神宮司廳藏版

古事類苑

官位部三

古事類苑刊行會

古事類苑

官位部第三册目錄

官位部五十

豐臣氏職員　

官位部五十一

徳川將軍　

官位部五十五
德川氏職員四

官位部五十六

德川氏職員五

官位部五十七

德川氏職員六

官位部五十八

徳川氏職員七

官位部六十

徳川氏職員九

古事類苑

官位部四十

鎌倉職員五

守護

守護ハ、押領使、追捕使等ノ變ゼシモノナリ、後鳥羽天皇ノ文治元年、源頼朝奏請シテ、始テ諸國ニ守護ヲ置キ、庄園ニ地頭ヲ置ク、是ヨリ先既ニ守護ノ稱アレドモ、諸國ヲ通ジテ守護ヲ置キシハ、實ニ此ニ權輿ス、然シテ當時守護職ニ補セラルヽ者ハ、皆頼朝ノ家人ニシテ、或ハ一國ヲ支配シ、或ハ數國ヲ支配スルアリ、又國守ニシテ守護ヲ兼ヌルアリ、守護ニシテ地頭ヲ兼ヌルアリ、國ノ撿非違使ヲ兼ヌルアリ、

凡ソ守護職ハ、國内ニ於ケル大番役ノ催促、謀叛人、殺害人ノ撿斷ノ三條件ヲ專務ト爲ス、大番役ノ催促トハ、地頭家人等ヲ督促シテ京都ニ赴キ、守衞ノ役ニ從ハシムルヲ云フ、其他強盜、竊盜、山賊、海賊等、種々ノ非法ヲ撿斷スルモ、此職ノ掌ル所ナリ、其初ハ聽訟ニハ關セザリシガ、蒙古來寇ノ後ニハ、之ニ預リシコトモアリシナラン、而シテ守護不入ノ地ニ罪人アル時ハ、疆外ニ於テ訊鞫スルヲ以テ法トス、

守護ト地頭トハ各〻其職ヲ異ニシテ、相侵スコトヲ得ザルニ、互ニ其權ヲ爭フコト毎ニコレアリ、其間ニハ爲ニ改補ニ遇フモノアリ、又其非法ノ甚シクシテ、其地ニ守護ヲ置カザルコトアリ、

守護ハ幕府ヨリ勳功ヲ賞シテ授クルアリ、私恩ニ出ヅルアリ、而シテ其得分ノ多寡ハ詳ナ

名稱

ラズ、寶治元年ノ幕府ノ令ニハ、守護地頭ガ遇分ノ所當ヲ責メ取ルヲ禁ズル文アリ、貞永式目ニハ守護ガ罪人ノ地ヲ沒收スルヲ禁ズル文アレドモ、未ダ遽ニ斷ジテ其所得ト爲スヲ得ザルナリ、然レドモ既ニ勳功ニ由リ、私恩ニ由ルトスレバ、其所得アリシヤ必セリ、守護代ハ、守護ノ自ラ其地ニ臨マズシテ、之ヲシテ己ニ代ラシムルモノナリ、其代官ハ多ク近親ノ男子ヲ用ヰシガ、婦人ニシテ其職ヲ繼承セシモ往々アリ、後ニハ守護代モ其地ニ赴カズシテ代官ヲ遣スコトアリ、コレヲ又代官トモ又代トモ云フ、守護使ハ、守護ノ支配地ニ事アル時ニ、使ヲ遣ハシテ、職務ヲ行ハシムルモノナリ、而シテ寺社領ノ如キハ、其入部ヲ禁ズルコト守護ニ同ジ、

建武中興ニ至リ、形勢大ニ變ジ、俄ニ武人ノ功ヲ賞スルニ守護ヲ以テス、而シテ守護ハ治國ヲ以テ職ト爲シテ、必ズシモ大犯三條ノ撿斷ニ止マラザルガ如シ、

〔運步色葉集〕守護（唐名太宰、刺史、使君、）

〔易林本節用集人倫之〕守護（シユゴ）

〔增補下學集上人倫・〕大守（タイシユ）（諸國守護）

〔日本書紀三十持統〕三年八月丙申、禁斷漁獵於攝津國武庫海千步內、紀伊國阿提郡那耆野二万頃、伊賀國伊賀郡身野二万頃、置守護人、准河內國大鳥郡高脚海、

〔式目抄一〕守護ノ號ハ、文治建久ノ比ヨリ相始歟、但文治建久ノ比、賴朝卿守護ノ事所見ナシ、秀氏（宿禰無所見之由申之）又守護ト云名モ不見、タヾ其國ヘ往テ其國ヲシヅメヨト云、賴朝ノ下知バカリ也、建久元年ニ、賴朝上洛ノ時、平家ノ餘黨ノ起ラヌヤウニトテ、諸國ノ守護ヲ置ル、ト云ガ、是モ宣下アリトモミヘズ、諸國惣追捕使事、壽永元年拜領ト云、守護宣旨ノ事ハ、正治元年ニ、賴家ニ宣下アリ、父ノ跡ヲ續レヨト云事ニ就テ宣旨ヲ成サル、時ニ、如舊諸國守護ノ事ヲ奉行アレトカケリ、

是守護宣下ノ始也、如舊トカクルヲモテ知ヌ、前ヨリ守護ヲバ存知アレドモ、宣下ハ成サレザリシ也、守護ノ二字、莊子ニ守而莫失ト云心也、守護ハ鎭護ノ義也、德行ヲ先ニシ、刑罰ヲ後ニシテ、國家ヲ鎭護スベキ也、昔ハ守護ヲ望ム人ナシ、守護存知スレバ、國ヲ治ルニ、苦勞アリテ、德分ハ多カラズ、故ニ望ム事ナシ、當時ノ如キハ沙汰ニ及バヌ事也、

〔武家名目抄 職名二十九上〕文治元年に鎌倉殿の奏請のまゝに、はじめて諸國一同に總追捕使を置き、地頭を補せられしかば、天下の間、一毛ばかりの地も武家の綺にあづからぬ所はなくなりぬ、さて幾ほどもなく、總追捕使の名をあらためて守護と稱することに定められたり、○註略但これより前にも、國郡を警衛するものを守護といひしことのありけるを、此時頓て便に付て總追捕使の名を廢し、諸國悉く守護に改められしなり、吾妻鏡治承四年十月廿一日に、以安田三郎義定爲守護遠江國被差遣とあり、元暦元年二月十八日には、播磨、美作、備前、備中、備後、已上五ヶ國、景時實平等遣專使可守護云云とあり、これら正しき名目にはあらざれども、守護の稱は此時始れり、さて景時實平等は、件五ヶ國の總追捕使たるよし、文治元年四月の所にみゆ、されば總追捕使を守護といへる事もありしなるべし、又元暦元年三月廿日に、大内冠者惟義、可爲伊賀國守護云々とみゆ、これらの文に仍ても、元より某國守護といへるがありしをしるべし、かく名を改められしは、前條にもいひし如く、武家の被管ならぬ、押領使總追捕使などいへるがあるをきらはれしなり、凡守護を補せられしに二義あり、一は勳功ありける者を其賞として補せられしなり、一は文治より已前、其國の總追捕使、または押領使撿非違使たりしもの、御家人に列するを、そのまゝ守護になされしなり、○註略これ其つかさどる所同じければなり、

〔貞丈雜記 四役名〕一國司、守護、領家、地頭の事、○中略守護と云は、將軍家より被仰付、武士を諸國へ下シテ、其國々の總支配をする人を云、

〔安齋隨筆 後編八〕一守護　頼朝卿に總追捕使を勅許ありし以來、諸國に守護を置れて、其國の五十分一を領し、國府に有て國司と相共に事を執行ひしとぞ、畢竟朝廷より置る、國司は、文事を

沿革

諸國置守護

以て政事を執り、武家より置く所の守護は、武備を以て非常を正スの義也、

〔農政座右職役〕守護

文治元年、源頼朝、諸國の國衙莊園ニ守護地頭ヲ置レシコト東鑑ニ見エタリ、コレハ官人ノ國衙庄園ヲ守護スル爲ニ兵ヲ置クト云ルガ如シ、後ニ其威漸ク强ク、京官ハ無キガ如ク、守護自ラ國司ノ如ク成リシト見エタリ、貞永式目ニモ、諸國ノ守護人ヲ責メテ、非國司而妨國務、非地頭而貪地利、甚以無道也ト云ヘリ、太平記ノ時ニハ、自然ノ勢ニ従テ一變シ、朝廷ヨリ命ゼラレシコトモアリト見エタリ、

〔長門國守護職次第〕長門國、平家以往守護職、元者號押領使職、○中略

九、土肥次郎實平、號總追捕使、一代官土岐次郎　大宮司吉貞

十、佐々木四郎左衛門尉高綱、自大將殿(源頼朝)文治二年給之、七月十三日下國、號守護職、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月廿一日庚子、以安田三郎義定、爲守護遠江國被差遣、

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元暦元年二月十八日丁丑、武衛○源頼朝被發御使於京都、是洛陽警固以下事所被仰也、又播磨、美作、備前、備中、備後、已上五箇國、景時、○梶原實平○土肥等遣專使、可令守護之由云云、　三月廿日己酉、今日大内冠者惟義、可爲伊賀國守護之由被仰付之云云、

〔吾妻鏡四〕元暦二年○文治元年五月廿三日丁巳、參河守範頼受二品○源頼朝之命、爲對馬守親光迎、可遣船於對馬島之處、親光爲遁平氏攻、三月四日、渡高麗國云云、仍猶可遣高麗之由、下知彼島在廳等之間、今日既遣之、當島守護人河内五郎義長、同送狀於親光、是平氏悉滅亡訖、不成不審、早可令歸朝之趣載之云云、

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月十二日辛卯、今日河越重頼所領等被收公、是依爲義經縁者也、○中略凡今度次第、爲關東重事之間、沙汰之始終之趣、太思食煩之處、因幡前司廣元申云、世已澆季、梟惡者、尤得

秋也、天下有反逆輩之條、更不可斷絕、而於東海道之內者、依為御居所、雖令靜謐、奸濫定起於他方歟、為相鎮之、每度被發遣東士者、人々煩也、國費也、以此次諸國交御沙汰、每國衙庄園被補守護地頭者、強不可有所怖、早可令申請給云云、二品(〇源頼朝)殊甘心、以此儀治定、本末相應、忠言之所令然也、　廿八日丙午、補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可充課兵粮米(段別五升)之由、今夜北條殿(〇時政)謁申藤經房卿中納言云云、　廿九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、

〔玉海〕文治元年十一月廿八日丁未、傳聞、頼朝代官北條丸今夜可謁經房云々、定示重事等歟、又聞、件北條丸以下郎從等、相分賜五畿、山陰、山陽、南海、西海諸國、不論庄公、可充催兵粮(段別五升)、非啻兵粮之催、總以可知行田地云々、凡非言語之所及、　十二月八日丁巳、所充諸國之兵粮、皆可募官物內之由下知之間、庄公之運上不通、人命殆不可待元正云々、非言語之所及、　十七日丙寅、光長朝臣來語云、去夜謁經房卿、談語世上事等云々、法皇(〇後白河)不可知食天下之機、有內々御氣色云々、為被仰件事、經房為御使、可下向關東之由有勅定、再三辭申、猶無許容、仍此條可被仰合人々之由令申、然而他人一切無可當其仁之人、不可及議定之由重有仰、仍於今者可行向之儀也、兼違綱了、正月十六日可首途云云、　廿日己巳、未剋大地震、雖不及七月之震、普通無比類之動也、其後連々六ケ度、相并七ケ度震動、此震非他、武士諸國押領之徵也、日本國之有無、只在今冬明春歟、已及獲麟歟、

〔源平盛衰記 四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

同(〇文治元年)十一月廿八日、(中略)時政(〇北條)實平(〇土肥)上洛シタレ共、合戰ナケレバ洛中靜也、時政、源二位(〇頼朝)ノ依下知、諸國ニ守護ヲ置、庄園ニ地頭ヲ可成由、吉田藤中納言經房卿ヲ以奏シ申ス、(中略)我朝イマダ無先例、頼朝申狀頗過分也ト、君モ臣モ思召ケレバ、御返事有御猶豫ケレバ、時政奏スラク、吾朝日本國ニ、昔ヨリシテ謀叛人多ク日記ニ留レ共、平相國(〇清盛)ニ過タル犯人ヲ不見、(中略)是ヲ

平グルハ源氏ノ高名也、是ヲ鎭ルハ關東ノ忠勤也、國ヲ守、人ヲメグマンガ爲ニ被奏申處也、ナドカ御免ナカラント申上タリケレバ、道理ハサモ有ケレドモ、當時ノ威應ニ恐テ、任申請宣、諸國ノ守護人、段別ノ兵粮米、平家知行ノ跡ニ地頭職ヲ被許ケリ、

〔神皇正統記後鳥羽〕賴朝勳功、まことにためしなかりければ、みづからも權をほしきまゝにす、君もまたうちまかせられにければ、王家の權はいよ／＼おとろへにき、諸國に守護をおきて、國司の威をおさへしかば、吏務といふこと名ばかりになりぬ、あらゆる庄園鄕保に地頭を補せしかば、本所はなきがごとくになれりき、

〔保曆間記下〕同〇文治元年十月、〇中略北條四郎時政、源二位〇賴朝ノ使トシテ上洛シテ、日本國ノ國々ニ守護ヲ置キ、鄕庄ニ地頭ヲ居テ、總地頭職ヲ給ハラント申、法皇〇後白河未ダ日本國ニ無例事ナレバ、ト[illegible]煩ケレドモ、源二位申所難默トテ被免ケリ、平家天下ヲ行レシヨリ、尙武家ノ權威ハ倍リケリ、

〔百練抄十後鳥羽〕文治元年十月廿八日、源二位依申請、可令補諸國守護之由被下院宣云々、彼代官北條四郎時政上洛、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月一日己卯、諸國被補總追捕使幷地頭內、七箇國分、北條殿〇時政被拜領畢、七日乙酉、北條殿被申七箇國地頭上表事、兵粮米事、沒官所々事、已經奏聞畢之由、左少辨遣奉書於帥中納言〇藤原經房、彼卿又送其狀於北條殿云云、

時政申狀奏聞畢〇中略

一總追捕使事、雖替其名、只同前歟、但義經行家不出來以前、二位卿〇源賴朝不申行之外、一向可被止之由、雖被計仰、世間不落居之間、每國置總追捕使、若又庄園計補者可宜歟、最狹少所々、皆悉被補者、喧嘩不絕、訴訟不盡歟、且令散萬人之愁、可爲尋出兩人之術歟、〇中略

三月七日　　左少辨定長

進上　帥中納言殿

〔集古文書二十六下知狀〕北條時房下知狀屋代弘賢藏

河內國金剛寺守護人入部事、如寺僧等申狀者、當寺者故右大將殿〇源賴朝御時、停止守護所沙汰、〇中略

元仁二年〇嘉祿元年四月五日　　相摸守平〇北條時房花押

守護代

〔吾妻鏡四十一〕建長二年三月三日己巳、今日諸國守護檢斷事、有其沙汰、殺害事、〇中略如地頭等申者、搦渡守護所之處、不論輕重、即放免之間、還而依有其煩、召進六波羅云云、

〔日蓮聖人註畫讚四〕諸宗問答第二十

國中〇佐渡持齋念佛者數百人、相議可殺害訟守護所、

〔新編追加目錄〕雜務篇〇十四ヶ條中略

守護行事條三

一諸國守護人奉行事寬喜三五十三　一守護成敗事　一可致撫民事　一諸國守護人非法事　一海路往返船事寬喜三六六　一山野河海事同九一　一諸國御家人跡、爲領家進止、所々御家人役事寬元二八二　一諸國飢饉間、遠近佗傺之輩事正嘉三二十　一河手事弘長二七一　一諸國苅取田稻跡蒔麥事文永元四廿六　一津料河手事弘安四四廿四　一條々弘安七六三　一河手事　一津泊市津料事　一沽酒事　一押買事已上四箇條　一所領年貢事弘安七六　一臨時役事永仁二十二　一諸國興行事永仁三五廿九　一雖爲本所進止領、御家人知行所々事、　一諸國庄公預所地頭相論時、糺定兩方事、文應二七廿三　一諸國守護人幷庄々地頭等、偏如不輸私領、抑沙汰、追出預所郷司等事、貞應元五廿八　一諸國守護人地頭、或正員、或代官、依領家預所訴訟事、寬喜三五十三　一御家人輩、依本所成敗、致訴訟、

事、寶治二七廿九　一名主職事條々　一東國沽酒事文永元　一農事不可使百姓事同　一可止百姓臨時所濟事文永元四十二　一京都大番役事文暦二七廿三　一京都大番衆事仁治三十一廿八　一侍所京都大番役事

一所載式目御家人事　一宿々早馬事　一三ヶ日厨事

守護人撿斷條四

一謀叛人追討事　一國々狠藉事文永七八廿九　一諍論事　一號先々不召渡守護所、直送遣犯人於京都事、　一爲守護人號犯科人跡、沒收所領田畠事、　一鈴鹿山幷大江山惡賊事延應元七廿六　一遠江佐渡兩國惡黨事弘安九三二　一犢屋用途勤仕、所々犯過人事、延應二　一貞應嘉祿以後、盜賊跡所領事、天福元八五　嘉禎三、一本補跡所々撿斷事　一隱置惡黨於所領内輩事弘安九二五　一侍所惡黨人事　一同所幷撿非違使所召人事

守護人幷御使可存知條々

一夜討强盜山賊海賊殺害罪科事　一惡黨由有其聞輩事　一博奕輩事　一依難遁罪科捨本所去他國惡黨事　一就犯人在所可斟酌事　以上

一、獄舍事　一官食事　一兵士事　以上三ヶ條

一城郭事　一寄役所致自由合戰事　一兵粮米事　一警固結番事　一兵船事

〔武家名目抄職名二十九上〕凡守護の職掌は、撿斷をむねとするは勿論なれど、鎌倉右大將家の時定められしは、大番役の催促其國の地頭御家人を催して番役にしたがはしむるなり、謀叛人殺害人の撿斷、すべて三ヶ條を專務とす、其外にも强盜、竊盜、山賊、海賊等の撿斷をもかね行へり、又軍役ある時は、國中の地頭、御家人を催し、國民を夫役にあて、それらを率ひて事に從ふならひなり、文治の制にて、公田私田より出す段別五升の兵粮米は、地頭の收納にて、守護は預らざれど、非常の事あれば、其費に給すべき料を國中に充課せてめすことなり、もとより郡鄕庄保の差別あることなし、貞

永式目に、充課公事於庄保とみゆるは是なり、前にいひし如く、定日兵粮米を收むることはなけれど、其國の庄郷に地頭の闕職ある時、守護たるもの申請て、兵粮料の爲に、やがて其所の地頭職を補するものもまゝあり、鎌倉殿の時、初めの程は時々守護人を改補せられて、必其職を世々にすべき定めにはあらざりけるが、いつとなく世職のごとくなれり、然れども罪あれば所職を放たるゝも、常の事にはありけるなり、

〔吾妻鏡六〕文治二年五月廿九日丙午、神社佛寺興行事、二品〇源頼朝日來思食立由、且所被申京都也、且於東海道者、仰守護人等、被注其國總社幷國分寺破壞、及同尼寺顛倒事等、是重被經奏聞、隨事躰爲被加修造也、爲善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行、今日面々被下御書云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年十月十五日甲寅、左女牛若宮領、土佐國吾河郡、京都大番役之外、被停止公事、但件役、猶爲別當秀嚴惟光子、廣元舍弟、沙汰可催勤者、以其旨下知守護人中務丞經高云云、行政盛時等奉行云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十二月廿九日丁亥、以小山左衞門尉朝政補播磨國守護職畢、住國家人等、相從朝政、勤仕內裏大番、總可致忠節也、朝政可沙汰事者、謀叛殺害人事許也、相交國務不可成敗人民訴訟、凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年閏十月十五日丙辰、諸國守護人等奉行條事、兼日被定置之外、動相交他雜務之由、其訴出來間、仍今日有沙汰、事實者、向後可停止、若猶有違犯之聞者、可改補其職之旨、嚴密被仰下、廣元朝臣奉行之、

〔吾妻鏡十八〕元久二年六月廿六日壬子、關東國々守護撿斷地頭所務以下事、任先規可致嚴密沙汰之由、有仰云云、

〔吾妻鏡十九〕承元三年十一月廿日庚戌、諸國守護人緩怠之間、群盜動令蜂起、爲庄保煩之由、國衙之

訴出來、依之條々被凝誹儀、於爲一身定役者、遁諂故實、可有懈緩之儀、結番人數各相替、差年限可令奉行歟、不然者被尋聞食國々子細、可被改不忠輩歟之由、雖有其沙汰、未被一決、以此次被職補任本御下文等、可進覽之旨先被仰近國、是自然恩澤、與勳功賞事、可有差別之故也、義盛、仲業、清定等奉行之、　五年〇建暦元年六月廿六日丙午、海道可建立新宿事、度々雖有其沙汰、未令遂行之由依有其聞、今日重被仰守護地頭等云云、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年五月十三日、今日有被定下條々、先諸國守護人者、大犯三箇條之外、不可致過分沙汰、　四年〇貞永元年閏九月十七日、鏡社住人、渡高麗企夜討、盜取數多珍寶歸朝之間、守護人爲尋問子細、欲召取彼犯科人等之處、預所稱不可交守護沙汰之由、張行之旨就注申、今日有沙汰、預所非可抑留、任交名早可召渡于守護所、乘船幷賊物事、同可令沙汰之由被仰隱岐左衞門入道云云、

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年二月十六日丁亥、今日有評定、條々被定其法、〇中略

一西國守護奉行事

於鎭西者、任大將家〇源頼朝例可致沙汰、必不可依式目、其外西國者、任被定置旨、可致沙汰之由、可被仰遣六波羅、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年二月十六日辛巳、諸國守護人沙汰事有其定、西國守護奉行事、於鎭西者、依爲遠國、不相鎭狼藉之間、任右大將家〇源頼朝御時之例、可致沙汰之由、可被仰遣六波羅云云、　十二月十七日戊寅、籠置惡黨所々者、可被收公之由、被仰出于諸國守護人云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年三月三日己巳、今日諸國守護檢斷事有其沙汰、殺害事、如守護人等申者可請取其身之處、郡鄕地頭等、搦進六波羅條無謂云云、如地頭等申者搦渡守護所之處、不論輕重、即放免之間、遁而依有其煩、召進六波羅云云、就之被仰遣六波羅云、守護成敗事、被定置諸國之間、可被加下知、但地頭等中、若致無道者、守護人者、就訴申尋明可被注申、殊可有御沙汰也云云、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月廿八日辛酉、仰放遊之士、可被禁遏鷹狩之旨、日來有其沙汰、所被施行于諸國守護人也、

〔新編追加雜務〕守護人撿斷條　守護人幷御使可存知條々

一夜討、强盜、山賊、海賊、殺害罪科事、

於御家人者、召進其身於六波羅、可令注進所領、至非御家人凡下輩者、隨所犯輕重、可有罪科淺深也、兩人相議可令計沙汰之、

一惡黨由有其聞輩事

所犯之條、雖無分明證據、有風聞之說者、相尋地頭御家人之處、聞及之由差申者、於御家人者、可令召進六波羅、至非御家人凡下輩者、同可令計沙汰、

一博奕輩事

爲守護人御使沙汰、可加禁遏、有違犯之輩者、於御家人者、可被召所領也、非御家人凡下輩事同前、

一依難遁罪科、捨本在所、逃去他國惡黨事、

國雖令各別、本所相觸事由、先相互召渡之、餘黨事同可致其沙汰、

一就犯人在所可斟酌事

於本所一圓之地者、可召渡犯人之由、可相觸彼所、若不敍用者、可注申事由、至關東御分所者、守護之綺雖無先例、於此度者可致其沙汰、　已上

〔新編追加雜務〕守護人撿斷條

一遠江佐渡兩國惡黨事

守護人無緩怠可令沙汰、於御使者、明春可令歸國也、就白狀相觸子細於地頭之處、兼日逐電之由依令申、不及其科歟、此日來經廻之惡黨令逃散云々、其所地頭致淸廉沙汰者、何不令退散哉、是又領主

雖難通其科、自今以後者、至如此所者、地頭可有罪科、次押買迎買沽酒以下事、禁制條々、先度被仰下畢、云彼云是、於違犯之輩者、可令注申、不注進者、守護人可有其科之狀、依仰執達如件、

弘安九年三月二日　相模守貞時北條判　陸奥守業時北條判

〔新編追加雜務〕西國鎭西條

一鎭西輩訴訟事弘安九七十六

守護人可令尋沙汰之由、先日被仰畢、雖然於地頭御家人、寺社別當神主供僧神官、所々名主庄官以下企參訴、於自今已後者、非別仰之外、不可參關東六波羅、令住國可致異國警固、有訴訟者、少貳入道、兵庫入道、薩摩入道、澁谷權守入道、寄合可令尋成敗、若於國難裁許者、可令注進、雖爲越訴尋究可令注申、關東居住輩、訴申鎭西族者、令下向可經沙汰、於關東不可有其沙汰、

〔新編追加雜務〕西國鎭西條

一西國守護代等國中所々犯人等事

右國中犯科輩出來之時、自本守護入部之地者不及子細、其外權門勢家、神社佛寺之領、號不入部、於其所堺、可尋明犯否之由觸遣之時、一日路或二日路、如此候之間、其堺者、則或野中、或於山中、擬尋明之間、往返不輕、亦於事非無煩、所詮被置守護人事、爲如此事也、於守護所糺明犯否之時、於爲無實者不及子細、若又爲實犯者、其時返本所、令請取之時者、尤於堺可請取之由、可被仰下歟、

押紙云、先々沙汰、輙不可改、任先例於堺可令糺定也、

〔式目抄一追加〕弘長新制云、可仰諸國守護地頭等、令禁斷海陸盜賊山賊海賊、夜討强盜類事、　諸國守護地頭等、可致其沙汰之子細被載式目訖、而無沙汰之由依有其聞、如此惡黨等、不可見隱聞隱之旨、雖被召起請文於御家人等、猶以不斷絕云々、早仰國々守護、所々地頭、殊可被加懲肅、此上猶惡黨蜂起

之由、於有其聞所々者、云守護云地頭、可被改補其職矣、守護人者、三箇條之外、不可致過分之沙汰、〇矣

以下十八字、據御成敗式目諺解補、

〔圓覺寺文書徵古雜抄所引〕圓覺寺雜掌僧契智申

欲早任綸旨國宜、如元可沙汰付寺家雜掌旨、可被成施行由、雖申守護新田左馬權守、可申成牒旨、

返答之上者、爲御沙汰、被仰下當寺領越前國山本庄事、〇中略

雜訴決斷所牒　越前國守護

圓覺寺雜掌契智申、寺領當國山本庄湯淺次郎左衞門尉宗顯押領事、副申狀具書、

右止彼押領、可沙汰居雜掌於庄家者、以牒、

建武元年三月二十四日　　左大史小槻宿禰判

左少辨藤原朝臣判〇高倉光守

〔松浦文書七〕雜訴決斷所牒　筑後國守護所

松浦小次郎入道蓮賀申、當國下宇治村地頭職半分事、

牒、件地頭職事、任去年三月二十一日綸旨、可令沙汰居蓮賀者、仍牒送如件、以牒、

建武二年二月二十日　　前筑後守藤原朝臣花押

中納言兼大藏卿左京大夫侍從藤原朝臣花押〇九條公明　　少判事兼右衞門權少尉中原朝臣花押

修理大夫藤原朝臣〇四條隆資　　明法博士兼左衞門權少尉左京大進中原朝臣花押

正三位藤原朝臣花押　　左衞門權佐兼少納言侍從藤原朝臣〇岡崎範國

戒飭

左少辨藤原朝臣

〔新編追加雜務〕守護行事條

一諸國守護人、幷庄々地頭等、偏如不輸私領抑沙汰、或追出預所鄕司、或雖自相交上司、不及所當辨濟、加之以吹毛之咎損土民等、自去秋冬、依院宣幷殿下〇藤原家實仰、雖禁符更以不承引、因之糺眞僞、令注文如是、相摸守〇北條時房武藏守〇北條泰時相分、國々代官一人可被相副也、尾張國先爲入部之始、定代官下向可相散也、御使者、五月會神事以後、卽可進發者、仰旨如此、仍執達如件、

貞應元年五月廿八日　　陸奥守平〇北條義時判

追申、國々代官者、器量相計可被定遣也、又經廻計略者、爲在廳沙汰、訴訟所々、可充子細御使被仰擧、

〔集古文書二十六下知狀〕北條時房下知狀屋代弘賢藏

河内國金剛寺守護人入部事、如寺僧等申狀者、當時者故右大將殿〇源賴朝御時、停止守護所沙汰、一向可爲寺家進退之由御裁許之後、無違亂之處、去亂逆以來、吹毛之咎、入部寺之內、剩其時守護人令下知云々、所詮任先例可令停止自由亂入之狀如件、

元仁二年〇嘉祿元年四月五日　　相摸守平花押〇北條時房

守護代

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年閏三月十七日丙申、諸國守護地頭所務之事、貞應二年任御下知狀致沙汰、市津料供給雜事、赤銅等事、可停止守護所張行事已下條々被觸仰云云、

〔新編追加雜務〕守護行事條

一諸國守護人奉行事、大番催促、謀叛、殺害人之外、不可管領細々雜事等之由、故右大將家〇源賴朝御時被定置畢、而近年以少事偏煩所部云々、太無其謂、庄家地頭公領撿非違所可致何沙汰哉、然則守護

人者、三ヶ條之外、不可致過分之沙汰、地頭撿非違所、過寛宥之計、可專乃貢勤之由、面々被遣御教書、自今以後、若有違亂之輩者、就領家預所住民等之訴訟、尋決兩方、可被注申、罪科無所遁者、可令改補所職之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

寛喜三年五月十三日　　武藏守〇北條泰時判

相摸守〇北條時房判

一諸國守護人地頭、或正員、或代官、依領家預所之訴訟、自六波羅爲遂對決、遣召文、爲停止非法加下知之處、不承引之族有之云々、二ヶ度者可相觸、及三ヶ度者、可注申關東之由、先日被仰下畢、而存優如之儀、不被申之由有其聞、事實者狼藉爭可相鎭哉、於自今以後者、無容隱可令言上給之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

寛喜三年五月十三日　　武藏守判

相摸守判

駿河守殿

掃部助殿

〔新編追加雜務〕守護行事條

一諸國守護人非法事

沙汰之法、定式目畢、而背彼狀、近年殊非法之由、多有其訴、所詮如式目、大番催促、謀反殺害人、付夜討、強盗、山賊、海賊、事等也、此外於致非法者、可注進交名也、爲國爲人不可不誡、此上猶背式目致非法者、可被召守護職之由、可被仰六波羅幷守護人及御家人等也、〇中略

寛喜三年六月六日　　武藏守判

相摸守判

駿河守殿

掃部頭殿

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右、右大將家御時、所被定置者、大番催促、謀叛殺害人付、夜討、強盜、山賊、海賊、等事也、而至近年、分補代官於郡鄕、充課公事於庄保、非國司而妨國務、非地頭而貪地利、所行之企、甚以無道也、抑雖爲重代御家人、無當時之所帶者、不能驅催、兼又所々下司庄官以下、假其名於御家人、對捍國司領家下知云云、如然之輩、可勤守護役之由、縱雖望申、一切不可加催、早任右大將家御時例、大番催促、幷謀叛殺害之外、可令停止守護之沙汰、若背此式條、相交自餘事者、或依國司領家之訴訟、就地頭土民之愁鬱、非法之至爲顯然者、被改所帶之職、可補穩便之輩也、又至代官可定一人也、

一同守護人不申事由沒收罪科跡事

右重犯之輩出來之時者、須申子細、隨其左右之處、不決實否、不糺輕重、恣稱罪科之跡、私令沒收之條、理不盡之沙汰、甚自由之姧謀也、早注進其旨、宜令蒙裁斷、猶以違犯者、可被處罪科焉、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年五月三日丙申、諸國守護地頭等、不隨六波羅召處事、三箇度雖令下知不參洛者、可被致改易所職之由云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寳治元年十一月廿七日丙子、畿內諸國守護地頭等所務事、有散亂子細之由依令風聞、今日有其沙汰、所被仰遣六波羅也、其詞云、

諸國守護地頭等、遂內撿、責取過分所當之間、難令安堵土民百姓事、就國司領家目錄可致沙汰之由、可相觸守護地頭之狀、依仰執達如件、

寳治元年十一月廿七日

左近將監

相模守

補任

相摸左近大夫將監殿

〔若狹國守護職次第〕一右大將賴朝御代　津々見右衛門次郎忠季守護、領當保一圓知行之、建久七年九月一日、守護本下司稻庭權守時定跡拜領之、(○下略)

〔吾妻鏡十六〕建久十年(○正治元年)二月六日戊辰、羽林殿下(○源賴家)去月廿日、轉左中將給、同廿六日宣下云、續前征夷將軍源朝臣(○賴朝)遺跡、宜令彼家人郎從等、如舊奉行諸國守護者、彼狀到著之間、今日有吉書始、淸大夫擇申日時云云、

〔百練抄十一土御門〕正治元年正月廿五日、故賴朝卿家人、隨右近中將賴家可奉仕諸國守護之由宣下、

〔吾妻鏡十六〕建久十年十二月廿九日丁亥、以小山左衛門尉朝政補播磨國守護職畢、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年八月廿七日壬戌、將軍家(○源賴家)御不例、縡危急之間、有御讓補沙汰、(○中略)以關東二十八箇國地頭幷總守護職、被充御長子一幡君(六歲)、

〔吾妻鏡十九〕承元三年十二月十五日乙亥、近國守護補任御下文備進之、其中千葉介成胤者、先祖千葉大夫、元永以後、爲當庄檢非違所之間、右大將家(○源賴朝)御時、以常胤被補下總一國守護職之由申之、三浦兵衛尉義村者、祖父義明、天治以來、依相交相摸國雜事、同御時檢斷事、同可致沙汰之旨、義澄承之訖之由申之、小山左衛門尉朝政申云、不帶本御下文、曩祖下野少掾豐澤爲當國押領使、如檢斷之事、一向執行之、秀鄉朝臣、天慶三年、更賜官符之後、十三代、數百歲奉行之間、無片時中絕之例、但右大將家御時者、建久年中、亡父政光入道、就讓與此職於朝政、賜安堵御下文許也、敢非新恩之職、稱可散御不審、進覽彼官符以下狀等云云、其外國々、又帶右大將家御下文訖、縱雖犯小過、輒難被改補之趣、有其沙汰、向後殊不可存懈緩之由、面々被仰含、廣元奉行之、

〔豫章記〕又八郎殿隨兵之事ニ付テ同(○源實朝)御書云

八郎殿(○通信四男通末)隨兵之事、依谷殿仰、去八月勤仕候訖、(○中略)兼又伊豫國守護職、幷新居西條兩庄之

事、先度親忠下向之時、書進宛書候、定下著候歟、諸事期御參候、恐々謹言、

霜月一日〔○建保六年〕　右近衛中將〔○源實朝〕

河野殿〔○通信○又見豫陽河野家譜〕

〔薩藩舊記前集二〕越前國守護事、任去年御下文之旨、左衛門尉惟宗忠久、可令奉行之狀、依仰下知如件、

貞應元年十月十二日　前陸奥守平〔花押○義時〕

〔若狹國守護職次第〕一公家一同御分　自元弘三年至正慶二　山徒多門坊代明静坊永舜　自同八月三日布志井三郎左衛門殿、御代官村山彌三郎并藏谷左衛門三郎、同九月廿六日より開發はかりにて、守護職村山殿給之、西津多島浦は藏谷左衛門三郎給之、

建武元年三月十三日和久殿入部あり、村山殿拜領分給之、次淺井辨阿闍梨四月三日入部あり、

又西津は同八月村山殿入部あり、

一同御分　國司大藏權少輔、代官山城前司、其代賀來下總權守、又代三郎入道意圓、四月十六日杖付又四郎下著、同十八日意圓下著、

〔薩藩舊記前集十二〕日向國守護職事、可被存知者、綸旨如此、悉之以狀、

元弘三年六月十五日　左衛門權佐〔御判○岡崎範國〕

島津上總入道館〔○貞久〕

〔集古文書一綸旨〕飛驒國守護職可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日　式部少輔〔花押○岡崎範國〕

兵部大輔殿〔○岩松經家〕

〔薩藩舊記前集十二〕大隅國守護職之事、任先例可令致沙汰者、綸旨如此、悉之、

建武元年四月廿八日　勘解由次官

島津上總前司入道館(○貞久)

改補

〔吾妻鏡十六〕建久十年(○正治元年)三月五日丁酉、後藤左衛門尉基淸、依有罪科被改讃岐守護職、被補近藤七國平、幕下將軍(○源賴朝)御時、被定置事被改之始也云云、

停止

〔吾妻鏡六〕文治二年六月廿一日丁卯、爲搜尋求行家義經隱居所之、於畿內近國、被補守護地頭之處、其輩寄事於兵粮、譴責累日、萬民爲之含愁訴、諸國依此事令凋弊云云、仍雖可被待義經左右、有人愁歟、諸國守護武士幷地頭等、早可停止、但於近國沒官跡者、不可然之由、二品(○源賴朝)被申京都、以帥中納言可奏聞之旨、被付御書於廷尉公朝歸洛便宜、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年十月五日己丑、被經評議、爲鎭南都騷動、暫大和國置守護人、沒收衆徒知行庄園、悉被補地頭畢、　十一月十四日丁卯、匠作(○北條時房)武州(○北條泰時)著評定所給、其衆參進、南都事有沙汰、衆徒靜謐之間、止大和國守護地頭職、如元可被付寺家云云、

〔武家名目抄職名二十九上〕按これより後、足利家の時までも、大乘院、一乘院、兩寺務として、大和一國の事を興福寺より沙汰せり、其他の國々は、佛寺より一國を成敗することはきこえず、

守護兼數國

〔吾妻鏡十三〕建久四年十月廿八日辛酉、佐々木左衛門尉定綱參著、此程薩摩國流人也、(○中略)近江國守護職事、如元可執行之由云云、　十二月廿日癸丑、佐々木左衛門尉定綱、本知行之地悉返給、其上七箇國內、各被加一所、於隱岐國者、不交他人之沙汰、一圓拜領地頭職、至長門石見兩國者、所被補守護職也、

〔吾妻鏡十六〕正治二年八月二日乙酉、佐々木中務丞經高蒙御氣色、淡路阿波土佐、以上三箇國守護職以下所帶等被召放之、以其趣所被申京都也、是日來聊依罪科雖被經沙汰、勳功異他之間、暫相宥之處、爲洛中警衛之士、令騷京都、背叡慮之條、難及私寬宥之旨、再往被經沙汰、如此云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年三月九日壬申、武藏守朝政飛脚到着、申云、去月日雅樂助平維基子孫等起伊賀國、中宮長司度光子息等起伊勢國、各叛逆云云、彼兩國守護人山内首藤刑部丞經俊相尋子細之處、無左右企合戰、經俊依無勢逃亡之間、凶徒等虜領二箇國、固鈴鹿關、八峯山等道路、仍無上路之人云云、　五月十日壬申、伊勢平氏等追討賞事有其沙汰、廣元朝臣、問注所入道等奉行之、朝政〇平賀補任伊勢國守護職、又給彼輩私領水田、件兩國守護者、經俊本職也、而恐于平氏之片時權威逃亡、仍所被改補也、

元久二年九月廿日癸卯、首藤刑部丞經俊捧歎狀、是去春比、伊勢平氏蜂起之時、依無勢、爲聚軍士暫遁其國之處、差遣朝雅被誅平氏之間、以經俊所帶伊賀伊勢守護職、被充朝雅之賞、而於時進退、兵之故實也、強難被處不可歟、就中對治朝雅之謀叛事、諸人雖有勳功之號、正加誅罰、獨在愚息持壽丸之兵略也、件兩國守護職、適日來朝雅之所帶也、且經俊本職也、任理運依忠節可返給之趣載之云云、但無御許容歟、隨而此所、先之補帶刀長惟信者也、

建永二年〇承元元年六月廿四日丙戌、就御室〇仁和寺仰、坊門亞相〇信清被執申、高野山愁訴、紀伊國土民猥藉事、於御所有其沙汰、和泉紀伊兩國守護者、佐原十郎左衞門尉義連職也、義連卒去之後、未被補其替、向後兩國爲院御熊野詣驛家雜事、自今以後、無指事外、不可置守護人、就之諸事可爲仙洞御計之由被定之、仍義連代、早可召上之由、所被遣御書於播部入道寂忍之許也、廣元朝臣奉行之、　七月廿三日壬辰、播部入道寂忍使者參著、和泉紀伊兩國守護代事、任御下知、去九日可參上之旨相觸之、同十三日言上其趣於坊門殿之由申之、

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

諸軍勢ノ恩賞ハ、暫ク延引ストモ、先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可被行トテ、足利治部大輔高氏ニ武藏常陸下總三箇國、舍弟左馬頭直義ニ遠江國、新田左馬助義貞ニ上野播磨兩國、子息義顯ニ越後國、舍

弟兵部少輔義助ニ駿河國、楠判官正成ニ攝津國河內、名和伯耆守長年ニ因幡伯耆兩國ヲゾ被行ケル、其外公家武家ノ輩、二箇國三箇國ヲ給リケルニ、サシモノ軍忠有シ、赤松入道圓心ニ、佐用庄一所計ヲ被行、播磨國ノ守護職ヲバ、無程被召返ケリ、サレバ建武ノ亂ニ圓心俄ニ心替ジテ、朝敵ト成シモ、此恨トゾ聞エシ、其外五十餘箇國ノ守護國司、國々ノ闕所大庄ヲバ、悉公家被官ノ人々拜領シケル間、誇陶朱之富貴、飽鄭白之衣食矣、

守護兼國守

〔梅松論 下〕今度は正成、和泉河內兩國の守護として勅命を蒙り、軍勢を催に、親類一族猶以難澁の色有、○下略

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月三日乙巳、美濃國守護人相摸守惟義、申當國路驛可加新宿所之事、有其沙汰、早可依請之由、今日所被仰遣也、俊兼爲奉行、

〔吾妻鏡 二十六〕承久四年○貞應元年三月三日、相州○北條時房賜伊勢國守護職御下文、是去年依合戰賞、拜領之處、彼狀燒失之由依被申之、重所被成下也、此外同國中、十六箇所賜之云云、

〔太田康有記〕建治三年七月四日、筑後國守護職、武州○北條宗政御拜領云々、

守護兼地頭

〔吾妻鏡 十三〕建久四年十二月廿日癸丑、佐々木左衞門尉定綱、○中略於隱岐國者、不交他人之沙汰、一圓拜領地頭職、至長門石見兩國者、所被補守護職也、

〔東寺百合古文書 六十七〕東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上○中略

當地頭親父若狹次郎兵衞尉忠季、建久六年補任當國守護、正治二年遠敷郡三方郡被補二郡總地頭、其時大番勤仕之、雖然人夫召仕之外無別煩、建仁三年、出羽前司家長、遠敷郡內給九箇所地頭、太良庄此內也十七箇年雖令知行無其煩、承久二年、次郎兵衞入道忠季時守護地頭共、以返給之、其時當地頭、舍兄兵衞尉忠時、大番勤仕之、是又人夫召仕之外無煩、三代之例如此、○中略

文永六年八月二日

守護兼檢非違使

〔武家名目抄職名二十九上〕按一國守護たる者、國內の地頭の闕しとき、申給りて其所の地頭を兼ぬる事は、本文に依てしるべし、

〔吾妻鏡五十〕弘長元年五月十三日甲戌、今日晝番之間、於廣御所、佐々木壹岐前司泰綱與澁谷太郎左衞門尉武重及口論、〇中略泰綱云、〇中略奉逢于右大將軍〇源賴朝草創御代、抽度々之勳功、兄弟五人之間、令補十七箇國守護職、剩面々所令任受領檢非違使也、昔牢籠更非恥辱、還可謂面目之、〇下略

〔吾妻鏡五十二〕文永三年四月十五日戊寅、長門國一宮神人等、致殺害沙汰之由事、守護人資平就駐申子細、有其沙汰、幷狼藉事、可令奉行由、資平雖申之、守護沙汰事、被定式目畢、而爲守護之身、補國檢非違使之條、不可然云云、

半國守護

〔諸家文書纂十一〕伊豫國道後七郡之事、爲守護職、可有管領、道前之事者、申付佐々木三郎盛綱候、諸事申合可有沙汰候、得能冠者事者勿論也、恐々謹言、

元曆二年〇文治元年七月廿八日　賴朝御判

河野四郎殿〇通信、又見豫章記、豫陽河野家譜、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年四月六日甲辰、伊豫國御家人河野四郎通信、自幕下將軍〇源賴朝御時以降、殊抽奉公忠節間、不懸當國守護人佐々木三郎兵衞尉盛綱法師奉行別可致勳厚、兼又如舊可相從國中近親幷郎從之由給御敎書、平民部丞盛時奉行之、通信年來在鎌倉之處、適賜身之暇、明旦可歸國之間、召御前〇源實朝給此御敎書云云、

〔豫章記〕九郎判官殿〇源義經被失故、通信〇河野同心ノ由ヲ被訴催、喜多郡以テ梶原平三景時賜、守護ヲバ盛綱〇佐々木佐ニ被補畢、〇中略然共文治五年、奧入合戰ノ時、阿津賀志山ノ先陣懸タリシ軍功ニヨリ、奧州三ノ迫ヲ給リ、亦爲喜多郡替久米郡ヲ賜、建治〇治字仁誤又半國守護職ヲ給ル、〇中略建保六年、一國ノ守護ニ被補了、

守護代

〔吾妻鏡十八〕元久二年閏七月廿九日甲寅、河野四郎通信依勲功異他、伊豫國御家人卅二人、止守護沙汰、爲通信沙汰可令勤仕御家人役之由、被下御書、(載將軍(源實朝)御判)件卅二人名字、所被載御書之端也、善信奉行之、

頼季(浅海太郎同舍弟等)　公久(橘六)　光達(新三郎)　高茂(浮穴大夫)　高房(田窪太郎同舍弟)　家員(白名三郎)　兼恒(高野小大夫同舍弟)　清員(垣生太郎同舍弟)　實蓮(眞勝房)　重仲(井門太郎)　山前權守(同子)　信家(大内三郎同弟)　高久(十郎大夫)　金戸源三入道(俊恒)　高盛(久萬太郎大夫同弟)　永助(久萬太郎)　安任(江四郎大夫)　家平(吉木三郎)　高兼(同四郎同舍弟)　長員(別宮大夫)　頼高(別宮新大夫同舍弟)　吉盛(別宮七郎大夫)　安時(三島大祝)　頼重(稠熊三郎)　遠安(藤三大夫同舍弟)　信任(江二郎大夫)　紀六太郎　信忠(寺町五郎大夫)　時永(寺町小大夫)　助忠(主藤三)　忠貞(寺町十郎)　頼恒(太郎)　已上三十二人云云

〔三島宮御鎭座本緣〕元久二年閏七月、從鎌倉殿(源將軍實朝)伊豫半國守護職河野通信下賜、依之伊豫國中御家人内三十二人、通信被相加、向後守護所沙汰止、通信下知可相守旨、雖被仰出、太祝安時三十二人中ヨリ被撰出、格別從鎌倉殿賜吉岡庄、三島宮可致守護旨被仰出候、從是三島太祝政所相立云云、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月八日丙子、梶原平三景時、原宗四郎行能、押領於最勝尊勝等寺領之由、有寺家訴之旨被仰下之間、就被尋兩人、各獻陳狀、以之可被付職事云云、

平景時謹陳申　尊勝寺御領美作國林野英多保事

右下給候之折紙、謹以令拜見候畢、先度被仰下之刻、子細言上畢、御年貢以下雜事、任先例令辨勤候也、於代官改補條者、不可及寺家訴、其故者、先例限候御年貢雜事、不致懈怠者不可爲訴歟、只爲令停止景時沙汰如此候歟、子細度々言上畢、仍不能委細陳狀、謹陳申、

文治三年八月五日　平景時

惟宗行能謹解　最勝寺訴申、若狭國今重保、背院宣并鎌倉殿御下文旨押領由事、

右九郎判官〇源義經逆亂之時、自東國武士上洛之日、行能相具北條時政之手上洛畢、而爲兵粮米充給所置代官、不可致沙汰之由自鎌倉殿依被仰下、不置代官、罷下本國畢、況於今重保者、無可知行之由緒、又自鎌倉殿非恩給之所、何以令致押領乎、但號行能代官、無去文者稱不可用之由、度々背院宣幷鎌倉殿御下文之間、依院宣預御勘發、因之且取不當之名、其恐不少、然者於號行能代官之輩者、早被搦取可被處罪也、全非行能結構、仍謹解、

文治三年八月八日　惟宗判

〔武家名目抄職名二十九下〕按、守護代は守護職たる人の代官にして、全く國司の目代の如し、是を守護代官とも稱し、又は代官とのみいひし事もあり、〇註略すべて守護の所職は、何事にまれ、守護代の預りきかざることとなし、抑其人品多くは守護の子弟一門たる輩、あるは其家人郎等の內、おとなしき者を以て此職にをらしむ、もと私に補せし司にはあれど、一國の成敗を執するが故に、大名一家の家人なりとも、此職に補せらるゝものは幕府にも祗候し、謁見をもゆるさるゝ事なり、この故に、守護代を補せんとては、守護より幕府に申して、後に命ずるならひとなれり、

〔吾妻鏡七〕文治三年九月廿七日乙丑、畠山二郎重忠爲囚人、被召預千葉新介胤正、是依代官眞正之奸曲、大神宮神人長家綱訴申故也、代官所行、不知子細之由雖謝申之、可被收公所領四箇所云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十月廿四日癸未、參河國內、御寄附大神宮之庄園有六箇所、而守護人藤九郎入道蓮西代官善耀被押妨之由、自神宮依訴申之、爲廣元朝臣奉行、被尋問蓮西之處、於六箇所者、御奉免之後、更以不交其沙汰之由、善耀內々申之旨、昨日進請文之間、副其狀於御教書被遣本宮、奉免之後者、爭可成其妨哉之由被載之云云、

〔吾妻鏡十八〕建永二年〇承元元年六月廿二日丙寅、坊門亞相信淸使者參著、所被進仁和寺御室令旨也、

是紀伊國土民等、亂入高野山、企狩獵押妨寺領、和泉紀伊國守護代爲其張本、爲關東御沙汰可被止狼藉之趣、有寺門愁訴之間、御室以件金剛峯寺所司等狀、被仰合坊門、仍又被傳申其旨云云、

〔若狹國守護職次第〕一修理亮殿御分國（泰時）　自安貞二年至寬喜元年御拜領之、御代官屋戸矢小太郎實永、同七月廿日入部、治四ヶ年、

一陸奥守重時朝臣（六波羅北殿、號極樂寺殿、）　自寬喜三年御拜領之、御代官原小二郎兵衞尉廣家、但守護領佐分鄕西津開發計也、於殘員所々者、中武藏守殿御拜領之、今富名御代官若狹尼云々、（若狹尼者、忠季後家、）

〔六波羅御下知〕如寬喜四年（○貞永元年）二月十九日、守護代眞眞部左衞門尉施行者、官兵幷大番役者任先例勤仕之由御敎書、十五日所下給也云々、

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右、右大將家（○源賴朝）御時所被定置者、大番催促、謀叛殺害人（付夜討、强盜、山賊、海賊、）等事也、而至近年分補代官於郡鄕充課公事於庄保、非國司而妨國務、非地頭而貪地利、所行之企、甚以無道也、（○中略）至代官可定一人也、

〔吾妻鏡　三十六〕寬元二年八月廿四日壬辰、伊勢國阿曾山、幷熊野山惡黨蜂起之間、今日有臨時評定、（○中略）自今出河殿被申事、爲攝津前司師員以下條々也、守護代兵庫大夫資範非法間事、於鎭西守護成敗事者、自右大將軍家（○源賴朝）御時、以別儀被定置之間、帶代々御下文所致沙汰也、不可被准申餘國守護沙汰事也、但細々非法由事被尋下、可被申左右之由及群議云云、

〔新編追加（侍所）〕謀叛殺害條

一謀叛之輩、爲宗親類兄弟者、不及子細可被召取、其外京都雜掌、國々代官所從等事者、雖不及御沙汰、委尋明隨注申追可有御計之由、自關東所被仰下也、可令存此旨、而稱謀叛被官輩、無左右及追捕、狼藉之由有其聞、事實者甚不可然、所詮止其煩可注申子細之狀如件、

寶治元年六月廿二日　相摸守〇北條重時判

河內國守護代

〔若狹國守護職次第〕一陸奥守時輔朝臣號北殿　自文應元年、御代官高橋五郎右衛門尉光重、其代島取兵衛太郎入道寂阿、次御代官、自文永三年、加賀入道殿還補了、其代新左衛門入道、

〔日蓮聖人註畫讃五〕蒙古來第二十八

六日〇文永十一年十月 辰剋合戰、守護代馬〇對 資國等雖伐取蒙古、資國子息等悉伐死、同十四日壹岐島押寄、守護代平內左衛門景隆等構城郭雖禦戰、蒙古亂入間景隆自殺、

〔東寺百合古文書一〕異賊降伏御祈事、御教書案文如此、於當國中寺社付頭實可致祈請之由、可被相觸別當神主等、且御祈之次第可被進注文歟、仍執達如件、

弘安七年正月四日　加賀權守在御判　沙彌在御判　右衛門尉在御判

若狹國守護御代官殿

〔集古文書三十九施行狀〕永仁六年施行狀河內國古市郡西琳寺藏

可禁斷守護代并地頭御家人等、於西大寺以下諸寺致濫惡事、

右任今年四月十日關東御下知之旨、可致沙汰狀如件、

永仁六年九月九日　左近將監平朝臣〇北條宗方判

前上野介平朝臣〇北條宗宣判

〔東寺百合古文書三十〕守護代施行案

若狹國太良庄雜掌申、直阿以下輩濫妨事、決斷所牒副具書如此、任牒之旨可被致其沙汰之狀如件、

建武元年四月十四日　雅清判

若狹守護代殿

〔若狹國守護職次第〕一又公家一圓御分〔于時新田殿〕　自八月廿八日軍大將左門少將殿、又國司代若狹又太郎、守護代式部六郎山東山西松永等燒拂小濱に著く、

〔三浦文書〕花押〇新田義貞

三浦和田彥四郎茂實申、〇中略金山鄉者、和田又次郎〇義成家人三浦平四郎、和田彌三郎、同又三郎家人富澤孫太郎以下惡黨等構城廓、致合戰、刃傷殺害云々、所詮、守護代相共、守宣旨御事書之旨、相催近鄉地頭以下、任法可被加治罰、若不從催促者、可被注申交名之由、國宣所候也、仍執達如件、

建武元年二月五日　散位高秀奉

謹上　御目代殿

守護又代

〔若狹國守護職次第〕一陸奧守重時朝臣〔六波羅北殿、號極樂寺殿、〕　自寬喜三年御拜領之、〇中略守護御代官加賀守殿、自延應元年拜領之、但西津庄除之、其代平左衞門入道、

一高時朝臣御分國　自元亨四年八月、御代官小馬三郎、其代和久二郎賴基、　自元慶元年九月工藤次郎右衞門殿、代佐々布又太郎左衞門殿、又代同弟佐々布十郎、

守護使

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十一月八日丙申、右近將監多好方、去建久四年、依宮人曲賞、自故右大將軍〇賴朝賜飛驒國荒木鄉訖、而於今者、可讓補子息多好節之由申之、仍今日被經其沙汰、有御許容、且於彼地、不可守護使入部之旨所被仰下也、北條殿〇時政令奉行之給云云、

〔武家名目抄職名二十九下〕按、守護使は、守護職の使節たる者をよべる唱へなり、もし其國に田畠を撿地すべきこと、又は年貢の不納などあるおりには、家人の内事にたへたる者を遣して撿注究濟せしむ、又非常の事いできたれる時にも、これを遣して沙汰せしめ、おりにふれては撿斷などの事にもあづからしむるものなり、勿論臨時の所役にして、平常設置かるゝつかさにはあらず、もとより守護の私に定むる所司にて、おほやけにかゝはれるものにあらず、この

故に別に名稱をも設けずして、ひとへに守護使とよべる成るべし、さるべき神社佛寺の領地又堂上地下の庄園にても、由來ある所領には、此使の入部して撿注することを禁せらる、これを守護使不入地、又守護不入地ともいへり、

〔古簡雜纂 卯〕筑前國宗像社領可止守護所使事

右中社領依社家訴申、被停止守護所使畢者、依鎌倉殿仰下知如件、

元久元年十二月三日

遠江守 花押 ○北條時政

〔武家名目抄 職名二十九下〕石見國文書云、可早停守護所使入部石見國大家庄事、右任將軍家度々御成敗之旨、可停止守護所使入部也、若有子細事出來之時者、言上事由、可蒙上裁之狀、依仰下知如件、承久三年十月日、陸奧守平 ○北條義時 判、

〔薩藩舊記 前集二〕可令早停止爲伊賀國守護使亂入當國長田庄事

右當庄前々守護之時、不入部使者之由地頭所申也、大番役幷謀叛殺害沙汰之外、不可入部彼使之狀、依仰如件、

貞應二年八月六日

前陸奥守平 花押 ○北條義時

〔集古文書 二十六下知狀〕寬喜二年下知狀 所藏不詳

當國金剛寺住僧申守護使亂入由事

訴狀 副具書 遣之事實者、尤以不便、任前々御下知之狀、不可有自由亂入儀之狀如件、

寬喜二年七月十九日

掃部助 花押 ○北條時盛

駿河守 花押 ○北條重時

河内國守護代

〔六波羅御下知〕如嘉祿三年八月廿八日六波羅下知者、威神院日御供料、丹波國波波伯部保守護使

亂入事、社解遣之、如狀者前々守護代之時、不申入之處、當守護代、始令亂入保內、令煩土民之間、長日御供及闕如云々、事實者不便、任先例可停止新儀、若又有殊子細者可參決云々、

〔御成敗式目〕一隱置盜賊惡黨於所領內事

次被停止守護所使入部、所々事、同惡黨等出來之時者、不日可召渡守護所也、若於拘惜者、且令入部守護使、且可被改補地頭代也、若又不改代官者、被沒收地頭職、可被入守護使矣、

〔新御式目〕弘安七五廿七評

一博奕事　爲守護人御使沙汰可加禁遏、有違犯之輩者、於御家人者、可被召所領也、非分家人凡下輩之事、同前、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年五月五日乙巳、義盛〇和田時兼以下、謀叛之輩所領、美作淡路等國守護職、横山庄以下爲宗之所々、先以收公之、可被充勳功之賞云云、相州〇北條義時大官令〇大江廣元被申沙汰之、

〔太平記一〕後醍醐天皇御治世事附武家繁昌事

朝暘不犯トモ、殘星光ヲ奪ル、習ナレバ、必シモ武家ヨリ公家ヲ蔑シ奉ルトシモハ無レドモ、所ニハ地頭强シテ領家ハ弱、國ニハ守護重シテ國司ハ輕シ、此故朝廷ハ年々衰ヘ、武家日々盛也、

〔增鏡十六久米のさら山〕むかしこそ受領どもゝ、任の程その國をまたゝめおこなひしが、此比〇後醍醐はたゞ名計にて、いづくにも守護といふものゝ、目代よりはおぞましきをすゑたれば、武家のなびきにてのみ、おほやけざまの事は、よろづをろそかにぞしける、

〔伯耆之卷〕近國の者共、不殘御方に參けれども、出雲の守護は一族をうつたへ、八木と云所にひかへて不參けり、

古事類苑

官位部四十一

鎌倉職員六

地頭上

地頭ハ、後鳥羽天皇文治元年、源頼朝ガ義經行家ヲ捜捕スルヲ以テ名ト爲シ、後白河上皇ニ奏請シテ置ク所ナリ、抑〻地頭ノ稱ハ、何ノ世ニ起リシニカ詳ナラザレドモ、平氏專政ノ時ニハ、其庄園ニ家人ヲ遣シテ地頭ト爲シタルコトアリキ、頼朝ハ蓋シ之ニ倣ヒシナラン、地頭ノ職タル、其地ヨリ兵糧米ヲ徵收スルモノニテ、其糧米ハ一段ゴトニ五升トス、而シテ頼朝之ヲ總管セリ、因テ或ハ頼朝ヲ稱シテ總地頭ト爲ス、然ルニ地頭ハ徵求ニ託シテ非法多ク、人民爲ニ凋弊セルニ由リ、二年ニ至リ、近畿ニ在ル所ノ沒官ノ地ノ外ハ、地頭ヲ置カザルコトヽ爲シタリ、

地頭ニ本補新補アリ、承久ノ亂前ニ係ルモノヲ本補地頭ト云ヒ、以後ニ命ゼラルヽモノヲ新補地頭ト云フ、又總地頭アリ、總領地頭トモ云フ、卽チ數人ニテ分領スル所ノ地頭ヲ總轄スルモノナリ、又半分地頭、三分二地頭、三分一地頭、一分地頭等アリ、並ニ某地ノ幾分ニ地頭タルノ謂ナリ、

地頭ハ原來兵糧ヲ徵收スルタメニ置ク所ナレドモ、其掌ル所極メテ廣シ、例セバ年貢ヲ收メテ之ヲ領主ニ輸送シ、訴訟ヲ聽斷シ、或ハ訴人ニ狀ヲ付シテ之ヲ鎌倉ニ送リ、賊盜ヲ逮捕シテ亦之ヲ鎌倉ニ送リ、荒地ヲ墾闢スルガ如キ是ナリ、而シテ垸飯役ノ如キハ、之ヲ其所得

名稱

ヨリ辨ズルモノトス、

地頭ノ所得ハ、其初ハ詳ナラズ、承久ノ亂後貞應二年ニ宣旨アリテ、新補地頭ハ、田畠十一町ノ內ニ十町ヲ國司、或ハ莊園ノ主ノ分ト爲シ、一町ヲ以テ地頭ノ分ト爲シタリ、又一段ゴトニ、五升ノ米ヲ以テ地頭ノ所得ト爲シタリ、卽チ文治ニ定ムル所ノ兵糧米ナリ、令制ニ依ルニ、段別ノ五升ハ、其地ノ所得(二斛五斗)ノ五十分ノ一ニシテ、十町ノ所得ハ五斛ナリ、又十一町ノ內ノ一町ヲ賃租セシムルトキハ、其地子ハ收米ノ五分ノ一ニシテ、亦五斛ナリ、之ヲ通計スレバ十斛トナル、卽チ地頭十一町ノ所得ニシテ、收米ノ二百七十五ノ十ニ當ル、然レドモ滿一町以下ノ地頭ニ至リテハ、其得分ハ租ノ三分一ナリ、租ハ姑ク令制ニ依ルニ、一段一斗一升ナレバ、三分一ハ三升六合餘ニシテ、五升ヨリ少キコト一升三合餘ナリ、而シテ當時ノ實例ニ據リテ考フルニ、地頭所得ノ多寡ハ一樣ナラザルガ如シ、又本補ノ地頭ノ所得ハ、都テ此ヨリ優ナリシナラン、

地頭ヲ補スルハ、原ト有功ヲ賞スルガ爲ニ出デタルガ如シ、然レドモ或ハ私恩ニ出デシモノモナキニアラズ、又之ヲ婦女ニ與ヘシアリ、神社佛寺ニ入レシアリ、是ニ於テ地頭ハ資財ト同一ノ用ヲ爲セリ、サレバ之ヲ子孫ニ傳フルアリ、分割シテ與フルアリ、

地頭代ハ、地頭ノ其地ニ赴カズシテ之ヲシテ代ラシムルモノナリ、地頭代モ大ニ勢力ノアリシモノニテ、當時大ニ橫暴ヲ肆ニシテ、害ヲ領主ニ被ラシメシコト少カラズ、

建武中興ニ至リテ、歸順ノ者ハ更ニ安堵ノ下文ヲ賜ヒテ、其職ヲ全ウセシメ、敢テ改補セザリシガ如シ、而シテ領家ニ地頭ヲ兼子シムル者アルハ蓋シ異例ナリ、

〔下學集 態藝 下〕地頭(チトウ)

〔運步色葉集 地〕地頭

〔易林本節用集（知人倫）〕地頭（ヂトウ）

〔南朝平壤錄（四日本）〕日本故倭奴國也、〈○中略〉所屬五畿七道六十六州三島、共統五百八十九郡、郡守曰地都、

〔異稱日本傳（中二）〕今按、〈○中略〉郡守曰地都、都當作頭、聲訛、

〔日本風土記（一）〕設官分職　州郡官銜曰地都（ヂトウ）、

〔八幡愚童訓（上）〕降伏事

爰日本皇后（○神功）御船近、唐笠計、光夜々照ケリ、白張著タル老俗現シ申合力可申、何ナル人ゾト問玉フ時、南閻浮提大地頭ナリト申去ヌ、

〔沙汰未練書〕一地頭者　右大將家（○源賴朝）以來、代々將軍家奉公、蒙御恩人々事也、

〔續古事談（二臣節）〕或人云、諸國ノ地頭ト云名、心エズ、イカニツケタルヤラムト年來思ヒシ程ニ、或唐書ノ中ニ云ク、世ニ俄ニ謀反ノモノイデキタルヲウタントテ、卒爾ニ兵ヲアツムルトキ、兵粮米ノタメニ、國王郡々ヲヒメテアツメタルヲ地頭錢ト云トイフ文アリ、コレ今ノ地頭ノ義ニカナヘリ、コノ文ヲ見タリケル人、ツケソメタルカ、

〔舊唐書（四十八食貨）〕八年（○大曆）正月二十五日、勅、靑苗地頭錢、天下每畝率十五文、以京師煩劇、先加至三十文、自今已後、宜準諸州每畝十五文、

〔唐書（五十一食貨）〕廣德元年、詔一戶二丁者免一丁、凡畝稅二升、男子二十五爲成丁、五十五爲老、以優民、而轠寇未夷、民耗斂重、及吐蕃逼京師、近甸屯兵數萬、百官進俸錢、又率戶以給軍糧、至大曆元年、詔流民還者、給復二年、田園盡則授以逃田、天下苗一畝、稅錢十五、市輕貨、給百官手力課、以國用急不及秋、方苗靑卽征之、號靑苗錢、又有地頭錢、每畝二十、通名爲靑苗錢、又詔上都秋稅分二等、上等畝稅一斗、下等六升、荒田畝稅二升、五年、始定法、夏上田畝稅六升、下田畝四升、秋上田畝稅五升、下田

畝三升、荒田如故、青苗錢畝加一倍、而地頭錢不在焉、

〔塵添壒嚢抄 二〕地頭名事付地頭錢事 新補地頭事

諸國地頭ト云名ハ、何ナル故ゾ、　古來ヨリ沙汰アル事也、難心得名也、諸庄園ニ於テ、本家領ヲバ皆領家ト云、尤不審ナル所、或記云、諸國地頭名、年來難心得之處、後漢書或本中、世俄謀叛者出來時、是誅伐爲卒爾兵集時、兵糧爲國王士民責集メタルヲ地頭錢ト云、是尤今地頭義叶ヘリ、此文ヲ見テ名クル歟、不然墨ナンドノ來下シテ名付ル名歟、不思議事也ト書ル物アリ、誠此文ヲ不見程ハ不審ノ名也、今思ヘバ、鎌倉源二位頼朝卿、平家ノ亂ヲ靜メテ、文治ノ始、新補シテ地頭ト云フ、是則武士ヲ勇メテ、海内守禦全セン爲ノ義ナレバ、地頭錢ノ心相諧者哉、

〔式目抄 一〕地頭號、關東以前ニハ其號ナシ、或記云、文治元年十一月日、賜諸國ノ地頭職云々、唯淨裏書云、文治元年、或建久元年、始テ諸國地頭職ヲ御拜領之由申傳ヘタリトカケリ、然リトイヘドモ文治建久ノ比ノモノニハ無所見、若以内々被申入歟、地頭事ハ、貞應宣旨ニ見ヘタリ、頼經五歳ノ時也、イカサマ關東世務時ヨリ始ル號也、

〔武家名目抄 職名三十〕按、地頭職を設けしは、起源何れの世にあるを詳にせざれども、思ふに諸國の庄園、年々に倍增し、私領の土地多くなりしより巳後の事にて、其領主の家々より、私にこの職を設け置て、年貢收納の沙汰をなさしめしに始まりしならむ、○註略これは藤原氏、ひとり國政を掌握せし後のわざにして、一條三條兩帝の際に起りしなるべし、○註略もと領家の私に置るものなる故に、其職を地頭とのみはいはずして、領家代公文下司目代などゝもとなへしなり、○註略保元平治の後、平氏の門族國柄を執せし間は、其私領多くなれるゆへに、何れの地にも地頭職を置て、收納のつかさとなせり、○註略抑この地頭の名目は、こなたにて設けしにはあらず、唐の制に始れる名稱なり、國用急なる時、米穀にかへて諸郡に課せて、每畝に二十錢をいださしむるを地頭錢といへるよし、唐書食貨志に見ゆ、さるはもとより可段

の數に從ひてあて召さるゝが故に、地頭錢の名もありしなるべし、されば其事をつかさざる者をやがて地頭職といへるなり、文治以前の地頭は、必しも臨時に軍役の兵糧米にとて錢を收むるつかさにはあらざれども、其收納の法は、地頭錢の義にかなへるが故に、職掌の名とせしなるべし、平家兵權をとりし頃は、大かた軍役に從ふ者の唱へのごとくなりにけり、文治元年にいたりて、鎌倉殿奏請のまゝに、天下一圓に此職を置れ、段別五升の兵糧米を充取らるゝ法定まりては、いよ〳〵唐の制に符合せり、續古事談にも、いまの地頭は、唐の地頭錢の義にかなへる由をいへり、これより以前は、全く私に設けし職にて、私領にのみ置たりしものなり、されば公家ざまの記錄には、絕てみゆることなし、源行家、源義經、平家追討の後、四國九州の總地頭たるべき由の院宣を給はりしは、亂世の權宜にして、常の例にあらず、文治には勅許によりて、公私の差別なく、このつかさを置べき法となりければ、郡鄕庄保、のこる所なく地頭職を補して、兵糧米を收納する事となりぬ、此職は、もとより幕府の御家人たる者の所職なれど、たまさかには公家ざまの人も、武家に昵近するたぐひは、一鄕一村の地頭職を申給はりしもあり、或は神官なども、功ありて地頭をかねたるもまゝあり、又地頭職たる輩、その知行の地を門族に分與する時、妻娘及近親の婦女などにも一所の地頭を授けしこともあり、或は他姓の子をわが子に准じて讓りしもあり、さらに他姓の人に賣渡しゝも聞ゆ、凡地頭の職たるものは、兵糧米を收むるを常の務とし、事ある時には、守護人の催促に應じ、總領に從て軍役を勤め、常には京師の大番、鎌倉の大番、其外の諸役、何れも例に任せて勤仕するならひなり、女子の所領、もしくは主人幼少にて、みづから軍陣に出る事能はざるものは、代兵を出して事に從はしむ、又神官のたぐひは、みづから軍役をつとめしもあり、されど公家ざまの人は其事なりがたければ、大かたは錢を出して贖ひしなるべし、但公家の輩の此職をもてるは、殊さらいはれありてのことなれば、武家にて用捨せしこともありしと思はる、

〔倭訓栞前編十五〕ぢとう　承久記に、鎌倉右大將、平家を追討して、日本國の總追捕使に補せられ

て、國々に守護を置き、郡郷に地頭を居、段別兵粮をあてとらる、間、領家は地頭をそねみ、地頭は領家をあたとすとみえたり、某の地の頭人といふにや、又壒嚢抄に、後漢書に地頭錢といふ事あり、是其名のよる所ならんといへり、

〔安齋隨筆後編六〕一領家　東鑑卷十、建久元年十月九日庚寅、於駿河國蒲原驛院宣到來、是近江國田根庄者、按察大納言朝房領所也、依二品御鬱陶、日來籠居之間、地頭佐々木左衞門尉定綱、忽緒領家所務云々、彼卿復本之後就申子細、可令尋成敗之趣也、則以其趣被仰含定綱訖云々、定綱は彼大納言の地を預り、百姓を支配し、年貢を取立て納る人也、是地頭也、今世武家に地頭と云は、古ノ領家也、今世代官と云は、古ノ地頭也、鎌倉の代には、年貢を進納する人を地頭と云也、

〔東鑑不審問答附錄〕卷十ノ三十八丁オモテ地頭佐々木左衞門尉定綱忽緒領家所務云々、

地頭領家如何　公家ヨリ領スルヲ領家トイフ、領家ノ領分ヲ受テ支配スルヲ地頭ト云、

〔農政座右一〕地頭

頼朝以前ニモ、庄園ニハ地頭ノ名モアリシヲ、頼朝取用テ諸國ニ置シナルベシ、○中略思フニ一段ゴトニ其地ノ頭ヲ改メテ、軍役米ヲ收納セシナルベシ、拾芥抄ニ三十六歩爲一段頭トアルナリ、後ニハ是モ勢アリテ、自ラ官職ノ如クナリシニヨリ、院廳ノ下文ニテ、行家ヲ四國ノ地頭ニ補シ、義經ヲ九州ノ地頭ニ補セラルト云フニモ至リシナリ、故ニ終ニハ領主ノ如クナリ貴ブコトニテ、異國迄モ此事ヲ傳ヘ、郡守曰地都ト兩朝平壤錄ニ云ヘリ、地都卽地頭ナリ、

〔拾芥抄中末田籍〕凡田以方六尺爲一歩、四面各六尺也卅六歩爲一段頭、三百六十歩爲一段、積、七十二歩爲十代、百四十歩爲廿代、二百六十歩爲卅代、二百八十歩爲四十代、五十代爲一段、或云、代頭也云々、

〔墨水鈔二〕地頭名義考上

名義の事

守護地頭の地頭職は、鎌倉の始めに起れりとのみは誰しの人かは意得ざるべき、されど古記どもに據て考ふるに、夫より前にもやゝ古くより見ゆめり、又頭字を貫首の義とやうに意得んには、其義理甚く違ふべき物ぞ、抑此地頭の名義は、社頭路頭などいふ頭字の如く、ほとりといへる文字の意にして、地頭は土地といふ義にこそ有けれ、仁安元年十月十五日人車記、大嘗會御禊河原點地條云、上卿還參之間、以列官史令申事具由、此間陰陽頭賀茂在憲朝臣、助安倍泰親朝臣、臨地頭打丈尺云々、或家所藏、永暦元年文書云、自守殿依被仰下候、在廳令實檢地頭之後、于今無音云々、嘉祿元年十二月廿五日明月記云、雪埋地頭云々など見えしは、何れも其土地をさして地頭といへる明文なりかし、其土地といふ徵は何ぞといふに、唐代宗の大暦年中、限ある租税のほかに、地頭錢といふを加徵せしより起り、其地頭錢といふ名目の意は、地子といふに最近くかよひて、其實用の所課をいへば、軍糧の設けなりしなりけり、段別に錢十五など見えたりされば此方にて地頭といへるも、夫を原にて名づけそめたりしが、おのづから貫首の義にも協へば、終には職名とさへなれりしなるべし、

〔兵範記〕仁安元年十月十五日乙酉、御禊點地也、辰剋許向河原、先是行事撿非違使源爲經、志中原章貞臨地頭、令擇除二條以北、○下略

〔東寺百合古文書〕三十三下　新見御庄

仰下田處忠國申雜事參箇條○中略

一可任先例勸農時令雇仕百姓事

右爲田所之者、勸農之時、百姓一度、平均役令雇仕者、先例也、而地頭代形部入道抑留之間、相觸正。地。頭。之處、先例有限者、不可及妨之由令下知云々、旁勿論事歟、早任先例、勸農之時、可被役者可令雇仕也、

以前三箇條、依御下知如件、

嘉祿二年二月十八日　　造東大寺次官　[illegible]

沿革

〔集古文書二十六下知狀〕嘉禎三年下知狀 紀伊國高野山金剛峯寺藏

高野山領備後國大田庄預所僧覺傳與地頭大田方康連桑原方康連相論條々 ○中略

一地頭違背御下知事

右一庄內、一年中、兩方鎌倉下向、人夫四人、一方各貳人自內書信之時、雖令宛之、正員地頭下向之間、或八人、或十人具下、○中略

嘉禎三年七月七日

左京權大夫平 花押○北條泰時

修理權大夫平 花押○北條時房

○按ズルニ、正員地頭ハ、正地頭ニ同ジク、地頭代ニ對シテ稱スル所ナラン、

〔河內國小松寺緣起〕勸進奉加帳事

錢分

十貫文 交野郷領家代 覺蓮房

三貫文 田原郷地頭代 常道印

五貫文 同郷下司代

十貫文 鷹山郷下司代 正信

五貫文 高宮郷地頭代 宗時

一貫文 寺村郷地頭代 蓮信

一貫三百文 田原郷公文代 教智

五貫文 甲可郷目代 定眞 ○中略

右近隣諸郷奉加結緣、大略如右、此外雖有寸鐵尺木之助成、不能委細、仍奉加帳如件、

保延五年三月日

〔古事談四第四〕宗形宮內卿入道師綱、陸奧守ニテ下向之時、基衡押領一國、如无國威、仍奏聞事由、申下宣旨、擬檢注國中公田之處、忍夫○信郡者、基衡職テ、先々不入國使、而今度任宣旨擬檢注之間、基衡件郡地頭大庄司季春ニ合心テ禦之、國司猶帶宣旨推入之間、已放矢及合戰了、

〔墨水鈔二〕地頭名義考上

莊司代官の徒を地頭と稱へる事

按ふに、此國司（〇師綱）入部は、保延五年なるべく推考ふるよしあれば、さては彼小松寺緣起（上件に見ゆ）と同年に係れり（文治元年より卅六年以前なり）其徵は何ぞといふに、康治二年四月一日の除目に、陸奧守師綱朝臣、大膳大夫に任ずるよし物にみゆればなり、康治二年より五箇年以前は保延五年なり、此年國司に任ぜられしなるべし、

〔源平盛衰記四十六〕義經行家出都幷義經始終有樣事

昔將門ガ合戰ノ時、御方シタリシ俵藤太秀鄕ガ末葉ニ、陸。奧。出。羽。兩。國。ノ。地。頭。ニテ、權大夫常淸、（〇下略）

〔宇佐宮御神領次第（黒川春村書地頭名義考所引）〕宮司公順爲奉報神恩、以保安四年五月廿一日、當宮御寶前勤修御八講、供料庄被奉寄畢、其後始自五月廿五日、勤修彼御八講、下行供米料之間、傳法寺本領無指故建立宇佐僧正御房御領之別當宮領三百餘町、號四至內打入之中、城井浦其一也、仍號地。頭。（〇下略）

〔吾妻鏡二〕治承五年（〇養和元年）閏二月七日癸丑、武衛（〇源賴朝）御誕生之初、被召于御乳付之靑女、（今日名尼、號摩摩、）住國相摸早河庄、依召于御憐愍故、彼屋敷田畠、不可有相違之由、被仰含總領地頭云云、

養和二年（〇壽永元年）三月五日乙亥、山田太郞重澄、日來朝夕祗候、殊竭懇懃之忠、仍今日賜一村地頭職、

六月五日甲辰、熊谷二郞直實者、匪勵朝夕恪勤之忠、去治承四年、追討佐竹冠者之時、殊施勳功、依令感其武勇給、武藏國舊領等停止直光之押領、可領掌之由被仰下、而直實此間在國、今日令參上、賜件下文云云、

下　武藏國大里郡熊谷次郞平直實所定補所領事

右件所、且先祖相傳也、而久下權守直光押領事停止、以直實爲地頭之職成畢、（〇下略）

〔吾妻鏡三〕壽永三年（〇元曆元年）五月廿四日辛亥、左衛門尉藤朝綱、拜領伊賀國壬生野鄕地頭職、是日來

雖仕平家、懇志在關東之間、潛遁出都參上、募其功、宇都宮社務職無相違之上、重被加新恩云云、九月廿日丙午、玉井四郎資重濫行事、所被下院宣也、今日到來于關東、武衛(○源頼朝)殊依恐申給、則可停止之旨被仰下云云、

丹波國一宮出雲社者、蓮華王院御領也、預給能盛法師、年來令知行、何有稱地頭之輩哉、年來又不聞食及、而號彼御下文、玉井四郎資重恣押領、其理可然哉、有限御領、不可有異儀事也、早可停止件濫行之由、令下知給可宜之由、院御氣色候也、仍執達如件、

八月卅日　右衛門權佐

謹上　兵衛佐殿

十二月廿五日庚辰、鹿島社神主中臣親廣親盛等、依召參上、今日參營中、賜金銀祿物、剩當社御寄進之地、永停止地頭非法、一向可令神主管領之旨被仰含、是日來捧御願書、抽丹祈給之處、去春之比、現嚴重神變御之後、義仲朝臣伏誅、平内府(○宗盛)又出一谷城郭敗北赴四國訖、彌依催御信心今及此義云云、

〔薩藩舊記(前集一)〕下　伊勢國波出御厨(花押)

補任　地頭職事

左兵衛尉惟宗忠久

右件所者、故出羽守平信兼黨類領也、而信兼依發謀反、令追討畢、仍任先例、爲令勤仕公役、所補地頭職也、早爲彼職、可致沙汰之狀如件以下、

元曆二年(○文治元年)六月十五日　花押(○源頼朝)

〔吾妻鏡(四)〕元曆二年(○文治元年)八月廿一日辛未、鹿嶋社神主中臣親廣、與下河邊四郎政義、被召御前、遂一決、是常陸國橘郷者、被奉彼社領訖、而政義以當國南郡總地頭職、稱在郡内、押領件郷、令譴責神主

諸國置地頭職

妻子等剩可從所勘之由取祭文之旨、親廣訴申之、政義雌伏、頗失陳謝、爲眼代等所爲歟之由稱之、○下略

〔吾妻鏡　五〕文治元年十一月七日丙戌、二品○源頼朝爲召聚軍士、爲聞食定京都事、逗留黄瀨河宿給之處、去三日、行家義經、於中國落西海之由有其告、但件兩人、賜院廳御下文、四國九國住人、宜從兩人下知之旨被載之、行家補四國地頭、義經補九州地頭之故也云云、

〔玉海〕文治元年十月十七日丙寅、早旦大藏卿泰經、爲院御使來門外云、依觸穢不入門内、以季長傳申、去十一日義經奏聞云、行家已反頼朝了、雖加制止不可叶、爲之如何者、仰云、相構可加制止者、同十三日又申云、行家謀叛雖加制止、敢不承引、仍義經同意了、其故者奉身命於君、成大功、及再三、皆是頼朝代官也、殊可賞翫之由令存之處、適所浴恩之伊豫國、皆補地頭不能國務、○下略

〔吾妻鏡　五〕文治元年十一月十二日辛卯、今日河越重頼所領等被收公、是依爲義經縁者也、○中略凡今度次第、爲關東重事之間、沙汰之始終之趣、太思食煩之處、因幡前司廣元申云、世已澆季、梟惡者尤得秋也、天下有反逆輩之條、更不可斷絶、而於東海道之内者、依爲御居所、雖令靜謐、奸濫定起於他方歟、爲相鎭之、毎度被發遣東士者、人々煩也、國費也、以此次諸國交御沙汰、毎國衙庄園被補守護地頭者、强不可有所怖、早可令申請給云云、二品○源頼朝殊甘心、以此儀治定、本末相應、忠言之所令然也、　廿八日丙午、○丙午恐丁未誤補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米段別五升之由、今夜北條殿○時政謁申藤經房卿中納言云云、　二十九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、　十二月廿一日庚午、於諸國庄園下地者、關東一向可令領掌給云云、前々稱地頭者、多分平家家人也、是非朝恩、或平家領内其號補置之、或國司領家爲私芳志定補于其庄園、又令違背本主命之時者改替之、而平家零落之刻、依爲彼家人知行之跡、被入沒官畢、仍施芳恩本領主空手後悔之處、今度諸國平均之間、還斷其思云云、

〔玉海〕文治元年十一月廿八日丁未、又聞、件北條丸以下郎從等、相分賜五畿、山陰、山陽、南海、西海諸國、不論庄公、可充催兵粮、段別五升、非啻兵粮之催、總以可知行田地云々、凡非言語之所及、　十二月八日丁巳、所充諸國之兵粮、皆可募官物之內之由下知之間、庄公之運上不通、人命殆不可待元正云々、非言語之所及、　廿日己巳、未剋大地震、雖不及七月之震、普通無比類之動也、其後連々六ヶ度、相幷七ヶ度震動、此震非他、武士諸國押領之徵也、日本國之有無、只在今冬明春歟、已及獲麟歟、　廿七日丙子、午剋右中辨光長朝臣、持來賴朝卿書札幷折紙等、如夢如幻、依爲珍事、爲後鑒續加之、

賴朝書狀

　言上　事由

右言上日來之次第候者、定子細事長候歟、〇中略以義經補九國之地頭、以行家被補四國之地頭候之條、前後之間、事與心相違、〇中略但於今者、諸國莊園平均可尋沙汰地頭職候也、〇中略

　文治元　十二月六日　　賴朝在判

　謹上　右中辨殿

〔平治物語三〕賴朝擧義兵平家退治事

賴朝平家ヲ亡シ、天下ヲ治テ、文治ノ始メ、諸國ニ守護ヲ居、アラユル所ノ庄園鄕保ニ地頭ヲ補シテ、武士ノ輩ヲ勇メ、廢タル家ヲ起、絕タル跡ヲ繼テ、武家棟梁トナリ、征夷將軍ノ院宣ヲ蒙レリ、

〔承久軍物語一〕いにしへは、こくしりやうけといふばかりなりしを、この時〇源賴朝にあたつて、くにぐににしゆごをおき、郡鄕に地とうをすえて、たべつひやうらう米をあてとらるゝあひだ、こくしはしゆごをそねみ、りやうけは地とうをあたとをもふ、

〔源平盛衰記四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

同〇文治元年十一月二十八日、兩使數百騎ノ兵ヲ率シテ入洛ス、義經行家ハ都ヲ落ヌ、時政〇北條實平〇土肥

上洛シタレ共、合戰ナケレバ洛中靜也、時政、源二位〇頼朝ノ依下知、諸國ニ守護ヲ置、庄園ニ地頭ヲ可成由、吉田藤中納言經房卿ヲ以奏シ申ス、又二十六箇國ヲ相分テ庄領國領ヲイハズ、段別兵粮米ヲ充、義經行家追討ノタメトゾ聞エシ、無量義經云、王敵ヲ亡ス者ニハ、賞スルニ半國ヲ賜ハルト見エタレ共、我朝イマダ無先例、頼朝申狀、頗過分也ト、君モ臣モ思召ケレバ、御返事有御猶豫ケレバ、時政奏スラク、吾朝日本國ニ、昔ヨリシテ謀叛人多ク日記ニ留レ共、平相國〇清盛ニ過タル犯人ヲ不見、〇中略是ヲ平グルハ源氏ノ高名也、是ヲ鎭ルハ關東ノ忠勤也、國ヲ守、人ヲメグマンガ爲ニ被奏申處也、ナドカ御免ナカラント申上タリケレバ、道理ハサモ有ケレドモ、當時ノ威應ニ恐テ任望請旨、諸國ノ守護人、段別ノ兵粮米、平家知行ノ跡ニ地頭職ヲ被許ケリ、

〔臺水鈔二〕地頭名義考上

地頭職勅許の事

此文〇源平盛衰記も亦解し難きをおく多し、〇中略まづ諸國に守護を置き、莊園に地頭を成すべしとは、前年の宣制の趣き、二十六箇國を分て云々とは、翌年の改定なるを、〇註略一つらに書つゞけたれば、文義齟齬して聞え難きものなり、又次文に、諸國守護人段別の兵粮米とあるは、前年の趣き、平家知行跡に地頭職を許さるゝとは、平家の公達武士等の所領跡を、源氏の武士の勳功を賞して相傳の知行に宛らるゝをいへり、たゞ追捕使にのみ置るゝものとは、替りめある事をおもふべし、只それもこれも、地頭とのみ見ゆれば、とにかくにまぎはしきものなり、扨又二十六箇國と見ゆるは、恐らくは平家沒國の員數なるべし、此二十六箇國と關東知行の九箇國とは、公家より國司を置れずして、右大將家を國司代とし、或は一族の武家を受領として、國術の雜事も、年貢所當も、都て關東の所務とせしなり、

〔神皇正統記後鳥羽〕頼朝、勳功まことにためしなかりければ、みづからも權をほしきまゝにす、〇中

地頭政所

略あらゆる庄園鄉保に地頭を補せしかば、本所はなきがごとくになれりき、

〔保曆間記下〕同〇文治元年十月、〇中略北條四郞時政、源二位〇賴朝ノ使トシテ上洛シテ、日本國ノ國々ニ守護ヲ置キ、郡庄ニ地頭ヲ居テ、總地頭職ヲ給ハラント申、法皇〇後白河末日本國ニ無例事ナレバ、思食シ煩ケレドモ、源二位申所難閣トテ被免ケリ、

〔增鏡二新島守〕其年〇文治元年の十二月九日、權大納言になされて右近大將を兼たり、〇源賴朝之はすのついたちごろ、よろこび申て、おなじき四日、やがてつかさをばかへしたてまつる、この時ぞ諸國のそうついふくしといふ事うけたまはりて、地頭職に、我家のつは物どもなしあつめける、この日本國のおどろふるはじめはこれよりなるべし、

〔小夜のねざめ〕廣元〇大江などいひし人は、賤く數ならぬものにて有しかども、鎌倉の右大將、いとをしくせられて、日本國のことをもはからひ申て、今の世に諸國に地頭などをかれたるも、此人の申されたるとぞ承侍し、

〔薩藩舊記前集二〕地頭所下　南鄕沙汰人

可早如元令安堵如□千世松母堂屋敷事

右屋敷、如元可充給千世松母堂也者、沙汰人存此旨可充行之狀如件、宜承知勿違失、以下、

承元二年三月三日　　地頭在判

〔東寺百合古文書一下〕　山城國下久世庄公文職之事〇中略

正應五年二月日　　地頭政所

〔三島宮御鎭座本緣〕八十五代後堀川院御宇、貞應元壬午年正月朔日、三島宮邊ヨリ火災出起、社內寶殿以下、贄館、幷地頭政所、同太祝政所、井ノ口神大夫穴符宿迄、總數四拾餘所燒失、達子細京都、先假殿取成之云々、

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月六日乙卯、被獻右府〇藤原兼實御書曰、

言上事由、右言上日來之次第候者、定子細事長候歟、〇中略於今者、諸國庄園、平均可尋沙汰地頭職候也、其故者、是全非思身之利潤候、土民或含梟惡之意、値遇謀叛之輩候、或就脇々之武士、寄事於左右、動現奇怪候、不致其用意候者、向後無四度計候歟、然者雖伊豫國候、不論庄公、可成敗地頭之輩候也、但其後、先例有限正稅已下、國役本家雜事、若致對捍、若致懈怠候者、殊加誡、無其妨任法可致沙汰候也、〇中略

十二月六日　　頼朝在判

謹上　右中辨殿

〔吾妻鏡八〕文治四年八月廿日癸未、前廷尉康頼入道、亦捧訴狀、是阿波國麻殖保事、地頭刑部丞成綱、募武威不用保司之間、恩澤似無所據之、加之內藏寮濟物闕乏之故、可停止成綱地頭職之由、所被下院宣也、云云、被云是、二品〇源頼朝令驚給、被補置地頭於諸國事、警衛朝廷、爲治國亂也、而抑留公物、不穩便之由有沙汰、成綱雖令領掌地頭職、不可相交領家方之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年二月卅日壬寅、安房、上總、下總等國々、多以有荒野、而庶民不耕作之間、更無公私之益、仍招居浪人、令開發之、可備乃貢之旨被仰其所地頭等云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年十月五日丙戌、於關下遣陸奥目代解狀到來、仍彼國地頭所務間、有被定事等、雖爲路驛猶及此御沙汰、繁務不失寸陰之故也、

下　陸奥國諸郡鄉新地頭等所

可早從留守幷在廳下知先例有限國事致其勤事

一國司御廐舍人等給田畠事

右件舍人等、居住郡鄉、募來彼田畠在家等者也、早任先例可令引募、且隨作否之多少、可充行也、

一國司御厩佃事
右件佃、本自有定置之郡鄕、宮城、名取、柴田、黑河、志太、遠田、深田、長世、大谷、竹城是也、早任先例可致沙汰、縱所雖損亡、隨作否可充行沙汰也、
以前條々、背此狀致不當之輩者、可改定地頭職也、且御目代不下向之間、隨留守家景幷在廳之下知可致沙汰、○中略

建久元年十月五日

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年四月廿七日戊子、仰東國分地頭等、可新開水便荒野之旨、今日有其沙汰、凡稱荒不作、於乃貢減少之地者、向後不可許領掌之由、同被定云云、廣元奉行之、
正治二年八月十日癸巳、陸奧出羽兩國諸郡鄕地頭所務事、可守秀衡泰衡舊規之旨、故將軍源賴朝御時被定之處、各動境以下事、成非論之間、可任彼例之由、今日重被定之、且秀衡等知行之時、每境懸札訖、以其古跡可令爲牓示之由云云、廣元親能朝臣等依仰加下知、中村掃部丞相觸留守所云云、

〔吾妻鏡十八〕建永二年○承元元年三月廿日壬辰、武藏國荒野等可令開發之由可相觸地頭等之趣、被仰武州○北條時房云云、廣元朝臣奉行之云云、

〔吾妻鏡十九〕承元四年三月廿二日庚戌、相州○北條義時室依可有熊野詣、路次雜事等、被充地頭等云云、仲業奉行之、　五年○建曆元年六月廿六日丙午、海道可建立新宿事、度々雖有其沙汰、未令遵行之由依有其聞、今日重被仰守護地頭等云云、

〔吾妻鏡二十二〕建保三年二月十八日丁未、仰諸國關渡地頭、可被止旅人之煩、但如船賃用途者、五料田可募其替云云、

〔新編追加雜務〕神社佛寺條
一郡內寺社事

右件寺社者、多是爲領家進止歟、若又地頭氏寺氏社者、私進止歟、所詮任先例、今更不可致自由新儀、

去々年兵亂以後、所被補諸國庄園鄕保地頭沙汰條々、〇中略

本新地頭條

一公文、田所、案主、總追捕使有司等事、

右件所職、隨所或在之或無之、各雖非一樣、所詮任先例、於領家國司進止之職者、地頭更不可致妨、若又亂逆時、依爲指犯過之跡、雖兼帶其職、如舊可從領家國司之所務、〇中略

一犯過人糺斷事

右領家國司三分之二、地頭三分之一、可致沙汰也、以前五ヶ條、且守宣下之旨、且依時儀、可令計下知也、凡不帶此狀之輩、若寄事於左右、猥張行事出來者、領家國司之訴訟不可斷絕、隨交名到來、可令過斷也、以此旨兼普可被披露也者、仰旨如此、仍執達如件、

貞應二年七月六日　　前陸奧守判

相模守殿

〔吉田社文書一〕下　吉田社

仰下雜事參箇條〇中略

一可任度々下知停止社內犯過人爲地頭一人進止事

右犯人過料者、三分之內、一分領家、一分地頭、一分田所、定使可令相分之由、度々下知已畢、而猶地頭一人進止之、或乍行過料、不令相分、或容隱所犯自由放免適雖令露顯妄稱無其科云々、所行之趣可謂自由、縱任度々下知停止彼自由、可令致相分之沙汰、〇中略

寬喜元年七月日　　主殿頭小槻宿禰花押

〔新編追加雜務〕守護人撿斷條

一鈴鹿山幷大江山惡賊事、爲近邊地頭之沙汰、可令相鎭也、若難停止者、改補其仁、可有靜謐計也、以此趣相觸便宜地頭等、可被申散狀者、依仰執達如件、

延應元年七月廿六日　　前武藏守（泰時）判

　　　　　　　　　　　修理權大夫（時房）判

相摸守殿（〇北條重時）

越後守殿（〇北條時盛）

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年（〇延應元年）六月六日甲辰、武藏國請所等用途事、爲地頭沙汰、每年可有京進之所々、今日被定下之、　七月廿五日壬辰、越中國東條河口曾禰八代等保事、爲請所、以京定米百斛、可備進之旨、地頭等、去年十一月、獻連署狀於禪定殿下、（〇藤原道家）仍可停止國使入部、幷勅院以下國役之由、同十二月國司加廳宣、就之去正月、任國司廳宣地頭等寄進狀、爲東福寺領、停止勅院事國役等、爲地頭請所、可令備進年貢百石、

延應二年（〇仁治元年）十二月十六日乙亥、就地頭所務以下事、被定條々

一本補跡所々撿斷事　可任先例者

一厨雜事等事　不謂本新補、一向停止（馬藁薪以下、非沙汰之限、）者、

一人倫賣買事　勾引中等者、可被召下關東、被賣之類者、隨見及可被放其身、只可觸路次關々也、

一諸社神官幷神人等、令書起請時、於他社不可書由事、　於京都令書者、不嫌自他社、於北野可書也、

一可被行罪科由、被裁御下知了見事、　可書載子細於分明者

〔徵古文書甲集山城〕報恩院文書（宇治郡醍醐寺村醍醐寺塔頭）

征夷大將軍藤原賴經下文（〇寬元元年）

下　醍醐寺領越前國牛原庄住人等

　仰三箇條

一撿斷事

右對決之處、如雜掌盛景申者、前地頭土左三郎廣義之時、撿斷沙汰者、領家三分二、地頭三分一也、且承久亂逆以後、當地頭補任之剋、前代官助基、如前々領家方相共可致沙汰之由、令成下知狀畢、然而又代官等不敍用之間、訴申地頭之處、可追前地頭例之由、貞應三年雖被成下知狀、助基得替、政範眞念等、被補地頭代之後者、都以不承引、仍去年十一月、言上關東之處、被遣御教書於地頭許之間、如去年二月地頭下知狀者、尋明前地頭之時例、可有左右之旨雖被載之、猶不事行、早任先例、領家三分二、地頭三分一、可致沙汰之由欲被仰下云々、如地頭代眞念、同使者心蓮等申者、當庄者、故遠江入道、山城入道、土左三郎、三代知行之時、撿斷事、領家不相交、一向爲地頭進止之由、庄內故實之者、重圓法師令明申之間、自承久至當時二十餘年、地頭一向之沙汰也、次助基下知狀事、非地頭下知之上、爲南庄之代官、非一庄奉行之仁、只依一旦之阿□(○恐容字)令書出歟、隨如前々可致沙汰之由載狀之間、依無先例不及敍用、次不可有新儀沙汰之旨、貞應三年、地頭被成下知狀畢、若有先例者、就此狀領家方年來何不相交哉、故實之重圓被殺害之後、今如此掠申之條、尤無其□(○恐謂字)之者、盛景則備地頭前代官助基下知狀、領家三分二、地頭三分一之由申之、眞念等亦重圓法師明申先例之間、地頭一向致沙汰之旨雖申之不出對、重圓書置狀之上、如地頭度々下知狀者、可追前地頭例之由令書載之處、彼例不分明歟、爰有山城入道知行時之文書者、可令進覽之由、被尋下信濃民部大夫行盛法師之處、如去五月一日請文者、故信濃前司行光法師之時、古文書等依令朽損令取寄之間、如然之文書不傳持云々、仍載起請詞可注申、先□□法之由、仰相模守重時朝臣被尋問前地頭土左三郎廣義法師(法名實念)之處、如去六月廿四日實念誓狀者、當庄撿斷事、遠江入道、山城入道知行之時、一向地頭進止之由依承及、實念任彼例致沙汰畢(○本書此下、有起請詞、略之五字、)云々者、早任先例、如元可爲地頭之進止矣、(○中略)

寬元元年七月十九日　　武藏守平朝臣(花押○北條經時)

〔吾妻鏡　三十八〕寬元五年(○寶治元年)十一月廿七日丙子、畿內諸國守護地頭等所務事、有散亂子細之由

依レ令二風聞一、今日有二其沙汰一、所レ被レ仰二遣六波羅一也、

〔吾妻鏡四十〕建長二年三月三日己巳、今日諸國守護撿斷事有二其沙汰一、殺害事、如二守護人等申一者、可レ請二取其身一之處、郡鄕地頭等、搦二進六波羅一條無レ謂云云、如二地頭等申一者、搦二渡守護所一之處、不レ論二輕重一、卽放免之間、還而依レ有二其煩一、召二進六波羅一云云、就レ之被レ仰二遣六波羅一云、〇中略地頭等中、若致二無道一者、守護人者就二訴申一尋明、可レ被二注申一、殊可レ有二御沙汰一也云云、　四月廿九日甲子、雜人訴訟事、諸國者、可レ帶二在所地頭擧狀一、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年六月二日辛酉、奧大道夜討强盜蜂起、成二往反旅人之煩一、仍此間度々有二其沙汰一、可レ致二警固一之旨、今日被レ仰二付于彼路次地頭等一、

〔東寺百合古文書四〕伊與國弓削嶋庄領家與二地頭景行幷茂忠一所務條々和與事

一兩樣兼帶事者、付二新補率法一、可レ致二其沙汰一也、

一以二土居末久名一、任二久行法師時之例一、一向可レ引二募給加徵之代一、此外於二百姓名之給加徵一者、一向不レ可レ取レ之矣、

一山海所出事、於二鹽幷網一者、同任二久行法師之例一、互不レ可レ有二相違一、其外所出者、兩方可レ致二半分之沙汰一也、

一比年野僨事、可レ爲二進止領家一也、

一宗貞名事、不レ可レ致二其妨一、兩方相計、可レ被レ付二隱便之百姓一也、

一行成名事、同如二先止一妨云、〇云恐誤字可レ被レ付二隱便之百姓一也、

一撿斷事、兩方相共任二御式目一、於二三分二一者、可レ爲二進止領家方一、於二三分一一者、可レ爲二地頭得分一也、

右以前七ケ條、兩方共守二此旨一、於二自今以後一者、不レ可レ有二違亂一者、仍和與之狀如レ件、

正嘉三年〇正元元年二月廿二日　地頭日置茂忠花押

地頭左衛門尉同景行花押

雜掌僧明鑒花押

〔新御式目〕一新制條々七ヶ條正慶三二十三

一造作事　一修理幷替物用途事　一垸飯役事

右三ヶ條、充課百姓事停止之、以地頭得分可致沙汰焉、

〔沙石集七〕慳貪者之事

一奥州ニ百姓有ケリ、慳貪ニシテ妻子ニモ情ナカリケレバ、妻ノニゲ〳〵スルヲ、度々取エテゾ置ケル、或時五六ナル子ヲ抱テ、地頭ノ許ニ行テ申ケルハ、夫ニテ候者、餘ニ情ナク慳貪ニ候故ニ、堪忍シテ相傍ベキ心地候ハズ、蒙御下地離申度由申スニ、地頭、夫コソ妻ヲバ去レ、妻トシテ夫ヲ去事イカナル子細ゾト尋ルニ、余リニ情ナク候事、サノミハ叵申盡候、〇下略

〔建武年間記〕一領家地頭所務事

云領家云地頭、不可違近年所務之例、有子細者、各可經奏聞、近日以威勢恣致濫妨之類、有其聞、諸國擾亂職而由茲、背先例任雅意、致其沙汰者、縱雖爲理訴、永可被弃捐後訴、

一諸國庄園鄉保地頭職以下所領等年貢事

一員數事

不論本領新恩、當時管領田地之分、任實正不日可注進之、以後正税以下色々雜物等、所出廿分之一於料所保被勤仕之地非此限可進濟御倉、但至貢金貢馬等之類者、可守先例、若注進之田收以下減少之條、支證出來者、於餘田者可被收公也、

〔匡遠宿禰記裏書〕當莊年貢事、一向無沙汰云々、太不可然、

雜訴決斷所𥿻　大內莊西方地頭

右當莊所務幷年貢事、雜掌申狀如此、何樣事哉、早帶文書正文、可令參對之狀如件、

戒飭

建武元年二月二十二日

〔吾妻鏡六〕文治二年六月廿五日辛未、歡喜光院領、播磨矢野別府事、海老名四郎能季、稱地頭、不堪寺家所堪之由依被下院宣、向後可止非分押妨之旨、二品令加下知給云云、　七月廿八日癸卯、帥中納言〇經房奉書到來、新日吉領武藏國河肥庄地頭對捍去去年乃貢事、并同領長門國向津奥庄、武士猥藉事、取庄家解狀被下之、早可令尋成敗給之由被載之、去六月一日御教書也、　八月五日己卯、就帥中納言奉書被進御請文、是新日吉領武藏國河越庄年貢事、并長門國向津庄、猥藉事等也、平五盛時染筆云云、六月一日御教書、七月廿八日到來、謹以令拜見候訖、新日吉社御領、武藏國河肥庄事、本自爲請所、令進御年貢候之所也、而去年領家令逝去之由依承候、不知可進年貢之所候、仍令相待領家候之間、彼年自然罷過候了、地頭恣非抑留之儀候歟、而今前領家孫、以禪師君可爲領家候者、早令存知其旨、可令沙汰進年貢候之由、可令下知地頭候也、且社役爲先、自今年無懈怠可令致沙汰之由、可令下知候、同御領長門國向津奥庄地頭、謀叛人豐西郡郡司弘元之所帶候、仍以景國令補地頭之處、致種々惡行候之條、事實候者、不能申左右候、早企參洛、且令陳申子細、且可仰天裁、兼偏止濫行、可隨社家使進止之由、所令下知候也、件狀一通謹以進上之候、以此旨便宜可令洩達給候、賴朝恐惶謹言、

八月五日　　賴朝　裏御判

〔吾妻鏡七〕文治三年三月四日丙午、東大寺造營之間、爲引材木被仰人夫事之處、周防國地頭等、及對捍云云、二品殊令驚申給、可致精勤之由、今日被仰遣彼地頭等中云云、　四月廿三日甲午、周防國者、去年四月五日、爲東大寺造營被寄附之間、材木事、於彼國有杣取等、而御家人少々耀武威、依有成妨事、勸進聖人重源、取在廳等狀訴申公家之間、被下其解狀於關東、所被尋仰子細也、

重源申上候、御材木の事、いそぎさた仕り候べきよしぞんじて、まかりくだり候ところに、なをなを武士のらうせきとゞまり候はず、

筑前冠者家重　　内藤九郎盛經　　三奈木三郎守直　　久米六郎國眞　　江所高信

これらが、おの〳〵かまくらより、地頭になり候て、所々におさめをきて候米百八十六石、そのゆへなくをしとり候畢、人夫食料にたのみてまかりくだり候あひだ、かやうに狼藉いでき候て、よろづ相違つかまつり候畢、わたくしに制止をくはへ候に、さらにもちいず候、かやうの事まづまり候はずは、此御大事なりがたく候者也、かねては國人をかりあつめて、城郭をかまへて、わたくしのそまつくりをはじめしあひだ、御材木引夫めし候に、さらに承引せず、あるひは山野の狩つかまつり候に、またく院宣にはゞかり候はず、如此の事により候て、諸事事ゆかず候へば、恐の爲に急申候由、委在廳解に申候よし、重源恐々謹言、

文治三年三月一日　　　　在判

〔吾妻鏡　七〕文治三年四月廿九日丙申、三日公卿勅使驛家雜事、伊勢國地頭御家人等、多以對捍之間、召在廳等注進狀被下之、仍今日二品〇源賴朝覽被目錄、仰不法之輩可被誡向後懈緩之由、及嚴密御沙汰云云、　六月廿日庚寅、伊勢國沒官領事、加藤太光員隨令注進之被補地頭之處、彼輩於大神宮御領致濫行之由、自所々有其訴之間、宜令停止之由今日被定下、其狀云、

下　伊勢國御領內地頭等　早可停止無道狼藉從內外宮神主等下知致沙汰事

右件於謀叛輩之所領者、任先蹤令補地頭職許之處、各致自由之濫行、或押領所々、或煩神人之由依有其聞、可先神役之由、度々令下知畢、仍神宮官等、擬致沙汰之處、任光員注文補地頭之輩、尙所々押領、致神領煩之由有其訴、所行之旨、甚以不當也、自今以後、從神官之下知、可令致神忠、縱雖地頭何煩神人怠神役乎、宜停止件狼藉、若於令違背者、慥注交名可言上之狀如件、以下、

文治三年六月二十日

〔吾妻鏡　八〕文治四年九月三日丙申、宮內大輔重賴不法事、就被下院宣、早可被停止之由、被仰遣重賴、

○中略

下　若狹國松永幷宮川保住人　可早任先例令勤仕國衙課役事

右件所之地頭宮內大輔重賴、寄事於所職押妨國事由、依國解自院所被仰下也、早付地頭事之外、於國衙之課役者、停止非法之妨、任先例可致其勤之狀如件、以下、

文治四年九月三日

廿二日乙卯、信濃國伴野庄乃貢事、闕怠每度依尋下、向後於有此儀者、殊可有其沙汰之由、被仰地頭小笠原次郎之間、令辨償之、仍被仰遣其趣於帥中納言許云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年十月一日丁亥、於多賀國府、郡鄉庄園所務事、條々被仰含地頭等、就中不可費國郡、煩土民之由、御旨及再三、加之被書一紙張文於府廳云云、其狀云、

以庄號之威勢、不可押不肖之道理、於國中事任秀衡泰衡之先例、可致其沙汰者、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年五月十二日乙丑、加賀國井家庄地頭、都幡小三郎隆家不義事、自仙洞被仰下之間、今日令加下知給、平民部丞盛時奉行之、

井家庄內都幡方、號地頭、致方々不當之間、不用領家之所命、不受京下之使者、押領所務、宛陵土民、況乎自名之課役、一切不致其勤之由、自院所被仰下也、所行之至、奇怪無極、直雖可停止地頭職、先所下知遣也、自今以後、令違背領家命者、可令停廢地頭職也、其上隆家之身も、難遁重科歟、仰旨如此、仍以執達如件、

五月十三日　盛時奉

加賀國井家庄內都幡小三郎所

八月三日乙酉、河內國庄々地頭等押領事、幷糟屋藤太有季致狼藉事、可被尋成敗之由、被下院宣之間、被獻御請文之上、所被問子細於彼地頭也、○中略

河内國國領於時定加、陸奥所といふ假名於立て、令押領之由有其聞、先陸奥所と云假名聞耳見苦之上、無禮と不存哉、彼奥州にて、出羽國內を押領せん爲には、陸奥所とも云てん、縱押領して有とても、地頭許にて、有限國事を、不對捍ばこそ、過怠を遁所もあらめ、對捍濫妨爲先て如然不當を致事、奇怪之至、不及左右事也、早有限國事は任先例可致其勤、又可隨國司下知也、若猶有懈怠者、將可令停止地頭職也、仰旨如此、仍以執達如件、

八月三日　盛時奉

平六左衛門尉殿

河内國山田郷事、爲地頭可隨國命之由を、下文載畢、而當任國司、光輔之時、鎌倉の仰を蒙たり、早可觸鎌倉之由令稱云云、此條鎌倉國司ならばこそ令進止、左右如何樣仰給けるぞ、又誰人をもて聞けるやらん、如此虛言、以外之次第也、早任先例可被改其沙汰之由所候也、仍以執達如件、

八月三日　盛時奉

江大夫判官殿

〔吾妻鏡十五〕建久六年八月六日戊午、丹後國志樂庄幷伊禰保、領家雜掌解到來、地頭後藤左衛門尉基清、致濫妨狼藉之由云云、尋聞子細事實者、分取地頭職三分一可注申之、可被補任他人之旨、被仰前掃部頭親能云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十二月十五日己酉、爲尼御臺所〈○平政子〉御計、被止諸國地頭分狩獵、清國書允清定奉行之、

〔島津家本吾妻鏡〕建曆三年十一月廿三日己丑、彼卿〈○藤原定家〉家領、伊勢國小阿射賀御厨地頭澀谷善左衛門尉、致非法新儀之間、領家所務如無、三品雖爲年來之愁訴、本自依不染世事、不弃置此事、思涉旬月計也、而去比以廣元朝臣消息、有愁訴由至被成遣時、爲休土民之歎、始發言之間有其沙汰、被停

止件非儀云云、是併被賞歌道之故也、

〔壬生家文書 一〕太政官厨家下　若狹國國富庄司等

可任將軍家政所御下文永停止地頭非法濫行條々事

副下將軍家政所御下文一通

右當庄者、重役無雙之地也、而地頭非法濫行隨日倍增之間、經奏聞之處、被仰彼御口一々可停止之由、所被成御下文也、早任彼狀、永可停止非法濫行之狀如件、庄司宜承知、依件行之、不可違失、故下、

建保四年十一月日　案主文殿紀花押

別當右大史中原花押　預右史生中原花押

左史生高橋

〔東大寺要錄 二〕左辨官下　東大寺

應令停止兵粮米責、幷以同宛文及守護所自由下知、忝號地頭、不用領家使、押領諸國寺領事、

右夏比以來、世間不靜、丁壯苦軍旅、老弱罷轉餉、稱責蒭何之糧道、普費華夷之編戶、已雖辨濟有限之兵粮、猶又責取無故之民稼、因玆諸方之貢賦不全、万人之愁訴无盡、神社佛寺之用途巳多闕怠、權門勢家之所領不叶進止、爲上爲下不可不禁、仍宛賜備前備中三箇國於武士、被停止諸國諸庄三升米之濫責、加之稱爲地頭職、不用京下使之者多有之歟、本自帯下文知行顯然之者、不及子細、今更雖下知證據炳焉之者、又以勿論、或以守護所之自由、始置地頭、或以兵粮米之宛文、忝號地頭、如此張行皆可停止、是豈非庄公落居之基、土民安堵之計乎、若背鳳銜之旨、猶有狼藉之輩者、可注進交名、仰武士可被行其罪、權大納言源朝臣通具宣、奉勅布告諸寺、令知此宣矣者、同下知諸國旣畢、寺宜承知、依宜行之、

承久三年十月廿九日　大史小槻宿禰在判

中辨藤原朝臣在判

〔新編追加雜務〕本新地頭條

一諸國庄々地頭中、致非法濫妨之由、訴訟出來之時、對決兩方、爲是非、於京都、而沙汰人預所可遂問注之旨被下知之所、稱觸正員、地頭代面々對捍不令參決云々、事實者甚不當也、雖爲代官、爭可令難澁哉、自今以後、猶通事左右、於不隨催促之輩者、殊可有御沙汰也、定有後悔歟、兼以此旨可令觸知之狀、依仰執達如件、

嘉祿三年○安貞元年閏三月十七日　武藏守○北條泰時判

相模守○北條時房判

播部助殿○北條時盛

修理亮殿○北條時氏

〔新編追加雜務〕本新地頭條

一地頭方厨事

右長日厨事、一向可停止之由御下知先畢、仍不及異儀焉、以前條々、以此旨可被加下知之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

寛喜三年四月廿一日午時　武藏守○北條泰時判

相模守○北條時房判

駿河守殿○北條重時

播部助殿○北條時盛

〔新編追加雜務〕守護行事條

一諸國守護人地頭或正員、或代官、依領家預所之訴訟、自六波羅爲遂對決、遣召文、爲停止非法加下

知之處、不承引之族有之云々、二ヶ度者可相觸、及三ヶ度者、可注申關東之由、先日被仰下畢、而存優如之儀、不被申之由有其聞、事實者猥藉爭可相鎭哉、於自今以後者、無容隱可令言上給之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

寬喜三年五月十三日

武藏守（○北條泰時）判
相摸守（○北條時房）判

駿河守殿（○北條重時）
掃部助殿（○北條時盛）

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年六月六日、海路往反船、或逕漂倒、或遭難風、自然被吹寄之處、所々地頭等、號寄船、無左右押取之由依有其聞、雖爲先例、諸人之歎也、自今以後、可停止之由可被仰遣諸國之旨、今日及評議云云、

〔御成敗式目〕一諸國地頭令抑留年貢所當事

右抑留年貢之由、有本所之訴訟者、卽遂結解可請勘定、犯用之條無所遁者、任員數可辨償之、但於爲少分者、早速可致沙汰、至過分者、三箇年中可辨濟也、猶背此旨令難澀者、可被改易所職也、

〔薩藩舊記前集三〕國分寺文書

左衞門尉友成申、爲薩摩國阿多郡內北方地頭、以新儀切充課役於池邊村、不糺返質物等由事、重折紙、如此之事、就先度訴狀、止新儀濫妨、可糺返押取物等之由、去延應二年七月廿三日令下知畢、而于今不事行云々、事實者、甚不穩便、早止當時違亂、糺返質物、有子細者同時企參洛、可被遂對決也、仍執達如件、

仁治二年九月十日

越後守（御判○北條時盛）
相摸守（御判○北條重時）

得分

地頭殿

〔吾妻鏡三十六〕寬元三年五月三日丙申、諸國守護地頭等、不隨六波羅召處〔○處字恐衍〕事、三箇度雖令下知、不參洛者、可被致〔○致字恐衍〕改易所職之由云云、

〔十六夜日記〕のこるよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに、くはうだいこぐうの大夫しゆんせいの卿の御むすめ、ちゝのゆづりどて、はりまのくにこしべのしやうといふところをつたへしられけるを、地頭のさまたげおほくて、むかしむさしのせんじへ、ことなるそせうにはあらでまいらせられけるうた、しんちよくせんにも入侍とやらん、心のまゝのよもぎのみしてとゝふうたをかこちて申されける歌、

君ひとり跡なきあさのみをしらば殘るよもぎがかずをことわれ、とよまれければ、ひやうぢやうにもをよばず、廿一かでうの地とうのひほうを、みなとゞめられて候けり、

〔東寺百合古文書百八十二〕安藝國井原村事、地頭高藤二入道、號神官、不勤警固役云々、甚無其謂、早可令催促、且相尋當村知行之由緒、可令注申之狀、依仰執達如件、

建治二年八月廿四日　　武藏守〔○北條義政〕

相模守〔○北條時宗〕在判

武田五郎次郎殿

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月廿八日丙午、〔○丙午恐丁未誤〕補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米〔段別五升〕之由、今夜北條殿〔○時政〕謁申藤經房卿中納言云云、　廿九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、

〔長門本平家物語十九〕同日、〔○元曆二年十一月六日〕關東より源二位〔○賴朝〕の代官、北條四郎時政上洛す、九郎判官義經みやこをおちければ、合戰するにおよばず、天下しづまる上は、諸國に守護人をおき、庄園

に地頭をすえて、國衙庄保をいはず、段別をあて十一町に一町の給田給はる、

〔墨水鈔二〕地頭名義考上

地頭職勅許の事

此文〇長門本平家物語頗る杜撰なり、時政朝臣の上洛は、同月廿五日のよし吾妻鏡に見えたり、又此勅許の一條、同月十二日に思ひたゝれて、十二月廿一日に宣下ありき、〇註略加之十一町に一町の給田の事は、此よりは四十年許後なる、貞應二年の制に係れり、〇註略さるを推くるめてひとつにかけるは、いと漫りなりかし、

〔墨水鈔三〕地頭名義考下

地頭得分員數事

鎌倉の征夷將軍右大將家以來の地頭は、三様の差別あり、此三やうの差別あるによりて、得分も亦等しからず、此事どもは上の條々所々に徵してあれども、猶とり統て委曲にいふべし、一には古來相傳の輩、或は右大將家以來新恩の輩、或は私に買得せし類ひ、何れも其郷保の内を一圓に管領して、地下の土民に耕作せさしめ、所當の官物租税地子也を辨濟し、其餘稻をば取あぐる限り我得分にするをいふ、假令田地より獲る所の米百斛あれば、此内租税は五斛に足らず、地子は二十斛なり、餘る所の七十五斛餘は、私に是を得るなり、但しその地下の名主土民は、其七十五斛餘のうちより作得を分ちとるなり、此地頭の輩、管領の地の廣狹によりて、大名あり、小名あり、御家人もまた此うちにあり、〇註略本補の地頭といへるもの是なり、但此うち新恩の限りは、五百町の外は削るべきよし、横しまなる沙汰も後には聞えぬ、されど廣元善信などの人々、諷諫を加へられしかば、空しく其沙汰は止たりしなるべし、〇中略一には新補の地頭なり、此大旨は前條に述たるが如し、是は假令百十町の地なれば、其内十町を給田に賜はり、其外の百町よりは段別五升の兵粮米を賜はるよしなり、此事は將軍執權次第、〇註略長門本平家物語〇註略等

に見えたり、但此うち本新彙帯の地頭には、頗大名の武士もあるべし、一には庄園郷保のうちに謀叛盗賊の輩あれば是を補せられ、平定の後は停止せらるゝをいふ、○中略此趣なる地頭の所得は、段別五升の兵粮米のみ充行はるゝ定めなるべし、（もしくは給田なとも賜はるならひか、體にはありがたし、）段別五升は、文治の度の制にて、上文○註略に見えたるが如し、此三やうを辨知せざれば、所得の差別も知り難きものぞ、

〔吾妻鏡　六〕文治二年九月五日戊申、諸國庄公地頭等、忽緒領家所務之由依有其聞、有限地頭地利之外不可相交、乃貢以下、不可存懈緩、於違越輩者、可有殊罪科之由被定云云、　十一月廿四日丁卯、去月八日宣旨、同九日院宣、去比到來、今日被奉書御請文、大夫屬入道、筑後權守等加所談云云、是平氏追捕跡地頭等、以非指謀反跡、充行課役煩公官等之間、國司領家所訴申也、現在謀叛人跡之外者、可令停止之由云云、

太政官符　　諸國

　早令停止國衙庄園地頭非法濫妨事

右内大臣宣、奉勅偁、依令追伐平氏、被補其跡之地頭、稱勳功之賞、非指謀叛跡之處、充行加徴課役、張行撿斷、妨總領之地本、責煩在廳官人郡司公文以下公官等之間、國司領家所訴申也、然者仰武家、現在謀反人跡之外者、可令停止地頭綺之狀如件、依宜行之、符到奉行、

　文治二年十月八日　　　　修理左宮城使從四位上左中辨兼中宮權大進藤原朝臣

　　　　　　　　　　　　正六位上行左少史大江朝臣

諸國庄公、被補平氏追伐跡之地頭等、稱勳功之賞、非指謀反跡之處、充行加徴課役、張行撿斷、妨總領之地本、責煩在廳官人郡司公文以下公官之間、依國司領家之訴訟、所成官符也、然者現在謀叛人之外者、早可被停止地頭等綺之由院宣候也、仍執啓如件、

文治二年十月九日　　左少辨定長

進上　源二位殿

御請文云

跪請　院宣事

右所被仰下、諸國庄公、被補平氏追伐跡之地頭等、稱勳功之賞、充行加徵課役、張行撿斷、妨總領地本之由事、官符宣、謹拜見仕候了、現在謀叛人跡之外者、可令停止地頭綺之旨、面々加下知候者也、早仰國司領可有御禁斷候歟、此上致張行之輩候者、注給交名可加炳誡候、以此旨可令言上給候、院宣所請如件、頼朝頓首恐惶謹言、

文治二年十一月廿四日　　源頼朝請文

〔吾妻鏡八〕文治四年三月十四日庚戌、前廷尉康頼入道捧款狀、是去年拜領阿波國麻殖保保司職、仍雖遣使者、地頭野三刑部丞成綱不能許容之間、乃貫空手之由載之、當保者、內藏寮濟物運上地也、成綱固抑留之間、度々被下院宣訖、然者除件所濟、而康頼可中分之旨被下御書云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年五月八日庚午、就國司等之訴、有被經沙汰之事、所謂山海狩漁、可從國衙所役事、鹽屋所當、以三分一爲地頭分、可止抑留之儀事、〇中略且隨國宜、且任先例、可致沙汰之旨被仰付地頭等、左衞門尉義村、左京進仲業爲奉行云云

〔吾妻鏡二十一〕建曆二年九月廿一日甲子、諸國津料河手等事、可被止由日來及御沙汰之處、其事爲得分、所々地頭依申子細、今日如元可致沙汰之由、面々被仰下云云、

〔新編追加雜務〕本新地頭條

一宣旨事

左辨官下　五畿內諸國七通

應令自今以後、庄公田畠地頭得分、拾町別給免田一町、幷一段別充加徵伍升事、

右頃年依勲功賞、居地頭職之輩、各超涯分、恣侵土宜、因玆云國衙、云庄園、寄事於彼濫妨、懈勤於其乃貢、是非相貿、眞僞互雜歟、然間無止之佛神事、空以凌替、有限之公私領、不辨地利、天下之衰弊、職而斯由、方今四海既定、萬方靡然、誰輕宗廟社稷之重事、誰掠五畿七道之濟物、然則一爲休庄公之愁訴、一爲優地頭之勲勞、旁從折中儀、須定向後法、文武之道、捨一不可之謂也、左大臣〈○家通〉宣、奉勅庄公田畠地頭得分、拾丁別賜免田一丁、一段別充徵五升、於自今以後者、嚴守制符、宜令遵行者、諸國宜承知依宣行之、

貞應二年六月十五日　　大史小槻宿禰

左中辨藤原朝臣

〔將軍執權次第〕貞應二年〈癸未〉

政子〈従二位〉　六月十五日、新補地頭、得分十一町別一町、段別加徵五升之由被下宣旨云々、

〔小早川家譜參考〕注進都宇竹原御庄地頭得分田畠色々物等目錄之事

合

一田畠加畝〈段別五升〉

一栗林地子〈段別二升〉　塩濱地子〈三分一〉　桑代絹〈三分一、但上勺分内〉

一雜物等　桑代麻木板〈三分一〉　度別厨乃米白米〈三分一〉　麥畠厨白米春麥荒麥〈三分一〉　秋上分米幷麥上分春麥等〈同可加徵〉　畠麻苧〈三分一〉　沙汰人等曳出物絹〈三分一〉　總追捕使沙汰〈地頭一向沙汰〉　給田五町内〈本庄三町新庄二町〉

右件色々物等、注進如件、

貞應二年六月　日　　預所右兵衛尉中原判

社家御使刑部丞平判
散位鴨判

〔新編追加雜務〕本新地頭條　去々年兵亂以後所被補諸國庄園鄕保地頭沙汰條々

一得分事

右如宣旨狀者、假令田畠各拾一町內、十町領家國司分、一町地頭分、不嫌廣博狹少、以此率法免給之上、加徵段別五升可被充行云々、尤以神妙、但此中、本自帶將軍家御下知、爲地頭輩之跡、爲沒收之職、於被改補之所々者、得分縱雖減少、今更非加增之限、是可依舊儀之故也、加之新補之中、本司之跡、至于得分尋常地者、又以不及成敗、只勘注無得分所々、守宣下之旨、可令計充也、仍各可賦給成敗之狀也、且是不帶此狀之輩、張行事出來者、可被注申交名、隨狀可被過斷也、

一山野河海事○中略

右領家國司之分、地頭分、以折中之法、各可致半分之沙汰、加之先例有限年貢物等、守本法不可違亂、○中略

以前五ヶ條、且守宣下之旨、且依時儀可令計下知也、凡不帶此狀之輩、若寄事於左右、猥張行事出來者、領家國司之訴訟不可斷絕、隨交名到來、可令過斷也、以此旨兼普可被披露也者、仰旨如此、仍執達如件、

貞應二年七月六日　　前陸奧守義時北條判

相摸守殿

〔新編追加雜務〕本新地頭條　諸國新補地頭得分條々

一本年貢外半分事

右於田畠者、十一町別給田畠各一町、加徵段別五升者、爲正稅官物內之條勿論也、至山野河海所出

者、除本年貢之例外、可致半分沙汰之由、御下知先畢、而今地頭者、以神社佛事之上分、本家領家之公物、爲本年貢之由申之、雜掌者、預所定使得分、皆以年貢內也、不可割分之由申之云々、以預所定使得分號年貢者、以何餘剩可致半分之沙汰乎、地頭所申非無其謂焉、

一本司跡名田事

右地頭者、以件名田內引募新給田、其殘者辨濟所當、不可勤公事之由申之、雜掌者、給田之外者、如百姓可辨勤所當公事之旨申之、雜公事不蒙領家預所之免許、任自由不及立用、雜掌所申有其謂歟、然者於給田餘剩者、可令辨勤所當公事矣、

一桑代事

右地頭分、可割分否之由雖載篇目、兩方申旨子細不詳、但隨其所皆有差別、於爲山所出者、除本年貢之外、可致半分之沙汰、至爲在家役者、可依在家率法焉、

一苧在家役麻樹木五節供以下事

右地頭者、每物可被分充之由申之、雜掌者、新補率法條々之外也、雖一塵不可交之由申之云々、今除本家領家年貢之外、可爲半分之沙汰也、然而於無領家定使得分之所々者、不可及地頭得分之沙汰、但至五節供者、一向可令停止地頭口入也、次白苧事、先々御成敗之所々者、非沙汰之限矣、

寛喜三年四月廿一日　武藏守〇北條泰時判

相模守〇北條時房判

駿河守殿〇北條重時

掃部助殿〇北條時盛

一新補地頭得分田畠加徵事

本年貢一斗已上事、先日被仰定下畢、於一斗之所者、可爲三分也、〇中略

寛喜三年五月十三日　武藏守　判

相摸守　判

駿河守殿

掃部助殿

一撿注雜事内地頭剩取事

右任先下知可令停止也

一五節供事

右可停止之由、先下知已畢、而今地頭面々所申、聊非無理歟、三月五月七月九月分者、一向不可爲地頭口入、至于歳末節料者、地頭可分取也、

一新補地頭注出新田一向可進止否事

右如本田

一山畑事

右領家地頭各可致半分之沙汰也、以前條々、守此旨可被成敗也、兼又若寄事於此下知奉〇奉字上下恐有誤殿於今違亂所々者、更不可承引之條、依鎌倉殿仰執達如件、

寛喜四年〇貞永元年卯月七日　武藏守　判

相摸守　判

駿河守殿

掃部助殿

〔新編追加雜事〕本新地頭條

一地頭所務内百姓犯科跡事

右日來者、號地頭一向進止、令押領歟、今訴訟出來之時、所詮可致半分沙汰之旨、被下關東御下知候之間、雜掌者、先々地頭押領分、毎年半分充可領知、不然者、成百姓名、兩方可召仕之由申之、地頭者、於前々領地分者、一向可領知也、自今以後、可致半分沙汰之旨申之、何樣可候哉、尤可被仰下候歟、

押紙云、可為半分之由被定畢、不可論御下知之前後、可致半分沙汰也、○中略

一丹後國新補地頭所務事條々

一次國保司跡事

右於野畠者、任國例、可為地頭分也、但有本年貢者、守先例無僻怠、可致沙汰也、

如本司之時、可為地頭收納也、至京保司跡者、地頭不可管領之、可為下收納使沙汰也、

一諸國新補地頭得分田畠加徵事

右不論多少、可取段別五升之由、新補地頭等雖申、假令本所當一斗已上之所者、尤可為五升、一斗以下之所者、以三分之一可為地頭分也、

一白苧幷桑代事

右國司領家、自元於不召之所々者、新補地頭始不可取之、

文暦二年七月廿三日　武藏守　判

相模守　判

駿河守殿

掃部助殿

〔島津家本吾妻鏡〕延應二年○仁治元年六月十一日甲辰、於前武州○北條泰時御亭、有臨時評議、定三ヶ條事、

一新補地頭得分田畠加徵物事　於本年貢一斗所者、可為參分一者、

〔新編追加雜務〕國司領家條

一領家地頭中分事

於新補地頭者、被折中之處、限于本補、不許容之條、先沙汰不可然、向後者、隨事體可被中分歟、

〔新編追加 侍所〕惡口狠藉條

一依狠藉科被召所領事○中略

傍例

一紀伊七郎左衛門尉重經所領、丹後國之地頭得分物、以同所領夫令運上鎌倉之處、件夫丸下着鎌倉、於米町之邊見付彼侍逃夫丸、擬召捕之處、夫丸逃走之間、重經下人追懸之剋、入將軍御所御臺所、重經下人、猶以追懸之間、壹番以下人々群集、云重經下人、云夫丸、召取之、申事由之間、御尋之處、子細無相違、但主人重經雖不知此子細、追入御所之條、粹已爲勝事之間、主人猶難遁其科之由有御沙汰、即被召重經丹後所領畢、

此事寬元年中之比、武藏前司殿御時事歟、云所領主名字、云年月、委可尋記也、

〔吾妻鏡 三十七〕寬元四年十二月廿八日癸丑、今追入之者、逃參幕府臺所、敵人追付之內參入、于時松田彌三郎常基、壹番祗候之間、兩方共搦取之、仍上下騷動、自相州○北條重時被差進平衛門尉、諏方兵衛入道、各尋問事之由、是紀伊七郎左衛門尉重經所從等也、重經丹後國所領德分物運送疋夫、去比負荷負財產逐電訖、相尋諸方之處、只今於米町邊適雖見逢、追奔之處失度、推參之由申之、即被經御沙汰、雖非主人所爲、彼郎從已請命之後狠藉也、粹及勝事之上者、可召放件丹州所領之旨被定之云云、

〔小早川家譜參考〕沼田御庄本庄方作田御正撿目錄

沼田御庄　本庄方

注進　建長四年作田御正撿注目錄事

見作田貳佰伍拾町貳段三百貳拾步

人給　地頭給十二町

地頭得分二百三石四升九合

右見作田御正撿注目錄、注進如件、

建長四年十一月　日　　公文恒宗判

總地頭沙彌平美作守判

正撿使前若狹守橘朝臣判

〔古簡雜纂九〕宗像大宮司氏盛申、肥前國晴氣保內安光名地頭得分、米參拾六石伍斗六升九合、錢三陸佰九拾貳文事、

右如訴狀者、名主久布志良左衞門太郎後家尼法意、正應四年以後、不從地頭所務、抑留得分云々、爲糺明、度々雖尋下法意、無音之間、以多久太郎宗經、小城彌五郎入道妙喜、重加催促之處、如宗經等執達、去年三月十八日、法意請文者、早速以代官可明申之由、雖載之、于今不參之間、難遁違背之咎歟、然則於地頭所務者、守先例致沙汰、至得分物者、任員數可令究濟也者、依仰下知如件、

延慶三年十二月六日　前上總介平朝臣花押

〔薩藩舊記前集十二山田氏文書〕薩摩國、谷山郡內山田、上別府、西村總地頭所務事、式部孫五郎入道道慶〇山田宗久可破正中二年和與狀之由、掠給鎭西下知狀之間、件裁許爲非據之條、去年於決斷所御沙汰訖、而於和與契約得分物者、任先例、於郡司所倉可勸渡之由、載和與狀之處、以前五ヶ年分內半分、於京都可沙汰之由、被仰出間、在京計略依爲難治、彼兩村總地頭所務、如元可返付道慶之由、去年十二月十七日捧請文之處、今月十三日、於決斷所、如被仰出者、於總地頭所務者、可返付道慶云々、以前五ヶ年總地頭得分物米、九月中可勸渡于道慶之由、被仰下候之條、爲代官身難治之由、雖相存候、應上裁捧請文候、所詮遂結解、地頭得分之內、於用途者、可致九月中沙汰候、至米分者、九月中難治之間、十一月

中可勸渡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武元年六月十七日　沙彌覺信代敎信請文（裏判）

合奉行人賴連（花押○飯尾）　合奉行人章有（花押○正親町）　奉行人明成（花押○姉小路）

〔薩藩舊記前集十二山田氏文書〕島津式部孫五郎入道道慶（○山田宗久）子息藤原忠能重言上

薩摩國谷山郡司五郎入道覺信他界間、其子細守護所注進上者、對于彼跡、子息平五郎左衞門入道隆信、相傳當知行上者、重欲給御牒、當郡（○谷山郡）內山田、上別府兩村、抑留年々地頭得分物等事、

副進　一通　覺信代敎信請文　一通　御牒

右兩村地頭職者、親父道慶重代相傳之地也、而爲全得分物、令契約覺信之處、背契狀之間、武家沙汰之時就訴申、道慶預度々下知畢、天下一統之後、捧彼狀及上訴、爲俊春（○高橋）御奉行、忝賜決斷所御牒之處、於地頭所務者、雖去渡之、至得分物等者、背覺信請文、猶以不叙用之間、被仰下國司守護所之剋、覺信去年十二月令他界畢、爲亡者之上者、對于彼跡相傳隆信、被下御牒、爲糺賜以前抑留得分物等、恐々言上如件、

建武二年三月　日

〔伊佐早文書〕越後國奥山莊內黑河條地頭職者、圓心かくべち相傳の所領也、しかるを實子なき上、女房平氏のおいたるによて、南保三郎右衞門尉重貞を養子として、未來所讓與也、但圓心ならびに女房一ごの程は、此ところの得分半分、毎年ニ無未進沙汰しのぼせて給候へ、殘半分をばともかくも進退たるべく候、此所は嘉曆三年八月所勞の時、女房ニてうどの證文を相副て、一圓にゆづりわたし候あいだ、すでに外題安堵を申給候によて、此狀ニ女房判ぎやうをくわへて、一期のうちは、一圓ニ彼證文をあひそへ候て、知行さをいあるまじく候、このほかいかなる人出來、子細を申候とも、此狀ニ女房證判をのせ候上は、自餘ハ其をりニ申おこなせ（○なせ間恐脫ニは字）給候へ、仍爲後

證自筆之讓狀如件、

建武二年卯月廿七日

沙彌圓心（花押）〇齋藤實利

平　　氏（花押）

〔宗像文書三〕雜訴決斷所牒　肥前國守護所

宗像六郎三郎氏勝申、當國晴氣保〇小城郡內友永乙久安光武）六郎丸得武友光市武小武久名等、名

主後藤四郎入道蓮佛已下輩打止檢注、抑留年々地頭得分物等由事、

副下解狀具書七通

牒、所訴申無相違者、遂結解致辨償、若有子細者、來十一月十日以前、企參洛可明申之由相觸交名輩、

宜注進散狀者、仍牒送如件、以牒、

建武二年十月十七日

大藏少丞兼左少史左京權少進高橋朝臣（花押）〇俊春

中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣（花押）〇九條公明　　前筑後守藤原朝臣（花押）〇小田貞知

修理大夫藤原朝臣〇四條隆資　　明法博士兼左衞門權少尉左京大進中原朝臣（花押）〇近衞職政

右少辨藤原朝臣〇岡崎範國

右中辨藤原朝臣

〔壬生家文書一〕〇端缺

一可令地頭得分內募半分立用關東夫馬功米事

右如地頭陳狀者、自補任之初、十餘箇年令勤仕也云々者、右以六石之見米、勤一人之夫役、至于十餘箇年、無優免之條、已爲地頭之苛法、云夫云馬、件功米、自今以後、以地頭得分內、可致半分之立用也、〇中略

以前條々、大略如此、抑件庄爲備進公家嚴重用途之地、於事無煩可令土民安堵也、凡地頭庄務間事、

所詮任前地頭時貞法師之例、可致沙汰之狀、依鎌倉殿仰下知如件、故下、

承元元年十二月　日　惟宗花押　前圖書允淸原花押　散位中原朝臣花押　散位藤原

朝臣　書博士中原朝臣花押

〔山城名勝志五洛陽〕洛中守護篝屋

古文書云、爲京中守護可被懸篝於辻々料松事、以美濃國日野村、伊豫國周敷北條地頭得分內、辻一所松用途錢拾貫文、寄合多賀江兵衛尉、隨分限每年可致沙汰也、不可煩百姓也、且關東御公事幷守護人使入部者一向可被止之狀、依仰執達如件、

嘉禎四年〇曆仁元年六月廿日　左京權大夫〇北條泰時判

修理權大夫〇北條時房判

たかへの二郎入道殿

〔新編追加雜務〕本新地頭條

一本司新補兩樣混領事仁治元十一廿三評

右被召所領者、就之所々訴訟無盡期歟、仍可被召篝屋用途也、但隨其所之多少可被召之、假令五十町所者、可被召錢五十貫文也、但地頭得分也、寄事於左右、不可成土民之煩、

〔吾妻鏡五十一〕文應二年〇弘長元年二月廿日壬子、修理替物用途、幷垸飯役事、充課百姓事、永停止之、以地頭得分可致沙汰之由被定之、

〔新編追加雜務〕本新地頭條

條々

一百姓臨時役事　一修理替物事　一垸飯役事

不可充課百姓、以地頭得分可致沙汰之由、可被下知在京人幷西國守護人地頭等、有違犯輩者可被

地頭給

注申之狀、依仰執達如件、

弘安元年二月卅日

武藏守〇北條義政判
相模守〇北條時宗判

〔鹿島長暦後醍醐〕元亨三年八月晦日、自是先從鎌倉、山川判官入道、小田常陸太郎左衛門尉貞宗等を鹿嶋社の造營奉行として營作を致さしむ、今年造營の年期たる故也、然に造營の事に就て、南郡大枝郷地頭野本四郎左衛門尉貞光、幷下河邊和泉二郎左衛門尉顯助等、同郷の給主大禰宜中臣能親と相論の事あり、件の大枝郷は、元より不開殿仁慈門造營の所役たり、さて地頭等は、丹塗格子の外は地頭の預る所にあらず、給主の所役なりと云、能親は、給主地頭折中の地にして、兩方平均に勤仕すべきの先例の由を述ぶ、造營奉行等、地頭の云所を是とし、其旨を鎌倉に注進す、於鎌倉にて爭論の沙汰決らるゝ處に、子細いまだ詳ならず、但造營は當時の急務たるに依て、先各其爭論を閣き、奉行人等催促を加へ、成功を速にすべき旨、是非に於ては追々沙汰あるべき旨、奉行人等に下知せらる、奉行等、其旨を以て沙汰しけれども、兩方相爭ひ造營遲引せり、

〔太平記十二〕大内裏造營事附聖廟御事

翌年〇建武元年正月十二日諸卿議奏シテ曰、〇中略大内裏可被造トテ、安藝周防ヲ料國ニ被寄、日本國ノ地頭御家人ノ所領ノ得分二十分一ヲ被懸召、〇中略今兵革ノ後、世未安、國費ヘ民苦テ、不歸馬于花山陽、不放牛于桃林野、大内裏可被作トテ、自昔至今、我朝ニハ未用作紙錢、諸國ノ地頭御家人ノ所領ニ、被懸課役條、神慮ニモ違ヒ、驕誇ノ端トモ成ヌト、顰眉智臣モ多カリケリ、

〔忽那文書乾〕伊豫國忽那島地頭名幷給田畠事、以申狀被言上之處、不可有新儀、可依先例之由、鎌倉殿仰候也、仍執達如件、

建永二年〇承元元年五月六日　散位花押

〔若狹國大田文〕若狹國　注進　文永二年實撿大田文内事

合

東鄕八十七町五反二百八十步　除　七十八町六十步〇中略

鄕田九町五反二百廿步〇中略　地頭給一丁七反百四十步〇中略

右注進如レ件

文永五年七月　本注所判形無レ之

〔備中國新見庄作田目錄〕備中國新見御庄　文永八年辛未御總撿作田目錄事

合作田玖拾捌町玖口三十五代十八步〇中略

一出田分

合參拾三丁二段廿代十八步〇中略

六丁三段十五代新田　地頭給　一丁二段　船人給〇中略

人給七丁五段十五代

右御總撿作田目錄、注進如レ件、

文永八年七月日　公文大中臣重高花押　以下人名〇略

〔但馬國大田文〕太田太郞左衞門尉政頼弘安八年之注進

朝來郡

押反社領家淨土寺大政法印　八十一反　地頭小比良大夫局〇中略　地頭給　五反　定田　三丁六反　私田段別五

升、并地頭給之町步也、〇中略

已上神社領〇中略

西明寺　八丁五反〇中略　地頭給　一丁〇中略

已上佛寺領○中略

衣摺社　十丁五反二十分　地頭小比郞大夫局○中略　地頭給　一丁○中略

已上國衙分

莊園領

田道莊畠本家一條殿　領家民部大夫　十五丁地頭仇賞三郎太郎御家人　公文八代孫五郎入道道佛○中略　地頭給　二丁五反○中略

物部上莊　十六丁五反六十歩　地頭左近藏人云也○中略　地頭給　六反○中略

朝來莊　六十四丁五反地頭安板薩摩八郎左衛門尉公文勢至丸御家人○中略　地頭給　五丁一反廿五歩○中略

牧田位田二條院御領　廿丁　地頭東阿藤四郎長茂御家人○中略　地頭給　一丁五反内讃岐房善同分、二反長齋舍弟、

地頭維免　二丁一反小内藤九郎有茂分五反長茂ナリ○中略

廣谷莊　七十丁二反領家地頭關東御領給主伊賀入道女子跡○中略　地頭給　四反小內　女子分一反大

養父郡

輕部莊悲田院領　領家方丈沙汰　五十六丁九反百七十分　地頭石岡兵衛治入道○中略　地頭給　五十一丁大三十六歩

○中略

建屋新莊尊勝寺領　領家備中法眼後映女子君　七丁一反三百十分地頭石和田又太郎光時御家人○中略　地頭給　屋敷九反

氣多郡

日置鄕　百四十六丁七反百九十四分地頭越生兵衛太郎長經、八幡宮神人免廿一丁九反百七十分、○中略　地頭新給田　四丁

六反百六十四分

美含郡

佐須莊內長井村　十六丁一反六十歩　地頭久下孫二郎左衛門尉春光○中略　地頭正作　二丁

○中略

同莊内丹生邑　六十一反八十四步　地頭久下左衛門九郎〇中略　地頭正作　三丁三反二百七十分

二方郡

温泉莊蓮花王領領家民部少輔入道　七十四丁六反半五分　地頭宗眞九郎宗光、同舍弟二郎左衛門尉正員、〇中略　下司幷總追捕使給下司給四丁、總追捕使給五丁、内□□浮免地頭得之云々

〔陸奧國好島浦島檢注目錄〕注進浦田正和三年甲寅檢注目錄事

合

田數貳拾町捌段三合内〇中略

人給田　地頭給肆町貳段　名主壹町　垸飯田六段六合六步

以上伍町八段六合六步〇中略

右目錄之狀如件

正和四年二月十五日　預所代沙彌覺乘

注進好島田正和三年甲寅檢注目錄事

合

田數貳拾町玖段三合内〇中略

人給田　地頭給肆町八段　名主壹町　郡司給壹町三段　公文給田伍段　定使給四段　垸飯田六段六合六步〇中略

右目錄之狀如件

正和四年二月十五日　預所代沙彌覺乘

古事類苑

官位部四十二

鎌倉職員七

地頭下

〔沙汰未練書〕一新補地頭トハ　承久兵亂之時、以沒收之地充給所領等事也、地頭得分率法御事書在之

一本新兩樣所務事　兩樣兼帶所務トハ、本補地頭トシテ下地一圓管領之上、又新補率法之得分取之、兩樣兼帶ト云也、地頭有其咎、

〔尺素往來〕新補地頭、可守率法之段、承久以來所被定置也、國衙所務者、任先規不可相綺、但地下侮微弱不叙用者、守護地頭、同莅被所可被沙汰居雜掌於庄家者也、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國注進國中總圖田帳

　合肆仟拾町漆段內〇中略

入來院九十二町二段內　　沒官御領地頭千葉介〇中略

公領七十五町內島津御庄寄郡

　辨濟使分五十五町　本地頭在廳種明　郡名分二十町　本郡司在廳道友〇中略

飯島四十町內島津御庄寄郡　　沒官御領千葉介

　上村二十町　本地頭在廳道友　下村二十町　本地頭藥師丸〇中略

右件圖田注文、去文治年中之頃、依豐後冠者謀叛、被亂逆之間、被引失畢、仍大略注進如件、

　建久八年六月日　　權掾藤原朝臣在判〇以下人名略

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年十一月四日壬戌、伊勢國三日平氏跡、新補地頭等、募武威停止大神宮御上分米之由、本宮訴申之、二年十二月十日壬戌、伊勢平氏跡、新補地頭事、今日被定率法、悉被施行之、清定爲奉行云云、

〔吾妻鏡十九〕承元四年九月十一日丙申、故足利又太郎忠綱遺領、上野國散在名田等、此間稱尋出之、安達九郎右衞門尉景盛令注進、仍被補新地頭、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年二月廿四日丙寅、新補地頭八人進發、伊豫國毎郡被補之云云、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年四月廿一日、承久兵亂之後、諸國郡鄕庄保、新補地頭所務事、被定五ヶ條率法、四年〇貞永元年四月七日、新補地頭所務間事、七箇條被定其法云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年九月九日辛巳、今日爲齋藤兵衞入道淨圓奉行、地頭間事、有被經沙汰之條々、所謂云本司跡云新補、率法不可混亂兩樣之由下知之處、不叙用於違犯者改易其所、可被充行勳功未給之輩、次令補地頭之輩、或背先例、或違父祖例之由訴訟之時、不從御下知者召其所、可充行宮仕忠勞之輩幷所知替、

〔新編追加建曆〕本新地頭條

一諸國地頭所務事

承久兵亂以前之本地頭者、有所務之先例、更不可有新儀、同兵亂以後之新地頭者、被定置率法畢、何背彼狀哉、然則於自今以後者、縱押領之後、雖過二十箇年、不可依年紀、本地頭者任先例、新地頭者守率法、可致沙汰之由可被裁許也、可被存此趣之狀如件、

寶治元年十二月十三日　　左近將監〇北條時賴

相模左近大夫將監殿〇北條長村　　相模守〇北條重時

總領地頭

〔吾妻鏡四十〕建長二年五月廿八日癸巳、讃岐國法勲寺地頭職壹岐七郞左衞門尉時重、令兼帶本補新補兩樣之由、雜掌就訴申之、有評定、經年序之由地頭雖申之、無其理之間、於一方者可被停止、然者可爲本司跡歟、將又可爲新補歟、隨望申可被仰下、可注申一方之旨、今日被仰下云云、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年四月廿九日壬申、評定、西國庄公地頭等所務事、有其沙汰、是本地頭所務者、可依往昔之由緒、故追先規之例、可令止新儀非法也、新地頭者、被定率法之上者、其外全可停止濫吹也者、存此趣可加下知之由、卽被相觸五方引付云云、

〔東寺百合古文書四十九〕（太良庄雜掌條々申狀案）東寺御領若狹國太良庄雜掌謹言上

欲早蒙御成敗地頭若狹四郞入道定蓮條々非法無謂子細事〇中略

關東御成敗云、諸國地頭所務事、承久兵亂以前、本地頭者、有所務之先例、更不可有新儀、同兵亂以後、新地頭者、被定置率法畢、何背彼狀哉、然則於自今以後者、縱押領之後、雖過廿ケ年、不可依年紀、本地頭者任先例、新地頭者守率法、可致沙汰云々、而當庄地頭若狹四郞忠淸之親父、次郞兵衞尉忠季者、自正治二年被補置、往古之本地頭也、相繼跡忠淸者任雅意、承久兵亂之折節、或押領公田所當、或領知領家進上之公文職、〇中略早任寬治元年御式條、爲蒙御成敗、勲仕狀言上如件、

建治三年十二月日

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年閏二月七日癸丑、武衞〇源賴朝御誕生之初、被召于御乳付之靑女、今日者尼、號摩摩局、住國相摸早河庄、依召干御憐愍故、彼屋敷田畠、不可有相違之由、被仰含總領地頭云云、

〔吾妻鏡五〕文治元年十月十一日庚申、今日佐々木三郞盛綱號本佐々木、知行田地、如元可領掌之旨、被書下之、但可從佐々木太郞左衞門尉定綱所勘云云、是雖非一族、佐々木庄總管領者定綱也、盛綱分在其內之故歟、

〔御成敗式目諺解五〕總地頭トハ、總鄕庄ヲモツ地頭也、

〔武家名目抄職名三十〕按、總領の稱は古へよりみゆ、いはゆる筑紫總領、坂東總領、又は周防總領、吉備總領などのたぐひなり、この中に筑紫坂東は邊陲の地なれば、異域の警備、其外數ヶ國の政務をもふさねて、國郡の有司等を管領せしめんと成べし、周防は、殊方の船舶往來の要津なれば、これを置れしならん、吉備も周防もならびて南海にそひたる所なれば、こゝにも總領をば置れしとみゆ、其後筑紫總領は大宰帥に改められ、其外の總領も廢せられて、國司各其國の庶務を攝すること、なりぬ、爰に於て總領の司は絕しかども、其稱呼は猶世に殘りしとみゆ、さて所々の庄園の領主たる者、私に地頭を置に及びて、それを統領する者をば總領地頭とよび、或は總地頭ともいへり、今の大庄屋などいふもののたぐひなり鎌倉殿諸國一國に地頭を置れし時も、もとのまゝに總領地頭をも置れしなり、初めは同姓ならぬ人も總領に補せられしが、中頃よりは大かた一家の嫡流たる者、支流たる輩の領知を統領して、總領地頭になる事となれり、これは先祖より傳補せる郡鄕庄保の地頭職を、家族の繁茂するまゝに、各一鄕一所を分ち與へて、其所所の地頭たらしむる故に、其嫡子の流たる者を總領と定め、軍役及其他番役以下の公事諸役等をも、それが指揮に從ひて勤仕する事なり、

〔吾妻鏡十六〕正治二年五月廿八日壬午、陸奥國葛田郡新熊野社僧、論坊領境、兩方帶文書、望總地頭畠山次郎重忠成敗、

〔諸家文書纂五薩摩〕島津庄庄官等、不隨總地頭忠久下知之條、庄官等之企、尤以奇恠、有對捍之輩者、可令注申給者、前右大將殿頼朝仰如此、仍執達如件、

七月十日　平在判

宗兵衛尉殿

〔小早川家譜參考〕沼田御庄本庄方作田御正檢目錄中略

右見作田御正檢注目錄、注進如件、

建長四年十一月　日

公　文　恒　宗　判
總地頭沙彌平美作守判
正檢使前若狹守橘朝臣判

〔東寺百合古文書 六十七〕東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上

地頭若狹四郎入道號大番役用途、切充段別錢二百五十文、致苛法責間、先例不勤仕由令訴申處、彼代官忠賴構百曲陳狀、無謂子細事、○中略

彼代官忠賴狀云、當雖不勤先例、始自關東六波羅可令勤仕彼役之由、於被仰下者、云雜掌云地頭、何可令違背哉云々、此條先例不勤仕大番役之條、已以炳焉也、其上以新儀張行之條、太無道也、彼役不勤仕之例、委可申之、當地頭親父若狹次郎兵衛尉忠季、建久六年補任當國守護、正治二年遠敷郡三方郡被補二郡總地頭、其時大番勤仕之、雖然人夫召仕之外無別煩、建仁三年出羽前司家長、遠敷郡內給九箇所地頭、太良庄此內也、十七箇年雖令知行、無其煩、承久二年、次郎兵衛入道忠季時、守護地頭共以返給之、其時當地頭舍兄兵衛尉忠時、大番勤仕之、是又人夫召仕之外無煩、三代之例如此、○中略

文永六年八月二日

〔御成敗式目〕一總地頭押妨所領內名主職事

右給總領之人、稱所領內、掠領各別村事、所行之企、難遁罪科、爰給別御下文、雖爲名主職、總地頭若伺尪弱之隙、有限沙汰之外、巧非法致濫妨者、可給別納御下文於名主也、名主又寄事於左右、不顧先例、重違背地頭者、可被改名主職也、

〔太平記 三十五〕北野通夜物語事附靑砥左衛門事

西明寺ノ時賴禪門、密ニ貌ヲ窶シテ六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到又、○中略

既ニ日昏ケレバ、荒レタル家ノ垣間マバラニ軒傾テ、時雨モ月モサコソ漏ラメト見ヘタルニ立寄テ宿ヲ借給ケルニ、〇中略主ノ尼公、手ヅカラ飯匙取音シテ、椎ノ葉折敷タル上ニ餉盛テ持出來タリ、甲斐々々シクハ見ヘナガラ、懸ル態ナンドニ馴タル人共見ヘネバ、不審ク覺テ、ナドヤ御內ニ被召仕人ハ候ハヌヤラント問給ヘバ、尼公泣々、サ候ヘバコソ、我ハ親ノ讓ヲ得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シカ、夫ニモ後レ、子ニモ別テ、便ナキ身ト成ハテ候シ後、總領某ト申者、關東奉公ノ權威ヲ以テ、重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ可訴訟申代官モ候ハネバ、此二十餘年、貧窮孤獨ノ身ト成テ、麻ノ衣ノ淺猿ク、垣面ノ柴ノシバ〱モナガラウベキ心地侍ラネバ、袖ノミ濡ル露ノ身ノ、消ヌ程トテ世ヲ渡ル、朝食ノ烟ノ心細サ、只推量リ給ヘト、委ク是ヲ語テ涙ニノミゾ咽ビケル、斗藪ノ聖、熟々ト是ヲ聞テ、餘ニ哀ニ覺テ、笈ノ中ヨリ小硯取出シ、卓ノ上ニ立タリケル位牌ノ裏ニ、一首ノ歌ヲゾ被書ケル、

難波潟鹽干ニ遠キ月影ノ又元ノ江ニスマザラメヤハ

禪門諸國斗藪畢テ、鎌倉ニ歸給フト均ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔集古文書五十讓狀〕風早禪尼深妙讓狀大友能直室　肥後家臣志賀太郎藏

讓與　所領事

在豐後國大野庄內志賀村半分地頭職

右當庄者、得亡夫豐前前司能直之讓、任彼狀賜將軍家御下文、尼深妙無相違所令領掌也、而分讓當庄於男女子息孫子等之內、於志賀村半分者、所讓與孫子太郎泰朝也、更不可有向後之妨、但此內名田壹所者、所思充同孫子輔房禪季泰朝舍弟也、彼狀在別紙、雖然於總領者、可爲泰朝之沙汰、仍爲後日證文讓狀如件、

弘長貳年八月六日　　　　尼深妙花押

〔武家名目抄職名三十一〕正和元年七月六日六波羅下知狀云、出雲國從本庄〔○牛尾庄〕雜掌經範與中澤式部房圓性幷眞繼眞景昌直覺實相論、當庄地頭職有無事、〈○中略〉伊勢大神宮神寶御訪幷丈六堂造營用途等事、就同所領可致沙汰之由被仰下之上、圓性相傳牛尾庄總領職否尋問庶子等可注申旨、付守護人被下關東御敎書畢、

〔古文書類纂上和與認可狀〕後醍醐天皇元亨三年和與認可狀〈大和國平群郡額田部村額安寺所藏〉

和與　額安寺領備前國金岡東庄內地頭庶子道性分領事

右、惣總領地頭藤肥前左衛門入道覺知和與之旨、五分貳參分、分別下地、以貳分爲領家方、一圓可令進止之、以參分爲地頭方、一圓可令進止之、將又於道性分領有分漏之地者、爲領家分可令掌領之也、且守此狀之趣、且任分文之旨、兩方申賜御下知、互以不可異儀、若有令違約事者、可申行罪科、仍和與之狀如件、

元亨三年二月五日　　地頭代紀政綱花押

預所藤原義幸花押

裏書
爲後證奉行人所封裏候也

元亨四年〈○嘉暦元年〉八月七日　　左衛門尉利行花押

左兵衛尉貞雄花押

〔東寺百合古文書三〕和與

東寺勸學會料所安藝國三田鄕雜掌行胤、與同鄕總領地頭市河又五郎入道行心代孫子賴行相論、年貢所務檢注以下事、〈○中略〉

嘉暦貳年八月廿七日　　地頭代藤原賴行花押

〔萩藩閥閲錄 百二十一ノ二〕石見國周布郷〇那賀郡總領地頭御神本彦次郎藤原兼宗謹申、去六月二十九日馳參京都候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月二日　藤原兼宗 在判、上裏

進上　御奉行所　雜掌僧行胤 花押

承了 花押〇尊氏

一國地頭

〔吾妻鏡 十三〕建久四年十二月廿日癸丑、佐々木左衞門尉定綱本知行之地悉返給、其上七箇國內、各被加一所、於隱岐國者、不交他人之沙汰、一圓拜領地頭職、〇下略

二郡地頭

〔東寺百合古文書 六十七〕東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上〇中略 無謂子細事

當地頭親父若狹次郎兵衞尉忠季、建久六年補任當國守護、正治二年遠敷郡三方郡被補二郡總地頭、

一村地頭

〔吾妻鏡 二十〕建曆二年三月廿日丁卯、惟義親時廣綱等依在京奉公之勞、各拜領一村地頭職云云、廣元朝臣爲奉行云云、

半分地頭

〔集古文書 五十 讓狀〕鳳早禪尼深妙讓狀 大友能直室　尼 能直室 志賀太郞籟助

讓與　相傳所領田畠山野等事

在豐後國大野庄內志賀村半分地頭職〇中略

右當庄者、尼深妙得亡夫故豐前前司能直朝臣之讓、任彼狀賜將軍家御下文、無相違所令領掌也、而分讓當庄於男女子息等之內、於志賀村半分地頭職者、所讓與八男僧寂也、任注文之旨、更無後代之妨、可令領知、但於關東御公事者、隨所領田數、守嫡子大炊助入道之支配、可致沙汰也、仍爲後日證文讓狀如件、

三分二地頭

延應貳年四月六日　　尼深妙〈花押〉

〔集古文書下文十三〕將軍宗尊親王下文　〈尼後家臣志賀太郎助藏〉

將軍家政所下　　藤原泰朝

可㆑令㆘早領㆓知豐後國大野庄內志賀村半分地頭職㆒〈除㆓舍弟分㆒〉事

右任㆓祖母尼深妙〈前豐前守能直後家〉弘長二年八月六日讓狀㆒、可㆑令㆓領掌㆒之狀、所㆑仰如㆑件、以下、

文永元年三月廿二日　　案主菅野

令左衞門少尉藤原　　知家事淸原

別當相摸守平朝臣〈花押○北條政村〉

武藏守平朝臣〈花押○北條長時〉

〔集古文書寄附狀四十二〕將軍久明親王寄進狀　〈相摸國鎌倉鶴岡八幡宮藏〉

奉㆑寄　鶴岡八幡宮寺

近江國報恩寺半分地頭職、幷周防國小鯖庄半分預所職、伊豫國齋院勅旨田事、

右爲㆓長日不斷本地供料所、武藏國鹿嶋田鄕替所㆒、被㆓寄進㆒也者、依㆓將軍家仰㆒、奉㆑寄如㆑件、

正應元年十一月廿一日　　前武藏守平朝臣〈花押○北條宣時〉

相摸守平朝臣〈花押○北條貞時〉

〔東寺百合古文書百八十一〕東寺領伊豫國弓削嶋雜掌敎念、與當嶋三分二地頭小宮兵衞次郞入道西緣〈今者死去〉子息又三郞賴行代廣行相論所務條々、〈○中略〉

永仁四年五月十八日　　陸奧守平朝臣〈花押○北條宣時〉

相摸守平朝臣〈花押○北條貞時〉

○按ズルニ、三分一地頭條ニ小宮三郞次郞茂廣アリ、卽チ三分二地頭小宮又三郞賴行ト共ニ

三分一地頭

二人ニテ弓削島ヲ支配セルナルベシ、

〔豐後古文章（碩田叢史所收）〕豐前六郎貞廣申、勳功地豐後國香賀地莊地頭職參分貳（河越安藝入道之跡）事、任今月廿五日綸旨、都甲彌次郎入道相共可被沙汰付候、仍執達如件、

建武元年十一月廿八日　　左近將監（友貞〇大蔵）

竹田津諸次郎入道殿（〇道獣）

〔竹田津文書〕當國香賀地莊地頭職三分貳（河越安藝入道跡）同三分壹（同跡）豐前六郎貞廣、幷七郎貞擧等爲勳功賞拜領、任綸旨之趣、早莅彼所、可令沙汰居貞廣貞擧等於莊家給之由國宜所候也、仍執達如件、

建武元年十一月卅日　　散位長兼（奉、花押、）

竹田津諸次郎入道殿

〔竹田津文書〕竹田津諸次郎入道請文

豐後國香地莊地頭職參分貳（河越安藝入道跡）豐前六郎貞廣勳功事、去年十一月廿五日綸旨、同月廿八日任御施行之旨、一方御使相共都甲彌次郎入道、去年正月十六日、莅彼所、貞廣沙汰付候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武貳年三月廿六日　　沙彌道景（裏判、請文、）

〔東寺百合古文書（六十三）〕東寺領伊豫國弓削嶋雜掌敎念與三分一地頭小宮三郎次郎茂廣代廣行相論條々

一未久名事

右如六波羅執進所陳狀者、子細雖多、所詮當名者、田壹町壹段八十步、畠拾參町四段也、爲新補地頭之間、給田畠之外者、可濟年貢之處、茂廣一向引募之條、無謂之由敎念雖申之、如正嘉和與狀者、以未久名、任久行法師之例、一向可引募給加徵之代之、如正元下知狀者、任和與狀可致沙汰之者、此上令

更不能勘落之間、雜掌訴訟不及沙汰焉、〇中略

永仁四年十二月廿日

陸奥守平朝臣判〇北條宣時

相模守平朝臣判〇北條貞時

〔集古文書二十七下知狀〕嘉元四年下知狀所藏不詳

可令早神眞光爲信濃國伊那郡中澤鄕內中曾倉村參分壹地頭職事

右對決之處、如眞直眞光等申者、爲眞不儲男子者、於爲眞跡者、可讓舍弟等之由、見于眞—氏字有憚讓狀、而爲眞與後家女子之條、無其謂、可分給也云々、如後家代信友申者、爲眞領者、中澤內八箇村、出雲國牛尾庄也、而於牛尾庄者讓眞直、中澤內四箇村者讓于眞光、所殘四箇村所讓後家女子也、爰眞直等、幷可領知之由令申之條、存外事也、眞直等妨後家女子者、可悔返牛尾幷四箇村之由、載爲眞之讓狀、欲蒙御下知云々者、如後家所進眞—氏字有憚讓男爲眞嘉祿三年五月狀者、如此雖處分、不儲男子者可讓舍弟等也、女子者不可過在家壹宇云々、而爲眞以四箇村讓與後家女子之條、雖似背亡父之命、眞直等、本自得父讓之上、爲眞以牛尾庄讓與眞直、以四箇村讓眞光之條、非無思慮、仍可謂相傳歟、此上眞直等、不及鬱訴歟、但爲眞以中曾倉村讓與家子小次郎云々、其理不可然歟、仍以彼村參分貳者、可爲眞直分、以參分一者、可令眞光爲地頭職之狀、依鎌倉殿仰下知如件、嘉禎三年四月十一日云々者、件御下知狀者、中澤太郎爲眞後家女子、次郎眞直、圓性父四郎眞光拜領之處、眞直所給分御下知狀、去永仁二年二月十一日、私宅炎上之時燒失畢、被召出眞光所帶御下知狀、爲後證可預下知之由、圓性依申之、仰眞光子息四郎太郎法師法名眞佛所被召出也、任圓性所進案文、可預御下知之由雖申之、無校正符案之間、不能比校、仍任眞光所進御下知文所被寫下也者、依鎌倉殿仰下知如件、

嘉元四年〇德治元年九月七日

陸奥守平朝臣判〇北條宗宣

相模守平朝臣判〇北條師時

一分地頭

〔草野文書〕豐前七郎貞擧〇大友申、勳功地豐後國香賀地莊地頭職參分壹河越安藝入道跡事、任今月廿五日綸旨、都甲彌次郞入道相共可被沙汰付之也、仍執達如件、

建武元年十一月廿八日　　左近將監花押〇大友貞載

竹田津諸次郞入道殿〇道景

〔竹田津文書〕豐後國香地莊地頭職參分壹河越安藝入道跡豐前七郞貞擧勳功事、去年十一月廿五日綸旨、同月廿八日任御施行之旨、一方御使相共都甲彌次郞入道、去年正月十六日、莅彼所、貞擧沙汰付候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年三月廿六日　　沙彌道景請文、裏判、

〔集古文書下知狀二十七〕大友親時下知狀　肥後家臣志賀太郎助藏

風早東西阿彌陀堂時乘等申、背風早禪尼送文、被對捍、被相節由事、今月廿日奉行所奉書案幷訴狀具書如此、所申無相違者、任送文可被致沙汰、若又有子細者、早可令明申給、仍執達如件、

弘安十一年〇正應元年三月廿日　　因幡守花押

志賀村一分地頭太郞入道殿

〔古簡雜纂卯〕上野國高山御厨北方內、大塚□□兩鄕預所前隼人正親鑒代道盛、與小林五郞次郞入道道義跡得一。分。地。頭。善六兵衞尉朝淸妻女大江氏相論、初任撿註、幷年貢以下事、〇中略

德治三年〇延慶元年二月七日　　陸奧守平朝臣花押〇北條宗宣

相摸守平朝臣花押〇北條師時

〔忽那文書乾〕伊豫國忽那島一分地頭藤原氏代忠長申、當島一。分。地頭重則、押領重安名田地以下屋敷、抑留得分物由事、重訴狀副具書如此、兩度遣召文之處不參候、太無謂、本月廿日以前、可參決之旨相觸、重則載起請文之詞、可被申散狀也、仍執達如件、

延慶二年二月廿一日

前越前守花押○北條貞房

越後守花押○北條貞顯

綿貫左衛門二郎殿

高木五郎兵衛入道殿

〔忽那文書乾〕伊豫國忽那島一分地頭藤原氏代長忠申、押領重安名田地以下屋敷、抑留得分物由事、書狀副具書如此、早帶陳狀、可令出對之狀如件、

延慶二年十一月廿五日

利用花押

盛久花押

一分地頭代へ

〔深堀系圖證文記錄二〕一元弘三年七月廿八日、深堀彌五郎擧狀證判、　一通

去五月廿五日、武藏修理亮英時誅伐之間、肥前國戶町浦○彼杵郡一分地頭深堀彌五郎政綱、最前馳參、付于御著到、令在津候畢、給覆勘狀、欲備于向後龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月廿八日

承了　判○大友具簡

進上　御奉行所

〔上妻文書〕花押

筑後國上妻○上妻郡一分地頭宮野四郎入道敎心誠惶誠恐謹言上

欲早任抽忠節實、預御覆勘狀、且浴恩賞、且施弓箭面目子細事、

副進

一通　筑後前司入道妙惠○少貳貞經狀

右去五月廿五日、武藏修理亮英時誅伐之時、敎心早速馳參、致忠節、令付于連々著到之時、筑後前司

入道妙惠狀分明之上者、下賜御覆勘狀、爲備將來龜鏡、恐々言上如件、

元弘三年八月日

〔吉川家什書十五〕一石見國永安一分、幷益田庄〇美濃郡小彌富寸津浦井中山、美磨博庄久保、同國岩地村地頭職事者、宣旨案如此、不可有知行相違所候也、仍執達如件、

元弘三年九月十七日　御目代藤原

永安一分地頭良海代孫太郞殿

〔伊達文書一〕上野國公田鄕一分地頭伊達孫三郞入道道西〇貞綱謹言上

欲早且任傍例、且任相傳道理、賜安堵國宣、全當知行公田鄕一分地頭職間事、〇中略

元弘三年十月日

〔萩藩閥閱錄二十七ノ一〕熊谷小四郞直經申、武藏國木田見鄕一分地頭職事、木田見孫太郞致濫妨云々、所申無相違者、可令沙汰付之、若又有子細者、可被注申之狀如件、

元弘三年十二月二十日　尊氏花押

伊豆守殿〇上杉重能

〔吉川家譜一〕經長王熊次郞、播磨國福井庄之內、安藝國大朝本庄之內、大塚、妻原一分地頭、元弘三年癸酉、屬官軍、賜綸旨、又有軍忠狀、別記之、

〔日向國圖田帳〕日向國　注進國中寺社庄公總圖田町

合田數八千六十四町〇中略

權門　八條女院御領國富庄田代千五百二町　一圓庄千三百八十二丁

加江田八十丁　右宮崎郡內　地頭平五　加納二百丁　右同郡內　地頭同人

大田百丁　右同郡內　地頭同人　國富本鄕二百四十丁　右同郡內　土持太郞宜綱

左右恆久百丁　右同郡內　地頭平五

一所領有數地頭

限野八十丁　右同郡内　地頭同人　吉田三十丁　右同郡内　地頭同人
源藤六十丁　右同郡内　地頭同人　鏡淵六十丁　右同郡内　地頭同人
今泉三十丁　右同郡内　地頭土持太郎信綱
那珂二百丁　右那珂郡内　地頭同人　田島破四十丁　右那珂郡内　地頭同人
裟十五丁　右郡内　地頭同人　佐土原十五丁　右兒湯郡内　地頭同人
倍木三十丁　右同郡内　地頭同人　新田八十丁　右同郡内　地頭同人
下富田百三十丁　右同郡内　地頭同人　寄郡百二十丁
穗北郷七十丁　右同郡内　地頭同人　鹿野田郷五十丁　右同郡内　地頭同人
前斎院御領田代二百七十八町
平郡庄百丁　右同郡内　地頭預所右馬助殿廣時
藤太別庄二十丁　右同郡内　名主重直　久目田八丁　右同郡内　預所同人
都於郡百五十丁　右同郡内　預所同人（沒官領地頭宇都宮所衆信房、地頭土持太郎信綱）
殿下〇藤原兼實御領島津庄田代三千八百三十七町　一圓庄二千二十町
北郷三百丁　右諸縣郡内　地頭（前右兵衛尉）忠久　中郷百八十丁　右郡内　地頭同人
南中郷二百丁　右郡内　地頭同人　救仁郷百六十丁　右同郡内　地頭同人
財部郷百五十丁　右同郡内　地頭同人　三俣院七百丁　右郡内　地頭同人
島津破三百丁　右同郡内　地頭同人　吉田庄三十丁　右郡内　地頭同人
寄郡千八百十七町
新名五十丁　右臼杵郡内　地頭掃部頭殿　浮目七十丁　右同郡内　地頭同人
伊富形十五丁　右同郡内　地頭右兵衛尉忠久

大貫十二丁　右同郡内　地頭同人　新納院百二十丁　右兒湯郡内　地頭掃部頭殿
宮頸三十丁　右同郡内　地頭右兵衛尉忠久
穆佐院三百丁　右諸縣郡内　地頭同人　飫肥北郷四百丁　右宮崎郡内　地頭同人
同南郷百十丁　右同郡内　地頭同人　櫛間院三百丁　右同郡内　地頭同人
救仁院九十丁　右諸縣郡内　地頭同人　眞幸院三百廿丁　右同郡内　地頭同人
三宅郷二十丁　右臼杵郡内　地頭信綱　三納郷四十丁　右同郡内　地頭同人
間世田八丁　右同郡内　地頭同人
公領右松保田代廿五町　右同郡内　地頭土持太郎宣綱
沒官御領田代六十八丁　宇都宮所衆
右去元暦年中之頃、武士亂逆之間、於諸代國之文書者、散々取失畢、雖然寺社公總圖田大略注進如件、

建久八年六月日　日下部依包　權掾矢田部恒　權介日下部盛直　權介日下部行直
權介日下部重直　權介日下部宿禰盛綱

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳
合肆仟拾町漆段内（○中略）
伊作郡二百町（正八幡宮論田廿二町五段廿）　地頭右衛門兵衛尉（○中略）
同（○日置）南郷内外小野十五町　地頭右衛門兵衛尉（○中略）
御庄寄郡内沒官御領六百十町二段内
三百七十八町三段　地頭千葉介
二百三十二町　地頭右衛門兵衛尉

阿多久吉二百十町四段　地頭佐女島四郎○中略
公領百九十五町四段内　没官御領地頭佐女島四郎
久吉百四十五丁四段　本名主在廳種明
高橋五十丁　同地頭佐女島四郎○中略
右件圖田注文、去文治年中之頃、依二豊後冠者謀叛一、彼亂逆之間被二引失一畢、仍大略注進如レ件、
建久八年六月日　權掾藤原朝臣在判　權掾伴在判　大目大藏在判　權大前在判　目代
右馬允藤原在判

〔淡路國大田文〕淡路國二郡　注進　國領幷庄薗田畠地頭注文事
合　津名郡　國領
都志郷田二十一町八反百五十步　前地頭女房三條殿　新地頭佐野太郎
除田五丁一反六十步　殘田十六丁七反九十步　畠十三丁二反六十步　除畠二丁二反　殘畠十一丁六十步　浦一所
郡家郷田三十町三反　地頭駿河入道殿
除田十一丁七反二百四十步　殘田十八丁五反百廿步　畠廿二丁九反百八十步　除畠二丁八反六十步　殘畠廿丁一反百廿步　一宮社一所　同神宮寺一所○中略
室津保田廿一町七反二百步　前地頭左馬允忠道、國御家人、　新地頭讃岐右衞門六郎、
除田三丁　殘田十八丁七反二百步三斗代五丁二百步　畠五丁百卅步　除畠一丁九十步　殘畠四丁四十步
石屋保田六丁七反百四十步　前地頭中務入道殿　新地頭當守護所
除田三丁九反　殘田二丁八反百四十步　畠五丁二百十步○中略

庄分

廣田庄西宮御領　地頭大和中務丞

田六十町　畠略○中

由良庄禪林寺新熊野領　前地頭賀加兵衛佐殿　新地頭木内二郎

田廿町　畠略○中

三原郡　國領

笶原保田六十町一反二百五十歩　前地頭前守護所中務入道殿　新地頭當守護所

除田廿七丁一反三百五十歩　殘田三十二丁九反二百六十歩　此内在廳引名加之　畠廿九丁七反七十歩　除畠八丁七反百卅歩　殘畠廿丁九反三百歩　八木村　鹽濱村　八太村

美原宮一所　開且寺一所　成相寺一所　二宮社一所　同神宮寺所　榁尾宮一所略○中

阿万庄得長壽院并八幡宮御領　前地頭兵衛尉以忠法師入道　新地頭木村太郎

田百三町本庄百町新庄三丁　畠　浦二所

諭鶴羽御山一所熊野領現本山略○中

右大略注進如件、但於庄薗者、任建立最前立券文之旨、注進仕之間有不審歟、於國領者、付當時文書之旨、令口注進也、仍言上如件、

貞應二年四月日　散位藤原朝臣花押　散位凡宿禰花押　散位權守宿禰花押　右馬允藤原朝臣花押

〔但馬國大田文〕大田太郎左衛門尉政綱弘安八年之注進

氣多郡

上賀陽莊　十七丁六反三百廿八分　地頭二人

南方地頭　小林三郎入道　北方地頭　同三郎與重〇中略

（八幡宮）菅莊　四十一丁七反三百分内　地頭二人

北方　十六丁七反小　地頭藤肥前左衛門太郎經久

神田　一丁五反　加當一宮田五反定　寺田　一反　加徵代　一丁　定田　九丁

小

南方　二十五丁半　地頭多々良岐勝太郎長基

神田　五十一反　御油田　一反　一宮田　三十六反　人給　四丁一反　定田

十二丁半

〔豐後國圖田帳〕豐後國直入等注申、當國八箇郡分、國崎、速見、直入、大野、海部、大分、日田、玖珠、田數領主等之事、

一國崎東郷千六百三十八町内

武藏郷三百町　宇佐宮領　領主神官名主等

本郷二百五十四町八段　地頭職大友兵庫入道殿

久吉名十六町　重藤名六段八町　同人

池内永吉名二十一町　地頭職御家人忠左衛門尉惟景〇中略

辨分十町　地頭御家人日田彌三郎永基（法名法基）

弘永名三十町　同人〇中略

朝來野浦十四町　地頭朝來野彌三郎公平、同次郎公繼〇中略

吉久二十八町　地頭職大炊三郎藏人能泰（法名道善）

久末名五町　地頭職小田原彌次郎親景〇中略

一速見郡千町餘五町
石垣庄二百町　宇佐宮領　領主神官名主等
本庄百四十町　地頭職名越備前左近大夫殿〇中略
別府六十町〇中略
鶴見村十五町　領家延曆寺地頭大友兵庫入道殿
一直入郡二百七十町本鄕百町入田鄕三十町　合直入百三十町　領家淸凉寺、地頭職大友兵庫入道殿〇中略
一大分郡千百八十九町〇中略
岩屋二十町一段九步　領主地頭職御所女房輔御局〇中略
一海部郡八百三十一町內〇中略
本庄百二十町　地頭御家人佐伯彌四郎政直〇法名謙淸中略
一大野郡八百七十町內〇中略
井田鄕八十町五段　地頭職相模三郎入道殿女子〇中略
一日田郡五百六十町〇中略
四百五十町　地頭職御家人日田彌三郎永基法名法基
竹田別府二十町二段　宇都宮領　領家冷水谷大納言家跡地頭職豐前大炊入道殿女子、持明院別當入道後室家跡、小田原又次郎景泰法名寂佛同五郎景鄕買領之由申〇中略
大肥庄六十町　領家安樂寺別當御房地頭職上野國御家人大鷹四郎經胤跡、當知行不分明、
一玖珠郡三百八十町〇中略
帆足鄕八十町　地頭職本家安嘉門院御跡

一人兼數所

（大隅國圖田帳）大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領并本家領所地頭辨濟使等交名事

合田參仟拾漆町伍段大

正宮領　本家八幡　地頭掃部頭（〇家忠）

田千二百九十六町三段小　不輸五百町五段小　應輸七百九十五町八段

國領　公田百丁半　不輸百三十三丁三段小　府社五箇所十六丁　大府御沙汰　嶋津御庄領　殿下御領　地頭衞門兵衞尉　新立庄七百十五丁　寄郡七百十五丁八段三丈　近衞鄕

曾野郡二百廿九丁四段大

正宮領五十六丁一段　本家八幡　地頭掃部頭

御供田十四丁七段　寺田十五丁七段　國方所當辨田　万德五丁二段（丁別十足）　恒見廿丁五段（丁別十九足三丈〇中略）

小河院三百四十八丁三段大

正宮領二百七十四丁八段

本家八幡　地頭掃部頭

御供田十五丁六段六十歩　寺田三十二丁六段　小神田五丁三段六十歩

國方所當辨田　万德百六十丁三段（丁別十足）　恒見三丁九段大（丁別十九足三丈〇中略）

桑東鄕百八十九丁四段大

正宮領百四十三丁九段大

本家八幡　地頭掃部頭

御供円廿七丁七段　寺田五十一丁八段六十歩　小神田三丁五段

國方所當辨田　恒見四丁九段半（丁別十九疋三丈）　万德十二丁（丁別廿疋）　宮永廿三丁　正宮修理料

（此内不輸免押事、名々在成敗）　公田廿一丁（丁別廿疋）　万善十二丁　松永七丁　税所藤原篤用所知　千手丸

二丁（○中略）

帖佐鄉二百七十一丁大

正宮領

本家八幡　地頭掃部頭

爲牛不輸、正税官物者、辨濟於國衙也、御供田九丁七段小　寺田廿六丁六段　小神田六十

四丁九段半　大般若三丁　經講浮免十四丁二段（臨時府國御祈禱料）

國方所當辨田

万德五丁三段大（丁別十疋）　恒見八丁七段大（丁別十九疋三丈）　宮吉五丁（丁別八疋）　正政所十丁（丁別十五疋）

權政所五丁（丁別十五疋）　公田六十八丁四段半（丁別廿疋）　村々十ケ所（○中略）

加治木鄉百廿一丁七段半

正宮新御領

本家八幡　地頭掃部頭

公田永用百六丁二段　郡司大藏吉平妻所知

件名雖爲社領、分號府別府、以數百餘丁、宛五十丁所當准千疋、殘六十餘丁不辨濟、府國兩方、恣

私用也、勤不隨國務也、（○中略）

右件總田數、任御敎書之旨、注進如件、

建久八年六月日　大判官代藤原　諸司撿校散位大中臣（在判）　田所散位建部宿禰（在判）

税所散位藤原朝臣（在判）　目代　源（在判○下略）

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年十月十七日丙午、大隅國正八幡宮寺訴申事、被經沙汰、是故右幕下〇源賴朝御時、播部頭入道寂忍爲正宮地頭之處、宮寺依申子細、被停止其儀訖、其後又三箇所被補三人地頭之間、造宮之功難成之由云云、仍今日所止彼地頭職等也、帖作鄕地頭肥後坊良西、荒田庄地頭山北六郎種賴、萬得名地頭馬部入道淨實云云、廣元朝臣奉行之、

〔集古文書一綸旨〕伊勢國笠間庄　維貞跡
同國蒲御厨　泰家法師跡
駿河國大岡庄　泰家法師跡
陸奥國泉荒田　同跡
播磨國福居庄　維貞跡
遠江國淺俣鄕　泰家法師跡
同國大池庄　高家跡
甲斐國安村別府　同跡
出羽國會津　顯業跡
土左國下中津山　泰家法師跡
右所々地頭職可令管領者、天氣如此、仍執達如件、
元弘三年七月十九日　式部少輔花押
兵部大輔殿〇岩松經家

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十日戊子、伊勢大神宮領地頭等之中、乃貢已下事、可致精勤之由、日來有其沙汰、今日被施行之、御信仰異他故也、
下　伊勢國神宮御領御國御厨地頭等、可早任先例、辨備御上分神役并給主禰宜得分物事、
右當國神領神民之中、令停止猥藉、有限御上分雜事并給主禰宜神主得分物、不致對捍、任先例可令辨備也、若依處之異損、泥本法之辨者、雖地頭得分、慥可令急用正物、於神役者、敢不可闕之故也者、御國御厨住人宜承知、不可緩怠之狀如件、
文治二年三月十日

〔豐後國圖田帳〕豐後國直入等注申、當國八箇郡分、國崎、速見、直入、大野、海部、大分、日田、玖珠、田數領主

等之事、

一國崎東郡　千六百三十八町內

武藏鄉三百町　宇佐宮領　領主神官名主等

本鄉二百五十四町八段　地頭職大友兵庫入道殿

久吉名十六町　重藤名六段八町　同人

池內永吉名二十一町　地頭職御家人忠左衞門尉惟景跡、當知木工助三郎景元、

安岐鄉三百町　宇佐宮領

余名三十六町　領主神官名主等

辨分十町　地頭御家人日田彌三郎永基(法名法基)

弘永名三十町　同人

成久名三十七町　相摸七郎殿母御前辻殿

朝來野浦十四町　地頭朝來野彌三郎公平

守江浦三町　戶次太郎時頼、(法名道惠)同次郎公繼字憚(○憚恐寧)在、

來繩鄉三百町　宇佐宮領

本鄉并余名二百七十七町　鄉司來繩妙性房智恩寺院主榮範、神官名主等各分領雖存知、

吉久二十九町　地頭職大炊三郎藏人能秦(法名道善)

久末名五町　地頭職小田原彌次郎賴景

田原鄉六十町　宇佐宮領

本鄉四十町　領主本守護所豐前大炊助入道女子、持明院別當之後室之跡、而豐前六郎藏人泰廣、或號借上質劵、或買得相傳之由申處、辻殿雖掌論之、

小野一萬名十町　伊賀國御家住人八十島左衛門太郎賴忠爲二私領一六郎藏人泰廣借二上之一

田染鄕九十餘町　宇佐宮領

本鄕四十二町　辨符云、領主大藏卿法眼有寬跡、小田原五郎景泰、法名寂佛相二論之一

吉九名二十一町　地頭名越尾張入道殿

糸永名三十町　肥前國御家人曾禰崎淡路法橋慶增

櫛來浦十五町　宇佐宮領地頭職大炊助官次郎親元

太田原別府十五町　地頭小田原次郎重直法名道佛〇中略

一速見郡　千町餘五町

石垣庄二百町　宇佐宮領　領主神官名主等

本庄百四十町　地頭職名越備前左近大夫殿

別府六十町

朝見庄八十町　宇佐宮領　地頭職土肥一王丸

〔日向國圖田帳〕日向國　注進國中寺社庄公總圖田町

合田數八千六十四町　寺領田代二百三十八町

彌勒寺領百十五町

鹽見三十五町　右臼杵郡內　領家八幡別當地頭土持太郎信綱

富高三十町　右同郡內　領家同人　地頭同人〇中略

安樂寺領六十三丁

馬關田庄五十丁　右諸縣郡內　地頭須江太郎不レ知二實名一

湯宮十三町　右兒湯郡內　地頭平五

花藏院御領六十丁
國分寺田二十丁　右兒湯郡內　地頭土持太郎宣綱
法元寺田二十丁　右同郡內　地頭同人
尼寺田十丁　右同郡內　地頭同人
安寧寺田十丁　右同郡內　地頭同人
社領田代二千百六町
宇佐宮領千九百十三町
縣庄百三十丁　右臼杵郡內　地頭故勤藤原衛門尉(不ㇾ知₂實名₁)
富田庄八十丁　右同郡內　地頭同人
岡富庄八十丁　右同郡內　辨濟使太郎宣綱
多奴木田十丁　右同郡內　辨濟使宇佐大宮司公通(宿禰家使)
田島庄九十丁　右同郡內　地頭故勤藤原左衛門尉(不ㇾ知₂實名₁)
諸縣庄四百五十丁　右諸縣郡內　地頭同人
浮田庄三百丁　宮崎郡內　辨濟使故宇佐宮司公通宿禰(家使)
廣原庄百丁　右那珂郡內　辨濟使七郎助綱
新名瓜別府八十丁　右同郡　辨濟使土持太郎宣綱
宮崎庄三百丁　右宮崎郡內　地頭前播部頭殿
調殿十六丁　右兒湯郡內　地頭同人〇中略
右去元暦年中之頃、武士亂逆之間、於₂譜代國之文書₁者、散々取失畢、雖ㇾ然寺社公總圖田、大略注進如ㇾ件、

建久八年六月日　日下部依包　權掾矢田部恒　權介日下部盛直　權介日下部行直　權介日下部重直　權介日下部宿禰盛綱

〔吾妻鏡十八〕元久二年五月廿四日辛巳、安樂寺領筑後國岩田田嶋兩庄事、就社僧等愁訴有沙汰、今日被付地頭職於社家云云、　九月十九日壬寅、以伯耆國宇多河庄地頭職、被施入大原來迎院云云、廣元朝臣奉行之、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年（〇建保元年）十二月十八日甲辰、今日修理亮（泰時）以伊豆國阿多美鄕地頭職、令奉寄走湯山權現給、是元者件神領也、而頃年仁田四郎忠常令領之、彼滅亡之後、匠作（〇泰時）拜領之給訖、根本由緖、今朝始聞之、卽爲放生之地、永所被寄進也、

〔吾妻鏡二十六〕承久四年（〇貞應元年）四月十九日、安藝國千與末地頭職、令寄進嚴嶋社領給云云、

〔阿蘇文書二（鎌倉下文）〕八月五日御札、九月十日到來、謹以承候了、抑阿蘇社領色見山間事、於地頭職者、故陸奧入道返進候歟、御代官事、左右可爲御進止候哉、以此旨可令披露給候也、恐惶謹言、

九月十六日　武藏守平泰時（花押裏ニ）

〔三島宮御鎭座本緣〕八十六代四條院御宇、嘉禎元（乙未）年、領家德大寺改預所木工頭入道、神主補任余藤兵衛、雖神主下向從鎌倉殿、太祝家地頭幷社守護職有限依被仰附京都守護人、至此時相止云云、

〔大山積神社文書〕三島御油畠事

合壹町內（漆段　領家御分）（參段　地頭分）

右件畠、先沙汰人依違亂不作云云、而任光實房申狀道理、如先所充行也、有限御油、無懈怠可令致其沙汰狀如件、

仁治三年九月日　花押

〔檜垣兵庫家古文書〕永寄進多氣郡相可鄕三疋田村荒張御園口入料田事

合捌段六十步者

右當御園者、去承元年中、建立豐受大神宮御園、送多年畢、而永樂寺領地頭致押妨之間、年々不及上分口入沙汰、仍以有近之名字、賜本所御奉狀、訴申六波羅家、番訴陳之處、有近帶證文、道理之剋、地頭遁避之間、去正月廿二日、預武家御裁定、賜本所御下知畢、仍仰神威、依有存旨、以權禰宜行文神主、定口入所、如本號荒張御園、米參斛御國本器定限永代、毎年無懈怠可備進彼宿所也、但於上分者、以此內爲口入所御沙汰、直可被備進御贄上分也、末代若致對捍之時者、付件八段餘之地本、自口入所可被致訴法之責、仍爲後代寄進之狀如件、

弘安三年四月廿三日　御園領主法橋上人位判

〔島津文書〕豐前國上毛郡勤原村地頭職事、御寄進狀遣之、可送進正八幡宮也、御願成就、異國降伏之由、可啓御寶前之旨、可令相觸當宮神官之狀、依仰執達如件、

弘安七年二月廿八日　駿河守在判〇北條業時
相模守在判〇北條時宗

大宰少貳殿

奉寄進　正八幡宮御寶前　豐前國上毛郡勤原村地頭職事

爲右、聖朝安穩、異國降伏、殊有御祈願、所被寄進也者、依鎌倉殿〇惟康親王仰、奉寄如件、

弘安七年二月廿八日　正五位下行駿河守平朝臣業時在判
正五位下行相模守平朝臣時宗在判

〔但馬國大田文〕太田太郎左衛門尉政頼弘安八年之注進

朝來郡

當國二宮粟鹿大社　百丁七反二百廿六步領家埦殿法印跡　地頭島津常陸入道〇中略

養父郡

水谷大社（當國三宮）　六十九丁三反内（領家關東御分預所地頭神主水谷庄衞門大夫淸有）

〔東寺百合古文書 四十六〕榮實和與狀

和與

東寺領伊豫國弓削嶋庄下地以下相分事

一當嶋田畠山林鹽濱等下地、所務以下相分參分之壹貳畢、然者於參分之貳者、壹圓可爲領家分、至參分之壹者、壹圓可爲地頭分矣、

一網場參箇所内壹所嶋尻者、壹圓可預所分、壹所釣濱浦者壹圓可爲地頭分、壹所邊屋路嶋者、網以下所出物、隨出來預所幷地頭可致等分沙汰哉、

右當嶋所務以下條々、守正元永仁御下知等、雜掌榮實與地頭代空勝（俗名重高）雖番訴陳、斷未來之煩、爲停止當時之論、所令和與也、堅可守以前條々和與之旨、更不可背之、若於違背之者、宜被處罪科、仍和與之狀如件、

乾元二年正月十八日　雜掌法橋榮實（花押）

地頭代左衞門尉佐房（花押）

〔三島宮御鎭座本緣〕九十五代後醍醐天皇御宇、元應二年庚申、從鎌倉殿延松名地頭職、爲加增下賜、相摸守平高時在判有之、

〔大德寺文書 一〕信濃國伴野庄地頭職、所被寄附大德禪寺也、殊可奉祈萬年之聖運者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年六月十五日　式部少輔（奉、花押）（岡崎範國〇）

宗峯上人（妙超〇）禪室

〔臨川寺文書〕常陸國東岡田郷〇久慈郡地頭職〈諸岡式部大夫跡〉所被付臨川寺也、可令知行給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年八月七日　　右兵衞督〈花押〉〇葉室長光

夢窓上人〇疎石御坊

〔大德寺文書〕一下總國遠山方御厨、領家並地頭職、爲具行卿〇北畠菩提料所、民部卿局寄付大德寺之由被聞召了、永代管領不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年八月十日　　左中將〈花押〉〇千種忠顯

宗峯上人御房

〔富士文書〕乾駿河國下島郷地頭職所被寄附當宮也、□知行者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年九月三日　　左少辨〈花押〉〇中御門宣明

富士大宮司館

〔寶簡集〕三高野山金剛峯寺大塔料所、備後國大田莊〇御調郡地頭職、所被寄附當山也、一圓可令知行之由、可令下知寺家給者、天氣如此、仍上啓如件、

元弘三年十月八日　　式部少輔〈花押〉

謹上　勝寶院僧正御房

高野山金剛峯寺大塔料所、備後國大田莊地頭職所被寄附當山也、一圓可令知行之由事、綸旨如此、早可令存知之旨、可令相觸滿寺給者、依法務前大僧正御房御氣色、執達如件、

十月八日　　法印實猷

撿挍法印御房

〔大德寺文書〕一播磨國浦上莊〇揖西郡地頭職事、任被申請、爲葛西御厨〇下總國葛西郡替、所被寄附當寺也、可

補任

令存知給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年十二月一日　左衛門權佐花押〇岡崎範國

大德寺長老〇妙超禪室

〔東寺百合古文書百四十六〕東寺領若狹國太良庄地。頭。職。如元所被付寺家也者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年七月十二日　朱書三條公冬左中將花押

謹上　遊無動院僧正御房

〔長樂寺文書三〕上野國大胡鄕內野中村〇南勢多郡地頭職事、長樂寺了愚上人譚庵、義貞〇新田寄進被聞食了、不可有相違之由、綸旨如此、早可被沙汰付之旨、國宜所候也、仍執達如件、

建武二年六月十九日　平花押　源花押　沙彌花押

謹上　御目代殿

〔西大寺文書四〕後村上　吉野

筑後國竹野庄地頭職、任先度勅裁知行不可在相違者、天氣如此、仍執達如件、

正平八年十月九日　右中辨花押

西大寺長老上人御房

〔薩藩舊記前集一〕花押

下　信濃國鹽田庄

補任地頭職事

左兵衛尉惟宗忠久

右人爲地頭職、從行庄務、御年貢以下、任先例可致其勤之狀如件、以下、

文治二年正月八日

〔吾妻鏡六〕文治二年十二月十日癸未、今日藤原遠景爲鎭西九國奉行人、又給所々地頭職等云云、

〔諸家系譜後編二十六龍造寺〕季家龍造寺左衛門尉

右大將頼朝公、天下草創時、爲鎌倉御家人、　文治三年丁未、始賜肥前國佐賀郡龍造寺邑地頭職、

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月十二日辛巳、小山左衛門尉朝政、先年募勳功、浴恩澤、常陸國村田下庄也、而今日賜政所御下文、其狀云、

將軍家政所下　常陸國村田下庄下妻宮等　補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右去壽永二年、三郎先生義廣、發謀叛企鬪亂、受朝政偏仰朝威、獨欲相禦、卽待具官軍、同年二月廿三日、於下野國野木宮邊合戰之刻、抽軍功畢、仍彼時所補任地頭職也、庄官宜承知、不可違失之狀、所仰如件、以下、

建久三年九月十二日　案主藤井〇俊長　知家事中原〇光家

令民部少丞藤原〇行政　別當前因幡守中原朝臣〇廣元　下總守源朝臣〇邦業

〔小山結城家之證文〕將軍家政所下　下野國日向野郷住人　補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右壽永二年八月日御下文云、以件人補任彼職者、今依仰成賜政所下文之狀如件、以下、

建久三年九月十二日〇署名同上文、故略、

〔三島宮御鎭座本緣〕建久八年丁巳四月四日、北條四郎義時舍弟修理大輔時房、三島令地頭始補任、代官藤七郎盛友相伴下著、鎌倉殿當國地頭被居始也、上下三十九人下著云々、

〔古文書類纂上補任下文〕土御門天皇正治二年補任下文〔吉川家什書〕

下　播磨國福井庄住人　補任地頭職事

藤原經衆

右人可爲彼職、但於庄務及年貢課役者、不成濫妨、可致沙汰之狀如件、以下、

正治二年正月廿五日

〔小山結城家之證文〕(朱書)賴家御判

下　播磨國五箇庄住人　補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右人可爲彼職、但於乃貢已下課役者、不成抑妨、可致其勤之狀如件、以下、

正治二年正月廿五日

〔相良文書一〕下　肥後國球麻郡內人吉庄

補任　地頭職事

藤原永頼

右庄、爲平家沒官領之間、可被補地頭之由依申、殊施軍功之故、以永頼可令爲彼職之、但至有限之御年貢以下雜事者、地頭全不致違亂、可存公平之狀、依鎌倉殿御下知如件、

元久二年七月廿五日　　遠江守平朝臣(御判〇北條時政)

〔諸家文書纂三刀屋四〕出雲國三刀屋鄉地頭職事

諏方部三郎助守所帶、先判御下文也、早止飽馬斎藤四郎時綱沙汰、可令助守知行之狀、依仰下知如件、

貞應二年二月十七日　　前陸奧守平(花押〇北條義時)

〔吾妻鏡三十〕文曆二年(〇嘉禎元年)七月七日戊辰、近江入道虛假所賜之承久宇治河先登賞、被付神社等

之間、今日有其替沙汰、被成御下文、依為殊勲功被載其詞、

將軍家政所下　尾張國長岡庄住人、補任地頭職事、

前近江守信綱法師

右人承久兵亂、宇治河勵鋒之勸賞、豐浦庄之替、可為彼職之状、所仰如件、以下、

文暦二年七月七日　案主左近將曹菅原　知家事内舍人清原

令左衞門少尉藤原〻　別當相摸守平朝臣（○北條時房）　武藏守平朝臣（○北條泰時）

〔小代文書乾〕花押（○將軍藤原賴嗣）

下　肥後國野原庄　補任地頭職事

小代平内右衞門尉重俊

右人依子息重康之忠、補任彼職之状如件、

寶治元年六月廿三日

〔太田康有記〕建治三年六月十三日、城務被通使者之間、罷向松谷別莊之處、被仰云、肥前肥後國安富庄地頭職、相大守（○北條時宗）可有御拜領之由、内々有御氣色、只今可被成進御下文者、可為康有之奉書云々、仍書御下文、持參山内（○時宗宅）、被以諏方左衞門入道申入之處、於國殿被召御前、被仰云、當庄事、聊有子細言上處、申沙汰之條所悦思召也云々、

〔古簡雜纂卯〕可令早宗像稱松丸知肥前國晴氣保地頭職事

右任今年十月廿八日關東御下文、可令致沙汰之状如件、

弘安二年十二月二日　左近將監平朝臣（花押○北條時國）

陸奧守平朝臣（花押○北條時村）

〔諸家系譜後編二十六龍造寺〕家益（龍造寺六郎）

兄季時與蒙古合戰時、與兄季友共警固博多防戰、兄弟共討死、因是家益爲總領職、繼其家督、賜肥前國龍造寺村及筑前國比伊郷、筑後國荒木村之地頭職、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕六波羅の注進につきて、武家興福寺領に、もろ〳〵の大名ごもを地頭に補しければ、さいはひ大和國にいりみだれ、漸事めづらしければ、峯〇多武峯寺〇興福寺の衆徒はさてこそやみにけれ、

〔朽木文書乾〕近江國朽木庄地頭職、佐々木出羽四郎兵衛尉時經、如元可令知行者、天氣如件、悉之以狀、

元弘二年八月十二日　　式部少輔花押

〔壬生文書〕若狹國國富庄事綸旨官符等案

若狹國國富庄〇遠敷郡地頭職高時法師跡事、可被知行者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年五月二十九日　　勘解由次官〇高倉光守判

大夫史殿〇小槻匡遠

〔薩藩舊記前集十二山田氏文書〕島津大隅式部諸三郎忠能、同舍弟龜三郎丸等謹言上、

欲早任當知行旨、下賜安堵綸旨、備將來龜鏡、薩摩國谷山郡內山田、上別府兩村地頭職、同國散在名田畠相傳所領等事、

副進　一卷　所領相傳文書等

右就被下綸旨、於忠能一族島津上總前司貞久法師、法名道鑑令誅罰武藏修理亮英時之時、忠能父子共懸先令生捕、抽軍忠之間、可浴恩賞之旨、以別紙言上、於當知行所領等者、早下賜安堵綸旨、欲備將來龜鑑矣、仍恐々言上如件、

元弘三年七月日

賞有功

右書ノ口ニ知レ此有レ之
奉行人藏人式部少輔（○岡崎範國）

〔島津文書三〕播磨國下揖保（○揖西郡）東方地頭職周防又五郎入道覺善、當知行不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年十一月八日　宮內卿（花押○中御門經季）

〔烟田文書天〕雜訴決斷所牒　德宿彥太郎幹宗所

常陸國鹿島郡德宿鄕內鎌田（○烟田）烏栖、富田、大和田四箇村地頭職事、

右當知行不可有相違者、以牒、

建武元年五月二十四日　少判事中原朝臣（在判）

左中辨藤原朝臣（在判）

〔吾妻鏡十五〕建久六年八月廿八日庚辰、東國庄園、於隱居強竊二盜、幷博奕等不善輩所々者、召放其所地頭之職、可充賜搦進仁之旨、被仰下陸奥出羽以下國々云云、

〔諸家文書纂四三刀屋〕可令早源助長爲出雲國三刀屋鄕地頭職事

右人依勳功賞、可爲彼職之狀、依仰下知如件、

承久三年九月四日　陸奥守平（花押○北條義時）

〔薩藩舊記前集二〕可令早左兵衞尉惟宗忠義爲伊賀國長田鄕地頭職事

右人依勳功賞、可爲彼職之狀、依仰下知如件、

承久三年閏十月十五日　陸奥守平（花押○北條義時）

〔諸家文書纂五薩摩〕可令早左衞門尉藤原忠義爲近江國興福寺庄地頭職事

右人依勳功之賞、補任彼職之狀、依仰下知如件、

貞應二年六月六日　前陸奥守平（在判○北條義時）

〔島津文書一〕薩摩國市來院〈〇日置郡〉名主職、豐後國井田鄕〈〇大野郡〉地頭職〈菊王丸跡〉、爲勳功賞可被知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年二月二十一日　　左衞門權佐〈花押〇同國〉

島津上總入道館〈〇貞久〉

〔華名古文書〕可令早三浦介時繼法師〈法名道海〉領知武藏國〈足立郡〉下野右近大夫將監跡、相摸國河內鄕〈大住郡〉澁谷遠江權守跡地頭職事、

右爲勳功賞所宛行也者、早守先例可令領掌之狀、依仰〈〇成良親王〉下知如件、

建武元年四月十日　　左馬頭源朝臣〈花押〇足利直義〉

授祗候人

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〈〇元久元年〉十二月廿二日己酉、御臺所〈〇源實朝室〉御方祗候男女數輩、拜領地頭職云云、

授婦女

〔吾妻鏡十〕文治六年〈〇建久元年〉四月四日丁亥、美濃國內地頭佐渡前司重隆并堀江禪尼妨公領、爲令沙汰其事、召使則國入部之處、菊松犬丸等公文、凌礫之由依有訴、被尋下之間、二品殊令驚申給、其狀內內可被遣權中納言許之由云云、

召使則國申　爲美濃國菊松公文末友犬丸公文延末、被陵礫則國身由事、

件兩公文等之所行、何遁罪科候哉、〈〇中略〉於尼公地頭職者、不日令停廢、以他人令改補候畢、

〔吾妻鏡十四〕建久五年閏八月十二日己巳、以但馬國多々良岐庄、始爲地頭補任之地、可被付熊野鳥居禪尼云云、是依所望也、　九月廿三日庚戌、但馬國多々良岐庄者、源宰相領所也、而熊野鳥居禪尼、〈故左典廐〈〇源義朝〉姨公〉日者強所望彼邊、事異他之間、被遣地頭補任御下文、但於有限領家乃貢課役等者、不可有懈怠之由今日被遣御消息云云、

〔吾妻鏡二十六〕承久四年〈〇貞應元年〉四月廿七日、以鳥居禪尼所領紀伊國佐野庄地頭職、尼一期之後、子

息長詮法橋、可相傳之由被仰云云、彼禪尼者、六條廷尉禪門○源爲義妹、故右大將家姨母也、仍令避敵當所地頭職給訖、而子息法橋行忠長詮兄背母命、押領當庄、剰去季兵亂之時、候仙洞、致合戰、零落之後猶立還當庄之由、長詮就訴申、如此、長詮者、抽關東御祈禱之忠云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年十月廿五日壬午、於勝長壽院、有如法經十種供養、是故鎌田兵衞尉正淸息女所修也、○中略彼女性父左兵衞尉正淸者、故大僕卿○源義朝功士也、遂於一所終其身、仍今將軍家○源頼朝殊令憐愍給之間、雖被尋遺孤、無男子、適此女子參上、以尾張國志濃幾、丹波國田名部兩庄地頭職、令恩補給訖云云、

〔徵古文書乙集伊豆〕三島神社文書

鎌倉幕府執權下知狀

下　三島宮領伊豆國玉河鄕住人　可早爲地頭伊豆局沙汰散田事

右當鄕者、元久二年閏七月、被寄進當宮之間、於鄕司職者、盛重神主知行來之處、承久二年二月、伊豆局補地頭之日、盛重依爲彼局舍弟、內々申付代官職之間、盛重、光盛、盛忠等、皆爲代官、一向沙汰來歟、而今地頭與久盛向背之剋、地頭屋敷二町七段大之外、不可相交他事之旨、久盛張行之由、地頭所訴申也、然者一向沙汰之時、與各別知行之今、爭無差別哉、早且任傍例、於散田者、可爲地頭之沙汰、至所當收納者、可爲鄕司沙汰也、兩方可存此旨之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

安貞二年三月卅日

武藏守平花押○北條泰時

相摸守平花押○北條時房

〔徵古文書乙集甲斐〕結城小峯文書(東山梨郡濟田村結城澄藏)

征夷大將軍藤原頼經下文

袖判

下　尼陸奥介景衡後家　可令早領知陸奥國八幡庄內中野堤上、本田壹町、荒野肆町、蕨壇荒野柑子袋藤木田參町地頭職事、

右任亡夫景衡法師法名仁治三年二月十五日、同三年三月廿一日、今年四月日讓狀等、守先例可致沙汰之狀如件、

寶治二年十二月廿九日

〔但馬國大田文〕弘安八年之注進 太田太郎左衞門尉政頼

朝來郡

長講堂領　領家六條中將　地頭鎌田新左衞門尉女子〇中略

氣多郡

安美鄕　七十六丁七反六十分內　地頭大田氏出石三郎信政嫡女 長右衞門四郎長連妻女

佛神田　二十丁九反二百八十分　地頭給　五丁九反三百二分　別名田　五丁六反百八十分　次女分　三丁　安藝口助光直後家　三女分　三丁　治田小太郎入道願西妻女

大同莊預所佐渡入道禪海妻女　四女分　二丁

信政次男孫三郎左衞門尉政光分　成與名　八丁五反

三男孫三郎信繼分　安富名　七丁百三十分

四男五郎信長分　成與名　四丁七反二百分　福成名　三丁八反小　被付下地出水各卌云

云　定田　八丁七反二百七十分〇中略

長講堂領〇中略

新田莊　百六十四丁百六十分內　地頭肥後三郎兵衞尉爲重跡　但中分地〇中略

領家方　百四丁七反百廿分〇中略

地頭方　五十九丁三反五十六分內

讓與

一分　二十四丁八反小　地頭肥後三郎兵衛爲重女子　周防守妻女
佛神田以下除　六丁五反小　定田　十八丁三反
二分　十七丁四反小廿八分　地頭甲斐入道爲連後家尼西肥
佛神以下除　四丁一反小廿八分　定田　十三丁三反
三分　十七丁小二十八分　地頭爲重女子伊賀局
佛神以下除　三丁七反小二十八分　定田十三丁三反〇下略

〔吾妻鏡六〕文治二年正月廿八日丁未、左典厩〇藤原能保及室家、依可被歸洛、出門于足立右馬允遠元家、〇中略備後信敷庄以下數箇所地頭職、令避與于彼室家給云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年八月廿七日壬戌、將軍家〇源賴家御不例、縡危急之間、有御讓補沙汰、以關西三十八箇國地頭職、被奉讓舍弟千幡君十二歲、以關東二十八箇國地頭、幷總守護職、被充御長子一幡君六歲、

〔吾妻鏡十九〕承元四年二月十日己巳、紀伊國安氐川庄地頭職者、故右大將軍〇源賴朝御時、爲高野大塔造營奉行賞、賜高雄文覺房訖、御素意被改彼一身之處、此間湯淺兵衛尉宗光、稱得上人讓狀、望申安堵御下文、被經御沙汰、以件地頭職、不申子細、無左右難讓補、輙不可被許容之由雖被仰之、宗光爲御家人、有其功之上、准新恩可充給之旨頻依愁申、今日被成政所御下文云云、

〔吾妻鏡二十七〕寬喜二年五月廿一日、加賀前司遠兼、令知行亡父安藝前司仲兼遺領地頭職事、不可違先例之旨今日蒙仰、彼仲兼朝臣者、去元久元年十二月、將軍家〇源實朝室西八條禪尼是也自京都御下向之時供奉、二年閏七月廿六日、令拜領一村之後、父子相續關東奉書云云、

〔古文書類纂上下知狀〕四條天皇文曆元年、鎌倉幕府下知狀（陸中國膽澤郡鹽竈村留守景祠所藏）
可早以藤原氏字乙姬令領知陸奧國宮城郡南宮庄內荒野滲町岩切村地頭職事
右人任亡父家元今年七月八日讓狀、可領知之狀依仰下知如件、

文暦元年十一月廿九日　武藏守平（花押○北條泰時）
相摸守平（花押○北條時房）

〔諸家文書纂四 三刀屋〕將軍家政所下　源助盛
可令早領知出雲國三刀屋郷内自河北幷越後國佐味庄上條内赤澤村内下村（除母分定等）地頭職事
右人任親父助長安貞二年二月日讓狀、爲彼職、可令領知之狀、所仰如件、以下、
寛元元年六月十一日　案主左近將曹口野　知家事彈正忠淸原（花押）
令左衞門少尉淸原（定○滿）　別當前攝津守中原朝臣（花押○師員）　前美濃守藤原朝臣（花押○親實）　前甲斐守大江朝臣（花押○泰秀）　武藏守平朝臣（○北條朝直）　左近將監平朝臣（花押○北條經時）　散位藤原朝臣（花押○秋田城介義景）

〔集古文書十三 下文〕鎌倉賴嗣卿下文（出雲國出雲郡日御崎社藏）
花押
下　日置有基
可令早領知出雲國大野庄内名田（員數別付在注文）地頭職事
右任亡父有忠去年七月二日讓狀、幷貳通注文（百姓名地頭名）爲彼職、守先例可致沙汰之狀如件、
寶治元年五月六日

〔諸家文書纂十 野上〕將軍家政所下
豐後國玖珠郡飯田郷内野上村住人　可令早淸原金伽羅丸爲地頭職事
右任亡父資道建長八年九月十六日讓狀（子細載之、後家尼加例）幷正嘉二年六月十日御下知狀、爲彼職、守先例可致沙汰之狀、所仰如件、以下、
正元元年十二月九日　案主淸原　知家事淸原

令左衛門少尉藤原　別當相摸守平朝臣（花押○北條政村）　武藏守平朝臣（花押○北條長時）

〔古文書類纂上讓狀〕龜山天皇文永二年、陸奥留守地頭職讓狀（陸中留守景福所藏）

讓渡　陸奥國宮城郡高用名內村々地頭職事

子息左衛門尉家政

餘部村、（除女房井須麻谷女子、伊澤女子分）村岡村、椿村、（田者東宮仁參町可減也）

右所讓渡于家政實正也、子息等中、互不可有違亂之狀如件、

文永二年三月二日　留守藤原（花押）

〔諸家文書纂十野上〕野上彌九郎助道後家平氏申豐後國野上村地頭職事、子息助直管領之間、平氏依訴申之、割分當村、母一期之間、可知行之由、助直令申之處、平氏又承讓了、彼和與狀二通、內氏女狀、助直當參之間下給了、今一通遣之、平氏在國候はゝ、同可給與也者、依仰執達如件、

文永七年五月六日　相摸守（花押○北條時宗）　左京權大夫（花押○北條政村）

大友出羽前司どのへ

〔諸家文書纂四三刀屋〕可令早左兵衛尉源助親領知出雲國三刀屋郷自河北地頭職（除舍弟助秀）事

右任亡父助盛法師（法名西佛）文永元年十二月三日讓狀、可令領掌之狀、依仰下知如件、

建治二年十二月廿六日　武藏守平朝臣（花押○北條義政）　相摸守平朝臣（花押○北條時宗）

〔集古文書十三下文〕將軍久明親王下文（所藏不詳）

將軍家政所下　左衛門尉通茂法師（法名導專）

可令早領知遠江國飯田庄上郷內笞島西俣加保村、因幡國日置郷內下村、備後國津田敷名兩郷

等地頭職事、

右任親父是通法師(法名專光)弘和安(○和恐誤)四年十一月三日讓狀、爲彼職守先例可致沙汰之狀、所仰如件、

以下、

弘安四年十二月廿八日　案主菅野

令左衞門尉藤原(判)　知家事

別當相摸守平朝臣(判○北條時宗)

〔東寺百合古文書(百六十一)〕可令早源季直領知相摸下海老名鄕內田在家、幷播磨國矢野庄例名內浦分地頭職(四至堺名字分限載讓狀)事、

右任親父海老名四郞左衞門尉季景法師(法名佛然)文永元年八月廿一日、今年九月廿一日讓狀等、可令領掌之狀、依仰下知如件、

弘安九年十一月廿三日

相摸守平朝臣(判○北條貞時)

陸奧守平朝臣(判○北條業時)

〔古文書類纂(上將軍家下文)〕後伏見天皇正安元年、征夷大將軍久明親王下文、〔近江園城寺所藏〕

將軍家政所下

可令早左衞門尉藤原宗秀領知美濃國石太五里兩鄕、同國津布良庄、下野國長沼庄(古布島者、後家一期之後、可知行之由載後家所帶讓狀、)同國小藥郡、陸奧國長江庄(號南山、檜藤太跡者、後家一期之後、可領地之由載同讓狀、)淡路國守護職、笑原上田兩保、同國東神代鄕西神代鄕、(富永名者、有夜叉一期之後、可知行之由載有夜叉所帶讓狀、)湊村、賀茂鄕、同國內膳庄(有夜叉一期之後、可知行之由載同讓狀、)等地頭職事、

右任亡父左衞門尉宗泰法師(法名覺源)去弘安六年三月廿七日五通讓狀(津布良者、摩尼王一期之後、可知行之由載讓狀、)之守先例可致沙汰之狀、所仰如件、以下、

正安元年十二月六日　　　　案主菅野　知家事

令前出羽守藤原朝臣　別當相摸守平朝臣（花押〇北條貞時）　陸奧守平朝臣（花押〇北條宣時）

〔諸家系圖纂六十耳擧〕譲與（狀曰）　尾張國丹羽郡寂念村内地頭本地分田畠在家等事

上野房静眞

右彼田畠在家等者、最喜先師重代相傳所領也、爰静眞幼少昵近之上、芳契依異于他、彼田畠在家等、永代所譲與于静眞也、至于子々孫々、不可有他妨、仍譲狀如件、

嘉元三年五月廿二日　　　法印最喜（花押）

（裏書云）任此狀令領掌之由、依仰執達如件、

嘉暦三年正月廿一日　　　相摸守（花押〇北條守時）

ゆづりわたす　おはりの國にわのこほりのうち、まやくねんのむらのでんばたさいけふの事

右かのぢとうしきのでんばたさいけうは、ぢみやうゐんの中納言のほうゐんの御坊より、去嘉元三年五月廿二日、まやうまんにゑいたいゆづりたびたる所りやう也、まかるあいだ、ちやくしさゞ坊かうまんに、かの御ゆづりをあひそへて、ゑいたいゆづりあたふるところ也、まつたくたのさまたげあるべからず、のちのために譲狀如件、

正和三年十月八日　　　僧静眞（花押）

〔天野文書〕譲渡　能登國萬行保（〇鹿島郡）東方地頭職事

右地頭職、相副手繼狀并御下知除目等、限永代所譲與于子息七郎眞將也、當保雖為狹少之地、胤成重代相傳私領也、男子一人之外、不可分譲數子、有男子數輩時者、不謂嫡庶、守器量可譲一人、不可譲後家女子（江）所領、無男子之時者、女子（仁天）一人之外、不可分譲數子、女子之跡相傳之仁同前、次永代

不可沽却之、三ヶ條篇目、至于子々孫々、固可守此誡、若雖爲一事、令違犯者、爲不孝之仁、眞將不可知行胤成之跡、於讓與眞將分者、自餘得分親等可申給之、次保內濱田捌段漆坪（坪捌段坪七田）幷公文名橘內屋敷、孫太郞入道屋敷、爲後家分、女房一期之間、所讓與也、一期之後者、可返付眞將之由、載後家分讓狀畢、但於彼一跡分、眞將致違亂煩者、後家永代可申給也、凡於當保者、後家分之外、不可有除、仍爲後日讓狀如件、

建武二年三月十七日　　胤成（花押）

○按ズルニ、眞將ハ胤成ノ二男ニテ此讓ヲ受ケタレドモ、此年七月十四日、胤成ハ眞將ガ己ノ命ニ背クヲ以テ之ヲ奪ヒ、總分ヲ嫡子茂成ニ與ヘ、眞將ニハ竹鼻屋敷等ノ地ヲ分與セリ、

〔忽那文書乾〕左衞門尉重俊與舍弟左衞門尉重虎相論亡父左馬允國重法師（法名西信）跡伊豫國忽那島（付松吉名）地頭職事

右重虎所帶西信讓狀等爲僞書之由、重俊訴申之間被召決之處、如去月十四日和與讓者、西浦者可爲重虎分、東浦者可爲重俊分（於後家幷自餘兄弟等分者、本知行不可有相違之由載之、）云々、此上不及子細、早任代々御下文、且兩方守和與狀、相互無違亂可致沙汰之狀、依仰下知如件、

建長六年三月八日
　　相模守平朝臣（花押）（北條時賴）
　　陸奧守平朝臣（花押）（北條重時）

〔集古文書五十讓狀〕風早禪尼深妙配分狀（大友能直室　豐後家臣志賀太郞助議）

嫡男大炊助入道分　　相模國大友鄕地頭鄕司職

次男宅万別當分　　豐後國大野庄內志賀村半分地頭職（在別注文）

大和太郞兵衞尉分　　同庄內上村半分地頭職（在別注文）

八郞分　　同庄內志賀村半分地頭職（在別注文）

九郎入道分　同庄內下村地頭職（但故豐前前司嘉當寄附院主職也）
女子大御前分　同庄內中村地頭職
女子美濃局分　同庄內上村半分地頭職（在別注文）
帶刀左衞門尉後家分（數子在之）　同庄內中村內保多田名
右件所領等者、故豐前前司能直朝臣、賜代々將軍家御下文、無相違所知行來也、而尼深妙、得亡夫能直之讓、賜將軍家御下文、所令領掌也、依之任能直之遺言、爲孚（ハグヽム）數子等、如此所配分也、然者任均分之狀、無依違可令領掌也、但關東御公事被仰下時者、守嫡男大炊助入道之支配、隨所領多少可致其沙汰也、仍爲後日證文、總配分狀如件、
延應貳年四月六日　尼深妙（花押）

〔諸家文書纂五薩摩〕弘安四年、蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡七隈鄉地頭職配分事
一人薩摩國武光三郎師兼　田地參町
當鄉內（下ハカマ）　一所　七段大內六段（西依）　一所（指爪）　八段半　一所（フチ田）　丁　一所（メキ田）　八段小內五段半（東依）
屋敷二箇所
比伊鄉上乙王丸名內　一字　達成房
二奈木庄井上名內　一字　彌平三
畠地六段
七隈鄉內　一所（武清）　三段二丈
長淵庄內　一所（七下田）　一段　安與　一所　一段三丈（元三段四丈內南依）　鄉由光
右就孔子配分如此、有限佛神事、本所年貢、守先例不可有懈怠之狀如件、
正應元年十月三日　沙彌（在判）

弘安四年、蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡比伊郷地頭職配分事

一人大隅國禰寢彌次郎清親

田地五町　上乙王丸名内　（山崎四）一所　一段　（山崎）一所　一段小　（堤堺）一所　三段半　（中メナ）一所　三段

半　（中メナカ東）一所　三段　（東ソイ）一所　二段六十歩　（下メナ）一所　八段　（コヤウコヤウキ）一所　三段　（林崎）一所　九段

（林崎東）一所　四段　（上ナンチヤウ）一所　丁　（下ナレチヤウ）一所　九段大内一段六十歩（東依）

屋敷三箇所　東吉光名内　一字　刑部左衞門尉

長淵庄内　（モスコモリ）一字　安與名　（與一）一字　六郎丸

畠地一町　下乙王丸名内　（チヤウト町上）一所　二段　（シヤウフサコノ浦）一所　四丈

長淵庄内　（長田下作）一所　一段一丈（元三段内北依）　袈裟丸　（田嶋）一所　二段二丈　同人　（椿本）一所　一段三丈

同人　（帶田細）一所　一段四丈　同人

右就孔子配分如此、有限佛神事、本所年貢、守先例、不可有懈怠之狀如件、

沙彌（在判）

正應元年十月三日　沙彌（在判）

沙彌（在判）

〔東寺百合古文書〕四　讓渡　孫太郎範長所

合

一播磨國矢野庄重藤名地頭職、田畠山林、例名公文職、大僻宮別當、神主祝師職等事、

一同國坂越庄内浦分堤木津村、畠貳町地頭職事、

一同國福井庄東保上村地頭職内、小河原屋敷田畠事、

一備前國光延國富兩名内、屋敷壹所田畠（坪付在別紙）事、

改補

一攝津國頭陀寺地頭職內、友定四郎兩名事、

以上五箇所

右所領等者、範兼相傳、當知行無相違之地也、爰於重藤名地頭職、同例名公文以下所職等參分壹者、依有志、姪源氏代字千所讓渡也、此殘幷所々所帶等者、相副關東六波羅御下知御下文以下手繼證文等、爲家督範長仁永所讓與也、更不可有違亂煩、〇中略

正和二年九月十二日　右兵衛尉花押

〔吾妻鏡〕六文治二年六月廿一日丁卯、爲搜尋求行家義經隱居所、之於畿內近國、被補守護地頭之處、〇中略於伊勢國者、住人插梟惡之心、已發謀叛了、而件餘黨、尙以逆心不直候也、仍爲警衛其輩、令補其替之地頭候也、

〔吾妻鏡〕七文治三年三月二日甲辰、越中國吉岡庄地頭成佐不法等相累之間、早可令改替之由、經房卿奉書到來、仍則被獻御請文、

去月十九日御敎書、今月二日到來、謹令拜見候畢、越中國吉岡庄地頭成佐事、任御定早可令改定候、但彼庄未復本之間、御年貢不式數之由、成佐申之候、重相尋候而、可令改他人候也、以此旨可令洩達給候、賴朝恐々謹言、

三月二日

四月廿三日甲午、周防國在廳官人等言上二箇條、〇中略

一爲所乘高信、久賀、日前、由良號地頭、打開官庫、押取所納米、如保司張行雜事、不隨國衙事、

副進證文等

右件所々者、非指庄號之地、有限國保、勿論之公領也、而天下騷動以後、云領主者、地頭依令牢籠、落居之程所被改補也、〇下略

〔吾妻鏡十三〕建久四年十二月五日戊戌、被收公遠江守義定所領、當國淺羽庄地頭職、以景廉被補其替、今日賜御下文、大藏丞頼平奉行之云云、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年閏二月九日、仙洞御使忠綱朝臣參二品〇政子御亭、〇中略是攝津國長江倉橋兩庄地頭職、可被改補事、巳上院宣條々也、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年閏二月十二日、右京兆〇北條義時相州〇北條時房駿州〇北條泰時前大膳大夫入道〇大江廣元參會于二品御亭、以忠綱朝臣被仰下條々、追可上啓由、被申御返事畢、急速無左右者、定背天氣歟之由、有評議云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十五日、武家背天氣之起、依舞女龜菊申狀、可停止攝津國長江倉橋兩庄地頭職之由、二箇度被下宣旨之處、右京兆不諾申、是幕下將軍〇源頼朝募勳功賞定補之輩、無指雜意而難改由申之、仍逆鱗甚故也云云、

〔承久軍物語一〕つのくに長江倉橋といふ兩庄は、一院〇後鳥羽の御ちやうあい、かめぎくといふ白拍子がちぎやうなるを、地とうこれをこつしよしけるによつて、かめぎくこれをいきどをり、院へそうしなげきけり、これによりて、くはんとうへちよくしをたてられ、もりとを〇仁科が所領返しあたふべき事、かめぎくがちぎやう所の地とうしよく、かいたいすべき事、此二ケ條、すみやかにちよくにをうじ奉るべきよし、左京大夫〇北條義時がもとへ仰下されけり、〇中略仰のおもむき一々にちよくたうせられけるは、先地とうしよくと申事は、いにしへはなかりしに、故う大しやうよりとも卿、平家をうちほろぼしたるけんしやうに、後しら川の院、日本こくのそうぢとうを給はりたるなり、てうてきついたう、六ケねんがあひだ、あるひはおやをうたせ、子をうたせ、あるひはしうをうたせ、いへの子をうしなひたる御家人どもに、くんこうのしな、しなにしたがひて、わかちたびたらんぢとうしよくを、させるざいくはもなくして、よしときが

辭職

はからひとして、あらため申べきやう候はずとて、きよようし奉らざりしかば、君大きにげきりむあつて、その時より、いよ〳〵くはんとうをほろぼさばやとぞおぼしめしける、

〔吾妻鏡 六〕文治二年三月一日己卯、諸國被補總追捕使幷地頭內、七箇國分北條殿〇時政被拜領畢、而深存公平、去比上表地頭職、其上重被付書狀於帥中納言、黃門又付定長朝臣被奏聞之、　二日庚辰、今南石負庄兵粮米可停止之由、昨日帥中納言以使者被傳院宣於北條殿之間、今日所被成進下文也、亦北條殿言上事奏聞之由、左少辨所被示送于帥中納言之狀、黃門遣北條殿云云、

時政申狀、奏聞候畢、七箇國地頭辭退事、尤穩便聞食、總追捕使事可何樣哉、爲遂勸農停止地頭職、無人愁者、旁神妙定爲其儀歟、兵粮米未濟事、又以同前、迎春譴責窮民若爲歟歟、其條又定相計旨候歟、〇中略

三月二日　左少辨

帥中納言殿

七日乙酉、北條殿被申七箇國地頭上表事、兵粮米事、沒官所々事、已經奏聞畢之由、左少辨進奉書於帥中納言、被觸又送其狀於北條殿云云、　時政申狀奏聞畢

一地頭辭退事、爲人愁停止之條、尤爲穩便歟、〇中略

三月七日　左少辨定長

進上　帥中納言殿

〔徵古文書 甲集河內金剛寺文書〕源義兼避狀(建久六年)

謹避進　河內國錦部郡金剛寺御庄天野谷地頭幷下司職事

右於件天野之地頭幷下司職者、依前右大將殿〇源賴朝御氣色、謹所避進之狀如件、

建久六年六月日　源義兼在判

解職

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月廿四日丙午、新熊野領安房國群房庄領家年貢事、有去年未濟之由訴出來、此事及度々之上、至今者暫召放地頭職、點當時得分物、補去今兩年未所乃貢之後、於可返賜否事者、追可有御計之由被定云云、行政奉行之、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月廿五日壬申、今日春日部左衛門三郎泰實被召放美濃國指深庄地頭職、是當庄沙汰人地頭有非法之由就訴申六波羅、雖下召文、泰實不應之、仍註進其趣之間及此儀、即所被仰遣陸奧左近大夫將監許也、

不置地頭

〔吾妻鏡六〕文治二年三月四日壬午、主水司供御所、丹波國神吉依補地頭職、有事煩之由依訴申之、可被免除之旨、被遣御消息於北條殿、因幡前司沙汰之、　六月廿一日丁卯、爲搜尋求行家義經隱居所之、於畿內近國被補守護地頭之處、其輩寄事於兵粮、譴責累日、萬民爲之含愁訴、諸國依此事令凋弊云云、仍雖可被待義經左右、有人愁歟、諸國守護武士幷地頭等、早可停止、但於近國沒官跡者、不可然之由、二品〇源頼朝被申京都、以帥中納言可奏聞之旨、被付御書於廷尉公朝歸洛便宜、〇中略　又縱爲謀反人之所帶令補地頭之條、雖有由緒、可偏止之由、於被仰下候所々者、隨仰可偏止候也、　廿九日乙亥、伊勢國林崎御厨事、爲平家與黨人家資跡、雖加沒官領注文、就大神宮訴申之、不可有地頭之旨被下院宣之間、今日有沙汰、所被停止宇佐美平次實正知行也、〇中略

下伊勢國林崎御厨住人　可令早停止宇佐美平次實正地頭職勤仕神宮課役事

右件御厨者、謀反人家資知行之所也、仍任前蹤爲令致沙汰、以被實正補任地頭職畢、然而依有神官訴、所令停止實正之沙汰也、但今雖令改易其職、自神官令還補本人者、甚以可爲不便之沙汰也、早爲神官之沙汰、可致有限御上分已下雜事之沙汰歟、如件、以下、

文治二年六月廿九日

七月七日壬午、諸國地頭職事、平家沒官領幷梟徒隱住所處之外、於權門家領等者、一々偏止之由所

被申京都也、

〔吾妻鏡 九〕文治五年三月十三日乙卯、被整去十一日院宣御請文云云、

二月十七日御教書、三月十一日到來、兩條之仰、跪以承候畢、〇中略

一熊野御領播磨國浦上庄事

右有限年貢者、湛政令徵納之由、雖見景時代官陳申之旨、動闕怠社役、歎思食次第也、彼御庄一所、枉可令停止地頭職之由、修理權大夫奉書、同拜見給候畢、御評定之趣、不及左右候、早可令停止景時地頭職之由、直可被仰下庄家候也、其後若令對捍申候者、重可加下知候、縱沒官領にて候とも、別御定をば爭可令申左右候哉、〇中略以此旨可令披露給候也、頼朝恐惶謹言、

三月十三日　　頼朝請文

五月廿二日辛巳、板垣三郎兼信有違勅事、仍殊可尋沙汰之由被下院宣之間、今日二品〇源頼朝所被進御請文也、

太皇太后宮御領、駿河國大津御厨地頭兼信不當事、謹承候訖、如此被仰下候之上、自宮仰給て候へば、於地頭職者無左右令改定候訖、〇中略

五月廿二日　　頼朝

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年八月十九日辛丑、板垣三郎兼信依違勅以下積惡被處配科之上、其領所可被改地頭職事、備後國在廳等捧申狀訴土肥彌太郎遠平之不法事、被下院宣之間、兩條御請文載一紙所令言上給也、

一

圓勝寺領遠江國雙侶庄地頭事、不當に不候ば何事之候哉と存候處、於兼信者誠不當に候らん、早可令改易候也、但不當に候ざらむ者を其替に令補候はむと思給候、此條も可隨御定候、一向に可被停止候者、不及左右候、備後國在廳申狀給候畢、相尋子細、追可令言上候也、此旨可令洩達

給候、賴朝恐々謹言、

八月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　賴朝

九月十七日戊辰、去月廿七日院宣到來、民部卿經房所被執進也、條々內、兼信所領遠江國雙侶庄事、

應御旨今日被獻御請文云云、○中略

圓勝寺領遠江國雙侶庄地頭事

件御堂待賢門院御草創、殊不准他寺思食連々佛聖以下闕如、年貢對捍、不便思食兼信被流罪

訖、其替不被補地頭者、旁可宜事歟、

以前條々以此旨可仰遣之由內々御氣色候也、仍上啓如件、

八月廿七日　　　　　　　　　　　　　　右大辨定長

謹上　民部卿殿○經房

御請文云

被仰下候、遠江國雙侶庄地頭兼信、依流罪候不可補其替候之由、謹以奉候訖、以此旨可令洩達給

候、賴朝恐惶謹言、

九月十七日　　　　　　　　　　　　　　賴朝

〔吾妻鏡十一〕建久二年十月二日丁丑、御隨身左府生兼峯、去比進使者、可被停止所領紀伊國三上庄

地頭之由、所訴申也、是任大將御拜賀之由、供奉以降、有功者也、仍任申請之旨、無左右可停止地頭職

之旨、被仰下地頭者、豐嶋權守有經也、可賜替之趣、又被仰有經云云、

〔東大寺要錄二〕權大夫請文東大寺衆徒申、伊賀國阿波廣瀨庄事、任院宣幷寺解之旨、令停止廣綱地頭職候了、下

知狀可被付使者候也、以此旨可令披露給候、義時恐惶謹言、

四月十七日　　　　　　　　　　　　　右京權大夫平在判上

〔吾妻鏡十五〕建久六年十一月四日乙酉、嘉祥寺領長門國棚庄事、守護人妨領家所務之由被仰下之間、此所事、去文治年中、依院宣停止地頭職訖、今更違亂之條招罪科歟、慥可停止之旨、今日所被仰下也云云、　廿五日丙午、伊豫國越智郡被停止地頭職、是殿下〈○藤原兼實〉依可令領承給也、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〈○正治元年〉三月廿三日乙卯、中將家〈○源頼家〉依有殊御宿願、大神宮御領六箇所被止地頭職、其所々内、謀叛狼藉之輩出來者、自神宮可被搦出、且又可觸輩案内之旨、被仰遣祭主之、而彼六箇所内、尾張國一楊御厨自神宮遣雜掌可追出地頭代之由加下知、撿。封。得。分。之旨、令風聞之間、故右大將殿〈○源頼朝〉令薨去給最前、及件狼藉之條、頗爲遺恨、尤可有御尋者歟之由、同所被仰遣也、御奉免狀書樣、

御神領　遠江國蒲御厨　尾張國一楊御厨　參河國飽海、本神戸、　新神戸　大津神戸　伊良胡御厨總追捕使

右件所々地頭等、依別御祈願、所被停止彼職候也、鎌倉中將殿御消息如此、仍執達如件、

建久十年三月廿三日　兵庫頭〈○大江廣元〉

祭主殿

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〈○元久元年〉八月廿一日辛亥、石清水八幡宮領河内國高井田事、爲將軍家〈○源實朝〉御祈禱所、被止地頭訖、可爲宮寺沙汰之由、今日被仰遣云云、

〔吾妻鏡十九〕承元四年八月十二日丁卯、信濃國善光寺地頭職者、故右大將軍〈○源頼朝〉御時、鎭狼藉可令安堵住侶之由、寺家就望申之、可被仰付便宜輩之旨有御沙汰之時、長沼五郎宗政申請云、吾身者先世罪人也、爲値遇結緣欲被抽補當寺生身如來地頭者、仍依請之由、賜御下文之後、歷年記之處、寺家地頭還成煩、早可被停止之趣、本所御文到來之間、可停止彼職之由、昨日被成政所御下文、今日被申御報、廣元朝臣爲奉行云云、

〔東大寺要錄二〕可令早停止東大寺領周防國椹野庄地頭職事

右如寺解者、承久亂逆之時、當庄住人等、無指科之處、被補地頭之條、難堪次第也、且小郡幷賀河鄕者、當庄一所也、而右大將家御時、建久九年四月、白松藤二資綱、雖掠給地頭職、依寺家之訴、同五月召返御下文、下給寺家畢、〈奉行盛時云々〉如時廣法師陳狀者、貞應元年給地頭職之由雖載之、根元之子細、分明不申之、仍寺家不申非無其謂歟者、早任先例、停止地頭職之狀、依鎌倉殿仰下知如件、

天福元年七月九日　武藏守平在判

相模守平在判

東大寺領周防國椹野庄地頭職停止事

右任去七月九日關東御下知狀、宜停止之狀如件、

天福元年八月廿三日　掃部助平在判

駿河守平在判

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年十月五日己丑、被經評議、爲鎭南都騷動、暫大和國置守護人、沒收衆徒知行庄園、悉被補地頭畢、　十一月十四日丁卯、匠作〈時房〉〇北條武州〈泰時〉〇北條著評定所給、其衆參進、南都事有沙汰、衆徒靜謐之間、止大和國守護地頭職、如元可被付寺家云云、

總地頭兼郡地頭

〔薩藩舊記前集三〕總地頭所下、先達延慶所　奉免冠嶽權現御寶前薩摩郡內所々事

一所成永名ノ內せりか野壹曲

一所太郎丸名內那良原壹曲

一所本若松名內加治妻迫壹曲

一所富永名內川骨山常荒壹曲

右件所々者、或依本願主奉寄之狀、或任故總地頭之免判之旨、所令奉免也、住僧等宜致式日之勤、可

奉レ祈二請天長地久一由之狀如レ件、以下、

寛元四年二月八日　　總地頭兼郷地頭左兵衛尉花押

地頭兼總追捕使

〔忽那文書乾〕大佛殿避狀御判〇花押略

忽那島松吉內末重名地頭兼西浦總追捕使次郎兵衛入道性蓮中、各別相傳田畠幷總追捕使得分物等事、訴狀副二具書一遣レ之、所レ申無二相違一者、早令レ停二止違亂之儀一、可レ被二糺返抑留物一候也、仍執達如レ件、

元應元年六月五日　　僧圓成奉

能勢判官代殿

地頭兼公文職

〔東寺百合古文書六十七〕關東御下知案

若狹國太良庄雜掌僧定宴與二地頭若狹四郎忠淸代定西法師一相論之條々〇中略

一以二公文給一引二募地頭給一否事〇中略

公文職事、承久以前、地頭兼帶之間、經二年序一畢、今更非二沙汰之限一矣、至二公文給田一者、重被二尋究一可レ有二左右一矣、以前五箇條、依二鎌倉殿仰一、下知如レ件、

寶治元年十月廿九日　　左近將監平朝臣在御判北條時賴〇

相模守平朝臣在御判北條重時〇

地頭兼神主

〔諸家文書纂九狩野〕加賀國福田庄菅浪郷總領地頭兼菅生社神主狩野彥五郎賴廣、爲レ致二軍忠一馳參、今月二十一日、仍以二此旨一可レ有二御披露一候、恐惶謹言、

元弘三年六月二十五日　　藤原賴廣承了在判

進上　御奉行所

領家兼地頭

〔色々證文〕太政官符　加賀國

應レ令下正五位上行大外記兼助敎備後守中原朝臣師利相傳領二知當國倉月庄〇河北郡領家地頭兩職一

沙彌在判

弘安四年、蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡比伊鄕地頭職配分事

一人大隅國禰寢彌次郎淸親

田地五町 上乙王丸名內 山崎田一所 一段 山崎一所 一段小 堤崎一所 三段半 中メナ一所 三段半 中メナカ東一所 三段 東ソイ一所 二段六十步 下メナ一所 八段 コヤウコナウキ一所 三段 林崎一所 九段

林崎東一所 四段 上ナンチヤウ一所 丁 下ナンチヤウ一所 九段大內一段六十步東依

屋敷三箇所 東吉光名內 一宇 刑部左衞門尉

長淵庄內 モスコ堀一宇 安與名 典一一宇 六郎丸

畠地一町 下乙王丸名內 チヤウト町上一所 二段 シヤウフサコノ浦一所 四丈

長淵庄內 長田下作一所 一段一丈元三段內北依 袈裟丸 田嶋一所 二段二丈 同人 榑木一所 一段三丈

同人 帶田細一所 一段四丈 同人

右就二孔子一配分如レ此、有レ限佛神事、本所年貢、守二先例一不レ可レ有二懈怠一之狀如レ件、

正應元年十月三日 沙彌在判

沙彌在判

〔東寺百合古文書 四〕讓渡 孫太郎範長所

合

一播磨國矢野庄重藤名地頭職、田畠山林、例名公文職、大僻宮別當、神主祝師職等事、

一同國坂越庄內浦分堤木津村、畠貳町地頭職事、

一同國福井庄東保上村地頭職內、小河原屋敷田畠事、

一備前國光延國富兩名內、屋敷壹所田畠坪付在二別紙一事、

ことを待ずしてまるべきなり、○略註然るに文治よりこのかた、地頭はうけはりたる職掌のごとくなりければ、其眼代も、をのづから勢ひを得るさまとはなりしとみゆ、眼代は即地頭代にて、常にはこれを代官ととなへしが、いつとなく定まれる稱へとなりて、足利殿のなか頃よりこなたには、大かた代官とのみいふことゝなりぬ、

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月十九日辛酉、依被重上宮太子聖跡法隆寺領、地頭金子十郎妨事可停止之趣、去年下知給之處、猶不靜之由、寺家帶院宣訴申、遣雜色里久、可止鵤庄押領之由及沙汰、○中略

下　播磨國鵤庄住人　可令停止金子十郎妨一向從領家所勘事

右件庄可令停止金子十郎妨之由、去年依院宣令下知畢、而金子十郎入置代官令押領庄之由、重所被仰也、甚以不當之所行也、自今以後、早可令停止其妨、若猶不用者、爲召誡其沙汰人、所下遣使者里久也、早可令停廢彼妨之狀如件、

文治三年三月十五日

〔吾妻鏡 九〕文治五年二月卅日壬寅、長門國阿武郡者、爲沒官領內之間、爲勳賞雖賜土肥彌太郎遠平、爲御造作杣取可去進地頭職之由依有勅定可退出之由被仰之處、遠平代官于今居住之由及遠聞之間、重被遣御書、

下　長門國阿武郡前地頭遠平代官可令早退出郡內事

右件地頭職可令停止之由、被成下院廳御下文之處、遠平代官于今淹留、致濫妨之由有其聞、所行之旨、甚以不當也、早可令退出郡內之狀如件、以下、

文治五年二月卅日

〔明月記〕建永元年五月四日、今日江州新地頭代官、送書札幷牛馬等、來十二日、於京可獻之由以忠弘令答、

〔壬生家文書 一〕端缺

一可同令停止地頭代官等所飼馬事

右正地頭分所飼馬壹貳疋者、百姓不可及訴訟、至于代官等馬者、可令停止也、但地頭下着之時、芻薪精進雜菜、如此之入物勤仕之條、非指煩費、此外於子息及代官等經廻之雜事者、可令地頭各致其勤也、○中略

承元元年十二月日　　惟宗花押○以下四人署名略

〔吾妻鏡 十九〕承元五年○建暦元年六月七日丁亥、越後國三味庄領家雜掌、依訴訟參向、令寄宿大倉邊民屋處、今曉爲盜人被殺害、晴之後、左衛門尉義盛尋沙汰之、稱敵人召取件庄地頭代、仍其親類等愁緣者女房、内々訴申尼御臺所○源頼朝室政子御方、而義盛沙汰、不相違之由被仰出之、申次駿河局及突鼻云云、

〔古文書類纂 上執達狀〕後堀川天皇嘉祿三年、鎌倉幕府執達狀、〔大和春日神社所藏〕

大和國豐國庄惡黨狼藉事、地頭長布施四郎重康訴狀、副代官申狀如此、可糺訴子細之由度々被仰之處、不應召致濫行之條、罪科不輕、甚以奇恠也、早言上事由於殿下○藤原家實御所、前下司行季預所長忠五師以下與力之輩、不日可令召進關東也、更不可及遲怠、兼又於地頭代光重者、且可令安堵其身之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

嘉祿三年九月七日　　武藏守泰時花押○
　　　　　　　　　　相模守時房花押○

掃部助殿並修理亮殿

○按ズルニ、掃部助ハ六波羅南方北條時盛ニテ、修理亮ハ六波羅北方北條時氏ナリ、

〔常陸國大田文〕吉田文書

二里八丁九文半〇中略

右酒戸吉治田撿注地文、段丁注進如件、

安貞二年十一月日　　地頭代在判

社田所權祝大舍人在判

撿注御使紀在判

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年九月十一日丁丑、諸國地頭等、以山僧幷商人借上輩、補代官事、一切被停止、是爲貪當時之利潤、不顧後日之煩、以如此輩補代官之間、偏忘公物備、只廻私用計之由依有其聞也、

〔徵古文書甲集山城〕報恩院文書(宇治郡醍醐村醍醐寺塔頭)

下　醍醐寺領越前國牛原庄住人等

仰三箇條〇中略

一可被改易地頭代眞念由事

右盛景則備度々訴狀四通八十五ケ條眞念有非法之旨訴申之上、百姓皆逃散之間、可被改易之由申之、眞念亦進覽條々陳狀、無非法之旨申之者、如眞念陳狀者、或令承伏、或雖相論、令煩庄民之條、頗過法歟、仍改易眞念、爲向後、就訴陳狀可令計成敗之由、所被仰下地頭也、〇中略

寬元元年七月十九日　　武藏守平朝臣花押

〔集古文書二十六下知狀〕寶治二年下知狀和泉國泉南郡久米田寺藏

和泉國久米多寺別當僧祐圓與同國山直鄕四箇里地頭代沙彌西生相論當寺免田四町參段餘事

右對決之處、如祐圓申者、當寺免田貳拾陸町餘、散在六箇鄕、代々國司無妨、承久以後、爲守護人逸見入道奉行、被尋在廳之時、承久以前、往古本免之由進勘狀之間、六箇鄕地頭去退畢、

〔貞應弘安式目〕諸國郡鄕庄園地頭代、且令存知、且可致沙汰條々、

一重犯　山賊　海賊　夜討　强盜　一殺害付刃傷人事　一竊盜事　一放火人事　一、牛馬盜

人人勾引事　一取流土民身代事　一諍論事　一土民去留事　一博奕輩事　一奴婢相論事

一密懷他人妻事　一可致撫民事　一令書起請文間事

以前條々守此旨、且致其沙汰、且可存知、雖一事違背此旨、於致非法者、可改所職也、沙汰人等、可注申

地頭代之非法也、若憚權威、恐地頭代、至見隱聞隱者、可爲同罪、以實正令注申之輩者、可有勸賞也、兼

又於大事沙汰者、寄合傍鄕地頭代、沙汰人名主等、相互加談議、可致其沙汰之狀、下知如件、

建長五年十月一日　相摸守（○北條時賴）

陸奧守（○北條重時）

〔吾妻鏡四十六〕建長八年（○康元元年）十二月廿日丁丑、就六波羅問注、條々有被仰遣事、（○中略）

一可書正地頭交名事

其庄地頭（某土）載（天）、不書正地頭之間、聊涉不審歟、地頭（某）代官（某土）、正員代官、共以可被書之矣、

〔集古文書二十七下知狀〕弘安元年下知狀（安藝國佐伯郡嚴嶋藏）

安藝國嚴嶋社供僧等申、播磨國神部庄地頭代定章對捍引攝用途米由事

右如土御門入道大納言家所執給之定章陳狀者、彼米柒拾參石內、伍拾捌石者、河野邊入道慈心抑

留之間、私雖加催促、不叙用之上者、可爲彼慈信沙汰、所殘拾伍石者、早可辨濟之旨雖載之、定章寄於

先代官慈心對捍之條無其謂、然則未進柒拾參石者、守關東度度御下知狀、定章早可令究濟之狀如

件、

弘安元年十月七日

左近將監平（花押○北條時國）

陸奧守平（花押○北條時村）

〔集古文書 二十五 召符〕六波羅召符 伊豫國越智郡三島社藏

伊豫國三嶋大祝安俊代安衡申、鴨部庄住人祐賢、濫妨日御料田等由事、重申狀如此、來月廿日以前、可催上狀如件、

正安二年三月十八日　左近將監 花押 〇北條宗方

前上野介 花押 〇北條宗宣

地頭代

〔東寺百合古文書 一〕常光院領備後國因嶋內三津庄雜掌了啓與地頭代賴圓相論寺用靈事

右就訴陳狀、擬有其沙汰之處、今年四月日、兩方致和與畢、如雜掌狀者、備後國因嶋內三津庄寺用靈間事、自往古爲地頭代沙汰、令運上于寺家之處、先地頭代萱山九郎入道淨果知行之時、彼抑留分、可被糺返之由、於武家雖訴申、令和與之上者、向後每年參拾石京定、寺家斗定、并兵士代用途陸百文、爲地頭代沙汰、任先例、直可被運上于寺家、此上者、向後止沙汰了、更不可有異儀云々、〇中略

正安三年五月十二日　前上野介平朝臣 在判 〇北條宗宣

〔集古文書 二十七 下知狀〕正安三年下知狀 伊豫國越智郡三嶋社藏

伊豫國御家人三嶋大祝安俊代子息安胤與同國恒弘東方地頭代重明相論貞光名田地貳段事

右番訴陳之處、如今年十月十五日和與狀者、道生鄕內三宅里卅四坪貳段、恒弘名東方地頭代重明令押領之由就訴申、雖番訴陳、於彼坪貳段者、本自不押領之上、向後不可相綺之由出狀之上者、兩方以和與之儀、上〇上恐脫字 沙汰事口此上者、不及子細之狀如件、

三年十一月七日　左馬助平朝臣 花押 〇北條基時

陸奥守平朝臣 花押 〇北條宣時

〔集古文書 二十七 下知狀〕嘉元二年下知狀 伊豫國風早郡善應寺藏

宛補孫四郎跡名田畠事　　伴出雲房所

右孫四郎依預御勘氣、依被收公名田畠、被宛召者作毛畢、〇中略有限御年貢以下御事、任先例可致其沙汰之狀、依仰下知如件、

嘉元貳年十一月日　　地頭御代官　　左衛門尉菅原花押

〔新編追加雜務〕神社佛寺條

一若宮供僧訴申、相摸國長尾地頭備中前司賴綱事、其身雖爲在京、以子息進置代官之間、直可被尋彼子息、

〔沙石集七〕无嫉妬之心人事

遠江ノ國池田ノ邊ニ庄官有ケリ、彼妻極タル嫉妬ノ心ノ者ニテ、男ヲ取ツメテ、アカラサマニモ差出サズ、處ノ地頭代鎌倉ヨリ上テ、池田ノ宿ニテ遊ケルニ、爲見參宿ヘ行ントスルヲ制シテ不許、〇下略

〔相馬文書一〕左少將花押

陸奥國田村三川前司入道宗猷女子、七草木村地頭藤原氏代備前房超圓、今月二日、令馳參御方候、於向後者、可致軍忠候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年六月五日　　地頭代超圓

進上　御奉行所

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿七日乙未、下河邊庄司行平爲使節上洛、又重被申京都條々、〇中略

一所々地頭輩事

以前既面々含子細畢、若於不拘賴朝成敗輩事、隨被仰下可加治罰事、

右條々存公平所令言上也、

文治三年八月廿七日

〔吾妻鏡八〕文治四年四月十二日戊寅、院宣等到來、〇中略

院宣云　諸國庄園地頭等、國者令隨宰吏、庄者可隨領家之由、或成進下文、或可加下知之旨、再三令申給畢、然而自所々如令申訴者、只以云補地頭、偏如押領庄家、貴賤上下、徒疲愁歎、神社佛寺鎭抱訴訟、兆民之歎、猶爲天責、何況於佛神乎、〇中略　但地頭之中、依其性之好惡、有其勤之輕重云云、然者能尋捜子細、隨其勤否、改易無勤者、抽賞有勤輩者、偏恣奸謀、直表勤節、一向於不用領家之輩者、可被處罪科也、〇下略

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米地頭未濟事、頻有職事奉書、〇中略今日令注進京都給、因州〇大江廣元幷盛時、俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事〇中略

志摩國答志嶋、和淳院　菅嶋、本宮御領　佐古嶋、不知行所也、其中菅嶋、佐古嶋地頭不分明、若依爲所々小名、獨不得其名所歟、此外所々下文上、相副請文、

〔徵古文書乙集常陸〕常陸國總社文書　總社造營役所地頭等請文目錄（文保三年）

常陸國總社造口役所地頭等請文（　）

一通、大枝三分二地頭代左衛門三郎請文、　一通、小河庵澤兩鄕地頭宍戶七郎左衛門尉（　）　一通、竹原鄕地頭彌七請文、　一通、河俣鄕地頭次郎太郎請文、　一通、上曾鄕地頭上曾三郎請文、　一通、佐都社地頭備中守請文、　一通、口口鄕地頭孫四郎請文、　一通、野寺鄕一分地頭次郎三郎請文、

一通、口幡四郞左衛門尉請文、　一通、弓削田木谷兩鄕地頭宍戶四郎左衛門尉（　）　一通、野寺鄕一分地頭宍戶四郎兵衛尉（　）　一通、志筑鄕大枝鄕地頭宍戶和泉前司（　）　一通、筑波社三村口地頭小田常陸前司（　）　一通、田余鄕地頭常陸大掾請文、　一通、大橋鄕給主稅所左衛門入

道請文、一通、吉田社沙汰人臼根三郎入道請文、一通、小幡管間所郷地頭藤原氏請文、一通、小井戸郷地頭等請文、(違署)、一通、大橋郷地頭所請文、(違署)、以上十九通

右目六如件

文保三年□□廿日

〔沙石集三〕美言有感事

一下總國ノ或地頭、領家ノ代官ト相論ノ事アリテ、鎌倉ニテ對決ス、泰時(○北條)ノ御代官ノ時ナリ、重々ノ訴訟ノ後、領家ノ方ニ肝心ノ道理ヲ申立ル時、地頭手ヲハタト打、泰時ノ方ニ向テ、荒負ヤト云時、座敷ノ人ドモ、ワツト笑ヒケル時、泰時打頷キテ、イミジク負給ヌル物哉、泰時御代官トシテ年久成敗仕、未如此事ヲ承、哀レ負ヌルト聞ユル人モ、叶ワヌ物故ニ、一言ヲ陳ジ申習ナルニ、我ト負給ル事、珍シク侍リ、前ノ重々ノ訴陳ハ、一往サモト聞ユ、今領家ノ御代官ノ被申處、肝心ト聞ユルニ隨テ、陳狀ナク負給事、返々イミジク聞ヘ侍リ、正直ノ人ニテ御座ケリト、打涙グミテ感ジ被申ケレバ、笑ツル人々、皆ニガリテゾ見ヘケル、

〔愚管抄七〕武士將軍をうしなひて、我身はおそろしき物もなくて、地頭々々とて、みな日本國の所當とりもちたり、院の御ことをば、近臣のわき地頭の得分にて、こそぐればゑますと云事なし、武士なれば、當時心にかなはぬ者をば、おれ〳〵とにらみつれば、手むかひするものなし、只心にまかせてむとひしと案じたりき、今は見ゆめり、

〔今物語〕此上人(○覺□)文のうたに

世中に地頭ぬす人なかりせば人の心はのどけからまし、とよみて、我身は業平にはまさりたり、春の心はのどけからましといへる、何條春にこゝろのあるべきぞといひけり、

〔古今和歌集春一〕なぎさのゐんにて櫻をみてよめる　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

〔伯耆之卷〕翌年〇元弘三年二月始比にや、自京都供奉仕ける成田入道を召て被仰下けるは、思召立る事あり、此番衆の中に、誰をか可有御賴と勅定有ければ、土屋又四郞と申者を召て參る、以六條少將殿〇忠顯を、汝を賴被思召由被仰下ければ、小分限者にて難叶候、但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郞長高と申者こそ、弓箭を取ては樊噲張良にも劣らじと思仁にて候、其上家富、一族も多く、手柄の者共にて候、是を可有御賴候、近國には自是外には候はずと申て御前を罷立ぬ、大番勤て候ける地頭御家人等の中に御志有者多かりければ、彼等に如前有御尋ければ、廿四人迄如土屋ぞ申ける、借は子細有とて、長高を賴みに被思召けり、六條少將忠顯を召て、奈和庄地頭村上又太郞長高を、彌可有御賴由勅定有ければ、〇下略

〔花園院御記〕正中二年十二月一日丁丑、經顯參、申曰、〇中略播磨國伊和西鄕定資知行、而有子細申入之、與地頭和與、被下院宣、而昨日隆蔭知行、西細工所內田地掠之、與地頭和與之由申入申院宣、其趣被仰武家也、此事如何、定資已盜犯他人知行之田地、和與地頭云々、不及一言之御尋被下院宣之段、殊歎入、但昨日聞此由、以經顯申子細之處、被召返院宣云々、隆蔭造意之企、不ノ御沙汰之趣、失面目之上、如此亂惡事、無不審被思食歟之間不被尋下歟、然者傳奏可辭申、又奉公有恐歟、已失生涯了、此上者又執權事、可被仰他人歟之由申之、子細等多々不能記、

〔沙石集六〕芳心有人之事

一武州ニ世間豐カナル地頭アリ、先世ノ布施ノ因緣ニヤ、福德ノアル上、慈悲モ深ク、芳心アリト聞ヘ、洛陽ノ人トカヤ承シ、近所地頭不諧ニシテ所領ヲ年々賣ケルヲ、度々ニ皆買取テケリ、サテ彼地頭、世間モ衰エ、竟ニ身マカリヌ、只一人有子息ニ、財寶モ所領モナケレバ讓ニ不及、ヒタスラマドヒ者ニテゾ侍ケル、サスガ一門廣キ者ニテ、親キアタリニ通ヒアリキテ命ヲ續ケリ、其モ皆

小名ナレバ、哀ミナガラ思イ當ル事迄ハナカリケリ、

〔太平記 十二〕公家一統政道事

總ジテ此君笠置ヘ落サセ給シ剋、解官停任セラレシ人々、死罪流刑ニ逢シ其子孫、此彼ヨリ被召出、一時ニ蟄懷ヲ開ケリ、サレバ日來誇武威、無本所ヲ權門高家ノ武士共、イツシカ成諸庭奉公人、或ハ走輕軒香車後、或跪靑侍挌勤前、世ノ盛衰、時ノ轉變、歎ニ叶ハヌ習トハ知ナガラ、今ノ如ニテ、公家一統ノ天下ナラバ、諸國ノ地頭御家人ハ、皆奴婢雜人ノ如ニテ有ベシ、哀何ナル不思議モ出來テ、武家執四海權世ノ中ニ、又成カシト思フ人ノミ多カリケリ、

古事類苑

官位部四十三

足利將軍

足利尊氏、光明天皇ヲ擁立シ、建武三年征夷大將軍ニ拜任シテヨリ、子孫之ヲ世襲シ、義詮、義滿ヲ歷テ義昭ニ至ル、世ヲ累ヌルコト十五ニシテ、年ヲ閲スルコト二百十ナリ、尊氏、義詮ハ、正二位權大納言ヲ兼チシガ、後ニハ從一位ノ大臣ニ至ルモノアリ、而シテ義滿ガ、始テ源氏長者、奬學淳和兩院別當、馬寮御監タリシヨリ以來、將軍タル者ハ、之ヲ兼ヌルヲ以テ例トス、

〔運步色葉集 久〕公方(クホウ)

〔饅頭屋本節用集 久人倫〕公方(クバウ)

〔書言字考節用集 四人倫〕公方(クバウ)家(ケ)(鹿苑院義滿公准二攝家一之後、斥二將軍家一云レ爾、)

〔增補下學集 上一人倫〕大樹將軍(ジユシヤウグン)(云二公方一也)

〔貞丈雜記 二人品〕一公方と申號は、貞衡云、公方と申は、院の御所と御同座の御位也、院の御所と申は、帝王の御位をすべり給ふを申也、古世上の亂えづまり靜になりける時、天子より尊氏卿江公方の號御免ありしに、當時いまだ世上一統に治らず候、公方の號を蒙り候へば、甲冑を帶する事ならず候、世上こと〴〵く平になり候迄は、公方の號を止られ、將軍號ばかりにて、さしをかるべき旨、奏聞ありければ、勅諚出て二たびかへらざる事なれば、公方號は尊氏へあづけ置給ふよし、仰られしにより、尊氏卿は公方號は稱せずして將軍號ばかり也、二代め義詮公の時も同前、三代め義滿公に至て、始て公方號を夢て稱せられし也云云、又或說に、義滿公十歲の時、御父義詮公にお

宣下

くれ給ひし時、細川武藏守賴之〈法名常久〉貞忠を盡して、後見し奉りて、尊氏卿よりこのかた、一統せざりし天下を泰平に治め、静謐になれり、賴之死去の後、義滿公おごり心出來て思ひ給ふは、公家には攝家と云棟梁あり、沙門には門跡と云棟梁あり、武家ばかりには棟梁なし、萬事を治る法、帝王に一等下して、攝家に准じて大納言までをめしつかひ、官位は太政大臣從一位に到りて、武家の棟梁たるべき家を給り候へと、奏聞し給ひければ、公方と云號を下され、望の如く勅許ありて、此時よりして公方の號は始りけるとぞ申傳ふる、○註略

一公方と云號、將軍義滿公の時、天子より勅許ありしと云說は誤なるべし、舊記に其事會而見えず、鎌倉時代既に公方と云稱はありし也、其比公方といひしは、今時公義と云に同じ、下より上をうやまひ尊ていふ詞也、勅許にもあらず、將軍の自稱にもあらざる也、太平記卷十〈鹽飽入道自害ノ條〉云、私の眷養にて、公方の御恩をも蒙らねば云々、同卷廿五〈京勢重テ南方發向ノ條〉云、公方の催促をも不相待、我先にと天王寺へぞ向ける云々、同卷三十五〈北野通夜物語ノ條〉わが身の爲には、いさゝかなる事をもせずして、公方事には千金萬玉をもおしまず云々、是皆公方と云は公義と云事也、是太平記の時代は、義滿公よりもはるかに以前の事、鎌倉時代なり、

〔難太平記〕貞氏讃岐入道殿と申、其御子にて大御所〈○足利尊氏〉錦小路殿〈○足利直義〉は、わたらせ給ふ也、

〔貞丈雜記〈二人品〉〕一大御所と云號は、將軍家の御隱居を申奉る也、大御所の號は、仙洞御所に〈天子の御隱居〉也准ずる號也とぞ申傳へたる、此號尊氏公より三代め、義滿公より始る由、今川了俊の〈伊豫守貞世〉書れたる、難太平記に見ゆ、

〔將軍宣下三十一度儀不同次第〕一室町殿十五代の間の事

尊氏、義詮、義滿の三代は、南北兵亂の中なれば、たゞ宣下ありし由にて、其儀は備らずと見べし、義持、應永の始に將軍に補し給ひし時、其儀初て備る、これ室町家宣下の儀を行はれし初例なり、義

量、義教二代の事又同からず、其儀を備へらるゝに及ばずと見へたり、義勝の時に、義持の例を用ひられ、義政、又義持、義勝の例を用ひられしと見ゆ、是より後義尙、義植、義澄、義晴、義輝、義榮、義昭七代の間、天下の大に亂れしかば、其儀を行はるゝに及ばず、

謹按、賴朝卿の時の儀、後代の例に同じからざる歟、官使わづかに廳の官人たり、是一ッ、居ながら關東にて、宣旨を承らる、是二ッ、拜賀の儀に及ばず、是三ッ、鶴岡の神殿にして、官使をむかへらる、是四ッ、宣旨を請取る所の人甲冑を帶す、是五ッ、但し自ら束帶し、宣旨の函に砂金をいれて、歸されし事は、永く武家の佳例となりたる也、又室町殿十五代の中に、大儀を備て宣旨をうけ給ひしは、わづかに三代なり、いづれも京都に御座ありしかば、官使其亭にゆきむかひて、位記宣旨を參らせ、堂上の人々、皆々參賀の事ありしなど、これまた鎌倉の例に同じからず、

〔寶篋院殿將軍宣下記〕延文三戊戌年十二月十八日之午剋、爲勅使以日野時光、征夷大將軍〇足利義詮宣旨也、有御頂戴、同廿二日、御參內之品々、〇中略

一同廿二日、卯剋御車幷諸侍之先ニ乘、騎馬之事、〇人名略之 都合三十騎二行ニ乘、右四脚御門ニ伺公シ、奉待御成也、〇中略

一其次ニ御沓役佐々木新藏人秀詮 征夷將軍之宣旨秀詮請取之

一其次ニ御車牛二疋、御牛飼六人、御車御跡左右供奉、步行十五人組布衣也、〇人名略之

一其次ニ輿 將軍御連枝鎌倉殿也參議從三位兼左馬頭源基氏

一其次ニ輿 〇武衞也中略

一其次ニ細川兵部大輔時氏 〇以下人名略之

一御劍之役　澀川式部大輔直保

一御太刀之役　吉良左近將監爲貞

一御沓　佐々木新藏人秀詮渡ス、今川兵部大輔賴近請取なをす也、此外平侍入道集御所之御警固、都合其勢九千四百五十餘騎、

〔太平記三十四〕宰相中將殿賜將軍宣旨事

去程ニ延文三年十二月十八日、宰相中將義詮朝臣、二十九歲ニテ征夷將軍ニ成給フ、日野左中辨時光ヲ勅使ニテ、宣旨ヲ下サレケレバ、佐々木太郎判官秀詮ヲ以テ、宣旨ヲ請取奉ル、天下ノ武功ニ於テハ、申ニ不及トイヘドモ、相續シテ二代忽ニ將軍ノ位ニ備リ給フ、目出カリシ世ノ様シ也、抑此比將軍家ニ於テ、我ニ增タル忠ノ者アラジト、臂ヲ振フ輩多キ中ニ、秀詮宣旨ヲ請取奉ル、面目身ニ餘ル、其故ヲ開バ、祖父佐渡判官入道道譽、去元弘ノ始、相摸入道〇北條高時ガ振舞惡逆無道ニシテ、武運已ニ傾ベキ時至ヌトヤ見タリケン、平家ヲ討テ、代ヲ知給ヘト、頻ニ將軍ヲ進メ申セシガ、果シテ六波羅、尊氏卿ノ爲ニ亡ビニキ、然共四海尙亂テ一十餘年、其間ニ名ヲ高クセシ武士共、宮方ニ參レバ、又將軍方ニ降リ、高倉禪門〇足利直義ニ屬スルカト見レバ、右兵衛佐直冬ニ與力シ、身ヲ一偏ニ決セズ、道譽、將軍方ニシテ、親類大略討死ス、中ニモ秀詮ガ父源三判官秀綱、去ル文和二年六月ニ、山名伊豆守ガ謀叛ニ依テ、主上〇後光嚴帝都ヲ去セ御座シテ、越路ノ雲ニ迷セ給フ、爰ニ新田掃部助、山名ガ謀叛ニ節ヲ得テ、堅田浦ニテ君ヲ襲奉シ時、秀綱返シ合セ命ヲ輕ズ、其間ニ主上延サセ御座ス事、偏ニ秀綱ガ武功ニ依テ也、其忠他ニ異也トテ、秀詮ヲ撰出サレケルコソ、是ハ建久ノ古、鎌倉右兵衛佐賴朝朝臣、武將ニ備リ給シ時、鶴岡ノ八幡宮ニテ三浦荒二郎宣旨ヲ請取奉リシ例トゾ見ヘシ、

〔薩戒記〕正長二年〇永享元年三月九日乙卯、今日左馬頭殿〇足利義敎元服給了、加冠尾張守持國也、有禁色宣下、上卿萬里小路大納言時房云云、　十五日辛酉、傳聞今日被行小除目、是左馬頭殿任參議左近中將給故也、又征夷將軍事被宣下、雖可載除目、依佳例被宣下官云云、任人參議源義敎、今日以宣字被改敎字、左

近中將源義敎、右近少將源通行云云、參議四條宰相隆夏朝臣被取闕云云、此人未奏慶也、上卿按察大納言（資家）參議不參、仍頭大辨忠長朝臣書也、勅任一紙也、參議奏任別紙一枚、左近中將、奏任一枚（已依公卿也、）右少將源通行也清少納言宗業眞人中將少將、可爲一紙歟之由、雖申云云、先任參議次中將之分也、然者依公卿別紙勿論也、

〔康富記〕文安六年（○寶德元年）三月二十一日辛丑、早旦詣新四位史亭對面、官務職還補事、幷氏長者管領事、以去十八日付被宣下之、室町殿（○足利義政）御執奏也、十八日被申、其日卽被宣下之、傳奏（中山）辭退之時分也、長橋局奉書、被下頭左大辨之間、左大丞兩通被書出云々、披見了、（○中略）抑今度官務改動事者、室町殿來月有御元服、卽可有將軍宣下、任近例可爲官方宣旨也、晨照宿禰、嘉吉二年、慶雲院殿宣旨持參、不快被思食之間、爲被替例之故、如此有御執奏云々、征夷將軍宣旨事、或除目、或宣下也、雖爲宣下、多分外記方奉行之、木曾義仲補之時、爲官方宣旨、其後又度々爲外記方之沙汰、然而應安度、慶雲院殿（○足利義詮）將軍宣旨、官務兼治宿禰奉行之、勝定院殿（○足利義持）御代、應永儀、直枝宿禰申沙汰之、其後長得院殿（○足利義量）御代故四位史爲緒宿禰奉行之、自應永廿已爲官務之故也、爰正長元年、普廣院殿（○足利義敎）御代始、將軍宣下之時節、旣爲緒宿禰參陣之處、長得院殿儀、奉行官務御不快之由、依訴申、俄被退爲緒宿禰、以直枝宿禰、被還補官務職了、奉行不快之沙汰、官務吉凶之訴陳、件年初度歟、普廣院殿有御事了後、慶雲院殿御昇進奉行、又晨照宿禰也、然者御兩代之近例、可申不快歟、就之此御沙汰令出來、仍及官務改動之儀、武家有御執奏者也、將又先年北野社御遷宮時、畠山爲管領職有執奏、長興宿禰被補官務了、其年中管領職替時、細川又爲管領被執奏、晨照宿禰還補、事至今者也、嗚呼正長之昔、無官務吉凶之沙汰者、文安之今、免兩職改易之憂患歟、出於爾者、歸爾之謂乎、然間自管領、以使節（攝津大輔肥彈）可被尋究之由、被申入傳奏、又被申公方云々、於上意者、堅被仰下之間、及六七度、管領雖被支申、遂以還補令治定云々、　四月廿九日己卯、今日午剋有宣下事、室町殿征夷大將軍幷禁色等

宣下也、上卿右衛門督持季卿（權中納言轉宮上卿也、）職事藏人右中辨勝光（官方兼行）、四位大外記清原業―（眞人）、四位史長興宿禰、六位外記不參、史員職、召使久繼（史生）等參陣也、先召辨仰將軍宣下事、次召大外記仰禁色事、仰詞等可尋注之、兩局務各成宣旨、被持參申室町殿、同時也、先被召將軍宣旨、頭人攝津掃部頭之親勤申、次直垂折烏帽子也、祿物砂金貳拾兩（二裹）納宣旨筥被下之、次禁色宣旨被召也、左衛門佐永繼朝臣（縫狩衣）爲申次、祿物砂金拾兩（一裹）納筥蓋被下之、外記史生久繼同參入、取次外記宣旨出、局務取之被進申次云々、史生祿物如此、毎度千疋被下之、先々自傳奏被申勢州、自勢州被下行之、今日亦爲其分歟、追可尋之、上卿右衛門督、奉行職事等不改束帶、直被參室町殿被申陣儀事終之由云々、兩局務又冠帶也、上卿兩局務總衆懸御目之時、同進御太刀被懸御目者也、（三人各二腰寬持參、雜衆又此分也、）其後有御判始被行吉書儀、○中略午剋、予（玉帶）著朝衣、（赤衣也、小雜色一人、）召具參賀室町殿、御昇進之參賀、公武諸門跡濟々有御群參、左府、右府、內府、其外久我前內府、大炊御門殿、萬里小路前內府以下、前官當官三公九卿、直衣狩衣直垂等相交不可勝計、雲客醫陰等如例、局務並官務予等束帶也、各上下御劍（金覆輪）二腰持參也、室町殿公卿座有御出座、（南面有御着座、）傳奏（中山宰相中將直垂）申次（永繼狩衣）其外近習人々、日野、烏丸黃門、右兵衛督、伊勢兵庫助已下濟々、南弘庇被伺候、攝家、丞相等公卿座與殿上作合有御佇立、公卿等殿上人令佇立給、上下經殿上南緣、昇西向妻戶入公卿座西端南妻戶、被懸御目畢、末之於妻戶構見參了、執柄御遲參漸有御參之由有其聞、其後諸門跡被懸御目了、此間兩局務予三人退待所、廻御末方、大方殿御禮申入也、飯尾左衛門大夫申次、春日局令出座給、三人入見參退出了、先々東向之衆、同西向之衆有出座、雖構見參、兩局務就細々參入自御末被申入之、予進退可何樣哉之由被尋之間、束帶一人相殘可入見參之條爲顯著、可從申驥尾之由令申、同奉相從之、自御末方申入女中御禮之條是始也、殊更祝著、畏入者也、兩局務直令參賀管領亭給、予每年依無用意不能處々參賀、直歸畢、

左馬頭源朝臣義成

右少辨藤原朝臣勝光傳宣、權中納言兼右衞門督藤原朝臣持季宣、奉　勅、件人宜爲征夷大將軍者、

文安六年四月廿九日　　　　　　　　　　左大史小槻宿禰長興奉

征夷大將軍左馬頭源朝臣義成

正三位行權中納言兼右衞門督藤原朝臣持季宣、奉　勅、件人宜聽著禁色者、

文安六年四月廿九日　　　　　　　大炊頭兼大外記清原眞人業―奉

〔公卿補任光明〕建武五年(戊寅○暦應元年)

權大納言從二位源尊氏(八月十一日敍正二位、同日還補征夷大將軍、元寅(寅恐征誤)東將軍、)

〔公卿補任後醍醐〕建武二年(乙亥)

參議正三位源尊氏(武藏守、右兵衞督、鎭守府將軍、八月九日補征夷大將軍、廿日敍從二位、○中略十一月廿七日止職、)

〔足利家官位記〕等持院殿　尊氏(始高氏)

建武元年九月十四日任參議(左兵衞督武藏守如元)　同二年八月九日、爲征夷大將軍、(元鎭守府將軍)　同月卅日、敍從二位、(勳功賞)　同十一月廿六日、解官、(依勅勘也○中略)　同五年八月十一日、敍正二位、(追討賞)　同日、爲征夷大將軍、(○中略)　延文三年四月卅日薨、(前權大納言、征夷大將軍、正二位、五十四歲、)　同六月三日、贈左大臣從一位、號長壽院(一作寺)殿、又號等持院殿如義仁山大居士、康正三年四月廿八日、贈太政大臣、

○按ズルニ、公卿補任、足利家官位記等ニ、建武二年尊氏ヲ征夷大將軍ニ補ストアルハ、征東將軍ト混ジタルニテ誤ナリ、ナホ將軍篇征東將軍條ヲ參看スベシ、

〔太平記十三〕足利殿東國下向事附時行滅亡事

諸卿議奏有テ、急足利宰相高氏卿ヲ討手ニ可被下ニ定リケリ、則勅使ヲ以テ此由ヲ被仰下ケレバ、相公勅使ニ對シテ被申ケルハ、去ヌル元弘ノ亂ノ始、高氏御方ニ參ゼシニ依テ、天下ノ士卒皆官軍ニ屬シテ、勝事ヲ一時ニ決候キ、然バ今一統ノ御代、偏ニ高氏ガ武功ト可云、抑征夷將

軍ノ任ハ、代々源平ノ輩、功ニ依テ、其位ニ居スル例不可勝計、此一事殊ニ爲朝爲家望ミ深キ所也、次ニハ亂ヲ鎭メ、治ヲ致スニ以謀、士卒有功時節ニ、賞ヲ行ニシクハナシ、〇中略忠戰ノ輩、勇ヲ不可成、然レバ暫東八箇國ノ管領ヲ被許、直ニ軍勢ノ恩賞ヲ執行フ樣ニ、勅裁ヲ被成下、夜ヲ日ニ繼デ罷下テ、朝敵ヲ退治仕ルベキニテ候、若此兩條勅許ヲ蒙ズンバ、關東征罰ノ事、可被仰付他人候トゾ被申ケル、此兩條ハ天下治亂ノ端ナレバ、君モ能々御思案アルベカリケルヲ、申請ル旨ニ任テ、無左右勅許有ケルコソ、始終如何トハ覺ヘケル、但征夷將軍ノ事ハ、關東靜謐ノ忠ニ可依、東八箇國ノ管領ノ事ハ、先不可有子細トテ、則綸旨ヲ被成下ケル、〇中略尊氏卿東八箇國ヲ管領シテ、所望輒ク道行テ、征夷將軍ノ事ハ今度ノ忠節ニ可依ト勅約有ケレバ、時日ヲ不回、關東ヘ被下向ケリ、

〔太平記十四〕新田足利確執奏狀事

去程ニ、足利宰相尊氏卿ハ、相模次郎時行ヲ退治シテ、東國纔テ靜謐シヌレバ、勅約ノ上ハ何ノ子細カ可有トテ、未ダ宣旨ヲモ不被下ニ、押テ足利征夷將軍トゾ申ケル、東八箇國ノ管領ノ事ハ、勅許有シ事ナレバトテ、今度箱根相模河ニテ、合戰ノ時有忠輩ニ被行恩賞、先立テ新田ノ一族共拜領シタル東國ノ所領共ヲ、悉ク闕所ニ成シテ、給人ヲゾ被付ケル、

〔太平記十九〕本朝將軍補任兄弟無其例事

同年〇建武三年十月三日、改元有テ延元ニウツル、其十一月五日ノ除目ニ、足利宰相尊氏卿、上首十一人ヲ越テ、位正三位ニアガリ、官大納言ニ還テ、征夷將軍ノ武將ニ備リ給フ、舍弟左馬頭直義朝臣ハ、五人ヲ越テ位四品ニ敍シ、官宰相ニ任ジテ、日本ノ副將軍ニ成給フ、

〔三內口訣〕一副將軍事

凡將軍ハ、有朝敵之時、爲追罰一旦被補之、尊氏依別忠永代可爲將軍家之由、被仰出候、後他人之

競望無之候者也、副將軍者六孫王（○經基源）始被補候歟、建久以後無其沙汰、況於當時者依被重將軍家、彌近代不及沙汰候、

〔公卿補任　後光嚴〕延文三年（戊戌）

參議從三位源義詮（十二月十八日任征夷大將軍、）

〔足利家官位記〕寶篋院殿　義詮

建武二年四月七日、敍從五位下、（六歲）康永三年三月十六日、敍正五位下、（越階）同月十八日、任左馬頭、（十五歲）貞和三年四月廿二日、敍從四位下、（宣下）觀應元年八月廿二日、任參議兼左中將、（勳功賞、廿一歲）延文元年八月廿八日、敍從三位、（越階○中略）同（○延文）三年十二月八日、補征夷大將軍、同四年二月四日、兼武藏守、貞治二年正月廿八日、任權大納言、（不任中納言、征夷大將軍如元、三十四歲）同七月廿九日、敍從二位、（越階○中略）同六年正月五日、敍正二位、同十二月七日薨、（前權大納言、正二位、征夷大將軍、卅八歲）同月卅日、贈左大臣從一位、號寶篋院殿道惟瑞山大居士、

鹿苑院殿　義滿

同年（○應安元年）十二月卅日、補征夷大將軍、（官宣○中略）同六年十一月廿五日、任參議、（十六歲）同日兼左中將、敍從四位下、（○中略）同年（○永和元年）十一月廿日、敍從三位、（越階、宣下、十八歲、○中略）同月（○永和四年三月）廿四日、任權大納言、（廿一歲、縣召除目、）同年八月廿七日、兼右大將、（任大臣次除目）同年十二月十三日、敍從二位、（被付行小除目）同五年正月六日、御監、（○右馬寮御監、中略）康曆二年正月五日、敍從一位、（越階、廿三歲、○中略）同（○永德元年）六月廿六日、任大臣召仰、同七月廿三日、任內大臣、（大將如元）大饗、（○中略）同二年正月一日、初御參小朝拜、同月廿六日、轉左大臣、（○大將如元、中略）同年閏正月十九日、御拜賀著陣也、今日補藏人所別當、同三月廿八日、聽牛車、同年四月廿一日、爲院別當、同三年正月十四日、爲源氏長者、同十六日、爲奬學院淳和院等別當、同六月廿六日、准三宮、（廿六歲、宣下、○中略）至德元年三月十日、辭大將、（○中略）同（○嘉慶）二年五月廿六日、辭左大臣、（○卅一歲、中略）同年（○明德三年）十二月廿六日、還任左大臣、（卅五歲）同四年正月七日、還任御拜賀、同八月十一日、兵仗、（宣下○中略）同（○應永元年）十二月十

七日、辭征夷大將軍、讓任御息、同廿五日、任太政大臣、卅七歲 同日兵仗、宣下、〇中略 同〇應永二年六月三日、辭相國、同廿日、御落飾、卅八歲、御法名道有、但後日被改道義、御道號天山、〇中略 同〇應永十五年五月六日、御圓寂、五十一歲 號鹿苑院殿、

〔公卿補任〕後小松 應永三年丙子

參議正四位下源義持

應永元年十二月十七、敍正五位下、同日任左中將、補征夷大將軍、聽禁色、

〔足利家官位記〕勝定院殿 義持

應永元年十二月十七日、敍正五位下、九歲 同日御元服、今日任左中將、聽禁色昇殿、補征夷大將軍、〇中略 同二年六月三日、敍從四位下、同三年正月廿八日、兼美作權守、十一歲 同四月廿日、敍正四位下、越階 同九月十二日、任參議、左中將如元、〇中略 同四年正月五日、敍從三位、十二歲 同三月廿九日、任權中納言、同五年正月五日、敍正三位、十三歲〇中略 同七年正月五日、敍從二位、十五歲〇中略 同八年三月廿四日、任權大納言、十六歲 同九年正月六日、敍正二位、十七歲〇中略 同十一月十九日、敍從一位、遣內宴賞〇中略 同十三年八月十七日、兼右大將、廿歲 同十四年正月五日、御監、〇中略 同〇十六年七月廿三日、任內大臣、大將如元、〇中略 同十九年五月廿九日、辭大將、廿七歲 同月日、為院執事、同年八月七日、兵仗、宣下、〇中略 同十月廿二日、為弉學院淳和院等別當、同十三日、為源氏長者、〇中略 同月〇二十六年八月廿九日、辭內大臣、卅四歲 同卅年三月十八日、以征夷大將軍讓任御息、〇義量 同四月廿五日、御出家、卅八歲 同卅五年正月十八日御圓寂、四十三歲 同廿二日、贈太政大臣、號勝定院殿、

〔柳營御傳〕勝定院殿義持 鹿苑院長子、母家女房藤原慶子、准母權大納言時光卿女、贈從一位業子、定心院殿 至德三年丙寅二月十二日誕生、應永元年十二月十七日元服、加冠殿親、理髮右大辨宰相重光卿、即敍正五位下、九歲 同日、御元服今日任左中將、聽禁色幷昇殿、補征夷大將軍、被摸攝政例之間、先可任少將之處、鎌倉右大臣〇源實朝例不快之間、直令任中將、花園左大臣〇源有仁後無例歟、

〔公卿補任 稱光〕應永三十年 癸卯

前内大臣從一位源義持 征夷大將軍、三月十八日、大將軍讓補息子(義量)、四月廿五日出家、法名道詮、

〔花營三代記〕應永三十年二月十八日己亥、御方御所(○足利義量)征夷大將軍宣下、中將如元、十七歲、御所樣(○足利義持)將軍被與申之、爲落髮云々、

〔足利家官位記〕長得院殿 義量

同(○應永)廿四年十二月朔日、御元服、加冠父公、十一歲、敍正五位下、同日任右近衛中將、禁色宣下、同月十三日、昇殿、(○中略)同卅年三月十八日、任征夷大將軍、受父讓、于時十七歲、同卅一年正月十二日、敍從四位下、同年十月十三日任參議、同卅二年二月二十七日薨、十九歲、號長得院殿道基雲山大居士、贈左大臣從一位、

〔公卿補任 後花園〕正長二年 己酉○永享元年

參議從四位下源義敎 元義宣、三月十五日任、同日左近衞中將、征夷大將軍等如元、元左馬頭、

〔足利家官位記〕普廣院殿 義宣 后改義敎、

同(○應永)卅五年三月十二日、任左馬頭、小除目、廿五歲、今日先從五位下、於陣座宣下、今日御還俗、○中略 同(○四月)十四日、敍從四位下、越階、陣宣下、左馬頭、敍留、永享元年三月九日、御元服、(○註略)同日、禁色宣下、同月十五日、任參議、今日御改名、廿六歲、兼左中將、小除目、爲征夷大將軍、官宣下、元左馬頭、○中略 同月廿九日、任權大納言、云々、今日從三位、越階、并陣宣下、○中略 同八月四日、兼右大將、(○中略)同十二月十三日、敍從二位、越階、○中略 同二年正月六日、御監、(○中略)同十月十七日、敍從一位、越階、卅七歲、○中略 同四年六月廿四日、任大臣兼宣旨、御參內、今日先有陣儀、同年七月廿五日、任內大臣、(○中略)同(○八月)廿八日、轉左大臣、大將如元、同十二月九日、御拜賀、今日補殿上并院別當、同日補獎學院淳和院等別當、御爲源氏長者、同日聽牛車、陣儀、○中略 同(○永享)五年八月九日、辭大將、有御表、同九年十月十日、兵仗宣下、(○中略)同(○永享)十一年九月四日、辭左大臣、嘉吉元年六月廿四日、御生害、四十八歲、同月廿九日、贈太政大臣、號普廣院殿、

〔看聞日記〕正長二年〇永享元年三月十五日辛酉、今日室町殿〇足利義敎昇進、參議中將幷征夷大將軍被宣下、名字義敎ト改名、元義宣也、世しのぶと被讀成、不快之間被改云々、御元服以下賀禮馬太刀諸人進物、悉八幡御寄進、社務善法寺被遣云々、

〔公卿補任後花園〕永享四年壬子
左大臣從一位源義敎八月廿八日轉任、同日右大將如元、今日節會內辨權大納言實熙卿、宣命使實雅朝臣、征夷大將軍、十二月日、補淳和院別當、奬學院別當、幷殿上別當、院大別當、兼牛車宣下、

〔康富記〕嘉吉二年十一月七日甲子、是日室町殿御年九歲、義勝去年八月十九日御敍爵、御元服也、〇中略先於陣被行條々宣下事、室町殿御昇進五箇條也、上卿萬里小路大納言時房卿、職事藏人頭右中辨資任朝臣、四位大外記師世朝臣、四位史晨照宿禰、少外記清原親種、宣下分配右大史安倍盛久、大內記菅原在豐朝臣等參陣之、酉剋許、被執行之、先召大內記、仰御敍品正五位下事、次召大外記、禁色事被宣下之、次左近中將事被仰之、次召官務、征夷將軍事被宣下之、此後御昇殿事、於殿上召六位藏人定仲被仰之云々、

〔足利家官位記〕慶雲院殿　義勝
嘉吉元年八月十九日、敍從五位下、八歲〇中略同年〇二年十一月十七日、御元服、九歲加冠二條關白、理髮左中將公綱朝臣、敍正五位下、任左近衞中將、任征夷大將軍、禁色宣下、聽昇殿、同三年正月五日、敍從四位下、同七月廿一日薨、十歲同廿三日、贈左大臣從一位、號慶雲院殿道春榮山大居士、

〔公卿補任後花園〕文安六年己巳〇寶德元年
參議從四位下源義成
文安六年四月廿九日、爲征夷大將軍、同日禁色宣下、

〔足利家官位記〕慈照院殿、義成後改義政、
同月〇文安三年十二月十五日、敍從五位上、十二歲、於陣宣下、同四年二月七日、敍正五位下、同日侍從、同五年十二月

廿六日、任左馬頭、（非陣宣下、〇中略）同（〇寶徳元年）四月十六日、御元服、（御歳十五歳、〇中略）同廿九日、爲征夷大將軍、同日禁色宣下、（〇中略）同（〇八月）廿七日、任參議、兼左中將、（元左馬頭）同日、敍從四位下、（共陣儀、小除目小敍位也、〇中略）同二年正月五日、敍從三位、（越階、十六歳）同三月廿九日、任權大納言、同年六月廿七日、敍從二位、（越階、宣下、〇中略）享徳二年三月廿六日、敍從一位、（越階、宣下、十九歳、）同年六月十三日、御改名、（義政）同年十二月廿九日、爲源氏長者、同日補奬學院淳和院等別當、（共非陣儀、）康正元年八月廿七日、兼右大將、（廿一歳）同二年正月六日、御監、（〇中略）同（〇長祿二年）七月廿五日、任內大臣、（大將如元、）大饗、（〇中略）同四年八月廿七日、轉左大臣、（大將如元、廿六歳）同十二月十五日、御拜賀、同日聽牛車、（非陣儀、）寛正二年八月九日、辭大將、（有御表、〇中略）同五年七月十九日、爲院執事、同廿九日、院司御拜賀、同八月九日、兵仗宣下、同十一月廿八日、准三宮、（廿歳、〇中略）應仁元年九月二日、辭左大臣、給文明五年十二月十九日、辭征夷大將軍、讓任御息、（〇中略）同十七年六月十五日、御落飾、（御法名道慶、道號喜山、）延徳二年正月七日薨、（五十六歳）號慈照院殿、同三月十七日、贈太政大臣、

〔公卿補任 後土御門〕文明七年（乙未）

參議正四位下源義尚

文明五年十二月十九日、元服、（加冠殿親）今日敍正五位下、任左中將、聽禁色昇殿、爲征夷大將軍、（昇殿之外、於陣宣下、）

〔足利家官位記〕常徳院殿　義尚（后改義熙、又爲御改名、內々及御談合、然而依參事不及沙汰、）

同（〇文明五年）十二月十九日、敍正五位下、（九歳、御名字義尚、）同日任左中將、聽禁色昇殿、補征夷大將軍、（〇中略）同年（〇六年）六月十九日、敍從四位下、（陣儀敍位、〇中略）同七年正月廿八日、兼美作權守、（十一歳、除目入眼、）同年四月十九日、敍正四位下、（越階、宣下、）同九月十七日、任參議、（左中將如元、〇中略）同八年正月六日、敍從三位、（十二歳、本敍位、）同九年正月六日、敍正三位、（小敍位、）同十一年正月五日、敍從二位、（十六歳、小敍位、〇中略）同十二年三月廿九日、任權大納言、（兼召）同十五年三月廿三日、敍從一位、（越階、十九歳、）同十六年十二月廿三日、爲源氏長者、（依東山殿御與奪、）同日、補奬學院

淳和院等別當、共并ニ陣儀同十七年八月廿八日、任二右大將一、陣儀、廿一歲、同十八年正月五日、右馬寮御監、宣下陣儀○中略長享二年月日、御改名、義熙同九月十七日、任二內大臣一、有二節會一、大將如レ元、二十四歲、○中略同三年三月廿六日薨、廿五歲、法名道治、道號悅山、號二常德院殿一、同廿七日、贈二太政大臣一、

〔足利季世記畠山記一〕常德院殿早世之御事

東山慈照院殿公方○足利義政初ハ御子ナクシテ、今出川義視公ヲ猶子ニナサレ、御代ヲユヅラント定玉ヒ、已ニ御隱居ノ時分、北山殿御臺所若君誕生アリケレバ、實子ニ御代ヲツガセ申サン爲ニ御臺山名金吾入道持豐ヲ賴ミ給フ、今出川殿ハ細川右京大夫勝元ヲ賴ミ給ヒシカバ、兩方ノ大亂ト成、洛中合戰國々ノアラソヒニ成行ケリ、其後色々ノ謀アリ、今出川殿ハ山名方ニナシ、若君ハ却而細川取立、征夷將軍ニ備リ給フ、義尙ト申ハ是也、

〔親長卿記〕文明五年十二月十九日丙子、中院大納言通秀卿來、今日御元服、著座並宣下上卿云々、予可レ著二裝束一、次羞二一盞一令レ著二裝束一、束帶今日宣下條々、○中略若君○足利義尙就二御元服一有二宣下事一、正五位下左中將禁色征夷大將軍室町殿御與奪云々昇殿御事等也、其儀可二尋記一、右中辨兼顯參陣云々、

〔公卿補任後土御門〕延德二年庚戌

參議從四位下源義材七月五日任

延德二七五從四下、同日右中將、禁色、征夷大將軍等宣下、

〔足利家官位記〕惠林院殿　義稙、始義材、又義尹、慈照院贈太政大臣爲レ子、實大智院義視卿男、○中略文明十九年月日、御元服、今日御敍爵、長享元年八月廿九日、從五位下、廿二歲任二左馬頭一、延德二年七月五日、爲二征夷大將軍一、禁色、陣宣下昇殿、同日敍二從四位下一、任二參議右中辨一給、小除目敍位○中略同○明應十年○文龜元年月日辭二征夷大將軍一、三十六歲

○按ズルニ、公卿補任ニ延德二年以後明應九年ニ至ルマデ、義材義稙初名ノ下ニ、征夷大將軍ノ文アリ、又同書文龜二年源義高義澄初名ノ下ニ、明應三年十二月廿七日征夷大將軍ノ文アリ、義材ノ

其職ヲ辭セズシテ、北國ニ赴クヤ、義高ヲ以テ其職ニ任ジタレバ、同時ニ二人ノ征夷大將軍アリシナリ、

〔足利季世記 畠山記〕常德院殿早世之御事

卯月十日改元有リテ延德元年ト云、同月十二日、今出川殿〇足利義視御父子美濃國ヨリ御上洛アリ、今出川殿ノ若君左馬頭殿〇義材、後改ニ義稙一ヲ、大御所〇足利義政御養子ニナサレ御相續アリ、大樹ノ御位ニ備エラル、今出川殿ヲ初メヨリ御契約アリシカドモ、常德院殿〇足利義尚ニ越サレ給ヒ、本意ナク思食ケルニ、若君ノ今ハ將軍ニ御補任ナサレケル、天運ノ程ゾ目出ケレ、

〔後法興院記〕延德二年七月五日丙辰、申剋武家兩所被レ向ニ細河右京大夫許一、於ニ彼所一可レ有レ被レ見ニ宣下一云云、〇中略左馬頭殿〇足利義稙宰相中將四品幷將軍等宣下也、上卿侍從大納言〇三條實隆奉行頭辨俊名朝臣云々、今日判形始、沙汰始云々、　十三日甲子、師富朝臣進小除目聞書、

參議源義材

左近權中將源義材兼

延德二年七月五日

〔公卿補任 後柏原〕文龜二年壬戌

參議從四位下源義高七月十二日任、(中略)同廿一日、御ニ改名義澄一、

明應三年十二月廿七、征夷大將軍、

〔足利家官位記〕法住院殿　義遐、又義高、後改ニ義澄一、慈照院贈太政大臣(足利義政)爲レ子、實左兵衛督政知男、

明應二年四月廿八日、敍ニ從五位下一陣宣下、十五歲、御名字義遐、同六月六日、御改名義高、同三年十一月廿四日敍ニ正五位下一隆、淸息宣下、同廿七日、任ニ征夷大將軍一、同日、任ニ左馬頭一、文龜二年七月十二日、敍ニ從四位下一、任ニ參議一、兼ニ左中將一、淸息宣下、廿三歲、〇中略同廿一日、御ニ改名義澄一〇中略同三年正月十四日、敍ニ從三位一廿四歲永正五年四

月十六日、御出奔、廿九歳同八年八月十四日、於江州岳山薨、號法住院殿清晃旭山大居士、卅二歳數年之後、永正十八年八月日、贈左大臣從一位、

〔足利季世記一島山記〕義材公北國落之事

京ニハ天龍寺ノ香嚴院殿、イマダ落髮ナクシテ、喝食ニテオハシケルヲ、九條禪定殿下〇政基ノ内縁アリテ、シキリニ被仰ケレバ、右京大夫政元取立申、御元服アリ、義遐ト名付ケ奉リ、頓テ前將軍ハ御解官アソバシ、當御所ハ征夷將軍ニ成リ給フ、後ニハ義澄ト申スハ此御事ナリ、先公方義材公ハ北國ニテ加賀富樫中務、越中ヨリ椎名神保、能登ノ畠山殿、長ノ九郎左衛門、越前ノ朝倉、若狹ノ武田伊豆守ヲ御賴ミアリ、明應二年閏四月坂本マデ御發向アリ、山門ヲ賴マセ給ヒケルニ、京勢雲霞ノ如ク有リシカバ、山門中堂僧房マデ、悉ク燒拂ハレテ、義材公方ハ周防ノ大内左京大夫義興ヲ賴ミ、中國エ御下向アリ、

〔足利季世記二舟岡記〕政元生害事

公方義澄ノ御母ハ、柳原大納言隆光卿ノ御女也、今ノ九條攝政太政大臣政基ノ北政所ト御姉妹也、

〔足利家官位記〕惠林院殿　義稙始義材、又義尹、

延德二年七月五日、爲征夷大將軍、〇中略同〇明應十年月日〇文龜元年辭征夷大將軍、三十六歳改名義尹、永正五年四月廿七日、自防州和泉堺著、同六月八日、御歸洛、同七月一日、任權大納言、小除目、四十三歳同日敍從三位、小敍位同日爲征夷大將軍、於陣宣下〇中略同月〇十二月廿七日、敍從二位、越階、消息宣下、〇中略同十年月日、改名義稙、同十六年九月廿七日、爲源氏長者、補淳和奬學兩院別當給、同十八年〇大永元年三月七日夜、密令出京師給、御下向淡路國、同十二月廿五日、罷征夷大將軍、大永三年四月九日、於阿州撫養薨、五十八歳號惠林院殿道舜嚴山大居士、

〔足利季世記二舟岡記〕澄元沒落之事

六條澄元右京大夫ニ任ジ、管領ニ備リケル、三好高畠天下ノ權ヲトリ、ウエミヌ驕ノ風情シテ、威勢ヲフルヒケリ、○中略三好高畠ガヲゴリノ餘リ、諸人ニ無禮シケレバ、內々澄元ヲ背中族アマタアリ、中ニモ京ニハ奈良修理亮元吉、攝州ニハ伊丹兵庫助元扶、丹波ニハ內藤備前守貞正等、一味同心シテ、九條殿エ其好アリシカバ、細川民部少輔高國ヲトリ立、中國ノ義材公エ申通、逆心ヲ起シ、諸國牟複○反覆シケレバ、永正五年卯月九日、巳ニ打立ト聞ヘシカバ、右京大夫澄元、三好高畠散散ニ成テ落行ケル、○中略義澄御所モ不レ叶シテ、同月十六日、近江國朽木エ落サセ給フ、京ニハ高國ヲ右京大夫ニウツシ、管領ノ職ニスヘ、同卯月廿七日、義材公方御上洛アリ、先ヅ和泉ノ境エ御著アル、コヽニテ義尹ト御改名アリ、後ニハ義稙トモ申ケリ

義尹御武勇之事

永正五年六月八日、義尹公方中國ヨリ御入洛アリテ、同月十日御參內アリテ、○中略同年七月朔日ニ、征夷將軍ニ還任アル、先公方ハ解官アリテ、當御所本位ニ復シ給フ、帝王ニハ重祚ノ御例アリトイヘドモ、本朝ニハ公方ノ還任ハ是初トゾ聞ヘシ、

〔公卿補任後柏原〕大永二年壬午

參議從四位下源義晴二月十七日任

大永元年十二月廿五日、爲征夷大將軍宣下、同日聽禁色昇殿、

〔足利家官位記〕萬松院殿　義晴惠林院殿爲子、實法住院殿男、

大永元年七月廿八日敍爵、同十一月廿五日、敍正五位下給、越階、陣宣下、十一歲、○中略同日任左馬頭、同十二月廿四日、御元服、○中略同廿五日、任征夷大將軍、同日禁色昇殿、同二年二月廿七日、敍從四位下、十二歲、同日任參議左中將、享祿三年正月廿日、任權大納言、同日敍從三位、廿歲、天文十五年十二月廿日、任右大

將、〔三十六歲〕同日讓二大將軍於御息義藤朝臣一同十九年五月四日、於二江州坂本穴太一薨、〔四十歲〕同七日、贈二左大臣從一位一〔陣宣下〕號二萬松院殿曄山道照大居士一、

〔足利季世記三 高國記〕公方〔義稙〕ト高國不和之事

公方義稙公イニシヘ政元ニヲシコメラレ、籠ノ中ニ御座アリシトキノ遁世者落シ奉リ、御運ノ開カセ給ヒシトキ、御ヤクソクアリテ、カノ遁世者ガ子息一人召出シテ畠山式部大夫ト名付、萬事ニ權威高カリケル、此者公方ノ御意ニ入、如何ニモシテ、是ニ管領ヲアタヘタク、朝夕思召、御色ニモ出ケレバ、細川殿ト御不快ニテ、萬ニ奇怪ナル御振舞アリケレバ、細川高國モ御恨フカクナリ、如何樣洛中ヲダヤカナラズ、カヽリシ程ニ、大永元年辛巳三月七日、公方細川御中不和ニ成、京ヲ出サセ給ヒ、淡路ノ武島ヘ御渡海アリケレバ、京ニハ、細川右京大夫、同名陸奥守以下評定シテ、故法住院殿〔○足利義澄〕御子赤松アヅカリ申テ、今年七歲ニナリ給フヲ呼上奉リ、七月六日、播州ヨリ御上洛アリ、左馬頭ニ任ジ、御元服アリ、義晴ト名付奉ル、同八月ヨリ、三條ノ御所ヲ上京ヘ引、今ノ柳ノ御所ヲ營立ラルヽ、頓テ征夷將軍ノ勅宣ヲ蒙リ給ヒケレバ、前將軍ハ解官アリテ、將軍職ヲトヾメラルヽ、

〔公卿補任 後奈良〕天文十六年〔丁未〕

參議從四位下源義藤〔二月十七日任〕

天文十五年十二月廿日、爲二征夷大將軍一同日從四下、聽二禁色昇殿一、

〔足利家官位記〕光源院殿　義藤〔後改二義輝一〕

同〔○天文〕十五年七月廿七日、敍爵、于時義藤、〔十一歲〕同十一月十九日、敍二正五位下一〔十一歲〕同日任二左馬頭一同十二月十九日、御元服、同廿日、任二征夷大將軍一同日敍從四位下、聽二禁色昇殿一同十六年二月十七日、參議、〔十二歲〕同日兼二左中將一〔○中略〕同廿三年二月十二日、改二名義輝一〔十九歲〕永祿八年五月十九日、依二三好左京大

夫義繼、松永彈正少弼久秀反逆、御傷害、（三十歳）同六月七日、贈左大臣從一位、號光源院殿道圓融山大居士、

〔公卿補任（正親町）〕永祿十一（戊辰）年二月八日、左馬頭源義榮、征夷大將軍禁色昇殿等陣宣下、上卿帥中納言、奉行職事頭中將重通朝臣、（○中略）九月日征夷大將軍薨給、

〔御湯殿の上の日記〕永祿十年正月五日、あはの武家（○足利義榮）より、左馬頭の事申さるゝ、勅許せうそく宣下たびたびの例よきさてその例なり、　十一年二月八日、さんだの武家（○足利義榮）將軍宣下あり、

〔足利季世記（六久米田軍記）〕阿波御所義榮樣御上リノ事

去年ヨリ、阿波御所御上洛ノ御催シ有リシ故、三好衆ヲ御頼ミアリテ、光源院樣（○義輝）御生害有、其後京都未ダ靜マラザレバ、御延引アリケルガ、今度御上洛可有トテ、六月中旬淡路ノシチト云所エ御出張アリ、

阿波御所義榮御敍爵之事

同（○永祿九年）十二月七日、義榮富田ノ庄普門寺エ御動座アリケレバ、（○中略）同月廿八日、富田エ勅使ヲ立ラレ、阿波御所義榮敍爵ノ事アリテ、任左馬頭、

松山安藝守ガ事

同（○永祿十一年）二月八日、三好吹擧申ニヨリテ、左馬頭源義榮被補征夷將軍、

〔足利系圖〕義維―義榮（永祿九年十二月二十八日、從五位下、左馬頭、同十一年二月八日、征夷將軍、同年九月薨、號光德院殿、道號玉山、）

〔公卿補任（正親町）〕永祿十一（戊辰）年九月廿六日、自濃州左馬頭義昭御入洛、織田彈正忠信長供奉、十月十八日、左馬頭源義昭（○元義秋）征夷大將軍、禁色昇殿等陣宣、同日參議、左中將、從四位下等、小除目小敍位等有之、上卿源中納言、執筆右大辨宰相、奉行職事頭辨經元朝臣、

〔御湯殿の上の日記〕永祿十一年十月六日、一乘院の武家〔〇足利義昭〕あくた川に御陣すゑられ候とて、この御所よりめでたきとの御使參られ候、十八日、將軍宣下あり、

〔足利季世記 六 久米田軍記〕光源院殿御最後之事

一乘院殿〔〇義昭〕モ兄ノ公方〔〇義輝〕ノ御生害ノ事、且ハ歎キ被二思召一、且ハ口惜ト思召ケレドモ、少シモ御氣色ニ不レ被レ出シテ時刻ヲ送リ給ヒケルニ、内々松永打手ヲ參ラセ、御生害アルベキト沙汰アリケレバ、伺候ノ輩ニ、甲賀ノ侍アリテ、細川藤孝ニ申合、御當家再興ノ事密ニ進メ奉リ、頓テ忍ビ出サセ給ヒ、即和田和泉ガ亭マデ出シ奉リテ、夫ヨリ江州中郡矢島ニ御逗留有リ、爰ニテ御長髮アリ、御敵退治有テ、將軍家御相續可レ有ト、諸國エ相催サルヽトイヘドモ、〇下略

〔足利季世記 七 義秋公方記〕一乘院殿樣御元服之事

一乘院御門跡〔從慶〕樣、去ル永祿八年八月、江州矢島エ御動座アリテ、同十年マデ諸國ヲ相催シ、三好ヲ御退治有度ト、謀ヲ廻ラサルヽ間、方々ヨリ馳參ル、〇中略 同十年九月朔日、朝倉太郎左衞門尉義景ヲ御賴ミ、彼ガ謀ヲ以テ、御憤ヲ可レ散ト御使アリケレバ、義景畏テ無二貳尊敬シ奉リ、安養寺エ入奉ル、爰ニテ義景モテナシ奉リテ、一乘ノ谷ニ於テ御元服アリケル、〇中略 御諱義秋ト號シ奉リ、後ニ又義昭トモ御改名アリケリ、

信長出張之事

永祿十一年七月廿五日、信長御迎ヲ進上アリケレバ、美濃國西庄立正寺被レ移二御座一、

新公方樣御上洛之事

是月〔〇九月〕義榮モ腫物ヲ憂タマヒテ逝去アレバ、叶マジトヤ思ケン、十月朔日細川讃州息男三好彥二郎ハ、富田普門寺ニアリシヲ、阿波國エ落シタテマツリテ、長房〔〇篠原〕モ越水城布引瀧山城ヲ明テ、落行ケレバ、新將軍義昭公越水城へ移ラセ給ヒ、信長ハ芥川城エ入城アリ、攝州上下郡共ニ

平均ナリ、○中略公方樣御入洛アリ、故細川右京大夫氏綱ノ舊宅ヲ御座所ニシツラヒ、御移リアリ、
同十月廿二日御參內アリ、征夷將軍ニ御補任アリケリ、

〔公卿補任〕正親町天正十六年戊子

權大納言從三位源義昭 征夷大將軍、在大坂、正月十三日落飾、

〔足利家官位記〕義昭 元義秋、(中略)左馬頭、永祿十一年十月十八日、從四位下、同日參議左中將征夷大將軍、禁色昇殿、三十二歲、同十二年六月廿二日、從三位、越階、同日權大納言、

〔足利系圖〕義昭

母慶壽院、義輝同腹弟也、天文六年十一月三日生、永祿八年五月、出一乘院門跡、元號覺慶、到江州、同十年、往越前、於朝倉館元服、號義秋、加冠二條殿晴良、理髮朝倉義景、同十一年六月信長合力入洛、十月十八日、任三木左中將征夷將軍從四位下、同十二月從三位、天正元年信長不和、合戰敗北、同十三年出家、號昌山道久、准三后、慶長二年八月二十八日薨、六十二、贈靈陽院、

〔豐臣家譜〕天正十三年三月、秀吉任內大臣、敍正二位、 四月十六日、秀吉欲爲征夷大將軍、謂權大納言源義昭曰、公其可養我、我爲將軍矣、公若養我、則公安富尊榮不可疑焉、義昭愚昧遂不從、於是秀吉與菊亭右大臣晴秀相議、晴秀曰、關白者、人臣之高爵、士民之景仰、貴於將軍遠矣、公其可任關白、秀吉悅、 七月十一日、秀吉任關白、

〔朝野舊聞裒稿 四百九十六〕慶長年錄云征夷大將軍は賴朝以來武將之任に候得ば、室町殿代々御補任にて、他家より望申事不叶、信長、秀吉天下をうち取、此任を御所望候得共、昌山 ○足利義昭 存生之間、此職を渡し進候事不可叶、押て生害ありて、補任可被成由、御申之間、無是非、直に公家にならん迚、皆大臣にいたり、關白まで極められけり、日本にては、いかに威勢有とも、自由に補任不叶、攝家には執柄家よりなり、天子には王孫より位につき、將軍には公方家迚定り、恣に脇より不任例也、是により信長秀吉、天下を取給得ども、本朝之掟に任せ、終に不任、

待遇

○足利將軍表

次第	名	父	母	配偶	就職	去職	歿年	年齡	院號	贈官位
尊氏	初高氏	貞氏	清子上杉賴重女	赤橋登子久時女	曆應元年八月十一日		延文三年四月三十日	五十四	等持	從一位太政大臣
義詮	幼名千壽王	尊氏三男	赤橋登子	澁川幸子義季女	延文三年十二月十八日		貞治六年十二月七日	三十八	寶篋	從一位左大臣
義滿	幼名春王	義詮長男	紀良子石淸水善法寺通清女	前妻日野業子時光女 後妻日野康子資康女	應安元年十二月三十日	應永元年十二月十七日	應永十五年五月六日	五十一	鹿苑	
義持		義滿長男	藤原慶子三寶院坊官安藝法眼女	日野榮子資康女	應永元年十二月十七日	應永三十年三月十八日	正長元年正月十八日	四十三	勝定	太政大臣
義量		義持	日野榮子		應永三十年三月十八日		應永三十二年二月二十七日	十九	長得	從一位左大臣
義敎	初義宣	義滿四男	義持同母	前妻日野尹子重光女 後妻日野重子[illegible]	永享元年三月十五日		嘉吉元年六月二十四日	四十八	普廣	太政大臣
義勝		義敎長男	日野重子		嘉吉二年十一月十七日		嘉吉三年七月二十一日	十	慶雲	從一位左大臣
義政		義敎二男	義勝同母	日野富子政光女	寶德元年四月二十九日	文明五年十二月十九日	延德二年正月七日	五十六	慈照	太政大臣
義尚	初義熙	義政長男	日野富子	日野氏勝光女	文明五年十二月十九日		延德元年三月二十六日	二十五	常德	太政大臣
義稙	初義材 又義尹	義視(義敎子)男	日野氏政光女富子妹	細川氏成之女	延德二年七月五日	文龜元年月日未詳				
義澄	初義遐 又義高	政知(義政子)男	日野氏隆光女	日野氏永俊女	文明三年十一月二十七日		永正八年八月十四日	三十二	法住	從一位左大臣
再任 義稙					永正五年七月一日	大永元年十二月二十五日	大永三年四月九日	五十八	惠林	從一位太政大臣
義晴	幼名龜王丸	義澄長男	家女房		大永元年十二月二十五日	天文十五年十二月二十日	天文十九年五月四日	四十	萬松	從一位左大臣
義輝	幼名菊童 初義藤	義晴長男	近衞氏尚通女	近衞氏稙家女	天文十五年十二月二十日		永祿八年五月十九日	三十	光源	從一位左大臣
義榮	初義親	義維(義澄子)男			永祿十一年二月八日		永祿十一年九月	未詳	光德	
義昭	初義秋	義晴三男	義輝同母		永祿十一年十月十八日	天正十六年正月	慶長二年八月二十八日	六十一	靈陽	

〔白石小品〕武家官位ノ事

鎌倉ノ代ノ始、賴朝東國ヲ居所ト定メラレテ、天下總追捕使ヲ申請ヒ、諸國ニ守護地頭職ヲ置テ、其身ハ正二位大納言ノ大將ニテ終リ玉ヒシ事、其慮遠クマシマセシ事、誠ニイミジキ將軍ニテ

ハオハシマシケリ、實朝ノ御時、大臣ノ大將迄ニ至リ給ヒシ事、世ノ人ハ其官位、以テノ外ニ超過シ玉ヒシナド申セシモアレドモ、ミヅカラ心ニ思食ス所アリトモミヘ、又後代將軍大臣ニアゲラレ玉フ事ノ初例ナレバ、アナガチニ傾ケ申スベキ事ニハアラズ、賴經ヨリ後ノ代々ハ、皆々北條ガタメニ立ラレテ、其威靈スデニ執權ノ手ニ墮ヌレバ論ズルニタラズ、足利殿ノ代ノ初、尊氏正二位ノ大納言ニテ終リ玉ヒシ事、賴朝ノ芳躅ヲ繼レシト見ヘタレド、此御事ハムカシ承久ノ亂ニ、義時ガ其代ヲシヅメシニモ、比スベカラザル事ドモナレバ、マシテ賴朝ノ御事ニハ似ルベクモアラズ、義詮ノ御事、又論ズルニ足ラズ、義滿ノ御事、世ニハ驕恣ナルコト共オハシケル由ヲ申ス、然レドモ勇武モ父祖ニスグレ、器量モ我國ニアマル程ニモオハセシニヤ、其武、四海ノ亂ヲ定メ、其文、萬民ノ肩ヲ息フホドニハ至リ玉ハザレドモ、北朝ノ御事ヲモヨク沙汰シテ、其身モ人臣ノ位ヲ極メテ、身死シ玉フニ及ビ、太上天皇ノ號ヲモ進ラセラレ、異朝ノ天子モ、我國ノ國王ニ封ジ玉ヒ、恭獻ノ諡ヲモ贈リ玉ヘリ、將軍ノ御事ヲ公方ト申マヰラセテ、其儀洞中ノ式ヲ用ヒラル、コトモ、又武家ノ永式ヲ定メオカレシコトモ、皆々此時ニ備ハリヌレバ、コレモアナガチニ傾ケ申スベキ御事ニハアラズ、

按ニ太上天皇ノ號ノコト、或ハ現存ノ時トモ、或ハ薨後ニ贈ラレシ所也トモ申シ、又ハ此事ハタシカナラズトモ申歟、カク其事ノ詳カナラヌハ、誠ハ公家ノ人々、此事ヲ諱ンデ正シク傳ヘ玉ハヌガ故ナリ、思フニ此號、現存ノ日ニ進ゼラレシ事一定歟、其代ニ正シク室町公方トモ申シ、又御ナリナドイヒシ事ドモアリ、モシ薨後ニ贈ラレシコトナランニハ、現存ノ日ニ、カク申スベキ謂レモナシ、又此事、詳カナラズトイフ說、一向ニウケラレズ、正シク太上天皇ノ像、今モ金閣ニアリ、其事ナカラズンバ、イカデカカヽル像ハアルベキ、サレド、マヅ世ノアマネク申傳ル所ニヨリテ、コヽニモ薨後ニ贈ラレ玉ヒシ由ニハシルスナリ、

將軍親
將軍妻

其後、大臣ノ大將ニ至リ玉フ事四代、ソノ中、准后ノ宣ヲモ玉ハリ玉ヒシモアレドモ、
　義持、義敎、義政、義尙、此中義政、准后ノ宣旨アリシガ、
コレシカシナガラ、鹿苑院殿〇足利義滿ノカゲニ、カクレ玉ヒシガ故ナリトハミヘタリ、

〔足利家官位記〕等持院殿　尊氏始高氏
延文三年四月卅日薨、前權大納言、征夷大將軍、正二位、五十四歲、　同六月三日、贈左大臣從一位、〇中略　康正三年四月廿八日、贈太政大臣、

〔後愚昧記〕貞治二年正月卅日辛未、聞書披露、大樹〇足利義詮任權大納言、征夷將軍兼之不經中納言、故尊氏卿例也、

〔公卿補任〕後小松永德三年癸亥
左大臣從一位源義滿右大將、征夷大將軍、正月十六日、爲奬學院淳和院等別當、六月廿六日宣、准三宮之由宣下、

〔贈官宣下記〕菅原益長記
嘉吉元年六月廿九日甲午是日贈官宣下也、故室町殿義敎公被贈申太政大臣者也、

〔建內記〕嘉吉三年七月廿一日甲戌、卯剋室町殿征夷大將軍、左中將、從四位下、十歲、御名義勝、普廣院殿(足利義敎)御長子、御事切云々、〇中略　中山相語云、〇中略就其今度之儀、可爲左府、其謂者三御代鹿苑(足利義滿)勝定(足利義持)普廣(足利義敎)自丞相被贈大相國、兩御代等持院(足利尊氏)寶篋院(足利義詮)自大納言被贈左大臣、然者今日淺官不可過兩御代例之故也、如此治定云々、尤可然事也、

〔公卿補任〕後花園寬正五年甲申
左大臣從一位源義政征夷大將軍、八月十九日、兵仗宣下、十一月廿八日、准后宣下、

〔京都將軍家譜〕義詮　母從二位平登子〇尊氏妻　赤橋武藏守久時女、相模守守時妹、
義滿　母從一位紀良子　石淸水善法寺通淸法印女

養母從一位源幸子〇義教室　澀川刑部大輔義季女

〔本朝通鑑六十稱光一〕應永二十年三月乙未、大納言從一位藤重光薨、〇中略號裏松亞相、後小松上皇后資子、道義(足利義滿)夫人康子、義持夫人榮子、共重光姉妹、

〔尊卑分脈藤原九〕資康
　重光裏松、又號北小路、
　　義資
　　　女子從一、贈太政大臣義教公室、號觀知院、
　　　女子從一、重子、贈相國義教公室、義勝、義政等母、號勝智院、
　女子太政大臣義滿公室、准后、從二康子、北山院、後小松院准母、應永十四三五院號、同廿六十一十一崩、
　女子從一、榮子、號慈受院、贈相國義持公室、贈左大臣義量公母、
　政光改重政
　　女子從一、富子、贈相國義政公室、義熈公母、號妙善院、
　　女子贈相國義視公室、義稙公母、贈從一、
　勝光—女子贈相國義熈公室、號祥雲院、

〔蜷川親元日記〕文明十七年十一月十日丁巳、若上樣日野左大臣勝光公息女〇足利義尙室御著帶、

〔足利家官位記〕今出河殿　義視〇義稙父

同〇延德三年正月七日薨、五十三歳〇中略年月日贈太政大臣從一位、號大智院殿、

〔後法興院記〕明應十年〇文龜元年十一月廿八日癸卯、去夜被迎武家〇足利義澄之室云々、故廣福院〇日野永俊息女也、日野侍從高光、連枝之契約云々、自彼亭被出立云々、

〔足利家官位記〕光源院殿　義藤后改藤作輝

御母、後法成寺入道前關白太政大臣〇尙通公女、

〔足利季世記又久米田軍記〕光源院殿御最後之事

永祿八年五月十九日、〇中略扨モ公方ノ御母儀慶壽院殿〇近衞尙通女モ、火ノ中エ飛入失セ給フ、〇中略公方〇足利義輝ノ御臺所ハ、近衞殿〇尙通子稙家ノ御息女ナレバ、三好日向守哀レミ奉リ、近衞殿エ奉送ケリ、

〔後法興院記〕延德二年七月五日丙辰、左馬頭殿〇足利義稙宰相中將四品幷將軍等宣下也、六日、丁巳、今日諸大名幷節朔衆令參賀武家云々、攝家諸門跡可爲來十一日云々、十一日壬戌、早旦余幷右府一乘院禪師等參武家、對面遲々、其間於比丘尼寮相謁、聖門實門次兩門跡被參、曇華院有一盞歟、余可參之由自方丈被命、則余幷右府參方丈、有盃酌事、漸武家可有對面之由自申次方告示間、則參葉室在所可相待申云々、仍直向彼所、人々豫被參集、無程有對面、先准后太刀金五振進之、次大樹有對面、太刀金五振進之、次歸宅、今日葉室在所江始罷向間、遣馬代二太刀絲、命祝著之由、

〔東山殿年中行事〕慈照院殿御代長祿二年以來正月十日、將軍家〇註略出御于御對面所、御供衆申次拜賀之作法如常、〇中略公家申次出于先所、公家ト披露シテ退時、日野三條幷常伺候之公家衆一人宛御禮、〇中略申次昇御縁、閾際ニテ事畢之由言上之シテ、閉御障子テ後、入御于御便所、被改御裝束、亦出御于御對面所、殿上人出于先所、攝家其外門跡ト一同ニ披露シテ、如最前開御障子、退剋、一人宛出座御對顏、退去之節御縁迄御送、但大納言迄者無御送、淸花等ハ任槐以後モ、不及御送云々、次典藥頭幷官外記御禮畢而殿上人出于御縁、閾際事過之由言上之、則入御于常御所、前後出仕有之時ハ次第如斯、東西之出仕無之時ハ、日野三條幷武家大名以下無登營、西衆公トハ門跡攝家淸家等也、典藥頭官外記ハ雖爲東衆列、今日ハ西衆之跡ニ就出座如斯也、家中東西出仕之時ハ、官位次第出座云々、

〔康富記〕享德三年十二月廿七日甲辰、參室町殿、大樹直垂大口歲末御禮、公家門跡大勢有御參、御西向衆准后一條殿、殿下、鷹司殿、近衞殿御方御所已下濟々御參、

〔康富記〕文安六年〇寶德元年四月十四日甲子、今夜今小路殿御元服也、十六日事也云云於二條殿有其儀、右府〇二條持通爲御加冠、御名字之事、近來鹿苑院殿〇足利義滿勝定院〇足利義持御字被申請之、今度又被申、仍令付成多、〇與足利義政初名義成偏字給、

古事類苑

官位部四十四

足利氏職員一

管領 將軍嗣子執事 併入

管領ハ、初メ執事ト稱ス、將軍ヲ補佐シテ、政務ヲ統領スルヲ以テ職トス、卽チ鎌倉幕府ノ執權ナリ、

足利尊氏ノ時、高師直、上杉朝定、仁木賴章、細川清氏ナドヲ用ヰテ執事トセシ時ニ、希ニ管領ト云ヒシコトモアリシガ、猶ホ職名トハ爲サヾリシニ、斯波義將執事トナルニ及ビテ、執事トフ云フ名ノ、大名一家ノ老臣ト同ジキコトヲ嫌ヒテ、專ラ管領ト稱スルコトヽナリ、是ニ於テ始テ一定ノ職名トナレリ、應永五年、畠山基國管領トナリシヨリ後、斯波、細川、畠山ノ三家、カハル〳〵此職ニ補セラレテ、他門ノ人、望ミヲ絶ツニ至レリ、因テ當時此三家ヲ稱シテ三職トモ、三管領トモ云フ、武家ノ黜陟賞罰、悉ク此職ノ手ニ在リテ、其威權天下ヲ覆ヘリ、應仁ノ亂後ハ、管領家モ足利氏ト倶ニヨク衰微シ、終ニ其職ニ居ル者ナキニ至ル、但シ幕府ニテ元服拜賀等ノ大儀行ハルヽ時ハ、必ズ管領ノ所役アルコトナレバ、假ニ補シテ急ニ應ズレドモ、其在職ハ皆數日ニ過ギズ、此時ニ當リ大内ノ如キ、其系統ナラヌ家モ、時勢ニ乘ジテ後見ノ事ヲ掌リシコトアリシカド、眞ノ管領タルコトヲ得ザリシハ、猶ホ其職ヲ重ゼシ故ナルベシ、

管領代ハ、儀式ヲ行フノ時ナドニ方リ、當職ノ缺員アルカ、又ハ當職ノ故障アリテ、其役ニ從

ヒ難キ時ニ、假リニ定メテ置ク所ニシテ、常ニ設クルノ職ニアラズ、大カタ一門タル輩ノ勤ムベキ所役ナレド、天文永祿ノ際ニ至リテハ、舊規既ニ廢レシ故ニ、佐々木朝倉等ノ輩モコノ事ヲ掌リ、亦之ヲ管領代ト云ヒシナリ、

名稱

〔運歩色葉集〕久 管領

〔饅頭屋本節用集〕久人倫 管領

〔碧山日錄〕長祿四年六月十八日癸亥、春公是日招致管領、(畠山義就)以相公(足利義政)命、布之於天下、爲管領、

職掌

〔壒囊抄〕七 施行ヲシ行共ヨムハ何事ゾ、管領ト申ハ近比ノ事也、本ハ執事ト云キ、大御所(○足利尊氏)ノ御時、高師直ノ朝臣、久ク此職ニアリシ、執事ト號ス、(○中略)昔ハ高、上杉ノ人々ノ役タリキ、近比御一族ノ態ト成テヨリ以來、管領ト申也、鹿苑院殿(○足利義滿)ノ御代ノ初方、斯波修理大夫高經、號靈源院法名道朝、始テ此職ヲ承リ給時、再三固辭シ給シカバ、只天下ヲ管領シテ御計候ヘト仰出サレシカバ、領狀被申テ、四男治部大輔義將ヲ以テ此職ニ居給ト云云、號法花寺法名道將、後ニ右衛門督ニ任ジ、正四位下ニ叙セラル、世ニ勘解由小路金吾ト云是也、然ルニ三男左衛門佐氏頼ハ、當家ニ彼職ニ居スル事、此家ノ瑕瑾也トテ、出家遁世シ給ヒケルト云リ、爰ニ或人ノ云、世ノ風聞ニハ、今ノ如クナレ共、實ハ非爾、高經ニ五男有、嫡子家長ハ、陸奧守トシテ奧州ニ下向、次男左京大夫氏經ハ、筑紫探題トシテ九州ニ下向、三男左衛門佐氏頼、四男治部大輔義將、五男修理大夫義種也、然ニ兄二人无在京間、氏頼惣領タルベキ歟ト思給、又京極道譽禪門、聟ニ取テモテナシケリ、然レ共其器用有ル故ニ、親父、義將ヲ以テ管領トシ、惣領ノ躰タル間、述懷ノ義ヲ以テ遁世シ給ガ、外聞ヲ彼事ニ披露有ケルトナン、遂ニ江州山上ノ邊リ昔ノ寺ニシテ圓寂ト云云、其ヨリ以降、御一族ノ職ト成テ管領ト申也、關東モ管領ト云共、上杉久ク此職也、

〔世鏡抄〕第八管領職之事

專祭禮、敬寺塔、諸家ヲ導、萬民ヲ哀ミ、二六時不寬心、君ヲ恐、可誅誅シ、可罰罰シ、以小理ノ塵、可埋大非谷也、可罰不罰、魔王亂入之儀也、不可罰罰、五逆無間之科也、可誅誅シ、可罰罰スルヲ正直正路ノ成敗トハ云也、雖無當忠、先々ノ忠節ノ末類ナラバ、所領安堵アルベキ也、但シ重テ有罪バ、依時儀可罰之、又當代在忠、先代无忠侍ヲバ、只今ノ忠、ニ合テ可扶持之也、相構テ相構テ、一毛一塵程モ無道ノ儀不可有、〈〇中略〉能々守之管領、不守之人非人也、

〔總見記〕〈六〉室町將軍御家沈淪事

扨公方御家來ノ公家十六人ヲ昵近トナヅク、其名稱一々記スニイトマアラズ、扨又武臣ノ面々ニハ、武衞、細河、畠山ノ三家、カハルがハル管領ニ任ジ、次ニ京極、赤松、山名、一色ノ四家、是ヲ四職ト號シテ、天下ノ政事ヲ評議ス、夫管領ト云ハ、尊氏卿ノ御時ノ執事職ノ事ニテ、天下ノ諸侯大小名ノ支配人也、四職ト云ハ、同ジ御時侍所ノ別當ノ儀也、近臣諸士ノ下知ヲナシテ、洛中ノ警固ヲ勤ム、此外御內、外樣ノ面々、諸家諸役ノ輩迄、十一段ニ位階ヲ定メ、公方ヲ守護シ奉テ、天下ヲ安治セシメケリ、

〔諏訪大明神畫詞〕〈下〉嘉元の比、當國〈〇信濃〉の御家人小坂孫三郎盛直、重き科有て、硫黃が島へ流されたりけるが、當社御社山の酒室の頭役人なり、先規に任せて免除あるべき由懇き申けれども、其比執權時村朝臣と、越訴管領宗方、確論の事ありて、神訴も空しかりける、

〔保曆間記〕高時管領長崎入道、老耄ニ依テ、子息長崎左衞門尉高資ニ彼ノ管領ヲ申付、〈〇又見太平記〉

〔旅宿問答〕守邦將軍御時、元弘三年癸酉五月、足利治部大輔尊氏出世シテ、北條ノ末孫平高時ヲ追伐シテ天下ヲ被召、仍二位尼〈〇源頼朝妻政子〉時ヨリ守邦迄ハ、關東モ京都モ兩人共行也、其時ノ關東ノ兩管領ハ相模守高時、一人ハ右馬頭茂時也、元弘三年五月十八日、高時父子山內自害シ、茂時ハ、

三管領

廿二日於殿中自殺ス、此時東一返シテ成御當家〇足利ノ代云々、

〔庭訓往來〕問注所者、永代沽券、安堵、年紀放券、奴婢雜人券契、和與狀、負累證文等謀實糺明之、管領。寄人、右筆、奉行人等、評判也、奉行人得差符方之與奪、當參仁者、成書下、下國之時者、下奉書、而無音之時者、下使節召文、訴陳狀、相對當所執事年々管領奉行人等、可致問答披露沙汰、就探題之異見所加下知也、侍所者、謀叛、殺害、山海兩賊、強竊二盜、放火、刃傷、打擲、蹂躙、勾引、路次狼藉、鬪諍、喧嘩等也、管領執事奉行人撿斷之、

〔武家名目抄〕職名四ノ三按、管領といふ意は、もと事をすべふさぬるいはれにて、正しき職名にもあらざりければ、定まれるさなもなく、一所の長官の稱にては有しなり、〇中略太平記、長崎高重最期條にも、前相摸守高時の管領に、長崎入道圓喜が嫡孫次郎高重と見えたり、此長崎氏は、世々北條家の家令にて、陪臣の如き人なるをも猶管領といひしと見え、又今川了俊書札禮に、我等が事は、既九州の管領の時分に候云云といふことあり、これは了俊九州探題たる時の事を云しなり、これらによりて、もと一時の稱呼なりしをさるべし、

〇案ズルニ、管領トハ、當時世上普通ノ言ニシテ、或ハ守護ヲ指シテ云フアリ、明德記ニ、山名氏清ヲ四ケ國ノ管領ト云フガ如キ是ナリ、或ハ其掌ル所ヲ指シテ云フアリ、式目新編追加ニ、國司所管ノ地ナル刃傷殺害人ノ事ヲ、守護ガ權ヲ侵シテ、之ヲ掌ルコトヲ陳ベテ管領ト云フガ如キ是ナリ、或ハ土地ニ就キテ云フアリ、椿葉記ニ、長講堂領、上皇御管領ト云ヒ、式目新編追加ニ、甲乙人等稱沽却質券之地猥管領ト云フガ如キ是ナリ、又同書ニハ、管領一寺トモ云ヘリ、然レバ執事ヲ管領ト云フハ、當時世上ノ稱ヲ、襲用シタルノミニテ、別ニ設ケタル名ニハアラザルコト知ルベシ、

〔春の夜の夢〕應永五年十一月、前將軍道義〇足利義滿畠山基國をして管領とす、これより後、斯波、細川、

畠山、かはる〳〵管領となりぬる、是を三管領といふ、又山名、一色、赤松、京極、かはる〳〵侍所をつかさどる、これを四職といへり、管領四職の權威、次第につよくなりゆくまゝに、將軍家の威光うすくなりもてゆきぬる、すゑの世に國家亂れべき、これなんはじめなるべし、

○按ズルニ、甲陽軍鑑ニ、都ノ公方ニ義詮公サマニ、武衞、細川、畠山、是三管領也、一式、山名、京極、赤松、是又四職トミエタレドモ、義詮ノ時ハ、未ダ是職ヲ置カズ、粗笨辨ヲ竢タズ、

〔南朝紀傳下〕此年、〇應永五年義滿公定武家三職七頭、准朝庭五攝家七清花、所謂三職、斯波、細川、畠山、號三管領、執事別當也七頭、山名、一色、土岐、赤松、京極、上杉、伊勢等也、其中、山名、一色、赤松、京極爲京都奉行、侍所別當號四職、奏者、伊勢守貞行也、又武田、小笠原兩人、弓馬禮式奉行、又兩吉良、今川、澁川等、爲武者頭、

〔臥雲日件錄〕長祿四年閏九月十六日、季瓊話、就管領門有落書、蓋畫鐵輪、去二ケ足存一足、置于碁盤上、其意武衞、〇斯波畠山、細川、此三家謂之三職、擬三足鐵輪、今武衞畠山皆亡、此次細川御番也、碁盤其晉相類故也、

○按ズルニ、本書三職トハ、卽チ三管領ノコトナリ、文祿淸談ニ三職ト云ハ、斯波、細川、畠山、謂之三職家、是則天下棟梁之臣也、此外ニ四職ト云有リ、委不及記、皆貴キ武臣也ト見ユ、

〔東山殿日記〕慈照院殿御代三職御相伴衆以下事但長祿三年以來

一三職

細川右京大夫勝元朝臣當管領也

斯波左兵衞佐義敏朝臣

畠山右衞門佐義就

〔應仁記一〕武衞家騷動之事附畠山之事

文正元年ノ夏四月ニ、武衞ノ義敏ト義廉ト、家督ノ諍ヒ出來テ騷動ス、其故ハ武衞德領千代德丸、

長祿三年卯月早世セラレシカバ、家督相續ノ息男ナクシテ、大野修理大夫持種一男義敏ヲ執立、任二右兵衛佐一、家督ヲ相續ス、然レドモ無レ程家老ドモト不和ニ成リ、甲斐、朝倉、織田ノ三人トモニ、新座ノ主ノ舊代ノ家長ニ對シ、加樣ニワガマヽ有ベキ事ナラズ、是ニテハ武衛ノ家督、三職ノ座ニ居エベカラズト評定シテ、伊勢守貞親ニ頼テ訴フ、貞親ノ妾ハ甲斐ガ妹ナリケレバ、内縁ヲ以テ頻リニ申シケル間、不レ移二時日一歷二上聞一、卽義敏ヲ令二勘道一、澁川治部少輔義廉ヲ取立テ、任二斯波右兵衛督一、居二三職座一ケリ、〇中略内裏ニハ元日政ト朝拜ノ節會ヲ行ヒ、武家公方ニモ三管領四職ヲ先トシテ、近習外樣ノ人々、色裝ノ粧ヒヲ刷、恒例ナレバ、垸飯ヲバ當管領政長被レ勤レ之コト嚴重也、又翌日ハ二日、故ヨリ管領御成始ナレバ、其設ヲ用意シケルニ、山名ガ讒言有リテニヤ、明日ノ御成ハ被二思召一子細アル條、其儀有マジキ也、

〔足利季世記四三好記〕武衛家傳ノ事

抑御當家室町殿ト申シ奉ルハ、尊氏公建武ノ比ヨリ、天下御草創アリテヨリ、義詮公義滿公ニ至テ、三代ニ一天悉ク治リ、四海ノ外マデ、浪風靜ナリシカバ、後々末代マデ、此御末天下ノ主トシ、永代御安全ナルベシト思ハヌ人モナカリケルニ、イツノ比ヨリ、カク亂レケルゾト云ニ、三管領ノ家末ニナリテヨリ以來如レ此、三管領トハ武衛細川畠山ナリ、武衛ト申ハ足利尾張守高經ヨリ初マル、此御家代々兵衛督ニ任ジ給フ故ニ、武衛ト號ス、稱號ヲバ斯波殿ト申ス、高經ノ一男家長ハ、奧州ノ大將軍トシテ、國司〇北畠顯家ノ合戰ニ、杉本〇鎌倉ニテ御自害、其子孫奧州ニ御坐ス、其弟二人アリシカドモ家督相續ナクシテ、義將末子ニアリ給ヘドモ管領職ニスハリ給フ、其子義重號二興德寺殿一ト、其子義孝、其子義淳、心照寺殿、其子義豐御早世ナリシカバ、父義淳再任アリ、御一族大野左衛門佐滿種ノ御子義鄕ヲ養子トシテ執事ヲユヅリ給フ、其御子千代德丸殿御早世アリシカバ、御家督相續ノ子ナクシテ、御一門大野ノ大夫持植ノ御子義敏ニツガシム、然レドモ甲斐、朝倉、

織田等ノ被官衆是ヲキラヒ、澁川左兵衛佐殿御子義廉ヲ養子トシテ家督ニスヱ、義敏ヲ追出ス、是ニヨリ應仁ノ亂出來ケリ、

畠山家傳ノ事

畠山ト申ハ、根本武州ノ秩父ノ畠山ナリ、然ルニ畠山重忠ハ、北條時政ノ聟ナリ、重忠讒言ニヨリテ生害ノ後ニ、カノ後室其知行ヲ領ス、足利義氏ノ御弟上總二郎義純ニ彼後室ヲ合テ相續ス、コレヨリ彼家源氏ニテ、代々足利ノ御一族ナリ、六代目ノ畠山殿ヲ尾張守義深ト云、初テ三管領ノ其一ナリ、其子基國、法名德元、一男滿家、號眞觀寺ト、法名道端、其弟滿慶、能登守、北國ノ畠山ノ先祖ナリ、道端ノ御子持國、法名德本、此管領ノ時御子ナクシテ、舍弟持富ノ御子政長ヲ猶子トシテ家督ヲユヅリ給フニ、實子義就誕生有テ政長ヲキラヒ、義就ニ家督ヲツガセ、是又應仁ノ亂ノ基ナリ、

細川家傳ノ事

細川殿先祖ハ、昔賴朝ノ時分、木曾方ノ大將軍トシテ、西海水島合戰ニ打死シケル、矢田判官義晴ノ末孫ナリ、五代ノ孫ヲ細川八郎公賴ト云、弟ヲ賴貞ト云、賴貞ノ子孫、卿ノ房定禪、其弟陸奧守顯氏、尊氏公ノ御代忠功アリ、今ノ細川奧州播州ノ先祖也、公賴ノ御子阿波守和氏、其子相州淸氏、共ニ尊氏ヱ忠功アリ、淸氏ハ執事ヲ職ニスハリケル、和氏ノ御弟讃岐守賴春、カクレナキ弓ノ上手ニテ、元亨ノ亂後ニ、公家御一統ノ御弓初ハ此人ノ勤仕シケル、賴春七條川原ノ軍ニ打死シケルニ、其子右馬頭賴之、尊氏義詮二代ノ御代ニ又忠節アリ、三代目鹿苑院殿ノ御代ニ、執事トシテ天下安全ナリシ、武藏守入道常久是ナリ、其弟賴有刑部大輔、今ノ播磨守ノ先祖ナリ、賴有ノ弟賴元、右京大夫、常久ノ跡ヲツギ執事トナル、其弟詮春、號法性院殿、今ノ下ノ屋形讃岐守殿ノ先祖ナリ、詮春御弟滿之、阿波守、今ノ和泉守護、幷備中ノ守護ノ先祖ナリ、右京大夫賴元ノ御子滿元、右京大

夫、岩栖院殿、執事ニスハリ、子ナクシテ御弟ノ持元ニユヅリ、是モ子ナクシテ御弟ノ持之ニユヅリ給フ、弘源寺殿是レナリ、其御子勝元、龍安院殿、應仁ノ亂ノ根本人也、カヤウニ三家替リ替リ執事ヲ持給ヒテ、室町殿ノ御名代ニ、天下ノ御支配アリケル、勝元ノ御子大心院殿政元ニ御子ナクシテ、澄之澄元御養子トシテ、カク天下ノ大亂アリシナリ、

○按ズルニ、本書三管領ノ家系ヲイフ事誤リ多シ、今參考ノ爲、左ニ略系ヲ示ス、

斯波高經―義將(家號斯波)―義教(初名義重)―義淳―義廉(義子、實澁川義俊孫義鏡子、)

畠山義深―基國―滿家―持國―政長(義子、實弟持富子、)

細川賴春―賴之
　　　　　賴元―滿元―持之―勝元―政元―澄元(義子、實義春子、)―晴元
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　高國(義子、實政春子、)―植國

〔執事補任次第〕高武藏守師直(右衛門尉師重法名道忍息)建武三年補任、至觀應二十六ケ年、號眞如寺、

〔梅松論 下〕將軍ハ、○足利尊氏御船、下御所○足利直義は、陸地を御發向治定して、則御手合あり、御船には執事師直、關東京都より供奉の宿老兩國の輩を船に乘せられて御發向有べし、

〔祇園執行日記〕貞和六年○觀應元年七月廿八日、鎌倉左馬頭殿、幷執事高武州直○師發向濃州、

〔太平記 二十六〕妙吉侍者事附秦始皇帝事

近來左兵衛督直義朝臣、將軍ニ代テ天下ノ權ヲ取給シ後、專ラ禪ノ宗旨ニ傾テ、夢窓國師ノ御弟子ト成リ、○中略或時首楞嚴經ノ談義已ニ畢テ、異國本朝ノ物語ニ及ケル時、吉侍者、左兵衛督ニ向テ被申ケルハ、○中略古モ今モ、人ノ代ヲ保チ家ヲ失フ事ハ、其內ノ執事管領ノ善惡ニヨル事ニテ候、今武藏守○高師直越後守○師直弟師泰ガ、振舞ニテハ、世中靜リ得ジトコソ覺テ候ヘ、我被官ノ者ノ恩賞

ヲモ給リ、御恩ヲモ拜領シテ、少所ナル由ヲ歎申セバ、何ヲ少所ト歎給フ、其近邊ニ寺社本所ノ所領アラバ、境ヲ越テ知行セヨカシト下知ス、又罪科有テ所帶ヲ被沒收タル人、以緣書執事兄弟ニ属シ、如何可仕ト嘆ケバ、ヨシ〳〵師直ソラシラズシテ見ンズルゾ、縱如何ナル御敎書也トモ、只押ヘテ知行セヨト成敗ス、

〔太平記二十七〕左兵衞督欲誅師直事

左兵衞督（足利直義）ハ、師泰ガ大勢ニテ上洛スル由聞給テ、此者ガ心ヲトラデハ叶マジ、スカサバヤト被思ケレバ、飯尾修理進入道ヲ使ニテ、武藏守（師直）ガ行事、萬短才庸愚ノ事アル間、暫ク世務ヲ綺テ止ル處也、自今後ハ、越後守（師泰）ヲ以テ管領ニ居セシムル者也、政所以下ノ沙汰、毎事慇懃ニ沙汰セラルベシトゾ委補セラレケル、

〔太平記二十九〕師直以下被誅事附仁義血氣勇者事

將軍已ニ御合體ニテ上洛シ給ヘバ、執事兄弟モ、同遁世者ニ打紛テ、無常ノ岐ニ策ヲウツ、（中略）此人天下ノ執事ニテ有ツル程ハ、何ナル大名高家モ、其ヱメル顏ヲ見テハ、千鍾ノ祿、萬戸ノ侯ヲ得タルガ如ク悅ビ、少シモ心ニアハヌ氣色ヲ見テハ、薪ヲ負テ燒原ヲ過ギ、雷ヲ戴テ大江ヲ渡ガ如ク恐レキ、

〔執事補任次第〕仁木左京大夫賴章（次郎義勝息）（觀應二年補任、至延文三年八ケ年、號地持院、四品、）

〔太平記三十二〕直冬上洛事附鬼丸鬼切事

山名父子七千六百餘騎、前後十里ニ支テ、丹波國ヲ打通ルニ、仁木左京大夫賴章、當國ノ守護トシテ敵ヲ支ン爲ニ在國シタル上、今ハ將軍（足利尊氏）ノ執事トシテ、勢ヒ人ニ超タレバ、丹波國ニテ、定テ火ヲ散ス程ノ合戰五度モ十度モアランズラント覺ヘケルニ、（下略）

〔太平記三十三〕京軍事

京中ノ合戰ハ、如此數日ニ及デ、雌雄日々ニ替リ、安否今ニアリト見ヘケレ共、時ノ管領仁木左京大夫頼章ハ、一度モ桂川ヨリ東ヘ打越ズ、

〔執事補任次第〕細川相摸守清氏〈阿波守和氏息〉〈延文三年十二月補任、至康安元年、四ヶ年、〉

〔御評定着座次第〕延文三年十二月三日

御座〈西面〉　北座　管領清氏〈細川〉朝臣、佐渡判官入道道譽

〔若狹國税所今富名領主代々次第〕一細川相摸守清氏〈其時は天下の御管領〉　文和三年九月廿七日に御下向有て、神宮寺に暫御座あり、〈康安元年十月に御得替、國落て和泉のさかひへ御入なり、〉

〔太平記三十七〕尾張左衛門佐遁世事

都ニハ細川相摸守〈○清氏〉敵ニナリシ後ハ、執事ト云者ナクシテ、毎事叶ハザリケル間、誰ヲカ其職ニ可置ト評定アリケルガ、此比時ヲ得タル、佐々木佐渡判官入道道譽ガ聟タルニ依テ、傍ヘノ人人皆追從ニヤ申ケン、尾張大夫入道〈○足利高經〉ノ子息、左衛門佐〈○氏頼〉殿ニ增タル人アラジト申ケレバ、宰相中將〈○足利義詮〉殿モ心中ニ異儀無シテ、執事職ヲ内々此人ニ定メ給ヒニケリ、父ノ大夫入道ハ、元來當腹ノ三男、治部大夫義將ヲ寵愛シテ、先腹ノ兄二人ヲ世ニアラセテ見ントモ思ハザリケレバ、左衛門佐執事職ニ可居由ヲ聞テ、樣々ノ非ヲ擧テ、種々ノ咎ヲ立テ、此者曾ヲ其器用ニ非ル由ヲゾ宰相中將殿ヘ申サレケル、中將殿モ人ノ申ニ附安キ人ニテ御座ケレバ、ゲニモ見子不如父、サラバ當腹ノ三男ヲ面ニ立テ、幼稚ノ程ハ、父ノ大夫入道ニ世務ヲ執行サスベシト宣ヒケル、左衛門佐是ヲ聞テ、父ヲヤ恨ニケン、世ヲウシトヤ思ヒケン、潛ニ出家シテ、イヅチトモナク迷出ニケリ、

〔執事補任次第〕治部大輔義將〈斯波此時有管領號〉〈康安二年(貞治元年)七月補任、至貞治五年、五ヶ年、〉

左衛門督義將〈斯波左衛門佐〉〈康曆元年再任、至明德二年、十三ヶ年、〉

斯波左衛門督號法花寺、

義將朝臣明德四年六月五日補任、已上三ヶ度、至應永五年六ヶ年、

〔尊卑分脈十三源氏〕義將斯波流左衛門佐正五下(中略)右衛門督、昇殿、治部大輔、管領、第一自貞治元至同五、第二自康曆元至明德二、第三自明德四至應永五、此時改執事號管領、

〔太平記三十九〕神木入洛事附洛中變異事

尾張修理大夫入道道朝○高經ハ將軍御兄弟合戰ノ時、慧源禪門ノ方ニ屬シテ打負シカバ、斷胸ヲ不散、暫クハ宮方ニ身ヲ寄ケルガ、若將軍義詮朝臣ヨリ樣々幣禮ヲ盡シテ、頻ニ招請シ給ケル間、又御方ニ成テ、三男治部大輔義將ヲ面ニ立テ、執事ノ職ニ居、武家ノ成敗ヲゾ意ニ任ラレケル、

諸大名讒道朝事附道譽大原野花會事

抑此管領職ト申ハ、將軍家ニモ宗徒ノ一族也ケレバ、誰カハ其職ヲ猜ム人モ可有、又關東ノ盛ナシリ世ヲモ見給タリシ人ナレバ、禮儀法度モ、サスガニ今ノ人ノ樣ニハアルマジケレバ、是誠ニ武家ノ世ヲモ治メンズル人ヨト覺ケルニ、諸人ノ心ニ違フ事ノミアリテ、終ニ身ヲ被失ケルモ、只春日大明神ノ冥慮ナリト覺タリ、諸人ノ心ニ違ケル事ハ、一ニハ近年日本國ノ地頭御家人ノ所領ニ、五十分一ノ武家役ヲ毎年被懸ケルヲ、此管領ノ時ニ、二十分一ニナサル、是天下ノ先例ニ非ズト憤ヲ含ム處也、○中略懸ル處ニ、柳營庭前ノ花、紅紫ノ色ヲ交テ、其興無類ケレバ、道朝種々ノ酒肴ヲ用意シテ、貞治五年三月四日ヲ點シ、將軍ノ御所ニテ花下ノ遊宴アルベシト被催、殊更道譽ニゾ相觸ケル、道譽兼テハ可參由領狀シタリケルガ、態ト引違ヘテ、京中ノ道々ノ物ノ上手ドモ、獨モ不殘皆引具シテ、大原野ノ花ノ本ニ、宴ヲ設ケ席ヲ嚴テ、世ニ無類遊ヲゾシタリケル、○中略此遊、洛中ノ口遊ト成テ、管領ノ方ヘ聞ヘケレバ、是ハ只我申沙汰スル、將軍家ノ花下ノ會ヲ、カハユゲナル遊戲ト欺ケル者也ト、安カラヌ事ニゾ被思ケル、乍去是ハ心中ノ憤ニテ、公儀ニ可出咎ニモアラズ、哀道譽、何事ニテモ就公事犯法事アレカシ、辛ク沙汰ヲ致サント心ヲ付テ被待ケル處ニ、二十分一ノ武家役ヲ道譽兩年マデ不沙汰ノ間、管領スハヤ究竟ノ罪科出來ヌト悅テ、道譽ガ

近年給リタリケル攝州ノ守護職ヲ改メ、同國ノ舊領多田莊ヲ沒收シテ、政所料所ニゾ成タリケル、依之道譽ガ鬱憤不安、如何ニモシテ此管領ヲ失ハヤト思テ、諸大名ヲ語フニ、六角入道ハ、當家ノ惣領ナレバ無子細、赤松ハ聟也、ナジカハ可及異儀、此外ノ大名共モ、大略ハ道譽ニ不諂ト云者無リケレバ、事ニ觸テ、此管領天下ノ世務ニ叶マジキ由ヲ將軍家ヘゾ讒シ申ケル、

〔細々要記 六〕貞治六年十月上旬、細川右馬頭頼之執事職ヲ司ドル、

〔執事補任次第〕細川右馬頭頼之讚岐守頼春息貞治六年十一月補任、應安元年四月十五任武藏守、同四年十月廿四轉相摸守、同五年辭之、還任武州、至康曆元年十三ケ年、

〔太平記 四十〕細河右馬頭自西國上洛事

爰ニ細河右馬頭頼之、其比西國ノ成敗ヲ司テ、敵ヲ亡シ人ヲナツケ、諸事沙汰ノ途轍、少シ先代貞永貞應ノ舊規ニ相似タリト聞ケル間、則天下ノ管領職ニ令居、御幼稚ノ若君〇足利義滿ヲ可補佐ト、群議同赴ニ定シカバ、右馬頭頼之ヲ武藏守ニ補任シテ執事職ヲ司ル、外相內德、ゲニモ人ノ云ニ不違シカバ、氏族モ是ヲ重ジ、外樣モ彼命ヲ不背シテ、中夏無爲ノ代ニ成テ、目出カリシ事共也、

〔花營三代記〕貞治七年〇應安元年四月十五日、左馬頭殿〇足利義滿御元服、

役人　加冠細川右馬頭頼之于時管領、今日任武藏守、〇中略

當日御雜掌管領　御劒役細川右馬助、御鎧御馬以下御太刀一振、以吉見左京亮被下管領、

〔後愚昧記〕應安二年四月廿日、日吉神輿入洛事、此間雖有風聞、度々延引、今日遂以有入洛之儀、〇中略執事以下大名等在將軍亭云云、又近江守護入道佐々木崇譽家人等警固內裏、又執事細川武藏守頼之勢少々分、近內裏云云、

〔花營三代記〕應安三年四月九日、御社參、〇中略

役人〇中略次近習人々、〇中略次執事武州、〇細川頼之

〔花營三代記〕應安四年五月十九日、夜武州號令辭退管領職、被赴西山西芳寺、仍御所御出、幷赤松律

師坊以下相向之間、武州自路次被歸畢、

〔後深心院關白記〕應安四年五月廿日壬申、曉更人告來云、大樹〇足利義滿并管領〇細川賴之相共俄赴西芳寺、人不知其故云々、驚聞之處、無程皆歸洛云々、天明之後、相尋子細處、南方進發軍士等不隨命、不渡河之間、憤怨之餘、管領爲遁世赴西芳寺之由風聞、仍大樹馳向制止、相伴歸洛云々、

〔後深心院關白記〕應安五年九月廿五日己巳、傳聞相摸守賴之朝臣、有違所存之子細歟之間、辭重職可令下向四國之由申暇之間、將軍再三止之、猶固辭之間、行向相誘之間、可罷止之由令領納云云、或云、是春屋和尙歸住嵯峨事、人々有籌策之旨之由、賴之聞之令鬱結云云、

〔後愚昧記〕應安六年十二月八日、大樹〇足利義滿佛事令結願者、世上可令擾亂之由、閭巷說有之、隨而諸國軍勢等悉馳上京都由風聞、是山名右衞門佐入道〇氏淸與執事〇細川賴之不和之故云云、其間說縱橫、不遑委記、然而無殊事、兩方和平之間、後日軍兵等下國云云、

〔後愚昧記〕應安七年六月十六日、今曉大樹〇足利義滿并執事武藏守賴之等、沒落之由風聞、凡驚耳之處無其儀、北面三品尼大樹母儀出淸水坂花三品比丘尼居住所也、以遁世之儀、着禪衣了、仍大樹并執事等馳向之間、天下鼓騷、言語道斷事也、〇中略或說懇望大樹并執事沙汰之條、及此企云云、

〔後愚昧記〕永和五年〇康曆元年二月廿日、今夜世上騷動、〇中略不知何事、巷說云、執事賴之朝臣也、諸大名等可退治彼朝臣之結搆等有之、依之如此云々、　五月三日、後聞云、武家執事事、左衞門佐號玉堂、故修理大夫〇高經法師子斯波義將領狀、此間治定了云々、

〔花營三代記〕永和五年〇康曆元年閏四月十四日、以二階堂中務少輔入道并松田丹後守爲御使、可下國之由就被仰、武州〇細川賴之卽沒落、　十六日、自西宮乘船、渡淡州之由有其聞、武州於京都出家云云、廿八日、左衞門佐義將可被爲管領之由被仰之、

〔櫻雲記〕天授五年北京康曆元年閏四月、武家ノ執事細川賴之、其職ヲ止テ、四國ニ至テ剃髮シ、常久ト號ス、

斯波義將執事職ニ補ス、

〔鎌倉大草紙 上〕康暦元年五月二日、京都にて、斯波治部大輔義將に管領職を被仰付云云、

〔細川系圖〕細川頼之彌九郎右馬頭、武藏守、生國參河、克文克武、異跡甚多矣、貞治元年、寶篋院義詮疾甚、遣使徵頼之於讚岐、不俟駕而至、義詮指幼君謂頼之曰、我今爲汝與一子、亦指頼之謂幼君曰、爲汝與一父、莫違其教、幼君乃鹿苑院義滿也、遂受顧托、任管領職者十三年也、○名○曰○武○州○管○領○、後有海南行、自作詩曰、人生五十愧無功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅掃難盡、去尋禪榻臥清風、義滿不忘嚴父之旨、外雖如謫遷島嶼者、枉遣入讚岐、以起高臥、再任管領職、

〔今川記〕其比公方も管領も政道正しからざりしを、細川前の管領常久なげき給ひけれど、讒人おほくて、今は常久のいさめも用ゐたまはざりければ、世のたゞしからざるを恨み、阿波國へ隱居し給はんとて、詩一首作り給ふ、○詩見上文細川系圖、故略、

〔東寺長者補任〕明德二年三月十三日、左衞門督義將朝臣、辭武家管領、下向越前了、四月三日、前武州禪門常久上洛、舍弟右京大夫〻〻○細川頼元爲武家執事、

〔執事補任次第〕武藏前司入道常久頼之號永泰院、明德二年四月八日再任、○法○躰○任○職○之○始○也○、至同三年二个年、再任三个度ナリ、

○按ズルニ、本書明德二年四月、頼之再任トアルハ、恐ラクハ誤リナリ、前條引ク所ノ東寺長者補任ノ説ヲ是トス、

〔明德記 上〕細川ノ武藏入道常久ハ、四國ヨリ中國ニ押渡リ、備後國ヲ退治シテ、其翌年ニ上洛シ、幷管領ノ職ニ居シ給ヒシカバ、天下悉歸伏シテ、權勢萬人ノ上ニ出ツ、御所樣モ政道ノ事ハ、毎事武州禪門ニ讓ト仰下サレシカバ、理民安世ノ儀ヲ口申沙汰シ給ヒケル、

〔執事補任次第〕畠山左衞門佐基國尾張守義深息、法名德元、號長禪寺、應永五年八月五日補任、至同十二年、八ヶ年、

斯波道孝長男、于時十一歳、依爲幼少、祖父法花寺代孫藏列形云々、

治部大輔義淳應永十六年八月十日補任、至同十七年、二ヶ年、

頼元長子、法名道觀、號岩栖院、

細川右京大夫滿元應永十九年四月十補任、至同廿八年七月廿九上表、十ヶ年、

〔若狹國稅所今富名領主代々次第〕同年○應永二十年三月己丑、小濱着岸之鐵船之公事、自內裏可有御直納之由、依武家被仰出之、當御管領細川右京大夫殿御敎書、應永十九年十二月三日、被成一色殿了、

〔花營三代記〕應永廿八年七月廿九日庚寅、管領細川右京大夫入道道觀、○滿元官領職上表納之、

〔薩戒記〕應永卅三年十月十七日丁丑、抑前管領入道右京大夫滿元朝臣逝去、三ヶ日內、興遊皆憚之、其故當時彼輩執政之器也、尤不可異古昔大臣歟、

〔椿葉記〕正月○正長元年十八日、內府○足利義持薨じ給ぬ、勝定院と稱號す思ひよらずいとあさまし、今は御子もなければ、御相續の事如何とさたあり、管領畠山、○滿家諸大名評定して、勝定院の御連枝の中をば、八幡の寶前にて御鬮をとりけるに、青蓮院門主、勝定院舍弟義圓、卽義敎、○御鬮におりけるとなん、將軍になし奉りぬ、○又見喜連川判鑑

〔執事補任次第〕左兵衛佐義淳、斯波號心源寺正長元年八月廿八日拜任、同日御評定始御沙汰始被行之、貞治六年例云云、至永享四年五ヶ年、

〔看聞日記〕永享元年八月十七日、昨日管領○畠山滿家上表也、勸解由小路武衛○斯波義淳可再任云云、二十四日、管領武衛、今日被補云云、

〔建內記〕正長元年十月十七日、播州高家庄直務、幷都多村、及建聖院五辻領賀茂庄加地子等事申狀、今朝付管領○斯波義淳乞賦之處、今日難為賦日、依御出管領被共之間延引云々、

〔管見記〕嘉吉元年六月廿六日辛卯、今朝將軍○足利義敎息義勝八歲○為繼嗣之儀、移任彼第、先以珍重々々、每事管領細川右京大夫持之輔佐云々、　七月六日庚子、今日於等持院有將軍○義敎茶毗、若公不被出、

〔嘉吉記〕嘉吉二年正月、義勝元服、一條持基公加冠、任少將從四位下征夷將軍、畠山持國為管領、依為義勝幼弱、專行天下政務、仍管領相代引善綱云々、

〔康富記〕嘉吉二年八月廿二日庚戌、畠山左衛門督入道○持國管領職之出仕始也、○中略出立之儀衣袴

也、乘網代輿、立檢騎馬十人、左右五香也、淺黄直垂如常、　十月十三日庚子、管領畠山左衞門督入道、雜訴之賦、自今日被出之、飯尾六郎左衞門尉、木澤左野等三人談合、書出目安之銘云云、每月六个日二七可被出也、今月二日管領寢日也、去七日者、飯尾達例日也、昨日亦例日也、仍自明日三个日、連日可被出之由風聞、廿七日甲寅、管領畠山亭、諸人爲取雜訴賦群參、賦事一日不過廿通、於所望之仁者、及數百人之間、每日作鬮、廿賦所望之訴、人々兼令取之、充人書給賦云云、此四五日如此云云、此儀元來無事也、雖然爲訴人殊勝々々、

〔管見記〕嘉吉三年二月九日、抑塔森船渡代官山本彌次郎、依爲德政張本人、彼德政、取返永代沽却地云云、爲管領成敗、澤井新藏人搦捕之、昨日誅之云云、

〔執事補任次第〕細川右京大夫勝元持之長子文安二年四月廿四日補任、(中略)同六年四月十四日武藏守、同廿九日辭之、京兆如元、寶德元年九月五日上表、五ヶ年、享德元年十二月廿三日再任、至寛正五年、十三ヶ年、四品、依慈照院(足利義政)御元服也、

〔南方紀傳〕下文安二年三月、畠山持國去職、細川勝元爲管領、

〔執事補任次第〕細川右京大夫勝元持之長子十六才文安二年四月廿四日補任、(中略)寶德元年九月五日上表、五个年、

〔康富記〕文安四年六月一日辛酉、參鷹司殿、又參文第、令語給云、執柄事、一條殿可有御再任候由、武家被執奏申、細川右京大夫爲管領職被申入之者也、　六年○寶德元年三月廿一日、辛丑先年北野社御遷宮時、畠山爲管領職有執奏、長與宿禰被補官務了、其年中管領職替時、細川又爲管領被執奏、晨照宿禰還補事至今者也、嗚呼正長之初、無官務吉凶之沙汰者、文安之今、免兩職改易之憂患歟、出於爾者、歸于爾之謂乎、然間自管領以使節攝津大輔、飯尾肥前可被尋究之由被申入傳奏、又被申公方武家云々、於上意者、堅被仰下之間、及六七度、管領雖被支申、遂以還補令治定云云、

寶德二年八月十六日丁亥、畠山左衞門督入道、○持國管領職事、自去月上旬比有上表也、悉被閣雜訴了、近日被訴訟申之儀、昨日無爲令落居云云、仍今日如元爲管領職之御禮、被出仕申者也、此由來傳

承分也、

〔師鄉記〕享德三年十月十日戊子、今日室町殿、渡御管領宿所、去夏比當職辭退之由申之、此間度々可爲如元之由雖被仰、不能領狀候、今日先以師鄉、兩度雖被仰、猶不隨仰之間、俄渡御之間隨仰云云、向後於重事者、以師鄉被仰下、又可申入之由、堅約束申云云、

〔師鄉記〕康正二年正月廿三日癸巳、室町殿〇足利義政渡御管領〇細川勝元宿所、造內裏事、今日於管領被仰出之云云、　二月十二日壬子、自室町殿、以都督日野亞相兩人、造內裏事、被仰管領云云、　十六日丙辰、今日都督日野亞相管領等、可被新造內裏被撿知之云云、半作淸涼殿、此間被侵雨露、然而可被作之哉、更可被新造哉、此間被經御沙汰云云、

〔新撰長祿寬正記〕寬正五年甲申正月四日、城ニヘ遊佐河內守長直ヲ殘シ上洛有ケレバ、其年細川右京兆勝元管領ヲ辭退有ル、是ハ政長ヲ卿上洛、又治部大輔殿モ、若年ナレドモ御出頭アリケレバ、兩方ヘ揖讓ノ意有リ、〇中略同年十一月十三日、畠山尾張守政長、管領ニ任ジ御禮有、

〔齋藤親基日記〕寬正六年十一月十日、御即位方褰帳典侍御訪、幷綾錦絹等代沙汰分、野州奉行管領政長、御訪五十八貫八百文、上錦廿丈代四十貫、上綾十三丈代十八貫五百文、

文正二年〇應仁元年正月二日、土岐美濃守、成賴

一畠山右衛門佐義就、御免之後始御對面在之、

一管領〇畠山尾州政長御成事、依可爲如先々用意之處、俄不可有御成之旨被仰出之、御使、伊勢備州、布野州、十一日、治部大輔義廉、任管領出仕始、

〔應仁略記〕下正月十八日御靈神前かせん附たり五月廿六日大亂等事

貞親〇伊勢私あるによつて、公方〇足利義政御胡亂の次第に落居す、此分にてはかなふべからざるの趣、諸大名一同の連署數ヶ條管領に達す、細川〇勝元尤同心、餘義なく披露を致し、條々にありその體

御所巻といはぬばかり也、

〔執事補任次第〕治部大輔義廉（斯波左兵衛佐、義敏遺跡、實澁川左兵衛義鏡息、）文正二年（○應仁元年）正月十一日補任、同年五月、依二一亂一與二同朝敵一畢、（號二龍安寺一）

細川勝元朝臣（應仁二年補任、已上三ヶ度、至二文明五年一六ヶ年、自二文明五年五月一至二同六年十二月一、職中絶、）

〔親長卿記〕文明五年五月十一日、管頭勝元朝臣自二去四日一歡樂、今日命終、（四十四歳）

〔足利季世記（一畠山記）〕常德院殿早世之御事

文明五年ニ大亂一統シテ、勝元理運ト成リ、山名降參シケリ、其間ニ山名モ細川モ病死シテ、勝元ノ子息政元、管領ト成給、

〔執事補任次第〕畠山左衛門督政長（四品）（文明六年十二月十九日再任、依二御方御所常德院殿（足利義熙）御元服之儀一也、同廿六日辭レ之、至二同九年十二月一又中絶、）

畠山左衛門督政長朝臣（文明九年十二月廿五日補任、已上三ヶ度、至二同十八年一十ヶ年、）

〔足利季世記（一畠山記）〕畠山政長自害之事

抑文明一統ヨリ以來、畠山義就モ逝去アリ、細川勝元モ、山名禪門モ逝去アリ、故キ人トテハ尾張守政長計殘リ給フ、此人本ヨリ一方ノ棟梁、位モ從三位ニ敍シ、再ビ管領ニ成リケレバ、三管領、四職、御供衆ニイタルマデ、彼ノ下風ニ立チテ、書狀ト文章ハ、四職ノ方エハ殿ト替テ、被官ノトモガラノ如シ、

〔蜷川親元日記〕文明十五年五月廿七日、東山殿御移徙、○中略管領（畠山左衛門督殿政長、河州に御在城、）雜掌土肥六郎右衛門尉、御太刀、（行光）三千疋、

〔執事補任次第〕細川右京大夫政元（勝元朝臣長男）（文明十八年七月廿日補任、就二常德院殿（足利義熙）大將御拜賀之儀一也、被レ奉二當日計一則上表也、）

細川政元朝臣（文明十九年丙午（○長享元年）八月再任、依二御吉書之儀一也、今日被レ行二御評定并御前御沙汰始一則辭レ之、號二大心院一、其後中絶、）

〔親長卿記〕文明十九年（○長享元年）八月九日、細川右京大夫（○政元）還二補管領一出仕云々、

〔足利季世記（二舟岡記）〕政元生害事

京管領細川右京大夫政元ハ、四十歳ノ比マデ女人禁制ニテ、魔法飯綱ノ法アタゴノ法ヲ行ヒ、サナガラ出家ノ如ク山伏ノ如シ、

澄之最後之事

香西藥師寺〇長忠相談シテ、丹波ヨリ九郎澄之ヲ迎トリ、管領トアフギ、右京大夫ニ移ス、是ハ九條殿〇關白政基ノ御子ナレバ、上一人ヨリ初メ、公家武家ノモテナシ奉ル事カギリナシ、香西又六、藥師寺三郎左衛門權ヲ取リ、天下ワガマヽニ振舞ケリ、カクテ五十餘日ヲ過ケルニ、三好之長、六郎殿〇細川澄元ヲ御供申シ、江州甲賀谷ニ山中新左衛門ヲ頼ミ、近江伊賀ノ軍兵ヲ催シ、畠山總州ヲモ頼ミ申、大和河內ノ兵ヲモマチキ、同八月〇永正四年一日、京都エ責メ上リ、九郎殿御座ス遊初軒エ取カケ責ケレバ、〇中略九郎殿御小袖ト、ビンノカミヲ切リ、御同朋ヲ使トシテ、父ノ殿下エ形見ニ參ラセヨトテ、

アヅサ弓張テ心ハツヨケレド引手スクナキ身トゾ成ヌル、サテ御自害アリケレバ、紀伊守、介錯申、腹十文字ニカキ切テ、御殿ニ火ヲカケ、朝ノ露ト消失ヌ、アハレナリケル次第ナリ、

澄元沒落之事

去程ニ六郎澄元、右京大夫ニ任ジ、管領ニ備リケル三好高畠、天下ノ權ヲ取リ、上ミヌ鷲ノ風情シテ威勢ヲフルヒケリ、然レドモ九郎殿ハ殿下ノ御子ナレバ、公家武家、ヲシミ慕ヒ奉リケル、又三好高畠ガ、驕ノ餘リ諸人ニ無禮シケレバ、內々澄元ヲ背申族アマタアリ、中ニモ京ニハ奈良修理亮元吉、攝州ニハ伊丹兵庫助元扶、丹波ニハ內藤備前守貞正等、一味同心シテ九條殿ニ其好アリシカバ、細川民部少輔高國ヲ取立、中國ノ義材公エ申通ジ、逆心ヲ起シ、諸國牢複〇反シケレバ、永正五年卯月九日、巳ニ打立ト聞エシカバ、右京大夫澄元、三好高畠、散々ニ成テ落行ケル、澄元ハ近江國エ落玉フ、〇中略京ニハ高國ヲ右京大夫ニウツシ、管領ノ職ニスヘ、同卯月廿七日、義材公方御

上洛アリ、

〔足利季世記 四三好記〕三好家傳ノ事

三好ノ先祖ハ、頼朝卿御時ノ小笠原次郎長清也、其子長經、其子阿波守長房、忠心法印ト號ス、ソレヨリ四國ニ住シ、阿波ノ小笠原ト云、長房ヨリ八世、阿波國ノ住人小笠原長隆、京ノ小笠原淡路守長興ヲ聟トシテ、信濃守義長誕生アリケレバ、義長母方ノ外祖父長隆ノユヅリヲ請テ、阿州三好ノ郷ニ居住シテヨリ、初メテ三好ト名乘ケル、カノ長興ハ、尊氏公エ大忠アリシ、信濃守貞宗ノ孫左京大夫滿長ノ子也、義長ノ子兵部少輔長行、二男三好神二郎長重、此子孫左衛門督、山城守宗三、右衛門大夫、越後守等也、長行ノ子息長輝、後之長ト改名ス、法名希雲、此人細川澄元ヲ政元ノ養子トシテ上洛ノ時、管領ハ執事トシテ上洛アリ、天下ノ執權八箇年ノ後、子息下總守長秀ニ執事ヲユヅリ給ヒケルガ、細川高國エ降參アリテ、都ノ百萬返ニテ父子自害アリ、長秀子息元長、晴元ノ執權五箇年アリテ、宗三ノ讒言ニヨリ、晴元ト不和ニ成リ、出家シテ法名海運ト號ス、讒口難遁、堺ノ顯本寺ニテ自害アリ、

〔鎌倉大草紙 下〕憲實〇上杉をも鎌倉へ歸參可有由、京都よりもおほせ下され、成氏〇足利も再三御使有けれども終に不參、伊豆國名越國清寺にて出家となりかくれ居けるが、〇中略其後船にて西國へ赴、周防國へ行脚あり、爰にそのころ中國の大內殿、威勢を中國九州までふるひける、都には武衛、細川、畠山の三家ともに末になり、其家いづれも二ツにわかれ合戰あり、一人して天下の御後見も難叶、大內は大名にて威勢もありければ、天下の御後見を望、一度都にのぼり、公方の執事とあふがれ、政道を輔佐せん事を願ひけれども、三家の外は執事の例もなし、かなふまじとて、多年望を空して過しける時、憲實入道此所へ來りけるこそ幸なれと大に喜て、憲實入道を雲洞菴高岩長棟菴主と稱し、長門國深川大事寺と申、會下寺にうつし置、馳走渇仰して、則大內殿は憲實の

養子になり、上杉山内の系圖を繼簒の丸にまひ雀の幕の紋を請て、憲實を御父とて崇敬限りなし、其後大內殿都へ上り、上杉は關東管領の家なれば、それをつぎて、京。都。の。執。事。職。も子細有まじきよし申上ければ、公方よりも禁中へ奏聞有ければ、尤其寄ありと御免ありて、大內左京大夫義興、初て上杉より請て京。管。領。に任せられ、御。後。見。望のごとく叶ひける、

〔足利季世記二舟岡記〕舟岡山合戰之事

公方義稙ト右京大夫高國ハ、高雄山ニ御陣メサレケルガ、洛中無爲ノ由ニテ、同年〇永正八年九月朔日御歸洛アリ、〇中略此度合戰、ヒトヘニ大內方ノ忠ニヨルモノ也ト管領ニ任ジ、明年從三位ニ補セラレケル、去年ノ合戰ノ賞ト書付ケルト聞エシ、

〇按ズルニ、義興ノ政權ヲ執リシハ、永正年中ノ事ナレドモ、執事補任次第ニコレヲ載セズ、思フニ正シク管領トナリシニハアラズ、タヾ諸事ヲ執リ行ヒシ事ノ管領ノ如クニテアリシナルベシ、將軍家譜ニ、管領代ト載セタルハ其意ヲ得タリト云フベシ、

〔高代寺日記〕永正十五年八月、從三大內左京大夫義興、管領ヲ辭シ周防ヘ歸ル、在京十餘年、公武ノコトヲ執行、財寶減敚ニ歸國スト云云、

〔足利季世記五 肆、軍地藏軍記〕大內殿生害之事幷家傳之事

大內殿ハ本姓唐人ナリトテ、大明國エ年々貢船ヲ遣シ、寶物ヲ買取リ、朝鮮エモ使節ヲ通ジ、本朝ニ未ダ不渡書籍珍貨、多クハ此時來レリ、種々ノ寶貨ヲ公家ニ奉リ、公方エモサヽゲ奉ル、然ルニ父義興、舟岡山合戰以後、從三位ニ敍シ、管領ニ任ジ、其威勢天下ニ振ヒ、在京十二年、京都ヲ治メ、今義隆、位ハ從二位、官ハ兵部卿、大宰大貳ヲカヽ子給ヒケルガ、家運此時ニ縮リ、子孫永ク絕ニケル、

〔足利季世記二舟岡記〕近江ノ九里被ㇾ誅事

大內殿、在京十二年ノ間、都ノ掟モ無私、四海ノ浪モ治リケル、諸人家ノ本意ヲ達シ悅ビケル、〇中略

永正十五年八月廿三日、大内左京大夫義興卿、周防國エ下向アリ、都ニハ細川右京大夫高國管領ニテ、公方義稙〇足利ヲ仰ギ奉ル、

〔執事補任次第〕右京大夫高國法名道永後常桓補任、萬松院殿(足利義晴)執ニ御元服儀ニ、雖而辭之、號ニ三友院武藏守ニ、

〔改選諸家系譜後編十三細川〕高國ノ管領少名細川右京大夫、民部大輔、從四位下、

〔和長卿記〕永正十八年〇大永元年十二月廿四日若公御元服也、〇中略理髮細河奧州〇高國加冠、管領也、去月廿八日補管領云云、

〔足利季世記三高國記〕公方義稙ト高國不和之事

公方義稙公イニシヘ政元〇細川ニオシコメラレ、籠ノ中ニ御座アリシトキ、通世者落シ奉リ、御運ノ開カセ給ヒシトキ、御約束アリテ、カノ通世者ガ子息一人召出シテ、畠山式部大夫ト名付、萬事ニ權威高カリケル、此者公方ノ御意ニ入リ、如何ニモシテ是ニ管領ヲモアタヘタク朝夕思召、御色ニモ出ケレバ、細川殿〇高國ト御不和ニテ、萬ニ奇怪ナル御振舞アリケレバ、細川高國モ御恨フカクナリ、如何樣洛中オダヤカナラズ、カヽリシ程ニ、大永元年辛巳三月七日、公方細川御中不和ニ成、京ヲ出サセ給ヒ、淡路ノ武島ヘ御渡海アリケレバ、京ニハ細川右京大夫、同名陸奧守以下評定シテ、故法住院殿〇足利義澄御子、赤松アヅカリ申テ、今年七歳ニナリ給フヲ呼上奉リ、七月六日、播州ヨリ御上洛アリ、左馬頭ニ任ジ、御元服アリ、義晴ト名付奉ル、同八月ヨリ三條ノ御所ヲ上京ヘ引、今ノ柳ノ御所ヲミガキ立ラルヽ、頓テ征夷將軍ノ勅宣ヲ蒙リ給ヒケレバ、前將軍ハ解官アリテ、將軍職ヲトヾメラルヽ、細川右京大夫高國管領ニ任ジテ天下ノ政務ヲトリ行、政道ニ私ナク、上下喜悅ノ眉ヲ開キケル、

〔公方樣正月御事始之記〕一大永元年十一月廿八日、細川右京大夫高國、被任管領職、御使兩度伊勢守貞忠、京兆ヘ參申、初度ハ被任之旨被仰出候御使也、二度目ハ御請御喜悅之旨御使也、此後右京

管領代

大夫被祗候、御三盃參、惣別ハ三ヶ度可有出仕之旨、御禮御太刀、持同御劒御拜領、御使伊勢守裏打、
管領出仕同前裏打、右京大夫出仕之供衆、香川美作守裏打、太刀を持秋庭備中守、こすはう長鹽又
四郎、こすはう
一各京兆へ禮に參、金を進候、
一公方樣へ京兆同名衆計、御太刀進上候也、
〔足利季世記 三高國記〕公方義稙ト高國不和之事、
大永五年四月、高國四十二ノ重疫厄〇重トテ出家アリ、子息六郎稙國ニ家督ヲ讓リ隱居アリケル、
法名松岳道永ト名付奉ル、
〇按ズルニ、家督ヲ讓ルハ、卽チ管領職ヲ讓リシヲイフナリ、
〔逸史 一〕天文十五年九月、河内人遊佐順盛、相細川氏綱作亂、管領晴元、使三好長慶伐之不利、晴元
赴救、大君義晴〇足利在東山、陰右氏綱、許以管領、晴元恚、遂叛、與江人連和、欲攻京師、義晴奔阪基、遂
老焉、
〇按ズルニ、此說未ダ何書ニ據ルコトヲ知ラズ、姑ク附シテ參考ニ供ス、
〔逸史 一〕天文十六年、是歲大君義晴、城白川據之、細川晴元與江師、東西入寇、不利而退、尋復入寇、會白
川棍竭、義晴奔阪基而行成、管領氏綱、自河奔阿、
〇按ズルニ、細川氏綱ハ尹賢ノ子ナリ、氏綱管領トナルコト、マタ其據ヲ知ラズ、
〔逸史 一〕天文十七年、是歲〇中略細川晴元、入爲管領、
〔花營三代記〕應永卅二年正月一日壬申、椀飯出仕有、官領代出仕畠山彈正少弼持國官領一男也、法名德本、
〔應仁記 一〕武衞家騷動之事附畠山之事
公方勢ハ、尾張守ハ合手ナレバ不及申、廣川ト云所ニ陣ヲ取、總大將管領代細川讚岐守成之、〇下略

雜載

〔足利季世記 四 三好記〕日吉御元服ノ事

京公方義晴公御子、御年今年十一歳ニテ御元服アリテ、御家督御相續アルベシトテ、天文十五年十一月中旬ニ御沙汰アリ、加冠ノ役ハ、代々三管領ノ中、當職ノ役ナレドモ、今細川畠山亂中ニテ、ムツコンノ最中ナリ、若輩ナリ、微力ナリ、旁御請難申カルベシ、幸ニ佐々木彈正少弼定賴、宿老ト云、大名ナリ、最其仁ニ相當レリ、則管領代ニ比シ、勤仕可申旨再三被仰付ケル、定賴大ニ恐レ辭退被申ケレドモ、頻ニ被仰付間、且ハ家ノ面目ナリトテ御請ヲゾ被申ケル、

〔光源院殿御元服記〕御元服〇足利義輝、當日十二月〇天文十五年十九日

一表江御出有テ、有富有春御身固有之、御次管領代〇佐々木定賴着座、衣裝大帷子折烏帽子、カケ緒紙ヨリ、海老鞘卷刀ヲサヽルヽ也、〇中略翌廿日御判始有之、御物七通ヲ硯ノ蓋ニ入、伊勢守貞孝持參シテ、管領代定賴ニ渡サルヽ、

〔足利季世記 七 義秋公方記〕一條院殿樣御元服之事

佐々木定賴、管領代ニ比シ、御加冠ニ參ラルヽ、其例トシテ義景〇朝倉ヲ管領代ニ比セラレ、御加冠ノ役勤仕、アマツサヘ左衞門督ニ任ゼラレ、義景ガ父敎景、初テ御相伴衆ニ召加ラルヽトイヘドモ、御前伺候ハナクシテ、只名ノミ計リナリシ、

〔正長元年記〕凡鹿苑院殿〇足利義滿ハ、大名ヲバ我御身ニハ有御賞翫テ、御緣ニ伺候ノ時モ、聊御禮セラレテ有御通シナリ、但公家ノ輩ノ上ヲ武家ノ大名ニサセラルヽ事ハ無リシナリ、勝定院殿〇足利義持ハ、御盃等モ、公家輩ヨリハ先管領等ヲ御賞翫ノ躰ニセラレテ、我御身ノ御賞翫ハ以外ニ無沙汰ニ、大名ドモニ御無禮ナリシナリ、

〔長祿二年以來申次記〕一上樣ヘ御禮事、〇正月五ケ日之內にて三度、朔日、七日、十五日也、〇中略

管領一人は、上樣御前へ被參て御盃頂戴在之、御酌は上らうの御方云々、

將軍嗣子執事

〔應仁記 一〕亂前御晴之事

應仁丁亥ノ歲、〇元年 天下大ニ動亂シ、ソレヨリ永ク五畿七道悉ク亂ル、其起ヲ尋ルニ、尊氏將軍ノ七代目ノ將軍義政公ノ、天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ不任、只御臺所、或ハ香樹院、或ハ春日局ナド云、理非ヲモ不辨、公事政道ヲモ不知給、青女房比丘尼達計ヒトシテ、酒宴婬樂ノ紛レニ申沙汰セラレ、〇下略

〔土岐家聞書〕一昔は侍所は賞翫の職也、〇中略 管領職は、昔は賞翫にはあらず、然に高師直師泰等謀叛の後、御一族管領職にならるゝに依て、其以來賞翫の職となり、近代侍所をば賞翫とせず、

〇

〔北條盛衰記 上〕伊勢平氏新九郎由來之事

尊氏將軍ヨリ八代ノ孫ヲ義政將軍ト云、〇中略 御弟、淨土寺ノ義尋ヲ還俗セシメ養子トシ、左馬頭義視ト改メ、今出川殿ト號ス、天下ヲ讓ラント契約アツテ、細川勝元ヲ義視ノ執事トシ給フ、

職員
執事

古事類苑

官位部四十五

足利氏職員二

政所

政所ハ諸般ノ政務ヲ總攝シ、管領以下評定衆ノ集會シテ國事ヲ議スル所ナリ、長官ヲ執事ト云ヒ、又頭人ト云フ、平時ニ在リテハ、金穀田園貸借勾引人等ノ事ヲ掌リ、且將軍ノ家事ヲ攝シ、評定ノ時ハ其席ニ列ス、始メ鎌倉ノ例ニ倣ヒテ二階堂氏ヲ以テ之ニ補セシガ、康暦ノ頃ヨリ伊勢氏ノ世職ト爲レリ、

執事代ハ卽チ開闔ニシテ、執事ノ代理ニアラズ、署內ノ要職ニシテ、評定衆引付衆、或ハ右筆宿老中ヨリ之ニ補スル例ナリ、齋藤松田二家ノ人多ク書史ニ見ユ、

政所代ハ、伊勢氏ガ政所ノ執事ヲ世襲セシヨリ以來、家臣蜷川氏ヲシテ其職務ヲ助ケシメシニ起リシモノニシテ、蜷川氏ノ世職ナリ、

寄人ハ、評定ノ時其席ニ列シテ雜務ヲ執ルモノナリ、此外ニ政所公人ト云フアリ、下部トモ云フ、雜事奔走ノ役ニ服スル賤職ナリ、

〔武政軌範政所沙汰篇〕一執事人體事

先代之時者、以二階堂名字之人被補之、至當御代、佐々木京極大和守等亦任之云々、中務少輔入道行照執事之後、伊勢入道照禪始任當職、其以來代々被補任之、

〔武政軌範引付內談篇〕一賦事

右者問注所執事、或政所執事、奉行之條、見于古記、○下略

〔武政軌範政所沙汰篇〕一式日内評事○中略

執事出座、○中略次奉書事、或執事加判、

〔相京職鈔一〕執事　一人　政所之長官也、故ニ頭人ト稱ス、○中略

政所頭人御次第云、等持院殿御代、

建武以來

政所執事　佐々木京極并大和守補任云々、時代不分明、　康永四

政所執事　二階堂山城守　貞和五

政所　二階堂大藏少輔　觀應二

〔花營三代記〕貞治七年○應安元年四月十五日、左馬頭義滿御元服、○中略當日御雜掌管領○中略御鎧、御馬以下、御太刀一振、以吉見左京亮被下、管領、政所役、于時山城中務少輔入道行照、子息菊鶴丸出仕候、執事代齋藤内右衛門入道玄觀子息四郎右衛門尉基兼出仕之、

〔花營三代記〕應安四年十一月一日、御即位、御沙汰被始行、於管領亭

奉行人　山城中務少輔入道于時政所

五年十一月二十二日、將軍家御判始、○中略

一番御吉書、七箇國於寢殿西間十二間政所沙汰進之、山城三郎左衛門尉元榮持參、于時政所山城中務少輔入道行照法體之間、以元榮勤仕之、　八年○永和元年正月十三日、同夜政所御沙汰始延引、依執事違例也、

〔武家名目抄職名八下〕按、この時、二階堂入道行照、執事たり、行照辭職の後、○中略二階堂氏にて此職に補せらるゝ事は、行照にとゞまれり、

〔花營三代記〕永和五年○康暦元年八月二十五日、政所内評定始、政所執事伊勢入道（貞繼）沙汰始○下略

〔諸家系圖纂十二伊勢〕貞繼十郎、勘解由左衛門、伊勢守、政所、殿中總奉行、御厩別當、從二尊氏公一義滿公迄大父ト號ス、廣福寺、法名昭禪、道號友峯、壽八十三、明德二年、貞信七郎左衛門尉、伊勢守、賴繼之實子也、諸職同前、又號二大父一、恩恩院、道號松洲、法名常貞、應永八年、六十七歲、貞行兵庫助、尾張守、伊勢守、貞繼之弟也、代々殿中總奉行、諸職同前、義持公御代、又號二大父一、知光院、道號心岩、法名常誠、應永十七、五十三歲、貞經勘解由左衛門、伊勢守、十郎、貞國之兄也、背二上意一隱二吉野山一、法名勢元、永享四、貞國備中守、伊勢守、兵庫助、從四上、諸職同前、義教公御代、三年目ヨリ號二大父一、深心院、道號悅堂、又常慶、法名常陸、又眞蓮、貞親備中守、伊勢守、從四上、兵庫助、諸職同上、隨松院、文明五正廿一卒、七十五歲、貞宗兵庫助、備中守、伊勢守、從四上、應仁之亂、五歲御時、義尙公扶佐、殿中總奉行、歌句入二筑波集一、御厩別當、金仙寺、道號金宣、法名常安、夢窓幷塔、永正六十廿八卒、貞陸七郎、備中守、伊勢守、兵庫助、從四上、始貞隆、諸職同上、勝蓮院、道號光岳、法名常照、號二茂齊和尙一、永正十八八七卒、貞忠七郎、備中守、伊勢守、兵庫助、從四上、始貞爾齋、諸職同上、寂蓮院、道號大應、法名常陸、天文四十一、廿四卒、貞孝兵庫頭、伊勢守、從四上、貞辰實子、永祿六九十一、於二三好合戰長坂山一討死、榛竹院、貞良虎福丸、兵庫頭、母源元光女、永祿六九十一、於二長坂山一父同時打死、建孝院、貞興童名小法師、三郎、永祿二己未四廿九誕生、天正十年六月、同二于明智一、於二山崎表一討死、廿四歲、

〔小田原記武家名目抄職名部八下所引〕三代目伊勢守俊繼、其子盛繼は、足利殿緣者なりしかば、元弘の比、尊氏將軍上洛の時、御供申上洛ある、此人、尊氏の御息達初め、皆早世の後、誕生の時、蟇目の役を相勤められてより後、御子息達繁昌ありしとて、御名を付、假の父と被レ仰、代々公方彼例に任せ、御子誕生の時、必御名をば、伊勢守家より名付申、盛繼の子息伊勢肥前守盛繼、元弘合戰に、手越河原にて討死しければ、其弟勘解由左衛門、彼忠功にて伊勢守に任じて、寶篋院殿〇義詮の近習奉行引付の頭人なり、後には執事の代を相勤む、法名昭禪、是より代々、公方の假の御父名付の父母として、伊勢守管領家にも不二相劣一事出頭、

〇按ズルニ、執事ノ代トアルハ即チ執事ナリ、

〔永享以來御番帳〕政所　伊勢守

〔松田長秀記〕永享十二年七月二十五日、大將御拜賀云々、自二政所一式三獻、幷餠等進二上之一、御祝大草調進、奉行伊勢守貞行、于時政所、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年七月五日丙辰、將軍宣下、〇中略御判始、宣下事終之後被レ執二行之一、〇中略

略御吉書右筆飯尾左衞門大夫爲規、（白雑）大七ヶ國（○註略）文章同前、（○中略）御吉書七通（入葛籠）爲規、今月二日巳剋、渡侍雜仕、當日雜仕持參之、列居葛籠蓋御硯等、取蓋渡、御硯役二階堂山城三郎左衞門尉尙行、（大雜、十四歲、）請取之、直持參于御前、被加御判之後給之、相退如已前、渡雜仕了、今度政所執事伊勢備中守貞陸、不勤御硯役、（爲宗悉然、但今日出仕也、）兼日被仰付尙行了、常德院殿御判始之時者、政所執事親父伊勢守貞宗御吉書、御硯等渡、進著座之管領、今度管領立座被進御前、（見文明記）

普廣院殿（○足利義教）永享四八七御判始之時、御硯役管領令勤之給、御硯等政所伊勢守貞經持參之、今度之儀相違也、

〔大館常興日記〕天文九年三月廿二日、細川豆州來臨、納錢方正實以豆州歎申候、千匹可致加增旨申候、（○中略）愚老依御返事、直々勢州（政所也）へ罷出可申由、承之間、いかにも各同心申候、勢州いかゞ可被申哉は不存知候、

〔光源院殿御元服記〕一天文十五年十二月二十日、新將軍（若君義藤）御評定始御判始等有之、（○中略）

一其後又各々如元著座有テ、御判始有之、御物七通ヲ硯ノ蓋ニ入、伊勢守貞孝持參シテ、管領代定賴ニ渡サル、定賴又御前ヘ持參、其間御前ニ貞孝伺候、御判スヱラレ畢テ、管領蓋ニ入、貞孝ニ被渡之、貞孝持テ出、侍雜司ニ被渡之、又御硯管領取、貞孝被渡、又侍雜司ニ被渡、

〔應仁記〕一亂前御晴之事

應仁丁亥ノ歲、天下大ニ動亂シ、ソレヨリ永ク五畿七道悉ク亂ル、其起ヲ尋ルニ、尊氏將軍ノ七代目ノ將軍、義政公ノ天下ノ成敗ヲ、有道ノ管領ニ不任、（○中略）亦伊勢守貞親ヤ、鹿苑院ノ蔭凉軒ナンド、評定セラレケレバ、今迄贔屓ニ募テ、論人ニ申與ベキ所領ヲモ、又耽賄賂ニ、訴人ニ理ヲ付、（○中略）又武衞兩家（義敏、義廉、）ワヅカニ廿年ノ中ニ改動セラルヽ事兩度也、是皆伊勢守貞親色ヲ好ミ、婬着シ、贔屓セシ故也、

執事代開闔

〔武政軌範政所沙汰篇〕一執事代事
當所者、止開闔號、稱執事代、是則代于執事令執行公事之故也、仍爲規模職、或評定衆引付衆、或右筆宿老中、撰器量仁被補之哉、
一内評定儀式事略○中
及其剋限寄人參列、先執事代差定役者、略○下

〔政所内評定記錄〕政所内評定始著到寛正二年正月廿六日○中略
一番孔子之役略○中 二番奏事略○中 三番硯出之略○中 四番著到略○中 五番鐵著到略○中
於次間整之、於當座各自身被書諱、但頭人之諱者、執事代最前書之、

〔相京職鈔一〕政所頭人次第云、執事代、
齋藤四郎兵衞入道玄秀俗基秀
寶篋院殿御代
貞治三
政所　執事代齋藤五郎左衞門基名　貞治七
政所　二階堂中務少輔入道行照俗行元
執事代　齋藤藤内左衞門入道玄龍俗基能
御番帳云、政所代蜷川親右衞門尉親元、

〔親俊日記〕天文十一年二月廿三日甲戌、京中倉役之事、御小者御雜色被除之、可被仰付之由候、三月朔日壬午、先度被仰付候、京中諸土倉懸錢事、重而執事代、松丹御倉正實房へ然バ五千疋分可在御用之由、被仰遣候云々、

〔後愚昧記〕貞治五年八月十八日、大夫入道沒落以後、奉行人等少々有黜陟沙汰、政所執事代、日來齋

藤五郎左衛門尉（季基）也、而改替齋藤藤內右衛門入道被補云々

〔花營三代記〕貞治七年（〇應安元年）三月一日、齋藤四郎右衛門尉可參侍所之由、被仰出之、改元吉書施行、（武藏、相模、伊豆、）持參之、齋藤四郎右衛門尉（于時政所執事代）同日被仰關東了、　四月十五日、左馬頭殿（〇義滿）御元服、（〇中略）當日御雜掌管領、（〇中略）執事代齋藤內右衛門入道（主親）子息四郎右衛門尉（基繁）出仕之、

〔祇園執行日記〕應安五年十二月二十八日、將軍家春季御神樂料足任例、拾貫文以執事代齋藤右衛門入道書下、伊與房請取、

〔花營三代記〕應安七年十一月三日、政所執事代事被仰松田左衛門尉貞秀畢、齋藤右衛門尉入道玄觀所勞之間、依令辭退也、御使矢野十郎入道、

永和三年二月廿八日政所內評諚始之、依執事代松田左衛門尉母儀去年十二月他界、服中延引、今日被行之、

〔齋藤親基日記〕文正元年十一月廿日、飯尾下總守爲奉行、神宮關闔幷政所執事代等被仰付之、加式評定衆已後不申沙汰之上者、辭式衆爲引付衆可奉行旨、以伊勢備中守貞藤被仰出之、舍弟肥前守之種御折檻之間、所帶並奉行事等悉被仰付之、

〔齋藤親基日記〕文正二年（〇應仁元年）正月廿六日、政所內議始、於春日亭可執行之由、雖被相觸之、若公樣御所ニ御座候間、俄於住宅在之、

政所內評定著到（文正二年正月廿六日）

伊勢兵庫助

執事代雖爲式評定辭之、却引付衆著座也、古者式評衆著座也、今執事非式評定候故歟、

飯尾下總守（〇以下十七人姓名略之）

〔蜷川親元日記〕文明五年八月二十五日甲申、政所對決、於執事代（淸泉）宿所有之、　十一月十五日、於政

所執事代（清泉州）宿所有意見沙汰、親元參勤了、

〔政所賦銘引付〕文明十一年

於執事代意見候時廻文書樣、明後日、、於執事代所爲意見可有參勤之由候

布、、、

清、、、

〔蜷川親元日記〕文明十七年十一月十日丁巳、若上樣（日野左大臣勝光公御息女○足利義尙室）御著帯、御帯要脚事、政所沙汰なり、仍執事代清備中入道方へ遣、一行（折紙）御祝御帯要脚、（注文有之）三貫五拾文、被仰付、御舍可渡仰之由申候、恐々謹言、十一月十日、清備中人道殿、親元、御帯要脚事、先御母（東殿）より注給分、一すぢせいがう二百疋、一すぢぬの貳十疋、御ッ、みきぬ九尺、三十五疋以上、此外御つ、ら五十疋、以政所公人召寄之、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年七月六日丁巳、宣下、（○足利義稙任將軍）御要脚三万疋內下行事、

伺傳奏（勸修寺敎秀卿）折紙幷御祝奉行大藏大夫兼連奉書之旨執事代貞通遣書下了、

〔蜷川親孝記（武家名目抄職名部八下所引）〕永正十三年九月、執事代被申候、地下老若一兩輩申云々、仍柳樽代目錢、清酒三ヶ條之儀、子細具伺可申由、有來臨承候間、披露之處、御同心之旨、頭人御返事、一酒屋方、柳樽一荷充代目錢等事、違先規候條、太無謂、然ば役錢減少甚不可然、注文遣之、相談酒屋中、於役錢沙汰之在所ハ、不及是非、恣令興行、不順其役、在所ハ堅可被停止候、此條々有違犯輩ば、可被注申交名候由也、仍執達如件、（永正十三）九月十日、玉泉房英致、

〔親俊日記〕天文七年三月十七日、辛卯執事代松丹、御倉正實房頭人被參、昨日御番錢之事談合候而、地下人へ被仰出之了、　十二月五日乙巳、節季御用脚として、納錢方へ、臨時可相懸否之段、以書狀、御倉へ執事代尋之、　六日丙午、納錢節季御用脚之事、披露之、如先規可申付之由御返事、納錢在所

政所代

付可被記申之由候、以淵田、河村申遣之、　八年正月廿六日乙未、當所御沙汰初、執事代以太刀頭人へ禮被申之、　七月廿五日庚申、上下京諸土倉今度德政之儀付而、御停止之旨被仰付、以政所公人開闔雜式令相觸之、　十一月八日壬寅、納錢方在所付、其外納下注文、御倉正實調進之、于時執事代松丹清秀銘加渡給之、

〔武家名目抄職名八下〕按、〇中略足利殿の世に至ても、等持院殿〇尊氏在世の程はいかなりけむ、詳ならず、寶篋院殿〇義詮の時にこそ、たしかに此職を設け置かれしなれ、もとは大かた儀式だちたる所役を専務とし、經濟の要務に至ては、執事たる者是を沙汰して、おのづから内外の差別ありしに、執事漸く怠惰を生ずるに及びて、執事代も亦納錢の庫倉を管領し、財貨の出納をさへ奉行して、内務にもあづかる職掌となりぬ、

〔細川家書札抄〕一政所開闔　一侍所開闔　一地方開闔　一神宮開闔〇中略

皆々打付書也、諸國は奉書之判形を仕來なり、

右此一條、龍安寺代注進候、

安富勘解左衞門尉元盛相傳之、

〔武政軌範政所沙汰篇〕一賦事〇中略

勢州貞國執事之時、至永享之末、依公儀不得寸暇、申子細於衆中、一旦以政所代親當子時折紙賦之、其以來任彼例、用代之一行乎、近年止折紙、只加訴狀銘、旁以爲新儀者哉、

〔武家名目抄職名八下〕按、政所代は、伊勢家の被官蜷川氏の世職なり、初め鹿苑院殿〇義滿の時、伊勢貞繼當所執事に補せられ、子孫これを世々にせしより、公務漸く繁く、獨身事に從ひ難きを以て、蜷川氏を代官とし、局務を執らしめしより、永世の格となりて、蜷川氏の子孫、伊勢家の許可を蒙り、此職を奉ずることゝなりぬ、其さまたとへば侍所に所司代を設けたるが如し、〇註略此職もと、私の代官たるを以て、執事代等と班列すべき秩祿にあらざれども、其執行する所、悉

寄人

く執事の職務なるが故に、威風はやゝ、執事代に立ならびしかたもありしなるべし、

〔永享以來御番帳〕政所代　蜷川新右衛門尉親元

〔澤巽阿彌覺書〕蜷川元祖ハ不存候、覺長申候、

親元新右衛門尉不白ト號―親孝―親順―親當
　　　　　　　　　　　　　　　└親俊―親長道標ト申候―親光

○按ズルニ、蜷川氏代々政所代トナレリ、此ニ擧ゲタルモノ則チ其補任ナリ、

〔蜷川親元日記〕文明五年八月七日丙寅、政所代事、如先々可執沙汰之由、被仰付親元、御使大藏丞則御禮申之、

〔親俊日記〕天文七年十一月廿七日丁酉、富田新右衛門入道申事、披露重伺之、然ば以折紙可申之由候間、如此調遣之、就酒麹賣買之儀、先度被成問狀御奉書候之處、以便宜返狀候段、近比緩怠之儀候、雖日限馳過之、尙以寬宥之篇相屆候訖、然ば來三日以前致上洛可申上之、於不然者、對新右衛門入道可被成御下知也、恐々謹言、

十一月廿七日　　　　政所代親俊

手塚帶刀左衛門殿

〔武政軌範政所沙汰篇〕一式日內評事○中略

寄人著座上首、次第披露公事、於意見者、上首發言、以衆議被決斷之、次奉書事、或執事加判、或寄人兩判、隨于事體聊有差異乎、

〔諸家系圖纂二十一清原〕淸家庶子近澄流

貞秀八郎左衛門尉、政所寄人、和泉守、引付奉行、

〔武家名目抄職名八下〕按、○中略足利殿の時に至ては、引付衆をもなべて寄人といひし事もあり、

これは引付十餘人の輩を、五方引付に分隷し、各寄人六七人を副らる丶故に、一方の頭人にては、兩衆共に我方の寄人なりといふ意より起りし稱なるべし、然れども元より階級尊卑あるを以て、儀式作法に於ては、大かた分別あり、凡寄人たる者、いまだ引付衆に補せざる程は、恩賞方に加へられず、且引付衆は、政所執事も、容易にこれを指揮する事を得ず、寄人に至ては、なべて執事の進退に預る定格なり、これ其尤等級ある所なり、又內評定始の時、孔子奏事著到、籤著到等の役は、寄人の所役として、引付衆は勤むる事なし、もとこれらの事は、下臈たる者の勤仕すべき定なればなり、

〔蜷川親元日記〕寛正二正廿六

新加奉行人事、頭人有御伺之、被成御奉書如此、

被召加政所寄人者也、早可被參勤之由被仰出候也、仍執達如件、

付年號

月日　諱

此分永德比、照禪御奉書大概如此、

〔齋藤親基日記〕文正元年四月十六日、正親町右衞門督家雜掌申借物事、於殿中政所伊勢守申之、政所寄人之外、右筆方衆悉可加談合之由承之、

〔政所賦銘引付〕寄人

文明六十二被召加式衆 松田丹後守秀興　　文明六十十七頓死 治部河內守國通

開闔 清和泉守貞秀 入道常通　　飯尾美濃守貞有

清式部丞 備中守 秀數　　齋藤大藏丞基周

齋藤五郎兵衞尉 上野介 豐基　　清四郎左衞門尉 民部大夫 元定

公人

文明十九廿七頓死飯尾加賀守爲信　新加治部四郎兵衛尉通種
新加松田九郎左衛門尉豐前守貞頼座次之　諏左將信濃守貞通
松田主計允對馬守數秀　飯尾齋左衛門尉清房
新加諏訪彌次郎長直　新加清八郎左衛門尉貞數
中澤掃部允備前守之綱　新加文明七六廿六晩頓死松田八郎左衛門尉親秀
以上衆、文明六正廿六着座分也、此内六人今日新加也、任例各被遣頭人御奉書畢、
此外清式部丞、諏訪左近將監、依在國无着座、文明元十一廿六新加飯尾新右衛門尉、同十年八廿六
新加松八左長秀、
文明十十二卅新加　布施但馬入道　飯尾兵衛大夫貞興美濃守　飯尾與三左衛門尉爲親　飯
尾左近將監　飯尾三郎右衛門尉

〔蜷川親元日記〕寛正六年三月五日壬子、政所公人新加右衛門次郎下旬番頭四郎五郎被執申之、

〔相京職鈔〕一公人　被官人公人ハ、太政官之史生、官掌ニ准ズベキモノ歟、

〔武家名目抄職名八下〕政所下部○中略　按、政所は衆務の歸する所にて、毎事繁劇なるを以て、下部をこの所に番直せしめ、雜事奔走の事に役せしなり、足利殿の時、これを公人とも稱せしは、其身卑賤ながら、公方の祿を食するものなれば、かくよびて私ノ人に分ちしなり、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、○中略
一御前打島山刑部少輔政信○中略
一御物奉行政所被官人

〔蜷川親元日記〕文明十七年十一月十日丁巳、若上様日野左大臣勝光公息女○足利義尚室御著帶、○中略御帶要脚事、
先御母東殿より注給分、一すぢせいがう二百匹、一すぢぬの貳十疋、御つゝみぎぬ九尺、三十五疋以

職掌

上、此外御つゞら五十疋、以政所公人召寄之、

〔延徳二年將軍宣下記〕延徳二年七月六日丁巳、宣下、〇足利義稙任將軍、御要脚三万疋內下行事、〇中略

一七貫二百文　黒太刀七、〇〇〇金覆輪四十振、御評定御沙汰始時各被下了、政所下部三郎左衛門尉調進之、〇中略

一壹貫六百五十文　御出人夫幷松明御蠟燭代政所下部三郎右衛門

〔親俊日記〕天文七年十二月二十日庚申、歳暮御美物、諸家へ如例年、以公人觸之、

〔武政軌範政所沙汰篇〕一條目事

利錢　出擧　替錢　替米　年紀地　本物返　質券地　諸質物　諸借物　諸預物　諸放劵

沽却田畠　勾引人、如此等事也、以往者、京都鎌倉雜務公事、凡將軍家御家務條々、皆以於問注所政所、有其沙汰、近代者、一向爲當所沙汰之、依之諸國料所年貢、土藏、酒屋以下、諸商賣、公役等、悉爲政所之沙汰者也、

一訴訟次第事

就賦到來書與召文、相觸訴陳狀於內談之砌被驚之、其糺明之次第、同于雜訴之規式、仍不及委記、

一賦事

訴狀加銘、以執事之折紙賦于寄人之條、既舊規也、而勢州貞國執事之時、至永享之末、依公儀不得寸暇、申子細於衆中、一旦以政所代于時親當折紙賦之、其以來任彼例用代之一行乎、近年止折紙只加訴狀銘、旁以爲新儀者哉、

一式日事

毎月三箇度執行之、近代者、六日十六日廿六日也

〔建武以來追加〕一諸人借書事

無理之輩、誘取他人之借書、令譴責負人之條、非無其煩、早爲政所方沙汰可被加炳誡歟、

内評定
内談

〔政所壁書〕洛中洛外酒屋土倉（附地下人事）條々（永享二九廿）
一酒屋土倉關所事（〇中略）　一負物事（〇中略）　一諸土倉沙汰人等事（〇中略）　以上、此三ケ條一通也、
一諸人借物事（永享二十六〇中略）　一通　一諸土倉盜人事（永享五十三〇中略）　一通
一諸人借物請人事（永享八五廿二〇中略）　一通　一諸人借物事（永享八五廿五〇中略）　一通
一負物年紀事（永享九十十三〇中略）　一通　一本物返質券所領事（永享十二十廿二〇中略）　一通
一借物年紀事（永享十二十廿六〇中略）　一通　一洛中洛外諸土藏事（文安二九廿一〇中略）　一通
一作替借書事（文正元五廿六〇中略）　以上十二箇、政所壁書、

〔武政軌範（政所沙汰篇）〕一内評定儀式事
問注所政所沙汰者、被撰御前評定、是故號内評定、以往者元日以來正月中日々被行之乎、仍無著到者、自朔日每日記之、右者年始之執行式日不定、應永以後以廿六日被行之、先兼日爲政所廻折紙相觸之、至評定衆者不載之、以使者被觸遣之、
明後日廿六午剋、政所内評定被始行候、可有參勤之由候也、
某殿
某殿
右筆以下悉一紙載之
漸及其剋限、寄人參列、先執事代、差定役者、讀者、右筆之上首、奏事者、其次座人、著到者、又其次圖者、右筆末座役也、役者既定之後、執事出座、寄人次第著座、

〔蜷川親元日記〕政所内評定始著到（寬正二年正月廿六日〇中略）
當日時儀次第、先頭人御著座之後、面々著座、其後條々、役者各於當座定、但於次間面々被定之、
一番孔子之役（當年諏訪左近將監殿）
老若之紙札二如常入平硯、フタニ孔子之役者持之、發言之前ニ向、仍發言、一被取之、一持之歸、

二番奏事治部河内殿

先目錄頭人之御前ニ置之、其以後致披露、

三番硯出之侍雜司役之

奏事歸本座之後、目錄頭人被合御點、其儘御前被置之、

四番著到齋藤四郎右衞門尉殿

著座以後、當座ニ書之立座、頭人之御前ニ置之、是モ其儘被置之、

五番籤著到飯尾左衞門大夫殿

於次間整之、於當座各自身被書諱、但頭人之諱者、執司代最前書之、

中疊ナトル、侍雜司役之、

右此後式三獻三盃、獻々ニ一ヅヽ、三度ニマイル、御シヤク兩人、兩方エ出之、獻々ニ御シヤク改之

間直垂著之、

通衆六人被定置云々

御銚子片口、此肴ハ侍雜司アクル、

則又三獻、但御肴者五種マイル、注文別紙在之、御盃二獻マデハ合物御シヤク直垂著一人マイ

ル、御提ハ侍雜司持之、三獻メ五度入、御盃初獻頭人有御始、二獻メ座頭忠老始之、三獻メ又頭人

有御始、各於當座御太刀金被遣之、三獻メ一篇頭人御シヤク、此御太刀ハ例年儀也

三獻事訖、先頭人被立御座敷、已前之目錄、并著到御隨身、其後面々立座畢、

依爲御職始、面々各被進御太刀金、立座已後也、一獻料千疋、自納錢方下行、

〔政所内評定記錄〕政所内評定始著到寬正二年正月廿六日

伊勢守　諏訪信濃守　松田丹後守　飯尾加賀守　飯尾左衞門大夫　治部河內守　飯尾兵衞

大夫　清式部丞　齋藤大藏丞　齋藤五郎兵衛尉　清四郎左衛門尉　諏訪左近將監　稱甚

相觸折紙書様以公人相觸之、此三人依爲引付衆、以私使者觸方々、

諏訪信濃守殿　松田丹後守殿　飯尾加賀守殿

明後日廿六日午剋、政所内評定始被執行、可有參勤之由候、

〔蜷川親元日記〕一寛正五年正月廿六日内評定

頭人諏信州　飯左太　齋新左　齋四右　清式　諏左將
松丹州　清泉　飯兵太　齋民　清四左

一孔子　諏左將

二奏事　齋四右

三著到　飯兵太

四鎰著到　清泉

式三獻如先規

〔蜷川親元日記〕一寛正六年正月廿六日内評定始

頭人　諏信州　飯左太　清泉　飯兵太　齋民　齋五兵　清四左　松主

松丹州　治河　齋新左　齋四右　齋大　飯新左　諏左將

一孔子　諏左將　此新加兩人、評定已前被御禮申之、各太刀令持參候、

一奏事　齋四右　昨日廿五被成遣御奉書畢

一著到　治河

一鎰著到　清泉

測式三獻、如例年、武庫依御歡樂无御出、

初獻頭人御盃被始、諏信州御指御成之由被告申間、有御禮、被立座數輩、

御酌親元

二獻ムシ麵給菓子御酌蜷[illegible]此時御太刀遣之、太五左役之、

三獻但肴サタウ羊羹副盃五度入

・此分佳例也、此外二三獻在之、不慮時宜也、

直垂給仕中西六郎左衛門尉　少路與三郎堤小三郎　古市彥五郎

任例六人分雖差定之、臨期不到之由申之間、四人也、尤略儀也、

侍雜司三人祗候、百疋下行公人等中へ一種一瓶被下之、一獻料千五疋飯左太方江遣請取千五百遣

以下、

書御倉ヨリ以納錢方下行之廿二日日付

著到如例年御持參、御太刀金御進上、著到則出、以倉內給之、

〔蜷川親元日記〕一十一月〇寬正四年廿六日內談

頭人　諏信州　治河　齋四右　清式

飯左太　清泉　齋民　諏左將出仕已後今日始而參勤、仍對日頭江御禮太刀金

一下野國商人賣成荷物事飯左太、

一西京成願寺買得之地安堵事治河

一壽嚴僧申大覺寺門跡領代官職事對長田法眼申之事清泉

一矢倉兵庫申八幡入江坊領事治河

一壽嚴僧申大覺寺領契約分年記間安堵事清泉

一堤鶴夜叉丸申山岡崎門跡領御代官職事同

一那谷寺福藏坊事齋四右

用途	職員　頭人　評定衆

一山徒證明坊事〈飯左衛〉

一金森小三郎

〔建武以來追加〕一政所方年中行事、要脚内六千貫文支配事、爲毎月月別沙汰之上者、縱雖有御急用、寺社、并公方臨時課役等、永可被免除之焉、

〔太平記三十九〕諸大名讒道朝事附道譽大原野花會事

一ノ武家役ヲ、道譽兩年マデ不沙汰間、官領スハヤ究竟ノ罪科出來スト悦テ、道譽ガ近年給リタリケル攝州ノ守護職ヲ改メ、同國ノ舊領多田庄ヲ沒收シテ、政所料所ニゾ成タリケル、

哀道譽何事ニテモ就公事犯法事アレカシ、辛ク沙汰ヲ致サント、心ヲ付テ被待ケル處ニ、二十分

評定衆

評定衆ハ、一ニ宿老ト稱ス、政所ニ會シテ政事ヲ評議スル職ナリ、中原三善ノ諸流ナル攝津、太田、町野、飯尾、布施等ノ人、及ビ二階堂、齋藤、波多野等ノ諸氏之ニ任ジ、足利氏ノ一族吉良、石橋、山名、一色等ノ諸家モ亦之ニ參ス、而シテ一族ノ人ヲ頭人ト呼ビ、他姓ノ人ヲ出世評定衆ト云ヘリ、又式評定衆アリ、コハ他ノ奉行ヲ兼ヌルコトナク、式日ノ評定ニノミ列スレバ此稱アリ、

〔御評定著座次第〕貞和五年正月六日

御座

武藏守師直　上杉彈正少弼朝定　長井大膳大夫廣秀　佐渡判官入道道譽　二階堂三河入道行證〈○證恐誤〉　二階堂信濃入道行珍　宇都宮遠江入道蓮智　問注所美作守顯行

御荷用

佐々木五郎左衛門尉　外記七郎　對馬四郎左衛門尉　信濃左近大夫　參河三郎　狩野三郎　粟飯原又次郎　海老名六郎

評定衆列執權之上例

文和三年五月廿日

寶篋院殿御自筆御記云、評定始、又三方內談始也、是來二十八日予發向之間、以前可始行也、今日評定當參、

（石橋）左衛門入道心勝　仁木左京大夫賴章朝臣　佐渡判官入道道譽　土岐大膳大夫賴康　二階堂大藏少輔政元　問注所美作守顯行

披露奉行相原左近大夫也

〔康富記〕嘉吉二年八月二十八日丙辰、或語云、飯尾肥前入道永祥者評定衆也、去廿二日、御評定始日、與頭人波多野出雲守座席令相論也、爲評定衆上者、任位階上首、可着頭人出頭上之由肥前申之、出雲申云、雖爲衆爲奉行人之間、不可着頭人上候間、可着肥前上之由、出雲守事申之、於去廿二日者、出雲守着肥前上云々、今日事、兩方及對論、所詮任位階上首、爲衆者可着頭人上之條、有支證之間、諸奉行一味同心、申此子細候云々、仍出雲守假一級事被執申、今日着肥前入道上云々、

〔武家名目抄職名五上〕按、常に奉行人といへば引付衆さ、政所問注所の寄人とにかゝれる稱謂なれど、もと奉行といふは、君命をうけ給はりて、事を行ふの意なるが故に、所職の上下等級にかゝはらで、政所の有司たる輩の總名の如く、かけていひしこともあり、本文に雖爲評定衆爲奉行人云々とかける類これなり、かくなれる故は、初鎌倉の世に、いまだ引付衆を置かざりし、重職なれば、衆中いづれも優劣なかりしが、引付を置かるゝに及びて、評定衆の内をもて、其頭

人に兼補せられしまゝ、同職掌とは云ひながら、頭人もしくは、政所、問注所の執事を帶せざる、なべての評定衆は、其勢一きはくだれるさまになりて、おのづから頭人の指揮に従ふごとくなれり、さればたまさかには、評定衆を引付衆と同じく、奉行といふこともありしなり、〇中略さてこの頭人には、評定衆の内にも、大かた上首の輩を以て兼補せらるゝならひなりき、これ全く彼輩をして、上首の人を指揮させじとの爲なるべし、然れども本文の如く、座席の論出きしを見れば、位階の下なるものも、たまさかには、頭人になされし事ありしと見えたり、

〔康富記〕寶德元年十一月九日甲寅、是日武家御評定始也、管領畠山左衛門督入道出仕也、頭人、問注所加賀守、攝津掃部頭、二階堂、波多野、飯尾肥前入道、大和入道、齋藤加賀入道、飯尾備中守、齋加云々同美濃守等十人、皆評定衆也、此外役人飯尾左衛門大夫布施十郎等也云々、

〔武家名目抄職名五上〕按、評定衆は執權と共に政所の席に列なり、政務を評議し、萬事を進退せる重職なり、或は政所執事、問注所執事等を攝し、又は引付頭人を帶す、公家の官職に准ずるに、納言以上のつかさに配して、尤文官の冠たり、〇中略足利家の時に至りて、〇中略中原、三善の諸流、攝津太田、町野、飯尾、布施の類なり、并二階堂、齋藤、波多野等の族、其任に堪へたる者をもて、此職に充られ、更に公方の一門、吉良、石橋、山名、一色等の諸家に命じて、評定の席に臨み、中原、三善等の上に列して、政務を議定し、かはるがはる引付頭人の職を攝せしむ、但當時の制度にて、一門の輩は引付を經ずして直に評定衆に補するが故に、他姓の諸家をば出世評定衆と稱して、一等を降せり、さて一家の輩も、初の程は諸家と同じく評定衆と稱せしが、中頃より頭人とのみいひて、評定衆とはよばざる事となりけれど、其職掌に至りては、卽評定衆のつかさざる所なり、思ふに一家の人は、右筆の列と其稱を同じうする事を厭ひて、頭人とのみ稱するならひもいできしとみえたり、三管領の家にて、執事といふ名をとゞめて、ひたすら管領とのみいふ事となりしに同じ、其外土岐、佐々木等の類も、等持院殿、寶篋院殿

の頃は、一家の人と共に評定の席に列し、引付頭人をも帯せしかば、應仁の亂後にも、引付の番文には、頭人の列に載られたりけれど、この輩も亦常に評定衆といふことなし、さるは何れの武門の名家にして、執筆の職を名譽とせざるなどの故を以て、一家と同じく其稱を停めし成べし、（引付頭人の條合せ見るべし）伊勢守も亦鹿苑院殿の頃より、評定の列に加はり、頭人をも帯する家となりしかど、康暦中、政所執事を兼せしより、其職を世々にせしかば、常には評定衆といはずして、ひたすら政所とのみ稱せり、こゝをもて評定衆といへるは、攝津、二階堂、波多野、町野等の族に限れる如くなりけれど、もとより定格とせられしならねば、猶引付衆よりも轉補し、たまさかには、其家ならぬ人も補任せられし事なきにあらず、（應仁亂後は、一家の輩、及土岐、佐々木等の諸家も、多くは在國して在京まれなりければ、世俗には、攝津、二階堂等をのみ評定衆の家と思ふ如くなれり、）此頃は、評定衆をさして宿老ともいふ、これ全く長老宿德の所職なればなり、此衆、大永天文の頃までは、たしかに補任せられしが、永祿元龜の際にいたりては、その稱謂さへ聞えずなれり、後幾ばくもなく、織田氏勃興して、足利家職を失ふに及べり、これをもて其勢の自然なるを知るべし、

〔殿中申次記〕正月八日（○中略）
御對面之次第、一番に評定衆と申入て、評定衆懸御目、

〔年中恒例記（十月）〕今月亥日、（○中略）大名の被官衆へ御嚴重（○嚴重恐衡重誤）出樣事、（○中略）
かみ〳〵　御部屋衆　攝津守以下評定衆
　右切薄也、上包有之、名書有之、

〔伊勢貞滿筆記〕一評定衆事、外樣衆と同前、總別評定衆と申は、攝津、二階堂、波多野、町野等也、何も外樣衆之分也、

〔大內問答〕一貴人御出の刻（○中略）

堂上出座候はゞ、一方に直し申され、一方には三職の御衆たるべきか、其外の事は、御位次第之儀候間、兼而は難ニ申定ニ、御相伴に被ニ參候衆の內、宿老分別の輩に、挨拶させられ候而可ニ然候、

〔梅松論 下〕一或時、兩御所〇尊氏直義 御會合在て、師直幷故評定衆を餘多めして、御沙汰規式少々定められける、〇下略

〔武家名目抄 職名五上〕按、これ建武式目の事をいへり、〇中略 本書を考ふるに、奧尾に署せし人數は、前民部卿是圓俗名眞惠、玄惠法印、大宰少貳、明石民部大夫、太田七郎左衛門尉、布施彥三郎入道、以上八人なり、少貳已下は、鎌倉殿の時より、評定衆の家なり、

〔太平記 十八〕比叡山開闢事

將軍〇足利尊氏 左兵衛督〇直義ヲ奉ニ始、高、上杉、頭人、評定衆ニ至ル迄、サナハ山門ナクテ、天下ヲ治ル事有マジカリケリト信仰シテ、則當領安堵ノ外ニ、武家増々寄進ノ地ヲゾ被ニ副ケル、

〔花營三代記〕應安五年正月十一日、齋藤右衛門入道被ニ召ニ加評定衆ニ訖、三月十二日、布施彈正大夫入道、可ニ爲ニ評定衆ニ之由、被ニ仰出ニ之、

〔鹿苑院殿御元服記〕一應安五年十一月廿二日、御判始、〇中略

御祝次第　御引出物御劍、御馬、管領進ニ上之、次御評定衆、俗淺眞直壽、法體玄如常、

〔御評定著座次第〕永和四年正月十一日於ニ出仕評定衆ニ者、盃飯朔子出云々、

〔文安年中御番帳〕評定衆　攝津　波多野　二階堂　町野　文安戊丑

〔長祿二年以來申次記 上〕正月八日

一評定衆、波多野、二階堂、町野、此三人、一人宛懸ニ御目ニ也、攝津も雖ニ爲ニ評定衆、朔日に參勤之間、今日は不ニ出仕ニ候、猶なにとも不ニ申入ニして

正月十一日

一御評定始在之、(每年今日式日也、如此也、)此次第雖々尋可申候、(○中略)

一御評定始、(未刻)管領并評定衆には、(攝津、二階堂、波多野、町野、)其外奉行衆以下出仕也、此儀も應仁亂前迄之事也、

〔蜷川親元日記〕寛正六年二月十七日乙未、無御出、仍一色殿例年之御成御延引之御沙汰始延引之、此條先例之樣、評定衆被尋下之處ニ、如此例無覺悟、只々雖爲十三日、畠山殿(義就)自御職時、如斯然者以是可爲延引之例歟之由、被申上云々、

〔齋藤親基日記〕寛正七年(○文正元年)正月廿六日、(當日奉行)政所內評定著到、(寛正七年正月廿六日)

伊勢守(貞親)　(當番)諏方信濃守(忠郷)　飯尾肥前守(之種)　(執筆著到)清和泉守(貞秀)　齋藤新左衛門尉(基維)

(奏事)齋藤四郎右衛門尉(種基)　齋藤民部丞(親基)　(貞秀舍弟)清式部丞(秀數)　齋藤五郎兵衛尉(豐基)　清四郎

左衛門尉(元定)　(新加)飯尾四郎左衛門尉(爲衡)　諏方左近將監(貞通)　(嫡子)松田主計允(數秀)　飯尾加賀

孫四郎(宗清、後改清房、)　貞有

爲衡雖著元定之座上、依爲親、於著到如座敷調之、

不參、松丹秀興、治河國通、飯新左爲脩、齋大基周、

文正元年六月廿四日、普廣院殿御年忌、御成如常、評定衆右筆方如先々參候、於齋集齋點心在之、評定衆點心計也、

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕評定衆

(江州)二階堂山城判官　(濃州)波多野因幡守(藤原)　町野加賀守　中條大夫判官(藤原)　結城加賀守(藤原)

一番衆

細川淡路善九郎　今川兵部大輔(國氏)　今川源三郎　細川天笠源命丸(○以下六十四人姓名略)

五番

大館彈正少弼尙氏　荒川宮內大輔政宗　荒川三河守　同太郎三郎　一色刑部少輔　一色宮內少輔（以下六十七人姓名略）

〔延德二年將軍宣下記〕一評定衆役者出仕

波多野因幡前司通直朝臣（大帷淺黃）

今度敍從四位下、彼家初例云々、

（同往所御硯役）町野加賀守敎康（同）　飯尾肥前入道永元（衣躰擬裝束好、依爲法躰之儀、衣於法中僧用、綸紋等不著僧儀也、）

（昨日卯）敍正五位下（越階）（著白革襪、時節不審、今日超越對州加州、）

松田對馬前司數秀（大帷）　飯尾加賀前司淸房（同）　攝津掃部頭政親

今度評°定°奉°行°事、先祖令勤仕否事可被注申之旨、御尋波多野町野之處、支證紛失之由波多野被申之、但爲次座勤仕之例、町野注進、仍以彼例被仰付酒掃云々、代々勤仕勿論也、將軍宣下令執進上之後、（篤打）儀依所勞退出、無御評定著座也、總評定著座御免者去年事也、其後無御評定、

今度又所勞也、未著座也、

奏事

飯尾美濃兵衛大夫春貞（白大帷）　雖有上衆、依應安御例被仰付云々、　加先規自評定奉行可被相觸之旨、兼連中通政親、以被使者兼日被相觸之云々、

孔子

淸筑後修理亮貞泰（淺黃大帷）

爲公（〇公原作二、今改）人奉行、兼連以使者兼日相觸之、

評定衆先各著座

御出座之後、管領著座、（篤打直垂、地紋二重鶴也、先例大帷也、被用略儀了、）自內々參著、其後評定衆經東面緣入于中門廊妻戶、

式評定衆

次第著座御前了、寢殿九間也、

〔大館常興書札抄〕書札之事

一評定衆事　攝津殿　二階堂殿　波多野殿　町野殿　是は同時ながら、御宿所と京極加賀殿などの如く書て可然也、又違之候ともあるべし、何々御宿所可然也、

〔光源院殿御元服記〕一天文十五年十二月二十日、新將軍義藤若君御評定始、御判始等有之、○中略

一新將軍御出御著座、元造朝臣サンフヲ持參、御座右ノ方ニ被置、人數定賴朝臣、二階堂中務大輔有泰朝臣、町野左近大夫將監康定、松田丹後守晴秀、今度、始而被召加處也、元造朝臣也、座席之次第、新將軍御右方、定賴朝臣著座、元造朝臣向定賴而座少下也、定賴之下有泰座、有泰之下晴秀座、元造朝臣之下康定座ス、

一鬮取次第、元造朝臣、有泰朝臣、康定、晴秀、鬮役賴隆、

一御前ノ通、眞中ニ圓座ヲ、一直見持テ出敷之、

一康定御硯目錄持參御前ニシテ置、歸座、三色御合點有テ、又康定座ヲ立テ、三色取ヲ退、又著座、堯連出テ三社ノ事披露、發言晴秀各合點ノ氣色有テ、堯連退出、次ニ評定衆下﨟ヨリ立テ、皆退出、定賴朝臣モ又退出、

〔花營三代記〕應安五年正月十一日、齋藤右衞門入道被召加評定衆訖、　三月四日、町野越前入道可爲式評定衆之由被仰出云々、　九日、佐々木治部少輔式評定衆出仕始、　十二日、布施彈正大夫入道可爲評定衆之由被仰出之、○中略　佐々木治部少輔恩賞方出仕始之、

〔武家名目抄職名五上〕按、佐々木氏は、初式評定衆に補せられて、出仕始を勤め、日あらずして、恩賞方に加へられし故に、又其出仕始をいたせしなり、恩賞方より加補する時は、式字を除く事なり、

職掌

〔武家名目抄 職名五上〕按、式評定衆は、なべての評定衆の列に有ながら、引付頭、政所、問注所の執事、及評定奉行等を帶することなくして、要職をば攝せざるものなり、されば、例式の評定にのみあづかる意にて、式字を加へられしなり、此名目、鎌倉殿の時には絶て見る所なく、建武記に始ていでたり、○中略足利殿の世となりて、評定、式評定の兩衆を置れけるに、初の程は、殊更に階級を分別せらるゝ事はなかりしかど、要務を統攝するさ、例式の公事を沙汰するとの輕重はありしなり、當時式衆たる者、政所執事代にはなされけれど、執事には補せられず、これその輕重ある所なり、されば式衆たる者も、一旦恩賞方に加補する時は、直に式字を除きて、要務にもあづかれり、これ恩賞方は、政府の要領たるを以てなり、花營三代記に、評定衆より、式衆になされし事見えたれど、これは別に故ありて、要務を止められしなれば、もとより常例にあらず、○中略然るを世を經るに従ひ、式衆の職掌、往々攙削せられ、ひとへに揚名の職となりて、御評定始、御沙汰始等の席に臨むの外は、所職なきさまになれり、さればこそ、伊勢、飯尾等の如く、式衆を辭して、引付衆に遷補し、神宮開闔、政所執事代等を兼行ふ變例もいできしなれ、思ふに此頃は、引付衆の内、或は老境にいたり、或は病ありて、劇務に堪へざる類を以て、式衆になさるゝ事多かりしなるべし、此式衆を補せられし事、文明より後は絶て聞えず、畢竟揚名の職となりし故に、おのづから廢絶せしと見えたり、

〔齋藤親基日記〕寛正七年○文正元年二月十七日、御前御沙汰始、

御前　管領　洒掃　雲州　因州

同事次第

野州貞基　玄良以上式評定也、恩賞方著座衆ニ御見、

〔政所賦銘引付〕寄人
文明六十二、被レ召ニ加式衆一、
松田丹後守秀興

〔庭訓往來〕引付、問注所、上裁勘判之體、異見議定之趣、評定衆以下可レ注ニ給之一、

〔新加制式〕一雖給三ヶ度召文、不參上科事、
右式目之趣、既顯著也、但其人、或受重病、或在不自由儀者、至評定衆中而、可申子細、
〔新加制式〕一固可有禁止賄貨事〇中略
訴論人、寄及賄貨之沙汰者、評定衆互遂白狀、可有其計、潔自他之心、各可被歷計議乎、

正月評定始

〔年中恒例記正月〕十一日、今日は御評定御沙汰始にて、管領以下出仕、但應仁亂以前之儀也、御評定初儀式事、未上剋公方樣御著座、(御座をまかれ、御裝束はかりぎぬ、)其後管領著座、(大帷也)其後に評定衆、(攝津、二階堂、波多野、町野、各大帷也、)其時之官位次第に著座、其次右筆方の中、評定衆に被召加之人數著座、(大帷也)其後に右筆方の衆一人づゝ、御前へ參て祝詞をつくりて披露之、各裏打也、如此事すみて、管領黑太刀進上之、其外評定衆以下御太刀(金)進上之、其後管領に御太刀(黑)直に被下之、御前へ被持參、伊勢守裏打也、其後評定衆に、於御前御太刀被下之、直には不被下、伊勢守役也、
〔成氏年中行事正月〕十一日、御評定始、公方樣、香之御直垂精好ノ御大口ニテ、御直垂付ニ白キ緌ヲメサル、因茲平人白緌ヲ不著、御佩御重代、大食役人ハ常ノゴトク御一家御沓之役名字不定、御評定所ハ十五間、中ハ油磨紫緣之御疊廻敷ニテ、衆中ノマヘゴトニ半疊アリ、御座ハ、常ノ御座ヲ紫緣ノ御タヽミノ上ニ重テシカルヽ也、面ハ皆御隔子ノマヽニテ、障子ヲ立ラルヽ、公方樣御出ノ口ハ、御ヤリ戸、御荷用ノミチモ御遣戸ニテ、北ハ大ベラ也、管領ハ大御門ノナラビ、南ノ小門ヨリ被參、評定奉行政所問注所其外ノ衆中ハ皆面ノ御門ヨリ出仕、網代輿也、馬ニテ出仕之方モアリ、俗體ハ皆常ノ直垂ナリ、法體ハ無紋褐地之紙縒紐タビ、只時ハ白小袖ニ緣ノ大口、シタウヅト名テ、ジヲ革ノ單皮ヲハカル、管領評定奉行ハ供二騎、其外ハ一騎也、何モ直垂、管領之出仕ナキ前ニハ、衆中先二間御縁侍伺候セラルヽ、管領ハ直ニ衆來之座へ被參、彼御座ハ七間ニテ、中ハ油ミガキノ板也、管領出仕ヲ聞テ、衆中皆集來之座へ被參、彼座者緣所トモ申也、管

領ノ供ヲ爲始七間御厩之侍ニ集、正印ノ太刀共ヲバ、我々ガソバニタテヽヲク、管領其外衆中之座位之様、供モ可居、仍テ管領評定奉行衆來ノ座ニテ、公方様之出御ヲ待被申、悉出仕之由聞召テ、簾面御出アル也、被見申御出、管領自下絓烏帽子ヲ取テ懸ラルヽヲ見テ、自餘モ同心ニ掛ヲルヽ、管領各ヘ目禮アッテ被參、其後評定奉行、其座次之様ニヨリテ、次第ニ被參、二間御遣戸ヲマナカ明テ、御障子ヲ立ラレタルヲ、左ノ手ニテヲサヘテアケテ、御座ノ内ヘ被參、右ノ指ニテ御障子ノハヅレヲ取テ立ラル、三寸ヅヽ立殘シテ、其後先手ニテコシニサシタル扇ヲヌキテ、右ノ手ヘ取ウツシテ持テ、御座ニ著ルヽ也、如此之後右筆折紙ニ三ケ條記之、一ケ條ハ皇大神宮伊勢之御事也、一ケ條ハ八幡宮鶴岡之御事也、一ケ條ハ勝長壽院之御事也、○中略 此三ケ條油ミガキノ座中ニ右筆伺候令披露時、圖役、是モ右筆老若ノ圖ヲ持テ廻時、管領評定奉行ヲ爲始圖ヲ取、老圖ナレバ、衆中ニ年之増タル人ノ去年發言申サヌ人、當年意見ヲ被申也、若ノ圖ナレバ、其内ニ年ノワカキ人ノ中ニ意見ヲ申サルヽ、但初參ハ三ケ年過テ發言ヲバ被申規式也、毎月六度之御沙汰之時ハ、遲參之人發言被申ナリ、仍御評定始之發言ハ、一年充番廻テ、三ケ條何ヲモ意見有、上古ニハ勝長壽院ノ事一年、二階堂永福寺之事一年、各年ニ被載之、近代永福寺回祿以後、御堂之事毎年披露アリ、三ケ條之意見共調テ後、同心之分ニテ同ト云コトヲ被申、是モ一年宛ニ廻テ被申也、意見ニモ同ニモ右筆ノ披露ニモ調子アリ、如此悠々衆中皆以可有覺悟、意見調子其外次第トモ自然外見聊爾タル間、不及子細記之、意見同調テ後三ケ條記タル折紙ト、御硯ヲ奏事之右筆持參申時公方様御點ヲアハサルヽ也、其後折紙ト御硯ヲ右筆持テマカリ出、其時御奉行代直垂ニテ參、奏事ノ役數タル圓座ヲ取テマカリ出、其以後御障子皆アケテ、式ノ御肴ニテ、御酒三獻參、

職員
頭人

引付

引付ノ頭人ハ、足利氏ノ一族、若シクハ外樣大名中ヨリ選拔シテ之ニ補ス、其代理ヲ權頭人、又ハ權々頭人ナド云ヘリ、

引付衆ハ、全國ヲ三區、若シタハ五區ニ劃シ、之ニ應ジテ三番、若シクハ五番ニ分レテ、其政務ニ當ル事アリキ、卽チ三方內談、五方內談ナド云フモノ是ナリ、

引付衆ノ外ニ開闔右筆アリ、開闔ハ、右筆中ノ宿老之ニ任ジ、署務ノ整理ヲ掌ルモノナリ、

〔撮壤集〕武職頭人引付

〔武政軌範〕引付內談篇一頭人事

御一家、及諸大名中、擇器量被補之、近年者不謂堪否、任舊例被補任畢、

〔園太曆〕觀應三年〇文和元年五月一日、傳聞自今日歟、武家執行雜務、引付高駿河守入道、大高伊豫前守重成、爲兩頭人行之云々、

〔後愚昧記〕貞治二年八月廿四日庚申、畑庄事、今日奉行人依田左近大夫時朝披露之、可成奉行之由治定云々、爲悅了、引付頭人尾張將監義高、大夫入道孫、當時執事也、

〔花營三代記〕貞治七年〇應安元年二月十九日、禪律內談始、行於御所、管領〇細川頼之佐々木大夫判官入道、

三月八日、一方內談、左武衛督

〔武家名目抄〕職名五下按、本文ニ、管領佐々木云々トアルハ、禪律方頭人ノ事ナリ、執權ヲ云フニアラズ、

〔花營三代記〕應安三年九月二日、澁川武州禪門京兆、一方內談頭人、今川與州禪門、出仕被仰吉見右馬頭入道之處、領狀云々、禪律方頭人事、被仰赤松律師坊之處、八年〇永和元年十一月廿六日、細川兵

部大輔可爲頭人之由被仰下之、同日五方引付、幷侍所、衆、又施行、

應永廿八年正月十一日、御評定始、管領頭人有出仕、御所樣有御對面、頭人四人、攝津、左馬助、波多野入道、

〔康富記〕文安六年〇寶德元年四月廿九日己卯、室町殿〇足利義政征夷大將軍、幷禁色等宣下也、〇中略其後有御判始、被行吉書儀、管領著殿上被行之、頭人波多野、二階堂、問注所、町野攝津掃部頭等也、

〔政所內評定記錄〕政所內評定始著到寬正二正廿六

當日時儀次第、先頭人御著座之後、面々著座、

〔今川了俊書札禮〕此間われ〳〵に向て、書札の禮に進上恐惶とあそばし候、無勿體候、昔はむかし、今は今にても哉之間、堅辭退申度候へ共、但我等が事は、既九州の管領時分に候、則將軍家の身を被分位に被居哉之間、式體は、公方に向ひ申候一の御禮かと心得申候間、辭退所なく候、今も我々當職上表申哉に候者、自他同輩等之儀たるべく候間、相互に恐々謹言たるべく候、京都にても、大方の一方の引付の頭人に成ぬれば、其かゝりの上衆達、まして評定衆、奉行人等、皆々恐惶と可書にて候、

〔常照愚草〕一番文之事　是は五方引付の番文なり、それには土岐、佐々木、伊勢、大和をも被入候、又攝津、二階堂、波多野、町野など書も番文に入候、正頭權頭とて、二人は一段賞翫なり、第一を正頭と云也、至近代は、正頭と申かた〳〵は、吉良殿、石橋殿、山名殿、一色殿、細川奧州などなり、畠山匠作被召加しことも在之云々、次權頭には、攝津、二階堂、伊勢、波多野、佐々木、加賀などにて候つる、第一に正頭の人を書て、其次に權頭を書候て、其外は位階次第にもしるし候哉、又は舊參新參の著到も可有之、此外右筆輩數多書加候、此番文と申事、昔は其時代之公人奉行、一代に必申沙汰仕て、人數を注たる事なり、近代は無沙汰云々、古は天下之諸公事を、此五方の頭人令存知評定をなし、理非

權頭人
權々頭人

引付衆

を分申定畢、應永年中までは、さやうの事も有之、其後は五方の人數ばかりは、公人奉行も出立候へども、不及御沙汰なりはてしなり、

〔武政軌範 引付内談篇〕一正頭人差合時、權頭人執行內談事、

依公事或病患等、正頭無著座之時者、權頭、權々頭、執行之條常例也、是爲不退轉、式日御沙汰也、次正頭人差合之時者、爲權頭人成奉公事、又有其例哉、

〔尊卑分脈 四 中原〕貞高 從五下 左近將監 ─ 能直 評定衆、引付權頭、掃部頭、從四下、 ─ 能秀 評定衆 權頭

○按ズルニ、當職ノ事ハ、頭人ノ條ニ引ケル、常照愚草ニ見エタレバ、宜シク併セ見ルベシ、

〔武家名目抄 職名五下〕按、引付衆は、評定衆輔助の職にして、訴訟はさらなり、其餘の公事、なべてうけ給はり、沙汰せる重職なれば、評定衆にさしつぎて、諸奉行の職を帶せるならひなり、これを公家の官職に比するに、參議もしくは、左右辨官の職掌にあたれりもと引付といへるは、記錄の名よりいでし名目なり、○中略 引は導引の意にて、事の手引となすべきいはれあり、○註略 付は著譜の義にして、當世物を記したるを、書付といへるに同じ、さてこの輩は、政所に祗候して、訴訟以下の公務を沙汰するを本務とし、文官の事たるが故に、記錄所祗候の意を以て、引付衆と稱せるなり、○中略 等持院殿政務の始、建武年中引付を置かれし時、頓て五番を設け、頭人五人を補せられて、引付衆十餘人を五方に分隷し、各寄人數人を副へられたり、○註略 此頃にいたりて、つねには引付衆を內談衆ともいひ、あるひは、此衆と寄人とをなべて右筆衆奉行衆とも稱せり、又ともに政所寄人ともよばれしなり、これは○中略 足利殿に至りても、吉良、石橋、山名、一色、細川、畠山を始め、一家の輩をもてこれに補せらる、但こゝにいふ細川畠山は、支流のすぢにて管領の家にはあらず、此外今川、仁木、吉見等も補せられしなり、何れも一門なればなるべし、これを正頭と稱す、又他姓には攝津、二階堂以下、伊勢、波多野、佐々木、加賀等の族、評定衆たる者、亦頭人に兼補せらる、此輩をば權頭とよびて、正頭よりは一きな下れるものなり、但常には、權頭をもひたすら頭人とよ

（びて權字をそへず、又鎌倉の時は、正權の分別有し事所見なしといへども、北條家と他姓とを分ちて、しかいひしことありしにや、しらず、）初めは此衆を引付頭といひ、中頃より内談頭人などゝも稱せしが、いつとなく頭人とのみよびて、引付の頭と聞ゆるごとくなれり、これは政所一局の稱呼外へ及ぼせしのみにはあらず、政府の重職たる故なるべし、此内に、地方頭人、神宮頭人、禪律頭人など、職掌さま〴〵あり、其よしは各條に辨せり

〔大舘常興日記〕天文八年六月廿六日、三寶院殿と山科家相論、山科鄕之内之事、右筆意見御尋可然哉之旨御氣色之趣、宮内卿殿より日行事（攝）へ文在之、巨細御樣體在之、　九年九月十一日、建武式目一卷、爲上意昨夕以佐拜見させられ候事在之、仍今朝以佐返上之仕也、忝存候旨申入之也、此儀御内書などに内談衆事を宿老衆と被遊候べき事、此式目に宿老衆と在之間、無別儀由、内々被尋下間、無別儀旨言上仕也、何にもと〳〵の趣、宿老共と被遊て猶可然哉と存候由申入之也、　此宿老衆と候事、淸三位に常興として尋候分に尋候べき歟之由御氣色也、尤に令存候て、今朝以佐相尋之處、くはしくは不存知候、常德院殿樣（○足利義尙）御時分之趣、尤無別儀存候旨被申之也、淸三位所進所候間、ふと覺向候て如此候由申也、

〔建武以來追加〕一本所寺社領事
方々施行停滯、頭人、幷奉行緩怠、空經廿ケ日者、任本條宜經直訴、嚴密遵運（○遵運二字恐遵行誤）行之可申左右之由、差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌亦猥及濫訴者、暫可閣彼訴訟也、

一文書紛失輩訴訟事（貞和二閏九廿七評定）
可爲內談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年已前分者、無事書之間、委細之旨趣、無據糺明歟、任先例尋問當知行之實否、於有證人等者、須成賜紛失安堵御下文、至同年已來分者、守舊規於事書在所（恩賞方、安堵方、問注所、）可有其沙汰焉、次不知行地事、於內談方、且相尋當時之領主、糺明證跡、可是非、子細

同前、

一方內談、武州方奉行人、(國忠門眞左衛門入道寂意)

(政所內評定記錄)政所內評定始著到(寬正二年正月二十六日〇中略)

相觸折紙書樣(此三人、依爲引付衆、以私使者觸方々、)

諏訪信濃守殿　松田丹後守殿　飯尾加賀守殿

明後日(二十六日)午剋政所內評定始被執行、可有參勤之由候、

(齋藤親基日記)寬正六年十二月三十日、飯左大之穢、一方內談衆御免、

(蔭凉軒日錄)文正元年七月二十五日、公文奉行次第之事、以伊勢守被尋下于諸奉行之中、仍飯尾肥前守被仰付樣者、普廣院御代、飯尾肥前入道、幷同加賀守勤之、然則不依上頭、只中老人衆依其器用歟之由申之、仍披露之、

○按ズルニ、中老ハ引付衆ノ事ナリ、

(齋藤親基日記)文正元年十一月二十日、飯尾下總守爲數、神宮開闔、幷政所執事代等被仰付之、加式評定衆已後、不申沙汰之上者、辭式衆、爲引付衆可奉行之旨、以伊勢備中守貞藤被仰出之、〇中略

一總州辭式評定衆、可爲引付衆(一方內談衆事也)之旨、屬玄良被申請奉書、希代事也、

(政所賦銘引付)寄人

松田丹後守秀興(文明六十二被召加式衆)　治部河內守國通(文明六十十七日頓死)(〇以下十六人姓名略之)

以上衆、文明六正廿六著座分也、此內六人、今日新加也、任例各被遣頭人御奉書畢、此外淸式部丞、諏訪左近將監、依在國无著座、

(武家名目抄職名五下)按、爰に寄人とあるは、引付衆と寄人とをなべていへるなり、

(大館常興日記)天文七年九月廿日、御內談衆、昨日は無來臨、今日來入、荒禮部、攝州、豆州、海備州、本常州也、　八年六月廿日、御內談衆、細豆州、荒禮部、攝州、本常州、佐各來入、山科家と三寶院御門跡相論

山科鄕內之事、兩奉行出合に、今日披露之、兩方證文共於番之、山科殿事は爲禁裏樣御申也、山科家理運之樣に有之哉、其趣先以以手日記可得上意分也、　九年二月十七日、今日御沙汰始也、仍御內談衆も每年御太刀（金）進上也、然間御太刀（金）御申次（細豆州へ）進入候て、如總次預御披露は可畏入存候由申之、（使者松下兵衞也）依不叶行步如此、以使者申之、自餘のかた〴〵も自然所勞などにて、不參候へば如此、　三月五日、攝州より各へ折紙在之、如此也、（昨日之日附也）

日向伊藤、一官事、內々彈正大弼雖望申、今度大膳大夫所望之由申候、各御存分可有御申候、伊藤被官、一條殿參候書狀、爲御披見被出之候、是は普通之儀候、不苦申事と於元造存意候、恐々謹言、

三月四日　　攝津守元造判

御內談衆御中

如仰大膳大夫事、四職大夫之內普通候哉、但伊藤家には、無其例候得共、老ゆんきよの例をもつて、望申候歟、尤宜爲御衆議候、大弼よりは、大膳可然哉と令存候、如此事書申也、

〔大館常興日記〕天文十年十一月十五日、愚老御內談衆御免事、重而申上度之由佐方へ申之、上意之趣面目之至忝存候、然共如此段、宮內卿御局へ可被得御意之由申之也、

〔武家名目抄職名五下〕義昭將軍諸役附云、奉行衆、諏方信濃守晴長、飯尾加賀守盛就、飯尾右馬助貞遙、諏方神兵衞尉俊鄕、松田九郎左衞門尉賴長、二階堂山城守晴泰、波多野耆五郎通秀、大館上總介氏虎、一色七郞勝貴、竹田梅松軒、耆波宮內大輔國任、（後號坂田）

〔武家名目抄職名五下〕按、茲に奉行衆といふは、引付衆をも政所寄人をもすべて云へるなり、此內二階堂波多野兩家は、世々評定衆の家なれど、此時既に評定衆の稱謂絕えたりしかば、奉行衆の內に列りしと見ゆ、又一色竹田耆波などはもと政所祗候の家にてはなかりしを、此時更に加補せられしなるべし、永祿六年諸役附に載たる奉行衆は、飯尾、諏訪、中澤、松田、治部、布施等

開闔
開闔代

の諸姓にて、何れも世家の奉行なり、依て思ふに、武家やうやく衰弊すと雖も、光源院殿の代までは、猶自ら世家のものを以て補せられしと見ゆ、然るを義昭將軍の時となりては、人數もみたずなりければ、其すぢならぬ輩をも加へられしなるべし、

〔細川家書札抄〕一引付方　諏訪信濃守　松田丹後守　打付書たるべし、さうにあるべし、

〔撰壒集武雜〕開闔

〔武政軌範引付内談篇〕一開闔事

右筆宿老中、依器用被仰付之、內談之次第、所役之進退、凡爲開闔之指南乎、古來以御前御沙汰衆、被補之云々、近代雖爲御前未參之仁、被補之、聊有不審、

一內談始行事

當日開闔遣折紙、相觸衆中、〇中略至其剋限、衆中參着、先開闔申合、頭人差定奏事、〇中略着座定之後、開闔起座而進於中座、披露規式、

〔武政軌範引付內談篇〕一訴訟次第事

訴訟人申請賦、而付渡于其手之開闔、則申沙汰之、賦與寄人之時、召訴人於內談之砌、相尋事由、〇下略

〔齋藤親基日記〕文正二年正月六日、內裏四足御門役事、尾州被引之、管領末補之間、開闔治河國重請取之、爲傍輩中可合力之由被仰出之、則分五番合合力了、

〔大館常興日記〕天文九年卯月朔日、從細川豆州日行事也各へ御折紙在之、今日清光院殿より、以宮內卿御局御申候、八瀨にて盜人在之て、清光院殿をもおそひ申ける、ねらはれて開闔へも被仰合之、めしとられ候て、盜人をばかいかうへあづけ被遣候、御成敗之段被仰付候やうにとの御申也、仍各へ御だんがうの由御折紙也、仍尤御成敗樣體、急度開闔へ被仰付候て可然存候、可爲御衆議之由申之也、清光院殿宮御局への文如此也、　三日、日行事豆州より各へ折紙在之、御乳人御三人御行

器之物、去月當月分未給之間、御迷惑之由被申旨承候、尤以無餘儀候、然に御倉に御要脚只今御ざなきよし承候、然ば御折紙かた何にても參次第に則可被仰付歟、次飯中大以申狀言上、被官中間宿に鏡師にかたわき宿をかし候、然處彼鏡師有子細めしとられ候、就其飯中大中間雜物事かいかう被引散候、まへ〳〵居申候處、如此開闔働更以無覺悟候、殊以引懸も申候へ共、此分曲事候由申事也、然間爲豆州二三度雖口入候、開闔無同心候條、可有披露候哉旨承之也、爲貴所御口入候得共、於無同心は如仰被伺御氣色、右筆方意見可有御尋候歟、宜爲御衆議之由申之也、飯中以引懸申段は無別儀哉旨同申之、

〔大館常興日記〕天文七年九月四日、御料所宮川御公用、一向就無沙汰儀、御雜色を可被差下、以懸札堅可申下候由宮内卿殿より承之、隨而河鏡事以日行事（豆州）御倉正實方へ被仰候由同承之也、御雜色は井上思食候處、歡樂仕候由候間、西村可罷下分也、開闔代布下（○布施下野守）被申付之也、

〔武政軌範（引付内談篇）〕一諸家兼參輩事

右者右筆奉公之仁、以子息親類令兼參于執事之條常習也、近來以其確據經歷于諸大名之類多有之、於引付内談之席申沙汰公事之儀、更不相替、直參人至座次亦無差異、依之歷年之後止兼參、雖致直奉公、曾無其煩者哉、

〔花營三代記〕貞治七年（○應安元年）三月八日、一方内談（左武衞禪）始行、右筆安威左衞門入道、　應安二年四月廿二日、一方内談（左武衞禪宮堅）始行之、右筆安左入、

永和五年（○康曆元年）八月廿五日、政所内評定始、（○中略）一方（康曆元八廿九始行、奉行人攝津掃部頭、右筆雅樂左近入道、）左兵衞佐入道當手十初行之、

康曆二年三月廿九日、一方（奉行佐々木大膳大夫、右筆雅樂、左近入道、所勞之間、子息民部左衞門尉伺申之、）左近衞入道、

〔蜷川親元日記〕寬正六年八月四日己卯、若君樣（江）御著衣御禮、御太刀參、右筆方衆少々、

職掌内談

〔齋藤親基日記〕寛正六年八月十六日、寅剋大水出溢、山城半國放生川如大海、〇中略

一評定衆少々、同右筆方玄良國通[　　]種基、親基、爲衡、元俊等、自十四日罷越、御參向之時分、於鳥居之邊拜之、參候衆、先々參善法寺之間、令同道之處、路次新造橋大風吹峙之、不得渡歩之間罷歸了、

文正元年五月六日、鹿苑院殿御年忌御成、如先々右筆方參候、　貞基　玄良　忠鄕　貞有　元連　親基　爲衡

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕右筆奉行衆

齋藤大藏入道元茂　飯尾隼人佐　中澤備前守　齋藤民部大輔　淸筑後守　松田九郎左衛門尉　飯尾美濃守　同四郎左衛門尉　御陣奉行同加賀守淸房　同松田丹後守　齋藤中務大輔　飯尾左衛門大夫　布施右衛門大夫　飯尾大藏左衛門尉　飯尾肥前守爲修　同大藏大輔　諏訪信濃守

〔大館常興日記〕天文九年五月八日、佐來入、九州羅漢寺十方寺住持相論事、大内申段御心へわけがたく候、兩方申狀不及被御覽、各何となり共申談候へ之由被仰出通、左京大夫殿御局より日行事豆州への御折紙在之、仍右筆方被尋訪意見候て可然令存候趣、日行事豆州手日記各被加名字候、於同心同可加之旨被申間、則加之申也、　十年八月廿五日、細川豆州、攝州、晴光、其外右筆方には諏方信州、松田豐前守、中澤播部助來臨、内談有之、

〔宗五大草紙下〕書札之事

一兩判のとき、表卷には、等輩の時は右筆の人位高く共、日の下に名をかくべし、一方上衆ならば、表卷には上衆の名を書べし、縦ば奉行と評定衆の時、表卷には評定衆の名を書べき也、自餘准之、

〔庭訓往來〕御沙汰事既嚴密所被執行也、更非停滯猶豫之政道、訴訟若有悠々緩怠之儀者、御在洛之

貴也、可被用意活持之計略、先被進擧狀於代官者、公所出仕、諸亭之經廻、可申圖師也、奉行人賄賂、衆中屬託、上衆秘計、口入、頭人內奏最屓、窺機嫌可申之、讒狀、謀實、越境、相論、未分甲乙之次第、譜代相傳之武具重〇恐奉重書等者、於引付方、可被遂御沙汰、頭人、上衆、闕闔、右筆、奉行人等、爲終日御評定、雖有窮屈、更無御休息之儀、被勘判之、就問注所賦闕〇賦也重執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音者仰使節、被下召符、就違背散狀者、直被下知于訴人、令召進之時者、被封下訴狀、番三問三答訴陳、於御前遂對決、任雌雄是非、奉行人令取捨事書、於引付、窺御評定異見、所令成敗也、〇中略管領執事、奉行人擒斷之、所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人、或下部等、召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問、拷問、拷訊等、尋搜之、尋究與同黨類等、可斷罪者被誅之、可誡者禁獄之、可流刑者被記流帳、此外火印、追放以下、隨事輕重、其人是非、可被行之、次寺社訴訟者、就本所擧達、被是非之、越訴覆勘者、依探題管領與奪、被執行之、奏事於庭中、家務恩賞方法規式、不可勝計也、

〔武家名目抄職名五下〕按、本文に奉行人賄賂、衆中屬託、上衆秘計口入、頭人內奏最屓とみえし奉行人は、評定衆、引付衆、又は寄人にても、その公事を沙汰せるものをすべいひ、衆中は、評定引付の兩衆をいひ、上衆は二人にもあれ、三人にもあれ、相共に、一事を奉行せる輩の內、位階上首の人をいふ、〇中略又管領とあるは、引付頭人の事にて、執權の人をさせるにはあらず、〇中略頭人は、公事裁判の長官なるをもて、管領といはれしなり、

〔政所賦銘引付〕一內談回文折紙

明後日――午剋、政所內評定被執行、可有參勤之由候、

飯尾――殿　齋藤――殿　――　――　――

以公人相觸之　於引付衆者、以使者相觸之、

〔東寺文書武家名目抄職名部五下所引〕東寺領攝津國垂水庄雜掌祐實謹辨申
欲早被棄捐朝倉孫太郎重方謀訴當庄下司公文兩職間事
右當庄者、嵯峨天皇御宇、弘仁三年、贈四品布勢內親王家御寄附之地、五百餘歲之間、本所一圓之寺領、下司公文職等、寺家進止之條、無相違之處、去建武五年、號采女播磨局代、孫子朝倉孫太郎重方下司公文職事、於三番御引付方、爲門眞彈正忠入道奉行、致訴訟之間、相尋子細於彼局之處、不存知之由、采女播磨局和字狀如此云々、

〔建武以來追加〕一寺社幷本所領以下、押領輩事、曆應三四十五、御沙汰、
近年、武家被官人甲乙之輩、令違背下知御敎書、剩對于守護使幷使節等、及合戰狼藉之由、有其聞、緈超常篇、然者別而可有嚴密之沙汰、奉行人令隨身文書、直令披露者、可被裁判罪科之旨、可觸御五方引付焉、

一雖給御下文不知行下地輩事曆應四三十、仁政內談、
不可爲仁政沙汰歟之由、前々內談訖、可爲引付行事之間、向後不可有其沙汰也、

〔武政軌範引付內談篇〕一御沙汰條目事
所帶押領、遂行難澀、抑留年貢、對捍使者、對論本主、遺跡競、女子相傳、下知違背、越境違亂、用水相論、如此等事也、不及具擧之、其外至安堵御判、勳功賞、官仕勞等類者、爲御前御沙汰乎、又寺社篇越訴條者、別被定奉行人歟、但依事之趣、或於引付被經御沙汰之段亦在之哉、

一訴訟次第事
訴訟人申請賦而付渡于其手之、開闔則申沙汰之、賦與寄人之時、召訴人於內談之砌、相尋事由、當座披露之至、對論事者、遣召文召出論人、遂糺明、調訴陳狀令披露之、

一賦事

右者問注所執事、或政所執事奉行之條、見于古記、近代者爲管領之御沙汰哉、至賦式日、令持參申狀具書於管領、渡于賦奉行、請取之、則伺申、無請文以下被相違者、加訴狀銘、相副吹挙之折紙、遣引付之、開闔則伺申頭人寄人、賦之奉行之仁體者、宜隨訴人之所望、不差申者、或爲頭人相計之被定、奉行人、或以孔子被定之乎、○中略

一内談始行事

兼日開闔遣折紙、相觸衆中、

明後日十二午剋、於殿中一方内談被始行候、可令參勤給之由也、恐々謹言、

二月十日　　實名判

某殿

至其剋限、衆中參著、先開闔申合頭人、差定奏事著到闔等之役者、奏事者右筆之上首、著到者其次座人、闔者末座人、其右筆之所作也、役者既定之時、頭人著座、次寄人、次第列座、御座席之中央一間者撤疊而鋪、剩筵其上鋪半疊、

〔武政軌範 引付内談篇〕一分諸國有沙汰事

三方内談之時者分諸國於三、五方内談之時者分諸國於五、令沙汰之國者依其類分配之、東山東海山陽山陰之類是也、至關東鎭西者不入之、別奉行人在之、

一式日事

月之上旬、下旬、各兩度也、假令二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、如此一方六箇度宛被執行之、五方之式日相替畢、

一會所事

御代始、頭人沙汰始者、於殿上布障子間、或三間、御厩等被行之、每月式日内談者、於頭人亭被執行

之、

〔大館常興日記〕天文十年八月十六日、豆州日行事より各折紙あり、相國寺和泉堺南庄事寺領也、近年押領之間、京兆へ被仰出候やうにと寺家より被申之云々、連々可被仰之旨可然存候由各存分也云々、十一月卅日、晴光方より各へ折紙在之、

從大覺寺御申子細、具御雜掌一紙に相見候請文之上者、御裁許無別儀とて存候、各於御同心は、被任御申狀旨、御下知事可申付候哉、恐々謹言、

十一月廿九日　　大館左衞門佐晴光

御內談衆御中

尤無別儀存候　元造

尤同前候　常興

下河原御門跡衆對之事、天文三年度被仰合付、當御門跡御存知之儀候、然ば彼候人衆參事候處、上乘院御門主御遠行以後、候人衆令無音、彼御門跡領等恣相計之、令沽却候、言語道斷義候、處詮先年衆對之事被仰定、以筋目被成御下知候之樣御申沙汰賴被申候、若此旨僞申候ば可預御成敗候、仍狀如件、

十一月廿八日　　俊元判

松田丹後守殿

十一年二月十二日、今度唐船に、猿樂の裝束に成候べく候べき物御座候間、させられて觀世に可被下と被思食候由、內々御尋也云々、尤可然奉存候由各言上之、仍如總次加證名申也、日行事播州より以折紙承之也、

〔大館常興日記〕天文七年九月五日、日行事豆州より、就若州靑鄕儀、蔭凉軒へ書狀事、如昨夕相調さ

せ候て可給候由承之候間、使中間またせ候て、田原右京進も調させて、拙老加判に仕候て進之也、

十八日、荒禮部日行事也來臨、安威兵部少輔申、父美作入道知行分數地佛名分事、右京兆方三寶院御門跡被仰合之由にて及違亂之間、播州へ被成御内書ば可忝存候段、以荒禮部安威言上に付て、昨日各尋之、然ば可被成候由各申之、仍案文被出之、常興可調申由被仰下候通、日行事荒禮部承之間、可令調進之也、

問注所

問注所ノ長官ヲ執事ト云フ、鎌倉ノ制ニ循ヒ、町野太田二氏ヲシテ世襲セシム、執事代ハ、執事故アリテ事ヲ視ルコト能ハザル時、其代理ヲ爲スモノニシテ、多ク執事ノ一族ヲ用ヰル例ナリ、執事ノ下ニ、寄人紛失方等ノ職アリ、

〔武政軌範問注所沙汰篇〕一條目事〇中略

一執事仁體事

評定衆中被補之、先代以來至當御代、多分町野太田族任之、是故善家右筆之輩以當所稱本所乎、他家之人亦任此職之例在之、

〔尊卑分脈四中原〕能秀――――滿親問注所地方頭人、(中略)評定奉行、

〔太平記十七〕隆資卿自八幡被寄事

將軍〇足利尊氏ハ些共不驚給、鎭守ノ御寶前ニ看經シテオハシケル、其前ニ問注所ノ信濃入道道大〇二階堂時違ト、土岐伯耆入道存孝ト二人倶シテ候ケルガ、〇下略

〔武家名目抄職名九〕按、道大は鎌倉の世、既に問注所執事たり、然るに足利家に至て、又同職に奉

執事代

用せられしは、其方を用ゐられたるなり、

〔康富記〕嘉吉二年八月廿二日庚戌、畠山左衞門督入道管領職之出仕始也、〇中略諸奉行直垂大口也、問注所町野子爲重服之間、問注所子又有御免令出仕之上者、可爲問注所歟之由伺申候處、町野爲重服不可然也、元問注所子太田雖有出仕、其父違上意爲野心之者、其子於御前可從所役之條、不穩便歟、以攝津播部子(頭人)爲問注所代可從所役之由、管領被申候間、今日攝津子(中務大輔之親)致其代云々、

文安六年〇寶徳元年四月廿九日己卯、被行吉書儀、管領著殿上被行之、頭人波多野、二階堂、問注所(町野)攝津播部頭等也、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年七月五日丙辰、將軍宣下事終候後、〇中略次御判始〇中略(南向)御座〇中略總奉行攝津播部頭政親、(淺黄裏打)自象日被仰付了、〇中略

一評定衆役者出仕　波多野因幡前司通直朝臣〇中略(問注所御硯役)町野加賀守敏康、(同)飯尾肥前入道永元、〇中略

松田對馬前司數秀、(大雑)飯尾加賀前司清房、(同)攝津播部頭政親、

〔花營三代記〕貞治七年〇應安元年正月二十八日、御評定始、〇中略

御硯　町野加賀民部大夫(爲問注所遠禪代勤仕之)

〔御評定著座次第〕應安六年正月十二日

御座　武州賴之朝臣、佐(京極)禮部高秀、攝洒播能直、町遠禪眞、勝山中書禪行照、佐(黑田)備禪道壽、　御硯　町野播部助信象、

〔武家名目抄職名九〕按、信象は、眞勝の代として、硯役を勤仕せるなり、

〔花營三代記〕應安八年〇永和元年正月十三日、御評定始、

御座〇註略　御硯役　問注所代町野播部大夫

〔康富記〕嘉吉二年八月廿二日庚戌、畠山左衞門督入道管領職之出仕始也、〇中略攝津播部子頭人爲

問注所代可從所役之由、管領被申候間、今日攝津子(中務大輔之親)致其代云々、

〔武家名目抄 職名九〕按、問注所執事代は、○中略足利殿の時○中略評定始以下、さるべき儀式の節に、執事其役に從ひ難き故あれば、代官として白地にこれを定められ、一時の所役に從事せしむるならひなり、されば此頃執事代をうけ給はる者、當所の要務に預る所なく、臨時の役をのみ勤仕せり、(凡執事法體なれば、儀式の所役に從はざること政所、問注所、いづれも同例にて、共に代官を用うるならひなり、○中略)抑當所の執事は、古來三善家の世職なるを以て、代官にも必其子姪たる輩定充らるゝことなり、されど當時その人なければ、他姓の人も亦勤仕せしことなきにあらず、これ全く其人なきを以て、儀式を闕べからざるが故なるべし、

寄人

〔武政軌範 問注所沙汰篇〕一賦事

執事訴狀加銘、以折紙直賦于寄人、

〔庭訓往來〕問注所者、永代沽券、安堵年記、放券、奴婢雜人券契、和與狀、負累證文等謀實糺明之、管領寄人、右筆奉行人等評判也、

〔蔭凉軒日錄〕長祿三年十二月九日、勝定院御佛事錢請取奉懸于御目也、問注所小串次郎右衛門尉、土岐美濃守、一色五郎殿、上野民部大輔殿、飯尾左衛門大夫、伊勢備後入道、各千匹充、問注所新加之衆故獻五百匹、

紛失方

〔細川家書札抄〕一紛失方○中略(問注所也)皆々打付書也

職掌

〔相京職鈔 二〕問注所○中略

紛注集云、但京都鎌倉雜務之公事等、凡將軍家御累務之條、悉問注所において其さた在之也、

〔武家軌範 問注所沙汰篇〕一條目事

當所者、爲武家之記錄所、仍古今之記錄、細麤之證券等、被納置于此文庫云々、是故文書紕繆、謀實

論紛失證文等、於當所被評判之、先代〇北條始比者、將軍家年中之家務以下、有其沙汰、中比以來爲政所之沙汰乎、古者諸方賦亦爲當所被奉行之云々、

一賦事

執事訴狀加銘、以折紙直賦于寄人、近代者内談之儀、雖令斷絕、至紛失訴訟等者、當所執事書與吹擧狀哉、

〔庭訓往來〕讓狀、謀實、越境、相論未分甲乙之次第、譜代相傳之武具重〇重恐奉書等者、於引付方可被遂御沙汰、頭人、上衆、開闔、右筆、奉行人等、爲終日御評定、雖有窮屈、更無御休息之儀、被勘料之、就問注所賦、開闔重賦也執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音、仰使節被下召符、就違背散狀者、直被下知于訴人、令召進之時者、被封下訴狀、番三問三答訴陳、於御前遂對決、任雄雄是非、奉行人令取捨事書、於引付寫御評定異見、所令成敗也、問注所者、永代沽劵、安堵年記、放劵、奴婢雜人劵契、和與狀、負累證文等謀實糺明之、管領、寄人、右筆、奉行人等評判也、奉行人得差符方之與奪、當參仁者成書下、下國之時者下奉書、而無音之時者、被下使節召文、調訴陳狀、相對當所執事年々管領奉行人等、可致問答披露沙汰、就探題之異見、所加下知也、

〔建武以來追加〕文書紛失輩訴訟事貞和二閏九廿七、評定、

可爲内談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年已前分者、無事書之間、委細之旨趣無據糺明歟、任先例尋問當知行之實否、於有證人等者、須成賜紛失安堵御下文、至同年已來分者、守舊規於事書在所恩賞方、安堵方、問注所、可有其沙汰焉、次不知行地事、於内談方、且相尋當時之領主、糺明證跡可是非子細同前、

〔異本式目〕一諸人庭中事永享廿一十五

致訴訟之輩、於管領政所問注所等、可申請賦之處、不經次第之儀、猥に以庭中歎申之條、理不盡沙汰

甚不可然、但成本主以人引渡敵方、雖致催促不能披露、徒送年月、或無遁避題目令出來、忽難通害族等外、企庭中言上等、堅被處罪科矣、

内評定

〔武政軌範問注所沙汰篇〕一内談儀式事
號内評定、其儀式、與政所之沙汰相同、但近代中絶之間不詳、雖然至當所執事者、于今被定其仁乎、

〔御評定著座次第〕文和三年五月廿日、寶篋院殿御自筆御記云、評定始又三方内談始也、是來二十八日予發向之間、以前可始行也、今日評定當參、○中略
問注所美作守顯行

侍所 小侍所所司 併入

職員所司

侍所ハ、足利時代ニ在リテハ、京師ヲ巡察シ、犯人ヲ捕縛シ、拷訊處刑スル事ヲ掌ル職ナリ、長官ヲ所司ト云フ、始ハ今川細川等ノ名家之ニ任ゼラレシガ、後ニ山名赤松一色京極ノ四家遞ニ之ヲ攝スルコトヽナリ、世ニ三管領ニ對シ、之ヲ四職ト稱ス、所司代ハ即チ所司ノ代理ニシテ、小所司代ハ又所司代ノ家人ニシテ職務ヲ助クルモノナリ、此外侍所ニハ、開闔、目附、寄人、小舍人、公人等ノ屬官アリ、公人ハ又下部トモ云フ、
小侍所所司ハ、幕府ノ小侍所ノ長ニシテ、足利氏ノ一族之ニ任ズル例ナリ、

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一頭人事
凡侍所者、致公武之警固、行路邊之撿斷、隨分之重職也、依之當代○足利之始、山名左京兆、時氏今川豫州、貞世其以後細川左京兆、俗名賴元、武州弟、號妙觀院、畠山右金吾、俗名基國、法名德元、號長禪寺、等被補任之、其外諸大名、或依器量、或隨分限被任用哉、

〔武家名目抄職名十上〕按、侍所所司は、〇中略足利殿の世となりては、別當をば補せずして、所司一員を置れたりければ、其任にあたれるものひとり侍司の所職を專にせり、されば常に侍所と稱すれば、所司をさしていふならひもいできしなるべし、初は其家を定められず、今川細川畠山、山名、土岐、佐竹などいふ名家の輩、かはる〴〵任用せられしに、中頃より、其家族やゝ定まりしごとく成て、山名、赤松、一色、京極の四家、互に此職を攝することゝなれり、故に時人此四家をさして、四職とよび、又當時在職の人をば當職と稱す、初め等持院殿、〇尊氏柳營を京師に起立せられしより、侍所の職掌やゝ繁雜になりて、諸侍の進退撿斷、決罰を行ふのみならず、洛中の雜事、及山城の境内なる公武の封邑、寺社領田の事をさへ統攝して、遵行已下の事、なべて所司の沙汰することゝなれり、これに依て、所司たる輩、山城守護に兼補せらるゝ事まゝあり、これ國內沙汰の事につきて、便宜あればなり、〇遵行とは、田地を其領主に渡し付るをいふ、應仁大亂の後も、文明の際は、當所司を設置れしかど、長享延德の比に至りて、おのづから廢絶せり、それより以降、侍所の開闔たるもの、すべて當所の機務を統領するならひとなりて、足利殿の季世には、すべて其さまなり、

〔梅松論下〕官軍には千葉介貞胤一人當千の船田入道、由良左衞門尉を始として、千餘人討とらる、御方にも手負討死多かりける、〇中略同十七日、〇建武三年正月兩侍所、佐々木備中守仲親、三浦因幡守貞連、三條河原にて頭の實撿ありしかば、千餘とぞ聞えし、

〔太平記二十三〕土岐頼遠參合御幸致狼藉事附雲客下車事

左兵衞督、〇足利直義是程ノ大逆ヲ緩ク閣カバ、向後ノ積習タルベシ、而レ共御口入難默止ケレバ、無力其身ヲバ被誅テ、子孫ノ安堵ヲ可全ト返事被申、頼遠ヲバ侍所細川陸奥守顯氏に被渡テ、六條河原ニテ終ニ被刎首ケリ、

〔太平記二十四〕天龍寺供養事附大佛供養事

八月〇貞和元年廿九日、將軍〇足利尊氏幷ニ左兵衛督、路次ノ行粧ヲ調テ、天龍寺ヘ被參詣サリ、貴賤岐ニ充滿テ、僧俗彼ニ成群、前代未聞ノ壯觀也、先一番ニ、時ノ侍所ニテ、山名伊豆守時氏、擧花ニ冑フタル兵五百餘騎ヲ召具シテ先行ス、

〔太平記三十一〕吉野殿與相公羽林御和睦事附住吉松折事

細河讃岐守賴春ハ、時ノ侍所也ケレバ、東寺邊ヘ打出テ、勢ヲ集ントテ、手勢三百餘騎計ニテ、是モ大宮ヲ下リニ打ケルガ、六條邊ニテ敵ノ旗ヲ見テ、著到モ勢汰モ、今ハイラヌ所也、何樣マヅ此ナル敵ヲ一散シ散サデハ、何クヘカ可行トテ、三千餘騎扣タル和田楠ガ勢ニ相向フ、

〔太平記三十七〕新將軍京落事

御內外樣ノ勢、四千餘騎ト注セリ、サテハ敵ノ勢ヨリモ、御方ハ猶多カリケル、外都ニ向テ可防トテ、時ノ侍所ナレバトテ、佐々木治部少輔高秀ヲ攝津國ヘ差下サル、

〔東寺執行日記〕貞治三年七月二十五日、爲大成庄事參侍所、土岐宮內少輔即有對面、但猿子方內書事ハ不可叶云々、縱雖書遣、彼仁不可被用、仍難治云々、

〔太平記四十〕中殿御會事

藏人左少辨仲光ヲ奉行ニテ、二月〇貞和六年廿九日ヲ被定、勅喚ノ人々ニ賦廻、〇中略丑刻計ニ將軍〇足利尊氏已ニ參內アリ、其行粧見物ノ貴賤皆目ヲ驚カセリ、〇中略今河伊豫守貞世ハ、侍所ニテ、爽カニ冑タル隨兵百騎計召具シテ、陣門ノ警固ニ相隨、

〔花營三代記〕貞治七年〇應安元年四月十日、侍所沙汰始、頭人今川中書宿所、

〔後愚昧記〕應安二年四月二十日甲申、日吉神輿入洛事、武士等如去年八月無出河原之儀、只侍所土岐左馬助也、大膳大夫入道猶子之儀云々、勢數萬騎云々陣法成寺角社邊、赤松勢在三條河原邊、數多勢也其外勢不出、執事以下大名等在將軍亭云々、〇又見日吉神輿入洛見聞略記

〔花營三代記〕應安三年四月九日、戊時御社參、(六條新八幡宮、北野社、祇園社、)御輿、(○中略)參陣、侍所佐々木治部少輔、

〔建武以來追加〕一東福寺(付門前)撿斷事(應安五十一廿一、雅樂左近入道々喜奉行、)

任五山之法則、可爲寺家之沙汰、若殊事出現之時者、可被觸侍所矣、(○又見花營三代記)

〔花營三代記〕應安七年十一月十日、元奇(佐々木入道、遠江國、)配流事落居訖、　十九日、元奇(佐々木入道、中務入道、)可有上洛之由、雖成侍所奉書、同二十四日、自在國直可下向遠江國之由被仰之、

〔鹿苑院殿御元服記〕一永和元年三月廿七日、石清水八幡宮御社參、當御代始、(○中略)　侍所　細川右馬助、(○又見花營三代記)

〔松田貞秀記〕永和元年四月廿五日、御參内始、御裝束(衣冠)御雜色、如御社參、(○中略)今度供奉一頭打、管領供奉、其外諸大名同前、次侍所、雖爲山名彈正少弼、未始行之間、不及供奉歟、

〔後愚昧記別記〕永和三年七月十八日、侍所(山名奥州)勢寄佛覺寺(比叡山麓)搦取惡黨等(強盜等)云々、或自殺、或打死四五人云々、或又搦取了云々、

〔後愚昧記〕永德元年十月二日、四條町地事官人沙汰、緩怠無盡期之體也、仍仰侍所嚴密可被相觸之旨、示遣内府、

〔相國寺供養記〕明德三年歲次壬申八月廿八日丁丑、天顏快晴、秋氣清爽、今日萬年山相國承天禪寺供養也、(○中略)侍所畠山右衛門佐郎等數百人、著甲冑警固總門脇門左右番屋、

〔普廣院殿御元服記〕一永享二年七月廿五日、(甲子、申刻、)大將御拜賀、　供奉行列　出仕人々伺候次第、并蹲踞、

侍所(帶甲冑、于時赤松左京大夫入道性具、依爲法體斟酌、舍弟伊豫守義雅勤其役、)　郎從三十騎召具之

義雅者著淺黃糸鎧、帶金刀金太刀、握重藤弓、負大中黑箭、甲床木等ヲバ僕持之、馬前二行步、馬毛黑、隨兵皆著糸毛鎧甲、敷皮等ヲバ各僕持之、皆總ヲカク、僕ハ紺ノ直垂ニ銀薄ニテ文ヲ押ス、皆

調度懸手蓋ツナヌキ、任先規カ、騎馬ハ常ノ體手歟、○中略

一御路掃除事、任先規被仰付侍所也、

〔建内記〕嘉吉元年七月十二日丙午、今日侍所山名也可闕所朝倉志内之由稱之、赤松被管人所緣之敵云々、元所緣勿論、今已各別之由答之、因拡問答及雜儀之處、有中人屬無爲云々、今夜又有物忩事、管領内人夫苅草之處、可買之由、山名下部謂之、不買草之由夫丸答之、以三錢押買候間、夫丸雜還之處、打擲之、夫丸拔刀切下部顏了、此間山名以侍所之謂、稱闕所致無窮之沙汰、結句稱陣立亂入洛中土藏、押取質物等解借用云々、仍諸土藏近日結鼠戸、不取質物、致用心、此事山名濫吹以外之次第也、因自管領度々可止濫吹之由、立使候處、或稱不存知、或又依疲勞歟之由答之、○中略所詮可寄山名許之由、管領支度之處、今夕之儀被管人無道之沙汰也、可切首之由山名謝之、仍屬無爲云々、　十一月二十四日丙戌、禁裏御厨子所雜分所率分事、御敎書奉行飯尾肥前入道永祥申沙汰、管領執判、長老今日被持來之、肥前入道舍弟也、仍就便傳進之、

萬里小路大納言家雜掌申、禁裏御厨子所雜分所率分事、如元可被沙汰付彼雜掌之由、所被仰下候也、仍執達如件、

嘉吉元年十一月十五日　右京大夫判

佐々木中務少輔殿

表書云、佐々木中務少輔殿、右京大夫持之、

件御敎書、以使者常鑑遣侍所京極中務少輔事也之處、即書出遵行也、○中略

萬里小路大納言家雜掌申、禁裏御厨子所雜分所率分事、任今月十五日御敎書旨、可被沙汰付彼雜掌之狀如件、

嘉吉元年十一月二十四日　中務少輔判

多賀出雲入道殿

表書云、多賀出雲入道殿、中務少輔持清、

郎附所司代(多賀事也)之處、只今物書之者他行之、明日、可加下知云々、

〔文安年中御番帳〕四職　一色左京大夫　山名右衛門督入道　佐々木治部少輔(京極殿御事)　赤松

〔康富記〕寶徳元年十一月十三日戊午、傳聞侍所職事、佐々木京極(大膳大夫)領掌申之、今日參室町殿、畏被申之、所司代事、彼被管人若宮可申付之由被申之、　十二月十四日己丑、今夜朔旦冬至恩詔宣下也、〇中略撿非違使出左衛門陣外、於門外仰看督長令放免囚人二人、(兼日奉行職事、仰明世、明世傳仰勢多判官、判官仰武家侍所云々、)

〔八幡社參記〕康正二年三月二十七日丙申、今日參詣石清水八幡宮、〇中略路頭行列、〇中略　侍所佐々木大膳大夫持清(中略)若黨六人

〔在盛卿記〕長祿二年四月十九日、御連枝小松谷殿、(配所隱岐國云々)御左遷之日次也、御俗名義嗣、自口科云云、今日侍所、(京極)於路次奉向之、京極宿所爲御所、　十一月二十七日辛亥、今日花御所御造作事、被仰出管領細川殿侍所(京極)衆等、普請始也、

〔長祿四年記〕七月廿六日、觀世大夫座物、彌五郎彌六兩人、被仰侍所被召取、則籠者云々、子細依計會御佗事申也、但於無御許容者、カケオチスベキノ由申之云々、依被怠如此御成敗也、其外之人數六人之內、兩人御免、殘四人被追失者也、

〔蔭凉軒日錄〕寬正二年十二月六日、萬壽寺就自山門發向、以訴狀披露之、仍土岐、幷當職京極方可致警固之由、以寺奉行飯尾美濃入道被仰付也、　三年五月廿七日、南禪寺林侍者、以重罪被渡于大獄之由、治部河內守、以所司代比日怠慢之語竊告予也、　八月廿一日、就梅津長福寺之事、所司代被官村木助次郎自殺之由披露之、梅宮神主被召置可有御糺決之由被仰出也、

〔蜷川親元日記〕寬正六年五月六日壬子、京極殿使、(隱岐又五郎、下河原德八、)就侍所職上表之儀、祇園會山戈事、不可申付、若有無沙汰之時宜バ不可存候由被申候而御返了、職事可被仰定間者、先以如前々被仰付、尤可然者也、

〔蜷川家記名部十上所引武家名目抄職〕文明十二年四月十日、飯尾加州被參申、春日殿御局より被仰候、宥慈院殿御地之上闕所屋事、已前の御支證なく候とも、御いろいあり付たる事にて候間、可有御成敗候由、御申によりて、貴殿へたづね申、可被成御奉書之由候、可有如何候哉之由、御返事先規の御支證なきに付候ては、御奉書如何候はむ哉、其上地に付候て、可有成敗之時、於政所侍所可存知候哉、新法就被仰出者、可致其覺悟候、

〔永享以來御番帳〕侍所　赤松兵部少輔

〔下學集下態藝〕所司代

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一赦沙汰事〇中略

禁獄者、對所司代遣奉書令下知之、

〔世鏡抄〕第九　諸司代職之事

王城中ノ喧嘩鬪諍、火事、惡徒、無法之者ヲ搦捕テ、死罪、流罪、籠舍ニオコナウベキ也、是モ一刹那モ理ヲ不可消、非ヲ不可癡、鞍馬、手棒、飛脚、差縄、兵具、片時モ心ヲ免コトナカレ、

〔武家名目抄職名十下〕按、侍所に所司代を置れしこと、何れの時なるを詳にせず、鎌倉殿の時には、此名目ありしこと絕て所見なし、但庭訓往來、太平記等に、はやく其職名となりたるを見れは、決してなかりしとも定め難し、さておもふに、初め此職は、侍所にて假初に設置れし所にて、私のつかさなりければ、其職掌はありながら、名稱の傳らざりしにもあるべしもとこれ撿斷沙汰等の時、所職を助くべき爲に、私の代官として設けらるものなればなり、足利殿の時に至りては、必此職を置るべき格となりし故に、所司より幕府に申して、我家令の長たる者を以て、所司代に補することゝなれり、されば陪臣ながら、うけ張たる所職となりて、おのづから所司にひとしき威權を得しかば、直參の有司も猶その下風にたてるばかりに成しとみゆ、政所執事の任、伊勢家の世職となりし後、被官蜷川氏

な以て、私に政所代とせしより、蜷川氏おのづから權勢を得たりしも亦此類なるを思ふべし、文明より後は、所司代絶たりしかば、此職も亦廢絶にいたれり、それより七十年計を經て、光源院殿の世に、三好長慶一度天下の權柄を握りし時、更に所司代と稱せし由見ゆ、當時所司をば補せずして、所司代あらんこと、古制にはたがひたれど、この時足利家漸く衰弊して、制度古法にならふことを得ざりし故、かくのごとき新制をも行ひしとみゆ、さるは長慶の威權世に聳きて、京中洛外の檢斷決罰已下の雜事、すべて獨斷して執行ひ、其形勢古の侍所の如くなりし故に、𛀁か稱せしなるべし、畢竟彼が權勢は、直に所司にもなさるべきほどなりけれど、もと其家にあらざるを以て、所司代とよばれしと見ゆ、されば古の所司代のごとく、當職の被管たる者の主家を補助せる職掌にはあらざりしなり、名稱同じといへども、古今職掌の異なることこれを以て知るべし、思ふに長慶の所司代になりたるは、佐々木定賴、朝倉義景等を管領代になされしと同例なり、彼時管領はなくして、何れも管領代とよばれたれば也、靈陽院殿入洛の時、佐々木義賢を此職になさるべき命ありしは、長慶の例にならひしなれど、義賢うけ申さゞりしかば、長慶卒去の後は、又中絶せり、

〔武家職號〕所司代○中略

東山殿義政の時、京極大膳大夫佐々木持清をば、侍所の司に補せらる、然れども持清は江州に有て、代として多賀豐後守中原高忠を京極に置しむ、これを濫觴とすと云傳へたり、但是より遙削に、都筑山城入道と云者、貞和の比、京都の所司代たる由、軍書の註に見えたり、御當家に至て、天正年中、奧平美作守信昌、慶長五年より、板倉伊賀守勝重、それより以來、今牧野佐渡守に至りて十六代、

〔年中恒例記十月〕五日、北野御經へ渡御、先松梅院へ御成ありて、御裝束を被改、經堂へ渡御、松梅院より經堂へは御はり輿、又還御に松梅院にて御直垂をめされて、一獻參、日野殿、三職以下御相伴衆祗候、御警固所司代、

〔太平記二十四〕三宅荻野謀叛事附壬生地藏事

已ニ明夜、木幡峠ニ打寄テ、將軍、左兵衞督、高、上杉ガ館へ四手ニ分テ夜討ニ可寄ト、相圖ヲ定タリケル前ノ日、如何シテ聞ヘタリケン、時ノ所司代都筑入道、二百餘騎ニテ夜討ノ手引セントテ、究竟ノ忍ビ共ガ隱レ居タル四條壬生ノ宿へ未明ニ推寄ルニ、楯籠ル所ノ兵共、元來死生不知ノ者共ナリケレバ、家ノ上ヘ走リ上リ、矢種ノアル程射盡シテ後、皆腹掻破テ死ニケリ、是ヲ聞テ、所々ニ隱居タル與黨ノ謀反人共モ、皆散々ニ成ケレバ、高德ガ支度相違シテ、大將義治相共ニ、信濃國ヘゾ落行ケル、〇中略爰ニ只今物切タリト覺シクテ、鋒ニ血ノ著タル太刀ヲ袖ノ下ニ引側メテ、持タル法師、堂ノ傍ニ立タルヲ見付テ、スハヤ此ニコソ落人ハ有ケレトテ、抱手三人走寄テ、中ニ挙打倒シ、高手小手ニ禁メテ、侍所へ渡セバ、所司代都筑入道是ヲ請取テ、詰籠ノ中ニゾ入タリケル、

〔武家名目抄職名十下〕按、當時細川顯氏侍所所司なれば、都筑は其家人なる事しるべし、

〔祇園執行日記〕正平七年五月七日、放火人大輔房、以專當宮仕等遣侍所（佐々木近江守秀綱）之處、先日發向八幡陣了、所司代同罷向之間、可渡杉原左近將監許之由、侍所親父判官入道申之間、公人等同道彼所之處、他行云々、

〔後愚昧記〕貞治二年七月二十日丁亥、行算申云、去夜戌剋許吉田備前房源覺（佐渡判官入道道譽一家人也）於四條京極道場（常闍堂）前邊被誅了、道譽仰侍所所司代若宮左衞門尉（實名不知）令誅也、〇中略後聞非道譽所爲、道譽子息侍所治部少輔所爲云々、彼源覺取立故判官（道譽孫）子（幼若云々）欲廢置侍所之故云々、道譽勸發治部少輔云々、

〔看聞日記〕永享二年三月十八日、楠木（僧體也、俗名五郎左衞門尉光正、）被召捕上洛、此間南都ニ忍居、是室町殿御下向爲伺申云々、　二十四日、先日被召捕楠木、今夕於六條河原被刎首、侍所赤松、所司代六七百人取圍斬之、（切手魚スミ）見物人河原充滿、自南都御使立、急可斬之由被仰、其形僧也、楠木首四塚ニ被懸、

〔看聞日記〕永享三年七月十日、抑去月以來、洛中邊土飢饉及餓死、是米商人所行之由露顯之間、去五日、米商人張本六人、侍所召捕糺明、被書湯起請、皆有其失、○中略又飢渇祭三ケ度行云々、與黨商人も皆被召捕、張本六人被籠舍、可被斬云々、所司代依此事失面目、職辭退云々、洛中飢饉以外也、

〔東寺百合古文書 入 十一〕廿一口方評定引付 永享五年癸丑

五月十一日

一神泉苑掃除事、明日十二日ヨリ任先規可致寺家奉行也、町ノ人夫事者、侍所へ日野中納言殿被仰付所也、定所司代等可出歟、寺家ヨリノ奉行一人、兩雜掌北面預二人、當番一人除之、納所門指以下執行中綱二人以上掃除之間、毎日近年如此、先例者、當年又可爲此分也、○中略

同十四日 連署除之

一昨日十三日神泉苑掃除了、所司代其外寄力等毎日罷出、嚴密致奉行了、○下略

〔蔭凉軒日錄〕長祿三年四月十九日、行者二員罪科、被渡于所司代、御使飯尾左衞門大夫、齋藤四郎右衞門尉、

〔碧山日錄〕寛正二年三月二十八日己巳、獄官多賀某、決南禪二囚僧之罪、以數升水其口噴之呑之、其苦萬端、然竟不言所作之咎云、

○按ズルニ、茲ニ獄官トアルモノハ、卽チ所司代ナリ、

〔新撰長祿寛正記〕寛正二年九月十一日、都ニモ土一揆オコリ、所々寺社領、其外富タル人民ノ家へ亂入放火シテ、財寶ヲウバヒトル、大將ハ蓮田兵衞ト云牢人ノ地下人也、時ノ奉行飯尾左衞門大夫、布施下野守承リ、所司代多賀豐後守ニ被仰付テ、是ヲ退治セントス

〔東寺百合古文書 二 十一〕廿一口方評定引付 寛正五年甲申

三月十三日 連署除之

一所司代門役之事、可有沙汰由、内々其聞有之、若然バ搔料用意罷出可體申之由評議畢、

同十五日、連署除之、

一所司代廿一日、灌頂院御影供爲二門役一令レ入レ寺由、柳二荷折二合、〈菓子マンヂウ〉用意、宿坊罷出禮可レ申由、御治定畢、

〔蔭涼軒日錄〕寬正六年五月六日、侍所京極依二辭職一而缺二當院南門警固一也、〇中略 六月三日、京極侍所今日再領掌、仍不レ知二行在所一、於二所司代多賀豐後守一付レ之、被二仰付一尤恩光、世皆嘉レ之、

〔蜷川親元日記〕寬正六年八月八日癸未、御成、〈御供一〉鹿苑院〈勝智院殿第三四〉御佛事、〈大座主招請〉面々御祗候、門役所司代、〈多賀豐後守〉

〔寒川入道筆記〕一多賀豐後に、所司代仰付られ候時に、女しやものに談合仕り、御返事申上うといふた、尤じや、この女しやものに談合申ずといふに、說々おほしといへども、たゞ女公事取次など究めてと思ひ、右のごとく申上た事じや、この人、上代にも末代にも有間敷公事の批判なか〳〵そのかずを知らず、豐後記とて、名譽の批判せられたことをまるし置たる書物、法花經ほどなる卷物五くわん、多賀の家に傳りこれ有る由承り及び候、拜見申度願ひまでなり、抑この人は、後花園御治世の末、寬正年中の人なり、將軍は慈照院殿の御代の所司代なり、

〔蔭涼軒日錄〕文正元年五月廿六日、竺峰和尙弟子壽陽藏主、依二罪科一可レ被二召出一之由、以二諏訪信濃守一被レ仰二付于所司代多賀豐後守一、被二領掌之一由、今晨披露之、 六月十六日、例日不參也、前夜於二寶雲院一、與二所司代多賀豐後守一相見之次、前七日祭、京極御成、依二闕乏一、爲二所司代一獨償レ之、仍以二彼忠義一、且謝レ之、且賞レ之、月色如レ晝、談笑刻移也、

〔齋藤親基日記〕文正元年十二月十一日夜、所司代多賀豐後守高忠、依二山門訴訟一逐電、

〔應仁別記〕明年〈〇文明二年〉正月三日、於二悲田寺一御ハテノ態アリ、東山泉涌寺破チ無リケレバ、元應寺、長老惠仁秉炬ノ御役ナリ、〇中略 赤松次郎政則當職ナリ、諸家ノ辻堅取分浦上美作守則宗所司代ナ

レバ、殿重ノ御警固ヲ申ケリ、

〔蜷川親元日記〕文明十年正月十三日丙子、御成、御方御所へ、東西御門役、所司代、浦上近江守則宗令勤仕、二月十九日壬子、七條道場御成、今日彼岸結願、オドリ御聽聞也、先御方御所樣御成、御馬、其後御所樣、上樣御同車ニテ御成、所司代浦上近江守爲御警固祗候、　十二年四月七日、淸泉州、飯加州、松田主計被參申、御構之堀壁之事、口明殿左衞門督殿、一向無御返事候、赤松殿事ハ兩三人申合候ヘト承候間、兩所ヨリ何共不承候間、自此方是非不及申候由被申候、如何候テ可然哉、町人ニ申付テ可然樣ニ候間、所承候、然共町人之事モ所司代ナド在京不仕候間、クル〳〵ト難有之被存候、御兩所ヘ只今參、依御返事重而可斷候、十月十六日、所司代參申、先度北野ヘ御美物御樽濟々被送下候、畏入候、爲御禮致祗候候、

〔東寺百合古文書〕百五十　廿一供僧評定引付文明十五年癸卯

七月廿七日　進警除之

一東山殿御普請料百貫文可進之由、公方奉書、幷所司代副狀到來、仍事子細、以雜掌可尋寺奉行之由治定了、

〔東寺百合古文書〕百五十　廿一供僧評定引付文明十五年癸卯〇中略

於東寺境內號短冊幷諸寺所公事錢相懸往來之旅人課役輩在之云々、每度及喧嘩之條、太不可然、所詮堅加下知、向後可被追放寺邊、有及異議之族者、可被處罪科之由被仰出者也、仍執達如件、

文明十五
七月廿八日　常通判

所司代　秋秀判

此正文ハ、造營方ヘ渡之、

〔親長卿記〕文明十六年十月五日、參(二)聖廟(一)、〇中略次參(二)千部經(一)、自(二)今日(一)始行也、〇註略無(二)警固(一)、無(二)諸司代(一)故也、

〔永享以來御番帳〕所司代　浦上美濃守則宗

小所司代

〔義演准后日記〕文祿五年正月十一日、車事、先年平信長卿不慮昇進故、南都大乘院ノ車ヲ本トシテ被(レ)作、不(レ)及(レ)乘(レ)車、彼卿生害之時燒失了、其後太閤秀吉天下平均之後、又大乘院之車ヲ被(二)借渡(一)、所司代玄以法印奉行トシテ作(レ)之、

〔武家名目抄〕職名十下按、小所司代、又は又所司代ともいふ、これ所司代の家人にして、其職務を助くるものなり、猶守護代に小守護代あり、代官に小代官あるが如し、この職も、所司代と共に廢絶せしと見えて、文明よりこなたは、更に聞ゆる所なし、

〔康富記〕應永八年五月九日丁酉、紫野今宮祭也、近衞西洞院獄門內構(二)旅所(一)、侍所所司代、又所司代長松奉行也、此所新儀也、

〔親長卿記〕文明九年正月十八日、參(二)安禪寺殿(一)、歸路之處、於(二)上邊(一)作(二)時聲(一)、驚尋之處、自(二)武田(一)許(一)押(二)寄赤松許(一)云々、卽馳(二)參禁裏(一)之處、〇中略彼軍勢等押(二)寄小諸司代旅店(一)也、禁裡咫尺、予南隣、破却引退了、

〔東寺執行日記〕文明十七年八月廿六日、夕部ニ土一揆東寺中ヲ退參候由、所司代多賀豐後守高忠方、寺家ヨリ註(二)進之(一)、其後夜入豐後守、子息與一、小所司代吉田人數三百人計ニテ、大門ヨリ入テ一見之由被(レ)申、

開闔

〔細川家書札抄〕一侍所開闔〇中略皆々打付書也、

〔武政軌範〕侍所沙汰篇一賦事〇中略

一開闔事

近代者、開闔申沙汰之、加(二)訴狀銘(一)、以(二)折紙(一)賦(二)與寄人(一)云々、〇中略

當手寄人中、以(二)右筆上首(一)被(二)仰付(一)之、但雖(レ)非(二)上首(一)、依(二)其器用(一)被(レ)任之條、先蹤有之乎、近代爲(二)引付衆(一)之人任(レ)之、舊例不(二)分明(一)歟、〇中略

一赦沙汰事〇中略

流人者、對頭人成奉書、禁獄者、對所司代遣奉書令下知之、是則爲開闔之所役乎

〔康富記〕文安四年五月五日丙申、侍所事、京極辭退之後、一色左京大夫領掌、雖然獄之諸未請取時分也、依之開闔布施民部大夫、此間致每事之成敗、今日下地等布施手追拂之、殘奉行人等爲合力、各出人加布施畢云々、　十八日己酉、炎旱之御祈禱、五山被仰付云々、又仰付侍所開闔(布施民部大夫、侍所未行事)以町人夫被掃除神泉苑云々、

〔康富記〕享德三年八月二十一日庚子、今夜就畠山事、世上物忩、山名相模守、御所東西警固、〇中略管領上表時分、內裡左衛門陣、侍所開闔諸奉行令警固者也、

〔蔭凉軒日錄〕寬正六年八月二日、當院勝智院殿大祥忌御佛事、御成、門役警固命于侍所京極方、同所司代多賀豐後守也、命于開闔治部河內守遣折紙狀也、

〔大館常興日記〕天文九年二月六日、爲御使祐阿來入、今日たう人近衞殿へ入間、御着色など被遣之處、入江殿へにげ入仕あまし候處、開闔被管よく仕候て仕とめ、其身も疵をかうぶり候間、御ほうびあるべき事、かへりていかゞたるべく候哉、又可然哉否之事被尋下之間、かやうの事は、たれたれによらず、時宜による御事也、今の分は既に仕あまし候處、よく仕とめ、其身もきずかうぶり候間、御ほうび尤可然、向後のいさみにも可然令存候よし、御返事申上候也、然者開闔に可被仰遣哉と存候由、祐阿まで申候處、開闔は就他事御時宜よろしからず候間、御ほうびに付ては、既に御太刀を可被下御分にて候由承候也、

〔厳助往年記下〕天文十四年六月十四日、祇園會、三條町山警固衆喧嘩仕出、雜職之一臈、松井打死、仍自公方其町可有御發向云々、　十七日、以開闔衆計穩便、發向云々、三條町一町之內、京兆內衆已下悉燒拂云々、

目附

〔萬松院殿穴太記〕二十一日〈○天文十九年五月〉には、御葬りの事あるべしとて、開闔松田對馬守盛秀奉行して、諸鄕諸村の人足を催して、東山の麓慈照寺の中に葬場の普請を致す、

〔康富記〕寶德三年九月九日甲辰、傳聞、此四五日之前、當管領畠山被官人木澤、捕京極〈侍所〉召仕目付、不及一往相尋誅了、仍自京極方遣使者、可有成敗之由令申之處、無德返事之間、京極自身可向管領亭之由、支度之間、細川右馬頭入道馳向制止之、猶不休之處、自管領被遣下手人了、

〔應仁別記〕醍醐山科ハ、三寶院御持有ケレバ、御合力トシテ、赤松衆武田衆相抱タリ、爰ニ目付ニ骨皮左衞門道源トテ、多賀豐後守所司代之時、走舞タルガ、手ノ者共京中山城ニ多カリケリ、中子細在ケレバ、勝元呉服ノ織物、金作ノ太刀ナド給ケレバ、山科ヨリ稻荷へ打越テ、社務羽倉出羽守申合、イナリ山ノ上ノ社ニ陣ヲ取、〈○下略〉

〔碧山日錄〕應仁二年三月十五日乙亥、居獄吏之下、克知盜賊之事者、號目附、其黨魁名道元、率其徒三百餘人、而歸集於稻荷、絕西軍之糧道、

〔武家名目抄〕〈職名三十四上〉按、目付は監察のつかさなれば、非常を按察し、事狀を具して、君長に密告すべき職掌なり、〈○中略〉この職、何れの時に設けはじめしことを詳にせず、思ふに、足利殿初政の頃、所司代の廳にして、設け置きたるなるべし、さるは彼所司代の職は、追捕撿斷等、すべて關せざる事なきものなれば、あらかじめ己が被管たる者を以て、目附の役に定め、監察をなさしめたりしと見ゆればなり、

寄人

〔武政軌範〈侍所沙汰篇〉〕一開闔事
當手寄人中、以右筆上首被仰付之、〈○下略〉

公人
小舍人

〔庭訓往來〕侍所者、〈○中略〉所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體之嫌疑、糺明犯否、

〔祇園執行日記〕正平七年五月七日、放火人大輔房、以當宮仕等道侍所、〇註略之處、先日發向八幡陣了、〇中略可渡杉原左近將監許之由、侍所親父判官入道申之間、公人等同道彼所之處、他行云々、

〔後愚昧記〕應安七年六月廿日、晩頭山門神輿、〈先年奉振神輿、山門訴訟入眼之間、奉歸入山上了、〉神人宮主等、奉返入之、是神輿造替遲々訴也、〇中略內裏近邊武士等少々差進之、神輿一基者行事所前〈一條南櫛笥以東小路里〉奉置之、所殘神輿六基、出雲路邊奉舁之、神人等歸去了、及曉天侍所小舍人男等出來、奉舁神輿、〇註略奉入於祇園社了云々、

〔東寺百合古文書八十二〕東寺雜掌申、當寺掃除散所法師事、任度々勅裁、幷去十月四日施行之旨、被免除他役所也、爲樓舍築地、雜色小舍人等可止催促之狀如件、

永德元年十二月二十日　右馬助花押

〇按ズルニ、右馬助ハ侍所一色詮範ナリ、

〔建內記〕嘉吉元年十一月二十八日庚寅、今路道下口、〈北白川邊可致沙汰也〉奉分事、今日以所司代公人沙汰付北白川也、此一口分、爲淨蓮花院修理料可寄進之由示云々、仍彼使者相副、使料〈百四〉同下行、

〔東寺百合古文書十八〕廿一口方評定引付〈長祿四年庚辰〉

三月二十日〈還著除之〉

一自所司代方、以公人〈德左衞門、四郎左衞門、〉申子細ハ、明日〈廿一日〉寺中へ乞食不可有御入由、被仰付之間、彼等堅佗可申之、御利益之事候間、如先々御入候バ、別而可畏入由申、即披露之處、不可叶由、以雜掌可申送由評議畢、

〔武政軌範侍所沙汰篇〕撿斷條目事

謀叛　夜討　强盜　竊盜　山賊　海賊　殺害　刃傷　放火　打擲　蹂躙　追落　刈田

刈畠　路次狼藉　路邊捕女、或爲博戲論、或切牛馬尾、如斯等事、又斬罪、絞罪、流刑、禁獄、拷訊、著鈦

職掌

以下刑法、皆以爲當所之沙汰者也、

一賦事

往古者、訴人捧申狀之時、頭人加銘直賦于奉行人之旨、見于古記、〇中略

一式日事

每月上旬、中旬、下旬三箇度也、日限者、依于時相替乎、或至急事者、雖非式日、被執行之、〇中略

一奉書事

頭人奉書者一判也、〇中略

一敎沙汰事〇中略

流人者、對頭人成奉書、

〔庭訓往來〕侍所者、謀叛殺害、山賊海賊、强竊二盜、放火、刃傷、打擲、蹂躙、勾引、路次狼藉、鬪諍、喧嘩等也、管領執事奉行人撿斷之、所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等、召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體之嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問拷問拷訊等、尋搜之、尋究與同黨類等、可斷罪者被誅之、可誡者禁獄之、可流刑者被記流帳、此外、火印、追放已下、隨事輕重其人是非、可被行之、

〔尺素往來〕夜討、强盜、放火、刃傷、打擲、蹂躙、捕女、山賊、海賊、勾引、辻斬、追落等、此間聊蜂起事、於京都者侍所、於國郡者守護、可被致嚴密撿斷歟、洛中人々之宿所、武士幷甲乙人等濫妨狼藉事、東京二條以南、三條以北者敎業坊、四條以北者永昌坊、五條以北者宣風坊、六條以北者淳風坊、七條以北者安寧坊、八條以北者崇仁坊、九條以北者陶駄坊、各仰於保務之官人、及侍所、以使廳下部、幷雜色小舍人等、常可被禁過者哉、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

一殿中日々記ニ付申候ニ、〇中略四殿之御事ハ、御苗氏をば書之、殿文字をも書之、

〔土岐家聞書〕一昔は、侍所は賞翫の職也、然る間、山名殿土岐殿も、侍所を御拘有、〇中略近代、侍所をば賞翫とせず、

〔建武以來追加〕一故戰防戰事貞和二二五、齋藤四郎兵衞入道玄秀奉行、〇中略

一刈田狼藉事

爲檢斷方可有糺明之、所犯分露顯者、可被召放所領三分一也、〇中略

一山賊海賊事

尋究出入之在所、若領主、有同心之儀者、令改替地頭、可被入守護使歟、〇中略

一刈田狼藉事貞和

爲檢斷方沙汰、可被行嚴制、所犯治定者、可被召所領五分一焉、同與力輩事子細同前矣、

〇按ズルニ、玆ニ檢斷トアルハ、所司代ヲ指セルナリ、

〔東寺百合古文書五十八〕制札案

禁制　　東寺

右於當寺、軍勢以下之甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可處罪科之狀如件、

正平八年六月九日　　吉良左馬頭御判

裏書云、諸寺領制札、江戸出羽權守出之、吉良侍所云々、

〔武家名目抄職名十上〕按、左馬頭は、吉良滿貞にて、當時官軍に從ふものなり、

〔建武以來追加〕一山門幷諸社神人等事至德三八五廿五、奉行之、松田丹後守貞秀、

山門幷諸社神人等、就諸事稱催促、率數多及亂入狼藉事、先々定置其法、有停止之處、近年猥違亂云云、〇中略所詮不經次第之訴訟、有如然之企者、於本訴者、雖帶理運、永可被弃捐、至神人者、任先例仰侍

檢斷

所、召捕其身、可有樣候矣、

〔東寺百合古文書 九〕應永十一年五月廿日 連署除之

一平五郎住宅撿封事

今朝加賀法師以使申云、平五郎子源六、此間市本奉公之處、有不義之子細、仍召籠之處、逐電云々、子之罪科懸親之上は、爲寺家可有撿封、若無其儀は、仰侍所撿封之由申之間、乍平五郎尋子細之處、杉源六は旁不義之間、令不孝之由申間、兩方沙汰之次第披露之處、既令不孝之上は、不可有父科歟、無左右可令撿封之條不便之間、可有免許之由、加賀法橋許遣黏寺法眼可申之由評定畢、

〔東寺百合古文書 二十一〕寬正七年□月廿日 連署省之

一所司代申云、大進刃傷仁有寺家之間、其者可召給、幷肥前阿被刃傷之由、以目安可被申云々、此旨披露處、所司代重申者、其時以談合可遣仰、幷目安事、明日御影供之間仁以內議有御用意、明後日樣可被遣云々、

一佛乘院昨日儀色々雜訴、不私所行由來臨、以誓文被申旨披露、雖然諸方仁集可爲召返、召人七八人令亂入、幷大進刃傷之趣、兩所江訴事難遣、其科巨細可進申、其間出仕事不可叶由、以兩使乘觀、乘圓、佛乘院江被仰遣了、

〔武家名目抄 職名十五〕按、足利殿の時、撿斷の職掌は、都而侍所のうけ給る所にして、所司代巳下、侍所の被管たる輩、專其事に從へり、されば所司代小所司代をも、なべて撿斷方とも、撿斷とのみもよべる事なりき、應仁の亂ありて後も、文明の末までは、尙同じさまなりしが、年を追て諸國亂れ行きし程に、侍所の所司たるべき輩も、己が心々に在國して、所司代巳下のつかさも、おのづから闕職となりしかば、侍所開闔たるもの、其專務にあらヾといへ共、所司代の職掌をも兼務むる事となれり、侍所開闔は、引付衆の兼る事にて、當所の事をふされ行ふといへども、文事の方をむねとし、巡行檢斷犯人追捕等の事は、專務とせざるが本儀なり、されど盜犯

撿斷、及其他の雜務、開闔一人の堪べき所ならざればにや、萬松院殿の頃より、所撿斷の職を設けて、都下の事はさらなり、近畿の雜事をも奉行せしむる事となりぬ、これを今の職掌に比するに、大かた町奉行のつかさに相當れり、但此頃は、幕府の職員備はらざりければ、寺社勘定過所等の如きことをもかねつかさどりしなり、永祿八年、三好義長謀反を起し、光源院殿を弑して、京畿を管領し、松永久秀を京師にとゞめ、しばらく兵權をとりける間も、幕府の舊制に准じて、己が被管人を以て京師の撿斷とし、都下の雜事を沙汰せり、三好氏敗るゝに及びて、靈陽院殿位に復せられしかども、幾程もなく、天下兵馬の權織田氏に歸して、京都の政務も其指揮に從ひしかば、更に撿斷職を置事はなかりしなり、又幕府職員の外に、撿斷といふものあり、たとへば京都の在家を知行せる輩、或は一鄕一所の地頭領主たる者、所領の雜務をおきてものすべき爲に、被管家人等をもて、私に撿斷を沙汰せしむる事ある類ひこれなり、今の世に、撿斷名主撿斷年寄などいふが、民家の所職に殘れるは、皆それらの流なるべし、

〔室町殿日記〕序源尊氏公、掩一天機、遂苦戰、終ニ開四海之政之廢レタルヲ、歸舊代、神社佛閣之絕タルヲ興シ、仁政直ニ施シヽカバ、其德答家門、數代武將之位ヲ汚セリ、〇中略至今天文之曆、此時之武將者、萬松院義晴公ト申奉ル時ニ當テ、四夷八蠻一同ニ亂レ、弓箭一日モ止事ナシ、〇中略于玆楢村市右衞門尉長高、脇屋總左衞門尉貞親、兩人京都之撿斷職ヲ給テ、自分之所用ヲ日毎ニ記ス、亦三好日向守義興、公方之御領所之沙汰人タルニ依テ、是モ事ヲ日毎ニ記セリ、サレド此日記ドモ、永祿年中之亂逆ニ取失ヌ、

〔室町殿日記〕一依洛中訴訟被行德政事

諸國就忩劇、分國に新關を立、往還の旅人安からず、さるによつて、都鄙の賣人おのづから途絕しけり、是によつて京方の工商家職をむなしくせり、追日榎つきければ、家財を蓄へたる者は質物

に入て、しばらく妻子をはごくむ、財寳なき者は、行衛なく逐電しけるものおほかりけり、かく衰ふるによつて、公方役、地子役、かつてす丶むるにあたはず、催促きびしといへども、大方質物に拂底しければせむかたなくて上下京、一同に撿斷所へ訴狀を上る、〇中略公方つく〲〵御覽じて、翌日人々をめして仰られけるは、在地人等、近年家業の利を失ひ、飢渇におよぶのよし、尤不便なり、〇中略常德院〇義尙法住院〇義澄の例にまかせて、急德政をおこなひ、貧窮を甘よと被仰付ければ、人々うけたまはつて、則評定所にて案文をか丶れける、新規にもあらず、大方先法の如し、

德政　城州

一借錢借家之事
一於武具之類者　廿四ヶ月
一絹布之類者　十二ヶ月
一佛具繪讃之物家器之類ハ　十二ヶ月
一家質經沽劵に仕り、證文正數言有之、於加利弁者、可爲借錢同前事、

右五ヶ條、以本銀之十分一白晝に取可申候、若違犯之族於有之者、曲事たるべきのよし被仰出候、仍下知如件、

天文九年三月日　光俊　貞長　長高在判

〔室町殿日記〕三百姓等訴訟事

御領所の百姓中、數年未進をはらみければ、三好筑前守、この秋急度皆濟可仕のよし催促急に入けるによつて、百姓中集、色々ことわりをつくすといへども、かつて請ざりければ、攝津の百姓等、京都へのぼり、長高かたまで書付を以て言上しけり、〇中略

近年洛中洛外、以の外痛申候に付而、三ヶ條之定を上せられ候事、

一利倍のために米錢を借輩利足四割五割と申事、餘高利に候間、質物入候而者二割、質なくば三割に借可申事、

一利足下にてば不入と存、向後借米相止申者於有之者、此方へ可申來事、

一町中振賣之商人、座の者共、著甲公儀、押賣、又は惡口など仕るに依て、致喧嘩を、動すれば撿斷所。へ罷出候間、向後商人、如何にも無非道やうに、賣買を可仕候事、

右三ヶ條、違犯之輩於有之者、爲過錢と料足一貫文、其上商賣とめさせ可申候、被仰出候に依て如件、

天文十六年　　檜村市右衞門長高

十一月十一日　　脇屋雄左衞門貞親

〔室町殿日記〕四　高野山僧坊訴訟之事

一高野山大塔奥院ならびに諸堂、破損のために、諸國を勸進せられけるに、國々所々の關所、さまたげなくとをり申樣に、御一札成下さるべきよし、訴訟申されければ、やがて檜村脇屋兩人に仰付られける、うけたまはつて關役免狀をぞ出されける、

〔室町殿日記〕四　借錢事

一上京今出川に大泉坊と云客僧、伊勢講中之掛錢、方々より借用し、何れへも返辨せざりしかば、撿斷所へ訴訟申によつて、裏書をいたされける、

魚振賣之事

一京都座の魚屋、ふり賣の爲に堺へ打越、町中をふりありくの處に、南北の魚賣どもとらへて、撿斷所へ上げゝれば、則荷物を打上、其者をいましめらるゝ、京都の魚賣集まり、訴訟申ければ、やが

て狀をぞ出されける、

〔室町殿日記五〕京都物忩之事

一此節洛中洛外、淀、伏見、木幡、山さき八幡をはじめて、往反のともがらをとらへて、はぎとり、荷物を追おとし、洛中へ夜ごとにみだれ入て、財寶をうばひとる事、なゝめならざるによつて、日くれかゝれば、門戸をとぢて、篝をたき、番等きびしくしければ、人のゆきかひ自由ならず、迷惑せしむるによつて、撿斷所へ方々より訴訟申ければ、所々に高札を擧られける、

掟

今度洛中洛外へ、徒黨の者ども徘徊し、追はぎ、辻斬、又は在家へ押込、資財雜具をうばひとるの條、甚以諸人の忩劇不ㇾ過ㇾ之、所詮町中衆而手合を仕候而、あやしき者ども於ㇾ有ㇾ之者、即時に討留此方へ可ㇾ被ㇾ參候、時之依ㇾ首尾、輕重は不ㇾ知御褒美可ㇾ有ㇾ之者也、

永祿五年　貞親

八月三日　長高

〔室町殿日記六〕役船の事

一舟之義に付而、急用とゝのひがたく、やゝもすれば、依ㇾ令ㇾ難ㇾ澀に、在々所々へ申つかはしける一札、

就ㇾ其許舟之儀に、子細ども有ㇾ之處、先此節聊爾に舟を出すべからず候、於ㇾ令ㇾ如ㇾ在者、曲事可ㇾ申候、仍如ㇾ件、

二月二十一日　長高

伏見　小幡　五ヶ之莊　小倉總中へ　貞親

内談

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一内談儀式事
役者之次第、孔子之作法等、與引付内談不相替、仍別不及記之、
一奉書事
頭人奉書者一判也、寄人之奉書者、或一判、或兩判、可依其事哉、
一赦沙汰事
正月十六日節會、於内裏北陣、撿非違使官人出獄舍者、含宣命追放之、是例年之儀也、又國忌幷武家御追善之時、有其沙汰、至大赦者、召返流刑人、放免囚獄者、仍每度執行内談、召出流帳獄記、勘辨其輕重、被赦免之流人者、對頭人成奉書、禁獄者、對所司代遣奉書令下知之、是則爲開闔之所役乎、

○

小侍所所司

〔武家名目抄職名十一〕按、小侍所所司は、○中略足利殿の時、○中略一人を補して、其所の長官とせられしかば、職掌といひ、人がらといひ、なべて鎌倉の世の別當にひとしかりき、又この比は、其人をさしてよべるにも、侍所小侍所とのみいひて、所司といふをば、省きいふこと常のならひなり、初め等持院殿、○尊氏兵權をとられし比は、他家の輩も、補任せられしかど、文和延文の頃より後は、一向足利の門葉たる輩の所職となれり、是を以て、其所職階級、いにしへの別當にひとしきを志るべし、應仁亂の巳後も、文明の頃までは、猶此職を補せられしかど、それより後は、遂に廢絶に及べり、
〔東山殿年中行事正月〕四日
御所樣江今日式日ニテ、出仕ノ面々、上樣江爲御禮伺公於御對面所拜賀之畢、而於小侍所一人宛春日御局參會、述慶詞云々、
〔梅松論下〕官軍には、千葉介、義貞一人當千の船田入道、由良左衞門尉を始として、千餘人討とらる、御方にも手負討死多かりける、○中略同十七日、○建武三年正月兩侍所佐々木備中守仲親、三浦因幡守貞

連、三條河原にて頸の實撿ありしかば、千餘とぞ聞えし、

○按ズルニ、兩侍所トアルハ、侍所小侍所ニシテ、三浦貞連ハ小侍所ノ所司ナリ、

〔御的日記〕建武二年正月七日、(左馬頭殿、御在鎌倉之時、御的小侍所澁野殿、)康永四年(○貞和元年)正月十五日、(小侍所大高與州、(中略)土御門東洞院、御所、)貞和二年正月九日、(小侍所師直子越後大夫將監師秀、)同五年八月十二日、(新造御所小侍所上杉左馬介、)文和二年正月二十四日、(大御所御在鎌倉之時、御的小侍所吉良左馬助、)同五年(○延文元年)二月十三日、(小侍所細川兵部少輔顯氏、)應安五年正月廿八日、(小侍所山名彈正少弼、)永和二年二月廿一日、(小侍所今川上總介、)永享二年正月十七日、(小侍所畠山左馬助、)同十三年(○嘉吉元年)正月十七日(小侍所山名右衞門佐持豐)

〔花營三代記〕應安五年正月廿三日、小侍所沙汰始、(於山名右衞門佐入道亭被始行之、)

〔鹿苑院殿御元服記〕永和元年三月廿七日、石淸水八幡宮御社參、(○中略)

御出(○中略)

小侍所　山名彈正少弼(但侍所勞所)□直之後參也(○中略)

一同四月廿五日、御參內始、(○中略)　御劒　細川右馬助賴基(今日被召御小侍所、召具朝夕畢、)

〔普廣院殿御元服記〕永享二年七月二十五日、(甲子中刻)大將御拜賀、　供奉行列　出仕人々伺候次第、幷蹤跡、(○中略)

小侍所　于時畠山左馬助持永、著狩衣、(紅梅、紋菱、)　郎從拾騎、直垂如例、大帷ヲ重ヌ、

〔看聞日記〕永享九年三月四日、抑公方、大和小路長谷雄爲退治、南都へ可有御立云々、(○中略)畠山子息、(小侍所)明日大和へ進發云々、

〔康富記〕寶德元年八月二十八日丙子、室町殿、(將軍宰相中將殿)御參內始也、(○中略)行列次第、(○中略)管領右京大夫勝元朝臣、(淺黃直垂、大帷、)具騎馬十騎、(一騎打也、)次小侍所右馬助成賢、(直垂同前、)具騎馬五騎、

〔八幡社參記〕康正二年三月廿七日丙申、今日參詣石淸水八幡宮、(○中略)

路頭行列、○中略　小侍所細河民部少輔敎春(著黨六人)

〔親長卿記〕文明十八年七月二十九日、今日室町殿、右大將(卅二歲、去年任事)御拜賀也、○中略　武家散狀隨尋出注左、

小侍所　細川右馬助政賢(後號二十人、召具之、)

〔成氏年中行事〕(正月)十四日、外樣ノ人々出仕、是モ日限定コトナシ、小侍所評定奉行侍所千葉介方、出仕ハ前ニ如書定、

職員
頭人

地方

足利氏ノ時、京中ノ家屋、宅地、及ビ訴訟等ノ事ヲ掌ルモノヲ地方ト稱ス、長官ヲ頭人ト云ヒ、又地奉行トモ云フ、代々評定衆攝津、二階堂、波多野ノ諸氏ヲシテ之ヲ掌シム、頭人ノ下ニ開闔アリ、寄人アリ、開闔ハ寄人中、右筆ノ上首ヲ以テ之ニ補ス、其掌ル所引付幷ニ侍所ノ開闔ニ同ジ、

〔武政軌範(地方沙汰篇)〕一頭人事

攝津、波多野等、評定衆中被補之、見于代々之番文乎、

〔尊卑分脈(四中原)〕能直――能秀(評定衆寄頭、地方頭始、)

〔花營三代記〕永和五年八月廿五日、(康曆元)政所內評定始、○中略

侍所　山名民部少輔

地方　二階堂中務少輔入道

〔康富記〕嘉吉二年七月三日辛酉、權辨被語云、今日地方頭人攝津掃部頭子藤原之親、任中務大輔云云、十一月十九日丙子、今朝一臈(宗繼)二臈(親繼)予員職等、同道向地方頭人攝津掃部方、當知行冷泉院

町艮町内、小倉大納言入道家押領分、松波二郎左衛門押妨分等事、次目安申賦、即出銘伺取之付飯尾美濃守貞元了、難可出召文云々、

〔蔭凉軒日錄〕寛正五年九月廿六日、慈德寺可引移于舊所之事、若來一兩輩置之可停止之由、以崇和尙以狀被申、即報于勢州幷津守也、勢州爲被寺檀那也、攝津守爲地奉行也、

○按ズルニ、地奉行トアルモ、亦地方頭人ノ事ナリ、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年五月廿六日、宗湛上座、以庵兒敷地望申之所者、中御門、室町、春日間、以此書立幷訴狀伺之、御領掌、仍命于攝津播部頭也、以彼爲地奉行也、

開闔寄人

〔武政軌範地方沙汰篇〕一開闔事

寄人中、以右筆上首補之、申沙汰之次第、與引付幷侍所之開闔是同、

〔細川家書札抄〕一政所開闔　一侍所開闔　一地方開闔○中略

皆々打付書也

職掌

〔武政軌範地方沙汰篇〕一條目事

京中諸家屋地事、云知行之安堵、云訴論之糺決、爲當所之沙汰者也、

一賦事

訴狀加銘、頭人以折紙賦于當手寄人、○中略

一奉書事

頭人、寄人連署也、而近年以頭人之一判成遣之、背舊規乎、且可謂右筆之越度歟、雖然近日被載一判事、爲多分之例哉、

内談

〔武政軌範地方沙汰篇〕一内談儀式事

其次第、與引付内談聊無相違、

古事類苑

官位部四十六

足利氏職員三

諸奉行

足利氏ノ奉行モ、亦鎌倉ノ制ト同ジク、政務ニ參與シ、公事ヲ奉行スルモノヽ稱ニシテ、或ハ評定衆引付衆、政所、問注所、侍所等ノ人ニテ之ヲ兼帶セルモノモアリ、而シテ其等級二種アリテ、將軍ノ前ニ出ヅルヲ得ルヲ御前衆ト云ヒ、然ラザルヲ御前未參衆ト云ヘリ、

評定奉行ハ、當時ハ、評定衆ノ世家、佐々木、二階堂、攝津等ノ人、年臈ノ順序ニヨリテ補セラルル例ニシテ、鎌倉幕府ト同ジク、評定衆ノ進退ヲ指揮スル職ナリ、公人奉行ハ、諸奉行ノ進止ヲ司ル職ニシテ、諸奉行ノ將軍ニ謁スル時ニ在リテモ、第一ニ謁スルノ例ナリ、守護奉行ハ引付衆ノ中ヨリ兼ヌルモノニシテ、諸國ノ守護ニ關スル事ヲ司ル、又官途奉行ハ、敍任ノ事ヲ司ル職ナリ、

恩賞奉行ハ、卽チ鎌倉ノ恩澤奉行ニ當ルモノニテ、評定引付兩衆ヨリ之ヲ兼ヌ、其員數十餘人アリ、

安堵方ハ、鎌倉時代ノ安堵奉行ニシテ、引付衆ヨリ之ヲ兼子、本領安堵ニ關スル事ヲ掌ル、

披露奉行、賦別奉行、證人奉行等ハ、訴訟ニ關スル奉行人ナリ、

段錢總奉行ハ、段錢徵集ノ事ヲ總括スルモノニシテ、國分奉行ハ、諸國ヲ分割シテ、其徵收ノ任ニ當ル職ナリ、

奉行總數

倉奉行ハ、幕府ノ倉庫ノ管理幷ニ出納ヲ掌ル職ニシテ、籾井氏ノ人、世々之ニ任ズ、納錢一衆ハ、洛中洛外ノ土倉酒屋ノ役錢等ヲ收納シ、其錢貨ヲ藏ムル倉庫ヲ管理スルモノナリ、

唐船奉行ハ、外國輸入ノ物品、若シクハ其牒狀等ノ事ヲ掌ル職ナリ、

寺社諸亭賦ハ、寺社幷ニ諸家ヘノ傳達ヲ掌ル職ナリ、

足利氏ノ時、神事幷ニ神社佛寺ニ關スル政務ヲバ、各種ノ奉行人ヲ置キテ、之ヲ分掌セシメタリ、卽チ寺社ノ事ニハ、寺社奉行以下多クノ奉行アリ、殊ニ伊勢神宮ノ爲ニハ、神宮頭人、神宮開闔等ノ職ヲ置キ、石淸水八幡宮ノ爲ニハ、八幡宮奉行ヲ置キ、延曆寺ノ爲ニハ、山門奉行ヲ置キ、東寺ノ爲ニハ、東寺奉行ヲ置ク等、大社巨刹ニハ、各、專管ノ奉行ヲ置ケリ、

此他、當時營中ノ庶務、土木ノ事ニ關スル奉行モ少カラズ、殿中總奉行、御所奉行、厩奉行、御所造作總奉行、作事奉行、材木奉行、普請奉行等ノ類是ナリ、

此他、御祝奉行、御出奉行、御物中持奉行、御物奉行、進物奉行ナド云フモノモアリキ、

〔太平記　三十二〕神南合戰事

北ニ當タル峯ニハ、大將義詮朝臣ノ陣ナレバ、道譽則祐以下、老武者〇中略〇奉行人、其勢三千餘騎、帷幕ノ內ニ布皮ヲ敷キナラベ、袖ヲ連テ並居タリ、

〔建武以來追加〕敬白　起請文事

一御成敗之趣、不叶理致子細在之者、不貽心底可言上、縱於當座雖不存寄、有思案仕出之旨者、不謂違期可申上、但至堅固不辨之越度者、非沙汰之限事、次就公事不存無沙汰事、

一雖爲他人奉行、御裁許之篇目、相違之由承及者、可申披之旨對申沙汰奉行人可申之、

右兩條、令違犯者、日本國中大小神祇、八幡大菩薩、山王二十一社、天滿大自在天神御罰、各可罷蒙也、仍起請文如件、

永享三年十月二十八日　飯尾肥前守弟左衛門尉三善爲秀 以下署名十一人略

〔建內記〕永享十一年六月二十五日辛丑、傳聞武家諸奉行人々、愁訴雖經數年不及披露、近日雖訴之、或稱管領命、越次第披露之不可然、不依尊卑親疎、任次第可伺申由有仰云々、

〔蜷川親元日記〕文明十七年八月十五日癸巳、奉行衆出仕、飯尾大和入道、清備中入道、齋藤大藏入道、清式部大夫、飯尾美濃入道、飯尾左衛門大夫、諏訪信濃守、松田對馬守、飯尾與三左衛門尉、松田左衛門大夫、飯尾三郎右衛門尉、松田對馬孫三郎、飯尾新右衛門尉、以上御前衆、御前未參衆、矢野長門入道、治部四郎左衛門尉、諏訪彌次郎、飯田中務丞、飯尾右京亮、清四郎、雜賀善次、松田八郎、齋藤四郎、齋藤民部丞、飯尾又六、飯尾彥次郎、諏訪次郎、飯尾彌六、飯尾加賀四郎、

○按ズルニ、御前衆トハ、評定始沙汰始ノ時、御前披露ヲ許サレタル輩ヲ云ヒ、未參衆トハ、御前披露ヲ許サレザル輩ヲ云フ、

〔延德二年將軍宣下記〕御配膳手長等同前

事終後、大御所御對面、管領、評定衆、御前衆、孔子役等、御太刀金進上之、

〔常照愚草〕一奉行衆ヲ右筆方と申事は、奉行と申事は、諸大名にも又萬の事奉行といふ事は在之間、右筆方と申事可然候、

〔樵談治要〕一訴訟の奉行人其仁を選ばるべき事

凡奉行人は、天下の公事を執行ふ職たるによりて、政道の善惡もこゝにして、是によるべし、いかにも心正直にして、私を不存、黑白をわきまへ、文筆に達し、理非にまかせて、贔屓をいたさゞらんを、よき奉行とは稱すべし、是によりて、あやまりあらん奉行人をば、ながくめしつかはるべからざるよし、貞永の式目にのせられ侍り、兩方の支證をとり合せ、究決せられて、理ある方へ付られたるを、もとの給人として、難澁をいたさんをば、別て罪科に處せらるべし、いはんや奉行人として、

存知ながらとりあげ披露せんは、大なる越度なるべし、もし又奉行人として、贔屓をいたし、かたてうちになされたる公事たらば、越訴を立て申さん事、其咎あるべからず、〇下略

〔世鏡抄〕第十　奉行ノ事

万事ニ我欲ヲ離テ、爲ㇾ君欲ナレ、理ニハ理ヲ添エ、非ニハ非ヲ添ヨ、貨ト禍ト理非ヲ以テ同ハ貨ニ付ヨ、但シ非ㇾ大儀ナラバ不ㇾ及ㇾ力、私ニ小シ以諂扶ㇾ之、謀叛人ノ末ナリトモ、度々忠アラバ只出セ、忠勤之侍ナリ共、度々不忠アラバ追籠不ㇾ用ㇾ之可ㇾ誅也、去バ故人云ク、奸臣在ㇾ朝則忠臣不ㇾ進、美女在ㇾ庭則國惡女佞ㇾ失ト云リ、智者在ㇾ朝家ㇾ則愚人必讒訴ストト云ヘリ、相構々々可ㇾ守ㇾ之也、

〔大内問答〕一御庭奉行、樂屋奉行とて御座候哉の事、

殿中には、樂屋奉行とて急度相定事は無ㇾ之候、樂屋を被ㇾ申付ㇾ事は、御作事奉行の役に而候、自然樂屋へ何をも被ㇾ下事も候へば、同朋衆被ㇾ申付ㇾ候、御庭奉行とても無ㇾ之候、見物仕候者などに申付事候へば、庭上に祗候の走衆被ㇾ申付ㇾ候、是は殿中の義、總別はその凸ふしに奉行被ㇾ付事は勿論の義に候、御成などの時も同前に候、不ㇾ入事ながら、諸奉行ましるしたるものうつし進候、

〔伊勢貞滿筆記〕一申狀之事、杉原の端に、たとへば、

右子細何々、此段爲ㇾ預ㇾ申御沙汰、粗言上如ㇾ件、

　　　三上因幡守謹而言上

永享三年三月日

御奉行所とも、又奉行の名をも書事在ㇾ之、

〔大館常興日記〕天文十一年二月三日、爲ㇾ御使ㇾ攝州來臨、當津就ㇾ御逗留儀、諸事御法之段被ㇾ仰談ㇾ之也、仍奉行宿老にも可ㇾ申談ㇾ旨仰也、然間二人奉行(信職)召候て、申合之也、

〔花營三代記〕應安五年六月廿一日、内談番文施行、

總。奉。行。佐々木治部少輔秀〇高　右筆布施彈正大夫入道

〔松田貞秀記〕應安五年十一月二十二日、御判始云々、次御評定御座、武州　禮部佐々木評定奉行律所〇中略奏事以後、貞秀、渡御寄進狀於總奉行佐々木禮部、則持參之、被成御判畢、

〔花營三代記〕應安五年十一月廿二日、將軍家御判始御年十五御裝束、立烏帽子長絹直垂

執權武藏守顯之朝臣淺黃直垂、

總。奉。行。治部少輔高秀同　右筆松田左衛門尉貞秀同

合。奉。行。齋藤四郎右衛門基象綾東白直垂

〔建內記〕嘉吉元年四月五日辛未、武家兩奉行書下未到之由、定光坊申之、仍示遣太和守許書下〇註略到來、貞連卽書之裁判、合奉行松田九郎左衛門尉貞寬、本名貞親也、改名歟、合判事示遣之、次、遣定光坊了、其後定光坊下行也、

〔蜷川親元日記〕一六月〇寬正四年廿六日　內談

頭人攝信州松丹州　飯左大治河　清泉齋四右　清式齋五兵　攝左將

一河道濱平三郎申間事

市座賣、自往古无商賣之改、勿論之由、小串次郎右衛門、南岸坊注進之上者、任舊例可致沙汰被成奉書、

本奉行飯信州

合奉行治河

〔武家名目抄職名十二下〕按、本。奉。行。合。奉。行。は、〇中略足利殿の時に至りては、兩奉行いづれも設置ことなく、皆臨時に命せらるゝ、格となれり、且職次階級をもえらばずして、兩職共に引付衆のうけ給はる事もあり、又皆寄人なる時もありて一例ならず、〇註略又此時のならひにて、本奉行

は訴人をあづかり、合奉行は論人を預る、是亦鎌倉の例と異なる所なり、思ふに、兩奉行の階級なかりしし、この故なるべし、凡室町の世には、訴訟沙汰のみならず、規式の公事を行はるゝにも、合奉行の稱あり、いはゆる御判始、御元服等の如き然るべき公事には、專當の奉行一人を命じ更に合奉行一人を副らる、これ規式につきたる職掌なり、○中略、其餘何事にても、奉行を定めらるべき時は、大かた合奉行を副らるゝことなり、(中略)合奉行、或は相奉行に作るものあるは、合相共に相對せる意ありて、副義近きが故なり、

〔蔭凉軒日錄〕長祿三年十二月二十日、依馬淵被官人永原公事可有御糺明之、相奉行之事、飯尾加賀守伺之、以飯尾左衛門大夫被相添之由、被仰出也、

〔政所內評定記錄〕寬正二年九月六日、內談略、

披露條々

一六波羅岩坊飯兵大、與平野神主齋四右、互相論事番々、○下略

○按ズルニ、玆ニ飯兵大トアルハ、訴人六波羅岩坊ヲ預ル本奉行ニテ、齋四右トアルハ、論人平野神主ヲ預ル合奉行ナリ、

〔齋藤親基日記〕文正元年八月廿二日、飛鳥井家被官人、與右京兆被官岡相論、粟田口酒屋事、於殿中意見在之、本奉行兵大貞有、合肥州之種、

〔政所賦銘引付〕一涌泉寺住持聖泉藏主中掃大文明十四四廿八年

小村藤右衛門入道借用五貫文事、質劵綾小路猪熊與大宮間地子一貫文、既廿餘年所務之、猶不返付云々、

合　淸八左　五月廿一日

〔花營三代記〕應安五年十一月廿二日、將軍家御判始十五年御裝束立烏帽子、長絹直垂、○中略、合奉行齋藤四郎右衛門基兼、白直垂、

○按ズルニ、右ハ訴訟ノ合奉行ニハアラザレドモ、參考トシテ引ケリ、

〔東寺百合古文書九〕應永十一年九月廿一日(違署除之)

一相奉行(飯尾大和入道)事、

飯尾大和入道可爲相奉行之由、去十四日、三寶院被伺申定了、仍若狹法眼、其子細奉書式之間、後方可付之處、今月中先可延引、來月此奉書可付之由治定了、

〔武家名目抄職名十三〕按、評定奉行は、(略○中)足利殿の時に至りても先代の格にならひ、評定衆の世家、佐々木、二階堂、攝津等の輩、年臈の次第によりて補せられしなり、(こゝにいふ三家の外、波多野、町野等も、鎌倉殿の時より、評定衆に補せらるゝ家なれど、評定奉行を勤めしことは聞えず、鹿林院殿將軍宣下記にも、波多野、町野この奉行を勤仕せし實證、始先の由をしるせるを考へば、古くより詳ならざりしとも見ゆ、此五家の內、佐々木は侍所の所司たるによりて、後には評定衆をはなれたり、)然るに應永より以降、攝津一家の世職となり、ことに應仁の亂後は、規式の節にのみ設けらるゝ所職となりて、常に置かるゝ事は中絕せり、

〔花營三代記〕應安四年十月十九日、評定奉行(略○中)佐々木治部少輔高秀、十一月十五日、評定奉行沙汰始也、佐々木治部少輔、(右筆)布施彈正大夫入道

〔御評定著座次第〕(評定奉行不參例)明德二年正月十一日

御座(御烏帽子直衣下括)　管領　問越　波肥　松丹

評定奉行

佐光祿禪　二中禪　攝左(不參)

是皆問注所越後守上首也、今日被略盃飯了、

同四年六月二十六日、職始、

御座　管領左金吾義將朝臣(略⊙中)

此時評諚奉行京極治部少輔高詮、出雲國下向、

公人奉行

〔齋藤親基日記〕文正二年〇應仁元年二月十日、番文施行也、　評定奉行匠作之親

〔尊卑分脈四中原〕能秀――滿親評定奉行

〔武家名目抄職名十三〕按、公人奉行は、奉行人の進止をつかさどる職掌にして、評定、又は寄合の席に臨む時は、評定奉行と共に事を攝する者なり、〇中略諸奉行には、公人奉行を上首とす、凡政所問注所の寄人はさらなり、在京せる奉公人の事にさへあづかるをもて、頓て公人奉行と稱せるなり、〇註略但鎌倉の世には、別にこの職を置れずして、問注所執事たるもの、其事を奉行しけるを、足利殿の時に至りて、奉行人の內より、更に公人奉行の職を置かるゝ事とはなりぬ、其職掌のごときは、又先代に異なることなし、〇註略評定奉行中絶の後は、評定衆の事をもかねうけたまはりしとみゆ、

〔年中恒例記正月〕四日、總番衆參次第事、一番より始て、五番まで、番次第に御目にかゝる也、昔は少少うらうちの衆もありし也、又就御祝儀御太刀など、時々參候時は、當番より始て御太刀進上之由也、〇中略奉行衆は參次第也、但公人奉行は一番に懸御目也、

十七日、〇二月略御沙汰始、奉行各祗候、〇中略御りやくのときは、公人奉行一人參て申入之、

〔公方樣正月御事始之記〕一十月ゐのこの御成切之事　公方樣御直に被下方へは、其分にて候、又御直に不被下方へは、御前之御成切過候て、五ヶ番へ御なりきり、四方にすはりて、一膳づゝ、五ヶ番へ被出之、五ヶ番へ月行事あり、祗候請取之、番子にちやうだいさせ申候、又奉行衆には、公人奉行祗候仕候て請取申、是も各に頂戴させ申候也、每年此分にて候也、御成切共中、又御嚴重共中也、

〔花營三代記〕應安四年十月十九日　評定奉行　山門奉行　寺社諸亭賦　已上三ヶ條　佐々木治部少輔高秀〇中略　公人奉行　布施彈正大夫入道

〔花營三代記〕永和四年十二月十二日　公人奉行　雅樂左近入道道喜

〔建武以來追加〕條々 文明九八廿七、于時公人奉行松田丹後守秀興奉行之、

一成敗御教書并奉書等事、不及伺申調達之段先規勿論也、雖然於訴人掠申之儀者、可有御糺明、若不實令露顯者、任先例可被沒收所領、無所帶者、可被處其身於罪科矣、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年六月十七日戊戌宣下、同時可被執行御判始義稙○足利之旨被仰出之、依公人奉行飯尾大和入道宗勝指合、息兼連奉之、役者以下令申沙汰事、○中略

七月五日丙辰、次御判始、宣下事終之後、被執行之、○中略

一評定衆役者出仕、○中略 清筑後、修理亮貞泰淺資大輔爲公○公原作今、改、下同二、人奉行、兼連以使者兼日相觸也、

○中略

次御前御沙汰始、今日可被執行之旨、今曉寅刻被仰出之、兼連相觸畢、依公人奉行差合、折紙無之、

〔大館常興日記〕天文七年九月三日、諏訪信濃守來入、公人奉行事、內々可令言上之由被申之、自然於御尋は、意得所仰候旨被申之也、　九年二月十七日、今日御沙汰始也、○中略 公人奉行諏信は少所勞氣にて、先直に被罷歸候、追而可有來入由、以飯中大被申之也、各何もかたぎぬ也、公人奉行一人は、ゑぼし上下にて出仕候、　十一年二月十七日、右筆方衆、公人奉行諏信はじめとして、各來臨、今日御さたはじめ、珍重之由被申之也、

〔大館常興日記〕天文十一年二月十二日、於當津、諸事御法之儀、先度公人奉行注申候條、應被伺申候、可然候由仰にて候旨、日行事攝州承之也、

〔大館常興書札抄〕一奉行衆之事

公人奉行之儀、被仰出之段承候、尤以珍重候、猶以面可申候、恐々謹言、

月日　　名乘判

松田丹後守殿進之候

守護奉行

〔萬松院殿穴太記〕かくて二十八日〇天文十八年六月には、世中かはりし後、諸家の參賀有べしとて、比叡辻の寶泉寺御所に、人々參拜せり、〇中略七月二日には、御沙汰初有て、公人奉行松田丹後入道宗佺を初、奉行ども參集して、みづから政道を聞せ給へば、〇下略

〔武家名目抄〕職名十三按、守護奉行は、引付衆の內にて、諸國の守護人轉補得替以下、何事にもあれ、守護の事につきたる公務をうけたまはるつかさなり、〇中略足利殿武權を掌握ありし後は、大亂の餘弊しばらく止ずして、諸家の向背絕る事なく、又非法をいたせる輩も多かりければ、轉替の沙汰、常に繁雜なるが故に、常日此奉行を設置て、これを沙汰せられしなり、其形勢は、本文に引たる建武式目追加にも粗見えたり、〇中略これ守護奉行を設て、常日沙汰を經らるゝいはれなり、さて鹿苑院殿〇足利義滿の頃までは、この奉行を置れしこと分明なれど、それより後は絕て聞えず、思ふに、明德に南北和合の議成て、諸國の鬪亂漸く平治にいたり、犯法の輩も少く、且各國の守護、大かた其家定まりければ、轉替の沙汰多からずなりて、常日此職を置るゝに及ばざるを以て、遂に中絕せしと見ゆ、應仁以後に至りては、諸國の守護、多くは在國して、幕府の命令に應せざりければ、轉補の沙汰施行すべき術なきを以て、再びこれを設けられしなるべし、

〔建武以來追加〕一諸國守護人事建武五後七二十九御沙汰、奉行諏方大進房圓忠、
右彼補守護之本意、爲治國安民也、爲人有德者任之、爲國無益者可改之處、或募勳功之賞、或稱譜第之職、押妨寺社本所領、管領所々地頭職、預置軍士、充行家人之條、甚不可然、固守貞永式目、大犯三箇條之外、不可相綺、爰近年、不叙用引付等之奉書、不及請文、徒涉旬月、多累催促、慾嚮之輩不可勝計、政道之違亂、職而由斯、仍就違背之科條、須有改定之沙汰矣、〇中略

建武五年後七月二十九日　御判

〔花營三代記〕應安四年十月十九日、守護奉行右筆齋藤右衞門入道、

〔花營三代記〕永和四年十二月十二日、諸國守護奉行、松田丹後守貞秀〇中略、可有執沙汰之由被仰下云々、

官途奉行

〔尊卑分脈四中原〕能秀――滿親官途奉行

〔齋藤親基日記〕文正元年十二月三十日、齋藤四郎右衞門尉種基、任加賀守、齋藤民部丞親基從五下、號民部大夫、飯尾新左衞門尉爲倚從五下、號左衞門大夫、攝津修理大夫之親朝臣、爲官途奉行、申沙汰、

恩賞奉行

〔武家名目抄職名十二上〕按、恩賞奉行の名は、建武の頃より見ゆ、これ即鎌倉の恩澤奉行にして、其職掌は、大かた前に注せるが如し、但足利殿の時には、執務の事倍增せしかば、先代には、恩澤奉行一兩人に過ぎざりしを、爰にいたりて、往々人數を加倍せり、初め北條家、其祀を絕し、公家一統の政務に復せし時、早く武家の制度をも混用ありければ、新に恩賞方を建置せられ、堂上地下十七人を以て其衆に充られたり、建武年間記に見ゆ〇中略足利殿、武權を掌握ありし後も、暫くは諸國全く靜謐に屬せざりければ、恩賞の沙汰猶繁く、寺社領等を奉行する事も、亦建武の制度に異ならず、されば其職務、僅兩三人の堪る所にあらざるを以て、評定引付兩衆の內より、十餘人を撰びて、恩賞方より擧補して事を辨せしむ、凡引付の頭人を帶せる評定衆は更なり、其餘頭人たらざる輩も、他に攝職あるものは、皆恩賞方に列して、事に從ふならひなり、〇註略又政所問注所に伺候せるなべての奉行人も、引付衆に補せらるゝ時は、數年ならずして必恩賞方に加へらる、この故に、評定衆の外恩賞奉行たるもの、常に十六七人より減ずることなし、

〔庭訓往來〕寺社訴訟者、就本所擧達、被是非、越訴覆勘者、依探題管領與奪、被執行之、奏事於庭中、家務恩賞方法規不可勝計也、

〔建武以來追加〕一恩賞遲引事

忠節拔群之輩、勳功賞遲引之族、理訴沈淪云々、宜諸訴可被仰奉行人子細同前、

〔祇園執行日記〕康永二年十月十八日、治部兵衛大夫入道、依恩賞奉行事訐曲露顯之間、被止參上所帶悉被收公、猶可被處重科之由、有其沙汰之間近日風聞了、

〔建武以來追加〕一文書紛失輩訴訟事貞和二閏九廿九評定

可爲內談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年已前分者、無事書之間、委細之旨趣、無據糺明歟、任先例尋問當知行之實否、於有證人等者、須成賜紛失安堵御下文、至同年已來分者、守舊規、於事書在所、恩賞方、安堵方、問注所、可有其沙汰焉、

〔建武以來追加〕一恩賞合給地事觀應三九十八評 右筆飯尾大和守[illegible]國

不謂軍忠厚薄、不擇給人貴賤、任例可被賞、先日御下文焉、

〔後愚昧記〕貞治五年八月十八日、大夫入道沒落以後、奉行人等少々有點陟沙汰、政所執事代日來齋藤五郎左衛門尉基季也、而改替齋藤藤內右衛門入道被補云々、又依田左近大夫、中澤掃部亮等、被除恩賞奉行云々、

〔花營三代記〕永和五年五月十一日、門眞外記、被召加恩賞奉行之、七月廿五日任左衛門尉、八月十日出仕始也、

〔蜷川親元日記〕文明十七年八月四日壬午、飯尾加賀守清房、清八郎左衛門尉貞俊、○以下姓名略以上十七人恩賞方衆、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年七月五日丙辰、御判始、○足利義稙宣下事終之後、被執行之、○中略次御前御沙汰始、　管領以下著裏打參候、同于御評定之儀式、號恩賞御沙汰、御評定者、號寺社方御沙汰、但雖有御評定著座御免、到御前御沙汰著座者、一段之儀也、經一兩年有御免也、

恩賞方衆號御前衆出仕、先著貢馬間之次座敷、今日御祝儀繁多之間、不移時剋可被行之旨依被仰出、各

安堵方

不改大帳著座也、一列伺事在之、

〔大館常興日記裏書〕天文九年十月記裏書

御子息九郎殿、恩賞方之事、以左衛門佐、昨日令披露之處、御意得候由被仰出候、尤珍重々々候、猶期向顏之時候、恐々謹言、

八月廿六日　　　　常興判

松田豐州床下

〔武家名目抄職名十二上〕安堵奉行

鎌倉の世には評定衆たる輩、此奉行をうけ給はりければ、足利殿の時にも大かた其例を追れしなるべし、さて應安に至りて本領安堵の制令を出され、舊領の地にても久しく中絶して、證跡分明ならざる所領、又故ありて一度沒收せられし領邑等の類は、後年歎訴を致すといへども、容易に返賜はるまじき定となりて、安堵の沙汰多からざりければ、別に此奉行を置るゝに及ばず、なべて引付方の奉行する事となれり、但元より引付方にて安堵の沙汰にも預りたれど、其要務をば安堵奉行のうけ給はる事なりしを、爰に至て更に引付に附屬せられしなり、

〔建武以來追加〕一文書紛失輩訴訟事貞和二閏九二十七評定

可爲内談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年已前分者、無事書之間、委細之旨趣、無據糺明歟、任先例尋問當知行之實否、於有證人等者、須成紛失安堵御下文、至同年已來分者、守舊規、於事書在所、〈恩賞方、安堵方、問注所、〉可有其沙汰焉、

〔政所内評定記錄〕寛正二年九月六日　内談晩

著座

頭人　諏信州　松丹州　飯左太　治河　飯兵太　齋四右　淸式　齋大　齋五兵　諏左將

披露奉行

披露條々〇中略

一越前國社庄、福聚庵安堵奉書事、〇中略 治河

一尾張國大牧郷、大梅院被申安堵事、 勘左将

一物部左京亮申、安堵奉書事、即被成下畢、 清式

以上七ヶ條

〔御評定著座次第〕至德二年十二月十二日、御恩沙汰、

御座　管領義將朝臣　二階堂中書禪行照〇中略

披露奉行人

松田豐前守　雅樂備中守　飯尾肥前守　齋藤五郞左衞門尉

同十七日、仁政御沙汰、

御座　管領義將朝臣　二階堂山城中書禪〇以下四人姓名略

披露奉行人

飯尾肥前守　雅樂備中守　飯尾善左衞門爲久　松田主計允

〔建武以來追加〕奉行人伺事規式 正長二八廿

一出仕事

各守結番之次第、可令參勤、但於急事者、雖爲非番、可申之矣、〇中略

一奉行人直請取訴狀披露事 正長二八三十

論人出帶之時、參差之沙汰出來之條不可然、向後者上裁并賦別奉行之外、所被停止也、各可令存知矣、

〔蔭凉軒日錄〕長祿二年四月十三日、雲頂院佩披露奉行、以飯尾下總守定之、

〔蔭凉軒日錄〕寛正三年七月二十八日、今日以赤松、雖可有諸奉行之披露事、依諸奉行今日御懺之前日、伺否之事不覺、仍今晨被聞披露事也、奉行不記得之旨、伊勢守披露之、　八月九日、花頂殿訴訟、依飯尾美濃入道違例、以兵衛大夫可致披露之由被仰出、仍命于兵衛大夫也、　十一月四日、同〇東寺領熊坂公事、重披露之、飯尾美濃入道出仕之時、可致披露之由被仰出也、

〔蜷川親元日記〕寛正六年七月朔日丙午、以備前殿奉之御狀、

就富士兵部大輔入道親子確執之儀、御注進之旨同彼方書狀趣、即齋藤四郎右衛門尉令披露畢、父子確執事候間、不及御糺明、被成下御教書奉書候、猶以宜被成御成敗候哉、此旨可得御意候、

六月二十五日御教書日付如此　　貞——

今河殿御狀、同其方御注進之旨、拜見驚存候、仍奉行人即令披露之間、被成下御教書幷奉書候畢、任御成敗之旨、可有其沙汰候哉、恐々、

六月二十五日　　伊——

謹上富士兵部大輔入道翌日奉之、整之、禮紙ニ二千疋進、御書悅之由、

〔齋藤親基日記〕寛正七年〇文正元年二月十七日、御前御沙汰始、

御座　管領　酒掃　雲州　因州

伺事次第　野州貞基　玄良〇以下十三人姓名略

〇按ズルニ、伺事トハ、即チ披露ノ事ニシテ、茲ニ擧グタル野州貞基、玄良以下十三人ハ、披露奉行ナリ、

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一守結番之次第、各可令參勤也、訴陳之儀爲巡番、先一ヶ條可伺申事、但訴陳之儀、有子細條々者、自餘之伺事可斟酌仕、

一非急事者、非番之輩可斟酌仕、於被仰出之子細者、不及是非事、

一被仰付御返事等、非指急事者、當番可伺申事、

○按ズルニ、此伺事モ亦披露奉行ノ事ヲ云ヘリ、

〔親俊日記〕天文七年十一月十七日丁亥、御料所之事、披露奉行所へ申、　二十七日丁酉富田新右衞門入道申事、披露重伺之、然者以折紙可申之由候間、如此調遣之、

〔光源院殿御元服記〕一十二月(○天文十五年)二十日、若君義藤朝臣、征夷大將軍從四位下禁色昇殿宣下有之、○中略

一同日、新將軍(若君義藤)御評定始、御判始等有之、○中略

一其後新將軍又御出座、定頼朝臣以下評定衆如前、各著座、以前ノ處ニ、御圓座一有之、其上ニテ各令披露次第、飯尾大和守堯連、松田對馬守盛秀、○中略　其次座ヨリ晴秀出テ披露、又著座、堯連盛秀ハ大帷子ヲ脱テ、各奉行衆ノ如ク裹打也、○中略　評定衆又下﨟ヨリ退出、

賦別奉行

〔建武以來追加〕一奉行人直請取訴狀披露事(正長二八廿)

論人出帶之時、參差之沙汰出來之條、不可然、向後者上裁、幷賦別奉行之外、所被停止也、各可令存知矣、○中略

一諸人訴訟事(永享二九廿○中略)

以賦日限次第、奉行人可伺申之焉、

一諸人庭中事(永享八六三)

致訴訟之輩、各申請賦、可付奉行所處、無左右企庭中之條、自由之至也、但雖望賦、令遲々者、申次之族、或緩怠歟、或贔屓歟、屬別人申之、尚延引者、於庭中可言上之、非急事題目等、不經次第、猥致庭中事、一切被停止訖焉、

〔武政軌範(引付内談篇)〕一賦事

證人奉行

右者問注所執事、或政所執事奉行之條、見于古記、近代者爲管領之御沙汰哉、至賦、或曰令持參申狀具書、於管領渡于賦奉行、請取之則伺申、無諸文以下被相違者、加訴狀銘相副吹擧之折紙、遣引付之開闔、則伺申頭人寄人、賦之奉行之仁體者、宜隨訴人之所望、不差申者、或爲頭人相計之、被定奉行人、或以孔子被定之乎、

〔康富記〕嘉吉二年十一月二十九日丙辰、淸大外史之訴訟、河內國更占氷室事者、遣召文於結城方畢、小川事者、遣召文於和田國分方之處、件和田國分者、當管領之被官人也、當職之時者內者事不可成召文之由、賦奉行飯尾六郞左衞門答云々、此事不謂次第也、雖當職之被官人、爭可略訴訟哉、不可說之由、奉行等一揆訪之云々、

〔政所內評定記錄〕內談　同〇寬正二年六月廿五日在貞勤中之、晝巳後、

著座

頭人　諏信州　松丹州　飯左大　治河　淸泉　飯兵大　齋四右　齋五兵　諏左將

治河久我殿者、別奉行之間、不及賦之儀披露云々、

一久我大納言家雜掌申〇中略

賦宛所、諏左將、但當座披露、齋四右ニ與奪、

一岩崎平次郞高則申〇中略

寬正六年四月十日在盛親勤之　內談

頭人　諏信州　飯左大　淸泉〇以下十一人姓名略

披露

一淸泉嵯峨保宗院永代買得安堵事依爲別奉行不能賦

〔武家名目抄職名十二下〕按、證人奉行は、鎌倉殿の時に所見なければ、きはめて室町家の世に設け

たる職號と見ゆ、もとより臨時の所職にして、常日設置かるゝものにあらず、何事にもあれ、訴論人等對決すべき事あれば、本奉行、合奉行の外、更に他の奉行二人、もしくは三人をして、沙汰の始末を見聞せしむ、證人奉行といふは即これなり、凡職分、且は對決の是非曲直を見證し、且は專當の奉行に偏頗なき旨を證すべきつかさなれば、ひたすら證人を以て名とせしなり、

〔政所賦銘引付〕一對決回文折紙

明日巳剋於政所、與――算用對決、爲證人奉行可有參勤之由候、

――殿

殿

兩人、但依事三人也、以公人相觸之、兩人者一人證人、一人爲右筆也、致算用者、御倉兩所ヨリ算置二人召出之、置合算也、以公人召之、

〔蜷川親元日記〕一四月寛正四年十五日、在盛卿之內談、○中略

一加賀國郡谷寺福藏坊買得之地之事、本主立歸彼地、巳前之沽却狀、謀書之由、申疑書事、以證人奉行令撿知之、可依左右、○中略

一對決、四月廿一日如內談、兼日證人奉行之事、以公人相觸、

回文書樣例式折紙

明日廿一午剋、於政所、武田大膳大夫被官與一色左京兆被官負物相論對決、爲證人奉行、可有參勤之由、

齋藤四郎右衛門尉殿

齋藤五郎兵衛尉殿

武田奉行淸泉　一色殿奉行　治河

越訴奉行

申詞執筆　齋五兵　銘　齋四右

奉行衆寢殿ニ着座、一色殿御使小倉武田使逸見、其外武田被官庄江次間、船瑠璃人廣椽ニ座、於當所對決、依爲始一獻不及伺、親元沙汰之、

〔蜷川親元日記〕寛正六年六月二十八日甲辰、松梅院禪親、與勝處坊衡禪對決、於布施下野守貞基所在之、○中略禪親、奉行布野州、衡禪、奉行飯左大、社家奉行也證人奉行諏信州、治河右筆齋四右、

〔庭訓往來〕寺社訴訟者、就本所擧達被是非之、越訴覆勘者依探題管領與奪被執行之、

〔武家名目抄〕職名十二下按、越訴奉行は、本奉行の沙汰、或は遲滯し、或は偏頗の事ある時、訴訟人、越訴をいたすべき爲に設られしつかさにして、偏に奉行人等の私曲綬怠を防ぐべき職掌なれば、鎌倉殿の初政には、置れしことなし、○中略足利殿の時にいたりても、鎌倉の制にならひ、評定衆の内より、さるべき輩をもて越訴奉行に補せられたれば、其つかさざる所も亦前代に准せしをしるべし、鎌倉殿の世に、この奉行を越訴頭とも稱せしは、引付頭人たるもの、これを帶せし時の事なり、

〔樵談治要〕一訴訟の奉行人、其仁を選ばるべき事、○中略奉行人として、贔屓をいたし、かたてうちになされたる公事たらば、越訴を立て申さむ事、其咎あるべからず、其方の奉行たる人、傍輩にかたらはざれ、猶をなして理をまげむは、かへすがへす口惜かるべし、御法にも奉行をさしをきて、別人に付て訴訟をいたす事をば、停止せらるといへども、時にまたがひ事によるべし、いかにも内奏强縁をもても、なげき申べきこととなるべし、

段錢奉行

〔花營三代記〕應安五年七月十一日、日吉神輿造替料足事、被付諸國段錢、日吉社神輿造替要脚內、諸國段錢事、○中略就被下院宣、所有其沙汰也、所詮召出國々大田文、寺社本所領幷地頭御家人等分領悉充公田段別三拾文、急速可執進之、若有難澁之在所者、守護使相共遂入部、可致譴責矣、○中略

段錢國分奉行

總奉行　佐々木治部少輔　右筆　門眞權少外記

〈蜷川親元日記〉文明十年六月二十日庚戌、諸國段錢總奉行事、松田丹後守秀興被仰付之、貴殿御奉以御使堤三郎兵衞尉被仰遣之、

〈武家名目抄職名十六上〉按、段錢とは、天下に重事ある時に當りて、其費に給せんとて、諸國の田畠に課せて、段別に充とらるゝ所の錢をいへり、常に重事といふは、御卽位、大嘗會、造內裏、及將軍宣下、將軍家上洛、又大社造營等なり、〇中略凡段錢を課する時には、國々を奉行人に分附して、收納せらるゝ故に、その掌を國分奉行ともいへり、

〈常照愚草〉一諸國へ段錢被相懸時は、奉行衆國をとりて、其國は誰々と被分之、是を國分の奉行と申也、其國々守護へ御下知書出申候也、

一諸侯知行分、或京濟、或免除之在所、古今有之、然ば奉行より其守護へ御下知をなすに、事書を一紙相添なり、其事書に、

御卽位ニカギラズ
御卽位要脚、何國段錢事、年號月日

以被要脚被附其定畢、早除三社領、幷北野社領、五山諸塔頭、等持寺、等持院領以下、先々免除京濟之地、令支配壹段別五十文充、於公田、來何月十日以前、可被究濟之、若難澁之在所は、爲有異沙汰、云領主交名、云土貢員數、共以可被注申之矣、

如此認て、うらに國分の奉行一人、判を仕也、是をうらを封ずると云也、名乘も不書して、たゞ判計也、さてくる〳〵とまきて、上書にはさし上て、事書と二字書也、

一守護へ奉書之文言

御卽位要脚、何國段錢事、早守事書之旨、相懸之、來何月何日已前、嚴重可被致執沙汰之由所被仰下也、仍執達如件と書て、如例式年號日付ありて、國分の奉行、日の下に官と判とて仕て、其時の

倉奉行

卽位奉行三人も、四人もあれ、加判也、如此之時は、評定衆之内一人、同奉行を仕也、假令攝津、二階堂等之類也、如此奉も奉行のおくに加判之時の頭人と是を申也、

一諸侯之知行、或免除之地、或京濟之地事、其國分の奉行人の方へ、以訴訟申處、證文を披見して、其時之頭人へ披露して、訴人方と守護へと成御下知也、其文言は、先々免除共京濟共地たる上は、可被止催促由被仰出候也、日下より奉行加判、如常折紙之奉書之樣體也、立文事も可有之、御下知之文言は、先々爲京濟地上は、被止守護使訖、早相懸之、何月何日以前、可被究濟之由、被仰出候也と認る也、如此御下知をとりて、其に隨て守護の遵行を取て、執進納也、

一如此之時の御倉をば、別にも被仰付、又いつもの御倉へも納申事也、受取には、諸侯へは、何がし殿と殿文字在之、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月十九日、大營倉方段錢國分、(備中國飯四左、近江國淸泉、)布野州止出仕之間、彼分爲總奉行被申之、

〔延德二年將軍宣下記〕一同(○足利義稙將軍宣下)段錢石見國分、(諏左大分也、爲使節遠江國下向也、)爲追加可申沙汰之旨、公(○公原作今、今改)二人奉行、明應四三廿七日被相觸之、去年依令月迫、當年被相掛之國々在々、當國幷藝州兩國使節、飯尾中務大夫行房下向也、遠州使節諏左大貞說、當月下向也、要脚到來者、可被用御參內料云云、

〔大館文書〕(武家名目抄職名部十六上所引)御元服之儀、千秋萬歲目出度存候、就其當國段錢事、可申付之由、被成御下知候、雖然從前々申付儀無之候、此旨可然樣可預御披露候、恐々謹言、

五月六日　大館左衛門

佐藤具敎

〔武家名目抄職名十六下〕按、倉奉行は、何にもあれ、國々のみつぎを納むる倉庫をあづかれるつか

さなり、〇中略足利殿の時には、籾井氏の人、代々倉庫の事を奉行する長にて、政所執事代の指揮に從ひ、倉廩の納下を沙汰せり、されど、當時まさしく倉奉行といふ名ありしことは、いまだ見る所なし、常には倉本、倉方、又は御倉とのみもとなへしなり、此時に又納錢方御倉といふがありて、法體のもの其衆となり、京師及洛邊なる商買の役錢を納下することを承れり、其長をば正實坊といへり、寬正の頃、正實坊、その職をとゞめられしをり、數年の間、籾井氏、其かたをも攝して沙汰せしことあり、凡この籾井氏は、諸國のみつぎを納下するの本職なれど、猶其餘の器財のことをもあづかり沙汰せしなり、これもと萬事の費用、このつかさより出る故なるべし、

〔長祿二年以來申次記〕七月七日〇註略

一御對面次第〇中略

一草花　禁裏樣へ御進上也、此草花は、五ヶ番より參を、御花瓶に被レ爲レ立、御盆に被レ居候而、以二傳奏一御進上なり、御藏籾井、被官どもに草花をもたせ候而、傳奏に相隨而内裏へ參也、花は代々立阿彌、立申也、

〔東山殿年中行事七月〕七日、諸御禮〇中略從二所々一獻二草花一、出御ノ前後に、於二奧方一女中披二露之一、從二五ヶ番一進上之草花、禁裏へ御進覽之、但立二于花瓶一、載レ盆、御倉籾井被官持參、以二傳奏一獻レ之、

〔普光院殿御元服記〕正長二年三月九日、御元服、〇足利義教　十一日、御太刀十三振、此內三振白　御鞍二口、總鞦二懸、以上自二御倉籾井一申二出之一、

〔武家名目抄職名十六下〕按、これは禁裡へ奉るべきため、又引出物の料に、奉行人申出せるなり、籾井氏は、室町殿の御倉をあづかる者なり、

〔御產所日記〕普廣院殿樣御時之事

若君〇義勝御誕生、永享六年甲寅二月九日寅剋、〇中略

一若君様、伊勢殿宿所江御座有時者、時之管領役而、式御引出物計進上之、其外大名達者、御馬御太刀計、御折紙以下事は、時宜ニヨテ被進上者哉、○中略又倉方奉者持太刀、折紙進上之、此衆者、公方之御倉勤仕輩也、

〔蔭凉軒日錄〕永享十一年十二月二十五日、高麗通信使來日、於殿中可導之旨有命、十二年二月九日、高麗返物之事、於籾井方被仰出矣、十九日、朝鮮官人、爲歸國參于殿中而請暇去、於御會所御對面、御返章被遣、書并箱如被報而被贈之者、扇子百本、太刀十振、朱椀一具、奈良樽二荷、以僧遣之、

〔康富記〕文安六年寶德元年○四月廿一日辛未、賀茂祭御訪三百匹、自籾井方到來、傳奏切符直付之、行法朝臣請取來了、

切符案

賀茂祭總用内參百匹、行列外記御訪可下行之由候也、恐々謹言、

文安六年四月二十日　家種判

籾井殿

〔齋藤親基日記〕文正元年十二月廿日、爲御倉籾井、相國寺鎮守之東、警固、驅集御所中外樣衆被差遣之、爲上使布野州、幷親基罷向、依加成敗無爲、

〔多聞院日記〕永正四年十一月十七日、今日於修南院家、籾井修理進官符、以下被參寺門幷御造營段錢之事、被仰付了、修理進懸御請申畢、十一月二十四日、御造替段錢、幷寺門領可運上由、赤澤方出狀了、

御造替段錢、幷寺門段米、寺社領御事、各無相違可被相渡、萬一於違亂之在所者、給人可相改者也、恐恐謹言、

十一月二十四日　赤澤長經在判

納錢一衆

和州　諸給人御中

十二月二日、棟別錢之內五十貫文、赤澤方へ被進了、此內三十貫、赤澤二十貫、粮井

〔蜷川親元日記〕文明十二年三月晦日、日野殿より御使堺崎正實事、代々被懸御目候由候、此方にも、加扶持者候、彼者近年御免物被下候はで、無足にて堪忍仕候間、迷惑之由事、令申候由、高倉かけ役錢、每月五百疋計之分、此間御倉へまいるべく候、以御心得是を正實へ被仰付候はゞ、於此方可為祝著候云々、御返事、正實申間事、子細承候、乍去粮井に御倉本を被仰付候、あまたに御許物を被下候へば、御公要減少候云々、

〔貞丈雜記四役名〕一藏をあづかる役人を倉法師と云事、京都將軍の御代、御倉を預る入道あり、正實坊、定泉坊と云兩人也、是を御倉法師と云、東山殿年中行事に見えたり、年中恆例記正月朔日の條に、御こわ供御の御儀式、中略御倉より下行に候、又十二月廿七日の條に、御すゝはきの道具雜煮も、御倉より御下行在之云々、然ば米穀雜物を入る御倉を預る役人也、昔は入道にてありし故、今は俗體の役人なれども、倉法師と云也、昔の詞の殘りたる也、

〔武家名目抄職名十六下〕按、納錢方といへる名目は、何れの頃より起れるにや、明證なしといへども、鎌倉殿の頃にも、既に納錢の職掌見えたれば、必其職名もなかるべきにあらず、されど、たしかに納錢方といへる名は、足利殿の時にぞはじめて見えたるにて、その有司を一衆といへるは、市衆の意なるべし、凡此職たる者は、洛中、洛外の土倉役錢、酒屋役錢等を收納し、其錢貨を藏むる倉を預りて、納下をつかさどり、又は奉行の下知によりて、市店なる質物等の事をも沙汰する事あればなり、此外大名諸家より奉れる禮錢、國役錢をもうけ取て、納錢の倉に藏むる事、其つかさどる所なり、略○註この輩も、粮井氏など同じく、政所の被管なり、すべて財用を辨ずることは、政所の事務なればなるべし、粮井氏は、諸國の乃貢を納むる倉庫の長なり、詳に前に云へり、さて其人がらは、大かた法體の者のうけ給

はる事なるが、たまさかには、在俗の者沙汰せしこともあり、なべて法師の庫倉を預り沙汰せる事は、中古よりのならひにて、武家草創以前の例なれば、室町家にも、それにならはれしなるべし、〇註略さて此章をば、常には御倉とのみいへり、其中に正實坊といふ法師、かしら立て、出納をつかさどれり、〇註略但をりにふれて、正實坊、しばらく職務を止めらるゝこともあり、其間は玉泉房、定泉房などいふ法師、正實の代職を命せらるゝならひなり、〇下略

〔年中恒例記 十月〕十日、亥日次第事、〇中略

つゝみ紙以下用意事、〇中略參諸下行は、亥子がけと云て倉役を相懸、以納錢被仰付之、

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一酒屋土倉闕所事 永享二九廿

若有如此闕所者、可被付納錢方焉、〇中略

一洛中洛外土倉質物事

於絹布類者十二ヶ月、至武具者二十四ヶ月之由、所被定置也、若過彼數月不請出者、爲流物可致計沙汰之旨、可相觸諸土倉之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享三年十月十七日

大和守 飯尾貞連

備中守 伊勢貞國

一衆中〇中略

一洛中洛外諸土倉利平事、近年任雅意致其沙汰云々、太不可然、所詮於高利者、爲衆中定置、嚴密可被相觸之、若有異議在所者、隨注進可被處罪科之由、被仰付候也、仍執達如件、

長祿三年十一月二日

之種 飯尾肥前守、于時左衛門大夫、

之清 飯尾加賀守

忠行二階堂山城守
于時政所、

〔政所內評定記錄〕寬正二年正月廿六日
政所內評定始著到寬正二年正月廿六日
伊勢守　諏訪信濃守
松田丹後守　飯尾加賀守略○中
三獻事訖、先頭人被立御座敷、已前之目錄、幷著到御覽之、其後面々立座畢、
依爲御織始、面々各被進御太刀金、立座已後也、
一獻料千匹、自納錢方下行、略○中
一寬正四年正月廿六　內評定始略○中
五度入
三獻　クミサカナ　ヤツカン　副サカナ　殘二獻、如去年勤之、三獻め御納之、貴則佳例也、御太刀金進之、其後兵庫殿貞宗有御出御、御納ニテ有御勤之御盃、及五六獻、大酒有、
一獻料千五百匹、納錢方ヨリ下行、請取二通遣之、
〔蜷川親元日記〕寬正六年五月二十五日辛未、慈恩院殿御訪萬疋事、御足付御料紙方、已前且三千疋被召候、殘內二千疋事、依折紙方遲々、先以納錢可渡進之由、被仰之間、正實坊江親元一行進之候、
〔齋藤親基日記〕寬正六年十二月三十日、納錢方御倉事、被改正實、被仰付禪住定光定泉等、
文正元年三月十七日、御參宮、略○中供御衆、幷遁世等御訪卅貫文宛、納錢方下行也、
〔蜷川親元日記〕文明十七年六月二十八日丁未、定光坊、納錢一衆に被召加之、頭人御奉書、
政所納錢一衆事、被召加衆分之由、被仰出候、納下之儀、嚴密可被致其沙汰也、恐々謹言、
文明十七六月廿八日　定光坊貞、
〔延德二年將軍宣下記〕延德二年六月九日庚寅
日時事、傳奏勸修寺大納言敎秀卿被伺申之、略○中可爲廿一日之旨、被仰出之、萬可爲應安御例云々、

御要脚事、如先々以納錢方臨時役可有其沙汰之旨被仰出、〇中略宜下方御要脚注文有之事、如先規酒屋土倉方相掛之、明日中三萬匹分可進納之、有難澀輩者、可被譴責之由候、恐々謹言、

六月九日　貞通

中村九郎左衛門尉殿

澤村平左衛門殿

此兩人、雖非御倉納錢方之儀、近年依執沙汰如此、

〔集古文書〕三十七 延德二年酒屋役條目 蜷川某家　貞通

度々被仰出條々 延德二

九月廿一日以葉室殿被仰付之
一酒屋土倉役事

以前一衆、中村九郎左衛門尉、并澤村平左衛門尉、押置地下御公用、致狼藉之條、言語道斷之次第也、所詮度々任被仰出之旨、可被渡當御倉玉泉候由、堅可申付之、於引違分者、有御糺明、就有無落居、可被仰付當御倉之由、被仰下之、〇中略

同日以種村刑部少輔被仰付之
一以前一衆等申納錢引違分事、

就被改替、御倉御返辨之儀、有先例哉否相尋之、左右可申之由被仰出之、〇中略

十月十七日
一榊原下木工 南西頬、酒屋中村三郎左衛門尉、小川實相院、同片山重左衛門尉等事、

爲二條殿御被官之間、可爲直進之旨、先度被仰付中澤備前守、被成奉書之處、玉泉不承引之條、以一行可申付之由、以萬阿被仰付之、

〔宣胤卿記〕貢馬傳奏事 明應二

諸取申　內侍所御神樂用脚事

合參拾貫六百文者 近年減少分

右所請取申如件、

明應二年十二月廿日　　御神樂傳奏中御門大納言家雜掌　朝貞

今日御神樂總用遲々間、先以他足自長橋局下行之處、及晩飯尾加賀守清房以使者曰、用脚三千餘匹納了、早々給召人可下行云々、先下行之間、明日一度ニ可請取之由返答了、仍廿一日、此請文令持青侍人夫三人（給之、自内裏）遣之、以奉行下書於御倉玉泉坊請取之、進長橋、

〔宣胤卿記〕請取申　節會御用脚錢事

合千五百疋者

右爲皆納所請取申如件、

明應三年五月十二日　　節會傳奏中御門大納言家雜掌　朝貞判

此請取ノ袖ニ、武家奉行如此書之、

此分、以禁裏元三御服要脚國役內可有下行也、

同日　　清房判

玉泉房　　眞通

以此下書、諏方信濃守貞通相判事申遣、人夫事、申勾當遣取玉泉坊地行云々、翌朝又遣取渡了、

〔武家名目抄　職名十六下〕蜷川親孝記云、永正十三年九月、執事代被申候、地下老若一兩輩申云々、仍柳桶代目錢、清酒三ヶ條之儀、子細具伺可申由、有來臨承候間披露之處、御同心之旨、頭人御返事、一酒屋方柳桶壹荷宛代目錢等事、違先規候條太無謂、然者役錢減少基不可然、注文遣之、相誂酒屋中、於役錢沙汰之在所者、不及是非、恣令興行、不順其役在所者、堅可被停止候、此條々有違犯輩者、可被注進交名之由候也、仍執達如件、永正十三九月十日、玉泉房英致、一柳代（以中頃之代半分錢、可爲三十疋）　一目錢

寺社諸亭賦
右筆

減二錢一如前々　一清酒事也別紙　就酒屋方、柳樽一荷、充代目錢等事、違先規之條不可然候、仍自執事代以注文被仰候、被相談酒屋中、急度被申觸候者、可為肝要候、猶雜掌可被申候、恐々謹言、九月十日、玉泉房親孝、

〔花營三代記〕應安三年八月六日、山門奉行佐々木治部少輔、諸亭賦中條兵庫頭入道、　四年十月十九日、評定奉行、山門奉行、寺社諸亭賦以上三ヶ條　佐々木治部少輔高秀、

〔細川家書札抄〕一奉行之事　右筆方

飯尾美濃守　布施下野守　齋藤遠江入道

〔公方樣正月御事始之記〕一於公方樣御憑之事、伊勢守并同苗衆勤之、七月廿七八日之間に、伊勢守如此注候て懸御目候、

奉行
伊勢守
右筆
伊勢因幡守
伊勢右京亮
御使
伊勢與一
伊勢六郎左衛門

木阿彌
古阿彌
直阿彌
季阿彌
業阿彌
喜阿彌

此おくに、又同朋衆を注候て懸御目候、是は役者なり、

〔齋藤親基日記〕寛正七年〇文正元年閏二月廿一日

一代々御內書右筆次第

伊勢守貞行法名常誠、眞蓮之親父也、自應永二至同六年、　伊勢因幡入道照心俗名七右貞長、貞行舍弟也、自應永七至同廿四年、

唐船奉行

伊勢守貞經（法名勢元、貞行長子也、自應永卅五正長元至永享三）　伊勢五郎貞通（號駿河入道照安、照心四男也、自永享三至同七年）

伊勢加賀守貞直（法名照心、長子也、自永享七至同八年）　伊勢右京亮貞勝（改貞仲）

飯尾肥前守爲種（法名永禪、自永享八至同十一年）　伊勢兵庫亮貞宗（貞親息）

（隨申沙汰、右筆方調御内書、不限此一人、皆調之、）　七郎右衛門尉貞熙（照安養子、實━━）

伊勢備後守貞彌（法名照永）　布施下野守貞基（文明四）

五郎貞通（法名照安、自永享十二至嘉吉）　布施下野守（彈正大夫）英基（文明十已後、至同十七年）

伊勢守貞親（文正元閏二ノ十出仕以後）

又兵庫助貞宗（文明三四、貞親隱居以後、）

又備後守貞熙（文明七以來）

〔相京職鈔　一〕右筆〈○中略〉

寬正年中記錄（天文追加）云、右筆方、

飯尾加賀守　飯尾大和守　松田對馬守　飯尾中務大輔　諏方信濃守　松田丹後守　中澤備前守　松田九郎左衛門　治部大藏丞　松田主計允　治部三郎左衛門　諏方兵衛尉　飯尾與三左衛門

評定始御判始次第云、次評定衆幷右。筆。衆。、御太刀進上之、

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕右。筆。奉。行。衆。

齋藤大藏入道元茂　飯尾隼人佐　中澤備前守　齋藤民部大輔　清筑後守　松田九郎左衛門尉　飯尾美濃守　同四郎左衛門尉　同加賀守清房（御陣奉行）　松田丹後守（同）〈○下略〉

〔武家名目抄　職名十六上〕按、唐船奉行は、明にもあれ、琉球にもあれ、すべて異國より送れる所の方物を撿納し、又こなたより贈らるべき書牒、品物の事等をつかさどり、商買交易の事をさへふさ

ぬる奉行なり、明は應永年中に、鹿苑院殿〇足利義満通信せられしより、使人の往來絶ることなし、常に五山の僧をもて使者とせり、俗これを遣唐使といふ、これまた此奉行のあづかり沙汰する所なり、思ふに、唐船奉行、唐奉行などいひて、その稱同じからざるは、ひとり書船交易の事のみならず、遣唐使等のことをも掌する事、いできし故なるべし、

〔康富記〕寶德三年八月十三日己卯、或語云、琉球嶋船商人去月末著兵庫津之處、守護細川京兆、早遣人被商物撰取、未渡料足之間、先々年々料足未進物、及四五千貫無返辨、又賣物抑留、爲島人難堪之由申之間、自公方被下遣奉行三人、布施下野守、飯尾與左衞門、同六郎、被糺明之處、被押取之物、自京兆未被返、依之奉行未上洛云々、

〇按ズルニ、此ニ唐船奉行ノ名稱ナシト雖モ、布施飯尾等三人ハ、琉球商船點檢ノ事ヲ奉ジタレバ、則唐船奉行ナリ、以下此ニ準ズ、

〔康富記〕享德三年十月十五日癸巳、是日奉行兩人、飯尾美濃守、同孫左衞門尉等、爲公方御使下向兵庫、自唐歸朝之船荷共爲撿知也云々、

〔蔭凉軒日錄〕寬正五年五月廿八日、就渡唐正使、幷居坐箇條、申狀與伊勢守判之、致披露以後、于唐船奉行、飯尾大和守於殿中渡之、正使天與和尚居坐妙僧都聞紹本都寺、依大内方所申、來六月可赴于九州地之由、以飯尾大和守被仰出也、卽命之、　六月十五日、爲可使于大唐、釋王寺石硯、自諸五山五百面可進上之由被仰出也、但以價直可被召之由、伊勢守、幷唐奉行飯尾大和守申之、卽觸之、〇中略　寺持寺、獻十二面硯也、　七月四日、來八日唐被遣之發軫丹、幷車警固出立錢、疏紙幷箱、正使幷居坐、可被懸御目等事、與唐奉行飯尾大和守語之、蓋爲評之、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月二十八日、琉球人參洛、〇中略　號長史、於御寢殿庭前三人懸御目、〇中略　庭鋪席、〇中略

神宮奉行

一進物料足一千貫、其外如先々、

一懸御目三人進物種々、自小侍所元連之種、爲奉行執次之進上也、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年八月六日、就琉球入貢點檢之事、大槩一日論其點檢方〇方上恐脫公字様、被惠彼者、而頻々有往來則可乎、然則彼者以內點檢入蟲入綱、以註文可獻之、若此外有漏泄之物、則堅可有御成敗之由、以證狀可申也、又其內有御用物、則可被召云々、懇々以伊勢守所申披露之、仍此旨、伊勢守可命琉球之奉行飯尾大和守之由被仰出、仍達之、卽伊勢守、於殿中召飯大命之、明日可行此命云々、

〔島津文書二〕琉球國渡海船事、先度被成奉書之處、御請到來、殊上使、就龍首座言上之趣、具以被聞食畢、所詮於子細者、追被糺明之、堅可有御成敗、至泉州小島林太郎左衛門尉、堺湯川宣阿、小島三郎左衛門男船等者、就渡唐被仰付之上者、以別儀嚴密加下知、無其煩可被全彼渡海之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明六年九月廿一日　加賀守花押
大和守花押

島津又三郎殿

〔撮壤集武職〕頭人。。神宮

〔武家名目抄職名十九ノ一〕按、伊勢神宮は、國家の宗廟にして、公武殊さらに崇敬せらるゝが故に、事務も亦隨而多かるべし、されば京都將軍家のはじめ引付衆の內より、神宮開闔の職を置れて、兩宮の事を專當せしめ、猶事の遲滯あらん事を恐れて、引付頭人一人をして、兩宮の事務を管領せしむ、これいはゆる神宮頭人なり、〇註略凡神宮の事務は、開闔たるもの、ふさぬる所にはあれど、頭人は總判の職たるが故に、其任の重きこと、政所侍所の別當に准じてしるべし、

〔尊卑分脈四中原〕能秀——滿親神宮頭人

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、○中略
一攝津掃部頭之親（神宮頭人同并神宮日同）　十四日、進發、
〔薩戒記〕嘉吉三年六月九日癸巳、松田對馬入道常守（神宮方奉行開闔也）等、爲三位入道德本使來云、○下略
〔康富記〕文安四年十二月二十九日丁亥、高大史員職語云、今年伊勢大神宮造替行事方本樣使諸道輩可下向候處、依公方要脚不足、令延引了、式年延引不可然之由、武家奉行開闔等申沙汰之間、以山門禮拜講御料足、先被引違、被下行之由にて、本樣使年內發向之分、被治定云々、
〔蔭凉軒日錄〕長祿四年六月十八日、寶林寺領備前新田庄內吉永保、并赤松次郎法師知行分、新田庄役工米、以先規支證可有御免之由被仰出、仍命于神宮奉行飯尾加賀守也、
○按ズルニ、神宮奉行トアルモノ、則チ開闔ノ事ナリ、
〔建武以來追加〕一寺社本所領事（應安元六十七、布施彈正大夫入道昌椿奉行之、）
禁裡仙洞御料所、寺社一圓佛神領、殿下渡領等、異于他之間、曾不可有半濟之儀、固可停止武士之妨、其外諸國本所領、暫相分半分、沙汰付下地於雜掌、可令全向後知行、此上若半分之預人、或違亂雜掌方、或致過分掠領者、一圓被付本所、至濫妨人者、可處罪科也、將又雖有本家寺社領之號、於家人給之地者、宜准本所領歟、早守此旨、云一圓之地、云半濟之地、嚴密可打渡于雜掌矣、○下略
〔花營三代記〕應安五年三月十二日、布施彈正大夫入道可爲評定衆之由被仰出之、雜賀縫殿入道可爲寺社奉行之由同前、
永和五年六月廿一日門眞權少外記、松田修理亮、齋藤四郎右衛門尉、爲寺社奉行、
〔建武以來追加〕一山門并諸社神人等事（至德三八廿五、奉行之、松田丹後守貞秀、）
山門并諸社神人等、就諸事稱催促、率數多及亂入狼藉事、先々定置其法、有停止之處、近年猥違亂云云、不可不誡、或忽罹當座之恥辱之間、不慮喧嘩出來、或爲塞後代之瑕瑾、不顧所當罪科乎、政道之違

亂、諸人之煩費、職而由斯、假雖爲洛民之住所、可有禁遏、況於其仁哉、所詮不經次第之訴訟、有如然之企者、於本訴者雖帶理運、永可被弃捐、至神人者任先例、仰侍所召捕其身、可有掕樓矣、

寺社造營奉行

〔花營三代記〕應安四年十月二十五日、石淸水八幡宮神殿立柱上棟、

上卿洞院大納言實守　辨左中辨宣方〇中略

造營總奉行赤松左近將監　奉行人布施彈正大夫入道　以下著座

六年九月二十三日、賀茂社造營奉行、　中條兵入　依田　杉原　雅樂　飯濃　松修　十二月二十七日、山門神輿造營沙汰被執行之、總奉行人高秀、親父道譽、去八月二十五日他界之間、依爲重服延引、然而依被下高秀除服之宣旨、被始行之、

永和五年〇康曆元年七月廿五日、日吉神輿造營奉行、中條兵庫頭入道、松田丹後守、飯尾左近入道、門眞左衞門尉、松田豐前守、齋藤四郎右衞門尉、安威新左衞門尉、布施民部丞、齋藤筑前五郎左衞門、雅樂民部左衞門尉、飯尾四郎左衞門尉、松田主計允、

〔東寺執行日記〕永享八年十月二十日、寺家大工國吉塔婆造營可致沙汰之由、仰被下、奉行飯尾加賀守爲行、同三郎左衞門尉爲秀下知、寺家奉行ハ重賢法印寶勝院、快壽僧都寶泉院、融覺僧都普光院、此兩三人、仍同二十一日ヨリ造營沙汰畢、　十二年十月十日、爲寺中修造、公方奉行兩人入寺、飯尾加賀守、同右衞門大夫、總之注文沙汰之、十日、十一日、十二日、三ケ日ニ寺家大工國次申也、造營奉行聖淸大僧都、

社家奉行

〔武家名目抄職名十九ノ二〕按、社家奉行は、寺社奉行の偏職なる由は、既に前條にいへるがごとし、されば寺奉行とあはせよべるには、寺社奉行といへり、皆奉行人のうけ給はる所職にして、階級班列等、差別あることなし、鎌倉の世の制度は、前條にのべたれば、ここには京都將軍家の制度のみをいへり、凡此職は、京師及近國の大社、又いづくにもあれ、公武尊崇の神社の事をばなべてうけ給はり沙汰する奉行人なり、但伊勢神宮は、いふもさらなる靈社なれば、別に神宮頭人、神宮開闔の二員を定め置て、ことさらに沙汰し

行はしむ、又石清水にも、別に奉行人をつけられしが、これは後にとゞめられて、社家奉行のうけ給はる事となれり、其由は、石清水奉行條にいへり、關東の公方家にも、京都に准じ、社家奉行を設け置れ、鶴岡已下鎌倉中の神社の事を沙汰せられしとみゆ、但鶴岡には、總奉行といふを別に附置れたり、是も石清水の例にならはれしなるべし、猶前後の條を合せ考ふべし、

〔建武以來追加〕一諸社神人等訴申喧嘩事應安五十一十八、松田左衛門尉貞秀奉行、

或帶本訴之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許、而近年就所務負物以下、動成奸謀之企、令單闘殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人之煩費也、不可不誡、於如然事者、一向非許容之限之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務、出非據吹噓者、經奏聞改所職、可被補器用之仁矣、

〔花營三代記〕應安四年十一月四日、布施彈正大夫入道、可為八幡宮奉行之由、被仰出之、

〔石清水放生會記〕永享十年八月十五日丁卯、公方樣〇足利義教御下向八幡、〇中略是日石清水八幡宮放生會也、〇中略武家奉行飯尾肥前守為種左衛門大夫貞元等也、

〔蔭戒記〕嘉吉二年八月十五日癸卯、石清水放生會、卯剋許神輿已降御島居下云々、然而祠官一人未參云々、差使者相尋武家奉行飯尾肥前入道、永祥返答云、神人訴訟、雖及數箇條、悉皆落居了、只今社家義遲引也、猶可加催促者、

〔康富記〕文安元年八月十五日辛酉、石清水八幡宮放生會也、〇中略奉行職事、頭中將隆富朝臣也、未拜賀、神幸已下祭禮如恒無為無事云々、管領不被下向、社家奉行飯尾肥前入道、又布施民部大夫、齋藤上野介等相副下向了、

寶德三年九月七日壬寅、是日自武家被遣使節於南都、依神木入洛之有聞也、管領畠山左衛門督入道御教書數通被成之、同被成遣綸旨者可然之由、武家就御申沙汰被成下綸旨於寺門社家等云々、

條々〇中略

一八幡奉行飯尾大和入道流罪事、雖申入、只可被改易八幡奉行之由被仰之云々、

以上條々、武家御敎書委被載之、綸旨武家如此條々申御沙汰上者、神木入洛事、可停止之由被仰下云々、

〔蔭凉軒日錄〕長祿二年八月晦日、當寺〔相國寺〕領玉櫛庄、交野神人、押取二百貫文、無謂之事、於社家奉行、依寺家所申、可被仰付之由被仰出、

〔祇園社文書〕〔武家名目抄職名部十九ノ一所引〕寬正四年十二月廿五日、御敎書、〔貞基、之種兩判、〕奉上無動寺、當社神輿、既至于坂口御下着之旨、注進到來、於衆徒者、可歸山云々、不移時剋可被進御迎候、若有遲怠者、可有其科之由、被仰出候也、仍執達如件、

寬正四年十二月二十五日　之種判
貞基判

祇園執行御房

○按ズルニ、之種ハ飯尾肥前守、貞基ハ布施下野守ニテ、共ニ社家奉行ナリ、

〔蜷川親元日記〕寬正六年五月六日壬子、今宮社別當去年御神事時、雜人就違亂儀御奉書事、社家奉行布野州ニ雖申候、難澀候間、以女中內奏、齋四右ニ被仰也、被成奉書、當年又同篇之間、當野州ニ申處、依去年之時宜斟酌之、迷惑之由參申之、御返事當野州ニ可被申云々、仍自貴殿モ野州方ヘ被仰之、親元奉之、遣使間、早々可被執申之由申候、野州意得申候由返事有之、

〔蔭凉軒日錄〕寬正六年六月廿五日、明日西芳寺御成、路傍有松尾神輿、致訴訟、蓋與溪堂爭之、御前被御覽、則可有怖畏、先以量御歸座、則可平之由、稟命于松尾社家奉行飯尾左衞門大夫方也、

〔蜷川親元日記〕寬正六年八月二十日乙未、松梅院〔禪豫〕申、先松梅院兩人借物弃破御奉書被仰下候、貴殿爲御一覽持參之、親元依他出預置之、此御奉書事、先日貴殿〔江〕被申之處、左樣に神役等於令闕

怠者、以社家奉行可被歎申之、若令无沙汰、自此方可有催促之由御返事有之、其趣以次春日御局、江語申入之處、卽上聞ニ被達、以少將殿社家奉行布施ニ被仰付云々、

北野寺領、諸國所々事、號先借錢主等、押而致知行云々、太不可然、所詮禪盛法印、依有其科、既被改御師職之上者、於被負物者被弃單、早令直務、可被專神役之由、被仰出候也、仍執達如件、

八十八　　貞基（判）

玄良（判）

松梅院

〔蔭凉軒日錄〕寛正六年十月二十八日、天龍寺大衆、評定衆申狀披露之、依高都聞所答申、而評議而可有御成敗也、與伊勢守評之、正盛都聞借物、自松梅院無沙汰、任以前御奉書之旨、可致其催促之由被仰出、卽命于北°野°社°家°奉°行布施下野守、幷當寺奉行飯尾左衞門大夫命之、

〔祇園社文書（武家名目抄職名部十九ノ一所引）〕天文二年六月八日、御奉書、（常興）芳札旨令披見候、抑今度當社御神事之儀、陣中可及煩之由之條、先以如此候、其趣被成御下知候、委細自社家奉行可被申候、公私非等閑之儀候、被仰御糺明、重而可被仰出候、猶雜掌可被申候、恐々謹言、

六月八日　　常興（判）

祇園社執行御房御返報

〔祇園社文書（武家名目抄職名部十九ノ一所引）〕當社司池田伊賀守緣親下知、（大宮駕輿丁等）就去七日御祭禮、大宮駕輿丁、與犬神人喧嘩事、犬神人等申懸空言、以大勢追懸、致刃傷之條、言語道斷次第也、彼等緩怠不始于今所行也、所詮社家致注進之處神妙由、於敵者社家堅有節堪上者、於已後不可仕緩怠之由、歎申者也、仍社家奉行折紙嚴密之間、於明日還幸所役者、不及煩儀可相隨之由、被仰出候之處如件、

六月十三日　　社家（在判）

寺家奉行

縁親判
大宮御輿丁中

〔伊勢貞助雜記〕一御靈御神事に、兩社へ御神馬の事、上御靈は別當、下御靈は若代丹後守かたへ、社家奉行より渡也、

〔東寺執行日記〕貞治二年三月二十七日、今日年預法印深源幷定伊可參之由、自寺務被仰之間、即令同道參了、被仰出之旨趣ハ、去々年康安元十二月七日、御開之時、將軍家大事御具足以下、被預經助僧都于時律師之處、大事具足內、重寶刀金造已下盜取訖、仍此間於武家有其沙汰者也、然而未及沙汰、於所詮彼經助者、爲寺僧之上、爲寺家可有糺明沙汰之由、以松田八郎左衛門尉寺奉行被仰之間、所被仰出也、面面馳歸寺家、相觸衆中可申散狀之由、以別當宗助大僧都被仰出了、

〔東寺百合古文書百六十二〕廿一口方評定引付　應永卅癸卯五月二日　連署除之

一寺家奉行松田豐前守還補事

披露之處、無子細、自公方被還補候、禮分三百疋可隨身之由衆議了、雖有其沙汰未能還補、仍不及禮、爲後記之旨也、

〔蔭凉軒日錄〕永享七年九月二十六日、大報恩寺住持之事、以衆僧所議伺之、○中略大報恩寺之事、被命兩奉行、飯尾三郎左衛門尉、同左衛門大夫、　八年五月二十八日、西芳寺領諸役免除之事伺之、則可免之由被命、又寺奉行、自今可命飯尾加賀守之由、被仰出、　九年九月二十八日、臨川寺奉行、加賀守在陣故、暫以大和守可代之旨有命、　十年二月十五日、東福寺奉行、如舊被命飯尾加賀守、　十一年十月九日、不壞化身院奉行、以飯尾大和守被命、

長祿二年二月十五日、等持院幷西芳寺不知行寺領事伺之、於寺奉行可申付之由被仰出也、　二十二日、西芳寺領還付之由、召寺奉行齋藤遠江入道可申付之由命之、　晦日、大德院不知行、同南禪歸

雲院不知行在所伺之、大德院奉行、以舊例飯尾加賀守被定矣、諸寺院領、本復施行遵行延引、別而被仰付之由被仰出也、　四月七日、當寺不知行追訴之書立伺之、飯尾新左衛門命之、以飯尾左衛門大夫、并新左衛門兩奉行也、是故命之、　五月六日、天龍寺鬪死之故、觸穢之事、并沙喝小諷經爲僧衆不可相見之事、又沙喝鬪諍之事出來、則其罪科可及于寮坊主、并老師之旨、以寺奉行飯尾美濃入道周加賀守、堅被命于寺家也、以報此命被及于當寺、蓋爲諸寺之戒也、晚來飯尾新左衛門尉、於天龍寺如被仰出、於當寺制法被仰出也、兩寺奉行、於愚老可命于寺家之旨致談合、而可白之旨被仰出、故諸奉行到來于當軒也、　八月晦日、東福寺門前、八町之御免許之事、披露之、寺奉行布施、可被仰付之由被仰出也、卽命于布施下總守、　九月三日、當院還附怠慢之事白之、可命于當院奉行左衛門大夫之由伺之、　十五日、東福寺退耕庵末寺、若狹國小濱、栖雲寺同寺領不知行之事伺之、寺奉行布施下總守命之、　十一月二日、善入寺領越前志比庄、波多野入道、雖有二百貫之請文、爲水損無土貢之由、依歎申被成御教書、而每年百貫文、可使于善入寺之由、以春阿被仰出也、飯尾新左衛門、依爲寺奉行被命也、　三年十月七日、雲頂院之奉行飯尾加賀守、寶幢寺之奉行飯尾左衛門大夫、依被望白被仰付也、

十二月二十一日、當寺風呂材木、作州富美庄取之、可被寄進于寺家之御奉書被成處、自守護方掠申而被成御奉書、寺家愁訴之由、以長老修山和尙、并都聞之狀白之、於寺家可有御免許之御奉書可被成之由、於寺家奉行左衛門大夫被仰出、卽命之、　四年〇寬正元年卯月二十五日、當院領綺田百姓、應成召文不參洛之事、并備後國寺領遵行未出之事伺之、命院奉行飯尾左衛門大夫也　二年六月六日、播州瑞光寺之內瑞雲軒安堵之事、此兩寺被下御判之御禮、各獻千疋、奉懸于御目也、蓋法泉寺雜掌、添以杉原十帖也、瑞雲軒住持者、妙顯藏主也、等持院都管妙堪都聞以書立伺之、德雲院依龍雲寺借用之事、德雲院淸甫和尙、以狀可有御成敗之由被訟申、仍披露之、卽命于寺奉行布施下野守也、天龍寺奉行飯尾美濃入道被加松田、蓋飯尾加賀守所沒之闕也、雲頂院之奉行、亦布施下野守也、今晨朝參之次、伊勢

守謂予曰、比來飯尾加賀守所奉行尤繁多也、可配付于諸奉行之由、伊勢守語之、　五年五月廿日、天龍臨川三會、就段錢以前御免許之折紙有之、當寺定有其例、然同前可有御免歟之由申之、但寺奉行以支證致披露、可被任理運乎之由申之、仍天龍臨川三會奉行飯尾兵衛大夫披露之、與伊勢守可評論之由被仰出云々、　六月二十日、駿河淸見寺奉行之事、自寺家望之、仍伺之被仰付于布施下野守也、卽命之、　十月十三日、東山淨土寺邊、正法寺領散在賣得下地、堤伊賀入道、曾依爲代官、致押妨、仍買主壽德院僧都寺祀都寺等持寺都官、以訴狀申之、以淨土寺殿(足利義政)奉行、齋藤四郞右衛門尉致披露、可有御成敗之由申之、〇中略齋藤者非淨土寺奉行、是岡崎門跡之奉行也、　十一月十四日、建仁寺領、與土岐方爭論、遁嚴命而前夜及半夜致遵行、仍寺家歡喜也、今晨餘事披露之次、被仰出、尤爲寵光也、修理大夫殿知行、美濃國中河遵行難澀之事、重伺之、被仰于布施下野守也、(守護段錢之事也、土岐方事也、)林光院領、尾張國犬山庄今枝方公事不用御奉書、就于南御所可歎申之由、全無謂之由懇々披露之、仍以寺奉行松田丹後守、幷齋藤四郞右衛門尉、嚴被命于寺家也、　六年正月十八日、御成在所住持皆參、謝于蔭凉軒之事也、蓋以年始之故、謹白無怠慢之事也、院奉行飯尾左衛門大夫、幷大和守參侍也、

二月七日、天龍寺、求勸進于高麗、欲歸朝、忽船頭就借物致緩怠、留彼船頭、依用事入洛云々、以次被召置之、預究決、則爲幸之由自寺家訴之、其趣天龍寺寺奉行飯尾兵衛大夫、今晨於殿中諭此子細、仍披露之、可留彼船頭命于飯尾兵衛大夫也、　十日、天龍寺、就于朝鮮國求勸進、然船頭玉井致緩怠、留財物、仍被召置、可有御尋之由、寺奉行飯尾兵衛大夫、與伊勢守評之、今晨披露之、　二十九日、洪恩院、爲花御成被申事、幷香嚴院御成之事伺之、花頂殿濃州大井戶鄕爲守護押妨、卽今花御覽之前、召離掌可被仰之訴訟被申、今晨以彼訴狀披露之、御領掌可申付之由被仰出、卽於殿中命于門跡奉行飯尾兵衛大夫、仍渡彼門跡之訴狀、又命于門跡遣狀也、　五月二十四日、八條遍照心院奉行之事、以飯尾兵衛大夫被望之、仍以狀伺之、御領掌也、命于飯尾兵又寺家也、　六月二十七日、來八月八日、勝智

院殿第三年忌、御佛事奉行依爲當院奉行、以飯尾左衞門大夫、并同大和守被仰付、仍命之、　臘月六日、天龍大衆東堂及評定、訴高都聞、并養都寺、其外四員、御罪科可被仰付之事、仍其罪雖云不露顯、爲衆中所申、而被處遠流之罪也、然則被召還雲居庵塔主梅谷和尚、可歸住之由、寺奉行飯尾兵衞大夫、并松田丹後守、及副奉行治部河內守被仰付、仍此由被諭于愚老、即奉報于院主也、自院主命于天龍寺也、尤不宗門之榮也、院主又歡喜踊躍而來謝也、　十九日、來正月中、法界門建立、擇吉日之事、命于在貞、以後寺奉行飯尾左衞門大夫、并大和守赴于盛都聞所、以上意可督之由、被仰付也、

文正元年七月廿四日、當寺領丹州上林上村河成年貢未納、以寺奉行飯尾肥前守可仰御成敗之由申之、仍命于寺家并飯左也、　廿五日、公文奉行次第之事、以伊勢守被尋下于諸奉行之中、仍飯尾肥前守被仰付樣者、普廣院御代、飯尾肥前入道、并同加賀守勤之、然則不依上頭、只中老人衆、依其器用歟之由申之、仍披露之、兵衞佐殿、時宜懇々披露之、仍以伊勢守被仰談也、以兩奉行被遣于竹王殿也、兵衞佐殿、公事比來切々披露、即今及大義、則直召伊勢守、而與日野樣御談合可乎之由謹白之、仍愚老志所之達之、尤爲願也、

〔東寺百合古文書百五十九〕廿一口方評定引付文明十九年丁未

二月十八日連署除之

一室町殿、就御歡樂被致御祈禱、可被進御卷數哉否事、可被相尋寺奉行飯尾加賀守由、治定了、○中略

同二十一日連署除之

一室町殿御祈禱事、以雜掌上總法橋相尋寺奉行之所、尤可然也、然者御卷數年預可被持參申之由云々、

仍明日二十二日可持參申之由治定了、

〔蔭涼軒日錄〕長享三年三月九日、又萬壽寺領播州安田備前土師鄉、國一亂以來、不知行、御還補奉書事望之、連署一通、實輪寺領播州安田五ヶ町半濟、國一亂以來不知行、御還補奉書事望之、住持松嶺

山門奉行

一行等、相二副愚一行、命二桂子一可レ達二二階堂中署權大輔方、大輔方披露之者、寺奉行方江可レ遣二愚折紙一之由命之、萬壽寺副奉行中澤備前守、寶幢寺副奉行飯尾大藏大輔、兩人方江遣二折紙一也、自二兩寺一二階堂方江各百疋、折紙調レ之遣レ之、就二公文之儀一飯尾加賀守方江遣二一行、齋龍鹿苑院主、同納所紹禧都寺持一緩來、茶話移レ剋、

〔室町殿日記四〕萬壽寺法度書之事

掟

一天文十二年八月晦日、任二公方御下知之旨、維那奉行等爲二一人、寺領已下、悉不レ可二相計、幷諸塔頭、可レ有二再興事、世間忿劇之間、被レ成二延引一者也、

永祿四年十一月十六日　長秋

長高

當寺維掌　同永賢藏主

〔武家名目抄職名十九ノ一〕按、長秋長高は京都の撿斷なり、此比は寺社奉行とて別には置れず、撿斷にてかね奉行せしなり、

〔武家名目抄職名十九ノ二〕按、比叡山は本朝第一の伽藍なれば、事務の多かりしは勿論なり、然れども鎌倉殿の時には、なべての大寺大社は、專朝廷の御はからひにして、ひたすら武家のあづかり沙汰せらるゝことはまれなりしを、足利殿の世となりては、神社佛寺の事はさらなり、天下の大小事、すべて武家よりはからひ申さるゝことゝなりにければ、叡山にも奉行人をつけられて、何事となく沙汰せしむ、これを山門奉行と稱せり、初のほどは、評定衆の内より、山門の奉行一人を定められ、又奉行人の内より、二人の佐職を補して、叡山の庶務をふさねしむることにて、何れも山門奉行とよばれたりき、花營三代記に見えたる山門右筆は、卽奉行人の內より補せられた

る山門奉行なり、(〇註略)さて後には、許定衆を此奉行になさるゝ事は絶て、奉行人二人にて、山門の事を沙汰するならひとなれり、(ときどき一人にて奉行することもありしごとく見ゆれど、應安の頃二人ありて、永祿中にも亦二人なるを思へば、二人にてうけ給はるが本式なるべし、)織田豐臣家の時より後は、別に山門奉行といへるを置るゝことはなきことゝなれり、

〔花營三代記〕應安三年八月六日、山門奉行佐々木治部少輔、

〔康富記〕寶德三年十一月十三日戊申、近日山門訴訟未落居、管領職號上表兎角延引之間、日吉神輿自夏比有勤座之上、四五日之前、大宮神輿又奉上之、今日必定可有入洛之由、有其聞之間、昨日管領畠山金吾禪門、被成遣奉書於山門、(〇中略)山門尙不申領掌之上者、可被成綸旨之由、自室町殿有御執奏、(〇中略)綸旨幷武家奉書等被成、被宥仰之間、今日入洛延引之由、山門使節最勝坊、於山門奉行飯尾肥前守入道許相語之間、入洛今日延引必定云々、

〔蔭涼軒日錄〕寬正三年六月十一日、天龍寺領江州建部庄內、自山門被懸段錢之事、停止之御奉書被成之事伺之、卽命于山門奉行布施下野守也、　十二月十七日、當寺領江州堀部上坂年貢、依山訴押取之、仍可有御成敗之事、以訴狀被申、可被成御奉書之事、被仰付山門奉行布施下野守、幷飯尾左衞門大夫也、　四年正月十八日、當寺領江州堀部上坂、舊冬依山訴被成御奉書、又可被成還之訴訟、自寺家申之、仍伺之、可被成還之由、可命于山門奉行布施下野守之由、被仰出也、

〔齋藤親基日記〕文正元年十一月廿四日、山門奉行一方被仰付、淸和泉守貞秀、布野州(〇州下恐脫申字)次也、

同日、御出方一方被仰付、飯尾兵衞大夫貞有、布野州(〇州下恐脫申字)次也、

〔御禮拜講之記〕一永祿五年七月十七日、御前に伺公仕候處、禮拜講之儀、爲御祈禱可被執行候、然者御精進代之事は、圓明に可被仰付候、三月之外にも、證例有也、尋可申由被仰下候、(〇中略)亦以山門奉

東寺奉行

行、飯尾加賀守貞廣、松田丹後守藤弘、而被仰出畢、

〔武家目名抄 職名十九ノ二〕按、東寺は、眞言一宗の本寺なれば、公武の事につきて、沙汰すべき事少からざる故に、康暦中、はじめて奉行人の内より、東寺奉行を置れて、當寺の事を預りしらしむ、是より先は、寺奉行たるもの、他の佛事と共にふさね沙汰せしなり、然るに慈照院殿〇足利義政の頃より、又東寺奉行をば廢せられて、もとの如く、寺奉行にてかねて沙汰する事となれり、

〔花營三代記〕永和五年〇康暦元年九月十七日、飯尾左近入道、可爲東寺奉行之由被仰出之、

〔東寺百合文書 九〕應永十一年十月十日 連署除之

一寺家相奉行 飯尾大和入道方會尺事

齋藤上野入道、寺家事諸事無沙汰之間、飯尾大和入道、可爲相奉行之由、寺家依歎申、三寶院、去月十四日内々御伺之處、不可有子細之由被仰出、仍自彼門跡、以奉行飯尾方申付之間、領狀申畢、仍可有會尺、樽一料足三百疋分、年預令隨身可罷向云々、

〔東寺百合文書 五十三〕永享八年六月十五日

一塔婆落懸雷電事、昨日 十四日 未剋、雷落懸塔婆乾角、柱半分裂破、四重五重柱同、就中乾悉損、其外角木以下、大略破損之間、即時寶嚴院僧正、馳向寺家奉行飯尾加賀守宿所、可申入此趣之由被申合處、今日無御機嫌之間、明旦可披露申、先規已下、一紙可被注進之由、加異見之間、建武四年六月十三日、雷同落懸、此柱燒損之間、二階堂三河守、諏訪大進法眼、以此兩使及御撿知、以攝州昆陽寺庄 小屋野邊 爲料所、被替例柱、其外破損處御造修之由注進畢、今日 十五日 披露之處、被下撿使之由御返事畢、

〔東寺百合文書 十四〕應永卅一五月八日 連署除之

一寺家奉行事

此間寺家奉行事、飯尾加賀一人事、多難被付置候、爲左右不能披露候、仍先奉行松田豐前事、如元寺

家奉行可被成、重寺家悦喜可申之由、管領江内々禪爲寺家被談合之處、自管領上聞通伺被申候處、清和衆被成畢、寺家案相違歟、雖然新奉行最初之禮定大法之間、三百疋可隨身之由衆議畢、

禪律長老奉行

〔武家名目抄 職名十九ノ二〕按、○中略足利殿も亦此教〔○禪宗〕を崇敬ありしかば、引付頭人の内より、禪律方の頭人を定め、奉行人より禪律奉行を置きて、住持移轉、及法儀等の事を沙汰せしめたり、たまさかこれを住持奉行ともいひしは、即住職の事を奉行する故なり、一宗の法儀定まりし後は、更に此奉行を置るゝ事を止められ、寺奉行の内にて、五山十刹等の諸寺を分ち預りて、庶事を沙汰することゝなれり、又關東にも、京都の制にならひ、足利氏滿在職の頃より、禪律奉行を定めて、鎌倉五山以下、禪律の庶務を攝せしめたり、されど所見多からざれば、その廢置等の始末は詳に辨じ難し、

〔花營三代記〕應安四年十月十九日、住持奉行右筆中澤掃部大夫入道、　十二月三十日、布施彈正大夫入道、被仰長老奉行畢、

永和四年十二月十二日、禪律長老奉行飯尾美濃守貞行、　可有執沙汰之由、被仰下云々、

〔太平記 三十〕高倉殿京都退去事附殷紂王事

抑是ハ誰ガ依意見、高倉殿ハ加樣ニ兄弟叔父甥ノ間、合戰ヲシナガラ、サスガ無道ヲ誅シテ、世ヲ鎭メナントスル所ヲ計ヒ給フト尋レバ、禪律ノ奉行ニテ被召仕ケル、南家ノ儒者藤原少納言有範ガ、ヨリ〳〵申ケル儀ヲ用ヒ給ケル故トゾ承ル、

禪律方頭人

〔花營三代記〕應安三年九月二日、禪律方頭人事、被仰赤松律師坊、

〔建武以來追加〕一五山十刹以下住持職事應安四正廿二御沙汰、奉行安威入道性威、○中略

一諸山入院叅明召請事應安五二九、布彈入奉行、○中略

禪院法則條々應安五四十五、布彈入奉行、

公文奉行

一兩班事〇中略

一僧員事〇中略

一大覺禪師門徒等惡行事〇中略

一東福寺事應安五八十七、布施入奉行、〇中略

一萬壽寺兩班座位事布施彈入奉行〇中略

一東福寺付門前檢斷事應安五十一廿一、雅樂左近入道道喜奉行、〇中略

一關東五山事應安六十九、布施彈入奉行、

〔花營三代記〕永和三年八月十日、臨川寺可ㇾ爲二五山一之由被ㇾ成二御教書一、依田左近入道奉行東福寺下、九月八日、等持寺可ㇾ爲二十刹第一一之由被ㇾ成二御教書一、依田左近大夫入道奉行、

〔武家名目抄〕職名十九ノ二按、公文といふは、もと官家書牘の通稱なれば、私にてはいはざることなりしを、中頃みだりがはしくなりて、公卿の家々にも、私の所領へ下さる文書をば、公文といふこと丶なりし故に、武家にも其例にならひて、御教書下文奉書のたぐひ、府廳より下さる丶文書をば、なべて公文とよべり、〇中略故に足利殿の頃に至りては、禪院に下せる文書にのみ公文の名は殘りしにや、公帖ともいふ、されば、たま／＼奉行人の内にて、公文奉行をうけ給はることあるは、もと五山十刹の住職、移轉等の時、下さる丶公文を取行ふべき爲に定めらる丶事にて、常には此職を置かれざりしなり、

〔蔭涼軒日錄〕長祿二年閏正月一日、澄顯喝食、等仙喝食、承泰喝食御相伴、中度僧二員、稜嚴頭有二其闕一、是故如二此三員一也、天龍寺度僧享珣喝食、乾隆喝食、宗棨喝食、紹暉喝食、書二立之一、以二上首二員一有二御爪點一、卽御免許矣、〇公文擇二其仁一、於二鹿苑院一命二于寺奉行一、書二立之一、贈二于當寮一、謹白二御判一也、

〔武家名目抄〕職名十九ノ二按、此時は、別に公文奉行は定められず、寺奉行たる人かねたりと見

ゆ、事の輕重に從ひ別に定むる時もあり、又寺奉行の役する事もありしと見ゆ、

〔蔭凉軒日錄〕寬正二年六月十七日、公文奉行之事、以飯尾美濃入道被仰付也、　六年三月二十一日、依飯尾兵衞大夫歎樂、可書上公文之事、以布施下野被仰出也、但伊勢七郞右衞門尉伺之、公文者、先規以宿老被命之由、尋于奉行而披露之、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年七月二十四日、公文可書之奉行之先規、可尋于伊勢守之由被仰出也、　二十五日公文奉行次第之事、以伊勢守被尋下于諸奉行之中、仍飯尾肥前守被仰付樣者、普廣院〇足利義教御代、飯尾肥前入道、幷同加賀守勤之、然則不依上頭、只中老人衆、依其器用歟之由申之、仍披露之、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月二十六日、公文奉行事、以蔭凉軒飯肥之種被仰付之、布野申次也、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年七月二十八日、南禪寺存中和尙、建仁寺光韶西堂、等持寺景文西堂、公文御判被遊也、

〔武家名目抄職名十九ノ三〕按、〇中略足利殿の時どなりては、千秋氏の人、常日の祈禱奉行を世職として、將軍家はもとより、若君御臺所など、息災の祈禱を奉行し、年ごとの祈禱始をもつかさどれり、扨又天下無異のいのり、或は災變など祓はるゝ事は、なべての家司の輩、臨時にうけ給はりしなり、千秋氏の常日の奉行に定まりしは、いづれのころにやさだかならねども、大かたは鹿苑院殿〇足利義滿の時にはじまれるなるべし、

〔年中恆例記正月〕十一日御祈始在之、在富方には、御太刀御馬被下之云々、有春には、千疋御太刀被下之云々、在富有春說也、奉行千秋に御太刀被下之、御祈始之故也、兩所共以御人形を上之也、

〔御產所日記〕一御所樣　義輝ノ時分

天文四年十一月一日戊午

御祈禱奉行　千秋左近大夫將監晴季

殿中總奉行

〔武家名目抄職名十四〕按、伊勢氏、世々殿中總奉行といふ職をうけ給はりしこと、家譜の外に見る所なしといへども、貞繼以來、政所執事を以て家職とし、又幕下代々の御父たるを以て、昵近出頭の家となり、營中の機務あづかりきかざることなかりしかば、私には、殿中總奉行など、稱せしこともありしと見ゆ、故に他書に所見なしといへども、玄ばらく家說によりてこゝに列せり、

〔諸家系圖纂十二伊勢〕貞繼伊勢守、政所、殿中總奉行、御厩別當、從二尊氏公、義滿公迄、大父ト號ス、(中略)法名照禪、―貞信諸職同前、又號二大父一、(中略)法名常眞、
―貞行代々殿中總奉行、諸職同前、(中略)法名常誠、―貞經○註略―貞國諸職同前―貞親諸職同上
―貞宗殿中總奉行―貞陸諸職同上―貞忠諸職同上○下略

御所奉行

〔武家名目抄職名十四〕按、御所奉行は、營中の諸事を攝する司にして、其のよせ輕からず、此職、連綿の職となりしは、二階堂行光に始りしが、○中略足利殿の時、○中略世家の奉行人、此職を奉はれる事也、然るに伊勢氏、政所執事、及將軍家御父の職を世々にするに及びて、營中の大小事、大かた其攝する事となりしかば、此職掌、おのづから彼にうつりて、御所奉行は、表立たる所役にのみ從ひしと見ゆ、鎌倉公方家にも、京都にならひて、佐々木二階堂等の八家を定め、替る〳〵其職を司らしめしなり、

〔貞丈雜記四役名〕一御所奉行は、御所中の總奉行、表向女中方迄の總奉行也、伊勢守代々、政所御所奉行兼帶なり、

〔尊卑分脈四中原〕能秀……滿親官途奉行、神宮頭人、問注所、地方頭人、御所奉行始歟、

〔明翰抄〕御所奉行
秀興松田丹波守　貞秀清和泉守　秀有飯尾美濃守　貞基布施下野守　元連同大和守　遲秀同但馬守　爲信同加賀守　秀數清式部　豐基齋藤上野介　任連飯尾近江守　元定清式部大輔　爲脩同三郞左衞門　貞康松田豐前守　貞通諏訪左近將監　數秀松田對馬守　清房飯尾

彥左衞門　定綱中澤攝部大輔　長秀松田八郎左衞門

〔普廣院殿御元服記〕正長二年三月十五日、任征夷大將軍給、宣下辰刻、　口宣小槻宿禰周枝持參之、周枝、時官長者也、　攝津掃部頭滿親請取令披露、　御所奉行事、昨日被仰付候、

〔武家名目抄職名十四〕按、御門役といへるは、諸門の出入を守り、非常をいましむる番役にて、今の御門番といふに同じ、○中略 さて奉行人の内一人をして、諸家の輩を分配し、此役に從事せしむる事をつかさどらしむ、これ御門役奉行なり、但この奉行の職掌は、自身警備のことにあづかるにはあらず、番衆の配當をふさぬるのみなり、

〔豐記抄〕門役奉行は、右筆方の奉行仕候、

〔蜷川親元日記〕寬正六年十二月二十日癸巳、上樣、○足利義政御產所ヨリ還御、○中略御門役奉行野依修理進、

〔武家名目抄職名十四〕蜷川親孝記云、永正十三年六月十一日、松對州來臨、禁裏御門役畠山殿、當月中來月中之儀、外樣衆へ可被仰出候歟、如何之由伺被申候、御意候旨在之、御所樣東御門役之事、當月中登田、仍來月之事、可爲吉見殿歟之由被申、尤其心得候由御返事有之、以彌阿伺申、松對へ以山内源四郎十二日申遣、出仕之間奏者窪に申置云々、十八日、禁裏御門役之事、仁木次郎殿、丹波可被勤仕申候由、御請被申云々、公方樣東御門、吉見殿勤仕可被申候云々、西御門役、來月より三ヶ月分、能登守護殿勤仕可被申云々、此三ヶ條、執事被申分、則令披露、尤可然之旨御返事在之、九月御門役事、松對より同名以八郎左衞門尉殿、頭人へ伺被申候、御返事條々有之、

〔大館常興日記〕天文九年正月九日、早朝に佐方より、各へ折紙在之、明後日十一より御門役事に、今日御内談、如常可有之由候間、意得存旨申之也、此御門役事、正月十日迄可被勤申旨、舊冬小笠原民部少輔、進士美作守兩人に、以御門役奉行松對被仰付候、仍十一日より誰々に可被仰付候哉之御内談

候歟、十日、早朝に佐方より、被相尋候御門役奉行は、松田對馬守一人候歟、又兩人候哉、然ば今一人は誰候哉之由被申之、仍兩人にてはなく候、松對一人にて候、於愚存は、此分にて候由令返答也、

二月九日、日奉行攝よりり、各へ折紙在之、明後日より御門役事、たれ〳〵に可被仰付哉の事、重而細川攝州へ可被仰候歟、總別和泉守護は、もと〳〵より花御所四足一季三月ヶづゝ被勤申候事にて候と存候、既只今御事かけ候間、今月中被勤申候やうにと、以御門役奉行可被仰歟と存候由申候也、

厩奉行

〔諸家系圖纂十二伊勢〕貞継伊勢守(中略)御厩別當

〔花營三代記〕應安四年十一月廿五日、御厩奉行被仰伊勢入道、奉行人齋藤右衛門入道

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、

一御臺樣同前、天晴風靜、辰剋御立、

一御馬三疋被牽之、二疋置御鞍、加治左京亮御供、御厩方奉行也、

〔東山殿年中行事正月〕二日、御乘馬始、御襖、御沓、一色治部少輔政熙役之、御厩別當次郎四郎、牽御馬從塀重門參入、被馭於緣上、御鐙、政熙勤之、被執御手綱、于後政熙、候塀重門內南方、次郎四郎ハ、同外ニ蹲踞、召畢而次郎四郎執御馬口、則入御、然後與服一領、賜次郎四郎云々、

○按ズルニ、此ニ御厩別當トアレド、伊勢系圖ナル別當トハ同ジカラズ、年中恒例記ニハ、是ヲ厩者トシタリ、

庭奉行

〔年中定例記正月〕十一日、御普請始、御事始、(中略)御庭奉行御太刀進上、

〔大內問答〕一御庭奉行樂屋奉行とて御座候哉の事

殿中には、(中略)御庭奉行とても無之候、見物仕候者などに申付事候へば、庭上に祗候の走衆被申付候、

庭之者

〔在盛卿記〕長祿二年二月二十四日壬午、今日出仕、以千秋刑部立石事御不審、依於御所中一通勘進之、御庭立石事、入根事、不到三尺者、雖為王相方無其憚哉、

二月廿四日　　刑部卿〇賀茂在盛

〇按ズルニ、千秋刑部ハ庭奉行ナリ、

〔東寺百合古文書百十六〕廿一口評定引付寛正四年癸未

六月三日連署略之

一公方御庭奉行千秋禮節事披露之處、既其儀御治定之處、時々年預依失念、已下無其沙汰、仍二百匹令隨身可有御禮云々、

右條々衆議治定畢

〔蔭涼軒日錄〕寛正四年六月十八日、高倉御所北方築地、土用以前可營之由、千秋刑部少輔、并結城勘解由左衛門尉奉之、

〔年中恒例記正月〕十一日、御普請始、次御作事奉行在之、〇中略御庭者も參也、

〔公方樣正月御事之記〕正月十一日、御作事始有之、樣體は、御大工以下、何も祗候仕始申也、

一從畠山尾張守、被管人六人罷出候て、兩人づゝもつこに砂を入候て持、御殿の正面に置之、すなを御庭に置候事、六人して九度也、〇中略さて御庭の者五六人罷出候て、なふりをもち候て、其にてすなをひろげ、其上をはうきにてよくはきて、さてざいもくれうの物をかざりて、まがり出して、木のこぐちに金をたて、木のふりをみて、すみを常の如くあて候て、まがりのき候へば、御大工罷出、てうのを持、いかにもよくはい仕候て、さててうのにて三々九木を作、儀式を仕候、

〔大内問答〕一御能の時、かゞりをばいかやうの者に申付候哉の事、

殿中にても、又私々にても、庭の者に申付候へば、篝火の臺以下用意候て、燒申候、

御所造作總奉行

〔伊勢貞助雜記〕一御小者或御庭者以下御肩衣被ㇾ下事、何とも沙汰不ㇾ承候、總別御かた衣の事、誠以ちかき御事にて候間、先規之御例はあるまじく候、

〔武家名目抄職名二十上〕按、〇中略足利殿に至りては、尋常の作事には、番衆の內より作事奉行、普請奉行を定めて、事に從はしめ、御所造作の時に至りては、三管領四職の內より、ことに總奉行を命せらるゝならひとなりし故に、山名畠山の輩、奉行せしなり、但恒例の御事始には、代々畠山家にかぎりて、總奉行をうけ給はる定なりしが、應仁已後は、恒例臨時にかぎらず、畠山氏のみ總奉行を命せらるゝことゝなれり、

〔在盛卿記〕永享三年八月二十二日、今日室町殿新造御所木作始也、奉行山名金吾、畠山匠作、此外奉公人々、

　二番結城勘解由左衞門尉、伊勢次郎左衞門尉、三番長駿河守、杉原伊賀入道、四番金山備中入道、山本下總入道、奉公方總奉行桃井入道殿也、

長祿二年十一月廿七日辛亥、今日花御所御造作事、被ㇾ仰ㇾ出管領細川殿侍所京極衆等、普請始也、〇中略上御所御造作總奉行事、山名金吾入道、畠山匠作入道兩人、任永享三年之例、被ㇾ仰ㇾ付之、十二月五日乙未、今日辰初刻、上御所御作事御事始也、爲御見物、御所樣義政〇足利渡御、〇中略御相伴衆、管領細川、畠山、山名、于ㇾ時總奉行畠山匠作、于ㇾ時總奉行一色、細川讚岐守、京極等皆參列、西之方蹲居御作事方奉行人、結城入道淨孝、同子政藤、〇中略各南之方伺公、〇中略御事始畢、還御、如ㇾ本渡於御會所、公武被ㇾ進御劒、

文明十一年二月十三日庚子、辰時普請始、幷築地始、以南北一簀立南界樣二三杵、被ㇾ仰ㇾ奉行結城下野、杉原布施來、謁總奉行管領畠山之前、披露事由畢、

〔公方樣正月御事始之記〕一永正十五年七月五日、下京三條御所御普請始、御事始、〇中略

一御事始、未刻同日總奉行畠山修理大夫、同小奉行伊勢右京亮、宮下野守、結城七郎、〇中略

一總奉行以下、幷伊勢守貞陸、著坐敷皮也、此以後御太刀各進上之次第、右京大夫、畠山修理大夫、大

作事奉行

内左京大夫以下如常、總番奉行以下、御普請始、御事始之御禮、御太刀二振進上、面々には持太刀也、總番以下は金なり、同朋は各相注候て御禮申なり、

一總之御太刀、以前に畠山修理大夫初而、先役人一番に御太刀進上候也、

〔庭訓往來〕次御館造作之事、不可有各別之作事、奉行人早四方構大堀、其内可用意築地、

〔豐記抄〕一作事奉行普請奉行は、公方樣にては、奉公人御沙汰候、門役奉行は、右筆方の奉行仕候、作事奉行にも、自然材木等に付て、奉書などなさるゝ儀候間、右筆方も被加候、但作事奉行普請奉行と計御尋候、

〔大内問答〕一御庭奉行樂屋奉行とて御座候哉の事

殿中には樂屋奉行とて、急度相定事は無之候、樂屋を被申付事は、御作事奉行の役に而候、

〔年中恒例記（正月）〕十一日、御普請始、次御作事始在之、御作事奉行、（○中略）庭上に伺候、（○中略）ことすみて後、御作事奉行、並御作事方右筆衆、御太刀（金）進上之、千疋御下行在之、御大工請取之、

九月晦日、御ゆるり被明候事、御作事奉行祗候候て、被申付之候、

〔伊勢貞助雜記〕一殿中御火爐は、九月晦日に開爐候て、三月晦日にふさぎ申也、御作事方奉行申付之、

〔建内記〕正長元年十月十七日丙申、造太政官廳日時定也、　十九日、左大史小槻周枝宿禰入來、（○中略）日時勘文案持來之、予（○藤原時房）依傳奏爲存知持來歟、神妙、宣旨可成作所奉行許也、結城（實名不知也）治定歟、然者可送遣云々、答云、奉（武家）行清和泉守秀定、未伺申云々、明日可伺歟、其以後可示治定者、明日可來云々、　同（○十）二十日時勘文案入見參、同被召置之、立柱上棟、來十二月二十六日之由申了、兼不知周備、然而先被勘此日了、作所奉行、可爲結城十郎之由、今日被仰、武家奉行清和泉守云々、然者可送宣旨於彼許之由申了、

二十三日壬寅、太政官廳木作始也、去年八月回祿之後、被企新造者也、（中略）作所奉行、結城十郎持藤也、爲左馬頭殿御沙汰被仰付之、（武家）奉行清和泉守秀定也、今日官務周枝宿禰、帶指圖向宮司、渡結城十郎、委仰含云々、番匠賜御馬、（自武家被引進之）

〔在盛卿記〕永享三年八月二十二日、今日室町殿新造御所木作始也、奉行山名金吾畠山匠作、此外奉公人々、

二番、（結城勘解由左衛門尉、伊勢次郎左衛門尉、）三番、（長駿河守、杉原伊賀入道、）四番、（金山備中入道、山本下總入道、）五番、（三上近江入道、宮下野守、堺和右京亮、○五番以下據一本補）

〔武家名目抄〕（職名二十上）按、山名畠山は、御所造作總奉行なり、奉公人々とは、番衆の事をいふ、この輩の內、結城は、世々作事奉行をうけ給はる家なり、其外の輩は、普請奉行、庭奉行などいふ役をもかねうけ給はるものなれば、共に土木のことにあづかることなり、但此衆をなべて作事奉行ともいひしなり、

〔在盛卿記〕長祿二年十一月三十日、參花御所、於七間御厩御作事奉行等面々參會、御屋地之內、住吉小社遷座、日次一通勘進之、結城入道渡之、　十二月五日乙未、今日辰初刻、上御所御作事御事始也、爲御見物、御所樣（○足利義政）渡御、（中略）御相伴之衆、管領（細川）畠山、山名、（于時總奉行）畠山匠作、（于時總奉行）一色、細川讃岐守、京極等皆參列、西之方蹲居、御作事方奉行人、結城入道淨孝、同子政藤、（○以下十人姓名略之）各南之方伺公、（中略）御事始畢還御、如本渡於御會所、公武被進御獻、（中略）巳時許御木屋立柱也、（中略）作事方奉行人、家君、予、有季、總奉行山名入道宗峯、畠山左衛門佐（入道代之）各重參上御所、午時計總奉行歸宅、作事奉行衆、并家君、予等皆參賀　八日壬戌、今朝結城勘解由左衛門、飯尾下總、同加賀守、爲御材木下向江州、　二十三日、參御所、以結城勘解由左衛門、御方違御吉方等注進物進覽之、

〔御產所日記〕天文四年十一月十七日甲戌、御產所御事始、御作事奉行結城左衛門尉、

作事方右筆

〔大館常興日記〕天文九年正月五日、日行事佐方より〈○中略〉重而又折紙在之、作事奉行詰左方より十一日御事始料事、以書状被申之、十一年閏三月二十六日、公方様本御所御普請に、私よりは中間三人孫兵衛又五郎新五郎三人進上申也、御庭へ石をひかれて、木をうゑさせられ候也云々、御作事奉行は結城殿、杉原殿兩人、祐阿也云々、

〔御禮拜講之記〕一永祿五年九月二十七日、今日より御精進たるべき由、樹下申シメヤシメ二色持參、仍常の御所にも二重引、則制札の如く板をこしらへ、此條數を書立持參、裏表御門に杉原兵庫助晴盛〈御作事奉行也〉承て、御大工等申付てうたせられ候、其上にまたしめやしめを引、

〔豐記抄〕一作事奉行、普請奉行は、公方樣にては、奉公人御沙汰候、門役奉行は、右筆方之奉行仕候、作事奉行にも、自然材木等ニ付て、奉書などなさるゝ儀候間、右筆方も被加候、但作事奉行、普請奉行と計御尋候、

〔年中恒例記〈正月〉〕十一日、御普請始、次御作事始在之、御作事奉行、御普請奉行、御作事右筆、庭上に伺候、〈○中略〉ことすみて、後、御作事奉行並御作事方右筆衆、御太刀〈金〉進上之、〈○又見公方様正月事始之記〉

材木奉行

〔在盛卿記〕長祿二年十二月五日乙未、今日辰初刻、上御所御作事御事始也、〈○中略〉巳時計、御木屋立柱也、於七間御厩南垣外二丈餘立之、〈○中略〉於行日於七間御厩注進之、御材木杣取奉行人諸國下向之日次也、八日壬戌、今朝結城勘解由左衛門、飯尾下總、同加賀守、爲御材木下向江州、三年七月二十一日、慶雲院、以五鼓鳴白案內、卽御成、〈○中略〉於御所間伺、建仁寺山門閣材木、圓柱十六本、冠木四支、以前以飯尾左衛門大夫自寺家伺之、御免許之由、以狀被白之、雖然飯尾肥前守、致公方御材木之奉行、故於肥前守此分可命之由、被仰出也、

普請奉行

〔豐記抄〕普請奉行は、公方樣にては奉公人御沙汰候、

〔年中恒例記〈正月〉〕十一日、御普請始、次御作事始在之、〈○中略〉御普請奉行〈○中略〉庭上に伺候、

普請衆

〔蔭凉軒日錄〕寛正四年六月十八日、高倉御所北方築地、土用以前可築之由、千秋刑部少輔、並結城勘解由左衛門尉奉之、召赤松次郎法師雜掌命之、以後愚老亦嚴可命之由、兩人奉行、召僧命之、蓋上意也、　二十日、高倉御所御築地之事、依被仰付于愚老、以奴僕十員助次郎法師普請之微力也、

〔蜷川親元日記〕寛正六年二月二十九日丁未、蜷川周防守參、花御覽御連歌ニ可參勤之由被仰出之、雖然仙洞御庭普請奉行事、千秋刑部少輔依不例、只一人也、可有如何哉之由得御意、御返事、不及子細、御連歌可被參、於其時宜、内々可被入御耳之由也、　五月二日戊申、秋庭所江御使事、親元奉被遣宗茂、○中略秋庭、仙洞爲御普請奉行罷出、仍河井申置云々、

〔蜷川親元日記〕文明十年三月二十九日辛卯、上御所御庭普請、貴殿より三十人被進候、奉行代三上與三左、番方、普請衆、依爲無數儀如此、　三十日壬辰、上御所普請奉行蜷彥右衛門、三上、　四月朔日癸巳、御普請、依夜前雨無之、　二日甲午、御普請奉行堤三郎兵衛尉、　三日乙未、御普請奉行蜷中務、野依若狹守、　四日丙申、普請奉行蜷掃部松平、○下略

〔殿中申次記〕正月十一日、永正十三御普請始、御事始在之、○中略

永正十三御太刀一腰持就御普請始御禮　畠山次郎殿

同御太刀一腰持御禮同前　杉原伊賀守○中略

右其外之役者、永正十三年同前、但杉原伊賀守、御普請奉行候間、御禮次第爲分別寫書之、

〔公方樣正月御事始之記〕一永正十五年七月五日、下京三條御所御普請始、御事始、

一御普請始、辰刻細川右京大夫高國勤之、被管人兩藥師寺罷出也、

一右筆方松田丹後守○中略御普請奉行金山三郎

〔年中恒例記正月〕十一日、御普請始、次御作事始在之、○中略御普請衆は、畠山殿より參也、

〔公方樣正月御事始之記〕一正月十一日、御作事始有之、樣體は、御大工以下、何も祗候仕始申也、

御祝奉行

一従畠山尾張守、被管人六人罷出候て、兩人づゝこつこに砂を入候て持、御殿の正面置之、すなを御庭に置候事、六人して九度也、仍支度之事、小袖の上に白きかたびらを著仕、かちんにそめたるはかまばかりにて、はかまの前を如常取りてかい候、返しもゝだちなど取候事はなく候也、

〔蜷川親元日記〕文明十年三月二十九日辛卯、上御所御。庭。砂。請者、貴殿より三十人被遣候、

〔武家名目抄職名十八〕按、御祝奉行といへるは、鎌倉殿の時に聞ゆる事なければ、足利殿の世に起れる名と見えたり、思ふに、親王將軍家にて、御厨子所別當といへるが、大かた此職掌にあたれりと見ゆれど、彼は常日の御膳をも奉行し、是は規式だてヽる時の職事なれば、少しく其たがひあり、凡此奉行は、將軍宣下、任大臣大饗、拜賀、其外恒例臨時の祝儀の式行はるゝ時に、饗方の事は、すべてうけ給はり沙汰するつかさなり、寶篋院殿〇足利義詮の頃より、普廣院殿〇足利義教の世迄は奉行人の内、松田氏の人、此職をふさねたりしが、東山殿〇足利義政より後は、定れる家もなく、飯尾布施諏訪等の輩も、うけ給はる事とはなりしなり、

〔松田貞秀記〕永和元年四月廿五日、御參內始、〇中略奉行　貞秀　門眞少外記周淸、〇中略

一自御誕生之日至于今、每度御祝貞秀奉行、可謂御佳例歟、大將御拜賀、行幸御供奉、大臣大饗以下、每度于今奉行之、記錄、公方諸家在之、不及注之、

〔松田長秀記〕永享四年六月廿四日、御著陣、兼宣旨等、御參內、　七月二十五日、大饗被行之、奉行飯尾肥前守爲種、著狩衣、　松田美作守秀藤、著狩衣、饗方。〇。奉行。〇御佳例、　十二年七月二十五日、大將御拜賀云々、自政所式三獻幷餅等進上之、御祝大草調進之、奉行伊勢守貞行、于時政所美作守兼秀、

〔武家名目抄職名十八〕按、饗方奉行は卽御祝奉行なり、又貞行は政所方の奉行、兼秀は御祝の奉行なり、

〔齋藤親基日記〕寛正六年十二月三十日、飯左大之種、一方内談衆御免、仍御祝方椀飯方、一方上表、則御祝方被仰付、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、二十三日、未剋御下向、直御精進屋、(御風呂供御)一御所還御、(○足利義政)於御寢殿御祝在之、六本立等大草勤之、(○中略)御祝奉行飯兵大貞有、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年三月廿三日、今日御參宮、(○中略)還御御祝、卽於御所有祝儀也、(○飯尾兵衞大夫、御祝儀方奉行之、)

〔蜷川親元日記〕文明十五年七月十一日壬寅、御生御玉御祝、大草調進分、御祝奉行松田豐前守方より被相觸之、

〔延德二年將軍宣下記〕延德二年六月十四日乙未、御祝奉行飯尾大藏大夫兼連出仕、依去七日祖母他界有其憚、雖令籠居、爲別家之上者、七日過以後、出仕不可苦之旨、依吉田二位兼倶申之、今日出仕云々、　七月五日丙辰、御判始、(○足利義稙)宣下、事終之後被執行之、(○中略)

御祝奉行飯尾大藏大夫兼連、(後號元行)淺黃大帷、

〔武家名目抄〕(職名十八)按御祝方といふは、柳營にて年中恒例の祝儀、もしくは臨時の大禮、其餘何事にもあれ、祝儀の規式行はるゝ時、將軍家の御前に供する盃酒、椀飯、また相伴衆、其外の役人にも給はるべき、酒肴等を調進する司なり、但鎌倉殿の時には、いかなる者の職掌なりしにや、たしかなる證見えず、足利殿の世に至りては、大草氏の人、代々此事をうけ給はることなり、此家は、等持院殿(○足利尊氏)より以來、譜代のすぢにて、然も庖丁の一流を相傳する家なれば成べし、(○中略)此外に行松氏の人、大草にさしつぎて、臨時恒例ともに、祝儀の盃酒など調進する事あり、去ながら大草氏、そのすぢの統領なるゆゑに、行松のつかさどる所は少かりしなるべし、

〔宗五大草紙〕(下)殿中さま〴〵の事

一正月五ヶ日、(○元日、二日、三日、七日、十五日)公方樣御臺樣へ御こは供御參入の時分にて候、それを取次申候や

う、先大草調進申候、大口ひたゝれにて候、次の御するゑのさいのきはまで、彼親類持參候、それを中の御するゑのさいのうちから、大草取次申候を、同名衆請取候、

○按ズルニ、大草ハ、代々祝方ヲツトムル家ナリ、

〔年中恒例記正月〕一日、御歯固事、當月中、以吉日を行之、仍日不定、此次第の事、先御出座以前、伊勢守口付御祝を、御座敷にすへならべ申す、○中略御祝は大草調進之、御倉よりの御下行、大草と伊勢守と、間の御手永諏訪也、此御祝、三ケ日の內にてあれば、まつすいに御對面ありて、御祝まいる也、○中略

年中御さはの供御、昔は毎日參四膳參也、御生飯をとられて、則あがり申也、大草調進之、大草かゝへ申、御祝御料所數多在之し時は、如此毎日參也、近年は、若州青江ばかり知行の間、毎月朔日より外不參しなり、大草入道說也、

七日、御みそうつ、御土器に入て參、大草調進之、但御こわ供御御參候はねば、御みそうつも不參候、大草入道說、

六月朔日、今日氷堅餅參、大草調進之、

七月十三日、今日海松二合、小膳二十連、大草調進上之、

十五日、新米の飯はすの葉にて包て參、大草調進之、

八月朔日、尾花の御かゆ參、大草調進之、

十五日、明月御祝參、於內儀也、茄きこしめさるゝ、枝大豆、柿、栗、瓜、茄、美女調進之、御いもゝ、御かゆ、茄、大草調進之、

十二月二十七日、御すゝはき在之、於內儀、御祝參也、○中略御すゝはきの御餅、大草調進之、

晦日、節分にむぎの食、御いもゝ、大草調進之、

〔普廣院殿御元服記〕一正長二年三月九日乙卯、亥刻御元服、〇中略於御發所御祝儀有之、則獻御飯、六本立、幷贊殿御膳物、御折敷、龜甲等、行松調進之、加冠未及着座、次加冠、尾州着座、被聞食三獻、大草調進之、〇又見松田長秀記、

〇按ズルニ、行松氏モ、亦代々祝方ノ職ヲ奉ズル家ナリ、

〔松田長秀記〕永享四年六月二十四日、御着陣、兼宣旨等、御參內、于時攝政殿今夕御參、先以於御會所內々有御一獻、還御以後御祝著座、公卿少々、〇中略其後內々御祝在之、行松調進之、手長伊勢名字未、

〔御產所日記〕普廣院殿樣、〇義教御時之事

若君樣、〇義勝御誕生、永享六年甲寅二月九日寅刻、〇中略

一初夜御祝、政所沙汰、御引出物沼田調進、自公方下行、有五百疋、大草方江遣之、〇中略

一十一日、午剋御湯始、御祝政所沙汰、五百疋、大草方下行之、〇中略

一參夜御祝、政所役雜掌料千疋、遣大草方、〇中略

一十三日、五夜御祝、管領右京大夫持之參勤、白直垂也、〇中略雜掌料千三百疋、自管領大草方へ被遣之、〇中略

一二十七日、酉時又七夜御祝、山名右衞門督入道常照、道服ニテ參勤、〇中略雜掌料千三百疋、被遣大草方江、

一御著衣御祝雜掌料千二百疋、被遣大草方、〇中略

一御祝之時、役人三人、白直垂、同二階堂奉行、大草同、〇中略

一初夜御祝時、公方トシテ、御練貫一重宛、役人七人是給也、大草マデ七人也、此小袖ハ、政所方ヨリ出ナリ、

〔慈照院殿御髮置次第〕若君樣御祝次第

永享八年十一月廿五日、午時、於管領在之、于時細川右京大夫持之、先御クシ置、次ニ御ハシ直、次ニ御袴著、〇中略

一於管領御祝次第、寢殿ニテ此儀在之、〈○中略〉此御祝、三度ナガラ行松調進、

〈康富記〉康正元年八月二十七日庚午、任大臣節會、幷小除目被行之、室町殿、〈義政、從一位、權大納言、征夷大將軍、御年廿一、〉令兼右大將給、〈○中略〉先任大將御祝儀在之、〈任御所、〉公方樣有御出座、〈御直衣、〉管領右京大夫勝元朝臣〈細川、直垂、〉參著、御一獻方先被仰付、幸松分供進、次大草沙汰進分供之、御陪膳藏人左少辨益光、管領前役送、伊勢黨三人、

〈齋藤親基日記〉文正元年三月十七日、御參宮、　二十三日、未刻御下向、〈○中略〉

一御所還御、於御寢殿御祝在之、六本立等、大草勤之、

四月十日、未刻若君御色直、御食初、〈同時〉

一伊勢守許御成、御臺樣同前、

一御祝六本立　行松勤之

一供御幷御肴八獻　大草公延勤之

〈延德二年將軍宣下記〉延德二年七月十三日甲子、宣下、〈○足利義稙〉御要脚三万匹內下行事、〈○中略〉

一三拾貫文、御一獻方、〈大草伊賀守公友、○中略〉

一二拾貫文、御一獻料、行松代、〈宣下之、但雖令用意、無御用也、〉

〈御產所日記〉一御所樣　御誕生ノ時分

天文四年十一月一日〈戊午〉

御祝方　　　　大草三郞光友〈○中略〉

十七日甲戌、御身固在之、有春朝臣參勤御加持、御身固之後、頓而左京大夫殿御局渡之、其後任御祝三ツ御盃、先有春拜領、次大草三郞光友被下、次松田丹後守晴秀被下、別有春朝臣、御盃拜領、雖無先例、依所望被下之、御祝式三獻御二御所參、大草調進之、〈○中略〉

天文五年二月二十一日、御臺樣御產所江御成、尤珍重云々、役者悉伺候、各烏帽子著上下以下今日伺候衆〇中略大草三郎、

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歲十二月十九日壬刁日、於坂本樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣後改義輝、被遂御元服之次第、〇中略

一御祝調進、大隅民部丞秀宗、松行氏

一同大草三郎左衛門尉公廣〇下略

供御方

〔武家名目抄職名十八〕按、供御は、もと天子の御膳物の稱なるが、いつとなく武家にもうつりければ、足利殿の時にいたりては、將軍家のきこしめさるゝ御膳をば、必供御ととなふること、常のならひとなれり、されば御膳物を調ふる一局をば、供御所といひ、其事にあづかる輩をば、供御方とよばれしなり、大かた世職にて、御末衆の內、進士太田などいふ輩、世々其事をうけ給はりしなり、中にも進士は、料理の道につきて、一流の家なれば、殊更にかしら立てゝ、庖厨のことをつかさどりしと見ゆ、〇中略供御方は、常日の供御を調備する職なれど、恒例の祝儀には、進士の預る式もまま有なり、

〔年中定例記〕一御祝はてゝ、朝供御參候、今一は伊勢守方よりまいり候、被官人蜷川丹後守、同名新右衛門尉、兩人おこの方へ申付候て、進上申候、赤金にてうちたる鉢に入候て、日に三鉢づゝ、兩御所樣へ參候、若君樣御座候へば、それも同前に參候、〇中略御志る御まいりをば、供御方仕候、先調て、丸桶とて口一尺四五寸計なる鉢を、赤漆にぬりたるに、あさぎのすゞしの絹にて、はりたるふたをして持て參て、御かけばんにならべ申候、常は御懸盤にて參候、御臺樣も同前に仕候、御精進の時は、あしの付たる折敷にてきこしめし候、御はんにて候、いづれも外をせい志つにぬり、內をば光明朱にてぬられたるにて候、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、○中略

一供御方、進士隱岐入道、息九郎、太田孫左衛門尉、疋田孫左衛門尉、此兩人別路也、○中略

一供御方疋田三郎左衛門尉、借宿五郎別路、

供御衆、并遁世等御訪卅貫文宛、納錢方下行也、

〔常德院殿御髮置次第〕應仁元年丁亥十一月二十八日庚寅、若君樣○足利義尚御祝次第、先御髮置、未時御著直、中時御着袴、同時○中略常御所於御琴間有之、○中略今夜より候御式にまいる、供御方事、小林新左衛門尉に被仰付候、仍御太刀金兩御所さまへ進上之、一重被下之、

〔蜷川親元日記〕文明十二年十二月廿三日、松田對州、中澤掃部大夫方被參申、御方御所さま、○足利義尚來正月供御方同御祝事、進士九郎左衛門尉に可申付候由、御乳人爲御承被仰出候、則申付候處、少知行分不入手候間、難調進仕候由申候、御返事可有御披露候、

〔室町殿上醍醐御登山日記〕永正十五年七月十七日、辰半剋御成、○中略還御午半剋、○中略今夜御一獻方爲門跡御用意、悉皆宗珍奉行歟、御末者雖不被仰付、時宜爲見計下津野與次郎祗候、還御之後、被召門主御前、被下御酒了、

〔武家名目抄職名十八〕按下津野は、御末衆の內にて、供御方をつとむるものなり、

〔澤巽阿彌覺書〕一節分方事

一御式三獻料之事百匹、近年は中島に申付也、

一供御料事三百匹、太田孫右衛門尉方へ下行也、

一雁　一、同太田かたへ遣之、

一鹽引　一尺、同太田かたへ遣之、

一鯛　一桶少、同太田かたへ遣之、但到來次第也

御出奉行

一ふりこ　一梱、同太田かたへ遣之、〇中略

一殿中御打大豆事、於供御所調進、御下行代二十匹にて、下笠次郎左衛門尉に下行之、注文等任之、供御之御すべり御拜領也、

大永元年十二月十三日　巽阿判有之

〔大館常興日記〕天文九年二月二日、攝州日行事より、各へ折紙あり、納錢方七百疋、地下取沙汰仕候內、白川方へ諸下行にて、三貫文餘相殘申を、三百疋御弟若公樣供御方へ白川方可被相渡候哉由、宮內卿殿各御內談候云々、仍尤御事かけ候はぬやうに御調可然存候由申之也、　八日、御弟若公樣供御方御事、先度宮內卿殿各へ承候、納錢方之內にて、可有御下行之事、上意には、太不可然被思食之由、堅固に被仰之由、宮內卿殿承候、其分可有存知旨承也、尤令存知之由申之也、

〔年中恒例記正月〕十日、御出奉行とて、右筆方の內兩人、御さきへ伺候仕て、庭上に敷皮をしき著座仕也、〇中略　禁裏樣、御庭上著座次第、先長橋殿の御ゑんのきはに御劒の役、已下御供衆伺候、〇中略　次御出奉行也、

〔走衆故實〕一正月十日、御參內、還御候て、御供衆走衆御出奉行兩人、御太刀參候也、御二ヶ所參、

〔供立之日記〕一公方樣御參內の事、先御成候、先へ御出奉行とて、奉行衆兩人乘馬にて參る、〇下略

〔諸大名衆御成被申入記〕御成剋限は、每度未剋也、自然として、從其時早々渡御之儀有之事は、別段の子細可成、凡定趣は未剋也、如此定上にても、勢州、又は御出奉行方より、兼日に今の剋限を亭主へ案內被申也、是は故實云々、

〔松田長秀記〕永享四年七月二十五日、今日大饗被行之、大饗以前御參內、扈從公卿、殿上人、諸役人名參候、御隨身番頭、其外職掌等注文、御出奉行飯尾肥前

守爲種、飯尾左衛門大夫貞元等、可記錄之間、不及注之、

〔康富記〕寶德二年七月五日丁未、是日室町殿著直衣、御參內也、御拜賀、大納言〇中略御出奉行布施民部大夫貞基、飯尾左衛門大夫爲數兩人也、

〔蔭凉軒日錄〕寬正四年九月二十九日、來十月五日、西芳寺御成、梅津渡御船之事、可命當國守護之事、命布施下野守也、以彼御出奉行之謂也、　五年九月晦日、奉報金剛院御成之事也、〇中略於御棧敷諷經御聽聞、〇中略諸大名被參侍也、御出奉行布施下野守、飯尾左衛門大夫參侍也、

〔蜷川親元日記〕寬正六年三月朔日戊申、出仕如常、自殿中貴殿注奉之、花頂、并大原野花遲遲之樣、可被御覽之、兩所之花枝、亦可執進之由、布施下野守御出奉行可申之旨奉之、卽以使者山本申進之、頓而召寄、可進上之由返事在之、此一左右晚令催促之處、花頂枝最盛也、四日、彌御治定、大原野之枝ハ三分一開了、來七八日可爲盛哉、貴殿江仍可被御覽之由、上意之旨、自布施方返辨之通、卽披露申也、

〔齋藤親基日記〕寬正六年八月十五日、酉剋神幸之間、自善法寺御參向、〇中略　御出奉行　布野州貞基

〔蔭凉軒日錄〕文正元年二月三日、來十日初午、東福寺方丈懺法御成、緇白紛冗、仍職警固之事、自寺家申之、仍與伊勢守先評之、尤可然之由有之、以此趣伺之、又語于伊勢守、卽召御出奉行布施下野守雜掌、可命于當職及所司代多賀豐後守之由命之、　六日、來十日東福寺初午懺法御成之事、以警固命于當職、并所司代之事、布施下野守告之、但布施者御出奉行、又東福寺寺奉行也、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、〇中略
御出奉行
一布施下野守貞基　飯尾肥前守之種、十六日進發、

十一月二十四日、御出方一方被仰付、飯尾兵衛大夫貞有、布野州〇州下恐脫申字、次也、

〔親俊日記〕天文七年、正月十日乙酉、御參內、巳剋御供、大館左衛門佐殿、細川三郎四郎殿、初而御供被

加召云々、御同朋歳阿、是も初也、御出奉行松田丹後守、諏訪神左衛門、御物春阿貞孝、若公様〇足利義輝預被申、仍無御供也、　八年正月十二日辛巳、御參内、午刻　御供細川右馬頭殿、朽木殿、貞孝、御出奉行諏訪信州、松田丹州、

〔長享年後畿内兵亂記〕永祿五壬戌年六月二十二日、自八幡公方樣〇足利義輝御入洛、〇中略　御出奉行松田主計助

御物奉行

〔武家名目抄職名十七〕按、御物中持奉行は、古くは中持奉行とよび、後には御物奉行といへるぞ、大かたのならひにはありける、凡御物とよべるは、將軍家服御の物をすべいふ言葉にて、衣冠の類より、刀劔等までにかゝれる名なり、〇中略　此奉行をうけ給はる者は、幕下御出行の時、御物を納めし唐櫃をあづかりて、事を辨ずべき職掌なり、〇中略　足利殿の世にいたりてぞ、御物長持奉行とも、又さしはなちて、御物奉行とのみいふ事もいできにける、すべて御物の類は、政所方にて辨備することなりければ、政所執事、伊勢守の被管たる輩、必この奉行をうけ給はる例となれり、因て常に被管の内、二人づゝを結番し置て、幕下御出行の日にあたれるものをして、其職に充たがはしむる定なり、

〔蜷川親元日記〕寛正六年正月二日庚戌、御成始、〇中略　御物奉行蜷川彦右衛門尉、當番蜷川又三郎、是先番之時不參之間參勤、親元雖爲當番殘候畢、　三月四日辛亥、花御覽、〇中略　於花頂先御一獻、御連歌始、〇中略　御連歌以後御一獻、還御、〇中略　直ニ若王寺江御成也、御輿　御物(中略)奉行蜷川民部、同新右衛門、　御長持一也、常御直垂、御大口、御腰物、大打付　六日癸丑、花御覽、大原野出御、卯刻〇中略　上樣御坊、圓坊　一獻、山名殿申ニ御沙汰、御連歌以後還御夜半、御物長持一ッ奉行、中西六郎左衛門尉、倉内民部少輔、　九月二十一日丙寅、南都御下向、〇中略　御物奉行貞親、親元、御物六合在之、　十一月三日丁未、上樣御產所江御宿初御出、〇中略　御物奉行兩人、蜷川又三郎、蜷川孫三郎、但代人、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、○中略
一御物奉行政所被官人　左蜷川出雲守右蜷川新左衛門尉親元、并政所公人等、
御輿、并上中下﨟御輿等、以上十六町、○中略
一御物左蜷川式部丞右蜷川孫三郎　政所役

〔蜷川親元日記〕文明十三年六月十五日戊午、御方御所樣、上樣、葛川へ御成、○中略貴殿御參、御物奉行、御物、上樣御分二荷、御方御所一荷、蜷河中務丞、野依若狹守、

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歲十二月十九日壬刁日、於坂本樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣、後義輝、被ㇾ遂ニ御元服之次第、

役者之定○中略

一御物奉行勢州被官蜷川新右衛門親俊、三上與次郎季長、○中略

御成次第十八日

十二月十八日辛丑、公方家、○義晴并若君、○義輝從ニ東山慈照寺ニ到ニ坂本ニ御成、于ㇾ時巳剋也、○中略御先一番、御物奉行蜷河親俊、三上秀長、各馬上弓持、叡負、并張替令ㇾ爲ㇾ持畢、行列嚴重云々、

〔武家名目抄職名十七〕按、同朋の役として勤仕する、御物奉行といへる職は、將軍家參內せらるゝ時に、御物のたぐひを納めし長櫃にそひて、行列の第一につらなり、さて內裏に至れば、直廬にさぶらひて、むねと裝束の事に從事せる所役なり、因て或は御直廬役とも稱せり、又參內のをりならずとも、威儀を正して、出行せらるゝ時には、此役を定めしこともありしなるべし、

〔供立之日記〕一公方樣御參內の事、先御成候さきへ、御出奉行とて、奉行衆兩人乘馬にて參、其次に御物奉行とて、同朋一人乘馬にて、御物は長からびつ也、其次に御成有、

〔年中恒例記正月〕十日、御參內次第事、○中略御直廬の役と號て、同朋一人、長橋殿に伺候仕て、御裝束

以下取あつかひ申也、長橋殿、赤きへりの掛席の外にて三獻在之云々、

○按ズルニ、直廬役トアルモノ、卽チ御物奉行也、

〔親俊日記〕天文七年正月十日乙酉、御參內、巳刻御供大館左衛門佐殿、細川三郞四郞殿、初而御供被加召云々、〇中略御出奉行、松田丹後守、諏訪神左衛門、御物春阿、

〔大館常興日記〕天文九年三月八日、御參內在之、〇中略御物奉行歲阿、御さきへ參也、御出奉行諏訪信濃守、松田丹後守、これ又御さき御物よりはあと也、

〔蜷川家記後鑑三百三十所引〕永祿三年二月六日、御參內御供次第、〇中略御出奉行松田丹後守、松田主計允、御物同朋萬阿、

〔走衆故實〕一永祿三二月六日壬寅、午刻御參內有之、一番御物、ゆたむ、赤段子に桐の丸を縫、二人して舁、公人の正男子上下にて候也、次御直廬、同朋萬阿彌馬上すわう白袴、

〔蜷川親元日記〕寬正六年十二月二十日癸巳、上樣、御產所ヨリ還御、〇中略進物奉行　蜷川又三郞

〔飯尾宅御成記〕寬正七年二月廿五日、未刻於飯尾肥前守之種宅御成、〇中略

一二十七日、內業御禮參、　一當日色々奉行　進物方神山掃部助、飯尾彌六、

〔伊勢守貞忠亭御成記〕大永三年八月五日、未刻伊勢守貞忠亭へ御成、公方樣御十三歲、貞忠四十一歲、

一、御進物奉行、堤新左、倉內民、翌日以御注文御進上、　御使、堤新左、倉內民、殿中へ持參申、御供之同朋ニ渡之、注文引合竪ニ認之、

〔細川晴元亭御成記〕天文十七年　月二十九日、御成云々、御成役者次第、御進物奉行飯尾上野介、茨木伊賀守、

〔朝倉亭御成記〕永祿十一年五月十七日、於越前谷朝倉左衛門督茂景亭へ御成事、

一御弓征矢御鎧奉行　小川三郞左衛門尉　中村藤內左衛門尉　岸彥右衛門尉

○按ズルニ、茲ニ御弓征矢御鎧奉行トアルハ、進物奉行ノ事ナリ、弓矢鎧ハ、進物ノ内第一トスル物ナリ、

番衆

足利氏ノ番衆ハ、番頭、詰衆、節朔衆、部屋衆、申次衆等ノ數種アリ、

總番ハ、其人員凡ソ三百人許アリテ、分チテ五番トス、因テ又五箇番トモ云ヒ、其各部ノ長ヲ番頭ト云ヘリ、而シテ申次詰衆等此内ニ在リ、申次ハ奏者ナリ、又部屋衆二人アリ、義政ノ時、始テ之ヲ置ケリ、毎夜遞次ニ將軍ニ近侍ス、

供衆、同朋衆、承仕、茶道、小番衆等ハ、皆將軍近侍ノ職ナリ、此他小袖番衆、御所侍等アリ、亦殿中祗候ノ職ナリ、

又格勤、足輕衆、末衆等アリ、營中ノ宿衛、其他將軍出行等ノ時、其警衛ニ任ズ、走衆ハ、將軍出行ノ時、其前驅ニアリテ、道途ヲ警備スル職ナリ、此他公人雜色等ハ、營中ノ雜事ニ從フ所ノ卑職ニシテ、公人ノ長ヲ公人番頭ト云フ、又朝夕アリ、驅使ニ服スル賤職ナリ、

〔貞丈雜記 四役名〕頭書 番頭と云は、五ケ番の事にて、其五ケ番の一組々々の内にて、頭を五人定めおかれたる人をさして番頭と云也、

〔細川家書札抄〕一番頭衆

一番 細川淡路守殿 二番 桃井左京亮殿 三番 畠山播磨守殿 四番 畠山中務少輔殿 五番 大館下總守殿（上總介殿事歟）

此方々へは、大略打付書たるべし、進候一兩人可在之、但時によりて御賞翫もあるべし、

〔大館常興書札抄〕一番頭之事

一番之頭　細川左京亮入道殿　　二番之頭　桃井治部少輔殿　　三番之頭　上野民部大輔殿　　四番之頭　畠山中務少輔殿　　五番之頭　大館陸奥守殿

陸奥守殿への書狀は前に注るす、その外の番頭へは、いづれも恐々謹言と書之、御宿所と書べし、

〔殿中申次記〕正月朔日長祿二戊寅御對面記

番頭略○中出仕　二日、番頭略○中出仕、　三日、番頭略○中出仕、略○中右御對面之次第、略○中二番に大名外樣少々、番頭、略○中七日、番頭略○中出仕、　二月朔日、番頭略○中出仕、略○中御盃已後、番頭以下懸御目て、造宮司と申入て御祓を申す、　晦日、番頭略○中出仕、

〔東山殿年中行事三月〕三日、將軍家略○註出御于御對面所、略○中番頭略○中御目見如例、畢而入御常御所ニ、西向ノマリニテ有鳥合、三番從殿中上覽、御供衆、申次、番頭、從屏重門參入、庭上ニ伺公、御鳥者番頭獻之、

〔年中恒例記三月〕三日、御供衆番頭庭上に祗候、雨雪などふる日は、御えんに祗候被申也、

十月十日、番方へ御嚴重出事、杉原にて御嚴重を二十も三十もつゝみて、御四方をうちかへし、うらへ此五包を銘々に入て、五ヶ番へ一膳づゝ出也、此つゝみ候事も、番頭へ渡事も、會所同朋之役也、これも菊紅葉など時々の物を數べき也、又番頭義は、その番々の月行事へ渡也、

〔蜷川親元日記〕寛政六年十一月廿三日丁卯、若君義尚○足利御誕生、午剋、即御成、初夜御祝御禮在之、今朝御產聊依令遲々、七佛藥師詣事被仰出之、以少將殿御局、御使、二宮新左衛門大七佛ハ依路治物忩、上一揆起、小七佛也、仍即番頭江被觸申之、

一番御使彦三郎中條被觸云々　二番御使宗廣結城勘解由左衛門三吉太夏　三番彦三番頭十七ヶ所在陣之間小笠原備州江被相觸畢、　四番宗廣　五番彦三富永助五郎

如此可相觸處、既有御誕生、雖然猶爲御所樣可被詣云々、人數之事者、如先規爲番頭可被計申之由申之、

十二月廿日癸巳、公家、外樣、御供衆、番頭頭人、御前奉行、若君樣今日御供衆、上樣御供衆、走衆、此外奉公面々、少々皆以御所樣還御已前ニ御參賀、御申次武庫、

〔長祿二年以來申次記〕正月四日、御身固、〇中略次總番衆、五ヶ番事也、

〔貞丈雜記〕四役名一五ヶ番と云は、節朔衆トモ、又番方トモ、又ハ詰衆トモアリ、殿中に番を勤る人々を五番にわけて、五ヶ番と云也、

〔年中恒例記〕正月四日、總番衆奉行衆、上樣へ御禮之事、春日局小侍所へ出座にて、各一人づゝ、對面也、〇中略

總番衆參次第事、一番より始て、五番まで、番次第に御目にかゝる也、昔は少々うらうちの衆もありし也、又就御祝儀、御太刀など時々參候時は、當番より始て、御太刀進上之由也、假令晦日などに御太刀參候共、先五番衆、次一番衆、二番衆、次三番衆、次四番衆、如此なるべし、自餘以之しるべし、朔日より六日迄は、一番衆御番也、七日より十二日迄は二番、十三日より十八日迄は三番、十九日より廿四日迄は四番、廿五日より晦日までは五番衆勤被申也、奉行衆は參次第也、

〔花營三代記〕應永三十年五月三日、畠山中務少輔、自去月十八日等持寺ニ來七日迄御座等持寺へ被召、御方番衆、御所北面小門中宿直スベキ由被仰下也、番帳アリ、

〔永享以來御番帳〕一番〈五ヶ番著到、於御前注之、〉

細川左京亮〇以下七十人姓名略

二番

桃井彌九郎〇以下六十人姓名略

三番

畠山左馬助〇以下五十人姓名略

四番

五番

畠山中務少輔入道〇以下六十一人姓名略　大館上總入道〇以下八十一人姓名略

右五ヶ番之著到事、永正九壬申冬比、一番之中條從三河有上洛、爲外樣衆可有出仕旨被申上候間、一番衆言上之趣者、往古者雖爲外樣衆、慈照院殿樣〇足利義政御代中條依有自訴子細、一番衆被入、出預無其隱者也、所詮先々總番著到可備上覽之由申上、伊勢守貞陸注置著到を、稻葉近江入道、借出備上覽候處、則被聞召分、爲一番衆可致出頭趣被仰出訖、然間其刻此著到各寫置所持之候者也、

〔文安年中御番帳〕公方樣御番衆自一番至五番文安年中

一番

細川淡路治部少輔　上野與三郎　細川下野左京亮　天竺駿河三郎　結城上野入道　曾我小次郎　勝田兵庫助　伊勢九郎〇中略

申次

伊勢備後守　同因幡守　同新左衛門尉　同三郎　同八郎左衛門尉

詰衆

今川關口刑部大輔　伊勢掃部助　曾我兵庫助　中條與三郎

在國衆

今川下野入道　土岐本庄伊豆入道　毛利宮内少輔　稻葉近江入道〇下略

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕常德院殿樣〇足利義熙御動座之御出立事、

五ヶ番之衆は、思ひ〳〵に出立、太刀をはき、左右に分て、三百人計參る也、

〔御随身三上記〕永正九年六月八日、八幡へ御社參、〇中略御出前に、五ヶ番共に、晝夜如本番祗候可申之由被仰出候、當番は二番也、一番と三番と、又四番と五番と相副て、常の御所と御厩に各夜に相

節朔衆

替祗候候也、八日は闕取にて、夜御厩に四番五番御宿直申候、

〔集古文書掟三十八〕室町家掟書蜷川某藏

殿中御掟

一總番衆面々、可ㇾ有ㇾ祗候ㇾ事、○中略

永祿十二正月十四日　彈正忠

〔殿中申次記〕正月朔日　長祿二戊寅御對面記

番○方○節朔衆之事也○中略 出仕

〔貞丈雜記四役名〕一節朔衆と云も、右の五ヶ番○見上文の事也、殿中申次之記に見えたり、節は五節供也、朔は朔日也、番方の衆は、常に公方樣江御目見なし、年始、五節供、朔日、十五日計、御目にかゝる故、節朔衆と云也、

〔相京職鈔三〕節朔衆

五ヶ番ノ中、一色、小笠原等節朔衆ト云、節朔ノ日殿中ニ出仕スル故也、

〔大館常興書札抄〕一番方之事

久不ㇾ申承、非ㇾ本意候、御隙之折節以參會、諸事可ㇾ令ㇾ閑談候、併期ㇾ面拜之時候、恐々謹言、

月　日　名乘判

桃井治部少輔殿御宿所

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日、番預幷節朔衆には色阿波守、小笠原、中條、結城、千秋、三上、楢葉等、攻衆、幷走衆、うち續て一人宛被ㇾ參也、

七月七日、草花禁裏樣へ御進上也、此草花は、五ヶ番より參を御花瓶に被ㇾ爲ㇾ立、御盆に被ㇾ居候て、以ㇾ傳奏ㇾ御進上なり、

〔和長卿記〕大永二年二月廿三日、伯三位雅業王、彼一流、元來外樣也、雖ㇾ爲二武家節朔之衆一、代々非二三獻衆一之處、淡路御所〈○足利義維〉有二別儀一、〈有二御官位之事一〉依二御執奏一、三獻衆相加畢、

〔貞丈雜記〈四役名〉〕一御部屋衆と云は、條々聞書云、御部屋衆とは、〈○中略〉是は、御用心のため、夜毎に御寢所にとまり番をせらるゝ衆なるべし、されば御一家の人勤られし也、

〔相京職鈔〈二〉〕御部屋衆　二人

普廣院殿〈義教公〉初而置二此職一、尤重職ナルガ故ニ、御紋拜領之衆補二此職一、二人ノ内一人、毎夜御前ニ伺候シ宿直ヲ勤ムル也、〈○中略〉

諸門跡座主御衆之事云、公方樣の御部屋衆、此かた〳〵の時は、申次と大略同前に御指有べし、目録の事、是も同前也、又送り禮等は申次へのと同前也、〈○中略〉

寬正年中記錄云、御部屋衆、

一色式部少輔　細川兵部大輔　三淵彌正左衛門　上野與十郎　朽木彌六　同彌十郎

大館三郎

大館尙氏記ニ御部屋衆、

一色治部少輔政熙　上野刑部少輔

御部屋衆と申は、普廣院殿被二定置一也、今以不ㇾ過二兩人一、大方御紋の衆也、隔夜一人宛出仕候て勤二御宿直一云云、御若年の時は、總番より詰衆とて、

佐々木少弼御成申獻立云、御部屋衆、

大館九郎殿　一色式部少輔殿　細川伊豆守殿　細川刑部少輔殿　三淵彌二郎殿

大館彌三郎殿

〔長祿二年以來申次記〕御部屋衆

一色治部少輔政熙　　上野刑部少輔政直

已上此御部屋衆と申は、普廣院殿〇足利義教御代より被定置候、其時より人數は兩人也、必此人々の名字中、又其家々の流には不定事也、時に隨ひて誰にも被仰付之、何も御もんの衆也、兩人の內每夜一人宛御前に宿直被申也、御所樣御若年之時、總番中より詰衆とて、少々別に被召仕儀有之、其詰衆には、此御部屋衆之事は各別之身體也、

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日、御供衆幷御部屋衆兩人事、去應仁亂前迄は、御便所にて被掛御目間、其趣注申といへども、亂後などよりは、御供衆も御部屋衆も、御對面所のさいのきはにて、被懸御目也、御部屋衆之事、正月朔日計也、其外は於面向被掛御目義は一年中には無之、但御太刀參時は、御供衆之次に可被參也、其次第は、御對面所へ御出座以前より、御供衆、次江御部屋衆、申次衆一列に、次の御座敷と御對面所とのさいのきはにかさはりあふ樣に伺公候而、御出座之時、則懸御目也、人數餘の時は、二度三度にも懸御目なり、一人宛などにては無之、當番の申次一人は、御供衆よりも猶進てさいのきはに伺公候也、御出座を奉待心得に候、懸御目候へば、各頓而被罷退也、〇中略

御部屋衆兩人於面向御對面之事は、正月朔日計也、五ヶ日は無之、

〔宗五大草紙下〕殿中さま〳〵の事

一公方樣御寢所には、〇中略夏冬共に、御部屋衆一人づゝ每夜御そばに祗候、御部屋衆とは、御一家の內、一段御心安き仁たるべし、ちかくは細川治部少輔殿、號文朋と云御喝食今一人は一色治部少輔殿、此兩人うちかへ〳〵に夜每に伺候にて候、

〔年中定例記正月〕二日、御乘馬始、伊勢守御部屋衆一人祗候、　十四日、御部屋衆、申次祗候、　十二月晦日、十一番に〇中略御部屋衆〇中略御目にかゝり候、

詰衆

〔年中恒例記正月〕二日、御對面已後、年始御乘馬始有之、御むち、御沓、或は伊勢守、又淡路守、或は御部屋衆、又は小笠原參勤、〇中略御厩次郎四郎、御服を被下なり、或は御部屋衆或伊勢して被下之、

二月一日、當月彼岸に、三ヶ度入日中日あくる日本阿來候て、西の御座敷にて、御重代、並御太刀等の拭ひ申也、同朋申次之、中日には、重代二ッ銘一ばかりのごひ申候、二つ銘のごひ申候時は御紋仕候、御供衆、又は御部屋衆一人、同朋に被相副候、

〔殿中申次記〕一御亥子次第之事

御部屋衆は、御供衆と申次の間に、被參、御供衆御部屋衆申次と次第在之、

〔集古文書掟三十八〕室町家掟書蜷川某藏

殿中御掟

一不斷可被召仕輩御部屋衆定詰同朋已下、可爲如前々事、〇中略

永祿十二正月十四日　彈正忠

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿〇足利義輝御代當參衆、并足輕以下衆覺、

永祿六年五月日

御部屋衆

大館源五郎宗貞任治部少輔　三淵伊賀入道宗薫　同彈正左衛門尉藤英任大和守

朽木刑部少輔藤綱　杉原上總介長盛　荒川與三輝宗

三淵彌四郎秋豪　一色三郎秋成　上野中務太郎秀政堀彌入耶、當御若衆也、

一色刑部少輔氏明吉良殿弟也　一色四郎秋孝　一色駿河守孝秀初號二階堂

上野宮内少輔　伊勢上野介　同幸松

〔相京職鈔二〕詰衆

御幼稚ノ時、總番ノ中、有器量者此職ニ補ス、御用心ノタメナリ、

申次記錄云、御所樣〇足利義政御若年の時、總番中より詰衆とて、ちか〳〵別に召つかはるゝ、義在之、其詰衆には此御部や衆の各別の身體也、

〔文安年中御番帳〕公方樣御番衆自一番至五番、〇中略

詰衆

一色宮内少輔　大内修理亮　陶山又二郎　垪和右京亮　荒川太郎　佐々木岩山美濃守　三上﨟部助

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿〇足利義輝御代、當參衆并足輕以下衆覺、

永祿六年五月日

外樣詰衆以下

攝津掃部頭晴門〇以下五十六人姓名略

詰衆番衆

一番

曾我兵庫頭助乘曾我上總介　楢葉若狹守時永馬田彥次郎　本郷下總守信弼中澤玄蕃允　朽木左衛門尉成綱　竹藤兵部少輔藤兼　佐分利玄蕃允　本郷治部少輔信能　本江又三郎方秀　馬田左京進

二番

後藤治部少輔廣綱　大草三河守公廣　安威兵部少輔藤備　結城民部大輔貞胤　沼田彌七郎統兼　沼田勘解由左衛門尉　大草與三郎秋長　結城又七郎忠達　沼田德松　飯川彌四郎忠直　安東宮滿丸　山下〇以下三番十一人、四番四人、五番十一人略之、

〔年中恒例記正月〕一日、御對面次第、〇中略近年は御用心に付て詰衆在之、出仕之時は、申次之次に懸

御目也、

〔東山殿年中行事正月〕朔日、番頭、節朔衆、攻衆、走衆、順々出テ奉賀之、〇中略（攻衆事、近年ハ申次ノ次ニ、走衆ノ前ト有之由、返答云云、院殿御引付ニハ、節朔衆ノ次走衆ノ前ト有之由返答云々、）

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕一攻衆爲大勢間、兩度に一獻在之、相伴以下與奪之、

中備　松左　松對〇中略

御所侍

一後三月二日、爲後宴御供衆攻衆少々、御部屋衆少々、申次同朋衆招請、八劉ヨリ參會、湯漬在之、

〔建内記〕正長元年五月十九日、室町殿大法結願也、自去十二日、聖護院准后（道意）令參勤尊星王法給、〇中略次御撫物御卷數、勸修寺中納言取之、壇奉行行海法印傳之、黃門持參御前了、（初夜之時、被出御撫物、又如此也、）御撫物事、以御所侍被出了、　二年七月五日、未明參室町殿（直垂如例、內々也、）五壇法結願之間也、御卷數御撫物、承仕渡御所侍、（可著淨衣之由下知之處、著單衣、奇怪、）

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕御所侍　直海查次郎

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歲十二月十九壬寅日、於坂本樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣、（後被改義輝）被遂御元服之次第、

役者之定

一御所侍直見代、近衞殿御所侍林與三郎御履、〇中略

一御所侍、二重一對、矢筈餠一對、持出立也、

〔宗五大草紙上〕人の召仕れ候仁心得らるべき事

一公方樣にて椀飯の時は、殿上人一人御參候て、將軍家へ御みやづかひ候、三獻めの御盃は、其日申沙汰の人御給候、〇中略又御主殿をば、御所侍と御承仕と悉皆調申候、

申次衆

〔宗五大草紙上〕奏者の事

一公方にては申次と申、私にては奏者と申候、殿中にては攝家門跡をば殿上人御申次候、但御指合候へば武家も申次候、長老をば蔭凉申つがれ候、是も差合候へば申次申候、公方樣正月出仕之次第、人により又進物により、さま〴〵の故實口傳候へ共、註に及ばず、先進物の置やう御對面所のうち、すゑの御さいのきはに、御左のかたにをくべし、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

一殿中日々記ニ付申候に、三職御事は、御苗氏不書之、殿文字を書之、四殿之御事は、御苗氏をば書之、殿文字をも書之、

一永正三年（義澄公代）十二月卅日に、觀世大夫於庭上被成御覽時、以外大雪にて、庭上に雪つもり申候間祗候仕、在所の雪かきのけさせられよと大夫申次に懇望申之、當日貞遠（伊勢右京亮）なり、返答には、御庭に雪つもり申事、大切之儀也、又自然御馬にもめされ候事可有之、何事にかきのけ申候哉と可被仰出時、如何可申候哉、然東山殿樣〇足利義政御代に、判門田御對面候時、如此大雪積候也、然どもはかせ候事は無之、以其例對大夫返答在之、尤之儀候由各被申、申次之躰可有分別事候也、

〔相京職鈔二〕諸門跡座主御乘の事云

殿中申次御拵の事

此方々の時は、御供衆同前に御あつかひ候て可然候、御供衆も申次をも被仕候條、御拵に急度相替る事これあるべからず、目錄の認樣の事、御供衆と同前たる御太刀一腰、御馬一疋と被調候方と申次の內にも可有、又太刀計御の字を被入候て、馬には不被入方も可有候、おくには名字官實名を被書事も、名字官計被書候方も可有候、申次の內にも高下候、又被備候時は、へい重門のあたりまで可被出候、

申次記錄云、其時申次をはじめとして御對面所のさいのきわに伺公ありて、是も一列に被懸御

目也、

〔年中定例記〕殿中從二正月一十二月迄御對面御祝已下之事

一御對面之次第、先御對面所江御出の前日、申次當番の人御對面所の御障子のきはに祗候、其次に御供衆各御祗候、次に御部屋衆、さて當番ならぬ申次祗候、一列に懸二御目一御禮申立のかれ候、

〔集古文書〕三十八室町家掟書蜷川某藏

殿中御掟

一閣二申次之當番一、毎事別人不レ可レ有二披露一事、○中略

永祿十二正月十四日　彈正忠

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日、御直垂めさるゝ、時役者之事、御後腰は藤中納言殿、御前腰は山名宮内少輔豐之、御履物、御扇子、鼻紙は畠山宮内大輔敎國、兩三人也、是又亂前迄之御事也、如レ此有て則御對面所へ御出座、其時申次衆、當番之申次を始として御對面所之次の間さいのきはへ伺公有て、是も一列に被レ懸二御目一也、

同二日、御對面所へ御出座以前より、御供衆、申次衆一列に、次之御座敷と御對面所とのさいのきはにかさなりあふ樣に伺公仕て、御出座之時剋被レ懸二御目一也、人數餘多のときは、二度三度にも被レ懸二御目一也、一人宛などにては無レ之、當番の申次一人は、御供衆よりも進て、さいのきはに伺公仕なり、御出座を奉レ待心得云々、懸二御目一頓て各退出候也、當番の申次、御對面所之さいのきはへ參候而面々と申入、

同十四日、松囃事、夜に入て御西向松御庭、御かゝりなり觀世仕レ之、○中略松御庭南よりの御縁に、公武共に伺公也、其外畳縁をせられ候て、御供衆、申次衆、同伺公在レ之、

同十五日、爆竹、三毬丁共云レ之、此爆竹は、今朝御對面相過候て、則椀飯より以前之事也、御西向松之御庭に

て、さきつちやう囃申を簾中より被御覽候、御供衆、申次衆庭上に伺公也、

同十七日、御的始、未刻過有之、〇中略

公方樣被御覽樣躰事

御寢殿の向殿上より御見物在之、御劔役一人は御緣に伺公在、御供衆、申次衆は、御近所之庭上に各伺公也、

同〇十二月廿日、御ひとへ幷御卷數、所々より進之、〇中略

御ひとへ、伊勢守持參候、近年は申次持參候事も在之、

御卷數所々より進上、是は申次持參申て、御對面所のさいのきはにて、所々よりの御卷數と申入て、扨さいの內、御前近く參て、御頂戴あらせ申て退出なり、

〔殿中申次記〕正月朔日　長祿二戊寅御對面記

一於御對面所、申次一番に面々と申入て、則三御盃、數の御盃參て、其後管領を始て、大名以下次第次第に被參て、御盃頂戴之、〇中略

御亥子諸家出仕樣體之事

一御對面所へ御出座候て、則申次御前へ參、面々と申入候て、則三職以下御相伴衆之大名、一列に御前へ被參、著座候て御膳參り候、〇中略

七日　義稙公代　延德四年正月、御陣於三井寺光淨院、

一御對面次第

一御出之所にて、御供衆申次懸御目、其次に當番の申次、御通りへ參、面々と申入、其次に三の御盃參、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

一正月十一日、祭主兩人祗候之事在之、權大輔と權少輔參上候はゞ、大輔は雖爲若年可進、祭主御卷數進上之事、申次持參申、祭主と申入て、御卷數頂戴させ申、懸御目也、

一諸人御太刀進上之事、雖爲童體、自身御太刀持參候なり、自然幼少にて御太刀をも難致持參は、申次に渡之披露候て其後に可懸御目也、（文龜二卯四）善法寺兒、幼少にて出仕候時如此在之、以申次進上候事は無之事也、

一座頭御對面之時は、申次手を引て御前へ參、是にあれと可申聞候、平家語り候はゞ琵琶可持參、其樣體在之、無分別候ては失面目儀也、自然御服御折紙以下被下之ば、申次手に渡之、退出も同前、

一吉良殿御出仕之時、臨時に御太刀御進上候はゞ、當日之申次、御供の衆へ申とりつぎ可申、御自身御とりありて御進上候事は、申次無古實事なるべし、臨時ならず御太刀進上之時は、申次取次申べし、御前へは御自身御持參也、

一於御前殿文字申事、吉良殿は殿文字慥に聞え申樣に申之、細川殿其外三職の御衆は、殿文字を申けす樣に可申之、其外は殿とは申まじき也、此儀に付候て分別共在之、

一御扇井引合杉原には、進上之目錄無之、其外は兩種在之ば、以目錄可致披露事也、

〔永享以來御番帳〕文明十二三年比

申次

大館刑部少輔　畠山刑部少輔　上野民部大輔　伊勢左京亮貞誠　伊勢下總守貞牧　伊勢備後守貞熙

〔長祿二年以來申次記〕申次人數之事　長祿年中以來

大館兵庫頭教氏（御供衆也、上總介持房次男也、不及受領、兵庫頭之時死去、伊豫守尙氏親父也、）　伊勢備中守貞藤（御供衆也、伊勢入道眞蘊次男、貞親祖臣舍弟）

也、貞藤令入道、已後、號笑軒云、　上野民部大輔持賴御供衆也、應仁亂已後、三番之頭也、　伊勢加賀守貞綱御供衆也、應仁亂迄、三番衆頭也、因幡守貞誠伯父也、　畠山播磨守教光御供衆也、應仁亂迄、三番衆之頭也、　伊勢下總守貞持貞綱之親父、舍弟に下總守貞房と中仁在之、其息云々、次郎左衛門貞賴、井右京亮貞遠以下之親父也、　畠山中務少輔政光御供衆也、應仁亂迄、四番之頭也、大夫將監貞清之座也、　伊勢備後守貞照貞房舍弟息歟、不分明也、

伊勢肥前守盛富八郎左衛門、盛種之親父也、　伊勢備前守盛定前には備中守云々、號笑軒、任備中守之時、拜任備前守云々、

右御番事、以御自筆被定置之、

文明之頃

畠山宮内少輔政光舍弟、應仁亂已後、御供衆四番之頭也、　畠山刑部少輔政清大夫將監貞清次男也、三男との間に、信濃守持清と申仁在之、其息云々、寛正年中御發宮之時、御前計參勤人也、　伊勢左京亮貞誠　伊勢下總守貞扶　伊勢備後守貞照　畠山中務少輔政近被召加之、文明九年十一月日、御供衆幷四番之頭也、政光舍弟、又宮内少輔よりは雖爲舍兄、應仁亂之後、宮内少輔死去以後出仕也、任上總介、

御方御所樣

一申次始而被仰付人數事　文明九年十一月卅日

大館治部少輔尚氏御供衆、教氏息、任兵庫頭、彈正少弼、左衛門佐、伊與守、以下於江州鈎御陣被召加評定衆云々、　大和兵部少輔政邦大和守成親舍弟也、當時家督云々、　伊勢八郎左衛門尉盛種任代々備前守、　伊勢次郎貞賴貞扶息也、任次郎左衛門幷下總守、

一上野刑部少輔政直、吉見兵部少輔政家、應仁亂前迄、一色次部少輔政熙、上野刑部少輔政直、此兩人は御部屋衆にて候、

右兩人被召加之、文明十年十二月廿七日

一一色式部少輔政熙被召加之、文明十一年閏九月七日、應仁亂前迄、御部屋衆也、其後任式部少輔、御部屋衆之間は治部少輔也、

一吉見在國也、大和は死去也、仍

御番衆被定置之、

大館治部少輔尚氏　一色式部少輔政熙　上野刑部少輔政直一番衆、上野一流、政前方は先流云々、　伊勢肥前守盛種　伊勢次郎貞賴

一連々被召加人數事

伊勢彈正忠貞固文明十二年六月廿日、被召加之、　伊勢新九郎盛時文明十五年十月十一日、被召加之、備前守貞定息也、　上野小太郎尚長文明十六年十一月廿日、被召加之、持賴息三番頭也、　安藤右馬助政藤文明十八年二月十八日、被召加之、[illegible]

一當申次參勤人數之事　文明十九年正月御供衆

大館彈正少弼尚氏　上野民部大輔尚長御供衆　伊勢肥後守盛種　伊勢彈正忠貞固　安東

右馬助政藤　伊勢新九郎盛時

一荒川宮内大輔政宗 星野宮内大輔政茂 此兩人被召加之文明十九年七月廿八日

一於江州鈎御陣、始而被召加之人數事、

伊勢下野守盛相長享二年五月日　一色宮内少輔親冬長享二年六月日　里見兵部少輔尚直同二年十月六日　岩

山美濃守政秀同年同日　宇都宮次郎藤綱同年同日

一近年申次人數事東山殿樣

大館刑部大輔政重御供衆也、治部少輔教幸息也、祖父は雖任上野介、孫政重は刑部少輔より拜任陸奥守四品也、　伊勢右京亮貞遠貞扶次男、下總守舍弟也、貞遠は貞宗朝臣猶子分云々、　畠山中務少輔政近　伊勢上野介貞弘　畠山刑部少輔政清息也　伊勢因幡守貞誠左京亮貞泰父也

右以御自筆被定置者也此以後伊勢肥前守盛種被召加之畢

申次御番定被置人數事　延德二年六月日

大館刑部少輔政重四品也　伊勢右京亮貞遠　大館右衛門佐尚氏四品也　伊勢次郎左衛門尉貞賴任下總守、近年貞仍と改名也云々、　上野民部大輔尚長　伊勢因幡守貞誠　大館治部大輔親綱御供衆也、尚氏曾祖父舍弟流民部少輔政房息也、　伊勢上總介入道貞弘　伊勢肥前守盛種備後守貞熙息也、七郎右衛門尉事也、　伊勢又七貞俊

一常德院殿樣○足利義熙御代、御親父右馬助政藤申次御參事、

被召加、度被思召候間、此等之趣伊勢貞宗に爲御談合、以尙氏書狀可尋遣之由被仰出之間、上意之旨、貞宗に申通候處に、如此御返事被申候條、備上覽者也、仍而可有御參之由被仰出候以來、至永正三年丙寅春被勤申畢、然時者、云上意、云先規、御參例旁以御理運哉、一旦被叶上意、被召加人數之類には大相違申候歟、此旨兩宮八幡も照覽、淵底尙氏存知仕候間、具に注申者也、〇中略

右文明十八年丙午二月十七日、伊勢守貞宗朝臣如此被申上候也、

尙氏存知之在判

從長祿年中至延德二年、申次參勤之人數如此也、

永正六年四月日

大館伊豫守

尙氏在判

安東故右馬助政藤殿御家督平六殿

小番衆

〔建內記〕永享十二年二月十一日甲申、今日於室町殿有松囃習禮、是近習幷小番衆沙汰也、　十三日丙戌、今日於禁中東庭有松囃事、室町殿被仰、近習幷小番衆等、被盡風流、被召進之、

〔建內記〕嘉吉元年十月廿五日戊午、參室町殿、〇中略武家小番衆、奉行人等御對面、

〔甲陽軍鑑品第十二四〕上杉殿御曹司龍若殿と申て、十三に成給ふを、六人の乳母の子共談合して、いざや此若を土產にして、北條殿江罷出んとて、氏康公へ龍若殿を具足し申、小番衆の神尾と申侍に申付られ、彼龍若殿の頸を切り率る、不思儀也、神尾今迄二代三病をわづらふ、氏康にて小番衆、信玄家にて近習の事なり、

小袖番衆

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿〇足利義輝御代當參衆幷足輕以下衆覺

永祿六年五月日

御小袖御番衆

同朋衆

大和治部少輔孝宗　伊勢次郎左衛門貞満〇以下入人姓名略

〇按ズルニ、年中恒例記ニ、御小袖の間には、大豆を自うたる丶也トアリ、小袖番衆トハ、小袖ノ間ノ番ヲ爲ス職ナルベシ、

〔同朋故實考〕同朋ノ始ノ事、サダカナラザレドモ、鎌倉將軍家ノ比ハ、力者ナド云ヒシ者ナルベシ、京都將軍家ニ至テ、同朋ト唱ヘラレシナルベシ、或說ニ、同朋ハ義滿公ノ比始ルト云ヘルハヒガ事ナルベシ、〇中略同朋ノ司候事、御座敷ノタヽミシキ様、屛風立様、總ジテ御座敷ヲトリツクロヒテ、御承仕ト申合セテツトムルナリ、又御長刀ヲ持役ナリ、

〔貞丈雜記四役名〕一同朋と云は、剃髮の者にて、殿中にて諸侍につかはれ、雜役の者也、茶の事をつかさどるを茶同朋と云なり、或說に云、鹿苑院義滿公、十歲にて父に義詮公ナリおくれ給ひし時、細川頼之執事と成て義滿公を養育す、其比頼之のはからひにて法師六人をゑらび、異體の衣服を著させて、伎坊と名づけ、又童坊とも名づけ、何れも何阿彌と名のり、色々のたわけ事をさせ、たわことをいはせて殿中をありかせ、諸侍のなぶり者とし、わらひぐさとしけり、是は義滿公に佞人をにくみ給ふ樣に敎へ奉る頼之の下心也、諸侍の中に佞人あれば侍童坊とあざ名を付る故、佞人ども皆耻けるとぞ申傳へたる、本は童坊と書けるを、いつの比よりか同朋と字を書かへける也云々、寶篋院義詮公、延文三戊戌年十二月廿二日征夷大將軍御拜賀の御參内の記に、供奉の行列を段段記して、其次に隨身馬上、隨身姓名今略之赤き金襴の上著に豹虎之尻鞘の太刀、滋藤弓に尻籠負ひ、厚總の尻鞦懸て、左右を分、二行に乘也、中略其次御長刀二振、御同朋、右同前之上著ニテ、馬上ニテ持之と見え、御參内之記式ニ見タリ、上著トハ袍ヲ云ナルベシ、義詮公は義滿公之父也、然れば同朋は、義滿公よりも以前よりありし也、

〔道照愚草〕一同朋衆は、太刀をば不持候、打刀計もたせ候、小太刀をば不持候、小者は馬之さきへ走

候、打刀をば馬のわきに中間に持せ候、當時は相替事候間不存候、法は如此候、
〔年中恒例記〕正月五ヶ日御對面所にての御手長、會所之同朋衆也、
七日、千秋萬歲參出於松庭被舞之、御太刀持被下之、同朋遣之、
十日、御參內次第事、先御立烏帽子、御直垂を被召て、三御盃をまいりて、則長橋殿迄御參、○中略
御供之事、御供衆三騎、又は五騎七騎、同御供の同朋一騎御小者六人、走衆六人めしつれらるゝ、
二月一日、當月彼岸に、三ヶ度入日中日あく日本阿來候て、西の御座敷にて、御重代並御太刀等の拭ひ申
也、同朋申次之、中日には、重代二ッ銘一ばかりのごひ申候、二つ銘のごひ申候時は、御紋仕候、御供
衆又は御部屋衆一人、同朋に被相副候、自餘之御重代のごひ申候時は、同朋計にてのごはせられ
候也、如此三ヶ度參勤仕候て、結願の日、御太刀白被下之、同朋取次之、
當月ひがむ中日に、御鏡とぎ參りて、下御末邊にて御鏡とぎ申也、○中略仍御太刀白被下之、同朋衆
申沙汰之、
四月中の申日、鴨社務より葵桂進上之、○中略御末同朋常御所にはかけ申也、
八日、自等持寺釋迦像參りて、御湯をそゝめさせらるゝ也、蔭凉軒持參之、同をけに花を入申て、御
末同朋調進之、
七月七日、寅時の水にて、御硯を御會所同朋あらひ申て、御硯水には、いもの葉の露をそのまゝ葉
にて包て、御硯水入の上に置申也、
十二月廿七日、御すゝはき在之、於內儀御祝參也、常の御所御會所御厩以下は、御會所之同朋仕之、
上樣御有所は、御末の同朋、御末は御三男衆、並御末同朋仕也、
御すゝはきの御祝參る、雜煮參也、御美女方より參也、御會所同朋、御末同朋、御末男衆、御美女等、
於御末さふに御酒給之、

晦日、節分夜、紙にかきたる舟口伊勢守進上之、女中衆同朋衆迄、取調申之、

〔殿中申次記〕正月十日、(永正十八)御參內、年始御參內之御禮、御供衆、同朋兩人御走衆御太刀(金)進上之、〇中略

申次覺悟之事

一同朋衆も年始歲暮之御禮無之、御禮候時は、花瓶香爐何にても唐物進上之、御太刀は進上無之、

但御參內還御時、御供之同朋御禮被申上候、其時は御太刀進上也、

〔御供古實〕御燒香の時香合をば同朋衆持候て參候なり、公方樣にて如此なり、

〔宗五大草紙下〕殿中さま〲の事

一公方樣御寢所には御座をしかれ候、〇中略御かちやうは、水色角、水引は段子、さほこくしつ、かざしやくどう、七うち候へば、必同朋の役にておろし申候、

〔宗五大草紙上〕色々の事

一足袋の事、殿中へは御免候はでは、えはき候はず候、〇中略同朋は被免之沙汰なくはき候、

〔寶篋院殿將軍宣下記〕同(〇延文三戊戌年十二月)廿二日、御參內之品々、〇中略

一其次に御長刀二振、御同朋、右同前の上著に而馬上にて持、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月廿日、巳剋御參宮、

廿六日、御物人夫注文〇中略

同朋衆八人分　八人(道夫)〇中略

以上百五十人、日別百文下行之、

〔集古文書三十七〕延德二年酒屋役條目(蜷川家藏)

度々被仰出條々(延德二)

同八月三日、以種村刑部少輔被仰付之、

一同朋衆(萬阿、耳阿、目阿、直阿、)四人、御月宛事、

格勤

毎月各貳百疋宛、以納錢之內可下行之由被仰出之、〈○中略〉
同日(九月廿一日)以同人(楊村刑部少輔)被仰付之、
一目阿、直阿、御月宛事、
月當、月三百疋宛分、可下行之由被仰出之、
萬阿事、三百疋同可被下行之旨、以前被仰付之、

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕同朋衆
越阿　海阿　木阿　杉阿　歲阿　佛阿　直阿　遊阿

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿〈○足利義輝〉御代當參衆幷足輕以下衆覺
永祿六年五月日
同朋衆
春阿　孝阿　萬阿　綠阿　歲阿　百阿　福阿　台阿　輪阿　松阿　慶阿

〔道照愚草〕一同朋衆を日々記に書には友阿と二字書之、

〔大館常興書札抄〕一同朋衆之事
先日者御來臨、祝著候、御隙之時者、細々御入候て、御雜談候は可為喜悅候、恐々謹言、
月日　　名乘判
善阿彌陀佛〈進之候〉

〔貞丈雜記〈四役名〉〕一御格勤といふは、同朋より上なるべし、〈○中略〉應仁の大亂以後、御格勤も絕たるなるべし、將軍家の儀式沙汰、應仁の亂以後、絕たる事多き樣に舊記に見えたり、

〔道照愚草〕一御配膳と申は、御膳をする申事にて候、殿中にては御供衆之御役にて候、御末より持參御供衆へ渡申、是をば御末の、御かくごと申候、近年は御格勤と申者無之間、御末男同朋へ渡申、

〔簾中舊記〕正月御こはくごまいりやう

一五ヶ日參り候、〇中略御こはくごの時は、御そばつゞきにても、御なをしにても、御前はりなんごめし候、あがり候時の御てながは、御かくごゞもし參らせ候、御しやうぞく御ぬぎ候てのちに御いはひ、七こん參り候時は、うへのきぬなどみな御ぬぎ候、

〔後愚昧記別記〕永和三年八月十日、秉燭之後、大樹之亭武士馳集騷動云々、是恪勤者鬪諍、相互殺害云々、

〔花營三代記〕應永廿八年十二月廿五日、御方御所樣〇足利義量、爲歳末御禮、嵯峨香嚴院、幷寶鏡寺江有御成、御供六騎、〇中略御カクゴ三人歩行、小林小五郎持御劍、高橋四郎御釵負、御弓持小林彌三郎、卅年八月卅日、御方〇註略禪能坊へ成、幷赤松大膳大夫入道性松家成、御供〇中略御恪勤二人、同前御馬左右ニ參也、

〔武家名目抄職名附錄十下〕按ずるに、足輕衆といふは、前にもいひしごとく恪勤の先走をつとむる人をいへる也、〇中略後の世にいふ足輕同心のことにはあらず、

〔二水記〕大永七年八月廿九日、早旦東山勝軍地藏堂之邊、燒葬、江州御出洛近々也、仍少々昨日著坂本云々、今朝之儀、人不知之、見山葬相驚了、巳剋足輕衆既以入洛了、

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿〇足利義輝御代當參衆幷足輕以下覺

永祿六年五月日

足輕衆

秋本兵衞尉　曾我左衞門尉　野垣太郎左衞門尉　廣田善兵衞尉　大西虎介　小川三郎五郎

田村勘左衞門尉　內山彌五太兵衞尉　永嶋新七郎　大貳　楢本與次　鈴木勘左衞門尉　三上式部丞　一卜軒

〔集古文書掟三十八〕室町家掟書蜷川某藏

末衆

殿中御掟

一諸門跡坊官、山門衆徒、醫陰輩以下、猥不可有祗候、付、御足輕中、互隨召可參事、

永祿十二正月十四日　彈正忠○織田信長

〔道照愚草〕一御末衆之事、もと〳〵は御末男衆と申之也、當時御末衆と在之、如何、但至今て御下知以下には御末男と被書之也、

〔貞丈雜記四役名〕一御末男と云は、御末衆、又御末之男トモ云、又御ハシタ衆とも云也、公方様へ御膳參らする時、御膳を御末男持て參り同朋衆へ渡し、同朋衆御供衆へ渡し、御供衆御前へすへ申さるゝ也、此事道照愚草に見えたり、御末衆は同朋より下也、

〔武家名目抄職名附錄十下〕按に御末衆といへる、格勤侍の内にて宿直をつとむる人なり、同じ格勤の内にて先走といひて、走衆のかたはらにそひて走る役に從ふものをば、足輕衆と稱す、元はともに格勤といひて、宿直をも先走をも打混じてつとめけんを、いつしか家をわかちて、御末衆と足輕衆とよぶことゝなれるなり、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

一御末衆御禮被申事、年始歲暮には無之、自然御代始などには被申之、然間年始歲暮に式日無之、

〔年中恒例記十二月〕廿七日、御すゝはき在之、於内儀御祝參也、○中略上様御有所は、御末の同朋、御末は、御三男衆、並御末同朋仕也、

〔宗五大草紙下〕公方様御成の様體の事

公方様には、○中略御犬笠懸の時、御てうづをば、御すゑの仁取申候、○中略鹿苑院殿、○足利義滿野御遊雪野などへ御成の時は、走衆、又は御すゑの衆、御笳をかたげられ候て、御馬のきはに參られたる由申傳へ候、

〔齋藤親基日記〕寛正七年〈○文正元年〉二月廿五日、飯尾肥前守之種亭御成、〈○中略〉御供以下、御前御肴等者、御末衆一圍調之、三月廿日、御參宮、廿六日、御物人夫注文、〈○中略〉御末衆四人分、四人、〈通夫、○中略〉日別百文下行之、

〔集古文書〈三十七〉〕延德二年酒屋役條目〈蜷川家藏〉

度々被仰出條々〈延德二〉

同日〈九月二十九日〉以葉室殿被仰付之、〈○中略〉
一御末男衆十三人御月宛事

各百疋宛、可下行之由被仰出之、

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿御代當參衆幷足輕以下衆覺

永祿六年五月日

御末之男

河田與左衛門尉　疋田修理進　同彌四郎　同源四郎　二宮彌三郎　疋田尉松　高橋阿古千代

諸大名御相伴衆以下

御末男

高橋新九郎　疋田彌七郎　御倉正實　掟遷

〔走衆古實〕飯能須職へ尋條々

一惠林院殿樣〈○足利義稙〉周防より御上洛之御門出候時、田村濟親俗體にて走に參勤、御末の進上各各交て參、御末之衆詰候に混亂、不及覺悟候由雖被申、不能承引、然には引を持て打擲せられ候、當座被絶入、仍御門出候時、曲事候由被仰出、然ば雁一ッ仕由申て祗候、大内種々被申、さりとては尤理候、

承仕

〔貞丈雜記 四役名〕一御承仕と云は、是も輕き者也、正月、五節、朔日、十五日など、其外御規式の時、殿中御座敷の疊の敷樣、屛風の立樣、總而御座敷の取つくろひをする役也、

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕御承侍

釣源坊　香淵坊　常松坊

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歲十二月十九壬寅日、於坂木樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣 後被改義輝 御元服之次第、

役者之定 ○中略

一御承仕、伏見殿御承仕盛嚴御雇、○中略

御元服次第 ○中略

一御末童防德阿彌、白砂ニ蠟燭ヲ持テ出、是ハ御承仕ノ役タルベキ由沙汰アリ、頓而御承仕出テ、御掌燈ヲ取退、

茶道

〔齋藤親基日記〕寬正七年 文正元年 二月廿五日、飯尾肥前守之種亭御成、○中略 御茶道永阿菊阿也、

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕永祿四年三月卅日、未剋御成、○中略

一於四間御座敷式三獻、○中略

一次の三疊敷に御茶湯在之、春阿仕之、○中略

一當日に被參同朋衆九人、但○中略 春阿は、御座敷嚴被申間、千匹被遣、

供衆

〔貞丈雜記 四役名〕一御供衆と云は、建武元年、尊氏公鎌倉より御上洛の時、御供仕りたる人々也、伊勢守家も御供衆の第一也、其人々の子孫を後々までも御供衆と名付て、公方樣の御前近くめしつかはれ、朝暮御膳の御宮仕、其外御そば近く御用をうけ給る也、今御小性衆と云人々の勤方の如し、

〔相京職鈔二〕御供衆
親昵ノ衆也、御成ノ御供、又御陪膳等ノ事ヲ掌ル、伊勢安齋記云、御供衆は、等持院殿(足利尊氏)元弘元年、北條高時がまねきによつて、かまくらより軍勢を引つれ上洛し、高時に加勢をし給ふ時、かまくらより御供申たる人を御供衆といふ、其子孫を代々御とし衆といひて、將軍家の御きん習にめしつかはるゝ人なりと云々、先輩多く此說を用ゆといへども、予是を信ぜず、

〔御供古實〕一御供の時下馬候事、さきうち二三騎おり候て、やがて可乘候へば、其まゝ後の衆はおり候はね共不苦候、又おり候ても可然候、おり候へば御こしなどにをくれ候て、おり不申候事可然候、〇中略
一御こしの時、御供衆覺悟之事、雨もふり路次もあしく候へば、たてむしろを引出してたてられ候て、かぎに御かけあるべし、然共前のすだれをおろされ候はではわるく候、是は向ひ候風に雨つよく入候ての事にて候、たてむしろは此時の用計に候、〇中略
一御供衆、走衆、きやはん股はゞきの事、可被用候時分之事、十月五日の御經の御成より三月三日まで可被用候、又雨ふり候時は、御小者は、きやはんをひり候得共、もゝはゞきはとり候はず候、御供衆走衆は、もゝはゞききやはんをもとられ候、年寄たる人などにて御座候はずはめされ候はず、共にて候御小者は、さりとては仕候はでの事にて候、是も十月五日より明年の三月三日までの事也、〇中略
一御供の時、御劒の御役人は、御こしのやがて御後たるべし、御こしと御太刀持の馬の間は半町程可然候、半町ほどの中程に御太刀持の小者をはしらかされ候事可然候、夜に入候ては、御太刀の役人御こしの少きはに馬を打寄られ候て可然候、左も候はゞ餘の御供衆も同馬を打よせられべし、〇中略
一御成の御供の時は、御座敷の次の方に御供衆も候也、御相伴衆は、三管領より外の方々は御參

次第にて候、然ども其中にも可依人體候歟、又御供乘の中にも、人により一かど引のきて惣次の御供乘々も別御なをり候方も有べし、○中略

一御供の時、馬上にて返しも、ゝだちの事、嵯峨鞍馬高雄杯へは御ごとりあるべし、此時は沓をはき候ても可然候、足なかも不苦候、返々洛中などにては御どり候まじく候、

一神前などにて、御こしのながえの前計たてられ候時、御供乘は皆下馬あるべし、又主人於路次人と行あはれ候て、御こしをたてられ候はゞ、御供乘も其人にあひ候て下馬あるべし、

〔供立之日記〕一公方樣御參內之事○中略

一御供乘はゐぼし上下たるべし、○中略

一御供乘の供立、右の分、又御參內の御供には、侍一人も召つれず、中間小者迄召つれ申也、○中略

一御參內は、御供乘も分別古實共これある事也、

〔殿中申次記〕御亥子諸家出仕樣躰之事

一御膳は以上三膳參り候也、御配膳は如常御供乘勤役也、

〔諸大名衆御成被申入記〕一伊勢守申詞に、○中略上野故刑部少輔殿、直被申しは、烏丸儀同殿資任なども被御紋候御供乘など迄は、御前にても殿文字をおほ〳〵と被申たる段、勿論云々、ケ樣の事は時々によりての御事にや、何れも古へに相易事多之、乍去御臺樣の御酒の時、公方樣の御前にて御申の御詞、古へよりの御形も、更以無相違由承候也、妙養院殿常德院殿など御前にて被仰しをば、拙者など傳承候也、其故は大御酒の時、御供乘召出に參事每々有之、總別は御臺樣御前へ御中の召出は、男衆はさうなき事なれど、去應仁亂中より、種々御供乘は御臺樣御中の召出も有之て、拙者なども參上せし間、まのあたり承たる事也、殿文字を被仰にてはなくて、假令右馬頭のとて被仰て、御酒など御しゐ候て被下時は、假令三御ほり候へなど、被仰、其外とせられ候へ、かくせ

られ候へなど、兩御所御前にても被仰しなり、播者式迄も、惟如此御座ありしなり、〇中略

一御菓子のとき、御茶聞召候事、公私共に無之、但自然可被聞召由仰ニ付ては、御供衆持參也、

〔家中竹馬記〕一御供衆馬打の事、御太刀の役は一番也、主仁下馬めさるべき處を覺悟して、先馬より下て、返しもゝだちをおろし、主仁下馬あれば、則御太刀を取て持也、〇中略

一應仁より以前、天下無爲の頃までは、御供衆の小者は、皆一に成て、一番に御供する人の馬の先に走なり、〇中略

一御出仕の時、殿中にて當職の御供衆を始として、御前の次第准て、御供衆も座する也、引わかれても居なり、時宜のよき樣に見合せて、其かたの衆は一つれ〳〵に有なり、〇中略

一公方樣の御劍は、御供衆にても御一家の持るゝ也、何方へも御成の時は、馬上に左帶にして、我右に御輿の跡に被參なり、〇中略

一御前のらうそくのさきを取事、公方樣御覽せらるゝ御通りをば、御供衆の中にも御一家の被取なり、其やうは、膝まづきて、蠟燭をぬきてさきをとらるゝ也、

〔伊勢貞助雜記〕一諸大名幷諸侯衆、或忠節、或奉公人の勞によりて、高位高官に被成、或は其家を再興の例不珍、然時は、諸家よりは其の被成たる位ほどには可被扱事、勿論也、然ば先々よりもけむかくに可相進事也、其時は縱他所よりは、さやうに被扱候とも、此方は其分別可然候、其一代之儀は、いかにも其用捨も尤可然、二代とも候へば、被成たるほどらいに進退を被持可然之由、古人申習したることなり、或は申次は御供衆に被成、御供衆は又御相伴衆に參勤也、例非無之、其時の心得之趣、仍古常被仰事也、又貞親之法置たる物にも有之、可分別事也、

〔大館常興書札抄〕一御供衆江之事

松露一折御進上候、則致披露之處、意得候而可申上候御氣色候、猶期拜顏存候、恐々謹言、

月日　名乘判

右馬頭殿參進覽之候

引合十帖令拜受候、誠以祝著之至候、猶以拜顏可申入候、恐々謹言、

月日　名乘判

細川上總介殿進覽之候

先日ハ於殿中申承候、本望候、御經御成御供之事、可有御參勤之由承候、尤以目出存候、定而珍敷可爲御馬候哉、御床敷存候、恐々謹言、

月日　名乘判

赤松伊豆守殿御宿所

凡此趣也、御供衆中にては、細川典厩は、取分賞翫之儀なり、上總介殿とは備中守護の事也、淡路守殿因幡守護など同前也、又は御宿所とも書なり、次赤松豆州、其外伊勢守殿など同前也、

〔永享以來御番帳〕御供衆

一番 細川淡路入道全了　二番 桃井治部少輔入道常欽　三番 畠山播磨入道祐順　四番 畠山右馬頭持純

大館上總介入道祐善　畠山三河入道常滿　大館駿河入道常安　大館七郎

大館刑部少輔持房　小笠原備前守持長　中條判官滿平　三上近江入道周通

三上美濃入道年世　伊勢七郎貞親　伊勢因幡入道　伊勢下總守貞房

伊勢上總守貞安　伊勢左衞門尉貞彌

御供衆二ヶ番被分也

一番衆十一人〇中略 以上十一人畠山殿江御成ニ始參勤

一番衆〇中略 以上十一人〇中略

慈照院義政公東山江御移之已後御供衆

大館刑部大輔　畠山中務大輔　伊勢守　伊勢因幡守貞誠

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日

一公方様御様躰之事、先御便所へ御出成て、藤中納言殿御びんに被参て、御直垂をめさるゝ、其時御供衆、於御便所一列に掛御目、御部屋衆同之、上池院も其次に、千阿彌等も懸御目也、此段は應仁之亂前までの事也、亂以後は御供衆も御對面所にて、申次衆同ごとく被掛御目也、○中略

一細川淡路守正月朔日御笠懸引目、并御弓進上之事、其様躰は御供衆にて候間、淡州御盃頂戴にあたり候時、自身御前へ持参、右之手に御弓と蟇目とを取添て、にぎりより三寸計上を引さげて持て参て、左の手をば疊に付て、右にては弓のもとはずを疊に付きて、何とも不申入して、そと掛御目て、則御對面所之内、御前之左の方の向ひのすみに立申て、其後御盃頂戴なり、申次、公家と申入て、三職進上候御太刀を立申も、此御弓を立申と同所也、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御参宮、○中略

御供衆

細川兵部大輔勝久　匠作源門賢頁舍弟畠山宮内大輔政國　畠山播磨守　一色兵部少輔義遠

赤松刑部少輔貞祐　赤松有馬彌次郎　伊勢守貞親　貞親息同兵庫助貞宗

貞親舍弟同備中守貞藤　定御供衆御部屋衆也一色治部少輔　同上野刑部少輔

〔大館常興日記〕天文十一年閏三月廿五日、結城左衛門尉國縁杉原――晴盛兩人より御供衆中へ折紙在之、如此、

次第不同

大館伊與入道殿常

走衆

上野與三郎殿奉
大館左衛門佐殿奉　三人可ニ申付一候
吉見右馬頭殿
大館兵庫頭殿奉
伊勢因幡守殿奉
大館治部大輔殿
細川三郎四郎殿親候者參候間、同讀可レ預ニ御心得一候
朽木民部少輔殿奉

〔長祿二年以來申次記〕十二月卅日、歳暮御卷數之事は、今日以前にも所々より進上之儀も在レ之、雖レ然先御對面所之つぎに置レ之也、必其日受ニ取之一、申次御供番にて候へば、今日卅日可ニ參候義不定候へ共、其受取申候日、同朋衆、是は歳暮の御卷數とて參候へども、大卅日に所々のと一度に可ニ披露申一候間、當座には不レ及ニ申入一候、更に置申候、自然可レ被ニ心得一之由申置候也、

〔政所内評定記錄〕寬正七正廿六、內評定始、若君樣御座之間、於ニ春日亭一被ニ執行一、座上東也、○中略侍雜司四人祗候、百疋下行、公人中、一種一瓶、一獻料千五百疋、時宜如ニ例年一、御倉禪住須被レ改、御直垂、於ニ御上下一、直京極御成ニ御參候、於ニ路次一被レ待申、御成著到者、還御之時、可レ有ニ御披露一也、依レ爲ニ御供番一親春ニ渡候畢、

○按ズルニ、右二ヶ條ノ御供番ハ、御供衆ナラザルモノ將軍ニ供奉セシヲ謂ヘルモノニテ、御供衆トハ自ラ異ナリ、サレド參考ノ爲メ特ニ之ヲ揭グ

〔貞丈雜記役名四〕一御走衆(ハシリシウ)と云は、御成の時御道筋、又は御能有レ之時は、狼藉人を打擲しいましめらるゝ役也、ゑぼしすあふを著し、糯子のきやはんをはき、太刀をはき、はひきをさし、鐵鞭を持て御

供せらるゝ也、

〔相京職鈔 三〕走衆

猿藉ヲイマシムル職也、御成之時帯ニ刃引、六人闘ノ次第ヲ守リ御供ニ候ス、日没以後、金鞭ヲ執ル、(今ノ世ノ金棒是ヨリ起ル歟)

〔走衆故實〕一走衆の故實、仕來る儀なければ、委しくは存候はねども、先申傳侍るは、烏帽子(かけは心のまゝ也)上下にて、は引をさし、太刀をはき、かへしもゝだちをとりて參、日くれて御ちやうちんまいり候へば、金鞭をとり、手にさげて參候也、猿藉人の成敗は、時によるべし、衣裝は老若ともに、うすかろく出立たるがよし、あはせの下に、しろきかたびらを、重きたるがよく候由候、次第は闘取にて候、敷皮笠を用意すべし、走笠とて、笠のこしらへやうあり、○中略

一十月五日より三月三日までは、きやはんもゝはゞきをする、御きやうより以前はせず、たとひする時なれども、御道に川あり、雨ふりてつよくしるければ、きやはんもゝはゞきをとる也、きやはん色、多分こんのしゆす也、但茶の色にても著用の例有之、もゝはゞき色不定、

一慈照院殿樣(○足利義政)御代には、走衆男、大方同程なるをめしつれられ、笠なども一つを本としてそろへさせられ、御輿のさき、左の衆は左にさし、右の衆は右にさゝせられつるとて候、總別走衆の事、公事役の樣にむかしはなかりき、鹿苑院殿樣(○足利義滿)勝定院殿樣(○足利義持)御時は、畠山將監殿などに祇候、後には御さき打に被參候つるにて候、今川關口殿なども被參候つるにて候、伊勢黨被參例、無やうに沙汰候、○中略

一走衆出仕は、正月は朔日に祇候候、歲暮は大晦日にて候、

一走衆別に御番あり、一日に兩人にて候よし候、これも近年無人數候、又は定たる走衆、然々と無之間、番はなし、○中略

一御旅などにて御てうづ參候時は、走衆かけ申也、故實多し、〇中略

一同說、〇宗嫡走衆は、六人よりおほく被參候事は不承及候、十八人御用意候つれども、うちかへて六人より外は被參候はす候、三上殿先祖には、腹わたを走切て、被死候人之由候、達者ならではならぬわざにて候由、故人も被申由候、〇中略

一走衆はくたびれたる時は、そと土につきて休べし、御輿かきのかはる時の事也、然ばゑぼしにあたらぬ程の長さにこしらゆる、柄のさきに、木をもつのをも、又金をも入るゝ也、〇中略

一走衆十八人定たる時は、參所の事、くるり〱とまはりて、度々に被參けると也、近年は人數、不定間、不及是非也、皆々物語候、〇中略

一自然直奏申時、走衆申次樣躰、申狀を御小者に渡す、御小者請取て、御輿きはの走衆に渡すを請取、則申入候仁躰をば繩をかけさせ、かいかうへ渡候由候、其故に必走衆手繩をもたせ候事故實候、惠林院殿樣〇足利義稙御代、飯川能登守順職、親父の時、直奏候事あり、請取て披露可申樣躰ありしかば、還御ありて可聞召由被仰間、其まゝ懷中して、彼者をば右に如申、かいかうへ渡、還御ありて、以奉行可申入旨申上候處、最前之以筋目披露可申由被仰出、被聞召てかいかうに被仰付、御禮明候はん由、御返事候つるとて候、〇中略

一普廣院殿樣〇足利義教御生害の時、走衆市、遠山、曾治、伊勢平左衞門、小田圖書也、山本市、遠山殿は討死候、〇中略

飯能順職へ尋條々

一走衆に番を被仰付候時は、面の番、月行事、其外さきつちやうせん、七夕の花ふせひまでも諸役を不仕候、然を走衆番も不仕候、乍去月行事などもおもての儀は不仕候處、此四五年以前候哉、不謂事にて、おもての月行事をさへ仕候に候へば、花の事も同前候、此子細以面可申、前々は不

仕候事に候、

〔大内問答〕一御能の時、走衆庭上に祗候の由候、同田樂も同候仕のよし承及候、其樣躰いかゞ候事、走衆庭上に三人宛、兩人に六人祗候候、出やうは、はひきをさし、太刀に敷皮を持添候、いまだ表へ御出御座候はねば、舞臺の前を罷通、兩方に祗候候、御出以後に而御座候得ば、兩方一度に參合候樣にと慈照院殿樣〇足利義政被仰出候、以來は一方は舞臺の後を通り兩方同時に祗候候て、御庭の成敗被申付候、

〔殿中申次記〕正月朔日　長祿二戊寅御對面記

永正十八十日、御參內、年始御參內之御禮、〇中略走衆御太刀金進上之、

永正十三十四日、走衆、就一獻始之儀、各御太刀進上之、

〔年中恒例記〕正月十日、御參內次第事、〇中略御道をば走衆もゝだちをとり、太刀をはきて被參候、御立石より太刀を右の手にさげ、もゝだちをおろして被參也、

〔長祿二年以來申次記〕正月十四日、松囃事、夜に入て、御西向松御庭御かゝりなり觀世仕之、〇中略走衆は六人、庭上に敷皮にて伺公なり、

〔宗五大草紙下〕公方樣御成の樣躰の事

一御輿の時、御劍御輿に入候、常には走衆六人、左右に番して參られ候、次第は每度くじ取にて候、御こしの際左、其次右、其次さきの左、又右、其次中の左、又右也、中くぼに候、又御旅などの時は、久敷まいられ候仁、御こしぞへに左右共にまいられ候、其故は、所々の名をも御尋候はむずる爲也、又ふとして御手水をもかけ被申候、又御車の時は、ながえのきはをつのきはとて賞翫なり、御晴の時は、ほうい太刀はき參勤も其分に候、是もつの際の左一右二、但つのきは佐々木名字の衆子細候て、古へより參付られ候、御先は赤松名字の衆、伊勢名字參候、慈照院殿、常德院殿、大

將の御拜賀の時、伊勢名字參勤致し候、つのきは第一御先第二中次第にくばく候也、

〔日吉社室町殿參詣記〕應永元年九月十一日戊申、室町殿准三后從一位前左大臣征夷大將軍源義滿公、辰上刻出御、片庇四方輿、御狩衣、直衣、今路越、御力者十八人供奉、○中略衞府侍走衆十人、騎馬侍、伊勢七郎左衞門平貞長、同十郎左衞門、

〔永享以來御番帳〕走衆

後藤佐渡守　藤民部中務少輔　佐竹左京亮　小串下總守　遠山彥太郎　市新左衞門尉　長下總守　廣戶刑部丞　角田彈正忠

〔蜷川親元日記〕寬正六年正月十四日壬戌、入夜松御庭松囃能有之、○中略走衆如例庭上伺候、御小者當年不伺候、

〔齋藤親基日記〕寬正七年○文正元年二月廿五日、同日飯尾肥前守之桓亭御成、○中略走衆相伴、飯時玄良座敷、殿衆座敷也、備用家子、肴時玄良、忠郷、親基、○中略

一御走衆

後藤左京亮　長次郎左衞門尉　山縣左近將監　藤民部中務少輔　熊谷近江守　富永兵庫助

三月十七日、御參宮、○中略

一走衆六人、手替六人、乘馬打、御供衆後、

後藤左京亮　子息九郎　山縣左近將監　富永兵庫助　藤民部中務少輔　竹藤右京進　市六郎左衞門尉　同名三郎　遠山左京亮　富永助五郎　角田彌平次　廣戶次郎

〔二水記〕享祿四年八月廿九日、今日赤松母上洛也、此月中旬御湯立有之、輿三張、走衆三十人許、其外輿跡二百人許、超過之體也、

雜色

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歲十二月十九日壬寅日、於坂本樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣(後改義輝)御元服之次第、

御成次第十八日

十二月十八日辛丑、公方家幷若君、從東山慈照寺、到坂本御成、于時巳刻也、○中略

一若君御走衆六人、鬮次第、本江宮內少輔信富、杉原兵庫助晴盛、進士修理亮晴舍、沼田三郎左衛門尉光兼、安威美作守光備、飯河山城守信堅、帶刀、肩衣、四布袴、脚半著之、○中略

一公方御走衆十人、鬮次第、伊勢肥前守盛正、伊勢次郎左衛門尉貞清、千秋刑部少輔晴季、石谷兵部大輔光政、海老名刑部大輔賴重、狩野孫三郎光茂、矢島次郎定行、眞下彌太郎晴弼、大和小三郎□□彥部雅樂頭晴直、各帶刀、肩衣、四布袴著之、

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕

一三月(○永祿四年)卅日(未刻)御成、○中略

一御走衆之事、舞臺と御前の間、庭上に祗候之事、先規の段無紛儀候、雖然近年庭上に無祗候に付て、今日廐の東を四疊敷失禮(○出來備字、或作室禮)テ、於座敷六人御能見物、先規相違、各御越度歟、○中略

一御走衆六人參勤　石谷兵部大輔　籾井兵部少輔　小林民部少輔　進士源十郎

安威兵部少輔　安東藏人

但庭上には無祗候、廐の東を四帖敷失禮て祗候之、各太刀をば持てはひき被持之、一獻相伴、

〔細川家書札抄〕一御走衆之事

打付書に、いかにも〳〵如在にさうにあるべし、不及沙汰儀なり、

〔東寺執行日記〕貞和三年六月七日、祇園御輿迎有之、但少將井神人等、與武家小舍人雜色等引出喧嘩、神人一人被殺害云々、

公人番頭

〔松田貞秀記〕永和元年三月廿七日、石清水八幡宮御社參、當御代始、〇足利義滿御裝束如例、御淨衣御出、御車
新造自東寺御輿、四方〇中略雜色九人、車副、釜取以下、
〔松田貞秀記〕永享十二年七月廿五日、大將〇足利義敎御拜賀、供奉行列次第、〇中略雜色四人、淨衣
〔慈照院殿義政拜賀篇目〕一雜色事注云、永享觀光卿記、如木雜色六人云々、
永享祐光卿記、康曆度十人也、今度以省略之儀可被略之條可有難歟、如何之由被申攝政之處、御略
不可有難候、但康曆被召具之上者、少々可被召具之由被申之、仍六人被召具云々、
〔長享元年九月十二日常德院樣江州御動座當時在陣衆著到〕常德院殿樣〇足利義熙御動座之御出立
事
雜色之男共十人計、なしうちゑぼしに、黑き布直垂ニ、かへしも丶だちを高く取て、腰刀計也、
〔大館常興日記〕天文七年九月四日、御料所宮川御公用一向就無沙汰儀、御雜色を可被差下、以惣札
堅可申下候由、宮內卿殿より承之、〇中略御雜色は井上と思食候處、歎樂仕候由候間、西村可罷下分
也、開闔代布下被申付候也、如此御雜色被差下候事上意被知食たる事候哉、不然者そと可被入御
耳候歟、自然之時、一向不知食よし被仰候ては不可然存候旨、宮內卿殿へ以書狀申候處、御心へ候
御ついでに可被申入候、早々可差下候由承之也、　十九日、御雜色西村九郎左衞門方より、富森左
京亮かたへ注進之書狀十五日付也、到來、　九年三月廿四日、雜色以開闔言上、就諸役御免見入などの
役錢、先々より不致其沙汰處、今度荷物など押置申之間、成懸御下知申之、諸役免除候につきて、諸
關役錢不可致其沙汰之由候事、聊不審、然間先々御下知被召出之、其上にて御談あるべき哉、可爲
御糺儀由申之、
〔武家名目抄職名附錄十五〕公人番頭
按ずるに、公人番頭といへるは、鎌倉殿の雜色番頭なり、されどその給はりものは、公方より出る

ものゆゑに、公人と稱して、私の人にかへたるなり、番頭といへども、同じ身分のものにて、格別のものとは見えず

〔普廣院殿御元服記〕一永享二年七月廿五日甲子、申刻、大將御拜賀、供奉行列〇中略番頭八人

〔普廣院殿左大臣御拜賀記〕永享四年十二月九日、天皇〇後花園御元服由奉幣日時定、上卿左大臣殿〇足利義教御參內有御參賀儀〇中略御參內時、番頭八人、取松明左右前行、

〔蜷川親元日記〕寬正六年三月五日壬子、政所公人新加、右衞門次郞下旬番頭四郞五郞被執申之、

〔齋藤親基日記〕寬正六年八月十五日、酉刻神幸之間、自善法寺御參向、御車御供衆、走衆、御小者、番頭牛飼、

〔大館常興日記〕天文九年二月廿日、今日御臺樣、近衞殿へ御成在之、〇中略御こしのきはに、御先へは地下、公人番頭等參勤也、

〔貞丈雜記〕四役名一公人朝夕人ト云事舊記にあり、公人はくにんとよむ、〇中略公人も朝夕人も公事の時、公事とは公儀の事を云也、訴訟事を云にあらず、政所にてこまづかひする役人也、

〔成氏年中行事〕附錄一公方人ト云ハ、御中居殿原也、格勤ノ事也上文ニ見ユ公方者ト云ハ、御力者、御雜色、

〔關東評定傳〕一正嘉二年九月二日、諏方斬罪、俊基、牧等遠流、俊基者爲公人之間、殊遣硫黃嶋、相州禪門、故令評給、科斷之法、世以爲美談、

〔永享九年十月二十一日行幸記〕一從御臺女房達の御引出物〇中略

一女公人とも　得選二人　女官四人　女孺三人　刀自二人　主殿司二人　各練貫三重給之

〔年中恒例記正月〕一日、年中日とよく月とよくのたびごとに、御殿のむねを三所計、こもにてつゝみ申候也、檜皮師の役也、公人相副也、

朝夕

十日、禁裡樣御庭上著坐次第、〇中略御裝束唐櫃の宰領には公人つき申て、於長橋殿、御直廬に伺候の同朋、並藤中納言にわたし申也、〇中略

五月四日、蓬莀蒲御殿にふかる、、檜皮師の役也、公人、相添下行在之、

〔伊勢守貞忠亭御成記〕大永三年八月五日、未刻伊勢守貞忠亭へ御成、公方樣御十三歲、貞忠四十一歲、

條々可有用意事

一公人、御厩者、御輿舁、御牛飼、車ぞへ舍人、河原者以下、悉被遣、

〔親俊日記〕天文七年正月十三日戊子、大御所樣〇足利義晴へ若公樣〇足利義輝御一獻御申、御供衆以下、御美物可有御進納之由、以公人相觸、

〔長享年後畿內兵亂記〕永祿五年九月十二日、公方德政雖被懸之、三好筑州依訴訟德政不行、至十二月、以公人洛中洛外至邊土、德政不行旨被相觸者也、

〔貞丈雜記四役公〕一公人朝夕人と云事、舊記にあり、〇中略朝夕人は、ちやうむやくにんとよむ也、公人も朝夕人も公事の時、公事とは、公儀事を云也、訴訟事を云にあらず、政所にて、こまづかひする役人也、〇中略又朝夕人は參內などの時は、おと筒を持つ也、おと筒と云は、小便筒也、

〔年中恒例記正月〕十日、御參內次第事、〇中略御立石とて、伏見殿の邊に昔より石立之、其きはにて御下輿也、御輿の御あとへんに、御朝夕まいる也、

〔家中竹馬記〕一貫馬之次第是は其後次第に末は下る也

一番管領　二番山名殿　三番土岐殿〇中略

管領の御進上は、公方樣之御代官と云々、然間當職の御沙汰也、是を一の御馬共、管領の御馬共申、昔は一の御馬、二の御馬、三の御馬など、申けるを、中頃より山名殿の御馬、土岐殿の御馬など、、

其家々の御名字を申也、朝夕が役として喚也、されば御前なれども、いづれにも殿文字を申也、

〔佐竹宗三聞書〕一御所的をば、下地よりも朝夕役として誘へて、白布をかうくしにはりて、其上に的をかくる也、

一的の時の矢申、二人共に朝夕の役也、一人は數塚の方の後に畏、一人は的の方の前に畏時分に、的の方の矢申走はせず、足ばやに射手の二番三番目の間に畏、矢とり射手の脇に畏時分に、的の方の矢申、足早に行、又數塚の方の矢申、數塚二ッの間をとをりて、數塚より三間くち計行て、兩方のもの同樣に畏、兩人ながら、手を地につきて、的の方の者、前も後も矢四ッ、的にあたる時は、みなあたりところを高く申を、數塚の方の者承て、又かずづかの間をとをりて、日記付る人の前に畏、兩の手を地につきて、聲を高く、みなあたりと申て、前の所へかへりて畏也、

〔鹿苑院殿御元服記〕一同年〇永和元年四月廿五日、御參内始、〇中略

御劔　細川右馬助頼基今日被召御小侍所、召具朝夕畢、

〔普廣院殿御元服記〕一永享二年七月廿五日、大將御拜賀、〇中略

一御路掃除事、任先規被仰付侍所也、奉行人連署奉書、以朝夕送遣之、

〔朽木文書〕朝夕五郎次郎國繼、衣料五貫文事、早任例可被致其沙汰之由所被仰下也、仍執達如件、

左衛門佐（花押）

享德元年十二月廿六日

佐々木朽木殿

〔松田貞秀記〕長祿二年七月廿五日、任内大臣給、〇足利義政、中略、一御路掃除事、任先期被仰付侍所也、奉行人連署奉書、以朝夕送遣之、御路注文自廣橋家被出之、

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午歳十二月十九日壬寅日、於坂本樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣、後改義輝、御元服之次第、

一セウメイ〇明松役者、御朝夕四人參候、

〔東山殿年中行事〕上樣御被官

勢田大判事　大石雅弘　安藝大膳亮　山田三郎次郎　松波二郎　金山

但不限此名字計、當時御用ヲ勤仕シ、馳廻人一兩輩云云、

〔殿中申次記〕正月四日、御對面之次第、〇中略三番に大外樣、五ケ番衆奉行衆、上樣御披官一兩人、幷勢田判官、大膳亮、加治等、番方につゞきて懸御目也、

二月廿九日、總番衆、上樣御披官以下出仕、

〔年中恒例記十二月〕廿九日、總番衆其外上樣御披官一兩人、以下出仕、

〔奈留別志四〕被官を披官とかくは誤なり、支配したの事をいふなり、家來の事にはあらず、

〔貞丈雜記四役名〕一被官衆と云は、古知行所に地侍とて、昔より其地に居住し來りたる侍あり、其侍を地頭より支配して免し仕ふ也、被官と書て管せらるゝとよむ也、支配を受ると云ふ心也、家臣同意に地頭へ奉公する也、

古事類苑

官位部四十七

足利氏職員四

關東管領 政所 評定衆 引付 問注所 侍所 小侍所 評定奉行 御所奉行 越訴奉行 禪律奉行 併入

足利氏ノ時、鎌倉ニモマタ管領職ヲ置キ、之ニ屬スルニ政所、評定衆、引付、問注所、侍所等ヲ以テシ、以テ東國ノ政務ヲ統轄セシム、

初メ足利尊氏、關東管領ニ補セラレシハ、朝廷ノ命ズル所ニテ、武家ノ設ケシ職ニアラズ、尊氏之ヲ弟直義ニ傳ヘ、直義之ヲ義詮ニ讓リ、義詮又弟基氏ニ讓リシハ、皆武家ノ私ニシテ、朝廷ノ知ル所ニアラズ、然レドモ武家遂ニ國命ヲ執リシヨリ、基氏ノ子孫相繼ギテ關東管領タルコトヲ得タリ、當時世俗ニテ、其執事ヲ或ハ管領ト呼ビシカド、幕府ノ執事ヲ專ラ管領ト稱スルニ及ビテ、關東ノ執事モ亦之ニ倣ヒ、常ニ管領ノ號ヲ用ヰル、是ニ於テ君臣其稱ヲ同ジクスルヲ嫌ヒ、基氏ノ子孫、自ラ關東管領ノ號ヲ捐テヽ、悉ク京都ノ制ニ效ヒ、或ハ御所ト稱シ、又ハ公方トイヒ、俗間ニハコレヲ關東將軍ト稱スルモノアルニ至レリ、是ニ於テ管領ノ號ハ、全ク陪臣執事ノ稱トナレリ、又初メ尊氏關東ヲ管領セシヨリ基氏ノ代ニ至ルマデハ、斯波、畠山、高、上杉ナド、一門家人ノ別ナク此職ニ擧用セラレシガ、貞治中、上杉憲顯再ビ之ニ補任セシヨリ後、他姓ノ人又此職ニ補スルコトナク、上杉一家ノ世職トナレリ、上杉氏ニ管領トナルベキ家兩家アリ、一ヲ山内ト云フ、憲顯ノ子孫ナリ、一ヲ犬懸ト云フ、憲顯ノ兄憲藤ノ後ナリ、兩家互ニ此職ニ補セラレタリシニ、應永中、憲藤ノ孫氏憲、兵ヲ起シテ一門ノ

殄滅ヲ致シヽヨリ、山内家、獨リ管領職ヲ襲ギシガ、足利持氏ノ死後ハ、上杉氏、暫ク足利氏ニ代リテ管領ト爲リ、關東ノ政ヲ行ヘリ、時ニ大亂ニ際シ、屢變革アリ、數世ノ後、山内憲政ノ家大ニ衰フルニ及ビテ、其臣長尾輝虎ヲ養子トシテ此職ヲ讓リ、直ニ幕府ニ屬セシニ、輝虎卒シテ後、上杉氏遂ニ其職ヲ失ヘリ、

管領代以下ノ職掌ハ、並ニ幕府ニ同ジ、中ニ就テ侍所ノ所司ハ、千葉氏ヲ以テ世職トシ、之ニ小山、長沼、結城、佐竹、小田、宇都宮、那須ヲ加ヘテ、關東ノ八家トモ、關東ノ八將トモ稱シ、之ヲ幕府ノ四職ニ擬シ、毎ニ評定等ニ預リシナリ、

家務ハ執事ノ家政ヲ執ルモノヲ云フ、山内家ニハ長尾大石ヲ以テ家令トシ、扇谷家ニハ太田上田ヲ以テ家令トセシガ、長尾太田ハ其上首ニテ、其職ヲ世々ニスルヲ以テ、一家之ヲ呼ビテ家務ト稱シ、俗間或ハ稱シテ執權ト云ヘリ、

〔太平記十三〕足利殿東國下向事附時行滅亡事

諸卿議奏有テ、急足利宰相高氏卿ヲ討手ニ可被下ニ定リケリ、則勅使ヲ以テ、此由ヲ被仰下ケレバ、相公、勅使ニ對シテ被申ケルハ、去ヌル元弘ノ亂ノ始、高氏御方ニ參セシニ依テ、天下ノ士卒、皆官軍ニ屬シテ、勝事ヲ一時ニ決候キ、然バ今一統ノ御代、偏ニ高氏ガ武功ト可云、抑征夷將軍ノ任ハ、代々源平ノ輩、功ニ依テ其位ニ居スル例、不可勝計、此一事殊ニ爲朝爲家、望ミ深キ所也、次ニハ亂ヲ鎭メ治ヲ致ス以謀、士卒有功時節ニ賞ヲ行ニシクハナシ、若註進ヲ經テ軍勢ノ忠否ヲ奏聞セバ、擧達道遠シテ、忠戰ノ輩、勇ヲ不可成、然レバ暫東八箇國ノ管領ヲ被許、直ニ軍勢ノ恩賞ヲ執行フ樣ニ勅裁ヲ被成下、夜ヲ日ニ繼テ罷下テ、朝敵ヲ退治仕ルベキニテ候、若此兩條勅許ヲ蒙ズンバ、關東征罰ノ事、可被仰付他人候トゾ被申ケル、此兩條ハ天下治亂ノ端ナレバ、君モ能々御思案アルベカリケルヲ、申請ル旨ニ任テ、無左右勅許有ケルコソ始終如何トハ覺ヘケル、但征夷將

軍ノ事ハ、關東靜謐ノ忠ニ可依、東八箇國ノ管領ノ事ハ、先不可有子細トテ、則綸旨ヲ被成下ケル、

〔太平記十四〕新田足利確執奏狀事
足利宰相尊氏卿ハ、相摸次郞時行ヲ退治シテ、東國軈テ靜謐シヌレバ、勅約ノ上ハ、何ノ子細カ可有トテ、未ダ宣旨ヲモ不被下、押テ足利征夷將軍トゾ申ケル、東八箇國ノ管領ノ事ハ、勅許有シ事ナレバトテ、今度箱根相摸河ニテ合戰ノ時、有忠輩ニ被行恩賞、先立テ新田ノ一族共拜領シタル東國ノ所領共ヲ悉ク闕所ニ成シテ、給人ヲゾ被付ケル、

〔鎌倉大日記〕延元元年丙子　二年丁丑　斯波陸奧守家長、爲管領被指置處、爲顯家於杉本觀音寺自害、
左馬頭號錦小路〇直義　自今年關東十ケ國管領〇〇〇〇

〇按ズルニ、直義兄尊氏ノ付託ヲ以テ、關東ヲ管領シ、家長又其代官トシテ、鎌倉ヲ守リシナラン、

〔太平記十四〕新田足利確執奏狀事
義貞朝臣是ヲ傳聞テ、同奏狀ヲゾ上ケル、其詞曰、〇中略前亡餘黨纔存、揚蟷螂怒之日、尊氏申賜東八箇國管領、不敍用以往勅裁、養寇堅恩澤、害民事利欲、違勅悖政之逆行、無甚於焉、〇中略諸卿重テ僉議有テ、此上ハ非疑處、急ニ討手ヲ可被下トテ、一宮中務卿親王尊良〇〇〇〇ヲ東國ノ御管領ニ成シ奉リ、新田左兵衞督義貞ヲ大將軍ニ定テ、國々ノ大名共ヲゾ被添ケル、

〇按ズルニ、足利尊氏ト尊良親王トノ東國管領ハ、朝廷ヨリ命ズル所ニシテ、後ノ管領トハ異ナレド、其名ノ本ヅク所ヲ知ラシメンタメニ、之ヲ此條ノ首ニ置ク、

〔太平記十九〕奧州國司顯家卿上洛幷新田德壽丸上洛事
八月〇元弘三年十九日白川關ヲ立テ、下野國ヘ打越給フ、鎌倉ノ管領足利左馬頭義詮、此事ヲ聞給テ、上杉民部大輔、細川阿波守、高大和守、其外武藏相摸ノ勢、八萬餘騎ヲ相副テ、利根河ニテ支ラル、

追二奧勢跡一道々合戰事

大將左馬頭殿ハ、其比纔ニ十一歲也、未思慮アルベキ程ニテモヲハセザリケルガ、ツク〴〵ト此評定ヲ聞給テ、抑是ハ面々ノ異見共覺ヘヌ事哉、（○中略）苟モ義詮東國ノ管領トシテ、タマ〳〵鎌倉ニアリナガラ、敵大勢ナレバトテ、爰ニテ一軍モセザランハ、後難遁レガタクシテ、敵ノ欺ン事、尤當然也、

〔鎌倉大日記〕康永元年（壬午）

義詮（十月二日元服、十三歲、此時未二將軍一、只號二鎌倉殿一、）

〔難太平記〕大御所（○足利尊氏）錦小路殿（大休寺殿○尊氏弟直義）の御中違の時も、一天下の人の思ひし事は、當家の御中、世をめされん事まで、あながちに御兄弟の間をば、いづれと不ㇾ可ㇾ申とて、兩御所に思ひ〳〵に付申き、其時も諸人の存樣は、大休寺殿は、政道私わたらせ給はねば捨がたし、大御所は、弓矢の將軍にて、更に私曲わたらせ給はず、是また捨申がたしと也、中御所（○足利基氏）と寶篋院殿（○足利義詮）をば、大御所さすがに御父子の事にて、捨申させ給ひがたく、大休寺殿も又おなじ御兄弟ながらも、あはれなる御志どもにて、中先代の時、箱根山よりして天下をも御當家をもゆづり申給ひし事を、大御所はおぼしめし忘給はで、只いかにもして、大休寺殿より寶篋院殿へ、うつくしく天下をゆづり與申させ給へかしとの御方便ゆへに、攝州井出の合戰の時も、師直師泰うたれしをも、大御所はとがめ申させ給はざりき、又由比山の合戰の後、上杉民部大輔（○憲顯）自伊豆山引分て落行しにも、大御所とがめ申させ給はで、又御合躰いとゞ定りたりき、就夫兩御所（○尊氏直義）ひそかに御談合有けるにや、京の坊門殿（○義詮）は、如何に申させ給とも、御あらためさせ給がたし、然者終に天下をたもたせ給がたかるべし、たとひ少々御政道たがふ事ありても、關東大名等一同せば、日本國の守護たるべし、然ばまた此御兄弟の御中に、かまくら殿を置申されて、京都の御守目になし

申されて可有目出と御内談ありて、坂東八ヶ國をば光王御料基氏に讓申されて、御子々孫々、坊門殿の御代々の守たれと、くれぐ\申をかせ給ひし也、其後兩御所隱れ給ひし後、京都を恨申當、內々連々、關東を勸申樣なりしかども、終大御所の御素意を專とせさせ給ひしを、自京都は大体寺殿の御申によりて、鎌倉を別に取立申さるとおぼしめしつめられて、御內心は御怖畏有しにや、如斯にては終に天下の可有煩と思召て、諸神に御ちかひありて、大鎌倉殿基氏、寶篋院殿に先立申させ給ひけるとこそ承及しかども、實說は人の可知にあらず、

〔太平記三十三〕新田左兵衛佐義興自害事

古ヘ新田義貞ニ忠功有シ族、今畠山入道道誓ニ恨ヲ含ム兵、竊ニ音信ヲ通ジ、頻ニ媒ヲ入テ、催促ニ可隨由ヲ申者多カリケレバ、義興今ハ身ヲ寄ル所多ク成テ、上野武藏兩國ノ間ニ其勢漸萠セリ、○中略此事無程鎌倉ノ管領足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓ニ聞ヘテケリ、

〔後愚昧記〕應安六年十一月廿五日、今夜被行小除目、參議源義滿將軍也、勳功左近中將源義滿、勳功左近少將藤原多賓、左馬頭源滿氏、○關東管領源基氏嫡息滿氏、氏滿誤、下文同、正四位下藤原宣方、從四位下源義滿、正五位下源滿氏、自餘雜任略之、

○按ズルニ、足利義詮、同基氏ノ鎌倉管領タルハ、直ニ幕府ニ屬スルモノニテ、亦後ノ管領ト異ナリ、

〔喜連川判鑑〕正二位征夷大將軍尊氏母從三位藤原淸子、上杉修理亮賴重女、

―正二位征夷大將軍義詮母從二位平登子、赤橋武藏守久時女、

延文三年十二月、任征夷大將軍、去ル貞和五年十月、高師直、師泰、奢侈ニ依テ、直義政務ヲ停止セラル、師直ガ計ラヒトシテ、上京シテ政務ニ預ル、基氏ニ鎌倉ノ管領ヲ讓ラル、○中略

從三位左兵衞督基氏（尊氏ノ次男、童名龜若丸、母從二位平登子、赤橋武藏守久時女、相摸守守時ガ妹、）
貞和五年十月、任關東管領職、上杉兵庫頭憲房一男民部大輔憲顯、高武藏守師直男播磨守師冬ヲ執事トス、○中略　貞治六年四月十六日、從三位左兵衞督基氏公逝去、于時二十八歲、號瑞泉寺殿、法名道昕、治十九年、

從三位左兵衞督氏滿（童名金王丸、于時九歲、）
五月御家督、○中略　應永五年十一月四日、從三位左兵衞督氏滿公逝去、于時四十歲、號永安寺殿、法名道全、治三十二年、

從四位左兵衞佐滿兼
十二月御家督、○中略　十六年七月二十二日、從四位左馬頭兼左兵衞佐滿兼公逝去、于時三十三歲、號勝光院殿、治十三年、

從三位左兵衞督持氏（童名幸王丸、于時十二歲、）
九月御家督、○中略　永享十一年二月十日、於永安寺御自害、于時四十二歲、號長春院殿、近臣數十人自害、治三十年、

左馬頭從四位成氏（童名永壽王丸）
文安二鎌倉沒落ノ砌、信濃國ニ落下リ玉フ、大井持光養立申、今年關東ノ諸家、京都ヘ訴申シ、鎌倉ヘ請待シ、如元公方ト稱ス、○中略　寬正二年、京都古將軍義教公四男左兵衞督政知、關東下向、伊豆北條ニ住ス、是ハ鎌倉ノ諸將京都ヘ申シ、關東政治ノ爲請待ス、政知ノ御子義通ハ、明應二年ニ上洛有、義政ノ養君ト成リ、翌年任將軍、義澄ト改ラル、

左馬頭從四位政氏
明應六年九月晦日、古河公方成氏逝去、于時六十四歲、號乾亨院殿、○中略　永正十六年、政

氏久喜へ御隱居、

義明 雪下殿右兵衛佐、小弓御所、八正院殿、

頼淳 左兵衛督、童名國王丸、

慶長六年五月十四日、於喜連川逝去、龍光院殿全山機公、子息國朝、頼氏、繼嫡家、

左兵衛佐從四位高基 童名龜王丸

享祿四年七月十八日、政氏於久喜逝去、號甘棠院殿吉山道長、○中略 天文四年十月八日、左兵衛佐高基逝去、號千光院殿高山貴公、

左兵衛督從四位晴氏 童名龜若丸

右兵衛佐從四位義氏 童名梅千代王丸 母北條左京大夫氏綱女

北條氏康補佐シ申テ葛西ガ谷ニ奉移、晴氏ハ關宿へ御隱居、 弘治元年十月、御家督、從五位下、任左馬頭、京都將軍義輝ノ御一字ヲ請ハレ、號義氏、三年二月敍從四位下、任右兵衛佐、○中略 永祿三年五月二十三日、晴氏於關宿逝去、號永仙院殿系山道統、○中略 天正十年十二月二十六日、右兵衛佐義氏於古河城逝去、號香雲院殿長山周善、

右兵衛督國朝 童名乙吉丸

天文七年、祖父右兵衛佐義明鴻臺ニテ戰死ノ時、息頼淳幼稚ニシテ房州へ落居、里見義弘年來輔佐之、天正十八年、關白秀吉ノ命ニ依テ嫡家ヲ繼、喜連川ニ住移ス、○下略

〔土岐家聞書〕一昔は、侍所は賞翫の職也、○中略 又關東の管領は、今も上杉也、是は格別なり、上職に准ぜず、

〔成氏年中行事 正月〕八日、若宮社務御加持ニ被參、○中略 管領子息兄弟出仕之時、被遣御馬ニハ、御使

御馬牽事、先規ヨリ無之、被座職時之禮儀也、管領職ハ公方樣ノ御代官ナル故也、職上表之時モ、先管領ト申間、禮儀同前也、

〔成氏年中行事〕一公方樣ヘ、管領外樣出仕之時、御盃御禮ナシ、目禮モ無之、御座二疊重ナレドモ、管領ニ御對面之時、御下アッテ御對面アリ、外樣奉公同前、

〔長祿二年以來申次記〕正月十日、白馬一進上候、判門田、(毎年今月、關東管領上杉雜掌、式日此分也、)

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

憲房━┳━憲藤(修理亮、中務少輔、關東執權、一方、曆應元年三月十五日、於信州討死、)
　　　┗━憲顯(執權、民部大輔、從五位下、越後守、安房守、應永元年四月晦日管領、)

〇按ズルニ、此時足利義詮關東管領タリ、故ニ此ニ執權ト云ヒ、管領ト云フハ、其執事ヲ謂フナリ、

〔太平記二十九〕師冬自害事附諏訪五郎事

高播磨守(〇師冬)ハ、師直ガ猶子ナリシヲ、將軍ノ三男左馬頭殿(〇足利基氏)ノ執事ニナシテ鎌倉ヘ下リシカバ、上杉民部大輔(〇憲顯)ト相共ニ、東國ノ管領ニテ、勢八箇國ニ振ヘリ、

〔鎌倉大日記〕貞和五年己丑

基氏(御下向)　觀應元年庚寅　關東兩管領、高播磨守師冬、十二月廿五日沒落鎌倉、翌年正月廿五日於甲州栖澤城被討了、其後戶部(〇上杉憲顯)一人管領、

〔喜連川判鑑〕文和二年七月、畠山阿波守國淸、鎌倉ノ任執事、

〔太平記三十六〕頓宮心替事附畠山道誓事

康安元年十一月十三日、關東ヨリ飛脚到來シテ、畠山入道道誓舍弟尾張守御敵ニ成テ、伊豆國ニ楯籠リ候間、(〇中略)其濫觴何事ゾト尋ヌレバ、去々年ノ冬、畠山入道、南方退治ノ大將トシテ上洛セ

シ時、東八箇國ノ大名小名、數ヲ盡シテゾ上リケル、此軍勢長途ニ疲レ、數月ノ在陣ニクタビレテ〇中略暇ヲモ不乞、抜々ニ大路本國ヘ下リケル、遙ニ程經テ、畠山關東ニ下向シテ、彼等ガ一所懸命ノ所領共ヲ沒收シテ、歎ケ共耳ニモ不聞入、〇中略餘ニ事興盛シケレバ、宗徒ノ者共千餘人、神水ヲ呑テ、所詮畠山入道ヲ執權ニ被召仕バ、每事御成敗ニ隨マジキ由ヲ左馬頭〇基氏ヘゾ訴申ケル、

〔太平記 三十七〕畠山入道道誓謀叛事附楊國忠事

畠山ハ、此十餘年、左馬頭ヲ妹聟ニ取テ、榮耀門戶ニ餘ルノミナラズ、執事ノ職ニ居シテ、天下ヲ掌ニ握シカバ、東八ケ國ノ者共ノ、命ニ替ラント昵ビ近付ケルヲ、我身ノ仁德ト心得テ、〇下略

〔喜連川判鑑〕貞治二年六月、上杉民部大輔憲顯、再任執事職、是ハ觀應頃、惠源禪門〇足利直義ニ屬シ、故將軍〇直義兄尊氏ノ御勘氣ヲ蒙ル、其後先非ヲ悔イ、鎌倉殿ヘ歎申ニ依テ御免ヲ蒙リ、〇中略此度還俗シテ越後ノ守護ニ補セラレ、任執事、

〔鎌倉大草紙 上〕尊氏公之御母、二位殿之御兄、上杉兵庫入道憲房、京四條合戰のとき、將軍の命にかはり討死あり、〇中略實子上杉修理亮憲藤、曆應元年より關東の執權を仰付られ、同年三月十五日、信濃國にて討死、其子幸松丸とて十四歲、二男幸若丸十二歲にてありしを、郞等石川入道覺道供して鎌倉へ參ければ、將軍大に感じ、兄をば左馬助朝房と號し、信濃越後を給はり、弟をば中務少輔朝宗と名付、上總國をたまはり、應永二年三月關東の執事被爲補し、犬懸の先祖是也、憲房の二男民部大輔憲顯、〇中略此人は尊氏公と錦小路殿〇足利直義御兄弟不和のとき、錦小路殿の味方に參しゆへ、將軍御にくみありけれども、案者第一之人にて、關東のかため、此人にあらずんば叶まじと思召ければ被召出けり、其上基氏公の御乳母子にて、おさなきよりいだきそだて被申ける間、旁々可然由にて、越後安房兩國を下され、鎌倉の御後見にて、山內殿の先祖是也、

〔賴印大僧正行狀繪詞〕觀應二年ノ頃、將軍〇足利尊氏ト錦小路殿〇尊氏弟直義ト不和ノ子細出來ス、爰上杉

ノ民部大輔憲顯、ヨシミヲ錦小路殿ニヨセテ城ヲ信州ニカマヘ、翌年ノ二月ノ末ニ、憲顯數万騎ヲ率シテ、武州將軍ノ陣ニ發向ス、〇中略實篋院殿、鎌倉ノ怨念ヲワスレテ、忽ニ降參ノ御教書ヲナサルヽノミナラズ、越後ノ國守護職ノ御教書到來ノ間、則城ヲ拂テ越後ヘ進發ス、〇中略カノ子息道讃〇憲能、道珍〇憲春、道合〇憲方、遺命ニ任テ知行相違ナシ、四代關東ノ管領相續ノ事、併院主ノ加持力也トテ、各掌ヲゾ合ケル、

〔喜連川判鑑〕從三位左兵衛督氏滿　貞治六年五月御家督、上杉民部大輔憲顯執事トシテ輔佐也、
　應安元年九月十九日、執事上杉民部大輔憲顯死去、〇中略次男兵部少輔能憲、執事職ニ補セラル、上杉中務少輔憲藤ガ男彈正少弼朝房、能憲ニ相並テ執事ト成ル、是ヲ兩上杉ト號ス、朝房ハ後ニ上京シテ都城ニシテ死ス、

〔諸家系圖纂〕十五上杉

憲房─┬─憲顯民部大輔(中略)關東執權、─能憲兵部少輔(中略)關東執權、
　　　└─憲藤中務少輔(中略)關東執權、此名字始、─朝房彈正少弼(中略)關東執權、

〔花營三代記〕應安五年十二月廿日、關東一方管領上杉兵部少輔入道〇能憲上洛、着三條西洞院大草太郎左衛門尉亭、

〔空華日工集〕永和二年五月九日、兵部〇上杉能憲問以臨終用心之一段、〇中略又兵部上表、辭管領職、遣余令白府君、余推讓少室、相與入府、啓管領上表之意、府君不允、還就兵部宅、報以不允之意、　十日、兵部重邀余與少室、懇聞于辭職之切、府君會議、乃曰、管領職、本系于京之樞府事、不敢專免、當急白京府、宜寛處而忍待之、慰諭諄々、余復報以白京之意、兵部顏色稍好如平日、人咸謂以脫重職、其病自除也、十三日、入管領第、先與房州和會白兵部辭職於京府事、次入臥內、與兵部談、畢參白府君、於是辭職之事既定矣、

〔喜連川判鑑〕永和三年四月十七日、上杉兵部少輔能憲死ス、○中略舍弟刑部少輔憲春被補執事職、

〔鎌倉大草紙上〕一永和五年己未三月三日改元、康暦元年に移る、美濃國土岐大膳大夫、嶋田が讒言にて御退治あり、國々の御勢をめさる間、關東よりは、此時之管領上杉憲春の舍弟憲方入道道合を大將にて五百餘騎、御旗を給り出勢す、此時京都の動閧に付而、内々すゝめ申人ありけるにや、鎌倉殿思召たつ事有、已に憲春に御評定あり、上杉大におどろき、諫奉るといへども御承引なし、思召定められたる御返答を承り、上杉いさめ兼て、我館山の内へかへり、○中略氏滿公へ御謀反叶まじきよしを再三自筆に書おき、持佛堂へ入て則腹切たまひける、法名道珍と號す、鎌倉殿大きにおどろき給ひ、忽に京都の公方將軍の御望をやめられ、御後悔ありて、同卯月晦日に、三嶋まで打立ける上杉安房入道道合に管領を被仰付、是は去三月十日に發向しけるを、三嶋に滯留ありて領狀を申上ける也、

〔喜連川判鑑〕康暦元年四月、氏滿京都將軍家ヲ謀リ玉フ、執事上杉憲春數諫言スレドモ許容ナシ、憲春諫メ兼テ報恩寺ニ入テ自害、氏滿公驚キ悔テ京都ト和平、同晦日、上杉憲春弟安房守憲方任管領職、始テ山ノ内ニ住、

〔今川記〕鹿苑院殿樣○足利義滿御政道あしくて、諸人うらみうとみ奉ければ、其比の鎌倉殿氏滿公、御政道も正しく、東國十一ヶ國御存知有り、○中略京都の御有樣、諸人内心は背申由聞召て、そのかみ尊氏公直義と御相談にて、基氏をかまくらに居へ御申有事も、京都の御政道たがひ給はば、關東より制し御申あり、又關東の御ちがひ目有ば、勿論京都より御制し御申ありて、他家に天下をうばはれ給はぬ樣にとの御謀なれば、今京の義滿公の御政道惡く、諸人恨奉るなれば、從關東征し御申ありて天下を治め、等持院殿○足利尊氏大休寺殿○尊氏弟直義の御存念を守り給ひ、天下萬民の爲に御逆心有べしとて、上杉刑部大輔憲春など、被仰合しかば、上杉いさめ申ける

は、京鎌倉兩方に御座候へば、互に御守りにはならせ給へ、今京都をはろばし御申あらば、唯兩頭の爲有て、毒を食て一ッの躰を失ふに同じと申ければ共用ひ給はず、上杉よしやいさめに死するは忠臣の道也とて、一紙の諫狀を書、氏滿へ奉り、康暦元年七月十九日、自害し果給ひければ、氏滿も驚き、是非御逆心も難叶して、思召とゞまりけり、

〔頼印大僧正行狀繪詞〕一字金輪ノ法ヲ殿中ニヲイテ始行、是ゾ護持僧ノ御祈禱ハジメナリシ、件ノ僧六口毎事息災ノ法ナリ、此法中ニ大慶三ヶ條アリ、一ニハ關東前ノ管領上椙刑部大輔入道道珍、去三月八日自害ノ剋、舍兄道合、土岐善忠對治ノ大將トシテ、數万騎ヲ率シテ上洛ス、暫伊豆ノ三嶋ニ信宿ス、爰ニ道合管領タルベキ由仰ラルヽ間、貴命ニヨリテ四月廿八日關白ノ時分ニ還參シテ出仕ス、二ニハ道珍自害ニヨリテ、關東野心ノ由洛中ヘ徹スル間、武衞〇足利氏滿旣テ自筆ノ告文ヲ認テ、瑞泉寺古天和尙ヲ使トシテ、將軍ヘ陳謝申サルヽ處ニ、五月二日、將軍自筆ノ狀ヲモテ、子細アルベカラザル由返事アリ、三ニハ、京都管領未定ノ處ニ、同日志波ノ治部大輔義將ヲモテ、其仁ニ補セラル、都鄙ノ兩管領、同時ニ定マリシカバ、息害ノ義、悉ク和睦ニ歸ス、

〔鎌倉大日記〕永徳二年壬戌執事安房入道道合正月十六日、管領職上表、六月廿七日、亦還補、俗名憲方(上杉)四月晦日領掌

〔鎌倉大草紙上〕四月〇明徳三年廿二日、上杉房州道合、依重病て管領を辭し、子息憲定名代に被補、

〔喜連川判鑑〕應永元年十月廿四日、前管領上杉安房守憲方入道道合卒ス、　十二月三日、上杉兵庫助憲孝病ニ依テ管領職ヲ上表ス、

〇按ズルニ、憲孝ハ上杉系圖ニ安房守憲方一男、從五位下兵庫頭、明徳三壬申年九月二十六日死、二十六歲、法名大梁敬公トアリテ、本書ト合ハズ、

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

朝宗（中務少輔、上總國守護、（中略）應永二年三月九日任管領、號釋迦堂管領、（中略）應永十二年九月十二日薨）

〔鶴岡事書案〕就當社座不冷以下御寄進事、應永七庚辰六月三日、執行法印御房（尙賢）與南藏坊（俊誉）兩人、管領方へ被參、當社御勤料所者、或依爲遠國令不知行、或雖爲近國、依旱水雨損、有名無實定候、雖然於代々被定置御勤等者、無懈怠令勤仕候間、大略致無供勤行候由被申之處ニ、管領御返事趣者、御寄進事、尤可然候、以目安可有御申、如何樣可付奉行人之旨御返事在之、

〔旅宿問答〕安房守憲定、（○上杉）應永十二年八月十七日管領職玉リ、同十九年壬辰十二月十八日、卅八歲ニシテ死去、大全長基光照寺殿也、次ニ右衛門佐氏憲一兩年爲管領職、

〔鎌倉大草紙上〕七月（○應永十七年）廿二日、御年廿二にて御早世あり、（○足利滿兼）勝光院殿と號す、（○中略）鎌倉の執事をば、上杉右衛門佐氏憲に被仰付、（○中略）明る年の同（○應永）十九年十月、管領上杉安房守入道大全（○憲定）死去す、行年三十八歲、號光照寺、同名犬懸右衛門佐入道禪秀に管領を給はる、

〔禪秀記〕應永十九年十月十八日、關東管領上杉安房守入道大全死去ス、行年三十八歲、號光照寺、同名右衛門尉入道禪秀ニ管領ヲ給ル、犬懸入道是也、四五年之間、政道モ直ニテ民之煩もなかりけり、

〔鎌倉大草紙上〕一應永廿二年四月廿五日、鎌倉政所にて御評定のとき、犬懸の家人常陸國住人、越幡六郎某、科ありて所帶を沒收せらるゝ、禪秀、さしたる罪科にあらず、不便のよし扶持せらるゝ、間、以の外に御氣色を妨りける、禪秀は道の道たる事をいさめず、法外の御政道に隨ひ奉りて、職にゐて何の益かあらんと述懷して、同五月二日管領職を上表申されしかば、かやうの事、彌上意を奉令輕と御腹立有、則收上表畢、同月十八日に故大全の子息安房守憲基、管領に被補、

〔旅宿問答〕其時ノ鎌倉殿ヲバ、持氏將軍ト申ス、（○中略）上杉安房入道大全死去、後同名右衛門入道犬懸ノ禪秀、（○氏憲）ニ管領職ヲ給リ、四五ケ年ノ間、政道ヲ改ム、途ノ亂ル、事ヲ直處ニ、良藥口苦ク、忠

言耳逆ル習ナレバ、連々背上意コト既ニ多、然ニ應永稱光院廿二年四月末ッ方、常陸國ノ住人越幡六郎、無差罪科所帶ヲ被沒收候程ニ、禪秀再三不便之由被申候處ニ、上意以之外ノ御氣色ノ間、禪秀被思ケルハ、道ノ道爲コトヲ悦ビ、法ニ背コトヲ法トシテ不諫内、居職テ有何益乎トテ、五月二日ニ上表被申畢、上意連々御耳ニ逆ル儀、上意ヲ非分輕乎ト思召間、收上表畢、同十八日ニ、大全ノ嫡子安房守憲基ニ被仰付、

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

氏憲 上杉左衛門佐、應永二十年三月任管領、(中略)在職三年、(中略)同二十四年丁酉正月十日、依謀反於雪下別當坊、(中略)討死、法名禪秀、

〔湘山星移集〕應永年中將軍關東持氏長春院殿、京義持勝定院殿、京管領畠山徳本、細川左京大夫持之、法名道歡、○康富記云、嘉吉二年八月四日、先管領細河右京大夫入道常喜、今日逝去、四十三歲也、又非於其儀云、從四位下持之朝臣、與此異、關東兩管領、佐介殿、犬懸殿、佐介安房守憲基、法名海印、犬懸右衛門佐氏憲、法名禪秀、彼兩上杉不和、而常不斷雜說、佐介内内公方○持氏見御引汲間、禪秀、滿隆○氏滿三子持仲○持氏弟進被申謀叛企、既見事候間及合戰、佐介敗北、而憲基越後差而有敗走、持氏公、大藏御所忍出御、塔辻篝燒警固申間、山路經廻、三浦由井濱御出相州、經駿河御透候、箱根別當案內者迚御供申也、應永廿三丙申十二月合戰也、然間禪秀滿隆仰被申分也、持氏公、駿河今川上總介憑給、又安房守憲基越後ヨリ京都言上相調、後年攻下間、滿隆御生害、同上杉右衛門佐入道禪秀、幷子息以下、悉於鎌倉雪下滅亡也、

○按ズルニ、氏憲敗死スルノ後、犬懸ノ流斷絕シテ、山內氏ノミ管領ニ補スルコト、ナレリ、

〔鎌倉大草紙上〕安房守憲基は、いかゞおもひけん、同○應永二十四年五月廿八日職を辭し、三嶋へ下向ありしを、やう〳〵に被仰下ければ、五月廿四日鎌倉に返り參り、六月卅日、また管領に成給こそ目出度けれ、○中略廿六年三月六日、上杉安房守憲基、病に伏て管領を辭し、子息四郎憲實、當職を承り安房守に任す、

〔花營三代記〕應永卅一年十二月廿七日、大御所〈○足利義持〉御方、貢馬ニ管領へ成也、貢馬注文御方へ參書寫、

一鴾毛　管領〈私ニ書、畠山右衛門督入道道端、○中略〉

東國　殘ハ自公方出

上杉四郎〈○憲實〉鎌倉管領也、

〔建内記〕嘉吉元年七月廿八日、傳聞鎌倉故持氏卿子息於兩人者、其比被誅了、所殘今一人已擒之者、濃州垂井邊、於路次可誅歟之由注進之時分、普廣院殿〈○足利義敎〉薨御了、仍沙汰付鎌倉、以彼可總相續之由、管領已下評定事了、以上杉房州〈○憲實〉如元可爲鎌倉管領〈執事也〉之由、同評定了、仍自垂井可有下向鎌倉由風聞之所、今日彼小生京着、直御渡管領宿所云云、

〔鎌倉大草紙〕下鎌倉成氏ハ、同姓持氏一亂之時、永享十一年十一月朔日、永壽王と申、〈○中略〉信濃へ落行、大井越前守持光を賴居給ひしか、同十三年〈○嘉吉元年〉三月四日、舍兄二人、常陸國中郡に蜂起して逆心を企、同廿一日結城氏朝をたのみ籠城有しかば、大井持光が家臣、蘆田淸野二人をつけて、六才の時、結城の城に籠城す、結城落城の時、兄弟三人生捕にして上りけるを、舍兄二人は、〈十三十二、○中略〉美濃國垂井の道場金輪寺にて生害す、永壽王殿は六才にて、いまだ東西不覺の躰なれば、一命を助、美濃の守護土岐左京大夫にあづけらる、〈○中略〉關東には上杉安房守入道、鎌倉に居住して政務をつかさどりける、〈○中略〉爰に越後の守護人上杉相模守房定、關東の諸士と評議して、九ヶ年が間、毎年上洛して捧訴狀、基氏の雲孫永壽王丸を以、關東の主君として、等持院殿〈○足利尊氏〉の御遺命を守り、京都の御かためたるべき由、〈○中略〉丹精を盡し歎き申ければ、〈○中略〉寶德元年正月御沙汰ありて、〈○中略〉永壽王殿をゆるし、亡父持氏の跡をたまはり、〈○中略〉同二月十九日、關東へ下らるゝ、〈○中略〉これにより上杉相模守〈○房定〉は、越後上野の境へ出むかひ、政事を輔佐し、同顯定は、上野國府中へ參、

還御の御支度を馳走被申、八月廿七日、上州白井をたち、鎌倉へ趣き給ふ由聞へければ、上杉安房守〇憲實も御迎に可參と支度しけるが、いや〳〵御父持氏兄弟、御兄三人まで、憲實が爲にうせ給ひし事、定て恨めしく思召、身のため子孫のため大事なりとぞんじ、同廿六日の夜、子息三人同道して伊豆國へ落行、爰にて出家して行方しらずなり給ふ、永壽王殿は、〇中略同九月九日、鎌倉へ還御、初は山の內の龍興院に御入、後には淨智寺に御入有て、御所御造營なり、其間京都より御下知有て、上杉安房守行衞を御尋候へども、伊豆國名越の國淸寺にて、子息二人ともに出家となり、〇中略末子龍若丸、幼少なりければ、伊豆の山家に隱し置けるを、老臣ども漸々尋出、京都へ此由申ければ、たとへば幼少成とも、老臣ども令輔佐、管領に任じ、山內扇谷の兩家の輩相談にて、京都の御下知をうけ、政務を專に可致之由被仰下、去間同年十一月晦日、御所出來御移あり、京より御一字を下され、永壽王殿御元服ありて、左馬頭成氏と申、龍若丸は、上杉右京亮憲忠と號す、

〔新編相模國風土記稿〕二建置沿革國造國司

基氏ヨリ四代ノ管領持氏ガ時、執事上杉憲實ト確執起リ、永享十一年、持氏終ニ自殺シテ、鎌倉管領茲ニ廢絕ス、是ヨリ上杉兵庫頭淸方、獨國政ヲ專ニシ、押テ管領ト稱スレドモ、鎌倉主ナキガ故、國中穩ナラズ、此際凡九年、文安四年、持氏ノ末子永壽王、父ノ遺趾ヲ襲テ、鎌倉ニ還住シ、左馬頭成氏ト稱シテ、關東ヲ管領セシガ、〇下略

〔康富記〕享德三年十二月廿七日甲辰、後聞是日鎌倉殿〇足利成氏被誅管領上杉右京亮〇憲忠於御所被出拔云云、故鎌倉殿之御敵之故者哉、

〔結城戰場記〕成氏之御事

享德三年十二月廿七日、公方成氏、密々結城氏朝ガ子成朝ト相謀テ、鎌倉西ノ御門ニテ、管領右京亮憲忠ヲ被誅ニケリ、是ハ父ノ公方長春院殿持氏、憲實ノ爲ニ被亡玉フ事ヲ恨思召ケル故ニ、上

杉一家ヲ御退治有テ、カノ御イキドホリ休メ率ルベキトノ御企也ケレバ、〇此間恐有二脱誤一斯ニ上杉ノ老臣長尾左衛門尉入道昌賢ト云者、智謀無双ノ故兵也、此人計コトヲ廻シ、越州ヨリ上杉民部大輔房顯、〇憲忠弟其比十四歲ニテ御座ケルヲ呼越、上州ノ境ニ楯籠、公方家ト合戰ニ及事已ニ四ケ年ニ、八ケ國ノ軍兵ヲ本ノゴトクニ討治メ、房顯山內殿ニ移リ、關東ノ成敗ヲ司リ、執權スベキ由京都ヨリ御敎書到來ス、公方成氏、終ニハ打負給テ鎌倉ヲ打捨、下野國古河ノ庄ニ被二移居一玉フ、是ヲ古河。。。。ノ御所。。。。ト申奉、從レ是關東大ニ亂テ、三十餘年、在々所々ノ合戰一日モ靜ナル事ナシ、

〔鎌倉大草紙　下〕長祿元年六月廿三日、澁川左衛門佐義鏡を大將として武藏國へ被二指下一、是は公方〇足利義政の近親にて、代々九州探題の家なれば、諸家もおもき事におもひけるうへ、祖父〇澁川系圖爲二義鏡曾祖父一左衛門佐義行は、久鋪武藏の國司にてあり、其時より足立郡に蕨と云所を取立、居城にして、今に至まで此所を知行しければ、旁此仁可レ然とて義鏡を探題になしたまひ、御下知の通、武州上州の兵どもに申聞せ、成氏を退治して、上杉を管領として關東を治むべきの趣を觸渡す、板倉大和守先立て罷下、此由を申ければ、上杉方の兵ども各馳集、澁川殿へ參會して、京公方の御下知を承、其年長祿元年四月、上杉修理大夫持朝入道、武州河越の城を取立らる、太田備中入道〇資清は、武州岩付の城を取立、同左衛門大夫〇資長は、武州江戶の城を取立ける、成氏も同年の十月、相州下河邊古河の城普請出來して、古河へ御うつりありける、京都より澁川殿探題にて下向あり、武藏相摸の兵を集め、東の常緣、兩總州の兵共を下知しければども、東國の兵共、猶以成氏を背く者なし、いかさま京都公方の御子を一人關東の主として御下向ありて、關東の公方と定、彼御下知にあらずば、關東治がたきよし諸家言上しける間、此儀尤しかるべしとて、將軍家の御舍弟、香嚴院殿と申て、禪僧にて天龍寺に御座有けるを、長祿元年十二月十九日、廿三才にて俗に返し申、左馬頭政智と付、上杉中務丞爲二上使一、〇中略同月廿四日、伊豆國迄御下着有、〇中略鎌倉には御所もなく、要害惡鋪、敵

地も近ければとて、伊豆の北條に堀越といふ所に、かりに屋形をたて、伊豆國を知行せらる、

〔結城戰場記〕堀越ノ御所御下向事

政知卿、足利御ノボリ有テ、御子茶々丸公ヲ北條ニ留玉フ、是ヲ後ニハ成就院ト申ケル、山内扇谷ノ兩管領、東海ノ掟ヲ司リ、關東ノ執權ス、中ニモ山内殿ハ上杉ノ惣領ニテ、長尾一家ノ長者ドモ、其家ヲ輔佐シ政務ヲトリ行フ、上州越州伊豆武藏等分國ナレバ不レ及レ申、其外家來ドモノ領知モ廣大ナレバ、軍勢凡廿万騎トゾシルシケル、扇谷殿ハ、上杉家ニテモ庶流ニテ、分國モ少シ、家老ニモ大軍ノ兵ナシ、漸山内ノ家中、長尾ノ領地ホドナラデハナシ、少身ナレドモ大將定政、智謀深キ人ニテ、諸家モ重レ之テ、万人傾レ首寄レ心テ、家老太田備中守入道、知仁勇ノ三德ヲ兼タリキ、君明ニ臣直ニ、國ノ福ナレバ、其下ノ軍勢、何モ義ヲ專ニシテ畏二天命一、國郡富貴シテ民靜ニ、佞人自去テ賢臣集リシカバ、大家ノ山内ヨリ、人ノカツカウモオビタヾシ、

○按ズルニ、本書及ビ豆相記ニ山内扇谷ヲ以テ、兩管領ト爲シヽハ誤リナルベシ、扇谷家ニテハ絕テ此職ニ補セラレシコトナシ、宗長ガ駿河日記ニ、永正元年九月初ニ、鎌倉山内扇谷號二兩上杉一、山内管領職、年楯トミエ、兩家ヲ以テ兩上杉ト稱セシコトハ、ナホ多クノ書ニミエタレドモ、兩管領トイヘルハ甚ダ希ナリ、武家名目抄ニモ是事ヲ辨ジテ、世ニ或ハ山内扇谷兩家ヲ以テ、兩管領トイヘルハヒガコトナリ、コレ全ク兩上杉ト稱セシヲ誤レルナリトミエタリ、

〔諸家系圖纂〕十五上杉山内

憲實―憲忠 右京亮、文安四年丁卯九月廿五日、今川播磨守帶二綸旨一下着、享德三年甲戌十二月廿七日、於二鎌倉御所一爲二成氏一被レ誅、

―房顯 爲二憲忠猶子一、上杉四郎兵部少輔、母一色氏女、在二鎌倉一十二年、寬正七年〇文正元年二月十二日、於二武州五十子一與二成氏一對陣中病死、

〔御内書案〕寬正五甲申 飯尾左衛門大夫渡レ之

職〇管領上表事、如レ元可レ令レ存知一之由、先度被二仰遣一之處、猶以辭退之旨被二聞食一候、太不レ可レ然、任レ例可レ有二輔

佐也、

十月十六日　　　　　　　　　　　　御判

上杉兵部少輔殿〇房顯

文正元年丙戌、房顯遺跡事、息中一人領掌候者尤可然候、猶被官人委細可申候也、六月三日、上椙民部大輔殿〇房定　御判、

〔嘉吉記〕成氏古河へ引入玉へバ、關東ノ諸侍、我々ニナリ、互ニ私事ヲシ、隣境ヲ奪取ラント、騷動ヤムコトナシ、上州越州ノ境ニ居住スル上杉民部大夫顯定、兵ヲ發シ逆徒ヲ平ケ、東國無爲ニ屬ス、顯定卽鎌倉山ノ内ニ住シテ、自管領トナル、

〔妙法寺記〕永正七年、此年〇中略管領、〇上杉顯定越後ニテ長尾六郎ニ打レ給フ也、

〔相州兵亂記二〕可諄討死之事

永正七年六月廿日、顯定入道、長森原へ出合、散々ニ戰ヒ、尾六郎〇爲景ヲ追立ケル所ニ、高梨攝津守馳來テ、顯定ヲ討取申ケル、此人ハ上杉家中興ノ管領ニテ、〇中略法名ハ可諄大居士トゾ申ケル、

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

憲實—周清—憲房五郎右馬頭、永正十二年任管領、大永五年四月十六日五十九歲死、—憲廣四郎、養子、任管領、實公方源高基子、

房顯　顯定四郎民部大輔、右馬頭、實越後上椙相摸守房定次男、房顯無子息、依之長尾景信迎之、令顯定繼家督、于時應仁元年也、此年任管領、年十四、移山内、初號平井城、永正七年六月廿日、爲長尾爲景對治越後發向、遂得勝利、信州高梨蜂起、於椎屋討死、

〔相州兵亂記三〕江戶合戰之事

上杉官領憲房ハ、鉢形へ來リテ大ニ腹ヲ立、不日ニ人衆ヲ出シ、江戶ノ城ヲ取カヘシ、遠山ヲ討取ベシト、已ニ用意ト聞エケルガ、運ヤ盡タン、重病ニ犯サレテケレバ、〇中略明ル大永五年四月十六日、終ニ墓ナクナリ給フ、〇中略扨アルベキニアラザレバ、京都へ御意ヲ請テ、古河殿へ申、彼家督憲

政、幼稚ニシテ難叶トテ、公方ノ御子ヲ一人養子ニシ奉リ、憲廣ト名ヲ付奉リ、管領ト定メテ、長尾、白倉大石、小幡等ノ長者共、彼名代ニ關東ノ成敗ヲ司リテ、諸家ヲ支配スル事モトノ如ク、分國ハ無爲ニゾ治リケル、

〔天正年代記〕天文六丁酉、上杉憲正定管領、憲廣上總退、

〔相州兵亂記四〕河越之夜軍之事

天文十二年ノ比、關東管領上杉兵部大輔憲政ト、駿河ノ國司今河刑部大輔氏親ト相談シテ、駿河勢、小田原衆ノ籠リシ、長久保ノ城ヲ責ルト聞エケレバ、北條氏康長久保へ加勢ヲツカハスベキ由ギセラレケル所ニ、兩上杉、長久保ノ後詰ノ爲ニ、北條殿ノ城武州河越ヲ責落スベシトテ、兩上杉東八ケ國ノ勢ヲ拂テ、八萬餘騎ニテ同年九月廿六日發向シ、憲政ハ砂久保ニ旗ヲ立、先勢ヲ以テ河越ノ城ヲ稻麻竹葦ノ如クニ取卷タリ、河越ノ城ニハ北條左衞門大夫成○綱籠ケル、本ヨリ無双ノ猛將ニテ、關東伊豆駿河甲州境ノ戰ニ、每度魁殿ノ働、以寡勝多、萬死ヲ出テ一生ニ逢フ、其上氏康へ無二ノ陪臣タリシカバ、本ハ福嶋左衞門ナリシヲ、近年北條ヲ賜リ、北條左衞門大夫ト云、後ニハ上總介トゾ申ケル、彼人ノ指物ニハ黃色ノチリヲ四副四方ニシテ、八幡ノ二文字ヲ書ケレバ、時ノ人地黃八幡ノ左衞門ノ大夫トゾ名付ケル、サレバカヽル大剛ノ兵ナレバ、伊豆相模ノ兵ワヅカニ三千餘騎ニテ、上杉勢八万ヲ引受、晝夜且暮ニ戰ケル、其勢ヒ暴漲來テ、平地忽ニ江河ト成、大山崩テ海ヲ埋トモ、アヘテ頭ヲ動カスベカラズト見エニケル、其比古河ノ公方晴氏卿へ憲政使者ヲマイラセ、今度管領へ御合力アリテ、河越へ御動座ナサレ、氏康ヲ御退治アラバ、公方ヲ鎌倉へスヘ奉リアフギ奉ルベキ由言上ス、此公方ハ、故氏綱ノ御聟ニテ、氏康トモシタシク御座シカバ、氏康モ代官ヲ以テ被申上ケルハ、如何ニ管領ノ被申ト云トモ、只今何ノ科ニヨリテ當家ヲ御退治アルベキヤ、公方樣ハ、タトヒ如何ナル事アリトモ御動座アルベカラズ、今度ノ合戰

味方勝トモ、敵ノ勝テモ、皆公方ノ御家人ニテ、御下知ヲ請ル事ナレバ、一方ヘノ御加勢、イハレナシト細々ト被言上ケレバ、公方聞召テ、上杉ヘノ御合力ハナカルベシト定リケル間、氏康ヨロコビ、頓テ後詰ノ勢ヲ出シ、上杉ヲ追落セト評定アル所ニ、難波田彈正〇忠行小野參河守、古河殿ヘマイリ言上シケルハ、今度氏康言上ニツイテ、管領ヘ御合力ナキヨシ承リ候、實ニテ候ハヾ、甚以テ不可然存ズルナリ、抑公方管領ハ、尊氏將軍ヨリ以來、代々君臣水魚ノ忠德ニテ終ニ絕ザリシニ、長春院殿〇足利持氏ノ御代ニ、君臣不快ナリシ後ニ、加樣ニ關東ノ亂レトナリ、誰レカ安全ニ渡ラセ玉フ、今度タマタマ君臣合體ニテ、管領關東ヲ治メ、君ヲ御代ニツク奉ルベキヨシニう已ニ打立候ヘバ、早々御加勢アリ御動座可然氏康御緣者ニテ、不便ニ思召事最ナレドモ、祖父早雲ヨリ已ニ三代ニ至ルマデ、伊豆相摸武州ニ及ビ國郡ヲ治ルトイヘドモ、何レノ所カ公方ヘ奉リテ候ヤ、己ガ威勢ノツノルニマカセテ、公方管領ヲモ滅シテ、關東ヲ治メント計ヒ候ナレバ、今度彼ヲ御退治アリテ、御世ヲ持セ玉フベキ由頻リニ言上アリシカバ、公方則納得アリテ、天文十二年十二月廿七日、河越ヘ御動座アリテ御旗ヲ立玉ヘバ、關東分國ノ御勢馳集リ、河越ヲ取卷テ食ゼメニコソ詰ニケル、〇中略去程ニ上杉人々、氏康ニ打マケ、上州ヘ皈リシカドモ、次第々々ニ勢ヒ輕ク成行ケレバ、小田原ヘ內通スルモノモ多カリケル、然レドモ太田美濃守ハ猶岩付ニ在城シテ、江戶河越ヘ人數ヲカケ、度々ノ合戰ヤム隙ナシ、其外忍ノ成田下總守、新田、長尾、由良、深谷、安中、山上、和田、倉賀野以下、長野信濃守ヲ初メトシテ、大名數万騎有ケレバ、度々ノ戰ニ負シカドモ、國ヲバツイニ不被取、此管領、幼稚ニシテ、父憲房ニヲクレ玉ヒ、吾儘ニ成人シ玉ヒケレバ、カリニモ民ノ愁ヲ不知、人ノ嘲ヲ不顧、侈リヲ極メ色ニ艷リ、酒宴ニノミ日ヲ送ル、依之佞人ハ日ヲ追テ集リ、賢人ハ自去ル、サレバ上杉家此時ニ至リテ絕果ツベシト、見ル人眉ヲヒソメケル、

〔甲陽軍鑑五品第十三〕兩上杉、又中わろく成、北條家と取合の儀、喩ば三方論義の如し、されども北

條家をば少身とていやしみ、氏康公出給へ共、上杉家の人數二萬三萬むかひ、神奈川、品川、武藏の府中、たかいど、ところ澤、せたがやなどいふ所にて、氏康と兩上杉と都合八年の取合に、則政〇憲政公一度も出給はず、少敵とていやしめど、上杉家大將出ざる故、大合戰にも、こせりあひにも、上杉衆皆負て、氏康一度もかたずと云事なし、〇中略則政未練きあひにて、ちと臆病にましますが、今年來年と申せ共、以上に山內殿馬出し給ふ事更になければ、管領の御馬にて出かぬると申は、此時代より始まれり、扨こそ上杉公はわろく思ひければ、油斷なる大將と是をいふ、〇中略關東にて結城にたがや、千葉に原、はらに高木、兩さか井などゝて、主より大きなる知行取の有は、此時代より始る、

〔相州兵亂記〕四上杉敗北幷龍若最期之事

天文十五年十月ニ、上杉勢、笛吹峠ヲ越シテ、甲州ヘ人衆ヲ出ス所ニ、晴信〇武田惡所ヘ敵ヲ引請、散散ニ責ケレバ、上杉勢、甲州ノ戰ニモ打マケ、散々ニ成テ引返ス、其後彌々威勢ワヅカニ成テ、成田、由良、白倉以下、小田原ヘ音信シテ、降人トナランコトヲ望ミケル、上杉ハ虎ノ山ニ籠(ヨリカヽル)恐懼ヲ成シ、氏康ハ次第ニ龍ノ水ヲ得タル如クニイキヲイ增ス、世ノ末風俗義ヲ重ンズル者ハ少ク、利ニ走人ハ多ケレバ、只今マデ付順ツル、筑後左衞門以下、普代舊功ノ身ニ代リ、命ニ代ラント、義ヲ存シ忠ヲ致シツル郞從ドモ、忽ニ心變シテ、却テ害心ヲ插ミ、氏康ヘ內通シ、上杉ノ下知ヲ不用、唯朝ニ來リ暮ニ往テ、交リヲ結ビ情ヲ深セシニ、一族一家ノ輩、重恩ヲ蒙シ譜代ノ侍、僅ニ五百騎計殘リケル、其中ニモ上州ニ長野信濃守、武州ニ太田美濃守ハ、一人當千ノ兵也、其外ハ物ノ用ニモ立難キ老軍、或ハ建黨張臂、畑水連ノ兵ドモナリシガ、中々此勢ニテ小田原ヲ對治スル事難成、モシ亦指置バ上州マデモ責來ラン事、三年ヲ不可過、然ラバ如何トシテカ氏康ヲ討ベシト、評定區々ナリシ所ニ、曾我兵庫助進出テ申ケルハ、越後ノ長尾景虎ハ、長尾六郎爲景ガ子ニシテ、上杉ノ普代

ノ家老ナレドモ、父爲景、故管領ヲ討申テヨリ御敵トナリケレドモ、爲景死去ノ上ハ、景虎ヲ別儀ヲ以テ蒙御免、是ニ大將ノ號ヲ被下バ、定テ忠義ヲ致サンカ、彼景虎ハ、武勇ニ於テハ、凡北國東國ニハ無双ノ英雄、智謀名譽ノ良將ナリ、其上ハ信濃ノ村上義清、信玄ニ打マケ、越州ヘ行、景虎ヲ賴ミシニ、景虎タノマレ、度々信玄ト合戰ニ及ビ、勝利ヲ得タル事天下ニカクレナシ、增テ上杉ヲ被下ナバ、頓テ隨御意、御敵對治可易ト申ケレバ、憲政大ニ悅ビ、則越州ヘ趣キ玉フ、景虎是ヲ聞、本ヨリ名ヲ重ンズル人ナリシカバ、カギリナク悅ビ、御迎ニ出テ憲政ヲ入レ申、種々モテナシ奉ル、憲政、景虎ヲ養子ニシテ、上杉重代ノ太刀、天國幷系圖ヲ渡シ、關東ノ管領ヲ讓リ玉フ、憲政ハ上州一國ヲ知行シ、其外景虎シハイ可有ト約諾シケレバ、景虎リウショウシ、御敵退治、イトヤスカルベシト申ケル、

〔甲陽軍鑑十品第三十二〕一去天文廿年辛亥に、上杉家破る丶子細は、上杉殿、北條氏康に負、國を捨越後へ逃入、長尾景虎を賴、上杉の名字と管領職を景虎に讓、關東國をも景虎に宛行、上杉殿は隱居管領になり、上野一國にて世をおくり申べきと、長尾景虎に管領被仰候故、景虎尤と有、上杉になり管領職を給りて、〇下略

〇按ズルニ、本書ニ、上杉憲政越後ヘ御牢人ノ時、御曹司龍若殿ヲ捨置キ、憲政公計逃給ヘバ、御曹司御局ノ子、目賀田新助、弟長三郞、其弟三郞介、其伯父九里采女、同與右衞門、局共ニ六人、其外緣類親類マデ合テ廿人、但談合シテ、御曹司龍若殿ヲ北條氏康ヘツレテ出テ忠節ニ仕ル、氏康公其年卅七歲ナレ共、餘所ノ五十六十ノ大將ヨリ弓箭ノ穿鑿ヲ能ナサレ候間、忠節ノ上杉衆ヲ皆搦メ捕リ殺シ給フ、扨又御曹司モ御生害ナリトアリ、是ニ至リテ山內上杉氏絕エタリ、

〔豆相記〕鎌倉公方滅亡之後、關東州國分散、而雖如戰國七雄、上杉、奉管領職、而爲州國之長、故諸士盡屬上杉、而關東不動干戈矣、上杉氏、姓藤原、左大臣冬嗣苗裔也、兄與弟號東管領、執柄異他、威名赫

如矣、兄者住山內、故號山內、弟者居扇谷、故號扇谷、○中略時人言兩管領是也、凡屬管領州國、相武上野房總羽奥越後信佐等州也、○中略天文二十辛亥年、氏康氏政父子圍山內則政居平井城、攻敗、○中略山內則政出奔北越矣、執則政長子龍若丸、以歸、遣神尾於修禪寺、殺之矣、○中略永祿三庚申年、北越長尾景虎、出張關東矣、尋其濫觴、上杉管領則政、平井城敗北之後、出奔北越、謙信入之矣、則政以關東管領職、兼上杉氏與景虎曰、相人朝夕、釋憾於弊邑、長子死之、民震動、國幾亡、吾身泯焉、故今爲山葬矣、寡人不忍其詢、願再歸弊邑之地、而比死者一洒之、景虎與之、終改長尾號上杉管領景虎、後改輝虎、所謂義輝賜一字也、出家號謙信、越永祿二己未年、景虎以回文、告東八州列將曰、先年東公方滅亡之后、兩上杉嘗奉管領職、而八州盡附庸于上杉矣、然伊豆北條、侵襲於關東、恣嚴威、故諸士舉從于北條、實忘忠臣不事二君之語乎、○中略此故我起義兵、而欲使則政再歸國、○中略亟服景虎、退北條之謀、於諸將之急務也、故今呈一紙回文云々、依之而東八州諸士、盡寒心于北條、而歸景虎、景虎喜而則率越師、戒嚴而發向關東、先伐沼田城、○註略取之、亦拔厩橋城、而圍名和城、自同年十月迄翌歲二月、宿年攻城々聚人衆、東八州之士卒、皆歸景虎、○中略終越師伐於相小田原、

〔甲陽軍鑑〕品第三十二十下公方光源院義輝公へ景虎御禮申上、猶以管領職を申請、然も義輝の輝と云字を被下、其上網代輿文の裏書、公方様よりゆるされ候て、上杉輝虎と此比ハ申候如件、

〔相州兵亂記〕四景虎小田原へ寄來事

景虎不叶トヤ思ハレケン、小田原表ヲ引テ鎌倉○鶴岡八幡宮へ參詣シ、度々ノ前例ヲ尋テ、拜賀儀式ヲ追ハレケル、○中略前例ノ如ク山內殿ニカリヤヲ建、ソレヨリ大石、長尾、白倉、小幡等ヲ近侍ニ乘リツレテ、宮寺へ參リ拜賀ヲ遂、諸院家衆ニ所領ヲイタシ、悦ノ酒モリシテ歸リケル、○中略其後其年○永祿四年五月、北國ヲ通リ上洛シテ、京公方光源院殿義輝公へ出仕ヲイタシ、關東管領ノ御敎書ヲ賜リ、朱柄ノ唐笠、同御紋ノユタンヲ御免アリ、御諱ノ一字ヲ被下、輝虎ト改名シテ、アジロゴジ、狀

ノ裏書ヲ御免アリ、越後ヘコソハ歸リ玉フ、

〔常山紀談　二〕謙信、相州に攻入る時、京都より近衞關白前久公を進られ、管領の職を承る事、此時より始るともいへり、又鶴岡に參詣し、管領の職に任ず、近衞關白前久公下向有て、光源院殿の公方より大和兵部少輔使たりともいへり、孰か是なる事を知らず、

○按ズルニ、甲陽軍鑑ニ、此事ヲ載セテ近衞關白前久公ヲ都ヨリ申下シ、公方ニ作リタテヽ式ヲ行フトアリ、是時輝虎、前久公ヲ招キタルハ、全ク將軍トナサントノ意ナリシト見エ、關東管領記ニモ、永祿三年正月、禁中御卽位〇正親町行ハレテ後、關白殿下近衞前左大臣前嗣公〇前久初名越後ヘ御下向、〇公廣補任係二九月是當職トイヘドモ、關東ノ公方ニ申請度由、上杉輝虎望ムニ依テ被二差下一處也、凡關白職ハ天下ノ大任也、殊更當職ノ殿下、遠國徘徊ノ事、頗無二先規一甚失二本意一儀歟、其頃前嗣公ヲ稱二越州公方一云云トアリ、

管領代

〔成氏年中行事　正月〕朔日ノ椀飯ハ管領ヨリ參、遠侍ニハ高盛物二アリ、一ニハ波葉、一ニハ蟦也、置鳥置鯉アリ、椀飯奉行、直垂ニテ出仕、是ハ右筆勤レ之、管。領。代。官。ト兩人、御中門ニ令二伺公一、一公方樣出御奉待、御座ハ妻戶之門也、御酒式三獻、〇中略三獻メノ御酌、御酒ヲ申時、御一家ノ人、銀劒持參、管領御代官手ヨリ直ニ被二受取一也、其後弓征矢ヲ役人持參、其次ニ沓行縢ヲ役人持參イタシ罷出後、管領被官武州守護代子、或ハ孫、或ハ兄弟等、御車寄ノ立砂・前ニ、御馬御鞍ヲ置テ引立、同引副ハ裸馬ナリ、

家務

〔甲陽軍鑑　品第十三〕弱過たる大將之事附兩上杉幷北條家生起合戰物語事

都の公方に義詮公御下に、武衞、細川、畠山、是三管領也、一式、山名、京極、赤松、是又四職也、さて鎌倉の公方に持氏公をしすへ參らせられ、御下に兩上杉、もとは藤原內大臣冬次の子孫にて御兄弟也、舍兄は鎌倉にて山內に屋形ありて、則山內と申、舍弟は扇谷に屋敷有故、扇谷と云、〇中略兩上杉と

は申せ共、先山內殿を肝要に用る故、結句後には公方をわきへなし奉り、十人は七人山內殿、二人扇谷へと申て、公方樣へは、漸一人も出仕いたさずしてゐたるにより、公方の御仕合如此に候へども、山內殿に楯をつく侍、一人としてなき故、少も子細なく治る、〇中略就中兩上杉、家中作法の儀、山內殿は、上野平井に居城有て、大石、小幡、長尾、白倉、是四人の老也、扇谷にては、上田、太田、見田、萩谷と申て、是も又四人の老ありて、居城は相州大場と云所也、

〇按ズルニ、四人ノ老ハ、乃チ家務職ナリ、

〔鎌倉大草紙下〕同年〇寶德元年十一月晦日、御所出來、御移あり、京より御一字を下され、永壽王殿御元服ありて、左馬頭成氏と申、龍若丸ハ上杉右京亮憲忠と號す、〇中略其ころ山の內は憲忠若輩ゆへ、長尾左衛門尉景仲、諸事を名代に執行す、扇が谷は修理大夫持朝也、是もいにしへ持氏滅亡のとき、憲實に一味の最なれば、よの中□□□□大切におもひければ、出家して道朝と號し、子息彈正少弼顯房に家督を渡し、憲忠を聟として、武州河越へ隱居して有ける、然ども顯房若年の間、家臣武州尾越の太田備中守資清、政務に替りて、諸事を下知しける、太田長尾は上杉を仰ぎ、憲實の掟の時のごとくに關東を治めんとす、此兩人、その頃東國不双の案者なり、又成氏の出頭の人々、簗田、里見、結城、小山、小田、宇都宮、そのほか千葉新助は、父は持氏へ不忠ありしかども、同名陸奥守がすゝめにより、成氏の味方と成て、色々上杉を妨、振權威ける間、兩雄は必あらそふならひなれば、太田長尾と其間不和に成、此儘にてはいかさま上杉退治の事程あるまじとて、太田備中守、長尾左衛門尉令相談、一味同心の大名を催し、事のおほきにならざるさきに、此方より退治すべきよし評定して、寶德二年卯月廿一日、其勢五百餘騎にて鎌倉の御所へ押寄ける、〇中略管領上杉右京亮憲忠名代として、長尾左衛門入道景仲威勢を振、八州彼名字の中三家あり、上州白井の長尾、總州佐貫の長尾、越後の長尾等也、

〇按ズルニ、長尾太田ハ、山内扇谷ノ家務職ナリ、永享記、太田道灌之事ノ條ニ、扇谷殿は、山内より分國は、少く、軍勢も微なれども、太田父子〇資清、資長、の善政を聞及び、武功之者集事不知其數、武道未練の族は自身を退ける、依て人も禮を學、公方管領も聞義諮道給ふ、されば大名高家も重之、萬民傾首けり、今の如くならば、末々扇谷殿、上杉家を主どり、關東は一向に、彼下風ニ隨ひなんと人々さゝやきければ、山内殿の御内の侍、幷越後の相摸守房定も偏執の思を成し給ふトアリ、其權勢ノ盛ナリシコトヲ知ルニ足ル、

〔武家名目抄職名六上〕荏柄社所藏、長尾景信贈太田道灌狀云、今更於御身上可被與新儀候之段、何事候哉、愁景信相當當方〇山内上杉氏家務職候之間、於當家滅亡之儀者、不顧一身難存候之間、雖何傍輩身上候可執申候、

又太田道灌贈寺尾若狹入道狀云、抑御家務職事、忠景〇長尾へ被仰出候哉、先以目出度候、於今度者、彼申沙汰不可有餘儀候旨、自去頃申來候、隨而當國〇武藏之事者、景春〇長尾方へ被仰出候樣、自與厩樣御取合候哉、管要候、此一段被相口御方便可然候、御膝下祗候者、猶雖說之不可有盡期候、

〔松陰私語五〕景信他界以後、景春、顯定背御意條、不被感父祖忠信勲、〇中略山内家務之事、寺尾入道、海野佐渡守相談、長尾尾張守ニ申成、因茲景春述懷、於武上相之中ニモ、景春同道被官之者共、對尾張守含欝憤者二三千餘、於國家蜂起充滿、

〔鎌倉大草紙下〕文明五年十一月廿四日、上杉扇の谷の大將修理大夫政眞も打死なり、行年廿四才、此人いまだ子なかりしかば、一家の老臣ども評定して、故持朝の三男定政を修理大夫に任じ、扇の谷の家督となす、扇の谷の家務は太田左衞門入道道灌、山の內の家務長尾左衞門入道〇景信死去の間、長尾尾張守忠景に顯定より被申付、爰に長尾四郎左衞門尉景春は、長尾一家の大名にて有勢の者也、殊に老父玉泉菴、忠功異他、然間景春われこそ家務職を可承處に、忠景に被越、天性腹

惡敷男にて、逆心忽におもひ立、顯定を可亡企害に存知立、縁者たるの間、太田道灌に此事を相談す、道灌是を聞て、一大事出來ぬと思ひければ、顯定の前に來りて申けるは、景春もとより無器用にて御家務職は無及候得ども、父玉泉が忠功を思召候はゞ、武藏の守護代を被仰付、先忠景と和談仕、忠景も暫時邊土へ相退、かれが心を相靜て、御陣中無爲の御謀可然候、彼が家來被官人に、猥藉之族、逐日令增倍候間、定而近日、御難儀不可遣之由申といへども、山の内を始て評定人ども、更にいづれも承引せず、

○

政所

〔成氏年中行事正月〕一四日朝、政所出仕、直垂被着、公方樣モ御直垂ニテ御對面、御酒式三獻、次法躰宿老中出仕、御對面之樣同前、御劒進上、又被下、

一同十一日、管領ハ大御門ノナラビ南ノ小門ヨリ被參、評定奉行、政所、問注所、其外ノ衆中ハ、皆面ノ御門ヨリ出仕、網代輿也、

一同十五日朝、御祝如常、○中略次御吉書、多分二日也、但日限不定、關東御分國ヲ被註、執事代ヲ召具シテ政所有出仕、可有御判物ヲバ執事代持參、御硯ヲバ政所ノ子息持テ被參時御判有、其後又執事代參、御判物ヲ給、政所ノ子息參テ被罷出タル後、先御式三獻有、清執事代ヲ勤、二階堂寄領也、二階堂政所勤、公方樣、政所執事代、又御荷用ノ人々モ直垂也、式三獻過テ後、政所御劒進上、別而有御酒被下御劒也、

評定衆

〔諸家系圖纂二十一清原〕將繁本名賴將、左將監、關東評定衆、

〔諸家系圖纂十五上杉〕氏定彈正少弼(中略)評定衆、應永二十三年十月八日(中略)於藤澤道場自害、

〔喜連川判鑑〕應永二十四年正月五日、佐竹義憲、越後ヨリ軍ヲ起シ、滿隆、持仲、禪秀ト合戰、禪秀敗北シテ鎌倉ニ引退ク、同十日、滿隆、持仲、禪秀、於雪下自害、同十七日、鎌倉へ還御、淨妙寺ニ入御、上杉安

引付

房守憲基、管領職如元、佐竹左馬助義憲ニ軍功ノ賞被行、評定ノ頭人ニ補セラル、

〔喜連川判鑑〕永和四年八月廿七日、長井掃部頭入道道廣、頭人ニ補シ、始テ行之、

〔東亂記 一〕持氏鎌倉ヘ飯玉フ事附鎌倉合戰

上杉安房守、數万ノ軍勢ヲ相具テ、同四日上州ヲ打立テ、同月十九日ニ着陣分陪、是ヲシテ御旗本ニアリシ人々、御内外樣ノ侍、奉行、頭人ニ至ルマデ、公方ヲ捨置申、管領ノ勢ヘゾ馳加ハル、

〔成氏年中行事 正月〕朔日、公方樣出御、○中略御マイリノ肴ニヲ三獻、御一家幷評定衆召サレ、此御祝ニハ宿老中、皆御荷用ヲ被申、

〔成氏年中行事〕管領對奉公中、禮義幷書禮等之事、公方樣御役、又ハ御一家評定衆ヲバ先座ヘ請テ、其後被出酒、一獻之時ハ、依時宜義先被始時モアリ、

〔鎌倉大草紙 下〕景春○長尾われこそ家務職を可承所に、忠景○長尾に被越、天性腹惡敷男にて、逆心忽におもひ立、顯定○上杉を可亡企、密に存知立、緣者たるの間、太田道灌に此事を相談す、道灌是を聞て、一大事出來ぬと思ひければ、顯定の前に來りて申けるは、○中略かれが心を相靜て、御陣中無爲の御謀可然候、彼が家來被官人に、狼藉之族、逐日令增倍候間、定而近日御難儀不可遠之由申といへども、山の内を始て、評定人ども、更にいづれも承引せず、

〔結城戰場記〕太田道灌最後事

逸政ニハ忠臣オホク、勞政ニハ亂人多キ習ナレバ、上杉家ノ出頭人、評定ノトモガラドモ、太田入道、扇谷ノ執事トシテ、萬ヅ心ニ任タル事ヲ猜ミ、境ニ着テハ、吹毛ノ咎ヲ爭テ讒言シケル事度々ナリ、

〔成氏年中行事 附錄〕引付之衆ト云ハ、評定衆ノ下司ヲ云也、

〔鎌倉大草紙 上〕一應永五年十一月四日、氏滿四十二歲にて御逝去なり、○中略若君滿兼公、從四位下

問注所

左兵衛督御補任にて鎌倉に備りたまふ、御年廿一、管領ハ上杉中務輔助承之、引。付。頭。人。二階堂野州入道清春、一。方。頭。人。長井掃部助入道道供、〇下略

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

能俊 宅間左衛門佐、引。付。一。番。頭。人。號二妙山一、又名道高、應永八年十月晦日死、

〔成氏年中行事正月〕朔日ノ椀飯ハ、管領ヨリ參、〇中略

一公方樣御裝束ハ表ノ御祝同前、〇中略御荷用之方々ハ、上古ハ引。付。之。衆。御椀飯御荷用ヲモ御免ナリ、近年被レ破レ之、

一同廿三日、鶴岡御社參、〇中略引付衆以下ヘハ、皆以二短冊ヲ一被レ賦レ之、

〔空華日工集〕應安三年六月十日、問。注。所。刑部〇太田刑部少輔來話、

〔賴印大僧正行狀繪詞〕三寶院流ハ、醍醐嫡々ノ正統トシテ、秘佛靈寶ノ本尊聖教等、師資相承シテ、新玄大僧正、覺雄大僧正ニ至ルマデ傳來相違ナキ處ニ、元弘大亂ノ剋、後醍醐天皇一統シ給ヒシカバ、關東ノ僧俗參洛セズト云事ナシ、隨而覺雄于時權僧正上洛之時、極樂寺長老印教上人ハ、印可之弟子タルニ依テ、本尊聖教寺ヲ預置カルヽ者也、覺雄附弟道快僧正、彼本尊聖教返サルベキ由、極樂寺江申遣ス處、年序ヲ經候上ハ、返スベカラザル由返事ス、仍印教上人之預狀等ヲ院主ニ奉ハラセラルヽ狀云、〇中略

同〇至德二年五月廿四日、武衛眞言御傳受ノ次ニ、院主此事申出サヽル時、二階堂式部大輔入道友政ヲ奉行トシテ、寺家ト問答スベキ由仰付ラルヽ間、再三問答ストイヘ共、進スベカラザル由申上、剩友政奉行タラバ、寺家忽ニ面目ヲ失フベキ由申ニ依テ、問注所信濃入道浄善〇町野ヲ奉行トシテ、再應問答、子細同前、〇中略彼樣ニ御教書ヲナサルヽトイヘドモ、武衛御等閑ナキアイダ披露ニ及バズ、

侍所

同十月廿七日、淨善寺ヘ罷向テ申云、度々御口入ヲ承引ナキ上ハ、向後ニヲヒテハ寺家沙汰ヲ閣シ召サルベカラズ、長老云、此條驚入侍ル者也、イカ樣寺僧ニ內談スベキ由申、翌廿八日、僧ヲモテ返シ申スベカラザル由申切ル間、淨善披露ノ爲出仕ノ處、寺家ノ代官ノ僧御所江馳參シテ、淨善ニ申テ云、度々御口入ノ上ハ、彼ラヲ進スベキ由ヲ申間、武衞幷管領悅喜此事也、

〔成氏年中行事〕一同月〇正十一日、御評定始、〇中略管領ハ、大御門ノナラビ南ノ小門ヨリ被參、評定奉行、政所、問注所、其外ノ衆中ハ、皆面ノ御門ヨリ出仕、網代輿也、 一同月〇二八幡宮ニ一七日御參籠、社務社家奉行出仕、政所、問注所、御所奉行、其外宿老中、廻廊ニ幕打參籠アリ、 一四月〇中略中之酉ニハ、本社三島ヘ爲御代官、月輪院出世一人有參詣、〇中略其朝管領、評定奉行、政所問注所、御所奉行、其外衆中ヨリ御樽進上、當日晩景ニ御酒數十獻アリ、

〔空華日工集〕應安四年二月十四日、聞官使奉行明石泊侍所、入圓覺首座寮、補僧二人而飯、

〔春の夜の夢〕このとし〇應永五年東國には、上杉〇朝宗が權威日々にいやまし、關左何事も心にまかせずといふことなし、東國領主を集めて上杉評議し侍るは、京師にしては將軍家に三管領四職を定めおかる、關東にても是に准じて其沙汰あるべし、若君〇足利氏滿子滿兼を將軍と仰ぎ、上杉をして管領にさだめ、千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、那須、宇都宮を以て、關東の八家と名付、よろづの事を評定して、上杉是を聞て決斷すべしと定めらる、

〔永享記〕古河城の事

關東の公方成氏、〇中略文明九年丁酉七月十七日、古河の城へ還入らせ給ふ、〇中略其後城南、鴻巢と云處に在御所作て、兩上杉も八家も、先古河殿〇足利成氏と崇申けり、所謂八家とは、千葉、小山、里見、佐竹、小田、結城、宇都宮、那須是なり、

〇按ズルニ、春の夜の夢ニ四職トアルハ、京師侍所ノ所司、山名、一色、赤松、京極ノ族ヲイフナリ、

小侍所

評定奉行
御所奉行

關東コレニ擬スルニ八家ヲ以テス、サレバ八家ハ、卽チ侍所所司ナリ、

〔鎌倉大草紙上〕應永十七年五月のころより、公方滿兼御病氣以之外にして、〇中略七月廿二日、御年廿二にて御早世あり、〇中略此節新田殿の嫡孫、謀反を起し、廻文を以て、便宜の軍兵をもよほされければ、鎌倉の侍所、千葉介兼胤が生捕にして、七里濱にて討之靜めける、

〔鎌倉大草紙下〕下總國千葉介入道常瑞、舍弟中務入道了心、日比者鎌倉の侍所にて、成氏へ度々の忠節ありしが、此兄弟故上杉禪秀が外孫也、今度禪秀が子息右馬助憲顯下向してすゝめければ、母方の叔父と一味して、成氏へ敵をなす、

〔成氏年中行事正月〕十日、小侍所、幷評定奉行、扇谷侍所千葉介方出仕、但依時宜日限八日、管領出仕以後被參事在之、御對面之樣、多分管領同前、出仕之樣躰モ同、

〔諸家系圖纂十五上杉〕憲直(播部助、淡路守、中略)陸奥守、評定奉行、(中略)永享十年十一月、於金澤自害、

〔成氏年中行事正月〕五日ノ夜、御行始、管領へ御出恒例也、〇中略御臺參、管領、評定奉行以下宿老、御座へ被召、

一同九日、例日タル間、御祝等無之、但初子日ニ相當時、見好法師參テ、種々ノ祝言ヲ申、根松ヲ三本持テ參、其時評定衆之子共、親類ノ間、以上意直垂ニテ松ヲ受取テ扇ニ置テ、御二間ノ御妻戸ヨリ十二間ヘ令持參時、松ヲ御請取アツテ被置也、見好法師ハ、管領評定奉行ノ亭ヘモマカリ出、自公方樣御祝、自政所下行、其外祝言アリ、

一同十日、小侍所、幷評定奉行、扇谷侍所千葉介方出仕、但依時宜日限八日、

一同十一日、御評定始、〇中略評定奉行、政所、問注所、其外ノ衆中ハ、皆面ノ御門ヨリ出仕、網代輿也、

〔成氏年中行事四月〕中ノ酉ニハ、本社三島ヘ爲御代官、月輪院出世一人有參詣、〇中略其朝管領、評定奉行、政所、問注所、御所奉行、其外衆中ヨリ御樽進上、當日晩景ニ御酒數十獻アリ、管領評定奉行ハ

不被參、御代官ハ出仕、

〔成氏年中行事附錄〕一御所奉行人數八人

佐々木近江守　海上信濃守　梶原美作守　宍戸　二階堂信濃守　寺岡但馬守　本間遠江守　海老名

越訴奉行
禪律奉行

〔鎌倉大草紙上〕應永五年十一月四日、氏滿四十二歲にて御逝去なり、○中略若君滿兼公從四位下左兵衛督御補任にて、鎌倉に備り給ふ、御年廿一、管領は上杉中務禪助承之、引付頭人二階堂野州入道淸春、一方頭人長井掃部助入道道供、禪。律。奉。行。町野信濃守入道淨吉○淨吉一本作許善、越。訴。之。奉。行。二階堂山城宮内入道行康等也、

遠國職

足利時代ノ遠國職ハ、九州、中國、奥羽等ニ之アリテ、多ク探題、若シクハ奉行ト稱ス、

九州ニハ九州探題アリ、九州探題ハ一ニ鎭西大將軍、九州管領、鎭西探題ナドヽ云フ、筑前國博多ニ鎭所ヲ置キテ西海道ノ諸大名ヲ統御ス、始メ一色範氏、仁木義長等之ニ補シ、斯波氏經、今川貞世等相次テ之ニ任ズ、貞世罷メラルヽニ及ビテ、澁川滿賴之ニ代リ、子孫世々之ヲ襲グ、

中國探題ハ、山陽八國ノ諸侯ヲ管スル職ニシテ、始メ尊氏ノ子直冬之ニ補シテ、長門ノ守護職ヲ兼ヌ、然ルニ直冬罷メラレテ後、一時中絶セシガ、後應仁亂後、大内義興之ニ補セラレシコトアリ、

奥州探題ハ、陸奥ノ庶政ヲ掌ル職ニシテ、始メ足利氏創業ノ時、石堂義房陸奥ニアリテ、東北

九州探題

ノ諸將ヲ指揮セシヲ以テ當職ノ始トスト云フ、後畠山、吉良ノ二氏之ヲ分掌ス、故ニ之ヲ一ニ奧州一方管領トモ云ヘリ、後斯波家兼、奧羽二州ノ探題トナリシヨリ、子孫相傳ヘテ之ヲ世襲スルニ至レリ、而シテ又此他ニ奧州奉行ト云フモノアリ、足利義滿ノ時、松田某ヲ以テ之ニ補シ、京師ニ在リテ奧州ニ關スル事ヲ掌ラシメシガ、後停廢セシモノヽ如シ、

羽州探題ハ、又出羽大將トモ云フ、奧州探題斯波直持ノ弟兼頼、始テ之ニ補シ、子孫世々之ヲ襲グ、其同國最上郡ニ在ルノ故ヲ以テ最上氏ト稱ス、

奈良奉行ハ、其地ノ政務ヲ管スルモノナリ、

〔阿蘇大宮司惟澄申狀〕延元二年四月十九日、一色少輔入道〇範氏下國之時、武重相共馳向犬塚原、致散々合戰、一色入道、舍弟右馬助入道、其外橘薩摩彌八、國分十郎以下、於當手討取畢、〇中略延元三年十月、頼尚率數千騎攻來甲佐城之時、惟澄僅以卅餘騎懸出城外、或討死、或被疵畢、次押寄郡浦討取一色少輔入道代田井間三郎、其後又攻落南郷城、仁木右馬助義長代立田七郎甥立田十郎生取之、其外數十人討取畢、

〔武家名目抄職名二十七上〕按、是より先、尊氏將軍西國へ沒落の時、一色入道道猷、仁木義長、共に功あるを以て、二人をして西國の成敗を司らしめしと見ゆ、是即探題の任にあたれる也、

〔祇園執行日記〕貞和六年〇觀應元年四月十日、宋船一艘著岸筑前國奧濱津、日本人僧十八人、舟主十一人、唐人委細追可注進之由、一色入道注進到來云々、昨今程歟、

〔梅松論下〕是に依て九國には、一色入道、仁木右馬助、松浦黨幷國人以下をとゞめて、建武三年四月三日、大宰府を立て御進發〇足利尊氏ありし程に、〇下略

〔祇園執行日記〕貞和六年〇觀應元年十月十七日、鎭西兵衛佐殿〇直冬被擧義兵、仍小貳大友與力之由、飛脚内々到來、〇中略就之來廿五日、將軍可有御發向之由有其沙汰、鎭西探題一色入道籠于肥前國草野

城云々、

〔太平記三十三〕崇德院御事

今年○延文三年ノ春、筑紫ノ探題ニテ、將軍ヨリ被置タリケル一色左京大夫直氏、舍弟修理大夫範光ハ、菊池肥前守武光ニ打負テ、京都ヘ被上ケレバ、少貳、大友、島津、松浦、阿蘇、草野ニ至ルマデ、皆宮方ニ順ヒ靡キ、筑紫九國ノ內ニハ、只畠山治部大輔ガ日向ノ六笠ノ城ニ籠タル計ゾ、將軍方トテハ殘リケル、

〔太平記三十八〕九州探題下向事附李將軍陣中禁女事

筑紫ニハ、少貳大友以下ノ將軍方ノ勢ドモ、菊池ニ追ヘラレテ、已ニ又九州宮方ノ一統ニ成ヌト見ヘケレバ、探題ヲ下シテ、少貳大友ニ力ヲ合セデハ叶フマジトテ、尾張大夫入道ノ子息左京大夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テゾ被下ケル、左京大夫先兵庫ニ下テ四國中國ノ勢ヲ催シケレドモ、付順フ勢モ無リケレバ、サリトテハ道ヨリ非可引返トテ、僅ニ二百四五十騎ノ勢ニテ、已ニ纜ヲ解ケルニ、左京大夫ノ屋形船ヲ始トシテ、士卒ノ小舟共ニ至マデ、傾城ヲ十人二十人ノセヌ舟ハ無リケリ、

〔島津文書一〕島津上總入道道鑒代得貴謹言上

欲早被經急速御沙汰、被引合譜代相傳重書等案文、被校正間事

副進 一卷 譜代相傳文書等案

右道鑒、自右大將家○源賴朝以來迄于今、代々相傳文書等、九州御管領○足利氏經御下向之上者、正文等可持下之處、路次難儀之上者、被校正案文等被封次目被順正文、於鎭西爲被經御沙汰、恐々言上如件、

康安元年六月日 花押

進上 御奉行所

○按ズルニ、九州管領ハ卽チ探題職ナリ、

〔今川記 一〕了俊は、範氏御早世の後、心省の御跡繼として、京都に祗候有て、寳篋院殿樣〈○足利義詮〉に昵近し、康安貞治の比、侍所にて御坐有し也、鹿苑院殿〈○足利義滿〉の御時、西國の御敵の蜂起せしかば、九州の探題に了俊を被仰付しに、已に發向のとき、遠江國の守護職を惜く思召けるにや、管領細川殿〈岩栖院〉へかくよみてつかはされけり、

何となくこゝろにかけて思ふ哉濱名の橋の秋の夕くれ、と有しかば、御分國ゆめ〳〵相違不可有との御返事有りとかや、

〔應永記〕大內〈○義弘〉上意ノ通リ、亦御敎訓ノ旨畏テ承リ候、〈○中略〉就中九州一統トシテ、御敵數萬騎、中國ニ打越ベキ企アリ、仍今川伊豫入道ヲ爲探題被差遣、其勢僅三百餘騎、微力ニシテ不能令渡海九州、然間致合力可發向九州之由蒙上命、某十六歲ニシテ、率四千餘騎探題相共ニ渡海九州、二十箇年ノ間、此彼ニ宗徒ノ合戰トモ二十八箇度、減敵致無二忠節所世知也、

〔今川了俊書札禮〕此間われ〳〵に向て、書札の禮に進上恐惶とあそばし候、無勿躰候、昔はむかし、今は今にて候之間、堅辭退申度候へ共、但我等が事は、既に九州の管領時分に候、則將軍家の身を被分位に被居候之間、式躰は公方に向申候ての御禮かと心得申候間、辭退所なく候、今も我々當職上表申候は、自他等輩之儀たるべく候間、相互に恐々謹言たるべく候、今も京都にても、大方の一方之引付の頭人に成ぬれば、其かゝりの上衆達、まして評定衆奉行人等、皆々恐惶と可書にて候間、六波羅の頭人、九州探題には恐惶の御禮不可有子細候、

〔花營三代記〕應安八年〈○永和元年〉九月十四日、去八月廿六日午剋、於肥後國軍陣、大宰少貳冬資爲探題今川伊與入道被誅之由使者到來、

〔難太平記〕一世人の申なるは、了俊九州にはなるゝ事は、人二人の巧に落と云々、大內入道探題の

大望故と云々、又は澁川を可レ爲二探題一ために勘解由小路〇斯波義將方便云々、大敵難儀は、了俊骨を折、
靜謐の時になりて、無功緣者に申與など利口有と云々、

〔諸家系圖纂〕三清和源氏澁川氏九州探題

義行——滿頼九州探題、兩度、應永三年下向、同三十二年上洛、右兵衛佐、左近大夫將監、——義俊探題、次郎、左京大夫、大夫將監、
　　——滿行——滿直號二御調三郎、中務大輔、武藏守、正長元年探題職、——敎直三男、萬壽丸、右衛門佐、探題、

〔看聞日記〕應永廿六年八月十三日、抑異國襲來事、去六日、探題注進狀、不慮披見記之、
長言上　抑六月廿日、蒙古高麗一同に引合て、軍勢五百餘艘、對馬島に押寄、彼島を打取之間、我等
大宰少貳が勢計にて、時日をうつさず、浦々泊々の舟著にて、日夜之間合戰を致之間、敵御方死す
る者、其數をしらず、旣難儀之間、九ヶ國の軍勢を相催、同廿六日、各手をくだき、安否の合戰を致之
間、異國の軍兵三千七百餘人、打取斬棄、其外は數をしらず、〇中略如レ此急速に落居、併神明の威力に
仍也、上樣の御運も、殊目出畏入候、委細猶略して注進狀如件、
　　七月十五日　　　　探題　持範判

〔鎌倉大草紙〕下長祿元年六月廿三日、澁川左衛門佐義鏡を大將として、武藏國へ被二指下一、是は公方
の近親にて、代々九州探題の家なれば、諸家もおもき事におもひけるうへ、祖父左衛門佐義行は、
久鋪武藏の國司にてありける、其時より足立郡に蕨と云所を取立居城にして、今に至まで此所
を知行しければ、旁此仁可レ然とて、義鏡を探題になしたまひ、御下知の通、武州上州の兵どもに申
聞せ、成氏を退治して、上杉を管領として、關東を治むべきの趣を觸渡す、

〔蜷川親元日記〕寛正六年八月廿一日丙申、九州探題右衛門佐敎直ヨリ、太刀金千疋、先度御子息三郎殿御
受領之事、申御沙汰御禮云々、御狀在レ之、飯和執二進之一、

〔蜷川親元日記〕文明十年九月三日辛酉、大内殿狀六月八日日附到來、九州探題澁川右衛門佐殿、敎直舊冬大

内下國之時、御奉書御請文、三月十八日日附被執進之、十五年五月廿六日戊午、大内殿より貴殿へ太刀金貳千疋被進之、九州探題合力御下知事、早々御沙汰之御禮也、對少貳合戰儀也、

〔肥陽軍記〕一資元筑前軍幷肥前國滿山軍の事

天文二年十二月、○中略爰に先年將軍より下されし、九州の探題澁川刑部少輔義長、近年威勢衰へて、此ころ國都に在けるが、朝日山の城に入、少貳の味方として防ぎ戰けるを、筑紫惟門强責て、義長父子三人一所に戰死す、

〔大館常興日記〕天文十年十一月七日、佐方より承候、九州たんだい澁川殿只今の名乘貞基御禮被申上候、御太刀御馬青銅二千疋進上之、次御字義事、官途左兵衛督事被申之、次肥前國人々御歎同意御下知事、次諸寺出世事、條々伊勢守方へ申狀也、八月十五日日附也何も大内左京亮より副狀八月廿四日日付也在之、仍各被尋下間、御字幷官途事、何も無別儀存候、御歎同意御下知事は、以證跡重而可有言上、次諸寺出世事、是又以證跡可有書上之由、可被仰下哉由、各存分也、

廿九日、一日行事豆州より、各へ御折紙在之、如此也、爲申之、左京大夫殿御局文に如此被仰出候、各御存分可有御申候、御太刀被遣可然候哉、御内書之事、何も一途被申、可爲尊一候、恐々謹言、

十一月廿九日　日行事　高久判

御内談御衆中

九州澁川殿へ御内書、幷御太刀等可被下候哉否之段被仰聞候、長承候、一廉在之樣、大内都督執被申候儀候間、尤可然存候、但ヶ樣之御事は、大館與州御存分肝要存候、　元造

伊勢守被申趣、無餘儀存候、自餘に相替仁躰候、かた〳〵以伊勢被申旨にまかせられ可然事存候、　晴光

尤同前に存候　常興

〔武家名目抄〕（職名二十七上）按、澁川尹繁、天文の初、沒落の後、大内義隆、澁川の一族を抑立して、九州探題と稱せり、本文にいはゆる澁川殿はこれなり、されど澁川の家衰弊せしことなれば、治術をほどこすべき勢もなく、遂には大内氏、ひとり西國に跋扈せしと見えたり、

〔澁川家譜〕（武家名目抄職名部二十七上所引）義満將軍之御代、澁川満頼ニ九州探題職初而被仰付、應永三年ニ筑前國ニ罷下、満頼ヨリ尹繁迄五代ハ、九州之致押、天文二年ニ筑紫殿（○大友氏）謀叛ニヨリ致合戰、一門大略討死仕候、其砌森戸板倉、各貳人之家老共、某堯顒ヲ相扶ケ、筑前ヲ遁出、有馬殿ヲ賴申、肥前國藤津郡ニ致牢人、其後天正三年、龍造寺隆信之代ニ罷成、手ニ付申、于今存命罷在候事、

〔大友系圖〕貞宗（大）（従五位下、左近將監、孫太郎、左衛門尉、近江守、法名直菴具簡、號顯孝寺、○○○鎮西奉行、）

氏泰（七）

氏時（八）

親世（九）（童名千代松丸、従四位下、左馬助、丹後守、式部大輔、修理大夫、法名勝儼、祖高號瑞光寺、自親父略○民受家督、探題不補之間、親世宜致九州之成敗之由、有鹿苑院義満將軍之御判、）

〔大友記〕大友九州之探題職給ル事

能直ヨリ九代之後胤、瑞光寺殿修理權大夫源親世入道、祖高ヨリ以來、九州之探題ニ侍リタマフ、彼親世ト申奉ルハ、ナラビナキ仁義ノ名將ニテヲハシケル、（○中略）御世ツギタマヒ、肥後國菊池ト對陣事七十一度、（○中略）菊池ウタレシカバ、豐筑肥六箇國、事故ナク御手ニ入、九國二島親世入道祖高御旗下ニゾナリニケル、世シヅマリ、官位ノタメ上洛マシ〳〵、左右ノ大臣ニ付テ奏聞シタマヒケレバ、御門叡覽アリテ、九州ノ探題タル院宣ヲナシ下サレ、其ヨリ以來、筑紫ノ探題ニ備リ給ヒケリ、

○按ズルニ、大友氏ハ、鎌倉ノ時ヨリ、世々鎮西奉行ノ職ニ補シ、足利氏ノ時ニ至レリ、サレバ大友記ナル探題ハ即チ、鎮西奉行ノ事ナリ、當時澁川氏世々探題トナリタレバ、其外ニ探題ノ職

中國探題

アルベカラズ、歷代鎭西要略ニ、應永三年、大友修理大夫親世、補二九州奉行職一、蓋因二大内義弘之吹擧一也、(或說、大友親世、此時任二探題一矣、此疑誤乎、大友先代、世爲二奉行一、)トアルニテモ知ラルベシ、

〔大友記 上〕義鎭公ナリ立ノ事

義鑑公御最後ノ跡ハヤウチヲ以テ別府へ注進シケレバ、義鎭公早々歸リ給フ、○中略其後事故ナク義鎭公大友十八代目ノ探題ト仰ガレタマウ、若タマシマセドモ、御仕置宜シクシテ、豐筑肥六箇國之上下萬民、トモニ此君ヲカツカウスル事不レ斜、

〔古文書類纂 下書狀〕大覺寺大僧正義俊書狀(伯爵立花寬治所藏)

九州探題職幷大内家督之事、任二先例一被二仰付一之由被レ成二御内書一候、尤珍重存候、猶宗可可レ申入候間不レ能二詳候一、穴賢々々、

十一月九日　花押

大友新太郎殿(○義鎭)

〔園太曆〕貞和五年四月十一日、(直冬發二向長門一事)傳聞右兵衞佐直冬、今日進二發長門國一、於二彼國一可レ成二敗八ケ國事一之由風聞、可レ尋、

〔太平記 二十六〕直冬西國下向事

先西國靜謐ノ爲トテ、將軍ノ嫡男宮内大輔直冬ヲ備前國へ下サル、抑此直冬ト申ハ、古へ將軍ノ忍テ一夜通ヒ給タリシ越前ノ局ト申女房ノ腹ニ出來タリシ人トテ、始メハ武藏國東勝寺ノ喝食ナリシヲ、男ニ成テ京へ上セ奉シ人也、○中略時々將軍ノ御方へモ出仕シ給シカ共、猶座席ナンドハ仁木細川ノ人々ト等列ニテ、サマデ賞翫ハ未ダ無リキ、而ルヲ今左兵衞督(○足利直義)ノ計ヒトシテ、西國ノ探題ニナシ給ヒケレバ、早晩シカ人皆歸服シ奉リテ、付順フ者多カリケリ、備後ノ鞆ニ座シ給テ、中國ノ成敗ヲ司ドルニ、忠アルモノハ不レ望恩賞ヲ賜リ、有レ咎者ハ不レ罰去二其境一、自レ是多

年非ヲカザリテ上ヲ犯シツル師直師泰ガ惡行彌隱ノモ無リケリ、

〔長門國守護職次第〕廿七兵衛佐殿直冬御代官仁科左近大夫將監

○按ズルニ、直冬ハ探題職ニテ、長門ノ守護ヲモ兼テタルナリ、又御代官トアルハ、探題職ノ代官ナリ、

〔江濃記〕六角京極合戰事

明應永正の頃、畠山細川合戰の頃には、京極殿は政元と一味し、六角殿は畠山と一味にて、義尹公方を取立被申けり、此時、中國の探題大內左京大夫義興せめのぼり、公方を御供申、京都に備へ奉り、大內十三年の間、管領に任じけり、

〔見聞雜錄〕武家名目抄職名部二十七上所引兼ては禁中より信長方被仰下候は、天下の支配いたし候共、中國十六ヶ國の儀は、毛利家を以て探題とすべし、○中略信長は五十ヶ國之東西南北支配は仕候へ、中國十六州は毛利家との勅定たり、

〔武家名目抄〕職名二十七下奥州探題又號奥州管領

按、足利殿兵權をとられし初め、奥羽は僻遠の地にして、權勢の及ぼし難きのみにあらず、北畠家官軍の首將として、奥羽の二州を統領ありし故に、二國の兵士、併其指揮に從ひしかば、それを壓せらるべきために、等持院殿○足利尊氏一族石塔義房を陸奥の鎭將としてかしこに置かれ、國內の大小事を沙汰せしめ、且は奥羽の將士を招誘して歸伏せしめ、且は軍兵を催督して官軍を誅しむ、これいはゆる奥州探題の始めなり、其後義房が職をとゞめて、畠山國氏と吉良貞家二人に命じて、陸奥探題とせられしが、國氏は故ありて貞家に殺されしかば、其後は貞家ひとり國事を執行せり、貞家所職を子國家に傳へし後、又畠山國氏の男國詮を探題に補せられ、滿家と共に國務に從はしむ、然るにいくほどなく、斯波家兼奥羽二州の探題に任せられて下向し、專ら二國の成

敗を司ざりければ、其勢遠く二將の上に出たり、さて畠山家は國詮の子滿泰が時まで一方の探題をうけ給はり、吉良家は滿家までにして職をさり、上杉家も又管領たりしかど、いくほどもなくして奥羽の地すべて斯波一家の管領する所となれり、藤田系圖には、吉良滿家を治氏に作る、後に改名せしとみゆ、同系圖に、治氏の子治部大輔治家が時に、鎌倉基氏朝臣奥州より召返して、上州の内にて采地を給ひし由みゆ、家兼の子直持の時に至て、弟兼頼を出羽探題に定めをかれ、ひとり奥州の成敗を攝せり、これより二人の子孫永く各國の成敗をふさねて、他門の族、此任にあたらざる事となりぬ、もとより足利家にて置る重職にして、九州探題にひとしきつかさなり、大崎義隆職を失ひし後は、またこれを置るゝ事なしといふ、

〔白河證古文書上〕一結城大藏少輔〇親朝、同彈正少弼〇顯朝、式部少輔、伊達一族等事、參御方可致軍忠之由、先日被成御教書訖、可存其旨之狀如件、

康永二年四月十九日　　御判〇足利尊氏

宮内少輔四郎入道殿

〇按ズルニ、宮内少輔四郎ハ石塔義房ニテ、此時陸奥ノ鎮トナリテ、國中ノ事ヲ掌レリ、康永元年五月ノ阿蘇文書ニ、於奥州者、大略歸伏候、凶徒方大將石塔入道楯被打落候了トアルニテ知ルベシ、

〔尊卑分脈源四〕高國奥州探題、藏人、上野介、畠山小太郎、——國氏奥州探題、管領、左馬權頭、畠山、従五下、中務、橘太郎、同彌太郎、

——國詮奥州探題、修理大夫、宮内少輔、——滿泰奥州探題、修理大夫、

〔尊卑分脈源十三〕義繼吉良——經氏——經家——貞家修理大夫、従五下、奥州一方管領、——滿家中務大輔、従五下、奥州一方管領、

〔武家名目抄職名二十七下〕按、一方管領といふは、畠山國詮等と、國をわかちて預る故の稱なり、

〔白河證古文書上〕一奥州郡々檢斷奉行事、任先例不可有相違、但於安積郡者、追可有其沙汰之狀如件、

貞和二年六月廿七日　　右馬權頭(花押○山國氏)

結城大藏大輔殿

〔尊卑分脈四源〕宗家(志○波○尾張守)―家貞

高經―家兼(奥○州○管○領、引付頭人、伊豫守、)―直持―詮持(彥○三○郎、任○奥○州○之○大○將○、)

〔陸奥國會津示現寺文書武家名目抄職名部二十七下所引〕三浦大炊小太郎左衛門尉盛通妻平氏申、陸奥國耶麻郡内、下利根川村當知行分安堵事申狀壹通、謹進覽之、子細載于狀候、以代官令言上候、可被經御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

貞和四年八月十二日　　右馬權頭國氏在判

左京大夫貞家在判

進上　武藏守殿

〔結城古文書〕陸奥國高野郡内當知行分事、領掌不可有相違之狀、依仰執達如件、

觀應二年十月廿五日　　右京大夫御判

結城三河守殿

〔陸奥國下河邊八幡文書武家名目抄職名部二十七下所引〕石川板橋播部介高光申、所領陸奥石川庄之内、千石板橋八幡宮神領下河邊村澤尻等之事、右於被所者、高光重代相傳之所、舍兄千石大和權守時光、爲宮方之時令押領畢、而時光降參之後、畠山右馬權頭管領之時雖及爭論、高光被裁許當知行云々、爰時光所令同意顯信卿、當時凶徒隨一也、於高光者、自最初爲御方、去々年度々致軍功、至命抽戰功上者、當所等本領當知行無相違、可預安堵御下文之旨申之趣、急速被經御沙汰候哉、高光軍忠、若僞申候者、八幡大菩薩御罰可能蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

觀應三年卯月十三日　右京大夫貞家判

進上　遠江守殿

〔白河文書〕陸奧國會津蜷河庄半分事、公方恩賞申沙汰之程所充行也、守先例可被致沙汰之狀如件、

文和三年十一月九日　中務大輔〇吉良滿家

結城三河守殿

〔諸家系圖纂十五上杉〕山内

憲顯――憲英〇藏人大夫陸奧守、號國淸寺殿、奧州管領、法名常興、道號大宗、八月二日逝去、

〔大崎系圖〇武家名目抄職名部二十七下所引〕斯波家兼左京大夫、伊豫守、依勅命與舍兄高經下向於北國而退治於義貞故賜出羽陸奧探題、〇〇〇〇〇

〔奧州那須釜大安寺文書〇武家名目抄職名部二十七下所引〕大寺安藝入道道悅、竹貫參河四郎光貞、相論石川郡吉村之事、道悅所申頗有其謂云々、早任代々可致領掌狀如件、

明德五年七月一日　左京大夫直持〇斯波判

〔石川文書乾〕探題與富澤河內守近日及弓矢云々、太不可然候、不日可被廻無爲計略、縱雖有意趣關東進發之間者、總別閣諸事、早速令出陣、可被致忠節之由所被仰下也、仍執達如件、

寬正六年五月十九日　尾張守

石川治部少輔殿

〔政所賦銘引付〕一民部朝泉布野州　文明十三六廿四

奧州探題一族被官人等在々所々熊野參詣先達職事、云譜代由緒、云買得、帶仕心院下知并御奉書當知行候處、上野僧都弟子等競望未休云々、

〔親俊日記〕天文七年六月十五日丁巳、奧州探題大崎殿より御狀アリ、黃金二兩大窪雅樂允、黃金一

羽州探題

兩大崎殿、

〔伊達文書四〕就奥州探題職儀、爲禮大鷹一本、馬一匹、雲雀毛黄金卅兩到來、目出候、猶晴光可申候、爲其差下孝阿候也、

九月廿四日　花押〇足利義輝

伊達左京大夫晴光〇大館どのへ

〔武家名目抄職名二十七下〕按、左京大夫は植宗なり、これは其子小僧丸大崎家をつぎし時のことなり、

〔伊達文書四〕奥州守護代事申付桑折播磨守、牧野彈正忠兩人候、可存其旨事肝要候、爲其差下孝阿候、猶晴光可申候也、

九月廿四日　花押〇足利義輝

伊達左京大夫晴光〇大館どのへ

〔細川家書札抄〕一探題殿へは、人々御中敷、進覽候哉、

探題殿へは付状に候、仍奥州之探題へ氏家安藝入道など、、此方よりは書候つるなり、

〔花營三代記〕應安五年二月十八日、奥州奉行事、被仰松田左衛門尉訖、

〔武家名目抄職名二十七下〕按、此一條は、足利將軍家の時の奉行にて、京都に在ながら奥州のことを沙汰すべき爲に命せられし所なり、もとより武備等の事をうけ給はるものにあらざれば、鎌倉殿の時の奉行、葛西伊澤等とは、その司ざる所同じからざれども、名稱同じき故に、しばらく爰にのす、此後明德三年に至りて、陸奥出羽兩國をも、鎌倉公方の指揮たるべき旨定められしかば、さらにこの奉行をも置かれずなりしなり、

〔武家名目抄職名二十七下〕按、羽州探題は、斯波家兼奥羽二州の探題となりしに權輿せしかど、其

時は一人して二國を兼ふさねたりしなり、然るを家兼が子直持、父の職を繼て後、出羽の管領をば弟兼頼に讓りしにより、奥羽の鎭分れて兩家の所職となれり、それより以降、兼頼が子孫、永く最上郡に居住して國内の成敗をつかさどり、最上義光が時にいたるまで其職を世々にせしかども、文明明應の際より天下悉く亂れて、何れの地も鬪爭の界ならぬはなかりしかば、奥羽之兩探題ともに、古のごとく治術をほどこすべきいとまなく、其勢漸く衰微せしなるべし、然れども義光頗英武の才ありければにや、家聲をば落さゞりしに、世の轉變に准ひ、探題の職はこの時に至りて廢せしなり、其職掌と其重任なりしことは、奥州探題に准じてさとるべきなり、

〔最上系圖〕家兼伊與守 ― 兼頼修理大夫、出羽按察使、延文元丙申年八月六日、出羽國最上郡府中山形入部、康暦元年六月八日卒、法名光明寺成覺、

― 直家左京大夫、應永十七年正月六日卒、法名生蹊寺日淳光公、 ― 満直修理大夫、應永卅年八月三日卒、法名法禪寺念叟親公、 ― 満家修理大夫、嘉吉三年五月廿八日死、法名禪會寺虎山威公、

― 義春右京大夫、文明六年二月廿七日死、法名大直源公、 ― 義秋修理大夫、文明十二年十二月廿六日卒、法名松岩芳公、

― 満氏治部大輔 ― 義淳左衛門佐 ― 義定雲照寺 ― 義守天正十八年五月十七日死、行年七十、法名後龍寺明林榮林居士、 ― 義光出羽守少將、天正十九年任二侍從一、慶長十六年三月廿三日、任二少將一、同十九甲寅年正月十八日死、行年六十九、法名光禪寺玉山白公、

○按ズルニ、武家名目抄職名部二十七下ニ引ク所ノ最上系圖ニハ、兼頼ノ官ヲ修理大夫出羽大將ニ作ル、

〔蜷川親元記〕武家名目抄職名部二十七下所引〕奥州探題左衛門佐殿ヘ、御所氏家三河守、羽州探題右京大夫殿、氏家伊與守、以上太田上野介光注申分如此、

〔奥羽永慶軍記〕二〕白鳥十郎被討事

羽陽谷地ノ住、白鳥長久ガ嫡子十郎義國トイヒシ者、イカニモシテ山形ヲ亡シ、最上三郡ヲ手ニ入、國中ノ大將ニ成ラバヤト明暮心ニ懸ケルガ、兎角信長將軍ニマミエ媚ヲナシ、其後一揆ヲ起サントゞ議セラレケレドモ、時シモミダレタル世ナレバ、左右ナク通ルベキ事難ケレバ、先白鳥隼

奈良奉行

人ヲ使者トシテ尾州安土ノ御所ヘゾ遣シケル、〇中略此事最上義光ノ臣氏江尾張守聞テ義光ニ申ケルハ、白鳥ヒタスラ信長公ヘ媚ヲナスト承ル、今ノ世ノ習ヒニテ若ソシリヲ企、君ヲ討奉ラント議スル事モアルベシ、是ヨリモ使者ヲ以テ仰ラレ然ルベウ候フト申ケレバ、義光實ニモトテ、志村九郎兵衛ヲ使者トシテ信長公ヘ遣シケル、九郎兵衛、國々亂レ、通路心ニ任セネド、越後國ヨリ北國ヲ經テ、ヤウ〳〵トシテ到著ス、山本査三郎ヲ以、白鷹一居獻ジ、其序ニ申ケルハ、義光此度某ヲ指登セ候フ事別儀ニアラズ、是ニテハイマダ知シメサレヌ事モ候ハン、義。光。先。祖。按。察。使。足。利。修。理。大。夫。兼。頼。ヨ。リ。今。義。光。マ。デ。八。代。出。羽。國。ノ。大。將。ニ。テ。候。日外白鳥十郎使者ヲ以テ己羽州ノ大將タルヨシ訴奉ルト承ル、是極タル僞ニテ候、此旨ヨク〳〵申セトテ、某ヲハル〳〵サシノボセテ候フト申ケレバ、信長公聞シ召、扨ハ白鳥十郎僞リケルコソ心得ヌ、其義ナラバ義光出羽ノ大將タル事疑ヒナシト、剩其時四位少將ニゾ補セラレケル、

〔奥羽永慶軍記三〕山北前田氏斷絶ノ事

北奥州北羽州ノ邊ヘハ、國中ノ事サヘ音信不通ノ時ナレバ、何事モ僞ノミ多カリシガ、最上會津ナド使者ヲ上セテ、國中ノ探題ヲ蒙リシナド、アラヌ虚説唱ヒケレバ、油斷スベキニアラズ、イザヤ參禮ヲ遂ント、同十年ノ春、山北ノ大將小野寺遠江守景道、比内ノ住人淺利與次郎義實、前田薩摩守利信、秋田ノ名代檜山山次等打ツレテ上洛ス、

〔武家名目抄職名二十八〕奈良代官又稱奈良奉行、奈良所司代、

按、大和國は、鎌倉室町の世とともに、興福寺の別當大乘院一乘院にて守護せる國なりければ、かしこに官府を設け置て、衆徒の中、さるべき輩其所に候し、奈良はさらなり、國中の撿斷以下の事、大かたはからひ沙汰する事なりき、東大寺にかゝはりし事はいろはざりしと見ゆ、されば足利殿の時にも、南都奉行といふはありしかども、かしこに訴訟いできしおりに其訟をきゝ、又は春日祭會の時、下向して非

常を守るなどやうのつかさなりければ、ひたすら彼地に在住して撿斷の沙汰など執するまでの事はなかりしに、應仁の亂いできし後、諸國大に亂れて、畿内の地もたゝかひの街となりければ、大和のわたりは畠山家より管領し、文明中に山城大和の地に代官を居置て、何事をも奉行せしめしかば、奈良もかの代官のはからひとなりしなり、それより常のならひとなりて、其後細川家大和を管領せしほどは、赤澤氏の者に命じて、奈良の諸務を沙汰せられしなり、やがて三好松永の黨、近畿に横行するに及びては、松永久秀大和の多門に在城して、南都の成敗を專らにせり、

〔花營三代記〕應安四年十月十九日、南都右筆、　中澤掃部大夫入道　雅樂左近入道

十二月十八日、飯尾左近入道可爲南都奉行之由被仰之、

〔康富記〕寶德三年十一月廿一日丙辰、今日聞、(南都奉行上洛事)春日神木已下大訴令落居、興福寺寺門、今月十九日令開門、上使奉行飯尾美濃守、(貞元)同左衛門大夫、(爲數)松田主計允等、昨日(廿日)夜令上洛云々、

〔多聞院日記〕文明十六年三月廿九日、圓城坊坊主貞覺房得業被出被申云、山城國寺社領之事、畠山右衛門佐殿不可被成綺之由、去年成敗之間、珍重之由存處、又御内人齋藤方、近日可致知行云々、(中略)○去年既兩三人奉行令入國、當社當寺之事、別而不可成煩之由、奉行蒙貴命之由申候、則爲寺門而山城國寺門領被取日記之處又如此、不幾令相違之條、言語道斷也、　四月廿七日、近日山城國之事、畠山右衛門佐殿可有知行云々、仍而春日八幡之御領事は、寺社本所領不可成綺之由被申候間、昨日寺門之使者承仕道乘下向山城、右衛門佐方代官方令對面、當寺社領諸院諸坊領不可被成其綺之由被申候了、則隨而御日記之面不可有緩怠之由、慇懃返答在之、右衛門佐殿代官豐岡、(又代官百田掃部)小柳、(又代官井大炊助)花田、(又代官土塔三郎右衛門)　五月六日、自畠山右衛門佐殿方山城國宇治ヨリ南分押而知行、於春日八幡之領は不可成綺、全以可致本知行之由、自當年儀以被言出者也、則三奉行々右衛門佐殿被居置之間、自舊冬三奉行ヨリ又代官兩三人、山城國ニ入被致所務、(中略)○三奉行者小柳、豐岡、花

田ナリ、又代官之躰可口上記、

永正二年八月二日、澤藏軒京兆之儀者、今日山城國入部了云々、去六月十日、細川殿より宗益御免則上洛、只今如本城州被仰付之條、希代之事也、　三年正月廿六日、今日澤藏軒河內譽田古市へ責入追落了、兩遊佐殿難防戰不叶、即兩遊佐ハ高屋へ被入畢、　廿九日、通夜河內高屋城攻落了、仍當國奈良隱物以下、以外馳走也、但自成身院澤藏軒以使被音信處、懸ニ返事在之間、先以安堵了、　二月七日、澤藏軒者上洛畢、　三月十五日、奈良中寺門之儀無爲之趣、澤藏軒書狀而承仕持來了、

○按ズルニ、澤藏軒ハ細川右京大夫政元ノ家臣赤澤澤藏軒宗益ナリ、

古事類苑

官位部四十八

足利氏職員五

守護

足利時代ノ守護職ハ、鎌倉ノ例ヲ因襲シ、三大犯ヲ檢斷スルヲ以テ主ト爲スト雖モ、其權極メテ重クシテ、從前ノ國守ニ過グルノミナラズ、子孫世襲シテ封建ノ勢ヲ成シ、管內ノ事ハ隨意ニ之ヲ行ヒ、其地頭家人ヲモ驅使シタリ、其朝廷幕府ニ奉ズルコトハ、纔ニ恒例臨時ノ儀節、及ビ土木ノ事アル每ニ其役ヲ執リ、其費ヲ獻ズルニ過ギズ、且其大ナルモノハ數國ニ亘リ、甚シキハ一族ニシテ日本ノ六分ノ一ヲ領スルモノアリ、殊ニ寬正長祿以後ニ至リテハ、幕府ノ威令行ハレズ、群雄割據互ニ相併吞シテ、守護ノ名モ隨テ亡ビ、以テ德川幕府大名ノ基ヲ啓クニ至レリ、

守護所

〔建內記〕嘉吉元年十月廿八日辛酉、華藏坊重慶法印入來、高家庄事、使者則向入部、無相違、但雖然赤松播磨守手宇野次郎滿貴(自代官也)未渡之、彼舍弟(ト識)一屬守護(山名)手、縱彼威勢可支地下之由可令了見歟、以內緣可示置垣屋云々、宍粟郡郡司今月廿一日入部、件郡欲入高家之處、無其儀、就前守護代居所、入申栢野庄、已開宇野館、欲居住之處、宇野點近所之道場、令居住之云々、播磨國新守護(山名右衞門佐持豐)定守護代垣尾、大田垣、土橋三人、彼去十一日入部、國中郡々郡司同沙汰居之、仍赤松播磨守滿政奉行、三郡郡司誰人哉、可尋知之、

〔筑紫道記〕是より守護所陶中務少輔弘詮の館に至り、傍の禪院にやどりして、又の日、彼館にて、さ

職掌

まざまの心ざし有、折ふし千年治部少輔、松次郎左衛門尉弘相など有て、一折あり、

ひろくみよ民の草葉の秋のはな、此國〇周防の守護代なれば、萬姓の榮花をあひすべきのこゝろなり、

〔建武式目〕一諸國守護人殊可被擇政務器用事

如當時者、募軍忠被補守護職歟、可被行恩賞者可宛給庄園乎、守護職者、上古之吏務也、國中之治否、只依此職、尤被補器用者可叶撫民之義乎、

〔尺素往來〕夜討、強盜、放火、刃傷、打擲、蹂躙、捕女、山賊、海賊、勾引、辻斬、追落等、此間聊蜂起事、於京都者侍所、於國郡者守護、可被致嚴密撿行歟、〇中略企無理訴訟、被棄捐之刻、構奉行人之偏頗之條、殊無其所謂者也、將亦奉行若耽賄賂屬託、贔負一方者、太以不當也、縱雖被成下御教書、守護無左右不可被遵行、重可被伺申也、

〔太平記三十三〕公家武家榮枯易地事

前代相模守〇北條高時ノ天下ヲ成敗セシ時、諸國ノ守護、大犯三箇條ノ撿斷ノ外ハ、綺フ事無リシニ、今ハ大小ノ事共ニ、唯守護ノ計ヒニテ、一國ノ成敗雅意ニ任ズレバ、地頭御家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ、寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所トテ押ヘテ管領ス、其權威、只古ノ六波羅、九州ノ探題ノ如シ、

〔樵談治要〕一諸國の守護たる人廉直を先とすべき事

諸國の國司は、一任四ヶ年に過ず、當時の守護職は、昔の國司におなじといへども、子々孫々に傳て知行をいたすことは、春秋の時の十二諸侯、戰國の世の七雄にことならず、所詮頼朝の大將、後白河院の勅諚として、六十六ヶ國の總追捕使に補せられしよりこのかた、守護職といふは、武將の代官をうけたまはれる由にて、當代にいたるまでも、其例ををはるゝうへは、はやくさだめをかれたる御法をまもり、かぎりある得分の外は、そのいろひをなさず、上には事君の節をつくし、

下には撫民の仁をほどこして、廉直のほまれ、當世に聞、隱德の行、末代に及さば、冥慮にもかなひ榮花を子孫につたふべきを、やゝもすれば無常をかまへ、猛惡をさきとする事、かへす〲しあんなきにあらずや、貞永の式目には、或は國司領家のそせうにより、或は地頭士民の愁訴につきて、非法のいたり顯然ならば、所帶の職をあらためられ、穩便のともがらに補すべき也、又建武の御法には、守護職は、上古の吏務也、國中の治否、只此職による、尤器用に補せられば、撫民の義にかなふべきかと云々、此式條のごとくならば、時にしたがひ人をえらびて、其職に補せらるべきよしみえたるにや、然るに當時の躰たらく、上裁にもかゝはらず、下知にもしたがはず、ほしいまゝに權威をもて、他人の所帶を押領し、富に富をかさね、欲に欲をくはふる事は、さしあたりて、ことかきたるゆへにはあらず、只無用の事のしたきさ、人かずをおほくそへんとのため成べし、もとより富貴の家に、いたづらに寶をたくはへて人にほどこさぬは、思出もなき事なるべし、妻子珍寶及王位とて、死ぬる時はわが女子もたからも位をも、一として身にそへぬ事とこそ佛もとき給ふなれ、されば猿樂田樂のかけものにし、傾城白拍子の纒頭にあたふることは、さらに非分の事にはあらざるべし、只世のそしりをうけ、人のうらみをおふは、無理非道の押領をなすゆへ也、又人數のほしきことも、たれかはねがはしからぬ事にはあらざれど、正躰なき家人に所領を多くあてをこなへば、後々は過分になりて、いさゝかも氣にあはぬ事のあれば、主をもとりかへんとす、かゝる事はまのあたりに見をよぶ事ども也、又人をたづぬるよし聞つたへて、あなたこなたよりふしぎの物どもが、一旦の給恩をむさぼらんために名字をいだすといへども、一大事にのぞみ、戰場などにおもむく時は、我先にと落うせて、折角の用に立ものはこれまれ也、

〔今川記かな目錄追加〕一不入之地之事、(中略)自舊跡守護使不入といふ事は、將軍家天下一同御下知を以、諸國守護職被仰付時之事也、守護使不入口ありとて、可背御下知哉、只今は、をしなべて自

分の以内量國の法度を申付、静謐する事なれば、ゑゆごの手入間敷事、かつてあるべからず、兎角之儀あるにおいては、かたく可申付也、

〔武家名目抄〕職名二十九上 按、〇中略應仁の亂後、諸國の守護各在國して、幕府の令に從はずなりしより、國々の地頭御家人は、いつとなく守護の家人となりしかば、守護たる輩は、今の世の大名の如きものとなれり、〇註略されば其頃よりこなたには、守護地頭の職掌、いにしへとは一變して、各守護家の法度に任せて、幕府の命を守る事絕果たり、

〔建武以來追加〕一諸國守護、幷武家御家人等、望補吏務職知行本所領事、暦應二五十九

右云右大將家〇源頼朝御時、云貞永式目、一向被停止訖、而近年背禁制、致自由之競望歟、縱雖替面、自今以後、於有其聞之輩者、可處罪科也、

一諸國守護人以下、使節緩怠事、康永三七四御沙汰

或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論入之由觸遣之處、遵行遲引之條、甚以不可然、向後於難澁使者者、須被收公所帶矣、

諸國狼藉條々 貞和二十二十三沙汰〇中略

同守護人非法條々

一大犯三箇條付苅田狼藉使節遵行外、相綺所務以下、成地頭御家人煩事、

號公役對捍、稱凶徒與同、無左右令管領同所領、與耻辱及牢籠事、得論人當知行人語、下知遵行難澁事、或分取訴論人所領、或押領國中闕所、構表裏沙汰事、

一成緣者之契約、致無理方人事、

一號請所假名於他人、令知行本所寺社領事、

一稱國司領家年貢譴納、號佛神用催促、放入使者於所々追捕民屋事、

一號兵粮幷借用、責取土民財產事、

一誘取他人借書、令兩責負人事、

一以自身所課、令分配一國之地頭御家人事、

一構新關號津料、取山手河手、成旅人煩事、

以前條々、非法張行之由、近年普風聞、雖為一事、有違犯之儀者、忽可改易守護職、若正員不存知、爲代官結構之條、蹤跡分明者、則可召上彼所領、無所帶者、可處遠流之刑矣、

一寺社本所領事　觀應三七廿四御沙汰

依諸國擾亂、寺社之荒廢、本所之牢籠、近年倍增、而適靜謐之國々、武士濫吹未休云々、仍課守護人、依國遠近、差日限可施行、於不承引輩者、可分召所領三分一、無所帶者、可處流刑、○中略將又守護人有緩怠之儀者、可改易其職、次近江、美濃、尾張三箇國本所領半分事、爲兵粮料所、當年一作可預置軍勢之由相觸守護人等訖、於半分者、宜分渡本所、若預人寄事於左右、不去渡者、一圓可返付本所、

〔東寺百合古文書六十九〕東寺雜掌賴憲言上

欲早被經急速御沙汰、重被成嚴密御奉書於守護方、不日被退多治部備中前司入道道元濫妨、被沙汰付下地於雜掌、全所務、備中國新見庄領家職事、

副進

一通御奉書案　一通守護方御施行案　應安元十月八日

右庄者、爲當寺講堂御願料所、長日重色異于他之子細、前々言上事舊畢、而近年道元非分押領之間、依訴申之、被經御沙汰、去貞治六年十月十四日就被成御奉書、應安元年十月八日守護方雖被施行之、道元以不敍用之條、御敎書違背之罪科太不輕、不可遁踵者哉、然早重被成嚴密御奉書、仰御使、不日被退彼押領人、被沙汰付下地於雜掌、爲全御願之要脚、重言上如件、

應安三年七月　日

〔建武以來追加〕一日吉社神輿造替要脚内其國段錢事（應安五七十一）

就被下院宣所有其沙汰也、所詮召出國之大田文、寺社本所領、幷地頭御家人等分領、悉充公田、段別三拾文急速可執進之、若有難澁之在所者、守護使相共遂入部、可致譴責矣、

諸國闕所事（應永十五十一三、武衛管領判在之、飯尾美濃入道常廉奉行、）

諸人就望申、雖被充行、或稱本主、或號新給、帶證文申之輩繁多也、因茲參差之沙汰出來之段不可然、所詮於向後者、闕所之段、土貢之員數、相尋守護、就左右可有其沙汰、若注進日數過廿ケ日者、以訴人差申在所、可充給御下文矣、

〔東寺百合古文書七〕守護方夫日記

應永廿五年十二月十三日
一人（十六日十六人）　炭持孫四郎　　三人（同十六日 廿二日分、廿二人、坊平内、十七日分、十七人、介、）

應永廿五年十一月
一人（十日十人）　加治左近分　　一人（同十二月廿六日 廿日廿人播部三郎 十九日分十九人田中左近）

同應永廿六年正月ヨリ

正月十一日
一人（廿三日廿三人）　大家分五郎二郎　　二月二日 一人（炭持十八日分、十八人大夫）　三月三日料 一人（九日分九人）大家分助四郎　五月一日 一人（六日分六人）大家分大夫三郎

伊勢夫
一人　十七日　致所　一人（木引十人）濟平内　木引 一人（九日分九人）いも吉　五月十八日 二人（十六人十六日）あつき谷大家

六月七日
二人　未不歸　同日役人數應永廿六年

廿人　つくり谷けんたんの物　　十人　壁柱（度々夫催促御使くり谷）　同廿六年

應永廿五年十二月晦日
米二斗三升　政所分度々　三百十八文　酒直雜事

米一斗六升五合　大家にて度々　二百十文　酒直雜事

應永廿六年六月十日

〔東寺百合古文書七〕東寺御領丹波國多起郡大山庄内

一院谷御百姓等謹言上

抑守護御方人夫の事、當年正月より六月に至まで、二百五十餘人被召仕候、（但日數分）御領之百姓分八人之處、見るに如此人夫被召仕候間、たとい毛を付候とも、御百姓等安堵難仕候、所詮急速御成敗あづかり候はゞ、□□□地下難足立候、此旨預御披露候ば畏入候、恐惶謹言、

六月十（○應永三十一年）二日　一院谷御百姓等

御奉行所

〔東寺百合古文書 入〕太良庄半濟御敎書案

勝定院殿樣（○足利義持）御敎書案

東寺雜掌申、若狹國太良庄地頭領家兩職半濟、幷預所職事、早退被官人等押妨、一圓可被沙汰付寺家雜掌之由、所被仰下也、仍執達如件、

應永卅三年十二月廿六日　畠山殿　沙彌判

一色左京大夫殿

此御敎書付守護方之處、不合遵行之上、御敎書抑留畢、仍普廣院殿（○足利義敎）御代、三ヶ度被立御使、（御使）飯尾加賀守、守護御返事ハ、在陣之（大和陣、越智害）尾御對治之時、上者、且有御延引者、可畏入候由申事、

〔東寺百合古文書 百四十四〕一守護殿より御要脚段錢催促入目注文事

合永享三年分

壹貫文　守護殿　一所壹貫文御禮分　壹貫文　兩奉行殿へ　禮分

三百文　兩三人中間方へ　壹貫文　中澤殿へ、但免許以前催促のわび事、內ロ入禮分、

二百文　配符使ニ出候　三百文　配符注進使粮物

二百文　注進御左右、仍延引、重而飛脚へ物、　一貫七百三十文　催促使入目（六日夕部より同八日朝迄色々分）

以上五貫七百卌二文

此代米五石一斗五升七合　公文別ニ九升、和市定、

公方半分二石五斗七升八合五勺

十二月九日

〔建武以來追加〕一事公仁躰、對守護人、其咎出來時、可致注進事、寛正卯廿七

在國之輩、重科出來者、速爲守護注申子細、可隨御成敗、萬一以私之儀、不事問於致計沙汰者、縱雖爲道理、可被處嚴科焉、

〔政所内評定記錄〕寛正四年六月廿六日　内談

一武田被官與一色左京兆被官申船荷物事

十三九大船事者、主各別之上者、於小濱立請人、先被返渡、相論枝舟事者、仰豐前守護可被召上責主、

本――淸泉

合――治河

〔東寺百合古文書九十八朱書〕御讓位段錢免除、守護遵行案、寛正五六廿、

東寺領太良庄御讓位段錢事、爲免除地之上者、早可被止國催促之由候也、御執達如件、

寛正五　六月廿日　長行判

繁議判

内藤八郎殿

山中但馬守殿

〔蜷川親元日記〕寛正六年五月廿六日壬申、細川讚岐殿被仰渡御狀、

三河國額田郡内蠧之事、及₂種々狼藉₁之旨、爲₂守護成敗₁之處、彼牢人等、其邊徘徊之由候、太不₂可₁然候、殊被₂成₁奉書、御一段可₂申付、萬一親類彼官人中許容後候者、任₂御成敗之旨、嚴密可₂致₁其沙汰₁候、巨細猶蜷川新左衞門尉可₂申₁候、謹言、

五月廿六日　　　　——親

松平和泉入道

同奉書

三河之蠧(文名在₂別紙₁)事、爲₂守護御成敗₁之處、彼牢人等隱居其邊、立歸及₂種々狼藉₁云々、併親類被官人中許容有₂之歟、若然者、以外次第也、早任₂御奉書之旨、可₂被₁致₂沙汰₁候也、仍被₂下御狀₁候也、猶以一段可₂被₁加₂成敗₁候由被₂仰出₁候也、仍執達如件、

同日　　　　親元

松平和——貞雅

〔齋藤親基日記〕寛正六年十一月廿三日、午剋若君(○足利義尚)御誕生、(御產様)御臺所、細川刑部少輔常有(泉州半守護)作事以下諸事、兩守護相共沙汰也、仍泉州平均段錢棟別有₂御免、被₂相遂₁之、(但少々除地有₂之)崇壽院堺南庄德錢同前、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年二月十七日、湯山湯沐御暇之事、以₂伊勢備中守₁伺₂之、卽免許之由被₂仰出、仍途中警固之事、依₂攝津國守護₁於₂細川右京大夫殿方₁被₂仰付₁也、

〔越前氣比古文書〕就₂ゑらのとねがことに₁よの物、とねののぞみをなすといふとも、此とね彥次郞いちごの間、きほひのぎあるべからざる物也、たゞし守護殿の御意にそむくぎあらば、此はむもほうぐたるべし、仍狀如件、

課役

文明元年卯月廿八日　判

〔大館常興日記〕天文九年二月九日、日行事(折)より各へ折紙在之、明後日より御門役事、たれ〳〵に可被仰付哉の事、重而細川攝州へ可被仰候歟、總別和泉守護は、もと〳〵より花御所四足、一季(三ケ月)づヽ被勤申候事にて候と存候、既只今御事かけ候間、今月中被勤申候やうにと、以御門役奉行可被仰歟と存候由申候也、

〔鹿苑院殿御元服記〕應安元年四月廿七日　御評定始

禁裏進物事(後日有其沙汰被進之)

砂金百兩(兩分本法、銀折敷、)　太刀一腰(皆銀)　鞍馬一疋(鹿毛、切付唐皮、當日御祝ニ、同管領進上之、)　御使(能直持參執奏)　鞍馬一疋(糟毛)　被進執奏(西園寺前右府)

禁裏御進上金代等諸國守護役。

○按ズルニ、永享元年將軍義敎元服ノ時モ、内裏ヘ進リシ金代ハ、諸國守護役タルヨシ、松田長秀記、及ビ元服記ニ見エタリ、

〔集古文書(十六判物)〕勝定院義持公御判物(攝津國兔田吉田道可藏)

南禪寺慈聖院末寺、美濃國大興寺領、段錢以下臨時課役守護役等事、早所免除之狀如件、

應永卅年十二月廿四日　菩薩戒弟子(花押)

〔普廣院殿御元服記〕一正長二年(○永享元年)三月九日乙卯、亥刻御元服、十一日、公家進金代、諸國守護役、(銀折敷代政所方促、諸道下行目錄別紙ニアリ、)　御太刀十三振(此内三振白)　御鞍二口、總鞦二懸、

以上自御倉籾井申出之、

〔康富記〕寶德二年五月廿一日甲子、晩向官務亭、局務被來談、參會有一盞、官務被語云、我文庫修理、宿所等營作之料、去年被申請、反錢自公家被仰出武家、武家被仰付管領者也、被成御敎書了、播磨國丹

波國邊、皆爲守護請可爲執沙汰之由有領掌、播磨分、今日初而萬疋到來、奉行飯尾肥前孫左衞門付兩人也、爲初度之間、先百卅貫直送官務許、今日到來、祝著之由被語之、

〔蔭涼軒日錄〕長祿二年六月十一日、常在光寺領、丹後國守護段錢依前御代御免許之御判、奉懸于御目、故相國等持院等持寺領被準于御料所、被成嚴重之御判、以故守護段錢御判被成、免許之旨也、此由命于奉行也、

〔齋藤親基日記〕寬正六年十一月十日、(御部位方)寒帳臭侍御訪、幷綾錦絹等代沙汰分、

一細川兵部(飯兵大之種)　御訪卅貫文、備中守護、上綾廿丈、代卅貫文、

一佐々木大膳大夫(飯和之清)　御訪同前、京極、絹二百七十丈、代百貫文、

一細川淡州(飯和之清)　上綾卅丈、代四十五貫文、

一土岐美濃守(賽四右種基)　御訪五十八貫百文、絹六十三丈、代卅貫文、

一山名相州(賽四右種基)　御訪同前、上綾廿丈、代卅貫文、

一山名兵部少輔(賽民)　同前、美作守護也、

一佐々木龜壽　御訪卅貫文、綾同前、六角

一山名七郎(飯新左爲衞)　同前、因幡守護也、

一武田大膳大夫(飯新左爲衞)　信賢　同前

一細川阿波入(飯四郎左爲衞―信)　御訪廿九貫四百文、和泉半守護、上綾十五丈、代廿二貫五百文、

一細川刑部　常有　同前

一富樫鶴童　御訪同前、上綾十丈、十五貫文、

一赤松次郎法師　同前、于時加賀半國守護、

〔土岐家聞書〕一當方へ瑞龍寺殿(〇土岐成賴)御時、慈照院殿(〇足利義政)御成には、觀世大夫能を仕りて萬疋下さるゝ也、〇中略其謂は三管領幷三ヶ國の守護職は、毎年の御成に毎度百貫也、當方は今濃州一ヶ國也、五千疋可然と云々、

〔蔭涼軒日錄〕長享三年四月六日、茶毘(〇足利義尙、此三月廿六日薨、)此日取事、命昌子可擇之由在通方(江)白之、以來十二日爲定日、〇中略自樹子相尋云、國役出錢員數如何、三个國衆萬疋、二个國衆五千疋、自餘者、三千疋、二千疋、此分也、書以遣之、自文德方以安上司贈一荷二合、乃贈之、

〔東寺百合古文書〕東寺雜掌賴勝謹言上

欲早被下奉行人被經嚴密御沙汰停止守護被官人等押妨任度々御教書可被沙汰付下地於寺家雜掌由被成下御教書全所務當寺領周防國美和庄内兼行方事、

二通御教書案（貞治三年七月四日 同年十二月四日）

右件兼行方、爲當寺領重色異他方地也、而守護大内助衞門、自應安二年以來、號兵粮料所預置家人等云々、所詮任先度御教書被經嚴密御沙汰停止彼等押妨可被沙汰付下地於寺家雜掌由、不日被仰下之、全所務彌爲致御祈禱忠□□□也、如件、

康暦元年六月　日

〔武政軌範〕引付内談篇　遣使節奉書

青蓮院門跡雜掌良緣申、越前國某鄉領家職事、雜掌解（副具書）如此、守護被官輩押妨云々、事實者、甚不可然、早和泉源左衞門尉相共莅彼所沙汰居雜掌、可被申左右使節、令緩怠者、可有其咎之狀、依仰執達如件、

明德二年月日　左近將監

出羽新藏人殿

〔東寺百合古文書〕百十二　東寺雜掌謹言上

當寺八幡宮領下久世庄内八幡田參段間事

右彼田地者、建武三年當庄鄉寄附以來、知行無相違之地也、而當國守護家人飯田及無理之違亂之間、寺家依致訴訟、爲守護可止綺之由、雖被成書下、猶以押領之條、濫吹之次第也、此上者、早預嚴密之御教書、退彼妨、可爲全社用、言上如件、

應永十一年九月　日

〔大塔物語〕爰村上大文字一揆之人々、憚虎口之讒訴、捧目安狀、注進合戰次第、村上中務少輔滿信、並

大文字一揆之人數等、一同連署、申子細事、其狀偁、

右當國〇信濃守護職事、小笠原信濃守長秀、賜安堵之御下文、去七月〇應永七年廿一日令下國、致一國平均沙汰之條、無相違處、事於寄守護諸役、掠譜代相傳之私領、行非禮之間、愁訴至極而不圖迄于合戰處也、是全非奉忽緒公方、若此條在奸曲者、正八幡大菩薩之御罰、各可罷蒙候也、然則被差下清廉之御代官者、彌可致忠節之旨、略言上如件、

則達上聞、可被差下島田遠江入道由、御評定畢、

〔政所賦銘引付〕文明十五年癸卯

一 松封 景秀知客——十二十二

三會院領泉州加守鄉代官職事、就被補任可入部之處、守護被官人等押領之間、廻計略入寺家年之剋、過分致借錢之處、不被返辨云々、任御法可預御礼明之由申云々、

〔政所賦銘引付〕文明十三年

一 飯加 山徒玉藏證祐——五廿八

大裏御料所江上笠村內、大功所務事、一亂中、守護人押領候、任買得相傳之旨、可被成下御奉書云云、

〔東寺百合古文書〕三目安　寶莊嚴院領阿波國大野庄本家職事

右當庄者、往昔以來、重色之寺領也、而爲寶莊嚴院興行、以彼執務職被寄于東寺、被渡御本尊之間、以彼寺領爲御願料足、設勸學乘執行長日之談義、令勤修眞言秘密之行法、奉祈天下泰平、爰去建武年中以來、守護御代官、無是非被押領之間、雜掌先於國雖申事子細、曾依不承引、經奏聞之剋、可有尋御沙汰之旨就成進院宣於武家、爲飯尾左衞門大夫奉行、貞和二年九月十三日、同十月十五日、兩度雖被封遣申狀、依不被申是非之散狀、同十二月廿日、以雜澁之扃欲被裁許剋、多賀掃部允於御內談之

補任

砌可明申之旨依被支申于今被閣之了、所詮任往古寺領之道理被停止非分綺、全寺領用者、尤可爲善政之專一、御祈禱之肝要者也、仍目安如件、

〔若狹國守護職次第〕一持明院殿〇足利尊氏
自建武三年八月廿七日、尾張式部大夫家兼、九月四日、小濱へ入部、

〔豫章記〕河野對馬入道善惠〇通治申、伊與國守護職事、爲御分國計之上者、宜有計沙汰候哉、恐々謹言、

霜月三日　將軍〇足利尊氏御判

中將殿御判

坊門殿

伊與國守護職幷通信跡事、被遣御下文候畢、既所上洛也、早相催國中地頭御家人等、急々可馳參之狀如件、

觀應二年二月十一日　御判

河野對馬入道殿〇中略

又自寶篋院殿〇足利義詮御書

於御方致忠節者、伊與國守護職之事、可宛行之由先度被仰候畢、定令到來候歟、所詮昨日九日、立江州四十九院宿、已所發向京都也、繼夜於日可責上之狀如件、

觀應三年三月十日　御判

河野對馬入道殿

〔太平記 三十六〕清氏叛逆事附相摸守子息元服事
加賀國ノ守護職ハ、富樫介、建武ノ始ヨリ今ニ至ルマデ、一度モ變ズル事無シテ、而モ忠戰異他、成敗依不暗、恩補列祖ニ復セシヲ、富樫介死去セシ剋、其子未幼稚也トテ、道譽、尾張左衛門佐ヲ聟ニ

取テ、當國ノ守護職ヲ申與ントス、細河相摸守是ヲ聞テ、サル事ヤ可有トテ富樫介ガ子ヲ取立テ、則守護安堵ノ御教書ヲゾ申成ケル、

〔大塔物語〕抑信濃國者、小笠原信濃守長秀親父長基、祖父政長代々爲補任守護職處也、長秀募由緒經訴訟處、上裁既無相違、則賜安堵之御下文、應永七年七月三日、賜御暇立京都、同廿一日令信州佐久郡下著、大井治部少輔光矩者、依爲一門、先馳越于光矩之館、披御教書令談合一國成敗之趣、同村上中務少輔滿信者、謂一家、依有內緣之儀、以使節經案內、其外伴野、平賀、田口、海野、望月、諏方兩社、井上、高梨、須田、總國人不殘以使者觸之、○中略去程小笠原信州、打入于寺家、○春光寺成安堵之思、則定奉行人、宗大犯三ヶ條、立押買狼藉闘遺旱馬等之制札、任傍例令遵行諸人沙汰、

〔小早川什書〕四伊豫國守護職事、被補任河野刑部大輔敎通訖、早守事書旨、催諸軍勢、杉原伯耆守相共被進發、合力敎通、可致忠節由所被仰下也、仍執達如件、

寶德二年八月十九日　沙彌御判○畠山德本

小早川安藝守殿

〔鎌倉大草紙〕上甲州をば京都へ御申上られ、逸見に可被下候よし、海老名三河守を以て再三御訴詔有しかども、其比の公方義持公より、高野に在し信濃守信元を召出して、是に給るべきよしの上意にて、信元國に打入ける、鎌倉殿○足利持氏も力に不及、信元に御教書を給けり、

〔應仁記〕三近江越前軍之事

又越州へハ、武衞義敏下向シケル、甲斐八郎山名方ニテ、土橋城ニ籠ケル、如何シタリケルニヤ、義敏モ土橋城ニ籠ラルヽ、其比朝倉父子在國シケレバ、追罰シテ國ヲ治ムベキ由御教書ヲ被下、○中略朝倉父子兄弟、莫大ノ勳功ヲヌキンデ、文明三年五月廿一日、敎景ニ越前ノ守護職ヲ給リケル、

〔蜷川親元日記〕文明十三年七月十日癸未、山城國守護職之事爲御料所御代官、侍所赤松殿兵部少輔政則

に被仰付候、仍守護代職事、所司代浦上美作守則宗に可被申付之由被仰出之、

〔集古文書十六列物〕慈照院義政公御判物 蜷川家藏

大御所樣 御判

山城國爲料國守護職事、所充行伊勢兵庫助貞陸也者、早守先例可致沙汰之狀如件、

文明十八年五月廿六日

〇按ズルニ、山城ハ將軍ノ料國ナルヲ以テ、侍所所司、又ハ政所ノ執事ヲ守護トシタルナリ、

〔長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆著到〕常德院殿樣御動座之御出立事

同年〇延德三年八月廿八日、重テ六角爲御退治、江州御動座在之也、三井寺御著陣在之也、江州守護歟、を細川殿內、安富筑後守給也、希代不思儀也、

〔伊達文書二〕急度以飛脚注進令申候、抑先年奥州守護職之事、貴扁寺上洛之時、御望候由被仰出候間、可然樣ニ申調候而可給候由被申候條、種々苦勞を仕申調下申候處、于今其不及御沙汰候條、事外御屋形被失御面目候由被仰、私罷下急度可申届候由被仰出候へ共、年罷寄候間、御佗言を申上、窪左衛門三郎下進申候、當年中ニ早々御禮御申可爲肝要候、上意江了簡を爲申上候由被仰候て、事外御屋形御腹立以外候、私迷惑此事候、若此年月中之樣ニ於御無沙汰者、上意之時宜可相替候、爲御心得急度致注進候、右樣ニ候へバ、近國他國御聞、中々不及申儀、先々如前々松岡土佐守方被上洛、御國を御請取御下知可有御給候、未奥州守護職、秀衡已來、御國を被下候人無御座候、於末代御面目不可過之候條、爲其御屋形伊勢守殿以御狀御申候、急度此等之趣可有御披露候、巨細猶此使者可申候、每事可得御意候、恐惶謹言、

八月廿七日　和泉守氏久 花押

謹上　牧野安藝守殿

解說

〔伊達文書二〕奧州守護職之事、望御申之旨、屋形依執申被成御心得之由被仰出候處、御禮于今御延引之條、屋形失面目之儀候之間、坂東屋富松被申付、態被差下飛脚候、委細以書狀被申候、幷勢州書狀被懸候、如何樣ニ毛以御馳走、當年中御禮御申可目出候、就中御所樣御作事御用途事、以別紙被申候、是者守護職御禮相調候而已後、寺町申談、時宜可然之樣可申沙汰候、次屋形之儀、未雖識若候、子細候而、去夏比落髮候、書狀之程可爲御不審候之間、如此令啓候、此等之趣可得御意候、恐々謹言、

八月廿七日　　伊豆入道宗觀（花押）

謹上　左京大夫殿

〔古文書類纂將軍御內書上〕足利義晴御內書（伯爵立花寬治所藏）

爲肥後國守護職祝儀、太刀一腰、則房刀一腰、淸綱弓一張、征矢一腰、腹卷一領、糸毛馬一疋、鹿毛置鞍黃金參十兩、到來候訖、尤以目出候、太刀一振家助遣之候、猶晴光可申候也、

八月廿六日　　花押（○足利義晴）

大友修理大夫どのへ

〔大館常興日記〕天文九年五月廿五日、此內荒川禮部言上、同名太郎、民部少輔兩人跡事、越中國候間、當時雖非可事行儀、爲後證御下知申請度之、太郎はちくてん、民部少輔は先年御敵へ參候由被申之、次荒川總領儀、同御下知申請度之、先祖石見國守護職被仰付候、ほうけう院殿さま（○足利義詮）御判已下備上覽也云々、愚意に存候、太郎民部は五番衆之事候間、爲番中申預度事なれ共、先年他番へ被入候間、不及申候儀也、

〔太平記三十六〕秀詮兄弟討死事

同年（康安元年）九月二十八日、攝津國ニ不慮ノ事出來テ、京勢若干討レニケリ、事ノ起ヲ尋ヌレバ、當國ノ守護職ヲバ、故赤松信濃守範資無二ノ忠戰ニ依テ將軍ヨリ給リタリシヲ、範資死去後、嫡

數國守護

子大夫判官光範相續シテ是ヲ拜領ス、而ルヲ去年宰相中將義詮朝臣、五畿七道ノ勢ヲ率シテ南方ヲ被レ責時、光範ガ軍用ノ沙汰、每事不足ナリト、將軍近習ノ輩共ツブヤキケルヲ、佐々木佐渡判官入道道譽、能ツイデトヤ思ケン、南方ノ軍散ジテ後、光範差タル咎モナキニ、攝津國ノ守護職ヲ可レ被二召放一由ヲ申テ、則我恩賞ニゾ申給リケル、

〔南方紀傳下〕南朝元中八年辛未、北朝明德二年十一月、停二滿幸出雲守護職一、（依押二領仙洞御領一也）

〔太平記三十九〕大内介降參事

爰ニ大内介ハ、多年宮方ニテ、周防長門兩國ヲ打平ゲテ、無レ恐方居タリケルガ、如何カ思ヒケン、貞治三年ノ春ノ比ヨリ、俄ニ心變シテ、此間押ヘテ領知スル處ノ兩國ヲ給ハラバ、御方ニ可レ參由ヲ將軍羽林ノ方ヘ申タリケレバ、西國靜謐ノ基タルベシトテ、聽テ所望ノ國ヲ被二恩補一、依レ之今迄貳無リケル厚東駿河守長門國ノ守護職ヲ被二召放一含レ恨ケレバ、則長門國ヲ落テ筑紫ヘ押渡リ、菊地トニ成テ却テ大内介ヲ攻ントス、

〔赤松族譜〕則村

及レ於二尊氏將軍之反志一通二尊氏一、千度百度震二勇威一、是以任二播磨、攝津、備前、美作、因幡、但馬、六州之守護職一、但州朝來郡、因州智頭郡、自レ素所レ領也、

〔常樂記〕至德四年十二月廿五日、土岐光祿禪門善忠他界、於二濃州小島一、（伊勢、美濃、尾張三ケ國守護、）

嘉慶二年正月廿四日、一色入道他界、（若狹、參河兩國守護、）

〔明德記上〕抑此播磨守滿幸ト申、山名ノ左京大夫時氏ニハ孫、右衞門佐師義ノ末子也、舍兄讚岐守義幸病氣ノ之ハ、彼代官トシテ在京シ、一方ノ家督ニテ有ケルガ、今度宮内少輔時熙以下退治ノ後ハ、四ケ國ノ守護職ヲ持テ、權勢氏族ニ越エタリ、其上陸奥守ノ爲ニハ甥ナガラ聟也ケレバ、富家モ他家モ媚ヲ成事甚シ、サレバ分國四ケ國ノ内ニ、出雲國ノ横田ノ庄ハ仙洞ノ御領ニテ、手サ

ス者アルマジカリシヲ、近年押領シケル間、數通ノ御敎書ヲ成下サレ、度々御内書ヲ以テ渡申スベキ由仰下サレケレドモ、曾テ承引セザルニ依テ、上意ニ背ク由シ聞エシカバ、家僕共談合シテ云、御分國既ニ四ケ國ナリ、夫ニ此一所程ノ事、サノミ御違背ハ勿躰ナキ由、再往敎訓申ケレバ、サラバ渡シ申ベシ、御代官ヲ御下シアルベシト申サレケレバ、仙洞ノ御代官トシテ、日野中納言家ノ齋藤右衛門尉下向シ入部シタリケルヲ、本給人村主地下人等ニ心ヲ入テ、是非ナク追出シケル間、カラ〳〵逃上テ、事ノ子細ヲ有ノマヽニ申上タリケレバ、御所太御忿リ有テ仰ラレケルハ、縱凡人ノ所領ナリトモ、上裁トシテ御下知アル上ハ、異議アルベシトモ覺ズ、況ヤ仙洞ノ御領タルヲヤ、既ニ生々ニスカシツオドシツ、嚴密ノ御沙汰ニ及所ニ、如此ノ振舞上ハ、重テ下知シタリトモ、只同篇ナルベシ、所詮守護職ヲ御改替ヨリ外ハ他事アルベカラズト、御沙汰既定ケリ、此上ハ滿幸在京シテ、所用何事哉、速ニ下向シテ在國スベキ由仰下サレケレバ、十一月八日、丹後國へ追下サル、其次第ヲ見聞ケル人毎ニ、サミスル事ヨ、餘リニ上意ヲナイガシロニ思ヒ申シツルガ、果テ面目ヲ失ヒ給フ上ハ、分國共、皆々アブナシト都鄙ノ嘲哢トゾ成ニケル、

〔明德記上〕十二月〇明德二年廿九日ノ暮程ニ、山名陸奧守、〇氏清小林ヲ呼テ宜ケルハ、〇中略若軍利有バ爭フベキ人アルベカラズ、御分執事ノ職ニ居シテ、毎事ヲ申沙汰シ給ヘト宜ラレケレバ、〇中略小林良有テ申ケルハ、〇中略當家ノ御事ハ、先年御敵ニナラセ給タリシカドモ、御後悔有テ、故殿〇山名時氏御歸參ノ後、御一家ノ間ニ、十一ケ國ノ守護職ヲ御拜領ノミナラズ、諸國ノ御領共、幾千萬ト申限モ候ハズ、是等ハ皆御所樣ノ御恩ニテ候ハズヤ、

〔明德記下〕明德三年壬申正月四日、内々御評定有テ、今度ノ闕國共、諸大名ニ任ラレケル、畠山右衛門佐基國ニハ山城國、細川右京大夫賴元ニハ丹羽國、一色右馬頭滿範ニハ丹後國、赤松上總介義則ニハ美作國、大内權大夫義弘ニハ和泉紀伊國兩國ヲ拜領シ、山名宮内少輔時熙ニハ但馬國、右馬

頭ニハ伯耆ノ國、佐々木治部少輔高詮ニハ隱岐國出雲二ケ國ヲ給シ、〇下略

〔應永記〕大内〇義弘ハ、上意及再三、如何御返事可申乎ト内談スル處ニ、新介申ケルハ、奉疑度々嚴命、實否分明ナラズ、以傳説違背仰、愚案ノ至ナルベシ、凡先祖ハ一國ヲモ不任、至當代六ケ國迄拜領シ、榮華餘身、奉輕御意御意ノ出來ルニヤ、今度ハ上意殊ニ有子細ト覺テ、備中ノ尊宿以絶海和尚被仰下、如何ニモ翻先非、隨上命可有參洛ト申セバ、平井備前入道此趣可然候、

半國守護

〔康富記〕文安四年五月十七日戊申、或仁語云、加賀國守護職事、富樫次郎〇童名龜童丸并叔父安高兩人、半國充可知行之由、管領之沙汰落居云々、此間相論不止、度々合戰也、〇龜童次郎者、前管領畠山扶持也、安高者、當管領細川京兆扶持也云々、

〔齋藤親基日記〕寬正六年十一月十日、〇御即位方褰帳典侍御訪、并綾錦絹等代沙汰分、〇中略

一赤松次郎法師(中略)子時加賀半國守護

〔應仁記三〕赤松家傳之事并神璽御事

赤松次郎赦免事、〇中略先年嘉吉ニ雖行治罰、今度勅許有テ寛宥也、政則五歳、長祿三己卯年赦免、綸旨ニ御敎書副ラレ、先闕國ナレバトテ、加賀國半國綸旨ニ、御敎書ヲ添ラレ被成下ケリ、

一國有數守護

〔江濃記〕六角京極合戰事

中頃應仁亂の時、六角方は山名一味、京極方細川一味にて、兩家不圖ニ敵味方となり、互に彼を亡し、近江一國を合て知行せんとす、去ル應仁元年五月、京都の亂逆の時、佐々木六角龜壽丸、同山内宮内大輔政綱、在京の間に、京極方政清、近江へ下向し、一國を治めむとす、

〔富樫記〕加州富樫ノ元祖鎭守府將軍兼武藏守藤原利仁ハ、武勇ノ人ニテ、世皆北斗星ノ化身ト云傳フ、其子齋宮頭敍用、其子加賀守吉信、其子加賀守忠頼ト相續、其末葉齋藤、林、富樫介トテ、三家ニ分レ、加賀越前ヲ領ス、其庶流進藤、赤塚、竹田、加藤ナド、皆北國ニ武威ヲ振フ、然レドモ今末代〇足利氏

守護代

季世ニ至リ、絶タル家多シテ、富樫計ハ繁昌シ、加賀ノ守護職ヲ司ル、

〔土佐軍記上〕土佐守護

土佐七郡と申は、幡多、高岡、吾川、土佐、香我美、長岡、安喜、七郡也、是に御所壹人、守護七人有、御所と申は、一條殿と云、系圖左に記す、幡多郡の內壹萬六千貫の主にて、中村に在城なり、此御所の御一門と云は、東小路、西小路、入江、飛鳥井、白川殿なり、〇中略守護七人、本山、安喜、大平、津野、山田、吉良、長宗我部、是七人也、何も三千貫五千貫之主也、

〔運歩色葉集志〕守護代

〇按ズルニ、守護代ヲバ、一ニ代官トモ、郡代トモ云ヒシナリ、事ハ下文ニミユ、

〔長門國守護職次第〕豐西郡司〇中略

卅代大內介殿貞世御法名道階　正平十三年六廿三、當府御入部、〇中略　守護代森入道法名良憲〇中略

卅一代大內左京權大夫殿義弘　御社參永和元年二月廿一日〇中略　守護代杉信濃守重直〇中略

卅五代大內新介殿持盛　永享四年二月十三日ヨリ御管領　守護代陶越前守盛政〇同日着府中略

卅七代大內介殿敎弘　嘉吉元辛酉八月ヨリ御管領〇中略　守護代如元、鷲頭肥前守弘忠、　名代野田備前守爲弘

〔若狹國守護職次第〕一色修理大夫入道信傳

貞治五年八月より給之、而使伊藤入道、遠山入道下向、代官小笠原源藏人大夫長房、後號三河守、爰應安二年正月十五日、於安賀庄金輪院栖つくの間、守護代押寄及合戰之處に、手負出來、打負て在所を燒拂はれ、得替し了、同三年十二月に山東山西鄉に守護代を入、彼所を被押之間、同晦夜、守護使壹岐太郎を夜討にし畢、此由を聞、同四年正月二日、守護代西津を立て、山東山西に押寄、菅濱に於て合戰有之、兩方之手負數十人、雖然守護殿方は死人無之、山東方は少々被討了、守

護殿方は打勝給て歸給ふ處に、鳥羽宮河倉見の能登野に出合ひ、同六日晚景に合戰有之、兩方の手負數十人あり、其時も守護殿方打勝、陣を取る處に、同七日曉西津より信傅の御子息、其時は兵部少輔殿(註缺)能登野へ御攻ありて守護代共に西津へ歸給了、去程に宮河に城郭を構立籠る處に、同四月、中申の夜忍入合戰あり、城方には武永入道と云者討れ了、然間彼在所を燒拂ひ、濫妨に及、西津へ歸給了、同五月に國一揆人々、安賀鳥羽三宅へ打入之間、兵部少輔殿守護代、國人佐分本鄕青一族、河崎三方佐野(多田 和田)引具し、のき山に陣をとり給處に、同廿六日の曉、玉置庄へ敵方打入之間、のき山よりおり、玉置河原にて合戰を致す、敵方の手負死人不知數、とりわけ宮河鳥羽一族等、木崎和久里、其外近鄕よりの見繼勢もあまた討れ畢、守護方も少々討れ、手負ありといへども打勝て西津へ歸給畢、それより彼人々は得替し畢、

〔菊池武朝申狀〕武朝奉屬將軍宮令在陣肥前國府、運諸方計策之處、今川仲秋相率松浦以下之凶徒、打出博多之間、指遣肥後國守護代武國、致大綱合戰、追散仲秋畢、

〔市河文書 四〕信濃國事、守護代二宮信濃守子息余一、在國之處、村上中務大輔入道、小笠原信濃入道、高梨薩摩守、長治太良以下輩有隱謀、及合戰云々、太以濫吹也、早同心之族、相共可被致忠節、所詮當國所令拜領也、仍守護代全所差下也、其間踏國抽其功者、別可有抽賞之狀、依仰執達如件、

至德四年六月九日　　左衞門佐(花押)

市河甲斐守殿

〔明德記 上〕明德二年辛未歲、山名陸奧守氏清、同播磨守滿幸以下一類悉同心シテ隱謀ノ企アルニ仍テ、不慮ニ兵亂出來テ、○中略軍ハ廿七日○十二月ト定タリトイヘドモ、河內國ノ守護代遊佐河內守國長、十七所ニ城郭ヲ構ヘ、國々和泉紀伊國ノ軍勢通路難儀ニシテ、八幡ノ勢ゾロヘハカタカリケレバ、合戰已ニ延引シテ、正月二日ト定メタリシ事ナレバ、其用意アリケル處ニ、峰ノ堂八幡ノ

勢共ヌケ〴〵ニ落、○下略

〔市河文書 四〕市河美濃入道性幸之代子息三郎氏貞申軍忠事

右當國○信濃守護代ニ御下向時者、老父美濃入道性幸、於都部致軍忠云々、就中當大將國御入部剋、
氏貞最前府中馳參、於在々所々致宿直警固處、去應永十年七月廿四日、村上、大井、友野、井上、須田爲
御敵馳向間、塩原御合戰時、於御前氏貞散々太刀打仕、蒙自身疵、次生仁城攻時、爲前懸合戰仕、重蒙
疵畢、同十月三日塩崎新城至沒落期抽忠勤畢、并同十一年九月高梨左馬助依背上意、爲御退治大
將細河兵庫助殿與郡御發向時、桐原若槻下芋河之要害責落、加佐遂至東條御陣抽軍忠條、上方御
見知上者、給御證判、爲備後代龜鏡、恐惶言上如件、

應永十一年十二月　日　　花押

〔親長卿記〕文明二年十二月十八日、若狹國玉置庄一分方事、去々年被下行事官氏益訖、雖然守護被
官人可持代官之由競望不可叶之由問答、仍于今不受用、常年年貢事爲仙洞御料所分可被借召被付鴨社
假殿造營方云々、仍代官仰逸見駿河入道許訖、件子細仰廣橋了、

〔相州兵亂記 三〕小弓御所發向之事

其比上總國ノ守護代、武田豐三、眞里谷三河守ト同國ノ侍、原ノ次郎ト云者、上總ノ小弓ノ城ニ在
城シテ、所領ヲ論ジ、合戰度々ニ及ビケル、

〔細川兩家記〕政元何とか思召けん、御心中あいかはり、能々物を案ずるに、我家は一門中より不持
してはあしかるべしと思召、阿波の國にすみ給ふ細川讃岐守御出家あつて慈雲院殿と申、此御
孫に六郎澄元後號眞乘院とてあり、これを養子にし、此家をゆづらばやと思召、攝津國守護代に藥師
寺與一元一を御使にて、阿波國へ差下さる、○中略一元院とて、與一世に在し時立をきたる寺へう
つり、○中略最後の時申樣、皆々御存知の如く、我は一文字好みにて藥師寺與一、なのりも元一、此寺

守護代職掌

も一元院と名付たり、されば腹をも一文字に切るべしとて、腹一文字にかき切り、朝の露とぞ消にける、上下萬民をしなべて、皆涙をぞ流しける、去程に、弟の與次は御かん有て、此度の恩賞に、桐のたうの御紋を被下、三郎左衞門と改名なされ、兄の與一が跡を賜りて、攝津國上下守護代となり、榮花にほこれり、

〔江濃記〕六角京極合戰事

明應永正の頃、○中略出雲隱岐兩國の守護は、京極の分國なれば、守護代尼子伊豫守、京極方の命により、中國を攻ゐたがへむとす、されば尼子勝れたる武勇の大將にて、十ケ國程、かの幕下に屬しける、

〔東寺百合古文書百十九〕山城國下、五郡守護代職之事被仰付之間、毎端如先々可致其答、異儀族在之者、追而可加成敗也、仍福地又太郎爲與力申合候、於自然儀者可致合力、若致難澁者可爲曲事者也、仍而狀如件、

大永八
七月十一日　元長花押

東寺公文所雜掌中

〔成氏年中行事正月〕朔日公方樣出御、○中略其後弓征矢ヲ役人持參、ソノ次ニ沓行騰ヲ役人持參イタシ罷出、後管領被官武州守護代子、或ハ孫或ハ兄弟等、御車寄ノ立砂ノ前ニ御馬御鞍ヲ置テ引立、

〔年中恒例記二月〕十五日、遣教經捧物沙汰御人數事、○中略諸國守護代以下進上之、是ハ善命坊說也、

〔和翰集要〕一施行事

曾我與太郞時祐申、駿河國沼津鄕、去月十一日之任御下知之旨、堅可被相觸者也、仍如件、

年號月日　守護判

（宛所ヘ）郡代人

鄕邊彥左衛門殿

（建武以來追加）一本社本所領事（文和元十一十五御沙汰）

嚴密可遵行之子細、去七月以來、載兩度事書之上、就面々訴雖被成御敎書、寄事於世上物忩、云守護云使節、尙緩怠之間、多以不事行云々、難遁其咎、但無勘錄者、定有未盡之後訴歟、所詮且取調先日散狀、召出守護代幷論人等、尋究遵行難澁之旨趣、陳謝無謂者、准先例可勘申罪名、亦有殊會尺者、隨事躰加糺決、宜經評議之由可仰五方之引付、

（東寺執行日記）貞治二年八月四日、昨日赤松彥五郞（攝津國守護代、號吹瀨、）候人猪熊四郞來臨、勸一獻了、垂水庄事談合了、　九月十日、慶妙法師自大成庄上洛、於當庄者、去月廿五日守護直施行、今月二日打渡下地畢、而敵方猿子美濃入道道宗代カニノ藤兵衛立歸、遵行之地亂妨之間、爲止彼違亂、可被遣守護代宮內少輔狀於道宗方之由申之、庄家百姓道圓同上洛、旨趣同前矣、

（太平記二十七）上杉畠山流罪死刑事

去程ニ、上杉伊豆守重能、畠山大藏少輔直宗ヲバ、所領ヲ沒收シ、宿所ヲ破却シテ、共ニ越前ノ國ヘ流遣サレケリ、〇中略當國ノ守護代細川刑部大輔、八木光勝是ヲ請取テ、淺猿氣ナル柴ノ庵ノシバシモ如何カ栖レント、見ルダニ物憂住居ナルニ、警固ヲ居ヘテゾ置レタリケル、

（花營三代記）應安七年五月九日、夜强盜亂入禁裏、唐門警固人近江國守護役家人目賀田彈正忠入道玄仙、（于時代）若黨令防戰之、追反之、則若黨二人、中間二人討死、

（康富記）享德三年十月十九日丁酉、參管領、以齋藤修理亮申入了、丹州隼人保金泉坊、雖下度々召文不出對之間、第四度召文、宛守護代書出候間、可被仰付候由令申入了、早可仰付候由被返答了、〇中略就隼人正康顯申、丹波國隼人保內本錢返地事、不日企參洛可明申間、可被相觸金泉坊由候也、仍

守護代成敗

執達如件、

享德三年十月十四日　清八貞秀判

治部國通判

守護代

〔康富記〕康正元年十二月十二日癸丑、鷹司前關白家雜掌申、和泉國五箇畑年貢事、及拾ヶ年無沙汰云々、事實者、太不可然、所詮云連年之未進、云當年之西收、共以嚴密可被致其沙汰之由被仰出候也、仍執達如件、

康正元年十二月六日　爲數判

貞基判

守護代

〔鎌倉大草紙上〕其比信元〇武田の家來跡部駿河、同上野と申て、甲州の守護代預り、一類餘多有て、何事も信元の旨を背き横行しけり、信元一期の後、伊豆千代に跡部背きける、甲州に輪寶一揆、日一揆とて兩一揆あり、輪寶一揆の侍、跡部に一味し逆心を企つ、信長方は加藤も早世し、日一揆の人人計にて、度々に合戰ありしかども、運や此時に盡果けん、から河合戰に日一揆皆打負、信長は忍て信濃へ打越、京へ上り給ひける、〇中略此間跡部兄弟公方の御下知もなくして、しばらく國を押領す、

〔桃花蘂葉〕一家領并敷地等之事

越前國足羽御厨　自鎌倉右大將家〇源頼朝相傳手繼分明也、中比常磐井宮〇龜山皇子恒明親王知行之、無其謂者也、然間應永廿三年十二月、勝定院贈相國〇足利義持故殿〇藤原經嗣御時、以自筆狀被返付之、可爲永領之由被載文言畢、爾來于今無相違、代官朝倉美作入道請之、毎年土貢四百餘貫致沙汰、應仁亂世

以來、朝倉彈正左衞門尉一向押領之、言語道斷事也、

○按ズルニ、足羽御厨ハ、關白一條家ノ所領ナリ、朝倉氏越前守護代タルヲ以テ、其年貢ヲ徵收シタリシガ、應仁以後、之ヲ押領シタルナリ、此外行俊名、安居保、淸弘名、吹田名、東郷庄ヲモ朝倉氏押奪セリ、

〔足利季世記〕五將軍地藏軍記 高政高屋城ヲ出ル事

カヽリシ頃、河內守護畠山高政ハ、遊佐長敎死去ノ後、長敎ノ子息イマダ幼稚ナレバトテ、安見美作守ヲ遊佐名代ニ河內守護代ニ定メラルヽ、是ハ中村圖賀ガ子也ケルガ、器量アリケル間エ有テ、安見養子トシ、其跡ヲ令レ繼、今郡代ノ遊佐死後ニ、高政ヨリ美作守ニ守護代ヲ持セケル、然ルニ、安見ヲゴリタル人ニテ威勢ヲ振ヒケレバ、高政ヨリハ、結句國人モ恐レケレバ、高政ト安見不快ニナリ、高政ヒソカニ美作守ヲ可レ被レ誅ヨシ計給ヘドモ、國人背シカバ不レ叶、

〔足利季世記〕八野田福島合戰記 畠山昭高生害之事

其頃河內半國ノ主、畠山尾張守昭高ト守護代遊佐河內守ト不快ノ事アリ、是ハ遊佐ガ威勢强大ニシテ、主ヨリ大身ナレバ、昭高ノ家人ドモ、自ラ遊佐ガ被官ノヤウニ成行ケル間、昭高ノ近臣ドモスヽメテ、遊佐ヲ可レ討取由評定ス、

〔若狹國守護職次第〕一足利尾張式部大夫家兼 建武三年七月廿七日給レ之、後にはいよのかうの殿と申、御代官氏家藤十郎通繼、

〔太平記〕二十九 師多自害事附諏方五郎事

去年(○觀應元年)ノ十二月ニ、上杉民部大輔(○憲顯)ガ養子ニ、左衞門藏人(○憲能)父ガ代官ニテ上野ノ守護ニテ候シガ、謀叛ヲ起テ鎌倉殿方(○足利直義)ヲ仕ル由聞ヘシカバ、(○下略)

〔太平記〕三十八 和田楠與二箕浦次郎左衞門一軍事

此比攝津國ノ守護ヲバ、佐々木佐渡判官入道道譽ガ持タリケレバ、其身ハ京都ニ有ナガラ、箕浦次郞左衛門ニ勢百四五十騎付テ、國ノ守護代ニゾ置タリクル、

〔康富記〕文安元年七月十日丁亥、後聞美濃守護代戶島、去月十九日、於土岐屋形被誅之、

〔江濃記〕雲州佐々木由來有事

佐々木黨、此國を知行する事、むかしより今にたえず、先代九代の代々には、隱岐鹽冶此國を知行す、其後尊氏の御時、山名しばらく當國の守護に補しけれども、守護代は上鄕三河守、其子鹽谷四郞とて、いづれも佐々木の末葉なり、其後京極殿の領地となりて、高詮持淸より、又佐々木家の國となり、于今至て守護代も、佐々木の門葉尼子伊豫守七代迄、此國の主と成事、不思儀の事ども也、

〔伊達文書四〕奧州守護代事、中村桑折播磨守、牧野彈正忠兩人、可存其旨事肝要候、爲其指下孝阿候、猶晴光可申候也、

九月廿四日　花押〇足利義輝

伊達左京大夫とのへ

守護代兼地頭代

〔若狹國稅所今富名領主代々次第〕一色左京大夫詮範　明德二年十二月廿七日より、御代官小笠原三河入道淨鎭、又代武田右京亮重信入道淨源、〇中略

應永三年正月廿五日、又代淨源死去之後、子息左近將監長盛守護代并地頭代にて當濱に住居、〇下略

小守護代

〔長門國守護職次第〕豐西郡司〇中略

三十一代大內左京權大夫殿義弘〇中略　小守護代久佐備後入道源祐

〇按ズルニ、長門國小守護代ハ、大內義弘ノ時ヨリ同義興ニ至ル迄、數代ノ間置キタル事、本書ニ見エタリ、

郡代

〔蔭凉軒日錄〕長祿四年〇寛正元年八月十七日、鹿苑院領三川國赤羽爾郷、有破損船、自郡代方打入、濫妨狼藉剩放火政所之由、自院被嘆申旨披露之、卽可改郡小代官、還奪取贓物、止已後狼藉之旨、於一色方被仰出、且可被成御奉書之由有命、

〇按ズルニ、郡小代官トアルハ、小守護代ナルベシ、

〔應仁別記〕爰ニ寄手ノ遊佐ガ内ニ、馬場ト云ハ參ノ者、勢數アリケレバニヤ、先陣ヲ申付ケリ、一仁ニ中村ト云者、義就御座アレバ、國ノ守護代ノ下代ナレバ　ヤ、若江ニ殘置ケリ、

〇按ズルニ、下代ハ卽チ小守護代ナルベシ、

〔公方樣正月御事始之記〕一永正十一年三月七日、就大内義興被相尋候、〇中略御返事中條々事、〇中略

一畠山にては、遊佐、しゐな、神保、譽田、御成申といへども、是又何の御代に申たると云事無之也、譽田紀伊國之郡代を持たる時、公方樣熊野御參詣候、其時旅宿之御宿を申たるを御成申たると歟、是は一向各別之事也、

〇按ズルニ、郡代ハ守護代ノ事ナリ、

守護使

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々 貞和二十二十三沙汰

一號一揆衆、致濫妨事

近年或押領他人之所領、對專使妨遵行、或爲散私宿意、率黨類及合戰云々、造意之企、難遁重科、所詮就守護幷使者注進、須處罪科、但隨事體、可有輕重焉、

〔若狹國守護職次第〕一色修理大夫入道信傳　貞治五年八月より給之、爾使伊藤入道、遠山入道下向、

〔花營三代記〕應安五年七月十一日、日吉神輿造替料足事、被付諸國段錢、

日吉社神輿造替要脚內諸國段錢事 應安五七十一

就被下院宣所有其沙汰也、所詮召出國之大田文、寺社本所領、井地頭御家人等分領、悉宛公田段別三拾文、急速可執進之、若有難澁之在所者、守護使相共遂入部、可致譴責矣、

〔後愚昧記別記〕永和三年十二月十六日、自畑飛脚到來、守護使下向之由、有英注進之使男、所住色井庄但州也、而守護使爲譴注下向者、自但州可越畑之旨、兼仰含之故也、

〔南禪舊記下〕應永十年癸未鹿苑院殿〇足利義滿公文　御判

南禪寺領諸國所々目錄有之諸公事臨時課役、并段錢人夫以下國役事、被免許畢、仍所停止守護使入部之狀如件、

應永十年閏十月廿八日

右現在本寺

〔東寺百合古文書九十七〕連署目安享德元九月太良庄和泉大夫之時

東寺申　當寺領若狹國太良庄守護使不入之間事

副進御教書遂行等貳通

右當庄者、爲嚴重之御願料所、往古以來、被止守護使之入部、毎事無其煩之處、近年動及違亂之間、就歎申之、重而被成下不入御教書、既遂行了、然而今度地下之雜内號和泉大夫號罪科人、召置守護所之間、任寺例乞請之處、既令領狀出狀畢、被狀如此、然則欲致糺明之刻、不事問被處死罪畢、言語道斷之次第也、百姓等事者、縦雖爲大犯、於罪科者、爲領主之所意、更不可及國方之綺、結句追捕彼住宅、運取資財雜具、剩當作毛、并他所之百姓出作之寺領以下、悉以可檢斷之由、注進仕訖、豈非濫吹之至極乎、此上者、爲公方樣堅預御成敗、任代々御下知之旨、被停止國方亂入、被雜具以下、不日被返付之當寺、全始終領知、彌欲致一天太平御祈禱、仍以連署謹言上如件

享德元年九月　日　　權大僧都仁然

法印權大僧都弘美
法印權大僧都快壽
法印權大僧都隆通
法印權大僧都重耀

雜載

今度議別而依大訴之、以連署申狀公方樣被申入了、〇下略

〔師守記〕貞治元年十一月廿九日庚午、今朝自田井保元孝僧上洛、女房御方給分代錢、少分到來、□□當保半濟事、自守護方一圓可管領之由相觸之云々、可被向丹波國之料云々、此間正守護在國也、

〔後愚昧記別記〕永和三年八月八日、今夜又可有騷亂之由風聞云々、人々推量分ハ、依越中合戰、武藏守與越中守護故大夫入道向背之儀也、依之兩方大名等可見繼之間、可及天下珍事云々、其間雖有種々巻說、不遑記之、

〔建內記〕應永卅五年〇正長元年二月十三日、吉川上庄守護避狀、舊冬十二月廿一日書與之、自然懈怠、今日下遣之、行向當座於所々小用事遣狀借用之後、可罷向小川備中入道許之由示代官僧者也、馬代三百疋送備中入道許、今度沙汰次第、以愚狀示遣之、小川以使節可沙汰居雜掌於庄家者也、

〔東寺百合古文書十六〕廿一口方評定引付　永享十三年辛酉潤九月十九日　連署省之

一播州吉祿庄守護半濟也、然之間、今度守護改刱、一圓事訴訟申處也、以守護號預寺家御沙汰者、可段入御沙汰用途等事者、不可成寺家御煩之由、隆遍法印被申之間、披露之處、寺領號モテ爲寺家可有御沙汰、然者此半濟爲知行者、京著三分一、當寺ヘ可被遣之、自本當知行之內、三百文鎮守寄進足者、可被加之者也、此由隆遍法印可有返答之由衆議了、〇下略

〔建內記〕嘉吉四年正月廿六日丙子、向山名右衞門佐入道宿所、播州守護職拜領之時、三ケ郡被宛行赤松播磨了、而彼不忠事等、内々申立歟、所詮一圓可被付總守護之由、山名强望申、仍先日被付御書

職掌

下管領剣形仍人々表禮云々、太刀折紙千疋書載候、以吉日白大橋方可遂之由、家種示申次也、出之、申次長次郎左衛門尉云々、

〔會津伊達兩家覺書〕同帝後柏原大永元年辛巳五月二日、會津守護葦名遠江守盛舜公、會津南山長沼氏を攻て御合戰、

〔大館常興日記〕天文十一年五月廿二日、能登守護畠山匠作入道ごうふく御免事、内々御尋旨佐中之間、如此一紙に言上之、

能登の守護畠山匠作入道、ごうふく御免の御事、くるしからず存候、むかし三職已下、少々御免にて著用候つるよし申つたへたる御事にて、此趣よろしく可有言上候、

五月廿二日　常興

右衛門佐殿

地頭

地頭ハ鎌倉ノ制ト同ジク莊園ノ政務ヲ掌ル職ニシテ、總領地頭、半分地頭、三分一地頭、四分一地頭、一分地頭等ノ稱アリ、地頭ノ代理ヲ爲スヲ地頭代ト云ヒ、別ニ又小地頭ナド云フモノモアリ、

足利時代ニ於ケル地頭ノ得分ハ、帝室ノ御料地、社寺ノ所領等ヲ管スルモノヲ除クノ外ハ、領家ト其地ヲ中分シテ、其半ヲ所得トスルコト應安元年定ル所ナリ、サレド此制ニ違フモノモ往々アリ、

〔新加制式〕一對地頭不遂事由猥名主職賣買事、

右名主職沽却之時、爲得庄園之利潤、減少本所之年貢、而書載古劵狀、恣賣買之段、猛惡之所行也、儻

令決定、如在來土貢可收納、若賣人有私曲者、遂勘定而可辨償之、凡賣買之時、件田地地頭分等相糺之、云賣人云買人、共以不可有後之妨乎、

〔東寺百合古文書五十九〕最勝光院領、遠江國原田庄細谷郷雜掌定祐申年貢事、

右當郷一分地頭原孫三郎光高、康永三年以來對捍之由、雜掌依訴申、仰守護人千葉介貞胤加催促事、如貞胤執進、光高去六月九日散狀者、毎年致其辨帶返抄云々、然則遂結解有未進者、可究濟者、下知如件、

貞和二年閏九月十七日　左兵衛督源朝臣花押〇足利直義

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二十三沙汰〇中略

一山賊海賊事

糺明出入之在所、有領主同意之儀者、於其所者永可令改補地頭職、至本所寺社領者、觸遣之程可被補地頭哉否可經奏聞焉、朱書

〔東寺百合古文書六十八〕地頭代陳狀案大番役事雜掌給事七月廿日也、

若狹國太良保地頭代右兵衛尉藤原忠頼謹言上

爲當保雜掌構今案、捧無理訴狀、有限押留大番雜事等無謂子細事、

副進　一通六波羅殿御教書案

件訴狀云、大番役事、若狹次郎兵衛尉忠季、建久六年補任當國守護之以降、年紀七十五年間、不勤其役之處、當地頭之時、今年始切宛巨多錢、令譴責事如切燒云々、取詮此條存外之中狀也、當雖不勤先例、始自關東幷六波羅殿可令勤仕彼役之由於被仰下者、云雜掌云地頭、何忝可令違背哉、〇下略

〔島津文書二〕大隅國凶徒等退治事、注進狀披見了、尤神妙、相催分國地頭御家人等、彌可遂凶徒退治籌策狀如件、

文和二年三月十日　　御判

島津又三郎殿

〔東寺百合古文書九十〕八幡宮　八月十五日、御放生會、幷上下宮九月十日流鏑馬役事、任先規恒枝保地頭方、相供可被勤仕之狀、依仰執進如件、

永德貳年六月一日　　三河守花押

太良保地頭方

〔東寺百合古文書百六十一〕朱書那波佐方敵方出帶支狀案應永七十二

海老谷新左衞門尉則眞謹支言上

欲早被棄捐東寺雜掌無理訴訟、被成返御敎書、全知行播磨國矢野庄例名内那波佐方地頭職間事、

副進

一通　安堵御下文案康曆元年六月廿一日

一通　安堵御下文案弘安九年十一月廿三日

一通　讓與狀案文永元年八月廿一日

三通　段錢請取案春日吉大嘗會米等

一通　矢野庄中分帳案正和三年正月廿四日

右矢野庄者、公田百五十町也、然例名七十五町南禪寺領也、次例名七十五町内又三十七町五段者西方領家職東寺一圓領也、殘三十七町五段地頭一圓領知也、隨而那波十一町四段三十、佐方四町一段廿、下村拾四町六段、上村七町三段、已上三十七町是也、正和三年正月廿四日分帳明鏡上者、蓋東寺雜掌至那波佐方十五町、每度稱別納掠申御敎書、致違亂之條、希代之猛惡也、爲那波佐方例名

武備

之內段勿論也、年々段錢配符譴取、國中煩焉也、其上當御代安堵御下文幷弘安御下知等明白也、所詮任國大田文之旨、被停止雜掌奸訴、爲預御成敗、謹支言上如件、

應永七年十二月　日

御判

下　海老名新左衛門尉　法師(法名源遠)

〔建武以來追加〕一日吉社神輿造替要脚內其國段錢事(應安五七十一)

就被下院宣、所有其沙汰也、所詮召出國之大田文、寺社本所領(幷)地頭御家人等分領、悉充公田段別三拾文、急速可執進之、(下略)

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕貳貫文　同日(六月十二日十三日分)六十三日進(同前(進狀下請取書))　山下孫三郎殿(美濃國西庄內遠領段錢)

〔蜷川親元日記〕寬正六年九月八日癸丑、御母御知行越前國高柳保地頭方之事、各別之處、領家方(南都)(光明院領代官甲斐備後四郎)ヨリ、段錢撿斷等事、勵懸之及違亂云々、仍奉書兩通彼名主沙汰人中(江)貞雄親元兩判、

一撿斷事者、領家代官、地頭代官御契約之時、一圓撿斷以其引懸如此可被經上裁之間、可相支之、

一段錢南都成身院方ヘ被仰遣之、一左右之間可相支云々、

〔新加制式〕一爲地頭百姓田畠等押領事

右爲地頭百姓年貢以下難澁之時、押領所當田畠者常習也、然地頭依事於左右、件百姓資財雜具田畠以下、及莫太違亂之段、甚背其義者乎、堅可被停止之、

〔甲陽軍鑑〕一甲州法度之次第

一國中之地頭人、不申子細、恣稱罪科之跡、私令沒收之條、甚自由之到也、若犯罪人爲晴信被官者、不

得分

可有地頭之綺、田畠之事者加下知、可書別人、年貢諸役等地頭江遂可辨償、到恩地者、不及書載、又在家幷妻子資財之事者、如定法職江可渡之、

〔集古文書五十六沽券〕熱田大宮司清重沽却（尾張國中島郡妙興寺藏）

沽却　尾張國中島郡平野屋敷畠地事

合捌段歟貳段者

右畠地者、藤原清重重代相傳地也、而依有直要用、代錢拾三貫文仁相副支證等狀、限永代所令沽却于當寺也、於地頭役以下公事等者、賣付申上者、寺家一圓仁可有御管領也、若於此地違亂煩出來者、以清重知行分門被of召時、一言不可及子細候、又子孫等中ニ背此狀致煩者、可被申行罪科也、仍爲後證沽却之狀如件、

貞和六年十月廿五日　藤原清重花押

〔尾張國妙興寺文書三〕尾張國牛野郷坪付注文

合

一地頭領家中分地

四町八段內、（貳町四段領家分、貳町四段地頭分、）西本地、　六町四段半內、（三町二段九十步領家分、三町二段九十步地頭分、）東本地堤內、　十

一町七段內、（五町八段半領家分、五町八段半地頭分、）東本地一色、　貳町內、（壹町領家分、壹町地頭分、）東本地人給跡、

一貳町、領家一圓、西本地、　一壹町、地頭一圓、西本地、　壹町、地頭一圓、東本地、　三町、（領家押妨）地頭公文名、西本地、

一當郷內除

八段內、（四段領家分、四段地頭分、）沙汰人給東本地、　四段、預給西本地、　壹町、（五段領家分、五段地頭分、）毛受引二坪、　壹町、荒野、小野、　五町八段、荒野、界熊野地、　五町八段、荒野、高木尾、　貳町二段大、堂地宮地敷地已下、

以上

右坪付注文如件、

康安二年三月十日

〔建武以來追加〕寺社本所領事（應安元六十七、布施彈正大夫入道昌椿奉行之、）

禁裏、仙洞御料所、寺社一圓佛神領、殿下渡領等、異于他之間、曾不可有半濟之儀、固可停止武士之妨、其外諸國本所領、暫相分半分、沙汰付下地於雜掌、可令全向後地行、此上若半分之預人、或違亂雜掌方、或致過分掠領者、一圓被付本所、至濫妨人者可處罪科也、將又雖有本家寺社領之號、於領家人給之地者、宜准本所領歟、早守此旨、云一圓之地、云半濟之地、嚴密可打渡于雜掌矣、次自先公（尊氏）○足利御時、本所一圓地行地事、今更稱半濟之法、不可改動、若令違犯者、可有其咎焉、次以本所領誤被成御下文地事、被充行替之程、先本所與給人、各半分可爲知行、不可有守護人之綺矣、次月卿雲客知行地頭職事、爲武恩被補任之上者、雖混本所領、可停止半濟之儀焉、○又見花營三代記、

〔東寺百合古文書九十（朱書）〕太良庄兵粮用途請取（應安四六四到來）

納　兵。粮。錢。事

合伍貫文者

右爲太良保地頭領家分所納如件、

應安四年五月七日　　玄將（花押）

〔朽木文書二〕越中國部田岡成兩名地頭職事

右兩名地頭職本御下文渡申候、當御代度々御教書幷賜御施行等、知行無相違之處、近年依國動亂不知行之間、出羽二郎氏秀方渡申候、被改沙汰有得理者、先立任契約狀、被土貢參分一於被去出殘於三分二者、可有知行候、本御下知渡申上者、永代更不可有相違、仍狀如件、

應安五年十月十七日　氏綱花押

〔東寺百合古文書〕一久世庄文書案

うりわたすなか地事

合壹畝者　あり　山城國おと國のこほり上久世庄内すけとも名あさなゐのつぼ

四至　東なかきろちろい　西なかきるあぜ　北なかきるくろ　南なかきろちるい

右件田は、き七ちうだいさうでんのたなり、志かるに用々あるによりて、代錢六貫文に永代をかぎりて、たいらのうちの女にうりわたしたてまつるところじちなり、○中略此田の御ねんぐまいは、上久世の八合ますにて、一石貳斗のところにて候を、三斗、又わら代五升、以上三斗五升を地頭東寺へ御さた候て、のこる八斗五升は、かいぬしの御とくぶんたるべく候、○中略

うりぬし山城國おと國のこほり上久世庄

永和貳年丙辰十一月廿日　き七判

うけ人　斎兵衞判○以下四人略

〔小早川什書〕一花押

安藝國沼田庄領家内備後入道本明跡半濟所務職事

右當庄事、以武家御教書本所分可被避渡由御下知之間、小早川備後入道本明跡半濟御年貢每年參拾貫文除運賃雜用、京進、不謂時之損否可有沙汰者也、但依被申河成水損之由御年貢減少、本所御不審之間被下使節被撿知之時、地頭不可申異儀、然者任今御契約參拾貫文縱雖及天下擾亂、當庄并路次無爲之時者、無法懈怠可被致其沙汰、萬一有未進懈怠者可有改替者也、無年貢未濟者不可有契約他人、若背此旨者於公家武家可被歎申、其時本所更不可有御異儀矣、仍爲後日契約之狀如件、

永德參年癸亥七月廿二日　源正少弼直衞花押

〔東寺百合古文書百六十一〕永代奉寄進田地之事

合壹段者在所字修理職之内、東ノヘシ也、

右意趣者、故善阿禪門幷如金禪尼之爲追善、限永代多福庵奉寄進處、實證明白也、但本所當一斗五升、地頭方二斗四升也、此外更ニ万囗公事、あるまじく候、仍爲後日寄進狀如件、

永德三年十一月廿八日　如金花押

〔政所賦銘引付〕文明十五年癸卯

一政信長岡筑前守貞信文明十五三二

江州蒲生郡七里村地頭職事、上分者、日吉六社燈明料山上二季講料等也、然自靜住坊憲舜方任買得之旨、可被成安堵御奉書云々、

〔尾張國妙興寺文書三〕宛行　妙興寺領牛野鄕内東本地半分地頭方年貢事

合

一所六町三段小　分錢貳十壹貫二百六十六文百姓名

八段　分錢三貫八百五十文公文給請放

六段六十歩　新島　分錢壹貫玖百卅二文同前

已上七町半分分錢廿七貫四十八文同

一反小步　分錢五百四十二文市庭減分

殘定畠七町六段四十步　分錢貳十六貫五百六文

右據爲彼下地、七町六反四十步、分錢貳十六貫五百六文爲夏秋損亡不作減、六貫文、令免除之、然者殘貳十貫五百六文請放、自閏十一月爲月宛、可致沙汰、此外加徵任先例可致其沙汰者也、依爲後證宛文之狀如件、

應永九年二月日　　宗亨花押

牛野百姓等中

〔東寺百合古文書へノ五十至五十九〕太良庄地頭領家方代官請人請文案

謹請申　東寺御領若狹國太良庄地頭領家方御年貢事

一地頭方御年貢米拾玖石九斗六升幷錢足漆貫肆百廿四文

一領家方御年貢米漆拾貳石九升幷錢足六貫五百卅一文

必可ㇾ致二其沙汰一事

右背二請文之旨一、雖二少事一令二未進懈怠一者、猶住宅財寶等悉可ㇾ有二御官領一、其時更不ㇾ可ㇾ申二一言子細一、仍請文之狀如ㇾ件、

應永廿年九月廿七日　　請人　彌五郎判

〔東寺百合古文書百三十六〕太良庄本所領家御方國下行

貳貫伍百文御飯米越賃　壹貫文守護代若狹方禮　壹貫文長法寺方禮　貳貫文雇夫二人分　壹貫文駄賃馬一疋三分二　壹貫文座頭自二守護方一勸進下ㇾ之　壹貫四百文節季雇夫二人分　壹貫文勸進猿樂　以上拾貫玖百文

同〇太良庄　地頭御方國下行

壹貫貳佰文御飯米越賃　壹貫文三月三日九月九日節供料　壹貫伍佰文垸飯采女修理替　壹貫文守護代方禮　壹貫文守護方雇夫二人分　五佰文駄賃馬一疋　五佰文勸進猿樂　參佰文座頭下部漆佰文節季雇夫　以上漆貫漆佰文

應永廿九年十二月十九日　　公文政信花押

御代官與祐花押

此外度々御公事遶臨時入候貳貫玖百文、是ハ地下ニ堅申付候て勤申候、但國下行ニ不レ入申レ候也、

〔東寺百合古文書九十八〕朱書太良庄地頭和市注進長祿二公文

東寺御領太良庄御年貢和市事

合

地。頭。御。方。延。　石別八百文者

右此旨僞申上候者、大師、八幡當社三社明神可レ蒙二御罰一候、仍請文之狀如レ件、

長祿二年十一月　日　公文　清之花押

進上　東寺總御公文所殿參

〔大坂城中壁書〕御掟追加

一天下領知方之儀、以二毛見之上一、三分二者地頭、三分一者百姓可レ取レ之、兎角田地不レ荒樣に可二申付一事、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一國中知行方之儀、以二毛見之上一、三分二地頭、三分一者百姓可レ取レ之、此旨百姓共及二異儀一者、地頭可レ任レ心、兎角田地不レ荒樣可二申付一事、付作職之事、近年如レ相改順逆、地頭可レ任二自由一事、

〔武家名目抄職名三十〕地頭

足利殿の時にいたりても、大かたは鎌倉の例にならはれしかば、さばかりの沿革もなかりしが、關東は應永に禪秀の亂ありしより法令やゝみだれ、畿内中國は應仁の亂より古法やうやく廢れしかば、所領をはなれて守護の家人となる地頭も有、又現在の地頭といへども、力たらざるものは、をのづから守護の門客に列するもありしなり、然れども悉く舊例廢せしにはあらざりしかば、天文弘治の際までは、全く守護の家人ならぬも諸國に多かりしなり、但兵糧收納の法は、古例にかなはずなりぬ、是併戰國のならひにて、さもあるべきことなり、織田豊臣の

鎌倉地頭

世となりては、二ヶ國三ヶ國の領主もいできて、其國の武士なべて領主の家人となりしかば、地頭といふとなへは旗本に祗候する一鄕一村の領主にのみのこれり、今の世も大かた其ならひなるべし、

〔東寺百合古文書〕福岡庄地頭請文

請申　最勝光院領備前國福岡庄、吉井村內八町河原沙汰雜掌、幷未來所務間事、

右頃宮肥後孫太郎義氏跡地頭職、號八町河原、冷泉侍從家年々寺役對捍間、雜掌祐尊ニ被仰付畢、而被付下地於寺家之時ハ、永代祐尊令相傳、限有御年貢可致其沙汰之由、雖給御契約狀、爲御年貢無沙汰之時ハ、被仰他人之刻、不可申子細、猶以支申者、義何口入之上者、可被申行罪科之狀如件、

康永二年三月日　　總領地頭左衛門尉義何花押

〔三刀屋文書〕出雲國三刀屋鄕惣領地頭諏方部三郎入道信惠代、子息彌三郎助直申、今年正月十三日馳參宇治御陣、同十四日參八幡、同十七日奉屬當御手、御入洛之御共仕候畢、然早下賜御證判、可備後證之由相存候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言、

觀應二年三月日　　源助直狀

進上　御奉行所

承了　花押（仁木左京大夫賴章歟）

出雲國三刀屋鄕惣領分、同庶子等知行分事、三刀屋菊松丸（諏訪部扶久）領掌、不可有相違之狀如件、

明德四年正月廿四日

三刀屋惣領職事、御相續之間、去年安堵令進之了、隨而今度公方之安堵御身宛被申成候上者、御一族殿原以下相催可被致軍忠候、若無承引輩候者、可有殊沙汰候、其分可有注進候也、恐々謹言、

三月二日　　京極治部少輔高詮花押

三刀屋菊松殿

〔三刀屋文書〕出雲國三刀屋郷萱原村惣領地頭諏方部孫太郎入道時運代子息九郎時行申、去年御敵依令蜂起云上郷云當津致御警固訖、隨而伯州凶徒等當津攻來之間、同代官孫子孫太郎馳向防戰被疵之條、無其隱者也、就中當大將軍爲當國凶徒等征伐、就御下向、即馳參、於當津自去年七月中至于同年九月令勤仕其役之處、自十月一日依有御結番、及二番衆迄于十二月々迫致御警固畢、而重正月十五日、可致警固之旨被仰出之間、令勤仕其役之處、預御感候、身暇可給早下賜御判可備後證之旨相存候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言、

建武五年正月日　源時行状

御奉行所

承了　上杉伊豆守重時歟　花押

〔土岐累代記〕濃州土岐氏守護起本之事

頼遠、始ハ伯耆七郎ト號シ、父ト一所ニ高田城ニ在ケリ、其器量父祖ニ倍セシカバ、暦應ノ頃惣領職ヲ賜リテ、美濃尾張伊勢三ケ國ノ探題トナリ、父ノ家督ヲ繼テ、則隣郷大富ニ館ヲ構ヘテ、住シ給ヒケルガ、所アシキトテ暦應ノ末ニ厚見郡長森ニ一城ヲ築テ移給フ、

〔南路志闔國二〕香宗我部隼人所藏文書曰

讓與　土佐國香美郡内香宗我部郷地頭職事

郷内在村々本郷蓋田須留田道手與樂以下

四至限東大忍庄堺鎌田峠、限南大海、限西深淵堺島川切石乃瀬利、限北立山横峰、

右於當郷地頭職者、元暦建久先祖秋家秋通令拜領、右大將家〇源賴朝御下文以來、迄于性海七代相傳知行無相違所領也、而至子息源藏人時秀者、今度天下動亂、御合戰之剋、數ケ度抽軍忠之上、爲親孝行志深切也、云彼云此、此忠節異于他之間、立惣領相副關東代々御下文、御下知、御教書幷先祖代々手繼相傳讓狀以下調度證文等、所令讓與時秀也、且爲一所所領之間、不可爲女子養子他人相傳之

儀、子細先日被定置候、若有不慮子細之時者、可令讓與舍兄秀明子孫也、固守此狀文、可令領掌者也、
仍而永代龜鏡讓狀如件、
康永四年九月廿六日　沙彌性海花押

〔石川文書乾〕石河駿河守遺跡幷總領職事、領掌不可有相違之狀如件、
正長元年十二月廿九日　花押○高師直
石川駿河孫三郎殿

〔小早川什書三〕扶平御代附箋
小早河美作守敬平當知行所々目錄事
一安藝國沼田庄惣領職悉井寺領社領
一同國大崎島兩庄略○中
一新庄西方公文職略○中
右外雖書落、敬平於當知行所之者、無他妨、可令知行者也、仍目錄如件、
延德三年八月六日　敬平花押
小早河又鶴丸殿

〔改選諸家系譜後編鎮島下二十六〕龍造寺藤原姓、秀鄉以上同、鎮島、
胤家(中略)明應八年己未、千葉新介謁大內義興、賜與宮、爲據領職、號村中之龍造寺、

半分地頭
三分一地頭
四分一地頭
一分地頭

〔小早川什書六〕安藝國久芳保地頭職半分事、任御下文、大多和太郎左衞門尉相共莅、被所可被沙汰
付下地於小早河美作五郎左衞門尉胤平之狀、依仰執達如件、
付紙、鎌氏之御代、
延文二年八月九日　右馬頭判
廣澤筑前守殿

〔小山氏文書〕讓與　所領等事

一所　下野國阿曾郡内阿曾沼鄕地頭職事〇中略

一所　同國〇陸奥江刺郡内角懸鄕半分地頭職事

一所　同國〇常陸磯部村參分一地頭職事〇中略

右所領注文如件、

觀應元年八月廿日　藤原秀親花押

〔大館常興日記〕天文七年九月十五日、西園寺殿被申城州池田地頭職三分事、從三條西殿御下知被申事在之ば、先可預御尋候趣、御臺所へ被申入之、被仰出旨日行事花禮部承之也、

〔小早川什書〕二安藝國沼田庄、同國乃美鄕、伊與國大島四分之一、洛中舞地東山靈山之内平松敷地等、施行遵行事書等也、

小早川美作守持平知行分、伊豫國越智郡内大島四分壹地頭職事、早任去月廿七日御下文之旨、可被沙汰付下地於小早川又太郎熙平代之由所被仰下也、仍執達如件、

永享十二年七月六日　右京大夫判

河野九郎殿

〔小早川什書〕六大島四分一之事、宛に身以御契約之儀以前數ヶ年知行候了、雖然連々無御等閑事候之間は、四分一之事如元返申候、可有御知行候、於以後も彌無御等閑候は所要候、就其今度管領樣依身之無緩怠之由被聞召、關々任順路、惣領職預御成敗、沼田之事安堵仕候間、大慶候、猶々連々無等閑候ば、自他可然候、仍其狀如件、

嘉吉貳年四月廿六日　持平判

補任

小泉駿河守殿

〔三刀屋文書〕出雲國三刀屋鄕內粟谷村一分地頭諏方部彥十郎源貞扶申軍忠事
右去二月廿七日夜、御敵佐々木次郎左衛門尉貞家、楯籠當國屋根山城之間、同廿八日惣領相共馳向彼城畢、次今月三日責入城內、追落凶徒等畢、是等次第佐々木五郎左衛門尉、同所合戰之間、令見知者也、然早賜御證判、爲備龜鏡、恐々言上如件、

康永四年三月日

承候了　高師直花押

〔集古文書十三下文〕等持院尊氏公下文出雲國出雲郡日御崎社藏

袖判

下　日置政高　可早領知出雲國大野庄香河村內、國守名地頭職事、
右人如本所補任彼職也者、可領知之狀如件、

建武三年三月廿五日

〔島津文書三〕播磨國下揖保東方地頭職事、爲闕所被支配白旗城之軍勢恩賞畢、而當方內屋鋪畠貳段事、爲累代地頭之敷地云々、麥畠事、雖未配分、先任重代可被知行也、仍執達如件、

曆應元年十一月廿四日　沙彌

周防五郎三郎殿

〔諸家文書纂八天野〕遠江國大峯平山大居村地頭職事、横地左京亮長連父爲長、去正中六年就拝給之、可遵行之由度々雖被仰下守護人今河入道心省、任御事書之旨、心省觀應三年八月十三日、成安堵之間、依不沙汰村、康曆二年十二月廿六日長連申成料所之處、永德二年八月廿五日被止料所之儀畢、雖然長連猶以就欲申之、去月廿一日有其沙汰之處、正中御下文者申成料所之間、令弃置歟、至料

所之段者既被止其號之間、旁所被閣長連訴訟也、此上者可被全領知狀、依執達如件、

至德三年六月廿七日　　左衞門佐

天野近江入道殿

與奪

〔西大寺文書六〕西大寺光明眞言料所丹後國志樂庄地頭職。。。但除地見二㫋聽御寄附狀段錢以下諸公事、并臨時課役等事、所令免除也、早爲守護使不入地可全領知之狀如件、

應永廿九年六月十七日　　花押

當寺長老

〔康富記〕寶德元年九月四日辛巳、諸局務文篇奉謁之令語給云、大炊寮領內安藝國高屋保地頭職事、奉公之仁平賀、爲勳功賞、建武以來代々御判頂戴地也、就寮領與行、被成下御教書之間、平賀歎申、仍自管領此子細被申入室町殿之由、室町殿被仰下云、寮領分明之處、可被除之條不可然、雖然爲御判之地者無力歟、替地可被下寮歟之由被仰之間、高屋保替地可被下之由、約束御教書被成下局務云云、

讓與

〔尾張國妙興寺文書七〕讓渡　伊勢國光用御厨地頭職事

大御分田くらかき　分米二斗納米五斗三合　くらかきいせとのあまことの分　壹段小くらかき分米四斗納米一斗七合ねしうんはたいのゝめの

貳反あふの　分米八斗　わかさほんけうかいのびくにの分　二反半地頭一圓　分絹四丈八代錢入百文　けんかうな

の分　三反かなはて　分米四斗五升かいのおときすこなかの分　壹反地頭一圓　分米三斗　あこ

もんの分

右此田地は、女子等いちごのゝちは、知行、知行さをいあるべからざる間、子そくとらます丸にゆづりわたす所實正也、まつだいにいたるとも、ながくちぎやうすべし、よのこともいらんわづらいをいたすべからず、仍爲後日ゆづり狀如件、

寄進

如行 花押

貞和元年十二月八日

〔南路志 二 闔國〕香美郡富家村西山傳兵衛所藏文書曰

讓與、香宗我部郷內一分地頭職西山分之事、

右件之所領ハ、香宗我部郷內、西山重代相傳之所領也、然ニ其子宮法師生年十三歲之時節、熊野參詣之時、讓與所實也、但捴領地頭方ヘハ、御公事等之事ハ、捴領次ニ隨勤申、其時一口之子細あるまじく候、仍爲後日之狀如件、

永享九年十二月廿三日

西山 秀員 花押

宮法師へ

〔古文書類纂 上 下知狀〕北朝光明天皇曆應二年、足利直義下知狀、(京都敎王護國寺所藏)

東寺八幡宮領山城國久世上下庄雜掌光信申、去今兩年年貢百四十石餘事、

右當庄地頭職者、去建武三年七月一日被寄附當社以降、爲放生會以下嚴重之料所、致長日御祈禱之處、下司公文等稱半濟、抑留神用之由訴申之間、今年十一月十三日仰金持三郎右衛門尉廣信、遣召文之處、如執進公文廣世仲貞、下司廣綱等請文者、半濟事、建武三年七月十一日爲恩賞宛給之間、任御下文致其沙汰候之上者、全無抑留儀云々、爰如廣世等所帶御下文者、領家職之由所見也、爲地頭職內下司公文爭可帶領家職半濟御下文哉之由雜掌雖申之、爲軍陣義之間、非巨難之上西京之甲乙人等依有軍忠、本所進止之所帶等猶以爲武家之計、平均被宛行畢、適武家被管之廣世等勤功之賞、輙難改動歟、但爲先日御寄進地之間、以後日御下文輒顚倒神領之條、其理之專一也、然則止當庄半濟之儀、於抑留年貢者任員數可令糺返、至廣世等者可宛給其替之狀、下知如件、

曆應二年十二月九日

源朝臣 花押

〔後愚昧記〕貞治二年四月廿四日癸亥、傳聞、山門訴訟事、(山門訴訟事)神輿動座可奉振洛中之由、日來雖風聞、訴訟不當理之間、武家不裁許之處、將軍(井)道譽法師、江州守護入道(佐々木崇永)等、有夢想之告、恐怖間、去十三日沙汰落居、出寄進狀於山門了云々、其案文繼左、

寄進　日吉十禪師社

近江國阿田鄕地頭職事

右就高滿殺害狼藉之篇、及神輿動座之間、奉優神威、永所寄附之狀如件、

貞治二年四月十三日　權大納言源朝臣(○足利義氏)判

寄進　山門根本中堂

近江國桐原鄕內得樂名地頭職事

右就崇永放火狼藉之篇、及神輿動座之間、奉優神威、永所寄附之狀如件、

貞治二年四月十三日　權大納言源朝臣判

〔尾張國妙興寺文書〕二奉寄進　妙興寺

尾張國中島郡朝宮保內畠地事

合壹町者

一所捌段小　四至(限東朝宮寺領　限西同前)(限南大河入道知行分　限北同前)

一所壹段大　四至(限東富田堺　限西妙興寺領)(限南大河入道知行分　限北大河入道知行分)

右當所者、泰隆譜代相續之地頭職也、而爲當寺造營永所令寄進也、然者一圓不輸仁可被全寺務、將又於領家年貢者、依有各別之下地、不及領家假之沙汰、其上除地頭諸役畢、仍爲後證狀如件、

貞治四年(乙巳)十二月廿一日　前美作守泰隆(花押)

〔尾張國妙興寺文書〕二尾張國中島郡吉松保地頭職所令寄進于妙興寺也、但當保田先立於淨土寺

眞福寺（寺田）二ヶ寺有契約之下地云々、仍毎年不闕、段別百文宛、公事用途有之、於向後者、一圓寄進之分者、自寺家可被收納也、若有無沙汰之儀ば、副使節可致沙汰也、仍爲後日狀如件、

貞治五年午歳二月三日　泰隆（花押）

〔尾張國妙興寺文書二〕寄進　妙興寺接待料所

尾張國中島郡益田保内拾町名事

合拾町（此外余田壹町者在坪付別紙之）

右所領者、宗天譜代相續之地頭職也、而依有借來供養之志、限永代所令寄進于接待料也、於地頭方天役加徵以下諸公事等者、一向令免除之上者、一圓不輸全寺務可被遂宗天本意者也、若子々孫孫中背此之旨致違亂妨者、可爲不孝之仁也、仍爲後規寄進狀如件、

應安貳年（己酉）二月五日　宗天（花押）

〔集古文書（五十三契約狀）〕應安元年契約狀（相模國鎌倉寶珠庵藏）

大神宮御領、下野國簗田御厨（號□□庄）□□□縣鄉事、於地頭職者、可爲建長寺寶珠庵領之由、被成將軍家御寄進狀云々、神税事、毎年參拾餘貫之條、雖爲先例、依有子細拾貫（除方雜事定）毎年可有直納于本家之旨、所令契約也、更不可有異變之儀、若有對捍事者、非此限矣、仍爲永代之狀如件、

應安元年八月三日　本家大神宮權□□荒木田神主永房（花押）

〔建内記〕應永卅五年（○正長元年）五月十四日乙丑、三寶院准后送使示給云、（○中略）愛河内國（和泉國歟、河内國歟云々、）島取庄領家職、鹿苑院殿（○足利義滿）御時御寄進神宮、仍地頭（號島取）勝定院御時（○足利義持）雖歎申不達之、被免夫地之居住者可然之由雖歎申、神宮代官（祭主歟）無許容、此地頭以外嗷議者也、然者決定可致嗷々之儀候間、可放被管人之號之由、畠山申之、放被管了、如案令放火燒地下了、仍以地頭職悉新御寄進也、是勝定院殿御沙汰也、仍地頭令牢籠之條、不便之間、彌只今及此御沙汰云々、

〔朽木文書三〕申含條々子細事

右丹後國倉橋鄉內與保呂村地頭職、播磨國在田上庄內滿願寺村地頭御代官職、鎌倉甘縄佐々目兩地事、

平増一丸相副代々御下文所讓也、依爲所領、言少分不及庶子配分之間、一圓不輸不讓渡也、但依増一丸計甘縄佐々目兩地之中に少分龜松丸可被相計候歟、情分穩便、而兄弟之禮儀候者可被不便存候、若千万一不和之儀候ば、不申及候、女子二人之事不及名田讓候之間、略之了、同兄弟仁天御渡候之上者、不可被見放候歟、若不調之事候者、宜被仰進退之意候、仍如件、

元亨二年十一月廿一日　散位宗度（花押）

〔東寺百合古文書（九十六）〕地頭代渡狀案

太良庄內公文職禪勝給田以下事、任七年（曆應二）十二月廿八日御施行之旨、打渡龜鶴丸了、仍渡狀如件、

曆應三年正月八日　地頭代教重（在判）

〔東寺百合古文書百七十七〕請申　東寺御領若狹國太良庄地頭方御代官職事

一御年貢以下殊存公平、無未進懈怠可致其沙汰事、

一有限代官得分外、雖一塵費公平更不可有私用儀、若年貢以下等有犯用者、不日被召放御代官職於公方可被申行其身於罪科、且地下代官所犯同懸正員可有其沙汰事、

一惡黨以下地下違亂出來之時、就內外可廻庄家安全計略、就中近日地下錯亂之時分、殊抽忠節可退方々亂妨事、

一所務間、每事守舊例、撫民爲先、不可懸臨時課役於百姓等事、

一寄事於左右、不相從寺家所勘、或相語權門、或引入惡黨、爲庄家更不可存不忠事、

地頭方所務職

一庄官百姓等罪科出來之時、任寺例令注進子細於寺家、更不可致自由沙汰事、

一寺役百姓代壹貫文、並湯代伍百文用途任先例可致其沙汰事、

右以前條々所請申、雖爲一事有不法之時、不日可致改補之、其時更雖爲一言不可申子細、若令違背請文之旨者、且被召放所務職、幷末武名主職、且可罷蒙大師八幡宮照罰、仍爲後日龜鏡請文狀如件、

觀應三年卯月五日　小槻國治花押

〔東寺百合古文書百三十六〕目安　東寺領若狹國太良庄地頭方代法眼禪舜申

右去年細川總州攝津國發向之時、當時寺社本所領代官等屬彼手、令下向處々事、爲闕如自守護御方被付給人云々、而於禪舜者東寺常住之間、曾以不屬彼手之條、世以無其隱者也、隨而地下代官敎實又其身爲山臥、更不携如此之武役之處、以當地頭方代官職、被混攝州發向輩跡、被付給人渡部之由承及之條、難堪之次第也、所詮云禪舜、云所務代敎實、曾以不屬總州手之上者、不可被行闕所之條爲所理推哉、然早至當地頭方者、被止給人之由被成下御書下、爲全寺家所務、粗目安言上如件、

貞治六　正　卯月　日

〔蜷川親元日記〕寬正六年九月八日癸丑、御母御知行越前國高柳保地頭方之事、各別之處、領家方南部光明院領代官、甲斐備後四郎、より段錢撿斷等事、動申懸之、及違亂云々、仍奉書兩通彼名主沙汰人中江　貞雄親元兩判、

一撿斷事者、領家代官、地頭代官御契約之時、一圓撿斷、以其引懸如此可被經上裁之間、可相支云々、

〔東寺百合古文書ハノ五十至五十九〕下　東寺領若狹國太良庄定補地頭方所務職事

小槻國治

右以人所補彼職也、有限年貢以下課役等任先例無懈怠可致其沙汰、庄家宜承知敢勿違失、故以下、

觀應三年四月七日　內公文

〔古文書類纂大宰府宣上〕後奈良天皇天文六年大宰府宣(筑前大悲王院所藏)

大府宣　大宰府廳官人等

可早任廳宣雷山神領筑前國夜須郡赤坂村參町地頭職號小地頭職事

右件地者、往昔爲不曷山領、誰妨之、而世既及澆季、頃年以降不知行云々、今依社訴所令還補也者、早守先例可全領知之狀如件、

在廳官人等宜承知、依宜行之、以宣、

天文六年十二月十四日

大貳多々良朝臣義隆花押〇

〔文章三〕抑當流門徒中ニヲイテ、コノ六ケ條ノ篇目ノムネヲヨク存知シテ、佛法ヲ內心ニフカク信ジテ、外相ニソノイロヲミセヌヤウニフルマフベシ、〇中略

一守護地頭ヲ疎略ニスベカラズ

〔今川了俊書札禮〕一國をも給て候する人は、其國中の地頭御家人等の書札も、恐惶と書候て雖あるまじく候、併公方を敬申にて候哉之間、家の疵に成まじく候、

〔箕輪伊賀自記後集二〕箕輪伊賀自記〇永祿五年

去レバ〇中略伊東入道聞之、彼北原ガ地ニ望ヲカケル、〇中略然ルニ北原ガ家來ニ、踊ノ地頭白坂美濃守、北原ノ躰危キ家ト見ユレバ、得此剩太守方ニ申入、忠人ト成ルベシト思ヒ、省於郡地頭三原遠江守へ密々ニ注進ス、遠江守境目役ド云、少モ遲々スベカラズトテ、踊ノ城へ番手ヲゾ差籠メラル、

大名 相伴衆 附

名稱

大名ノ名ハ、源平時代ノ頃ヨリ見エテ、多ク土地ヲ有セル武士ヲ稱スルナリ、而シテ名トハ名田ヲ云ヒ、名田トハ私有ノ田ヲ云フナリ、然レドモ鎌倉幕府ノ頃ニハ、泛稱タルニ過ギズシテ、書冊中未ダ多ク見エザリシガ、足利氏ニ至リテハ、其制自ラ定リテ、一種ノ家格ト爲リ、權シテ守護ノ家ヲ謂ヘルガ如シ、而シテ大名ニハ國持、准國持、外樣ノ三種アリ國持ハ一國以上ヲ領スルノ謂ニシテ、山名、細川、赤松、佐々木等十餘家ノ如キヲ云ヒ、之ニ準擬スルモノヲ准國持ト云フ、而シテ、外樣衆ハ、幕府ト疏遠ナルモノニテ、之ニモ國持衆アリ、准國持衆アリ

〔饅頭屋本節用集人倫〕大名ダイミヤウ

〔貞丈雜記人品二〕一大名の事、今高貴の人の事をさして云、古き詞なり、書札法式拔萃云、先代將軍の定にも、一族大名、守護大名と次第候、大名トハ、一國の主を云なるべし、大名とは、田地の名ミヤウを多く持ちたるなるべし、名トハ田地十三石チ云、先代とは鎌倉將軍をさして云、

〔年中定例記八月〕朔日、御對面御祝毎月の如し、

一御憑、禁裏樣へ御進上、○中略御使傳奏、御返まいる、御使同前、攝家、門跡、公家、大名、外樣、御供衆、總番衆、頭人、奉行、其外こと〴〵く進上、○中略

一大名御供衆などは、御返しの御禮に御參候、○中略

一晦日、○十二月、中略、

一公方樣、東山殿樣、御德日うし、ひつじの日は、大名國持御供衆よりうしの日は、餅一折、御太刀金御進上、

〔康富記〕嘉吉二年十一月十三日庚午、今日諸大名近習東向衆等、被進御太刀云々、

〔應仁記一〕武衛家騷動之事附畠山之事

起源

寛正六年乙酉冬、西國ヨリ上洛シテ、〇斯波義敏同十二月廿九日、父修理大夫入道道顕ト相伴ヒ、兩御所ヘ出仕申サレケル大。名。マハリ禮儀如常、

〔永祿六年諸役人附〕外様衆　大。名。在國衆號國人

攝津守中原晴門朝臣　細川六郎　畠山左衛門秋政　山名次郎義祐改名左京大夫　一色左近大夫　赤松次郎〇下略

〔常照愚草〕一諸。侯。之知行、或免除之地、或京済之地事、其國分の奉行人の方へ以訴訟申處、證文を披見して其時の頭人へ披露して、新人方と守護へも被成御下知也、

〔新猿樂記〕三君夫、出羽權介田中豐益、偏耕農爲業、更無他計、數町戶主、大。名。田堵也、

〔顯廣王記〕安元三年〇治承元年四月廿八日丁酉、燒亡、大極殿〇中略諸國大名不應國役、諸庄下司不順領家、洛中狼藉、外國私勢、誰加制斷哉、故有此天災歟、

〔古今著聞集闘諍十五〕かまくらの右府將軍家〇源實朝に、正月朔日、大名共參りたりけるに、三浦の介義村、もとよりさぶらひて、おほさぶらひの座上に候けり、其後千葉の介胤綱參りたりける、

〔平家物語五〕ふじ川の事

大將軍權のすけ少將これもり、東國のあん内者とて、長井の齋藤別當さねもりをめして、なんち程のつよ弓せい兵、八か國にいか程有ぞととひ給へば、齋藤別當あざわらつて、さ候へば、君はさねもりを大矢と思召れ候にこそ、わづか十三束をこそ仕り候へ、さねもり程ゐ候ものは、八ケ國にはいくらも候、〇中略大名と申すぢやうのものゝ、五百きにをとつてもつは候はず、

〔源平盛衰記十九〕文覺入定京上事

新都福原ノ樓御所ニ參テ、院〇後白河ノ近習者ニ、前兵衛督光能ト云人ハ、文覺ニハ外戚ニ付テユカリ也、其人ノ許ニ行向テ申ケルハ、伊豆國ノ流人兵衛佐頼朝コソ、朝家ノ御歎天下ノ牢籠ヲ承テ、

院宣ヲ下シ給ルナラバ、東八箇國ノ家人催集テ都ニ上、平家ヲ亡シ、仙洞ノ被打籠御座逆鱗ヲモ休奉リ、國土ヲモ鎭侍ナント申言ニ合テ、事ノ樣伺見ニ、ヨソ目ニハ勅勘ノ者トテ憚樣ナレ共、內心ハ皆通用セリ、況院宣ナド被下ナバ、大名小名誰カ一人モ背侍ルベキ、イツトナク御心苦キ御目ヲ御覽ゼンヨリ、院宣ヲ被免下ヨカシト奏シ給ヘト語、

〔吾妻鏡四〕元曆二年二月五日己未、與膳大夫中原久經、近藤七國平、爲使節上洛、(先先雖爲使節、仙人相替、今度治定云云、)〇中略今兩人差非指大名、久經者、故左典厩御時殊有功、又携文筆云云、國平者勇士也、有廉直譽之間如此云云、

〔吾妻鏡十六〕正治二年二月六日壬戌、小山左衞門尉、和田左衞門尉、畠山二郎已下群集所、雜談移刻、澁谷次郎云、景時引近邊橋暫可相支之處、無左右逐電、於途中逢誅戮、遂衆日自稱云云、重忠云、梓起楚忽、不可有堅橋引橋之計、難治歟云云、安藤右馬大夫右宗(生虜高雄文覺者也)聞之云、畠山殿者、只大名計也、引橋構城郭事不被存知歟、壞懸近隣小屋於橋上放火燒落、不可有子細云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年(〇弘長元年)五月十三日甲戌、今日晝番之間、於廣御所佐々木壹岐前司泰綱、與澁谷太郎左衞門尉武重及口論、是泰綱以武重有稱爲大名之由事、武重咎之云、已亘嘲哢之詞也、於當時至非大名、先祖重國(號澁谷庄司)者、誠相模國大名內也、然間貴邊先祖佐々木判官定綱(子時太郞)號牢籠之當初者、到重國之門寄得其扶持、子孫今爲大名歟云云、泰綱云、東國大少名、并澁谷庄司重國等皆官平氏、莫不蒙彼恩顧、當家獨不諛其權勢、棄譜代相傳佐々木庄、偏運志於源家、遂住相模國、尋知晉之好、得重國以下之助成、繼身命奉逢于右大將軍草創御代、抽度々勳功、兄弟五人之間、令補十七箇國守護職、剩面々所令任受領撿非違使也、昔牢籠更非恥辱、還可謂面目之始、重國以秀義爲聟之間、令生隱岐守義淸訖、被用聟之上、夫非馬牛之類、爲人倫之條勿論歟、此上令過言、頗荒凉事歟云云、列座衆悉傾耳、敢不能助言云云、

國持

〔江濃記〕佐々木兩家わかりの事

佐々木家にて、六角京極兩家のわかりは、むかし頼朝卿の御時、佐々木源三秀義の子共、一男定綱、二男經高、三男盛綱、四男高綱、五男義清、兄弟五人の間に拾七ヶ國の守護に補任しける、其中にも總領定綱の子孫、江州の家督を繼ぎける中にも、定綱の一男廣綱、承久亂に院方に有しか共、其弟信綱、關東より責上り、宇治川先陣をかけ、忠功比類なかりしかば、近江守に補任し、總領を繼ぎけり、兄の廣綱以下、皆誅せられけり、信綱の子息泰綱、父の跡を繼ぎ、近江守に補任せらる、、今の六角の元祖是也、其舍弟對馬守氏信とて、將軍家の近習にて、あまたの集に入、無雙の歌人なりとかや、今の京極家の元祖是也、根本は兄弟にて、兩流共に關東の賢佐、武備の大名なり、奉公他に異なり、されば元弘の亂にも、總領の六角方は、六波羅の催促にしたがひ、山門の合戰に手をくだき、其外戰功粉骨を盡し、馬場が峠の戰場より京都の降人に參られしかば、其身は出仕を止められ、子息氏頼、幼稚より名代として京都へ指上られける、又京極家には、佐渡守入道道譽は、其頃關東に有て、尊氏卿御上洛の時同責上り、其後尊氏の味方にて、一度も終に不忠の事なく、子孫皆足利殿の味方にて打死しけり、殊に總領氏頼、遁世の志有、近江の國務の事、道譽老人計にて、總領方をも萬さし引しける、しかも八十餘年長命して、尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ、武家の政道を輔佐し、子孫四職の其一に撰られ、京極殿と稱し、近江國十三郡の中、八郡を六角方知行し、五郡を京極方に支配す、明。德。年。中。よ。り。京。極。殿。又。大。名。に。成。て、出雲隱岐飛騨半國を知行し、其勢總領家にまさりけり、

〔書禮袖珍寶八〕彝用實書拔書

一鹿苑院殿○足利義滿御代、應安三年九月廿六日、御茶之御會在之、退出之時、國。持。之面々、其外諸侍にこそりはの長刀所持せば、御所望有度由、上意也、

〔文安年中御番帳〕外樣大名衆

山名因幡守護　細川右馬頭入道　山名相摸守　細川安房守　大友修理大夫　細川備中守護　細川和泉守護　上杉民部大輔　仁木右京大夫　佐々木六角大膳大夫　武田甲斐守護　同大膳大夫　島津　細川淡路守護　今川修理大夫吉良殿御一家駿河守護　土岐左京大夫　畠山上野介　富樫新介　小笠原信濃守護　以上

〔長祿二年以來申次記〕國持衆

斯波修理大夫入道斯波ニテハ、下屋形、義敏親父也、　細川民部大夫持久和泉守護之一方也　山名彈正少弼致豐右衛門督入道宗全一男也　同次郎政豐　山名相摸守教之　細川刑部少輔和泉守護之又一方也　山名兵部少輔政清　山名彈正忠是豐　土岐美濃守成頼　佐々木中務少輔勝秀　武田大膳大夫信賢　佐々木四郎政高　富樫介成春

〔永享以來御番帳〕文明十二三年比　國持外樣衆

山名彈正少弼　山名相摸守　細川民部少輔　細川刑部少輔　山名兵部少輔　山名彈正忠　赤松次郎法師　土岐美濃守　佐々木六角　武田大膳大夫　佐々木京極中務大輔　富樫介

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日

國持衆被ㇾ參、同御盃幷御練貫一重拜領同ㇾ之、細川陸奧守、京極加賀守、依ㇾ被ㇾ准二國持一雖ㇾ爲二外樣衆一、五ヶ日出仕也、御盃練貫同前也、

〔年中恒例記二月〕一日、千疋宛折紙、三職はじめとして、諸大名、其外國持たる方に進二上之一、當月にかぎりたる儀也、公家過て、面々折紙進上と申入て、自身持參也、

〔宗五大草紙下〕書札之事

一文書のうらに判形を居る事〇中略

准國持

外樣

一重而謹言と書は、禮紙に書言葉なり、

一三職はたがひに進之候と在之、又人の御心により候て、進覽共あそばし候か、おなじ御家ながら、職御持候はぬ前には、人々御中共調られ候歟、其外の國持衆御供衆申次以下へは打付書にて、公家へは御家により替りめ參らせ候、

〔細川家書札抄〕一國持衆次第不同

細川阿波守殿　同刑部少輔殿　同兵部大輔殿　同淡路守殿　山名相模守殿　山名兵部少輔殿　山名七郎殿　土岐美濃守殿　佐々木龜壽殿六角殿事　大内龜章殿　武田大膳大夫殿　富樫介殿　赤松次郎小法師今の兵部少輔殿　上杉民部大輔殿

此かた〴〵へは、大略進候也、又打付書も可在之恐々書たるべし、

一細川右馬頭入道殿　同下野入道殿　赤松治部少輔入道殿　山名伊與守殿　山名彈正少弼殿　山名彈正忠殿　細川民部少輔殿　佐々木鞍知壹岐守殿

此かた〴〵へは、皆々進之と可在之、大略は又打付書も可有之、當時可有御賞翫は別段之儀也、又當時無之人多候へども、前々に書置候間注進候也、

〔長祿二年以來申次記〕准國持人數

細川中務大輔成經奥州事也　佐々木加賀守

〔東山殿年中行事正月〕朔日、御相伴衆、國持衆、准國持、外樣衆、御供衆、一人宛出席御禮、御盃御服各練貫一重拜領之、畢而御酌替ル、先酌人、御盃御服頂戴、作法皆同前、各練貫御服拜領事應仁亂以後ハ無之、

〔長祿二年以來申次記〕外樣衆

畠山次郎　末子　赤松新藏人七條事也　佐々木鞍智紀伊守　土岐民部大夫

攝津掃部頭之親　赤松治部少輔入道有馬事也　同彌次郎

〔永享以來御番帳〕文明十二三年比　外樣衆

北畠左衞門佐　細川中務大輔准國持之　新田大島左衞門佐　伊勢仁木左馬助　山名伊豆守　一色右馬頭　新田岩松兵庫頭　吉見太郎　山名宮田五郎　丹波仁木兵部少輔　四條上杉中務少輔　佐々木京極加賀守　江見美濃守　土岐民部大輔　赤松新藏人　赤松中務少輔　佐佐木鞍智　攝津播部頭　二階堂大夫判官政行　町野加賀守　波多野

〔文安年中御番帳〕外樣衆次第不同、

小笠原左兵衞佐　仁木千代菊丸　引田兵庫頭　一色兵部大輔　細川駿河守　赤松中務大輔○以下三十六人姓名略

〔年中恒例記二月〕一日、御對面次第は、○中略次國所無所持外樣衆正月四日ニ出仕衆也

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日、外樣衆、同御盃、幷御練貫一重拜領同之、然此人數は、朔日と四日とに出仕也、五ヶ日出仕無之、○中略

同二日、外樣衆之事、末野以下は、朔日計被參也、

二月朔日、外樣衆被參樣之事

御盃の衆にてなき外樣衆も、常之節朔には出仕也、一番に管領御盃頂戴候而、退出之後、則此外樣衆被掛御目候而、被申次さいのきはへ參て面々と申入て、又管領を始て、御相伴衆一列に被參也、然時は、管領被參て後、面々と申入候、其間に外樣衆被參と申儀也、但又此外樣衆は、國持之後、番頭の前にも被參と申義也、近年は、もつはら其分なり、是も自然のために、古今之兩樣を注申者也、

三月朔日、外樣衆一人宛參、さいのきはにて御禮被申也、○中略

一外樣衆除准國持人事、毎月朔日には御盃頂戴無之、年中には正月朔日、只一度頂戴也、

一外樣衆は、正月、朔日、四日、同其外每月朔日節朔衆、嘉事出仕在之、

同二日、〇十月御ゐのこ出仕之事、〇中略

外樣衆、又一人宛被參候而、御膳にすはりたる餅を、われさ一宛給て頂戴候而被罷退也、國持に不准外樣衆は、かやうに直には不被給候間、時宜此分也、

〔齋藤親基日記〕文正元年十二月廿日、爲御倉籾井、相國寺鎭守之東、警固駈集、御所中外樣衆被差遣之、

〔文明十一年記〕正月十七日、御的始在之、〇中略

一外樣衆には、赤松又次郎、赤松越後彌五郎、兩人祗候、大名幷此兩人うらうち也、〇中略

一大名、外樣、御供衆、申次、御方衆、□□衆、奉行少々、御太刀金進上之也、

〔年中恒例記正月〕四日、外樣衆、朔日ニ不參衆總番衆、奉行衆、上樣へ御禮之事、春日局小侍所へ出座にて、各一人ツヽ對面也、

十月十日、名書の下に、殿文字かくさゞるとの事、武家にては、御紋候大名、同御供衆、同外樣衆、御部屋衆、殿文字有之、

〔大館常興書札抄〕一外樣衆之事

一年始御出仕之事、貴所御儀者、被准國持之段、勿論御事候條、御盃可有御給之儀、無餘義存候、猶以面上可申候、恐々謹言、

月日　　名乘判

細川陸奥守殿御宿所

凡此趣也、伊勢仁木殿、丹波仁木殿、其外御紋せられ候方々數多在之、何も同前也、

〔附〕相伴衆

相伴衆トハ、飮膳ニ陪食スルノ謂ナリ、此衆ハ、將軍ノ殿中ニテ宴ヲ開キ、又ハ諸家ノ宴ニ赴

ク時ニ、其席ニ侍スルコトヲ得ルモノニシテ、山名、一色、細川、畠山、赤松、佐々木ノ名家之ニ當ル、

名稱

御相伴ノ事ヲ掌ル、諸家へ御成ノ時、亦其亭ニ候ス、御臺所同ク成ラセ給フ時ハ候スルニ及バズ、

〔相京職鈔二〕御相伴衆

〔貞丈雜記四役名〕一御相伴衆と云は、大名の内にて器量を撰び、御相伴に伺候せしむる也、公方樣諸大名へ御成の時、御相伴に參らるゝ人々也、殿中にての御相伴にはあらず、

〔武家名目抄職名附錄二〕按に御相伴衆の名目、別にいはれなし、柳營にて盃酒椀飯の節、幕下の相伴に候することを得る人にて、譜代歷々の輩なり、されば山名、一色、細川、畠山、赤松、佐々木の外、この衆に加はることを得ず、公家法中の衆は、もとより臣下の儀にあらざれば、この例にかゝはることなし、足利殿季世にいたりて、陪臣のすぢなる朝倉、長尾、三好などの相伴衆に加はりしは、時世の變革はかりしるべし、もとより常例にあらず、

〔伊勢貞助雜記〕參次と申事之事によりて、御用之儀也、先御相伴衆の人々の事也、三職の御上は、當後先の次第相定之間、不及異論、其外は參次第也、然に先年大津の御陣の時、左京大夫義興朝臣公、其比は未新介にて若輩なり、又京極治部少輔持光、其比は御相伴衆なり、是も若年なりし、然共三井寺の御口已前よりも、御相伴衆に被召加口口口義興より著座可進之由言上候し、義興言上は、未在國中より御相伴に被召加官被成下御内書所持候段言上候條、參次第之上はとて、大内新介すゝみ被申し也、京極治部少輔は、被成御内書候段は無存知、在京の趣にて及相論、治部少輔、大内下に著座ありし、此御内書者、慈照院殿樣○足利義政より被成下たると云々、又根本之儀を被申立候つる人も候へども、口口被相定置候とて、不及取沙汰、

補任

〔永享以來御番帳〕永享比ヨリ至文正三職○中略

御相伴衆

山名右衛門督入道常熙　一色修理大夫義貫　畠山修理大夫入道道祐

赤松左京大夫入道性具　斯波治部大輔義豊管領息　畠山尾張守持國　畠山左馬助持永

畠山彌三郎持富　畠山阿波守義忠　土岐美濃守持益　六角大膳大夫滿綱

京極治部少輔持光　山名修理入道常勝　細川阿波入道常秀

山名彈正少弼持豊　細川刑部少輔持有　細川淡路守滿俊　山名上總介熙高

富樫介持春　武田伊豆九郎信榮　佐々木加賀入道有統

佐々木黒田備前守高光　佐々木鞍智殿河守高信　佐々木佐渡入道　上杉中務大輔

〔宗五大草紙 下〕文明十一年の比、御相伴衆、御供衆以下の事、

一管領畠山左衛門督殿政長　細川九郎殿政元　山名左衛門督殿政豊　一色左京大夫殿義春

細川兵部少輔殿　赤松兵部少輔殿政則

在國衆

治部大輔殿義良　畠山左衛門佐殿義統　京極殿政經　大内殿政弘

〔文明十一年記〕正月十七日御的始在之、〇中略

一祗候人數、管領〇註略治部大輔殿、細川殿、山名殿、一色五郎殿、赤松、以上御相伴衆也、

〔宗五大草紙 下〕騎馬の事

一人によりて輿御免候、三職其外御相伴衆吉良殿石橋殿など、同前御免のさたなくめし候、御相伴衆の内にも、赤松殿、京極殿、大内殿、御免候て被乘候、土岐殿、六角殿同前、又細川右馬頭殿、勢州代々御免候、〇中略

一引馬の事三職、御相伴衆吉良殿、石橋殿、土岐殿、六角殿、何も輿の先へ被引候、其外の衆は輿の

跡にひかれ候、

〔足利季世記五將軍地藏軍記〕晴元入道三好ト和談事

永祿四年辛酉正月十五日、三好修理大夫長慶父子上洛有、公方樣○足利義輝ニ出仕アリケレバ、息筑前守慶興ニ、義一字ヲ賜リ、父長慶父子共ニ御相伴衆ニナサレ、桐ノ御紋ヲ被レ下、是ハ先度御相伴衆ニナシ給フ時、朝倉彈正左衞門ヲ惠林院殿○足利義稙ヨリ御相伴衆ニナサレケル其例ヲ追レケル、同年三月廿九日、右ノ御祝ノ御悅ビトテ、公方樣義輝、三好館ヘ御成アリ、御遊モアリ御能モアリケリ、

〔永祿六年諸役人附〕光源院殿○足利義輝御代當參衆幷足輕以下衆覺

外樣衆　大名在國衆號ニ國人一

御相伴 武田孫八元次若狹國　同 佐々木左衞門大夫入道承禎御使　同 佐々木同右衞門尉義弼

同 朝倉左衞門督義景　同 大友左衞門督入道宗麟○中略　御相伴 伊東三位入道義祐日向國○中略

御相伴 北條相摸守氏康○中略　御相伴 今川上總介氏實駿河○中略

御相伴 三好左京大夫義繼

〔蜷川親元日記〕寬正六年三月四日辛亥、花御覽、先公家、一條太閤、關白二條、門跡聖護、三寶、實相、殿中江御參、○中略御人數之外、御相伴衆悉御參、

〔蔭涼軒日錄〕寬正六年九月十九日、來廿一日、奈良御社參、自二今日一御神事、廿日、今曉南都御發軫、廿九日、南都一條院御所○中略前南門、管領畠山尾張守殿護レ之、北門、武衞治部大輔殿護レ之、御相伴關白二條殿、三寶院、南都傳奏、日野殿被レ參也、

〔高倉永相書狀案〕武家名目抄職名部附錄一所引御相伴衆之趣御尋之事、譜代令二祗候一家之儀、日野廣橋、烏丸、三條、飛鳥井、當家候、此外冷泉、近代譜代樣候、惠林院殿○足利義稙御時、葉室、阿野、雖レ望申、依レ有二申分一無二御許容一

職掌待遇

之由承及申候、萬松院殿（○足利義晴）御時被召加勘修寺、凡此分候、猶可有上意候、三月廿八日、永相、

予時永祿四年三月晦日、三善筑前守義長御成被申入ニ付、口竹内三位御相伴可被召、先々趣有來候分可申入之由、以廣橋國光卿被成御尋候、飛鳥井、三條、同前也、予申分案文如此、若可被召加哉否、於御尋者、存分も可申入歟、唯今御尋者、前々之次第可申入之由被仰出候間如此也、

〔道照愚草〕一永祿八（乙丑）正月五日、午刻に細川兵部大輔亭へ爲北野還御御成在之、○中略御相伴衆、近衞殿、久我御方、久我入道殿、御侍者、御所廣橋殿、飛鳥井殿、新宰相殿、武田入道、

〔長祿二年以來申次記〕正月朔日、細川淡路守（正月朔日）御笠懸引目、并御弓進上之事、○中略一申次御前へ持參申樣躰の事、○中略そと手をつきて御禮申入て退候而後、山名殿以下御相伴衆被參也、

二月朔日、三職御相伴衆、一列に御前へ被參て御禮申されて、其儘御對面所御前之右の方に各著座候也、然者管領は二度御前へ被參也、扨又御三盃、并數之御盃參らるゝを、御三盃は三ながら被聞召、同數之御盃をも、上一さをり被聞召候時、正月之ごとく御酌の人相調候て、數之御盃の四方を御前のとをりに置申て、一宛御銚子之上にすへ申候へば、一人宛被參て頂戴也、管領より二番目の人、一番に被參候なり、其謂は管領は前に一人被參て頂戴候間、此度は二番めの人より被給始之、左樣に候而より、一人宛頂戴候而は則退出候間、管領の次に伺公候人の座、必あき申、其所へそばしざりに退て、其跡に管領伺公候也、

〔江北記〕二月朔日に、公方樣へ御屋形樣（○佐々木氏）御禮御申候事は、月迫に正月の御ふくを御給候御禮也、千疋に參者也、御相伴之者へは、何も御ふく被遣候由、申次折物小袖の事、御給候時は著めされず、御參候也、

〔年中恒例記（正月）〕一日、御對面次第、○中略御相伴衆之大名一人ヅヽ被參候て御盃頂戴也、○中略正月

一日、七日、十五日、三ヶ日大名以下、上様へ御禮被申事、當職一人は御前へ被參て、御盃頂戴之、其外御相伴衆、並國持、外様、御供衆までは、うへの御末裏辻の內へ被參候て、御盃頂戴之也、東の御わき戸より被參候也、

二月一日、今日一獻次第事、伊勢守、又は其日の申次一獻と申て、御相伴衆、各御前へ被參、公家衆にも御祗候の方在之、三獻參、初獻御酌、御相伴衆の內被勤之、

十月五日、北野御經へ渡御、○中略日野殿三職以下、御相伴衆祗候、御警固所司代、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事

一管領大かたびら、其外御相伴衆、御供衆、申次、小笠原以下うら打也、

〔宗五大草紙上〕公方様御對面之事同私様のやう

一人を送り候事、賞翫の方をば次の座鋪にて一送り、縁にて一送り、庭にて一送り、是第一也、○中略我等つれ、三職其外御相伴衆へ禮に罷出候時は、一送りもなく候、○中略又御使の時は、三職其外御相伴衆は御送り候、○中略

公私御かよひの事

一文明の比は、○中略公方様御酌は、女中にも大上﨟小上﨟より外は御取なく候、男衆には、公家衆、御相伴衆御一家之外は、伊勢守取被申候、○中略

公方様諸家へ御成の事

一毎年節分に伊勢守宿所へ御成候、其時は五迄參候、又此時にかぎり候て、同名の衆御供致し候はゐも、少々御相伴衆の御配膳を申候、○中略

一公方様へ七まで參候時も、御相伴衆へ三まで參候、又五公方様へ參候時も、三まで候、○中略

一御菓子の事七種、ふち高にすはるべし、○中略御相伴衆の御菓子も七種、ふち高にすはり候、

〔宗五大草紙下〕騎馬の事
一人によりてこし御免候、三職其外御相伴衆、吉良殿、石橋殿など、同前御免のきたなくめし候、御相伴衆の内にも、赤松殿、京極殿、大内殿御免候て被乘候、〇中略
一引馬の事、三職御相伴衆、吉良殿、石橋殿、土岐殿、六角殿、何もこしの先へ被引候、其外の衆は、こしの跡にひかれ候、〇中略
いにしへの人のをしへ申事
一路次にて馬上にて三職に參あひ候はゞ、下馬してかくれ可申候、若御覽じて、こしより御おり候はゞ、參候て御禮可申候、殘の御相伴衆に大かた同前、但赤松殿、大内殿、京極殿などは、少は人により候て、禮には被出候はで、內の仁まで使を遣候て、禮を被申候方もあるべし、〇中略
一三職御禮に參時、禮に使を給候はゞ、其使の所まで人を遣て禮を申べし、殘の御相伴衆同前、但人によるべし、
〔御供立日記〕公方樣より、織物御拜領候事は、御相伴衆にも、人躰により御拜領候なり、
〔細川家書札抄〕一御相伴衆
管領右京大夫殿御事　治部大輔殿武衛御事　一色左京大夫殿　山名左衛門督入道殿金吾の事なり　畠山左衛門佐殿□□大夫殿事
三職は、もと〳〵は小路名をあそばしたる也、進覽とも、進之共被遊たるなり、但御職御持なき以前は、自餘の御人數の事可有御賞翫候、御職御持候時は、自餘の方々へは、進之候と被遊候而も不苦候歟、三職衆之外、御相伴衆へは、皆進候と可在之、是も筆をつぎ、聊墨こく可被遊候、墨の黑さは賞翫なり、うすきは大槪の事也、是恐々の事なり、書札可認に第一の秘事也、努々不可有他見候、猶進候事は御職御持候時也、

〔常照愚草〕一三職幷御相伴衆共に立文たるべし、三職の御間は、何も進覽、又進之候、互此分、畠山左衞門督政長より細川典厩政國朝臣への狀、赤澤加賀守以申次正文被見候つるは進覽と在之、右馬頭殿の御供衆中にても、別而の儀候間如此也、

〔花營三代記〕應永廿八年正月十四日、御所樣、(足利義滿)〇義御臺樣、御方御所樣、伊勢守(貞經)江有御成、佳例十三日、伊勢守〇貞經出仕事有御免、管領畠山左衞門督入道道端ヲ召御相伴、　三十一年二月十一日、御方管領へ成、〇中略於御前大草三郎左衞門尉公範白鳥鯉仕也、管領、修理大夫入道道祐兩人御相伴、

〔建内記〕嘉吉元年六月廿四日己丑、今夕有前代未聞珍事、赤松彥次郎教康、(故則祐律師曾孫、故上總介大膳大夫入道義則孫、當時左京大夫入道滿祐子也、)依諸敵御退治嘉禮成申渡御、近日人々有此經營之故也、未斜室町殿、(征夷大將軍從一位前左大臣、四十八歲、鹿苑院殿(足利義滿)御息、勝定院殿(足利義持)御弟、天台座主義圓、去應永廿五年御還俗、御俗名義敎、)渡御彼宿所、(西洞院以西、冷泉以南、二條以北、)諸大名(管領細川右京大夫持之朝臣、畠山左馬助、山名彈正、細川讃岐守、大内、京極加賀入道已下諸大名、)爲御相伴、在其序猿樂三番、盃酌五獻之時分、閧御坐後障子、著甲胄武者數十人亂入之奉弑之、其時管領已下著座之諸大名、卽起坐退出、不及報答、纔大内介、京極加賀入道、拔刀防戰、又左衞門督(實雅卿、權中納言、)爲御相伴參候之、元來不帶兵具上者、無力之處、御前金覆輪太刀(禮太刀也)在之、拔件太刀相防、

〔蔭涼軒日錄〕長祿四年〇寬正元年卯月八日、今日戌剋、御會所御移徙定也、其剋御相伴之大名參賀、有三獻之御祝宴云々、　五月廿四日、來廿八日、建仁寺大龍菴、以爲小檀那之故、山名金吾入道可參于御。相伴。之由被仰出也、但赤松大膳大夫以舊參之例依伺之如此也、〇中略但自寺家所望也、　廿八日、大龍菴御成、〇中略山名金吾以爲檀那之故被參御相伴也、以無院主之故、秦斗和尙代院主被參御相伴也、　十二月廿日、來廿三日、大德院御成、御相伴一色殿被參之事伺之、〇中略御相伴衆喫飯飽可被喫也、比來喫飯不足被御思食、尙諸老可奉命之由、以伊勢兵庫助被仰出也、

〔蜷川親元日記〕寬正六年正月廿五日癸酉、三間御厩御一獻、御相伴衆各御服、(織物)御給之、

〔蔭凉軒日錄〕寛正六年六月廿四日、奉報普廣院〇足利義教御成御點心之事也、於方丈御點心、管領畠山殿、先職細川右京大夫殿、御相伴被參也、蓋勝定院殿〇足利義持御代、岩栖院〇細川滿元、眞觀寺〇畠山滿家兩殿同時御相伴被參申之舊例被露之、仍如此也、

〔應仁記〕〔一〕亂前御晴事

五六年ノ間、一度ノ晴儀サヘ、由々敷諸家ノ大儀ナルニ、此間打續、九ケ度迄執行ハレケル、先一番ニ將軍家ノ大將ノ御拜賀結構、〇中略九番ニ花之御幸也、去レバ花御覽ノ結構ハ、以百味百菓ヲツクリ、御前ノ御相伴衆ノ筋ヲバ、金ヲ以展之、御供衆ノ筋ヲバ沈ヲ以削之、金ヲ以、逆鰐口ヲカク、如此面々粧ヲノミ刷ント奔走セシマヽ、皆所領ヲ質ニ置キ、財寶ヲ沽却シテ勤之、

〔齋藤親基日記〕文正二年正月廿日、猿樂落居、大名御禮、

一管領禮部　其外、御相伴衆御太刀御馬、

〔諸大名衆御成被申入記〕一同名中にも、今の家々により、亭主如同門外に伺候も可有之、先年文明十年二月廿八日、細川聰明殿、代始の御成被申し時、細川讃州成之、同息彌九郎政之雖伺候候、門外へは不及被參、讃州は御一名因、爲御相伴衆の家如此歟、其比は政之はいまだ御相伴にも不被召加、御供衆にも不被參勤也、〇中略

一會所に御著座の以後、伊勢守御相伴衆へ可有御參由申とき、則一つれに御相伴衆御座敷へ伺候候也、扠御盃參也、

一寢殿へ御座候間は、御相番衆の方々、面向のかげの座敷に御入候て、伊勢守案内申とき、於御會所御前へ伺候也、〇中略

一伊勢守申詞に、三職をば御劒御拜領の御禮と、上におほ〱と御字を加て被申事故實なり云云、むかしは御紋著せられ候御相伴衆は、何も如此之由申傳候也、近代は左樣になき事有之哉、

例式の申次など、面向にての披露の申詞も、いにしへは如此云々、○中略

一猿楽させられ候事、所にて三獻參て、則供御參て、御菓子參て、御楊枝を不及取上、何にてもそときこしめし樣に御沙汰候、如其御相伴衆も、何にてもそと菓子をたべられて、軈て各我とふち高を持て御前を退出也、其後少御休息の趣にて御逗留ありて、猿楽はじめさせられ候、其段勢州承て、御相伴衆直て一列に御前へ被參候て、後伊勢守楽屋へ罷向て、能はじめ候へと被申候て、則猿楽仕候也、

古事類苑

官位部四十九

織田氏職員

織田信長ノ足利氏ニ代リテ政柄ヲ執ルヤ、勢威甚ダ熾ナリト雖モ、其征服スル所二十餘國ニ過ギズ、故ヲ以テ官職ノ如キモ、新ニ制定スル所ナク、從來ノ慣例ニ仍リテ、家老、右筆、奉行、目付、小性、馬廻等ヲ置キタリ、是即チ當時大名ノ職制ナリ、其造營、作事、普請等ノ諸奉行及ビ目付、走衆、同朋等ノ諸職、全ク足利幕府ノ舊名ヲ襲ヒ、且ツ所司代ヲ置テ京師ヲ守護シ、中國探題、關東管領等ヲ置テ、四方ヲ徇ヘ、稍〻覇府ノ態ヲ成シタリシガ、事未ダ成ラズ、中途ニシテ弑セラル、

家老ハ又年寄衆ト稱ス、政務ニ關カル重職ニシテ、當時林、柴田、丹羽氏等之ニ補ス、

右筆ハ文案記錄ヲ掌リ、凡テ文事ニ關スル職ニシテ武井夕庵、楠長庵等之ニ補セラレタリ、

奏者ハ上下ノ言ヲ傳達スルモノニテ、即チ室町ノ申次ナリ、近習ハ常ニ君側ニ祗候スル者ニシテ、小性頭ハ小性衆ノ長ナリ、小性衆ハ左右ニ侍スル者ヲ云フ、又咄衆アリ、

奉行ハ、君命ヲ奉ジテ、事務ヲ施行スル職ニシテ、其中ニハ常置ナルモアレド、多クハ臨時ノ職ナリ、造營奉行、作事奉行、普請奉行、大工奉行、石奉行等ハ、土木ノ事ヲ掌リ、薪奉行ハ薪炭ノ事ヲ掌ル、又軍奉行、船奉行、相撲奉行等アリ、而シテ軍奉行ハ、戰陣ニ在リテ將卒ノ著到等ヲ記注セリ、

目付ハ又横目トモ稱ス、監察ノ職ニシテ、戰陣ニ臨テハ、將士ノ勇怯ヲ檢視シ、國郡ニ在テハ

家老

領主ノ治蹟ヲ監察スル事ヲ掌ル、又使番アリ、其ニ軍職ナリ、

馬廻衆ハ、主將ノ馬側ニ侍スルモノナリ、弓衆鐵砲衆ハ、各隊伍ヲ定メテ戰陣ニ臨ミ、又主將出行ノ際ニハ、前後ヲ警衛ス、又小指物衆、走衆、小人頭等アリ、

留守ハ、主將出行ノ際、本城ニ留守スル職ニシテ、城代城番ハ、常ニ主將ニ代リテ諸城ヲ守ルモノナリ、

所司代ノ名ハ、足利幕府ノ時ノ侍所所司代ヨリ起レド、此時ノ所司代ハ大ニ異ナルモノニテ、京ノ内外ヲ管シ、司法警察等ノ庶政ニ關ル初メ信長、足利義昭ヲ擁シテ京師ニ入リ、佐久間信盛等五人ニ命ジテ、京畿及ビ近國ノ政務ヲ掌ラシメ、之ヲ奉行ト稱ス、蓋シ當職ノ始ナリ、元龜四年ニ至リ、村井貞勝ヲ以テ所司代ト爲ス、信長父子弑セラルヽニ及ビ、柴田勝家、羽柴秀吉、池田信輝、丹羽長秀ノ四人、信長ノ孫秀信ヲ擁シテ主ト爲シ、各家臣一人ヲ所司代トシテ、京師ノ政務ヲ執ラシム、

中國探題ハ、山陽山陰兩道ヲ管ス、羽柴秀吉ヲ以テ之ニ補シ、毛利氏ヲ伐タシム、南海道總管ハ、阿波讃岐伊豫土佐ノ四國ヲ鎭撫スル職ニシテ、信長ノ子信孝ニ命ズ、關東管領ハ、關東八國ヲ管シ、瀧川一益之ニ補ス、越前守護代ハ、初メ信長、朝倉義景ヲ滅シ、前波吉繼ヲ以テ之ニ補ス、幾モナク前波氏殺サレ、越前大ニ亂ル、信長之ヲ平定シ、更ニ柴田勝家ヲ北陸道ノ總職ニ補シ、前田利家等ノ三人ヲ目付トナシ、國政ヲ輔佐セシム、此外山城代官、勢州總奉行、江州奉行等ノ職アレド、皆臨時ニ設ケシトコロナリ、又堺代官、大津草津ノ代官アリ、

〔織田信長譜〕天文三年、信長誕生、童名吉法師、信秀築尾州那古野城、使吉法師居之、以林新五郎〈○通勝〉平手中務大輔〈○政秀〉青山與三右衞門尉、内藤勝助爲家老、

〔春秋左氏傳〈十六襄公〉〕十七年、齊晏桓子卒、晏嬰麤縗斬、苴絰帶、杖、菅屨、食鬻、居倚廬、寢苫枕草、其老曰、非

大夫之禮也、（時之所行、士及大夫、織服有不同、長子爲大夫、而行士禮、其家臣不解故譏之、）曰、唯卿爲大夫、（長子爲宣、已以斥時失道、故孫辭略答家老、）

〔國語晉語十四〕范宣子與龢大夫爭田、久而無成、（中略）叔向聞之、見宣子曰、（中略）盍訪之訾祏、（訾祏宣子家臣、）實直而博、（中略）且吾子之家老也、（家臣、室老、）

〔總見記二〕織田孫十郎逐電事（同歸參事）

其比名古野ノ城ニハ、孫三郎殿（〇織田信光）死去ノ後、城代トシテ、一ノ御家老林備前守ヲ被指置、

〔信長記一下〕近江國追罰評定幷佐久間忠言事

御入洛ノ門出トシテ、先手合ニ近江國可被追罰間、（中略）家長近習ノ面々ニハ、二十五日六日（〇永祿七年八月）ニ參ルベシト仰ケレバ、承テ佐久間右衛門尉信盛、木下藤吉郎秀吉、（中略）彼等ハ皆二十五日ニ參ケリ、

〇按ズルニ、家長ト、アルモマタ家老ノ事ナリ、

〔信長公記五〕元龜三年、是者遠州表之事、霜月下旬、武田信玄、遠州二俣之城、取卷之由注進在之、則信長公御家老之衆、佐久間右衛門、（〇信盛）平手甚左衛門、（〇汎秀）水野下野守（〇信元）大將として御人數、遠州濱松ニ至、參陣之處に、（下略）

〔安土日記八〕天正三年七月朔日、攝家、淸花、其外播州ノ別所、三好笑岩（〇康長）出仕也、武田總大殿家老之衆、不殘御供也、

〔信長公記十一〕天正六年寅十一月廿三日、總持寺へ重而御成、次日廿四日に、刀根山御所出御、御見舞（〇安土日記作御見舞）として、御年寄衆計被召列、

〔總見記二十〕林佐渡守追放幷自諸國注進事

同月（〇天正八年八月）十八日、大臣家、（〇織田信長）大坂ヨリ御歸洛、京都ニ於テ御逗留中、御家老林佐渡守西美濃ノ安東伊賀守（〇範俊）父子、御知行被召上、其身御追放仰付ラレ候、

右筆

〔總見記二十三〕先君〇織田信長御家督定事
各評定シテ、一決ノ趣ハ、〇中略信雄、信孝兩將ヲ彼後見ニ相定メ、柴田修理進勝家、池田紀伊守信輝、惟住五郎左衞門長秀、羽柴筑前守秀吉、此四老相談シテ、御器小大トナク、政道ヲ執行ヒ、外邊ノ順ハザルヲ平ゲ、天下ヲ一統スベシト云々、上下一同ニ此評議ニ決定シテ、北畠殿、三七殿、其餘ノ群公子、幷ニ四家老、諸大名、諸奉公人、各以此趣相違ナク相守リ、毛頭二心有ルベカラザルノ旨、各誓詞ヲ相認メ、是ヲ獻納セシメ畢ヌ、是ニ依テ家督相續政務等ノ義評議セシムル者ナリ、

〔老人雜話上〕信長の時は、天下の政道四人の手にあり、柴田、秀吉、瀧川〇一益丹羽〇長秀也、

〔天正記一〕抑秀吉御つく丸をめしぐし、重て上洛し、本能寺にて相公〇織田信長御はらめされし所に立入、らくるいをおさへ悲歎かぎりなし、ひでよし將軍數年御おんけいをかうふる事、かつてそのびるいなし、あまつさへ相こう第五なん御次まる、ゆふしとして下さるゝ所也、然ば秀吉もなさけふかき侍也、御そうれいなくんば有べからずおもひながら、れきく〵の年寄衆、ことに御れんしおほし、一たん其はゞかりをあふぎ、十月にいたるまで、ほうじをおこなはず〇下略

〔大友記〕義鎭公御舍弟八郎殿大内家ヲ繼給事
天文廿年辛亥九月朔日ニ、義隆公父子共ニ御腹メサル、既大内家退轉シケレバ、大内殿家老陶尾張守隆房、義鎭公御舍弟八郎御曹司〇義長ヲ申請奉リ、義隆公御跡目ニ仕リスエマイラセ度由、田原近江守ヲ賴セヨト申上ル、

〔總見記三〕鳴海桶狹間合戰事附義元討死事
熱田大明神ノ旗屋口ニツカセ給ヘバ、諸勢方々ヨリ馳參シテ、早千騎計ニナリヌ、卽チ當社大明神ヘ御參詣アリ、合戰勝利ノ御祈願ヲ掛ラレ、右筆ノ武井夕庵ヲ召サレテ、一通ノ願書ヲ被籠、

〔總見記十〕德川殿橫山龍鼻表參陣附軍評定事

軍評定始ムベシトテ、德川殿ヲ始メ、佐久間、柴田、其外ノ諸將等召シヨセラル、菅屋九右衛門尉〇眞頼ウケ給ハリ奉ナ、何レモ是ニ伺候仕リ候ト申ス、信長御對面アリ、右ノ趣被仰出、諸將以下尤ノ由ニテ、合戰ノ評諚アリ、御祐筆武井肥後守入道夕庵ヲ召テ、手クバリノ次第、備定メヲ一々ニ書記サセラル、

〔織田信長譜〕天正五年十一月、秀吉請全領中國、以求朱印、信長欲許之未果、會秀吉發播州、平但州、而報捷信長、卽以中國事全委秀吉、右筆楠長庵調其朱印、

〔當代記 二〕天正九年正月廿三日被相觸馬揃、二月廿八日有之、〇中略信長ハ右之馬上ノ跡ニ乘給、先馬之前ニ夕庵法印ヲ被通、其體小袖ヲツボヲリ、白髮ヲカツキ出立也、鞁ニ取付、誠之老女之馬ニ乘タルガ危キ樣ニ見ヘタリ、此夕庵ハ、信長右筆、七十餘之入道也、

〔利家夜話 下〕一信長公の御右筆、論語を講釋仕候を、利家面白思召、書寫させ被召候は、天下有道則見、無道則隱也、是につき、色々御物語候由、

奏者

〔朝倉敏景十七箇條〕一さのみ事闕候はずば、他國の浪人などに右筆させらる間敷事、

〔總見記 二十〕白子木工左衛門秀歌事附北條氏政父子進上使者事

同月〇天正八年三月九日、相州ノ守護北條左京大夫平氏政、使者ヲ差上ゲ、御鷹十三居ヲ獻ズ、〇中略公儀執奏ノ儀、瀧河左近將監、〇一益同下使、牧庵仰付ラレ候、扨又自今以後、關東衆申上ラル丶趣、諸事承リ御使仕ルベキ由、二位法印、瀧河左近、佐久間右衛門尉三人ニ相定ラレ、各被仰付畢ヌ、

〔信玄家法 上〕一他人養子之事、達奏者可申請遺跡、

近習

〔信長記 一下〕近江國追罰評定井佐久間忠言事

御入洛ノ門出トシテ、先手合ニ近江國可被追罰間、五三日休息有ッテ可馳參由被仰、〇中略中ニモ事ノ體、預メ評定アルベキ間、家長近習ノ面々ニハ、二十五日六日〇永祿七年八月ニ參ルベシト仰ケレ

バ、〇中略近習ニハ、毛利新左衛門尉、同河内守、菅屋九右衛門尉、〇頼貞福富平左衛門尉、〇貞次野々村三十郎、猪子兵介、彼等ハ皆二十五日ニ參ケリ、

〔當代記二〕天正八年五月、江州ノ住人布施藤九郎、度々有武功、才藝兼備間、信長近習ニ被成、

〔當代記二〕天正九年九月八日、小袖被下近習十人、

〔增補筒井家記〕筒井順慶一代之事

天正六年十一月三日、攝州大守荒木攝津守村重、故有テ信長公ニ叛キ、其身三千餘人ニテ、同國伊丹城ニ立籠、〇中略同十日押寄、城中ニ謀反人返忠ノ者在シカバ、卽時ニ諸勢堀塀ニ付シ所ニ、謀反共ノ首ヲ切テ擲出シ、弓鐵炮ヲ放掛ル、諸勢案ニ相違シ、手負死人數百人ニ及ブ、萬見屋仙千代、眞先掛テ塀ニ乘シ所ニ鐵炮ニ中リ、十八歲ニシテ討死ス、信忠公ノ扈從頭ニシテ、無雙ノ美童也、

小性頭

〔松隣夜話中〕斯テ夜ニ入テ、御小性頭井手彌兵衞、松永伊織ヲ招キ、美酒嘉肴ヲ催シ、太田ヲ始メ組頭ノ面々、並諸侍ヲ請ジ、終夜勞ヲ慰シムベキ旨仰付ラレ、〇下略

小性衆

〔信長公記八〕天正三年六月廿六日、佐和山に而少被成御休息、早舟にめされ、坂本に至て御渡海、少風有、御小性衆五六人被召列、六月廿七日、御上着、相國寺御寄宿、

〔東遷基業四〕長篠合戰の事

信長公は、佐久間右衛門、毛利河内兩人に、今度の加勢出して可然か、無用にせんかと尋らる、〇中略右衛門は、甲州勢は強ければ、味方の負は疑ひなし、然れども加勢に御出可然と申けり、信長公聞給ひて、毛利河内は武邊者なるか、何とて左樣に申哉、書付にては埒明ず、直口を聞べしとて、小性津田於杉を以て問われける、

〔信長公記十一〕天正六年寅六月十四日、祇園會、信長公御見物、御馬廻御小性衆、何れも弓鎗長刀持道具、無用之由御諚にて被持候はず、祭御見物之後、御伴衆被成御歸、御小性衆十人計にて、直に御

鷹野へ御出、雨少降、

小小性

〔備前老人物語〕一信長公、手の爪を取給ひしを、小性とりあつめけるが、とかくたづねもとむる體なれば、何をたづぬるぞと問給ひしに、御爪ひとつたらざるよしを申す、御袖をはらはせ給ひければ、爪ひとつ落たり、信長公御感ありて、物ごとにかくこそ念を入べき事なれとて、御褒美ありけり、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕武田法性院信玄公御代總人數之事

御小性衆　土屋總八郎〇以下二十三人名略

〔武家名目抄職名附錄十二上〕小々性といふは、いまだ元服せずして、近習に祗候するものなり、たまたまには、元服せしもあるべし、

〔信長記十五上〕惟任日向守謀叛事

小々性ニハ森亂丸、〇長定同力丸、〇長隆同坊丸、〇長氏兄弟三人、小川愛平、金森義入、魚住勝七、〇中略所々ニシテ討レケリ、

〔松隣夜話中〕仙可ノ親内記ト云者、〇中略謙信公へ切掛リ奉ルヲ、〇中略御小々性上村伊勢松走リ寄リ、高股切テ打臥仕留テケリ、

咄衆

〔氏郷記中〕氏郷朝臣松坂被遷居城事

爰ニ種村大藏入道慮齋ハ、本信長公ニ仕ヘテ、御咄ノ衆ニテ候シガ、今氏郷ノ家ニ仕ヘテモ、同ク咄ノ衆ニテゾ有ケル、

〔甲陽軍鑑品第四十上十三〕信玄公を始奉り、家老衆、大身小身善惡の儀分別之事、附物の時宜作法手本に成事、

或夜の事なるに、信玄公御放(はなし)衆小笠原慶安齋、〇中略其外各へ尋給ふ、工夫と思案は、別か同かと

仰られれば、もろ〳〵の中に、長坂長閑一事なりと申上る、

同朋

〔總見記十八〕信長公仰九鬼舟軍風情御覽事（附荒木村重逆心事）

然ル所ニ、今度御留主ニ住阿彌ト申ス同朋、無作法仕リ候故、御糺明ヲトゲラレ翌日御成敗、

〔利家夜話上〕一利家十九歲之御時、御腰の物の笄を、信長公の御次にて、御同朋十阿彌盜申候を、信長公へ被得御意、成敗可被成由御申上候處、彼御同朋に目を懸申衆、佐々內藏殿（○成政）を初、此度はひとへに下にて御覽候得と佗言被申候得共、御近所に在之者なれば、以來之爲と思召、被得御意候へば、日來不便に思召候御同朋故、此度は許し申樣にと信長公御意候故、利家聊無是非、御意次第と御請御申上候處に、彼同朋に目を掛申衆、影にて利家を笑申由を御聞、御腹立にて、二の御丸の櫓に信長公被成御座候下にて、彼同朋を御切被成候、

〔松平記〕今川殿（○義元）同朋、伊丹權阿彌と申もの、代々今川家のものなる上、法師なれども武邊よく心得、甲州衆を切たて候、

茶道

〔信長公記八〕天正三年十月廿八日、京堺之數寄（○數寄、安土日記作茶湯）仕候者十七人被召寄、妙光寺にて御茶被下候、（○中略）一茶道者宗易也、各生前思出、忝題目也、已上、

奉行

〔信長公記七〕天正二年三月十二日、信長御上洛、（○中略）南都東大寺蘭奢待御所望の旨、內裏へ御奏聞の處、三月廿六日、御勅使日野輝資殿　飛鳥井大納言殿（○雅敎）爲勅諚忝も被成御院宣、則南都大衆致頂拜御請申、翌日三月廿七日、信長奈良之多門に至て御出、御奉行塙九郞左衞門、（○直政）菅屋九右衞門、佐久間右衞門、柴田修理、丹羽五郞左衞門、蜂屋兵庫頭、荒木攝津守、夕庵、友閑、重御奉行津田坊、以上、

〔藥王院文書〕從靑蓮院殿江戶藥王院（江）此旨天台門徒中、內々可申傳事肝要候也、

就今度天台宗與眞言宗絹衣相論之儀、使僧中道院相上候、則其理禁裏へ申入候處、去年七月、彼眞

言宗申出綸旨者、奏聞相違之子細候、絹衣着用之段は、更無勅許候樣申條爲曲事次第之由、既被及御沙汰候、并破之可被成下綸旨之由候、然處信長爲御公事法度被相定奉行五人之間、重而可被經沙汰之旨候、先無別儀之樣、爲意從染筆候也、

七月○天正三年三日　　花押

〔信長公記八〕天正三年、去年月迫に國々道を可作の旨、坂井文助、高野藤藏、篠岡八右衛門、山口太郎兵衛四人、爲御奉行被仰付、御朱印を以て、御分國中御觸在之、無程正月中出來訖、江川には舟橋被仰付、嶮路を平らげ、石を退て大道とし、道の廣さ三間に中路邊の左右に松と柳を植置、所々の老若罷出、灑水ヲ撒、掃塵ヲ致掃除候き、

〔信長公記十三〕天正八年閏三月十六日より、菅屋九右衛門、堀久太郎、○秀政長谷川竹、○秀一兩三人爲御奉行、安土御構之南新道之北に江をほらせられ、田を埋させ、伴天連に御屋敷被下、

〔室町殿日記十四〕於安土宗論の事

かく安土さうどうして、諸人の取べきやうもなくなりけるほどに、人うちこみてさはぎければ、信長公の執權。菅谷九郎左衛門尉、堀久太郎、長谷川何某、并矢部善七郎、この四人をめして、事の次第をきこしめし、當時世間忩劇によつて、さなきだにみだれがはしき世中に、僧等のかく動亂することそ曲事なれ、互ひにことをやむべきよし仰付られける、

○按ズルニ、此ニ執權トアルハ、前後ニ引キ載セタル諸書ニ照スニ、卽チ奉行人ナリ、

〔安土日記十五〕天正十年四月十六日、懸川拂曉に立せられ、みつけ之國府之上、鎌田が原、みかの坂に御屋形立置、一獻進上也、爰より、まむし塚、高天神、小山手に取計御覽じ迄、池田の宿より、天龍川へ着せられ、爰に舟橋被懸置、御奉行人小栗二右衛門、淺井六介、大橋、以上兩三人被仰付候、

〔織田信長譜〕天正十年五月十五日、大權現○徳川家康到安土謁信長、信長像命奉行人修路次船橋旅館、

以待之、

神社造營奉行

〔信長公記十三〕天正八年四月九日、大坂退出、抑やはた八幡宮御造營爲御奉行、武田佐吉、林高兵衛、長坂助一、兩三人被仰付、去年十二月十六日新初、然而内陣下陣之間ニ、木戸井〇木樋在之、朽腐雨漏及廢壞之間、今度者爲末代候之間、からかねにて鑄物にさせられ、長さ六間、はゞを五間に鑄物に被仰付、當春三月下遷宮有而、無程社頭寶殿葺合、築地棲門令造畢、〇下略

〔總見記二十二〕大神宮御遷宮事附木曾義政參味方事

同月〇天正十年正月廿五日、勢州ニ於テ、大神宮ノ正遷宮、三百年以來、退轉ニテ執行無之、當世有道ノ上意ヲ蒙リ、再興仕リ度ノ由、上部大夫是ヲ歎訴ス、〇中略御自力ヲ以テ相調ラルベク候間、先ヅ三千貫被仰付候、其外入次第遣ハサルベキ旨仰渡サレ、平井久右衛門御奉行トシテ、上部大夫ニ相加ヘラレ候、

〔快元僧都記〕天文四年八月、當月十六日、向甲州氏綱〇北條進發、爲駿州扶佐云々、因玆社頭〇鶴岡八幡宮造營奉行事、陣參之間、御留主之人數、窪田入道、關新〇關新三郎神尾入道、被仰付了、

作事奉行

〔太閤記一〕秀吉卿經一命於敵國成要害之主事

永祿九年七月五日、大小の長屋十ケ、櫓十、塀二千間、柵木五萬本、來八月廿日以前に、仕立候へと作事奉行等に被仰出しに、日限より先て出來せしかば、老臣共をめされ、於勢州表取出の要害を拵んと思ふぞ、然ば國中の人數三分にして、一分は敵をさゝへ、二分は城の普請作事に掛候べし、〇下略

普請總奉行

〔武家名目抄職名二十下〕見聞雜錄云、天正四年正月中旬より、安土御普請始る、總奉行は惟任五郎左衛門尉長秀、

普請奉行

〔信長公記四〕元龜二年九月廿一日、抑禁中既御廢壞、就無正體、御修理之儀、御冥加之御爲を被思召、

普請下奉行

先年日乘上人、村井民部丞、○盛持爲御奉行被仰付、三ヶ年ニ出來、紫宸殿、清涼殿、内侍所、昭陽舍、此外御局々、無殘處令造畢、

〔信長公記　五〕元龜三年三月十二日、信長公直に御上洛、二條妙覺寺御寄宿、迚も細々御參洛の條、信長公御座所無之候ては如何之由にて、上京むしやの小路にあき地の坊跡在之を御居住に可被相構の旨、被達上聞候の處、尤可然之由被仰出、則從公儀御普請可被仰付之旨の御斟酌雖被及數ヶ度候、頻上意候之事候間、被應御諚、尾濃江三國之御伴衆者、御普請被成御赦免不仕候、畿内之面々等在洛にて候　三月廿四日、御鍬始有而、先方に築地をつかせられ、請取之手前々々に舞臺をかざり、兒若衆、色々美々敷出立にて、笛太鼓つゞみを以て拍子を合囃立、各も被乘興、○中略御普請奉行村井民部、島田所助、御大工棟梁池上五郎右衞門被仰付候き、

〔總見記　十五〕將相昇殿拜賀事

今度大將拜賀ノ儀執行ハルベキタメニ、今年十月初ヨリ、御普請奉行木村次郎右衞門ニ仰付ラレ、禁中陣ノ座御造營、頓テ出來セシメケレバ、天正三年乙亥十一月四日、信長卿先ヅ權大納言ニ任ゼラレ、昇殿ノ儀アリ、

〔大内家壁書〕築山掃除之事

從築山社頭至松原同小川掃除之事、可爲每月晦日也、普請衆之事、百石分限一人宛可有支配之、普請奉行人、并可止普請衆人數、兼日可被相定之、○中略

文明十九年三月晦日　　　　　　修理進奉行途

〔太閤記　〕秀吉初て普請奉行の事

或時清洲の城郭、塀百間計崩れしかば、大名小名等に、急ぎ掛直し可申旨被仰付しか共、事行かず、廿日計出來もやらで、御用心も惡ければ、秀吉千悔し、此節は高壘深塹すべき時也、○中略如此延々

に掛る事、招禍に似たり、危事かなとつぶやきけるを、何とかしたりけん、信長公きこしめし、猿めは何を云ぞ、何事ぞと問給へ共、さすが可申上義にあらざれば猶豫し給へる處に、是非に申候へとて、かひなを取てねぢかゞめ給ふ、有のまゝに申せば、宿老共を譏するに似たり、又申さねば君の仰を背に似たり、呼口は禍門なりと世の諺に傳へし事、今おもひあたりたり、唯有のまゝに不申ば惡かりなんと思ひ、御城の塀などを、今世間不穩折節、如此延々に掛申事にては有まじくや、深塀高壘、全身敵國を幷せ、平呑天下せんと思召大將のかゝる事や有と、御普請奉行を叱りけると申上ければ、尤能くぞ申たりける、武勇の志有者は、此こそ有度物なれ、汝奉行し、急揃可申と被仰付、かくて宿老衆へ參て申けるは、御城の塀、下奉行の油斷にて遲々に及條、某奉行仕り、早速に出來候やうにと御諚にておはしましけるぞ、其旨下奉行共に堅く被申付可然候はん由申ければ、唯御邊を賴入條、能に、計ひ候へと各被申けり、さらば割普請に沙汰し申さんとて、下奉行共と相謀り、百間を十組に令割符面々に充しかば、翌日出來し、腕木ごとに松明をも掛置、掃除以下きらよく見へし、折節信長公御鷹野より歸らせ給ふて、御覽じもあへず御感有て、御褒美不淺、其晩に被召出、御扶持方加增有けるこそ、終を初に立る徵兆也と、後にぞ思ひ知れたる、

普請衆

〔安土日記九〕天正四年正月中旬ヨリ、江州安土山御普請、惟住五郞左衞門ニ被仰付、　四月十四日、荒木攝津守、○村重永岡兵部大輔、○藤孝惟任日向守、○光秀原田備中、○長俊四人被仰付、上方之御人數被相加、大坂江推詰、○中略信長京都ニ御座ノ事ニ候、則安土御普請衆江被成御觸、候也、○此時以下十四字、據安土日記補

大工奉行

〔信長公記二〕永祿十二年正月、二條之古き御構堀をひろげさせられ、此時野村越中、被出褒美不斜、　二月廿七日、辰ノ一點御鍬初在之、四方に石垣、兩面に高く築上、御大工奉行村井民部丞、島田所之助被仰付、洛中洛外の鍛冶、番匠、杣を召寄、隣國隣鄕より材木を寄せ、夫々に奉行を付置、無油斷候之間、無程出來訖、

石奉行

〔快元僧都記〕天文二年十月十六日、自去廿一日、奈良大工奉行被相定、一番（関新三郎 横田木工助）二番（神尾治部入道、近藤太郎左衛門、）三番（鵜野入道 渡部太郎左衛門）

○按ズルニ、是ハ小田原北條氏ノ大工奉行ナリ、

〔信長公記九〕天正四年正月中旬より、江州安土山御普請、惟住五郎左衛門に被仰付、四月朔日より、當山大石を以て、御構之四方に石垣を被築、又其内には天主を可被仰付之旨にて、尾、濃、江、勢、三越、若州、畿内之諸侍、京都、奈良、堺之大工、諸職人等被召寄、在安土仕候て、瓦焼唐人之一觀被相添、唐様に被仰付、觀音寺山、長命寺山、長光寺山、伊場山所々之大石を引下し、千二千三千宛に而安土山へ被上候、石奉行、西尾小左衛門、小澤六郎三郎、吉田平内、大西、大石を撰取、小石ヲ被撰退、〇下略

薪奉行

〔太閤記一〕藤吉郎殿薪奉行の事

信長公、常に民の飢寒を憫み思召故に、不盡錙銖、漫に不費財用、唯欲賑民間給ふ故、炭薪の費、一させの分何ほどにかと其奉行に問給へば、千石有餘也と答へ奉る、いかゞは思召けん、奉行をかへよと村井に被仰付しに、誰彼とさしづ申候へ共用ゐ給はず、藤吉郎を召て、今日より炭薪の入用、汝沙汰し、能に計ひ、一兩年裁據致し可見旨被仰付しかば、翌日より自火を焼、多くの閑爐を穿鑿し、一ケ月の分を勘辨し、一年の分を勘へ見るに、右の三分一にも不及ほどなれば、近年千石許は、無左としたる費、益もなき事なりとて、秀吉千悔し、翌年正月廿日、炭薪の費、往年の勘辨如此の旨、御そば近く寄て申上しかば、御氣色も且宜く見へにけり、〇中略其後藤吉郎を召出し、汝を薪奉行などにせんことは、寔に駿馬を鹽車に苦しめ、大材を小事に用るに等しきと戯れさせ給ひつゝ、異奉行に被仰付けり、

軍奉行

〔賀越闘諍記〕信長公越前入國事

今は參河遠江兩國一統ニ信長公ニ屬シ、評議仕リケル間、然バ越州ヘ進發可有トテ、分國ノ首將

猛卒ヲゾ謀シ合サレケル、同十二日、軍奉行ニ仰テ着到ヲゾ着ラル、

〔松隣夜話 上〕其夜、〇永祿四年八月貝津ニシタヽメスル飯香夥敷上ルヲ謙信見給ヒテ、又諸將ヲ集メ、〇中略手配リヲ被成、〇中略荒尾一學、上村甚右衛門、三寶寺織部、直江山城等、宇佐美ヲ軍奉行トシテ跡備也、

船奉行

〔信長公記 十五〕天正十年四月十七日、濱松拂曉に出させられ、今切之渡り御座船飾、御船之内ニ而一獻進上申さるゝ、其外御伴衆、船數餘多寄させ、前後に船奉行被付置、無油斷越させらる、

〔大友興廢記 十〕豫州表へ出陣の事

其頃、〇元龜三年一條權中納言康政公ハ、大友宗麟公と御緣邊のつゞきあり、〇中略因玆此節西園寺公廣を御退治なさるべきむね仰出さるゝ、老中御尤なり、根を斷て末を枯すの御分別とかんじ奉る、則佐伯紀伊介惟教、鶴原掃部入道宗叱、幷御船奉行深栖大藏、若林越後、入道道閑、四人方へ面々に御書を以て仰付らる

相撲奉行

〔信長公記 三〕元龜元年三月三日、江州國中之相撲取を被召寄、常樂寺にて相撲をとらせ御覽候、人數之事、百濟寺の鹿、〇中略此外隨分之手取之相撲取共、我もと不知員馳集、其時之行事は、木瀬藏春庵、鯰江又一郎、青池與右衛門取勝り候、依之青地鯰江被召出、兩人之者ニ熨斗付之太刀脇指被下、今日より御家人に被召加、相撲之奉行を被仰付、兩人面目之至也、

〔信長公記 十一〕天正六年八月十五日、江州國中京都の相撲取を初として、千五百人安土へ被召寄、御山にて辰剋より酉剋迄とらせて御覽候、各我手之者共を召列られ、則御奉行御人數之事、津田七兵衛信澄、堀久太郎、〇秀政万見仙千代、村井作右衛門、木村源五、靑地與右衛門、後藤喜三郎、布施藤九郎、蒲生忠三郎、永田刑部少輔、阿閉孫五郎、〇中略

大方相撲終テ、既及薄暮、永田刑部少輔、阿閉孫五郎、强力之由連々被及聞食候て、兩人之仂御覽じ

目付

度被思食右御奉行衆之相撲御所望也、初には、堀久太郎、蒲生忠三郎、○氏郷万見仙千代、布施藤九郎、後藤喜三郎とられ候て、後に刑部少輔阿閉暫手相にてくまれ候、勿論阿閉器量骨柄勝れ候て力の強き事無隱候へども、仕合候歟、總別強く候歟、刑部少輔勝相撲に候、

〔總見記十五〕長篠敵味方勢賦同鳶巣城攻落事

信長公御目代ニ、金森五郎八○長近ヲ被仰付、人數四千人、鐵炮五百挺、御横目トシテ、青山新七郎、佐藤六左衛門、加藤市左衛門ヲ被指添、

〔總見記十五〕越前國御仕置御凱陣事

府中ノ城ニ、領地十萬石相添ヘ、前田又左衛門、○利家佐々内藏助、○成政不破彦三○道貞ニ下シ置カル、是ヲ府中三人衆ト名付、柴田ニサシソヘ御目付ナリ、

〔信長公記八〕天正三年九月十五日

掟條々　越前國○中略

越前國之儀、多分柴田令覺悟候、兩三人をば、柴田爲目付兩郡中付置之條、善惡をば柴田かたより可告越候、互に磨合候様ニ分別専一候、於用捨者可爲曲事者也、

天正三年九月日

不破河内守殿

佐々内藏助殿

前田又左衛門殿

如此被仰付、九月廿三日北庄より府中迄御出、

〔信長公記十一〕天正六年九月十五日、大坂表御取出、御番衆之御目付として御小性衆、御馬廻、御弓衆、廿日番に城々へ被相加、

使番

〔信長公記十四〕天正九年四月十六日、若州逸見駿河病死仕、○中略逸見本知分五千石、惟住五郎左衛門、幼少より召使候溝口金右衛門ト申者、不㆑慮被㆓召出㆒、若州高濱に在㆑之て、逸見駿河跡一色進退に五千石被㆑下、其上國之爲㆓目付㆒被㆓仰付㆒之間、若州に在國仕、善惡を聞立見及可㆓申上㆒之旨、忝も御朱印被㆓成下㆒、頂戴、後代迄も面目不㆑可㆑過㆑之、○本書有㆓誤脱㆒、據㆓安土日記㆒補正、

〔利家夜話下〕一大納言樣○前田利家御物語に、横目と云事入らぬ事、信長公の御代にも、初は被㆓仰付㆒候へ共、頓て御無用に被㆑遊候、其砌は横目は、結句依怙贔屓有物也、不㆑入事を聞、秘藏の者なども惡敷思ひ、又は失事も有也、影聞に聞こそよけれとて、早々御止め被㆑成候由、

〔九州紹運記〕豐州屋形宗麟公於㆓筑後㆒御出張の事

庚午○永祿十三年正月十一日、御屋形御出馬候へば、○中略藝州陣を御目付を以見られ候へば、○下略

〔信長記三〕姉川合戰之事

合戰ノ次第、御使番ノ者ニ急度仰觸ラルヽニ、諸卒ハ心得ズガホ也ケレドモ、御下知ナレバ、悉ク西ヲ指テ勢ヲ押廻シケルニ、信長卿サゲスミ給フニ少モ違ハズ、早朝倉淺井ガ勢、野村三田村へ移入タリ、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕武田法性院信玄公御代總人數之事

諸國へ御使者衆四人

一日向源藤斎　一秋山十郎兵衛　一西山十右衛門　一雨宮そんてん　在府衆、在鄉衆、總近寄二百五人、與衆三十五人の内にて御陣之時、

御使いたすは、大方むかでの差物の衆也、

一諏訪越中　一工藤市兵衛　一漆戸左京亮　一山田彌助　一小山田八左衛門　一初鹿彌五郎　一吉田左近　一小山田又二郎　一小宮山内膳　一三枝善八郎　一小山田十郎兵衛

一原勘四郎　一金丸助六郎　一小山田彦三郎　一諸角助七郎　一曾根與一之助

〔松隣夜話下〕謙信公ハ日頃ニ相替リ、人數ヲモ掛玉ハズ、亂レタル諸軍ヘ、各使番一手ニ三人宛遣ハサレ、○下略

〔總見記五〕重而濃州稻葉山城下軍事附日根野兄弟武勇事
永祿七年、龍興濃州沒落以後ハ、日根野兄弟モ濃州ヲ立ノキ、關東ニ下向シテ、武者修行ニ出、團扇ヲ預リ、年月ヲ送リケルガ、信長公ヨリ種々懇望シテ御招有ケル故、終ニハ御家人ト成テ、御馬廻ニ召仕ハレケリ、

〔武家名目抄職名附錄九〕按に、馬廻組といへるは、主人の馬の傍に扈從する騎馬の平侍をさせるなり、但古くは、只馬の傍に供する人をなべていへる故に、その人物定まらず、中頃よりこなたは、大かた其品をわけられし故に、馬廻組といふ職名にもなれるなり、

〔當代記一〕永祿十二年八月廿日、伊勢國へ信長出馬アリ、○中略此比信長馬廻ノ中、戰功之衆廿人、母衣衆被定、佐々內藏介、○成政毛利新左衛門、河尻肥前守、○與兵衛鎭吉生駒勝介、永野帶刀左衛門、津田左馬介、蜂屋兵庫頭、○賴隆中川八郎右衛門、中島主水、松岡九郎次郎、是黑幌之衆也、織田越前守、前田又左衛門、○利家飯尾隱岐守、○定宗福富平左衛門、○貞次原田備中守、○塙九郎左衛門事○直正黑田次右衛門、毛利河內守、野々村三十郎、猪子內匠助、此九人赤幌也、廿人不足、

〔信長公記十四〕天正九年正月朔日、他國衆之御出仕被成御免、安土ニ在之御馬廻衆計、西之御門より東之御門へ被成御通、可有御覽之旨上意ニ而、各其覺悟仕候處、夜中より巳刻迄雨降、御出仕無之、　八日、御馬廻御爆竹致用意、頭巾裝束致結構、思々の出立ニ而、十五日ニ可罷出之旨御觸有、二月廿八日、五畿內隣國之大名小名御家人を被召寄、駿馬を集於天下被成御馬揃、聖王へ被備御叡覽訖、○中略

御馬場入之次第〇中略

御馬廻御小性衆、何れも十五騎宛、與々を被仰付、 七月十五日、安土御殿主幷總見寺ニ挑灯、餘多つらせられ、御馬廻之人々、新道江之中に舟をうかべ、手々に續松とぼし申され、御山下かゞやき水に移り、言語道斷、面白有樣、見物群集に候也、

〔信長公記十五〕天正十年五月十九日、安土御山於總見寺、幸若八郎九郎大夫に舞をまはせ、次之日は、四座之內は不珍之間、丹波猿樂梅若大夫に能をさせ、家康公被召列候衆、今度道中辛勞を忘申樣に、見物させ申さるべき旨上意に而、〇中略御芝居者、御小性衆、御馬廻、御年寄衆、家康公之御家臣衆計也、

弓衆

〔松隣夜話上〕此時永祿四年八月川中島戰ハ、謙信公馬廻ノ侍ハ、宿所々々ニテ別レ、僅五六人ヲ從ヘ、宇佐美駿河ガ跡備ノ內ニ坐マス、

〔信長公記三〕元龜元年六月廿一日、淺井居城大谷へ取寄、廿二日、御馬を被納、殿に諸手の鐵炮五百挺幷御弓の衆三十計被相加、簗田左衞門太郎、〇政辰中條將監、佐々內藏介、兩三人、爲御奉行被相添候、

〔信長公記八〕天正三年十一月四日、信長有御昇殿而大納言の御位に任せられ、 同七日、御拜賀之御禮、御名代として三條大納言殿を以て被仰上、其時の爲御警固、御弓の衆百人供奉候之處、〇下略

〔浮田家分限帳〕御弓衆山崎孫之進、三拾人千貳百石、

鐵炮

〔信長公記三〕元龜元年六月廿一日、淺井居城大谷へ取寄、 廿二日、御馬を被納、殿に諸手の鐵炮五百挺幷御弓の衆三十計被相加、

〔信長公記十一〕天正六年十二月八日、申剋より諸卒伊丹へ取寄、堀久太郎、万見仙千代、菅屋九右衞門兩三人、爲御奉行鐵炮放を召列、町口へ押詰、鐵炮をうたせ、〇下略

〔藤葉榮衰記 中〕盛隆公〇會津氏高倉城攻落給事
角テ盛隆公安積高倉へ被向、〇中略熨斗付ノ裝束ノ御鐵炮衆千人、〇中略同ジ出立ニテ、誠ニ以テ花車ナリ、

小指物衆

〔細川幽齋覺書〕一信長樣御代には、小指物衆とて、歩の衆に具足を御きせ被成、御昇の跡に遣され、扨人數を立合備候時は、小指物衆、昇の間々に居候て、合戰に及候得ば、長柄を追取々々突掛り候、是は一段可然事なり、

走衆

〔總見記 十〕安養寺三郎左衛門爲生捕事幷自江北御歸洛事
淺井ガ家人安養寺三郎左衛門ハ、組討ヲシタリケルニ、御旗本ノ走衆五六人落重テ、手トリ足トリ、終ニ安養寺ヲ搦捕テ、信長公ノ御前へ引テ參ル、

小人頭

〔豐臣記武家名目抄職名部附錄二十三所引〕秀吉公十六歲ノ時、天文廿年辛亥ノ春、如何思ハレケン、中村ヲ被出ケル、〇中略尾州淸須へ往、信長公ノ小人頭市若ト云者、中村ノ者ニテ有ケレバ、是へ尋テ往玉フ、市若見テ留メ置、古鄕へモ遣シ、父母ニモ逢セ、夫ヨリ信長公へ御草履取、市若肝煎ヲ以テ出ラレケルニ、才覺第一ノ人ナレバ、少ノ內ニ立身シテ、小人頭ニ成ル、岩間久、市若、猿トテ、三人ノ頭也、

〔甲陽軍鑑品第十四六〕强過たる大將之事
一河中島合戰の時、廿人頭、小人頭各能付奉る中に、〇下略

小人

〔信長記 一下〕義昭公御歸洛事
菅屋九右衛門尉ヲ召テ、諸軍勢於洛中洛外、非義ノ族ナキ樣ニ能々申フレ候へ、若邪道ナル族、聞出見出シ候ハヾ、後々ニモ其罪ノガルベカラザル通申渡シ候へト有シカバ、奉テ其旨嚴重ニゾ申觸ケル、〇中略斯ル處ニ、御小人聊ノ利ヲ商人ト諍論シケルヲ、菅屋御使ノ事有テ、出京ノ次デ是ヲ見テ、何者ゾ子細問テ參レト有シニ、岩越藤藏ト云シ者、ツト參テ雙方具シテ參ケル、何ノ子細

ゾト問ハレケルニ、如此ノ事候ト商人申、御小人共答ニ不及ケレバ其儘搦捕テ、爾々ノ事候シト申上ケレバ、イシクモ仕タル物哉トテ、彼者ヲ庭前ノ木ニクヽリツケ被置ケルニ、○下略

〔信長公記十四〕天正九年二月廿八日、五畿内隣國之大名、小名御家人を被召寄、駿馬を集於天下、被成御馬揃、聖王へ被備御叡覽訖、○中略御馬場入之次第、○中略御小人五人御行縢持、○中略御小人六人御行縢持、

留守衆

〔織田信長譜〕天正五年十二月三日、信長放鷹於尾州三州、以菅屋九右衛門為安土留守、

〔信長公記十二〕天正七年四月十二日、中將信忠卿、北畠信雄卿、織田上野守、織田三七信孝、御馬を被出、○中略御留守永田刑部少輔、牧村長兵衛、生駒市左衛門の兩三人、御番手に被仰付候、

〔信長公記十五〕天正十年五月廿九日、信長公御上洛、安土本城御留守衆津田源十郎、加藤兵庫頭、野野村又右衛門、遠山新九郎、世木彌左衛門、市橋源八、櫛田忠兵衛、　二丸御番衆蒲生右兵衛大輔、木村次郎左衛門、○以下十人略是等を被仰付、

〔甲陽軍鑑二十品第五十五〕一天正八年辰の夏より、伊豆駿河の境ぬまづに城取御普請有、越後景勝と御無事の故、此おさへいらずして留守居ばかり指置、高坂彈正子息源五郎を組衆共に沼津に指置かるゝ、

城代

〔安土日記五〕元龜三年八月八日、虎御前山ニハ、羽柴藤吉郎為城代、○城代、信長公記作定番、被入置、

〔信長公記十四〕天正九年三月廿六日、菅屋九右衛門、能登國七尾之城為城代被差遣候也、

〔新田老談記上〕謙信公モ前橋へ御出馬被成、御逗留ノ内、小桑淵ノ城ヲ御責有テ、落城以後、長尾殿へ城被進、城代ニ新井圖書ヲ足利ヨリ被置ケリ、

城番

〔勢州軍記下〕諸國退治

一雲林院家事○中略故出羽守者、信長公之小姓矢部善七郎、依我舅頼之居住於安土、信長給小地為

城番也、

〔信長公記 三〕元龜元年六月廿八日、木下藤吉郎爲定番、横山ニ被入置、

〔武家名目抄 職名三十二〕按、定番加番といへる、いづれも城番の事にはあれど、定番といふは、常に不退に城を守るものなり、なべての城番には、交替して警衛を勤むるもあるが故に、これをば定番といへるなり、

〔織田信長譜〕元龜元年六月廿九日、合戰於姉川、○中略横山城以下皆陷、贈首級三千餘於京都、卽進兵圍佐和山城、磯野丹波守居之、既而使丹羽長秀、市橋九郎左衞門、○長利水野下野守、○信元河尻與兵衞、○秀隆爲定番、而歸、

〔信長公記 六〕元龜四年、去年冬、松永右衞門佐○久通御赦免に付て、多門の城相渡候、則山岡對馬守○景友爲定番、多門にをかせられ、正月八日、松永彈正○久秀濃州岐阜へ罷下、

〔大友興廢記 二〕朽網親滿謀叛の事 附 惟常本領安堵事

天文十三年八月下旬に、義鑑公の家臣朽網下野守親滿謀叛を起し、○中略折節御旗本は無勢なりしかども、君命を恐れず起す逆心なれば、天是を惆し給ふにや、親滿うちまけて高崎の城へ引のぼる、されども、御城番吉弘右近、古荘舍人助、勇力をもつて本丸は乘取られず、○下略

〔總見記 八〕但州播州軍事 附 山門領勘落訴訟事

抑其比京都ニハ、五人ノ奉行ヲ被指置、洛中洛外、畿内近國ノ政道ヲ執行ハセヲル、其面々、織田御長丸、○信次佐久間右衞門尉、○信盛森三左衞門尉、○可成丹羽五郎左衞門、○長秀村井民部丞○貞勝等ナリ、又日蓮宗ノ僧落ニ朝山日乘上人ト云者アリ、才名アツテ内外ノ文ニ達シケレバ、禁中方ノ故實、諸宗ノ取沙汰鍛煉ナリトテ、堂上方、幷ニ寺社諸公事ノ支配ニ加ヘラル、然ル處ニ五人ノ奉行ノ沙汰トシテ、神社佛閣ノ領地、悉勘落セシム、是ハ近年社人僧徒等、無用ノ領地ヲ大分ニ知行セシ

メ、法式學問ヲ相勤メズ、奢侈遊樂ヲ事トシ、剩ヘ武士組シテ、ヤヽモスレバ兵亂ニ交ル事、國家ノ蠧害ナルヲ以テ、其邪威ヲオサヘンガタメナリ、就中當時濃州ニ有之處ノ比叡山延暦寺ノ領地ヲバ、皆悉押領セシム、

○按ズルニ、本文所司代ノ明文ナシト雖モ、奉行五人ヲ、京都ニ置クトアルヲ以テ、此ニ載ス、

〔道家祖看記〕七月〇元龜四年廿一日、京都ニ至テ被納御馬、天下所司代村井長門守〇貞勝被仰付、致在洛諸色被申付候也、

掟條々、上下京五畿內之事、

一上下京ヘ非分課役不可申懸、但差當子細有テ於申付者、我々ニ相尋、隨其可申出事、

一今度上京放火付而、町人可迷惑候間、地子錢課役等可指置候、但下京同前之事、

一公事篇之儀、順路憲法タルベシ、努々贔屓偏頗ヲ不存、但上下京、二日ハ立入所ニテ可裁許、其後ハ長門守所ニテ可申付事、

〔信長記〕六室町殿重御謀反之事

今度義昭公惡逆ノ御働故、上京炎上ニ及プ事、尤不便ナリトテ、赦免セラルヽ條々、

定

一京中地子錢、永代令赦免畢、若從公家寺社方、地子錢之內、收納有來ル分者、相計替地ヲ以可致沙汰事、

一諸役免除之事

一鰥寡孤獨ノ者、見計扶持方可令下行之事、

一天下一號ヲ取者、何レノ道ニテモ大切ナル事也、但京中諸名人トシテ、內評議有テ可相定事、

一儒道之學ニ心ヲ碎キ、國家ヲ正サント深ク志ヲ勵ス者、或忠孝烈之者、大切ナル事ニ候條、下行等他ニ異テ可二相計一、又其器ノ廣狹、能尋問可レ告二知之一事、

右條々相計可二申付一者也

元龜四年七月吉日　　信長

村井長門守

トゾアソバシケル、

〔京都上京文書〕一條々　上京

一如二前々一可レ令二還住一之事

一陣執免除之事

一非分課役不レ可二申懸一之事

一地子錢免除之事（但追而可二申出一之儀、其以前何方へも不レ可二能納一所事、）

一各宅造畢之間、人足免許之事、

右所二差定一不レ可レ有二相違一者也、仍下知如レ件、

元龜四年七月　日　　彈正忠（朱印○田信長）様

〔信長公記十二〕天正七年四月廿三日、去程に京都に前代未聞之事有、下京四條こゆゐ之町、糸屋後家に及二七十一老女あり、一人の娘を持候、母と一所に候つる、四月廿四日の夜、娘母によき酒を求、思程ゑひてのませ、酔臥候時、土藏の內にをき、夜更人ゑづまりて母をさし殺し、手づからかわこへ入、よくからげて、法花衆にて候へ共、誓願寺の沙彌を呼よせ、人の知らぬ樣にして寺へつかはし候、下女一人候つる、かれにはうつくしき小袖をとらせて、人に深く隱密いたし候へと申付候、彼女後をおそろしく思ひ、村井長門所へ走入、此有樣申候、則彼娘ヲ搦捕、糺明をとげ、

四月廿八日、上京一條の辻より車に乘て、洛中をひかせ、六條河原にて成敗候也、九月廿八日、去程下京姉小路町門役仕候者之女房、あまた女をかどはかし、和泉之堺にて日比賣申候、今度聞付、村井春長軒召捕糺明候へば、女之身として、今迄八十人程賣たる由申候、則成敗也、

〔太閤記七〕所司代之事

天正十年六月下旬、於尾州淸洲、信長公家老中として、信忠卿御若君、〇信秀 十五歲にならせられ候まで、洛中之義裁判可致との事により、柴田修理亮、〇勝家 羽柴筑前守、〇秀吉 池田紀伊守、〇信輝 丹羽五郎左衞門尉〇長秀 より、所司代一人づゝ出し置候ひしか共、秀吉卿之威、日々月々に彌增行しかば、天正十二の正月より、池田丹羽が下代をば引侍り、今は秀吉卿之所司代のみ有て、威勢おびたゞしくぞ成にける、

山城代官

〔總見記十九〕伊丹城中困窮事附石淸水八幡宮御修覆事

石淸水八幡宮、內陣外陣ノ間、昔ヨリ木樋ヲカケ置候處ニ、近年破壞セシメ正體ナシ、此由大臣家〇織田信長 聞召及バレ、御造營成サルベキ由上意有之、卽山城ノ御代官武田左吉、林高兵衞、長坂助市、召寄セラレ、〇中略 片時モ急ギ出來候樣ニ可申付ノ旨、堅被仰付、

泉州堺代官

〔足利季世記七義秋公加冠〕御祝ノ御能之事

十月〇永祿十一年 廿四日、信長歸國ノ御暇申サレケレバ、今度大忠ノ至リ、逆臣ヲ不日ニ追罰シ、將軍家再興ノ事、信長一身ノ所爲也トテ、御內書御感狀ヲ給ハリケル、〇中略 今度打取國々、近江、山城、攝津、和泉、河內、已上五箇國、望次第可知行由、兼有御使辭シ申サル、和泉堺、江州大津草津計、代官ヲ付ラル、

〔信長記十五下〕信長公早世之評

一高野山へ事ノ子細有テ、泉州堺ノ代官松井友閑法印ヨリ、催促ノ武士三十餘人遣シ、〇下略

〔總見記 七〕信長擁義兵被攻上事附江州所々合戰事

江州奉行

扨其城々降參ノ輩ニハ、本領安堵ノ印ヲ賜リ、落去ノ城ニハ、守護ノ者ヲ被仰付、在々所々ノ亂妨ヲ禁制シ、萬民安堵、神社佛閣モソレゾレニ御仕置アリ、柴田修理進勝家、森三左衛門可成、坂井右近政尙、蜂屋兵庫頭賴隆、此等四人ヲ奉行職ニ被仰付、江州諸事ノ政道ヲ執行ハセ、平安ニ沙汰セラレケリ、

〔當代記 一〕永祿十一年九月廿八日、信長東福寺ニ移給、○中略芥川城細川六郎、○信長三好日向守、○長逸十月朔日、城ヲ捨退散也、小清水瀧山兩城同退散、義昭公小清水ニ移給、芥川へ信長被相移也、池田ノ城主筑後守○池田勝政屬味方、近江、山城、攝津國、和泉河內、五箇國、悉尾濃ノ衆へ被下、大津、草津是兩所ニ被置代官、諸軍莫不美談、

大津代官 草津代官

〔總見記 五〕信長勢州御仕置岐阜御歸城事

勢州總奉行

扨又瀧河左近將監一益ヲ勢州ノ總奉行職ニ定メ、本ノ如ク蟹江ノ城ニ居テ、西尾張長島河內等ノ所々ヲ領知ス、北方ノ諸侍、千草、宇野部、楠、赤堀、稻生、南部、加用、梅津、富田、上木、白瀬、濱田、高松、本田、持福等ヲ瀧河ガ與力ニ屬ラレ、向後勢州ノ押ヘトス、

〔總見記 二十三〕木曾穴山以下出仕事

關東管領

同月○天正十年三月廿三日、大臣家、○織田信長瀧川左近將監一益ヲ被召、關東管領職仰付ラレ、上野一國幷ニ信州ノ內二郡是ヲ下サル、

〔藤田記〕勝賴○武田亡テ、關東管領ニ、瀧川左近一益ヲ計、

〔東亂記 四〕武田一門被誅事

去程ニ信長公子息信忠卿ト相談シテ、今度討取處ノ國郡ヲ皆悉ク大名ドモニ充行、○中略上野國ヲバ瀧川左近將監一益ニ給ル、是ハ關東ノ管領トシテ、以來連々、小田原ヲモ可亡トノ內意ト見

北陸道總職

越前守護代

エケル、

瀧河合戰事

其程ニ瀧川左近將監一益ハ、上州三ノ輪ノ城ニ居住シテ、追捕使ニ成テ、東國ヲ管領ス、

〔織田信長譜〕天正十年三月廿三日、信長召瀧河左近一益、賜上州一國幷信州之佐久小縣二郡、且告之曰、以汝爲關東管領職、自是以東八州到奧州、征伐訟獄、皆可取汝處分也、

〔松原自休手錄（武家名目抄職名部四ノ四所引）〕瀧川左近將監、賜關東管領職、在上州厩橋、折節近邊ノ諸將來話ス、殘置長嶋杉山小介來テ告信長薨、則對客談之、各變舊約更無恨、可返人質云々、諸將ノ曰ク、信長被有對敵罪、賜或本領或新恩、今以不可有疎意云々、然處ニ從小田原氏直（○北條）率三万餘騎出張ス、瀧川以三千戰之、二ノ軍打負引入厩橋、六月廿八日、敗武藏野、諸將ノ曰々、爰ニ有居城、可勵忠信、有上國可送屆云々、瀧川爲弔軍請可上、依之送眞田、眞田出向送木曾、從之歸長嶋、

○按ズルニ、一益管領トナリシ事、御年譜附尾、及ビ王代一覽等ニモミエテ、互ニ詳略アリ、武德大成記ニハ、天正十年三月二十三日、州郡ヲ功臣ニ分チ賜フ、上野國及信州二郡（佐久小縣）ヲ以、瀧川一益ニ賜フ、命ジテ曰、汝專ラ關東八州、及ビ奧州ノ政令ヲ制セヨ、若智慮ノ不及所アラバ、德川殿ト商量スベシトテ、愛スル所ノ駿馬、及短刀ヲ賜フトアレドモ、此時ノ管領ハ、古ノ管領ノ如キ治術ヲ施スニ及バズ、只其稱號ヲ襲ギシニ過ギズ、信長薨ジテ、一益本國ニ歸ルノ後、關東管領ノ職、終ニ置クコトナシトイフ、

〔總見記十五〕越前國御仕置御凱陣事

先ヅ越前國ハ、北陸道ノ總管、大事ノ地ナレバ、柴田修理進勝家ニ被下、（○中略）當國ノ儀ハ申ニ及バズ、北陸道ノ總職ヲ勝家ニ被仰付、柴田ガ威勢諸人ニ越タリ、

〔信長公記六〕元龜四年八月廿四日、越前一國平均候間、國中の掟を被仰付、前波播磨守（○吉繼）守護代

としてをかせられ、〇下略

越前三奉行

〔總見記十三〕朝倉義景最期事

國〇越前ノ眞中、北庄ト云所ハ、代々朝倉方ヨリ三奉行ヲスヘ置テ、國中ノ政事ヲ司ラセケル程ニ、其舊例ヲタガヘズ、信長公ヨリ、北庄ニ津田九郎次郎、木下助左衞門、明智十兵衞〇光秀ヲ三奉行ニ被定置、一國ノ政事ヲ決斷セラル、

中國探題

〔總見記十七〕秀吉責落播州上月城事

同月、〇天正五年十一月羽柴筑前守秀吉ニ中國ノ探題職仰付ラル、此條前々ヨリ是ヲ懇望シ奉ルトイヘドモ、暫時以テ御許容ナキノ處ニ、今度秀吉、播但表、比類ナキ手柄ノ間是ヲ仰付ラル、秀吉希代ノ面目タル者歟、

南海總管

〔總見記二十三〕長曾我部注進事附德川殿上國事

五月〇天正十年十一日、神戸三七殿信孝、江州安土ヨリ出勢、攝州住吉ニ到テ下着畢ヌ、是兼テ南海ノ總管トシテ、阿波ノ國御拜領、四國退治ノタメ、御人數ヲ催サレ、今日當所ニ於テ勢揃船揃有之、

大名

〔太閤記一〕秀吉初て普請奉行の事

或時、清洲ノ城郭塀百間計崩れしかば、大名小名等に急ぎ掛直し可申旨被仰付しか共事行かず、

〔總見記二十三〕先君〇織田信長御家督定事

上下一同ニ此評議ニ決定シテ、北畠殿〇信雄三七殿〇信孝其餘ノ群公子、并ニ四家老、諸大名、諸奉公人、各以此趣相違ナク相守リ、毛頭二心有ルベカラザルノ旨、各誓詞ヲ相認メ、是ヲ獻納セシメ畢ヌ、〇全文見家老條

古事類苑

官位部五十

豐臣氏職員

豐臣氏ノ職ニ三等アリ、大年寄、小年寄、奉行ト稱シテ、軍國ノ事皆之ニ決ス、又近侍ニ詰衆、咄衆等アリ、雜務ヲ執ルモノニ諸奉行アリ、其他、軍職、留守職、所司代等ノ如キ、概ネ織田氏ノ制ニ異ナラズ、

大年寄ハ、又大老トモ云フ、庶政ヲ裁決スル職ニシテ、文祿四年ニ置ク所ナリ、徳川家康等五人之ニ任ズ、小年寄ハ政事ニ參預スル職ナリ、一ニ中老トモ稱スルハ、大老、奉行ノ中間ニ居リテ和解スルガ故ナリ、生駒親正等三人之ニ任ズ、奉行ハ、庶政ヲ掌ル職ニシテ、淺野長政等五人之ニ任ズ、故ニ五奉行ト稱ス、又大年寄五人ト併セ稱シテ、十人衆トモ云ヘリ、共ニ公文ニ連署ス、又右筆アリ、

奏者ハ、取次トモ云フ、其職織田氏ニ同ジ、詰衆、殿中ニ祗候スルモノナリ、又咄衆、伽衆、傍衆等アリ、

勘定方奉行ハ、金穀ノ出納ヲ管スル職ナリ、普請奉行ハ、文祿三年、伏見城築造ノ時、選拔シテ任ズル所ナリ、又普請衆、作事衆、大工頭等アリ、共ニ造營ニ預ル職ナリ、座敷奉行ハ、座敷ノ裝飾、賓客ノ座位等ヲ掌リ、臺所奉行ハ、炊爨調理ノ事ヲ管ス、又臺所衆、御膳番等アリ、宿奉行ハ、驛路ノ事ヲ司リ、軍奉行、兵粮奉行、扶持方奉行、城米奉行、小荷駄奉行ハ、共ニ軍事ニ關ル職ナリ、船手大將ハ、水軍ノ將ニシテ、別ニ船奉行アリ、目付、使番ノ職ハ、織田氏ニ同ジ、

物頭、組頭ハ、諸隊ノ首領ナリ、小性頭ハ六人アリ、小性衆六組ヲ預リ、馬廻頭ハ七人アリ、七手組ト稱シテ、馬廻衆七隊ヲ管ス、又歩行衆、弓頭、鐵砲頭等アリ、留守ハ主將出行ノ際、其居城ニ留守スルモノナリ、番衆ハ營中ヲ警衛シ、門番衆ハ諸門ヲ守護ス、又城代、城番アリ、所司代ハ織田氏ノ如ク、京師ヲ管スル職ナリ、前田玄以ヲ以テ之ニ補ス、大坂町奉行ハ、大坂市街ヲ管スル職ナリ、又堺奉行アリ、代官トモ云フ、

大年寄

〔太閤記二十二〕大年寄

家康公　加賀大納言利家　毛利中納言輝元　備前中納言秀家　越後宰相景勝

此五人を秀頼卿御うしろみとし、殿下〇秀吉世を去給ひなば、萬事頼入おぼし給ふと有て、秀次公御切腹ののち、かく定めおかれし也、

〔卜齋記下〕此時は日本國中へ觸流は、五人の家老、江戸内大臣〇徳川家康加賀大納言〇前田利家安藝中納言〇毛利輝元會津中納言〇上杉景勝備前中納言〇浮田秀家連判の御狀に、淺野彈正〇長政増田右衞門尉〇長盛石田治部少輔〇三成德善院〇前田玄以長束大藏大輔〇正家五人の奉行と、連判狀家老五人奉行五人の狀、諸國へ被遣候、家老連判の内へ、隆景判を被致候事もあり、此節朝鮮の人數引取候へと、德善法印を肥前の國へ使に被遣、五人の家老、五人の奉行の狀なり、

〔豐臣秀吉譜中〕天正十九年

以大權現〇徳川家康前田利家、浮田秀家、毛利輝元、小早川隆景為天下大老、

〔武家名目抄職名六下〕豐臣家の時に及びて、重職三等を定置かる、大老、中老、奉行といふものこれなり、其中に大老と奉行とは、常日政務を執行して、軍國の儀、府庫の務、悉く預り聞ざる事なし、

小年寄

〔太閤記二十二〕三人之小年寄衆

五奉行

生駒雅樂介　中村式部少輔　堀尾帶刀先生

此三人は、大年寄之內、五奉行と不和に成事有ならば、非儀なる方へ強く諫を遂べき旨、堅く頼おぼしめすと有し也、

〔豐臣秀吉譜 中〕以生駒雅樂頭、(○親正)中村式部少輔一氏、堀尾帶刀吉晴、爲中老、

〔慶長見聞書 一〕慶長四己亥正月廿一日、加賀大納言、幷奉行衆より爲使、兌長老、生駒雅樂頭、御屋敷へ參り、太閤樣御他界以後、數月を不經に、御緣邊の取組、我儘を被成候由直に理り申上、奉行衆より、大崎少將政宗、福島左衛門大夫正則、蜂須賀阿波守家政等(江)使有、其趣は、各へ相談も無之、家康公と緣邊の取組、御掟を背き、不屆之由也、(○中略)此時の年寄衆は、家康公、加賀利家、輝元、秀家、景勝、五奉行人、德善院、淺野彈正、增田右衛門、長束大藏、石田治部少輔、中。老。は、生駒雅樂頭、中村式部、堀尾帶刀、三人也、(○中略)太閤樣の御遺言に、年寄衆、奉行衆、其外の出入有之時は、生駒雅樂頭、中村式部、堀尾帶刀、扱を致し下にて事濟申儀に候はゞ、可相濟の由御仕置候に依て、堀尾帶刀は、子息信濃(○忠氏)に、秀吉公被懸御目を、帶刀又家康公、別而懇意故に、井伊兵部少輔(○直政)を以、御扱の樣子を節々得御意、扱公儀の趣は、雅樂頭、式部少輔、帶刀、三人して扱を致し、家康公御理運の樣子に扱相調、二月五日、互の御誓紙相濟、家康公被仰により、其兩方の誓紙、帶刀預り置申候、

〔松原自休手錄(武家名目抄職名部六下所引)〕伏見ノ城、不空可置、內府(○德川家康)御移尤也ト、三人ノ中。老。執之、奉行家老モ同之、三月十三日、被移城中、

〔武家名目抄 職名六下〕たゞ中老は、其階級、奉行の上にありて、政事に預參すといへども、定まれる職掌なく、傍に在て異見を加ふるを以て專務とす、又常にこれを小年寄とも稱するは、大老を大年寄といふに對する稱謂なり、

〔太閤記 七〕五奉行之事

淺野彈兵衛尉〇長政は、秀吉公の御臺所と同じはらからにはあらねど、兄弟の因みなりければ、每事內外共に、評諚之座にはづれざる者なり、玄以は信忠卿に事へ奉り、ときめき出たる才有、信忠卿は才勇兼備りし明將なりしかば、御見立あしくはあらじとて撰み出されしなり、長束は、丹羽五郎左衛門尉〇長秀につかへ、每物の裁判やはらぎ滯事なき者なり、增田、石田は、江州北郡入部之時より、吾に勢を盡せしなり、殊增田は萬事損益に曉ふして、其性剛なり、石田は諫に付ては、吾氣色を取す、諸事有姿を好みし者なりとて、五奉行に定め給ふ、前田德善院玄以、淺野彈正少弼、增田右衛門尉、石田治部少輔、長束大藏大輔とぞ申ける、如此五人一職に定置なば、每事はか行まじきの條、

一德善院僧正は、所司代として、洛中洛外之出入、神社佛閣之義に至るまで、一人として裁判可ㇾ申候事、

一長束は、知行方、其外萬算用等之儀、己之任として裁許可ㇾ仕之事、

一三人は、萬端可ㇾ然樣に執行ひ、諸ノ不ㇾ痛樣に令ㇾ分別ㇾ尤候、大なる事相滯るにおゐては、五人として令ㇾ相談、其宜に付て極可ㇾ申、大體定りたる事をば、一人二人してもすまし可ㇾ申候事、

一國々之取沙汰、萬出納之義、早速埒明候樣に由斷有間敷事、

一訴等之義に付ては、心を虛にし聞屆可ㇾ申候、富威兼備りたる者と、才勇不足にして、殊貧者の公事は、不ㇾ盡淵底聞迷有て、不ㇾ思も汚名可ㇾ立之事、

大佛殿之事

秀吉公、聚樂におはしましければ、彌洛中洛外にぎはひ侍るやうにあらまほしくおぼし給ふて、東山に大佛殿を建立し給ふべき旨、五人之奉行共に被ㇾ仰付にけり〇中略大奉行は、德善院一人可ㇾ然と定めらる、かく宣ふは、五人之奉行に一々問盡さんとせば、事行まじきかとおぼされての事

右筆

也とかや、

〔太閤記十二〕奥州九戸之城堀尾茂助乘捕事

今度御退治之國々、撿地爲ㇾ可ㇾ被ㇾ仰付、秀吉公、至ㇾ會津ㇾ有ㇾ御動座ㇾて、淺野彈正少弼、石田治部少輔、大谷刑部少輔、奉行として出されしが、漸撿地も出來し侍りければ、被ㇾ行ㇾ恩賜之地ㇾ、

〔淸正記二〕加藤主計頭、〇淸正小西、〇行長朝鮮國都へ押詰、跡勢を可ㇾ待と評定し、逗留之内に、秀吉公御名代宇喜多宰相秀家、并石田治部少輔、増田右衛門尉、大谷刑部少輔、〇吉隆其外日本勢着陣す、加藤、小西、秀家へ參候し、帝王捕可ㇾ申、人數手分を伺ひ申さる、秀家并三奉行被ㇾ申けるは、高麗帝王を生捕手段なれば、道筋手分可ㇾ仕と相定らる、

〔小松軍記〕利長與ㇾ長重ㇾ結ㇾ恨

茲比天下ノ三。奉。行。ト聞ヘシ石田治部少輔三成、増田右衛門尉長盛、長束大藏大輔正家等、己ガ權柄ニ募リ、幼君〇秀頼ニ事ヲ寄テ、國家ヲ亂ント計ル、然ドモ内府公〇德川家康ヲ始、諸國ノ大名、大坂伏見ニ充滿シテ、彼等ガ謀逆、事行ベクモ不ㇾ見ケレバ、如何ニモジテ諸將ヲ國々ヘ下シ、公儀ヲ疎クシ私ノ交ヲ止メバ、自然ト異說起テ、欺安カラントト内談シテ、先三奉行等、前田利長ニ向テ云ク、今天下安泰ニシテ何ノ用心モナキニ、遠國ノ面々、永々ノ在伏見シテ、財寶ヲ費シ國民勞セシメバ、賊徒諸國ニ起テ、世ノ煩トモ成ラン、殊更於ㇾ貴所ㇾ被ㇾ拘ㇾ大國ㇾ加之家督ノ後、所知人モ無シ、如何ナル訴訟ノ人、奉公ノ望有者モ候ベシ、國安フシテコソ天下泰平ノ功ヲモ立ラレ候ンヅレ、五大老ニ斷有テ、急入國アラレ候ヘト三成指計ヒ、言ヲ巧ニ述ケレバ、利長實モト思ヒ、兎モ角モ面々ノ御指圖次第タルベシト申サレケレバ、三奉行斯ト披露シケレバ、各モ尤ト同ゼラレ、歸國ノ事ヲ赦サレケル、

〔石川正西聞見集乾〕一京都諸司代德善院は、五奉行と一味せず煩ひとて談合にものられす候故、

奏者

本知丹波八上、其まゝ被ㇾ下候へども、子息主膳無分別にて身上はたし被ㇾ申候、親父は元來禪僧にて、內傳外傳の學術歌道に至るまで兼學して、才智深き人成しを、秀吉被ㇾ聞召ㇾ及被ㇾ召出、近習右筆に被ㇾ成、後は五奉行前田德善院玄以法印と被ㇾ申ける、

〔老人雜話　上〕太閤萬事早速也、或時右筆醍醐の醍の字を忘、太閤指を以て大の字を地に書して云、汝知らざるか、此の如く書くべしとぞ、

〔川角太閤記　三〕一大坂え御歸城被ㇾ成候處に、輝元臣下吉川駿河守元春、小早川左衞門允隆景、宍戶備前守御禮に罷出候、奏者淺野彈正殿〇長政なり、

〔關ヶ原軍記大成　二〕秀忠公御歸國附秀頼公大坂移徙

此日老中五奉行の面々相談して、大坂城中の勤番、其外の法禁を定らるゝ、〇中略

進物にて御禮可ㇾ申上ㇾ衆

公家衆　門跡方　國大名衆

右出仕之時は、加賀大納言〇前田利家　羽柴肥前守〇前田利長　父子の內、壹人伺公にて可ㇾ有ㇾ御取次ㇾ事、

右之衆之外、無ㇾ案內ㇾ心安進物にて御目見可ㇾ有之御取次は、石川備前守〇定清　石田木工頭〇重成　石川掃部頭〇頼明　片桐東市正〇且元　此內可ㇾ爲ㇾ御取次ㇾ〇御取次、古文書集作ㇾ奏者ㇾ事、〇中略

右之掟違背有間敷候、條々如ㇾ件、

慶長四年正月十日

長束大藏大輔
石田治部少輔
增田右衞門尉
淺野彈正少弼
前田德善院

詰衆

安藝中納言
會津中納言
備前中納言
加賀大納言
江戶內大臣

〔太閤記十三〕朝鮮國御進發之人數帳
御馬廻衆〇中略
千二百人　御詰衆

〔關ヶ原軍記大成二〕秀忠公御歸國附秀賴公大坂移徙
此日老中五奉行の面々相談して、大坂城中の勤番、其外の法禁を定らる、〇中略
御詰衆御番之次第
壹番　杉原伯耆守〇長房　堀加賀守　毛利河內守　羽柴孫四郎　宮部中務少輔　同捨吉　淺野右兵衛　伊東美作守　木村虎松　橋本中務少輔　山中紀伊守　加藤孫六郎　松平右近　伊藤武藏守　蜂屋勝千代
二番　大野修理〇治長　石田主水正　有地重藏　毛利長門守　土方丹後守　山岡彌平次　羽柴長吉　山口左馬助　奧捨藏　小西式部大輔　長谷川吉右衛門　石田右近　青山右衛門大夫　木村右京　堀田清十郎
右一日一夜宛、無懈怠可相勤者也、
定番之衆
春松越後守　垣原八藏　菊阿彌〇中略

咄衆

右之掟、違背有間敷候、條々如件、

慶長四年正月十日　長束大藏大輔○以下九人署名略

〔川角太閤記〕四一御陣中へ、奥の大名衆、御禮に被罷出候、正宗殿○伊達御禮早々相濟申候、其外與、詰衆無殘被罷出候、佐竹殿はちと遲く御座候事、

〔卜齋記〕下家康公、御咄頭、三日に壹度ヅヽ御出、二ノ丸迄は、刀持一人、草履取一人なり、本丸唐門に、黄母衣の衆二人、門の下に番、爰にて脇差を置、無刀なり引出しの箱あり、其重に其人々の名書付ありて、草履雪踏下駄あり、入候時に自身取出し、歸には元の重へ御入候となり、○中略御咄の時、料理出候時、茶の湯坊主十人計りあり、其内三人歟五人、給仕を仕候由、御膳は掛盤、家康公へも掛盤、御飯の鉢も同事、相伴衆へは通の鉢平膳、利家も、家康公同組の御咄の衆なれども平膳、秀吉公と家康公御膳、少しも違ひ不申候由、御雜談の時も、家康公と被仰候よし、

〔小早川什書〕九御とまり〳〵掟○中略

一御はなし衆卅人　さい五此内三はさい引　汁二此内一は土やうじ○中略

右御掟よりも、けつこう仕候はゞ、ていしゆくせ事たるべし、又人數書立之外、給候ものも可爲曲言候也、

天正廿年正月五日　太閤樣御朱印

〔卜齋記〕下秀吉公、伏見より京へ御上りの時は、奉行衆、御咄の衆、合て五拾人の内、廿町程御先へ、朱柄虎の皮抛鞘鎗二拾ヅヽ、眞直に立て持、遠くよりも上の御成と見ゆるなり、

〔利家夜話〕上一名古屋陣引取候て、後年太閤樣、政所樣、其外加賀樣、御手掛衆、御同道にて、吉野山へ御花見に被成、御座、御供の人々は、家康、利家、金森法印、○長近蒲生飛驒守、○氏郷淺野彈正殿、其外御咄之衆御供也、

御伽衆

〔老人雜話上〕承禎○佐佐木は江州一ヶ國を領して大名也、信長に滅されて江州を取らる、承禎の子は四郎殿とて、太閤の時は咄の者に成て、知行二百石也、

〔義殘後覺五〕玄旨法印咄の事

一あるとき秀吉公、玄旨法印、○細川藤孝桑山法印、清須法印、金森法印、○長近因幡足定坊などめされて、よもすがら御咄ありけるが、太閤○秀吉仰られけるは、おもしろくおかしき雜談なりともけふよりしては、腰より下のはなしをすべからず、わすれてもこしよりしたの事をはなす人は、過錢として牢金一枚づゝ、當座にいたすべしとぞ仰られにける、おの／＼かしこまつて候とて、いかにもしんにかまへておはしけるに、玄旨申させ給ひけるは、きのふひがし山清水寺へ、さむけいつかまつり候て、名譽の道具を見申て候と申させ給ふ、秀吉公きこしめして、めいよとはなにたる道具ぞと仰られければ、さむ候、祇園の松ばらにて、折ふしのざかはき申によつて、茶屋にてちやをたべ申候ところに、つく／＼と茶釜を見申候へば、てつのやうには見え申さず候ほどに、あやしくぞむじて、あの釜は、くろがねか、唐金かとゝひ申候得ば、ちやや申候は、あれはかねにては御座なく候、くすのきのかまにて御いり候と申ほどに、あなめづらしとぞんじ、そばへよりみ申候ほどに、おどろき入申候と申させ給へば、太閤きこしめして、木をたくならば、それはしりがこげて用に立まじきかとの給へば、玄旨うけたまはりて、しりは腰よりしもにて候、はや／＼判金一枚御いだし被成候へと申されければ、太閤、すてぼうずにだまされた、まつひらゆるせと仰られて、大にわらひ給ひける、

〔太閤記十三〕朝鮮國御進發之人數帳

御馬廻衆○中略

八百人　御伽衆

〔太閤記十四〕將軍於名護屋癸巳御越年之事

傍衆

初の程は山里にして、御伽衆計被召連、御けいこ有しが、御仕舞のよしあしをつゝ、まず、有やうに申せと御諚也、

〔太閤記十六〕秀吉公有馬御湯治之事

卯月十〇天正十七年廿九日、御湯治に付て、れき〳〵の御伽衆十九人被召列、御慰のかず〳〵云はむかたもなし、

〔太閤記十二〕相州小田原御進發之事

秀吉公三月十九日都を立せ給ふ、其日の出立、作り髭にかね黑也、御太刀差添など、こと〳〵敷若やかに物し給ひし粧なれば、御伽衆、御傍衆などは、云にも及ばず、異形たる出立、中々言葉の可及も覺え侍らず、

〔太閤記十三〕朝鮮國御進發之人數帳

御馬廻衆

四千三百人　御傍衆六組

童坊

〔備前老人物語〕一太閤秀吉公の童坊、何阿彌とかやいひしは、面白きかた氣成ものにて、常に御心にかなひたりしものなるが、いかゞしたりけむ、ある時御心にそむき、御氣色以の外にて、杖をとり追はしらかし給ふに、彼童坊にげながら、あとを見かへり〳〵、先またせ聞召されよかし、上樣も私も、あまりちがひはなく、たゞ一日の違也、昨日は過つ、あすはしれぬ世の中に、かほどまで御腹たゝせらるゝも勿體なし、されどけふは天下樣なれば、いか樣にもなされたきまゝになされよと、うちふてたる樣にて、面白おかしげにつぶやきければ、其まゝ杖をすてられ、うちわらはせ給ひて簾中に入給ふとぞ、

茶道

○按ズルニ、臺坊又同朋ニ作ル、事ハ足利氏職員、番衆篇ニ詳ナリ、

〔太閤記十五下〕大明より使者之事

かくて金のすきやとて、唐使に御茶被下けれは、其體尤つき〴〵しく有しとなり、晩之御振廻は、長谷川刑部卿法眼勤之、○中略秀吉公は床のわきに坐し給へり、茶道久阿彌、通ひ尼子三郎左衛門尉、三上與三郎、諸侯大夫、其外歷々之衆、緣通りに並居たり、

〔卜齋記下〕御咄の時、料理出候時、茶の湯坊主十人計りあり、其内三人歟五人、給仕を仕候由、

勘定方奉行

〔太閤記七〕五奉行之事

一長東は、知行方、其外萬算用等之儀、已之任として裁許可仕之事、○全文見二五奉行條一

〔慶長見聞書一〕一佐野肥後守は、○中略是は秀次公衆也、勘定方奉行被召抱、大坂西の丸御留主居罷在、敵退出し申候間、伏見へ參相果申候、

普請奉行

〔太閤記十六〕雍州之伏見殿下居城に御定之事

文祿三年正月三日、伏見を御城に可被成に付て、普請奉行何れか宜しかるべきぞ、ゑるし上候へと、増田石田などにのたまひしかば、十三人ゑるし付上ければ、其中を六人撰出されし人々は、佐久間河内守、瀧川豐前守、佐藤駿河守、水野龜助、石尾與兵衛尉、竹中貞右衛門尉也、五人之奉行之者に、役人共、二月朔日に於伏見着到にあひ候やうに上せ可申旨、國守等にふれ候へと有しかば、各奉り廻文に及び、六人之普請奉行を召て、被仰渡けるは、伏見普請之儀、無由斷申付候へ、かねて可入物共、目錄を以、増田石田長東などに令相談、用意候へ、爲はかの行やうに有べきむねなりしかば、六人之者共、是は忝仰には御座候へ共、小知小見之身を以、莫太なる御普請之儀、いかゞおはしまし候べきと御理申上しかども、不相叶御請を致し、役人之帳を五奉行之面々へ請取候はむと云ければ、廿五萬人之帳をぞ渡しける、かくて六人よりも、二月朔日以前、至于伏見參着有之様に

と、各諸大名衆へ廻文に及びき、

普請衆

〔太閤記二十二〕普請奉行六人〇姓名略、右六人は、馬廻小性與、二千七百人之内より撰出されし故、其なす所遲速其理にかなひ、下々までも恨むる事もなく、唯おしなべて其身々々のつとめを專にせし也、

〔太閤記十六〕醍醐之花見
翌日目錄を以、醍醐之寺々、門前之下々、并今度御供之人々、殊には八幡山、比叡山、愛宕山等之寺院などへも、方々よりの捧物を分與し給ふ、伏見大坂之普請衆へも酒肴恩賜有て、勞を報じ給へりき、

〔伊達日記下〕一慶長元年、太閤樣、伏見ノ向島ト申處ニ御城御構候、御普請過半出來候處ニ、閏七月十二日夜半時分、大地震ニテ、御城ノ天守御殿共ニ破損シ、御城ノ内ニテ、男女五十人餘被打殺候、向島ハ、宇治川立廻、地形下所ニテ候故、猶以普請衆餘多越度申候、

作事衆

〔太閤記十三〕高麗入評議之事
名護屋旅館御作事衆
一御本丸すきや　長谷河宗仁法眼
一山里すきや　石田木工頭〇正澄
老松蟄たりしを便として一興有
一本丸より山里へうらの露地　寺西筑後守
一山里書院五間六間　太田和泉守
座敷何も狩野右京亮畫之、盡善也
同所御臺所　河原長右衞門尉　石河兵藏

一山里おうへ十間十一間

御座の間　西王母　右京亮畫之（〇下略）　寺澤志摩守（〇廣高）

大工頭

〇按ズルニ、此作事衆ハ、費用ヲ出シテ工役ヲ助クルモノナルベシ、今ハ參考ノ爲メ此ニ掲ダ

〔南蠻寺興廢記〕秀吉公ノ近習ニ、中井修理大夫ト云者アリ、渠ハ元來中井半兵衞ト云工匠ナリ、秀吉公ノ大坂ヲ始、處々ノ普請ノ評議相手トシテ、晝夜傍ヲ去ラズ勤仕ス、宿所ハ淀ノ城下ニ在テ母ヲ畜ク、自分ハ天下ノ大工頭ト成テ、威ヲ工匠ノ徒ニ震フ、

座敷奉行

〔利家夜話　上〕其年（〇文祿三年）より右のごとく東帶の御成、家康公、蒲生飛驒守殿、（〇氏郷）安藝の毛利殿、（〇輝元）備前中納言殿、（〇浮田秀家）へ御成被成候、其時越後景勝も中納言に被成候、其後御城にて、最早宰相おそき早きにて、利家は景勝より下座に御座候故、殊之外御機嫌悪敷候、其段卽時に太閤樣御聞御驚候て、御座敷奉行德善院を御召、樣子御吟味之處、右之通、具に言上す、沙汰の限り何とて左樣之事などは不申上候と被仰、淺野彈正を以、利家を大納言に被仰出候、

臺所奉行

〔多聞院日記〕天正十七年十月十七日、關白殿、（〇豐臣秀吉）七ツ時分ニ御出、成身院御宿所也、次兵衞浮田宰相公、細川兵部入道、（〇藤孝）公家衆レキ〳〵、御同道也、僧坊中寺内迄、悉宿坊ニ取候、是ハ上ノ御臺所奉行トテ、福住吉右衞門ト云人來、上下卅人餘有之歟、一段和樂ナル衆ニテ介迷惑了、（〇中略）兩門跡良家衆、自類衆、大略迎ニ、般若寺チンガイノ門邊迄出了、

臺所衆

〔卜齋記　下〕秀吉公御代に、臺所の衆、朝は日の出に參り臺杯集め、前に鐘あり、其鐘を撞せ料理人這候、荒子など集め帳に付、七つ半程に臺所の隙を明け、鐘撞候處へ集り、人數帳に合せ、臺所を外よりさし、扉に鎖をおろし宿へ歸る、男は壹人もなし、表唐門へ入、楊貴妃の間と申御殿、其次に虎の間、其次に千疊敷、此内に三間に九間有座にて、人數廿人餘の山、

膳番

〔内藤家傳附錄武家名目抄職名部十二下所引〕左助子久五郎直政をば、外父政長養て弟として内藤氏を授て、秀吉

へ預奉り、御小性に召出され、二百五十石を下賜ふ、後に御膳番、其後御目付役被仰付、七百石を加賜ふ、合て千石なり、

宿奉行

〔太閤記十三〕高麗入評諚之事

就高麗陣掟條々

一人數おし之事、六里を一日之行程とす、乍去在所之遠近、六里之內外、奉行計ひ次第たるべきなり、卽宿奉行定之條、前後諍論なく、萬づ順路に可有之事、

軍奉行

〔一柳家記〕明ル廿一日〇天正十一年四月之寅之刻ニ、玄蕃〇佐久間盛政陣所山上へ御取懸被成候由、〇中略作內、〇加藤光泰市助〇一柳直末ハ、其日之軍奉行ト被仰出、其外之軍奉行衆ハ未出合、右二人ハ、態跡ニ扣致下知候、

〔太閤記十一〕九州御出勢ニ付御掟之條々

一合戰に出立、先陣後陣之儀、軍奉行次第下知を相守可申之事、

〔武隱叢話五〕竹中半兵衛事

竹中半兵衛重治ハ、美州菩提ノ城主ニテ、秀吉公ノ軍奉行也、

兵糧奉行

〔天正記三〕紀州御發向の事并水漬の事

今度すまあかし、ひやうご、西の宮、尼が崎、さかいの津、その外所々の船にて、兵糧をはこび、まし田仁右衛門をひやうらう奉行として、きのみなとにこれを置、一日に八木千俵、まめ百たはら相わたす、

〔太閤記十一〕筑紫陣御觸之事

然間來三月朔日、九州表可令發向之條、無油斷用意有て、二月廿日以前、至攝州可被參陣之旨、十二月朔月より國々へ觸まはる、畿內五箇國、北陸道之內五箇國、江州、濃州、尾州、伊勢、伊賀、南海道六箇

國、中國十六箇國、以上三十七箇國、其勢二十萬餘騎とかや、遠國之事なれば、兵粮米、馬之飼料、下行あるべき奉行として、小西隆佐、建部壽德、吉田淸右衞門尉、宮木長次、此四人は十二月十日に大坂を立出、三拾萬人之兵粮、二萬疋之馬之飼料、先一とせの分、用意可申旨被仰付にけり、卽下奉行共、國々御藏入方より、兵庫尼崎邊へ其手寄に隨て、御藏米着可被申由觸にけり、

〔太閤記十二〕兵粮奉行之事

長束大藏大輔を首として、其下之小奉行十人被仰付、年内に代官かたより、二十萬石請取、來春早早より船に積、駿州江尻淸水に令着船、藏を立、入置、總軍勢に可相渡旨也、幷黃金壹萬枚被相渡、勢尾三遠駿五箇國にをゐて兵粮を買調、能に令沙汰、小田原近邊の船着へ可相屆旨被仰出、何も十一月初旬より方々之催し急なりけり、

扶持方奉行

〔太閤記十一〕筑紫陣御觸之事

御扶持方渡し奉行は、石田治部少輔、大谷刑部少輔、長束大藏大夫也、

〔武功雜記四〕筑紫陣ノ時、人數廿萬人、馬二萬疋、先陣ハ下關ニアレバ、後陣ハ兵庫ニアリ、扶持方奉行ハ、建部壽德、宮城長次郞、小西隆佐、吉田淸右衞門、高麗陣ノ時、人數卅萬七千九百五十人、先陣肥州名護屋ニアレバ、後陣ハ廿備ニアマリ京ニ居ル、扶持方奉行ハ、石田、長東、大谷、

城米奉行

〔西戎遺文二〕城米之奉行、福島左衞門大夫（〇正則）毛利民部大輔（〇高政）に被仰付候、早川主馬首（〇長政）毛利兵橘（〇高政弟某）封有之、兩奉行に可引渡、並鐵炮同玉藥等、是又人手間之義可被申付候、猶淺野彈正少弼、山中山城守可申候也、

九月二十四日（〇文祿二年）　御朱印

小荷駄奉行

〔武家名目抄職名二十四下〕九戶記云、秀吉公卿覽じて、いかに利直（〇南部）誠に東南に雲收り、西北に風靜にして、四海の外迄も遙にまよくせざる地なきに、正實正道をかすむる事、甚以奇怪なり、兎

船手大將

角討手を差下し、心を合せ誅罰せよ、蒲生飛驒守氏鄉、井伊兵部少輔直政に大將を給り、軍奉行堀尾帶刀、小荷駄奉行曾根內匠云々、

〔脇坂家傳記〕天正十八年庚寅、北條左京大夫氏政、子息氏直、秀吉に順はざるによりて、相州小田原に發向せらる、安治〇脇坂九鬼大隅守嘉隆、加藤左馬介嘉明、長曾我部元親等は、舟手の大將として、二月中旬より我先にと海上を廻りしが、安治、同廿五日遠州今切に着船し、秀吉へ書を獻じて注進しければ、御感斜ならずして、回翰を下し給ふ、

〔川角太閤記〕四海上は、海賊衆受取、さて武藏下總奥へ御はめ被成、

〇按ズルニ、是モ亦小田原征伐ノ時ノ事ニシテ、海賊衆トアルモノ、卽チ船手大將ノ事ナリ、

〔脇坂家傳記〕文祿元年壬辰、秀吉朝鮮國を征伐し給ふ、〇中略船手の大將は、安治、九鬼大隅守、加藤左馬介也、

船奉行

〔秀吉事記〕紀州御發向之事

今歳天正十三年三月廿一日、御動座之由、兼日成陣觸、彼路筋海山之嶮難、舟之着場、馬之立處、以案內者見究成畫圖、〇中略中村孫平次、〇一氏一仙石權兵衛尉、〇秀久九鬼右馬允嘉隆爲大將、小西、石井、梶原、等、定舟奉行、越由良門、那智海、逆浪泝天、卒風捲砂、凌此大難、邐寄熊野浦、

〔川角太閤記〕三一五郎左衛門殿〇丹羽長秀人數一萬ばかりにて上洛と被聞召、道々目付を被付置候、はや先手は大坂え着申候、五郎左衛門殿、京まで御着候、

目付

〔川角太閤記〕三一戌の年〇天正十四年は、天下の御普請、國々の大名小名、洛中洛外に滿々て、祗候被仕候事、

一其時まで、九州屬し不仕故、毛利殿〇輝元を豐前へ渡海被仰付候、但御橫目黑田官兵衛、〇孝高豐後へ仙石越前、長曾我部父子〇元親盛親なり、

〔續撰淸正記 一〕淸正肥後國拜領いたし度旨望れ候事

佐々陸奥守○成政肥後仕置に下り給ひし時の横目に仰付らる、淸正も肥州へ行、仕置の樣子具に見られたるに、一として國を治むるの謀攻にあらず、○下略

〔脇坂家傳記〕二月○文祿二年廿一日に、番船又湊の內へ乘入ぬ、各早舟に取乘り、我先にと番船に押掛るに、安治が早舟一番に押かけ、番船に繩をつけ乘捕りける處に、○中略後に九鬼、脇坂、互に前後を爭ひ、雙方日本へ注進しけり、安治は家臣覺兵衞を使者として詳に言上しける、御横目早川主馬助よりも、脇坂一番乘たるの由を告たり、

〔藤堂家覺書〕一後之高麗陣、ふさんかいへ御着被成、其々あんかうらいへ被成御座、一日之御逗留に而、舟以下御こしらへ被成、○中略其晩に御横目衆、瀨戸口へ御よりあひ被成、番舟、和泉樣○藤堂高虎一番に御取被成候通、秀吉公へ言上可被成との七人の御横目衆すみつき御座候刻、○下略

〔西戎遺文 二〕條々

一先手之衆爲御目付、毛利豐後守、○勝永竹中源介、○正直垣見和泉守、○家純毛利民部大輔、○高政早川主馬首、○長政熊谷內藏丞、○直陳此六人被仰付候條、任誓紙之旨、總樣働等之儀、日記を相付候而、善惡ともに見かくし聞かくさず、具に可令注進事、

慶長二年二月廿一日　秀吉公御朱印

筑紫上野介どのへ

〔續撰淸正記 四〕漢南人橋の板をとる事并戰中働の事

蔚山籠城の運を開たる事は、釜山浦、須天、其外方々に御座したる大將衆の後詰の人數を見て、大明の勢恐懼して、百萬の軍兵とも、不殘引退たると本書にあり、此後詰に色々の僉議有て、後詰の大將衆と、横目衆と口論出來て、既に大事あらんといたしける、後詰有し方々の宜は、誰々後詰い

使番

たし候に依て、漢南の軍勢退散いたし、籠城仕たる諸卒、無」恙運を開たりとの書札を認め、秀吉公へ注進の狀に各連判いたされ、横目衆にも、加判あれと被」申候時、家名は失念仕候、兩人の横目被申しは、漢南人退散は、各後詰故と不」存、子細有」之故、加判なるまじきとの事なるを、清正樣々あつかひ被」申て無事になる、其書札に横目衆加判有て、秀吉公へ注進ありたり、

〔太閤記二十二〕御使番衆

佐久間河內守　瀧川豐前守　山城宮內少輔　三上與三郞　熊谷內藏允　佐藤駿河守　箕部隱岐守　布施屋隱岐守　布施屋飛驒守　竹中貞右衞門尉　水原石見守　杉山源兵衞尉　友松頭右衞門尉　松井藤助　大谷彌八郞

〔太閤記六〕丹羽五郞左衞門尉長秀志津嶽之城へ籠入事

秀吉卿は、夜の明るを待兼、木の本をまだほのぐらきにおし出し、志津嵩城の南に御旗を立させられ、弓鐵炮之かしら分共に、堀きりのこなたなる勢は、只今巳時引取と見へしぞ、急ぎ走着うたせようたせよと、使番母衣之者を以被」仰付」しかば、心得候と云もはてず、ひしと引附、堀切より引上候を、かけ渡しにねらひすましうたせしかば、時のまに手負二百人餘りうち出しけり、

勝家敗北幷毛受勝助忠死之事

翌日廿二日、北庄へおしよせらるゝ、勢之次第、堀久太郞〇秀政を先として、其次取出々々、番手の次第に任せ打候へと定め給ふ掟之事

一進退其外何事も、母衣之者、幷使番次第可」守」其法」事

〔川角太閤記三〕一城攻の體御覽候へば、城の堀へ寄手はや程近付申候處へ、御使番衆被」遣候、其樣子は早々終夜辛勞仕候、定て勞れにおよび可」申なり、此上は御手廻り小性等にて攻さすべき也、はや〱御入替可」被」成と御使なり、

○按ズルニ、是ハ島津義久ヲ追伐シタル時ノ事ナリ、

〔下齋記下〕御使番、五萬石、千石、二千石、三千石、太田小源吾は四萬石、福原右馬助〇直高は七萬石、何れも御使番なり、

物頭

〔川角太閤記一〕一風呂御入被成候て、あがりやに御腰を被掛、御伽に入申候小性衆に仰出の樣子は、年より共、または物頭々々〇江州觸可申ものなり、明日可打立覺悟也、〇下略

〔清正記一〕五月十〇天正十一年一日、江州於坂本御着、□□今度志津ヶ嶽、抽軍功七人之者被召出、〇中略物頭に被仰付、虎之助には鐵炮五百挺、與力二十人、御預被成、

〔川角太閤記四〕物頭羽柴筑前守殿、〇前田利家子息肥前守殿、〇利長景勝、淺野彈正、其外八人、所々の城攻は書村不申候事、

○按ズルニ、是ハ小田原征伐ノ時ノ事ナリ、

〔武家名目抄職名部附錄六〕按ずるに、物頭といへるは、一人の職名にあらず、旗鑓の奉行、弓鐵炮の頭などをすべいへる名號にて、足輕同心をあづかる職なり、

組頭

〔太閤記五〕織田三七殿與秀吉及鉾楯事

かくて弓鐵炮、小性、馬廻、其組頭々へ、柳瀨にをひて大利を得る事出來たるぞ、早々こしらへ出候へ、こし兵粮のみ、かる〳〵と營ふて出よと被仰觸けり、

小性頭

〔太閤記二十二〕小姓頭衆

福原右馬助　壽田權佐〇康定　別所豐後守〇吉治　長谷川式部大輔　宮木右京亮　中江式部少輔〇直澄

小性衆

〔下齋記下〕小性十人、本丸と西丸との間の二階、門上に二人計、番の日は二時計居て、宿へ歸の由、

〔柴田退治記〕十三番中川瀨兵衛尉淸秀、此次秀吉馬廻也、先手鐵炮衆、以上八首、右手既近之歷々也、

左手小性衆、究竟之勇者也、

〔太閤記十三〕朝鮮國御進發之人數帳

御馬廻衆○中略

三千五百人　小姓衆六組

〔老人雜話下〕羽柴長吉は、太閤の小姓、無比類美少年也、太閤或時、人なき所にて近く召す、日頃男色を好み給はぬ故に、人皆奇特の思ひをなす、太閤とひ給ふは、汝が姉か妹ありやと、長吉顏色好き故也、

馬廻頭

〔太閤記二十二〕御馬廻七頭亦七手組共云

郡主馬正　野々村伊豫守○雅春　堀田圖書助○勝嘉　中島式部少輔○氏種　眞野藏人　青木民部少輔○一重　伊藤丹後守○長實

馬廻衆

〔備前老人物語〕一太閤秀吉公御陣の時、御馬廻り衆の陣小屋を見廻り給ふに、小謠うたひ、小鼓うつ所あり、○下略

〔豐臣太閤御事書〕覺

一殿下陳用意不可有油斷候、來正二月比可爲進發事、

一召具候者共、人持之内へ三萬石、馬廻之内へ貳萬石可借遣候、金子も似合々々可被借遣事、○中略

天正二十　五月十八日　秀吉朱印

關白殿○豐臣秀次

〔伊達日記下〕一慶長元年、太閤樣、伏見ノ向島ト申處ニ御城御構候、○中略同○閏七月廿二日ニ、小幡山ヲ御覽被成、御城ニ可被成由被仰出候、大名衆、御馬廻リ小身衆迄、組々ヲ被成、極月晦日ヲ切ニ御移徙可被成由ニテ、夜ヲ日ニツイデ御普請イソギ申サレ候、

歩行衆

〔一柳家記〕明ル廿一日〇天正十年四月之寅之刻ニ、玄蕃〇佐久間盛政陣所、山上ヘ御取懸被成候由、然共市助〇一柳直末、聞付、四郎右衛門〇一柳某ト只二騎ニテ、馳參見候得者、秀吉公御先ニ、騎馬八人、歩行衆五人、御馬印持貳人之御中間之外無之由、〇下略

〔淸正記一〕於山崎表、明智日向守〇光秀と合戰之剋、秀吉公御先、一番高山右近〇友祥二番中川瀨兵衛、〇淸秀池田紀伊守、〇之助高山慢氣之武士なれば、寶寺南門をうち、我一勢に他勢一人もませず、可蓋粉骨と相定、合戰をぞ初めける、秀吉公其趣聞召、歩行之者二三人も參候へと召れける、あつと答へし內より、加藤虎之助も參たれば、いかに虎之助、高山が寶寺南門を打、合戰を初たる樣子見來れと被仰付、歩行衆三人にも被仰含けり、

〔武隱叢話十〕尾藤左衛門事

尾藤左衛門佐知宣ハ、秀吉公御譜代ノ侍也、〇中略秀吉公御少身ノ時ヨリ、尾藤甚右衛門トテ舊功アル者ナレバ、御宥免ハ無疑トテ、剃髮染衣ノ姿トナリ、秀吉公、七月十七日、小田原ヲ有御立、奧州御動座ノ道筋ヘ罷出、畠中ニ平伏シ居タリ、秀吉公酒匂川ニ御着之節、遙ニ是ヲ御覽ジ付ラレ、アレニ見ヘタル大坊主ハ、何者ゾト御尋アリ、尾藤兼テ濕置シ御馬廻リノ衆、アレハ先年御改易被成候、尾藤左衛門ト見ヘ申候、小田原ニ罷在シガ、剃髮染衣ノ姿ニ罷成、御馴染ニアマヘ、御目見ニ罷出候ニヤト申上ル、秀吉公俄ニ御氣色變リ、〇中略加樣ノ仕方、言語道斷悄キ次第也トテ、御歩行衆ニ引張セ、備前兼光ノ御腰物ニテ、御手討ニ御成敗也、

弓頭　弓衆

〔卜齋記下〕弓頭、大島雲八〇光義は三萬石、か樣さまく知行被下候故、足輕はなし、

〔太閤記十三〕朝鮮國御進發之人數帳

御弓鐵炮衆

一百人大島雲八　二百五十人野村肥後守　二百五十人木下與右衛門尉　百七十五人舟越五

郎右衛門尉　二百五十人伊藤彌吉　百三十人宮木藤左衛門尉　百五十人橋本伊賀守　百人鈴木孫三郎　二百五十人生熊源介

鐵砲頭

〔清正記一〕天正十二年三月三日、織田信雄と秀吉公と御中不和に成り、於尾州犬山及合戰、〇中略主計頭〇清正も先勢の鐵炮頭なれば、おひきつれ段々におさせ、龍泉寺の坂を下り〳〵見れば、はや合戰過て、小幡へ家康公信雄公入勢に成、兩軍の侍共玄づ〳〵とのく、

〔卜齋記下〕鐵炮頭、二萬石、三萬石、大垣の伊藤長門〇盛景は八萬石、〇中略か樣さま〴〵知行被下候故、足輕はなし、

鐵砲衆

〔天正記二〕柴田人數を五段にたて、五萬よき、やながせに出張陣をとる、〇中略秀吉これを聞、さうそく江北に發向し、先手の備をさだむだん〳〵、一番羽柴佐衛門守、堀尾茂助、〇中略此つぎは秀吉馬廻也、先手鐵炮の衆以上八かしら、〇下略

〔西國御發向記〕着陣人數算之、織田大納言信雄、〇中略九鬼右馬允嘉隆等也、外昵近衆、前備後備、鐵炮衆、殊精兵也、

〔太閤記十六〕醍醐之花見

醍醐御普請之覺

一院外五十町四方三町に、一箇所宛番所を立、弓鐵炮之者を置、かたく番を沙汰し可申事、〇中略

右堅可申付者也

慶長三年戊戌正月廿日　德善院玄以僧正〇以下四人署名略

留守

〔多聞院日記〕天正十五年三月三日、關白殿、朔日ニ出馬一定也、〇中略京ハ前田又左衛門、〇利家今ハ葉柴筑前守ト云、御留守被仰付了、大坂ノルスハ、次兵衛也ト云々、女房衆モ悉被召具了、事ノ樣、高麗南蠻大唐マデモ可切入ト聞ヘタリ、

番衆

〔太閤記十二〕相州小田原御進發之事

三月〇天正十八年朔日に打立、其國々の便に隨ひ宿陣し、泊々さし合事もなく、先陣は富士の根がた、由井蒲原に充滿せしかば、後陣は尾濃之間に扣てけり、毛利右馬頭輝元へ、都御留守を預給ふ、御四萬の軍勢にて聚樂御城を預り、洛中洛外御法度、如御置目沙汰し在城たり、

〔太閤記十三〕秀吉公就御母堂御異例御上之事

七月〇文祿元年廿二日、をしあけがたの出しほに、御船にて上らせ給ひし、御跡の在陣衆つとめ侍りし番所左の如し、〇中略

三之丸御番衆　御馬廻組

一番　石川組　石川紀伊守　土橋右近將監〇中略

本丸廣間之番衆　馬廻組

一番　伊藤組　伊藤丹後守　津田少兵衛尉〇中略

右一日一夜宛、無懈怠可令勤仕者也、

七月廿二日　御朱印

門番衆

〔太閤記十三〕秀吉公就御母堂御異例御上之事

七月〇文祿元年廿二日、をしあけがたの出しほに、御船にて上らせ給ひし、御跡の在陣衆つとめ侍りし番所左の如し、〇中略

裏之御門番衆

一番　有馬中務卿法印〇則賴　大野木甚之丞　二番　石田木工頭〇正澄　太田和泉守　三番　長束大藏大輔〇正家　江州觀音寺　四番　寺澤志摩守〇廣高　御牧勘兵衛尉〇中略

御本丸大手御門番衆

一番　服部土佐守　二番　蜂屋駿河守 建部壽德

本丸裏表御門番衆

一番　中江式部大輔〇直澄　二番　山崎右京進〇定勝　三番　石田木工頭　四番　長谷川右兵衛尉〇秀秋　五番　石河備前守〇定清　六番　寺澤志摩守　七番　長束大藏大輔　八番　服部土佐守　九番　蒔田權佐　十番　福原右馬助〇中略

右一日一夜宛、堅可₂相勤₁者也、

七月廿二日　御朱印

城代

〔卜齋記〕下伏見木幡山御城出口、西大寺石田治部少輔屋敷北の角、淺野彈正、長束大藏、北、松の丸出口、德善院、南増田右衛門尉、口々各當番、二の丸御門番御取立の衆、堀尾帶刀〇吉晴田中兵部〇吉政蜂須賀阿波守〇家政小野木縫殿助〇秀政土方河内守〇雄久此並の衆、十五日替に御番勤る、本丸は指て番衆も不ㇾ入、此口にて城中をまもる、

〔淸正記〕一一秀吉公、富田の寺内に御陣をすゑられ、加々の井彌八郎が居城を取、まかせ給ふ、〇中略總勢付入にして、敵千三百五十討取、勝どきをあげ、彌八郎が首御實檢有て、城の掃除等被₂仰付₁、稻葉左京進を城代に入置給ふ、

城番

〔太閤記〕十筑紫陣之事

島津方にも、兼て用意やしたりけむ、島津中務丞〇家久を大將として、二萬餘騎をさし添、豐後之府内之城を拵へ楯籠、相支むとぞしける、秀吉公蜂須賀などめしつれられ、城之南北を下墨給ふて、先遠卷にし、責具など用意し、ひたくと取卷、〇中略首數多討捕ぬ、卽府内之城番として、大友宗麟義統父子入置給ふ、

京都所司代

〔天正記〕二洛中洛外の所司代として、玄以法印をさだむ、若年よりちゑもつはらふかふして、しき

よくなし、秀吉是をまるによりて奉行をさだむるもの也、若又法度の外、決斷せず理非是あると
きんは、秀吉是をきうめいし、○下略

〔古簡雜纂 長〕織田信雄與前田玄以狀

一京都奉行職事、申付之訖、然上公事篇其外儀、以其方覺悟難落着仕儀有之者、相尋筑前守、何も彼
申次第可相極事、

一於洛中用事有之者、信雄以墨付何時も可申出候、不然者下々申越候共、不可信用事、

一其方事、程隔候て、自然讒言云成等事在之者、直に申聞可極其不申出以前者、如何樣之取沙汰雖
有之、聊不可氣遣事、

右條々可成其意者也、

天正拾壹年五月廿一日　信雄判

玄以

〔武家名目抄 職名十下〕按、去年十○天正年十月、明智光秀誅に伏せし後、秀吉專權柄を握り、先主信長の嫡孫三法師○信秀を立て家督とし、且闕國を以て諸將に分配す、織田信雄は尾張を領し、其弟信孝は美濃を領す、其他秀吉以下織田の舊臣、各配當あり、さて三法師の居を江州安土に移し、長谷川丹波守、前田玄以等をしてこれを調護せしめ、又三法師幼稚の間は、信雄を以て事を攝せしむ、爰に至更に玄以を舉て所司代とし、洛中洛外の機務を取行はしむ、其令する所、大概秀吉の意に出といへども、信雄は先主の血統にして、しかも幼主の輔佐たる故に此令を下せるなり、

〔玄以法印下知狀 武家名目抄職名部十下所引〕一條西洞院通、新町西輪事、北者限正親町通、南者土御門通を限、者廿丈、地子錢ハ往古ヨリ如有來、野畠分に令納所、早々家々儀相立、右之屋敷者、永代不可有相

違之狀如件、

天正十一年六月日　玄以

孫九郎　山城　宗幻　彌二郎　薩摩　與介

其方買得分、蓮花藏之内、横田壹段事、小作祇園次郎四郎ニ雖申付候、曲事之子細候而令逐電候、然上者其方買得分無紛之間、當立毛共、無異儀可申付候者也、

天正十一七月廿二日　玄以

黒澤新二郎どのへ

河原院敷東之土居開之地子錢之儀、如春長軒之時無別儀、毎年片季ニ百文充可有納所候、爲其如此候、恐々謹言、

天正十一八月十六日

淨因參る

於洛中臨時之課役、幷諸公事等之儀、任秀吉御判形之旨、令免除之狀如件、

天正十一十一月十五日

小西次郎右衛門尉殿

洛中洛外、椀家具幷諸塗物以下事、任御朱印之旨、如前々爲座中堅可申付候狀如件、

天正十一十二月十九日

塗師屋座中

吾方疊指、爲天下一、信長被成御朱印、諸公事御免許之上者、彌任秀吉判形之旨、不可有相違候狀如件、

天正十一十二月廿日

石見

賀茂社領境内六郷幷所々散在等事、從先規三社領之内爲守護使不入、度々御下知被帶御朱印、殊秀吉御折紙被遣上者、山林竹木、人足非分之課役以下、如先々令停止之狀如件、

天正十一　十二月廿三日

賀茂　雜中

大覺寺御門跡領、上嵯峨御境内事、自先々爲守護不入之地、人夫幷臨時之課役以下、如春長軒折紙令用捨上、不可有相違之旨、可有御披露候、恐々謹言、

天正十一　十二月廿三日

中澤右近　御雜掌

〔豐臣秀吉譜 中〕天正十六年、秀吉奏請行幸于聚樂第、勅許之、於是秀吉命德善院法印玄以掌其事、以永享九年之行幸爲例、遠近聞之者皆來洛、其繁華富贍不可得言、

〔京都上京文書 二〕京中屋地子事、被成御免許訖、永代不可有相違之條、可存其旨者也、

天正十九　九月廿二日　秀吉朱印

上京中

京中屋地子事、今度被成御免畢、任御朱印之旨永代不可有相違之狀如件、

天正十九　九月廿五日　玄以花押

上京中

上下京中、地子御めんなされ、御朱印筆切錢、銀子貳拾枚請取申候也、

天正十九　十二月廿八日　山中橘内花押

木下半助花押

民部卿法印〈○前田玄以〉

〔室町殿日記十六〕秀吉公京都之開基御尋の事

六十扶桑ことごとく屬ㇾ一同之御代、四海靜謐に治りしかば、ある時、法橋紹巴、玄以法印をめして、ひそかに洛中洛外のさかひを御覽せらるゝに、東は高倉よりあなたは鴨川はら也、はるかに見渡し給へば、へいへいと東山にとりつゞきて耕作の地なり、西は大宮よりあなた、嵯峨太秦へおし通して田畠なり、南北の際も、いづれともさかいなし、たゞ田舍の在郷のごとし、〈○中略〉さて一切の寺ども洛中にみちみちて、在家と立ならびければ、德善院に仰付られて、諸寺共は京極より一町ばかりひがしへ押出し、北は加茂口より、下は六條まで、片ならびに屋敷を渡されける、

大坂町奉行

〔多聞院日記〕天正十四年三月三日、今般於二大坂幷京邊一千人切與行、五六十人モ既ニ切、金子廿枚ノ高札ニ被二打置一、町奉行曲事トテ、令二返失一候處、令二才覺一處、大名衆究竟ノ仁共七人搦取、今日於二住吉表一生害、依ㇾ之鹽干ノ神事モ無ㇾ之云々、

堺奉行

〔卜齋記上〕大坂にては、備前島御座所は如何と申、增田右衛門尉〈○長盛〉所へ假に移し、十二日過て、大坂城中に、石田木工頭、家を立退、其身は堺へ被ㇾ參候、元來堺奉行木工頭、一萬石の身上にて候へども、當座御座被ㇾ成候に狹もなく候、

〔太閤記十六〕呂宋〈○呂〉より渡る壺之事

泉州堺津、菜屋助右衛門と云し町人、小琉球呂宋へ去年の夏相渡、文祿甲午七月廿日歸朝せしが、其比堺之代官は石田杢助〈○一氏〉にて有し故、奏者として、唐の傘、蠟燭千挺、生たる麝香二疋上奉り、御禮申上、則眞壺五十、懸二御目一しかば、事外御機嫌にて、西之丸の廣間に並べつゝ、千宗易などにも御相談有て、上中下段々に代を付させられ、札を押、所望之面々、たれたれによらず執候へと被二仰出一な

秀頼御守

り、依之望の人々、西丸に祗候いたし、代付にまかせ、五六日之内に悉く取候て、三つ殘りしを、取て歸り侍らむと代官の杢助に楽屋申ければ、吉公〇秀吉其旨聞召、其代をつかはし取て置候へと被仰しかば、金子請取奉りぬ、助右衛門、五六日之内に德人に成にけり、

〔多聞院日記〕天正十四年六月十四日、堺。政。所。祐閑曲事トテ取替、一及ト云ヲ被陶了云々、

〔利家夜話上〕大納言殿〇前田利家を、秀頼公之御守にと被仰出、彌天下におゐて御威勢不大形候、

〔利家夜話下〕一太閤樣御他界可被遊、前月七月〇慶長三年に、上意には、御煩も重り候へば、今日諸大名に御遺物可被下候、幸大納言〇前田利家は秀頼が守の事にて候間、大納言所にて誓詞をさせ、其上に御遺物を遣候へと被仰出候、

〔利家夜話中〕一秀頼樣、伏見より御參內之刻、利家は御抱き參らせ御越、御歸城之時分、伏見備前中納言殿〇浮田秀家上の城中にて、御供の大名小名馬より下り、下々入込不申候樣に、御車際に利家の御內乘警固被仰付候、

〔川角太閤記四〕一關白樣〇豐臣秀次御切腹相濟候て、加賀大納言殿を秀頼樣御もりに御付被成候、後は大納言殿より御訴訟にて御座候、我等儀は、年罷寄候の間、御もりを肥前守〇前田利長に讓り申度との御理にて、則肥前殿へ相渡申候事、

大名

〔下齋記下〕正月朔日に、國持、其外大小名、出家、藥師、町人迄も御禮申上附たる者は、不殘出申候、一年十二月不出、來年正月出る、每年朔日に一度宛外には不出、

〔川角太閤記四〕一上樣天下へ御歸陣被成、御祝と御意候て、日本の諸大名衆へ御金被下候、聚洛三の丸の大庭にて被遣候、民部法印巻物大目錄を讀上げ、一番に江戶內府〇德川家康二番に加賀大納言〇前田利家三番備前中納言〇浮田秀家四番に廣島の中納言〇毛利輝元五番に越後の中納言〇上杉景勝如斯次第々々に大名小名被召、御金銀拜領之事、

〔關ケ原軍記大成 二〕秀忠公御歸國附秀頼公大坂移徙

十一日〇慶長四年正月大名小名登城して秀頼公に御禮有、其後大廣間にて列座有ければ、大老奉行出座有て仰出されけるは、天下の諸法度は、先御代の條目を彌違背有べからず、〇中略其前代の諸法度左に記す、

一諸大名緣組之儀、御意を以可相定事、

一大小名深重契約誓詞等、御停止之事、

一自然於喧嘩出仕者、致堪忍之輩、可被屬理運ニ事、

一小身之儀者不及申、雖爲大身、目懸之女房大勢不可相抱事、

一酒者可限器、大酒御制禁之事、

一乘物御赦免之衆家康、利家、秀家、景勝、輝元、隆景、幷大老、長老、出世之衆、此外、雖爲大名、若年之衆は可爲騎馬、年齡五十以後之衆におゐては、及路次一里者、駕籠之儀御赦免被成候、於當病者、是又駕籠御免之事、

右之條々、違犯之輩者、可被處嚴科者也、

文祿四年八月二日

隆景
輝元
秀家
利家
家康

〔豐臣秀吉譜 下〕文祿四年八月、秀吉又下九條法制于諸人、〇中略其四曰、小名者、本妻之外可蓄一妾、又不可別求屋宅、大名亦其侍妾者、一兩人而可也、〇又見大坂城中壁書

古事類苑

官位部五十一

德川將軍

一後陽成天皇ノ慶長八年、德川家康征夷大將軍ニ補任セラレテヨリ、子孫之ヲ世襲シ、天下ノ大政ヲ統治スルコト、十五代凡ソ二百六十餘年ニ及ベリ、初メ家康ガ伏見城ニ於テ拜任スルヤ、勅使上卿、奉行、職事、辨官等臨ミテ之ヲ奉行シ、事畢テ後、將軍參賀ノ儀アリ、秀忠、家光亦上洛シテ拜任ス、皆家康ノ例ニ依レリ、而シテ家綱幼稚ニシテ家職ヲ襲ヒ、上洛スル事能ハザルヲ以テ、江戸城ニ於テ拜任ス、爾後此例ニ依リ、復タ上洛拜任ノ事ナシ、德川氏ノ位階兼官ハ概ネ足利氏ノ例ニ依リ、二位、大臣ニシテ、源氏長者、淳和奬學兩院別當、近衞大將、馬寮御監ノ數職ヲ兼ヌルヲ以テ例トス、而シテ現ニ將軍ノ職ニ居リ、從一位太政大臣ニ至リシモノハ、累世ノ間、唯家齊ヲ以テ然リトス、

宣下式

〔光豐公記〕慶長八年二月十二日、將軍宣下〈○德川家康〉有之、上卿廣橋大納言、奉行光廣朝臣、辨俊昌、地下如例、次上卿、職事、辨、此外地下役者共、〈予〉召連、爲勅使伏見內府〈江〉參、將軍之宣旨、氏長者宣旨、牛車宣旨、兵仗宣下、淳和奬學兩院宣旨有之、先至伏見、久脩參、御身固有テ、勅使〈予〉御禮申、宣下自出度旨申、著座、次上卿、奉行、辨、進次於南庭、副使二拜シ、昇進之二音、次將軍之宣旨、官務獻之、取次大澤侍從、內府拜見、其蓋ニ砂金袋二ツ入、官務給、次氏長者外記官務兩宣旨、是又外記官務ニ砂金二宛拜領、牛車兩宣旨、是砂金一宛給、兵仗宣旨、官務砂金給、任大臣宣旨、砂金外記給、此外役者共下行有之、又其外銀子三枚宛拜領、上卿金子十枚鞍置馬被引、奉行金子五枚、辨金子五枚、勅使金子五枚、鞍置馬拜

領、勅使五枚之儀不審、殘衆八、陣儀役者故一廉也、今日之勅使陣儀案內計也、內府心得次第可レ謂尤也、路次第、勅使雜色廿人、布衣二人、烏帽子著五十人、次上卿同、次奉行、職事雜色十人、布衣二人、烏帽子十五人、辨同、

〔東照宮將軍宣下之記〕慶長八年二月十二日、於伏見城有此儀、勅使勸修寺右大辨宰相光豐、束帶、　上卿廣橋大納言兼勝、束帶帶劒、　參仕辨坊城藏人左少辨俊昌、束帶、　奉行職事烏丸藏人頭左中辨光廣、束帶、

右各乘レ轅、官外記以下地下之官人等乘輿、堂上者到玄關而下輿、地下者到三之門而下、大樹〇德川家康著御紅之御直垂、諸大夫以上各著直垂、其外諸侍等、各著素袍、大樹御出上壇、御座定之後、土御門陰陽頭久脩參進、奉仕御身固、束帶持笏、其儀先向坤之方唱呪文一揖、次取出小刀面、左右之御手之中、御胸之上書レ符、畢退、次告使中原職善、束帶持笏、進前庭告御昇進、三度高聲告之、其詞御昇進、次右大辨宰相被レ申勅語之旨、其後上卿已下被レ候中壇、次副使二人持參宣旨、各覽宣旨入之筥、次大外記中原師生、左大史小槻孝亮取レ之渡大澤、兵部大輔基宿、大澤取レ之置御座之御側、次御覽畢、大澤取空筥渡永井、右近大夫尚政、永井入レ祿、砂金、傳大澤、大澤取レ之下兩局、第一將軍宣旨一通、第二氏長者宣旨一通、第三淳和弉學兩院別當宣旨四通、外記方、官方、第四右大臣宣旨一通、第五牛車宣旨一通、第六兵仗宣旨一通、右之祿、每一通砂金各賜一裹、部九贐、次黃金百兩、御馬、置レ鞍、御紋葵、廣橋大納言賜レ之、次黃金五拾兩、勅使右大辨宰相賜レ之、右役送永井、西尾、丹後守忠長、等勤仕之、其後上卿、勅使、奉行職事、辨參賀、被レ獻御太刀、大澤傳獻レ之、官務、外記以下、自獻御太刀拜伏、次令レ入簾中給、其後地下之輩各須賜祿、人五百疋、　三月廿一日、自伏見御入洛、供奉之侍各著袴肩衣、　廿五日、御參內、御劒之役本多、縫殿助康俊、御簾之役大澤、路頭行列遠山勘右衞門、山口勘兵衞沙汰之、前駈全阿彌騎馬、從者百餘人、次板倉伊賀守、勝重、同騎馬、次隨身八人、騎馬金襴袍壺垂袴、帶劒弓箭、御車之先、布衣之侍三十人許、皆是譜代之士也、各步行、大樹乘御御車、自御里亭到禁內、

警衛者尤精選之人勤之、諸大夫等皆騎馬也、於禁門之內者、御簾勸修寺右大辨宰相、御沓四條左少將隆昌也、以長橋爲直廬代、被改御裝束也、(御衣冠也)

御進上之事

銀子千枚　御小袖　(後陽成院)禁裏　銀子千枚(〇千枚、御湯殿の上日記作二百枚)　御小袖　(新上東門院)女院

銀子二百枚　(中和門院)女御　銀子五十枚　長橋局

銀子三十枚宛　局皆々江

同廿七日、將軍家江公家衆御禮之次第、

一番八條殿(智仁親王)　二番伏見殿(邦房親王)　三番九條殿(關白兼孝)　四番一條殿(前左大臣內基)　五番二條殿(前左大臣昭實)　六番近衛殿(左大臣信尹)　七番鷹司殿(大納言左大將信房)　何茂上壇之御禮　大納言、中納言、少將、侍從迄、床下之御禮也、

廿九日、門跡衆御禮、

〔千代のためし〕神祖、當職ニ任ゼラレ給ヒシ佳例ヲ親ヒ考フルニ、慶長八年二月十二日丑刻、禁中ニヲイテ、上卿廣橋大納言兼勝、奉行烏丸藏人頭左中辨光廣、參仕辨坊城藏人左中辨俊昌、及ビ外記史、其餘ノ官人著陣アリテ、征夷大將軍、幷ニ條々宣下セラルベキ旨仰行ハレ、夫ヨリ勅使勸修寺參議光豐、及ビ上卿、奉行、兩局以下伏見ニ參ラル、(〇中略)告使中原職善、束帶笏ヲ持、御庭ニスヽミ出テ、御昇進ト高聲ニ呼事二度シテ退ク

告使ハ、小舍人コレヲ勤ム、其第ニ參リ、昇進ニツキ、昇殿アルベキ由ヲ告ル使ナリ、コレ古ヨリ有事ナレドモ、高聲ニ呼ハル事ハ、此時ヲハジメトス、

副使二人、外記官方ノ宣旨ヲ覽筥ニ入テ持參、左大史小槻孝亮、征夷大將軍ノ宣旨ヲ取テ獻ズ、大澤兵部大輔基宿、御前ニ獻ルヲ御覽アリ、基宿空筥ヲ永井右近大夫直勝ニ渡ス、直勝砂金二包ヲ

入テ基宿ニ返ス、基宿是ヲ孝亮ニ與フ、孝亮拜受シテ退ク、
義滿ノ時ハ、大外記師茂、將軍ノ口宣ヲマヒラセシナリ、義教ノ時ハ、小槻周枝持參ス、時ニ官ハ長者ナリトアレバ、官務ヲイフナルベシ、義政ノ時ハ、辨ヲ召シ、將軍宣旨ノ事ヲ仰スト康富記ニ見ニタレバ、此時モ又官務ウケ給ハリシナルベシ、義輝ノ時モ官務ナリ、然ルニ慶長十年、台廟〇德川秀忠將軍宣下ノ御時ノ事ヲ記セシ西洞院時慶卿記ニ、將軍宣下ハ、官外兩人ヨリ上候由トアルハ、イカナル故ニヤ、其後ノ宣旨、又皆官務ウケ給ハレリ、又砂金ヲ入テ返サルヽ事、賴朝ノ時ハ砂金百兩ヲ贈レリ、ソレヨリ後一包ナリシガ、義滿ノ時ヨリ二包ヲ贈ル事トナリシト見エテ、延德二年義稙將軍宣下ノ記ニ、將軍宣下砂金、先規一裹也、然鹿苑院殿〇足利義滿御代有御執、此宣下被增一包トアリ、又大外記康富義政將軍宣下ノ事ヲ記セシ條ニ、砂金廿兩、十兩ヲ一裹トナスト見エタリ、

〔將軍宣下三十一度儀不同次第〕一當家神祖より御三代の間の時の事
神祖〇德川家康の御時は、伏見の御城にして、將軍宣下の事承はらせ給ひ、やがて御參內ありて御拜賀あり、其後將軍の御事を德廟〇德川秀忠へ讓らせ給ふべきにて、御父子共に御上洛ありて、宣旨かうぶらせ給ひ、御參內ありて御拜賀あり、其後德廟より猷廟〇德川家光へ御讓職の時も、前の例の如く御父子御入洛、宣旨をかうぶらせ給ひて、御參內ありて御拜賀あり、
謹按、京都にて宣旨を承はらせ給ひし事は、室町殿の例に似たれども、室町殿はもとより京に御座ありし也、又御拜賀の事ありしとも見えず、當家御三代は、はるばる關東より御上洛ありて、宣旨をかうぶらせ給ひ、御參內ありて御拜賀あり、御父子御讓職の事ありしに至りては、室町殿の代に其例を聞かず、まして鎌倉の例に比すれば、もつとも大にかはれる也、
一殿廟幷前御代の事の時の事

嚴廟（○德川家綱）御幼稚たるが故に、御上洛の事に及ばず、官使はじめて關東に下向あり、堂上の人人おの〱又參賀せらる、其儀すこぶる室町殿の時の例に似たり、（○註略）前御代（○德川綱吉）御幼稚の事にあらずといへども、嚴廟の御時の例を用ひらる、

謹按ずるに、此御兩代、關東にて宣旨かうぶらせ給ひし事は、賴朝の例に似たりといへども、其儀の次第は、彼例に同じからぬ事共あり、（○中略）且は又神祖より此かた三代、當家の御例ども同じからず、（○註略）さらば嚴廟より此かたの御例は古來將軍家の例にもあらず、又當家の初例にもあらず、細かにこれを論じなば、嚴廟の御時は、御幼稚のうちなれば、一時の權宜の變例とも申すべし、前御代の事をもて、今日の御例の始とぞ申すべき、然るに世の人此儀は武家の舊儀當家の御佳例也と申すは、大にあやまれる事なるべし、

〔將軍宣下記〕慶安四年八月十八日癸亥、今日將軍宣下（○德川家綱）ノ勅使、幷院使、新院使、女院使以下登城ス、依之御一門ノ歷々諸大小名御譜代ノ御家人近習之輩群參ス、其官位ノ品ニヨリテ各著衣冠、大納言家（御諱家綱、御歲十一歲、）御座ノ間ニテ衣冠ヲ著御有テ、午ノ刻白書院ニ出御、上壇ニ御著座、御劒ノ役ハ侍從源高如（品川內膳正）御刀ハ本多土佐守藤原忠隆役之、於是高倉前大納言藤原永慶衣冠ノ上ニ大帷子ヲ著シ、御前ニ進出、御裝束ノ御襟ニ聊手ヲツケ退ク、次ニ土御門二位安部泰重同衣冠ノ上ニ大帷子ヲ著シ、韈ヲハキ、笏ヲ持御前ニ跪キ、日時ヲ考、吉方ニ向テ揖シテ御身固ノ事ヲ勤ム、（先例御身固ハ陰陽頭御手ノソチチマジナヒ奉事ナレドモ、御幼君ニマシマス故、御衣ノスソヲマジナフ耕云云、）兩卿退出ノ後、紀伊亞相源賴宣卿、水戶黃門源賴房卿、尾張參議源光義卿、紀伊參議源光貞卿、御前ノ中壇ニ入テ著座、御目見御裝束似合奉ルト賀シ被申退カル、（水戶三位中將源光國卿ハ、違例ニ依テ出仕ナシ、）其後大納言家大廣間へ出御、上壇ニ御著座、御劒御刀ノ役同前、御傍ニ館林侍從源乘壽（松平和泉守）伺候ス、是ハ御幼君ニマシマスニヨツテナリ、勅使菊亭前大納言藤原經季卿束帶シテ、御前ノ下壇ニ入テ著座、院使、新院使、女院使ハ御次ノ間

ニ有、今度征夷大將軍、淳和弉學兩院別當、源氏長者、牛車ノ宣旨ハ、壬生官務主殿頭小槻忠利持參之、內大臣、右近衞大將、右馬寮御監、源氏長者、右近衞大將如舊、隨身兵仗、牛車ノ宣旨ハ、押小路大外記掃部頭中原師定持參之、共ニ御次ノ間ニ有、既ニシテ大藏民部少輔紀正直、束帶シテ御次ノ階ヲ下リ、座上ヲ經テ御前ノ階ヲ上リ、落緣ニ揖シテ兩度拜シ、高聲ニ御昇進ト二返唱ヘ下テ退ク、於是征夷大將軍ノ宣旨ヲ覽箱ノ蓋ニ入、副使ノ人取次テ官務小槻忠利ニ渡ス、忠利請取之、御前ノ板緣ニ持參ス、侍從源義多（吉良若狹守）出向ヒ請取之、御前ニ捧出ヅ、則御頂戴、義多給テ御床ノ上ニ置、右ノ覽箱ノ蓋ニ砂金ヲ袋ニ入テノセ忠利ニ賜フ、酒井日向守源忠能奉リ渡ス、（宣旨一通ニ砂金拾兩宛也、當座ハ其品計ニテ砂金賜フ事ハ後日ニ沙汰アリ、）忠利拜受シテ退ク、次ニ內大臣ノ宣旨ヲ覽箱ノ蓋ニ入、副使ノ人取次テ大外記中原師定ニ渡ス、師定請取之、御緣ニ持參シテ義多ニ渡ス、義多御前ニ捧出、御頂戴ノ後御床ノ上ニ置、又覽箱ノ蓋ニ砂金ヲ入師定ニ賜フ、忠能奉リ渡ス、師定拜受シテ退ク、凡宣旨ノ次第ハ征夷大將軍、右近衞大將、右馬寮御監、淳和弉學兩院別當、源氏長者、牛車、是ハ七月十三日ノ宣下、次ニ內大臣、右近衞大將如舊、隨身兵仗、牛車、是ハ七月廿六日ノ宣下也云々、（此十一通ノ宣旨、先例ハ一通宛御前ヘ持參シテ毎度御頂戴有之、御幼君ニマシマス故略其義兩度ニ御頂戴、）次ニ菊亭前大納言經季卿、御前ヲ退テ禁裏ノ御太刀目錄ヲ捧出、御前ヘ參上ス、御太刀目錄御頂戴ノ後、義多給テ御床ノ上ニ置、經季退ク、次ニ小河坊城前大納言藤原俊完卿、仙洞ノ御太刀目錄ヲ持參ス、其儀同前、俊完退ク、次ニ清水谷前大納言藤原實任卿、新院ノ御太刀目錄ヲ持參ス、其儀同前、實任退ク、次ニ廣橋中納言藤原綏光卿、女院御所ヨリ進ゼラルヽ黃金拾兩ヲ持參ス、其儀同前、右經季卿ノ外ハ、衣冠ノ上ニ大帷子ヲ著ス、次ニ菊亭前大納言下壇ニ進出、自分ノ御禮申ス、太刀目錄添進物有、太刀目錄ヲバ下壇ノ閾ヨリ三疊目ニ置テ、御緣ニ退テ義多披露ス、　廿五日庚午、今日勅答就被仰出、勅使三院使其外登城、將軍家御烏帽子紅御直垂著御、白書院ヘ出御、御劍ハ品川侍從、御刀ハ內藤出雲守藤原忠由役之、御譜代御家人近習

各裝束シテ列參ス、勅使菊亭前大納言、院使小川坊城前大納言、新院使清水谷前大納言、女院使廣橋中納言一人宛出テ、中壇ニテ御目見、次ニ傳奏ヲ召シテ、今度將軍宣下ノ勅答被仰渡、若狹少將御挨拶申上、菊亭本座ニ皈ル、次ニ三院使ヲ一人宛召シテ御返事被仰渡、高倉前大納言、土御門二位御目見、何も御次ヘ退ク、勅使、兩院使、女院使ニ御暇ヲ賜フノ旨ヲ、若狹少將、廣橋侍從二人ノ執事吉良侍從云渡之、各忝由言上ス、次ニ高倉、土御門以下御暇被下由申渡、勅使、三院使、高倉土御門以下御前ヘ出テ拜シテ退ク、於是御衾障子ヲ開、列參伺候ノ御家人諸役近習ノ輩御目見、將軍家入御、次ニ白書院ノ左ノ間ニテ綿三百把、白銀五千兩皆臺ニスヘ並置、菊亭ヲ召出シ賜之由吉良侍從云渡ス、經季拜禮シテ退ク、二ノ臺ヲ引、次ニ小川坊城ヲ召出シ、御帷子單物二十領、白銀三千兩並置賜之由云渡ス、拜謝同前、次ニ清水谷ヲ呼出シ云渡ス、員數拜謝同前、次ニ廣橋御帷子單物十領、白銀二千兩賜フ、高倉員數同前、次ニ土御門ヲ呼出シ、御帷子單物十領、白銀千兩賜之由云渡ス、拜謝如右、次ニ官務大外記ヲ呼出シ、御帷子單物四領、白銀三百兩宛賜之、拜謝シテ退ク、次ニ告使ニ御帷子單物二領、白銀二百兩、副使兩人ニ御帷子單物二領、白銀百兩宛賜之、各拜受シテ退ク次ニ老中廊下ヘ出テ、攝家門跡ノ名代ノ使者、北面冠師等ヲ呼出シ、被物ヲ賜フ事差アリ、各拜謝シテ退出ス、一條内府ヘハ廣橋侍從、吉良侍從爲上使御暇被遣、御袷三十領、白銀五千兩被送之ト云々、　廿六日辛未、三院使一條内府高倉、土御門以下上洛ス、　廿七日壬申、勅使菊亭前大納言依御用滯留シ、今日上洛ス、　九月朔日丙子、酒井河内守ヲ召シテ、今度將軍宣下御禮ノ爲御名代、禁裏仙洞ヘ可被遣之旨被仰出、同吉良若狹守ヲ召シテ、河内守ニ可被指添之旨被仰出、　七日壬午、廣橋侍從、吉良侍從ヲ召シテ、上京ノ御暇被下、黃金五十枚、御袷三十領、御馬一疋、忠清拜領ス、黃金二十枚、義冬拜領ス、今度將軍家ヨリ御贈物、

禁裏ヘ御太刀馬代白銀壹萬兩幷綿五百把　仙洞ヘ御太刀馬代白銀五千兩幷綿三百把

新院へ御太刀馬代白銀三千兩幷綿二百把　女院へ白銀三千兩幷綿二百把
御太刀馬代白銀千兩一條關白昭良公　白銀五百兩勾當内侍　同三百兩按察局　同三百兩右衞門佐局　同五千兩禁裏女中　同三千兩仙洞女中　同二千兩新院女中　同二千兩
女院女中

此外菊亭前大納言ハ江戸ニテ御暇ノ時、拜領若干有トイヘドモ、傳奏ノ爲御祝儀、御太刀馬代黄金十兩賜フ、十日乙酉、吉良侍從上京ス、十一日丙戌、朧橋侍從上京ス、十月十三日丁巳、朧橋侍從、吉良侍從下著ス、於京都去月廿五日參內、同廿八日ニ從禁裏仙洞御暇被下、其節禁裏ヨリ朧橋侍從ニ御劍菊一文字ヲ賜フ、仙洞ヨリ御劍長光ヲ賜フ、其外祿物差アリ、吉良侍從ニ禁裏ヨリ御劍備前三郎ヲ被下、仙洞ヨリモ御劍包平ヲ頂戴ス、其外祿物有之ト云々、十五日己未、朧橋侍從、吉良侍從登城ス、禁裏仙洞ヨリノ御返事ノ旨ヲ述ブ、今度京都ヘ御祝儀ノ御使相勤、目出度相調レバ、兩人共ニ可任少將ト被仰付、忠清ハ改河内守可爲雅樂頭ト被仰出ト云々、

〔光臺一覽〕四御當家は東照大權現宮始て從五位下三河守に御任官せられてより、階級超越なく、御昇進に一ツも私なる競望なくして、御在生にて太政大臣從一位迄任官被遊候て、薨御以後東照大權現宮と神號まで勅許有、被贈正一位事、大功成御事なり、宮號は中々希代の御事也、夫より歷代世に之れる所なれば略之、征夷大將軍に補任被成たる御方は、御代々何れも贈正一位太政大臣也、扨御當家御昇進の次第は、生立三位の中將にて、從二位の大納言まで御歷任有て、以後將軍宣下被遊御格式流例なり、將軍宣下の節は、宣旨十一通一度に被下候、御兼任の官職多く有故也、十一通に次第々々有、左に記すが如し、十一通之內六通大外記、五通官務なり、次第味ひて一覽あるべし、此宣旨は文昭院樣之將軍宣下の時なり、大外記官務の諱もその通りなり、

從二位權大納言源朝臣家宣

右以件人宜令敍正二位

寛永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

正二位權大納言源朝臣家宜

右以件人宜令補任征夷大將軍

寛永六年四月幾日

修理東大寺大佛長官正六位上兼左大史主殿頭主馬首小槻宿禰季連奉

正二位征夷大將軍源朝臣家宜

右以件人宜令兼任右近衞大將

寛永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

正二位權大納言兼右近衞大將源朝臣家宜

右以件人宜任內大臣

寛永六年四月幾日

修理東大寺大佛長官正六位上兼左大史主殿頭主馬首小槻宿禰季連奉

內大臣正二位兼右近衞大將源朝臣家宜

右以件人宜令兼補右馬寮御監

寛永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

內大臣正二位征夷大將軍源朝臣家宜

右以件人宜令補任淳和院奬學院兩院別當

寛永六年四月幾日

修理東大寺大佛長官正六位上兼左大史主殿頭主馬首小槻宿禰季連奉

內大臣正二位征夷大將軍源朝臣家宣

右以件人宜令補任氏長者

寶永六年四月幾日

修理東大寺大佛長官正六位上兼左大史主殿頭主馬首小槻宿禰季連奉

內大臣正二位征夷大將軍源朝臣家宣

右以件人宜令給仕近衞府次將各三人矣

寶永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

內大臣正二位征夷大將軍源朝臣家宣

右以件人宜令奉仕番長看督長等矣

寶永六年四月幾日

修理東大寺大佛長官正六位上兼左大史主殿頭主馬首小槻宿禰季連奉

內大臣正二位征夷大將軍源朝臣家宣

右以件人宜令聽乘牛車出入王城矣

寶永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

內大臣征夷大將軍源朝臣家宣

右以件人宜令帶隨身兵仗出入宮中矣

寶永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭造酒正中原朝臣師英奉

右如斯次第なり、うけたまはりての名は、月日の下に制字に縮めて書事也、扨此上卿職事奉行は文官武官兩方六人也、○中略扨又總別官位の本昇進と申は、參內をつとめ、殿上の間にのぼりてこそと有事なるに、關東の武家方之如く、關東に御座なされながら、御昇進有之候、消息宣下とて、公

卿補任の格の外の御官位なり、〇中略

右は、前申如く家宣公は六代目文昭院樣之將軍宣下の宣旨寫也、扨將軍宣下に付、關東參向に付、御諸司へ御往來は左之通也、

口上之覺

今般就將軍宣下、左之通參向之事に候、尤從大津品川迄、御傳馬、船川渡之證文、御朱印幷路物等、任先例宜有御沙汰候、參向衆中面々供奉之人數書遣之候、以上、

勅使　高野大納言　庭田前大納言　院使　松木大納言　仙洞使　梅小路中納言　女院使　藤谷三位　新女院使　甘露寺辨　女御使兼て

就將軍宣下參役之面々

上卿　高野大納言　職事奉行　甘露寺辨　御束帶著御之役　高倉中納言　御身固之役　土御門三位　兩局　押小路大外記　壬生官務　召使　青木右衛門尉　副使　山口右兵衛志　告使　青木兵衛尉

右之通、來ル十三日ゟ十五日迄、追々に可致發足之旨、御沙汰御治定候、猶別紙書附爲御心得申入候、以上、

四月九日　庭田前大納言

高野大納言

松平紀伊守殿

如斯格式也、扨往返相濟、御發足有之也、彼家宣公の將軍宣下は、寶永六己丑年五月朔日なりしが、總別關東の將軍宣下の御儀式は、白木書院也、將軍樣にも夫迄は從二位の大納言也、御上段之二疊臺を相除き、左方に御著座、堂上方は勅使の御口上は、年頭一通り、自分之御禮等は、初卷に記す

如きの例事相濟て、將軍樣入御、堂上方も一先休息所江退出、暫有て又出御御著座、上卿一人獸禮計有て、中段之少し右手に著座也、武家方左之方に著座、大方は著座之大名彼方格式、又は御差圖有事にや、上卿之高野正二位大納言保春卿、中段に著座有て、內辨代職事奉行兼て、甘露寺藏人頭正四位左大辨尙長朝臣、廣橋に候して外辨代也、地下は落緣に跪て伺候す、時に內辨代外辨に下知有、辨承りて召使に仰す、召使大外記に仰す、最初大外記正二位の宣旨柳箱に載て、外辨式事の所に至る、外辨式事請取て下段の上卿に渡す、上卿上段に至り、畏て宣旨を大納言樣江被上、御頂戴有て拜覽す、又柳箱に被載、時に高家衆宣旨を御床之三方に直し、柳箱を下段の內證へ持參、直に柳箱に黃金五兩入て落緣に持出、大外記に返し渡さる、此人は並高家衆也、次に又內辨高野、外辨甘露寺江被仰付事、前の如く外辨召使に仰す、召使官務に仰す、官務征夷大將軍の宣旨を柳箱に入、外辨之前に持參し渡す、外辨請取て上卿に渡し、上卿又御前に持參る、御頂戴拜覽有て、右の如く高家衆三方に載置て、黃金五兩入、官務にもどし渡す、如斯する事十一度、以上十一通之綸旨御頂戴、拜覽の次第は、前に書記申候宣旨の如し、其儀終ておの〱獸禮のみにて入御、上卿職事地下等退出、扨御帳臺上段に著御、高倉從二位中納言永福卿御目見、御老中高家著座、御裝束調進之樣子御老中御挨拶、高倉平伏而跪候有、于時三高家、御側御用人間部越前、越智下總守ともに、御裝束執出し、于時高倉御裝束奉屬之、以前裝束入之大硯蓋、將軍樣掌を三度上て御頂戴之御心持有之と也、扨束帶有て御帳臺より出御、白木書院上段之少し左之方に著座、禁裏御所方の御太刀目錄三高家持參庭田請取之、中段より上段にいたり、將軍樣江御渡、御頂戴之次第は年禮の如し、高野將軍宣下御昇進目出度之勅諚被述之、　秘に曰、このとき將軍樣、御頭少許下り候と見へ候と申候、餘人の不存處、本束帶にて候得ば、思召まゝに御身かろく、起伏遊ばされがたきと申事を不存故に、世人武家よりこのときなどの、將軍樣之御相好、承りおよびたるものは、勅使に對して

さへ公方樣には、如斯など云あへるよし、束帶の味不存上は、是非なき事也、右傳奏又は外之御使三位以上中段著座、殿上人下段、地下廣緣と段々と著座以後、將軍樣御帳臺ゟ出御有て、上段に御着座之時、土御門散三位、陰陽頭天文博士泰福卿、中段より玉緣ぎわに伺公して、將軍樣の正面に坐し、御身固の祓有、祭文を被誦間良久し、その以後は右のごとく勅使、院使、總御所方の御使、御目出度なりと口上述らるゝ、御事とかや、それ終て自分の御祝儀物、同御祝儀述らるゝなり、御老中方御挨拶有之由也、面々一禮終て著座、將軍宣下之祿物は、

判金十枚　上卿 高野大納言　判金五枚　式事奉行 甘露寺辨　黃金百兩　御裝束奉行 高倉中納言

右御裝束調進之料は、京都にて請取候也、

黃金五十兩　御身固料 土御門三位　同三十兩　大外記右大史　同二十五兩　官務左大史

此兩人は先刻柳營に入被下之

同十兩召使　同五兩副使　同十兩告使　告使は後刻殿中披露申て後也、

右之通なり、是は各將軍宣下に付て之下行料金也、右下行の御禮各祝し申上らるゝ中に、告使靑木兵衞尉副使を相伴ひ、御同朋衆奥向表方夫々の役次第先立して、營中より御玄關迄さしものひろき御城中、千疊ゑきもひゞくばかりに、御昇進々々々々と大音を上て呼はり廻に、其音に付て武家方の開番ども逸足を出し、馬上にて屋敷へ歸り、獻立の用意仕もあり、殿中にても番衆は番頭江向ひ祝儀を述べ、組子は組頭夫々に扨々御めでたさよと互に一禮述べ、天下泰平と稱歎の聲やまずとかや、其御屋敷夫切に退出有て、次の日御饗應、例之通被下、御能被仰付、御暇乞面々拜領物夥敷目出度歸路有也、追付將軍宣下御禮上使上洛ある也、この節は松平下總守殿御上洛有之、品々の獻上物有之候得共、失念申候也、

〔翁草四〕將軍宣下之事

寶永六己丑年五月朔日、巳之刻家宣公將軍宣下、

一御黒書院出御、御束帶御上段御著座、御裾御太刀御劍、高倉中納言衣冠、右出座、於下段御目見、高家披露之、則於御上段御裝束御衣、紋之規式、秋元但馬守相加リ勤之、但馬守御取合セ申上退去、束帶土御門兵部少輔、右出座、御敷居外ニ而御目見、高家披露之、但馬守先達而御敷居際迄罷出、土御門御上段ヘ上リ、御身固之規式相勤之、但馬守御取合申上て退去、

一御白書院出御御先立、御上段御著座、尾張中納言殿、紀伊中納言殿、水戸中納言殿、水野中將殿、右御對顏、老中披露之、老中御挨拶申上之、畢テ退去、松平加賀守、右御目見、同人披露之、畢テ退去、松平肥後守、井伊掃部頭、右御目見畢テ、

一大廣間出御、御先立御上段御著座、松平肥後守、井伊掃部頭、西ノ板緣ニ著座、

勅使　高野大納言、庭田前大納言、　仙洞使　梅小路中納言　春宮使　鷲尾中納言　女院使
　滋野井宰相　中宮使　外山宰相　大准后使　交野三位　右一人宛出席、中段之左右ニ著座束帶、

一告使山科民部丞、束帶於庭上向御前、御昇進と二聲呼之則退去、

一宣旨覽箱ニ入、副使青木左衞門御車寄御緣通覽箱持出之時、高家品川豐前守板緣ニ出向請取之、宣旨備御前上覽之內、豐前守ハ下段ヘ退去、官務ハ落緣ヘ退去、

一宣旨之次第　征夷大將軍、右近衞大將、右馬寮御監、淳和奬學兩院別當、源氏長者、兩宣旨、

　以上六通

右一通宛上覽、御右之方ニ被爲置之、其後御納戶構ヘ久世大和守納之、豐前守出座、覽箱取之、西之御緣ヘ持出、安藤長門守ヘ相渡之、長門守請取之、砂金二包覽箱ニ入レ、南之松の緣ヘ持出之時、官務出向、覽箱請取、頂戴之退出、

一宣旨覽箱ニ入、副使青木右兵衞尉御車寄御緣迄持來、押小路權大外記ヘ相渡、大外記落緣通覽箱持出ル之時、高家織田能登守板緣ヘ出向請取之、宣旨備御前、上覽之內能登守ハ下段ヘ退去、大外記ハ落緣ヘ退去、

一宣旨之次第　內大臣、右近衞大將如元、隨身兵仗、牛車、兩宣旨、

以上五通

右一通宛上覽、御右之方ニ被爲置之、其後御納戶構ヘ大和守納之、能登守出座覽箱取之、西之御緣ヘ持出之、長門守ヘ相渡之、長門守請取、砂金一包覽箱ニ入、西之板緣ヘ持出之、大外記出向ヒ覽箱請取、頂戴之退去、

一勅使　院使退座、〇下略

〔享保集成絲綸錄　六〕寶永六丑年六月

一將軍宣下〇德川家宣付大赦被行之、就夫諸家中井領分百姓等に至まで、公儀江伺申付候者勿論、自分より罪科申付置候者共、差免候而も、仕置障り不申分者、其品により相應に赦免、又者歸參等之儀も、主人心次第宥免被致可然候、〇中略

六月

〔京都御役所向大概覺書　三〕赦之事

一正德三巳年、家繼〇德川樣將軍宣下ニ付、牢舍之者、赦被仰出候、

〔鵞峯文集　四十啓札〕奉賀將軍宣下

辛卯〇慶安四年八月十八日、正二品亞三台源大君〇德川家綱補征夷大將軍兼右近衞大將、任內大臣、勅使前亞相藤經季登營述詔命獻宣旨、誠是武門之急務、天下之盛事也、其承襲連綿之久、嗚呼美哉大哉、擧世無不欣歎焉、如僕以從群士之後、竊見其禮儀、可謂幸也、於是漫忘鄙賤、謹演慶賀、綴研儷

補任次第

體一篇云、

候雁影連、皇華來五十驛、秋鶴齡永、將種榮千萬年、奉紫詔於西京、開青幕于東海、恭惟大君幕下閫國所倚、庶民具瞻、柳營大樹之權、閫外一統、蓮府台槐之貴、日下無雙、乃文乃武、備而兼幷、有威有儀、儼然望甚、冑子累葉、蔑視建久補賴朝、幼冲肯堂、絕勝應安任義滿、竊聞守成不易、仰祝太平可期、神祖烈考英靈格天、監臨在此、老臣群僚、寬猛濟世、調護勉旃、僕幸逢淸時、忝拜盛禮、爰描尺素、聊抒寸丹、

〔公卿補任 後陽成〕慶長八年癸卯

右大臣從一位源。家康。（二月十二日轉任、今日征夷大將軍、氏長者、淳和奬學兩院別當、牛車、隨身兵仗、八人等宣下、）

〔御湯殿の上の日記〕慶長八年二月十二日、內ふ（○德川家康）しやうぐんせんげあり、しやうけいひろはし大なごん、ぶぎやうとうの左中辨、さんしの辨左少辨也、

〔慶長年錄（朝野舊聞裒藁四百九十六所引）〕慶長八年二月、內府家康公、賴朝、尊氏之例にて、將軍補任可被成由に而、兩傳奏衆、勸修寺殿、廣橋殿、伏見（江）下向被成、御內意御相談候間、吳服四重、黃金六枚兩人（江）被進、

三月（○三月二月誤）十二日御補任あり、

〔柳營譜略〕東照大權現宮

慶長八年二月十二日、被補征夷大將軍、聽牛車、賜隨身兵仗、補淳和奬學兩院別當、源氏長者、御轉任右大臣、　同十年四月朔日、御讓職之儀被奏請、　七日、勅許有之、　八日、御上洛、　十日、御參內、　十六日、以大將軍之職被為讓台德公、（○德川秀忠）自此日奉稱大御所樣、　同十六年三月六日、駿府御發駕、　十七日、二條御城入御、　廿一日、以勅使太政大臣可有御昇進旨、菊桐之御紋可賜旨、內々之宣旨有之、然共堅有御辭退不被為受、　元和二年四月十七日、於駿河御城薨、御春秋七十五、　同三年二月廿一日、勅賜東照大權現之神號、（上卿日野大納言弘資、職事廣橋頭辨忠實、）

〔台德院殿御實紀 四十二〕元和二年四月、この月江戸增上寺にも靈廟を造營せられ、僧徒法諡を奉

りて安國院殿德蓮社崇譽道和大居士と稱し奉る、

〔千代のためし〕鎌倉數世ヨリ、足利義詮ニ至ルマデハ將軍ニ任ゼラレシ後、官或ハ大納言、或ハ大臣ニ進ミ、左右ノ大將ヲ兼馬寮御監ノ宣下アリシ輩ハアレドモ、兩院別當、氏長者ハ搢紳家ノ與ル所ニテ、源氏公卿第一ノ人是ヲ兼タリ、義滿ニ至リ、應安元年征夷大將軍ニ任ジ、大納言ノ大將ニ進ミ、康曆元年馬寮御監ノ宣下ヲ蒙リ、永德二年左大臣ニ轉ジ、牛車ヲユルサレ、同三年氏長者トナリ、其年兩院別當ニ補シ、應永元年太政大臣ニスヽミ、兵仗ヲユルサレタリ、サレバ前後此人ノミ、武家ノ貴權ヲ極メラレシトイフベシ、然レドモ義滿相國ノ任ヲ望シ時、公卿僉議アリテ、武家ニテ氏長者ヲ兼シ事、稀代ノ榮幸ナレバ、此上ノ希望ハ叶フマジキ由ナリシカバ、義滿怒テ殆朝家ヲ傾ケマイラセン結構ニヨリ、止事ヲ得ズ、望ノマヽニ任ゼラレタレバ、全ク勳功ニヨリシ特恩ニハアラズ、夫ヨリ後、足利家ノ數世、タマタマ氏長者トナリ、兩院ノ別當ニ補セシ人アレドモ、或ハ搢紳家ニ宣下セラレ、公武カハルカハル其闕ニ補セシナリ、又上代ヨリ已來、三公ニ列シテ將軍ノ宣旨ヲ請シ人ナシ、賴朝尊氏ハ、共ニ二位ノ大納言ニテ、將軍ノ宣旨ヲ請タリ、鎌倉、室町ノ數世補任アリシモ、皆四位五位ノ中將少將タリ、參議ニテ宣下セラレシハ、義詮、義政、義稙、義昭ノ四代ノミナリ、又武功ニヨリテ此職ニ補セシハ、賴朝、尊氏ノ兩將ナレドモ皆希望ノ意ニイデ、且天下ヲ平治シ、四隅ニ至ルマデ、法度行ハレシニアラズ、信長、秀吉、天下ノ權ヲ執リシカドモ、將軍ノ宣下ニ及バザレバ、海內ヲ制令スベキ職掌ナク、名義正シカラズ、今筆記スル事權アレドモ、慶長五年大捷ノ後、將軍宣下ノ內勅アリテ、列侯ノ輩モ、宣下シカルベキ旨言上セシカドモ、亂世ノ後、上下イマダ其所ヲ安ゼズ、萬民安堵ノ時勢ヲ見ハテヽコソ、宣下ヲモ行ハルベケレトテ肯ヒ給ハズ、マヅ豐臣秀賴ノ不逞ヲセメ給ハズシテ、其封邑ヲ定メラレ、同ジキ六年、上杉中納言景勝、佐竹右京大夫義宣等ニ、得替ノ事ヲ沙汰セラレ、ヒトリ島津家ノミ、其罪ヲオソレテ參勤セザ

リシヲモ又咎メ給ハズ、シバ〳〵御使ヲモテ、仰遣サルヽ旨アリ、シカノミナラズ、領國安堵ノ御誓詞ヲサヘ賜テ、懇ニ諭シ給ヒシカバ、同ジキ(○慶安)七年十二月、島津陸奥守忠恒、上洛シテ拜謁アリ、コヽニ至リテ四海統一シ、萬民其所ヲ安ジ、撥亂反正ノ大勳功ヲ遂ラレシカバ、勅命ニ任セラレ、同八年、御歳六十二歳(○徳川家康)ニ及バセ給ヒテ、征夷大將軍ノ宣旨ヲ請サセラレシナリ、關原役ノ後、御齢耳順ヲ踰サセ給ヒ、ナヲ天下ノ爲ニ御力ヲ盡サレ、強チニ其職ニ當リ給ハザル御掛念、彼ノ希望ニ出ル輩ト懸隔ナリ、無量ノ御神德、千萬世ノ泰平ヲ基ヒシ給ヒシ事、一事ニ就テモ、名義ノ正シキヲ窺ヒシルベキモノナリ、サレバ其間、已ニ三公ニ列セラレ、氏長者、兩院別當、牛車、兵仗ノ宣旨ヲ併セテ、トモニ賜リシ特命ハ、開國已來未曾有ノ事ニシテ、中間一年ヲヘダテ、同ジキ十年、台廟(○徳川秀忠)此重職ヲ繼セ給ヒシヨリ、今ニ至テ氏長者、兩院ノ別當トモニ、搢紳家ノ競望ニヲヨバズ、ナガク當家ノ光輝トナレリ、

〔公卿補任 後陽成〕慶長十年乙巳

內大臣正二位源秀忠。。(○四月十六日任、今日征夷大將軍、爲淳和奬學兩院別當、牛車隨身兵仗等宣下、同日敍正二位、越階、)

〔家忠日記增補追加〕慶長十年正月九日、大神君(○徳川家康)江戶ノ城御首途洛ニ赴セ給フ、　二月十九日、大神君、伏見ノ城ニ著御、　廿四日、台德院殿(○徳川秀忠)江戶ノ城御首途、洛ニ赴セ玉フ、供奉ノ輩十萬餘人、　三月廿一日、行粧ヲ整エシメ、台德院殿、伏見ノ城ニ入給フ、　廿九日、台德院殿參內、　四月七日、將軍興奪、　八日、大神君伏見ヨリ御入洛、　十日、大神君參內、　十六日、台德院殿、征夷大將軍、氏長者、淳和弉學兩院別當ニナリ給フ、同日任內大臣、敍正二位、聽牛車隨身兵仗、

〔柳營譜略〕台德院殿(御諱秀忠公)

慶長十年二月廿四日、江戶御發駕、御行粧盡美、凡十萬餘人奉供之、　三月廿一日、伏見著御、　廿九日、御參內、　四月七日、大神君將軍職可爲讓之旨被奏請、　同十八日、被補征夷大將軍、被任內大臣、

被敍正二位、被補淳和弉學兩院別當、源氏長者、大將如元、聽牛車、賜隨身兵仗、勅使廣橋大納言兼勝、西洞院少納言時直、至二條御城傳宣命、　同十七日、自伏見御入洛、　廿六日、被爲御車御入朝御拜賀、　同廿七日、伏見還御、　五月朔日、將軍宣下之御禮被爲請、　同三日、四日、五日、於伏見御能興行、　同十五日、伏見御發駕、　元和九年七月十三日、二條入御、　同廿七日、御隱居奉稱大御所公、　寛永九年正月廿四日、於西丸薨御、御壽五十四、

〔御日記〕元和九年七月十三日、秀忠公、家光公上洛、　廿七日、家光公任征夷大將軍、正二位、內大臣、兩院別當、源氏長者、于時台齡廿歲也、以稱三代將軍矣、

〔台德院殿御實紀六十〕元和九年七月廿七日、今度御上洛は京都にして、征夷大將軍の重職を、大納言殿〇德川家光へ御與奪あるべきとの御本意なり、よて御上表しば〳〵に及び、內にもことはりと聞召入られ、午剋陣の儀行はる、上卿は三條大納言實條卿、奉行は正親町宰相季俊卿、辨は勸修寺右少辨經廣、陣儀終り、直に實條卿勅使として、御位記宣命の諸役、伏見城へ參向あり、大納言殿征夷大將軍に補せられ、直に正二位內大臣に昇進し給ひ、淳和弉學兩院別當、源氏長者等とゞこほりなく、牛車隨身兵仗等、先規のごとく宣下おはしければ、公は此日より天下を御讓與まし〳〵、御みづからは大御所と稱し奉る、

〔柳營譜略〕大猷院殿御諱家光公

元和六年正月五日、被敍正三位、　九月七日、御元服被敍從二位、被任權大納言、　九年三月十五日、被兼右近衞大將、　七月十三日、江戸御發駕御上洛、　同廿三日、伏見著御、　廿七日、被任內大臣、被敍正二位、補征夷大將軍、淳和弉學兩院別當、源氏長者、右馬寮御監、聽牛車、賜隨身兵仗、於伏見御拜任、勅使三條大納言實條、　廿八日、御參內、　寛永三年七月十二日、江戸御發駕御上洛、　八月二日、淀之城著御御逗留、　同十三日、御參內、　十六日、大坂渡御、　十八日、被敍從一位、被任左大臣、　慶

安四年四月廿日、薨御、御壽四十八、

〔公卿補任後光明〕慶安四年七月十三日、將軍家綱宣下、上卿三條大納言藤熈房、奉行隆貞朝臣、　廿六日、任大臣家綱宣下、上卿鷲尾大納言、辨雅房、奉行俊廣朝臣、

〔柳營譜略〕嚴有院殿御諱家綱公

正保二年四月廿三日、御元服略○註叙從三位、任權大納言、同日叙正三位、勅使菊亭大納言經季、飛鳥井大納言惟宣、　慶安四年六月廿三日、御本丸御移替、　同廿五日、廿七日、御代替御禮被爲請、　八月十八日、被補征夷大將軍兼右近衞大將、右馬寮御監、被補淳和奬學兩院別當、源氏長者、被叙正二位、被任內大臣、大將如元、聽牛車、賜隨身兵仗、勅使菊亭大納言經季、　十二月廿八日、從西丸御本丸御移徙、　延寶八年五月八日、薨御、御壽四十、葬東叡山、

○按ズルニ、公卿補任ト柳營譜略等ト宣下ノ日ヲ異ニセルハ、一ハ朝廷ノ宣下ノ日ニシテ、一ハ勅使ノ江戶城ニ於テ、其宣旨ヲ授ケシ日ナリ、

〔公卿補任靈元〕延寶八年七月十八日、征夷大將軍、右近衞大將、右馬寮御監、淳和奬學兩院別當、源氏長者等宣下、權大納言源朝臣○綱吉上卿今出川大納言、辨右中辨國豐朝臣、奉行宗顯朝臣、　廿一日、任大臣宣下、征夷大將軍源朝臣上卿小倉大納言、辨左少辨宣基、奉行宗顯朝臣、

〔柳營譜略〕常憲院殿御諱綱吉公

延寶八年五月六日、御登城、翌七日御養君被仰出、卽日被叙正二位、被任權大納言、此日二丸御移徙、　同七月十日、御本丸御移徙、　同廿一日二日三日、御代替御禮被爲請、　八月廿三日、將軍宣下、被補征夷大將軍、被任內大臣、兼右近衞大將、補淳和奬學兩院別當源氏長者、被補右馬寮御監、賜隨身兵仗、勅使花山院大納言定誠、千種大納言有維、　寶永二年三月五日、任右大臣、勅使柳原大納言資廉、高野中納言保春、　六年正月十日、薨御、御壽六十四、葬東叡山、

〔公卿補任東山〕寶永六年四月二日、將軍宣下、家宣上卿園大納言、辨益光、奉行倚房朝臣、同日任大臣宣下、家宣上卿德大寺大納言、奉行倚長朝臣、

〔柳營譜略〕文昭院殿御諱家宣公

寶永元年十二月五日、爲御養君西丸御入、御附及御抱之御人共御家人被召出、九日、御諱家宣公與被改、廿一日、初而御禮被爲請、同二年三月五日、被叙從二位、被任權大納言、勅使柳原大納言資廉、高野中納言保春、同六年四月二日三日五日、御代替御禮被爲請、五月朔日、將軍宣下、依而御本丸御入、勅使高野大納言保春、庭田大納言重條、任內大臣、正德二年十月十四日、薨御、御壽五十一、

〔公卿補任中御門〕正德三年三月四日、將軍宣下、家繼上卿權大納言、辨治房、奉行基香朝臣、同日任大臣宣下、家繼上卿西園寺大納言、辨益光、奉行倚長朝臣、

〔柳營譜略〕有章院殿御諱家繼公

正德二年十二月十八日、御代替御禮被爲請、廿五日叙正二位、被任權大納言、奉稱家繼公、勅使下向無之、以宿次傳宣命、同三年四月二日、將軍宣下、任右近衞大將、內大臣、勅使德大寺大納言公全、庭田大納言重條、正德六年〇享保元年四月晦日、薨御、御壽八、葬增上寺、

〔折たく柴の記下〕御中陰〇正德二年十月德川家宣薨の事終りし後、十二月〇正德二年十一日にぞ、御代始の儀行はれたりける、先々の御代には、御元服の儀有て、正三位大納言になさせ給ひ、正二位に擧られ給ひ、御代つがれしに及て、將軍の宣旨蒙らせ給ひ、大臣の大將にもならせ給へり、當時は殊に御幼稚〇德川家繼年五のほどに御代つがれしかば、御官途の事申給ひて後、將軍宣下の御儀も有べきにて、其事を申給ふべき草案をば、有し御代の如くに某奉るべき由を詮房朝臣申さる、此上の事、今はた辭し申べきにもあらねば、其草を參らせたりき、〇中略三月〇正德三年廿六日、白書院に御出有て、御元

服の儀行はる、

〔公卿補任中御門〕正德六年〇享保元年七月十八日、將軍宣下、〇吉宗上卿坊城大納言、辨顯胤、奉行重孝朝臣、同日任大臣宣下、上卿醍醐大納言、辨敬孝、奉行治房朝臣、

〔柳營譜略〕有德院殿御諱吉宗公

正德六年〇享保元年四月晦日、依御遺言、爲天下御後見二丸御入、五月朔日、天下御相續被仰出、二日、奉稱上樣、廿二日、御本丸御移徙、御供被召連候者、御目見以上四十七人、御醫師兩人、不殘列御家人、六月廿六日廿七日廿八日、御代替御禮、八月十三日、將軍宣下、叙正二位、任權大納言、被補淳和弉學兩院別當源氏長者、征夷大將軍、兼右近衞大將、右馬寮御監、任內大臣、大將如故、聽牛車、賜隨身兵仗、勅使德大寺左大將公全、庭田大納言重條、延享二年九月朔日、御讓職、御隱居之儀被仰出、從此日奉稱御隱居樣、同廿五日、西丸江御移徙、奉稱大御所樣、寬延四年六月廿日、於御同所薨御、御壽六十八、

〔幕朝故事談〕有德院樣〇德川吉宗御代、有德院樣從右大臣左大臣に御轉任被遊、大納言樣〇德川家重右大將を御兼被遊、竹千代樣〇德川家治大納言に被任也、大納言樣內大臣可被叙從京師申來候得共、賴朝も內大臣を兼任被成、部屋住にて內大臣に被任候例無之候旨、御辭退被遊候に付、右大將に被叙也、

〔公卿補任櫻町〕延享二年十月七日、將軍〇家重宣下、上卿權大納言、辨師興、奉行光胤朝臣、同日任大臣〇家重、內大臣、宣下、上卿醍醐大納言、辨說道、奉行賴要朝臣、

〔柳營譜略〕惇信院殿御諱家重公

享保十年四月九日、御元服、〇註略叙從二位、任權大納言、勅使中院前大納言通躬、中山前大納言兼親、

寬保元年八月七日、被兼右近衞大將、被補右馬寮御監、勅使冷泉大納言爲久、葉室大納言賴胤、

延享二年九月朔日、御政務御讓請給、同月廿五日、御本丸御移徙、此日奉稱上樣、十月朔日、御代替御禮、同二年十一月二日、將軍宣下、被補征夷大將軍、淳和弉學兩院別當、源氏長者、被敍正二位、內大臣、右馬寮御監、大將如故、聽牛車、賜隨身兵仗、寶曆十年二月四日、御轉任右大臣、勅使柳原大納言光綱、廣橋大納言兼胤、四月朔日、御辭職、五月十三日、二之丸御入、奉稱大御所樣、同十一年六月十二日、於御同處薨御、御壽五十一、

〔寶曆集成絲綸錄五〕延享二丑年九月

一來ル廿五日御本丸、西丸被遊御移徙候事、

一御本丸之御移徙（〇徳川家重）當日より上樣と奉稱、將軍宣下當日より、公方樣と奉稱候事、

一西丸江御移徙（〇徳川吉宗）當日より、大御所樣と奉稱候事、（〇中略）

右之通可相達候

九月

〔兼胤公記〕寶曆十年三月廿五日、兩人向河內守役宅（依招也）前日信濃守同席、河內守演說云、此度信濃守を差登、以老中奉書申來候、大樹（〇徳川家重）未被及老年候へ共、近年病身に候間、近々政務を右大將江（〇徳川家治）被讓、近々本丸へ被移、致隱居西丸へ可被移候間、右大將へ將軍宣下勅許有之候樣、被願存之由演達、此趣書狀ニ書付渡之、兩人落手示可令言上之由、且河州申聞條々、

一將軍宣下陣儀可有之、勅使も八月中著府候樣被成度由、攝家衆も可爲下向事、

一信濃守參內を仕、御機嫌伺候樣被成度旨之事、

一將軍宣下に付、萬事延享二年之通、可取計申來事、（〇下略）

〔公卿補任桃園〕寶曆十年正月十一日、任大臣宣下、（隨身兵仗如故、家重、右大臣、）上卿權大納言、辨權右中辨光豫朝臣、奉行愛親朝臣、同日兼任宣下、（家治、右近衞大將、）上卿葉室大納言、奉行資枝、

〔寶曆集成綠綸錄 七〕寶曆十辰年正月

今度御轉任(○德川家重)御兼任(○家重子家治)就御祝儀赦被仰付候間、寬保元酉年之通相心得、可被書出候、

三奉行江

正月

〔天明集成綠綸錄 二〕寶曆十辰年三月

一御內意被仰出之、公方樣御年來御病身ニ被爲入候ニ付、末御老年には不被爲在候得共、右大將樣(○德川家治江)御政務被遊御讓、御本丸江近々可被爲移候、公方樣被遊御隱居西丸江可被成御移候、右之趣京都江も被仰遣、將軍宣下之儀も御願被仰遣候、不相替右大將樣江御奉公可仕候、此段可申聞旨御內意候、

寶曆十辰年三月

御目付江

明後廿八日此度之爲御祝儀、右大將樣江於御本丸御膳被進候ニ付、右大將樣御供之布衣以上、幷御目見以上之分江御料理被下之、御目見以下江は赤飯御酒被下候間、被存其趣、前々右大將樣江御膳被進候節、御供之面々江御料理被下候時之通被心得、向々江相談、席々御給仕等差支無之樣可被致候、

三月廿六日

〔公卿補任 桃園〕寶曆十年七月二日、將軍(○家治)宣下、上卿園大納言、辨俊臣奉行愛親朝臣、同日任大臣(家治、內大臣、)宣下、上卿三條西大納言、辨伊光、奉行韶房朝臣、

〔柳營譜略〕浚明院殿(御諱家治公)

寬保元年八月十二日、御元服敍從二位任權大納言、(○註略)勅使冷泉大納言爲久、葉室大納言賴胤、

寶曆十年二月四日、御兼任右近衞大將、被補右馬寮御監、勅使柳原前大納言光綱、廣橋權大納言兼胤、　同年四月朔日、御政務被爲請、　五月十三日、御本丸御移徙、　同月廿一日、廿二日、廿三日、御代替御禮、　九月二日、將軍宣下、被補征夷大將軍、淳和奬學兩院別當、源氏長者、被敍正二位、任內大臣、右馬寮御監、大將如故、聽牛車、賜隨身兵仗、勅使柳原大納言光綱、廣橋前大納言兼胤、　安永九年九月四日、任右大臣、勅使油小路前大納言隆前、久我大納言信通、　天明六年九月八日、薨御、御壽五十、

〔公卿補任光格〕天明七年三月六日、將軍宣下、家齊〇上卿權大納言、辨祠定、奉行俊親朝臣、同日任大臣宣下、家齊、內大臣、　上卿德大寺大納言、辨胤定、奉行基理朝臣、

〔柳營譜略〕將軍家御諱家齊公

天明元年閏五月十八日、御養君被仰出、可奉稱若君樣旨被仰出、　同月廿五日、西丸御入、　同二年四月三日、御元服、敍從二位、任大納言、〇中略勅使油小路前大納言隆前、久我大納言信通、　同六年九月八日、奉稱上樣、即日御本丸御入、　十一月朔日、二日、四日、御代替御禮被爲請、　同月廿七日、御本丸御移徙、　同七年四月十五日、將軍宣下、勅使油小路前大納言隆前、久我大納言信通、被補征夷大將軍、淳和奬學兩院別當、源氏長者、敍正二位、任內大臣、右馬寮御監、聽牛車、賜隨身兵仗、

〔泰平年表大御所〕文政五年三月朔日、公方樣〇德川家齊被任左大臣、被敍從一位、右大將〇德川家慶被任內大臣、被敍正二位、(中略)嚴有公(德川家綱)より浚明公(德川家治)に至り御七代、左大臣闕如す、御當代御世久しきによつて被任といへり、賴朝已來武家の天下と成て、六百四十有餘年に及といへども、將軍家任職已前、大臣に任じ給ふ事是を始とす、是より右大將家を內府公と奉稱、

〔續視聽草四集八〕御轉任御任槐問答

來年御轉任御任槐の御沙汰〇文政五年、德川家齊任左大臣、德川家慶任內大臣、御座候由、何と讀候哉、委敷承知仕度候事、〇中略

內大臣に任せられ候得ば、必正二位に敍せらるべく候、右等御例御座候事に候哉、

御例と申事にはいかゞ候半哉、寛永三年八月八日、大猷院樣〇徳川家光從一位に敍せられ、左大臣に任せられ候事に御座候、

御父子樣大臣之御例御座候哉、京都にて攝家淸花の御家に御座候事ニ候哉、

御父子樣大臣御ならび被遊候事は

東照宮樣　右大臣　慶長十年
台德院樣〇徳川秀忠　內大臣

台德院樣　右大臣　元和二年
大猷院樣　內大臣

台德院樣　太政大臣　寛永三年
大猷院樣　左大臣

右之ごとくに御座あるべく候、攝家淸花の御家などは、古今折々御座候、

將軍職に被爲成ざる前、內大臣の事、古今御座候事に候哉、

御受職前、內大臣に任せられ候事は、御代に無御座候、東照宮樣慶長元年、內大臣に任せられ、同八年に、征夷大將軍に補せられ、右大臣に任じ給ふ事にて候、

左大臣に被任候得者、必御上洛有之と申事如何、

此事一向無之事に候、大猷院樣御入洛の時、左大臣に被任候故、左樣之事申候半と存候、〇中略

右大將樣內大臣に任せられ候へば、左大將に被任候事に御座候哉、

左大將は右大將より重く御座候得共、內大臣に被任候上は、左大將に被轉候事も可有御座候哉に候得共、御當家に而者、左大將之御事は、東照宮樣天正十三年、右大將に任せられ、同十五年左大將に轉せられ、同十六年左大將を辭し給ふ、いづれも御任槐前の事にて御例とも

申がたく、其後御代々御受職の後、右大臣御轉任之後も、右大將にて被爲在候得者、此度も右大將にて、左大將には被爲成間敷候、去かしながら攝家者大納言の時、右大將を兼任、槐の後多くは左大將に被轉候得者、押極めて右大將にて可被爲在とも申がたく候、

〔公卿補任(仁孝)〕文政十年二月十六日、任太政大臣(家齊公)宣下、上卿權大納言、辨隆光、奉行顯孝朝臣、同日敍位(家慶從一位)宣下(消息)上卿皇太后宮大夫、奉行共福朝臣、

〔續泰平年表〕天保十二年閏正月晦日、大御所樣(○德川家齊)薨御、(御年六十九、御內實は七日夜薨御也と云、可秘、三月十三日御謚文恭院殿、贈正一位大相國、)

〔公卿補任(仁孝)〕天保八年八月五日、征夷大將軍(○家慶公○)宣下、上卿右大將、辨光政、奉行正房朝臣、同日任大臣(家慶公左大臣)宣下、上卿權大納言、辨俊克、奉行忠能朝臣、

〔實久卿記〕天保八年九月二日丁丑、今日登城也、(○中略)左大史以專宿禰、宣旨持參、入宮候廣廂、左少將義周朝臣(宮原也)出向取之、昇上段、覽大樹公、(○德川家慶)同公披見之、(征夷大將軍、兩院別當、源氏長者兩宣旨、以上四通、)

〔續泰平年表〕天保八年九月二日、將軍宣下、(○德川家慶)御兼官其外共如御先規、賜隨身兵仗、此日御轉任左大臣、(○中略)上樣御事、今日より公方樣と可奉稱旨(○中略)被仰出、

〔御家譜密拜〕十二世愼德院殿(家慶公)

寬政九年三月朔日御元服任大納言　文政五年三月朔日內大臣　同十年三月十八日從一位

天保八年四月二日御本丸(江)御移徙奉稱上樣ト　同年九月二日將軍宣下、左大臣御兼官如御先例、

〔嘉永明治年間錄(二)〕嘉永六年七月廿二日、將軍家慶公薨、

將軍家六月十九日、御異例之御沙汰なり、御內實は同廿二日薨御と云可秘々々、

八月四日、將軍遺骸ヲ增上寺ニ葬ス、勅シテ愼德院ト諡ス、

八月廿三日、御院號可ㇾ奉ㇾ稱ニ愼徳院殿ー旨宣命、

〔公卿補任孝明〕嘉永六年十月廿三日、征夷大將軍家祥卿家定初名宣下、上卿右大將、辨胤保朝臣、奉行光愛朝臣、同日任大臣内大臣家祥卿宣下、上卿源大納言、辨光愛朝臣、奉行胤保朝臣、

〔續泰平年表〕嘉永六年十一月廿三日、將軍宣下、（徳川家定）此日辰上刻高倉大夫、土御門右兵衛佐、御衣紋御身固等之事如ニ御先規一、征夷大將軍淳和奬學兩院別當宣下、上卿廣橋右大將基豐公、辨廣橋頭左中辨胤保朝臣、奉行柳原頭右中辨光愛朝臣、內大臣氏長者、右馬寮御監、大將如ㇾ元、牛車隨身兵仗宣旨、上卿久我大納言建通公、辨柳原頭右中辨胤ㇾ之、奉行廣橋頭右中辨胤ㇾ之、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年八月八日、將軍家定公薨、

八月八日、巳下剋公方樣薨御、御年三十五、九月十日總出仕、十一日萬石以上の面々、宰相樣へ爲ㇾ伺ニ御機嫌ー出仕候事、

九月十日、勅シテ前將軍家定公ヲ温恭院殿ト謚ス、

此日總出仕、徳川賢吉殿、徳川攝津守殿、御登城の節、掃部頭老中謁候以後、御黑書院に於て、御院號三方に載せ、中奧御小性持出、一通ツヽ頂ニ戴之ー、出仕の面々留置き、御院號拜見爲ㇾ致候事、

〔公卿補任孝明〕安政五年十月廿五日、征夷大將軍家茂卿宣下、上卿德大寺大納言、辨經之朝臣、奉行胤保朝臣、同日任大臣内大臣家茂卿宣下、上卿大炊御門大納言、辨豐房、奉行經之朝臣、

〔實麗卿記〕安政五年十月廿五日丁卯、今日家茂卿征夷大將軍宣下、上卿德大寺大納言、辨經之朝臣、奉行胤保朝臣、同卿內大臣宣下、上卿大炊御門大納言、辨豐房、奉行經之朝臣、　十一月十五日丙戌、今日二條亞相關東下向云々、　十六日丁亥、今日廣橋前亞相、萬里小路前亞相、已上武家傳奏堀河三位准后使等關東下向、爲ㇾ見ㇾ立遣ニ使者ー了、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年六月廿五日、將軍家定紀伊宰相ヲ以テ養子ト爲ス、

此日於ニ御座間ー、温恭公、紀伊宰相殿御對顏御養君仰出され、御刀長光代金二百枚、御脇差來國光

代金百五十枚被進之、

七月廿一日、養君ノ諱ヲ家茂ト命ズ、並ニ物ヲ諸吏ニ賜フ、

公方樣より宰相樣へ、御刀義弘代金三百枚被進之、

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年正月廿一日、將軍家茂公ヲ以テ右大臣ト爲ス、

河內守殿渡書付　去廿日勅使二條御城へ參入、御對顏有之候處、格別の思召を以て、右大臣御轉任の儀、可有宣下旨被仰出候、一躰御辭退も可被遊の處、厚き叡慮の御旨有之候に付、御領掌被遊、翌廿一日御參內以前、宣旨被遊御頂戴候、此段申達候樣御意候、

右之通、去る廿二日於二條御城被仰出候、此段向々へ可被達候、二月廿八日

廿七日、將軍家茂公從一位ニ敍ス、

備前守殿渡書付　去月廿七日御參內被遊候處、神武天皇御陵當節御修補御成功に至り、深宸賞被爲在、從一位可有宣下旨、御內意仰出られ候處、此度御轉任被仰出候上の儀に付、御辭退被爲在候へ共、格別の思召を以て、被仰出候儀に付、御領掌被遊、宣旨御頂戴候、此段申達候樣御意候、

右之通、去る四日於二條御城被仰出候、此段向々へ可被達候、

二月十一日

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月廿日、將軍家茂公薨御、

公方樣御不例被遊御座候處、御養生不被爲叶、去る廿日卯の上刻、於大坂表薨御被遊候、奉絕言語候、兼て被仰出候通り、一橋中納言殿〇德川慶喜御相續被遊、去る廿日より上樣と可奉稱旨、於大坂表被仰出、彌以て精勤可相勵旨被仰出候段、出仕の面々へ、於席々老中縫殿頭列座、河內守演達之、

十月、勅シテ故將軍家茂公ニ昭德院殿ト諡ス、

〔公卿補任 孝明〕慶應二年十二月五日、任官。權中納言慶喜。權大納言、 宣下、消息 上卿新大納言、奉行勝長朝臣、同日叙位。從二位慶喜 正二位、 宣下、消息 上卿廣橋大納言、奉行勝長朝臣、同日征夷大將軍慶喜 宣下、上卿右大將、辨俊政、奉行豐房朝臣、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十二月五日、將軍宣下、

河內守殿渡書付　去る五日、勅使二條御城へ參入、正二位權大納言御位記宣旨御頂戴、引續き將軍宣下、右近衞大將宣旨等御頂戴被爲在候に付、右御祝儀明後十五日總出仕の事、但熨斗目麻上下著用の事、

十二月十三日

將軍慶喜公は、水戶前中納言齊昭卿の七男にして、はじめ一橋家を相續し、安政五戊午年、故有て退隱し、其後文久二壬戌年、一橋家再相續あり、玆に至て遂に將軍家を御相續になれり、

〔嘉永明治年間錄 十六〕慶應三年十月、將軍慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還スベキノ旨ヲ閣老ニ命ズ、

我皇國時運の沿革を觀るに、昔王綱紐を解、相家權を執り、保平の亂、政權武門に移りてより、我宗家に至り、更に寵眷を蒙り、二百餘年、子孫相受、我其職を奉ずと雖も、政刑當を失事不少、今日の形勢に至るも、畢竟薄德の所致、不堪慚懼候、況當今外國の交際日に盛になるにより、愈朝權一途に不出候ては、綱紀難立候間、從來の舊習を改め、政權を朝廷に歸し、廣く天下の公議を盡し、聖斷を仰ぎ、同心協力共に皇國を保護せば、必海外萬國と可並立、我國家に所盡不過之、乍去猶見込の儀も有之候はゞ、聊忌諱を不憚可申聞候、

閣老幕府政權ヲ朝廷ニ奉還スルノ旨ヲ達ス

今般上意の趣は、當今宇內の形勢を御洞察被遊候處、外國交通の道盛に開るに至り、御政權二

途に相分れ候ては、皇國の御綱紀難相立に付、永久の治安を被爲計候、遠大の御深慮より被仰出候御儀にて、誠以て奉感佩候、殊に從前の御過失を御一身に御引受、御薄德を被爲表、御政權朝廷へ御歸し被遊候御文意、臣子の身分より奉伺候へば、何共以て奉恐入、涕泣の至に候、就ては此上益以て御武備御充實相成不申候ては、決て不相成儀に付、各に於ても聊氣弛無之、前文の御趣意相貫き、御武威相張候樣、一際奮發忠勤精々可被申合候、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月、朝廷ニ於テ、萬機裁決スベキ旨ヲ布告ス、

德川内府宇内の形勢を察、政權奉歸候に付、於朝廷萬機御裁決被遊に付ては、博天下の公議を以、衆心と休戚を同し、德川祖先の制度美事良法は、其儘被差置、御變更無之候、列藩御聖道を體付候儀は、不憚忌諱、極高論準繩補正に盡力、上勤王の實功を顯し、下人民の心を不失、皇國をして地球中に冠絶せしむる樣、淬勵可致御沙汰之事、

右之通被仰出候間、洛中洛外へ不洩樣可相觸もの也、

○德川將軍表

次第	名	父	母	配偶	宣下	去職	歿年	年齡	院號	贈官位
家康	幼名竹千代	廣忠長男	於大方水野忠政女	前妻築山殿關口氏義廣女　後妻朝日姫豐臣秀吉妹	慶長八年二月十二日	慶長十年四月七日	元和二年四月十七日	七十五	安國東照宮	正一位
秀忠	幼名於長	家康三男	西郷局(於愛方)西郷正勝女	逵子(於江與方、淺井長政女)	慶長十年四月十六日	元和九年七月廿七日	寛永九年正月廿四日	五十四	台德	正一位
家光	幼名竹千代	秀忠二男	逵子	孝子(中之丸殿)鷹司信房女	元和九年七月廿七日		慶安四年四月廿日	四十八	大猷	正一位太政大臣
家綱	幼名竹千代	家光長男	於樂方青木利長女	顯子(淺宮)伏見宮貞清親王女	慶安四年十月十三日		延寶八年五月八日	四十	嚴有	正一位太政大臣
綱吉	幼名德松	家光五男	於玉方本庄道芳女	信子鷹司教平女	延寶八年七月十八日		寶永六年正月十日	六十四	常憲	正一位太政大臣
家宣	幼名虎松　初綱豐	家光孫綱重(甲府)子	於保良方田中勝宗女	熙子近衛基熙女	寶永六年四月二日		正德二年十月十四日	五十一	文昭	正一位太政大臣

家繼	吉宗	家重	家治	家齊	家慶	家定	家茂	慶喜
幼名鍋松	幼名源六郎 後新之丞 初賴方	幼名長福	幼名竹千代	幼名豐千代	幼名敏次郎	初家祥	初慶福	幼名七郎麿
家宣三男	家康曾孫光貞(紀州)四子	吉宗長男	家重長男	吉宗曾孫治濟(一橋)一子	家齊二男	家慶四男	家齊孫齊順(紀州)一子	家康十世孫齊昭(水戶)七子
於喜世方 勝田玄哲女	於由利方 巨勢利清女	於須磨方 大久保忠直女	於幸方 梅溪通条女	於富方 岩本正利女	於樂方 押田敏勝女	於美津方 跡部正賢女	實子 松平六右衛門女	登美宮 有栖川織仁親王女
吉子(八十宮) 靈元帝皇女	理子(眞宮) 伏見宮貞致親王女	增子(比宮) 伏見宮邦永親王女	倫子(五十宮) 閑院宮直仁親王女	茂子 近衛經熙養女 島津重豪女	喬子(樂宮) 有栖川宮織仁親王女	前妻任子 鷹司政通養女 鷹司政熙女 後妻秀子 一條忠良女 後妻敬子 近衛忠熙養女 島津忠剛女(島津齊彬養女)	親子(和宮) 仁孝帝皇女	美賀子 一條忠香養女 今出川公久女
正德三年三月四日	享保元年七月十八日	延享二年十月七日	寶曆十年七月二日	天明七年三月六日	天保八年八月五日	嘉永六年十月廿三日	安政五年十月廿五日	慶應二年十二月五日
	延享二年九月朔	寶曆十年五月十三日		天保八年四月二日				慶應三年十二月十二日
享保元年四月晦	寬延四年六月廿日	寶曆十一年六月十二日	天明六年九月八日	天保十二年正月晦	嘉永六年七月廿二日	安政五年八月八日	慶應二年八月廿日	
八	六十八	五十一	五十	六十九	六十一	三十五	二十一	
有章	有德	惇信	浚明	文恭	愼德	溫恭	昭德	
正一位太政大臣	正一位太政大臣	正一位太政大臣	正一位太政大臣	正一位	正一位太政大臣	正一位太政大臣	正一位太政大臣	

上洛

〔家忠日記增補追加〕慶長十年正月九日、大神宮〇征夷大將軍德川家康江戶ノ城御首途、洛ニ赴セ給フ、二月廿四日、台德院殿〇德川秀忠江戶ノ城御首途、洛ニ赴セ玉フ、供奉輩十萬餘人、

〔御當家令條十三〕條々

一喧嘩口論堅停止之上、依親類知音之好身、贔屓之輩於有之者、本人より猶以可為曲事事、

一御上洛中人返儀、令停止之訖、雖然申分於有之者、下向之上可相斷事、

一路次中之儀、如御書付、段々ニ可相越事、

一諸事其奉行人、不可相背下知事、

一路次中宿之儀、奉行人可㆑任㆓差圖㆒事、

一不㆑可㆑有㆓押買狼藉㆒事、

一舟渡之儀、先次第可㆑爲㆓一手越㆒、夫馬以下可㆑爲㆓同事㆒、

附他之手之輩、乘合之儀一切停止之事、

右之條々若於㆓違背㆒は、速可㆑處㆓嚴科㆒者也、

慶長十年正月三日

〔國師日記〕元和三年六月廿九日、公方樣〇德川秀忠伏見御城へ御著座、於㆓御本丸㆒御目見、

〔御當家令條十三〕條々

一今度御供之時脇道すべからず、幷於㆓町通家之際㆒左右を除て可㆑令㆓供奉㆒事、

一喧嘩、口論、火事之節、其外如何樣之義雖㆑爲㆓出來㆒、番頭組頭之下知なくして、其身之事者勿論、下人等に至迄不㆑可㆑出之、若於㆓違背之族㆒者可㆑爲㆓曲事㆒事、

一路次中御著座之刻、馬より下り、馬は其所に置、供之者を通し、其次に馬を通し、其後諸道具を可㆑通事、

一御著座之時、當番之外不㆑可㆓御供㆒事、

一目付之面々、幷番頭諸奉行之義者不㆑及㆓沙汰㆒、縱如何樣之者申と云とも、御法度之旨、不㆑可㆓違背㆒事、

一馬上之際召列かちもの丶事、馬取貳人、沓籠持壹人、草履取壹人、持鑓壹人、此外可㆑召㆓列若黨㆒事、

一騎馬之中江乘替不㆑可㆓牽入㆒、但有㆓御用㆒而被㆑召者之馬者、可㆑爲㆓格別㆒事、

一組頭無㆑之者之分は、なかまとして日行事を定め、可㆑相㆓詰殿中㆒事、

一御供之時、馬の口をとらせ、幷高聲すべからざる事、

一諸道具入まじり通すべからざる事、

一於町通馬の口洗べからず、幷馬に聲を掛べからざる事、
一小荷駄馬は右の方を通すべし、但山坂にては、小荷駄を山の方へ付て可通之事、
一御著座之時、於町中笠頭巾をぬぐべき事、
右之條々相背族於有之者、爲過料銀子壹枚可出之、若目付之者番頭諸奉行可出過料儀、見遁聞遁於令用捨者、銀子貳枚可出之者也、

元和三年五月廿六日

〔教令類纂初集五〕元和三丁巳年五月廿六日

御上洛之時御條目

條々

一今度供奉之行列、可守定所次第、若前後をみだる輩於在之者可爲曲事事、
一喧嘩、口論、堅く制禁之上は、譬如何樣之子細有之といふとも、後日於江戶可及沙汰、若違犯之輩は不論理非、雙方共に可誅伐之、於殿中令出來者、其一座として可相計、町中幷供奉之道中におゐて有之ば、其所に有合猥に掛合輩可爲曲事、萬一令荷擔者、其科可重於本人事、
一旅館幷其町中におゐて、自然火事出來之時は、兼而定置之輩、其外當番之者、殿中江參上すべし、其餘は宿所に有之而、番頭、組頭、目付之輩差圖に任すべし、下々に至る迄、一切火元江不可馳集事、
一供奉中人返之儀は停止之事、且重科之者爲各別之間、番頭、組頭江相斷可受差圖、番頭無之者は、目付之輩江相談すべし、私として於返之は可爲曲事、
一供番不參之輩可改易之、遲參之者は可爲過怠事、
一殿中番之次第、於江戶所定のごとくたるべし、若相背族有之ば、可爲曲事事、

一萬事法度之旨、番頭、組頭、幷目付之輩、諸奉行人相斷之處、違背之族有之ば、急度可言上之、下々に至ては、奉行人相談之上、隨科之輕重、或死罪、或は過怠たるべし、事により主人も過怠たるべき事、

一法度違背之族、番頭、組頭、幷目付之者、見のがし聞のがし、於令用捨者、其列として言上すべし、於不申上は、譬へ後日に相聞候といふとも、可爲曲事事、

一不依何事企徒黨、令一味之儀、堅く停止之事、

一萬事に付不行義之輩可爲曲事事、

一舟渡山坂において不混雜樣に、先次第相越べし、小荷駄右之方を通すべし、但山坂に而は山之方へつけて可通之、その所の番之ものさしづに任せ、不致混雜樣可相通之、猥之輩可爲曲事事、

一押賣押買幷狼藉すべからず、もし違犯之輩は、其場において可行死罪、其上事により、主人は可爲過怠事、

一猥不可伐採竹木事、

附作毛之場に、馬を放置べからず、令違背者可爲曲事事、

一博奕之儀、彌堅停止之事、

一供奉之時不可脇道、家之際左右を除可供奉、違背之輩あらば、可爲曲事事、

一著座之時、供奉之輩馬よりおりずして、直に旅宿江乘入輩可爲過怠事、

附著座之時馬よりおり、馬は其所におき下々を通すべし、其次に馬幷持鑓を通し、其後諸道具を通すべし、違背之輩是又可爲曲事事、

一組頭無之輩は仲間をして、壹人ツヽ殿中に可相詰事、

一諸道具入交不可通事、

一自他之宿札剝レ之、旅籠幷宿賃不レ出之者、過怠たるべき事、

右條々可二相守一之、萬一違犯之輩有レ之ば、六人之内當番幷目付之當番可レ言二上之一、隨二科之輕重一、或は死罪、或は流罪、改易、或は可レ爲二過怠一者也、

元和三年五月廿六日

御黑印

〔御日記〕元和九年七月十三日、秀忠公、〇征夷大將軍家光公上洛、

〔教令類纂初集五〕元和九癸亥年五月十一日

條々 東武實錄には、今度御上洛に供而被二仰出一と有、

一今度御供之時、不レ可二脇道一、幷町通家之脇左右を除、可二供奉一事、　過料銀壹枚

一御供之時、狼藉者之儀、其身は可レ爲二死罪一、主人は可レ爲二過料一事、

一御供之時、馬之口をとらせ、幷高聲すべからざる事、

一諸道具入まじり通すべからざる事、

一小荷駄馬は、右之方を通すべし、但山坂にては、小荷駄馬を山之方江つけて可レ通事、

一濫に不レ可レ剪二採竹木一事、

一作毛之場に、馬を放置べからざる事、

一喧嘩、口論、火事、其外如何樣之儀雖レ爲二出來一、番頭組頭之無二下知一して、其身之事は勿論、至二下人等一迄、一切不レ可二出合一事、十三本御制法には、不レ可レ出之事に作る、

曲事 御制法に據て補ふ

一今度御供中人返之儀令二停止一畢、十三本御制法には、堅令レ停二止之一に作る、自然於レ有二申旨一者、還御以後可レ及二沙汰一事、十三本御制法には、可レ爲二沙汰一事に作る、

一路次中御著座之刻、馬よりおり、馬は其所に置、供之者を通し、其次に馬を通し、其後諸道具を可通事、

過料銀壹枚（御制法に據て補ふ）

一御著座之時、當番之外、不可御供事、

過料銀壹枚

一御目付之面々、并番頭諸奉行（十三本御制法、諸奉行人に作る、）之儀、不及沙汰、假如何樣之者申斷と云共、御法度之旨、不可違背事、

一馬上之際に、召列かちもの丶事、馬取貳人、沓持壹人、草履取壹人、持鑓壹本、此外若黨を可召連事、附騎馬之内、乘替之馬を不可引入、但有御用被爲召者は、（十三本御制法には、被爲召者之馬はに作る、）可爲各別事、

過料銀壹枚

右之趣、（御制法には、右條々に作る）若於相背族は、（十三本御制法には、有違背族はに作る、）隨科之輕重、或は死罪、或は流罪、可爲過料事、自然御目付之者、并番頭諸奉行人、見のがし聞のがし、於令用捨は、可出過料、尚下知狀可相見者也、（十三本御制法には、猶載下知狀者也に作る、）

御黑印

元和九年五月十一日

〔御日記〕寛永三年六月、（或御上洛ハ七月トモ云フ）將軍家御上洛、

〔光臺一覽五〕抑又將軍樣御上洛之次第と申は、往し寛永三年丙寅九月、台德院秀忠公を其頃大御所樣と稱し奉り候、大猷院樣（○德川家光）御同道にて御上洛被遊候、其後又十一年甲戌之秋、又大猷院樣計り御上洛有之也、如何樣此戌之年より延享元甲子年迄は、凡百十一二年にも相成候哉、夫よりは御上洛も無之候、今にても御上洛被成候へば、此寛永御上洛之格共にて、諸事御執行有之けるに、夫處に職者共は寛永の行幸とて、彼節之一冊有之て、賞見仕事に候、禁裏へは五種五荷之御樽肴、眞の御太刀、凡百枚計折紙、御道具判金百枚の御獻上の由也、この外御所方は次第段々之御

將軍他行

進物有之、御攝家方、俗親王方などへは、折紙道具銀千枚宛、淸花兩傳奏は銀五百枚に折紙御刀、諸家一同に、一位と大納言へは三百枚折紙之御刀、中納言宰相へは二百枚の折紙御刀、三位以上同斷、四品以下殿上人は百枚之折紙之御脇差被下、六位五位之地下役人にも五十枚、三十枚宛被下御事也、二條之著御被遊と否、傳奏昵近衆早速ニ參じ、御安否を被伺、昵近衆とは、

甘露寺　梅園　土御門　三條西　日野　烏丸　菊亭　廣橋　勸修寺　堀川　四條　柳原
飛鳥井　高倉　山科　舟橋　冷泉下　竹内　橋本

以上十九家、足利將軍のころより代ノ將軍昵近の衆と定られ、關東へも年頭、將軍宣下、其外御目出度事には、家司名代に參府致せり、凶事御法事等の名代を以て、納經拜禮被勤御事也、御上洛之砌、御所方一向所勢と申立、二條之逗留之中は、御隨逐被申事、畢竟御譜代御側大名同前御會釋也、御上洛遙前に立賣菊亭殿西隣に、常には閉治門あり、この門四足冠木門に被造建、唐居敷に相成由也、この門は施藥院法印の先は裏門也、施藥院一條下ル烏丸東側にて御束帶被遊、則假門より參内被遊と也、

〔元寛日記〕寛永十一年七月十七日、將軍家光公御上洛、供奉ノ面々綺羅輝天、同十八日、將軍家參内、八月將軍家自京都大坂御城ヱ御著座、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年二月十三日、將軍〇德川家茂上洛、
公方樣今卯上刻大廣間御駕籠臺より御上洛として御發駕、

〔御定書百箇條〕出火に付て之咎之事
一御成日朝ゟ還御迄之間、幷小菅御殿御成還御之日、幷御逗留中、小間拾間以上燒失、且平日三町ゟ以上、燒失之節、
享保四年極
火元　五十日手鎖

(寛保三年御)但寺社ゟ出火に候はゞ、其寺社十日遠慮、(中略)

(寛保三年極)一御成、還御之節、且小菅御殿御逗留中、類燒有之候共、小間拾間ゟ以下之燒失に候はゞ、不及咎、

(同二年極)一寺社門前ゟ出火之節、平日小間拾間以上、燒失に候はゞ、其寺社は不及咎、御成日朝ゟ還御迄之間、且小菅御殿御成、還御之日、并御逗留中、小間拾間以上燒失、平日三町ゟ以上之燒失に候はゞ、其寺社十日遠慮、門前之もの共咎は町方同段、

〔享保集成絲綸錄十五〕慶安二丑年十二月

一向後御成之刻、道筋計人留仕、脇道は往還之輩、無滯可相通之旨、被仰出之云々、

慶安三寅年十二月

一常々御成已前道筋等、往還之者留候事被聞召、向後者如只今迄拂退候儀令停止之、御先拂之御步行之者計ニ而可相留之、萬一御成之先江參掛者於在之者、其所ニ可差置之旨被仰出之、仍所所御門番之面々、町奉行江、右上意之趣、老中井御目付之輩江被相達之云々、

〔享保集成絲綸錄六〕延寶八申年八月廿二日

一彌明日將軍御成被爲遊候間、町中家持者不及申、借屋店がり裏々迄、火之用心之儀、何方江も不罷出、取分念を入可申候、尤前方相觸候通、表之間數に應じ、手桶に水を入出し置、中番差置可申候、勿論喧嘩口論萬事物噪敷無之樣可仕候、此旨町中裏々迄早々相觸、急度相守可申候、少も油斷仕間敷候、以上、

八月

〔享保集成絲綸錄十五〕貞享二丑年七月

一先日申渡候通、御成被爲遊候御道筋江犬猫出申候而も不苦候間、何方之御成之節も、犬猫繋ぎ候事、可爲無用者也、

七月

寶永三戌年正月

覺

一所々江御成之節、及暮還御に候はゝ、伺御機嫌之使者致延引、翌日四時過ゟ晝之内月番之老中江可被差出候、

右之通可被相觸候

正月

寶永七寅年五月

覺

一御成之節雨降候はゝ、御供之面々、かさ合羽御免之事、

一雨降候節は、御成先勤番之面々組共に、かさ合羽是又御免之事、

一御道筋勤番同斷之事

右之通雨降候節は、難儀可仕と被思召候に付、御免被遊候間、向後著用可仕候、已上、

五月

寶永八卯年二月

一自今御成之節、町之者共男女共に無御構候間、罷出拜可申旨被仰出候、尤作法能相愼、拜可申旨、町中相觸可申候、以上、

二月

享保二酉年五月

御目付　御小性組之與頭　御書院番組頭　御徒頭　小十人頭

右御城外御成御供之節、侍兩人鑓持草履取召連、馬可₂被₁率候、挾箱爲₂持候儀可₂爲₁無用候、

兩御番　布衣以下之役人

右御城外御成御供之節、侍一人鑓持草履取可₂被₁連候、但挾箱爲₂持候義無用に候、馬牽せ候義不₂及₁候、

右之通、明後十一日御成之節ゟ、召連候樣、向々江早々可₂被₁相達₁候、已上、

五月

享保二酉年五月

一御成之節、御道筋之町々、家主井店主計可₂罷出₁申候、女之分者其家之人數計差出シ可₂申候、男女共に他所之者一切呼寄申間敷旨、被₂仰渡₁候間、急度相守町中不₂殘可₂被₁相觸₁候、以上、

五月

享保二酉年十月

覺

一御成之節は、只今迄火之元之義に付而、町中火をも不₂爲₁焚樣に相聞え候、朝夕之また丶めに付而も、火を用ひ候はでは、難₂成儀も可₂在₁之處に、火を焚候義、嚴敷申付候ては、却而火を隱し取用ひ候事も可₂在₁之候、職人家業にて火を取扱候者も可₂在₁之候得共、旁火を爲₂焚候義差免、彌火之元之義入念可₂申付₁候事、

一御成之御道筋、前日當日、町中名主五人組等、無₂油斷₁可₂相廻₁候得共、別而繁く見廻り火之元をも見屆可₂申付₁候事、

一總而火之元之儀、御成之節御道筋には不₂限、方角違候とも、たとへば本所筋御成之節は淺草、神田、品川邊江御成之節は、四谷麻布筋は、風上にも候間、別而入念與力同心相廻し、火之元可₂申付₁

候、此外右に准じ可₂相心得₁候、差出候與力同心之人數、并廻し方之儀は、追而可₂相達₁候、火を焚候義は、前之ヶ條之通、心得候而可₂申付₁候事、

右之趣得₂其意₁可₂被₁申付₁候、以上、

十月

享保二酉年十二月

一御成道筋掃除堅無用仕、むさきもの候はゞ、取捨候樣に計可₂仕事、

一御供揃七半時と被₂仰出₁候とも、屋敷前挑灯一切ともし不₂申、門江計高挑灯出し可₂申候事、

附並手桶堅出し申間敷事

一辻番に挑灯に而も行燈に而も壹ッ出し、桶三ッ組程に仕、差置候迄可₂仕候事、

右は武士町共に、同前に可₂相心得₁候、

御見通し之外も、右之通可₂相心得₁候、尤還御之節も右同斷、

十二月

享保二酉年十二月

一陸を御通之節、御堀端之川に在₂之候船之事、小船は不₂及₁申、大船に而も園取拂候分は、差置べき事、

一大船構候而、包まわし候樣成船者、除可₂申候、

右何も人は拂可₂申事

一御船に而御通り之時は、内川に而も川平駄ようの船構無₂之、内の見江候者除候に不₂及、御道筋に不₂構樣に繫置可₂申候、大川に而は御道筋二三町外に候はゞ、大船荷物積置候へ共人を拂、其上御徒乘せ置、其儘差置可₂申候事、

十二月

享保三戌年閏十月

一御成之節、大名衆下屋敷抱屋敷等にて、御供之面々、若またゝめ抔致候ため、料理之用意をも仕候様に相聞候、火之元旁々不宜儀候間、料理之儀は勿論、茶烟草に而もたとへ所望候共、出し候儀皆無用に候間、其趣可被相心得候、以上、

閏十月

享保五子年三月

一品川邊御成之節、諸廻船拾五町程沖江退置候處に、右拾五町程之處を、獵船等猥に致往行候由相聞候、向後御成之當日、廻船退置候節、其内を堅往行仕間敷候、尤廻船退置候外を、通候分は不苦候、

右之趣、町中船持共江爲申聞、此旨相守可申候、尤明十九日東海寺江被爲成候間、別而念入可被申渡候、以上、

三月

〔將軍德川家禮典附錄二十四〕享保十二丁未年

御鷹野御成之節、御道筋之御門番、夜中より御番所江罷出候様相聞候に付、自今は朝六時迄之御供揃に候はゞ、六時過之御成に候共、御番所江相詰、御目見仕候に不及候、尤六時以後之御供觸に候はゞ、御番所江相詰可被致御目見候、

但還御之節は、只今迄之通可被心得候、尤大手内櫻田御門番勤方は、只今迄之通候事、

右之通大目付御目付江達之、

〔天保集成絲綸錄六十六〕寛政元酉年十月

町觸

御定式御成、遠御成之節、町屋江差出申間敷分、

出家、山伏、瞽女、座頭、髮切、總髮、羽織著之女、并突棒さすまた刃物長髮之男飛道具、

一髮之飾目立候物抔は爲取可申候

酉十月

〔青標紙〕御成先諸的例

一御成先御道筋留切場之事

寛政元辰年十一月三日、本多伯耆守殿御渡、

御規式并御鷹野御成之節、御道筋屋敷之辻番所々役人兩三人宛罷在、拂之御徒出候はゞ、直辻番人召連、横小路前之立切候場所江罷越、相固メ罷在候由に候、然ル處拂之御徒出候と、立切之場所江者、番人計差置、役人者屋敷內江引取候樣申付ル面々も有之由相聞、御成先人留之儀、大切之儀に付、向後御成之節、前條之通リ、拂之御徒出候はゞ、辻番所に罷在候役人共引連、立切場江罷越、相固メ可申事、

右之趣、萬石以上之面々江可有通達候、

〔天保集成絲綸錄六十六〕寛政元酉年十二月

遠御成之節、御道筋之者共心得違有之、いつとなく嚴重に成行、往來留も程過候樣相聞、御趣意にも相背候間、以來左之通可被取計候、

一武家町とも御道筋往來差留候儀、御徒方屋鋪前、又は町內、扇子に而拂通り候節、差圖を受、人留可致事、

附町人共、土間江下り候儀も同前之事、

一御道筋一小路裏通り者、御先見江候迄者人通し、木戸或はメ切致來候横小路之分も、見透不申場所は、人通し可申事、

一御見通しに而も、不淨に無之重荷之車井肩持之品共、拂之節差掛り難取片付者、御道より三町餘も隔り候はゞ、其儘片寄せ置、人夫は引拂可申事、

但御規式御成之節者、只今之通たるべく候、遠御成之節に候而も、牛車は差置まじく候、

一通御御跡總同勢引切候はゞ、御跡之方は人通し可申候、御門々總同勢通り濟候はゞ、內外共往來は可爲致候、

但通御御跡人通し方之儀者、前日御道申渡之御徒目付可申談候、

右之趣相觸候間、難呑込儀も候はゞ、兼而御目付江承合候之様可被致候、

十二月

右之通不洩様可被相觸候

寛政二戌年三月

御成之節、御道筋邊出火之節、火消井町人足火事場ゟ立退キ候者等往來之儀、以來御道之左右江片寄、御先之御徒一二間に壹人程宛之積、間配附居り候而、御駕籠脇を相通可申候、御道筋に道具など取散し有之候はゞ、取除させ可申候、尤御道固之大名火消等罷出候上者、右御徒間配に不及積に相心得、且御先江横切に參掛候ものは、御供之御徒立候迄は相通し、其後は御目通に而も、行掛りに留置、通御之御跡は、早速相通申べく候、川筋に而も兩岸に御徒間配罷在、御船之脇に而も無構相通可申候、

右之趣ニ兼而相心得候様可被致候、尤火消役、御徒頭、其外相心得罷在、可然向々江も可被達置候、

三月

〔氏家叢書十三〕御成并表出御

一文化五辰年五月四日、御目付遠山左衞門樣へ繪圖面相濟差出候處、御附札左之通、

日比谷御門内本多中務大輔居屋敷、濱御庭へ御成之節、是迄表通長屋不殘窓〆仕候處、右者先年松平主殿頭殿屋敷添地無之節之仕來ニ而、當時ニ而者、繪圖面別紙之通、右添地有之候故、南長屋者、御目通ニ相成不申候、依之已來大名小路數寄屋橋御門通御之節、南長屋計窓〆ニ不及候樣仕度奉存候、此段繪圖面を以奉伺候、以上、

五月四日　本多中務大輔家來　坂根杢之進

御附札

書面之趣、仕來之通改候義難相成候、

一文化六巳年四月廿三日、大目付桑原遠江守樣江相伺、御附札相濟、

遠御成御番所通御之砌、主人當番產穢罷在候節、家來平伏之儀、如何相心得可申哉、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

四月廿三日　小笠原信濃守家來　近藤澤左衞門

御附札

書面伺之通、遠御成御番所前通御之節者、家來計差出、平伏爲仕、尤其段御用番江御屆、當番御目付迄可被相屆候、

〔將軍德川家禮典附錄二十四〕文政四辛巳年

一遠御成等之節、俄に御道替有之、御道筋御門番御目見之儀、并右名前御目付より、口上を以申上候樣、御目付江達之、

一遠御成之節、御成がけ、俄に御道替之節、通御御門番御番所江相詰、御目見之儀御目付より相伺

候處、御成がけ、俄に御道替被仰出候節は勿論、還御御成道之通、右御門通御に候共、相詰に不及段達之、

〔文恭院殿御實紀附錄四〕ある御燕閑の時、御傍に候せし某御物語の次に、王子筋へ年ごとに成らせ玉へども、いつも首夏の頃なれば、飛鳥山の花も青葉のみなり、花盛のころ渡らせ玉はゞ、一入御興も有べしと申上しかば、吾もさおもへり、去かはあれど、かの山の櫻は享保に植させられ、花の所となりしよりこのかた、春は諸人つどひて花を翫ぶ事と聞しめし及ばせ玉へり、去かるに成せらるゝと仰出されなば、二三日前より人の往來を禁ずべし、其うちに雨風などあらむには、花はちり過ぬべし、御一人の御慰に、衆人春遊の妨げたらんこといかゞと思召ゆゑ、花のころは成せ玉はず、こは飛鳥山のみにあらず、隅田川も又然りと仰ありしに、聞えあげし人も恐懼して退きぬ、

〔幕朝故事談〕公方家

御成の節、御門番の大名、御鼻馬の先へ、御徒方を見懸て坐し、御小人を見て手を檢(ツ?)御長刀を見て平伏す、通御相濟候を計りて首を仰ぐなり、陪臣は通御相濟候以後、御小人目付來て、肩衣を引起すなり、是は賴みの御小人目付なり、

外櫻田神田、此兩御門を御成御門と唱へ、兩山御參詣の節は、必此御門より成被遊候事なり、右故此兩御門よりは、葬禮は不出御定なり、丸の中屋敷より、葬禮出候節は、先吳服橋御門より出す事なり、

〔一話一言二十五〕享保三年五月廿一日

御徒頭　雀部新六郎

申渡之覺

待遇

其方組内藤源八郎、一色諸左衞門、先月晦日增上寺へ御成之節、天光院寺内固め相勤候處、尾張殿同勢入込有之、埒之外より相見候付而、右之段僉儀有之候處、源八郎、諸左衞門相違之儀共申、固め之勤方も不念之儀、旁以不屆ニ付而、追放申付候、其方事右御成之節、增上寺固め之場所見分候而可入念旨申付之由に候得共、最前御役被仰付候節、一通り組之者へ、萬端勤方前々之通入念候樣、申渡候迄に而、其上委細之儀は不申聞候、總而御成先之儀は、別而大切成事に候得ば、兼而度々にも急度申渡之、尤其場所の樣子により、時に至り致了簡、組之者へも、相心得させ可申品も可有之處、無其儀、不調法之至に候、依之閉門被仰付者也、

右今晚於大久保佐渡守宅、新六郎呼寄、大久保長門守列座、佐渡守申渡、

八月廿五日

右は野史にいふ、尾張殿(章善公敏)埒の上より御成を見られしゆへ御咎有之、御書付なども追々出候よしなり、御徒兩人は追放に相成候よし、

〔光臺一覽 四〕大内記は菅家之廻り〳〵一人の官なり、(○中略)關東の御院號抔も被撰出也、

安國　初祖　家康公　元和二丙辰年三月十七日、太政大臣、同四月十七日、薨御、同三丁巳年二月廿一日、勅賜東照大權現宮之號、同三月九日、贈正一位、

台德　二世　秀忠公　寛永三丙寅年九月十二日、從一位太政大臣、同九年正月廿四日、薨御、同年二月廿一日、贈正一位、

大猷　三世　家光公　寛永十一年七月廿三日(〇十一年七月廿三日、三年八月十八日誤)、從一位左大臣、慶安四年四月廿日薨御、同年五月三日、贈正一位太政大臣、

嚴有　四世　家綱公　承應二巳年七月十日、右大臣、延寶八申年五月八日薨御、同月廿一日、贈正一位太政大臣、

常憲 五世 綱吉公 寶永二年三月五日、右大臣、同六年正月十日、薨御、同月廿三日、贈正一位太政大臣、○中略

文昭 家宣公 寶永六年五月朔日、正二位內大臣、正德二辰年十月十四日薨御、同月廿六日、贈正一位、

有章 正德三年四月三日、正二位內大臣、同六申年四月廿九日、薨御、同五月十二日、贈正一位太政大臣、鍋松君家繼公、

如斯御院號皆菅家より出る、大くは書經之連綿熟字なり、出ル處大略覺候へども略之、菅家より出され候書付、江戸へ被遣事也、但院之字は不書、只右之通り、二字計書出され候、

〔光臺一覽四〕關東などの凶事には、鳴物停止の日數多く、御所方には日數少きなり、然るに觸穢之事は、仙洞法皇など計の事にて、一度御祚を踐たまふ方のみにて有しかば、常憲院樣○德川綱吉薨御之節より、關東にも觸穢被仰出ける、公家方にも未曾有稀代の例なりと申されし也、其節の御往返再三なり、

一簡致啓達候、今般就大樹公薨御、宮中七ヶ日廢務被仰出、觸穢被仰付御事に候、此旨宜有言上候、恐々謹言、

正月幾日 重保
保春

土屋相摸守殿
秋元但馬守殿
大久保加賀守殿
井上河內守殿

阿部豐後守殿

如斯御書通有ける處、西丸大納言家宣公後文昭院樣、御養君として、御返答御奉書に、御辭退被仰上ける、御返書御文言は、

貴翰致拜見候、今般就大樹公薨御、宮中七ヶ日廢務被仰出、觸穢被仰付之御趣共、遂披露候處、廢務之儀は、叡慮之旨畏御請之御事候、於觸穢之儀は、先例も無之候間、御辭退之思召入候、此段宜有奏聞候、恐惶謹言、

正月幾日　　御老中例之通

高野大納言殿

庭田前大納言殿

如斯御奉書到來せり、又押返し被仰進候は、

報札之旨致被見候、然ば廢務觸穢之兩條、被仰出候趣、被達上聞候處、廢務之儀は可被遊御請候得共、觸穢之儀は、例も無之候間、被成御辭退度被思召旨、達天聽候處、此節別而御音信も繁多之御事ニ候得ば、御懇懃振之御儀に候間、被遊御預掌候て可然御氣色に候、猶又右之趣宜有御沙汰候、恐々謹言、

正月幾日　　重保
　　　　　　保春

御老中連名如例

如此申送りたまひしかば、再答御奉書到來せり、夫に依て觸穢被仰付候、將軍家觸穢之始也、

〔台徳院殿御實紀六十〕寬永九年正月廿四日亥刻、西城の正寢にして薨じ賜ふ、〇徳川秀忠御壽五十四なり、〇中略二月廿九日、勅使參向ありて、台徳院殿と勅謚せられ、正一位を贈らせらる、主上〇明正は

將軍父母
將軍妻

太上天皇の尊號を御追贈あらまほしき叡慮おはしけれど、御平常御謙遜の御志ふかくましましけるゆへ、こなたよりはかたく御辭退ありければ、先正一位にのぼせ給ひけるとぞ聞えし、

〔大江俊尚記〕正德六年五月七日、何となく東武沙汰不宜に付、番所へ示承候處、去月卅日、大樹公〇徳川家繼薨去ニ付、五ケ日廢朝之由也、

〔實久卿記〕嘉永六年七月廿六日己巳、未下刻、龍野侍從亭向、大樹公〇徳川家慶容體尋申了、大樹公去廿二日薨去旨言上、依之自今日五ケ日廢朝之旨、自相役卿被示申、

〔泰平年表台徳院〕御臺所〇徳川秀忠妻御諱は達子、或云於江與と稱後年大御臺所と稱し奉る、〇中略寛永三年九月十五日薨御、年五十四、〇中略同年十一月、從一位を贈らる、

〔柳營譜略乾〕御臺所奉稱於江與御方、〇徳川秀忠妻

寛永三年丙寅九月十五日、於西丸御逝去、〇中略十一月廿八日、贈從一位、

〔泰平年表嚴有院〕家綱公御事は大猷院殿御嫡男、御母堂は青木三太郎利長女、(中略)承應元年十二月二日逝、年三十二、東叡山に葬送、正二位を贈らる、

〔季連宿禰記〕寶永二年六月廿七日己未、大樹〇徳川綱吉御母儀從一位藤原光子、號桂昌院、御比丘尼、御座三丸、去元祿十五年二月十四日從一位宣下、今月廿二日薨逝之由有其聞、依之自今夜先洛中音曲造作停止之由觸之云々、日數未定、七月十六日丁丑、自今日洛中音曲被免之由風聞、自今日鳴物被免、其旨自傳奏被告知諸家、自去廿七日停止至今日、

〔泰平年表文昭院〕家宣公御事は、清揚院殿(中略)承應二年八月十二日、御元服、從三位左近衞權中將左馬頭綱重卿(中略)延寶六年九月十四日逝去、(中略)寶永六年閏八月十三日、贈征夷大將軍正一位太政大臣、〇中略御嫡子、御母堂は甲府家臣田中次兵衞時通女、於保良の方、寛文四年二月廿八日逝、號長昌院殿、正德二年十月十二日、贈從一位、

〔柳營譜略乾〕御臺所照姫君〇徳川家宣妻

寶永六年己丑六月十九日、叙從三位、○中略、正德三年癸巳四月二日、叙從一位、稱一位樣、○中略、寬保元年辛酉二月廿八日、於同所○西丸御逝去、御年八十、葬增上寺、三月八日、御出棺、此日御送葬、鳴物御二七日、普請者七日停止、御法名天英院殿、贈正一位國大夫人光譽和貞崇仁大姉、

〔天明集成絲綸錄 二〕寶曆十辰年九月

此度御臺樣○德川家治妻、從三位勅許被爲在候、此段向々江可被達候、

〔天明集成絲綸錄 二〕寶曆十辰年九月

御臺樣御叙位之爲御祝儀、來ル廿二日四時御本丸西丸江總出仕、尤服紗小袖半袴可爲著用候、

一總出仕之面々、老中右京大夫板倉佐渡守、御本丸西丸若年寄可被相廻候、且隱居幼少病氣之面々者、月番之老中右京大夫板倉佐渡守江使者可被差越候、

一在國在邑之面々者、老中右京大夫板倉佐渡守江、拾萬石以上者使札、其外者飛札可被差越候、在邑之隱居部屋住者可爲飛札候、

右之通可被相觸候

九月

〔柳營譜略 坤〕御臺所○五十宮之御方、德川家治妻、

寶曆十年九月二日、叙從三位、○中略、明和八年辛卯八月十日、御逝去、○中略、同年九月贈從二位、天明三年癸卯八月十二日、贈從一位、

〔實久卿記〕文化十四年五月十五日戊午、關東大樹公家齊實母、去八日死去、依之內裏勾當掌侍以取計自今日三ヶ日被止物音、仙洞同上、萠局以取計被止物音了、

〔泰平年表 大御所〕文政五年三月朔日、御臺所○德川家齊妻、被叙從二位、御簾中○德川家慶妻、被叙從三位、

〔續視聽草 四集八〕御轉任御任槐問答

御臺様〈〇徳川家齊妻〉御位階御沙汰も御座候、二位にならせられ候哉、一位に被爲成候哉、何と申候哉、從一位に被爲成候へ者、桂昌院様〈〇徳川綱吉母〉元祿三年、天英院様〈〇徳川家宣妻〉正德三年、從三位より直に一位に被敍候、此御例を以考候へ者、此度も一位に被敍候御事に御座あるべく候、御加階又御加級とも可申候、

御簾中様〈〇徳川家慶妻〉にも御位之事御座候由從三位に敍せらるべく候哉、御敍位と申候、

〔輪池叢書 外集四〕准大臣宣下

文政八年七月十八日、入道一位御方〈〇一橋治濟、家齊父〉准大臣宣下陣儀、〈〇中略〉同月二十二日、京都發足、

宣旨使〈正五位下大外記病氣ニ付〉　山口少外記中原禹昌〈中務少丞、小内記、四十七、〉

副使〈青木内藏允病氣ニ付〉　三宅中務大錄宗岡邦行〈長門介二十七〉

告使　山科長門守紀生直　二十四

八月三日、江戸著、同七日〈於一橋御屋形〉御式、〈〇中略〉

文政八年七月十八日　宣

入道治濟卿

准大臣

入道從一位源朝臣、春秋已高、又征夷大將軍源朝臣實有天性之親之間被宣下、

職事顯孝

入道從一位源治濟

正二位行權大納言源朝臣重能宣、奉勅件人春秋已高、又征夷大將軍源朝臣實有天性之親、宜准大臣預朝參者、

文政八年七月十八日　　少外記兼中務少丞少内記中原朝臣禹昌奉

〔天保集成絲綸錄十四〕文政八酉年八月

大目付江

一橋一位殿〇徳川家齊父治濟　准大臣宣下ニ付、向後一橋儀同殿と稱可申事、

右之通、向々江可被相達候、

八月

〔文恭院殿御實紀附錄二〕御父君にてわたらせ玉ふ一橋儀同治濟卿は、さきに准大臣に任じ玉ひ、綱代輿をおくり、その傅役に加祿さへありて、御孝志いと厚くおはしましき、つひに西城にうつし玉ひて、大御所の尊稱をおくりまゐらせたき盛慮まし〳〵て、宿老松平越中守定信、松平伊豆守信明を召出て、去かく〳〵の尊慮ありしに、いづれも然るべからざる旨を答へ奉りぬ、その後ある日、御ちかく〳〵と定信をめし、去ひて前命を遂玉はんことを宣ひし、定信なほ御旨にもとりて、さき〳〵のごとく答奉りしに、公〇徳川家齊殊に御いきどほり御氣色かはらせ玉ひ、御はかせをもて定信を斬玉はんとせられしに、たま〳〵御側平岡美濃守頼長御かたはらにあり、その御擧動を去らざるさまにとりなし、越中守よ、御刀賜ふに、はやう拜戴せよといひければ、公やむことを得玉はず、御刀をすてゝ、御奥に入玉ひぬ、こゝをもて定信、御刀を拜領して退しとなむ、其後青山下野守忠裕閣老となり、公またふたゝびこの儀をとひ玉ふ、忠裕御請申上たてまつるには、臣子の君父を扱ふに至りては、いかばかり美號を贈りたてまつるとも、猶心にあきたらず侍り、今の尊問の如きは、常人の情意にこえて、一橋邸を尊び玉ひて、大御所と仰ぎ玉はんこと、實に御至孝といひつべし、されど國家の制儀にあらず、既に正德の頃、甲府參議綱重卿を尊び玉ひて大相國を贈りまゐらせられしは、文昭院殿〇徳川家宣の追尊の盛慮に出し所に侍り、又有德院殿〇徳川吉宗の

父君紀伊大納言光貞卿は、薨ひ玉ひし後とても、更に御贈官の議なし、ましてや今一橋邸、いまだ御齡高からざるに、この尊號を贈り玉はんこと、御僭踰の御事なるべく、さきに定信等が申上し言は、萬世の公議なるべければ、幸にその言葉を棄玉はずば、社稷の福これに過るはあらじと、言葉を盡し諫め奉りぬ、こゝをもて尊意の遂玉はざることを思召て、つひにその議はやめ玉ひぬ、御孝心といひ、諫をいれ玉ふといひ、感仰し奉るもあまりある御事になむ、

〔天保集成絲綸錄十六〕天保七申年九月

大目付江　〇中略

一御臺樣〇德川家齊妻西丸江御移徙當日より、大御臺樣と奉稱、御簾中樣〇德川家慶妻御本丸江御移徙當日より、御臺樣と奉稱候事、

右之通可被達候

〔將軍德川家禮典附錄十一〕天保十二辛丑年五月廿八日、

一右大將樣江〇家定公、有君御方御緣組被仰出候ニ付、總出仕有之、

有姬御方は鷹司准后殿姬君、鷹司關白殿御養女、文政六未年九月五日、御誕生、天保二卯年九月十五日、御一向御本丸江御著輿、同六未年十一月廿八日、御鐵漿初相濟、

〔實久卿記〕天保十五年十一月十八日辛巳、廣大院去十日薨去、今日奏聞、大樹公〔德川家慶〕母儀也、依之自今日三ケ日御愼、宮中被止物音候旨、自相役卿被示了、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年九月朔日、前將軍〇德川家定御臺所ヲ稱シテ天璋院ト曰フ、

此日御臺樣御事、天璋院樣と可奉稱旨被仰出之、　昭德公〇德川家茂將軍宣下の時に至り、從三位勅許有之、

〔實麗卿記〕安政七年〇萬延元年十月十八日戊寅、巳刻參內、如日來、今日若狹侍從、橫瀨侍從等、參內有御

對面、和宮御緣組之事、御許容被仰出云々、右大將以一紙被示續左、

和宮〇仁孝皇女親子御緣組之事、自關東再三被懇願候に付、正德年中八十宮御約定、并東福門院〇後水尾后、德川秀忠女、御入内之御例も被爲在候儀、且深思食も被爲在候間、御許容被仰出候事、

酉下剋退出、直參和宮申談有子細、又爲御使女房〇越後、大乳人代云々御緣組御許容之事、被仰進云々、

〔嘉永明治年間錄十〕文久元年十二月十一日、和宮本丸ニ入輿、並慶賀ニ就テ、物ヲ供奉ノ公卿衆ニ賜フ、

今十一日、辰上剋、淸水御屋形より御出輿、吹上上覽所前通り、竹橋御門御堀端大手御門より、御本丸御車寄へ被爲入、御本丸、〇下略

〔將軍宣下記〕慶安四年八月廿七日壬申、將軍宣下ノ爲御祝儀、御一門諸大小名烏帽子直垂ヲ著シ登城ス、將軍家御烏帽子、紅ノ御直垂著御有テ、白書院へ出御、御劒ハ品川侍從、御刀ハ本多土佐守役之、紀伊亞相御禮太刀目錄、有銘、厩橋侍從披露之、次ニ水戸黃門御禮太刀目錄有銘披露同前、次ニ尾張參議御禮太刀目錄有銘披露同前、次ニ紀伊參議、水戸中將御禮太刀目錄披露同前、何も中壇ニ著座、御祝儀申テ退カル、於茲將軍家大廣間へ出御、上壇ニ御著座、御劒御刀ノ役同前、高田少將太刀目錄持參御禮、次ニ備前少將、〇中略松平飛驒守等侍從以上一人宛、太刀目錄持參シテ、下壇ニテ御禮申上退ク、〇註略其次毛利和泉守〇中略牧野右馬允等、四品ノ輩太刀目錄持參、太刀ヲ下壇ノ閾際ニ置、板緣ニテ御禮申上退ク、各持參ノ太刀目錄ヲバ、奏者番ノ面々引納之、次ニ五位ノ面々ハ板緣ニテ太刀目錄持參、御禮申上ル、右ノ太刀目錄ハ御書院番頭、御小性組番頭引納之、次ニ御旗本ノ諸士、烏帽子素袍ヲ著セル輩、大廣間白書院於御次ニ一同ニ御目見、太刀目錄ハ三千石以上獻之、在國ノ諸大小名ヨリ名代ノ使者、烏帽子素袍ヲ著、太刀目錄持參ス、奏者番ノ面々引納之、并在府在國ノ諸大小名ヨリ、女中ヘモ表御祝儀、其員數ハ一萬石以上五萬石以上、十萬石以上、二十萬

石以上、卅萬石ヨリ百萬石ニ至ルマデ、各差アリト聞ユ、　廿八日癸酉、今度將軍宣下ニ付テ、爲御名代増山彈正少弼、日光山ノ御廟ヘ可被遣ノ旨被仰付、　九月朔日丙子、將軍宣下ノ爲御祝儀無官ノ面々登城ス、將軍家御長袴ヲ著御、白書院ヘ出御、上壇ニ御著座、松平久松、紀伊宰相二男松平千代熊、周防長門國主上杉喜平次、奥州米澤城主細川六丸、肥後國主松平德千代、高田少將長男其外國持大名ノ長子、次第ヲ守、一人宛出テ、御禮太刀目錄ヲ持參ス、次ニ加藤出羽守〇中略戸川土佐守、御禮太刀目錄持參、此等ハ大猷ノ役人ナルニヨリテ、去月廿七日ニ御禮不申上ニ付テ、今日如此、次ニ小松中納言御禮太刀目錄、厩橋侍從披露之、松平犬千代故筑前守長男御禮太刀目錄持參、此外諸士ノ幼息等、大廊下ニ並居、太刀目錄ヲ前ニ置、御禮申上ル、次ニ京、江府、南都、大坂、堺、長崎ノ町人、白書院ノ御次、末座ニ並居、一同ニ御目見、伏拜シテ退ク、〇中略増山彈正少弼今日日光山ヘ首途ス、　二日丁丑、將軍家白書院ヘ出御、將軍宣下ノ爲御祝儀、日光御門跡一品法親王尊敬、上壇ニテ御禮、三束一卷太刀目錄、吉良侍從披露之、次ニ毘沙門堂門跡前大僧正公海、中壇ニテ御禮、上壇ニ著座、三束一卷、披露同前、次ニ山門ノ總名代御禮、三束一卷、井上河內守披露之、次ニ日光山總名代御禮、二束一卷、披露同前、次ニ最敎院晃海、雲蓋院豪倪、本實成院胤海、覺樹院純應、知樂院忠圓、喜多院周海、長樂寺圓義、青龍院亮盛、淨敎坊實俊、何も一束一本、次第ヲ守、一人宛出テ御禮、披露同前、次ニ六角木工權頭藤原廣賢太刀目錄持參御禮、披露如前、此時日門毘門退出、將軍家中壇マデ出御、御會釋有、其後平僧等進物ヲ前ニ並置、一同ニ御禮、平伏シテ退ク、　五日庚辰、將軍宣下ノ爲御祝儀、猿樂依被仰付、御一門ノ歷々、諸大小名長袴ヲ著シ、辰ノ剋登城ス、將軍家御長袴ヲ著御、辰ノ下剋大廣間ニ出御、御履物ハ内藤出雲守役之、紀伊亞相、水戸黃門、尾張參議、紀伊參議、水戸中將御目見、則西ノ御緣ニ障子ヲタテヽ、五卿ノ座トス、厩橋侍從御次ノ間ノ衾障子ヲ開ク、列參ノ諸大小名御目見、若狹少將御挨拶申上、御衾障子ヲサス、近習小臣等進テ御前ノ御簾ヲアグ、厩橋侍從舞臺ニノボリ、橋掛リニ到テ、御能初メヨト云テ歸座ス、則猿樂出、〇中略猿樂畢テ

紀伊、水戸、尾張五卿御目見、其後御衾障子ヲ開キ、諸大小名御家人等御目見拜禮ス、若狹少將御前ニアツテ、何も忝奉存ノ旨指揮ス、各伺候ノ面々申ノ刻ニ退出、其後又半袴ヲ著シ、今日ノ爲ニ御禮登城ス、七日壬午、今日增山彈正少弼從日光山歸參ス、今度ノ爲御祝儀在國ノ面々名代ノ使者執事ヨリ觸有ニヨツテ登城、在國ノ諸大名ヘ奉書有、使者ニハ、於蘇鐵之間御袷三領宛頂戴シテ退出ス、廿二日丁酉、今度ノ爲御祝儀猿樂依被仰付、番頭、物奉行、御旗本ノ諸士、近習、諸役人以下不殘、長袴著シ群參ス、多人數タルニ依テ、大廣間ノ御椽ヲツギ、傍ニ棧敷ヲ構、見物ノ輩著座ス、將軍家御長袴ヲ著御、大廣間ニ出御、○中略猿樂過テ、又御衾障子ヲ開キ、伺候ノ面々御目見、執事老臣御前ニ有テ、何モ忝奉存ノ旨ヲ言上ス、一同ニ平伏シ退出、

〔敎令類纂初集十〕正德三癸巳年三月十九日

水野監物被相渡候御書付之趣

一將軍宣下ニ付、四月御三家始萬石以上之面々、布衣以上之御役人、幷布衣以上之寄合、將亦法印法眼之醫師登城可有之事、

一諸大夫以上は束帶、布衣は其裝束ニ而著用候事、

一日限幷登城之刻限は、追而可相達候事、

右之通可相心得候

右爲御祝儀各被相廻候儀、當日は延引可有之事、

一將軍宣下相濟候爲御祝儀、以御太刀馬代御禮可申上候、去ル辰十二月十八日、御代替御禮之通、正月三日之分朔日ニ登城御禮可有之、裝束も侍從以上直垂、四品諸大夫狩衣、布衣は其裝束、無官は長袴素袍著用可有之、日限は追而可相達候事、

一御代替り御禮之節、眞御太刀獻上之面々は、此度作太刀可被差上候事、

一萬石以上幼少病氣、或在國在所之面々、名代之使者を以、御禮之日、御太刀獻上可ㇾ有候、尤使者素袍可ㇾ著事、

一萬石以上隱居之衆不ㇾ及御禮候、在江戸在所共ニ御禮之日、以使者御太刀獻上可ㇾ有事、

一萬石以上諸大夫、幷三千石以上在所、又は御役所ニ有ㇾ之面々、其外病氣之分以使者御太刀可ㇾ差上候、日限は追而可ㇾ相達候事、

一御禮申上候當日、萬石以上其外ハ翌日、掃部頭老中越前守、中務大輔、若年寄中江可ㇾ被相廻候、尤不ㇾ込合樣ニ可ㇾ被ㇾ心得事、

但在國在所之面々ハ、追而使者可ㇾ被ㇾ差越候事、

一幼少又は病氣之面々は、御禮之日右之通使者可ㇾ被ㇾ差越候事、

一御禮之節諸御番衆は、其向々一組ゟ五六人づゝ御禮ニ可ㇾ被ㇾ出候事、

但御腰物方五六人、御納戸ハ組頭之外元方拂方ゟ十人程、御右筆は當番切、御勘定は組頭之分十人程可ㇾ被ㇾ差出候事、

右之通可ㇾ被ㇾ相觸候

〔憲教類典一ノ十六 將軍宣下〕延享二乙丑年十月廿二日

覺

中務大輔殿　大目付
伊豫守殿　御目付　江御渡

一來月二日將軍宣下ニ付、御家門方始壹萬石以上之面々、布衣以上之御役人、幷布衣以上之寄合、且又法印法眼之醫師登城候事、

一大御所樣大納言樣附之面々も、御本丸ニ可ㇾ進事、

一諸大夫以上ハ東帶、布衣之面々ハ布衣著用候事、
一五時揃ニ候事、
右之通可被相心得候
延享二乙丑年十月廿二日
　　中務大輔殿　大目付
伊豫守殿　御目付　江御渡
一將軍宣下相濟候爲御祝儀、來月四日萬石以上之面々、同七日萬石以下之輩、老中右京大夫、隱岐守、若年寄衆加納遠江守、堀式部少輔、戸田淡路守、堀田加賀守江可被相廻候事、
一在國在所之面々ハ、被承候以後、追而使者可被差越候事、
　但隱居在所之面々も同斷
一在府之隱居、并病氣幼少之面々ハ、右兩日之內、使者可被差越候事、
延享二乙丑年十月廿二日
　　中務大輔殿　大目付
伊豫守殿　御目付　江御渡
一將軍宣下相濟候爲御祝儀、御太刀馬代を以、御禮可被申上候、先日御代替御禮之通、正月朔日出仕之分、一日二日出仕之分、一日三日出仕之分、一日御禮可有之候裝束も、先日之通たるべく候、日限は追而可達候事、
一萬石以上御暇之面々、且又在府ニ而も病氣之分ハ、其向々御禮之日、以使者御太刀可有獻上候、尤使者素袍可著事、
一幼少之面々ハ、三日目以使者、御太刀可有獻上候、尤使者熨斗目半袴可著事、

一萬石以下諸大夫并三千石以上、在所又ハ御役所ニ罷在面々、其外病氣之分ハ、三日目に以使者御太刀可有獻上事、

一萬石以上隱居之面々、不及登城候、在府在國在所共ニ三日目使者を以、御太刀獻上可有之候、四品拾萬石以上之使者は熨斗目長袴、其以下ハ半袴可著事、

一御禮被申上候ニ付、老中若年寄中江被相廻ニ不及候、

一大御所樣、大納言樣江獻上之御太刀馬代ハ、西丸江可被納候、

十月

古事類苑

官位部五十二

德川氏職員一

德川氏職員總載

德川氏ノ制ハ、武家ヲ、家門、外樣、譜代ノ三種トス、(家門外樣ノ事ハ大名篇ニアリ)譜代ニ大名、旗本、家人アリ、家人ハモト譜代ノ總稱ナリシガ、後將軍ニ謁見スルヲ得ルモノヲ旗本ト稱シ、其以下ヲ家人ト呼ブニ至レリ、而シテ幕府ノ職員ハ、譜代大名、幷ニ旗本家人ノ內ヨリ任ズルノ制ナリトス、

當時武家ノ官ハ、公家當官ノ外タルノ制ニシテ、朝廷ノ官位ヲ授ケラルヽモノアルモ、搢紳ト同官タルヲ妨ゲズ、旗本以下ノ格式ハ、布衣、及ビ目見以上、以下トス、目見以下ニ又譜代、二半場(ニハンバ)、抱入(カヽヘイレ)、上下役(カミシモヤク)、役上下、羽織袴役、白衣勤(ビヤクエツトメ)等ノ別アリ、布衣トハ布衣ヲ著スルヲ得ルモノニシテ、布衣ハ織紋ナキ狩衣ナリ、呼ビテホイト云フ、目見以上ハ將軍ニ謁見スルヲ得ルモノニシテ、以下ハ之ヲ得ザルモノナリ、譜代トハ、家康ヨリ四代ノ間ニ、留守居與力同心等ノ職ニ居リシモノヽ子孫ヲ云ヒ、抱入トハ、四代以後大御番與力同心等ニ新ニ採用セラルヽモノナリ、而シテ二半場トハ、家康ヨリ四代ノ間ニ、西丸留守居同心等ノ職ニ居リシモノヽ子孫ニシテ、其抱入レラレタル時代ハ譜代ト同ジクトモ、譜代ト爲サズ、而シテ又抱入ニモ入ルベカラザルモノヲ云フ、卽チ二者ノ中間ノ意ナリ、上下役、役上下トハ、上下ヲ著シテ出仕スルヲ得ルモノニテ、其內家督跡式ノ相續ノ時、躑躅之間ニテ命ヲ受クルモノヲ上下役ト

武家人員

稱ス、羽織袴役ハ、羽織袴ヲ著シテ出仕スルモノニテ、白衣勤ハ袴ヲ穿タズシテ出仕スルモノヲ云フナリ、又屋敷地ヲ賜フニモ、其格式ニヨリテ廣狹ノ差アリ、殿中ノ座次ヨリ、出入ノ門戸、衣服乘物ノ末ニ至ルマデ、皆各〻其格式アリテ、相冒スコトヲ得ズ、

役人ノ選擧ハ、推薦ト試驗トニ依リテ之ヲ行フ、而シテ新ニ就職スルモノハ、誓詞ヲ爲シ、古役ノモノニ就キテ執務ノ方法、幷ニ廳内ノ習慣ヲ學ブヲ以テ例ト爲シ、此任ニ當ル古役ノモノヲ師匠番ト云ヘリ、

幕府ノ諸職甚ダ多シ、而シテ老中、若年寄、寺社奉行、留守居、大目付、町奉行、勘定奉行、作事奉行、鎗奉行、目付等之ヲ分轄シ、其昇級、轉役、免職等、皆慣例アリ、其家格ヨリ以下ノ職ヲ勤ムルヲ引下勤ト云ヒ、本職ニ在ルノ間、其職務ヲ執ラズシテ、他ノ官衙ノ職務ニ服シ、若シクハ本職ニ在ルノ間、臨時ニ他ノ官衙ノ職務ニ服スルヲ出役ト云フ、加役トハ出役ノ中ニテ、或ル職ニノミ稱スル名ナリ、又加番ト云フアリ、大阪城番、駿府城代城番ノ副職ニ此名アリ、而シテ役人其職務ニ關スル事ハ勿論、凡ソ政務ノ上ニ於テ必要ト認ムル事アル時ハ、之ヲ建白スルコトヲ聽サル、又諸役ノ内、劇務ノモノハ日勤ニシテ、其他ハ隔日勤務等ノモノアリ、又文久中ニハ、隱居ノ身分ヲ以テ猶ホ其職ヲ奉ズルコトヲ許サレタリ、

〔保四羅談〕一元文二丁巳年、公儀御分限牒寫之由、

一萬石以上大名總人數　貳百六十四人

一萬石以下御目見以上　五千貳百四人

一御目見以下御役人附與力同心之外職人共若猿若共　四百八拾人

都合貳萬六千五十三人

一萬石以上千七百五十五萬四百石

一御目見以上萬石以下家來幷御扶持被下候者五十六萬三千貳百六十石

一御役料高十三萬五百卅石

一御藏米切米高七拾八萬六百九十俵　春　夏　冬　三度渡

一御藏米御扶持高　貳拾九萬六百五十俵

合九十九萬三百四十俵

內殘り五十三萬五千五百壹俵　上納方引之

四十九萬三千七百六十九俵　不定

右寄面　千貳百四拾五苗字　五千百六拾九人

〔御旗本武鑑抄〕い百八苗三百八十九人、○中略す貳十四苗百七十三人、　三十九文字

右人數五千百六拾九人之內

一御役人千貳百九十三人　一御番方千五百六十六人　一寄合貳百四十七人

一駿府勤番　貳拾八人　一甲府勤番百六十三人　一小普請千七百五十六人

一不知方百十六人

右之內千石以上　一六百七十六人　一千石以下五百石以上六百二十六人

一百石以下七百六十六人　一五百石以下百石以上三千九十七人　一高不知方四人

地行高　貳百六拾六萬八千八百六拾八石三斗壹升○四勺貳才

內貳萬千八百十五俵貳斗四升御藏米

御藏米高　六拾壹萬七千百○九俵○七升八合六勺九才

內百○九俵三斗四升六合地方

御扶持方　四千四百○五人半扶持

此俵貳萬千〇貳拾七俵半

高不ㇾ知分四人

都合高凡三百三拾零萬八千〇〇四石五斗六升四合壹勺壹才、但シ壹俵ハ壹石ニ直シ、

〇按ズルニ、右ノ表ニハ違算アル如キモ、別ニ校合スベキ書ナキヲ以テ姑ク原文ノマヽヲ存ス、

〔吹塵錄二十五德川氏〕德川氏領國八百萬石旗下八萬騎の說

世間又云ふ、德川氏の旗下總數八萬騎と、是は石高八百萬石より誤稱するが如し、旗下士の稱あるものにして、其祿萬石に及ばざるもの、實數三萬三千餘家のみ、然れども世に八萬騎と稱するものまたその原因あり、譜代の臣下にして、萬石以上の祿を食むもの、卽ち世俗に譜代大名と稱する輩百數十家、是等の家臣、昔時は皆旗下の隊に編成せしものなれば、是を通算する時は、其數八萬前後に及ぶべし、

〔德川禁令考公家一〕禁裏向御法式

慶長二十乙卯年七月

禁中方御條目十七箇條〇中略

一武家之官位者、可ㇾ爲公家當官之外事、

〔柳營秘鑑一〕官爵敍任次第

一五位ニ被仰付面々、所謂萬石以上城主之嫡子、無城ニ而も寺社奏者之嫡　若年寄之嫡　國持之次男三男或は　御側衆　御留守居年寄　大御番頭

御書院番頭　御小姓組番頭　甲州詰小普請頭　大目付　町奉行　御勘定奉行

御作事奉行　御普請奉行　小普請奉行　西丸御留守居　京都町奉行　禁裏附

法皇御所附　仙洞附　伏見奉行（近来萬石以上）　泉州堺政所　奈良奉行　駿河御城代

久能奉行　勢州山田奉行　長崎奉行　日光奉行　御小姓衆（時官も有之）　大坂奉行

一御三家幷松平加賀守家老五位被仰付、但御三家者六七人、內水戶は少し加賀守は四人、

右衛門督殿附兩人

〔靑標紙三編〕一叙爵國名の事は、竹尾善筑が類例略要集にも出たれども、悉く精しからず、關東にて憚り稱せざるも、京都にては更に憚からず受領する事なり、然れども流石に武藏守ばかりは憚りて名乘らず、其他は少しも憚らぬ事なり、關東にては、尾張守初め、陸奧、薩摩、越後を憚りて名乘らず、然れども紀伊と加賀は憚る事なし、又掃部頭は他にては憚れども、水戶の御連枝にてはこれを名乘らるゝ也、また御老中方と同名を憚りて改名をするは、御老中支配之御役人とても憚り改むるなり、又若年寄と同名も多くは改むる事なれども、御用御取次に限りて、若年寄と同名なるも改めず、これは大君つね〳〵御呼遊ばされたるより改めぬ事にて、たとへば、先年、若年寄に鳥居丹波守ありしに、平岡丹波守御用御取次にて改名せざるが如し、御用御取次が格別威權ある事これにても知れたり、又先年淺野中務少輔甲府勤番支配被仰付之時に、甲斐守に任じ度旨を伺ひしに、不相成との御附札なりしゆへ、又ふたゝび內匠頭と伺しに、憚り可然との御下知なり、小花和內膳正も日光奉行を被仰付たる時、大外記と伺しに不相成との御差圖なり、すべてその支配地を名乘る事も憚る事にて、大坂町奉行は攝津守を名乘らず、堺奉行は和泉守、奈良奉行は大和守、山田奉行は伊勢守、日光奉行は下野守、長崎奉行は肥前守を名乘らず、治部大少輔刑部同、右衛門尉を憚るは、關が原一件よりしての事なるべく、左右衛門大夫も又何等差ひく所ありて遠慮するものなるべし、

〔幕朝故事談〕位署、公儀にては、まき札なり、大目付衆坊主に被仰付候て、まかせるなり、此は御能の

時なり、

旗本家人

〔德川禁令考 三十六 文武〕旗本家人令條之一

幕士、將軍ニ謁見スル以上ヲ旗本ト稱シ、以下ヲ御家人ト稱シタルコトハ、當時見聞セシ所ナレドモ、右記ヲ按ズルニ、文化十酉年八月大目付ヘ、阿部飛驒守ヨリ問合ノ附札ニ、御旗本ハ、萬石以下御番衆迄ノ通稱、御家人トハ、御目見以上以下ニ而差別ノ儀ニハ無之トアリ、此ニ據レバ、幕士ヲ御旗本御家人ト分稱セシハ、習慣ニ由レル者ニテ、公稱ニハ非ラザリシナリ、然レドモ、當時ノ公文、御旗本御家人ト連稱シタル者、亦之レ有リ、因テ今此ノ章ノ標目ト爲シ、以テ上輩輕輩ヲ總攝スト云、

〔柳營沙汰書 三〕慶應二年正月二十八日

周防守殿　　　　兩御目付江

文學之儀、是迄厚ク御世話有之候得共、尚又御引立之爲、向後御旗本、御家人之面々、當主ハ勿論、次三男厄介ニ至迄、年齢八歳ヨリ以上之者ハ、學問所江罷出、讀書可致旨被仰出候間、親共ハ勿論、頭支配ニ於テモ、御趣意相心得、厚世話可被致候、委細之儀ハ、林大學頭、林式部少輔、坂井右近將監掛御目付可被談候、右之趣向々江可被達候事、

布衣

〔柳營秘鑑 一〕布衣被仰付面々

小普請支配　御番頭　御書院番 御小姓組 組頭　中奥御小姓　御小納戸　御旗奉行　御鑓奉行

百人組頭　御持弓鐵炮頭　御先手　御鐵炮御用　御勘定吟味役　西丸裏御門番之頭

二丸御留守居　定火消　御目付　御使番　御鷹匠頭　小十人頭　御徒頭　御船手

一位樣御用人　月光院樣御用人　瑞春院樣御用人　御廣敷御用人　元方拂方御納戸頭

御腰物奉行　奥御祐筆組頭　浦賀奉行　佐渡奉行　二條御城番　大坂御船手

駿河御城番　駿河町奉行　伊奈半左衛門　林百助　竹姫君樣御用人　養仙院樣御用人

法心院殿御用人

〔青標紙〕衣服制度的例

一布衣　古き裝束抄に、布衣と云は狩衣之事也、此事心得て見るべし、飾抄に布狩衣と云名目有て、古實には拵へは狩衣と同じ事にして、地は必布に而拵ゆるを布狩衣と云也、京都に而も先年迄は多く只のきぬ只ゑゞら絹を用ゆといへども、近頃に至りて多く布を用ゐらる、今武家に而は布衣之御役人は必精好を用ひ、陪臣には只の絹、又ゑゞら絹之內可用由、文化年中對州江朝鮮使來聘之節より御制度始れり、色目之事定なし、袖括は狩衣に同じ、鞆貫之事、淺黃の羽二重を用ゆ、

〔貞丈雜記裝束五〕一布衣と云も狩衣の事也、古將軍家御參內などの御供にほういの役といふ事有、狩衣を著し御劍を持つ役也、ほうい太刀はきと云事、條々聞書に有、〇略註今は織文あるを狩衣と云、織文なきを布衣と云習せり、古はすべて狩衣の事を布衣と云、又いにしへはほういと云、今はほいと云、是今世江戶武家の詞なり、

〔仕官格義辨〕二段布衣之事

問云、世間に而二段布衣と被申候は何々之御役儀に候哉、　答云、世間にて二段布衣と申は、布衣役々布衣江御役替之場所を二段共二重布衣共申候、極て二段布衣と申は、御旗奉行、御鑓奉行、小普請支配新御番頭、御持筒拵にて候、御先手、御留守居番、御目付も二重布衣御役に而候得共、兩御番〇御書院番頭御小性組番頭方よりは直に被仰付候例も有之候、　又問云、御先手江は大御番之組頭々も被仰付候、兩御番方々直に被仰付候得ども、御留守居番江は大御番組頭兩御番々被仰付候例不承候、如何被聞及候哉、

答云、御留守居番之儀は、寛永十九午年二月五日、初而五人被仰付候、宮崎備前守、筒井內藏、久松彥右衛門、長井五左衛門、松平庄右衛門にて候、右之內、五左衛門、庄右衛門は、大御番組頭より被仰付、其後も慶安元子年三月十二日、小野源左衛門、大御番組頭より被仰付候、寛文元丑年八月五日、御書院番より榊原四郎右衛門、大御番組頭より小笠原太郎右衛門被仰付候、延寶七未年三月四日、新御番組頭より三浦八兵衛、元祿七戌年七月朔日、小普請方より遠山權左衛門、右之面々、布衣以下御役人御番方より御留守居番被仰付候先例に而候、

〔幕朝故事談〕千石以上の御旗本にても、代々布衣にならざれば、其子兩番には番入ならぬ事なり、故に大御番に入なり、

目見以上
目見以下

〔舊經錄譚〕御目見以上以下大概順并場所高附

御目見以上

國持大名、御譜代大名、外樣大名、京都所司代、大坂御城代、若年寄衆、雁之間詰、御奏者番、寺社奉行、大坂御定番、詰衆、御奏者番嫡子、菊之間緣頰詰、同嫡子、高家衆、御側衆、表高家交代寄合、駿府御城代、伏見奉行、御留守居、大御番頭、御書院番頭、御小性組番頭、御三卿家老、大目付、町奉行、御勘定奉行、御旗奉行、御作事奉行、御普請奉行、小普請奉行、甲府勤番支配、長崎奉行、京都町奉行、大坂町奉行、駿府御城番、禁裏附、仙洞附、山田奉行、日光奉行、奈良奉行、堺奉行、駿府町奉行、佐渡奉行、浦賀奉行、西丸御留守居、百人組之頭、御鎗奉行、小普請支配、新番頭、御持弓筒之頭、火消役、御小性、中奥御小性、林大學頭、御廣敷御用人、西丸御廣敷御用人、半井出雲守、今大路兵部大輔、〇二人並典藥頭御部屋御用人、寄合、御側衆子供、駿府御城代子供、御留守居子供、法印法眼醫師、狩野養川院、〇繪師大坂御船手、御留守居番、御先手弓鐵之頭、御目付、御使番、御書院番組頭、御小性組組頭、駿府勤番組頭、御鐵炮方、西丸御裏御門番之頭、御徒頭、小十人頭、御小納戶、御船手、西丸御留守居番、御納戶頭、御腰物奉行、御鷹匠頭、御勘定吟味

役、奥御右筆組頭、瀨名住五郎、美濃郡代千種六郎左衞門、西國筋郡代揖斐十大夫、飛驒郡代飯塚常之丞、京都郡代石原清左衞門、御代官飯塚伊兵衞、新御番組頭、大御番組頭、表御右筆組頭、御膳奉行、小普請組支配組頭、甲府勤番支配組頭、裏御門切手番之頭、西丸切手番之頭、二條御城御門番之頭、二條御城御殿頭、御廣敷番之頭、中奥御番、御小性組、御書院番、兩番格御庭番、御納戸組頭、御鐵炮玉藥奉行、御簞笥奉行、御弓矢鎗奉行、御天守番之頭、(富士見御寶藏)番之頭、大坂破損奉行、御具足奉行、大坂御具足奉行、御幕奉行、駿府武具奉行、御書物奉行、諏訪部文右衞門、村松四兵衞、成島忠八郎、御賄頭、新御番、御腰物方、御納戸、大御番、甲府勤番、成島千藏、小南玄三郎、奥御右筆、御右筆、御馬方、小十人組頭、大筒役、御鷹匠組頭、御勘定組頭、御勘定組頭格、評定所留役、御勘定組頭格、松山惣右衞門、日光奉行支配組頭、佐渡奉行支配組頭、御代官、御切米手形改、御藏奉行、二條大坂御藏奉行、御金奉行、御細工頭、御材木石奉行、小普請方、吹上奉行、河合市三郎、濱御殿奉行、小石川御藥園奉行、御膳所御臺所頭、表御臺所頭、儒者、御疊奉行、添奉行、(神寶方兼)林奉行、御休息御庭之者支配、西丸同斷、御廣敷御用達、西丸同斷、御部屋樣同斷、安祥院樣御用人、小十人組、小十人格、御天守臺下御庭番、小十人格御庭番、御鷹匠、川船改役、吟味方改役、御勘定、禁裏御賄頭、御鳥見組頭、吹上奉行、植村左源太、馬醫、千人頭、御大工頭、小普請方改役、御作事下奉行、御普請方下奉行、寄場奉行、村田鐵太郎、寄合醫師、御馬醫師、天文方、御同朋頭、狩野永德、御數寄屋頭、御同朋、小石川御藥園預、芥川小野寺、

御目見以下

御鳥見、御召御船上乘役、御天守番、(富士見御寶藏)番、御勘定吟味役改役並、御普請方改役、支配勘定、禁裏御入用取調役、支配勘定格、御普請役元〆、御徒目付組頭、火之番組頭、御徒組頭、御貝役、押太皷役、小普請方吟味役、植木奉行、進物取次番之頭、御廣敷添番、御廣敷御庭番、添番並、御女中方附添番、闕所物奉行、黑鍬頭、御徒目付、御掃除番、御犬牽頭、評定所番、御膳所御臺所組頭、御臺樣御膳所組頭、表御臺

所組頭、御徒押、御挑灯奉行、奥火之番、表火之番、御中間頭、御小十人頭、御普請方、御侍、二丸火之番、紅葉山火之番、御駕籠頭、進物取次上番、禁裏勘使買物使、佐々木勘三郎支配、大筒下役組頭、御膳所御臺所人、表御臺所人、御女中方御臺所人、小金佐倉野馬奉行、綿貫鍋三郎、御廣敷御用部屋書役、御女中方御用部屋書役、吹上奉行支配筆頭役、御賄組頭、御賄調役、同吟味役、同御酒役、加役方人足寄場元〆役、御作事披官、小普請組世話役、傳奏屋敷番、御臺所番、明屋敷伊賀組頭、小普請方伊賀組頭、小普請方吟味手傳役、同手代組頭、同改役下役組頭、御臺所小間遣頭、公人朝夕人、石出帶刀、諸組與力、佐州組頭、御徒、日光御殿番、御勘定御普請役元〆、御勘定方吟味方下役、御勘定方御普請役、御馬乘、評定所書役、御作事方勘定役、御廣敷伊賀、明屋敷番伊賀、山里伊賀、御女中方伊賀、御廣敷進上番、奥坊主組頭、紅葉山附坊主、御數寄屋組頭、表坊主組頭、御賄方、御作事方小役、書役、手代、紅葉山御宮殿坊主、同御掃除坊主、御普請方伊賀之者、小普請方手代、御鷹犬牽、御休息御庭之者組頭、御廣敷吟味役、御下男頭、御目付支配三役世話役、濱吟味役、同筆頭役、坊主、御細工所同心、諸組同心、進物取次下番、御天守下番、富士見御寶藏番下役、小間遣組頭、御下男組頭、御材木石奉行手代、御林方手代、添奉行手代、書替手代、淺草御藏手代、御疊方手代、闕所奉行、小普請方改下役、吹上奉行役人目付、御馬方爪髮組頭、濱御殿番、御中間目付、御小人目付、吹上奉行支配御座敷方世話役、同御普請方組頭、同御座敷方同御大工役之者、同書役、同藥園方、同御庭方、同書役下役、同普請方、御香物奉行同心、御細工所張付役、二丸同心、御廣敷小十人、御口之者組頭、大筒下役、紅葉山御宮掃除組頭、石之間番人、御勘定所湯呑所之者、御中間、御小人、二丸御小人、植木方同心、水主同心、櫻田御用屋敷御番人、御駕籠之者、御口之者、御臺様小間遣、御賄六尺、御作事方定普請同心、御普請方物書役、御材木石奉行同心、評定所同心、傳奏屋敷同心、御休息御庭之者支配下役、三丸明地御門番人、御露路之者、黑鍬之者、御掃除之者、濱御庭奉行、小普請方之者、櫻田御用屋敷同、紅葉山同、御庭方、仕丁、御下男、御寶藏御門番人、小普請方定

小屋同、御鷹部屋同、濱御殿物書役、小石川御藥園同心荒子、御臺所椀方六人、淺草御藏同心、淺草御藏番、同所小揚之者頭、房州峯岡觸頭、淺草御藏小揚之者、御勘定御普請役下役、同小遣之者、御幕奉行中間、御座敷小遣之者、御春屋御門番人、新組、御馬飼、牢屋下男、○石高役料等略

〔德川禁令考三十七養子跡職〕寶暦十辰年五月十四日

御目見以上江以下より養子之事

松平攝津守殿御渡　三枝帶刀被申渡

一御目見以上之者江、只今迄御目見以下よりも養子相願候得共、向後御目見以下よりは、其親類之外、他人養子は難成候、

但右親類と有之は、又從弟迄之事ニ候、

右之通、寶暦八寅年相達候得共、御目見以上ニ而も、高低之者は、御目見以下にても、上。下。格之者よりは、養子可被仰付候、

一醫師之類は、家業有之者ニ付、家業宜從早速御用立候者を願候而、御目見以下幷町醫師等之悴にても、養子可被仰付候、右之通、家業之譯を以被仰付候事ニ候得者、家業宜と計ニ而は難相成候、家業專らに仕、從早速御用ニ立候者を、隨分致吟味可相願候、猶又相糺候上、被仰付ニ而可有之候、

右之通、組支配有之面々江、寄々可被相達候、

五月

寬政三亥年二月

御目見以上江新規被召出幷以下ニ而御譜代場江被召出候者養子之事、　大目付江

越前守殿御渡

一御目見以上江新規被召出候もの養子之儀、忌懸り候もの幷聟養子之外ハ、不相調趣等、元文元辰年相達置候得共、向後御目見以上江新規ニ被召出候ものは、他人養子ニ而も可被仰付事、

但御目見以下、養子不相濟由緒之者共より、御目見以上江御取立被仰付候節も、右同樣之事、

一御目見以下ニ而も、向後御譜代場江被召出候もの、幷是迄養子不相濟由緒之もの共も、御譜代場江一旦役替被仰付候はゝ、養子願可相濟事、

但御譜代共、御抱共、難相決二半場と唱候向は、是迄之通可被心得候、幷御小人、御中間等、其外ニも、都而一代切御抱入之ものは、是迄之通ニ候事、

右之通相成候間、可被得其意候、且又近來被召出候もの共、幷組支配有之向々江も、寄々可被達置候、

亥二月

〔衛門類例秘錄六〕下座會釋

一寛政十一未年七月廿八日伺、八月六日差圖濟、〇中略

御徒目付之義は御譜代席ニ而、家督之節ハ於躑躅之間月番御老中方御一人御出座、若年寄衆侍座ニ而被仰渡、都而御目見以上之仕成ニ不異、併御老若方其外ニ而開門無之、帳前引付取次式臺送り、尤御目見以上ゟ依願引下勤之衆は、年始、五節句、八朔、歳暮、暑寒等之廻勤は御紋服著用、御老中方若年寄衆開門、都而御。目。見。以。上。持格之通、於御城は年始御流も勤仕之末座ニ而頂戴之、著服素袍、嘉祥玄猪之御祝頂戴長袴、此節御目見以上持格ニ付、御城ニ而も御紋服著用不苦、勤ニ付候義は、一切御徒目付並之通、尤遠國御用等御暇拜領物も、持格之分は躑躅之間、御徒目付並之勤は、燒火之間ニ而申渡有之、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年九月朔日、幕府御抱ノ者、御譜代場所ニ轉役ノ規則ヲ革ム、

譜代二半場抱入

御目見以下御抱場相勤候もの、御譜代場へ轉役被仰付候者、只今まで全く御譜代同樣跡目被仰付候得共、自今は、御抱場相勤候もの御譜代場へ被仰付候ても、改て御譜代と可被仰付旨申渡し無之内は、身分御抱と可被相心得候、但自分追々轉役、御目見以上御役場へも仰付られ候ても、御譜代と申渡し無之候内は、是迄の通り可相心得候、

〔御用留〕御目見以下之者養子之儀ニ付御書付

御目見以下養子之儀、向後御譜代場江被召出候もの、幷是迄養子不相濟由緒之もの、御譜代場江一旦役替被仰付候はゞ、養子可相濟旨、寛政三亥年相達候已來、御譜代場相勤候ものは、養子相濟來ル處、去ル戌〇文久二年閏八月御抱之もの御譜代場江役替被仰付候とも、改而御譜代と申渡無之内は、身分御抱と相心得べく旨、相觸候ニ付而は、去々戌閏八月以後、御譜代場江轉役いたし候共、改而御譜代と申渡無之内は、養子願難相成候、最御目見以上江御取立相成候ものは、養子可被仰付候、

但去々戌閏八月相觸候以前、御譜代場江轉役いたし候ものは、是迄通可被心得候、

右之趣、組支配有之向江可被達候、

五月〇元治元年

〔大概順〕前々より御譜代と申取扱來候場所、左之通に御座候、

御留守居 與力同心　　御留守居番 與力同心　　百人四組之内 根來甲賀、御裏門番同心、　進上取次下番

明屋敷 伊賀者　　御廣敷伊賀　　二丸御留守居 二丸同心　　同 御小人　　御鷹匠同心餌差

御目付 御臺所番　　御目付 御中間　　同 黑鍬之者　　同 御小人

同 御掃除之者　　同 御駕籠之者　　御作事 定普請同心　　御鐵砲玉藥同心

寶暦六子年、堀田相摸守殿御下知に而書入申候、　西丸切手御門同心、

右請取

權現樣、台德院樣、大猷院樣、嚴有院樣、御四代之內、右場所相勤候得者、御譜代之者と下札仕候、尤右御代末ニ被召抱、前書之場所相勤候共、其身御抱入之者と下ケ札仕候、

但前書之場所之內ニも、當時者御譜代之者と御抱入之者入交ニ御座候、〇又見明良帶錄

〔明良帶錄新參〕二。半。場。

西丸御留守居與力同心當時無之　西丸御裏御門與力同心　御賄六尺　御膳所奉行支配御臺所石之間番人　御本丸奧表坊主　御女中樣御侍并書役　御女中樣御路次之者　同御小人同御下男　同仕丁　同陸尺并小間遣之者　御臺所小間遣

右者神君、台德院樣、大猷院樣、嚴有院樣御四代之內、右場所江被召抱相勤候共、御譜代之者とも難申、御抱入之ものの共難決、御譜代にも准じ可申なれども、御譜代之ものと云がたし、先二半場と稱す、尤右末々御代に召抱らるゝものは御抱入なり、〇中略

御。抱。入。場。

大御番與力同心　御書院番與力同心　御旗奉行與力同心　百人組四組之內二組與力同心　御持組與力同心　御先手組與力同心　町奉行與力同心　御鐵炮方與力同心　御船手組與力同心　火消役與力同心　切支丹改與力同心　道中方與力同心　御弓矢鑓奉行同心　御具足奉行同心當時無之　御幕奉行同心　御切米手形改手代　御藏奉行手代　小揚之者　御藏之者　御書物奉行同心　御材木石奉行同心手代　御疊奉行同心手代　御林奉行手代　漆奉行手代同心　植木奉行同心　御鑓奉行同心　闕所物奉行手代同心當時無之　評定所番同心　御細工所同心　濱御殿奉行支配之者　吹上奉行支配之者　傳奏屋敷番同心　御簞笥

奉行同心　元拂方御納戸同心　小普請方支配之者

右者神君御代被召抱前書之場所勤來候得共、御譜代之者にてはなく、右御代より末の御代は勿論、御抱入之者也、神田御殿、櫻田御殿、竹橋御殿、其外遠國にて被召抱もの右同斷、右名目に洩れたる御役名は、御抱入と稲生下野守、松前主馬伺濟之事、神君より嚴有院樣御代迄、御譜代之者と申傳へ、御場所江被召出、或は右之場所江御役替被仰付候者は、假令此後組付被仰付共御譜代なり、常憲院樣御代より末々御代右の場所江被召出、御役替等も被仰付者の實子無之候共、跡式も被下候得共、養子願は難相成、唯今迄躑躅之間燒火之間にて御役替被仰付者は、御譜代之有無伺之處、躑躅之間、燒火之間御役替被仰付者、何れも上下格之者成事、

〔大概順〕御目見以下大概順

八十俵、役扶持五人扶持、傳馬金十八兩、　譜代、上下役、白衣勤、　御鳥見

百俵持扶持　譜代、上下役、　御召御船上乘役 ○中略

五十俵、役扶持三人扶持、　譜代、役上下、　小普請組世話役

二十俵二人扶持　譜代、羽織袴、　御臺所番 ○中略

持高扶持、役扶持三人扶持、　譜代、羽織袴、白衣勤、　吹上奉行支配御花段方 ○中略

二十俵二人扶持　譜代、白衣勤、　御網籠之者

○按ズルニ、譜代、上下役、白衣勤トハ、譜代席ニテ上下ヲ著スルコトヲ得ルモノニシテ、平日ハ白衣ニテ出勤スルモノヲ云フナリ、

〔大概順〕御目見以下大概順

七十俵持扶持　二半場、上下役、　御廣敷御侍 ○中略

三十俵二人扶持　二半場、役上下、　御廣敷御用部屋書役 ○中略

五十俵持扶持、役扶持二人扶持、御四季施代金廿七兩、　二半場　奥坊主組頭〇中略

持高扶持、役扶持五俵ヅヽ、　二半場、羽織袴、　御賄御酒部屋書役　同勘定部屋下役　同豆腐役〇中略

十五俵一人半扶持、役金壹兩二分、　二半場、白衣勤、　紅葉山御高盛六尺

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵持扶持、役金十兩、　抱入、上下役、　支配勘定格御普請役元〆〇中略

五十俵持扶持　抱入、役上下、白衣勤、　御作事方御被官〇中略

五十俵、役扶持三人扶持、御手當金五兩、　抱入、役上下、　寄場元〆役〇中略

七十俵五人扶持　抱入、羽織袴、　御徒〇中略

三十俵二人扶持　抱入、羽織袴、白衣勤、　御作事方手代〇中略

三十俵持扶持　抱入、白衣勤、　御鷹犬牽

〔憲教類典御家人二ノ八下〕享保七寅年六月十一日

御目見以下之元來御譜代ニ而無之者、御取立ニ而、御役替被仰付候得ば、唯今迄も御譜代同時ニ跡目等被仰出候得共、自今は御譜代筋ニ而無之者、何樣之御役ニ被仰付候とも、分ケ而御譜代同意ニ可被召仕との被仰渡無之内は、跡式は被仰付間敷事、

右之儀、去月閏七月相達候向々も有之候得共、不詳候故、最前被仰出候趣、此度相達候條、被得其意組支配江も可被申聞置候、

寅六月

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕延享四丁卯年三月廿三日〇中略

一御中間御小人等之類、御譜代場ヘ御抱入ニ罷成候はゝ、病氣ニ而勤難成時、只今迄一代は小普請入來候得共、御譜代場ニ而も、御抱入は御暇指遣候、其跡は御入ニ成候事、

三月

右之通得其意、此趣を以、時々可相伺旨、頭支配有之面々可被達候、尤西丸御目付江も可有通達候、

信濃守殿

〔譜代家督留 二〕朱書卯（文政二〇年）四月廿三日御直ニ上ル、

組同心御褒美之儀奉願候書付

鳥居甲斐守

町奉行鳥居甲斐守組同心

岡本角兵衛 卯八拾七歳

右角兵衛儀、寶暦十一巳年、小普請組高力式部組之節、父角十郎跡式被下置、同人組罷成、天明二寅年養生所附出役被仰付相勤、寛政二戌年二月池田筑後守勤役之節、町奉行組同心明キ跡江御入人被仰付、引續相勤罷在候處、去々丑年中ゟ中風ニ而相勝不申候ニ付、引込養生仕候處、次第ニ差重り、快氣可仕體無御座候、若相果候はゝ、跡式之儀は、組同心御増人之内、當時相勤罷在候嫡孫承祖角輔被下置候樣、私迄相願申候、然ル處、右角兵衛儀、天明二寅年養生所附出役、其後町奉行組同心被仰付、勤仕並共、都合六十二年無懈怠出精相勤候ものニ御座候間、可相成儀ニ御座候はゝ、相應之御褒美被下置候樣仕度奉願候、猶跡目之儀ハ追而相願申度奉存候、以上、

卯四月 鳥居甲斐守

朱書 卯四月廿三日信濃守殿江御直上ル

例書

鳥居甲斐守

町奉行榊原主計頭組同心

早川政藏 八拾四歲

右之もの五拾八年之勤ニ而、老衰仕、小普請入被仰付、文政四巳年十二月申上、銀五枚被下置候、以上、

卯四月　　島井甲斐守

〔譜代家督留〕天保十一子年九月、永島金十郎跡を伜同苗金右衛門被下、并老衰御褒美等之儀ニ付調、

願書　　永島金十郎

一私儀、安永二巳年九月中、父同苗半平跡江御番代被仰付、如父時御賄六尺相勤、天明元丑年十二月中、御膳所六尺被仰付、同六午年正月中、御臺樣御膳所六尺被仰付、寛政四子年八月中、御同所小間遣被仰付相勤罷在候處、同十一未年八月中、根岸肥前守殿御勤役之節、當御組同心明跡江御入人被仰付、當子年迄右御賄六尺之節ゟ、當御組共都合御奉公六拾八年相勤申候、然處疝癪ニ而難義仕候ニ付、去亥九月中ゟ引込、種々療用仕候得共、追々相募、迚も御奉公可相勤體無御座候間、私伜同苗金右衛門と申三拾貳歲ニ罷成候者、當御組同心御增人貳拾人之內江被召抱相勤罷在候ニ付、私跡式右金右衛門江被下置候樣奉願候、此段被仰上可被下候、以上、

天保十一子年九月　　永島金十郎印

仁杉五郎左衛門殿〇中略

朱書
子十〇天保十一年十月廿五日、淨觀院樣御法事御當日ニ付評定所相流、登城致シ、內談之上、伊東助右衛門江相渡、同廿九日、同人ゟ申聞候は、是迄ケ樣之例も無之ニ付、矢張御譜代之積り認メ、進達之方ニも可有之哉之旨ニ付、別段御譜代之例ヲ以進達致候事、

助御用留

備後守殿

組同心　永島金十郎身分之儀ニ付御內慮奉伺候書付

筒井紀伊守

町奉行筒井紀伊守組同心

永島金十郎

右金十郎儀、安永二巳年九月御賄六尺父半平跡江御番代被仰付相勤、天明元丑年十二月御膳所六尺被仰付、其後御臺様御膳所六尺被仰付、寛政四子年御同所小間遣被仰付、同十一未年八月、根岸肥前守勤役之節、組同心明跡江御入人被仰付、引續相勤罷在候處、去亥年九月中ゟ疝癪ニ而相勝不申候ニ付、引込養生仕候處、此節次第ニ差重り、快氣可仕體無御座候、若相果候ハヽ、跡式之儀は、組同心御增人之內當時相勤罷在候倅金右衛門江被下置候樣、私迄相願申候、然處右金十郎儀、寛政四子年前書御膳所小間遣二半場江致轉役、夫ゟ當組江御入人被仰付候もの之儀ニ付、御譜代之筋目に相直可申筋ニ可有之哉之段、御目付江も問合候處、右家筋跡式も可相濟ものと被存候段挨拶仕候間、御譜代筋之ものと相心得、跡目相願申度奉存候、依之別紙由緒書寫相添、此段御內慮奉伺候、以上、

十月　　筒井紀伊守○中略

筒井紀伊守殿

御目付衆江談じ覺書

筒井紀伊守組同心

永島金十郎

右之もの、寛政十一未年八月、御臺様御膳所小間遣ゟ、拙者組同心明キ跡御入人被仰付相勤罷在

候處、此度病氣ニ付、同人忰金右衞門江跡式被下置候樣相願申候、然ル處別紙由緒書之趣ニ而ハ寛永十九午年御賄六尺ニ新規御抱入被仰付候筋目之ものに而、右金十郎儀、父跡江番代被仰付、御賄六尺相勤、其後御膳所六尺、同小間遣被仰付、猶又拙者組江御入人に相成候もの之儀ニ而、御抱入之ものと相見へ候間、御抱入並之通、金十郎は御暇申渡、忰金右衞門を跡御抱入申付候而可然筋之ものニ可有之哉、別紙由緒書相添御問合之事、

下ケ札　書面、永島金十郎家筋跡式も可相濟者と被存候、

〔本勤幷年寄等書留 二〕弘化四年未六月八日爲持遣、同十日挨拶來、同□月廿四日仁杉五郎八郎被申渡、

內匠頭殿　　遠山左衞門尉

組與力本多彌大夫明跡仮御抱入之儀、願之通被仰付候得者、同人取來候百六拾石之內、半高八拾石差遣、殘八拾石ニて仮御抱入並と申付、今壹人本勤並之もの江差遣候樣可致段、先般及御相談置候處、十人扶持之積ヲ以、給知之內ニて相應可相渡旨被仰渡候間、小原小十郎江五拾石差遣、仮御抱入申付候ニ付、屋敷之儀も止高三分一遣候積ニ御座候、今壹人仮御抱並之儀、仁杉八右衞門忰同苗五郎八郎儀、當時本勤並相勤居候間、同人江可申付處、今般御書付之御趣意も有之候ニ付、仮御抱並と申名目相止、追而殘知上高之內を以、五拾石丈之收納高金差遣候樣可致旨存候、此段御相談およぴ候、

御書面之趣致承知候、拙者儀何之存寄無之候、此段及御挨拶候、

六月十日　　鍋島內匠頭

〔幕朝故事談〕御留守居の廿五騎の與力は、御譜代也、廿五騎は百人組の事也、他の與力忰は、此與力へ養子にはならぬなり、

〔明良帶錄 新令續〕燒火之間ニ而御役替被仰付由緒吟味

嚴有院様御代迄之内、當時燒火之間にて、御役替被仰付るゝ、御役名之分は、古より御。譜代。と申傳、御場所之内には洩有之候得共、大概ハ御譜代と申傳候、御役名より重格之者故、唯今迄御譜代に取扱ふ、嚴有院様より御代の末に燒火之間御役替之者、初發御。抱。入の場所江被召出候ても、實子有之候得者、家督被仰付候間、御抱入之筋は相離候心得にて、只今迄御抱入之譯認不申、前々より左之通初發何役に被召抱、何代相續仕來、當時何役と認候事、右之内御被官無之、前々より上。下。役。に取扱ふ、且由緒吟味之内、御賄六尺と計名目にて御座候處、向後御賄幷六尺と入置、御賄六尺共に同様可取扱旨伺濟、西丸切手御門番同心、唯今迄由緒吟味取扱之内、御譜代にて無之場所江認入取扱來候處、向後右場所御譜代之場所江認入可申旨伺濟、御中間、御小人、黒鍬之者、御掃除之者、右場所代々勤來候者、病氣ニ而難相勤節は、御目付支配無役申付候處、向後ハ外場所幷小普請より御入人筋之者にても、病氣ニ而難相勤ものは、御目付支配無役可申付候、御中間、御小人、黒鍬御掃除之者より他場所江轉候者も、其場所一役にて病氣附難相勤ものは、御目付支配無役可仰付、御中間、御小人、黒鍬之もの、御掃除之者、右神田櫻田其外小普請より御入人筋之者、病氣にて難勤實子無之、續之者より跡抱願來、右伺濟之者、又ハ病氣之節最初御入人筋相離候間、高增之者にても、並高を以て跡抱相伺、尤御足高御足扶持にて御入人に相成候者も、並高を以て相伺、右之通高增又は御足高御足扶持之者、一度ハ取來候高を以て相伺ひ、二度目より並高を以て相伺可申候、御入人筋之者、實子無之、身寄之者跡抱相伺ふに、一度は由緒書添へ、二度目より定式跡抱相成事伺濟、

養子願之譯　堀田攝津守殿御書付を以被仰渡候ハ、御目見以上新規被召出候者、養子之義、忌掛り候もの、幷聟養子之外は不相成候趣、元文の度相達候、向後御目見以上へ被召出候ものは、他人

上下役　役上下

養子にても可被仰付候、御目見以下も養子不相濟由緒之者共、御譜代場江、一旦役替被仰付候て、養子願相濟候事、御譜代共決せす、二半場と唱候分も、是迄之通可相伺心得候、御小人御中間等其外都而一代切御抱入之者ハ是迄之通之事、

〔武家格例式〕御目見以下、上下役と申は、家督跡式共於躑躅間被仰渡候者ヲ、上下役と唱、其餘は役上下と相唱候、右上下役之者、御三家方、御三卿方途中通行之節、先拂参候跡は、片寄罷在、先挾箱ニ而下ニ居、通行ニ而御時宜仕候、鑓は伏不申候、挾箱ハ下ニ差置申候、右之通御徒目付相心得罷在候、以上、

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵持扶持	譜代、上下役、	御天主番 〇中略
七十俵五人扶持、勤金十兩、	譜代、上下役、白衣勤、	小普請方吟味役 〇中略
七十俵持扶持	二半場、上下役、	姫君樣方御侍 〇中略
五十俵持扶持	抱入、上下役、	大筒下役組頭 〇中略
三十俵二人扶持、役金之格金三兩、	二半場、上下役、白衣勤、	吹上奉行支配筆頭役 〇中略

〔大概順〕御目見以下大概順

七十俵五人扶持、役切米三十俵、	二半場、役上下、	御賄組頭 〇中略
五十俵三人扶持	抱入、役上下、白衣勤、	御抜官格御材木改役 〇中略
持高、役扶持四人扶持、	抱入、役上下、	小普請方伊賀組頭 〇中略
三百俵	譜代、役上下、	四獄石出帶刀

〔譜代家督留〕一〕未〇天保六年八月十三日

朱書一　對馬守殿　兵部少輔殿江鍋三郎を以上候處、即刻御付ニ御下ゲ承付致し、明日返上之積、

私組同心北條辰之助儀ニ付申上候書附、

書面伺之通可仕旨被仰渡奉承知候、

八月十三日

根岸肥前守

私組同心 北條辰之助

右上下格之者ニ御座候得共、依願引下ゲ勤被仰付候旨被仰渡候間、則私組江割入申候、依之以來共身分ニ附候儀は、上下勤之格式ニ取計、勤向之儀は外同心共並之通爲相勤、席順之儀も御入人御抱入之順ニ取計候樣可仕奉存候間、此段奉伺候、以上、

未八月　　根岸肥前守

〔青標紙〕衣服制度的例

一羽織袴　羽織は、足利家之時道服と云物あり、其丈短くして胴ばかりに著之、此一名を羽織と云、帶をしめずして、はおり懸て著す故の名なり、昔は常に著せず、旅行抔に風を凌ぐ爲也、今は羽織と云もの禮服の樣になれり、又役羽織とて役服となれり、遠御成の節、御徒組頭、茶縮緬單羽織、萌黄紐也、御徒には平生共、黑縮緬に茶紐也、御小人目付、御玄關番、御中之口番、黑絹無紋の袷羽織、御小道具組頭には、萌黄縮緬の袷也、御中間、御小人之類、黑絹の單也、扨平生著用之品、身分によりて遠慮の品あるべし、尤四季の相當あるなり、又綿入に紐丸打、單には平打を用ゆ、

〔大概順〕御目見以下大概順

三十俵持扶持、役金十兩、見習六兩二人扶持、　抱入、羽織袴、　評定所書役〇中略

三十俵二人扶持　譜代、羽織袴、　山里伊賀者〇中略

二十俵二人扶持、役扶持、三人扶持、　二半場、羽織袴、　御作事方小役

持高扶持　二半場、羽織袴、白衣勤、　同書役〇中略

白衣勤

三十俵三人扶持　抱入、羽織袴、白衣勤、　小普請方手代

持高扶持、役扶持三人扶持、　譜代、羽織袴、白衣勤、　吹上奉行支配御花段方

〔大概順〕御目見以下大概順

持高　役扶持三人扶持　羽織格　吹上御庭番人組頭略○中　濱御庭世話役御抱入

拾五俵壹人扶持役羽織渡り、但袷也、　役羽織　御中間目付　御小人目付御譜代

吹上奉行支持高　役扶持三人扶持、役金壹兩、　羽織格　御座敷方世話役御抱入

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵持扶持　譜代、上下役、白衣勤、　植木奉行略○中

持高、役金之格、金三兩、　二半場、上下役、白衣勤、　筆頭役並略○中

持高持扶持　抱入、役上下、白衣勤、　御作事方勘定役略○中

持高扶持　二半場、羽織袴、白衣勤、　御作事方書役略○中

持高持扶持、役切米二人扶持、御手當金二兩、肝煎者役金五兩、　抱入、羽織袴、白衣勤、　御普請方同心略○中

持高扶持、役切米三人扶持、　譜代、羽織袴、白衣勤、　吹上奉行支配御花段方略○中

二十俵二人扶持　譜代、白衣勤、　御駕籠之者略○中

十五俵一人半扶持、勤金二兩、組頭ハ廿俵二人扶持、御手當金三兩、　二半場、白衣勤、　奥六尺略○中

持高扶持世話役者一人扶持、組頭者外五俵一人扶持、御道具代一兩、　抱入、白衣勤、　御作事方御手大工

〔大概順〕御目見以下大概順

御船手貳拾俵貳人扶持頭々ゟ印之御仕着渡り　白衣　水方同心御抱入略○中

屋敷地

貳拾俵貳人扶持　　　　白衣　御駕籠之者 御譜代

黒染絹御四季施羽織共渡り、雨天ニ候ヘハ流ニ而被下候、正月七日、のしめ、八トク被下候、

〔御用留〕朱書 亥（文久三年）六月十三日ヲアーレ到來

白衣勤之儀ニ付口達

朱書 亥四月三日、大和守殿御渡一同小印致置候事、

口達之覺

先般白衣之著服一切相止候樣申達置候處、以來前々白衣ニ而相勤候掛には、勝手次第白衣ニ而も不苦候事、

亥四月

一屋敷見立願　元文三午年七月十一日、本多中務大輔殿御渡、

拜領屋敷無之輩、見立願相濟候後、是迄は屋敷場所年貢地をも相願候へ共、向後は年貢地相願候事無用ニ候、此段可被達置候、

〔青標紙〕屋敷向諸的例

拜領屋敷格坪覺

一五百坪 三百石ゟ九百石迄　一七百坪 千石ゟ千九百石迄　一千坪 二千石ゟ二千九百石迄　一千五百坪 三千石ゟ四千石迄　一千八百坪 五千石ゟ七千石迄　一二千三百坪 八千石ゟ九千石迄　一二千五百坪 一萬石ゟ二萬石迄　一二千七百坪 二萬石ゟ三萬石迄　一三千五百坪 三萬石ゟ四萬石迄　一四千五百坪 四萬石ゟ五萬石迄　一五千坪 五萬石ゟ六萬石迄　一五千五百坪 六萬石ゟ七萬石迄　一六千五百坪 八萬石ゟ九萬石迄　一七千坪 十萬石ゟ十五萬石迄

向後被下屋敷坪數大方此通相極可申候、乍然人ニ寄樣子ニ寄、其時ニ至增減可有之旨、元祿六酉年八月六日阿部豐後守殿被仰渡、

一五百坪（御書院番御小性組）　一四百坪（新御番大御番）　一三百坪（小十人醫師）　一貳百坪　小役人

一百五拾坪　坊主衆　但當時百坪ニ成ル

向後於本所屋敷被下候旨、右之趣可相心得、元祿二巳六月廿一日、大久保加賀守殿中坊長兵衛詰番之節被仰渡之、元祿十四巳年六月朔日御番衆新規屋敷被下候、其以後坪數相濟候覺、

一九百坪　千七百石　一七百坪　千石　一六百坪　九百石　一三百坪　貳百俵

一貳百坪　百五十俵

右之外、御小性組御書院番ニ五百坪ツヽ、

享保十巳年四月十五日、左近將監殿御渡被成候御書付、

一貳千坪（御側衆大番頭）下屋敷　一千五百坪（高家衆下屋敷）

坪數貳百坪ツヽ被下候者之部

御賄頭　御細工頭　小普請方　御作事下奉行　小普請方改役　御鷹匠御鳥見　御天守番

富士見御寶藏番支配勘定　御徒目付　御賄調役　火之番　御侍添番　御臺所人

進物取次上番　植木奉行　押御太鼓役　御具役　御庭方　御徒押　御提灯奉行　黒鍬頭

御中間頭　御小人頭　御駕籠頭　闕所物奉行　小普請方吟味役

坪數貳百坪以下百坪以上可被下者之部

學問所勤番　小普請世話役　御普請方

坪數百坪ツヽ被下候者

諸組同心　評定所書役　小普請方吟味役手傳役　漆方手代油方手代　伊賀之者　大筒下役　御作事下役　御廣敷御用部屋書役　小普請方改役下役　御天主下番　伊賀格吟味役

進上取次下番　御作事方書役　富士見御寶藏番下番

坪數七拾坪ツヽ被下候者

御中間　御小人　六尺　御普請方下役　御掃除之者　仕丁小間遣　御下男　御口之者

御鷹部屋御門番人　吹上御普請方之者　吹上御庭之者　黒鍬之者　小普請方改役物書

右之趣向後屋敷相渡候節、坪割可被致候、右之外三十三年以前元祿六酉年被仰渡候極坪之通可被相心得候、

一屋敷相對替之事

寬政五年八月、奥御右筆衆江問合入附屋敷拜領致し、三ヶ年相立候得ば、逢對替濟候事、一旦逢對替いたし候上、又相對替致候儀、拾ヶ年相立候上相願可申事、

一切坪替致し、殘坪逢對替いたし候分は、年始之差別相濟候事、

一萬石以上坪數多は一萬坪位、狹くは千坪位迄、　五千石以上坪數廣きは六七千坪位、狹は七百坪位まで、　一參千石以上坪數廣きは三四千坪位、狹は五百坪位迄、　一千石以上坪數廣きは千七八百坪位、狹は五百坪位迄、　一參百石以上廣は千坪餘迄、狹は二三百坪位迄、　百石以上廣は五六百坪位、狹は百五十坪內外迄、　一百石以下ニ而も　御目見以上　御目見以下　席以上廣は三百坪內外迄、狹は百坪內外迄、　席以下廣は貳百坪餘迄、狹は五六十坪迄、

右之外時之勤柄に寄、御足高にも寄、屋敷廣くも逢對替願相濟候事、　右文政年中御普請奉行江問合之答書也、組合屋敷替屆之事、　組合內ニ屋敷替有之、雙方引移相濟候ハヾ、頭取ゟ辻番掛リ御目付江可相屆、屆方ハ、何町何之誰頭取辻番頭組合之內、此度屋敷替仕、雙方今日明日歟引移申候、組合御割入可被下候、則高附別紙左ニ相認差出候旨相屆、高何程御役名何之誰義、此度拙者組合何之誰屋敷江引移申候、高何程御役名何之誰、此度拙者組合ゟ何之誰屋敷江引移候旨、雙方名前高附等認屆候事、組引高ニ候ハヾ、引高何程と可認候事、右頭取ゟ相屆候事ニ候得共、組合仕來ニ而、當人歟又は年番月番ゟ相屆候共、仕來之上は請取相成候事、右屆置候得ば、追而掛リ御

殿中座次

目付ゟ制入差圖有ㇾ之候事、

〔青標紙三編〕江戸屋敷分限定

一萬石以下七千石マデ　五十間四方　六千石ヨリ四千石マデ　四十間四方

三千五百石ヨリ二千六百石マデ　三十間ゟ四十間マデ

二千五百石ヨリ千六百石マデ　三十三間四方　千五百石ヨリ八百石マデ　三十間四方

七百石ヨリ四百石マデ　二十五間ゟ三十間マデ　三百石ヨリ二百石マデ　三十間二十間

〔幕朝故事談〕御旗本にて町屋敷被ㇾ下候は、御醫師と女中計り也、御中間は御目通り致者故、衣服見苦敷候ては、御目障に相成候故、町屋敷被ㇾ下、伊賀は被ㇾ召出ㇾ候時分、小身にて口り兼候故、被ㇾ下なるべし、御小間使黒鍬にても、町屋敷は不ㇾ被ㇾ下、獻廟の敎命にて、羽織を長く被ㇾ仰付ㇾ候は、黒鍬也、

〔天保集成絲綸錄八十三〕文政九戌年六月

大目付江

屋敷之内を、町人等ニ貸置候儀、前々より御制禁ニ候、彌堅差置申間敷候、至ㇾ來春ㇾ可ㇾ相改ㇾ候間、可ㇾ存ㇾ其旨ㇾ候、

右之通安永八亥年相觸候處、近來猥ニ相成、屋敷地面之内は勿論、長屋をも町人等ニ貸置候趣相聞候、彌右之趣相守、心得違無ㇾ之樣可ㇾ致候、尤追而可ㇾ相改ㇾ候間可ㇾ存ㇾ其趣ㇾ候、

右之通可ㇾ被ㇾ相觸ㇾ候

六月

〔大成令三〕殿中席書幷御長屋門中之口掛札等之部

萬治二亥年九月

新。御。殿。付。而。諸。士。著。座。之。席。以ㇾ壁。書ㇾ被ㇾ仰。出ㇾ之。所ㇾ謂

一雁之間　高家衆　詰衆
一芙蓉間　御奏者番衆　御留守居衆　郡奉行　町奉行　御作事奉行　水野石見守
大坂町奉行　禁中方　五味備前守　御勘定頭　石河土佐守　八木但馬守　中坊美作守
長崎奉行　佐渡奉行
一菊之間　詰衆總領　大御番頭　御書院番頭　御小性組番頭　百人組番頭　御鎗奉行　御
持弓之頭　御持筒之頭　御書院番組頭　御小性組之組頭　御使番　御普請奉行　駿府町
奉行
一欵冬之間　中奥衆　柳生飛驒守　御留守居番衆　新御番頭　御番之醫師
一御連歌間北之緣頰　驢庵　道三　意安法印　元德法印　長德院　三竹法眼　内田玄勝法
眼　武田泰安
一躑躅之間上北之間　新御番頭　御留守居番衆　新御番組頭　御番之醫師　能勢市十郎
榊原大膳　本多平右衛門　神尾内膳　御膳奉行
一躑躅間北ゟ[illegible]之間　御納戸頭　御腰物奉行頭　二丸御留守居番　御裏門番頭
御廣敷番頭　御馬預衆　小普請奉行　御金奉行　道奉行　御鷹師頭　御具足奉行
玉藥奉行　御弓矢鎗奉行　御腰物奉行　御納戸衆　川船奉行　御書物奉行　御幕奉行
渡邊囚獄　御寶藏番頭　御勘定衆　御代官衆　御細工之頭　御材木奉行　石奉行
繩竹奉行　殘物奉行　漆奉行　御切米手形加判役人　御厩方　馬醫方　殺生方
一躑躅之間　御弓頭　御鐵炮頭　御普請奉行　駿府町奉行　御步行之頭　小十人組之番頭
西丸御留守居番　御船手之頭遠國共　深川御番所之番頭　近藤縫殿助　石野八兵衛
三宅半七郎　土屋忠次郎　松崎權左衛門　佐野與八郎　御納戸頭　御腰物奉行頭

大御番之組頭　伊奈半左衞門　岡田將監

一御黒書院御次焚火之間　春齋法眼　春德法眼　伯元　岩船撿校

一柳之間ヨリ檜間江通之廊下　外樣之醫師

一御納戸之前緣頰　大平角助　幸田孫助　柴村左源太　中井主水　後藤　本阿彌　吳服師

狩野　幸阿彌　五十嵐

一御臺所通廊下　千人頭　御徒目付組頭　火之番組頭　椎木庄右衞門　渡邊五郎作

御貝太皷役人　早川八郎左衞門　增井一郎左衞門　黒鍬之頭　御掃除者之頭　評定所番

伊阿彌修理　御能屋　正吉　才市

一同所廊下右ヨリ末座敷居ヲ隔テ御中間頭　御小人頭　御駕籠頭　傳奏屋敷番

一御納戸裏口北之廊下　諸町人

一御納戸裏口南之廊下。猿樂〇中略

年號月日

〔憲敎類典御役二ノ五〕寛延二己巳年

殿中席書

御黒書院　溜之間　溜詰　同所御次　所司代　大坂御城代　大廣間　國持衆

表向四品以上　帝鑑間　御譜代衆　交代寄合　柳之間　大名表交代寄合　表高家　雁之間

高家　詰衆　菊之間　詰衆嫡子御書院番頭　大御番頭御小性組番頭　南ノ方御襖際　御使番御小性組番頭

御書院番組頭　同所敷居之外　御旗奉行百人組之頭御持弓筒頭定火消　御鑓奉行　同所椽頰　詰衆並

同嫡子

芙蓉之間　御奏者番御作事奉行　町奉行御留守居　駿府御城代寺社奉行　御普請奉行御勘定奉行　大目付伏見奉行　大坂御城番

寛延三午年伺之上極ル

〔殿居嚢二〕武家諸役班列

凡例　支配印若老　席印雁鶴

年始五節句月次御禮席附合印

東五月節句、月次、西湖間東御白書院御椽頰、御勝手、　南五月節句、月次、西湖間南御白書院御椽頰、御勝手、　帝五月節句月次　共帝鑑間　奥五月節句月次　共於奥御禮　×五月節句、月次、御黑書院御白書院御勝手、　白五月節句月次上　共御白書院御勝手　○月次、御黑書院御勝手、○五節句、大廣間御勝手、中嗬　無席

御大老、御老中、若年寄、御奏者番、御側、寺社奉行、大小御目付、御小姓、御小納戸、

千五百石高　老雁　高家　東　肝煎ハ御役料八百俵、部屋住ハ御切米五百俵、

五千石高　老　御側衆

持高御役知二千石　老雁　駿府御城代南

持高御役料三千俵　老芙　伏見奉行南　萬石以上被二仰付一候得バ、駿府御城代上席、

五千石高　老芙　御留守居南　三千五百石

若山吹　林大學頭南　聖堂料千石九十五人扶持

五千石高　老菊　大御番頭帝

四千石高　若菊　御書院番頭帝

四千石高　若菊　御小性組番頭帝

持高　公儀より千俵　屋形より千俵　老芙　田安殿家老奥

持高　同斷、　老芙　一ッ橋殿家老奥

持高　同斷　老芙　清水殿家老奥

三千石高　老芙　大目付

三千石高　老芙　町奉行×

三千石高御役金三百兩　老芙　御勘定奉行×

二千石高　老芙　御旗奉行白

二千石高　老芙　御作事奉行×

二千石高　老芙　御普請奉行×

二千石高　若中　小普請奉行×

持高御役知千石　老芙　甲府勤番支配×

三千石以下被二仰付一候得バ、三千石高御足於二甲府御藏一被レ下レ之、

千石高御役料四千四百二俵一斗　老芙　長崎奉行×

千五百石高御役料現米六百石　芙老京都町奉行×

千五百石高御役料同斷　芙老大坂町奉行×　千石高御役料七百俵　芙老駿府御城番×

千石高御役料千五百俵　芙老禁裏附×

千石以下之者被仰付候得バ、千石高外之御役料千五百俵被下、三千石以上之者被仰付候得者、御役料千俵被下之、

持高　芙老仙洞附　三千石以下ハ御役料千俵、三千石以上ハ同五百俵、

千石高御役料千五百俵　芙老山田奉行×　二千石高御役料五百俵　芙若日光奉行×

千石高御役料千五百俵　芙老奈良奉行×　千石高御役料現米六百石　芙老堺奉行×

千石高御役料五百俵　芙老駿府町奉行×　千石高御役料千五百俵御役扶持百人ふち　芙老佐渡奉行×

千石高御役料五百俵　芙老浦賀奉行×　二千石高　中若西丸御留守居×

三千石高　菊若百人組之頭白　二千石高　菊老御鑓奉行白

三千石高　中老小普請組支配×　二千石高　中若新御番頭×

千五百石高　菊若御持弓筒之頭白

持高　菊若火消役○　御役扶持三百人ふち、當火消役元八組、後十五組、寛永元申年十組ニ定ル、

五百石高　若御小性　五百石以下ハ、五百石高、御役料三百俵、五百石より九百石餘迄、高無之候、御役料三百俵、千石より九千石餘迄、御金三拾兩、頭取ハ御金百兩、部屋住ハ三百俵高、外ニ御役料三百俵、○下略

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

平日御役所席泊御番御夜詰之内席

雁之間　高家衆、詰衆、

芙蓉之間　御奏者番、寺社奉行、御留守居、大目付、町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行、遠國奉行、

菊之間　大御番頭、兩御番頭、御使番、兩御番組頭、

山吹之間　中奥御小性、同御番衆、（下札、不ニ泊相勤一、）

中之間　西丸御留守居、新番頭、御留守居番、御目付、御勘定吟味役、

御老中登城退出之節、高家衆、御奏者番、寺社奉行、芙蓉之間御役人、此席に罷在候、但退出之節、

中奥御小性、同御番衆、豺目之間に罷在候、

桔梗之間　新御番組頭、御番醫師、御納戸頭、（下ケ札、泊リ番可ニ相勤一候、）御腰物奉行、二丸御留守居、御腰物方組頭、御納戸組頭、御裏御門番之頭、（富士見御寶藏）番之頭、小普請方、御疊奉行、（下ケ札、泊不ニ相勤一候、）

御納戸口　御大工頭、御披官組頭、

御老中退出以後、御用無之節ハ、不ニ相詰一候、

泊リ不仕分　御大工頭、御披官組頭、小細工奉行、黒鍬頭、御掃除頭、御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、

御納戸廊下敷居内　御徒目付組頭、火之番組頭、小細工奉行、黒鍬頭、御掃除頭、

同鋪居外　御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、

右之外御腰物方、御納戸衆、御祐筆、御役所ニ詰罷在候、

泊御番相勤候

一御玄關前御門泊　御書院番頭　一（御書院番御番所脇大廣間）泊　同組頭　一菊之間泊　御小性組番頭

右之面々、御夜詰之内、菊之間に相詰申候、

一御玄關脇部屋泊　（本番）御徒頭　一中之口部屋泊　（加番）御徒頭　一（御玄關之間脇進物番詰所）に泊　小十人頭、新御番頭、　一中之間泊　御腰物方組頭、御納戸組頭、　一中之口部屋泊　御醫師

一御夜詰過候段、御側衆被仰渡候節、席ニ罷出、尤部屋ニ泊り仕候、御目付、右之面々御夜詰之內、桔梗之間相詰候、御腰物方御納戶衆、御夜詰不罷出、御役所に泊り仕候、

〔德川禁令考三十八家格〕明和四亥年十二月

大廣間御禮申上候面々之持參御太刀置所疊目

年始　中將從御下段下四疊目に置、三疊目にて御禮、　少將從御下段下三疊目に置、二疊目にて御禮、侍從從御下段下二疊目に置、一疊目にて御禮、　四品從御下段御敷居之內一疊目に置之、板緣にて御禮、

八朔　中將、少將、侍從之無差別、從御下段下一疊目に置之、一疊目にて御禮、　四品御下段御敷居之內ニ置之、板緣ニて御禮、

右之通、大廣間に而御禮申上候面々、爲心得寄々可被相達置候、

十二月

明和七寅年

御側御用人詰衆御奏者番之嫡子座席之事

大目付江

萬石以上座順之儀、諸席打込候節ハ、前々之通高順ニ致、同高之面々ハ、家督之前後次第之儀勿論之事ニ候處、御側御用人詰衆御奏者番之嫡子と座席混雜之樣ニ相聞候、如前々右嫡子之分ハ菊之間緣頰詰之上席たるべく候、御譜代外樣之內ニ菊之間緣頰詰より高低之面々落合候節ハ、右嫡子之分ハ席を替、或ハ向江並候歟、又ハ脇席ニ並候共可被致候、

右之通向後可被心得旨、寄々可被達置候、

十二月

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書

御老中、若年寄、右ハ御膳所之御料理

獻上之間　御小姓衆、御小納戸衆、

時計之間上之一之間　御側衆

御臺所一之間　御奏者番、御留守居番、大番頭、兩番頭、町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行、小普請奉行、西丸御留守居、小普請組支配、新御番頭、中奧衆、御留守居番、

御臺所二之間　御使番、兩御番組頭、御徒頭、小十人頭、御船手、二丸御留守居、御納戸頭、御腰物奉行、御勘定吟味役、新御番組頭、御膳奉行、小普請組頭、御裏御門番之頭、表御右筆組頭、御醫師、

御臺所三之間　御納戸組頭、御天守番之頭、御富士見御寶藏番之頭、新御番、御腰物方、御納戸、御祐筆、小十人組頭、御細工頭、御材木奉行、小普請方、御花畑奉行、御疊奉行、倉地政之助、和多田要人、御勘定、御同朋、御數寄屋頭、

右之分、於此所御料理可被下候、當番之外、可為無用、但御用之時ハ、御目付江可相断者也、

御臺所三之間緣頰　御徒目付組頭、火之番組頭、小細工奉行、植木奉行、黑鍬頭、御徒目付、御掃除頭、表坊主組頭、御披官組頭、御披官、

御臺所四之間　御徒押、御挑灯奉行、表火之番、御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、御徒、御臺所人、御賄手代、坊主、

御臺所四之間横手　御臺所番、石之間番人、御中間、御納戸同心、小普請方手代、御作事同心、御小人、

御臺所向之末　御駕籠之者六尺、黑鍬、御掃除、

〔明良帶錄新令篇〕御目見以上江御取立之條

門戸出入

御目見以下より、自今以上御取立に相成候者、三代目家督は躑躅之間にて被下、尤御目見以下之御奉公可被仰付事、但御取立以後、年數勤功等格別なるもの、或は其役柄永々御目見以上たるべき旨被仰渡有之は格別、是迄御取立に相成候分は、勿論唯今迄之通に候事、

〔大成令 三〕殿中席書并御長屋門中之口掛札等之部

萬治二亥年九月

新御殿付而諸士着座之席、以壁書被仰出之、所謂〇中略

一御臺所御門出入之覺

保科肥後守、酒井雅樂頭、松平伊豆守、阿部豊後守、稻葉美濃守、牧野佐渡守、久世大和守、內藤出雲守、土屋但馬守、土井能登守、板倉筑後守、松平民部、森川下總守、本多美作守、伊澤隼人正、北條右近大夫、渡邊丹後守、留守居衆、御守衆、御小性衆、御小納戸衆、御勘定奉行、御留守居番頭、御納戸頭同組中同心共、御腰物奉行頭同組中同心共、上池院、玄竹法印、宗悦法印、淸庵法印、意安、宗庵、御番之醫師、玉川御裏御門番頭、御廣敷番頭、御膳奉行同心共ニ、小普請奉行、御細工頭同心共ニ、御膳奉行同心共ニ、御臺所頭同心共ニ、御大工頭、御賄頭同心共

右之外出入有べからざる者也

一中之口御門出入之覺

年寄衆、高家衆同組頭、詰衆同組頭、大目付衆、町奉行、新御番頭、同組頭、禁中方之衆、遠國所々奉行、御作事奉行、柳生飛驒守、中奥衆、御歩行頭、加番二人、二丸御留守居番、田付四郎兵衞同心共ニ、御番之醫師、春齋、春德、儒者方、御右筆衆、小普請奉行、御金奉行、御具足奉行、御弓矢鑓奉行、玉藥奉行、總御勘定衆、總御代官衆、諏訪部彥兵衞、御同朋、御茶道具衆、

右之外出入有べからざる者也

年號月日

〔殘集柳營秘鑑五〕中之口ゟ登城之面々

一詰衆　一寺社奉行　一奏者番　一菊之間　一芙蓉間御役人　一御寄合衆御番衆

一御側衆　一其外小役人

御老中口ゟ登城之面々

一御老中方　一若年寄方　一京都所司代　一大坂御城代

〔綠朝故事談〕御轉任御兼任の時は、御束帶なり、四位以上は黑色なり、五位は皆緋なり紅に作るは非なり、六位は素袍なり、林大內記釋菜の時は緣をきるなり、朝廷にはなき事なり、

〔明良帶錄新金篇〕熨斗目白帷子著用之分

御本丸西丸御膳所平御臺所人　養仙院樣御臺所人　御本丸西丸御賄方　兩丸御膳奉行支配御賄方見廻り役　兩丸御用部屋書役

右之分は、前々より相達候通、御規式に懸り候節計著用、其外熨斗目白帷子一切著用不ㇾ相成事、

御作事方勘定役　御疊方手代組頭　同世話役　大奧御廣敷進上奉行　田付四郎兵衞組支配磨組同心組頭　書替手代　淺草御藏手代　御鐵炮玉藥奉行同心　養仙院樣御臺所組頭小間遣組頭

右之分、熨斗目、白帷子著用不ㇾ相成事、

〔青標紙〕衣服制度的例

一御紋服間合之事

御旗本方、其身御役服拜領被ㇾ仰付ㇾ候得者、三代迄ハ御紋付著用致し、幷兩親妻嫡子迄著用不ㇾ苦候哉、

附書面之通ニ而宜候、尤厄介二男三男は無用ニ候事、

〔御用留〕衣服御制度之儀ニ付御達

今度衣服御制度之儀ニ付、被仰出候趣も有之、速ニ可相改者勿論ニ候得共、當地之儀者、格別邊境之地〇蝦夷ニ付、當分之内平服之儀は、肩衣羽織襠高袴被六人著用致、且白衣勤之ものニ候而も、乘切等ニ而出勤之向は、矢張襠高袴著用、其儘出勤ニ而も不苦事、

一熨斗目長袴所持之分は、格式相當可相用者勿論ニ候得共、差掛差支候向は、當分服紗小袖半袴ニ而も不苦候事、

亥十二月

先般衣服制度御變革被仰出候處、以來前々之通熨斗目長袴等著用可致旨被仰出候、

一前々熨斗目、或は服紗小袖、又白帷子長袴著用候廉ニは、以來前々之通著用可致候、

但正月八日ゟ平服之事

一正月六日裝束

一九月九日、御禮之節前々之通、萬石以上之面々花色小袖たるべく候、

一月次御禮衆幷出仕之面々著用、前々通たるべく候、

一平服は前々之通繼上下たるべく、袴は襠高ニ而も平袴ニ而も、勝手次第著用不苦候、

但足袋之儀は、前々之通相用可申、尤夏足袋不及相願候、

一布衣以上掛り御用被仰付、前々白衣ニ而相勤候廉は、以來羽織襠高袴相用ひ可申候、

御城江差出候節、幷平常共著服之儀、前々之通たるべく候、

右之通相心得、熨斗目長袴は十二月朔日より其外は、來ル十五日ゟ、書面之趣著用可致候、

右之趣、萬石以上以下共、不洩樣可被相觸候、

十一月〇元治元年

笠

右之通相觸候間、可被得其意候、

〔御用留〕御抱物之忰、新規被召出候、親病死後別規ニは不被仰付儀ニ付御書付、

井上河内守殿御渡候覺書寫

御作事奉行衆　外國奉行衆　遠國奉行衆　小普請組支配衆　大目付江

覺

御抱物之忰、席以上江新規被召出、親病氣ニ而御暇相成候ハヽ、跡御入人ニ被仰付、其節忰之高、親ゟ與候ハヽ、親取米之高之通御足高被下、別規ニ者不被仰付候、

但御抱入之者席以上江被召出候共、御譜代と申渡無之内者、御抱と可相心得候、

右之趣、向々江可被達候事、

十月〇元治元年

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年九月、布衣以上以下陣笠ノ色ヲ分ツ、

去る八月廿三日御達には、布衣以上表黑裏金、御目見以上表藍裏金、但し表正面へ輪抜金筋又は金物、勝手次第の事、廿九日に至り又御達しに、布衣以上御役人の外、都て表藍裏金相用可申事、又九月九日に至り御達しに、布衣以上にても、寄合の廉にては表藍裏金相用候様、先達て相達候處、布衣以上の者は、寄合にても以來表黑裏金相用可申候事、

〔御用留〕布衣以上御目見以上冠笠之儀ニ付御書付、

朱書八月〇元治元年廿二日大目付松平因幡守ゟ差越

井上河内守殿御渡御書付寫壹通并別紙

御作事奉行衆　外國奉行衆　遠國奉行衆　小普請組支配衆

大目付

就職選擧

布衣以上之御役人、是迄端反笠相用候處、不便之品ニ付相廢し、以來布衣以上以下諸役人御番方等、御目印ニも相成候之旨、登城幷諸場所江罷越候之節、陣笠左之通相心得、來月朔日より相用候樣可被致候、尤大目付御目付御使番之儀は、是迄之通可被心得候、

布衣以上　表黑裏金　御目見以上　表藍裏金

但正面江別紙雛形之通、輪拔金箔又はかなものにても勝手次第付可申事、

右之通、萬石以下之面々江不洩樣可被相觸候事、

八月

右之通候事

〔德川禁令考選擧十八〕享保六辛丑年二月八日

擧人履歷書式ノ達

向後御用人被書出候節、父之勤書付可被申候、一生勤無之候はゞ、其譯書付可被申候、然ルニ於ては、祖父之勤をも可被書出候、當人御奉公之次第も可被書出候、

〔有德院殿御實紀附錄五〕諸職を命せらるゝはじめ、よく其人を擇ばるべきことなり、任せられし後は、少しの過失ありとも、大かたはみゆるし玉ふべし、昨日まで當路して時めきし者も、今日は俄に職をうばゝるゝやうにては、おほやけの命令定まらざるかと、下々心を安むずべからず、又職を移さるゝも、上より下にうつさるゝ事まづあるまじきことなり、これも貞享元祿の頃よりかゝるたぐひ多く、中川淡路守成慶は、御側より大目付になされたり、是らはさせる過失もなく

て左遷せられしかば、つかふる者うたがひをいだくのみにて、かゞみともなしがたし、近き世の宰臣は、布衣より上の人は、いづれも同じこと、思ふゆゑ、選擧をあやまつことおほし、兩番の組頭などは、同じ布衣以上といへども、尤其人を擇ばるべし、嚴有院殿のころまでは、組頭よりたゞちに番頭にのぼされし常の事なりしかば、のちは番頭にもなるべき器をえらびて組頭とはされしなり、されば萬石をも領するもの、二男三男か、もしくは父祖番頭などつとめし者の子孫のうちをあげられしとぞ、今もこのみ心ばへはありたき事にや、これにつきては、徒頭また他にことなる武備の職なれば、これも萬石以上の二男三男、または番頭の子弟などを選ばるべし、小十人頭同じやうにて、昔より功臣の末をえらばれしにもなければ、今も志ひて家筋にあづかるべきにもあらず、しかのみならず、近年は徒士よりなりのぼりし者多くなりぬ、嚴有院殿御時までは、賄頭、小細工頭、小普請奉行（今の小普請方）等の職は、みな大番新番の番士をもて充てられしかば、その子もとの番士となりて、事のさまもよかりしかど、今は無下にいやしき小吏よりへのぼりしもの、み、これらの職にありて、其子は大番小十人組などに召出さるゝにより、歷世普代の諸士かゝるいやしきもの、子と相まじはることをはぢなげかしくおもふ輩もありなむ、たまは賤吏より昇進するも、諸士をはげまさるゝためともいふべけれど、ひたすら定例のやうになりもてゆくは、あまりにもつたいなき御事なり、

〔鹽の燒藻の記下〕寛政九年のことなりしが、奥御奉公の御吟味有て、閏七月其事あり、近き頃は御側衆の宅障ある由にて、吹上上覽所に於て被試事に成ぬ、依て何十人もあれ、彼所へ召集められて、御用御取次衆對面あり、（平岡美濃守、高井飛騨守、亀井駿河守、）實は上にも被爲成御透見ありて、可被召出人物を被定事なりけり、

古は何百人にもあれ、はじめ一統に若年寄衆御宅にて吟味ありて、よろしかるべきものを勝スグ

りて被申上を、大抵六七十人其面々則御側御用取次衆にて能々ゑらみて、又すぐりぬきて、三四十人ばかり再吟味有つて、扨は誰々親類書を出すべき由にて、可被召出員數定り、世上にても、誰々は親類書をめされたり、此度御小納戸にこそ出べきなれとて評判したることなり、去間親類書を出すまでの間、若年寄より初め御取次衆用人には、内分手筋にての賄賂を送ること夥敷ことにて、大に權家は德付たることなりしが、近頃の御摸様にては、其煩は絕て、聞ぐるしきことはなく成しかども、つらつら思ふに、若年寄御側衆の取扱にて選擧定るに至りては、賄賂によるよらざるはともかくも、擧らるべきものも其沙汰なく、不可然ものも思ひの外御恩にあづかることも有とも、夫はかの人々の見損じにて、御吟味に罷出たるものに少しも疵難はなかるべし、上の御透見御直裁に至りては、貴賤に限らず、内存はともかくも、忠を盡すべき心は同じかるべき物の、主人の御選に外れたる者の内存、身の治りは如何侍るべき、部屋住のものならば、總領除をもすべきか、家督のものならば、奉公もいかならん、隱居をも願ふべきか、何さやらん終のとゝのはざることとなるべきを、執政の人々を始として、諫め奉らるゝ聞えもなく、氣の付たる沙汰もなし、愚案更に落著せず、畢竟辯案の至り成べし、

〔寶曆集成綠綸錄十六〕延享四卯年三月

諸組與力同心其外輕き者御抱入に罷成候類より、外場所江立身等致し候者之明き跡、向後小普請より御入人に成候事、

一右之類之内、病死等に而明き候節は、其者之妻子等片付方も無之難儀仕候者は、其段遂吟味可被申聞候、最厄介等も無之明跡ニ候は、是又御入人ニ成候事、

一御抱入之者、御暇差出候者之明き跡も御入人ニ成候事、

一御中間御小人等之類、御譜代場江御抱入ニ罷成候者、病氣等ニ而難勤成時、只今迄一代は小普

請入來候得共、御譜代場ニ而も御抱入は御暇差遣、其跡は御入人ニ成候事、

右之通得其意、此趣を以其時々可相伺旨、頭支配有之面々江可被達候、

三月

〔德川禁令考十八選擧〕慶應二丙寅年八月闕日

撰擧心得方達

一諸向御用人井聞付相願候者書出候節、人才相撰、場所相應可御用立と見込候者書出し候者勿論ニ候得共、其者之行狀等不宜候而者、たとへ如何樣御用立候ものニ候とも、御選擧難相成事ニ付、第一ニ平常之行狀等相糺し、家事取締向等も宜敷、其上可御用立と見込候者を相撰可書出筈之處、近來右等之糺も不行屆書出候向も有之候、右者頭支配之目がね違にも可有之哉ニハ候得共、畢竟糺方不行屆故之儀と相聞候、向後平狀之行狀、家事取締向等をも入念相糺、其上可御用立と見込候ものを相撰可書出事ニ候、若不糺之儀も有之候而者、書出候頭支配之越度ニも相成候事ニ候條、其段可被心得候、

右之趣、頭支配江可被達候事、

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年七月

大目付江

○○部屋住御番入之儀、追々不時ニも被召出候は、享保元文之頃之御趣意ニ候、其後より年數十四五ヶ年目ニ御番入被仰付、御番方も一組より年數藝術何人と申儀相定候、右之通ニ而ハ、一度御番入ニ洩候節は、重而之御撰には多分之年數を隔、年齢もおくれ、又は藝術上達等之儀も不相顯事に付、旁以先例ニ被准、不時追々ニ可被召出候御趣意之旨、去年相達置候儀ニ候、然ル處此度相對見分等有之分は、既ニ當年迄十四五ヶ年之間、御番入可有之を相待罷在候ものどもに而、年數勤

等は格別之儀ニも有之ニ付、此度之儀ハ、三四ヶ年之内ニも、追々不時可被召出候、右之内藝術ニ而可被召出分は、定人數可有之樣も無之儀に付、且又先達而見分に出候面々、若年寄衆ニ而、藝術再覽之儀も可有之候、御番方之面々、藝術之方ニ而書上之分も、頭見分相濟候上は、尤此上見分は無之候得ども、御役方之分、依藝術被召出候見分之ため、品により、若年寄衆にて、藝術一覽被致儀も可有之候事、

右之通、此度之儀は、當戌年迄、諸役諸御番共年數之勤幷藝術格別成分、又は父格別之勤勞有之者之悴共、三四ヶ年ニも、追々ニ可被召出候、來ル丑年よりは、以來五ヶ年目毎に年數藝術之分共、去年調之通にいたし可被書出候、右ニ付而は、御番方藝術に而書上之儀、見分之上、格別にも不相見は、是非書上ニ差加べきなど心得被申間敷候、重て改候書出も不遠儀に候得ば、夫迄猶出精之儀被申達、教育被致、年數之者之悴とても、身持等存候樣無之ものは、是又見合、樣子宜を見定め候上に而可被書出候、右之通ニ而、以來五ヶ年目に書出候樣にとの御趣意も相屆候儀に候間、專教育をも加江、吟味念を入候樣兼而可被心得候、

七月

右之通、諸役諸御番方悴共、御番入願候向々江可被達候、

〔御番入御見分記〕一文政十亥年より御番入懸御目付より達書

布衣以上以下御役人幷諸御番方總領共、部屋住御番入相願候分、來亥春中改而書出候樣可被達候、尤書出方其外調方等ニ至迄、諸事寬政元酉年以來、追々相達候通可被心得候事、

右は河内守殿、肥後守殿御渡候ニ付、御達申候、藝術書上等之儀は追而可申達候、以上、

八月　羽太左京　大草主膳　酒井作右衛門　御手洗五郎兵衛〇以上四人目付

來亥年、部屋住御番入御吟味ニ付、武藝何者幾年之心掛候旨、師範之者名前何勤、或は浪人陪臣歟

之譯、流儀之名目又は免許目錄等をも請候はヾ書載可申候事、

　但痛所等之當時は、業難相成候はヾ、其段も書加候事、

一學問心掛有無之事

　但心掛有之面々之內、文章詩作總而著述之品、又は讀書講釋等御試をも可受と存候品は可書出候、尤於學問所御吟味之上、召候而御褒美有之歟、御書付を以御沙汰有之分は御差出短冊書付之內、學問ヶ條之下江其次第朱書ニ而認入候事、

一軍學、天文學、或は筆算等迄も、心掛之品可書出候事、

一短冊案紙寸法之通御認、貳枚充御差出、御役切ニ名前別紙ニ御認、此外は御番入願置候仵無之候旨御由聞可有之候、尤諸藝術書出候以後、師範替り、或は免許皆傳等相濟候歟、其外相替儀も候はヾ、其都度々々引替短冊早々御差出可有之候、

一來亥春、短冊御差出後、養子願等相濟、又は御番入願差出候而も、來亥年御撰には除きに相成候積り、尤御番方等ニ而書上置候以後、父御役出等致し候分は、最初書上も有之儀ニ付、追々御差出有之候而も不苦候之事、

一書出方等御問合之儀有之候はヾ、當十月中迄御申聞、尤差掛候儀は、其時々御申聞可有之候、

右之通御心得、來亥正月中迄に、拙者共之內江御差出可有之候、以上、

　八月　　羽太左京　　大草主膳　　酒井作右衞門　　御手洗五郎兵衞〇以上四人目付

〔天保集成絲綸錄七十八〕天保七申年三月

　　覺

　十七歲以下之者は、部屋住御番入願書請取申間敷旨、天明八申年、各申合之趣申達置候、然る處、近來又々差出候向も有之候得ば、請取置候得共、前々之通、此後は差出候ても、請取申間敷候間、

向々にても其心得に罷在、十七歳以下之者は、願書不差出樣可被達置候事、

右御書取、大和守殿相模守殿御渡候ニ付、寫申達候、以上、

三月　山岡五郎作　曲淵勝次郎　大澤主馬　村瀬平四郎〇以上四人目付

〔徳川禁令考選擧十八〕寛政二庚戌年七月十九日

屬僚薦擧ノ儀ニ付達

諸向明き跡江御用人願申上候儀、明き候向々より未申上候内、或御役御免不被仰付以前、御用人之儀申上候向も有之候由、以來向々より御入人願申上、或ハ役儀御免被仰付候儀、得と承糺候上、御用人申上候樣可致候、

右之趣寄々無急度申談置候樣、安藤對馬守殿被仰聞候條、可被得其意候、以上、〔公文雜集ヲ按ズルニ、天保八年九月、本文ノ趣尙又再達アリ、今略之、〕

寛政七乙卯年六月闕日

屬僚薦擧ノ儀ニ付達

覺

諸向より取。入。之儀申聞候節、唯今迄其頭々江掛合無之向も有之哉ニ候、以來取人之儀申聞候ハヽ、銘々頭江篤と掛合之上申聞候樣、向々江寄々可被達候、

六月

〔明良帶錄新金書〕職業にて御目見以上へ御取立之條

職業にて、同樣御目見以上へ御取立之者ハ、二代目家督ハ躑躅之間にて被下置事同斷、但し年數勤功格別なる者同斷、職業にて最初より御目見以上へ被召出候者と御取立とハ格別之事、

〔徳川禁令考選擧十八〕寛政三辛亥年十二月闕日

御目見以下奉仕之者、家督席及轉役ノ儀ニ付書付、

一御目見以下より自今以後、御取立可被仰付者共、三代目家督者、躑躅之間ニ而被下置、尤御目見以下之御奉公可被仰付事、

但御取立以後、年數勤功等、格別成ものハ、其御役柄等ニより、永々御目見以上ニも可被仰付候、尤永々御目見以上たるべき旨申渡無之ハ、前條之趣ニ候事、

一是迄御取建ニ相成候者ハ勿論、唯今迄之通ニ候事、

一職業ニ而、右同樣御目見以上江御取立之者ハ、二代目家督者躑躅之間ニ而被下、尤右同斷之事、

但年數勤功等格別成者ハ、右同斷之事、

一職業ニ而も、最初より御目見以上江被召出候もの者、御取立と格別之事、

一御天守番、富士見御寶藏番者、古來席柄之儀ニも候間、御目見以上菊之間ニ而家督可被下面々よりも、品ニより可被仰付候、尤御目見井頂戴物等、家督被仰付候儀迄も、總而持格之通ニ可被仰付候、

一御目見以上菊之間ニ而家督被下來候内ニも、持高少給成分等、おのづから御奉公出も稀成事ニ候間、以來御奉公筋修行之ため、何れ之御場所ニ而も相勤度存候ものも候ハヾ、御目見以下上下格之御役柄抔江者、銘々爲修行、尤持格ニ而一旦御奉公可被仰付候、右者御目見井頂戴もの家督等被仰付候儀迄も、總而御目見以上之通ニ可被仰付候事、

一御目見以下躑躅之間ニ而家督被下來候もの之内ニも、右同樣いづれ之御場所ニ而も相勤度存候もの候ハヾ、役上下又者羽織格之内ニ而も、相應之役柄江者、一旦可被仰付候、尤銘々持格ニ而、家督被仰付候節も、躑躅之間ニ而可被仰付候事、

右之通被仰出候間、其向々井小普請支配其外組支配等有之面々江可被達置候、

本席見習

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年十二月

自今以後、御目見以上本席江御取建ニ被仰付候もの、本席十ケ年相勤候ハヽ、其翌春に至り、名前可書出旨、向々江被相達、取揃候而、若年寄江可被差出候、又其後二拾ケ年に至り候ハヽ、猶又申立、十ケ年目毎ニ、以來銘々不洩樣に勤書可被差出候、

〔本勤并年寄等書留〕〔一〕天保九戌年三月、與力見習本勤并ニ被仰付候起立書留、

朱書
筒井伊賀守殿江

天保九戌年三月四日、爲總名代と支配役五人罷出、用人岡本半八郎を以上ル、

同十七日、支配役五人并見習之もの七人被召呼、被仰渡、書付御渡相成候、

御組與力

願書

御組與力人數貳拾三人ニ而、勤方之儀者、御月番之節三人宛、御非番之節貳人宛、晝夜御番相勤、御成出役、評定所出役、撿使御用、其外諸事出役仕候處、天明年中迄者、御役懸り之もの少く、全御番不勤之もの者、〇朱略番江懸り役之方江除切、其餘者御番兼帶ニ而相勤候、御役而已ニ付、都合拾五人御番相勤候もの有之候間、見習之もの者、諸出役等相勤候ニも不及、御番諸出役共本勤之者ニ而多分御用相辨候處、天明七八之頃ゟ、御番不勤之御役懸新規人數追々相增、當時者〇朱略番先年ニ見合、御番不勤之もの九人相勤候ニ付、殘御番兼帶相勤候もの六人ならでは無之、右之內御番兼帶役之儀も、近來新規之分、古銅吹所見廻壹人、壹ケ月五六度宛同所見廻、并人足寄場見廻出役、隔日壹人宛罷出、其外半年役之分、冬春之內晝夜廻り壹人、御番不勤人足改增懸壹人、是又近來出來、其上赦帳方者、大赦等有之節者、當座御番不勤、町火消人足改之もの者、出火手合致シ候得者、是又御番不勤仕、全御番而已相勤候もの者、當時壹人ならでは無御座、依之見習之もの江御番爲相勤候得共、無足之もの而已ニ而、御番者雖相勤、殊ニ諸出役之方江も出人無之候而者難相成、旁本勤之もの

を差加候ニ付、吟味方、赦帳方、其外御役懸り之ものエ、助番相觸、兼帶ニ而爲相勤候得共、夫々懸り役之方ニも難差延御用向、其外御用多之節者、斷等致し、觸替等日々混雑仕、且又諸出役之儀も、御番兼帶役之もの者、前々見習之ものゟ先ニ觸當候處、是又近來夫々御用多相成、高積見廻者、前々壹ヶ月三度宛罷出候處、見廻場所相增候ニ付、六齋ヅヽ罷出、其砌者助番諸出役相斷、例繰方者拾予非常調例書仕立方等ニ而、諸出役見習之もの出切候後ニ相心得、彌以助番諸出役とも見習之もの持切同様ニ相成、第一者見習之もの御番晝夜相勤候得共、爲差御手當も無御座難儀仕候、〇中略火事場出役ハ勿論、其外何出役にても入組候御用向共晝夜ニ不限、當時ハ不幾相勤候儀ニ而、前々之振合とハ勤方拔群相違仕、本勤人數引足不申候故、右代り見習之ものにて全勤續仕罷在候儀ニ御座候間、何卒御憐愍之思召奉願度、〇中略以上、

戌三月

由井八十大夫印

佐久間斎大夫印

仁杉五郎左衛門印〇以下二十人略

〔本勤并年寄等書留ニ朱書〕天保十五年辰十二月十七日、高橋藤大夫を以御渡、〇中略

御切紙致拜見候、然者拙者共組與力同心忰共見習勤申渡候節取計、并右御手當其外明キ跡御抱入等申付候振合御問合之趣致承知候、兩組與力同心忰共見習勤申付候節者、手銀ニ而申渡、尤與力見習之儀者、人數五人迄、壹ヶ年御手當銀拾枚宛、同心共者八人迄金三兩宛被下置候、尤勤方之次第ニ寄、本勤並をも手銀ニ而申付、增御手當等被下候儀も有之候、御役出明跡者、御入人可被仰付旨、先年御書付有之候得共、品ニ寄一旦退勤致候者、格別勤功有之、別規御抱入又者父之勤功ニ而、忰共御抱入被仰付候義も稀ニ者有之候、仮御抱入と申儀者、拙者共組には無御座候、右御報如斯御座候、以上、

十二月　　　　　　　　　　　　　　　　鍋島内匠頭

川村清兵衛様　　　　　　　　　　　　　跡部能登守

〔譜代家督留三〕安政二卯年九月、家督方御右筆衆々問合、父席以上ニ而同人相勤居忰同心見習相勤候者、跡目家督被下置候例調、但両組ニ無之旨御挨拶相成候事、

朱書
安政二年卯九月九日受取、同廿日粂守を以達、　　　　家督方　西尾喜八郎

池田播磨守殿　　　　　　　　　　　　　清水五郎左衛門

父、席以上ニ而、同心相勤居リ、忰同心見習相勤候者、跡目家督被下置候節之例、一二例御書抜、早々可被遣候事、

但此度粂松弥助見合ニ致度存候間、御座候はヾ御書抜可被遣候事、

九月

下ゲ札
書面之例取調候處、是迄両組共ニ先例無之候事、

都筑十左衛門様　　　　　　　　　　　　石杉八右衛門

松浦安右衛門様　　　　　　　　　　　　荻野政七

新古役幷師匠番

〔青標紙三編〕一何御役にても、新規に被仰付時は、師匠番と云ふものありて、勤向之傳達を受る事なるに、両丸御目付に限りて、此師匠番無之、傳達をうけずして、即日より勤むる事なり、又御目付の部屋は、御用部屋同様別所に有之、紅葉之間のうしろにて、御座敷の中なり、

〔德川禁令考十九 振舞遊興之禁〕享保二十乙卯年九月廿七日

殿中へ持参ノ辨當幷新役拜命ノ節振舞等之儀ニ付御書付

前々より相違候趣も有之候處、御城部屋々々江、食物酒等持參、外々江も振舞候由相聞候、於殿中みだり成儀ニ候、依之左之通可被心得候、

一殿中晝計相詰候面々者、於御臺所御料理被下事候間、部屋々々江食物等持參之儀、無用たるべく候、

一晝夜御料理不被下面々、一分之辨當持參者可有之事ニ候、外々江振舞候樣ニ用意者、可爲無用事、

一泊番相勤、御夜食被下候面々之内ニも、用意之ため、一分之辨當持參者勝手次第之儀、且又組頭江振舞候者格別、外江振舞候樣ニ持參候儀可爲無用事、

一新規御役被仰付候面々、先役之內、諸事申傳相願候者江も、音物振舞等過分ニ候由相聞候、左樣ニハ有之間敷儀ニ候、初而振舞候共、分限可爲相應事、

右之通、自今急度可被心得候、

〔憲法部類二〕一明和四亥年四月廿七日、松原右近將監殿御渡被成候、筒井大和守被相渡候、

憲法部類、敎令類纂、御書付留等ヲ按ズルニ、元文寶曆明和嘉永ノ際、輪又享保度ノ書付ヲ添、頭支配ニ於テ、取締向行届候樣可致旨ヲ命セラル、

諸向新設被仰付候砌、其御役筋相傳致候者可有之儀勿論之儀ニ候、然ル處場所ニ寄、古役之者と新役之者一席いたし候ニも、差別を付候類之儀も有之哉、御役名者、一同之儀ニ候得者、御役名江對し、自己之差別を付候儀抔、決而有之間敷儀ニ候、其上近來者御役筋相傳候者幷古役之面々ゟ、事六ヶ敷申なし、出會幷辨當其外諸入用道具等之品々ニ至迄、形を出し、其通ニ無之候而ハ不相成候樣ニ致掛候儀共、間々有之由ニ候、右體之儀者毛頭有之間敷儀ニ候、向後新役被仰付候者之取計方共、具ニ從御目付相尋、承置之、且其向々之風聞爲承糺候筈ニ候、總而前々御書付等を以被仰出候儀共事承知候迄之樣ニ成行、如何成事ニ候、以後者堅相守、段々其旨を申

傳、忘却無之樣ニ可被相心得候、若此以後猥ヶ間敷筋も有之候はゞ、急度相糺ニ而可有之候間、

一同格別ニ申合可相守候、

右之趣、自今以後、急度可被相心得候、

〔德川禁令考十九新古役人諸制規附錄〕新古役人心得方ノ儀ニ付達（此一篇ハ諏訪氏ノ藏本ヨリ抄出ス、然ルニ原書、年號ヲ闕ク、今按ズルニ天保年度ナラン、）

小笠原相摸守殿、御目付三枝左兵衛ヲ以御渡御書付、

諸向勤方申合等之儀、前々より相達候通、重き御役人者勿論、末々ニ至迄、勤方嚴重ニ心掛ヶ、新役被仰付候砌、其役筋傳達候儀者、其通たるべく候得共、場所ニ寄、新古之差別を附候事、甚敷も有之哉ニ聞へ候、同役被仰付候者を、自己ニ差別を附候事者有之間敷事ニ候、且又御役筋傳達者、都而古役之面々より六ヶ敷申成、傳達相賴候者江過分之音信振舞等爲致、出會も手重に成行、辨當其外諸道具ニ至迄形を出し、其通ニ無之而者不相成樣ニ致掛候儀も間々有之由、向ニ寄候而者、御城部屋江食物酒等持參、仲間江振舞候由、右躰之儀者決而有之間敷事ニ候、

一組支配有之面々、別而其身を愼、組支配之勤向をはげまし候儀專要ニ可有之處、兎角申合不行屆、參會之節、御役柄ニ不似合、遊興音曲等を催し、酒宴ニ長し、不行儀之輩も有之哉ニ相聞候、向後右躰猥りヶ間敷出會等者堅相愼可申候、

一古役之者申聞候儀者、如何と存候事をも、挨拶柄ニ拘り、無據相用候儀も可有之候得共、古役之者ハ、猶更萬事を愼、勤方申合等入念、宜き筋を新役之者江爲見習候樣、精々心を用ひ可申候處、却而勤場古く相成候得バ、諸事怠り、勤向等閑にして、新役之者而已骨折せ候向も有之哉ニ聞へ、左樣ニハ有之間敷事ニ候、

一近來之風儀、諸事當り障り無之候を專らと致し、相互ニ突合計心を用ひ候より、自然役前之事

支配

おろそかに成行候、銘々役前之儀ニおいては、其身を不顧、御爲第一ニ力を盡し候事、本意ニ而既ニ誓詞前文之處、常々相守り候得者、申迄ニも無之儀ニ候條、萬事踏込可被精勤事ニ候、右之趣屹度可被心得候、尤是迄度々相達候趣も有之候得共、心掛ヶ薄く候故、年月を經候ニ隨ひ、自然相弛候、都而勤向實意を盡し候はゝ、右樣之儀ニハ至間敷候、自今以後、諸向共、新古之差別無之厚く申合、諸事互ニはげみ、不弛樣ニ可被心懸候、尤組支配之面々江者、右之趣等閑ニ不相成、厚く相心得候樣、頭支配替り候節は、篤と可被申合候、

但、銘々家來共儀も、右ニ准じ能々可被申付候、

〔青標紙三編〕一總じて支配下ある御役は、役儀は左までに高からざるも、尋常にてはつとめがたし、御徒頭小十人頭は席順は下なれども、一ほね折れる事なり、御使番は支配下なし、

〔天保十一年武鑑〕諸御役御支配附　但諸御役供合印ニ而分之

ろ　御老中御支配　田安樣、一橋樣、清水樣、御家老衆、御側衆、高家衆、御留守居、大御番頭、大御目付、町御奉行、御勘定奉行、關東御郡代、御勘定吟味役、御作事奉行、御普請奉行、小普請組支配、御籏奉行、御鎗奉行、御留守居番、交代寄合衆、表高家衆、美濃御郡代、遠國御役人、

わ　御若年寄衆御支配　御書院番頭、御小性組番頭、御小普請奉行、新御番頭、御小性衆、中奥衆、御小納戸衆、百人組頭、御持弓頭、御持筒頭、定火消御役、御先手御弓頭、同御鐵炮頭、御目付衆、御使番、火事場見廻、御鷹匠支配、御鳥見組頭、御小十人頭、御徒頭、御船手頭、御鐵炮方、西御丸御留守居、西御丸裏御門番頭、二御丸御留守居、御納戸頭、御腰物奉行、三千石以上御寄合、御儒者衆、御醫師衆、御女中樣方御用人、御書物奉行、御右筆組頭、御馬方、大筒御役、御膳奉行、御賄頭、御臺所頭、御細工所頭、御材木石奉行、濱御殿奉行、吹上御奉行、御藥園預、御庭者支配、御同朋頭、奥御坊主組頭、御數寄屋頭、中川御番、天文方、屋敷改、御進物番、御召御船役、御繪師、幸若音曲、御能役者、

ち　寺社御奉行御支配　紅葉山御坊主衆、同火之番、御樂人衆、神道方、連歌師、碁將棊所、古筆見、

る　御留守居御支配　御廣敷番頭、同御用達、同進物取次番頭、奥火之番、御切手番之頭、御天守番之頭、富士見御寶藏番之頭、玉薬奉行、御簞笥奉行、御弓矢鎗奉行、御具足奉行、御幕奉行、明屋敷番、伊賀組頭、

を　大目付御支配　關所物奉行

ま　町御奉行御支配　石出帯刀、町年寄、

か　御勘定奉行御支配　御勘定組頭、御勘定衆、御切米手形改、御藏奉行、御金奉行、御油漆奉行、御林奉行、川船極印改、御評定所、御評定所御留守居、總御代官、金銀朱座、

さ　御作事奉行御支配　御大工頭、御作事吟味役、同下奉行、御疊奉行、御庭作、植木奉行、御鋳棟梁、御翠簾屋、

や　御鎗奉行御支配　八王子千人同心頭

め　御目附衆御支配　御徒目付、御小人目付、御徒押、御玄關中ノ口番、表火之番、御貝役、御太鼓役、黒鍬頭、御掃除頭、御挑燈奉行、御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、傳奏御屋敷番、櫻田和田倉御用屋敷、御臺所番、

に　二之御丸御留守居御支配　二御丸火之番

引下勤

〔明良帯録新役篇〕引下ゲ勤

御天守番、富士見御寶藏番ハ、古來家柄の儀にも候間、御目見以上菊之間にて家督被下候面々にても、品に寄り引下げ可被仰付候、尤御目見幷頂戴物等ハ持格之通り家督等も同斷之事、

御目見以上菊之間にて家督被下來候内にても、持高少給成ものハ、自ら御奉公も稀成事に候間、以來御奉公筋修行のため、何れの御場所にても相勤度候はゞ、御目見以下上下格抔へハ銘々修行の爲持格にて一旦御奉公可被仰付候、尤御目見幷頂戴物家督被仰付候義、御目見以上之通可

被仰付候事、

御目見以下觸頭之間にて家督被下置候ものも、右同樣何れの御場所にても相勤度候はゞ、御役上下又は羽織格之內にても、相應の御役柄へは、一旦可被仰付、尤銘々持格にて家督被仰付候節も觸頭之間にて可被仰付候事、

〔青標紙〕衣服制度的例

一引下ゲ勤之者御紋付著用之事

文化十二亥年三月、大目付中川飛驒守ゟ御目付逵坂三大夫江問合、御支配向之內、御目見持格ニ而引下ゲ勤之者、其父御目見以上御勤役中致拜領候葵御紋付之時服、右引下勤之者、殿中向江致著用候哉、又勤ニ付候節ハ、著用不致、身分ニ付候御禮廻勤等之節計、著用いたし候哉、致承知度候事、

附、御書面引下勤御徒目付、表火之番、葵御紋付時服著用之儀、素袍長袴著用致候節、幷身分ニ付御禮廻勤等之節ハ致著用、其外平日殿中向者勿論、外出之砌も、勤ニ付候節ハ著用不致候心得ニ御座候、此段及御挨拶候、

逵坂三大夫

〔德川禁令考十八撰要〕寬政三辛亥年十二月閏日

御目見以上ノ者、以下ノ場所へ引下ゲ勤ノ儀ニ付達、

今度少給之面々等、御奉公勤馴候ため、一旦引下ゲ勤之儀被仰出候ニ付、右之趣を以、向々江御入人も可有之事ニ而、總而人才見立候而宜候人者、可成丈申上候樣ニ可仕儀者勿論之儀ニ候、此度修行として引下ゲ勤被仰付候ものハ、猶又能々心掛御用立可申者、幷出精之面々等、夫々人才ニ隨ひ、頭々より若年寄迄、內意、封書を以可被申立候、

但老中若年寄之直支配ニ而無之分ハ、御目付を以同樣ニ直封書可差出事、

右之趣可被相心得候、尤其向々江相達置候樣可被致候、

同上ニ付御目付口達

持格御目見以上之者、以下之場所江被仰付候節ハ、席順之儀、其場所切ニ相定不申、初而被仰付候節々相伺可申旨、松平越中守殿被仰聞候ニ付、御達申候、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕文久三癸亥年八月二日

寄合ノ面々引下ゲ勤ノ儀達

三千石以上寄合之面々、相當之場所江御役被仰付候儀者、勿論之事ニ候得共、當御時勢柄之儀ニ付、文武之心掛者勿論、人才御撰擧被遊候儀者、御專務之事ニも有之候間、事情も不相心得候面ハ難相成候ニ付、向後勤駉之爲め、三千石以上寄合之面々、布衣以下之場所江引下ゲ勤被仰付、部屋住之者も、御番入等被仰付候儀も可有之候、

右之趣、萬石以下之面々江可被達置候事、

〔明良帶錄前篇〕

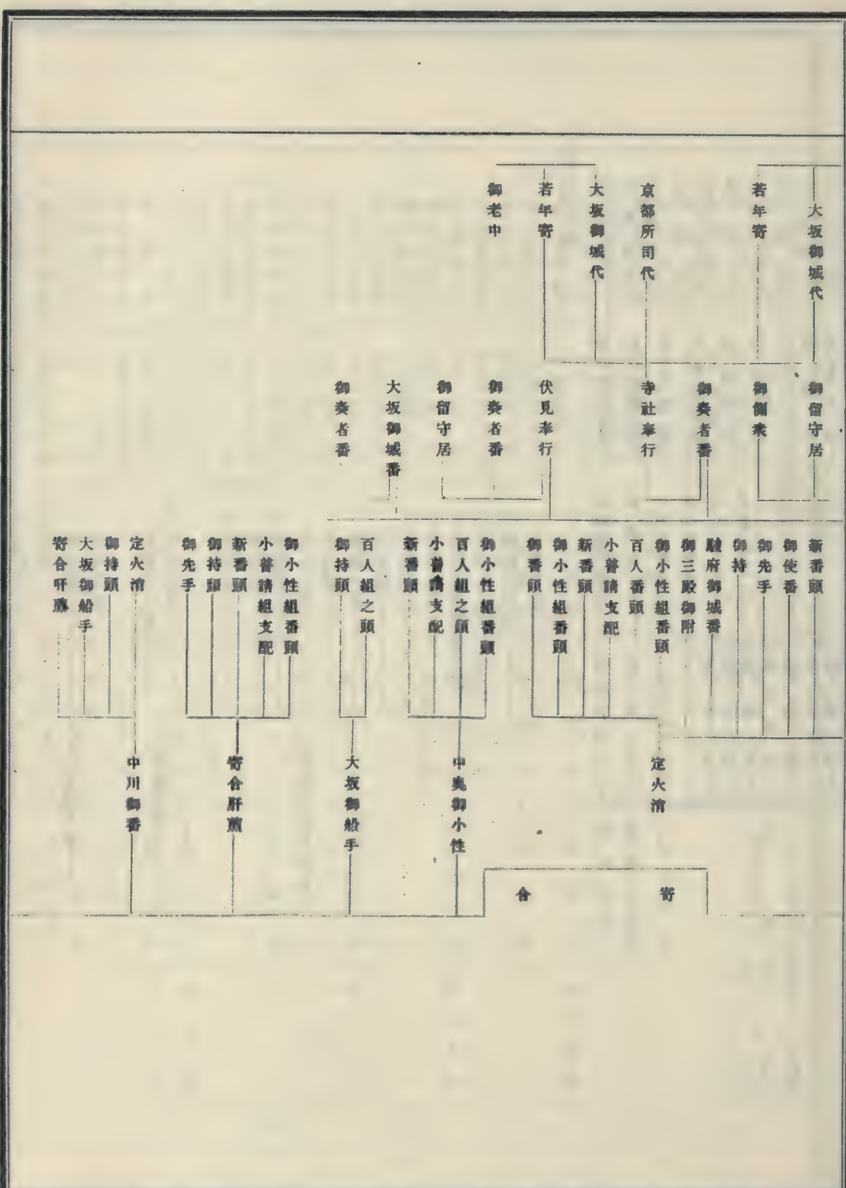
昇級

御側御用御取次　若年寄　御側御用人　御老中格　御老中　京都所司代

御側衆　大番頭　御留守居　御側衆　駿府城代

駿府御城代　御書院番頭　御側衆　御留守居　御三殿御家老　御小性組番頭　甲府勤番支配　御小性組番頭

御小性組番頭　小普請組支配


大坂御城代
若年寄
京都所司代
大坂御城代
若年寄
御老中
御留守居
御側衆
御奏者番
寺社奉行
伏見奉行
御奏者番
御留守居
大坂御城番
御奏者番
新番頭
御使番
御先手
御持
駿府御城番
御三殿御附
御小性組番頭
百人番頭
小普請支配
新番頭
御小性組番頭
御番頭
御小性組番頭
百人組之頭
小普請支配
新番頭
百人組之頭
御持頭
御小性組番頭
小普請組支配
新番頭
御持頭
御先手
定火消
御持頭
大坂御船手
寄合肝煎
定火消
中奧御小性
大坂御船手
寄合肝煎
中川御番
寄合

火消
御使番
寄合肝煎
火事場見廻
中川御番
御使番
御持頭
御先手
小十人頭
御徒頭
御納戸頭
禁裏附
仙洞附
佐渡奉行
西丸御裏門番之頭
火附盜賊改加役
駿府御城番
御船手頭

火事場見廻
寄合出役
御役寄合再勤場
布衣

〔明良帶錄後篇〕

佐渡奉行
日光奉行
山田奉行
山澗附
駿府御城番
堺奉行
京大坂町奉行
御持頭
奈良奉行
御持頭

御小性組番頭
甲府勤番支配
百人組頭
小普請支配
御旗奉行
御鎗奉行
堺奉行
御先手頭

御廣敷御用人
佐渡奉行
二丸御留守居
京大坂町奉行
御作事奉行
小普請奉行

御勘定奉行
御奉行
二丸御留守居
御目付
御使番
御先手
浦賀奉行
新番頭
御目付
新番頭

御納戸頭
御徒士頭

奥向

奥祐筆組頭

御留守居
御三殿附
御留守居
御旗奉行
御鎗奉行
御先手頭
御小性組番頭
御小性組番頭
江戸町奉行
大目付
御三殿御家老
御留守居
西丸御留守居
御鎗奉行
京大坂町奉行
御作事奉行
小プシン奉行
ゴフシン奉行
松前奉行
大目付
江戸町奉行
御サクジ奉行
ゴカン定奉行
小プシン奉行
ゴフシン奉行
御持頭
江戸町奉行
御作事奉行
ゴカン定奉行
長サキ奉行
大目付
ゴカン定奉行

京都町奉行
小普請奉行
御普請奉行
山田奉行
御持頭
御勘定奉行
御持頭
御小性組番頭
御作事奉行
御普請奉行
京都町奉行
小普請奉行
御勘定奉行
大目付
新番頭
京大坂町奉行
御作事奉行
大目付
新番頭
御作事奉行
江戸町奉行
ゴフシン奉行
御先手
御カン定奉行
御サクジ奉行
ゴフシン奉行
御三殿附
御小性組番頭
小プシンシハイヤ
甲府勤番頭

堺奉行
松前奉行
浦賀奉行
山田奉行
奈良奉行
禁裏附
長崎奉行
スルカ町奉行
京大坂町奉行
スルカ町奉行
京大坂町奉行
御フシン奉行
御サクジ奉行
小プシン奉行
御小性組番頭
甲フキンバン頭

御先手
浦賀奉行
佐渡奉行
日光奉行
御持頭
御先手頭
仙洞附
禁裏附
御目付
新番頭
小普請支配
新番頭
小プシンシハイ
スルガ町奉行
サド奉行
浦賀奉行
スルガ御定番
ナラ奉行
御先手
御目付

御三殿御番頭
御臺樣御用人
御納戸頭
小十人頭
御徒頭
御使番
兩番與力
中奥御番
進物番
御セン奉行
屋シキ改
御使番
二丸御ルスイ
御徒頭
御納戸頭

小十人筋
大番筋
御小性組
御書院番
御勘定
御右筆

小
書

御三殿付―御持番―大坂町奉行
御鎗奉行　御ハタ奉行　キンリ附
御ハタ奉行　御ヤリ奉行　御三殿附
御カン定奉行　スンフ御城番
ゴフシン奉行　御小性組番頭
御先手頭　キンリ附
山田奉行
サカイ奉行
御持頭

御先手
日光奉行
御目付
小十人頭
御持頭
御使番
小十人頭
御徒頭

御納戸頭
御船手頭
御腰物奉行
天文　タキビ
聖堂
測量
曆正
フタキ物
ケイフ
御右筆
御勘定
御書
造國
機殿
書役
請

〔明良帶錄續篇〕同寮歷昇

御勘定奉行―御勘定吟味役―御勘定組頭―御勘定―支配勘定

御勘定吟味役―御郡代―御代官―御鳥見組頭　同與力

御同朋頭―御同朋―格奥勤―御同朋

奥御右筆組頭　表御右筆組頭―奥御右筆　表御右筆―御右筆

御納戸頭―御納戸組頭―御納戸

吹上奉行　濱奉行―添奉行―御庭之者支配―吹上向

御賄頭　御臺所頭―御膳所御臺所組頭　表御臺所組頭―御賄組頭―御臺所向―御賄方―六尺

〔京兆府尹記二十〕奉行職昇進之圖

轉役
免職
隱居勤

御旗本と一群にこゝろゆれども、左にあらず、段々の次第あり、三千石以上は、御役場小身の向とは異也、其進み口左にあらわす、○中略

御役向進み口、大抵斯のごとく、數萬人の中ゟ撰み御役を仰付るゝ事なれば、なみ〳〵の方にては、有司奉行の職掌は勤めがたかるべし、拙なき筆に書き止むるは恐みありなんながら、移りかはる成行を弘むるも、又勸善懲惡之道なれば、沓とも成べかりしとおし計るとにはあらざれども筆を耕す、然ども中々愚昧之聞知るべき事にはあらず、只世風の評を書綴るのみ、

〔官中秘策十一〕御役人御役替之大法

一小普請組ゟ　御小姓組、御書院番、大御番、御祐筆、御代官、新御番、

一寄合より　中奥御小姓、御使番、御先手、火消役、火事場見廻、御小納戸、

一大名ゟ相勤分　伏見奉行、御城代、御奏者番、大御番頭、大名役外になし、

一一代小普請ゟ　音信次第にて、又御役出之事有、御切手番頭、御賄頭、御納戸頭へ、

一御代官ゟ　御勘定吟味役、佐渡奉行、降而一代小普請、

一御祐筆ゟ　御廣敷番頭、御切手御門番頭、西丸御裏御門番頭、二丸御留守居、

一新御番ゟ　御勘定吟味役、降而小普請、御切手番之頭、御用達、御納戸、

一御納戸御番ゟ　御小納戸、大御番、新御番、御代官、

一大御番ゟ　御切手番之頭、大御番組頭、御納戸番、小普請、

一御切手番頭ゟ　御賄方、御膳奉行、

一火事場見廻ゟ　中奥御小姓、御使番、火消役、大坂御船手、

一小普請組頭ゟ　御徒頭、西丸御裏御門番之頭、御納戸頭、小十人頭、二丸御留守居、

一中奥御番ゟ　御徒頭、小十人頭、堺奉行、

一御廣敷番頭ゟ　二丸御留守居、御膳奉行、西丸御裏御門番之頭、

一御書院番ゟ　同與力、小十人頭、御徒頭、御納戸頭、中奥御番、御使番、

一御小姓組ゟ　御使番、御小姓組之頭、御先手、御小納戸、御目付、小普請、

一御納戸頭ゟ　布衣以上、二丸御留守居、佐渡奉行、奈良奉行、

一御賄頭ゟ　御納戸頭、御勘定吟味役、御切手番之頭、

一御勘定吟味役ゟ　布衣、佐渡奉行、長崎奉行、御納戸頭、御勘定奉行、降而一代小普請、

一御小姓衆ゟ　諸大夫、御側衆、御小姓組番頭、新御番頭、御目付、御小納戸、寄合、

一御小納戸ゟ　布衣、小十人頭、御目付、新御番、御先手、御小姓、御普請奉行、

一大御番與頭ゟ御先手、御徒頭、

一御書院組頭ゟ布衣、御目付、日光奉行、御先手、堺奉行、

一西丸裏御門番頭ゟ布衣、御先手、寄合、

一小十人頭ゟ御目付、京都町奉行、山田奉行、御先手、御持頭、

一御持頭ゟ布衣、小普請支配、新御番、百人組頭、大坂奉行、御鎗奉行、

一中奥御小姓ゟ諸大夫、御小姓組番頭、新御番頭、小普請支配、御持頭、御普請奉行、

一大坂御船手ゟ布衣、大坂町奉行、小普請組支配、寄合、

一御目付ゟ大目付、町奉行、京町奉行、小普請奉行、御留守居、御勘定奉行、

一小普請支配ゟ布衣、大目付、御小姓組番頭、甲府勤番支配、

一御留守居番ゟ布衣、御旗奉行、御先手、寄合、

一御鎗奉行ゟ御留守居、大目付、寄合、

一日光奉行ゟ御作事奉行、西丸御留守居、小普請支配、御三家御家老、

一堺奉行ゟ諸大夫、大坂町奉行、小普請支配、御鎗奉行、持頭、

一佐渡奉行ゟ布衣、御勘定奉行、長崎奉行、西丸御留守居、小普請奉行、降而一代寄合、

一甲府勤番支配ゟ諸大夫、大目付、御小姓組番頭、御持頭、

一京町奉行ゟ町奉行、御作事奉行、御勘定奉行、御持頭、

一大坂町奉行ゟ諸大夫、御勘定奉行、御旗奉行、小普請奉行、長崎奉行、降而一代寄合、

一御使番ゟ布衣、御目付、小普請支配、新番、御先手、大坂町奉行、禁裏附、

一町奉行ゟ諸大夫、大目付、御留守居、

一御勘定奉行ゟ諸大夫、大目付、西丸御留守居、

一御膳奉行ゟ小十人頭、御納戸役、二丸御留守居、

一御小姓組與頭ゟ衣布、新御番頭、普請奉行、御目付、寄合、

一御徒頭ゟ御目付、山田奉行、御先手、

一二丸御留守居ゟ御持頭、御先手、御留守居番、

一火消役ゟ布衣、小普請支配、百人組之頭、小姓組番頭、

一御先手ゟ布衣、大坂町奉行、新御番頭、御持頭、御鎗奉行、加役ニ付一通リ、休

一西丸御留守居ゟ諸大夫、御小姓番頭、御旗奉行、寄合、

一新御番頭ゟ衣布、御小姓組番、小普請支配、御鎗奉行、

一百人組頭ゟ布衣、御小姓組番頭、小普請支配、甲府勤番支配、

一山田奉行ゟ京町奉行、日光奉行、御持頭、

一奈良奉行ゟ諸大夫、大坂町奉行、小普請奉行、

一駿府町奉行ゟ布衣、小普請奉行、奈良奉行、大坂奉行、御持頭、

一長崎奉行ゟ諸大夫、御勘定奉行、西丸御留守居、

一禁裏附ゟ諸大夫、御鎗奉行、御先手、寄合、

一御旗奉行ゟ諸大夫、御留守居、寄合、

一御普請奉行ゟ諸大夫、町奉行、御作事奉行、御勘定奉行、

一小普請奉行ゟ　諸大夫、御普請奉行、御勘定奉行、御三家御家老、御作事奉行、御鍵奉行、寄合、
一御作事奉行ゟ　諸大夫、大目付、町奉行、御鍵奉行、
一駿河御城代ゟ　諸大夫、御側衆、寄合、
一御小姓組番頭ゟ　諸大夫、御書院番頭、御側衆、御留守居、寄合、
一大目付ゟ　諸大夫、御留守居、御鍵奉行、御三卿御家老、御小姓組番頭、
一寺社奉行ゟ　所司代、若年寄、
一御側衆ゟ　若年寄、御留守居、大御番頭、
一御留守居ゟ　御側衆、駿府御城代、
一所司代ゟ　御老中
一御城代ゟ　御老中、所司代、

一伏見奉行ゟ　諸大夫、御側衆、寄合、御奏者番、
一御書院番頭ゟ　諸大夫、大御番頭、御留守居、御側衆、寄合、
一御三卿御家老ゟ　諸大夫、大目付、御留守居、寄合、
一御奏者番ゟ　大名、若年寄、寺社奉行、
一若年寄ゟ　御側御用人、御城代、
一大御番頭ゟ　若年寄、御側衆、伏見奉行、奏者番、
一御側衆ゟ　御老中格、御城代、
一御老中格ゟ　御老中

〔玉露叢十五〕寛文二年十月十九日、役替被仰付面々、〇中略
一御簞子奉行、竹島四郎右衞門跡役跡部茂兵衞、同斷小長谷伊左衞門跡役小野忠左衞門、右兩人ニ被仰付之、

〔德川禁令考十九 新古役人諸制規〕寛政元己酉年七月閏日
　諸帳面引渡方ノ儀ニ付達
　　大目付江
御役勤中之諸帳面并書付類、銘々限りニ而、跡役江引渡無之向有之哉ニも相聞候、以來ハ轉役退役又者死去等之節者、不殘同役江引渡、跡役被仰付候ハヾ、右帳面書付類、同役より不殘引渡有之様可被致候、
　但手留之儀ハ、銘々宅江封置候とも、又ハ同役江相讓候とも、勝手次第可致候、

右之趣、諸役人江寄々可被達候、

同上達

寛政三辛亥年七月同日

諸役人御役中之諸書物留書等、跡役江相譲候儀、向後ハ何之年以來之留、誰御役誰江引渡候段、幷誰より何程請取候旨、雙方書付候而、御目付江申達置候様可被致候、且又右之通、追々譲渡段々嵩高ニ相成、或者年暦久敷、留書等當時手元ニ無候而も宜類者御多門之内江相納置、見合等之節者、斷次第下ゲ候儀ニ相心得、是又御目付迄書付を以て申達相納置候様可被致候、

亥七月

右之趣、諸番頭、御物頭等、幷在府有之遠國奉行之類、其外も御役所等無之銘々、勤中限持退ニ相成類之場所々々者、前書之通ニ相成候様有之度事ニ候間、相達可然、向々江被申達、向後書付爲差出、御多門納等之儀も、御目付方ニ而世話有之様ニ可被致事、

〔青標紙三編〕一布衣以上御役人病氣にて、養生引込之月數ハ、六ヶ月御定めなり、御用繁多之場所ハ、六ヶ月未滿にても、退役を願ふ事なり、されども、格別に御用にも立ち、且勤功もあるものハ、六ヶ月を越しても御用捨あり、嘉永年中、町奉行なりし遠山左衛門尉ハ、八ヶ月を越したれども、格別之譯を以て、心永にゆる〳〵療養可致との御沙汰にて、やうやく三度目の願を聞とゞけられて、退役被仰付たり、御廣敷御用人なりし守山主計頭も、八ヶ月にて御免あり、尤この兩人ハ、さしも時に名高き御役人の一枚看板とも評せられたる人々なれば、かゝる例に替りし御優待もありしが、主計頭ハ、兩丸御廣敷昇、三御守殿五御住居御取締にて、御持頭次席千五百俵を賜ハる程の時めく威勢ありし人なれば、左もありしにや、○中略

一御目付部屋の通言に、禁仙駿と云ふ事あり、禁裏附仙洞附駿府町奉行を云、同役十人の内ニ而、

羽振のよきハ町奉行御勘定奉行へ直ニ升り、又は下三奉行か、遠國之内ニ而も長崎京大坂町奉行、山田堺奈良之内へ轉じ、又中等にして日光浦賀へ轉ず、或は新番頭、御先手、御留守居番へ轉ずるは、尤下等の御役替なり、禁仙殿もおもしろからぬ轉じ方ゆへに、かくは云ふものか、又同じ遠國なれども、佐渡と新潟へは、御目付より被仰付候事なし、佐渡は多分御納戸頭御勘定吟味役ゟ轉じ、又御先手ゟ轉ずるもあり、新潟は、御廣敷御用人ゟも轉ず、

一下三奉行と云へども、御普請奉行は、左まで御用多にもあらず、威權もうすし、小普請之方奥向の御用あるゆへ、繁劇にて威勢あり、然れども五奉行の列には入らず、又其席は中之間ニ而、御留守居番御勘定吟味役と同席なれども、名目ばかりニ而、芙蓉之間に候する事多し、手附配下の小普請方及び改役など、御取立ニ而出身するもの多し、至て出口のよき場所なり、又この小普請方よりして、多く御廣敷番之頭へのぼり御普請懸りを持つは、建築造營の事に功者なるをもつてなり、又この御廣敷番之頭の御役替に富士天と云ふ事ありて、御目付の禁仙殿と同じき通言あり、

〔仕官格義辨〕珍敷御役替之事

問云、世間ニ而、何之誰者何御役ゟ何御役江被仰付候者、珍敷御役替杯と申事折々有之候、近年にては誰々ニ而候哉、承度候、答云、珍敷御役替と世間ニ而申候も、別ニ先例無之御役替と申ニ而も無之候、只今迄餘り御役替無之場江被仰付、珍敷御役替共申候、昔之儀ハ、御人少故か、只今ニ引合候而者、只今不被仰付候御役替も有之候得共、延寶年中已後にて可申候ハヾ、延寶八申年三月廿五日、大坂御金奉行ゟ、寛五郎大夫、御先手被仰付候、天和三亥年閏五月九日、松平主計頭、御小性組番頭ゟ大御番頭被仰付候、近年にては、享保十巳年九月十一日、御鐵炮御用役井上左大夫、幼少ニ付、看防黒澤木工之助、組與力より屋代要人御供御簞笥奉行被仰付候、同十二未年三月十五日、小

十人之組頭より大久保半五郎（源次郎と改）御廣敷御用人被仰付候、元文六酉年正月廿八日、西丸御納戸頭より松平傳次郎御徒頭被仰付候、右之外にも可有之候得共、先是等之樣成御役替を珍敷共可申候、

〔德川禁令考十九隱居願變制〕文久元辛酉年三月廿八日

布衣以上役人乍勤隱居願不苦旨達

大目付
御目付　江

布衣以上御役人之內、追々老衰および、隱居仕度心底ニ而も、御役御免相願、一旦寄合相成候儀を殘念ニ存、身躰不自由ニ而も、可也立居も相成候分者、取續御奉公相勤居候儀ニも可有之哉、右等之分ハ、向後布衣以上ニ而も、老衰および、御役難相勤ものハ、御役御免相願候ニ不及、乍勤隱居可被仰付候間、右之心得を以可被相願候、尤老衰御褒美隱居料之儀者、都而前々之振合を以被下ニ而可有之候、

右之趣、向々江寄々可被達候、

三月

文久元辛酉年十一月十一日

同上布衣以下役人へ達

前文同上略之

右之通、先達而布衣以上之面々江相達候、然ル處布衣以下御番方幷御目見以下之者共も、布衣以下ニ准じ、別段小普請入等ニ不及、乍勤隱居被仰付ニ而可有之候間、向後右之心得を以可被相願候、

日勤
隔日勤

右之趣、向々江寄々可被達候、

十一月

文久二壬戌年六月十八日

七十歳以上以下共、乍勤隠居願不苦旨達、

布衣以上以下御役人御番衆、并御目見以下之もの共、老衰及び難勤相成ものハ、御役御番等御免相願候ニ不及、乍勤隠居被仰付候ニ而可有之旨、先達而相觸候處、向後七拾歳以下ニ而も、立居等不自由之ものハ、乍勤不時隠居可被仰付候間、右之心得を以可被相願候、就而者布衣以下并御目見以下之面々、右ニ准じ相願候ハヽ、願之通隠居被仰付ニ而可有之候、尤隠居料之儀ハ、是迄之通り可被相心得候、

右之趣、向々江寄々可被相達候、

六月

〔殘集柳營秘鑑五〕毎日登城有之御役人

一老中方　一若年寄方　一御奏者番　一寺社奉行　一高家衆壹人
一御側衆　一御留守居　一大目付　一町奉行　一御勘定奉行
一御作事奉行　一御普請奉行　一小普請奉行　一御目付　一大番頭
一御書院番頭　一御小性組番頭　一小普請組支配　一新番頭　一御旗奉行
一御鎗奉行　一御鐵炮頭百人組　一御持弓頭　一御持筒頭
一御先手御弓頭　一御先手鐵炮頭　一御使番　一御徒頭

右之御役人方者、朝四ツ時より登城有之、退出ハ九ツ半時過也、御用之節ハ居殘候事も有之、泊り番有之面々、七ツ半時過より登城有之

兼職

○按ズルニ、日々登城ノ役人右ノ如クナルヲ見レバ、必シモ日勤ヲ要セザル諸役甚ダ多キヲ知ルベシ、

〔譜代家督留　一朱書〕五月二日、鶴右衛門ゟ、[ ]を以口卽刻承り付御下ゲ承付返上、

御入人勤方之儀ニ付奉伺候書付

書面伺之通可申渡旨被仰渡奉承知候

寅〇天保十三年五月二日　年番

小普請組大島甲斐守〇義彬組

兼松源助〇中略

右者此度御組同心明跡江御入人被仰付候ニ付、勤馴候迄、當分泊り番不為致、勤人數之外、朝五半時より夕七半時迄、明日より三日御番為見習、御番所江差出し、夫より隔日ニ為見習候樣可仕候哉、此段奉伺候、以上、

寅五月　原鶴右衛門

安藤源五左衛門

〔仕官格義辨〕寺社奉行之事

又問云、近年町奉行ゟ大岡越前守、大番頭ゟ山名因幡守被仰付候處、兩人共ニ御奏者番者兼帶不致候由、先規も大御番頭抔ゟ被仰付候乗兼帶にて被勤候處、如何之譯にて可有之候哉、答云、上之儀を下にして難察候得共、是等之儀を相考候處、大岡殿者貳千石御加增にて六千石、山名殿も七千石、何も御足高被仰付、壹萬石之高にて勤被申候、本高大名ニ而無之候故、御奏者番者兼帶被致不申候と被存候、

〔文政十一年武鑑〕大御目付　并奏者番兼帶　御役附　三千石高

父吉左衛門　千七百石
岩瀬伊豫守氏紀
道中御奉行

〔大概順〕布衣以下大概順

出役。

御先手ゟ加役　四十人扶持　火附盜賊改　兩番ゟ出役　同　屋敷改　同斷　進物番

〔明良帶錄 後篇〕進物御番

是は兩御番より出役にて、御式正には御雇諸大夫なり、

屋敷改 御役扶持不同

是も兩御番より出役なれども、殊之外御用多也、屋敷、町屋敷、下屋敷、町並屋敷、抱屋敷、新地築出し、皆掛り也、

〔仕官格義辨〕諸御番ゟ出役之事

問云、御番方より出役之儀者、昔より今も替り候儀無之候哉、答云、諸御番ゟ出役之儀も、段々御人多ニ成候故、昔とは違候事有之候、寛文之頃は、當時之布衣役江、大御番より直ニ被仰付候例共有之候、當時ニ而も、一向布衣役不被仰付候と申ニ而も無之候、御小納戸近年吟味役杯被仰付候、又問云、昔大御番より直ニ布衣役被仰付候段ハ、兼而及承候、新御番御納戸御腰物方より布衣之御役江被仰付候事も有之候哉、答云、表方之布衣御役被仰付候儀不承候、近年御小納戸江者、被仰付候、其内御腰物方より者、寛永年中、小十人頭、其以後御腰物奉行之頭被仰付候例承候、大御番方よりは、寛永正保慶安之頃迄ハ、當時之布衣御役江多被仰付候、寛永二丑年七月五日、大御番より大久保嘉平次、同三寅年三月十一日岡野權右衛門、同五辰年正月十一日神保三郎兵衛、同十八巳年二月廿八日御腰物奉行、當御腰物方より、本目權兵衛、右之面々小十人頭被仰付候、慶安元子年閏正月廿八日、大御番より坂井八郎兵衛、黑川與兵衛、後長崎奉行、丹波守と改、右兩人御目付被仰付候、同三寅年九月

三日、松田六郎左衛門、（後御鎗奉行）青木新五兵衛、（後禁裏附、遠江守ト改、）石川太郎右衛門、小田切喜兵衛、（土佐守と改、）松平助之進、（後御持頭）右五人御目付被仰付候、其已後者大御番組頭ゟ計被仰付候、御番衆より者御目付者不被仰付候、

〔德川禁令考〈二十四吏員採用〉〕寶曆十辰年八月

御勘定所出役御小人目付之事

御勘定奉行江

御勘定所江出役之御小人目付之儀、半年宛ニ而引替候樣、先年申渡候得共、半年代ニ而ハ、人柄差働等不相知、隱密御用難申付ニ付、前日之通附切ニ被致度由被申聞候、依之唯今迄御勘定所相勤候御小人目付は、拾人共此度差戻し、是迄壹度も御勘定所不相勤御小人目付拾人、御目付支配ハ不相離御勘定所江附切ニ差遣可申候、右御小人目付ども勤方之儀は、御勘定奉行手ニ附、御用筋相勤、尤隱密之儀は、御目付江も不申聞、且又被下物等有之節は、御目付江相屆、御禮にも相越候樣仕、末々無忘却相守候樣得と申含候樣、御目付江申渡候間、得其意可被談候、

八月

〔本勤并年寄等書留〈三〉〕〈朱書〉酉（〇嘉永二年）閏四月廿二日、祐右衛門を以上ル、

翌廿三日承附、同人ヲ以返上、

出番年寄御人増相願候儀ニ付取調申上候書付、

書面伺之通、出番可申渡旨被仰渡奉承知候、

酉閏四月廿三日

年番

年寄同心出番之もの、人數當時拾貳人之內、川口萬右衛門者、諸出役御免、石澤又助者本番勤にて、跡拾人之內、三人病氣ニ付、諸役相勤候者七人ならでは無御座候付、兩三人出番年寄當分之內被

仰付被下候樣、一同ゟ申立候付、取調候處、當年番下役三廻者相除、外ト役掛下役之內年寄兩人有之候付、去ル巳年八月伺濟之通、町會所掛下役後藤理左衛門、本所方下役大竹査五郎、掛役兼帶本番勤可被仰渡候哉、左候而も、諸役相勤候者相增候義ニ者無御座候得共、差操相勤可申奉存候、此段奉伺候、以上、

酉閏四月

村井專右衛門

仁杉八右衛門〇中略

酉閏四月廿三日

申渡

後藤理左衛門

大竹査五郎

年寄御人少ニ付、本番勤出番申付候、

閏四月

〔御用留〕外國御用出役之者、部屋住厄介ニ而も被仰付候儀ニ付御書付、

朱書〇文久三年亥七月五日、大目付大澤豐後守ゟ達有之候趣ニ而外國方ゟ借受寫、

水野和泉守殿御渡覺書寫

覺

御作事奉行衆　外國奉行衆　遠國奉行衆　小普請組支配衆

外國御用出役相願候ものは、部屋住厄介ニ而も可被仰付候間、頭支配ニ而相應之もの相撰有次第、早々書出候樣、向々江可被達候事、

〔德川禁令考十八　選舉〕慶應三丁卯年十月十四日

無足部屋住採用ノ儀ニ付達

無足部屋住次三男者、業前場所之外、御役名之場所江出役ハ被仰付間敷旨、先年相達置候趣も有之候處、向後拔群之人物ニ候得者、御役名之場所江も出役被仰付ニ而可有之候、尤當主相成候迄ハ、本役ニハ決而被仰付間敷候間、諸向共、右之心得を以申立候樣可致候、尤人撰方不行屆ニ而、拔群と申程ニも無之もの申立候向も有之候ハヾ、急度御沙汰之品も可有之候、右之通、向々江可被達候、

加番

〔寶永五年武鑑〕大坂御城代略○中　同御加番

中小屋、山里、八月代リ　雁木坂、青屋口、御大名四人、或者三人、　諏訪安藝守、米倉主計、堀大和守、

駿河御城代井御加番

父信濃守　青山信濃守　五千石　與力十騎　同心五十人　木挽町つきじ　　寶永四ヨリ新規御役　松平釆女正定基　四萬石木挽町五丁メ

同御城番井御加番

父遠江守　青木新五兵衞　千七百石　與力十騎　同心五十人　小石川　　従御寄合　五千石　こんだはら　岡部播磨守　　御兩人宛　六千七百石　永田ばゞ　大久保玄蕃

加役

〔青標紙三編〕一御先手之内より壹人出役して火附盜賊改をつとむる事なり、これを俗に加役と云、然れどもこれは唱違ニ而、兩人ある時は、其壹人をさして加役と云ふ事也、松浦忠右衞門、矢部彥五郎などの時、この唱ある事にて、松浦は本職にて矢部は加役なり、此職にて其任に當り、功績ありしハ中山勘ケ由、長谷川平藏、矢部の三人なり、

〔文政十一年武鑑〕大御目付芙蓉井兼御役附　三千石高

父左京　松浦伊勢守忠　千五百石　カン宗門改加役人別改

三代相續

〔青標紙三編〕一三代相續して御役儀を勤むると云ふは、古來より稀なる事なるが、蜷川相摸守は三代相續重き御役儀をつとめたり、近頃平岡石見守二代打つゞきて御用御取次をつとむ、

世職

〔明良帶錄〕世職之篇目錄

高家　表高家　御儒者　典藥頭　奧醫師　御番醫師　寄合醫師　小普請醫師　御廣敷見廻り　小石川養生所　醫學館　澁江長伯　田村元雄　御目見醫師　御鷹組〔○組一本作レ匠〕支配　御鷹匠組頭　御鷹匠衆　御鳥〔○鳥一本作レ鷹〕見組頭　御鳥見　奧御右筆組頭　表御右筆組頭　奧御右筆衆　表御右筆吟味方　御日記方　同分限方　同家督方　同畫詰泊方　御同朋頭　御同朋格奧勤　御同朋衆　龜井坊　御鐵炮方　大筒御鐵炮役　大筒役組頭　御勘定、此場は世職同樣、御代官　御召御馬預　御馬預　御馬方　御馬乘　馬醫　騎射家　帶佩家　大澤主馬　桂川甫見〔○見一本作レ謙〕　柳生但馬守　小野次郎右衞門　北條安房守　寶藏院　御繪師　天文方　天文方改方　同下役　同出役　稻生勘解由　曆正御紏方　小幡健次郎　神道方　歌學方、連歌師　碁將棊之者　吹上御庭番　古筆見　御大工頭　三職御冠師　御烏帽子師　御末廣師御貝役　押御太鼓役　野馬奉行　公人朝夕人　囚獄　諸組與力　御天守番之頭　紅葉山御宮附坊主衆　御同所御靈屋附坊主衆　御太鼓坊主衆　奧坊主組頭　奧坊主衆　御數寄屋坊主組頭　同坊主衆　奧御小道具役坊主衆　御用部屋坊主衆　肝煎坊主衆　御土圭坊主衆御土圭之間坊主衆　表坊主組頭　表坊主衆　同三組肝煎御目付部屋坊主衆　薩摩婆々和泉婆々　樂人衆　幸若音曲　四座猿樂　後藤彫物家　塙撿挍　和書御改方　同調下役和田源七　醫學館留守居役　同御門番　同帳付　同留下役　本草家手附　在勤方　定人同所加役助　織殿方出役　吹上砂糖製法役所　山鳥奉行　御鳥籠方　濱御庭新織殿方　同所御藏新糀摺所　諸國銅山改方出役　澁江長伯手附　本所御藏船番所脇石揚手先世話人植村左兵太　同封之助　網屋權兵衞　植木屋長兵衞　三年寄　守隨彥太郎　道中御傳馬役所　馬口方頭　江戶御傳馬役　石橋彌兵衞　水鳥會所　東國屋　伊勢屋　ましや　安針町居住　岡島會所　こい屋　筑後屋　羽鳥極印改　三御組納屋　玉子會所　御魚會所　青物

役人心得

會所　籾藏會所　西河岸會所　靈岸島會所　葛西權九郎　八ヶ所市場　新朱座　町田春斎

土屋久右衛門

一續世職篇に出す處の名目

三後藤　枡屋　朱座　棚請負　諸人足方　彈左衛門　善七　松右衛門　三芝居　吉原〇以下一

四十一字、據二一本一補、

(徳川禁令考雜令十九)享保四己亥年五月廿七日

政務ノ可二沿革一廉ハ上申ス可キ旨達

一前々より被二仰出一候、御法度之儀ニ而も、不相應と存候儀者、早速可二申上一事、

一諸役所前々より之格を以、勤來候事共之内、不レ可レ然と存候儀者、其旨を達し可二相改一事、

一新規之儀、何ニ而も可レ然と存付候儀、早速可二申上一事、

右少々之儀ニ而も、存寄於レ有レ之ハ、無二遠慮一申出候樣ニ、急度可二相心得一候、以上、

五月

按ニ、教令類纂ニ、享和四年四月廿六日ノ令ヲ載ス、左ニ附記ス、前文ト參照スベシ、

諸向之御役所共都而之取扱、新規之趣ニ相成候儀ハ勿論之事、前々之仕來りハ、聊模樣替之儀迄も、其趣一應被二申聞一候上ニ而、取計可レ被レ申候、譬バ御都合ニ可レ然筋ヲ、先試ニ取計、猶宜候ハヾ、追而其段可レ被二申聞一など申類も間々可レ有レ之哉、右等之類達も、先其段最初に被二申聞一候而、取計有レ之候樣可レ被レ致候事、

(徳川禁令考教旨十八)天明七丁未年七月朔日〇中略

心得之覺

心得之趣沙汰致置申候、唯今之上意難レ有儀ニ御座候、毎々享保年中御規定御作法等、御穿鑿も有レ之被二仰出一候、其上御役人之勤方、下々艱苦之儀迄も、御細やかニ御沙汰有レ之候而、御代々之思召を被レ爲レ繼、浚明院樣之思召之達候樣ニと被二思召一候、誠恐悅奉レ恐入一候儀ニ御座候、以來御役人

ハ、猶更致一和、我意を不相立、御爲之所を以、私之儀ハ打捨、取計事も、下江而已任せ置候事無之樣、必至ニ存込候而、右上意之趣、一日も早く行届き、御安心被爲遊候樣、忠勤を可被相勵候、互ニ身を保ち家を全く致し候も、箇樣成節、御奉公第一相勤候ためニ而候、同席も一同申談、必至ニ心懸申合候ニ付、以來一己ニ打はまり、御奉公向は勿論、家事取締、家中領内之治方迄も厚く心を用ひ、聊榮耀ヶ間敷事無之、御役人は、世上風儀之手本ニも候間、猶更厚く愼み、御爲之儀、主役之事ニは器量一盃ニ心懸可被申候、扨唯今迄、縱少々之不行届心得違之筋有之候共、過去候儀ハ、一向ニ被爲捨候との御沙汰ニ候、今日右上意有之候、以來ハ心掛之善惡ニ付、急度御糺可被仰付候間、兼而左樣ニ可被相心得候、一時之功を而已相計、永代之御爲を不計儀有之間敷儀勿論ニ候、一日も早く御安心被爲遊候樣ニ仕候事、無此上忠勤ニ而候、右忠勤之功を以、立身出世いたし候ハヾ、一己ニ取候而も、無此上事ニ而候得者、何も厚く申合、可被致出精候、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寬政三亥年二月

口上之覺

御役人向、總而表勤之者、御前江被召出、御直尋等有之候處、何事もしか〱不申上樣ニ而、たとへば相替事なき哉と御尋有之候へば、相替儀無之旨のみ申上、平伏いたし罷在候間、おのづから御咄も難被遊候、表向之御尋などゝは違候事故、存より一盃聊つゝます、有躰御答申上、たとへ御役外之事たりとも、心付候事ハ、十分申上御尋有之候儀ニ而も、御咄し同樣ニ申上候樣、幷ニ始終平伏いたし候ニは不及、頭をあげて、隨分氣丈に御咄ども申上べく候、前後をのみかへりみ、樣子よきやうの事のみ申上候儀は、御きらゐに被爲在候旨、御直御沙汰ニ付、御前江可被召出面々江はより〱可被咄置候、

尤御意之品うかゞひ兼候事もいかゞうかゞひかへし、無間違御答可申上候、

二月

〔憲教類典御役二ノ五〕寛政三癸亥年七月三日

松平越中守殿御渡　　桑原伊豫守達貳通

一總而御直ニ御尋之節、申上候筋、或ハ重役頭役江申聞候儀、世上風俗等宜き事のみ申候ハ無詮事ニ而、不行屆儀行違候事等を專心懸、言上之義尤ニ候事、

一重役ゟ申聞候事にても、得心いたしがたき儀ハ、隨分押返し、存念之程可申達候、右者御爲を存候て、不敬之沙汰ニは無之候事、

一御政事向之儀ニ而も心附候儀は、たとひ役外之事たりとも、心底十分ニ可被申出事、〇中略

一近來總而同役ハ勿論、他向江對し候ても、見合を專にし、目立ざる義をのみ宜事ニ心得、たとへ甚恥辱ニあたり候程之事ニ而も、了簡いたし、事たゝざる樣ニ取計候を、物馴候儀と心得、辨口立振廻形容之義ニのみ拘り、自然と實事薄く相成候類も有之哉ニ候間、此趣被相辨實事相立候樣、敎導之義可被心懸事、

一諸御役所向、次第ニ手數多く、手重ニ相成候、以前ゟ人數增候而も、御用繁多成哉ニ候、以來手重ニ不相成樣、何分可被心懸候、書面等も、たとひ文言不行屆書樣等有之候とも、實事ニおゐて不行屆も無之候得ば、可相濟事ニ候、無益之儀ニ念を入候儀無之樣可被心懸候、

一總而度々被仰出候而も、當座之心得同樣ニ相成候ハ、畢竟心之用方不宜故之樣相見、甚如何之事ニ候之條、能々可被心得事、

別紙

一諸役人御役中之諸書物留書等、跡役江相讓候之儀、向後は何々年以來之留メ、跡御役誰江引渡候段、幷誰より何程請取候旨、雙方書付候而、御目付江申達置候之樣可被致候、且又右之通り追

追讓渡、段々嵩高ニ相成候歟、或は年暦久敷留書付、當時手元無之候而も宜敷類は、御多門之内江相納置、見合等之節は、斷次第下ゲ候儀ニ相心得、是又御目付迄書付を以申達、相納置候樣可被致候、

亥七月

右之趣、諸番頭、諸物頭等、井在府有之遠國奉行類、其外も御役所無之銘々、勤中限り持退ニ相成る之場所ニハ、前書之通ニ相成候樣有之度事ニ候間、相達可然向江被申達、向後書付爲差出、御多門納等之儀も、御目付方ニて世話有之樣可被致事、

〔德川禁令考十八數記〕天保十四癸卯年十一月五日

土井大炊頭演達

御政事之儀、御代々之思召者勿論、享保寛政度之御趣意不違、何事も正路ニ御爲第一ニ取計被遊、御安心候樣可相勵旨、一昨年被仰出候、然ル處、右被仰出之趣を、若取違候面々も有之候而者、御趣意と齟齬いたし候ニ付、左ニ申達候、

一諸御役人被申聞候儀ハ、其事之始末、委細之糺も無之被申聞候而ハ、品ニ寄、事實相違致候儀可有之、人善惡邪正之儀ハ、一言半句之違ひより、生涯之浮沈ニ拘り、不容易儀ニ付、其心得を以可被申聞筈之處、實否をも確と不辨、依怙贔屓或ハ妬忌讒諛等之類も有之候へハ、人心危懼を抱き、自然御奉公之勵薄く成行可申候、左候而ハ、御爲を存候者ニ無之、以之外之事ニ候、御役筋之儀ニ而も、自己之過失ニ而も、過去候儀ハ御取用無之候、

一不依何事、見込候筋被申立候ニハ、本末之次第を熟慮いたし可被申聞處、左も無之、外々之了簡、又者世上之風評抔ニ随ひ、唯申立さへ候得者宜と心得候ハ、素より有之間敷事ニ候、

一同役相互ニ信義を盡し、深切ニ可致ハ勿論之儀ニ候、心得違之儀有之候ハヽ、少しも無遠慮何

ヶ度も申談、其上ニ而不取用候ハヽ、其旨可申立段、急度相断候而、可被申聞事ニ候、

一組支配之內、勤向又者自己之事ニ付、如何成儀有之節、一應之異見ニも不及申立られ候筋者有之間敷事ニ候、頭支配御任せ被置候事ニ候得者、頭支配ニ而能々教諭いたし、夫ニ而も不取用候ハヽ可被申聞候、

右等之趣、得と了簡いたし、御趣意を取違無之樣相心得、組支配之もの江も可申聞置候、

嘉永六癸丑年五月十七日

敎旨并老中演達

上意之趣

御政事之儀、御代々之思召者勿論之儀、取分享保寛政之御趣意ニ不違樣思召ニ付、何も厚心得可相勤旨、

老中申渡候覺

寛政之度、御初政之砌、向々心得方之儀ニ付、厚き上意有之候旨、其節達置候者、一統相辨居可申儀ニ候處、年月押移り、場所々々ニ古く相勤候ものも殘少ニ成り候故、自然御趣意取失候が、前々御規定之心付薄く、當座之御用便のみ專務と心得候樣成行候者、如何之儀ニ思召候、自今以後御代代樣被仰出候儀者勿論、分而ハ享保寛政之御政事向ニ相復し候樣との御儀ニ付、縱御沙汰之儀ニ而も、御規定ニ觸候か、或ハ筋合之穩ならざる儀者不差扣申上候樣ニとの御沙汰ニ付、誠ニ難有恐悅之御事ニ候、乍然是迄何も不行屆御安心不被遊候御儀と深く恐入候事ニ候、右之御趣意各奉承知、享保寛政度觸達之書付類熟慮いたし、向々厚く相心得、是迄仕來り候事たりとも、筋合に違候儀者改革致し、何事も正路に御爲第一に取計、被遊御安心候樣、精々可被相勵候事、

附享保寛政之度を始、總而度々被仰出候儀、當座同樣ニ相心得候輩も有之、甚如何之事に候、殊

ニ御役人之儀ハ、表向之手本ニも相成候事故、別而厚相心得新役被仰付候節も、聊不洩樣精々傳達可有之候事、

〔諸役起請文前書〕諸向御役儀之起請文前書

但老中之宅、或ハ於十一月式日評定所、判元見之、老中、若年寄、御側衆、右衛門督殿兵部卿殿殿御守、并奥向衆、御同朋頭ハ、奥向ニ而判元有之、中奥御小性御小番ハ若年寄之宅ニ而判元有之、○中略

誓詞　支配向

一御臺所前廊下御徒目付組頭　二同火之番組頭　三月番宅御貝役
四同押太皷役　五同御徒目付　六同御徒押　七同御挑灯奉行
八同表火之番　九同御臺所番　十同櫻田御用屋敷御門番人組頭共
十一御徒目付組頭宅櫻田御用屋敷御掃除之者　十二御臺所前廊下黒鍬頭　十三同御掃除頭
十四同御中間頭　十五同御小人頭　十六同御駕籠頭
十七月番宅御目付支配無役世話役　十八同濱吟味役　十九同御小人目付
二十同御駕籠之者
他向何れも御臺所前廊下
二一小普請方改役勤方　二二御作事奉行勤方　二三進物取次番之頭
二四御廣敷添番　二五御廣敷添番並　二六種姫君樣御附添番格御侍
二七御普請方　二八大筒下役組頭　二九進物取次上番
三十御數寄屋組頭　三一表坊主組頭　三二西丸表坊主組頭

〔諸役起請文前書〕罰文

梵天帝釋、四大天王、總日本六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天

滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰、各可罷蒙者也、仍起請如件、

〔御當家令條三十四〕公事裁許役人起請文前書

一奉對兩御所樣、御後聞き心事毛頭不可存事、
一雖爲親子兄弟、兩御所樣御爲惡敷儀仕族幷背御法度輩於有之者、無憚有樣ニ可申上候事、
一今度大久保相模守蒙御勘氣上は、以來相模守父子と不通可仕事、
一公事批判御定之儀、知音好之儀者不及申、雖爲親子兄弟無依怙贔屓有樣可申付事、
一於評定所批判相談之時、互ニ心底ニ存寄之通、不依善惡、毛頭も不相殘可申出事、
一於御前被仰付候儀、就善惡無御意間者、他言致すべからず、幷餘人江被仰付候儀承候といふ共、當人就不申出者、他言仕間敷事、
一知音だてを仕申合一味仕候者、入精承り、言上可仕事、
一背上意候者、知音好身たりといふ共、入魂仕間敷事、
一此衆中、或は背御法度、或は贔屓偏頗いたし、就諸事惡事有之由立御聞候者、御穿鑿之上何樣ニも可被仰付事、

右條々於相背者

慶長十九年寅二月十四日

酒井雅樂頭〇忠世　酒井備後守〇忠利　土井大炊頭〇利勝　安藤對馬守〇重信
水野監物〇忠元　井上主計頭〇正就　米津勘兵衞　島田兵四郎各血判

〔泰平年表大御所〕天明六年、是年諸御役人誓詞を奉る、小十人頭舊記に、天明六年九月廿一日、御目付池田修理、柴田七左衞門へ相渡候書付、此度御代替に付、誓詞の義、先年の振合にて御支配方へ被差出候心得にて書付、近日の内拙者どもへ御差出可有之候、尤組頭中へも、同樣心得有之候、已上、同廿四日、誓詞願書、此度御代替に付、私どもも誓詞の義奉願候、已上、小十人頭六人、西丸方三人、別紙組頭願書、同十二月二日御目付達書、御代替に付、來ル六日姓名、今明日中御申聞可有之候、罰文一紙紙に致し、居列共相揃、御持參可有之候、宛

所は掃部頭殿、御老中方御座順之通御認、大目付姓名の義は、御宅において御間合、御書可有之候、則誓紙前書案文差進候、尤日限刻限御宅等之義、尚又御達可申候已上、同六日、鳥居丹波守殿御宅へ、六半時罷越、誓詞相濟、尤御禮御老中若年寄衆不殘、組頭は翌年二月十日相濟、

〔和學所御用留十四〕一三月〇安政六年十日、誓詞之儀ニ付八洲ゟ御達、

林大學頭

塙次郎殿〇小十人格、和學講談所附、

其方儀、明十一日於評定所誓詞致候樣、長門守殿御書付を以御達有之候、則御達書寫、御渡之誓詞案文共相達候、落手可被致候、尤案文ハ明朝於評定所我等江返却可被致候、此段申達候、以上、

三月十日

猶以、明朝七時自分紋服、紗小袖麻上下著用、評定所江參著可被致候、我等爲差添罷出候、且誓詞濟、御出席之御老中、月番之若年寄衆江、爲御禮可被相越候、已上

長門守殿御達御書付寫

林大學頭江

小十人格

塙次郎

右明十一日之朝、評定所江罷出、誓詞仕候樣可被申渡候、誓詞前書之案相渡候間、此通調之、尤罰文も繼、宛所ハ於評定所承合調候樣可被致候、

三月十日

案文

起請文前書

一今度被召出小十人格被仰出候ニ付而ハ、彌重公儀、御爲第一奉存知、聊以御後闇儀仕間敷事、

一諸傍輩ハ不及申、御一門方諸大名と、對御爲以惡心一味仕間敷事、

一和學筋御用之品井御書物等、他見他言一切仕間敷事、

一和學所出役之者之儀、常々心を附、親子兄弟知音之好たりといふ共、無贔員偏頗、且又存寄之

儀於有之ハ、不殘心底林大學頭江可申出事、

一跡々被仰出候御法度之趣堅相守、自今以後被仰出候御條目等、是亦違背仕間敷事、

一以御威光私之奢仕間敷事、

右條々、雖爲一事於致違犯者、　罰文

〔德川禁令考十八誓詞〕文久二壬戌年閏八月十四日

誓詞日、其外改正ノ儀ニ付達、　三奉行江

評定所式日、老中出席、諸役人誓詞被仰付候處、向後ハ、評定所において誓詞之儀者被差止、毎月四日、非番之老中壹人、正四ツ時登城、於柳之間誓詞被仰付候間大目付、御目付、出席可被致候、三奉行不及出座、

但御目見以下誓詞之儀も、柳之間椽頰において被仰付、誓詞見屆者、是迄之通可被相心得候、

一新部屋において誓詞被仰付、井老中若年寄宅において誓詞之儀者、唯今迄之通ニ有之候、

右之通相達候間、可被得其意候、

文久二壬戌年閏八月十七日

誓詞案文ノ儀ニ付達

若年寄支配之面々、評定所井若年寄宅ニ於て、誓詞被仰付候向も、唯今迄誓詞前書案相渡候處、以來ハ不相渡候間、表御祐筆所江案文突合之上、其場所々々、先格之通認持參致候樣、若年寄支配之面々江可被達候事、

〔政談四〕當時誓詞ト云コト盛ニテ、御作法ノ樣ニ成、役替ノ度々ニ誓詞ヲシ、駕籠ノ誓詞又ハ病氣ノ斷ニ誓文狀ヲ出スコト不宜コト也、○中略誓詞ハ一旦ノコトニ限ルベシ、其上度々誓詞ヲスレ

バ、馴コニ成テ神明ヲ畏ル丶心薄ク成故、却テ僞ヲ致ル媒ト成也、○中略當時ノ誓詞ハ、御作法ノ樣ニ成ヲ詮ナキコトナレバ、一向ニ停止アリテ、只大名ノ國元ナドヘ御目付ニ行コト抔、其外ニモ其時ニ取テ、當座切ノ御用ニ計リ、大切ナルコトニ、誓詞ヲ被仰付可然也、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年閏八月十八日、評定所ノ誓詞ヲ廢シテ、今ヨリ柳營ニ於テス、

和泉守殿御渡　向後評定所誓詞の儀差止、毎月四日、非番の老中一人、正四ツ時登城、柳之間に於て誓詞仰付られ候間、大目付出席致すべし、三奉行ハ出席に不及候、但し御目見以下誓詞の儀も、柳之間緣頰に於て被仰付、誓詞見屆の儀ハ、只今迄の通り可相心得候、

〔組中御引渡之節誓詞被仰付候一件〕組中御引渡之式

一組中御引渡之朝、五時登城可致處、御役之誓詞被仰付候ニ付、相濟直ニ登城、服紗袷麻上下着用、詰御番も月番爲肝煎被致登城候、○中略

一部屋江罷出候者、詰番之家來相賴、罷出候段組頭衆部屋江申遣候、組頭衆無程被參、組中揃書被差出候間取置、

但御目付衆江、御引渡ニ付、罷出候段、口上ニ而申達、御番衆揃之書付ハ、組頭ゟ直ニ御目付江相達ス、

一御老中方若年寄衆登城、詰番ニ而附人いたし置、留り候得バ爲知候間、詰御番ゝ自分同道ニ而、焚火之間江罷出、御月番御支配方登城之節、御廊下御通被成候間、進ミ出中腰ニ成、御引渡ニ付罷出候段自分申達、其次ニ豐後守殿被出、御引渡御番衆相揃候段申達、躑躅之間江引取申候、

〔玉露叢十四〕慶安四年六月十日ニ、評定所ニ於テ、老中四人、奏者番衆、大目付衆、大御番衆、御書院番頭、御小性組番頭、御目付、兩町奉行等ニ誓紙ヲ仰セ付ラル、十二日ニ、評定所ニ於テ、詰衆、書院番、花畑ノ組頭、新番ノ番頭、小十人ノ番頭、御歩行頭衆、百人組ノ頭、御弓矢御鐵炮持筒數多總物

戒飭

頭衆、誓詞ヲ仰セ付ラル、誓詞ノ趣ハ、當上樣〇家光御幼少ニ御座ナサレ候トテモ、公儀ヲカロシメ間敷事、次ニ御一致方ハ申スニ及バズ、諸大名へ出入致シ、公儀ニ對シタル申合セ仕ル間敷候、以來御法度ノ御條目、壁書等、急度相守リ申スベキ由、此外ハ前法ノ文言也、

〔武家厳制錄〕二 一同御代〇徳川秀忠 雜事御條目

條々

一物頭諸奉行人、依怙於有之ハ、急度曲事可被仰付事、

一諸奉行人并代官以下、買置あきないいたすにおゐては、可為曲事事、

一諸役人、其役之品々、常ニ可致吟味、油斷在之者、可為曲事事、

右條々、可相守此旨者也、

寛永九年九月廿九日

〔徳川禁令考〕十九 振舞遊興之禁 元祿八乙亥年九月 闕日

公事念入講釋聽聞并振舞等之儀ニ付演達

一公事訴訟念を入可申候、入組候公事訴訟は、たとへ一ツを一日に承切不申候共、得と念を入、理非明らかに裁許有之樣ニ可仕候、尤御役儀之事油斷仕間敷候、御講釋拜聞被仰付候儀、面々學問心掛、自分之行跡相嗜、御仕置之爲と被思召候、奉行中萬端心を付、思召ニ叶候樣、諸事念入、正路ニ可申付事、

一奉行中振舞ニ参、又者手前江振舞之儀、或は婚姻、或は無據子細有之候はゞ格別、左ニ無之候而者、振舞之儀、向後堅く無用ニ可仕候、ケ樣ニ被仰出候儀、御奉公專一ニ心掛、相勤候樣ニと被思召候事、

寺社奉行、御留守居、御目付、町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行、御目付荻原彦次郞、諸星傳左衞門、

右之面々江以書付申渡之、

一右書付之趣、諸役人中、遠國奉行中、御役儀念入、無油斷相勤、幷振舞等之儀可相達旨、大目付御目付江山城守申渡之、

〔寶暦集成綵綸錄十六〕寛延二巳年八月

大御番頭
詰番之外四五人罷出

御番方之面々幷辨當之儀、前々被仰出も有之候處、近來別而手重に相成出會等之節も諸事過分之物入等も有之、在番先におゐても、右之通ニ候由、粗相聞へ候、分限不相應之物入等有之候而者、御奉公障候品も可有之哉、左候而者如何に候、以來右躰之儀無之樣急度可被申聞候、

〔德川禁令考十九振舞遊興之禁〕天明七丁未年三月七日

同上達

諸向勤方申合等之儀ニ付、從前々度々相達候趣、重き御役人者勿論、末々之御役人迄無忘却、勤方嚴重ニ心懸、組支配有之面々は、別而其身を相愼、組支配勤向を相糺勵し候儀、專要ニ候處、向ニ寄申合等不宜、參會等之節、御役柄ニ不似合遊興音曲等を相催、酒宴ニ長じ、禮儀ニも不拘、行儀不宜輩も有之趣相聞候、末々迄も、右躰猥かはしき出會等は決而有之間敷事ニ候、古役之者申聞候儀者如何と存候事ニ而も、挨拶柄ニ拘り、無據相用候儀も可有之候得共、古役之者は、猶更相愼、御奉公幷申合等入念、宜勤方を新役之者江爲見習候儀、精々心を用ひ相勤可申候、右之段御沙汰も有之候ニ付相達候條、以來堅く相守、心得違無之樣可致候、

右之趣、向々江可被達候、

〔文恭院殿御實紀附錄一〕天明いつばかりのことなりしか、黒木書院へ出御〇家齊せさせたまひ、布衣以上一役より一人づゝ召出され、有德院殿の御代仰出されたる法令舊記等、能々研窮し、精入

つとむべきむね、御みづから仰含られ、宰臣松平越中守定信より、上意の趣委しく書記して敎示ありき、其文にいはく、唯今の上意有難き事にて、每々享保中御規定御作法等御穿鑿も仰出され、其上御役人の勤勞下々難苦の儀までも、こまやかに御沙汰も有て、御代々の思召を繼せられ、浚明院殿〇家治の思召の達するやうにと思召され、誠に恐悅恐入奉ることにて、以來御役人猶更一和いたし、我意相立ず、御爲を存じ、私の義は打捨、取計事も下々へのみ任せ置事なき樣に、必至に存込て、右上意の旨、一日も早く行屆、御安心遊さるゝ樣忠勤を相勵、互に身を保ち、家を全く致すも、加樣なる節、御奉公第一に相勤る爲にて、同席一同申談、必至に心掛申合せ、以來一己に打はまり、御奉公は勿論、家事取締、家中領內の治方も、厚く心を用ひ、いさゝかも榮耀奢がましきことなく、御役人は世上の風儀の手本なれば、猶更厚く愼み、御爲の儀、主役の事には、器量一はいに心懸申され、扨只今迄たとひ少々不行屆儀心得違の筋ありとも、過去候儀は一向に捨させらるゝとの御沙汰ゆゑ、今日右上意ありてより以來は、心懸の善惡に付、急度御糺仰付らるべき間、兼て左樣に心懸られ、一時の功をのみ相はからひ、永代の御爲を計ざる儀ある間敷事勿論にて、一日も早く御安心遊さるゝ樣仕る事、此上なき忠勤なれば、右忠勤の功を以、立身出世致す者は、一己に取てもこの上なき事にて、何も厚く申合、出精致さるべしとぞ、かくのごとく御德意を推廣め奉り、老臣より猶こまやかに群臣へ敎諭ありし事、誠に君臣和合せる、千載一時とも申べし、〔新見正路記〕

〔御頭幷家來筋御役所江附候取計書〕一御頭足輕中間等、本所深川邊、端々料理茶屋等江罷越、世話人より金錢貰受候者も有之哉ニ入御聽候、今般嚴重ニ御取締御沙汰候由、然處御役所公事人腰掛茶屋共儀も、右向より盆暮抔仕向受候哉ニも相聞、此節御改革之折柄、右樣之儀有之候而ハ以之外ニ付、右御締方者年番方ニ而厚相心得取計候樣、高林右大夫を以被仰渡候、

丑〇天保十二年十二月廿三日

朱書
右之趣を以、茶屋六人、下番貳人江も申渡ス、

茶屋彥兵衛　庄兵衛　七助　次郎兵衛　喜兵衛　太兵衛　下番伊助　藤助

〔嘉永明治年間錄 四〕安政二年十月廿一日、諸官吏羈旅ノ行裝ヲ省略スルノ達、

遠國奉行且遠國御用等被仰付候面々、旅裝束の儀、以來伊達道具持せ候に不及候、旗並竿幕矢箱等行列に不差加、荷造に致し持せ越可申候、持弓の儀は、勝手次第持せ可申候、鐵砲筒數の儀ハ、是迄の振合に不拘持越不苦候間可相伺候、雨天の節相用候長柄傘の外、臺笠立傘等持せ候儀相止可申候、挾箱簑箱の儀も持せ不申候ても不苦候、萬石以下の面々、家來共長棒駕籠並徒召連候儀可為無用候、但し具足箱持せ候は、一人持に可致候、萬石以上の面々も、右之趣に相心得、參勤交代等の節、供連行裝省略いたし候儀可為勝手次第、家來共旅裝の儀も右に准じ、夫々可致省略候、右之趣萬石以上以下の面々へ可被相達候、

右の外、諸御門番省略、或ハ殿中著服省略等の達書あれど、爰に略す、

〔德川禁令考 十九 雜令〕正德二壬辰年七月四日、

町人職人ノ贈貽ヲ受、及他向ヨリ依賴ノ職人ヲ使用スル儀不相成旨達、

一前々より、諸職人町人等江御用申付候諸役所頭之面々江被仰付候誓詞之趣、總而御用相勤候職人町人等よりの音物、縱令前々受用之物と言共、新規ニ相改、諸事嚴密ニ仕、一切受用すべからず、支配之者共者不及申、妻子召仕之者ニ至迄、堅申付、誓詞仕らすべき旨被載之候、然ル處ニ、支配之輩等、職人町人より音物受用之儀于今不相止候旨相聞候、若自今以後如斯之儀相聞るに於ては、急度御穿鑿之上、其沙汰可有之事、

一諸役所御用承候職人町人等、平生之御用幷臨時之御用ニ付而、諸方より賴之者有之、御用可相勤ものを差置、賴之者江申付候儀有之由相聞候、自今賴之者ハ一切ニ不可許容、若無據子細有

之候はゞ、其御用掛又者支配頭相伺可受差圖事、

右之趣、可被得其意候、

同上ニ付三奉行江達

前々より、諸職人町人等江御用申付候、諸役所頭之面々江、被仰付候誓詞之趣、總而御用相勤候職人町人等より之音物、たとへ前々受用之ものと言共、新規ニ相改、諸事嚴密ニ仕、一切受用すべからず、支配之もの共は不及申、妻子召仕之ものに至迄、堅申付誓詞仕らすべき旨被載之候、然ル處ニ、支配之輩等、職人町人より音物受用之儀、至于今不相止由相聞候、若自今以後、如斯之儀相聞候はゞ、急度御穿鑿之上、其沙汰有之由、猶又此度被仰出候、兼而御用承候職人町人等、此旨存ずまじき樣も無之處ニ、音物等相贈候事、不届之至ニ候、若此以後、音物等を不相贈候ニ付而、御用相違候ために、障候樣子も於有之者、早速町奉行迄可訴出候、若又此等之旨を相背、或は事にふれ、或は品をかへ候而、ひそかに物を贈り候輩有之候はゞ、其贈物之輕重多少ニよらず、縱年月を經候後ニ相聞候とも、急度罪科ニ處せらるべきもの也、

大岡出雲守〇御側御用人、中略、

〔敎令類纂二集六十七〕寶暦六丙子年五月

御禮事、其外老中若年寄へ一統贈物有之候節、老中若年寄江贈物之中分ニ可相贈候、難相分品ハ、若年寄之通可相贈候、其ハ自分々々之取扱ひ次第たるべく候、

右之趣、向々江可被相達置候、

〔德川禁令考十六大目付〕天明七丁未年三月閏日

諸藩程式贈物ノ儀ニ付達

大目付江

近來諸家之面々より、御側衆勤、表向御役人中江、參勤其外御禮事等、又ハ年中定式差定り候贈物等、仕來員數より省略致し、又ハ品柄甚粗末成も有之、或は一向贈物ニ不及向も有之由相聞候、右は一己之音信贈物等とは違ひ、上江附候勤品之儀ニ候得バ、左樣ニハ有之間敷儀ニ候處、取扱候家來共之心得違にて、右之通にも有之哉、向後は前々より仕來之通贈物有之、粗略之儀無之樣可被達候、

三月

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年六月十日、諸贈物ヲ止ム、

脇坂中務大輔殿渡之　諸向より寒暑音物の儀、御門主御三家御兩卿の外、獻上殘に無之分ハ堅く相斷、一切受納致間敷候、右之通り一同申合候間、爲心得向々へ無急度可被達置候事、

〔內安錄〕一遠國の奉行出立前には、御座間御人拂御用召出しありて、ナゼ歸府後には召出し御用無之歟、出立前よりも歸府後に召出しあらば、土地の樣子も御わかり、其時の模樣も御承知あり、又奉行の存寄も見込も可申上に、

〔幕朝故事談〕押込隱居、池田左門、後藤庄三郎の類は、七年の內は、諸願、頭にて取上げ不申候、是は思召不知故なり、七年過候て被思召出、年限も相立候に付、御免被成候と有之候得ば、其後願書取次なり、若七年過て御沙汰無之候得ば、終身御免なし、願もならず、

御對客、御番士の類は、頭へ願、頭より御老中方へ申上候て、差圖の上でなければ、對客に出る事ならぬ也、

三季獻上に付、御內書被下候は、陪臣にては吉川左京計り也、御三家の附人といへども無之也、

〔有德院殿御實紀附錄八〕松浦河內守信正、はじめ與四郎とて番士なりしが、さえかしこく、しかも人を率るの量ありければ、いつしか御目にとまり、徒の頭にぬきんでられ、いくほどなく目付に

なされ、大坂の町奉行にす、むのち任所にありしほど、訴を聞さま、人に超たる事多かりし、〇下略

〔有徳院殿御實紀附錄八〕名家の子孫を與して、士風をはげまし、風俗をあつくせられんとの御旨にや、舊家の苗裔をあげさせ玉ふもの多かりし、加藤虎松明策は、左馬助嘉明より出、福島助六郎正武は、左衞門大夫正則が裔、平岩七之助親賢は主計頭親吉が後胤なり、これ等の輩つぎつぎ登庸を蒙れり、水野大内藏忠毅も、もとは萬石の列なりしかば、大番頭にのぼせられ、其子總兵衞忠友をも、大納言殿浚明院御事の御かたにぞ附られける、

〔天保集成絲綸錄七十四〕寬政二戌年十二月

月並其外出仕之節、布衣以上以下御役人、病氣差合等ニ而、登城不致候節は、大目付御目付江相屆可申旨、元祿八亥年、御書付を以被仰渡候處、近頃不相屆向も有之候間、以來病氣差合等に而、登城無之節は、御同役を以、拙者共江御屆可有之候、依之申達候、以上、

十二月十四日　桑原伊豫守

〔政談三〕道奉行、新地奉行、廻役ナド云役モ、無用ノ役也、是ハ其起リ、御役被仰付器量モナキ人ニ、何ゾ役儀ラシキコトヲ申付タシト思フ人有ヨリ老中ノ拵タルコト也、廻役モ、年久敷番衆ノ、我下ヨリヒタモノ立身スレバ、其人述懷シ、若キ新役ト同ク御番ヲスルコトヲ無念ニ思フヲ、シバラク引ノケテ御番ヲサセヌヤウニシタル者也、人ノスタラヌヤウニト了簡シテ、老中ノカヤウノコトヲ拵ヘタルハ、其時代ニハヨキ了簡トモ云ベケレドモ、畢竟無用ノ事也、カヤウニ無用ノ役有ヨリ、御先手ナドモ、其身モ世間ヨリモ隱居役ト覺テ、役儀ノ勤ナクナル也、輕キ御役人ノ内ニカヤウノ役猶多カルベシ、新地奉行等モ、同ク詮モナキ役也、代官寺社奉行ニテスムベキコト也、如此マタガリテ色々ノ役有ユヘ、手代ノ金ヲ取コトニ成也、

〔新政談〕諸役所を減じ候事

凡そ役所數多ければ入用多き譯にて、如何なる役所にても、役所と相成候得ば、炭も入り、油も入り、紙も筆も入り、人も入り、小遣も入り、疊も道具も入る故、取締をするには、役所を減ずるが第一の要務たり、然れ共一寸見受候ては、役所は決て省き方無之様に見ゆれ共、諸事簡易にして、本氣にて上の御爲を存込働きものを御使被成候ては、勤向に功者なるものをして、工夫致させ候はば、此役所は彼役所へ幷せ爲引請、此役所は欠ても無差支と申すこと可有之なれ共、私共不案内に候間、爰とさして申儀相成兼候得共、一藩一家中數少き上にてさへ、臺所頭を止め、賄にて兼帶するの、奥用人を止めて、奥用達にて勤さするのと申様なる儀、隨分都合出來するものなり、ましてや天下數多き御役所なれば、省くべき處のなきことあるまじ、譬ば御普請方あれば小普請方幷せ、御普請方定小屋あれば、外方にて御普請あれば迚假小屋を建るに不及、定小屋を廣くし、其内にて切組み、持運て建るといたしても事濟ば、假小屋にも不及、野扶持にも不及と申様なる、其外輕き御臺所人坊主衆等の多き中には、いくらもあるべし、御鷹部屋の類も、古は色々御趣意ありて、下情を試み、非常に備給ふの類、又は御鷹の雁雲雀等大名迄被下候て、御懇意あらせられ候御趣意等もある様に相伺候得共、是も當時は形計に相成居、其實は御規式計に、何の御益にも不相立こと故、下情を試給ふには、好く目を明き、廉耻を辨へ、國家を大切に職分を盡す役人を御撰び、非常に備らるゝとも、何の御鷹匠計類になる譯も無之、○中略

役所人別減じ候事

役所人別多きは、むだなる費のある根本なり、故に人別を減ずるは、倹約の第一なり、去かし人と道具は有次第にて明はなきもの故、減じて間に合兼るかと存ずるなれども、左にはあらず、譬ば我々式の家にて、纔に拾人前の吸物膳を平常出して遣ふ處を、五人前にいたし候ても、どうかこうか間に合行ごとく、少人數なればとて、前々にも申ごとく、人々廉耻の風を勵み、忠精を盡す氣

に成て働く時は、決して御間欠はなきことなり、只武備警衛の場所、或は御政務筋へ掛り候分は減少なり兼る故、其外は其役所にて巧者にて精勤を身に入るゝものを撰び、工夫をさせるは減方いくらもあるべし、手の書ぬ御祐筆、算盤の出來ぬ御勘定人、料理の出來ぬ御料理方等、いくらもあるべし、間に合ごとにあらず、夫より其職に達し、役に立つものを撰び、少人數にして精勤次第御心附あり御遣ひ被成候はゞ、却て大勢にて突掛持にするより、間に合べきなり、夫を御慈悲などゝ心得て、むだ人を多く差置は、役所を以て御救小屋とするなり、御救小屋は窮民を入るゝ所にて、士を入るゝ所にあらず、夫を難有儀と心得ては、廉耻を忘るゝと申べし、又御賄手方、御普請方、御賄方等に掛り候ものは、是迄上の物を盗み、是を役德と號し、公然として耻る心もなく、小給者のことゝ、左樣に無之てハ、暮方不行立抔と自許して、餘計掠むるを働のなると心得、廉耻の風儀を失ひ候て、風俗を敗るの第一にて、又御儉約の立ぬ根元なり、されば此風を嚴敷戒め、少しにても後ろ暗きことゝいたし候ものは、忽ち罰を下し、懲しめ給ふべし、乍然古は十五俵貳拾俵にて諸色も安く、世の中も質素故、かなり暮方も附しなれども、當時諸色高直にて、世間の風儀奢に移り中々暮方取續兼候間、中には無據左樣のこと耻かしながらも共々にいたし候樣成候間、是迄の人數より三分一位に減じ、少人數にて精勤さする所えは養廉米として、半高づゝも別段被下、少しの不調法は、此養廉米を半年分とか一年分とか減じ罰する樣にせば、自ら盗をする風止みて、廉耻の風興り、御儉約も立べし、此養廉米を被下候人數三分一にて相濟候はゞ、倘半分の御益あり、此御人數を御減少に相成候もの、幷御玄關番中の口番御仲間、御小性人、御臺所人、御賄方、小間遣、六尺、坊主の類、多人數の所、いづれも三分の二を減じ、此人數を以てケベル組とし、御先手組、百人組、御留主居、同心、火消同心、其の外箇樣の類組合せて二三千人も拵へ、七八十俵、百俵、貳百俵位の所より出たるものと、諸組與力を組合て、騎馬隊とし、平日に調練して、常は所々の番人等に

遣ひ候はゞ然るべし、(高に不同なるは、先其儘持高にて爲ㇾ勤、役に追々揃ふ樣にする手段あるなり、)御旗本高取をケベル組として調練させるは、事躰を失ひ、實用の役に立ぬは、下の武學の條に申べし、諸役所人少なれば、御入用も減じ、人少なれば事簡易ならざれば(〇此間恐有㆓誤脱㆒)物もかゝらず、〇下略

〔新政談〕手明御旗本衆十里四方へ住宅の事

相見申候趣、左の通に御座候、

是も江戸人別を減ずるの一策に御座候、古人も既に心附て、室新助言上仕候こと獻可錄の內に

漢土の中を考候處に、勿論繁昌のことに御座候得共、群臣の住宅不ㇾ殘城下にあるにても無ㇾ之、帝城を取廻し、或は二三里或は五六里、山野隔候て、方々へ分散いたし住居仕候得共、妻子童僕等は不ㇾ及ㇾ申、其外商賈抔も夫に附てすきはひあり候故、都へ諸國より集り候ものも、五里七里の外へはぶき申候道理に御座候、只今江戸の繁昌、日本にては古今に無ㇾ之ことに候、然る處、御城下一同に入込罷在候故、是ほど廣大なる武藏野に候得共、尺地も殘り不ㇾ申、人家と罷成候、夫夫遊民惡黨共其間に紛れ居候故、中々仕置も難ㇾ仕、科人絕不ㇾ申候、是に依て奉ㇾ存候得ば、寄合組小普請其外無役のもの共、江戸廻り五里三里外又は王子、葛西、戸塚、板橋邊にて、百人二百人程づゝ住居候樣に罷成候はゞ、末々商人の類も、夫ニ付集り可ㇾ申候間、御城下自然と人少に罷成可ㇾ申候、第一諸國勝手の爲にも宜敷、江戸風俗も改り、又は火事の沙汰も靜り可ㇾ申候、

右新助申上候儀、至極便利の儀に御座候、乍ㇾ併是は右組々下組頭支配夫々確と御立被ㇾ成候はねば、風俗狠に相成、且右樣遠方へ組分に相成候へば、其中より人材を見出し、御拔擢被ㇾ成候仕方無ㇾ之ては、人に捨物にせられ候樣に御座候て、人心自から引立不ㇾ申、役に立ぬ人物多く相成可ㇾ申候間、右の通り組分に相成候上は、文學武藝所は組々に建立し、其頭支配精を入て人材を仕立候を職分と仕候て、其內より撰擧の法を以て取上候樣に仕、(此撰擧の法、人材取立の箇條に委しく可㆓申上㆒候、)多く御役に立候

様のもの撰擧候得ば、頭支配の勤功に相成、二年も三年も其組下より一人も人材出不申候はゞ、其頭支配の不勤に相成、下席へ轉じ候樣被遊候はゞ、取立方相勵、其下も器量次第にて立身御役附に可相成と心掛候て、人心自から引立、風俗も宜敷可相成候、甲府駿府御番士幷甲府住宅小普請の面々も、右の格を以、御撰擧有之候はゞ、是又一同相勵、人材も出可申候、京大坂へ是迄年々勤番被仰付候御番士も、甲府に准じ、彼地在住に被仰付、年々勤番相止候はゞ、御用途も多分の御省略可相成、是も撰擧の法同樣、御番頭幷諸司代御城代にて取立候はゞ、只今より人數多被仰付候ても、御足高も被下不及、御入用にも不相響、兩所御警衛筋も相屆、兩全と奉存候、一躰は右の外浦賀、下田、箱館等御警衛の場所は、皆土着に仰被付、其近所にて知行所被成下、輕きものは自分にて耕し、且守り候ものは、多分の御物入も省可申候、

〔甲子夜話三十五〕世習ハイカニモ早ク轉變スル者ナリ、予〈○松浦靜〉江都ニ一年在勤ノ命蒙シ頃ハ、寛政ノ光被ニテ、諸有司ハ言ニ及バズ、外様ノ大名マデモ、各々志ヲ立ケリ、予モソノ頃青雲ノ思アリテ、唯大城ノミ慕ハシク有ケルユエ、纔一月三日ノ登營ナレバ、御禮畢リテモ、遲々トシテ下殿セリ、又其頭ニハ、帝鑑衆モ各申合ハセシト覺シク、ソノ頭取ト見エシハ、今ノ閣老水野羽州〈是ハ先羽州閣老再勤ノトキニテ、部屋住ニテ、和州ト稱シ、帝鑑木席ニ居タリ、〉今隱居ノ本多三樂〈是モ閣老彈正大弼ノ嫡子ニテ、其頃ハ河内守ト稱シテ、帝鑑木席ユエ和州ト同ジ、〉今ノ戸田采女正氏庸〈是モ父采女正閣老ノトキニテ、伊賀守ト稱シテ、嫡子ニテ本席ニキタリ、〉等ニテ、其餘老少モアリシガ、人心ノ一ナラザレバ、浮薄ノ輩ハ早ク退出セント爲ルヲ、此三人引纒テ、御玄關ノ上、虎間ノ前ニ集リ居ル、外様衆ノ退出畢ラザレバ、御殿ヲ出ズ、柳班ノ人々モ、是モ同ジク浮薄、勘辨モナケレバ、我先キニト出去リ、間ニハ走リ行モ有シニ、予ハトカク遲々トシテ、人後ヨリ出タレバ、羽州三樂ナド、イツモ咲戲云フニハ、何ニシテ足遲キヤ、皆人ハ出タルニト云ナド爲シヲ、予モ咲テ、足痛ニテ進得ズト答ヘ、或ハ退食自公、委蛇々々ナド戲レバ、趨進ムガ禮ナリ、學者ニシテ不禮ナリナド戲レ答メタ

ルガ、予猶行クコト早カラザレバ、後ハ手ヲ執テ牽出シ、又ハ後ヨリ押出シ抔シテ、予ハイツモ柳班ノ殿タレバ、予ガ退出ヲ見テハ、溜リキシ帝鑑衆モ殘ラズ退出セリ、其實ハ知ラネドモ、定メテ御譜代衆ハ、外班御固メノ意ナリシナラン、近頃フト肥州ニ此事云出シタレバ、肥州云ニハ、今ハソノ如キ者ハ自他共ニ有ラズ、戸田氏庸一人ハトカク寛々ト退出シテ、イツモ柳班衆ヨリ一人アトニ殘ル躰ユヱ、肥州云ニハ、君ハ何ニシテ退出オソク爲ラル丶ヤト問ヘバ、其ハ小氣者、人込ノ中ハ眩暈ナリ、夫故先ニハ出得ズトテ、トカク柳班衆ノ退濟テ退出ス、其心根ヲ察スルニ、以前ノ形ヲ思居ルカト覺ユト語レリ、予聞テ落涙シ、流石其頃ノ閣老ノ子トテ、能ゾ御譜代ノ作法ヲ守ルヤト嗟歎シケル、

古事類苑

官位部五十三

德川氏職員二

大老 後見 補佐 政事總裁 政事輔翼 溜詰 溜詰格 [併入]

大老ハ德川幕府ノ官人ノ長ニシテ、一人ヲ以テ定員トス、德川氏ガ參河ニ在リシ時ハ之ヲ家老ト稱シ、大久保、石川、酒井等諸家ノ世襲ナリシガ、後本多、榊原、及ビ井伊氏ヲ加ヘ、常ニ年寄奉行ノ上ニ位シ、獨リ政事ノ機密ニ參スルノミナラズシテ、專ラ諸士ノ頭領トナリテ、軍將ノ職ヲ兼ネタリ、二代秀忠ノ征夷大將軍ニ任ズルニ及ビテモ、舊ニ依リテ改ムル所ナク、仍ホ家老ト稱セリ、寛永十五年三代家光ノ時、始メテ大老ノ稱ヲ立テ、土井利勝ヲ以テ之ニ任ジ、酒井忠勝之ニ繼グ、以後或ハ置キ、或ハ置カズ、

德川將軍ノ幼冲ナルカ、又ハ幕政ノ多事ナル時ニ當リテ、臨時ニ、後見、輔佐、政事總裁、政事輔翼等ノ職ヲ置キテ、將軍ヲ輔佐シ、政務ヲ統督セシム、何レモ德望アル親藩ノ諸侯ヲ以テ之ニ任ジ、老中ノ上ニ在リテ、猶ホ大老ノ職ノゴトシ、松平定信ハ十一代將軍家齊ニ輔佐タリ、田安慶頼、一橋慶喜ハ、相前後シテ十四代將軍家茂ニ後見タリ、又此時ニ松平春嶽ヲ政事總裁ニ任ジ、次デ德川慶恕ヲ政事輔翼ニ任ズ、而シテ一橋慶喜以下ノ就職ハ、皆朝旨ヨリ出ヅル所ナリ、

溜詰トハ、常ニ黑書院ノ溜ノ間ニ伺候セシメテ、政事ノ諮詢ニ備フルノ名ナリ、每月十日二十四日ノ兩日ニ登城シテ老中ニ謁シ、大事アレバ必ズ其議ニ參ス、モトハ榊原、井伊等ノ如

名稱

キ世々家老ノ職ニ任ゼラルヽモノ、常ニ此ニ候ゼシガ、後ニ松平頼重讃岐高松城主保科正之等、共ニ世胄近親ヲ以テ此ニ候ゼシヨリ、遂ニ井伊、松平、保科ノ三氏ヲ以テ、世襲常任ノ家ト爲スニ至レリ、其他酒井、奥平ノ諸家、及ビ老中ノ職ヲ罷ル者、或ハ進テ此ニ列セシモノアリ、

〔職掌錄〕大老

當職一員、○中略當職は、○中略俗間には御家老とも申せしにや、延寶武鑑には御家老と見えたり、營中の詰所は、老中御用部屋のうち上の入側也、

〔柳營秘鑑〕一諸御役人之次第幷官位

一大老　當時此職無之、月番御用、評定所出座、連判等御免也、

〔有司勤仕錄〕大老

一此役、其人に依而被仰付事歟、○中略月番、評定所出座、奉書等御免也、御内書渡候事、司之事有り、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寬永十五年十一月七日、土井大炊頭利勝、酒井讃岐守忠勝、瑣細の職掌にあづかる事みなゆるされ、朔望にのみ出仕し、その間にも、もし大政の事あらばまうのぼり、老臣と會議して怠るべからざるむね命せらる、○これ今の世にいふ大老なり、

官位

〔職掌錄〕大老　官は侍從少將中將等也

〔藩翰譜五酒井〕讃岐守忠勝、○中略正保の比、大老の職に補せられ、四位の少將に昇進し、○下略

〔有司勤仕錄〕大老

案するに、此職たる事、○中略元和九年、大猷公○德川家光將軍宣下あり、其頃迄は武家の執權侍從を限る、老中は諸大夫四品迄成しを、寬永七年九月、明正院御即位の時、關東ゟ酒井讃岐守忠勝、上使として罷登けるが、差添て松平伊豆守信綱も遣さる、讃岐守、左近衞少將、伊豆守は侍從に被成ける、同月十二日御即位と極て、禮儀濟ける後、讃岐守參內しけるに、天盃を賜り、中將に轉任

すべき旨仰出されければ、讃岐守固く辭して請ざりければ、せめての事にとて一級を進められ、從上の四位に叙せられしを、早速には御請不申、關東江申上てこそ四位上階には進みけれ、凡武家少將に任ずるは、高家御家門之外諸侯之外には、讃岐守計なり、增て從上之一級は、また格別之朝恩と社申侍れ、其後は執權の人少將、老中は各侍從、かく權柄を執り給ふ、

〔藩翰譜續編四上井伊〕宗家左中將兼掃部頭藤原直該(そのはじめは直興、又直治、〇中略)明の年(〇寶永四年)二月、大老の職になり、かへりて直該とあらため名のり、加階して正四位左中將に任ず、

〔有司勤仕錄〕大老

一右老中の一等上なれば、其會釋又重し、老中と同道之時は則一二歩も先立、諸家江之會釋、又右に准ず、日々登城有之、老中と同敷退出有之、

一世上ゟ之疎居、御禮事、御祝儀事、諸獻上殘、諸音物等、又何も有之、〇中略

一御城、下部屋あり、御門掛ヶ板に大老之名を書、少間を置て老中之名を書也、御城內總下座、勿論也、

〔職掌錄〕大老

御城內、并御門內に於て、番士等、不殘下馬の禮を行ふ、每年雲雀五十、鶴一、營中に於て賜之、

〔憲教類典二ノ六老中〕天明四甲辰年十一月廿八日

一公儀向之御禮、且又年始節句等御禮、老中江被相越候節、掃部頭(〇大老井伊直幸)江も可被參事、

一在所にて御機嫌伺、其外御禮等之儀、掃部頭江も、書中を以可被申越事、

一端午重陽歲暮之祝儀、參勤其外獻上物之殘り、總而指上物有之、老中江も被相贈候節は、掃部頭江も相應に可被贈候事、

十一月

任免

〔內安錄〕一御大老井伊掃部頭〈○直亮〉へ、御鷹の鶴被下、御大老は、御先格御小、納戸頭取上使なり、

〔常憲院殿御實紀〈十〉〕貞享元年八月廿八日、少老稻葉石見守正休發狂して、大老堀田筑前守正俊を刺したり、　廿九日、堀田下總守正仲〈○正俊子〉がもとに、戶田山城守忠昌して、香銀三百枚給ふ、〈○中略〉又正俊が事もて鳴物停止三日仰出さる、

〔大猷院殿御實紀〈五十八〉〕正保元年七月十三日、土井大炊頭利勝卒せしかば、阿部豐後守忠秋御使して、その子遠江守利隆を弔せらる、　十四日、土井遠江守利隆のもとへ、阿部豐後守忠秋御使して、香銀三百枚給はり、所領古河へ趣き作善行ふべしと命せられ、同じ事により松平右京大夫賴重のもとへ、書院番頭池田帶刀長賢をつかはさる、これ賴重は大炊頭利勝が壻たる故とぞ、

〔藩翰譜〈五土井〉〕大炊頭源利勝は、〈○中略〉小左衞門利昌が嫡男なり、〈○中略〉寬永十五年六月、連署の事ゆるされ〈世に加判御免といふ〉大老と稱せらる、〈○大老といふ事は利勝より始る〉　正保元年七月十一日、七十二歲にて卒す、

〔武家執政之事〕初東照宮大神君、參河平均之時、酒井左衞門尉忠次、石川伯耆守數正、兩家老として、東參河西參河の諸士兩人に附屬す、其後遠州、駿州、甲斐、信濃御手に入し頃より、井伊兵部少輔直政、榊原式部少輔康政、本多中務大輔忠勝、軍功を以て御家人の長たり、酒井雅樂頭正親は、累代御先祖よりの家老なり、正親二男河內守重忠、備後守忠利と云り、慶長五年天下一統の時、直政、康政、忠勝は、皆藩屛の任に補せられて其國の將となり、天下の大事を預り守る、

○按ズルニ、參河以來ノ家老ハ、則チ後ノ大老ニ當ル、但シ諸役代々記、武鑑等ニ、井伊、榊原、本多ヲ以テ大老ノ始トシタルハ、家康天下ヲ統一セシ始、大政ニ預リシヲ以テナリ、然レドモ當時大老ト云ヒシニハアラズ、大老ノ稱ハ土井利勝ニ始マレリ、

〔藩翰譜〈五酒井〉〕讚岐守忠勝、〈○中略〉寬永九年の春、大相國家〈○德川秀忠〉薨じ玉ひ、將軍家〈○德川家光〉世を知り玉ひしかば、忠勝が年來輔佐の功を賞し玉ひ、同九月十九日、所領の地を加賜ひ、〈○中略〉正保の比、大老

の職に補せられ、四位の少將に昇進し、年老いぬれば、明暦二年五月廿七日に致仕し、○中略寛文二年七月十二日、七拾六歳にして卒す、

〔有司勤仕録〕大老

案ずるに、○中略酒井讃岐守忠勝、大老の名目はなしといへども、世上の重ずる處、大老の威備はる、老年に及て出仕し、剃髮して空印と改む、然共古老之良弼ゆへ、別義ヲ以て被仰出、政務の御沙汰を取計ふ、剃髮故、白衣に羽織ニ而、拜領之紫のくゝり頭巾をかむり、老中と列座あり、其御座敷の柱に、いつも寄りかゝりて對話し、大方の事は上ェ伺せず、空印の了簡を以て決斷有しとなり、依之此柱を夫ゟ空印柱と今におゐて稱せり、

〔藩翰譜五酒井〕河内守忠清、父につぎ、○中略承應二年の比より、老中と共に奉書の連署あるべしと仰下され、寛文三年二月八日、所領加玉ひ、三万石連署の事御免あつて大老の職に任じ、延寶八年正月十二日、所領加給ふ、二万石

〔常憲院殿御實紀附錄上〕雅樂頭忠清は、閥閲の名門にて、累世輔導の重任を襲しかば、忠清も年若きより頻に顯任せられ、大老の職にありしが、其頃嚴有院殿○德川家綱御多病におはしましければ、天下の萬機、みな忠清一人に御委任あり、忠清元より權勢富貴に人となりし事なれば、威權赫々たるにまかせ、よろづ心のまゝに驕縱の擧動どもありて、世のそしりも穩ならず、當時諸大名はじめ、みなその下風に趨り、かれが一顧を得むことをのみねがひ、世の諺に下馬將軍などいひて、はてには忠淸あることをしつて、大朝あることをしらざるにいたれり、

〔延寶三年江戶鑑〕御家老　酒井雅樂頭殿○忠淸

〔萬天日錄十三〕寛文十二年子仲秋記之

御役人官爵之次第幷御役高下○中略

一高十三萬石厩橋少將雅樂頭源忠清

右月番ノ御用、評定所出座等免レ之、寛文六年丙午三月廿九日、於ニ御前ニ奉書加判、御免之上意有レ之、爲ニ老中之長官者歟、仍テ世此一人稱ニ御家老ニ、

〔常憲院殿御實紀二〕延寶八年十二月九日、大老酒井雅樂頭忠清、近年多病の故を以て職ゆるさる、折々出仕してゆる〳〵養生すべき旨命せらる、

〔憲廟實錄三〕延寶九年〇天和元年十二月十一日、執政堀田筑前守正俊少將に任じ、連判を免許にて、酒井雅樂頭忠清、同河内守忠擧が職掌を奉る、十二日、御家門衆、幷諸大名登城、堀田筑前守正俊が、酒井雅樂頭忠清が職掌を奉るによりてなり、

〔憲廟實錄七〕天和四年〇貞享元年八月廿八日、執事稻葉石見守正休、本丸大料理間にて、大老堀田筑前守正俊を殺す、正休も卽座に、殿中伺候之ともがらに殺さる、

〔憲廟實錄二十二〕元祿十年六月十三日、井伊掃部頭直興、大老となる、

〔憲廟實錄二十五〕元祿十三年三月二日、大老井伊掃部頭直興病免、

〔文昭院殿御實紀九〕正德元年二月十三日、井伊掃部頭直該〇直興舊名ふたゝび大老の職になさる、

〔有章院殿御實紀七〕正德四年二月廿三日、この日大老近江國彥根城主井伊掃部頭直該、こふまゝに退休して、その子備中守直惟に原封參拾萬石をつがしめ、〇下略

〔浚明院殿御實紀五十一〕天明四年十一月廿八日、井伊掃部頭直幸、大老の職命せられ、懇の御詞を給ふ、

〔文恭院殿御實紀三〕天明七年九月十一日、大老井伊掃部頭直幸、請ふまゝに職ゆるされ、備前祐定の御刀たまひ、なほをり〳〵まうのぼりて、公用の事共はからふべきのよし恩命を蒙る、

〔續王代一覽後記六〕天保六年十一月廿三日、井伊掃部頭直亮、御前ニ於テ御懇ノ上意ヲ蒙リ、御大

老ノ職命ゼラル、

〔續泰平年表〕天保十二年五月十三日、大老井伊掃部頭直亮、年數にも相成、太儀に思召候、依之御役御免被成候、是迄出精相勤候ニ付、御手自御指之御刀、美濃國兼道、代金二十枚、被下之、御懇之上意被成下、向後ハ折々御用部屋ヘ罷出、御機嫌可相伺旨、

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年四月廿五日、井伊掃部頭直弼ヲ以テ大老ト爲ス、

大老格

〔德川禁令考 國事 十〕故宰臣有司譴責達書

十一月〇文久二年七日申渡之覺

在邑　井伊掃部頭
名代　小出大膳

其方父掃部頭〇直弼儀、重き御役相勤、御幼君御補佐ニ付候而者、萬事御委任被遊候處、京都江奉對、被爲惱宸襟候樣之取計いたし、公武御合體方にも差響、且賞罰黜陟共我意に任せ、賄賂私謁之儀も不少、上之御明德を汚し、不意之死を遂候に至候而も、奉欺上聽候段、追々達御聽、重々不屆に被思召候、急度も可被仰付處、出格之御宥免を以、其方高之內、拾萬石被召上之、

右於松平豐前守宅、老中列座、豐前守申渡之、大目付竹本甲斐守、御目付杉浦正一郎相越、

〔嘉永明治年間錄 十四〕慶應元年二月朔日、大老職ヲ酒井雅樂頭〇忠績ニ命ズ、

〔文昭院殿御實紀 三〕寶永六年六月三日、甲斐の國府の城主松平美濃守吉保〇柳澤氏致仕の請をゆるされ、御前に召て其御ゆるしあり、〇中略この吉保は、〇中略元祿十一年七月廿一日、中堂〇寬永寺落成の功を褒せられ、左近衞權少將に昇る、このとき座班は宰臣の上にあるべしと命せらる、

〔明良帶錄 前篇〕御側御用人〇中略

柳澤出羽守保明は、寶永の始、御大老格、〇下略

〔有司勤仕錄〕大老

後見

案するに、○中略松平美濃守吉保は、大老と云名目も無之、御側御用人にも非ず、内外之事を司り、大老の格のごとく、格段に老中の上なり、是は格別なれば例とすべきにはあらず、尤官爵も四位之少將なり、

○按ズルニ、寳永年間ノ武鑑ニ、松平吉保ヲ老中ノ前ニ列セリ、ナホ吉保ノ事ハ、側用人篇ヲ參看スベシ、

○

〔泰平年表有徳公〕享保元年四月廿九日、有章院様○家繼、八歳、薨去、是日二丸江入御、(吉宗)御遺言(家宣)とて御後見同五月朔日、大統御相續被仰出、同二日、今日ゟ上様と奉稱、

〔徳川禁令考後見十四〕安政五戊午年八月九日

田安中納言○慶賴政事後見ノ旨諸向へ達

宰相様十四世家茂御若年被成御座候間、御政事向之儀、當分之内、田安中納言殿御後見被成候様ニ御遺言ニ付、何も入念大切ニ可相勤旨被仰置候、

右之通被仰出候間、可被得其意候、

八月

文久二壬戌年五月十二日

同上解職ノ旨諸向へ達

大目付江

田安大納言殿

公方様、御年頃ニも被爲成候ニ付、御内願之通、御後見御免被遊候、以後御政事向御相談も可被遊候間、折々御登城可被成候、先年以來日々登城被致、格別御精勤、御滿足被思召候ニ付、別段之

譯を以被敍正二位、

右之通被仰出候間、向々江可被達候、

五月

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年正月十八日、田安大納言致仕ス、

御使水野和泉守、井上河内守、　田安大納言殿御事御後見、御政事向御不都合の事共有之、京都へ被對恐入候に付、御官位一等御辭退、且御隱居御願之通、都て無御據被思召候に付、京都へ仰進られ、今度願之通御官位一等御辭退の段、被遊御聞居、御隱居御願之通被仰出、只今迄被遣候十萬石、德川壽千代殿へ被遣候旨、被仰出候、此段爲心得向々へ可被達候事、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年七月六日、勅シテ將軍家輔佐ヲ一橋刑部卿慶喜ニ命ズ、

御使脇坂中務大輔、松平豐前守、以思召再相續仰出され、一橋領拾萬石被進候旨、今朝仰上らる、直に刑部卿殿登城、御對顏、今度以叡慮仰進せられ候に付、御後見被仰出之、

〔文久紀事五〕戊午二六月、勅使大原三位卿殿御下向之節、叡慮之御旨、島津三郎殿差添之事、

勅諚

朕惟、方今時勢、夷戎恣猖獗、幕吏失措置、〇中略因策三事、〇中略其三曰、令一橋刑部卿授大樹、越前前中將〇松平春嶽任大老職輔佐幕府内外之政、當不受左衽之辱、此萬人望恐不違、朕意決于此三事、〇下略

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年三月廿五日、請ヒニ依テ一橋慶喜將軍家輔佐職ヲ免ス、

一橋中納言殿、〇中略是迄後見職被仰付置候處、今般依內願被免候、但大樹〇將軍家茂在京中ハ、以前同樣心得可有之旨、御沙汰に候、右之通、從御所仰出られ候段、去る廿五日於二條御城仰出られ候、此段向々へ可被達候、

輔佐

〔樂翁侯一代略譜〕天明八年三月四日、登城之上於御坐之間、御直ニ御輔佐之儀蒙仰候、依之月番之儀蒙御免、御懇之上意有之、御手自御差料之御脇差包永作大和國拜領仕候

〔螢の焼藻の記上〕天明七年六月、定信朝臣松平越中守、奥州白川城主、十一萬石、田安黄門君御三男なり、執政登職あり、浚廟家治○薨御の砌、天下の事、御三家へ頼み被爲置よし、御病中被仰遣によりて、其時御使本郷大和守、御側衆御三家日々御會合あり、就中紀伊黄門公、御老體と云、御病中成により、御兩家尾水いつも紀館へ御出なり、溜詰をも被召て御内談有ける由、松平隱岐守田安黄門公御二男へ執政の事被仰合けるに、隱岐守御答申されけるは、其儀は多病と申、不才と云、御用に立可申とも不奉存候、弟越中守に於ては、御政務を被任候ても可然者に候由被申上たりと云り、尾州君被聞召て、兼て越中守事は、御三家にも被思召寄りたる處なりとて、御歡ありて、則尾州より御吹擧ありて、此度越中守執政に被任たりとかや、近頃田沼家弄權の時、則隱岐守は、賄賂を以御紋を願ひて則御免ありければ、屋敷の棟瓦迄御紋を付させたり、此事世間にて専ら沙汰しけるによつて、宜しからざる旨再び御沙汰ありて、俄に棟瓦の御紋を削らせたりとて、世上の巷説に逢たりし人なりしが、舍弟越中守を薦め申されたる所存、流石に田安黄門君の御遺明ありける人なりとて、或人の咄し侍りけるを後に聞たり、

〔文恭院殿御實紀十五〕寛政五年七月廿三日、松平越中守定信、うち〳〵請ふまゝに、特旨をもて輔佐加判の列をゆるされ、溜詰になされ、少將に任せらる、御輔佐命せられし以來、萬端の骨折莫太勤功の事に思召、このゝち代々の內、溜詰も仰付らるゝ、家格になし下されしとなり、よて布衣以上宿直の輩へ宿老これを傳ふ、

政事總裁

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年七月九日、勅シテ總裁職ヲ松平春嶽ニ命ズ、

越前守隱居松平春嶽、今度叡慮を以て被仰進候に付、御政事總裁職御前にて被仰付、尚此後十

政事補翼

一日御達、　松平春嶽御政事總裁職被仰付候へ共、公儀向の御禮、幷に年始節句其外相越に不及、且又御機嫌窺ひ、呈書、幷端書、重陽歳暮の祝儀、餘勤、其外贈物に不及候間、其段向々へ寄々可被相達候事、

〔文久紀事六〕勅諭

今度勅使被仰出候ニ付、一橋刑部卿再出後見、越前前中將政事總裁職等之儀、大樹公御請被申上、兩人日々登城、政事變革之儀、盡力相勤候旨、勅使歸京言上有之候、○中略朝命を尊崇之志情奮起之趣旨、暫御猶豫、處置方御考察可被爲有候事、

閏八月〇文久二年十四日

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年三月廿七日、總裁職松平春岳京都ヲ出奔ス、

四月朔日、豐前守殿渡、　松平春岳儀、御政事總裁職御免相願ひ、未だ御許容無之候處、勝手に當地發足致し、出立後其段相屆、且引戻の儀相達候處、殘居候家來相支、其儘歸國の段、如何の事に候、叡慮を以て總裁職被仰付、既に御免願達叡聞、御聞屆も無之內、前段の始末、對朝廷別て不束に付、屹度も可被仰付候處、是迄出精相勤候に付、出格の御宥免を以て、總裁職御免、逼塞被仰付之、

右之段、於京地被仰出候間、向々へ可被達候、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年五月十三日、政事補翼ヲ前大納言德川慶恕ニ命ズ、

河內守殿御渡　尾州前大納言殿事、公方樣御登京御滯在中、御政事向補翼被在之候樣、叡慮を以て被仰出之、

右之通、於京都被仰出候間、向々へ可被相觸候事、

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年十月十日、政務補翼ヲ一橋慶喜ニ命ズ、

溜詰

和泉守殿渡書付　此度格別の被爲蒙御寵命御請は被仰上候へ共何分不容易御時節柄に付、中納言一橋殿へ御政務御補翼の儀被仰出、別て十分御助力被爲在候樣被仰出候、
右之通、京都に於て去る十日被仰出候間、爲心得萬石以上以下へ可被達候、

〔有司勤仕錄〕溜詰
一此職當時四人有之、內貳人ヅヽ在府、於江戶交代也、御禮日之外に二度程登城有之、則五日一度程之積也、〇中略
一御規式御禮之節は、御簾を揚る事を司る也、

〔職掌錄〕溜詰
溜詰は役名にあらず、人數不同也、御譜代の歷々、御黑書院溜間に詰る故此名あり、彥根、〇井伊會津〇保科高松〇松平の三家は代々溜間に候す、其外は帝鑑間席より家柄年功等によりて此席に進むこと也、これを俗に入溜といへり、參勤交替の勤諸大名とかはることなし、〇中略在府の時は每月十日、廿四日登城、溜間に候じ、老中に謁し、御機嫌を伺ふ、御用の事あれば、老中列座にて對談す、此外何に限らず、御規式の節は登城、老中の上に著坐す、三山御參詣之時豫參あり、又御先立を勤む、〇中略御大禮の時、京都への大上使をつとむ、〇又見柳營秘鑑

〔柳營秘鑑二〕西之丸江出仕之覺享保十巳年五月廿五日被仰出
一月次朔日　御三家　松平加賀守〇吉德　溜詰

〔改元物語〕翌年改元アッテ萬治ト號ス、此改元ノ時ハ先考〇林道春ノ例ノ如ク、予〇林恕勘例ヲ調ベ公家ノ勘文ヲ讀テ、井伊掃部頭直孝、酒井雅樂頭忠世、酒井讚岐守忠勝、松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、稻葉美濃守正則列座、アマタノ年號ノ字ヲ議シテ、其中ニ貞觀政要ノ文ヲ引テ、本國萬事治ト云ヘルヲ予讀ケレバ、掃部頭直孝曰、コレホドノ吉事アルベカラズト申サル、〇中略讚

岐守忠勝等モ最ト同ジ、御前へ出テ言上シ定ル、

〔法修之事〕寛文三年五月上旬より、保科肥後守、〇正之松平式部大輔、〇忠次酒井雅樂頭、〇忠清阿部豐後守、〇忠秋稻葉美濃守、〇正則黑書院の傍に會合し、大猷院殿寬永十二年定らる、武家法度十九ケ條を披き相談の事有、

〇按ズルニ、此二條ハ溜詰ノ輩、黑書院溜間ニ伺候シテ、政事ヲ議スルモノナレバ茲ニ掲載ス、

〔有司勤仕錄〕溜詰

一此職〇中略五節句御目見には、御白書院ニ而、御三家幷松平加賀守〇前田吉德相濟、其次ニ出る也、諸獻上等も、御三家加賀守溜り詰之面々、諸家とは格段也、又幸不幸ニ付テ上使被下事、是又諸家とは格別也、官は中將少將又は侍從、年老家柄にも寄る也、

〔職掌錄〕溜詰　每年雲雀三十、雁二、上使御使番を以て、これを賜ふ、

〔柳營秘鑑一〕上使之次第

一御三家之外に、御暇之節、御鷹拜領は松平加賀守〇前田吉德溜間之面々也、

〔有司勤仕錄〕溜詰

按ずるに、此職定りたる數あり、又其家代々有樣なれども左にも非る歟、其始松平下總守忠明此職を勤て、是は上之御機嫌伺常に登城ありしとなり、又保科肥後守正之は、其頃威德兼備りて、天下の人口定として政務を取計ふ、夫故續て後々肥後守正容此職たり、又酒井備後守忠朝も相勤也、近來酒井雅樂頭忠清〇忠清恐忠擧誤相勤之、松平讚岐守家も代々續勤之、井伊掃部頭は、元來執事の家たれば、是又當時其職たり、又四家之内にも省略有歟、

〔藩翰譜四上井伊〕此とし〇慶長十九年東西和睦の後、將軍家直孝をめして、兄〇直勝に代りて父〇直政が家をぞ繼がしめらる、〇中略

直孝父が家を繼て後出仕す、やをら進み出て、本多佐渡守正信〇中老が座の上に著く、其體誠に優なり、事終てのち御前を罷出て、正信に向ひ、今日の振舞無禮にこそ侍れ、去ながら故侍從が家を繼ぐべしとの仰を蒙りて候上は、向後の事は御免あれといふ、正信、さればけふのふるまひ、正信こそ悦びて侍れ、かくあらん人と知召されし將軍家の御心の程、有難う候者かなとぞ答へたる、是を見し人、打寄々々、きのふ迄も大番頭して、遙かの末座に伺公せし人の、けふは一﨟の上に立ちし有樣の、優しくも見えき、あはれ將軍家の能き御固めなりけりと賀じ申てけり、〇中略

かくて〇中略身既に三代將軍家〇家康、秀忠、家光、の大老として、萬治二年六月廿八日に卒す、

〔大猷院殿御實紀十九〕寬永九年正月晦日、松平下總守忠明は、この後三年滯府して、井伊掃部頭直孝と共に大政にあづかる、

〔藩翰譜一保科〕幸松丸殿其家を繼、元服し玉ひて、從四位下肥後守正之朝臣とぞ申ける、〇中略慶安四年の夏、左大臣家大猷院殿(家光)の御事、後皆是にならふ、かくれさせ給ひし後、將軍家〇家綱御幼稚の內、天下政務の事預り聞給ひき、是は左大臣家の御遺命とぞ聞えける、〇中略寬文九年四月廿七日致仕、同き十二年の十二月十七日、六拾四歲にて卒せらる、

〔嚴有院殿御實紀二十五〕寬文三年二月五日、松平式部大輔忠次を御前にめし、關閱の家筋といひ、當代御幼稚の時より儲閣に附られ、ことさら御親しく思召をもて、いまより後保科肥後守正之と同じく、國家の大事にあづかり、諸老臣と會議すべしと仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀三十七〕寬文八年十一月十九日、井伊掃部頭直澄、今より後大政にあづかるべき旨面命せらる、

〔常憲院殿御實紀四十一〕元祿十三年二月十五日、大留守居酒井雅樂頭忠擧、溜詰になる、

溜詰格

〔文昭院殿御實紀七〕寶永七年閏八月十五日、松平下總守忠雅は、備後國福山より伊勢の桑名に轉封し、溜詰にくはへらる、

○按ズルニ、此外溜詰ニ列セラレシモノ多カレド、煩シク載セズ、

〔續王代一覽後記二〕文化十四年三月十七日、奥平大膳大夫昌高、(實ハ松平榮翁重豪二男ニシテ、御臺所之御弟、)御臺所兼兼厚キ御願タルニ依テ、溜間詰格仰付ラレ、向後、年頭、五節句、月次御禮、溜間次ヘ出席致スベキ旨羽目間ニ於テ老中列座松平伊豆守傳達セラル、

○按ズルニ、是例外ノコトニテ、溜詰ヲ置ル、本旨ニアラズ、猶ホ此年九月ニ至リテ溜間本席ニ進ミタリ、皆御臺所ノ所縁ニツキテナリ、

〔續王代一覽後記三〕文政二年十二月十五日、酒井雅樂頭忠實、家柄ニ依テ溜間次席仰付ラル、四年十二月十五日、酒井雅樂頭忠實、溜間詰、御前ニ於テ仰付ラル、

〔續王代一覽後記六〕天保三年七月二日、松平隱岐守定通、初祖隱岐守定勝格別ノ御筋目アルニ依テ、向後、父溜詰タルノ節、年齡相應ノ嫡子アラバ、五節句、月次、出仕ノ砌、引續溜詰格命ゼラル家格ニ致スベキ旨、御白書院溜間ニ於テ、老中列座松平周防守演達セラル、

○按ズルニ、溜間詰トナリシ人ノ嫡子ニシテ溜間ニ候スルコトハ、世襲三家(彥根、會津、高松、)ノ外ニ例ナキコトナレドモ、上ニ載セタル松平忠雅及ビ松平定通ナド、特別ニ此家格ヲ賜フモノナキニアラズ、是亦溜間詰ヲ置キシ本旨ニアラズシテ、之ヲ以テ一ノ爵位ノ如クナセルナリ、

老中

老中ハ、初メ參河ニ在リシ時ハ年寄トモ奉行トモ云ヘリ、其奉書ニ連署スルヲ以テ、又加判

ノ列トモ云フ、蓋シ大老ヲ以テ鎌倉ノ執權ニ擬シ、老中ヲ連署ニ擬シタルナラン、諸書ニ、宿老或ハ執政ト記セルハ、正シキ名稱ニアラズ、此職ハ大抵四人ヲ定員トシ、月番ヲ定メテ政務ヲ總理シ、特ニ諸大名、遠國役人及ビ樞要ノ官吏、其他城普請、知行割等ノ事ヲ支配ス、又毎月定日アリテ、諸役人ヲ引見シテ、其請願、或ハ公務ニ關スル事ヲ内聞シ、諸大名溜詰等ノ人人ニモ對面ス、之ヲ對客ト云フ、月番非番共ニ此事アリ、

老中ハ、諸大名、諸役人等ヨリ贈ル音物ヲ除ク外ハ、別ニ役料ナシ、但シ隱居若シクハ部屋住ノ者ニハ之ヲ給ス、位階モ其初ハ五位ニ過ギザリシガ、寛永九年、二條第行幸ノ時、始テ四位ニ昇リ、官モ侍從ニ至リシモノアリ、後世ハ、大抵拾萬石以下ニシテ、一城ノ主タル者ヲ以テ之ニ任ジ、就任ノ日、四位ノ侍從ニ拜スルヲ以テ例トス、其他生前死後ノ待遇、亦甚ダ優渥ナリ、又老中格ト云フアリ、老中ニ准ゼラルヽナリ、西丸老中ト云フアリ、將軍ノ世子ニ附屬シテ、其總務ヲ統督スルナリ、其他前將軍ニ附屬セル老中モアリ、

老中、若年寄ノ候所ヲ御用部屋ト云フ、德川幕府ノ政令ノ出ヅル所ナリ、抑、德川氏ノ初世ハ、其參河ニ在リシ時ノ家老年寄ヲ以テ政務ヲ統攝セシメ、而シテ別ニ此等ノモノヽ政廳ヲ設ケズ、常ニ將軍ノ居所ニ參直シテ政事ヲ議ス、之ヲ奉行所ト稱ス、又廣ク諸役人ヲ會シテ政務ヲ評定スル所ヲ評定所ト云ヒ、其家老年寄ノ私宅ニ於テスルヲ宅寄合ト云フ、三代將軍家光ノ時ニ至リ、始テ和田倉門外ニ評定所ヲ設ケ、評定衆ヲ定メテヨリ、政務ヲ行フニハ評定所ニ於テスルモ、其之ヲ議スルハ、猶ホ將軍ノ側ニ於テセリ、四代將軍綱吉ノ時ニ至リテ、始テ老中ノ直所ヲ設ケ、之ヲ用部屋ト稱ス、用部屋ニ上ノ間、下ノ間アリテ、上ノ間ハ大老、老中ノ事ヲ議スル所ナリ、下ノ間ハ若年寄ノ事ヲ執ル所ナリ、此部屋ニ出入スルコトヲ得ルハ奥右筆ノミニテ、他ノ官吏ハ一切入ルコトヲ許サズ、

名稱

職員 職掌

〔職掌錄〕老中　當職を奉書連判、又加判の列といふ、

〔有司勤仕錄〕老中

一此職を奉書連判と稱す、又加判と云、右之役被仰付時は、加判之列と云なり、

〔藩翰譜土井五〕能登守源利房は、○中略寛文三年、所領を加へ給て少老の職を奉る、二万五千石延寶七年七月十日に執政に補せられ、所領の地加へ給ひ、凡四万石を領せしなり從四位下侍從に任す、

〔司職撰名〕御老中　執政

〔藩翰譜阿部五〕備中守阿部正次は、○中略同き九年○元和七月、宿老の職になされ、諸役人の頭に、今年左大臣家(徳川家光)の將軍宣下の時、正次老中なりと註す、

〔東武實錄十〕元和九年、是年稻葉宇右衞門正勝、佐渡守正盛男從五位下ニ叙シ、丹後守ニ任ズ、此年正勝、○中略奉行職ニ列シ、政務ノ沙汰ヲ預リ聞テ奉書ニ加判ス、

〔延寶三年江戸鑑〕御年寄衆　稻葉美濃守殿、○正則久世大和守殿、○廣之土屋但馬守殿、○數直阿部播磨守殿、○正能

○按ズルニ、宿老、奉行職、年寄衆、皆老中ナリ、

〔官中秘策九〕諸御役人之事

一老中四人

〔職掌錄〕老中　當職四員也、或ハ五員、

〔柳營秘鑑一〕諸御役人之次第幷官位

一御老中　各被任侍從、月番之御用被相勤之、奉書加判、上野增上寺紅葉山御名代、且評定所出席有之、其外種々之御用難盡筆紙之、

〔泰平年表大猷公〕寛永十二年十一月十五日、始て老中之月番定めらる、土井大炊頭、酒井讃岐守、松平伊豆守、阿部豐後守、

堀田加賀守、五人にて月番を立、諸大名の訴訟御用向言上すべき旨被仰付、

〔明良帶錄前篇〕御老中

萬機之政總をて、人臣の極職なり、普く天下に政令を施し、萬石以上、遠國御役人之分御支配也、當日の御用向は、奧御右筆組頭兼取調て申上御觸事は大目付兼へ御書付御渡し、御政事筋之御役向は、御同朋頭を以、御書付を御渡し、御用番にて諸向被仰渡御心得、御役替之節は、御座之間邊に侍座有、御勤向者、兩山御名代、京都所司代御引渡、御掛りは、大奧向、御勝手向等、御一座にて御心得、評定所御著坐、公家衆參向之節、殿上之間御會釋等、諸御披露之御太刀、御奏者番披露、御老中御取合等、諸御用掛り、御上掛り、御殿向御修復出來、御見分相濟、八丈之類拜領、

〔職掌錄〕老中

月番の時は、諸御用一切司之、毎日登城の時、月番より非番の同列へ案內として使者を出す、非番の面々は、此案內次第登城あること也、尤非番のものより、いまだ案內來らざる方へ段々案內ありて登城也、使者其屋敷へ行著ざる以前登城なれば、途中にて其段申達る事也、〇中略道中人馬宿次の證文、幷關所手形を出す、〇中略端午、重陽、歲暮三節の御內書御渡の事、月番の老中司之、其家格によつて營中にて渡之、其外はすべて月番の宅へ留守居呼寄渡之、出火ありて及大火時は、晝夜に不限、月番の老中登城す、但し夜は下乘橋の外、百人組箱番所上の間へ出、奉書火消等を申付、御徒、內腰懸に候し、御奉書の使を勤ること也、〇中略三山〇寬永寺、增上寺、紅葉山、御名代は、非番の老中順番に勤む、又御三家、國持大名、參勤御暇の時、其外臨時の上使等勤之、〇中略一切の御用、月番の承りといへども、定式臨時共、各懸り〴〵の御用あり、定式は御勝手方御用、臨時は朝鮮人來聘、日光御參詣、諸所御普請御用等の類也、〇中略式日には、月番あけの老中一人、評定所へ出席、朝の內に仕廻登城也、御法事の節、一人づゝ總奉行被仰付、御法事中、兩山〇寬永寺、增上寺、宿坊へ詰ること也、〇中略御成の節、月

番老中、殿中の御先立相勤、還御まで殿中に伺候す、○中略不快にて引込の時は、日々月番より手紙を以て殿中の沙汰を申送ること也、奥御右筆の內、順番に御手紙番といふものありてこれをしたゝむる也、是も餘程の永引になれば、御手紙斷といふことあり、

〔有司勤仕錄〕老中

一老中之上座々、大奥御女中方之御用向司レ之、幷正月御年男を被レ勤之、

〔柳營秘鑑三〕老中奉書連判之次第

一公家衆　門跡方、御三家、城普請、○註略參勤伺、歸國在著之御禮、證文、繼飛脚、

定式先如レ斯、其之外にも、奉書を以、御用被二仰付一候類、何茂連判也、

老中月番一判之奉書次第

一御機嫌伺、輕進物、當座之儀、

此外にも七夕獻上、或は御香奠獻上等之奉書一判也、

右奉書之次第、寛文四甲辰年四月被二仰出一之、但大名幼少之內、十歳迄は獻上物雖レ有レ之、奉書は不レ被レ成也、十一歳より奉書被レ成レ下之、拾萬石以上は、月番老中之使者持二參之一、其以下は徒使持二參之一、勿論家柄による事也、○又見二萬天日錄、官中秘策一

〔教令類纂初集三十九〕寛永十一甲戌年三月三日

定

一禁中方、幷公家門跡衆之事、

一國持衆、總大名壹萬石以上御用、幷訴訟之事、

一同奉書判形之事

一御藏入代官方之御用之事

一金銀納方、幷大分之御遣方之事、

一大造之御普請幷御作事、堂塔御建立之事、

一知行割之事

一寺社方之事

一諸國繪圖之事

一異國方之事

右之條々御用之儀、并訴訟之事、承屆可ㇾ致言上事、

寛永十一年戌三月三日

酒井雅樂頭〇忠世
土井大炊頭〇利勝
酒井讚岐守〇忠勝

〔享保集成絲綸錄 一〕寛永十二亥年十一月十日

一國持大名御用并訴訟之事

土井大炊〇利勝　酒井讚岐〇忠勝　松平伊豆〇信綱　阿部豐後〇忠秋　堀田加賀〇正盛　五人にて一月番に可ㇾ承候、〇中略

一御普請奉行、小普請奉行、道奉行御用之儀は、松平伊豆、阿部豐後、堀田加賀可ㇾ承ㇾ之、但大造之御普請、并大成屋鋪割之儀は、土井大炊、酒井讚岐、可ㇾ遂ㇾ相談事、

一國持大名御用、并訴訟之儀承候日、

三日　九日　十八日〇中略

寛永十二年亥十一月十日

〔寛政明典錄〕老中心得十九箇條

老中之儀は、天下之手本にも相成候御役柄にて、御政事一事之得失、天下之治亂にも預り候儀に付、萬端相愼、萬づ正道に相心得、御規定向、大切に奉ㇾ存候て、御後暗き儀、毛頭仕間敷事、

御當家は、おのづから御當家之御制度有ㇾ之儀にて、たとへば王朝及鎌倉室町之古風に立戻、又は漢土之制度、尤に候共、當座之分別私智、我好む所之所存を以て、了簡を加へ申間敷候、只今迄致來候定例に候共、風儀時節之變化にて、不相應之儀も候はゞ、衆評を遂げ、深く思慮を加へ候

上、相伺候て正道に致可申候、御制度次第に廣大に過不申、御國相應之處を斟酌を加へ可申事、

一安きに危きを忘れず、治に亂を忘れざる儀、備要に候、治安之儀を以、油斷致す時は、危亂之本にて可有之候、御城内外、幷山海川澤、御要害、領地割、御番城等之事迄、念を入、御武器其外御船之類、幷兵粮鹽噌等御備之事、夫々に心配可致事

一凶年御備米穀御たくはへ、諸國城詰米、郷藏圍米等も油斷致間敷候、當時之利益を以、金銀を貴み米穀を賤み候仕なし致間敷事、尋常之御費に不可用之御備金、幷所々御城金等、嚴重に心得可申事、

一町人百姓、下賤之者に候共、あなどり申間敷事、

一小事おろそかに致間敷事

一古き事、麁略に致間敷、物事を急に致す間敷事、

一外國遠く候ても、油斷致間敷事、

一不宜風俗を時節と心得、災難を時之變と心得、打捨申間敷事、

一御仕置御褒美筋之儀、御定幷先例を以斟酌可致事、時勢之急を救ひ候儀は暫時可有之儀に付、御仕置之寛猛、御褒美之多少等之差略、衆評一決之上、厚思慮を加へ相伺可申事、御賞罰は、其一人之情に叶候樣にとのみ有之、永々の法に難相成儀は、後に弊可有之事、

一山は繁り候樣に、川は深く相成候樣に、國に窮民少く、古田荒不申、戸口減じ不申樣に心を盡すべき事、

一思召たがひ、幷行屆かれざる等之儀は、聊も身を不顧、御心得之儀、御諫言等可申上事、且我名をなさんとして諫言、衆人之中にて申唱候類は、忠臣之淺きに可至候、況身がまへ等致候類は、不忠勿論之事、

一雖有御旨、下へ行届、下之情、上へ達候樣に可致候、瑣細之事、鄙賤之事は言上に不及、天災地妖、其外一揆騷亂等之事は、御苦勞奉增候まゝ、是又言上に不及、すべて風説等も御聽に不奉達樣致候儀、職役に有之間敷儀、勿論に候事、

一御幼君に奉仕候節、御幼君之御規定被相守、御側之者、御敎訓御尋問之者厚く相撰、同役彌共和致、新規之儀は、猶更容易に不致事、且不輕儀は、衆評區々にして決しがたき時は、言上之上、御三家御三卿の御方に御思慮をも相伺可申事、萬事何にても、御面倒之義不相憚相伺、念を入可取扱事、

一御儉約相用、無用之費を省き、華奢之儀を退け、質素之風儀を以て取扱可申事、下を損じ、上を益し候類、目前之小利を以て取扱不申事、下を損じ、後之患となり候儀、勿論致間敷候、たとへば新規運上抔とて、諸色之價を高し、人心を亂し、差障べき新田をおこし、古田を荒し、人心を亂し候類、すべて下と利を爭ひ候儀致間敷事、

一權柄、我に歸し、善惡を我心の儘に致し、曾て衆議をとげず、一己に決斷し、己に智ありとして人を見下し、下より申出候儀を辨舌威權を以言上し、舌を縮め下と智惠をくらべ候て、下之威權を恐ざる心底を殘し候樣なる儀、是又致間敷事、

一我にまさりたる者を擧用ひ、宜敷人々の御役を得候樣に致候事第一にて、諸役人之進退等もあくまで心を用ひ、萬事公道にしたがひ可申事、然處吟味評議等も不遂、或は一存に決し、又は親類故舊之中を以て、同役互に取持候類、又はまひないを以申候筋目を取用ひ、又はおのが勝手宜樣に荷擔可致をあげて、重役之心に任せ、時勢に媚び諂らひ候類を引立取用ひ、其上重役へも存寄申候器量有之もの、又は正道相守り申候者等をば不禮不骨、又は愚鈍之旨申、正人之進むべき道をば塞ぎ候類、重職之役目に有之間敷事、勿論之儀也、

一大奧向へ取入、老女等願事など取持致し、又は大奧向ゟ被仰出候儀、申出候儀は、評議之上を以て用捨を加へ奥向取次等之類にも、御側向等之御威光を以、用捨を加へ候儀、重職に有之間敷事、勿論之儀に候、

一下々愁訴之情、相鬱し不申樣に可致事、奉行所、又は領主之裁許、非義之事有之、可訴出方無之に付、捨文又は以相訴、駕籠訴等致候節、定例に泥み非義を不糺、下之怨訴鬱し候樣不致事は、心得可有之事、

一瑣細之末事を事とし、諸伺調事等、下へのみまかせ、大本之御政事向、御勝手向等、夫々之評議、下にのみ打まかせ置、聊思慮を不盡、職事を脇になし、分外の驕をなし、公事をもらし候類は、職役に有之間敷儀、勿論之至に候、

右等之儀、堅く相守り心懸可申事、此旨に背き候節は、御歷代樣之思召に相背候儀、可爲不道不忠之至候、

天明八年戊申冬十月

右之條々、依台命此度奉撰者也、

○按ズルニ、白河樂翁侯略譜に、天明八年九月廿四日、重役之心得筋等、取調指上候樣、尤同役名本多彈正少弼へも厚申合候上、認可入御覽との御事、御側加納遠江守申達トアルハ、卽チ此老中心得十九條ナリ、是松平定信ガ、將軍家齊ノ命ヲ奉ジテ作リシモノナリ、

〔大猷院殿御實紀七十三〕慶安二年二月廿一日、朽木民部少輔稙綱、少老の職ゆるされたれば、其職命せらるゝ間は、萬石以下の輩、何事も老臣三人のもとへ訴ふべしとふれらる、

〔常憲院殿御實紀二〕延寶八年十二月廿三日、稻葉美濃守正則、御內書の事つかさどるべしと命せらる、いまゝで酒井雅樂頭忠淸つかさどりし所なり、

〔常憲院殿御實紀一〕延寶八年八月十六日、この日令せられしは、○中略國用の事今より後、堀田備中守正俊、○老中井に京町奉行、郡代役前田安藝守直勝、井上丹波守正貞、勘定頭杉浦內藏允正昭、德山五兵衛重政、甲斐庄喜右衛門正親、目付大岡五郎右衛門清重、謀り合せてはからふべしと仰下さるれば、其旨をまもり、毎事私曲なく勤むるものは、きと聞えあぐべしとなり、

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年九月廿三日、今まで地理の事は秋元但馬守喬知、國用は大久保加賀守忠增司りしが、この後は、諸老臣衆議してはからふべしと仰いださる、

〔憲教類典二ノ六老中〕寬延三庚午年十月朔日、堀田相模守殿○正亮御勝手掛り被仰付候ニ付、同月六日、板倉佐渡守殿○勝清、若年寄、左之御書付御渡、

一總而御入用筋、其外御勝手ニ拘リ候萬事伺事、幷請取物所、佐渡守江可被申聞候、相模守江は佐渡守より相達事ニ候、

但品により、相模守直に相達度儀は、勝手次第候、樣子により、相模守直に相尋儀も可有之候、

一諸色渡方、相模守所ニ而可相渡候、差掛り少々之儀は佐渡守所ニ而も相渡ニ可有之候、

右御書付、順阿彌を以被遣之候、

御入用ニ付差出候節、佐渡守ト、控同樣認、一通可被差出候、

〔浚明院殿御實紀三〕寶曆十一年二月廿九日、ことしより、宿老年毎に輪廻して、國用をつかさどらしむ、

〔有章院殿御實紀九〕正德四年八月十五日、井上河內守正岑に二三丸、並に養仙院、松姬御方々の事、奉るべしと命せられ、阿部豐後守正喬には金銀錢鑄造の事、久世大和守重之には材木並に宅地の事命せらる、これ喬知が卒せしをもてなり、

〔德川禁令考十四老中〕安政元甲寅年八月十一日

海防御用筋取扱方ノ定

覺

海岸防禦筋之御用向、向後御老中若年寄中、一同ニ而申合取扱候、尤是迄之通、月番順を立取扱候間、向々諸伺諸屆等、其心得ニ而差出候樣可被致事、

右之通、向々江可被相達候事、

八月

〔嘉永明治年間錄 五〕安政三年十月十七日、閣老堀田備中守、外國御用取扱ヲ命ゼラル、

御老中堀田備中守正篤、外國御用取扱、於御前被仰付、同十九日御書付、備中守事、外國御用取扱被仰付、當分の內、月番被成御免候、海防月番は一手に引請取扱、御勝手月番の儀は、是迄の通相勤候樣被仰出候間、諸向是迄、海防月番へ差出候諸伺屆書等、向後備中守へ差出候樣可被致候、

同廿日、貿易の儀、於御前備中守へ被仰付之、

〔德川禁令考 十四 老中〕安政五戊午年四月廿八日

老中司務掛分達書

覺

外國御用取扱、京都御警衛、并大坂表御臺場築立、學問所、講武所、(附深川越中島調練場、大森町打場、)清水跡片付、

備中守〇堀田正睦

御軍艦操練、并長崎表蘭人傳習、大艦製造、大小砲鑄立、梵鐘鑄換、組々調練、蕃書調所、醫學館、天文方、

伊賀守〇松平忠固

蝦夷地御開拓、內海御臺場御修復、御廣敷并御守殿御住居御取締、

大和守〇久世廣周

右之通、向後申合取扱候事、

按ニ、御書付留中、文久二年六月三日、同八月十九日、同十一月二日、前件事務ニ掛リ分ヶ改達アリ、老中名前ハ今略之、増加ノ事項左記ノ如シ、

蒸氣機關御取立、文久二年六月三日海陸御備場向并御軍制取調同八月十九日西洋醫學所御改革、外國掛、以上十一月二日

慶應三丁卯年七月朔日

老中ノ月番ヲ止、各事務ノ總裁ヲ置ク旨、諸向ヘ觸書、

御國內事務總裁　美濃守〇稻葉正邦

會計總裁　周防守〇松平康直

外國事務總裁　壹岐守〇小笠原長行

陸軍總裁　縫殿頭〇松平乘謨

海軍總裁　兵部大輔〇稻葉正巳

右之通被仰出候ニ付而者、向後月番ハ不相立、其筋總裁ニ而取扱候得共、諸向共、身分ニ付候諸願伺屆等者、御國內事務總裁江差出候樣可被致候、

右之趣、萬石以上以下之面々江可被相觸候、

七月

同上覺書

殿中ニおいて、諸向より老中江差出候書付類、夫々之總裁江差出候儀ニ者候得共、若病氣差合等ニ而、登城無之節者、老中宛ニ而、其筋引受取扱候若年寄江可被差出候、

右之通、向々江寄々可被達候事、

七月

〔柳營秘鑑三〕老中支配

一禁裏御所方、公家門跡、國持及万石以上之大名、并九千石以下、交代有之寄合、米良、松前、知久、小笠原、岩松、座光寺、松平太郎左衞門、中嶋與五郎、高木、山村、那須等之類迄支配之、

一大造之御普請

堀川石垣地形等也、御作事家作、或は塀門等也、又は堂塔御造營修覆等也、

一知行割　一異國御用　一御側衆　一高家衆

一御留守居　一大御番頭　一大目付　一町奉行

一御勘定頭　一御旗奉行　一御鑓奉行　一御作事奉行

一御普請奉行　一小普請奉行　一遠國奉行　一遠國役人

〔教令類纂二集六十六〕延享元甲子年六月

御老中支配〇中略

右衞門督殿御守、刑部卿殿御守、〇中略御留守居番、伊奈半左衞門、御勘定吟味役、

〔德川禁令考十四老中〕支配向

海軍奉行、陸軍奉行、騎兵奉行、步兵奉行、騎兵頭、步兵頭、砲兵頭、京都見廻役、撒兵頭、軍艦奉行、山陵奉行、外國奉行、神奈川奉行、箱館奉行、新潟奉行、奥詰銃隊頭、軍艦頭、此諸曹、皆新規設置、據官府職應雜記補之、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寬永十五年十一月七日、大番并寄合の輩は、松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、阿部對馬守重次、支配すべしと命せらる、これ今も大番頭交替寄合は、老中支配たるもとなり、

〔營中御日記一〕元和十年〇寬永元年六月十日、土井大炊頭〇利勝宅寄合、酒井讃岐守〇忠勝井上主計頭〇正就永井信濃守〇尙政松平右衞門大夫〇正綱其外諸役群參、

對客

〔營中御日記 十〕寛永十年八月廿日、老中宅寄合、評定之次第、酒井讃岐守、永井信濃守、松平伊豆守、○信綱兩町奉行等達上聞云々、

○按ズルニ、寛永十三年正月十一日ノ評定所創立以後ハ、老中ノ宅ニ於テ訴訟ヲ斷決スルコトヲ止ム、然レドモ大名ノ家事ニ關スル訴ハ、尙ホ之ヲ大老ノ宅ニ於テ訊問判決スル事アリ、寛文中、仙臺ノ家臣、伊達安藝、原田甲斐等ノ訴ヲ大老酒井忠淸ノ宅ニ於テ問糺セシガ如シ、

〔有司勤仕錄〕老中

一月番之節は、毎朝對客有之、但御精進日は除之、使者之間上之間へ出て、一兩人づゝ代る〴〵對面、諸願又は役筋之内聞有之事なり、御家門、國持大名之溜詰等之面々は大書院也、又挨拶柄により、小書院、内書院にて謁見、或は三奉行諸役人等之外、親敷面々は勝手座敷にて對面、掛合之料理出ル、其外出入之諸役人、小役人、坊主衆、繪師、能役者、御用達、諸職等之類、勝手へ相詰、料理を出し、謁見相濟、勝手へ入、其跡にても追々客來有之而、無據用向は再出之對面有り、又大概之用向は、表用人罷出、御用私用之品承り達之、

〔憲教類典 二ノ六 老中〕享保元丙申年九月九日

一八日　廿日　廿四日

右三日共に老中、若年寄中、向後對客有之筈に候間、寄々可被申達候、

〔教令類纂 二集六十六〕延享四丁卯年正月廿七日

月番老中對客定日

三日　差合候得ば四日　五日差合候得ば六日　七日　十一日差合候得ば十二日　十三日

十八日差合候得ば十九日　廿一日差合候得ば廿二日　廿三日　廿五日差合候得ば廿六日

非番は唯今迄之通り兩日

官位俸祿

右之通申合候

〔憲教類典二ノ六老中〕正德三癸巳年十一月二日

一非番之老中、若年寄中、今程御城勤繁候に付、朝之内、手前にても御用取込候故、見廻之衆江存樣に逢候儀も難成候間、手透考候而、朝之内、可令對客候條、御用無之、逢被申計に被相越候衆中江も、右之節可懸面談候、此旨寄々可被相達候、

十一月

〔憲教類典二ノ六老中〕延享三丙寅年二月二日

佐渡守殿御渡　御目付江

一老中若年寄對客之節、七半時分より何も詰掛、殊外騷敷、前々之通、明六時過に揃候樣、向々江可被申達候、尤大御所樣〇德川吉宗大納言樣〇德川家治御目付江も可有通達候、

〔明良帶錄前篇〕御老中從四位侍從或ハ從四位少將

〔有司勤仕錄〕老中

一右官位ハ、各被任侍從、但往昔ハ從五位下也、

〔白石先生小品〕當家〇德川老中ナド申スハ、天下機密ノ事ヲツカサドリテ、其職掌、譬ヘバ朝家ノ大臣、武家ノ執權管領等ノ任ニ異ナラズ、シカルニ當家ノ初、兩代ノ間ハ、其職名モ奉書連判衆ナドイヒテ、其官五位、其祿纔ニ萬石ニアマル迄ナリ、是我神祖〇家康往代ヲ鑑ミ玉フ所オハシマシテ、後代ノ制ヲ立オカセ玉ヒシ所歟、

足利殿ノ代、管領ノ強僭ニヨリテ終ニホロビ玉ヒシニ懲リ玉ヒ、鎌倉ノ初例ヲ用ヒラレシ歟、此事ヨク大明ノ太祖ノ相官ヲオカレザリシニ似タリ、必ズ深キ神慮アルベキ御事歟、

三代ニアタリ玉フ始ニ、寛永九年ノ秋、二條ノ邸行幸ノ時、老臣ノ二人、從四位下ニ叙シ侍從ニ

任ゼラル、是當代ノ朝奨ト申スベシ、コレ近世ノ老中、必四位ノ侍從ニナサルヽコトノ始メテリ、サレド其比ハ、此職ニアル人悉クシカアリシニ非ズ、其後又寛永廿年、大老ノ職（〇土井利勝）少將ノ始メナリ、其後ハ、其官モ文武ノ職ヲ撰バズ、其位モタヾ從五ノ下ニトヾマレリ、古ノ代ノ如ク、六位ノ侍アルコトモナク、寛永九年十一月、布衣御免ナドイフコト出來ヌ、此事古ヨリ此カタ公武ノ間ニ未曾有ノ初例ト申スベシ、又ハジメ神祖ノ御時、前代將軍ノ代ニ、シカルベキ人ノ後ヲ撰バレ、侍從少將等ニナサレテ、堂上ノコトヲツカサドラセ玉ヒタリ、コレラハ鎌倉ノ代ノ末、京都ノ代ノ盛リニ、武家祗候ノ公卿殿上人ニ准ゼラレシ所ナレバ、御家人ノ例ニ比ブベカラズ、

一神祖、堂上ノ人々、武家祗候ノ事ヲトヾメラレテ、前代ノ時、シカルベキ武家ノ後ヲ撰ンデ其事ニ准ゼラレシ御事、コレ又神慮ノホド、兎角申スニ不及、中少將ノ如キハ、モトヨリ近衛ノ司サナレバ、ソノ武職タルコト論ズルニ不及、サレド前代將軍ノ代ニ、御家人ノ任例ニ未聞處ナリ、マシテヤ侍從ノ職ノ如キハ、御家ノ近臣、武家ノ人々、タトヒ其位ハ從四ノ下ナランニモ、從五位下ノ官ニ任ゼラルベキ所ニモアラズ、マタ天下ノ機務ツカサドラン人々、タトヒ其位ハ從四ノ下ナランニモ、從五位下ノ官ニ任ゼラレンコトモ、其官アマリニ淺キニ過ギタリ、（侍從ハ從五位下相當ノ官ナリ）今ニ於テハ、タヾ鎌倉京ノ代ノ如ク、其位ハ正四位ノ上ヲ先途トシ、其官ハ四府ノ督、或ハ四職ノ大夫タランコト、尤モ其宜ヲ得タリトモ申スベシ、ソレヨリ下モ、悉皆鎌倉京ノ例ニマカセテ、其位ハ四位五位六位、各正從上下ヲワカチ、如此ナレバ、三位ヲ合セテ武家ノ位階十三等ナリ、次第ノマヽニスヽメノボセラレンニハ、
　可然事共多カリ、

其官ハ武職ノ外ハ、皆諸國ノ受領タラシメンコト、然ルベキ御事ナリ、

〔德川禁令考稍規十八〕慶應三丁卯年九月廿六日

別紙御役金被下高之覺

金壹萬兩、隱居井部屋住ヨリ被仰付候 老中、金五千兩同上 老中格、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年六月廿三日、太田道醇資始加判列、并年俸三萬俵ヲ賜フ、

高五万五千石、遠州掛川太田備中守資功父隱居道醇、御老中を命ぜらる、勤務中、三萬俵を賜る、外國御用兼帶、道醇追て備後守と改名、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年五月廿三日、脇坂掛水、加判ノ列ニ再任ス、并歲々米三万俵ヲ賜フ、

播州龍野侯隱居、脇坂掛水、改め中務大輔、加判の列被仰付、紀伊守次席、御勝手掛り、外國御用取扱ひ、御役勤候內、年々三万俵づゝ被下之、

〔職掌錄〕老中 持高二万五千石以上ならでは當職に補せられず、増祿あるは格別也、

○按ズルニ、是ハ寬永以後ノコトニシテ、以前ハ壹萬石ノ老中モアリシナリ、

〔吏徵別錄上萬石以上〕老中 元祿十二年己卯七月廿九日、老中座順、前々之通、先輩次第ト被仰出、

〔幕朝故事談〕酒井雅樂頭は、平より直に老中上座になる家なり、

〔惇信院殿御實紀十〕寬延二年九月廿八日、堀田相摸守正亮は宿老の首座、酒井左衛門尉忠寄は新に加判の列になされ、相摸守正亮の次座たるべしと命ぜらる、

〔殘集柳營秘鑑一〕一御老中者、帝鑑之間御譜代、或者雁之間ゟ御役被仰付候事也、右帝鑑之間者、表御譜代と云故、袋入立傘令持之、右之席ニ而、御役被仰付候得者、傘袋を取令持之、諸事供廻り等、こうとうに被致候也、是は御役故也、○中略

御老中方諸事御格合

一老中役被仰付候而、名差合候得者、名替有之面々者、御譜代衆、外樣衆、御役人方、御寄合ニ至迄、各

差合之品ニ寄、老中一同ニ御前江罷出候事有之也、

一御本丸、御老中三人、若年寄二人在之、

帝鑑之間ゟ享保八年ゟ御役被仰付之　松平左近將監

雁之間ゟ同十五年ゟ御役被仰付之　松平伊豆守

帝鑑之間ゟ同二十年ゟ御役被仰付之　本多中務大輔

〔吏徵別錄上萬石以上〕老中　享保十一年丙午十二月朔日、國持大名、御連枝中ハ格別、其外之大名老中同名附候儀、可致遠慮旨、

〔有司勤仕錄〕老中

一坂下御門より登城之事、若年寄以下は、皆坂下御門にて下乘也、尤老中計は乘輿にて御本丸之臺部屋口迄、西丸は裏御門まで、紅葉山は橋際まで乘輿なり、

〔職掌錄〕老中　御門々御城內通行の時、番士等總下座の禮あり、○又見萬天日錄

〔柳營秘鑑二〕御內書之次第

一老中○中略　於御用部屋御內書頂戴之、月番之老中は、其時之奉行故不被下之、

〔職掌錄〕老中　每年雲雀三十、雁二、營中に於て賜之、○又見吏徵

〔憲教類典二ノ六老中〕天明八戊申年四月

御目付菅沼新三郎達

一三奉行より差出候書付、老中退役後、殿文字相認候義有之、不相認も有之、區々ニ付、以來は勤ながら卒去之分計、殿文字相認、其餘は都而殿文字不相認分ニ相違候間、向々より差出候書付も、以來右之通相心得候樣ニ、寄々可相達置候旨、牧野備後守殿、口上にて被仰渡候ニ付、御達申候、以上、

四月

〔官中秘策 七〕諸大名病氣御尋幷御暇之上使奉書御香奠之事

一老中御役之内、死去之時は、鳴物音曲三日停止之、爲伺御機嫌、布衣以上之御役人登城有之、諸大名は、月番老中宅へ使者を以御機嫌伺候、若年寄爲上使、御香奠白銀三拾枚被下之、

〔憲教類典 二ノ六 老中〕享保十四己酉年十月廿九日

一山城守〇老中戸田忠眞卒去ニ付、今日ゟ來月二日迄、鳴物停止事、

但普請は不苦候

十月廿九日

〔憲教類典 二ノ六 老中〕寛保三癸亥年四月十九日　伊豫守殿御渡　御目付江

一伊豆守〇老中松平信祝卒去ニ付而、國持衆、表向之面々は、老中右京大夫〇輝貞宅江明廿日、以使者御機嫌可被相伺候事、

但能登守〇西丸老中、松平乘賢、宅江使者被差越に不及候、

一雁之間詰、菊之間緣頰詰、諸番頭、諸物頭、諸役人は、爲伺御機嫌、明日可有登城候事、

但西丸江は不及出仕候

一在國在邑之面々は、飛札可被差越候事、

但能登守江は被差越ニ不及候、〇中略

右之趣可被相觸候、老中支配之分は、大目付ゟ相達候、尤西丸方は西丸御目付ゟ相觸候樣可有通達候、

四月十九日

〔殘集柳營秘鑑 五〕老中若年寄御役屋敷之覺

任免

一西丸下御屋敷　松平左近將監〇乘邑　一西丸下御屋敷　本多伊豫守〇忠統
一右同　松平伊豆守〇信祝　一右同　西尾隱岐守〇忠直
一辰之口御屋敷　本多中務大輔〇忠良　一馬場先御門之内　水野壹岐守〇忠定
一神田橋内御屋敷　松平能登守〇乘賢　一右同　板倉佐渡守〇勝清
一一ツ橋之内御屋敷　松平右京大夫〇輝貞　一大下馬之脇　小出信濃守〇英貞
右ハ御役被仰付候故、御城近ニ而屋敷拜領之、尤御役御免之節者、外ニ屋敷替等被仰付候歟、

〔諸御役代々記〕一御老中

權現樣御代
慶長十九寅二月二日、有故配駿州、　江戸 大久保相模守忠隣
權現樣御代　江戸 本多佐渡守正信
元和八戌十月配羽州、　駿州後江戸 本多上野介正純
駿州後尾州 成瀨隼人正正成
駿州後紀州 安藤帶刀直次
台德院樣大猷院樣御代、寛永十三子正月十九日卒、　酒井雅樂頭忠世 侍從
土井大炊頭利勝
台德院樣御代　安藤對馬守重信
元和三年御書院番頭ヲ歷、寛永五辰八月十日、於殿中豐島刑部正次被害、　井上主計頭正就
寛文八申九月十一日卒　永井信濃守直政 四品
寛永二十未二月十二日卒　青山大藏大輔幸成
台德院樣大猷院樣御代、寛永九申正月廿九日殉死、　森川出羽守重俊
大猷院樣御代　酒井備後守忠利

青山伯耆守忠俊　元和五未五月廿九日、御奏者より、寛永二丑十二月、有レ故御勘氣、

內藤若狹守清次　御奏者より

阿部備中守正次　元和六申正月御奏者より

酒井讃岐守忠勝　寛永九申十二月三日、御奏者より、任二少將一、同十五寅御大老江、

內藤伊賀守忠重（後改二志摩守一）　元和九亥承應二巳四月卒

稻葉丹後守正勝　寛永十酉、同十一戌正月廿五日卒、

堀田加賀守正盛（少將）　寛永十酉五月五日、若年寄より、慶安四卯四月廿日御供切腹、

阿部對馬守重次（四品）　寛永十五寅十一月七日、若年寄より、慶安四卯四月廿日御供切腹、

松平伊豆守信綱（侍從）　寛永十酉十月十八日、若年寄より、（中略）寛文二寅二月六日卒、

阿部豐後守忠秋（侍從）　寛永十酉三月廿六日、若年寄より、慶安三寅九月西丸江被レ爲レ附、

松平和泉守乘壽（四品）　慶安四卯より、加判、正保三午卒、

稻葉美濃守正則（侍從）　明暦三酉九月廿八日、被二仰付一、萬治元十二月廿九日より加判、（中略）天和元酉十二月八日御役御免、

久世大和守廣之（侍從）　寛文三卯八月十五日、若年寄ゟ、同月廿九日加判、（中略）延寶七未六月廿五日卒、

土屋但馬守數直（侍從）　寛文五巳十二月廿三日、若年寄より、同六午二月十九日より加判、（中略）延寶七未四月二日卒、

板倉內膳正重矩（侍從）　寛文五巳十二月廿二日、大坂御城代ゟ、同月廿九日より加判、（中略）延寶元丑五月廿九日卒、

阿部播磨守正能（四品）　延寶元丑十二月廿三日被二仰付一、同四辰年六月六日、依レ願御免、

大久保加賀守忠朝（侍從）　延寶五巳七月廿八日被二仰付一、（中略）貞享十一寅二月十五日依レ願御免、賜二茶入一、

土井能登守利房（侍從）　延寶七未七月十日若年寄より、（中略）同九酉二月廿一日御免、

堀田備中守正俊（後改二筑前守一）　延寶七未七月十日若年寄ゟ（中略）天和元酉十二月十二日、大老任二少將一、

板倉石見守重通（侍從）（後改二內膳正一）　延寶八申九月廿一日、寺社奉行より、同九酉二月廿五日、若君樣江被レ爲レ附、（中略）同年十一月廿六日、有レ故御免、

阿部美作守正武 侍從 改二豐後守一
延寶九酉三月廿六日、寺社奉行より、(中略)寶永元申九月十七日卒、

戸田越前守忠昌 侍從 改二山城守一
天和元酉十一月十五日、京都所司代より、(中略)元祿十二卯九月十日卒、

松平日向守信之 四品
貞享二丑六月十日、詰衆より、(中略)同三寅七月廿一日卒、

土屋相摸守政直 侍從
貞享四卯十月十三日、京都所司代ゟ、(中略)享保三戌三月三日、御役御免、

小笠原佐渡守長重 侍從
元祿十丑四月十九日、(中略)所司代より、寶永二酉八月廿七日、(中略)西丸江被爲附、同六丑正月十日、御本丸、同七寅五月十八日、依願隱居、號二峯雲一、

秋元但馬守喬朝 侍從
元祿十二卯十月六日、(中略)若年寄より、(中略)正德四午八月十四日卒、

稲葉丹後守正通 侍從
元祿十四巳正月十一日、大御留守居より、寶永四亥八月二日、依願御免、

本多伯耆守正永 侍從
寶永元申九月廿七日、一萬石御加增、若年寄ゟ、同年十二月五日、西丸江被爲附、(中略)同六丑正月十日、御本丸、同八卯四月二日、依願御免、

大久保隱岐守忠增 侍從 改二加賀守一
寶永二酉九月廿一日、詰衆より、(中略)同八卯四月二日、病氣依願御免、

井上大和守正岑 侍從 改二河內守一
寶永二酉九月廿一日、若年寄ゟ、(中略)享保七寅五月十七日卒、

阿部飛驒守正喬 侍從 改二豐後守一
寶永八卯四月十一日、詰衆より、(中略)享保二酉九月十四日、御役御免、

久世大和守重之 侍從
正德三巳八月三日、若年寄より、(中略)享保五子七月廿七日卒、

松平紀伊守信庸 侍從
正德四午九月六日、京都所司代より、同六申三月五日、病氣依願御免、

戸田能登守忠眞 侍從 改二山城守一
正德四午九月六日、詰衆より、(中略)享保十四酉十月廿九日卒、

水野和泉守忠元 侍從
享保二酉九月廿七日、京都所司代より、(中略)同十五戌六月(中略)御役御免、隱居、號二祥岳一、

安藤對馬守重行 侍從 後信賢、又信友、
享保七寅五月廿一日、大坂御城代より、同九辰十一月十五日、西丸江被爲附、同十七子七月廿五日卒、

松平左近將監乘邑 侍從
享保八卯四月廿一日、大坂御城代より、延享二年十月九日、御役御免、

松平伊賀守忠周 侍從
享保九辰十二月十五日、京都所司代ゟ、同十三卯五月朔日卒、

享保十三申五月七日、(中略)若年寄より、同年九月十日卒、
大久保佐渡守 四品 常春

享保十三申七月七日、大坂御城代より、同二十卯五月十八日卒、
酒井讃岐守 侍従 忠音

享保十五戌七月十一日、大坂御城代より、延享元子四月十八日卒、
松平伊豆守 侍従 信祝

享保十五戌七月十一日、溜詰之席より、(中略)延享二丑十二月十一日、(中略)依願隠居被仰付、
松平右京大夫 侍従 輝貞

享保十七子七月廿九日、(中略)寺社奉行より、西丸江被為附、同二十卯三月廿七日卒、
黒田豊前守 侍従 直邦

享保十九寅六月六日、御詰代席より、同二十卯閏三月朔日西丸江被為附、同年五月廿三日、御本丸被召返、延享三寅六月朔日御免、
本多中務大輔 侍従 忠良

享保二十卯五月廿三日、(中略)西丸若年寄より、西丸江被為附、延享二丑九月朔日、御代替に付、御本丸江御供、同三寅五月八日卒、
松平能登守 侍従 乗賢

寛保二戌六月朔日京都所司代より、延享元子九月十二日卒、
土岐丹後守 侍従 頼稔

延享元子五月朔日、大坂御城代より西丸江被為附、(中略)同年九月十八日御本丸加判之列、
酒井雅楽頭 侍従 忠知

延享二丑九月朔日、(中略)若年寄より西丸江被為附、(中略)同三寅五月十五日御本丸加判之列、(中略)宝暦十辰三月十日卒、
西尾隠岐守 侍従 忠直

延享二丑十一月三日、大坂御城代より、(中略)宝暦十一巳二月八日卒、
堀田相模守 侍従 正亮

延享三寅五月十五日、寺社奉行より西丸江被為附、同四卯六月朔日御本丸勤、(中略)安永八亥七月廿五日卒、
松平右近将監 侍従 武元

延享三寅十月廿五日、寺社奉行より、宝暦八寅九月廿三日御免、伺之上差扣、
本多伯耆守 侍従 正珍

延享四卯九月三日、西丸若年寄より西丸附、宝暦十辰四月朔日御本丸江供奉、同十四申三月廿四日依願御免、
秋元但馬守 侍従 凉朝

寛延二巳九月廿八日、本多伯耆守上座被仰付、宝暦十四申五月廿六日、依願御免、
酒井左衛門尉 侍従 忠寄

宝暦八寅十月十八日、京都所司代より、同十辰五月六日、大御所様江被為附、同十一巳十二月朔日加判列、(中略)天明元丑九月廿六日卒、
松平右京大夫 侍従 輝高

宝暦十辰二月三日、京都所司代より、同十三未十月三日、病気依願御免、
井上河内守 侍従 利容

松平周防守康福侍從　寶暦十二午十二月九日、大坂御城代ゟ若君樣附、(中略)同十三未十二月十一日、御本丸御人少に付、月番加判兼帶、(中略)天明八申四月十三日、御役御免、

阿部伊豫守正右侍從　寶暦十四申五月朔日、京都所司代より西丸附、明和元申十一月廿九日、御本丸御人少に付、月番加判兼帶、(中略)同六丑七月十二日卒、

再役 秋元但馬守凉朝侍從　明和二酉十二月廿二日、西丸附、同四亥六月廿八日、病氣依願御免、

板倉佐渡守勝淸侍從　明和四亥七月朔日、(中略)御側御用人より西丸附、同六丑八月十八日、加判列被仰付、安永九子六月廿八日卒、

阿部飛驒守正允侍從改豐後守　明和六丑八月十八日、京都所司代より西丸附、(中略)安永八亥四月十六日、御本丸御老中末席被仰付、(中略)同九子七月廿四日卒、

田沼主殿頭意次侍從　明和六丑八月十八日、(中略)御側御用人ゟ御老中格、(中略)同九辰正月十五日、(中略)加判之列、(中略)天明六午八月廿七日、依願御免、(中略)同七未十月二日、(中略)蟄居被仰付、

久世出雲守廣明侍從改大和守　天明元丑閏五月十一日、所司代ゟ西丸附、(中略)同九月十八日、加判列、同五巳正月廿四日卒、

鳥居丹波守忠孝侍從改忠意　天明元丑九月十八日、若年寄より西丸附、(中略)同六午閏十月朔日、御本丸江御供、加判列、寛政五丑二月廿九日、[illegible]病ニ付願御免、

牧野越中守貞長侍從改備後守　天明四辰五月十一日、京都所司代より加判列被仰付、(中略)寛政二戌二月二日、病氣依願御免、

水野出羽守忠友侍從　天明元丑九月十八日、御側御用人ゟ、(中略)御老中格、(中略)同五巳正月廿九日、(中略)加判列、(中略)同八申三月廿八日、(中略)加判列御免、

阿部備中守正倫四品改伊勢守　天明七未三月七日、寺社奉行ゟ加判列被仰付、(中略)同八申二月廿九日、病氣依願御免、

松平越中守定信侍從　天明七未六月十九日、加判列御老中上座、(中略)同八申三月四日、補佐被仰付、(中略)寛政五丑七月廿三日、補佐加判之列御免、

松平伊豆守信明侍從　天明八申四月四日、御側御用人より加判之列、(中略)享和三亥十二月廿二日、病氣ニ付御役御免、

松平和泉守乘完侍從　寛政元酉四月十一日、京都所司代ゟ加判列、(中略)同五丑八月十九日卒、

本多彈正大弼忠籌 侍從

寛政二戌四月十六日、御側御用人より、(中略)老中格、(中略)同十午十月廿六日、多病ニ付御役御免、

戸田采女正氏敎 侍從

寛政二戌十一月十六日、御側御用人より加判列、(中略)文化三寅四月廿六日卒、

太田備中守資愛 侍從

寛政五丑三月朔日、雁之間詰より加判列、(中略)享和元酉年六月七日、病氣ニ依レ願御免、

安藤對馬守信明 侍從 改二信成一

寛政五丑八月廿四日、若年寄方加判列、(中略)享和二戌九月廿八日、大納言樣江被レ爲レ附、(中略)文化七午五月廿四日卒、

水野出羽守忠友 侍從

再役、寛政八辰十一月廿九日、雁之間詰より、若君樣附、(中略)享和二戌九月廿日卒去、

牧野備前守忠精 侍從

享和元酉七月十一日、京都所司代方加判列、文化十三子年十月十三日、病氣ニ付御免、

土井大炊頭利知 侍從 改二利厚一

享和二戌十月十九日、京都所司代方加判列、(中略)文政五午七月八日卒、

青山下野守忠裕 侍從

享和四子正月廿三日、京都所司代方加判列、(中略)天保六未五月六日、就二病氣一願之通御免、

松平伊豆守信明 侍從

文化三寅五月廿五日、雁之間席方加判列、御老中上席被二仰付一、(中略)同十四丑八月廿九日卒、

松平能登守乘保 侍從

文化七午六月廿五日、大坂御城代より西丸方安藤對馬守代連判列、(中略)文政九戌七月八日卒、

酒井讃岐守忠進 侍從 改二若狹守一

文化十二亥四月十五日、京都所司代方加判列、(中略)文政元寅七月廿三日、(中略)右大將樣江被レ爲レ附、同十一子正月廿八日卒、

阿部備中守正精 侍從

文化十四丑八月廿五日、御奏者番寺社奉行兼帶より加判列、(中略)文政六未十月十一日、病氣ニ付願之通御役御免、

水野出羽守忠成 侍從

文政元寅八月二日、御老中格方加判列、(中略)天保五午二月廿八日卒、

大久保加賀守忠眞 侍從

文政元寅八月二日、京都所司代より加判列、(中略)天保八酉三月十九日卒、

松平和泉守乘寛 侍從

文政五午九月三日、京都所司代より、加判列、同九戌十二月二日卒去、

松平右京大夫輝延 侍從

文政六未十一月十三日、雁之間詰方加判之列、同八酉二月十七日卒去、

植村駿河守家長 侍從

文政八酉四月十八日、若年寄より御老中格、(中略)同九戌十一月廿三日、(中略)西丸御老中江、同十一子十一月二日卒、

松平周防守康任 侍從

文政九戌十一月廿三日、京都所司代方加判列、(中略)天保六未十月廿九日病氣依レ願御免、

牧野備前守忠精 侍從

元御本丸方、文政十一子二月五日、(中略)西丸方再勤加判之列、天保二卯四月十八日、(中略)內願之通隱居被二仰付一、

文政十一子十一月廿二日、京都所司代より西丸方加判之列、(中略)天保五午三月朔日御本丸勤、(中略)天保十四卯閏九月十三日、(中略)御免差扣、

水野越前守忠邦（侍從）

松平伯耆守宗發（侍從）
天保二卯五月廿五日、京都所司代より加判列西丸方、(中略)同六未十月六日御本丸勤、同七申八月四日、(中略)大御所様附被仰付、同十一子九月十八日卒、

太田備後守資始（侍從）
天保五午四月十一日、京都所司代より加判列西丸方、(中略)同七申八月四日(中略)御本丸勤被仰付、同十二丑六月三日、依願御免、

脇坂中務大輔安董（侍從）
天保七申二月十六日、御奏者番寺社奉行兼帯より西丸御老中格、(中略)同年八月四日加判列、大納言様附被仰付、同八酉七月九日御本丸勤、同十二丑二月廿四日卒、

松平伊豆守信順（侍從）
天保八五月十六日、京都所司代ゟ御本丸方加判之列、同年八月五日、病氣依願御免、

堀田備中守正篤（侍從）
天保八年七月九日、大坂御城代より加判列、大納言様江被爲附、同十二三月廿三日御本丸勤、同十四閏九月八日御免、

土井大炊頭利位（侍從）
天保九戌四月十一日、大坂御城代より加判之列、大御所様江被爲附(中略)同十亥十二月十六日御本丸勤、(中略)同十五辰十月十三日、依願御免、

間部下總守詮勝
天保十一子正月十三日、京都所司代ゟ加判列、西丸方、(中略)同十二丑三月廿三日、大御所様薨去ニ付、右大将様江被爲附、同十四卯年閏九月廿一日、病氣依願御免、

井上河内守正春
天保十一子十一月三日、大坂御城代ゟ加判列、(中略)西丸江被爲附、同十二丑三月廿三日、大御所様薨去ニ付、右大将様江被爲附、同十四卯正月廿九日、病氣依願御免、

眞田信濃守幸貫
天保十二丑六月十三日、御譜代席ゟ加判列、(中略)同十五辰五月十二日、病氣依願御免、

阿部伊勢守正弘
天保十四卯閏九月十一日、御奏者番寺社奉行兼帯ゟ加判列、

牧野備前守忠雅
天保十四卯十一月三日、所司代より加判列、

戸田日向守忠温（改二山城守一）
天保十四卯十一月三日、御奏者番寺社奉行兼帯より西丸方、(中略)弘化二巳三月十八日御本丸勤、

（再勤）水野越前守忠邦
天保十五辰六月廿一日、雁之間詰ゟ加判列、年寄上座、(中略)弘化二巳二月廿二日、病氣依願御免、

弘化元辰十二月廿八日、大坂御城代より加判列、（中略）嘉永元年九月三日、病氣依ㇾ願御役御免、　青山下野守忠良

弘化二巳三月十八日、大坂御城代より加判列、侍從、右大將樣江被ㇾ爲ㇾ附、嘉永元申年十月十九日御本丸勤、　松平和泉守乘全

嘉永元申年十月十九日、大坂御城代より加判列之列、　松平伊賀守忠優

嘉永元申年十月十九日、寺社奉行ゟ加判列之列、四品、右大將樣江被ㇾ爲ㇾ附、　久世出雲守〇改二大和守一廣周

〔元治元年武鑑〕御老中

松前伊豆守崇廣元治元子七月ヨリ　松平伯耆守宗秀元治元子八月ヨリ

水野和泉守忠精文久二戌三月ヨリ　牧野備前守忠恭文久三亥九月ヨリ

諏訪因幡守忠誠元治元子六月ヨリ　阿部豐後守正外元治元子六月ヨリ

稻葉美濃守正邦元治元子四月ヨリ

〔慶應三年武鑑〕御老中

井上河内守正直慶應元丑十一月

〔嘉永明治年間錄十七〕明治紀元戊辰　德川家有司鑑抄

御老中

慶應元乙丑十月台命　備中松山　高五万石　板倉伊賀守勝靜

同年九月再職台命　肥前唐津　勤中三万俵世子　小笠原壹岐守長行

同年十一月台命　武州川越　高五万四千石　松平周防守康直

同二年丙寅四月台命　山城淀　高十万三千石　稻葉美濃守正邦

同年台命　信州田野口　高一万八千石　松平縫殿頭乘謨

同年十二月台命　房州館山　勤中一万俵　隱居稻葉兵部大輔正巳

同年台命　播州姬路　高十五万石　酒井雅樂頭忠惇

〔吏徵別錄上萬石以上〕老中　文祿二年癸巳十月日、始置老中二人、大久保相摸守忠隣、本多佐渡守正信、一說、慶長十二年丁未七月、始置老中三人、酒井右衞門大夫忠世、土井大炊介利勝、安藤對馬守重信、又置駿府老中三人、本多上野介正純、成瀨隼人正正成、安藤帶刀直次、

〔寬永系圖大久保十四〕忠鄰

忠鄰勤仕不怠、自天正初列奉行職、御分國幷他國往來之奉書、其外諸事忠鄰役之、文祿二年、家康公使忠鄰奉仕秀忠公、以爲家老、

〔藩翰譜本多十一〕正信、○中略德川殿○家康の御覺え大方ならず、常に御側に伺候して軍國の議に與る、○中略右大將家、○秀忠將軍の宣旨蒙らせ給ひしより、正信は關東の執事として將軍家に隨ひ、嫡男上野介正純は、大御所○家康の執事として駿河に在り、父子相並びて天下の權をとる、

〔藩翰譜內藤四〕清成、初め彌三郎とぞ申ける、忠政が讓り受て德川殿に仕ふ、大相國家、○德川秀忠いまだ御幼稚の御時より御傅として附られ、關東に移給ひし時、相摸國當麻の地を賜ひ、七千石其後本多佐渡守正信と二人、關東の奉行職をば承る、慶長六年青山常陸介忠成を加へられ、三人同く職にあり、

〔藩翰譜安藤五〕重信、童名は彥十郎、成人の後、又左衞門と申す、○中略慶長五年四月九日叙爵し、○中略十六年に奉行職を承る、

〔大猷院殿御實紀二十九〕寬永十二年十月廿九日、松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、堀田加賀守正盛、小姓組番頭を兼ねしをゆるされ、土井大炊頭利勝、酒井讚岐守忠勝と共に連署の列にくはへらる、これ今の世にいふ老中にて、大老の奉書に加判する事なり、たゞし信綱はこれより先も連署せしとぞ、

〔森雨會談〕阿部豐後守忠秋之事

久世大和守廣之ハ、信綱忠秋ノ志ニ契ヒ、如親子睦ク、內外表裏ナク指南ヲ蒙リケル、伊豆守○信綱

ハ卒去、大和守ハ、寛文三年癸卯八月加判ノ列ニ仰付ラルヽニ、初テ評定所ヘ出席ノ節、豐後守同道成シガ、對諸御役人豐後守物語セラレシハ、伊豆守殿存生ノ時分密申サレ候ハ、イツカ和州ヲ加判ノ列ニ被仰付、於評定所淳直ノ裁許、寛仁ノ器量見聞致シタキト願ハレ候キ、存命ニテ今日ノ體見申サレ候ハヾ、可爲滿悅ト落涙數行也、忠秋ノ眞實ヲ感、各涙ヲ催シケルト也、豐後守ハ、九歳ノ時ヨリ勤仕、六十九歳、寛文年中、加判月番ハ御赦免アリケレドモ、天下ノ重事、御政道ノ義ハ、忠秋ノ宅ヘ執政ノ方々來會シテ遂相談ラレケル、誠ニ鹽梅ノ良臣ト可謂乎、

〔機務覽要二〕加判之列被仰付候一件

一享和元酉年七月十一日、牧野備前守殿、加判之列被仰付、御座之間相濟、直ニ芙蓉之間有合御列座侍座ニテ被仰渡有之、右相濟、御廻リ之御順有之、同月十三日、西丸太田備中守屋敷家作共被下、御座敷觸有之候、同月十六日、今日ゟ御加判被成、月番ハ追而被仰合被成、御勤候旨、伊豆守殿被仰聞候ニ付、御座敷觸有之、同月十八日、西丸下御屋敷、今日御請取被成候旨御吹聽有之、御座敷觸致ス、

〔有司勤仕錄〕老中

一數年當役を勤、老人と成、御用捨を以て御奉書加判、上野芝紅葉山御名代、評定所出座等、御免之事有之、但御年男は勤之、先年土屋相模守、戸田山城守等、如此被仰付之、

〔嚴有院殿御實紀三十一〕寛文五年八月五日、阿部豐後守忠秋老衰し、其上近年多病によて、直月幷に評定所出座をゆるさる、

〔嚴有院殿御實紀六十〕延寶八年正月十二日、稻葉美濃守正則に壹萬五千石、大久保加賀守忠朝に一万石加へらる、また美濃守正則は直月連署の事をゆるされ、大政にのみあづからしめらる、

〔藩翰譜四中內藤〕同き十一年〈○慶長〉清成〈○內藤〉忠成、〈○青山〉罪蒙りて職〈○老中〉免さる、〈此事本多正信が讒文に詳なり〉

大御所〇德川家康冬ごとに武藏相模の國々に渡らせ玉ひ、御鷹狩の事あり、將軍家より其所々にて鳥獸取る事を禁せらる、或時大御所係蹄むすび罠繩ひきし所を御覽じて、誰が仕業ぞと尋給ひしに、內藤青山が許せし由申ければ、かゝる事、將軍〇秀忠には知り玉はぬにやと御氣色殊の外に損じ玉へば、將軍家聞召し驚かせ玉ひ、二人誅せらるべき由を、阿茶の局に附て伺はせ玉ふ、〇中略阿茶の局を召て、二人が命失はれん事然るべからず、急ぎ申送るべしと仰られしかば、將軍家大に悅ばせ玉ひて、內藤青山も罪免れたり、只押込られて後終に死したり、

〔古今見聞雜筆集乾〕寶曆八寅年十月廿九日

本多伯耆守〇正珍
名代　黑田豐前守

其方儀、加判之列相勤候節、金森兵部少輔領分村々百姓共、領主申付を不二相用一、不法相募候ニ付、可レ屆置レ哉之旨、聞柄之譯を以及二內談一候節、內々取計方不埒之手段致し候、兵部少輔家來共、其方家來石井丹下申達、承知之上、其方〇江も申聞候由ニ候、右躰不埒之品承候者、得と相糺、早速列座〇江も申談、取計方も可レ有レ之候處無二其義一、畢竟丹下申節不二承屆一、其通打捨置候事ニ相聞候、仍而兵部少輔、其方噂を彼是と申達候義も出來、且靑木次郎九郎、筋違之取計之義、評定一座御勘定奉行所〇江尋有レ之候節にも、右內々子細、同列〇江も可二申達一心付も無レ之段、全く重き御役も相勤候身分ニ有レ之間敷、等閑成所存不口之義被二思召一候、依レ之逼塞被二仰付一候、御役御免、雁之間詰、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年五月廿六日、閣老內藤紀伊守〇信親免役、

內藤紀伊守、加判列御免、溜詰格、御刀加賀國次代金廿枚拜領、

〔文久紀事五〕戊〇文久二年十一月廿日、左之通、

申渡之覺〇中略

老中格

內藤紀伊守
名代　諏訪庄右衞門

其方儀、加判之列、久々相勤、古役之儀ニ候得ば、萬事心付可申處、勤役中、同列之內、不正之取計共致し候にも不心付罷在候段、不束之至ニ付急度も可被仰付處、格別之思召を以、先年村替被仰付候壹万石、舊地戾被仰付、溜詰格御免、帝鑑之間席被仰付候、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年六月二日、閣老久世大和守廣周○中略免役、

大和守、病氣に付御役御免の儀、尙又相願候趣、不得止事、無據被思召、依之願之通り御役御免、雁之間席被仰付、心永に養生致し、氣分快き節は、登城仕り、御機嫌相伺可申旨被仰出之、

〔有司勤仕錄〕老中並

一享保十五戌年七月十一日、松平右京大夫輝貞、老中並被仰付、右末席ニ可罷出旨、但シ月番加判無之、○中略

一上野增上寺紅葉山御名代、老中と組合、順番に相勤ル、

一登城之節は、新御番所前之溜に相詰罷在、御用之品に寄、老中一同に御前へ罷出る事も在之、

一御三家、國持大名等へ之上使相勤之、○又見柳營秘鑑

〔憲教類典二ノ六老中〕天明元辛丑年十月朔日　酒井石見守殿御渡

出羽守○水野忠友老中並御勝手掛被仰付候ニ付

一拜借幷御普請願等之類、其外御勝手江附候諸願伺共、是迄御勝手方老中江差出候分は、以來出羽守江可差出候、

一人馬御朱印幷證文願は、是迄御勝手老中江指出候分も、以來月番之老中江可被差出候、

一證文幷裏書等、是迄御勝手方老中印形之分は、以來出羽守可爲印形候、

一遠國より申越候御普請等之類、其外御入用筋之儀、是迄老中連名ニ而申越候分、以來出羽守江可申越候、

右之趣、向々江可被相達候、

九月

天明元辛丑年十月十二日　酒井石見守殿御渡

一出羽守、御勝手掛被仰付候ニ付、京大坂、其外遠國ゟ御普請其外、御入用筋之儀申越候儀、以來出羽守江申越候樣、先達而相達候得共、以來老中連名致し、出羽守も書加候樣可致候、

右之趣、向々江可被相達候、

十月

〔有司勤仕錄〕老中並

一享保十五戌年七月十一日、松平右京大夫輝貞、老中並被仰付、〇中略御城內總下座有之、下部屋入口御門掛板に、老中之次、少し置て右京大夫、其次少し置て若年寄を記す、〇中略

一世間之勤方老中に准ズ、御禮事御祝儀事、諸獻上殘、諸音物等、老中同前也、

一在所ゟ御祝儀事、御禮等之飛札等、別段之格狀也、

〔憲敎類典老中二ノ六〕享保十五庚戌年七月

一松平右京大夫輝〇貞事、老中之通被仰出候間、御禮事、其外御三家初諸大名、此外共ニ、向後老中之通可被相越候、尤贈物も可爲老中之通候、在國在邑輩は、老中江連札差越候事、可爲格狀候、

一願書宛所等ニは、不及書入候、

右之通可被相觸候

〔浚明院殿御實紀二十〕明和六年八月十九日、令せられしは、きのふ田沼主殿頭意次、宿老の列に准

せられしにより、老臣の邸にまかるべき事は、三家をはじめ万石以上以下も、その邸にいたるべし、また贈遺も諸老にひとしかるべし、在封の輩、飛札もて宿老のもとに申すことあらば、意次は別に一封たるべし、願聞え上るふみには、其名を加ふるに及ばずとなり、廿三日、令せられしは、田沼主殿頭意次、今よりのちは、評定所の會議、宿老の輩と互に參るべし、よりて主殿頭意次が參る日、誓約あらば意次が名を用ふべしとなり、

〔浚明院殿御實紀四十五〕天明元年九月十八日、出羽守忠友、○水野こたび宰臣の班に准ずべく仰下されしかば、何事も宰臣と同じかるべし、在封書簡を呈する時は、忠友には別書につくりて送るべし、又申文には、忠友が名を連署することなかるべしとなり、

〔御張紙留〕本多彈正大弼殿、○忠籌、寛政二年四月爲老中準御老中格被仰付候處、注進狀、格通を以別段差出し候に不及承付被成、御禮事其外、御三家初諸大名其外共、老中之通可被相越候、贈物も老中之通たるべく候、在國在邑之輩々は、老中江連札差越候節、可爲格狀候、

願書之宛所等ハ、不及書入候旨御書付出ル、

〔營中御日記九〕寛永九年十一月十八日、松平伊豆守、○信綱宿老衆並、御奉公可仕旨被仰付之

〔營中御日記十〕寛永十年五月五日、堀田加賀守、○正盛阿部豐後守、○忠秋宿老並可勤旨、於御前被仰付之、

○按ズルニ、此三人、寛永十二年十月、老中ニ列セラル、

〔藩翰譜續編十一間部〕越前守藤原詮房は、○中略明る二年○寶永の正月、御側衆となり、○中略其冬○寶永三年從下の四位にのぼり、宿老の座なみに准ぜられしと云ふ○中略詮房ことに御むねにかなひしかば、常にうちにさぶらひて、出頭其右に出る人もあらず、宿老の人々の上請する所も、みな詮房につきてぞ申しける、されば正德二年文昭院殿かくれさせ給ひしにも、御跡の事どもをば詮房に附托せさせ給ひしと

前將軍老中

ぞうけたまはる、

〔浚明院殿御實紀二十一〕明和六年八月十八日、御側用人田沼主殿頭意次、加判の列に准せられて、侍從に任じ、加秩五千石を給ひ、諸老とともに祇候すべしと命せらる、

〔明良帶錄餘集〕御老中格

安永之度、田沼主殿頭意次は、嬖寵之出頭たるを以て爰に昇る格にて、御用部屋御內談之御席には列らずと云、

〔浚明院殿御實紀四十五〕天明元年九月十八日、御側用人水野出羽守忠友、宿老に准じ、昵近故のごとしと命せられ、封地五千石を增下され、鎗二柄をもたすべしとゆるし給はる、

○按ズルニ、此他御側用人ニシテ老中格トナリシモノ、將軍綱吉ノ時ニ牧野成貞、田沼意次等アリ、側用人篇ヲ看ルベシ、

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年九月四日、小笠原壹岐守ニ老中格ヲ命ズ、

小笠原圖書頭事は、一昨亥年五月、横濱に於て島津三郎一件償金、英人へ渡せし譯を以て御役御免なりしが、爰に至りて壹岐守と改名、老中格被命、追て本役になる、

○按ズルニ、老中格ノ任免ハ、老中任免ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

〔藩翰譜五安藤〕大御所〇德川家康駿河に御座を移されし後、直次、〇安藤本多上野介正純、成瀨隼人正正成と三人奉書連署の事を承る、其後遠江宰相殿〇德川賴宣には附られたり、

〔藩翰譜十一本多〕上野介正純、年十九より、大御所〇德川家康に仕へ、終に執事の職に至り、〇中略元和二年、大御所薨じ給ひし後、正純關東に參て將軍家〇德川秀忠に仕ふ、執政たること元の如し、

〔惇信院殿御實紀三十一〕寶曆十年五月六日、酒井雅樂頭忠恭はじめ參覲三人松平右京大夫輝高、〇老中御位ゆづらせたまふ後、大御所〇德川家重の御方につかへ奉るべしと命せらる、　九日、令せら

れしは、○中略大御所に奉仕の宿老御側へも、本城の如く贈遣あるべしとなり、

〔文恭公實錄四〕天保七年九月四日、命來歲讓二大統于西城公一、○德川家慶稱二大御所一、○德川家齊、中略、松平宗發爲二大御所老中一、

○按ズルニ、此他土井利位、間部詮勝、井上正春等モ亦前將軍家齊ノ老中タリシコトアリ、老中任免ノ條ヲ併セ看ルベシ、

〔吏徵首卷萬石以上〕西丸老中一人不同　慶長十二年丁未七月日始置

〔職掌錄〕西丸老中　當職二員、或は一員、格式等、都て御本丸老中と替ることなし、

〔有司勤仕錄〕西丸老中

一御本丸方之御用向に不二相替一勤レ之、諸獻上、幷御機嫌窺等之奉書出レ之、御名代上使相勤レ之、其外西丸一巻品々御用有レ之、萬事御本丸老中に准ず、

一西丸御用向、或は西丸附に御役替等、御本丸に而被二仰付一有レ之時は、則御本丸老中と列座也、

一大納言様御成之節御供、是又御本丸に同じ、○又見二柳營秘鑑、職掌錄等一、

〔藩翰譜五土井〕大炊頭源利勝は、○中略慶長七年、下總國小美川の地を賜ひ、一万石其後從五位下に叙し、大炊頭に任じ、大納言家○德川秀忠の宿老となされ、○下略

〔藩翰譜五永井〕信濃守尚政家を繼ぐ、○中略大相國家○秀忠に仕へ奉る、慶長九年、常陸國貝原塚の地を賜ひ、千石○中略同き九年○元和遠江國にして地又加へらる、五千石加へられて、都合二万四千石を領すといふ、是よりさき大相國家宿老の職に在て、御書院番の頭を兼ぬ、これを西城の御老中といひしなり、但し宿老職を承りし年月、諸役人補等に詳ならず、

〔藩翰譜五青山〕伯耆守忠俊、十四歲の時より竹千代殿○家光に仕へ參らせ、○中略元和元年九月、兩御所○家康、秀忠、の仰にて、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝と共に、三人同じく竹千代殿の御傅になさる、

西丸老中兼本丸老中

○按ズルニ、此時世子ニ三傳ヲ附セシガ故ニ、老中ヲ置カザリシナラン、

〔藩翰譜 二松平荻生〕和泉守乘壽、〇中略 十九年〇寛永 十二月十五日、竹千代殿の〇右大將家の御事〇家綱 御家老となされ、〇下略

〔藩翰譜 五阿部〕豊後守阿部忠秋、〇中略 慶安三年の九月五日、大納言殿〇家綱 西城に遷らせ玉ふによつて、忠秋を以て彼御家老に附らる、

○按ズルニ、西丸老中ノ任免ハ、老中任免ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

〔有德院殿御實紀 五十九〕延享元年九月十八日、この頃、執政欠員多きをもて、酒井雅樂頭忠恭、しばし本城の事奉り、西城をも見廻るべしと仰付らる、

〔藩翰譜續編 五上酒井〕左少將忠恭は、〇中略 延享元年の五月朔日、宿老の職にすゝみ、侍從になされて、西城に附らる、

〔教令類纂 二集六十六〕延享甲子年〇元年 九月十九日

諸大名、且又從二其外一差越候、願書書狀其外共、雅樂頭〇酒井忠恭 連名に可二書加一候、西丸方へ連名に不レ及候、併重事には連名候樣、可レ被二相心得一候、

右之趣、寄々可レ被二達置一候、

〔浚明院殿御實紀 八〕寶曆十三年十二月十一日、若君の宿老松平周防守康福、本城宿老を兼、直月連署の事奉はるべしと命せらる、

〔教令類纂 二集六十七〕寶曆十三癸未年十二月

大目付江　周防守〇松平康福

向後西ノ丸へ日々罷出ニ不レ及、月並之間、一兩度も爲二見廻一罷越候事、

一周防守月番之節ハ、西丸方之御用向、非番之老中、申合取扱候事、

用部屋

右之趣、向々江可被相達候、

十二月

〔監察故談〕一古へは御老中方、若年寄衆とも、今の御用部屋といふはなくて、中之間の圍爐裏の廻りに、御列座にて御用向執り行はせられしとなり、そのせつ御目付兩人、中の間入口に相詰め、御用を承りしとなり、實は御老中方御建議のあひに心附ん爲なりとぞ、今はその形のみ殘りて、御揃より表御廻りにて兩人ツヽ詰る也、御老中、若年寄衆共に御用部屋出來て、今は隔る事天地のごとし、

〔紳書下〕一嚴有院殿〇徳川家綱の御代の頃迄は、御坐の間の下の間の次に、今もある九尺に三間の間を九疊敷といひて、其次の間の、間の襖障子を開けば、則今の相の間といふ所に、今も有夕顏の板戸たちし椽がはに、毎日老中は伺候せられしなり、其次の間は松に藤の杉戸をへだてヽ、今も有如くなりき、扨夫より北に入所の間をば、御鑰かけの間といひて、御持鑰をかけ置きし所なり、〇註略夕御膳を召上られし時、其下りし御膳を老中に、一人々々にみせてさげられしなり、其頃は御小性衆の中にても、御本膳の御役を被仰付しは、老中の申付られて、事重くありし事に申たりき、然れば毎日老中の伺候せられし間は、御坐の間よりしては、纔に御坐の間の次の間と、九疊敷の間とを隔てしのみなりき、〇中略扨常憲院殿〇徳川綱吉御代の初も、大やうは元の如くなりしに、稻葉石見守〇正休堀田筑前守〇正俊を刺殺せしは、かの松に藤の杉戸の口に參りて、御用候とて、筑前守の夕顏の杉戸の際の椽がはに伺候せしを呼たてヽ、其次の間の松に藤の杉戸外にて刺殺したる也、是より御栖居改りて、昔より御膳立の間なりし所を老中の御用部屋と名付て、そこに老中伺候し、彼老中伺候の間を桐の間といひて、番衆など置れしなり、〇註略是より老中御前を遠ざけられし事、幾間といふ事をしらず、御持鑰も外へ出されて名のみ殘りたり、〇註略昔は老中常には

彼夕顔の杉戸の椽がはに、鍵の手に坐につきて伺候し、杉戸を開けば其まゝ御坐の間なりき、人人の老中に物申には、黒書院の溜の間にて聞かれし、夫より事輕き事は、今の如く御右筆部屋の緣頰にて事を沙汰せられき、されば今も老中附の坊主といふ者、奥と表とに二つに分れてある、其表方の者は、黒書院に召つかはれし所なり、○中略常憲院殿御代には、老中若年寄などいふもの、一月に五三度ならでは御前に參られし事もなかりしといふ、文昭院殿○德川家宣御時に、昔の如く毎日に召出されし也、

一若年寄といふ者は、大猷院殿○德川家光御時に出來しなり、○中略若年寄部屋とてもなく、御側衆の部屋を借りて、そこに伺候せしと也、

〔監察故談〕一他向は皆部屋と役所とあり、御老中若年寄御目付は、役所を部屋と呼ぶ、是は他向は皆夫々の職掌あり、御老中若年寄御目付、他向よりの御用向集りて、それをとり扱ふが職事なれば、日々定れる職事なし、このゆへに、御役所といはずして部屋といふなり

〔大猷院殿御實紀附錄四〕宮城甚右衛門和甫は、いと抗直の質性にて、○中略あるよ殿中にて、老臣はいづくにあるやと尋し者あり、和甫、えこつぼにこそといろふ、いづくなりやと問ふ、和甫、汝はしれたる人かな、老中がよりて依怙する所なるをしらずや、卽ち右筆部屋今御用部屋といふの事なり、○下略

〔鳩巢小說下〕只今御右筆衆ナド居被申候所、其時分老中ノ會所ニテ候間、其所ニテ諸事被仰渡候、

〔御當家令條一〕武家諸法度

一新義之城郭構營、堅禁止之、居城之隍壘石壁以下敗壞之時、達奉行所可受其旨者也、櫓塀門等之分者、如先規可修補事、○中略

一諸國主幷領主等、不可致私諍論、平日須加謹愼也、若有可及遲滯之義、達奉行所可受其旨事、〇中略

寬永拾貳年六月廿一日

〔御當家令條〕三十四　公事裁許役人起請文前書

一於評定所批判相談之時、互ニ心底存寄之通、不寄善惡毛頭茂不相殘可申出事、〇中略

慶長十九年寅二月十四日　酒井雅樂頭　酒井備後守　土井大炊助　安藤對馬守

水野監物　井上主計頭　米津勘兵衞　島田兵四郎　各四判

古事類苑

官位部五十四

徳川氏職員三

若年寄

若年寄トハ、老中卽チ年寄ニ對スル稱ニテ、若年老中ノ謂ナリ、此職名ハ、土井利隆、酒井忠朝ノ如キ、大老ノ子ニシテ、父ニ隨ヒテ政事ニ參セシ時、俗ニ若年寄ト稱セシニ始マレリ、而シテ諸書ニ少老又ハ執事ト記セルハ、正シキ名稱ニアラズ、大抵四人ヲ定員トシ、老中支配以外ノ諸役人ヲ統轄シ、特ニ旗本ノ士ヲ支配ス、故ニ又若年寄ヲ旗本支配トモ稱セリ、譜代大名中、小祿ナル者ヲ以テ之ニ補ス、位階ハ普通ノ大名ト同ジク從五位下ナリ、役料ハ老中ト同ジク給セラレズ、但シ時ニ由リテ年俸五千俵ヲ給シ、又隱居若シクハ部屋住ノモノ、及ビ萬石以下ニシテ若年寄格等ニ補セラルヽモノニハ、役料ヲ給スルノ定メアリ、其他ノ待遇モ亦大抵老中ニ次グ、西丸ニモ亦若年寄アリ、二人ヲ定員トス、前將軍附ノ若年寄ニハ定員ナシ、

〔有司勤仕錄〕若。年。寄。　一名に麾。下。副。執。事。と云

〔大猷院殿御實紀七十三〕慶安二年二月十九日、少老朽木民部少輔稙綱、〔中略〕少。老。の事、此世には御。旗。本。支。配。と唱しなり、

〔職掌錄〕若年寄　當職四人、又は五人、

〔有司勤仕錄〕若年寄

一月番の節、諸御用向司之御勝手向之事、臨時に相勤、又常々御用掛有之、總而老中、御留守居、三奉

行等支配之外、諸旗本悉く支配す、又支配もあるに依て、其司處、巨細之事迄不レ聞と云事なし、毎日御扶持方裏判迄悉く押レ之、其外末々御小人御中間等、家督被二仰付一書付迄判形押レ之、御目付へ被レ渡事也、

一登城之時、月番案内之事老中と同じ、但非番月々、面々外へ案内無レ之登城也、

一御目見御機嫌伺等老中と同じ、其外月番之節對客、是又同前也、○中略

一上野、○寛永寺増上寺、御女中方、御靈屋之御名代勤レ之、

一御用向繁多なれば、一々記すにいとまあらず、諸大名諸旗本へ應對之事、老中に准じて可レ知レ之、但諸大名幷老中とは各別に品有レ之、○中略

一支配之人、家督或御役替等之時は、老中被二申渡一節、若年寄侍座する也、

〔明良帶錄前篇〕若年寄

御掛りは、御勝手向並、大奥向、是は御一老之方御心得、万石以下、遠國之外は大方御支配なり、御政事向御觸事は、御目付衆へ御書付御渡し、御役向者、御同朋頭を以向々御書付御渡おり、其日の御用向、奥御右筆組頭、取調て申上る、御政事第一の職也、兩山○寛永寺増上寺御名代、並孝恭院樣○徳川家基御祥月御名代、其外御成之御供有なり、

〔職掌錄〕若年寄

御勝手懸、御廳懸、御馬懸、御女中樣方御用承等、各一人充、定式御用引受勤レ之、御成御供、歩行に而一人、御駕籠御左の方に附、御用承レ之、

〔幕朝故事談〕御女中樣掛りは、若年寄の役也、老中はせぬ事なり、

〔教令類纂初集三十九〕寛永十一甲戌年三月三日

定

一御旗本相詰候輩、萬事御用御訴訟之事、
一諸職人御目見、幷御暇之事、
一醫師方御用之事
一常々御普請、幷御作事方之事、
一常々被レ下物之事
一京、大坂、駿河、其外所々御番衆、幷諸役人御用之事、
一壹萬石以下、組はづれの者御用、幷御訴訟之事、
寛永十一年甲戌
松平伊豆守どの〈○信綱〉へ
阿部豊後守どの〈○忠秋〉へ
堀田加賀守どの〈○正盛〉へ
三浦志摩守どの〈○正次〉へ
阿部對馬守どの〈○重次〉へ
太田備中守どの〈○資宗〉へ

〔享保集成絲綸錄〕一寛永十二亥年十一月十日
一御旗本諸奉公人御用幷訴訟、土井遠江〈○利隆〉備後〈○酒井忠朝〉志摩備中對馬五人にて、一月ヅヽ番致可レ承候事、〈○中略〉
一御旗本諸奉公人御用幷訴訟承候日
三日　九日　十八日〈○中略〉
一寄合日

二日　十二日　廿二日

寛永十二年亥十一月十日

〔憲廟實錄十七〕元祿六年九月廿九日、秋元但馬守喬朝、〇若年寄母堂、御臺所、五丸君、鶴姫君の御用を奉る

〔憲廟實錄二十三〕元祿十一年二月十四日、執事の職掌を分、秋元但馬守喬朝は、闔內幷に營作の事を掌る、加藤越中守明英は、刀劍猿樂の事を掌る、米倉丹後守昌尹は、納戶細工方の事を掌る、本多伯耆守正永は、數寄屋犬馬の事を掌る、　五月七日、執事秋元但馬守喬朝、米倉丹後守昌尹圖計を奉る、

〔吏徵別錄上萬石以上〕若年寄　按若年寄御勝手懸、此爲始、

〔文昭院殿御實紀四〕寶永六年十二月廿五日、納戶、小普請方、賄、細工所の事、これまで少老一人づゝ司りしが、此後は直月にて沙汰すべしと仰出さる、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年二月九日、少老森川出羽守俊胤、圖財の事つかさどるべしと命せらる、

〔幕朝故事談〕若年寄御勝手懸りは、德廟〇吉宗の御代、本多伊豫守〇忠統始てなり、

〔文昭院殿御實紀十三〕正德二年正月廿一日、少老久世大和守重之、〇中略日記の事つかさどるべしと仰付られ、〇下略

〔有章院殿御實紀九〕正德四年九月十二日、少老森川出羽守俊胤、日記の事つかさどるべしと命せらる、

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年正月十一日、海防掛ヲ參政ニ命ズ、

松平和泉守殿〇乘全口達、海岸防禦筋御用向、近來多端相成候に付、是より月番相定、取扱候樣被

仰出候、右に付當月本多越中守〇忠篤、二月遠藤但馬守〇胤親、三月本庄安藝守〇道貫、相心得申候、

〔教令類纂初集三十九〕寛文二壬寅年二月晦日

一老中幷御旗本支配之差別〇中略

御書院番頭、御小性組番頭、新番頭、御小性衆、御小納戸衆、中奥衆、百人組之頭、御持弓御筒頭、御目付衆、御使番衆、總御弓御鐵炮頭、火消役人、歩行頭、小十人組之頭、西丸御裏御門番之頭、御納戸頭、御船手頭、二丸御留守居衆、中川御番衆、

九千石以下交代無之寄合、御膳奉行、御右筆衆、小普請奉行、道奉行、醫師、儒者、御書物奉行、御細工頭、御賄頭、御臺所頭、御同朋、黑鍬頭、御中間頭、御小人頭、

右は久世大和守〇廣之、若年寄、土屋但馬守〇數直、若年寄、支配、

〔憲教類典二ノ五御役〕延享元甲子年六月

若年寄支配

御書院番頭、御小性組番頭、小普請奉行、西丸御留守居、新御番頭、御小性、御小納戸、百人組之頭、御持弓筒頭、御女中樣方御用人、御廣敷御用人、右衞門督殿小性頭、刑部卿殿小性頭、田安用人、一橋用人、林內記、御先弓筒頭、御目付、御使番、御鐵炮方、西丸御裏門番之頭、御徒頭、小十人頭、右衞門督殿物頭、刑部卿殿物頭、御船手、二丸御留守居、御納戸頭、御腰物奉行、御鷹匠頭、奥御右筆組頭、法心院樣蓮淨院樣御用人、御膳奉行、表御右筆組頭、中奥御番、御書物奉行、諏訪部久右衞門、御賄頭、御馬方、馬醫、御細工頭、御材木石奉行、吹上奉行、濱御殿奉行、御膳所御臺所頭、表御臺所頭、御休足御庭者支配、御鳥見組頭、吹上添奉行、御同朋頭、御數寄屋頭、御樂園奉行、評定所勤役儒者、儒者、繪師、撿挍、舞々、役者、中川御番、寄合、御醫師、黑鍬頭、御掃除頭、御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、

〔萬天日錄十四〕一御馬方　一御馬預方　一伯樂方　一御數寄屋方　一御茶之御用幷茶師　一

狩野家

右ハ土井能登守〇利房、若年寄、支配

一御腰物奉行以下、御金具師、御鞘師、本阿彌家、　一御鷹方　一御飼差御鳥見

右者堀田備中守〇正俊、若年寄、支配也

〔德川禁令考十四若年寄〕支配向

開成所頭取、西洋畫學所頭、據官府職補之

對客

〔憲教類典二ノ六老中〕正德三癸巳年十一月二日

一非番之老中若年寄中、今程御城勤繁候ニ付、朝之內、手前ニ而も御用取込候故、見廻之衆江存候樣ニ逢候儀も難成候間、手透考候而、朝之內可令對客候儀、御用無之、逢被申計に被相越候衆中江も、右之節可懸面談候、此旨寄々可被相達候、

十一月

享保元丙申年九月九日

一十八日　廿日　廿四日

右三日共に、老中若年寄中、向後對客有之筈ニ候間、寄々可被申達候、

申九月九日

延享三丙寅年二月二日、佐渡守殿御渡、　御目付江

一老中若年寄對客之節、七半時分ゟ何も詰掛、殊外騷敷、前々之通、明六時過ニ揃候樣、向々江可被申達候、尤大御所樣、〇吉宗大納言樣、〇家治御目付江も可有通達候、

位階俸祿

〔柳營秘鑑一〕諸御役人之次第并官位

一若年寄、〇中略右從五位下之御役也、

資格待遇

〔明良帶錄 前篇〕若年寄 從五位下諸大夫

〔德川禁令考 十八給規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定○中略

別紙

御役金被下高之覺○中略

金四千兩 同上○隱居并部屋住ヨリ被仰付候　若年寄、○中略　金四千兩 萬石以下 若年寄格、若年寄並、但高八千石以上之者江ハ半減、

〔有章院殿御實紀 十五〕正德六年四月六日、少老大久保佐渡守常春、大久保長門守敎寬、森川出羽守俊胤、在職の間、各廩米五千苞を給ふ、

〔有德院殿御實紀 六〕享保三年三月三日、少老大久保長門守敎寬、大久保佐渡守常春も、ともに五千石の地を加賜せらる、此後少老に五千俵の官量をたまはることは停廢せらるゝとなり、

〔浚明院殿御實紀 四十九〕天明三年十一月朔日、奏者番田沼山城守意知、少老に加へられ、官料五千俵を給ふ、交番の月直はつかふまつらずして、奉ることあらんときは、内殿にも入るべしとなり、

〔柳營秘鑑 一〕諸御役人之次第并官位

一若年寄○中略

若年寄ハ元來諸士之別當、無城之御役也、依之城主之面々被仰付時ハ、每邊座上蒙仰之例也、○又見職掌錄、有司勤仕錄

〔明良帶錄 前篇〕若年寄

門地により、人材によりて、大番頭よりも昇る、又一万石位之仁は簡掛に昇る、延寶年中、永井尙庸、所司代に昇る、貞享年中には、内藤重頼、大坂御城代に昇る、

〔殘集柳營秘鑑 一〕一若年寄は、帝鑑之間、雁之間、菊之間、柳之間〻も御役被仰付候事也、尤柳之間外樣衆は、御奏者番等勤之、其上にて御役被仰付候事歟、右帝鑑之間、柳之間之面々、御役被仰付候節、

任免

傘袋を取令持之、供廻り等之格合、右〇老中同、〇中略

一若年寄方者、支配之御役人計、名差合有之面々者、名替有之事也、

〔吏徴別錄上萬石以上〕若年寄　元祿十二年己卯七月廿九日、若年寄座順、先輩の構なく、城主次第座上と被仰出、

〔職掌錄〕若年寄　每多雁一、御用部屋にて賜之、

〔憲教類典二ノ六老中〕延享三丙寅年十二月廿九日、讃岐守殿、伊豫守殿、御目付江、

一來年始ゟ向後御本丸月番之若年寄は、御流頂戴無之、時服は於御用部屋頂戴之事ニ候間、可被得其意候、

右之通相觸候間、爲心得相達候、

〔柳營秘鑑二〕御內書之次第

一老中　御用人　若年寄、何も於御用部屋御內書頂戴之、

〔有司勤仕錄〕若年寄

一御城中總下座、御老中と同じ、〇中略

一世上よりの勤方、御禮事、御祝儀事、諸獻上殘り、諸音物等も老中と同、但品有之、

〔憲教類典二ノ六老中〕天明八戊申七月廿五日　伊藤河內守達

一若年寄衆、乍御勤死去之分計、以來殿文字相認、其餘は都而殿文字不相認方ニ相心得、寄々向々江相達候樣、伺之通大膳亮殿江被仰渡、依之御達申候、以上、

六月　伊藤河內守

〇若年寄ノ資格待遇ノ事ハ、老中ノ資格待遇ノ條ヲモ參看スベシ、

〔諸御役代々記一〕若年寄

堀田加賀守正盛　寛永五辰五月廿一日、御小性組番頭兼之、同十酉五月五日御老中江、

松平伊豆守信綱　寛永五辰十二月十四日、御小性組番頭兼之、同九申十月十八日御老中江、

阿部豊後守忠秋　右同断、寛永十酉三月廿六日御老中江、

太田備中守資宗　寛永十酉三月廿六日右同断、同十五寅四月廿四日御奏者番江、

阿部對馬守重次　右同断、寛永十五寅十一月七日御老中江、

三浦志摩守正次　右同断、同十五寅十二月十二日御免、

酒井備後守忠朝　寛永九申十一月十九日、御小性組番頭兼、同十五寅四月廿四日、御奏者番江、

土井遠江守利隆　同年十二月十四日、御小性組番頭より右同断、

朽木民部少輔稙綱〇稙一作植　寛永十三子十月、御書院番頭より、後志摩守民部少輔兩人にて勤之、寛文元丑六月御奏者番江、

久世大和守廣之　寛文二寅二月廿二日御側衆より、同三卯三月三日御支配方定ル、同年八月十五日御老中江、

土屋但馬守數直　右同断、寛文五巳十二月廿三日御老中江、

土井能登守利房　寛文三卯八月十六日、御奏者番より、延寳七未七月十六日御老中江、

永井伊賀守尚庸　寛文五巳十二月廿二日、御奏者番より、同十戊二月十四日(中略)京都所司代江、

堀田備中守正俊　寛文十戊二月廿二日、御奏者番より、延寳七未七月十日(中略)御老中江、

松平因幡守信興改二信衡一　延寳七未七月十日(中略)御側衆より、天和二戊二月十九日(中略)御奏者番江、

石川美作守乘政　延寳七未七月十日(中略)御側衆より、天和二戊三月十九日(中略)御奏者番江、

堀田對馬守正英　延寳九酉九月六日、若君様御守より、(中略)貞享二丑六月十日御奏者番江、

稻葉石見守正休　天和二戊三月廿二日、御側衆より(中略)貞享元子八月廿八日、於二殿中一堀田筑前守正俊ヲ殺害シテ卒、

秋元攝津守喬朝改二但馬守一　天和二戊十月十六日、寺社奉行より(中略)元祿六酉九月廿九日、月番御免、(中略)同十二卯十月六日(中略)御老中江、

内藤若狹守重頼改二伊賀守一、又大和守一　貞享元子十二月十日(中略)若君様御守より、同二丑九月廿七日(中略)大坂御城代江、

貞享二丑六月廿一日、詰衆より、(中略)同三寅正月廿一日、(中略)御側御用人江、
松平伊賀守忠德

貞享二丑八月九日、御奏者番より、同三寅正月廿一日、御側御用人江、
太田備中守資直（改二攝津守一）

貞享二丑十一月六日、(中略)御側衆方、元祿二巳二月三日、御役被二召放一、
稻垣安藝守重之

貞享四卯十二月十八日、寺社奉行より、同五辰八月廿七日、依願御免、
加賀守嫡子
大久保安藝守忠增

元祿二巳二月六日、御奏者より、同年五月二日、御奏者江歸役、
三浦壹岐守直次

元祿二巳五月三日、奧詰より、同月十一日、御役御免、
山口大膳亮直久

元祿二巳五月十一日、(中略)御側衆より、同三午九月廿九日、依願御免、
松平安房守信孝

元祿三午七月十日、御奏者番より、同七戌三月、依願御免、
內藤右近大夫政親（改二丹波守一）

元祿三午十月十一日、寺社奉行より、(中略)正德元卯十二月廿二日、依願御免、
加藤佐渡守明英（改二越中守一）

元祿七戌二月十九日、御奏者より、同九子三月十八日、御奏者江歸役、
松平彈正忠正久

元祿九子三月廿八日、(中略)同十二年七月十二日卒、
米倉丹後守昌忠

元祿九子十月朔日、寺社奉行より、(中略)寶永元申九月廿七日、(中略)御老中江、
本多紀伊守正永（改二伯耆守一）

元祿十二卯七月廿八日、御小性より、(中略)寶永六丑九月廿五日、依願御免、
稻垣對馬守重富

元祿十二卯十月六日、寺社奉行より、(中略)寶永二酉九月廿一日、御老中江、
井上大和守正岑

寶永元申十月朔日、寺社奉行より、同三戌十月十五日、西丸江被爲附、同六丑年正月十日、御本丸一同ニ成、正德元卯六月三日卒、
永井伊賀守直敬（改二伊豆守一）

寶永二酉九月廿一日、寺社奉行より、正德三巳八月廿三日、御老中江、
久世讚岐守重之

寶永三戌十一月十五日、御側衆より西丸江被爲附、同六丑正月十日、御本丸一同ニ成、(中略)享保八卯三月六日老衰に付御免、
大久保長門守教寬

正德元卯六月廿七日、寺社奉行より、(中略)同六申三月廿一日卒、
鳥居伊賀守忠教

水野監物忠元　正徳元卯十二月廿二日御奏者番より、同四午九月六日京都所司代、江

大久保山城守忠富改佐渡守、改常春　正徳三巳八月三日御側衆より、(中略)享保十三申五月七日(中略)御老中、

森川出羽守重興又令重　正徳四午九月六日寺社奉行より、享保二酉十一月十六日御役被召放、

石川近江守総茂四品　享保二酉九月廿七日寺社奉行より、同十巳六月十一日西丸江被為附、同十七子(中略)御側御用人、江

松平能登守乗堅　享保八卯三月六日御奏者番より、同九辰十一月十五日西丸江被為附、同廿卯五月廿三日(中略)西丸御老中、江

水野壹岐守忠定　享保八卯三月六日大御番頭より、同二十卯六月三日(中略)西丸江被為附、延享二丑九月朔日御本丸御供、同五辰六月廿五日卒、

本多伊豫守忠統　享保十巳六月十一日寺社奉行より、(中略)寛永三午年十月十二日病氣依願御免

太田備中守資晴　享保十三申五月七日寺社奉行より、同十九寅九月廿五日大坂御城代、江

小出信濃守英貞　享保十七子三月朔日寺社奉行より、西丸江被為附、延享元子十一月廿日卒、

西尾隠岐守忠直　享保十九寅九月廿五日寺社奉行より、延享二丑九月朔日(中略)西丸御老中、江

板倉伊豫守勝清改佐渡守　享保廿卯六月五日寺社奉行より、(中略)寶暦十辰四月朔日御側用人、江

戸田右近将監氏房改淡路守　延享元子十一月廿三日御奏者番より、西丸江被為附、同二丑九月朔日大納言様江被為附、寶暦八寅三月十九日病氣依願御免、

堀田出羽守正陳改加賀守　延享二丑七月朔日大御番頭より、同年九月朔日大納言様江被為附、同十二月廿一日御本丸江被召返、寛延元辰十月十五日(中略)大御所様江被為附、

加納遠江守久通　延享二丑九月朔日御側衆より、新規ニ大御所様江御附、同四卯九月十五日年寄候に付、月番御免、

堀式部少輔直舊　延享二丑九月朔日大御番頭より、新規ニ大御所様御附、同五辰六月十九日卒、

三浦志摩守義次　延享二丑十二月廿一日御奏者番より、大納言様江被為附、寛延二巳六月廿九日病氣依願御免、

秋元攝津守涼朝改但馬守　延享四卯六月朔日寺社奉行より、大納言様江被為附、同年九月三日西丸御老中、江

延享五辰七月朔日、御奏者寺社奉行方、明和四亥十月十五日卒、

小出伊勢守英智 改ニ信濃守

延享五辰七月朔日、御奏者より大御所様江被為附、寛延四未七月十二日、雁之間詰被仰付、

小堀和泉守政峯

寛延元辰閏十月朔日、御奏者寺社奉行方、明和五子十一月九日卒、

松平宮内少輔忠恒 後改ニ摂津守

寛延二巳七月六日、御奏者寺社奉行方西丸附、寶暦十辰四月朔日（中略）大御所様江被為附、同十一巳八月三日、雁之間詰被仰付、

酒井山城守忠休 改ニ石見守

寶暦四戌三月朔日、（中略）御側衆より、（中略）同六子五月廿一日、（中略）御側御用人江、

大岡出雲守忠光

寶暦六子六月十一日雁之間詰より再役、同十辰四月朔日、御代替ニ付、大御所様江被為附、同年十二月十二日、病気依願御免、

小堀和泉守政峯

寶暦八寅三月廿八日、御奏者寺社奉行より西丸附、同年九月十四日、御役御免差扣被仰付、

本多長門守忠英

寶暦八寅九月廿八日、御奏者番より西丸附、同十辰四月朔日、御代替ニ付、御本丸江御供、安永四未年八月廿日卒、

水野壹岐守忠見

寶暦十辰三月廿二日、御奏者番寺社奉行方、同十二月十九日、大御所様御附、同十一巳八月三日、雁之間詰被仰付、

鳥居伊賀守忠孝

寶暦十一巳八月十五日、雁之間詰より再役、（中略）天明七未四月十八日卒、

酒井石見守忠休

寶暦十二午十二月九日、寺社奉行より再役、西丸附、安永八亥四月十六日御本丸若年寄末席在、（中略）天明元丑閏五月十一日、西丸附、同年九月十八日、西丸御老中江、

鳥居伊賀守忠孝 改ニ丹波守、改ニ忠意、

明和二酉八月廿一日、御奏者寺社奉行より西丸附、安永八亥二月廿四日、（中略）御本丸若年寄之末席在、（中略）天明元丑閏五月十一日、西丸附、同四辰五月十四日、御本丸勤、同八申三月十九日、病気依願御免、

酒井飛驒守忠香

明和四亥十月廿六日、御奏者番方、天明六午七月廿四日卒、

加納遠江守久堅

明和五子十一月十五日、（中略）奥勤兼御側衆より、（中略）安永六酉四月廿一日、御側御用人江、

水野豊後守忠友 後改ニ出羽守

安永四未八月廿五日、御奏者寺社奉行方若年寄上座被仰付、天明三卯年二月八日卒、

松平伊賀守忠順

安永六酉四月廿一日、御奏者番より、天明四辰五月十日、西丸附、同五巳十二月廿日卒、

米倉丹後守昌晴

太田備後守資愛　天明元丑閏五月十一日、御奏者寺社奉行より西丸附上座被二仰付一、同年九月十八日、御本丸勤、(中略)寛政元酉四月十一日、京都所司代ニ、

井伊兵部少輔直朗　天明元丑九月十八日、御奏者番より西丸附、同六午閏十月朔日、御本丸勤、(中略)文化九申十二月廿五日、近年多病ニ付、御役御免、

田沼山城守意知　天明三卯十一月朔日、無足、部屋住、御奏者番より、(中略)同四辰三月廿四日、於二殿中一(中略)手疵ヲ負、同四月二日卒、

安藤對馬守信明　天明四辰四月十五日、御奏者寺社奉行ゟ、寛政五丑八月廿四日、加判之列ニ、

松平玄蕃頭忠福　天明五巳十二月廿四日、御奏者番ゟ西丸附、同六午閏十月朔日、御本丸勤、同八申四月十一日、病氣依レ願御免、

本多彈正少弼忠籌　天明七未七月十七日、帝鑑之間席より(中略)同八申年五月十五日、御側御用人ニ、

青山大膳亮幸完　天明八申三月廿二日、御奏者番より、寛政三亥九月十八日、病氣依レ願御免、

京極備前守高久(後改二備中守一)　天明八申六月十八日、大御番頭より、(中略)文化五辰四月廿日卒、

堀田攝津守正敦　寛政二戌六月十日、大御番頭ゟ、文化十四丑七月廿四日、御側月番御免、(中略)天保三辰正月廿九日、老衰ニ付願之通隱居、

立花出雲守種周　寛政五丑八月廿五日、御奏者寺社奉行より、文化二丑十一月十九日、(中略)御役御免差扣被二仰付一、

青山下野守忠裕　寛政八辰十一月廿九日、御奏者寺社奉行より若君樣付、同十二申十月朔日、大坂御城代ニ、

松平能登守乘保　寛政十午七月廿四日、御奏者番より西丸附、文化元子八月十三日、御本丸、(中略)文化三亥十月十二日、大坂御城代ニ、

植村駿河守家長　寛政十二申十一月朔日、御奏者寺社奉行ゟ西丸附、文化二丑十一月十五日、御本丸勤、(中略)文政八酉四月十八日、御老中格ニ、

青山大膳亮幸完　文化元子八月十五日、御奏者番より再勤、西丸附、文化五辰十一月八日卒、

小笠原近江守貞溫　文化二丑十二月廿二日、御奏者番より西丸附、同九申四月四日、御本丸方、文政五午二月廿三日卒、

水野出羽守忠成　文化三寅十月十二日、御奏者番寺社奉行ゟ御本丸方、同九申四月四日、御側御用人江、西丸方、

水野壹岐守忠韶　文化五辰十一月廿日、御奏者番ゟ西丸附、文政十一子五月廿六日卒、

有馬佐兵衛佐譽純　文化九申四月四日、御奏者番寺社奉行より西丸附、文政二卯八月六日、病氣依願御免、

京極周防守高備(改ニ上總守)　文化九申十二月廿五日、大御番頭より文政十一子十二月廿一日、病氣依願御免、

内藤豐前守信敦(改ニ紀伊守)　文化十四丑七月廿四日、御奏者番寺社奉行兼帯より、文政五午九月三日、京都所司代江、

田沼玄蕃頭意善(改ニ意正)　文政二卯八月八日、大御番頭より西丸方、同五午七月廿八日、御本丸方、(中略)同八酉四月十八日、若君様御側御用人格江、

森川紀伊守俊知(改ニ内膳正)　文政五午八月十五日、御奏者番より西丸方、天保七申八月四日、(中略)御本丸方、同九戌八月八日、病氣依願御免、即日卒、

増山河内守正寧(改ニ彈正少弼)　文政五午九月三日、御奏者番より御本丸方、天保十二丑四月十八日、御膳手掛、(中略)同十三寅三月廿三日、病氣ニ付御膳手掛御免、

林肥後守忠英　文政八酉四月廿三日、御側御用取次より、(中略)天保十二丑四月十六日、(中略)勤方思召ニ不應、御役御免、

本多豐前守正意(改ニ遠江守)　文政八酉四月廿八日、御奏者番寺社奉行ゟ御本丸方、同十二丑五月廿七日卒、

永井肥前守尚佐　文政十亥十二月廿日、御奏者番より西丸方、天保三辰二月九日、御本丸方、同七申八月四日、(中略)大御所様御附被仰付、同十亥四月十九日卒、

堀大和守親寚　文政十一子十月廿五日、御奏者番寺社奉行ゟ御本丸方、天保十二丑七月朔日、御側御用人江、

小笠原相模守長貴　文政十二丑六月二日、御奏者番より御本丸方、天保十一子三月八日病死、

本多豐後守助利　天保三辰二月九日、御奏者番ゟ西丸方、同七申一月四日、大納言様御附被仰付、同十一子三月廿四日、御本丸方、同十二丑八月七日、御懇之上意、御役御免、

天保七申八月四日、御奏者番より大御所様御附、同十二丑三月廿三日、(中略)右大將様江被爲附、同十二丑七月十日、御本丸方、

大岡主膳正忠堅　天保七申八月四日、御奏者番より大納言樣御附、同十二丑四月廿八日、御本丸方、(中略)同十四卯十月廿四日、御役御免、

堀田攝津守正衡

松平玄蕃守忠惠　天保九戌八月九日、御奏者ゟ御本丸方、同十二丑七月十日、西丸方、

水野壹岐守忠實　天保十亥年五月朔日、御奏者番ゟ西丸方、同十二丑三月十六日、病氣依願御免、

內藤大和守頼寧(改二駿河守一)　天保十一子三月廿四日、御奏者番ゟ右大將樣御附、同十二丑七月十二日、病氣依願御免、

本多越中守忠德　天保十二丑七月十二日、御奏者番より西丸方、天保十四卯年□□日、より御本丸方、

遠藤但馬守胤統　天保十二丑八月十日、大坂御定番より御本丸方、

本庄伊勢守道貫(改二安藝守一)　天保十二丑九月十四日、御奏者番ゟ御本丸方、

酒井右京亮忠毗　天保十四卯十二月十五日、大坂御定番より西丸方、

〔嘉永明治年間錄 一〕嘉永五年壬子今年有司鑑抄

若年寄

天保十二丑八月台命　江州三上　高壹萬二千石　遠藤但馬守胤統(タネノリ)

同年九月台命　濃州高富　高壹萬石　本庄安藝守道貫

天保十四卯十二月台命　奧州泉　高二万石　本多越中守忠德

嘉永四亥十二月台命　上州小幡　高二万石　松平玄蕃頭忠惠(タダシゲ)

嘉永五子七月台命　下總生實(オイミ)　高一万石　森川出羽守俊民

〔嘉永明治年間錄 十七〕明治紀元戊辰德川家有司鑑抄

若年寄

文久二壬戌八月台命　高一万石　平岡丹波守道弘

同三癸亥九月台命　奥州下手渡　高一万石　立花出雲守種恭
慶應二丙寅正月台命　丹後峯山　高一万石餘　京極主膳正高富
同年八月台命　上總太田喜　高二万石　松平豐前守正質
同三年丁卯正月台命　下野黒羽　高一万八千石　大關肥後守增裕
同年同月台命　常州下館　高二万石　石川若狹守總管
同年台命　美濃加納　高三万二千石　永井肥前守尙服
同年台命　信州須坂　高一万石餘　堀内藏頭貞虎
同年台命　豐後府内　高二万千石餘　松平左衛門尉近說
同年台命　江戸濱町　長井玄蕃頭
同年台命　山陵奉行兼　高一万石　戸田大和守忠至
同年台命　江戸愛宕下　川勝備後守

〔藩翰譜土井五〕遠江守利隆、〈○利勝子〉寛永七年十二月、敍爵して御扈性組番頭となり、十二年十月廿九日、酒井備後守忠朝〈○忠勝子〉と二人、始て少老の職を承る、〈是少老の始なり〉土井酒井が父子、共に股肱〈○股肱一本作執政〉の職を司り、中にも土井が父子、初めに大少老の職に任せらるゝ事、希代の例也、

○按ズルニ、土井利隆ノ父利勝ハ、寛永十五年ニ大老トナリ、酒井忠朝ノ父忠勝ハ、正保年間ニ大老トナレリ、

〔藩翰譜朽木六〕民部少輔源稙綱は、〈○中略〉寛永十年正月十一日、御書院番頭になされ、同き十二年、寄騎同心を預られ、十三年十月、御旗本の事を司る、

一說に、十二年十月八日、少老職になされ、土井遠江守、〈○利隆〉酒井備後守、〈○忠朝〉三浦志摩守〈○正次〉太

田備中守○資宗と同じく、御旗本の事を沙汰す、其後三浦朽木二人して此事を司る、當時の人、是を若年寄衆といひしといふ、

〔校訂補任七十三土井〕遠江守利隆、元和五年生、江戶、

從五位下　寛永七年十二月十六日　十二歲

列若年寄之席酒井備後○忠朝一同、　八年十二月廿八日

此頃若年寄之稱なし、後の六人衆を混じてかく記るせる歟、

酒井備後守忠朝一同御小性組番頭、列六人衆、　同十二年十月廿九日　十七歲

若年寄　年譜十五年

若年寄　年譜十三年十月○中略

酒井備後守一同御役御免　同十五年十一月七日　二十歲

若年寄御免、信濃、河內、監物並可出仕旨、

家督　正保元年九月朔日　二十六歲

〔泰平年表大猷公〕寛永十年三月廿三日、始て若年寄を置る、松平伊豆守(信綱)阿部豐後守(忠秋)堀田加賀守(正盛)三浦志摩守(正次)太田備中守(資宗)阿部對馬守(重次)是を六人衆と云、日記、大目付に御老人二人にて、少々の御用之義は可相調之由被仰出と也、依之此度三浦太田阿部、初て若年寄被仰付しものなり、

〔校訂補任五十三酒井〕備中守忠朝、元和五年六月五日生、

從五位下　寛永八年十二月廿七日　十三歲

土井遠江守利隆一同御小性組番頭、列六人衆、　同十二年十月廿九日　十七歲○中略

六人衆之事、御日記を考るに、寛永十年三月廿三日、松平伊豆守○信綱阿部豐後守○忠秋堀田加賀守○正盛三浦志摩守○正次太田備中守○資宗阿部對馬守○重次に、少々之御用之儀は、六人衆令相談、可相調旨被仰出、其うち伊豆守は、前年十一月廿八日、宿老並御奉公すべきよし被仰出、

十年の五月五日、豐後守加賀守も、伊豆守並に御年寄被仰付、十二年十月廿九日、忠朝と土井遠江守利隆とを御小性組の番頭になされ、同年の十月廿日、朽木民部少輔〇稙綱堀田加賀守元組の御小性組の番頭となり、志摩守〇三浦正次備中守〇太田資宗對馬守〇阿部重次備後守〇酒井忠朝遠江守〇土井利隆並御奉公可仕旨被仰出たれば、酒井土井の兩人も、番頭の時より六人衆之列たりしと見えたり、〇中略但し土井〇利隆の譜には、十五年に若年寄としるせり、もしくは二人とも父の蔭を以て其列には相並べども、未だ若年なりしかば、政事にはあづからずして、後年に至りて、同列の並に事を奉りしもの歟もしるべからず、〇中略

御役御免　　寛永十五年十一月七日　　二十歳〇中略

按ずるに、土井遠江守〇利隆も此時御役御免、外の同列も、對馬守は、伊豆守豐後守並御用可承とて宿老に例し、備中守は奏者番となり、志摩守〇三浦正次民部少輔〇朽木稙綱は、御旗本御番勤仕之面々、萬事御用可承旨にて、これ若年寄の始也、紀州日記に、備後守〇忠朝遠江守〇利隆若年寄御免、信濃河内監物並に可出仕と見えたり、

〇按ズルニ、若年寄ノ始メニ就キテ二說アリ、一ハ、寬永十二年十月ニ、土井利隆ト酒井忠朝トガ之ニ補セラレシヲ始トシ、一ハ、寬永十年三月ニ、六人衆ヲ置キ、松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛、三浦正次、太田資宗、阿部重次等ヲ之ニ任ズ、然ルニ信綱ハ、其前年既ニ老中タリ、忠秋、正盛モ亦同十年五月ニ老中トナリシカバ、利隆、忠朝及ビ朽木稙綱ヲ以テ其闕ヲ補ヒ、正次、資宗、重次ト共ニ六人衆タラシム、然ルニ同十五年十一月ニ至リ、利隆、忠朝ハ並ニ其職ヲ免ゼラレ、重次、資宗モ亦他ノ職ニ轉ゼシカバ、六人衆ノ中正次ト稙綱トノミ殘リテ、旗本ノ事ヲ掌ル、此二人即チ若年寄ノ始メナリト云ヘリ、是非違ニ決シ難シ、姑ク記シテ後考ヲ俟ツ、但明良帶錄及ビ上ニ引ケル御役代々記等ニ、堀田正盛ヲ若年寄ノ始メトセルハ、何レモ六人衆ト若年寄トヲ混

前將軍若年寄

ジタルモノナラン、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年十一月七日、三浦志摩守正次、朽木民部少輔稙綱は、旗本の輩を所屬として何事もうけたまはり、正次は二丸の事をもつかさどるべしと仰付らる、○これ今の世の若年寄なり、

〔大猷院殿御實紀七十三〕慶安二年二月廿一日、朽木民部少輔稙綱、少老の職ゆるされたれば、其職命せらるゝ間は、萬石以下の輩、何事も老臣三人のもとへ訴ふべしとふれらる、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年二月廿二日、御側久世大和守廣之、土屋但馬守數直、この後御旗本の輩支配すべしと命せられ、五千石づゝ加へらる、今の若年寄なり、此職寛永十二年十月廿九日、酒井備後守忠朝と土井遠江守利隆もて新に置れ、其後廢したりといふ、

〔教令類纂二集六十七〕安永八己亥年四月

鳥居丹波守○忠意

酒井飛驒守○忠香

右若年寄之末ニ可罷在旨被仰出候間、御禮事等、向後若年寄之通可被相越候、尤贈物も若年寄之通たるべく候、在國在邑之輩ゟは、若年寄へ連札差越候節は、丹波守飛驒守江も連札可差越候、

一願書之宛所ニハ、書入ニ不及候、

右之通、可被相觸候、

四月

〔惇信院殿御實紀八〕寛延元年十月十五日、少老堀田加賀守正陳、大御所○前將軍徳川吉宗方少老首座にうつり、三千石加秩たまはる、

〔有徳院殿御實紀六十二〕延享二年九月朔日、御所○徳川吉宗には、西城に御隱退あり、○中略御側加納遠

西丸若年寄

江守久通、大番頭堀式部少輔直舊は、西城の少老となる、

〔惇信院殿御實紀 八〕寛延元年七月朔日、奏者番小堀和泉守政峯、大御所方〇吉宗の少老となる、

〔浚明院殿御實紀 二〕寶暦十年十二月十九日、少老鳥居伊賀守忠意、大御所方〇徳川家重の少老となり、首座たらしむ、

〔文恭公實錄 四〕天保七年九月四日、命來歲讓大統于西城公〇徳川家慶、稱大御所、〇徳川家齊、中略、永井尚佐、大岡忠固、爲大御所若年寄、

〇按ズルニ、此他前將軍ノ若年寄タリシモノ猶ホ多シ、一々之ヲ載セズ、若年寄任免ノ條ヲ併セ看ルベシ、

〔吏徵 首卷萬石以上〕西丸若年寄二人　諸大夫　鴈一拜領〇又見掌職錄

〔有司勤仕錄〕西丸若年寄

一西丸一件之御用向、萬事司之、御本丸に准じて可知事也、世上の勤方も同前也、〇又見柳營秘鑑

〔憲廟實錄 三十一〕寶永三年十月十五日、執事永井伊豆守直敬を西丸に附玉ふ、

〔殘集柳營秘鑑 一〕西丸若年寄二人

菊之間　享保二十年ゟ西丸被仰付之　水野壹岐守

柳之間　同十七年ゟ御役被仰付之　小出信濃守

〇按ズルニ、西丸若年寄ノ任免ハ、本丸若年寄任免ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

右筆

右筆ノ稱ハ尤モ古シ、徳川氏ノ初世、建部氏、曾我氏等之ニ任ジ、金地院崇傳、林道春等ト共ニ、法度制令ノ文案ヲ掌ル、天和ノ初年、將軍綱吉ノ時ニ至リテ、始テ奥ト表トノ別アリ、奥ト表トニ分

奥右筆組頭

職員
職掌

レザル以前ノ右筆ハ、表右筆ノ條ニ收ム、奥右筆ハ、專ラ老中ニ屬シテ、機密ノ文書ヲ作リ、老中ノ職ニ關スル記錄案例ヲ掌ル、表右筆ハ、廣ク天下ニ令スル文書ノ案ヲ掌ル、然レドモ機密ニ關スルコトヲ得ズ、奥、表共ニ組頭以下ノ職員アリ、又側右筆ト云フアリ、御用方右筆ト云フアリ、奥右筆所詰ト云フアリ、何レモ臨時ニ置ケルモノナリ、其他西丸ニモ亦奥、表右筆アリ、用部屋ノ設ケナカリシ以前ハ、右筆亦定マリタル部屋ナシ、用部屋ノ定マルニ及ビテ、始テ奥、表ニ分チテ各〻其部屋アリ、之ヲ奥右筆部屋、表右筆部屋ト稱ス、

〔吏徵上右表以上〕奥御右筆組頭二人　若年寄支配〇又見ニ職掌錄一

〔職員私抄〕組頭

奥の御右筆おかれしより八年の間は、いまだ組頭といふものあらず、元祿二年にいたりて、蜷川彥左衛門親熙組頭となる、それより十三年を經て、十四年に病して死す、のち五年がほど組頭なし、寶永三年にいたりで、井出源〻左衛門正雅、また組頭となる、享保十九年、始て二人となる、蜷川八右衛門、岡本彌十郎、元文二年、八右衛門うせたりしのち、又彌十郎一人となる、寬保二年、彌十郎轉役の時、又二人となる、永谷又吉、蜷川八右衛門、これより後例して二人なり、

〔職掌錄〕奥御右筆組頭

當役二人にて、隔日に當日の御用を承る、此職は禁裏御所方御用よりはじめ、年中御規式御禮事、御次第書、御三家、諸大名、諸役人官位、述職、承襲、差除、譯報、刑名、すべて老中若年寄中、被承候御用向、一切引請承るを以て、甚繁劇也、

〔明良帶錄世職篇〕奥御右筆組頭

御用部屋日々之御用向等取調、諸向被仰渡之書物御奉書之類を認め、その日の御用向等を御老若方へ申上る也、諸願向も取調る事故、安永明和之頃迄は、御右筆方之地獄箱と俗にいふ事あり、

賞格
待遇

吹擧もなく、賂もせす、無緣之もの丶、諸願は地獄箱に入ると云は、是は調大に遲く、跡より願ひても早く仰付らる丶は、吹擧之仁、賂の緣のある人之願は、早く調べ出す故早く濟む、無緣之賂なきは、跡へ／＼と廻さる丶故おそし、夫故俗説也、

〔文昭院殿御實紀三〕寶永六年六月廿一日、奥右筆組頭井出源左衛門正雅に法令の事を仰付らる、

〔惇信院殿御實紀四〕延享三年八月廿二日、奥右筆組頭蜷川八右衛門親雄に、朝鮮人聘禮の事奉はるべしと命せらる、

〔職員私抄〕職掌右筆○奥

朝鮮の信使來れるとき、かの國に賜る書かきし事、いにしへはいかにありけむ、正德には儒官佐々木玄龍といふかきたり、享保には服部源八郎組頭にあらず、手よくかきしゆゑと見えたり、かきしかば、其例にやあらん、寛延には蜷川八右衛門、明和には清次孫之丞してかゝせらる、

〔文恭院殿御實紀三十九〕文化三年十二月十六日、藩翰譜書つぎの事つとめし、奥右筆組頭近藤吉左衛門はじめ、奥右筆三人、表右筆一人、奥右筆所詰二人、その他この事にあづかりし輩、賜物各差あり、

〔職掌錄〕奥御右筆組頭

布衣役也、但御役は御次にて老中申渡、畢而御目見あり、此類を御次布衣と唱ふ、

〔職員私抄〕班次右筆○奥

この局の班次の事、元祿二年、蜷川彥左衛門親熙はじめて組頭となりし時は、表の組頭の上首にありしと見へたり、五年に始て布衣の侍に召加らる、寶永三年に井出源左衛門仰蒙りしにも、そのとし布衣にはならずして、五年に至りて召加へらる丶事を得たり、按するに、このころはいまだ布衣の職とも定らずして、近きころの小笠原久兵衛、甲斐庄武助などが如く、不次に召加へられしにや、正德四年に、本目權左衛門親良、井出に繼て組頭となれ

り、そのころし布衣をもゆるされたり、これより例してすぐに仰蒙ることをえしほどに、つゐに布衣の職とはなりぬ、さて彥左衛門親照は、元日の拜賀を始て、令節朔望なども、いづかたに參りしにや志るべからず、(按ずるに、奥にもまいりしと見えたれば、御次の間などいふ所にて拜賀せしにやあらん、)源左衛門は、布衣ゆるされしのちも、元日の拜賀、黑書院御勝手の間に參りしと見えたり、正德二年までは、日記にその事見えて、三年より、今の如く大廣間にて拜賀せしなるべきか、(今節にもこの頃より白書院の東廡にまいりしにやあらん、日記に、元祿三年より、元正の日、黑書院御勝手の間に、新番組頭、桐の間衆、御右筆組頭、御勝奉行、新番御右筆、並び居て拜賀するよしをのせたり、又井出源左衛門が布衣となりし明のとしに、新番組頭の上、奥御右筆組頭とあり、これ今までもこの所にありしといへども載ずして、奥御右筆表御右筆と今のごとくにわけて記したり、)また嘉定の御祝ひ、玄猪の夜にも、今のごとく、勘定吟味の衆の志りにたちてもの給はれり、(伊奈半十郎が上に在りし事、近き世の如し、)彥左衛門源左衛門が仰蒙れる時は、いまだ布衣の職とも定られざりし故にや、御前にめし出さるゝに及ばず、宿老の衆、土圭の間に列坐して申傳へられぬ、其後相繼て布衣になされしに至りては、なべて布衣の職のもの丶如く、御前にめさるべき事なりしを、なを宿老の衆申傳へられて數十年をへたりき、寬政六年に、荻原金十郎友政仰蒙りし時に、はじめて御前にめして御こと葉を蒙る、ことに面目と申すべし、〇中略

轉遷

我輩にては、よく召仕れて他に轉せしもあれど、組頭となるをもて第一の榮とす、(他にうつるにいたりては、布衣にめし加へらるゝ事たやすからざればなり、)組頭は必局中の甲座に至る者、仰蒙る事をうるなり、

〔明良帶錄世職篇〕奥御右筆組頭

此場は昇途も遠き故、他場所へ出たる人邂逅なり、此場より御簾中樣御用人となり、夫々御普請奉行に昇たる仁あり、昔中根平藏は四十年此場を勤る、遣懷之狂歌に、

筆とりてあたまかく〳〵四十年男なりやこそなかね平藏、と讀たるを、いつか聞えて昇進せ

俸祿賜與

り、

〔教令類纂二集六十五〕享保九辰年七月十三日、左之通被仰出候、○中略

唯今迄之通四百俵取候者　　奥御右筆組頭

御役料貳百俵

〔憲教類典二ノ十一御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候内、御足高并御役料定、○中略

四百石高、御役料二百俵、　奥御右筆組頭

○按ズルニ、官中秘策、吏徵、職掌錄、明良帶錄等、皆四百俵高、役料二百俵トアリ、

〔德川禁令考十八給規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定○中略

別紙

御役金被下高之覺

金六百兩宛、○中略 奥御祐筆組頭、但高千石以上之者ニハ半減、御切米高七百俵以上之者江は不被下、同三百五十俵以上之者江は半減、

〔吏徵上布衣以上〕奥御右筆組頭、○中略 御四季施代金貳拾四兩二分、○又見明良帶錄、職掌錄、

〔職掌錄〕奥右筆組頭　每暮還勤褒賞として、金三枚、時服三領をたまふ、

〔職員私抄〕賜予例物○奥右筆

我輩の定りて賜る所、年の終ごとに、組頭は黄金三枚、時服三領、其餘は黄金二枚、時服二領なり、ただし病によりて、出仕をかく事多きものは減ぜらるゝの例あり、そのはじめ天和三年十二月廿五日、蜷川彥左衞門、杉浦源左衞門に黄金三枚を賜ふ、宿老衆、土圭の間に列坐して申傳らる、此のち年ごとに賜はる、貞享四年十二月廿一日、黄金三枚、時服二領をたぶ、これ時服を給はるのはじめなり、元祿二年十二月廿二日、組頭は黄金三枚時服二領、其餘は黄金二枚、時服二領を給ふ、わが輩の給はる所は、これより定例となる、然れども、又年によりて増たまはりし事もあり、○中略

任免

衣服の料、御四季施代といふ定りて正月と六月とにこれをたぶ、五月九月に時服二領、上下一具を御右筆に給はる事、少府記に見えたり、又寛文の中頃までは、三月或は四月時服二領、上下一具、五月十二月、時服二領、上下一具を給ふ、十一年のころより、二月七月とに料金を給はる事、今の數量に同じ、天和元年に局わかたれし後も、奥表のかはりなし、元祿二年迄これに同じ、元祿三年より料金をとゞめて、二月時服三領、袷一、單物一、帷子一、或は袷一、帷子二、上下二具、九月時服一領、上下一具、十一月時服二領、上下一具をたまふ、十一年迄これに同じ、十二年よりまた料金をたぶ、二月と六月とに白銀十枚づゝ、寶永元年迄これにおなじ、寶永二年に重ねて改りて、二月と八月と十一月とに時服上下を賜はる事、元祿三年以後の例のごとし、五年まで、これに同じ、寶永六年より再び料金をたぶ、二月七月、小判金十兩、この時表のものは白銀十枚をたぶ、享保二年より料金の數、寛文十一年以後の例のごとく、小判金十二兩一分、これを給はる、此後定制とはなれり、

〔諸御役代々記 十四〕奥御右筆組頭

蜷川彥左衛門　元祿二巳十二月十六日より、寶永三戌年病死、

井出源左衛門　寶永三戌十二月十日、奥御右筆より、(中略)正德四午年病死、

本目權左衛門親良　正德四午五月廿一日、(中略)奥御右筆より、(中略)享保十一午四月廿八日、小次郎様御廣敷御用人へ、

飯高孫大夫胤壽　享保十一午四月廿八日、奥御右筆より、(中略)同十九寅四月十八日、御廣敷御用人江、

蜷川八右衛門親知　享保十九寅四月十八日、表御右筆組頭ゟ、(中略)寶曆五亥十一月廿九日、御役被召放、

岡本彌十郎　享保十九寅四月十八日、奥御右筆より、(中略)寛保二戌七月九日、拂方御納戸頭江、

蜷川八右衛門親雄　寛保二戌七月九日、奥御右筆より、寶曆五亥十一月廿九日、御役被召放、

水谷又吉勝昌　寛保二戌七月九日、奥御右筆より、(中略)延享四卯十月廿八日、拂方御納戸頭江、

山中新八郎　延享四卯十月廿八日、奥御右筆ゟ、(中略)寶曆二申四月九日、西丸奥御右筆組頭江、

神保勝之助定與(改左衛門)　寶曆二申四月九日、奥右筆ゟ、(中略)同七丑七月廿九日病死、

寶曆五亥十二月六日、奥御右筆より、(中略)同十三未七月九日、拂方御納戸頭、江、　柴田藤三郎勝忠

寶曆七丑八月十六日、奥御右筆方、(中略)安永二巳六月廿四日、御廣敷御用人、江、　臼井藤右衛門房誠

寶曆十三未七月九日、奥御右筆方、(中略)明和三戌九月廿八日、西丸御納戸頭、江、　清須孫之丞幸登

明和三戌九月晦日、奥御右筆より、(中略)天明三卯七月廿四日、御留守居番、江、　橋本喜平太敬惟(改喜八郎)

安永二巳七月朔日、奥御右筆より、(中略)天明三卯八月六日病死、　上村政次郎利安(改鍋三郎)

天明三卯七月廿七日、奥御右筆より、(中略)同六午七月十二日、御廣敷御用人、江、　安藤長左衛門定賢

天明三卯八月八日、奥御右筆より、(中略)同七未六月廿四日、西丸御裏門番之頭、江、　大前孫兵衛房明

天明六午七月十二日、奥御右筆方、(中略)寛政三亥十月廿九日、拂方御納戸頭、江、　佐藤斎之丞豐明(改又八郎)

天明六午十二月、西丸御右筆組頭より、(中略)寛政元酉月日病死、　長坂忠七郎高美

天明七未十二月朔日、奥御右筆方、(中略)寛政五丑十二月廿八日、御徒頭、江、　吉松次左衛門弘正

寛政三亥十月廿九日、奥御右筆方、(中略)文化四卯十一月廿八日、御留守居番、江、　近藤吉左衛門孟卿

寛政四子十二月廿三日、奥御右筆方、(中略)同十午十二月廿三日、御腰物奉行、江、　曾根半左衛門良次

寛政六寅二月朔日、奥御右筆より、(中略)享和元酉四月七日、御納戸頭、江、　荻原金十郎友政

寛政十午十二月廿九日、奥御右筆方、(中略)西丸方、(中略)文化十五寅二月八日、御本丸方、(中略)文政二卯七月病死、　高木新三郎弘充

享和元酉四月七日、奥御右筆より、(中略)文化十三子八月四日、御廣敷御用人、江、　尾嶋隅三郎信賢(改定右衛門)

文化四卯十一月十二日、同格方、(中略)同十五寅正月廿三日病死、　秋山松之丞惟祺(改内記)

文化十三子八月八日、奥御右筆方、(中略)文政十二丑四月十四日、病氣依願御免、　青木忠左衛門忠陽

文化十四丑十二月廿日、奥御右筆方見習、(中略)文政八酉二月廿九日病死、　布施藏之丞□

文化十五寅三月八日、奥右筆方西丸方、　蘆屋源五左衛門利字

文政八酉三月十二日、奥御右筆より、(中略)同十一子九月十六日、病氣依願御免、　蜷川伊兵衛賢達

奥右筆組頭格

大澤彌三郎直行　文政八酉四月朔日、奥御右筆ゟ同格、同十二丑四月廿四日本役、(中略)天保十二丑四月廿四日、西丸御裏御門番頭ニ、

船橋勘左衛門茂喬　文政十一子七月廿四日、奥御右筆ゟ、(中略)天保四巳四月廿四日、病氣依願御免、

田中龍之助長明　天保三辰十一月十九日、奥御右筆ゟ同格、同四巳五月十二日本役、(中略)同十六未十月廿四日、二丸御留守居ニ、

石川藤右衛門　天保六未十月廿八日、表御右筆組頭より、(中略)天保七申月日病死、

田中吉歲　改林藏　天保六未十月廿八日、奥御右筆ゟ同格、(中略)同十五辰五月廿三日、思召有之御役御免、

荒井甚之丞　天保十二丑四月廿四日、奥御右筆ゟ、

都筑長三郎　天保十五辰五月廿六日同格ゟ

長谷川又三郎　嘉永元申九月十日、西丸奥御右筆組頭より、

中村長十郎　嘉永元申九月十六日、奥御右筆ゟ、格、

〔常憲院殿御實紀二十〕元祿二年十月廿六日、奥右筆に組頭を新に置る、蜷川彥左衛門親賢これを命せらる、

〔有德院殿御實紀三十九〕享保十九年四月十八日、表右筆組頭蜷川八右衛門親和、西城の奥右筆岡本彌十郎久包ともに奥右筆組頭となる、けふより奥右筆組頭一員を增して二人とせらる、

〔職員私抄〕組頭右筆○奥

寬政元年八月廿六日、瀨名源五郎貞雄、○註略組頭の格といふものになりて此局に候す、役料百俵をたまふ、本秩五百石なり、外に賜物なきなり、これは職とし承はる所はなく、たゞ時の顧問に備へられたり、故に日々は出仕せず、月毎に十日程出仕しけり、このとし十二月、布衣に召加へらる、この人は中古以來の野史家乘に通じて、其詳なりしこと及ぶものなし、

〔德川禁令考十八規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定○中略

奥右筆組頭見習

奥右筆職員職掌

別紙
御役金被㆑下高之覺

金五百兩、奥御祐筆組頭格、但高千石以上之者江は半減、御切米高六百俵以上之者江は不㆑被㆑下、同三百俵以上之者江は半減、

〔文恭院殿御實紀三十五〕享和三年九月六日、奥右筆秋山松之丞惟祺、おなじ組頭に准せらる、

〔職員私抄〕組頭〇奥右筆

其職になされずして組頭の事をたすけしあり、元文五年に、岡本孫十郎病して久しく出仕せざりしかば、水谷又吉して其事をとらしめらる、七月がほどなり、其年の終りに賜物ありてこれを賞せられたり、また寛延二年十一月より明るとしの二月まで、組頭一人にてありしかば、神保勝之助して其事をたすけしめらる、其間入十三日とぞ、賞有べしやと宿老の衆申されしに、聞しめされて、こたびは賞せらるべからず、このちも百日にもあまりたらば、賞を議せらるべしとの御事なり、

〔諸御役代々記十四〕奥御右筆組頭

文化十四丑十二月廿二日、奥御右筆より見習。文政二卯七月十二日、高木新三郎代出役、同八酉二月廿九日病死、　布施藏之丞□

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御奥御祐筆衆　凡貳拾人

〔吏徵上〕御目見以上〕奥御右筆廿三人

〔職掌錄〕奥御右筆組頭　奥御右筆三十員

〔職員私抄〕御右筆

奥御右筆、天和元年より三年までは二人なり、貞享元年に三人となり、四年に五人となる、元祿元年に四人となり、十年まで增減なし、是年七月二人を增、合六人十四年に一人を加ふ、合七人十五年に又一人を加ふ、合八人十六年に一人減ず、七人寶永三年又一人を減ず、六人六年の春、西城のもの加へて十人となる、御代改りしによれり是歲三人を減じて、又七人となる、正德二年二人を增す、合九人四年に一人

減す（八人）享保元年二月二人をます（合十人）このとし五月御用方四人を併せられて十四人となる、十一月一人を減す（十三人）三年また一人を減す（十二人）八年まで沿革なし、このとし十一月一人を減す（十一人）九年三月二人を増加へらる（合十三人）これより延享二年までは（二十年）増減する所なし、このとし閏十二月一人を増す（合十四人、これより定員とす）寛延三年まで（五年）増減なし、寶暦元年正月に三人を加へらる（これは員外に加へらる、追々定員の闕に充らるべき由なり、合十七人）二年二人を減す（十五人）三年二人を加ふ（又十七人となる）四年に一人減す（十六人）六年又一人を減す（十五人）七年八月一人を減す（十四人）十月又三人を加ふ（これ又定員の外也、合十七人）十年一人を減す（十六人）十一年二人を増す（これは六月の御事により西城の者を召加へらる、合十八人）十二年一人を減す（十七人）十三年又一人を減す（十六人）明和元年一人を加ふ（合十七人、こゝにいたりて定員に定めらる）安永八年迄（十六年）損益する所なし、このとし四月一人を加ふ（これは二月の御事によりて西城の者を召くはへらる、合せて十八人）九年十二月一人を減す（十七人）天明元年三月一人をます（合十八人）此時十八人を定員とす（組頭願を合せて二十人に定られん事を望申せしによれり）六年まで（七年）増減なし、是年閏十月西城のもの六人を加ふ（御代改りしによれり、合二十四人）七年四人減す（十七人）十月一人を増す（すでに定員ありといへども、其人あまるゆゑに加へらる）十二月又一人を減す（十七人）二年一人を減す（十六人）四年一人を加ふ（合て十七人、これは儲副の御方の事どもかね奉るべきがために、三人まし置るべしといへども、其人なきによりて先一人也）五年二人を加ふ（合て十九人、これ上にいふところなり）七年一人を減す（十八人）八年正月又一人を減す（十七人）八月四人を加ふ（これは儲副の御方に人わかたるべきがため也、合二十一人）十二月四人、西城附となる（十七人）

〔東徴別錄〕（布衣以下御目見以上）奥御右筆　文化八年辛未本役十六人、留物方四人を定員とす、（○中略）天保十二年辛丑十月、増本役二員原彌寸郎、立田錄助、合廿一人、　弘化二年乙巳□月□日、増本役二員、（合廿三人）中神順治、川上謙三郎、

〔職員私抄〕職掌（○奥右筆）

天和のはじめ職わかたれて、奥に候せしは、いかなる事を奉はるべきがためといふ事、書も傳へ

ざれば考ふべからずといへども、その初はわづかに二人にて、後にましくはへられたる所も四五人に過ず、思ふにうち／＼の事どもをのみうけ給はりしなるべし、寶永のすゑより、これかれかきしるすものも漸々おほしと見ゆ、しかれども、むかしは宿老の衆、おの／＼その第宅にて事を辨せられて、上書文移等の外は、我輩にはかゝしめられず、それも草は家の書記してかゝせられたるも多かりしにや、（いま朔望などに、拜賀する人の姓名等書つらねたるを、御禮衆のしらべなど申すなり、これら月番たる宿老の第にて草案をたてゝ、淨書をばわが輩に申さるゝ事にて、ましておの／＼の手扣などいふものは、みなその家人して寫させられたり、延享の末までも猶かくの如し、）かゝれば、事少かりしもおもひはかるべし、享保の初、制度法式も沿革多かりしほどに、○中略公事しげくなりて、我曹の考へて進止をとるべき事も有しにや、局に有人もましくはへらる、○中略しかれども、今の如く細大うちまかせて奉はりしにはあらず、○中略寶暦の初にやあらむ、宿老少老の衆、手びかへなどいふものまで、こと／＼くしるして進らすべきよし申されて、凡とり行はるゝ式ども、悉くに事例を考へ、當否をしるして申すことゝはなれり、（むかしは、ものかく職にてありしな、今は事の當否を申す職のやうになりぬ、老たる人のかたりしは、その年わかきとき、斷獄の文書を奉るとて、いかに心得てあかるべきにやと古老の人にとひしに、奉行中より上つる所の斷案をもて、宿老の衆に申うかゞひて、よきにだにあらば、それにてよしとこゝろうべしといひたり、いかに當否をも考へずして、さは申さるべき、申したらばよかるべしやとて笑ひたりき、むかしはさてもありしと見えたり、）裁省せしもの少からず、しかれども、事々の沿革も、享保の初に倍蓰せしによりて、煩はしくもなりぬ、又さき／＼は諸老の衆、第宅にて下知せられし事、或は表の局にてとり申せしものまで、みなうちまかせて奉はる故に、職事のしげくなれる、そのかみに比せば、たゞ觴をうかぶべきほどのながれの、つひには川をなせるが如し、○中略

國初に御教書御内書等をはじめて、其式すべて室町家の格を用ゐられしは、其事傳へたるものども召出されしも多かるべし、そのうち丹波守（曾我）古祐といふもの、ゆゝしき有職にて有しほどに、書札の式は悉く奉はりて沙汰したりとぞ、○中略その式、久保松雲が子、吉右衛門正元に傳へ、其

子吉右衞門正永に至りて、罪かうぶりて其祀をたつ、天和二年六月の事也、これよりさき、蜷川彥左衞門親照に、吉右衞門より書式を傳授せし事、日記にも見えたり、天和二年四月十日、久保吉右衞門書札、蜷川彥左衞門につたふべきよし仰下さる、中にも城門を始て、所々に建る所の榜下馬札と云どもは、みなさき〲より由緖ある事にて、其旨趣を受ずしては書する事あたはず、彥左衞門一人此事を奉はり、其他總じての書式ども、殘らず親照が家に傳へて、他人は競望する事を得ず、親照其子親英親和に傳へて、世々これを專らにす、親英是も後に彥左衞門といふ父に繼てこの局にいり、又出て表の御右筆組頭となる、元祿十六年二月二日也其のち故ありて職とゞめられし時、寶永五年六月廿三日なり、家に傳ふる所のもの悉く召して官府に納らる、下馬札の式は井出源左衞門正雅に傳ふ、親英が弟親和八右衞門と云職奉はるにおよびて、父兄の後に繼て又その事を專らにし、つひに其子數馬親雄後にこれも八右衞門と云に傳ふ、寶曆五年十一月廿九日、親雄罪を得て職奪はれしに至て、書式又傳はらず、○中略註唯下馬札の式のみ、仰によりて、橋本喜八郎敬周表御右筆頭に傳へたり、喜八郎死せしに及びて、其子喜平太敬惟この局にありし時なり其傳をうけて、父の時の如くこれを奉る、この時、表の組頭赤井平右衞門にも傳授すべきよし仰下されて、二人となれり、天明三年に、喜八郎御留守居となるに及びて、我局にてこの事を奉はる事は絕たり、○中略

按ずるに、すべてわが輩の職とする所、御内書奉書を始として、目錄或は箱の銘書等に至るまで、皆其式ありしを、局にいるもの、人ごとに面授口訣して受習ふ事にてありしといへり、故にその古實來歷を表局中の簿書にはしるさず、おのが掌記にとゞめて、帳中の秘とせしほどに、其弊遂に式樣をうしなひて、つたはらざるもの多きに至りぬと申ものありき、さる事もありしにや、その來歷はしらねど、さき〲よりの例に任せてとり行ふこと多し、○中略

儲副の御方をはじめ、御子たちの御手習はじめには、むかしよりわが輩のうちに仰せて御手本を上らしめらる、○中略享保のはじめ、前々代○德川家重いまだ二丸におはしませしとき、本目權右衞

門親良○奥右筆組頭に仰せて、御手本を上らせらる、小次郎殿にもかきてまゐらす、すなはち給はり物あり、○中略この權右衞門は、小五郎殿にも手本かきてまゐらせたり、○註略寛保三年閏四月五日、前代○德川家治の御手習はじめに、御手本上るべきよし蜷川八右衞門親雄に仰下されて、五月二日西城に參りて上る、その日呉服二領をたぶ、○中略

淸愼勤の三字を守り、勤謹和緩の四字を持すなどいふ事は、いづれの官に在ても同じかるべけれど、わきてこの局にあらむものは、謹愼の二字をむねと守るべきなり、されば享保十六年に、執事伊豫守忠統朝臣○本多の申されたる事あり、その大要は、この局深奥の所にありて、密議をも奉はれば、常にふかくつゝしみて、外樣の人の家に出入る事などはいふに及ばず、諸役人の面々にも親しく交るべきにあらず、まして大名の行人などの來りて、もの問ふ事ありとも、いかならむ事をもこたふべからずと戒められぬ、この時に堀内善次郎が職とゞめられしも、かゝるすぢに過などやありけむ、忠統朝臣の宣ひしこと、たれかは忘るべきなれど、年月をかさねしのちには、又心ゆるみたるものも有ぬべし、越中守定信朝臣○松平の府にいられしより、局中のならはせも改りて、人々相戒めつゝしむ事、むかしにも恥ざるべし、今も府におはす人々の、心にかけられぬはなきにや、近き頃も執事攝津守正敦朝臣○堀田の敎令を出されたり、大意は享保の令にかはる所なくて、我輩の禮節、疎なるまじき事を專に申さるゝ、その事と申は、我曹は小職にをれども、政府に申つぐ事なども多ければ、外樣の役人も禮を加ふる所有ぬべし、それによりておのが身をわすれて、驕りたる振舞などあらんは以の外なり、いかにも恭敬を存して、輕慢の言など戲にも申さじと心を用ふべきよしなりき、○中略

　此局の事はる所、すぢ〳〵わかれたるうちに、刑罰と財用とにあづかる事をもて重しとす、其うち刑獄に至りては、人の生死の係る所なれば、わきて重かるべし、先延享中定めらるゝ所の

刑書を見て、そのよりて起る所をもしり、〇註略又歴年の成規をも深く考へおきて然るべし、

〔舊經錄 事〕奥御右筆掛

一屋鋪、初而御目見、家督御禮、　一御鷹、養子、　一緣組、官位、補任、但高官之分者、組頭取扱之、　一御仕置、差扣御免、藥種しらべ、　一家督、御女中樣御取かわし、　一隱居、訴狀、　一御馬　一御勝手御用〇註略　一御能役者　一參勤、御暇、　一火事場　一御目見、御番入、　一騎射大的　一誓詞　一諸組弓鐵炮見分　以上

〔明良帶錄 世職篇〕奥御右筆衆

諸向御奉公は、奥向書物、其外棒杭等諸認物を致す、夫々に掛りあり手廣し、骨折場にて遠國之御用をも引請るなり、

〔職掌錄〕老中

不快にて引込之時は、日々月番より手紙を以て、殿中の沙汰を申送ることなり、奥御右筆の内順番に、御手紙番といふものありて、これをしたゝむるなり、

〔文昭院殿御實紀 十三〕正德二年三月七日、この日奥右筆高階半次郎經和、當直をゆるされ、新井筑後守君美にしたがひ、韓聘の儀注、ならびに日記を書せしむ、日記方右筆玉置半助喬直はじめ、四人にも、この事たすくべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀 三十三〕享保十六年三月廿二日、けふ右筆の局に仰下されしは、奥右筆のともがらは、機密をも見きゝする事なれば、外廷のともがらに出逢ふ事あるべからず、たとひ有司たりとも、したしくゆきかふ事あるまじ、まいて諸大名家士等、ひそかにとひはかる事ありとも、私につげもらす事、かたく禁ずべしとなり、

〔德川禁令考 十七 祐筆組頭〕元文五庚申年六月閏日

奧祐筆心得方達

一奧方御祐筆之儀者、唯今迄者其心得ニ而可ㇾ有ㇾ之候得共、御內々御用向取扱申事ニ候得者、外樣出會之儀彌相愼、大名抔江出會之儀有ㇾ之候由□□に有ㇾ之候共、其儘兼而可㆓斷置㆒候、不ㇾ及ㇾ申御權威ヶ間敷儀無用、御內々之儀、其外共諸事漏不ㇾ申樣ニ堅可㆓相心得㆒候、且又諸大名之留守居等出會之儀、若唯今迄有ㇾ之候共、向後可ㇾ爲㆓無用㆒候、尤總而不ㇾ愼候儀無ㇾ之樣ニ可ㇾ被ㇾ心得ㇾ候、

六月　寛保條錄

〔職員私抄〕班次○奧右筆

わが輩の班次、いにしへは兩番の上にたちたりと見へたり、いつの頃よりか改て新番の後になりぬ、延寶の御時までは、嘉定玄猪のくはしもちゐも、布衣より下つかたへもたまはりしは、このころは兩番の上たりしこと疑ふ所なし、元祿の御時には、布衣の侍にならざるものは給はる事を得ざりしほどに、順次の考ふべきものなし、寶永の御時より、むかしのごとく、平士にも賜はる事になりしに、その順次すでに新番の後、御代官の上になりぬ、これによれば、我輩の順次改りしは、元祿の初にもや有べき、猶考べき事也、いまは大番の後、御馬方のもの丶上にたちたり、この局のものも、表の局のもの丶上に有までにて、かわりめあらず、新正拜賀よりはじめて、令節朔望にも、黑書院御勝手の間に候するなり、○中略むかしは、この局のもの西城に參り、西城のものこの局に召くはへられしにも、その年﨟をもて次第したり、寶曆五年に、野本孫四郎が西城より召くはへられしとき、はじめて改りて、この局より西城にまゐるものは、年﨟によらず上首に居り、西城より來るものは、すべて末にをるべきに定めらる、

秩祿

わが輩の秩祿、いにしへは定れる所なきに似たり、されども二百俵を定例とす、小祿のものは、局に入りし一二年の間に、足米といひて、加へ給はる所ありて二百俵になさる、奧表ともにかくの如し、又そのかみの右

筆に召加へられて、あらたに祿たまはるものは、みな二百俵を給はれり、そののちは其人の勤勞によりて、或は五六年或は七八年にして又加へたまはる、加恩二度三たびに至りしもあり、〇中略

轉遷

此局にいるものは、すべて表の局を歴ざるはなし、天明元年に、伊藤彌十郎が、小十人より來れるはいかゞ有べき、彌十郎の父の百助、多年の勞をつみて、組頭にもならずして死せしかば、かく彌十郎をもなされたるなり、近き頃も、岡松八右衞門を勘定衆よりすぐになさるべしと聞えしに、組頭だつ人々、然るべからぬよししゐて申せしかば、先表の局にいりて、さてこの局には召加へられぬ、〇中略

蔭任

わが輩の子ども、いにしへより不次に召出して職につかせらる、この局のもの丶子ども、皆表の局にいれり、寶曆十二年に、始て小十人組になさる、總御番入の時なり、是よりさきに射御等の試あり、これよりして父どもが望申すに任せて、或は右筆、或は番衆になされてめし仕る、番衆となるは、この局のもの丶子共にかぎれり、そのくはしきは、ここにしるすに及ばず、

按するに、このころよりして、かの不次に召いで丶職につかしめらる丶事は止しにや、わが輩の職、いにしへより子供をめし仕はる丶例ありて、定員に闕ある時は、局にあるもの丶子どもを撰びて召加へらる丶、又長子のみにもあらず、諸子姪等をも召つかはれしすくなからず、〇注略祿をも別に給はりて世々にせり、後には祿を世にせずして、その身ばかりたまはりしもあり、

〔官中秘策〕十諸御役人之事

一御奧御祐筆衆　二百俵高　凡貳拾人

〔憲教類典〕二ノ五御役享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候内、御足高并御役料定、○中略

二百石高　　奥御右筆

〔吏徵〕御目見以上 奥御右筆　御四季施代金廿四兩二分○又見二明良帶錄、職掌錄一

〔職掌錄〕奥御右筆組頭　奥御右筆、○中略 廻勤賞金一枚、時服二領を給ふ、

任免

〔職員私抄〕起原○奥右筆

天和元年八月廿二日に、小嶋次郎左衞門御右筆吟味役といふものと見えたり蜷川彥左衞門神田御殿より扈從せしものなり奥にて書役等の事奉はるべきよし仰下されて候せしを始とす、そののち大河内十大夫といへるを加へられて三人となり、後又二人を加へて、合せて五人なり、

〔吏徵別錄〕御目見以下 奥御右筆　天和元年辛酉八月廿二日、小島二郎左衞門、蜷川彥左衞門、向後御奥ニ而、書役之御用等可二相達一旨、豐後守傳レ之、元祿二年己巳十月廿六日、飯高市郎兵衞、本目權左衞門被二仰付一、

〔職員私抄〕逸退○奥右筆

この局にいりしもの、やめられて表の局にかへされたるは、元祿元年二月廿一日、鈴木彥八郞を初とす、これは勞はる所ありて、職を辭し申せしによれり、○中略 職とゞめられしものあり、享保十六年三月廿一日、堀內善次郞、十七年五月七日、松井久右衞門、延享三年八月九日、久松彥五郞等なり、善次郞久右衞門は子細ありがたし、彥五郞は、奉公あしきによれりとて、しばらく籠居したり、天明八年二月廿六日、丸毛家三郞をやめられしは、身の行ひよからぬ事聞えしによれりとぞ、

○按ズルニ、右筆補任ノコトハ、右筆組頭任免ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

奥右筆見習

〔吏徵〕御目見以上 奥御右筆所留物方十人　若年寄支配

〔職員私抄〕奥御右筆見習

西丸奥右筆

天明八年十二月廿九日、はじめて見習四人を置る、これは職事しげきによりて、まづ員外にありてうけならひ、又簿書どもしるすべきためなり、寛政三年にあらためて期月を定めらる、十三月なり、扶は加ふる所なく、服賜は年ごとに賞金一枚、時服二領、衣服の料たまはることは定員におなじ、限りとす、四年閏二月廿九日、見習二人一人は四年、一人は五年、を免さるゝ、時、年ごろの勞を賞せられて給り物あり、白銀各十枚、このゝち非にみて、ゆるさるゝものは、文書を奉じて組頭より申傳へたり、六年まで一七年増損する所なし、七年四月、六人をまし加へらる、これ局にある所の文書ども、副本おの〳〵一帙をうつして、官庫にとゞむる證書あるによれり、この時より并月をとゞむ、

〔吏徴別録下 布衣以下御目見以上〕奥御右筆　寛政七年己卯四月、増見習六員、合十人此時より無年期ニ成、　同十二年庚申四月廿二日、三員、　文化六年己巳七月、改奥御右筆見習、爲奥御右筆所留物方、此時より三ヶ年期ニ成、　同八年辛未、本役十六人、留物方四人を定員とす、　文政二年己卯十二月、増置留物方二員、合六人〇中略天保三年壬辰二月廿四日、増留物方二員、合八人　天保六年乙未十一月廿五日、留物方一ヶ年之期月ニ成、

〔職掌錄〕奥御右筆組頭

奥御右筆所留物方十員ありて、諸御用向を分掌す、〇中略是は表御右筆の内より一年期の定なり、當番は隔日也、本役の闕あるまでは、年期を繼て勤む、本役には年中定式懸あれども、留物方は定懸りなし、

〔吏徴上 御目見以上〕奥御右筆所留物方　百五十俵高、御四季施代金廿四兩貳分、

〔職掌錄〕奥御右筆組頭

留物方百五十俵高、御四季施代金本役に同じ、廻勤賞金一枚、時服二領を賜ふ、

〔吏徴上 布衣以上〕西丸奥御右筆組頭二人　若年寄支配

〔官中秘策十〕諸御役人之事

西丸奥御右筆組頭一人

一四百石高(御役料二百俵)

〔職員私抄〕西城奥御右筆

組頭よりはじめて、秩祿賜予等のもの、すべて本城の人に異なることなし、寶永四年十二月廿六日、高階半次郎(局に入て二年)に足米百俵をたぶ、(合せて二百俵)五年十二月廿六日、中川進三郎(局に入て二年)にも、同じく百俵をたぶ、(合せて二百俵)これらこのころの制なり、

〔有德院殿御實紀四十八〕元文三年七月十八日、奥右筆坂原作左衛門定賢、西城のおなじ組頭とせらる、これ新に設けらるゝ所なり、

〔吏徴上 御目見以上〕西丸奥御右筆六人　西丸奥御右筆所留物方一人

〔職員私抄〕西城奥御右筆

西城につかへしもの、寶永にはたゞ三人あり、伊藤五郎兵衛利恒、間宮庄右衛門盛興、松田金兵衛某なり、これは櫻田の藩邸にて召つかはれしを、御右筆になされたり、○中略享保九年に、前々代、(○家重)儲副にたゝせ給ひし時も三人を遣らせらる、○註略十六年まで(八年)ましくはふる所なし、十七年五月廿三日、二人を加ふ、(合五人)寛保三年五月廿八日にまた一人を加ふ、(合六人)こののち定員とす、○中略

班次のこと、本城の人にかはる所なし、むかしは、この局より本城に召くはへられ、又本城より西城に參れるもの、みな年臈をもて次第せしに、野本源四郎が本城に召加へられしときよりして、此局より本城の局にいりては、臈をとはずして末に居るべきに定めらる、本城より此局に來るものは、年臈によりて順次をたてたり、

〔甘露叢十一〕延寶九年八月廿二日、奥御用御右筆ニ被仰付、(御本丸)小島次郎右衛門、(西丸)蜷川彥右衛門、

〔吏徴上 御目見以上〕表御右筆組頭三人　若年寄支配

表右筆組頭

〔有德院殿御實紀五〕享保二年十一月十五日、表右筆組頭これまで三人なりしが、こたび首藤又右衞門俊章病死せしかば、その闕をば補はれず、飯高市郎兵衞胤英、小池與左衞門永貞、二人にてつかふまつり、今より後、宿直には及ばざる旨命せらる、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年二月二日、此日表右筆組頭一員をまさる、

〔明良帶錄世職篇〕表御右筆組頭

右○奥御右筆組頭同斷、諸調向筆墨紙、其外に至る迄、省略を付て世話いたし、諸書物之吟味等を司る、

〔德川禁令考祐筆組頭十七〕元文二丁巳年五月十三日

表祐筆心得方達

一表御祐筆方之御日記、向後大目付御目付世話仕候而、爲二相認一可レ申候、念度掛リニハ不レ及候、大目付月番ニ壹人宛、御目付は月番世話ニいたし、御作法事其外記來候儀者、無二相違一不レ漏樣ニ認候樣ニ可レ仕旨、被二仰出一候、

五月

〔常憲院殿御實紀五〕天和二年四月十日、右筆組頭久保吉右衞門正信、書札の式を右筆蜷川彥左衞門親熙に教授すべしと仰付らる、

○按ズルニ、上ニ引ケル職員私抄奥右筆狀山縣大貳著ニ、奥の御右筆おかれしより八年の間は、いまだ組頭といふものあらず、元祿二年にいたりて、蜷川彥左衞門親熙組頭となるトアレバ、久保正信ノ奥右筆組頭ニアラザルコト明ナリ、

又按ズルニ、元祿二年ヨリ逆推シテ八年ハ、天和元年ニ當ル、此年始メテ奥右筆ヲ置キシカバ、從來ノ右筆ハ、自ラ表右筆トナレリ、天和以前ノ右筆ヲ悉ク表右筆ノ條ニ收載セルハ、此故ナリ、

〔有章院殿御實紀九〕正德四年七月十二日、こよひより表右筆組頭一人宿直すべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀二〕享保元年八月十二日、儒役林大學頭信篤、林七三郎信充、林百助信智、表右筆組頭小池與左衛門永貞、封地の御朱印、御判物の事にあづかるべしと仰下さる、

傳録
馬輿

〔吏徵御目見以上〕表御右筆組頭　桔梗間、三百俵高、御役料百五十俵、御四季施代銀貳拾枚、

〔教令類纂二集六十五〕享保九辰年七月十三日、左之通被仰出候、〇中略只今迄之通、四百俵より内は、

御役料百五十俵　御右筆組頭

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六年辛亥年三月

御目見以上、御役勤候內御足高、井御役料定、〇中略

三百石高、御役料百五拾俵、　御右筆組頭

〔大猷院殿御實紀二十一〕寬永九年十二月廿日、右筆の長建部傳右衛門昌興、御前に召て金三枚給ふ、

〔文昭院殿御實紀二〕寶永六年五月七日、表右筆組頭飯高一郎兵衛胤英に、役料として金五十枚をくださる、

補任

〔東照宮御實紀附錄十〕十四日〇慶長五年九月の夕方、右筆闕左馬之助をめして、明日軍果し後に、關東へ遣はさるべき御書、各狀三通に、江戸留守の者への連狀一通を認むべしと仰付られ、十六日、藤川の御陣にて、昨日の書狀はと宣へば、左馬之助かねて志たゝめ置しを御覽にそなふ、あて所は參河守秀康主、伊達政宗、最上義光へ一通づゝ、江戸の御留守は、本城新城ともに連名に認むべしとありて一通殘りければ、左馬之助、こは佐竹義宣が方へ遣はされんかと伺へば、いづかたへもつかぬものをと仰らる、左馬之助、いづれへもつかずは、猶更つかはさるゝがよけむと申す、いやいやとの仰にて、さて汝此狀をかきしに、今十五日とかきしはさることなれど、巳の刻とまで前方

より時刻をはかりてかきしは、いかなるゆゑかと問しめらるれば、左馬之助、敵は大軍、味方は小勢なれば、巳の刻より午の刻までにかたせ玉はずは、かならず御負なるべし、さらば御書も不用なりとおもひて、かくはしるし侍ぬといへば、御笑ありしとなり、この左馬之助は、元來善書のみにあらず、その才覺も御意にかなひければ、四百石賜はりて、右筆の組頭のごとくにてありしが、後にまた加恩ありて、使番になされしとぞ、

〔諸役人系圖 六〕表御右筆組頭元祿二巳十月廿六日新規被仰付之

△飯高七左衛門 勝秋
元祿二巳十月廿六日

△大橋左兵衛 元祿四未 ― 渡邊七郎兵衛 勝 後神田和田倉御屋敷奉行
元祿二巳十月廿六日　　元祿七戌十一月九日

△大河內十大夫 信就 死 ― 曾雌權右衛門 後小十人組番頭 ― 蜷川彥左衛門 親英 元奧御右筆
元祿二巳十月廿六日　　元祿九子七月晦日　　元祿十六未二月十二日

△柴田助右衛門 勝則 後小石川御殿奉行 ― 小嶋彥四郎 重治 元祿十六未二月廿五日御役被召放 ― 大橋左兵衛
元祿二巳十月廿六日　　元祿十一寅四月五日　　元祿十六未三月五日

〔吏徵 御目見以上上〕表御右筆廿八人　若年寄支配

○按ズルニ、延寶三年、及ビ同六年ノ江戶鑑ニモ、御祐筆衆二十八人トアリ、未ダ奧表ト別レザリシ時ノ事ナリ、

〔有德院殿御實紀 二十四〕享保十二年二月十八日、本城の表右筆は三十人、西城の表右筆は十人と其員を定めらる、

〔明良帶錄 二〕表御右筆吟味方　諸調物、諸認物を改め吟味して、組頭衆へ出す事を司る、

御日記方　諸向御政事に拘りたる筋之事、御役出等を增減して、鑑に載す、故諸向頭支配之面面頭々か相違す、

分限方　諸家分限帳、諸組諸支配入除達し有之、都度々々增減改め、朱點を加へ置、分限帳短冊張替置く、

家督方　隱居家督願差出し、仰付らるゝ節相違す、跡目も同斷、頭支配よりも相違す、家督小普請、跡目小普請とて調に付て分ちあり、

書詰泊方　是は當番なり、此場は職業にて仰付らるゝ故、諸向より至る小普請より書きもの手傳、系譜調等に出たる向之出役筋々仰付るもあり、何れも同寮を歷昇する故、其事に自然と委敷、勤に馴るゝなり、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕表御右筆　享和三年癸亥九月、表御右筆泊之儀、元文六酉年之頃ハ兩人泊ニ候處、其後一人泊と相成候、向後元文之頃ニ復し、兩人泊ニ仕候樣達之、

〔德川禁令考十七祐筆組頭〕慶應二丙寅年十二月廿一日

表祐筆役廢止ニ付達　　御勘定奉行江

今度表御祐筆者被廢止候ニ付、評定所ニ而誓詞有之節、讀役等、都而評定所番之者、取扱候積相心得、其段可被申渡候、尤差支無之樣可被取計候事、

一御藏證文之儀者、書替奉行ニ而取扱、右證文請書者、奧御祐筆所ニ而認候筈ニ付、御藏證文取調候樣可申渡候、尤遲々無之樣可被取計事、

〔台德院殿御實紀四十四〕元和二年十月十二日、右筆曾我又左衞門古祐は、崇傳〇金地院が旅院に來り、この七日進覽の令條を國字にてゑるすべしとつたふ、

〔法修之事〕抑東照宮御治世始、武家法度定被置候、台德院殿樣叅し給ふ、御兩代條目文言は、金地院傳長老〇崇傳草しけるとなん、大猷院殿彌潤色し給ふ、掃部頭〇井伊直孝、大炊頭〇土井利勝、讚岐守〇酒井忠勝評定し、伊豆守〇松平信綱、豐後守〇阿部忠秋、末座に在、道春永喜舊文を改正す、金地院長老も召加へらる、建部傳右衞門祐筆たり、各評議の上、於御前決定せらる、清書認めて後、諸大名を大廣間に召集て、

上意の旨有て、道春高聲に讀誦しけるとなん、

〔土井利勝年譜〕寛永十五年八月、賜₂耶蘇宗倍制禁之令書於諸家₁、利勝又蒙₂台命₁、集₂會諸家留守職於私第₁、附₂與之₁、建部傳右衞門、久保吉右衞門、進レ席讀レ之、

〔嚴有院殿御實紀二〕慶安四年十月廿三日、右筆久保吉右衞門正元、御手習の御臨本獻するにより、御染筆物、幷に時服一襲給はる、

〔甘露叢五〕延寶八年十一月五日、平祐筆ヨリ御奉書改ヘ、小島次郎右衞門、渡邊傳四郎、

〔甘露叢十九〕天和三年正月廿五日、御祐筆ノ內、分限帳改、齋藤久太郎、御祐筆薗屋清左衞門、杉浦與右衞門、大河內十大夫、右三人晝計相詰、泊番御免ノ由、

〔甘露叢四十三〕元祿二年六月朔日、御右筆吟味役中村平右衞門、勤方不レ宜故逼塞、

〔常憲院殿御實紀十四〕貞享三年八月九日、表右筆鈴木甚五左衞門重勝、晝詰を命せらる、

〔吏徵上御目見以上〕表御右筆廿八人　百五十俵高　御四季施代銀二十枚

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候內、御足高幷御役料定、○中略

百五拾俵高、取米御扶持方共、　表御右筆

〔東武實錄十三〕寛永三年五月廿七日、今度御上洛ニ依テ、江戶ヨリ京都ニ至テ、公○家光供奉ノ面面宿割、○中略

御右筆衆

四百六十石松雲○久保　八百二十石建部傳內　二百石志賀半兵衞　三百石川副六兵衞

百五十石鈴木權兵衞　百五十石久保善左衞門　百石星合太郎兵衞

○按ズルニ、是ハ將軍上洛ニ關スル記事ナレドモ、寛永中、右筆ノ秩祿ヲ擧グタルヲ以テ、參考

ノ爲メ玆ニカヽグ、

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月廿五日、この日、小性組八人、書院番十三人、新に廩米三百俵、○中略右筆五人に百俵づヽ、○中略新に給はる、

○按ズルニ、延寶三年ノ江戸鑑ニ見エタル右筆モ、千石高一人、四百石高一人ヲ除ク外ハ、三百石一人、三百俵一人ニテ、餘ハ悉ク二百石、二百俵高ナレバ、其比ノ右筆ハ、四百石以下二百俵以上ナリシナラン、

西丸表右筆

〔吏徴上御目見以上〕西丸表御右筆十三人　若年寄支配　百五十俵高　御四季施代銀二十枚　慶安三年庚寅八月廿三日始置

〔有德院殿御實紀二十四〕享保十二年二月十八日、西城の表右筆は、十人と其員をさだめらる、

〔大猷院殿御實紀六十〕正保二年五月廿一日、この日、腰物奉行、納戸番、右筆、○中略大納言殿○將軍家光子家綱御かたに附らるべき旨仰出さる、

〔大猷院殿御實紀六十五〕正保三年十二月十二日、先に大納言殿○家綱へつけられたる右筆大橋左兵衛重爲、森新兵衛正勝、廩米百俵、月俸十口ッヽ、○中略下さる、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、吉長なればとて大納言殿○家綱へ、御家人あまた附屬せらる、右筆二人、○下略

側右筆

〔大猷院殿御實紀五〕寛永二年、此年、○中略小十人星合太郎兵衛具通は、大御所○秀忠の御側右筆になり、○下略

〔大猷院殿御實紀五十五〕寛永二十年十二月廿九日、側右筆建部傳内昌興が四子、與兵衛直恒、召出されて右筆となる、

〔大猷院殿御實紀附錄四〕大橋龍慶は、初め長左衛門重保といひて、豐臣家の右筆なりしが、大坂の

役に、片桐且元に屬して戰功ありしかば、台德院殿（○德川秀忠）の御時召出され、右筆とせられ、後に剃髮して龍慶とあらため、つねに御側近くつかへ奉り、しば〳〵恩眷を蒙り、そが高田、および牛籠の別墅に成せられしことも度々なりき、

〔職員私抄〕御用方

寶永六年三月廿五日に、奧御右筆松野彌右衞門、堀内善次郎を御用方御右筆といふものになされて、役料二百俵をたぶ、（土圭の間に宿老衆列座ありて申傳らる）これは越前守（○間部）詮房朝臣につきて、事ども奉はりしにや、（其上る所の盟書にも、越前守が奉はりて申す所の事にたがふべからざるよし載たれば、かの朝臣の曹司のあたりにや參りつかへたりけん、まさしく儀ぜしところ詳ならず、）ことし十月廿五日、跡部與一郎、中川進三郎を加へられて四人となる、その班次なども、いかほどといふ事しれがたけれど、近侍の人々にかずまへられて、御前にも咫尺せしと見えたり、奧にては土圭間番の組頭といふものゝ、しりに立たり、（このとし嘉定に、表にて菓子給はるべきと宿老衆にうかがはれしとき、表にはまゐらざるになりぬ、）元朝八朔の拜賀などは、御膳立の緣どほりにありて申せしなり、賜予のものは、年の終りに黃金二枚をたぶ、（御次の間にて詮房朝臣申つたへて、御前に參りて謝し申す、其のち大溜の間といふ所にて賜はれり、正德二年より、黃金三枚を御前にめして給はれり、）又近習の人々に時服給はる時に、同じく御前にめして二領をたぶ、年ごとの五六月には、かたびらひとへもの、（各一）或はのしちゞみ（二端）等、（○中略）これらみな近侍の人と同じくする所也、寶永七年正月廿九日、さき〳〵の如く衣服の料賜はる、（小判金二十兩）正德元年十一月十四日、裡うちたる御上下二具づゝ、廿三日には黃金三枚づゝを賜はる、これは此ほど事しげきによりて、不時の賞とぞ聞えし、十二月十九日、堀内善次郎中川進三郎に、其秩百俵づゝを加へ給はる、（御かたみとも見奉れとの御事なるべし、）二年十月十八日、時服三領をたまはりしは、前代（○家宣）宣ひ置れたるよし聞えぬ、四年七月十一日、松野彌右衞門を表御右筆組頭になされて、十八日には、服部源八郎をその闕に充られたり、ことしの事、このころ間部下總守（○詮勝）が上る所の詮房朝臣職にありし時の日記に出た

り、その日記も則御用方四人して書たるもの也、享保元年御代改りて、詮房朝臣職とゞめられしかば、御用方をもやめられて、わが局〇奥右筆に併せられぬ、五月十六日のことなり

〔有徳院殿御實紀 一〕享保元年五月十六日、先代〇家繼昵近の輩、例によりて多く職ゆるさる、〇中略御用方右筆もゆるされて、奥御右筆となる、

〔吏徴附錄 職掌〕奥御右筆詰　奥御右筆組頭支配　寛政五年癸丑六月九日始置、二人支配勘定格、

〔職員私抄〕奥御右筆所詰

寛政五年六月九日、屋代太郎弘賢御賄の臺所人なり篠本久次郎廉御書院番の頭、酒井因幡守の寄騎也、といふものを、支配勘定の格といふになされて局に候ず、組頭の支配也秩は百俵をたぶ、〇註略又年の終ごとに賜りものあり、小判金十両この二人、和漢の事に通じて、學博く才ゆたかなれば、定りて奉る所はなけれど、事ある時の顧問に備らるゝ所なり、その常に候ずる所をも別に設らる、御臺所より土圭の間に通る所の御廊下にそひたる一の閣なり、このあたり、むかしはわが輩のあづかりし閣ありしとぞ、その所なるにや、近き頃は御用部屋の坊主のあづかりてありしを、少しく違りあらためたり、

按ずるに、これらの事、越中守定信朝臣の思ひつきて申行はれしなり、すべてこの局と申すは、天下後世にも傳ふべき命令のよりて出るところなれば、其職、奉はらむ人々は、才學あるを撰び置るべき事なれど、むかしはさらず、近世以來はさる沙汰にも及ばざりしに、定信朝臣政府にいられしはじめ、いかにしてか長坂忠七郎高美〇奥右筆組頭が文才あるをしられけむ、第一にめして、とり行ふべき事ども申あはされぬ、その節につきて奉はる事もありき、この高美は、わかかりし時、太宰彌右衛門といふものにつきてもの學びたり、其人温雅にして、書なども拙なからず有しが故也、さては近藤吉左衛門孟卿、荻原金十郎友政〇二人並奥右筆組頭ぞ有ける、〇中略これらの人々に朝夕せしよりぞ、わが〇奥右筆秋山維祺如き愚盲なるも、聞ぬ事どもきゝ、しらぬ事どもしりしことすくなからず、これしかしながらかの朝臣のとり申されし餘澤なりと申すべし、

〔文恭院殿御實紀三十九〕文化三年十二月十六日、藩翰譜書つぎの事つとめし○中略奥右筆所詰二人、○中略賜物各差あり、

〔職員私抄〕起原

むかしは御右筆、奥表のわかちなく、宿老の衆、事あるときは、表の御右筆所といふ所に入來りて、書啓文移などをも口づから申されて、右筆の輩書出しけり、○中略されば月番の宿老定まりて、著座せられしところとて、今も月番柱など申傳へたる所あるにや、すべてはその由緒をくはしくせむ事は、表の局を初とすべけれど、事のいたづかはしき、それまでは及ぼしがたければ、外史の事は去ばらくおきぬ、○中略

按ずるに、そのはじめいづかたに候せしといふ事考ふべからずといへども、いまだ奥御右筆所といふ局ありしにもあるべからず、このころ○天和年間までは、宿老の衆、常にまゐられしところも今とは同じからず、常の御座の間を一間ばかりへだて、候せられしよし申傳へたれば、其あたりに候せしにや、元祿の間、記錄せしものを見るに、何の文書は蜷川彦左衛門(奥右筆組頭)さゝげて奥に參る、又御座の間にて御内書に御筆を染らるゝとき、彦左衛門さゝげて御前通りに參る、美濃守吉保朝臣、とりて御前にたてまつるなどあり、去かれば御座に近侍せし事もありしと見えたり、貞享の初にぞ、宿老の衆、伺候の所も改りて、今の御用部屋と稱する所になれり、去かれば奥の御右筆所も、このときに出來しなるべき歟、

〔萬天日錄一〕萬治二年九月五日ニ被仰出御定○中略

一御祐筆部屋へ、御右筆衆差圖ナクシテ一切參ベカラザル事、○中略

右可相守此旨者也

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕寛文十庚戌年十一月朔日

一今日御老中被仰渡候は、去る廿六日、於御右筆部屋水野伊兵衛儀、意趣有之由にて、大橋長左衛

門江悪口申、扇にて打申候、其上脇差を拔申所を、其座に有合御右筆衆取分申候、〇下略

古事類苑

官位部五十五

徳川氏職員四

側用人

側用人ハ、初ハ御近習出頭人ト云ヘリ、一人ヲ定員トシ、常ニ將軍ニ近侍シ、將軍ノ命ヲ老中ニ傳フ、萬石以上ノ人ヲ以テ之ニ補シ、從五位下、若シクハ從四位下ニ敍ス、幕府ノ待遇ハ凡テ老中ニ准ジ、大名諸家ヨリノ贈遺ノ差モ亦老中若年寄ノ間ニ在リ、此職ハ、徳川氏ノ初世、秋元但馬守泰朝、松平右衞門大夫正綱等之ニ補シ、後柳澤吉保、將軍綱吉ノ側用人ト爲リテ、威權頗ル重ク、終ニ大老格ト爲リテ、老中ノ上ニ列セシガ如キハ異例ナリ、西丸ニモ亦側用人アリ、資格待遇、本丸ニ同ジ、

〔官中秘策 九〕諸御役人之事

一御側御用人　壹人四品

〔吏徵 首卷 萬石以上〕御側御用人一人 闕

〔有司勤仕錄〕御側御用人

一此役、時に取て被仰付、定りたる格無之か、

〔東武職記聞 一〕側用人一人

承知將軍家之仰、而達執政之職也、按往古以來有出頭衆之號、無當職之號、

〔寛永三年武鑑〕御側御用人 御近習出頭

〔有司勤仕錄〕御側御用人

一當時御側向を司る、老中之伺公を取次傳達する處の職分なる由、上之寵遇之深淺に寄、其威權も品有べき事か、諸家より勤る所、諸事老中に准也、

〔明良帯錄前篇〕御側御用人

君邊第一の重任なれば、人品尤高邁廉正を第一とす、拾遺補闕の心にて、君へ御心添奉り、遺し給へるを拾ひ、闕たるを補ふを第一とす、

〔常憲院殿御實紀十五〕貞享四年二月廿四日、三縁山台德院殿靈廟に牧野備後守成貞代參す、これは此ほど犬の令下されし時、老臣等御旨をあやまりし事をもて御前をはゞかりしにより、御側用人、代參つかふまつりしなり、

〔常憲院殿御實紀三十〕元祿七年十一月廿五日、評定所式日に、御側用人柳澤出羽守保明、始て出座せしめらる、

○按ズルニ、此後間部詮房、田沼意次等モ、亦側用人ニテ評定所へ出席セリ、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年正月十二日、御側用人松平右京大夫輝貞、黑田豐前守直邦に、大歛〈○此月十日、先將軍綱吉薨、〉の事つかさどるべしと命せられ、西城より御側用人間部越前守詮房まかりて監臨す、

〔文昭院殿御實紀十〕正德元年五月七日、吹上にて番士の乘馬御覽あり、〈○中略〉宿老、御側用人、少老、御側、ならびにこの事にあづかる、

〔東職記聞一〕側用人一人　從四位下、或侍從、

爲親近之職故、帝鑑間雁間重代豪傑、以堪其器之人被補之也、牧野成貞以來、補此職人、多任侍從、石川總茂、大岡忠光補之時、叙從四位下也、

官位

〔明良帶錄前篇〕御側御用人諸大夫四品、或は侍從、

此場は、四品に叙し、城主格となる、○中略柳澤出羽守保明は、寶永の始、御大老格、明和の比、田沼主殿頭意次は御老中格、何れも執頭嬖寵せられて御老中格となる、

〔有司勤仕錄〕御側御用人

一當時此役無之、各被任侍從、老中之次也、但し常憲公○徳川綱吉御代、松平美濃守吉保は、少將に昇進し、老中之上に列し、大老の如くに而、御役も無之、國主の列になる、長刀を持し、內外の政事等も口入有之由、併是は格別之事故、外に例なき事也、

〔機務覽要一〕御側御用人四品以前嫡子名順之事

文化九申年四月十四日

一御側御用人水野出羽守殿、當日四品ニ不被叙候ニ付、名順先年御差圖之通、四品之次と可相心得哉之段申上候處、其通と御差圖有之、依之十七日星帳差札ハ、四品嫡子之次ニ組入、昨十三日、年寄水野若狹守ゟ相廻候處、井上美濃守ゟ、右水野出羽守行列立所之儀、先例吟味被致候得共見當不被申、是迄御側御用人被仰付候得者、大概即日四品被仰付、四品不被仰付候衆ニハ、嫡子共ニ可見合儀無之、此度者、諸大夫頭之嫡子も不罷出候間、立所障も無之候得共、若出勤之節者、順如何にも被存候間、明日河州江も申談之上、取計候樣被申越候ニ付、今日河內守、若狹守、播磨守詰合ニ付、一同申談候處、伺候方可然ニ決候間、則御用番松平伊豆守殿江、尾島定右衛門を以、右之通相心得可申哉之段伺候處、例も無之上者、申上候通、帝鑑之間四品嫡子之次、諸大夫頭嫡子之上と可相心得旨、同人を以被仰聞候、

〔安政六年武鑑〕御側御用人

從五位下　五万石　水野出羽守忠寛

補任

〔職掌錄〕御側御用人
都而諸家よりの勤品、老中に准ず、毎日登城、御城內總下座也、每多雁ニ於御用部屋賜之、
〔常憲院殿御實紀四〕天和元年十二月十二日、御側用人牧野備後守成貞、諸門出入の時、門々の警卒等、宿老に同じく下座すべしとふれらる、
〔惇信院殿御實紀二十三〕寶曆六年五月廿八日、令せられしは、大岡出雲守忠光、御側用人となるをもて、在封の輩より書簡呈する時は、老臣の外、さらに一通を送るべし、謝恩の事ありて官邸にまかる時は、其邸にまかるべし、贈遺は宿老少老の間をもて之を待すべし、員數わけがたき品は、少老に准ずべしとなり、
〔寬永三年武鑑〕御側御用人御近習出頭
寬永〇寬永恐慶長誤年中ヨリ、秋元但馬守泰朝、松平右衞門大夫正綱、板倉內膳正重昌、井上主計頭正親、水野監物忠善、森河出羽守重俊、元和年中ヨリ、酒井讚岐守忠勝、堀田加賀守正盛、中根壹岐守、牧野佐渡守親成、慶安年中ヨリ、久世大和守廣之、內田信濃守正信、齋藤攝津守三友、
〔藩翰譜六秋元〕但馬守泰朝、大御所〇德川家康に昵近し、松平右衞門大夫正綱と一雙の親臣にて、時に御近習出頭の人と云ふ、大猷院殿(德川家光)の御時、日光山の神宮造られしに、右衞門大夫正綱と、但馬守泰朝とを奉行たらしめ給ひしも、此故なりと申傳へけり、其後寬永十八年二月三日、甲斐國谷村の城を賜ひ、一萬八千石三代の君に仕へ奉り、同き十九年十月廿三日、年六十三歲にて卒す、
〔官中秘策九〕諸御役人之事
一御側御用人
右慶長年中、秋元但馬守泰朝相勤候以來不絕、
〔明良帶錄前篇〕御側御用人

慶長年中に、秋元但馬守泰朝、始て被ニ仰付一、

〔藩翰譜 二 松平長澤〕正綱、十七歳より徳川殿〇家康に近く召仕れ、常に御側をはなれず、近習出頭人衆といひし也

〔藩翰譜 六 堀田〕寛永八年五月廿一日、正盛御小姓組の番頭となり、十二年の十二月に至る十二年二月、宿老の職となり、程なく加判の事御免ありて、世には御近習出頭といひしなり、

〔藩翰譜續編 四下 牧野〕侍從笠間家兼備後守源成貞は、〇中略延寶八年、館林殿〇綱吉徳川大統をうけさせ給ひしかば、これより次第に出頭して、恩寵日々に厖なり、〇中略明のとし十月十一日、職すゝめられ、御側御用人と申せしなり從下の四位にのぼる、

〔諸御役代々記 一〕御側御用人 綱吉公御代ゟ始

延寶八申十月九日、御本丸江可レ被ニ召連一旨被ニ仰出一、(中略)元祿八亥十二月朔日、依レ願御免、　牧野備後守成貞 侍從

貞享二丑七月廿二日、若年寄より、(中略)元祿二巳三月廿二日御免、　松平伊賀守忠易

貞享二丑七月廿六日、御小性より、元祿二巳二月二日、有レ故松平越中守江御預ヶ、　喜多見若狹守重政

貞享三寅正月十一日、若年寄より、同年六月廿九日、病氣依レ願御免、　太田攝津守資直

貞享五辰九月十二日、御側衆より、元祿元辰十一月三十日、御役被ニ召放一逼塞、　牧野伊豫守忠廣

元祿元辰十一月十二日、御側衆より、(中略)同二巳正月廿六日、病氣依レ願御免、　南部遠江守直政

元祿元辰十一月十二日、御小納戸上座より、(中略)寶永六丑六月三日、願之通隱居被ニ仰付一、號ニ保山一、　柳澤出羽守保明 少將 後松平美濃守吉保ト改

元祿二巳五月十一日、奥詰より、同五申七月廿八日、有レ故城地被ニ召上一、　金森出雲守賴時

元祿二巳六月四日、奥詰より、同年九月、病氣依レ願御免、　相馬彈正少弼昌胤

元祿二巳十二月七日、御側衆より、(中略)同四未二月三日御側御免、　畠山民部大輔基玄

元祿七戌八月廿七日、柳澤出羽守列被ニ仰付一、(中略)寶永六巳正月十七日御役御免、　松平右京亮輝貞 侍從 後改ニ右京大夫一

元祿九子十月朔日、奥詰より、同十丑四月十九日、京都所司代ニ、　松平紀伊守信慈 改ニ信庸一

松平伊賀守忠德　侍從　寶永二酉九月廿一日、松平右京大夫列、(中略)同六丑正月十七日、御役御免、

間部越前守詮房　侍從　寶永元申、家宣公櫻田ゟ被二召連一(中略)正德六申五月十六日、御役御免、

本多中務大輔忠良　侍從　寶永七寅十二月十五日、間部越前守列、正德六申五月十六日、御役御免、

此以後相止

石川近江守總茂　四品　家重公西丸江被ㇾ爲ㇾ成二御座一候節、享保十巳十一月廿八日、西丸若年寄より(中略)同十八丑九月十六日卒、

此以後相止

家重公御代始
御側御用人

大岡出雲守忠光　四品　寶曆六子五月廿一日、(中略)若年寄より、(中略)同十辰四月廿六日卒、

板倉佐渡守勝清　四品　寶曆十辰四月朔日、若年寄ゟ、(中略)明和四亥七月朔日(中略)西丸御老中江、

田沼主殿頭意次　四品　明和四亥七月朔日(中略)御側衆ゟ、(中略)同九辰正月十五日、加判之列江、

水野出羽守忠友　四品　安永六酉四月廿一日、若年寄ゟ、(中略)天明五巳正月廿九日、加判列江、

家齊公御代始
御側御用人

松平伊豆守信明　天明八申二月二日、御奏者番より、同八年四月四日、加判列江、

本多彈正少弼忠籌　四品　改二彈正大弼一　天明八申五月十五日、若年寄より(中略)寬政二戌四月十六日、(中略)御老中格、

戸田采女正氏敎　四品　寬政二戌四月十六日、御奏者寺社奉行ゟ、同年十一月十六日、加判列江、

水野出羽守忠成　四品　文化九申四月四日、若年寄より(中略)西丸方新規、(中略)同十五年八月二日、御老中江、

田沼玄蕃頭意正　四品　文政八酉四月十八日、若年寄より、(中略)若君樣江被ㇾ爲ㇾ附、天保五午四月廿六日、病氣依ㇾ願御免、

此後相止

堀大和守〇實親　天保十二丑七月朔日、若年寄ゟ、(中略)弘化二巳四月廿九日、病氣依ㇾ願御免、

〔折たく柴の記〕下　同〇正德六年五月十二日に、中の口なる某〇新井君美が部屋返し進らす、詮房〇間部忠良

西丸側用人

○本多二忠側用人、人、等の朝臣をはじめて、近習の人々悉く皆其職をとゞめられたり、詮房忠眞等の朝臣、今まで奉られし職事、世隔りし後には、いかなる事にやとも思ふべければ、その事をこゝに註するなり、神祖(德川家康)より第二代(德川秀忠)の御時迄は、奉書連判衆など申せし、其官五位の諸大夫に過ずして、其職も稀かりき、第三代(德川家光)の御時、二條の御行幸の比より、四品の侍従になされし事等出来たり、其比に堀田加賀守正盛朝臣、はじめの程奉書連判の衆になされ、程なく其事止められ、御側にさぶらひて、老中の人々へ御下されし御旨をも、又老中の人々申すべき事など、此人に就て申されき、此御代にぞ大老若年寄などいふ事も出来けるなり、第四代(德川家綱)より、御幼稚にて御代つがれて、老中の人々御政務を輔佐せられしかば、其後は正盛朝臣の事のごときなる人もあらず、第五代(德川綱吉)の御時、牧野備後守成貞の朝臣は、舊邸よりしたがひまゐらせしかば、むかし正盛朝臣が時のごとくに、老中に御ことつたへ、申次どもせられき、そのちに柳澤出羽守保明、御家號ゆるされ、御名字賜り、四位の少將になされ、甲斐の國主となりしほどに、老中みな〳〵其門下より出て、天下大小の事、彼朝臣が心のまゝにて、老中はたゞ彼朝臣が申す事を外につたへられしのみにして、御目見などいふ事も、僅に一月がほどに五七度にも過ず、前代(德川家宣)御世つがれて、老中の人々日々に召問はせ給ふ御事どもありしかど、この人々は、元より世の諺にいふなる大名の子にて、古の道學びしなどいふ事も、今の事をもよく知らず、とし比御事傳へしのみにて、前に知るせしごとく、天下國財の有無だに知らぬほどの事なり、まして職務の事ども、其本末知るべきにもあらず、然るを上の明審におそれて、前後の對をうしなはれしあまたゝびあれば、よのつねの事をも、まづ内々詮房朝臣して聞召、事は仰下され、人々の議合ひしをまたせ給ひて、其後に御前にめして、御下さる、その議深く遠くして、たやすく心に得らるまじき事どもをば、いくたびも詮房朝臣して、その論を上下し給ひ、つひにさとし得たまひ、其心に得られし後に仰下され、かり染の御事にも、推して御沙汰ありし御事はあらず、されば此人々にも申すべきほどの事ども、まづ此人して申さる、詮房朝臣は、幼時よりつねに御側にめしつかはれ、其心の程をもよく〳〵知ろしめされしかば、かゝる事をも御かうぶりしかど、なほ思召す事やありけむ、其後忠眞朝臣して、その事をも同じくせさせ給ひ、其座次は、老中とともに官の前後の次第によるべしと仰下さる、されば此ほどまでも、詮房朝臣は豐後守正喬朝臣の上に就き、忠眞朝臣は正喬朝臣の下にぞ就れたりける、

〔吏徵首卷萬石以上〕西丸御側御用人一人闕　享保十年乙巳十一月廿八日始置

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十一月二十八日、少老石川近江守總茂、大納言殿○德川吉宗世子家重の御側用人とせられ、從四位下に叙す、

〔有司勤仕錄〕御側御用人

一近來西丸御側御用人、石川近江守總茂を被二仰付一、御側向御用司之、御城内總下座也、是又被レ叙二四品一、老中若年寄の間にて、若年寄之方ニ附格也、

職員
職掌

〔官中秘策九〕諸御役人之事

一西丸御側御用人　壹人

右御側向引受之御用品々、御城内總下座也、然るに享保十八年丑、石川近江守病死已後、此役未被仰付とぞ、

側衆

側衆ハ、或ハ五六人、或ハ七八人アリ、交番ニ殿中ニ宿直ス、將軍ニ昵近シテ、小性小納戸醫師等ノ身分ヲ進退シ、又老中退出後ハ、老中ニ代リテ殿中ノ事ヲ處理ス、又此衆ノ中ニテ、御用取次ト云フモノ三人アリ、毎日登城シテ、將軍ノ居室ト用部屋トノ間ニ在リテ、取次ノ職ニ從事ス、何レモ老中ノ支配ニシテ、從五位下ニ敍シ、五千石高ノ職ナレドモ、萬石以上ノ人ヲ補スルコトモ無キニアラズ、慶應三年祿制改正ノ時、五千石高ニハ役金貳千五百兩ヲ給シ、五千石以上ニハ、其半額ヲ給セリ、

此職ハ、慶安元年、牧野佐渡守親成、久世大和守廣之等ヲ之ニ補セシヲ始トス、而シテ當時ハ御側衆出頭人衆ト云ヒテ、多クハ番頭ヨリ兼職セシガ、承應二年ニ至リテ、牧野內藤土屋三氏ノ番頭ヲ解キ、專ラ側衆ノ職ニ從ハシメシカバ、是ヨリ專職トナレリ、西丸ニモ亦側衆數人アリ、

御用取次ハ、享保元年ニ有馬兵庫頭氏倫、加納遠江守久通二氏ヲ以テ之ニ補セシヲ以テ始トス、

〔柳營秘鑑四〕諸御役人員數并支配

一御側衆御本丸五人

〔官中秘策九〕諸御役人之事

一御側衆　凡七八人

〔吏徵上布衣以上〕御側衆七人不同

〔東職紀聞一〕側衆五人、或六人、

掌扈從衆小納戸衆之事、頗爲昵近職也、當職亦依其器、而奉御用之申次也、執政退出之後、於急事當職達之執政也、

〔紳書下〕御側衆といふもの、嚴有院殿〇德川家綱の御比には、老中退出の跡にては、殿中の事を取行はれし程に、威權強くありき、

〔職掌錄〕御側

すべて奥向、御小性、御小納戸、醫師等の身分を進退す、

〔明良帯錄前篇〕御側衆

君邊第一の勤にて、人品尤高邁ならざれば成難し、御老若方御退出後は、殿中非常之事に關る、本番、詰番、加番、伺出とて、大抵日勤之場也、兩山御名代、御裏方御祥月御名代、山王聖堂等御名代、御成御供にて、所々御門々御目付平伏之仁へ、上意の取次等を致すなり、〇中略火事地震之節、不時登城之規合は、表方にては知れ難し、奥向より申出るを規とす、出殿道筋は、影土圭通り也、

〔有司勤仕錄〕御側衆

一御側向之事司之、三番に泊り番有之、晝過より登城泊番を勤、明日非番之人、四ッ時分登城し、泊り番之人替りて退出し其日休息す、非番之人は、其日之泊番出て退出する也、

一老中若年寄退出之後は、御殿向之事は、諸役所より御側衆に伺ふて相濟す、

一御成之節は、兩人ヅヽ、歩行にて御輿左右を供奉す、
一御次之間に部屋有之、是又相詰、諸事御用を達する役也、
〔紳書下〕一嚴有院殿〇德川家綱の御代の比までは、御座の間の下の間の次に今もある、九尺に三間の間を九疊敷といひて、其次の間の襖障子を開けば、則今の桐の間といふ所に今もあり、〇中略其比は御側衆と申も只三人ありて、壹人づヽかの九疊敷に伏して宿直せられき、今壹人は巳の時に出仕し、今壹人は午の時に出仕せし人宿直す、
〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年六月十八日、御側牧野佐渡守親成、久世大和守廣之、內田信濃守正信、小姓組番頭齋藤攝津守三友の四人にて、兩人ヅヽ、一日は奥、一日は表方に伺候し、〇中略すべて營中の諸士勤番の勤怠を巡察し、法令壁書をよく守るか否を查撿し、御直に聞えあぐべしと命せらる、よて目付もてこのよしをふれられ、各よく法令を守り、家僕從者等、御家人に對し、禮法を失はざらんやう命ずべき旨をつたふ、
〔嚴有院殿御實紀四〕承應元年八月十一日、御側久世大和守廣之、牧野佐渡守親成に、御家人宅地查撿を命せらる、
〔嚴有院殿御實紀六〕承應二年九月十八日、御側兼小性組番頭久世大和守廣之、御側出頭兼書院番頭牧野佐渡守親成、小性組番頭內藤出雲守忠由、土屋但馬守數直は、各番頭をゆるされ、晝夜御前に伺公し、夜は一人づヽ御次に宿直すべしと仰付らる、
〔嚴有院殿御實紀十四〕明曆三年十一月二日、御側所屬の每隊より一人づヽ、新錢座の横目を仰付らる、
〔常憲院殿御實紀二〕延寶八年閏八月六日、今日より評定所式日に、御側牧野備後守成貞出座せしめらる、

資格傳錄

〔文昭院殿御實紀 三〕寶永六年七月四日、けふより御側森川出羽守俊胤、評定所に出座すべしと命せられ、はじめてまかる、これも古は御側一人づゝ出座せしに、先代よりとゞめられしを復古せられしなり、

〔吏徵 上布衣以上〕御側衆　老中支配　諸大夫　五千石高

〔東職記聞 一〕側衆五人、或六人、　從五位下

重代之家流、撰㆓歷諸番頭古老㆒被㆑補之也、○中略雖㆓万石以下之職㆒、專爲㆓淸撰㆒也、

〔藩翰譜 二松平狀生〕美作守源乘政は、○中略寛文二年四月七日、御扈從組の番頭となり、同十二年御側衆、延寶二年十二月廿六日御用人衆、同き七年七月十日、少老の職に補せられ、所領の地加賜りぬ、

〔藩翰譜 四中內藤〕重賴、寛文二年二月八日、御書院番頭となり、同八年十二月五日、大番頭に移り、延寶四年十二月廿一日に御側衆になさる、

〔有司勤仕錄〕御側衆

一此御役、五千石高たりといへども、萬石以上も有㆑之、何も萬石以上之格也、

〔吏徵別錄 上布衣以上〕御側衆　元祿十二年己卯七月廿九日、座順、萬石以上ハ座上、萬石以下ハ、先輩次第ト被㆑命、

〔機務寛要 二〕寛政十二申年十二月十一日

一御側衆、表高家、座順之儀、寛政十二申年十二月十一日、家督方表御右筆ゟ問合ニ付、早々相糺、天明三卯年三月、緣組被㆓仰付㆒候節、伺上ケ候順有㆑之由、奧御右筆秋山松之丞爲㆑見候處、左之通、○中略

承合

御側衆　表高家

詰合候得ば、右順ニ而宜候哉、

下ゲ札

被仰渡等之節、表、高家御側衆ト申順ニテ候、

〔拾遺柳營秘鑑三〕一御老中御側衆御名、繪圖ニハ殿付書上間敷候、見分書ニハ殿付ニ可致候、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月十二日、御側瀧川越前守利錦、米倉丹後守昌尹に、各役料千俵をたまふ、

〔寶永三年武鑑〕御側衆　御役料千俵宛

〔憲教類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日

五千石より內は、五千石高に可被成下候、　御側衆

〔元治元年武鑑〕御側衆　五千石高

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金貳千五百兩　御側

高五千石以上之者江は半減

但御切米高、三千俵以上之者江は不被下、

同千五百俵以上之者江は半減

〔文昭院殿御實紀三〕寶永六年六月十一日、此日宿老御側用人に帷子六、少老に四、御側に三たまふ、御側には、ことしよりはじめてたまふ、

補任

〔吏徵別錄上布衣以上〕御側衆　承應二年癸巳九月十八日、久世大和守、○小性組番頭牧野佐渡守、○書院番頭内藤出雲守、土屋但馬守、○以上二人、並小性組番頭、只今迄の御番頭御免、御前へ晝夜相詰候樣被命、四人之内、一人宛御次間に泊番勤む、此爲御側衆始、

〔泰平年表嚴有公〕承應二年九月十八日、初て御側衆を置る、此時御役名見えず、久世大和守、牧野佐渡守、内藤出雲守、土屋但馬守、此四人、只今迄の御番頭御免、御前へ晝夜相詰候樣上意、此四人の内、一人ヅヽ御次の間に泊番被仰付、御小性組舊記始末全錄云、萬治年中より、仙石因幡守、大久保出雲守、本多土佐守、三人共、番頭の事なれども勤ながら奥へ勤仕し泊等あり、今奥勤には、御小性組番頭格にて出るにや、

〔東職記聞一〕側衆五人、或六人、

往古無當職、代々記曰、承應二年九月、嚴有院殿○德川家綱年十三、始免婦人之手而寐表寢殿、於是以牧野佐渡守親成、久世大和守廣之、内藤出雲守忠廣、○嚴有院殿御實紀、作忠由、土屋但馬守數直等四人、宿直御寢所之次間、被令奉夜中之御用、是當職之所權輿也、諸家系譜、稱之御側執役也、

〔藩翰譜四下牧野〕内匠頭源信成は、○中略二男佐渡守親成を世嗣とす、親成初め寛永七年八月九日に歩行衆の頭と成りて、同じき九年三月十五日、御書院番の頭に遷り、昵近して事を執る、御側衆出頭人衆といふ、番頭たること、いつまでといふ事詳ならず、父卒して家を繼ぎ、右大臣家○德川家綱御代つがせ玉ひても、昵近元の如し、

〔藩翰譜五久世〕大和守藤原廣之は、○中略寛永十二年十一月十七日、歩行の頭を承り、同き十五年十一月に、次第を歷ずして直に御扈從組番頭に至り、慶安元年九月八日、御側衆となされ、所領加へ給はり、五千石なり右大臣家○德川家綱世を知召されし初、承應元年正月十一日、御馬の事を掌る、

○按ズルニ、牧野佐渡守、久世大和守等ハ、慶安ノ初年ヨリ既ニ側衆タリシコト、職員職掌ノ條ニ引ケル大猷院殿御實紀ニテ明ナリ、蓋シ當時ノ側衆ハ、何レモ番頭ヨリ兼職セシガ、承應二年ニ至リテ、始テ專職トナリシモノナルベシ、

〔嚴有院殿御實紀十〕明暦元年九月十七日、御側中根壹岐守正盛に附屬の輩十八人を三隊に分て、

久世大和守廣之、土屋但馬守數直、內藤出雲守忠由に附屬せらる、

〔寛永小說〕中根壹岐守、無比類出頭故、威勢つよく、奧向にては、老中も手をつきあひさつ也、表向へ出座の節は、老中列座の座敷へ入候事不罷成候、是は上よりかやうに被成かけ候故か、右の通出頭にて候得共、御一生の內、五千石也、あまり威勢つよく候故、わざと祿はかろく被遊被差置候か、

〔安政六年武鑑〕御側衆　五千石高

五千五百卅三石　御用御取次　登城前御逢日、三日、十三日、十八日、廿五日、　坪內伊豆守保之

五千石　御用御取次　登城前御逢日、三日、十三日、十八日、廿五日、　蜷川相模守親賓

三千石　御用御取次　登城前御逢日、三日、十三日、十八日、廿五日、　平岡丹波守道弘

三千石　堀田對馬守正路

五千石　大久保志摩守忠豊

五千五百石　室賀美作守正發

五千石　大久保駿河守忠誨

二千石　佐野日向守政行

六千五百卅一石餘　遠山安藝守景高

三千石　岡部因幡守長富

七千石　小笠原若狹守信名

〔慶應三年武鑑〕御側衆

八千五百卅三石　御用御取次　登城前御逢日、三日、十三日、十八日、廿五日、

御用取次

三千十五石ヨ　御用御取次　登城前御逢日　坪内伊豆守保之
赤松左衛門尉範忠
五千石　御用御取次　登城前御逢日、三日、十三日、十八日、廿五日、　室賀伊豫守正容

〔職掌錄〕御側

總員の中三人、御用懸りと稱して、泊番なしに毎日登城し、老中退出後退去す、其間御前、并御用部屋との中間にありて諸事を取扱ふ故、俗に御用御取次とも申す也、

〔明良帶錄(餘篇)〕御側御用御取次

君邊第一の重任なり、御政事筋御相談、諸大名諸旗本御逢對客等を御受にて、人材の善惡を辨知りて、御尋ねあれば御直に申上る也、日勤にて泊なし、骨折場なり、此場十年の勤功にて御加增有なり、享保の有馬備後守、安永の稻葉越中守、天明の小笠原上總介、當時の平岡美濃守、高井飛驒守、紀州より來る等御加增あり、

〔青標紙(三編)〕一御老中方と同名を憚りて改名をするは、御老中支配之御役人とても憚り改むる也、又若年寄と同名も多くは改むる事なれども、御用御取次に限りて、若年寄と同名なるも改めず、これは大君つね〴〵御呼遊ばされたるより改めぬ事にて、たとへば先年若年寄に鳥居丹波守ありしに、平岡丹波守御用御取次にて改名せざるが如し、御用御取次は、格別威權ある事、これニ而も知れたり、

〔甲子夜話(一)〕德廟(○德川吉宗)ノ御時、有馬備後守カ、加納遠江守カ、始テ御用御取次ニ命ゼラレテノ翌日、何方ヘカ御成アリシトキ、御玄關ノ前ニ其人先チテ御駕ニ傍テ在ケルニ、高ラカナル御聲ニテ其名ヲ呼玉ヒ、上意ニハ、其方昨日、用取次ヲ申付タリ、勤方イカヾ心得居ルヤトナリ、某答奉ルハ、御用ノ旨ハ、其通リ人ヘ申達シ、下ヨリ言上仕ル旨ハ、其通言上仕ルト心得居候ト高

音ニ申セシカバ、夫ニテヨイト又大音ニ仰給フ、扈從ノ輩ヲ群居タルニ、普ク其御問答ヲ聞奉リタリ、時ニ人々竊ニ言シハ、上ノ御心ハ、彼勤役ノ旨ヲ人ニ普ク知ラ使メ給ハントノ御心ニヤ、又上下ノ言ヲ通ズルマデニテ、私ニ君側ノ威ヲ振フコトナキヲ示シ玉フカ、其英邁ナル御樣子、感ゼヌモノハナカリシトゾ、

〔幕朝故事談〕御側衆は、御前にて被仰付て後、御用部屋にて、其方御用御取次被仰付候なり、〇中略加納樣、初め御側被仰付、御用御取次相勤むべしと被仰付、平服にて被仰付候、縦ば若年寄の御勝手掛り被仰付る類なり、御免の時も、詰合の同役名代にて口上にて被仰付、是亦平服なり、餘儀なき事故、願之通御用御取次御免被成候と口上也、

〔幕朝故事談〕御紋小きを被下候は、御用御取次計也、

〔有德院殿御實紀一〕享保元年五月十六日、けふ藩邸供奉の執事有馬四郎右衛門氏倫、加納角兵衛久通して、申次の事をつかさどらしめらる、今の御用取次の濫觴なり

〔吏徵別錄上布衣以上〕御側衆　享保元年丙申五月十六日、始置御用御取次貳人、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年正月十一日、御側有馬兵庫頭氏倫に八千石、加納遠江守久通に七千八百石、加恩の地たまはりて萬石の列に入、ともに宿直をゆるされ、日ごとに出仕せしむ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御側衆　享保十一年丙午正月十一日、有馬兵庫頭、加納遠江守兩人、御用多相勤候付、向後泊番御免、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御側衆　享和二年壬戌三月廿二日、御用御取次三人共病氣付、泊方一同ニ而、御取次助相心得候樣被命、

〔明良帯錄餘篇〕御側御用御取次見習

此場江出るは、御裏方續の仁か、又は出頭嬖幸の內官者同樣たる仁叓に昇る、安永の津田日向守、

西丸側衆

蓮光院御續横田筑後守、松平因幡守、近頃の松平伊勢守、押田豐後守香琳院御續等なり、是に御小性組番頭格と、新番頭格との二ッ有り、少し意味有り、

〔文恭院殿御實紀四十五〕文化十年九月廿四日、西城新番頭格松平筑後守、同じ小性組番頭格となり、御用取次見習を命せらる、

〔柳營秘鑑四〕諸御役人員數井組支配

一御側衆 西丸五人

〔吏徵上布衣以上〕西丸御側衆六人不同　同上〇老中支配、諸大夫、五千石高、

〔常憲院殿御實紀五〕天和二年三月廿九日、大番頭堀田豐前守正休、廩米をあらためて一萬石給はり、西城の御側となる、

〔東職記聞二〕監國君職

側衆五人、或六七人、　從五位下

職掌同金城之同列也、代々記曰、元祿十二年閏九月、大久保長門守教寛、補金城之當職、寶永元年、甲州侯〇德川家宣爲監國君而遷西營之時、以其家司井上遠江守正方被補之、同二年二月、大久保教寛、自金城遷屬監國君、同三年、保田內膳正宗鄉亦自金城遷而屬之也、享保九年十一月、有德院殿〇德川吉宗以松平駿河守信望、松平內匠頭乘國、土岐信濃守、高井飛騨守等四人被屬監國君〇德川家重、今之監國君〇家治世子自幼時以永谷出羽守勝英、水野丹波守分員、青木縫殿頭直宥等三人而被屬之也、

奏者番 進物番附

職員
職掌

奏者番ハ、萬石以上ノ人ヲ以テ之ニ補ス、其人員ハ二十人、若シクハ三十人ニシテ、當番助番非番等アリテ、交番ニ其職ニ從フ、大名旗本等ノ將軍ニ謁見スル時、其姓名ヲ言上シ、其進物ヲ披露シ、又將軍ヨリ下賜ノ物ヲ傳達スル事ヲ掌ル、又三家及ビ大名ノ家格ニ依テ、奏者番ヲ以テ上使ニ充ツルコトアリ、而シテ寺社奉行ハ、必ズ此職ヨリ兼帶スルヲ例トス、抑〻此職ハ、慶長年間、足利氏ノ遺臣本郷信富、同勝吉等ヲ之ニ補セシヲ始トシ、文久二年ニ一旦之ヲ廢シテ、其職務ハ、詰衆、寺社奉行、進物番、高家等ニ分屬セシメシガ、同三年ニ再ビ之ヲ置ケリ、

西丸ニモ亦奏者番アリ、

〔職掌錄〕御奏者番　當職定員無之、當時廿六七人、

〔翁草百二十〕近日、公へ申次役人を奏者と稱す、奏は天子へ申す儀なり、東君、關白へ對し奉りても奏とは云べからず、只申次と稱して可也、

〔官中秘策九〕諸御役人之事

一御奏者番　凡貳拾餘人　右之内、寺社奉行兼帶之者四人、

〔東職記聞一〕奏者番、無定員數、至二三十人、掌年始五佳節朔望、諸侯大夫謁將軍家時、候御前申次之、且賜諸侯御使等之職也、

〔明良帶錄前篇〕御奏者番

君邊第一之職にて、言語伶利、英邁の仁にあらざれば堪へず、披露事、其外遠國寺社御目見之節披露、都而寺社奉行も兼帶す、公家衆より進上の御太刀は、御老中御取合、此職にて引く、地下之者よりの差上物は、此職にて披露也、平日被下物有之時、進物番呼上の義、兩番頭へ申達し、明日下されもの有之間、進物番、餘計とも何十人差出候樣、兩御番頭へ坊主衆を以て申達す、又殿中元服之仁に御前之習禮を敎へしむ、

〔甲子夜話 三〕遜齋林〇話ル、肥前少將治茂〇鍋島モ、近世ノ國持ノ内ニテ見所アリ、〇中略營中ニテ奏者番習禮ノトキ、一度シタルマデニテ、再ビセズシテ本席ニ戻ル、因テ脇坂淡路守呼返セバ、今敷居ニ手ヲ付タルコトナルベシ、其事ハ心得テ居ルナリトテ、回顧モセズ引退タリ、

〔有司勤仕錄〕御奏者番

一當番有之、御本丸西丸江詰る、御目見御禮等之節は、御太刀目錄を以、御披露之事司之、御禮之人之格式に依て其披露場有之、進物番之面々江云談じ、出し引を差圖し、前格之通相勤る事也、但披露等下司を不云、其内紀伊守、攝津守、陸奧守計、下司を唱ふ、披露の數多き時は、掌の內江細字に其名を書付る也、又年頭に、京大坂奈良伏見堺等所々の町年寄、過書、金座、銀座等之者迄、前に進物差置、御廊下江一同に並居、其所を則御通掛之御目見之節、御奏者番は御跡に引添、中腰に而步行ながら、右之披露を一口に申上る、

一毎年參勤之節、大名格に依而、御奏者番上使勤る事在之、又者時に寄、御三家方御在國之節、上使勤事も有之、

一諸國より定たる一同に御太刀馬代獻上之節は、當番之家來ども書役之ものを召連、糸竪、縄を持參す、則蘇鐵之間に罷出、此所に而、諸家の使者より御太刀目錄を請取事也、書役一々に下帳に記之、受取仕廻之後、御太刀は十本廿本ヅヽ、糸竪に包、縄にてからげ御納戸江遣す、目錄は宅江持參し、追而其目錄の裏書に、相違なく請取旨を記し御納戸江遣す、金銀は諸家より直に御納戸江納之、追而當番之押合役之者、御納戸江罷越、右之請取たる時之請取帳を押事、右獻上之節、清帳を一通り認、老中江差出事也、但萬石以下は、中の口脇にて受取也、

一其外之獻上物は、直に御納戸江納り、其時々に御納戸より以書付御奏者番之下部屋江遣し、當番之家來江相渡す、是を一々相認、老中江相達する也、清帳に記し、追而押合する事也、

一事に寄、格段之獻上物者、當番之御奏者番使者江謁之、

一御能之時、要脚廣蓋司之事、晴業也、先御能中入之時、御奏者番、舞臺之眞先江出る、役者共向に畏り、時に進物番廣蓋持參、唐織等時服等載之、御奏者番之側に置、則御奏者番是を取て、其ゑりを取り、(昔は襟を取りたるよし)右之膝を押立て、役者之肩へ投ると、則役者是に手を添、肩に打掛御禮す、要脚は則進物番渡之候事也、○中略

私曰、此御役者殿中向晴成業故、間違失念等可有之事也、いつの頃か不知、松平出雲守、何の某とか云もの御目見之節、當番之御奏者番、名を失念有之、暫つかへたる時、件の何某、自分にて我名を高々に申上候由、珍敷事ゆゑ記之、

一當御役之内に而、功者成人を撰て肝煎と號す、是は披露之節、其人々の席に出て、其披露之様子、御太刀目錄等置處之次第、差圖して取計ふ事なり、

一御成之節、壹人づゝ御城に相詰、還御以後、御目見有之て退出す、

一御城下部屋に、當番部屋、非番部屋と云て、二ッ有事也、

〔慶應元年武鑑〕御奏者番　內藤若狹守　押合(岡村濟藏 中村甚右衛門)

〔奏者番留書〕當番勤方幷心得

一五半時登城、部屋江罷越、若年寄衆非番登城に而、中之間江罷越、當番座ニ罷在、老衆江は會釋有之候間致時宜候、若年寄衆御側御用人江は無會釋、老衆茂間柄候得ば不致會釋候、

但無會釋之儀は、右之老衆江參而申込、承知之上之事、

老衆江會釋も、登城退出計に而、其餘は不致會釋候事、

一老衆揃後、芙蓉之間江罷越候、

一廻り前、外席江御用等有之罷越候節は、暫之內、同役衆江當番代り賴置候事、

一廻り後、老衆御座敷ゟ被出候節は、跡ゟ罷越、席々ニ出席之事、

一總出仕、或は御三家に老衆御逢之節、老衆被出候儀、芙蓉之間に而知兼候間、中之間ヱ罷越、例之當番座に罷在候事、

一廻り後箱之儀、坊主ヱ爲知候樣申付、部屋に罷在候而も可然、又芙蓉之間ニ罷在候而も、勝手次第之事、

但八時ニ相成候はヾ、箱不出候とも、中之間ニ罷在候事、

一紅葉山、上野、增上寺、御成之節は、當番老衆揃後、直ニ中之間ニ罷在候事、

右書き留に相見申候、當時は芙蓉之間ニ罷在候、

一御禮日は、老衆退出茂早く有之候間、中之間に罷在候、又は芙蓉之間に扣可心得事、

一紅葉山、上野、增上寺、還御後、是又老衆退出早く候間、中之間ニ相詰罷在候事、

一月次前日、或は御禮衆有之節は、御用番、御同朋頭を以、當番ヱ御逢可被成候段申來候はヾ、早速中之間へ罷越、當番席ニ扣罷在候事、

一老衆奥ゟ之入口ニ而、奏者番、大目付、御目付ヱ御禮書御渡候、老衆ゟ明日月次御禮有之段被仰聞候事も有之、明日月次御禮之儀、不被仰聞節は、當番ゟ月次御禮有之哉之段伺候事、

但月次之節は、老衆登城之刻限は、御用番退出後、御同朋頭ヱ承候、且御直ニ登城之刻限伺候事、

〔舊經錄七〕都而御番之事

一明六時ゟ翌日之明六時迄、當番受持之事、○中略

一兩御當番、退出ゟ外出無之、直に在宿之事、○中略

一助番相勤候日、退出後、受持相願候儀、不相成、

但三方替ニ相成候故也、土岐美濃守様被成御咄候由、被遊御意候、

一一通り之御番替不苦、三方替は不仕候事、

一病氣之節、御本丸御番二ッ引候得ば、御番繰詰申遣候事、〇中略

一忌掛り之節、御本丸御番二ッ引候得ば、是又御番繰詰申遣候事、

但忌中、御番二ッニ懸らざる節は、不及其儀候、

一服穢之者、十七日御番不割付候事、

〇按ズルニ、本書ハ、奏者番ノ職務ニ關スル事ヲ記シヽ書ナリ、

〔舊經錄 七〕上使歸　參勤　病後　忌明　御番入之事

一遠國上使歸者、御目見相濟候日より御番一順廻り申候而出番之事、

例

元文二巳八月、清凉院様三十回御忌ニ付、紀州江御名代松平伊賀守罷越、八月廿三日歸府、同廿四日御目見相濟、同廿九日出番、

〔武家擎要〕上使御定之家

上使御奏者參暇共

立花左近　丹羽左京　津輕越中

〔類例略要集〕同〇御三家方御逝去ニ付急御使

同斷(紀州御隱居逝去)ニ付御香奠　同年同月〇寬文十一年正月廿三日　御奏者松平山城守重次

薨御ニ付御三家方御在國之節　御使

尾州江　延寶八〇申五月八日　御奏者土屋相摸守政直

御三家方御嫡子且御簾中並御實母其外御忌之節　御使〇中略

治休卿尾州江逝去　安永二巳六月十八日　御奏者仙石越前守政辰

御三家方御年回之節　同〇御使番御代參使

清溪院殿廿一回忌紀州　享保十巳七月四日　御奏者丹羽式部少輔薫氏

御在國之御隱居江　御使付御所勢〇中略

御同殿(對山殿)御所勢　同年〇寶永元年十二月六日　御奏者松平兵庫頭乘紀

日光山江盂蘭盆　御代參　御奏者番勤之

〔舊經錄 仁〕助之部助先、御使先ニ而も、段々相障、心得之仁無之節は、其段番江申遣、請合來中、宜被仰合被下候樣申遣候事之由、

一新役二度目御番不相勤内助江不加事、

一忌明後、助順ハ第二番目ナリ、

一加役月番者、助不相勤事、

西丸御番も同斷〇中略

寶曆九卯七月廿四日被仰合

一兩御丸助番并添、同日相勤候刻、助順之上ニ而添相勤、助順之次ニ而助相勤候事も有之、區々ニ付、以來何レ之助ニ而も一ニ相立、添ハ何レ之添ニ而も二ニ相立、助順繰可申旨、今日被出候同役衆へ申合候、

〔奏者番留書〕助番之部

一本助一、西助二、本中之間助三、西朝助四、添五、御使先六、但御使先、御名代抔之節、誰相勤候段、達も有之は格別なり、

一助番前之節は、八時頃迄は先は在宿、遠方江無據儀ニ而罷越候節は、次助番之者江可申談候事、

舊格は、當番之次助番江手紙ニ而申遣候得共、近例は次助番江申談候事、

一御用日に而も、御奏者方不殘差合、急助入候はゞ、寺社奉行月番之外之衆は、御老中江伺ニ不及、

助被勤候樣可申談旨、寶永五子年九月、大久保加賀守殿被仰聞候事、

但近例は、寺社奉行兼月番は除之、其外は助順ニ立置候、

〔奏者番留書〕御番割之部

一御番割は、毎月廿八日之當番、翌月之御番割相調、於御城廿八日仲ヶ間中江遣之、同役中增減在之時、御番割中途ニ割替候時も、右之御番割相調候仁、是を認置候、首尾ニ依而、其日當番之仁認候事も有之候也、

〔奏者番留書〕新役心得

一御役被仰付、初當番當り候迄、見習ニ而有之故、老衆退出迄、當番と同樣ニ罷在、見習之內は、於席席拜領物被仰渡之時は、當番之跡ニ付罷出申候、拜領物之節は、當番出席候間、見習之者は跡ニ付扣、やはり元之座に罷在候事、

〔德川禁令考 十四 奏者番〕文久二壬戌年閏八月廿日

奏者番被廢ニ付、諸向取扱方改正ノ達、

今度御改革、御奏者番之御役被廢止候ニ付、向後左之通、

一參勤御暇、其外是迄御奏者番相勤候上使者、詰衆幷詰衆並江被仰付べく事、

一例年增上寺盆料被下候御使者、寺社奉行江可被仰付候事、

一急上使之節も、前日罷出之儀可相達候事、

一御禮衆習禮は、大目付御目付可致、繰出し者、大目付可被致候事、

一御能之節、御座席奉行者、詰衆計江可被仰付候事、

但不足之節者、詰衆並も可被仰付候事、

一御能之節、大夫江被下候時服渡、進物番持出、其儘進物番より可渡候事、

位階資格

但大夫計、其外之ものは、席ニ而御目付出席可ㇾ渡事、

一要脚之もの青銅者、御舞臺江差出ニ不ㇾ及事、

一地下之もの披露者、高家可ㇾ相勤事、

一地下之もの御暇之節拝領物は、高家可ㇾ被ㇾ渡事、

右之通可ㇾ被ㇾ心得候

閏八月

〔營中御日記〕寛永二年四月二日、將軍家、〇德川家光今度日光御參詣被ㇾ仰出候ニ付、諸大名爲御餞別、以使者品々獻ㇾ上之、奏者番衆、受取納ㇾ之、〇中略奏者番一人、日光御成、道中御泊、晝御休息之所々へ相越、御挨拶可ㇾ仕旨也、

〔享保集成絲綸錄十八〕正保三戌年五月

一御奏者番、〇中略右之面々、日來御奉公之儀、朝四ッ以後登城、晩は八ッ以前ニ退出仕候事、不ㇾ應ㇾ貴命候之間、自今以後、可ㇾ相嗜之旨上意之趣、酒井讚岐守傳ㇾ之、

〔嚴有院殿御實紀六〕承應二年十月廿二日、この日老臣宿直をゆるされ、奏者番一人づゝ宿直せしめらる、

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年三月七日、けふ令せられしは、詰衆奏者番寺社奉行詰衆並の輩、今より後、朝會の日、病あるか、又喪制にてまうのぼらざるは、前月の老臣へ其旨告べし、

〔有司勤仕錄〕御奏者番

一右御役者、各從五位下也、但御奏者番寺社共ニ、近來は持來之四品にても被ㇾ仰付事あり、

〔明良帶錄前篇〕御奏者番諸大夫芙蓉

此場城主の勤場なれ共、人材により、一萬石にても勤む、

〔元治元年武鑑〕御奏者衆奏番(寺)印、寺社御奉行兼帶、

四品　三萬二千石　松平中務大輔

四品　十萬三千五百五十八石ヨ　(寺)　酒井若狹守

二萬石　(寺)　松平攝津守

二萬石　增山對馬守

五萬石　(寺)　水野出羽守

二萬石　(寺)　本多能登守

一萬五千石　水野肥前守

二萬千二百石　松平左衞門尉

十一萬三千百廿九石ヨ　大久保加賀守

一萬石　柳澤民部少輔

〔吏徵別錄上萬石以上〕御奏者番　寬保元年辛酉四月十二日、前々御敷居之外に而雖被仰付、向後は可爲內旨定、

〔楓務覽要二〕諸大夫頭御奏者番

一享和元酉年六月廿七日、諸大夫頭松平和泉守、御奏者番被仰付候ニ付、左之通御書付、戶田采女正殿御渡、

大目付江　松平和泉守

一年始嘉定玄猪之節、只今迄之通、諸大夫之上座江罷出候事、

一年始御謠初之節、只今迄之通、御次江致著座候事、

沿革
補任

一五節句其外御禮等之節も、其席ニ而諸大夫之致上座候事、

右之通可被得其意候、六月、右之通御書付御渡、尤和泉守江戸御直ニ御渡有之、此方ゟ心得ニ當

御奏者番江為見セ置候、

〔東職記聞一〕奏者番

抑當職之始未詳、相傳云、神祖〇德川家康以永井右近大夫直勝始被補此職也、萬姓家譜曰、慶長五年、神祖爽三成等之時、津田小平次有功勞、神祖賞之、增給采地三千石、被補奏者番也、家忠日記曰、慶長七年三月、神祖以水野隼人正清忠補書院番頭、令兼奏者、被屬監國君〇台德院殿秀忠也、山口家傳曰、慶長五年、神祖給采地三千石於勘兵衞直友、令領士三十六騎、但組士之知行五千石亦預之而被補奏者番、集成曰、神祖進爵之日、以永井右近大夫直勝之英武超衆、容貌長大、而周旋動搖當宜、而使之受取寶冩也、又載本鄉家傳曰、進爵之時、以勝左衞門勝吉被補奏者也、勝吉之祖父民部大輔信吉、後美作守〇台德院殿御實紀、寬政重修諸家譜、並作信富、嘗仕足利義輝、奉柳營之申次、是以世々傳其舊式、故以勝吉被補之也、同十四年、秀賴來二條、謁神祖云々、秀賴賜永井直勝以下奏者五人、人別白銀百枚也、先是雖有奏者之號、多載執政諸有司之名、則強難為權輿、疑始天正中歟、余〇小林元逸以代々記推之、元和中之奏者、多出書院番頭之部、則知其始書院番頭多帶之歟、

〔台德院殿御實紀二〕慶長十年九月廿三日、本鄉美作守信富卒す、〇中略この信富は、若狹國本鄉に世世ゝるよしゝて、代々足利家の近臣たり、信富、光源院義輝將軍につかへ、奏者番として將軍家の禮式に精熟せり、のち織田家に屬し、また大御所〇德川家康に仕奉るもとよりその人となりをしろしめされければ、將軍宣下のとき、信富を伏見に召て、汝は世々室町將軍家の禮法にあづかりしものなれば、よくその典故を辨へたるべし、今より我家に於て、奏者の事をつかさどるべしと面命有て、伏見の城邊に宅地を賜はり、衰老の事なればとて、永井右近大夫直勝に扶助せしめられ

しが、七十五歳にて終をとれり、(中略)按ずるに、この人當家にて奏者の職を置れしはじめなるべし、

〔寛政重修諸家譜 四百七十一 村上源氏〕本郷

泰茂──信富 初泰富、與三郎、左衛門尉、治部少輔、美作守、〇中略

慶長七年十月二日、山城國綴喜郡のうちにをいて、采地五百石の御黒印をたまひ、八年、將軍宣下のとき、〇德川家康めされて伏見にいたる、ときに仰けるは、汝が先祖、代々室町家につかへ、よくその制法をしるべしとて奏者番となされ、伏見にをいて宅地をたまふ、

〔大三川志 六十二〕慶長八年二月、本郷庄右衛門勝吉が祖父治部少輔信吉、幕府義輝〇足利ノ奏者ヲ役シ、勝吉其舊式ヲ受傳フルヲ以テ、勝吉ニ奏者役ヲ命ジ玉フ、

〔藩翰譜 三水野〕隼人正源忠清は、和泉守の末子なり、慶長七年春、大納言殿〇台德院殿の御事〇秀忠に附けられ、御書院番頭となる、叙爵して御奏者の事を兼ぬ、

〔浚明院殿御實紀 四十五〕天明元年十二月十五日、田沼主殿頭意次が子播磨守意知、奏者に加へらる、

〔昭德院實紀 二十三〕文久二年閏八月二十三日　　御奏者番

御改革ニ付、御奏者番被廢止候ニ付、御役御免、

〔嘉永明治年間錄 十二〕文久三年十月廿二日、再ビ奏者番ヲ置ク、

御奏者番の儀、去る壬戌閏八月廿三日御廢止、今日御再興、依之寺社奉行牧野越中守、水野出羽守、御奏者番兼勤仰付られ、松平中務大輔、増山對馬守、御奏者番仰付らる、

〔慶應三年武鑑〕御奏者番　芙蓉間、御當番一人宛　寺社御奉行兼帶、

三万千二百石、文久四子正月ヨリ、　松平左衛門尉

十万三千五百五十八石、文久四子二月ヨリ、　酒井若狹守

十一万五千百廿九石、文久三亥十一月ヨリ、　大久保加賀守〇以下十人姓名略

前將軍奏者番

〔大猷院殿御實紀一〕元和九年、此年酒井阿波守忠利、大御所〇前將軍徳川秀忠のかたに付られ、西城に於て奏者の事を役し、座班は老臣の上に列すべしと命せらる、

西丸奏者番

〔東職記聞二〕監國君職

奏者番

慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇徳川家光以奏者井上河内守正利、水野備後守元綱等兩人被屬監國君〇家光世子家綱也、代々記曰、寛永三年十一月、常憲院殿〇徳川綱吉以安藤右京亮重行、松平宮内少輔等兩人被屬監國君〇家宣公也、如當代、奏者衆每日一人、伺候西營而奉御用也、

〔大猷院殿御實紀五十四〕寛永二十年七月廿三日、この日酒井日向守忠能、若君〇徳川家綱につけられ、三丸奏者の役つかふまつらしめらる、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇徳川家光世子家綱に附屬せらる輩あり、〇中略奏者番は、井上河内守正利、水野備後守元綱、

〔吏徴別錄上〕萬石以上御奏者番　慶安三年庚寅九月三日、始置西丸御奏者番貳人、

〔甘露叢五〕延寶八年十一月廿一日、徳松君〇徳川綱吉西丸へ御移徙已後、奏者番一人〇中略御禮日は奏者番二人宛、

右書計可相詰、

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十一月二日、此月よりして、奏者番、寺社奉行を兼るものも、西城に上直する事を定めらる、

圖進物番

進物番

進物番ハ、諸侯其他ヨリ、幕府ニ獻ズル物ヲ掌ル職ナリ、進物取次番頭、進物取次等ノ諸役アリテ其務ニ服ス、

〔明良帶錄 後篇〕進物番
是は兩御番より出役にて、御屆諸大夫なり、五月其外重き御規式には大紋著用、尤大紋は御納戶より出す、且又被下物有之節、御奏者番より呼上之事、兩番頭へ申達、明日被下物有之、進物番斗共、何十人罷出候樣、坊主衆を以て申越す、

〔東職紀聞 二〕進物番、無定員數、
撰兩番組中善周旋之人而被命之、是亦兼職也、掌獻諸侯大夫之贄於將軍家時、總年始等一切之役送也、

〔泰平年表 大猷公〕寬永九年十一月五日、初て進物番三十人を置る、

〔藩翰譜 六 土屋〕但馬守源數直は、○中略寬永九年十二月五日、御進物番となり、○下略

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十二月、此月進物番役名ヲ廢ス、

進物取次番頭

〔吏徵 御目見以下 下〕進物取次番頭三人　御留守居支配　百俵持扶持高　燒火間上下役

〔官中秘策 十八〕諸御役支配
一御留守居支配
奥方進物取次番之頭　進物取次番之頭

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕元文三庚午年三月廿日
御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、○中略
百俵高扶持持

〔大概順〕御目見以下大概順
百俵五人扶持　御譜代席　上下格　進物取次番之頭

〔明良帯録外篇〕進物取次番之頭　百俵五人扶持留支

以上引下の仁も有り、諸進物方差引有り、下番より昇進す、小普請より御入人多し、初に一番にて、御目付支配下番より昇進、聖堂以下兩番の內よりも昇る、

〔寛政四年武鑑〕進物取次番之頭　百俵五人扶持

四谷新やしき　菅沼久左衛門　小石川白山　持田五郎右衛門

西丸進物取次組頭

〔大猷院殿御實紀六十一〕正保二年閏五月廿九日、この日徒組頭四人を〇中略奥方進物取次とせられ、〇下略

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月七日、西城進物取次組頭幷所屬廿人を置る、

進物取次上番

〔吏徴下御目見以下〕進物取次上番廿七人　頭支配　五十俵持扶持高　燒火間上下役

〔明良帯録新益篇〕進物取次上番

大抵右之場所は、以上引下げの仁の勤場也、御奉公修業のため、侍格にて以下の場を勤て昇進す、小高にて出場の六か敷仁は、一旦以下の場へ出て、夫より御目見以上にすゝむなり、

〔享保集成絲綸録三十〕享保九辰年七月

五拾俵高

持扶持之儘　進物取次上番〇中略

右之通、御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

進物取次下番

〔吏徴下御目見以下〕進物取次下番　持高　御譜代場

〔大概順〕御目見以下大概順

貮拾俵貮人扶持　羽織進物取次下番御譜代

勤渡忰へ被仰付候

職員
職掌

高家

高家ハ、足利氏以來ノ名家ニシテ、武田、畠山、大友、吉良以下二十六家アリ、何レモ世襲ニシテ、幕府ノ儀式典禮ニ關スル事ヲ掌リ、勅使ヲ待遇シ、京都、伊勢、日光等ヘノ使節ヲ勤ム、故ニ萬石以下ノ列ナレドモ、或ハ四位五位ニ敍シ、侍從少將ニ任ゼラルヽモアリ、老中ノ支配ニ屬シ、千五百石高ノ職ニシテ、慶應三年ニハ役金千五百兩ヲ給シ、三千石以上ノ者ヘハ、其半額ヲ給シタリ、

高家ノ中、二人若シクハ三人ヲ擇ビテ、專ラ京都ノ使節ヲ掌ラシム、之ヲ肝煎ト云フ、肝煎ハ二千石高ニシテ別ニ役料八百俵ヲ給シ、慶應三年祿制改正ノ時モ、役金千五百兩ノ外、肝煎ニハ別ニ金五百兩ヲ給シタリ、又側高家ト云フアリ、常ニ將軍ニ昵近シテ事ヲ行フ、又表高家ト云フアリ、高家幼年者、若シクハ事務ニ熟達セザルモノ、暫ク此職ニ在テ練修スルモノニテ、此職ヨリ高家ニ拔擢セラルヽモノ多シ、何レモ無位無官ナリ、其他高家見習アリ、西丸ニモ亦高家アリ、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一高家 來九人

〔吏徵 上 布衣以上〕高家十六人 不同

〔東職記聞 一〕高家十人

掌、辨禁中御使、勢州神廟、日光宗廟之奉幣御使、勅使下向之時、恒例之格式等之職也、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕高家廿六家　宮原彈正大弼義周 千四百十石　武田大膳大夫信典 五百石　畠山長

門守義宜三千百石餘　戸田加賀守氏敏二千石　大澤右京大夫基昭三千五百五十六石　由良播磨守貞靖千石
織田大藏大輔信恭七百石　横瀨美濃守貞固千石　有馬兵部大輔廣憲五百石　中條中務大輔信禮千石
織田淡路守信裕二千石　品川豐前守氏繁三百石　畠山上總介基德五千石　大友豐後守義路千石
織田鎌次郎信愛二千七百石　六角頼母廣體二千石　吉良式部義發千四百廿五石　京極兵庫助高福千五百石
前田右近長年千石　前田貞之丞某千四百石　長澤直丸某千四百石　土岐功之助頼永七百石　日野主税某千五百三十三石餘　上杉豐三郎某四千九百十六石餘　今川斊三郎某千石　大澤右膳某六百石

〔有司勤仕錄〕高家衆
一禁裏江御使、并公家衆參向之節、諸事御用等之事司ﾚ之、雁之間江相詰る、其外御規式之御社參、御佛參之節は、御太刀を持供奉す、尤豫參也、神前江供神酒之事司ﾚ之、御酌等勤ﾚ之、正月御規式、御三家方御盃事之節、御酌相勤ﾚ之、

〔明良帶錄世職篇〕高家
世職にて、何れも家柄歴々の末流にて、職を世々にして官を嗣ぐ、此職尤雲上のことにあかるく、公方の名記、有職の事に達したる人、何れも老功の人ならねば功者ならず、昵近の公家衆と親しくなし、傳奏御用を勤め、○中略當番平日一人也、○中略京都御名代、金十五枚、時服三、羽織、伊勢御名代、金十枚、時服二、羽織、日光御名代、金五枚、時服、御法會御名代、將軍宣下御轉任之節、覽箱之受取渡し等、公家衆御馳走の掛り、上野上使、傳奏屋敷御使等、御馳走掛りの大名衆を指揮ありて習禮を傳授す、勅使登城にて、禁裏よりの御太刀指上らる時、御頂戴の後御床に納る、仙洞御所よりの品も同斷、中宮よりの進せられもの、御頂戴無ﾚ之、大納言樣へ同斷、是は御納戸構へ納て此職にて取扱、

〔類例略要集〕高家御役初り御家柄公家武家御撰定之前後
東照宮樣天下御平定之節、二條康道公江御相談被ﾚ爲ﾚ在、高家之名武家にも在ﾚ之處、中絕に相成候

故、被ㇾ爲ㇾ與旨ニ而、先大澤は持明院之流ニ付被ㇾ仰付、駿府江戸ニ而御用相勤メ、後子息より京都持明院家被ㇾ相續ㇾ任ㇾ大納言、是希代の事也、

凡武家より公家江養子他家ニ無ㇾ之、大澤家計成事は此故也、外ニ沼田三万石、眞田紀氏有ㇾ之、外不ㇾ承ㇾ之、但大澤遠州堀江城住領其地

吉良は足利の庶流系統不ㇾ絶ニ付被ㇾ加ㇾ之、京都向令ㇾ扱、

〔續泰平年表〕天保十三年四月十七日高家衆江御達書昨年以來、別而厚被ニ仰出一候趣も有ㇾ之候に付而者、一同申合、取締方も可ㇾ有ㇾ之處、兎角風儀不ㇾ宜、重も有ㇾ之哉、且又旅中幷在京中、不取締之儀も粗相聞候、急度も可ㇾ被ㇾ及ニ御沙汰一候得共、先此度者、御宥免を以不ㇾ及ニ其儀一候、向後何れも厚申合、質素節儉を第一に相心掛ㇾ不取締之儀無ㇾ之樣、堅相愼可ㇾ被ㇾ申候

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年三月七日、御追號御贈位の御謝使を高家吉良上野介義彌命せられ暇下さる、

〔大猷院殿御實紀六十二〕正保二年十二月廿八日、この日高家吉良若狹守義冬、日光山歳首の御使命せられ暇給ふ、

〔嚴有院殿御實紀三十九〕寛文九年十一月十五日この日與高家一人づゝ、直日を定むべき旨命せらる、

〔吏徴別錄上布衣以上〕高家　寛文九年己酉十一月十五日、御近習之高家之面々、向後一人充、殿中可ㇾ相詰旨被ㇾ命、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月十一日、高家のともがら、日をさだめ上直すべしと命せらる、

〔明良帶錄世職篇〕高家

四位の侍從、五位の侍從也、五位の侍從は高家に限る、

官位
俸祿

〔武家百官志〕侍從
高家は從五位下侍從之後、四位侍從に遷る、武家五位侍從は高家に限る也、
〔有司勤仕錄〕高家衆
一御役柄故、各四位五位之侍從、又は少將迄も被任事なり、
〔東職記聞 一〕高家十八人　官位、四位五位侍從、或少將、
雖萬石以下、於家流不恥於諸侯之舊家、依爲諸流之高家、將軍家被重之、官位之最初、叙從五位下、任侍從、歷從四位上下、任少將、爲先途、官位次第准國主及三家之庶流也、抑於關東、萬石以下勿論、雖萬石以上、於普通之家、官位昇進不思寄之儀也、此家流雖無位無官、白小袖乘輿被許之、既官位則列雁間之上、未官位之際、列柳間之下、誠重疊珍重之流也、
〔幕朝故事談〕高家、先年迄は無城嫡子の下に著坐に候處、近來有城嫡子の下、無城嫡子の上になるなり、又曰、是恐くは交代寄合の誤なるべし、
〔吏徵 上 布衣以上〕高家十六人　老中支配　芙蓉間　侍從　千五百石高〇中略　部屋住五百俵、御役料千俵、伊勢御名代、御暇金拾枚、時服貳、羽織、　京都御使、御暇金十五枚、時服三、羽織、　日光御名代、御暇金五枚、時服貳、
〔慶應元年武鑑〕御高家衆　雁之間　千五百石高　御詰番一人宛　肝煎三千石以下ハ御役料八百俵
〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月二十八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略　高家二千石以下は五百俵、
〔憲敎類典 二ノ五 御役〕享保八癸卯年六月十八日
　　　　　　　　　　　　　　　　　　高家衆
千五百石より內は、千五百石之高に可被成下候、

〔寶暦集成祿給錄二十五〕寶暦四戌年二月

御勘定奉行江

高家衆
長崎奉行

右御足高御役料、只今迄各裏印ニ而相渡候得共、向後直判手形ニ而受取候樣申渡候間得二其意一、其段書替奉行江可レ被二申渡一候、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨、被レ仰二出之一、

御役金被レ下高之覺

一金千五百兩　高家

高三千石以上之者江は半減

但御切米高貳千俵以上之者江は不レ被レ下

同千俵以上之者江は半減

〔東徵別錄上布衣以上〕高家　慶長十三年戊申十二月廿四日、始置二當職二員一、大澤兵部大輔基宿、吉良上野介義彌、

補任

〔東職記聞一〕高家十八

集成曰、○中略初吉良左京大夫義堯有二四子一、云二長義鄉、次義安、次義昭、次義虎一也、義堯卒、嫡子義鄉立、不日卒、其弟義安、嗣東條城主一爲二吉良持廣之養子一、而屬二今川氏一、是以立二義昭一爲レ嗣云々、神祖○德川家康悼二足利嫡流家絕一家、而後年召二上野介義安於駿州一、而遇レ之被レ以二客位一也、後奏二天子一任二之少將一、被レ稱二高

家中之第一也、先是當職之號無所見、則始于茲歟、

〔諸御役代々記 一〕高家

天正十六子四月十四日、寛永十七辰正月廿五日病死　大澤兵部大輔基宿 中將

慶長十三申十二月廿四日、寛永二十未十二月廿四日病死　吉良上野介義彌 少將

同十五戌　大澤右京大輔基重 少將

寛永三寅、寛文八申三月廿五日病死　吉良若狹守義久 少將

寛永十三子、寛文元丑十一月廿四日病死　今川刑部大輔範英 少將

正保元申、慶安三寅九月、西丸江被ㇾ爲ㇾ附、　品川內膳正高昭

正保元申、延寶六午七月廿二日病死　大澤兵部大輔基時

慶安三寅九月、西丸江被ㇾ爲ㇾ附、寛文二寅十二月四日切腹　上杉宮內大輔長貞

慶安三寅九月　戶田土佐守忠元

明曆三酉十二月廿七日、元祿十五十二月十四日夜、淺野內匠頭家臣ニ被ㇾ害、家斷絕、　吉良上野介義央 少將

寛文三卯正月十五日、貞享三寅三月廿七日願御免、　畠山下野守義重（改ニ飛驒守一）

同年三月十九日、延寶七未三月十五日願御免、　織田主計頭貞置

寛文五巳九月八日、御書院番より、延寶二巳正月七日卒、　由良新六忠繁（改ニ信濃守一）

寛文五巳九月八日、表高家より、貞享元子十二月十四日自害、　上杉伊勢守長之

寛文十一亥正月廿三日より、（中略）元祿十丑三月朔日病死、　大澤右京大夫基清

延寶七未五月三日、元祿元辰十一月十四日、（中略）御側衆江、　畠山次郎四郎基玄（改ニ民部大輔一）

右同斷、元祿八亥年十二月廿五日、病氣依ㇾ願御免、　由良新六賴繁（改ニ信濃守一）

天和三亥十一月十三日、表高家方、元祿元辰十一月廿五日、依ㇾ願御免、　土岐主殿賴清（改ニ出羽守一）

日野彌市郎資栄改伊勢守　元和三亥十一月三日、表高家より、(中略)元禄四未十二月四日、依願御免、

織田平八郎長達改隼人正　右同断、元禄五申三月御免

織田十郎長福改美濃守又能登守　元禄元辰十一月廿六日

大友内藏助義孝改近江守　元禄元辰十一月廿六日、表高家方、同十四巳八月廿一日(中略)御役御免、

今川刑部氏勝改刑部大輔　元禄元辰十一月廿六日、表高家方、同二巳閏正月十五日、御小性江、

品川采女伊氏改豊前守　元禄元辰十一月廿六日、表高家方、

六角孫九郎廣治改越前守　元禄二巳閏正月廿六日、御小性組より、同八亥七月十日、御役被召放、

大澤友之助基次改播磨守　元禄二巳閏正月廿六日、寄合方、同四未十月五日、病死、

前田左京義俊改河内守又左衛兵督　元禄五申正月十一日、同六酉九月廿九日、御小性江、

大澤孫三郎基詮改越前守又出雲守　同年同日、小普請より、(中略)正徳二辰六月十八日、御役被召放、

京極近江守高頴改對馬守　元禄八亥十二月十五日、寄合より、寶永二酉七月廿五日、願御免、

最上刑部義智改駿河守　元禄八亥十二月十五日、同十丑三月卒、

畠山民部大輔基玄　元禄九子十一月十二日、寄合より、再役、寶永四亥十月、願御免、

戸田圖書氏興改中務大輔　元禄九子十一月十二日、表高家方

畠山修理義寧改下總守　元禄十二卯十一月廿八日、表高家より、享保十四酉三月廿九日、依願御免、

横瀬式部貞顯改美濃守又駿河守　元禄十二卯十一月廿八日、表高家方、(中略)享保十三申十二月廿四日、依願御免、

宮原主膳氏義少將初長門守、改和泉守又刑部大輔、　元禄十四巳九月廿一日、表高家方、寶永六丑十二月十五日、免、御奉公被仰付、

中條左京信治改山城守又對馬守　元禄十四巳九月廿一日、表高家方、(中略)元文四未三月、病死、

大澤左衛門基實改右衛門督　元禄十五午十二月十五日、寶永五子、西丸御奉公被仰付、

織田式部信明改讃岐守　寶永二酉正月十一日、表高家方、享保八卯二月十八日、願御免、

大友孫三郎義閭（改因幡守）
寶永二酉正月十一日、表高家より、享保十六亥十月廿六日、依願御免、

京極大膳高氏（改大膳大夫）
寶永四亥十二月十五日、享保九辰十二月九日願御免、

長澤壹岐守資親　少將
寶永六丑正月廿一日、御小性より、（中略）寛延三午五月廿三日病死、

前田出雲守玄長　少將（改隱岐守）
寶永六丑正月廿一日、御小性より、寶曆二申四月病死、

蒔田左兵衛督義俊（後吉良左京大夫ト改）
寶永六丑正月廿一日、再役、元文五申十二月五日、老衰ニ付、依願御免、

大澤遠江守基實
右同斷

前田伊豆守實長　少將（改信濃守）
寶永六丑正月廿一日、御小性より、寶曆十三未七月三日病死、

再役　大澤右衛門督基隆
正德二辰十二月七日、御側高家より、同三巳六月十三日、御役被召放、逼塞、

堀川兵部大輔廣益
正德六申五月十六日、御側高家ゟ、寶曆六子四月五日病死、

織田大膳信倉　少將（改淡路守）
享保十三申十二月十五日、表高家ゟ、寶曆二申十月八月病死、

織田式部信榮　少將（改伊賀守　又對馬守）
享保十三申十二月十五日、表高家ゟ、後肝煎、明和四亥年（中略）御役被召放、隱居被仰付、

畠山次郎四郎基祐　侍從（改民部大輔　又紀伊守）
享保十五戌十二月十五日、表高家より、寛保二戌六月卒、

大澤左京基清（改下野守）
右同日同斷より、元文五申七月卒、

大澤兵部基朝　侍從（改丹波守）
享保二十辰四月廿二日、表高家ゟ、寛保三亥年（中略）御役被召放、

中條右近信秀　侍從（改山城守）
右同日、寛保二戌九月病死、

日野大學資陽　侍從（改若狹守）
元文五申十二月十一日、表高家より、寛延二巳三願御免、

京極四郎左衛門高本　侍從（改近江守）
寛保二戌十月十五日、表高家より、寛延元辰十二月十日、病氣依願御免、

由良新六郎貞整　少將（改播磨守）
寛保二戌十月十五日、表高家より、（中略）天明元丑月日病死、

畠山民部義雄　侍從（改民部大輔　又紀伊守）
延享二丑二月十五日、表高家より、（中略）寶曆十二午五月廿四日、病氣依願御免、

畠山織部國資　侍從（改飛騨守　又下總守）
右同日表高家より、（中略）明和四亥閏九月廿二日、病氣依願御免、

織田主馬長時（改主計頭）
右同日表高家より、寛延四未二月十四日、病氣依願御免、

長澤要人資祐（改土佐守、又壹岐守）
延享四卯三月九日、部屋住より見習、寛延元辰十二月十日本役、（中略）安永病死、

前田式部房長（侍從）（改出羽守）
寛延三午十二月十四日見習ゟ、（中略）同月廿六日本役、（中略）明和四戌閏九月廿六日肝煎、（中略）同九辰十月依願御免、

前田靫負長敦（侍從）（改伊豆守）
右同日同月廿六日本役、（中略）明和九辰十月廿八日、肝煎、安永四未三月十一日病死、

橫瀨式部貞隆（侍從）（改駿河守）
寶暦二申十二月朔日表高家ゟ、同十四申十二月廿三日、病死、

戶田縫殿助氏富（侍從）（改遠江守）
右同日表高家より、同十一巳九月三日病死、

六角主殿廣孝（少將）（改伊豫守、又越前守）
寶暦七丑十二月廿四日、表高家ゟ、（中略）安永四未三月廿一日肝煎、（中略）文化十二亥月日卒、

堀川修理廣之（侍從）（改兵部大輔、苗字有馬ト改、）
右同日表高家ゟ、（中略）安永五申四月四日肝煎、（中略）寛政二戌月日病死、

寶暦十二午八月十五日表高家より、（中略）安永九子五月二日肝煎、（中略）文化五辰十二月十四日、（中略）御免、

中條兵庫信敬（少將）（改大和守、又山城守）

大友左京義珍（侍從）（改近江守、又式部大輔、）
右同日表高家ゟ、（中略）寛政二戌二月廿九日肝煎、（中略）同十二申七月廿一日、老衰願ニ依御免、

今川主馬義泰（侍從）（改丹後守）
右同日表高家より、安永四未七月九日、病氣依願御免、

寶暦十三未十二月十八日見習より、（中略）明和四亥十二月十一日本役被仰付、安永五申九月十一日病死、

大澤兵部定寧（侍從）（改相模守）

上杉中務義壽（侍從）（改主水正）
明和四亥十二月十一日、表高家より、同六丑十二月十日、病氣依願御免、

吉良式部義豐（侍從）（改左京大夫、又左兵衞督、又左京大夫、）
右同日表高家より、（中略）天明元丑八月十日、病氣依願御免、

戶田圖書氏明（侍從）（改中務大輔）
右同日表高家ゟ、（中略）寛政九巳十一月十六日肝煎、（中略）文化七午月日病死、

宮原勘太郎義潔（侍從）（改和泉守、又長門守）
安永二巳八月十二日、表高家ゟ、（中略）文化元子十二月十一日肝煎、文化三寅十二月六日、病氣依願御免、

右同日表高家より(中略)寛政十二申十月廿五日病死、
横瀬式部 侍従 貞臣 改駿河守

右同日見習部屋住より(中略)同五申六月廿七日本役、(中略)天明六午七月九日、病氣依願御免、
由良新六郎 侍従 貞通 改信濃守

安永五申七月四日、表高家より(中略)文化三寅十二月十五日肝煎被仰付、(中略)文化五辰正月病死、
大澤内膳 侍従 命德 改下野守、又下總守、改基季

右同日表高家より、天明〔　〕病死、
前田式部 侍従 清長 改隱岐守

右同日表高家より、天明五巳四月八日病死、
土岐大膳 侍従 賴方 改大膳大夫

安永九子六月十七日、表高家より、文化二丑七月八日卒、
前田靱負長禧 改伊豆守、又信濃守

右同日表高家より、天明八申九月廿六日病死、
武田織部 侍従 信明 改安藝守

右同日見習部屋住より、(中略)安永九子九月朔日本役、(中略)寛政四子閏二月二日病死、
六角帶刀 侍従 廣壽 改伊豫守

天明四辰七月十二日、表高家より、寛政七卯九月廿七日病死、
織田大膳 侍従 信直 改能登守

右同日見習部屋住ゟ、(中略)同二十二月廿三日本役、(中略)享和元酉五月廿二日病死、
有馬勘解由 侍従 廣春 改修理大夫、又兵部大輔、

天明七未三月朔日、表高家ゟ、文化四卯十一月廿八日肝煎、(中略)同十四丑五月廿八日卒、
織田主膳 侍従 信由 改主計頭

天明七未三月朔日、見習部屋住より、(中略)同四月十三日本役、(中略)文化五辰十二月廿五日肝煎、(中略)文政十亥年四月卒、

中條兵庫 侍従少將 信義 改河内守

寛政四子十二月十六日、高家末席ゟ見習、同六寅八月廿一日本役、(中略)文政五午六月卒、
大澤右京大夫 侍従 基之

寛政六寅十月廿日部屋住より見習、(中略)同七卯二月廿九日病死、
六角主殿 侍従 廣敎 改伊豫守

寛政六寅十月廿日、部屋住ゟ見習、(中略)文化十二亥七月廿日、病氣依願御免、
大友左京 侍従 義方 改因幡守

寛政八辰十一月二日、部屋住ゟ見習、(中略)文化七午十二月廿九日、(中略)御役御免差扣、
六角主殿 侍従 廣胖 改主殿頭

寛政十午九月廿四日、部屋住ゟ見習、(中略)文化七午十二月廿四日肝煎、(中略)天保五午九月五日、病氣依願御免、

戸田圖書氏 少將侍従 倚 改備後守、又備前守

享和二戌十二月廿七日、表高家ゟ、(中略)文政元寅八月十日卒、
今川主馬 侍従 義幹 改丹後守

享和二戌十二月廿日、表高家より、(中略)文化四卯三月廿八日、病気依願御免、

日野玄蕃資施 侍従 (改伊豫守)

文化二丑閏八月九日、部屋住ゟ見習、(中略)文政五午六月廿五日肝煎、

宮原仙之丞義周 少将侍従 (改攝津守、又彈正大弼)

文化四卯四月廿五日、表高家より、(中略)同八未十一月廿九日卒、

畠山榮三郎國祥 (改紀伊守)

文化四卯四月廿五日、表高家より(中略)文政三辰五月日病死、

土岐大膳頼康 (改大膳大夫)

文化四卯四月廿五日、表高家ゟ、(中略)同五辰三月廿日病気依願御免、

京極兵庫介高次 (改近江守)

文化四卯八月晦日、部屋住より見習、(中略)同六巳三月卒、

大澤左京基隆 (改左京大夫)

文化五辰十月二日、部屋住ゟ見習、(中略)文政十亥二月十日肝煎、同十一子十一月十七日卒、

織田又太郎信順 (改豐後守、又主計頭)

文化六巳四月廿四日、表高家より、(中略)同十一戌三月七日病気依願御免、

上杉兵部義長 (改中務大輔)

文化六巳四月廿四日、表高家ゟ、(中略)同十一戌六月廿九日病死、

有馬久米允廣壽 (改兵部大輔、又修理大夫、)

文化八未六月三日、部屋住より、(中略)文政十二丑十月廿八日、病気依願御免、

中條鶴次郎信德 (改大和守)

文化八未十一月廿四日、表高家ゟ、(中略)文政十一子十一月廿七日肝煎、

武田貞之丞信典 (改左京大夫、又大膳大夫、)

文化八未十一月廿四日、表高家ゟ(中略)文政十三寅八月日死、

横瀬左衛門貞征 (改駿河守、改美濃守、又駿河守)

文化十一戌十一月十四日、表高家より、(中略)文政十三寅三月七日、思召有之御免、

大澤右膳基休 (改修理大夫)

文化十一戌十一月十四日、表高家ゟ、(中略)天保十三寅七月十五日肝煎、

畠山庸藏義宣 (改飛騨守、又長門守)

文化十一戌十一月十四日、表高家ゟ(中略)天保二卯十二月十八日卒、

前田百之助長粲 (改信濃守)

文政元寅九月二日、部屋住ゟ見習、

戸田圖書氏徽 (改中務大輔、又土佐守、又加賀守、)

文政元寅九月二日、部屋住より見習、(中略)同二卯九月卒、

大澤兵庫基榮 (改相模守)

文政二卯十二月廿二日、部屋住より見習、

大澤采女基昭 (改式部大輔、又民部大輔、又右京大夫、)

文政二卯十二月廿四日、表高家ゟ(中略)天保十一子月日死、

今川刑部義用 (改刑部大輔、又上總介)

文政二卯十二月廿四日、表高家より、

由良新六郎貞陰 (改播磨守)

文政九戌十二月十五日、表高家より、(中略)天保十一子月日死、　畠山左衛門基利改紀伊守、又式部大夫、又中務大輔

文政九戌十二月十五日、表高家より、(中略)天保六未十一月廿六日、病氣依レ願御免、(中略)　前田織部長義改二出雲守一

文政十一子十一月四日、部屋住より見習、　宮原勘五郎義直改二攝津守一

文政十一子十一月四日、部屋住ゟ見習、　織田主膳信恭改二大藏大輔一

文政十三寅四月七日、部屋住ゟ見習、　武田啓之丞信元改二左京大夫一

天保二卯八月五日、部屋住ゟ見習、　横瀬左衛門貞固改二美濃守一

天保六未十二月廿四日、表高家より、(中略)嘉永元申十一月廿七日病死、　有馬兵部廣憲改二兵部大輔一

天保六未十二月廿四日、表高家より、(中略)同十二亥四月十六日死、　土岐左衛門頼之改二出羽守一

天保六未十二月廿日、表高家より、　中條兵庫信禮改二山城守一

天保十一子八月廿日、表高家より、　品川内記廣繁改二豐前守一

天保十一子七月廿日、表高家ゟ、　織田專次郎長裕改二淡路守一

天保十三寅十二月八日、表高家ゟ、(中略)嘉永元申十一月廿七日、病氣依レ願御免、　大友丹次郎義路改二豐後守一

天保十三寅十二月八日、表高家ゟ、　畠山左衛門基德改二上野介一、後民部大輔

嘉永元申十二月廿日、表高家ゟ、　土岐功之助頼永改二出羽守一

嘉永元申十二月廿日、表高家ゟ、　六角帶刀廣泰改二越前守一

〔吏徴別録布衣以上〕高家　元祿八年乙亥十二月十五日、交替寄合最上刑部義智拜職、十八日、侍從改駿河守、此爲二一代高家一、

〔柳營秘鑑四〕諸御役人員數幷組支配

一高家衆九人内三人肝煎

〔有司勤仕録〕高家衆

肝煎

一此內貳人肝煎と云有之、專京都之事司之、

〔職掌錄〕高家

京都年頭御使は、肝煎三人にて、かはる〲勤ることなり、〇中略肝煎被仰渡は、芙蓉間にて老中列坐、月番の申渡也、御太刀之役は肝煎に限ること也、故に肝煎被仰付候へば、改て御席にて、御太刀之役被仰付こと也、

〔明良帶錄世職篇〕高家

肝煎は從四位上の少將にて、雁之間御椽に列す、

〔吏徵別錄上布衣以上〕高家　寬保元年辛酉五月廿日、肝煎不拘位階、可為上席旨被定、

〔有司勤仕錄〕高家衆

肝煎貳千石高、八百俵御役料、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日　高家衆

千五百石より內は、千五百石之高に可被成下候、

肝煎ハ、御役料八百俵可被下候、

〔德川禁令考十八稍規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定〇中略

別紙　御役金被下高之覺

金千五百兩高家〔中略〕肝煎江は別段金五百兩

〔萬天日錄〕天和三年三月七日、高家吉良上野介、大澤右京大夫、畠山飛驒守、

右之面々、月番ヲ致シ、御用可相勤ノ旨被仰渡之、

〔常憲院殿御實紀五十四〕寶永三年十二月廿五日、高家品川豐前守伊氏、織田能登守信門、ともに祿

少きにより、役料八百俵づゝになしたまふ、

側高家

〔吏徵別錄上 布衣以上〕高家　寶永三年丙戌十二月廿五日、肝煎御役料八百俵、

〔高家勤舊記二〕大澤右衛門督基迢　寶永六年四月十五日、從四位下、元御側詰高家、御小性列

〔諸御役代々記一〕高家

再役 大澤右衛門督基隆 正德二辰十二月七日、御側高家ゟ、

堀川兵部大輔廣益 正德六申五月十六日、御側高家ゟ、

表高家

〔明良帶錄 世職篇〕表高家

是は幼年か、又は時務に未熟なるかの仁、暫く無位無官にて爰に居る、此內より人材殊絶の人は高家に昇る、但し家にもよる、

〔大猷院殿御實紀 四十二〕寛永十六年閏十一月七日、この日表高家品川新六郎高久子、內膳高如、○中略 家つがしめらる、

〔常憲院殿御實紀 十〕貞享元年十月十五日、上杉主水長宗、表高家命せらる、

〔慶應二年武鑑〕表御高家衆　柳之間　乘輿白無垢著

大友式部源義敬　織田職之助平信眞 二千石　戸田中務藤原氏貞　日野大學藤原 千五百三十三石

織田主計平信任　上杉源七郎藤原 千四百九十六石　吉良源六郎源義方 千四百二十五石　長澤內記藤原資□ 千四百石

有馬修理 五百石　畠山木久麿源基永 五千石　織田數馬平信德　大澤兵庫助藤原基恭 六百石

中條兵庫藤原信汎　前田凞十郎藤原長禮 千四百石

見習

〔高家勤舊記二〕織田能登守元長

寶永二年正月十二日、豐前守○品川伊氏相勤候御用、可見習旨被仰出、　閏四月七日、今度京都へ上使ニ付、從四位下可任叙爵旨被仰出之、

西丸高家

〔浚明院殿御實紀五十一〕天明四年十二月廿三日、高家見習有馬修理大夫廣春、官料千俵を給ひ、こののち御使の事奉るべきむね命せらる、

〔文恭院殿御實紀四十三〕文化八年七月晦日、高家見習中條大和守、こののち代參使者等の事、同列並のごとくつとむべしと命せられ、官料一千苞を下さる、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇徳川家光世子家綱に附屬せらるゝ輩あり、高家は品川内膳正高如、上杉宮内大輔長貴、

〔吏徴別錄上布衣以上〕高家　慶安三年庚寅九月三日、始置西丸高家三員、

古事類苑

官位部五十六

德川氏職員五

大目付 闕所物奉行附

大目付ハ寬永九年置ク、四人若シクハ五人アリ、大目付ハ大監察ノ義ニシテ、一切ノ政務ヲ監察スルヲ其職ト爲ス、而シテ兼テ諸大名ノ席次及ビ殿中ノ禮法ヲ監シ、諸大名ノ傳達、訟獄逮捕ノ事、諸士分限ノ事、服忌ノ事ヨリ、日記ノ事、鐵砲改、宗門改、道中奉行等ノ事ヲ掌リ、此他長崎ニ出役スル等ノ事モアリテ、其職掌甚ダ多シ、

〔柳營秘鑑〕四諸御役人員數并組支配

一大御目付四人 内一人づヽ西丸江詰る○又見二吏徵一

〔職掌錄〕大目付 當職四人、或五人、

〔官中秘策〕十諸御役人之事

一大目付 三千石高 五人

右ハ萬石已上之觸流、諸國驛宿○宿一本作馬船渡等、同役中より壹人兼帶之、切支丹宗門改、同役中より壹人兼帶之、支配下闕所物奉行、

〔享保集成絲綸錄〕一寬文二寅年二月

先頃所被仰出之老中幷御旗本方支配之差別略○中

大目付衆略○中 右者老中支配

〔藩翰譜柳生六〕寛永九年十二月十七日、始て總目付と云職を置かれて、宗矩、水野河内守〇守信、秋山修理亮〇正重井上筑後守〇政清其職に任ず、是れ今世の大目付なり、〇又見二營中御日記一

〔諸役人代々記一〕大目付　三千石

家光公御代寛永九申年十二月十七日、御目付より、　井上筑後守政重

同年同月同日　柳生但馬守宗矩

同年同月同日、御目付より、　秋山修理亮正重

同年同月同日、堺奉行より、　水野河内守守信

同十七辰年正月廿三日、江戸町奉行より、　加々爪甲斐守忠澄

同十九午年十一月八日、御目付より、明暦元未年二月十五日卒、　宮城越前守和甫

正保四亥年七月三日、御目付より、寛文六午年六月廿六日御免、　兼松下總守正直

家綱公御代明暦元未年九月十日、新番頭より、寛文十戌年三月九日御免、　北條安房守氏長

万治二亥年七月十九日寄合より、延寶四辰年十月十一日御免、　高木伊勢守守久〇守久一本作二正能一

〔藩翰譜加々爪六〕民部少輔忠澄、〇中略寛文十五年五月、大目付となつて、同十七年六月十三日、職免され、明れば十八年五十六歳にして卒す、

〔續々泰平年表十七〕安政二年八月九日、御役替〇御留守居跡部甲斐守、土岐丹波守、右兩人、大目付江轉役被二仰付一之、但右兩人とも御留守居之格席を以御轉役也、私に云、大目付に而兼帶爲レ持候事之始也、

〔嘉永明治年間錄十七〕明治紀元戊辰　德川家有司鑑抄

大目付

元治元甲子十月台命　江戸駿河臺　高千二百石　瀧川播磨守具擧

慶應二丙寅七月台命　同飯田町　高三千石　戸川伊豆守安慶

同三丁卯台命　同市兵衛町　高三百俵　川村大和守

同年台命　同西久保　高三百俵　木下大内記

〔教令類纂初集三十九〕寛永九壬申年十二月十八日

條々

一諸大名御旗本江、萬事被仰出御法度之趣、相背輩於有之ニハ、承り届可申上事、

一對公儀、諸人不覺悟成者有之にをゐてハ、承届可申上事、

附諸事御奉公だての儀、幷に不作法成者、承届可申上事、

一年寄中、其外御用人、幷諸役人代官以下ニ至迄、御奉公だて仕者、又御うしろぐらき者有之にをゐてハ、承り届可申上事、

一御軍役嗜之わけ、承届可申上事、

一諸奉公人、大小によらず、身上不成者之様子、承届可申上事、

一民つまり草臥候儀など、承届可申上事、

一不依何事、諸人迷惑仕候儀、於有之ニハ、承届可申上事、

寛永九年申十二月十八日

秋山修理〇正重

水野河内〇守信

柳生但馬〇宗矩

井上筑後〇政重

〔教令類纂初集三十九〕寛永九壬申年十二月廿五日

覺

一御用日に其坐江罷出、善惡之儀可承届事、
一四人之者、兩人づゝ、公事之場江可罷出事、
一御老中にて、誓詞致し候もの、四人之者參、誓詞之文言改判いたさせ可申事、
一誓詞仕候者之判形、四人之者改可申候、但小身成者ハ、四人之者宿所にても、致させ可申事、
一御旗本之諸人、馬しるし差物、組々の分、仕置可申事、
一諸人分限帳、并知行之國、一ッ帳ニ作置、可申候事、
一海道筋制札、ふるく成候もの、改替可申事、
以上
寛永九年壬申十二月廿五日

〔有司勤仕錄〕大目付
一被叙從五位下、於殿中諸大名之席々を改事司之、總而万石以上江觸流し、或は御社參御佛參之節、大紋行列供奉之御觸、其外万事司之、諸大名病氣差合にて御禮無之斷を請老中江達之、
一當御役之内にて、切支丹宗門改、鐵砲改、分限帳改、道中奉行等之加役壹人ヅヽ請取有之而勤之、
道中奉行ハ御勘定奉行よりも相勤之、

〔明良帶錄後編〕大目付　三千石高　芙　老支
此場は、寛永九年、秋山修理亮正重、水野河内守守信等始て勤む、御留守居へ昇り、延寶九年坂本右衞門佐重治は寺社奉行に昇る、其後なし、勤向は諸大名への御觸事、御禮席寄せ差引、御老中方より御觸事、御規式に掛りたる御書付は、此役場へ御渡し有り、殿中非常の取計、西丸御殿見廻り、評定所立合等、其外御政事筋一向なり、〇中略懸りは分限方、服忌方、鐵炮改方、指物方、宗門方、御日記方、道中方等也、〇中略其外懸りは、諸向より達するを請取る、兩山見廻り、遠國御用之事、しげき場也、

〔東職紀聞一〕大目付四人　從五位下

掌監一切之善惡、鐵砲宗門分限帳等諸改之事、於殿中口達執政之下知於諸侯、禮謁之日巡諸殿戒非違、且諸侯大夫捧誓書之時、在執政之傍而檢之之職也、慶延略記曰、寬永九年十二月始置此職、以(寬明同說、而脫水野氏、加井上氏、)柳生但馬守宗矩、水野河內守守信、秋山修理亮正重三人被補之、又曰同十七年四月增一人、井上筑後守政重補之、爾來四人無增減也、(明曆元年九月、北條安房守補之之時、帶吉利支丹奉行、万治二年七月、高木伊勢守補之之時、帶道中奉行、爾來帶兩改之事也、)廻文以下達万石以上之義者、當職之所奉行也矣、

〔享保集成絲綸錄十八〕正保三戌年五月

一御奏者番、幷御勘定方四人之役人、大目付、町奉行、

右之面々日來御奉公之儀、朝四ツ以後登城、晩は、八ツ以前ニ退出仕候事、不應貴命候之間、自今以後、可相嗜之旨上意之趣、酒井讚岐守(忠勝)傳之、

〔鳩巢小說下〕一新井氏(君美)被申候ハ、先刻北條安房守參ラレ候テ、暫語リ被申候、今ノ安房守祖父安房守、嚴有院樣御時、大目付役ニテ候、何ヤラン大事ノ公事ニテ、御老中方其外役人中御寄合御僉議一決ニテ、何レモ同心ノ體ニ候處、安房守一人兎角申サレズ、酒井雅樂頭殿被申候ハ、安房守一人是非ノ事申サレズ候、外ニ了簡モ有之ヤ、ウケ玉ハリ度ト也、其時安房守申サルハ、御尋ニテ候間申上候、私ハ此裁判ノ趣御尤トハ不存候旨申サレ候、其時名人伊豆守殿被申候ハ、夫ハ意地ノワルキト申モノニテ候、是程各僉議候テ、存ヨリヲ申候處ニ、不同心ニ存ゼラレ候ハヾ、早速其段不被申候テ、雅樂頭殿前ニ御尋候ヘバ、左ヤウニ被申候、若シ御尋ナクバ、右不同心ノ義ヲ、其マヽ聞テ居ラレ候ハントノ義ニ候ヤト申サル處、房州被申候ハ、儕ハ私役義ノ筋取違ヒアシク心得罷在ト奉存候、只今マデ私心得候ハ、大目付役ノ義ハ、其僉義ノ座ニ加リ、各サマ被仰候趣ヲ默シテ承リ、上樣ヨリ御尋モ有之時分、ケ樣々々各僉義仕ト、其趣ヲ申上ル役ト存マカリ在リ候、若

各サマ方同事ニ了簡ヲ申候バ、各サマ同役ト申者ニテ候、ケ樣心得マカリ在候故、只今マデ私了簡不申入候ヘ共、雅樂頭殿別段ニ御尋故尤ト不存義ヲ尤トハ難申候故、有ヤウニ申候、然處伊豆守殿御申候ヲ存候ヘバ、サテハ只今マデ役義ノ筋心得違候ヤト存候旨申サレ候ヘバ、流石ノ伊豆守ドノ、一言モ無之候、其時雅樂頭ドノ、成程尤存候、然ドモ是ハ各別ノ義ニ候間、御了簡ノ赴承度由申サレ候ニ付、安房守ドノ、了簡被申候處、各是ニ同心ニテ、終ニ其通ニマカリ成候由、其時分マデハ老中役人等、ケ樣ニ我役義ヲ常ニ守リ被申候、○下略

〔憲教類典二ノ五御役〕天明九己酉年正月廿二日

御目付と申候者、御政事之役ニ而、御作法第一ニ相守候義ニ候、御勝手向預り候御勘定奉行等、大目付、御目付御政事御作法之御役とハ、兩輪之義ニ而有之候、然る所、御目付之内ニ、御勝手掛と申有之譯ハ、御勝手向と御政事向とハ兩輪ニ而分リ不申候得共、御勝手向取〆宜は則御政事之立行御作法之正敷ニ而、御勝手向之御不取〆ハ御政事之欠ケ有之候間、離れて不離ものゆへ御政事御作法之御目付役御勝手掛と申有之事ニ候、右御勝手掛リハ御勝手向御不取〆リ無之樣、又酷薄儉約と申候而も、下々ニ難儀迷惑致候筋有之候而者、やはり御政事之欠ケ御作法不宜候間、其所を厚く心懸候事たるべく候、御儉約之義ハ不益之御費無之樣ニ致候のみの事ニて候、有來候品を半分減三分減候樣成事有之、書面之上は御益之やう相立候樣ニ而も、下々迷惑難義致、自分にて不具を補ひ候と申樣ニ而は、何とも大賄ニ取、如何敷、御趣意相背候事ニ候、利勘利德即功を求候類ニ候、風俗之害ニ相成、必今日之御益ハ明日之御損に相成候事有之ものにて候、小家之儉約之法を以取行候之事ハ尤不相成候、必利勘ニ落入候、さればとて物事寬大ニ過、手重ニ過候得ば、不益之費成る御儉約之御趣意背申候、唯今質朴簡易と申候而は、事輕く手重ニ不相成樣致し、外飾之不益之儀相止、下々ハ相應ニ而立行難有大切之御奉公致候義、專要之事ニ候、下々難儀

と申とて、其分限外之義有之類ハ、寛大ニ過申候事ニ候、此等之趣意行屆候樣ニ心を盡、不行屆義ハ兼而心を懸被申聞候事專一ニ候、御目付役ハ御勝手向之役と混趣意ニ相違申候間、此旨何も承知之可爲事候、猶又可被申聞置候、

正月廿二日

〔續々泰平年表〕安政二年八月十五日、阿部伊勢守殿より大目付江、水戸前中納言殿、海岸防禦筋井御軍制御改正等之儀に付、近頃も三度御登城被爲在之候處、此度御政務筋之儀に付、改而被仰出候趣も有之候に付而は、彼是御相談之儀も可有之候間、御老體之儀御苦勢には被思召候得共、以後は隔日御登城被成候樣被仰出候、

〔甲子夜話 一〕松平定信越中守在職ノ時、土浦侯卒ス、土屋但馬守奏者番世ヲ擧テ病死ニ非ト風聞ス、侯跡目願ノトキ、判元見屆トシテ大目付大屋遠江守往ベキ旨ヲ定信申渡ス、コノ大屋ハモト田安殿ノ家老ヲ勤テ、定信少時ヨリ親ク思ハレケレバ、ソノ時ニ臨テ定信ニ私語シテ曰、土屋氏專變死ノ聞アリ、若其コト實ナラバ奈何取計ベキト云シカバ、定信色ヲ勵シテ曰、御役ニテ判元見屆ラルベシト申達スルニ、卒忽ノ口上ナリ、實否ハ參リテ見屆ラルベシトアリケレバ、大屋大ニ失言ヲ悔悟シ、判元見屆別事ナク返リ申上シトゾ、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年八月

大目付
御目付　江

出役之者認候御日記之儀、日々表御右筆所より請取、詰所引拂候節、又候御右筆所江相闕候樣可被致候、

一御日記都而調方之儀、御日記方從御右筆突合に差越候節可成丈手間取不申樣取調、年々おくれに不相成樣可被致候、尤御日記調方清書之儀も、手間取不申樣御日記方御右筆江も相達候

間、得其意可被談候、

〔教令類纂 初集十八〕寛永六己丑年四月

覺

一御禮日、其外出仕有之節、向後大目付、御目付席々見廻リ、作法等宜敷樣ニ、可被相心得事、○中略

三月

一萬事訴人事

〔憲教類典 二ノ五御役〕寛永十二乙亥年十一月十日

水野河内守 ○守信　柳生但馬守 ○宗矩　秋山修理亮 ○正重　井上筑後守 ○政清

右四人可承之事

○按ズルニ、此條ハ大目付ノ明文ナシト雖モ、水野守信等四人ハ、當時大目付タリシモノナリ、

〔幕朝故事談〕仙石丹波守、多材の人にて、自分狀を認ながら、物書に口占し、文爲讀て聞く人なりしが、必其敵に遇者にて、四拾七人の事、此人の玄關へ註進に來り、逐に懸りと成、此時大目付成故なり、其後御留守居と成、江島殿の事懸りとなる、

〔常憲院殿御實紀 四十七〕元祿十六年二月四日、去年吉良上野介義央がもとに押入て、主のために報讐せし、故淺野內匠頭長矩が家臣、大石內藏助をはじめ、四十六人の輩、國禁を犯し、黨をむすび、飛具を用ひ、公をはゞからずとて、共に死をたまふ、○中略 大目付仙石伯耆守久尙、目付長田甚左衞門長親命をつたふ、

〔常憲院殿御實紀 四十〕元祿十二年十一月廿六日、この日寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭へ令せらるゝは、火賊盜考察の兩加役、今より後停廢せらるゝにより、人々緩怠の心おこるべければ、前に加役あらざりし時の如く心得、相互ひに所管の地點撿せしむべしとなり、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十一月廿七日、天草の逆徒征討の御使を、松平伊豆守信綱、戶田左門氏鐵に命せらる、

○按ズルニ、此時松平信綱ハ老中、戶田氏鐵ハ大目付ニテ、老中軍ニ臨ム時ハ、必ズ大目付ヲ附ケラレシナリ、

〔溫恭院實紀七〕安政元年七月廿四日、御役替、達、御軍制御改正御用于水戶前中納言、令御軍制御改正御用者、海防御用者、

御役替

大目付

西丸御留守居大目付格　筒井肥前守〇中略

大目付　井戶石見守

筒井肥前守〇中略

一

右於御前被仰付之〇中略

右御軍制御改正被仰出候間、右御用可相勤旨、伊勢守申渡之、

〔續泰平年表〕弘化二年八月八日、大目付土岐丹波守〇中略海岸防禦之儀、御用取扱被仰付、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年二月廿日、大目付北條安房守氏英〇中略小金の原御狩の事つかさどるべしと命せらる、

〔吏徵附錄權職〕鐵炮改一人　大目付兼役　貞享四年丁卯十二月二日始置二人　享保四年己亥正月十一日、大目付一人兼役、

〔明良帶錄後篇〕大目付三千石高老支　芙

懸りは分限方、服忌方、鐵炮改方、〇中略十里四方鐵炮改、四季打鐵炮打留取上書付、江戶より分口何

十里と認め差出す、隱鐵炮は停止なり、

〔憲教類典 五ノ十三 鐵砲〕貞享三丙寅年四月廿二日

口上之覺

鐵炮改、向後諸國一同被仰付候、證文等之儀、河野權右衞門、加藤兵助方江可被相伺候、以上、

四月廿二日

〔憲教類典 五ノ十三 鐵砲〕享保二丁酉年五月三日

一鐵炮改之義、向後關八州ハ、貞享四年被仰出候趣ニ相心得、てつほふ改役ゟ相伺可受差圖候事、

○中略

一關八州之外之國々は、てつほふ改役江例年證文指出し候事、以來不及其儀候、尤猥に無之樣ニ、

御料私領寺社領共ニ急度可申付候事、

右之趣、可被得其意候、以上、

享保二酉年五月

〔常憲院殿御實紀 十四〕貞享三年十一月廿八日、大目付水野伊豆守守政、鳥銃考察を命せらる、

〔常憲院殿御實紀 三十九〕元祿十二年五月廿一日、普請奉行甲斐庄喜右衞門正永、鳥銃考察命せらる、

〔有德院殿御實紀 八〕享保四年正月廿一日、大目付内藤日向守正峯に鳥銃監察の事を命せらる、これはもと大目付小普請奉行各一人この事奉はりしが、これより後は大目付のみ奉はる、

〔德川禁令考 二十五 鐵砲改〕文化元子年十一月

隱鐵炮之儀ニ付江戸拾里四方之心得方問合并挨拶

石川左近將監

隱鐵炮致所持候もの、江戸拾里四方と右之外とは、御仕置差別有之儀ニ候處、江戸拾里四方は、日本橋より四方江五里宛之儀ニ候哉、又は何方迄と申取極等有之候哉、此段及御問合候、以上、

子十一月

御書面、江戸拾里四方鐵炮改之儀、享保十四酉年三月廿六日、水野和泉守殿御書付を以、御拳場井江戸拾里四方と有之ハ、日本橋より東西南北江五里宛と可相心得旨、被仰渡有之候、以上、

子十二月朔日　久田縫殿頭

〔有司勤仕錄〕大目付

一切支丹宗門改之事

一例年七月ゟ十一月迄之内、奉行所江諸大名ゟ兩判之證文差出之、是を一紙證文と云、類族之生死、嫁娶、養子、改名、剃髮等之儀、二季之屆也、追放も近年は其趣にて、是又屆にて相濟、本人伺も何事も其時之伺に而、奉行中差圖之上、其通申付候段、當座屆出之、本人同然之者なれバ、其子其孫迄、類族に成る、本人ゟ都合六代なり、七代目平人に成、是を男草と云、其外本人同然之忌掛之者不殘類族也、本人之聟舅は忌服無之といへども類族に成る、此宗門ハ、御代々堅御制禁ニ而、毎度被仰出も有之なり、〇又見柳營秘鑑、職掌錄、

〔嚴有院殿御實紀十七〕万治二年四月二日、大目付北條安房守氏長、天主教考察によて、先手頭與力三騎、同心三十人を附屬せられ、別に與力三騎召かゝへしめ、總計六騎になされ、廩米六十石づゝ給ふ、

〔教令類纂初集百四〕寬文十一辛亥年六月十九日

覺

一其方御代官所、耶蘇宗門改之儀、被入御念候由ニ候得共、彌無油斷可被申付候、向後ハ百姓壹軒

ツ、人別帳江記之、一村切ニ男女之人數を致し、又一郡切ニ成共、國切ニ成共、都合せしめ、自今以後無懈怠被申付、帳を作手前ニ被差置、此方江ハ、當年之通り一紙手形可被差上候、〇中略

亥十月晦日　　德　五兵衛

杉　内藏允

松　猪右衛門

〔御當家令條十八〕青木遠江守宅江諸留守居扣之申渡覺

切支丹宗門改之義、前々ゟも隔年ニ證文被差上候得共、當年ゟは、毎年四月ゟ十一月迄之内、宗門改之證文可被差出候、彌入念改可被申候旨、御老中被仰渡候由、申渡之、

延寶九年酉二月廿九日

〇按ズルニ、切支丹奉行ハ、大目付、作事奉行ノ兼職ナリシガ、普請奉行ヨリモ兼帶シタル事アリ、憲廟實錄ニ、天和二年十月二十五日、普請奉行田中孫十郎、天主教考察の命を奉るトアルモノ是ナリ、但シ一時ノ事ニテ常例ニアラズ、又作事奉行ニ當職ノ兼帶ヲ命ジタルハ、寛文二年二月八日ヲ始トス、

〔大概順〕御目見以下大概順

現米八十石　　抱入役上下　　大目付　宗門改與力

〔憲敎類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代幷御抱場所書付〇中略

前々ゟ、御譜代ニ而無之と相定取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

切支丹改與力同心

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年二月十八日、大目付與津能登守忠閭、目付三宅大學康敬に、諸

國の戸口を改むべしと命ぜらる、

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年六月十二日、大目付井上筑後守政重、六千石加恩ありて、一万石になさる、毎年長崎につかはされ、かの地の政務をあつかふによてなり、

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年四月七日、大目付安藤筑後守重玄、驛路の事奉る、

〔大猷院殿御實紀七十四〕慶安二年三月十日、この四月大納言殿〇德川家綱日光山へ御參あれば、先達てかしこにまかり、驛路其外の事まで、巡察すべき旨、大目付兼松彌五左衞門正直〇中略仰付らる、

〔文昭院殿御實紀十三〕正德二年正月廿一日、少老久世大和守重之、日光山御參ならびに日記の事つかさどるべしと仰付られ、〇中略大目付仙石丹波守久尙、目付鈴木飛驒守利雄、堀田源右衞門通右も、日記の事とるべしと命ぜらる、大目付折井淡路守正辰、松平石見守乘邦、横田備中守由松は、丹波守久尙をたすけて其事はかるべしと仰下さる、

〔東職紀聞二〕監國君職

大目付

慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿以大目付兼松彌五左衞門正直〇下略被爲監國君也、當代闕職、

〔甘露叢五〕延寶八年十一月廿一日、德松君西丸へ御移徙巳後奏者番一人、大目付一人、〇中略右晝計可相詰、〇下略

〔昭德院實紀九〕万延元年十一月朔日

和宮御方御緣組井御下向御用、被仰付之、

大目付　遠山隼人正〇中略

〔常憲院殿御實紀四十〕元祿十二年九月廿一日、大目付溝口修理宣就に分限帳査勘の事仰付らる、

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政九巳年閏七月

大目付江口上ニ而達之覺

都而引下勤被仰付候者共、由緒書江、其譯認入可申事ニ候、是迄不認向も有之候間、是又認入候樣、組支配有之向々江寄々可被達置候事、

〔續泰平年表〕弘化二年十月十六日、大目付深谷遠江守、〇中略系譜取調御用被仰付、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年二月十八日、大目付與津能登守忠閏〇中略に、諸國の戸口を改むべしと命せらる、

〔天保集成絲綸錄七十七〕享和元酉年七月

大目付江

百姓町人苗字相名乘、并帶刀致し候儀、其所之領主地頭より差免候儀ハ格別、用向等相達候迚、御料所ハ勿論、他領之者共江、猥ニ苗字を名乘せ、帶刀爲致候儀は有之間敷事ニ候間、堅可爲無用候、右之通可被相觸候、

七月

位階

〔有司勤仕錄〕大目付

一被敍從五位下〇下略

待遇

〔柳營秘鑑三〕殿中座席之定

一芙蓉之間　大目付

〔憲教類典三ノ二十六〕御臺所一之間

殿中定〇中略

大目付〇中略

右之分、於二此所一御料理可レ被レ下之、奉行中ハ格別、當番之外ハ可レ爲二無用一、但御用之時は、御目付中江可二
相斷一者也、

十二月

〔京兆府尹記 二〕山田奉行職掌

評曰、御旗本の內、其極官ハ御留守居也、尤五千石高也、次ニ大御番頭也、其次大御目付にて、重役たり、諸大名を指揮する御役にて、年始ハ大紋を著し、折烏帽子を著、手に末廣を取て、官服大名に等しく、往來に對の箱井蓑箱を持す、寶暦の頃、津田何某といふ者あり、御簞笥同心にて、三拾俵に貳人扶持の者成しが、才智發明にして御普請役と成、四十俵に五人扶持支配勘定と成、七十俵より百俵迄、七人扶持、御勘定と成、則御目見以上御旗本の列に加はる、高百五十俵也御勘定組頭と成、三百俵高御勘定吟味役と成、則御前におゐて布衣仰付られ、五百石高夫よりいよ〱首尾能く御勘定奉行仰付られ、從五位下に任ぜられ、朝散大夫と成、三千石高、越前守と成、猶立身して大御目付と成ける、抑御簞笥同心とは、御作事奉行手附にて、御殿中におゐて御用簞笥等持運び、其外左樣の類をあつかふ役也、御廊下より土間へ下り、亦は御廊下など往來すれば、雨中杯は竹の子笠に下駄を下る事也、然る處前のごとく立身して大御目付と成ければ、其年の始は、大名の通り官服を著し登城いたしけるが、悦びのあまり、

下駄さげた手に末廣の扇子かな、かく發句せし由、奇なる句作りながら、かやうに立身する人の句とは見ゆ、其人の悦びおもひやるべし、斯の如く大御目付の役は重役たり、中々やういには御普代の歷々たり共進む事あたはず、

〔諸例集 八〕一大目付衆、御門通行之節、番士下座之儀に付、寄合肝煎江掛合答、

卯二〇安政二年三月廿五日、於二御殿一西鄕貢之丞江相達、四月十五日答下ケ札に而差越、

柳生播磨守

寄合肝煎衆

去る廿一日、拙者儀、虎御門致通行候節、右御門に而行儀拍子木打候迄に而、番士初其外下座不致候間、其節心得方爲承可申と存候處、彼是手間取候而者、不都合之儀有之候間、其儀無之候、然る處去る亥年正月、先同役池田筑後守より、御先役奥田主馬江及掛合、別紙之通挨拶有之候間、寄合衆御門番之御門には、何れも總下座に而可有之處、前文之通に而者、區々にて、主馬より挨拶之趣共致相違候間、御禮之上御答有之候樣存候、依之主馬より挨拶之寫壹通相添、此段及御掛合候、以上、

卯三月

御書面幷御別紙之趣致承知候、早速相糺候處、其節之番士、全心得違に而、以後右樣之儀無之樣精々申達置候、

〔憲教類典〕御役二ノ五 享保八癸卯年六月十八日　大目付

三千石ゟ内は三千石高に可被成下候

〔憲教類典〕御役二ノ五 寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

一二千俵　大目付

〔憲廟實錄〕四 天和二年四月廿一日、諸番頭諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略 大目付

千俵、

〔常憲院殿御實紀〕二十五 元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略 大目付町奉行三千石以下七百俵、

〔惇信院殿御實紀〕十 寛延二年十二月朔日、大目付河野豊前守通喬留守居となり、一橋家老伊丹兵庫頭直賢大目付となり、前職の時のごとく、一橋邸にも折ふし參り、監視すべき旨命せられ、官俸

の外に千俵を賜ふ、

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺　　大目付

一金貳千五百兩宛

高五千石以上之者江は半減

但御切米高三千俵以上之者江は不被下、同千五百俵以上之者江は半減、

西丸大目付

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿〇徳川家綱御方に附屬せらるゝ輩あり、〇中略大目付兼松彌五左衞門正直は、もとのまゝにて、御方に付られ、〇下略

附闕所物奉行

闕所物奉行ハ、闕所物ノ事ヲ掌ル、初メ留守居ノ管轄ナリシガ、元祿二年大目付ノ管轄ト爲レリ、

職員

〔吏徴別錄下御目見以下〕闕所物奉行　元祿二年己巳閏正月五日、大目付支配、是迄御留守居支配　享保九年甲辰七月十三日、百俵五人扶持高、

〔憲廟實錄十二〕元祿二年閏正月五日、闕所奉行を改て、大目付に隷す、

〔吏徴下御目見以下〕闕所物奉行貳人　大目付支配　百俵五人扶持　燒火間上下役

〔明良帶錄外篇〕闕所物奉行百俵高大目支　手代八人

是ハ町奉行諸事札方、幷類例取扱心得有る仁、又ハ組同心廻り方など、都て輕きは牢屋同心など、又ハ六箇所定廻り、都て其向より昇進して、奉行下役改方となる、御小人目付寄場元〆よりも昇る、

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、○中略

百俵高五人扶持　　關所物奉行

〔機務覽要二〕關所物奉行老衰拜領物并附添之事

一關所物奉行服部四郎兵衛、病氣ニ付御役御免願、并七十歳以上廿壹ヶ年相勤候ニ付、御褒美願、享和三亥年十月晦日、御用番伊豆守殿年番取扱ニ而、可致進達處申談ニ而、自分取扱致進達候、同年十一月九日四郎兵衛御用有之候ニ付、明十日四時御城江可差出候、若病氣ニ候者、名代可ニ差出旨御書付、御同人御渡、依之四郎兵衛名代呼出申渡、御書付寫遣、翌日四郎兵衛名代同役內海左內登城ニ付差出、御目付達、伊豆守殿御登城ニ而、御同朋頭ヲ以、四郎兵衛名代罷出候旨御屆申上、拜領物ハ、於燒火間若年寄衆御列座ニ而、出雲守殿被仰渡、白銀十枚被下、附添自分罷出、燒火之間御固之內江自分ハ入著座、四郎兵衛名代、御敷居外罷在候、

關所物奉行手代

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

關所物奉行　　手代八人○又見二官中秘策一

〔吏徵御目見以下〕關所物奉行手代六人　貳拾俵貳人扶持高　御抱場

〔吏徵別錄御目見以下〕關所物奉行手代　享保九年甲辰七月十三日、二十俵二人扶持高、

〔憲敎類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付○中略

前々ゟ御譜代ニ而無之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、○中略

關所物奉行手代

目付

目付ハ慶長年中ヨリ既ニ其名ヲ見ル、其員數ハ本丸十人、西丸六人ナリ、大目付ニ亞ギテ政務一切ノ監察ニ任ズル職ナリ、而シテ其主ナルモノハ、城內非常ノ際ニ於ケル指揮宿直幷ニ殿中ノ禮法ヨリ、評定ニ參シ、又訟獄、土木、兵事、國防ノ事ヲ掌リ、又府內ニテモ學校等ノ出役ヲ爲シ、又京都、大阪、長崎、駿府等ニ出役スル等ノ事アリ、其特ニ大目付ニ異ナル所ハ、大目付ハ萬石以上ノ傳達ヲ掌リ、目付ハ萬石以下ノ傳達ヲ掌ルニ在ルガ如シ、目付ノ外ニ火事場目付アリ、元祿中置ク所ナリ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御目付冬夏御陣御供二十四人之內、定役十六人被命、

元和三年丁巳正月十一日、始置定役十六員、　寛永十六年乙卯二月廿四日、御目付衆兩人充、月番ニ相定、萬事無油斷御法度之趣可申付旨被仰出、朽木民部少輔傳之、日記

〔靑標紙三編〕一御目付ハ十人之內、五人ハ御使番より、貳人ハ御小性御小納戶より被仰付、其餘三人ハ他の布衣以上御役より仰付らるゝ事なり、諸大夫壹兩人交りてあり、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御目付　御本丸十人

〔享保集成絲綸錄一〕寛文二寅年二月

先頃所被仰出之老中幷御旗本方支配之差別〇中略

御目付衆〇中略

右者久世大和守、土屋但馬守支配、

〔諸役人代々記一〕御目付

秀忠公慶長年中ゟ寛永十五寅年町奉行江、　加々爪甚十郎
同断より　豊島主膳
同断より、寛永十酉年三月十一日、御留守居江、　日下部五郎八郎
同断より　牧野清兵衛
同断より　花井庄右衛門
同断より　木村源太郎
同断より　加藤伊織
同断より　高木九兵衛
同断より、元和三巳年九月十三日、御普請奉行江、　山岡五郎作

〔台徳院殿御實紀 二十九〕慶長十九年十月廿三日、御所〇徳川秀忠江城を御發駕あり、〇中略すべて供奉の有司老臣は、〇中略目付ハ山岡五郎作景長、加藤伊織則勝、永井彌右衛門白元、高木九兵衛正次、木村源太郎元正、太田新左衛門信勝、〇下略

〔台徳院殿御實紀 四十五〕元和三年正月、この月豊島主膳正信満目付となる、

〔舊經錄 御目付 奥右筆〕彙役之次第

職掌

一御勘定所見廻　御目付　二人　一辻番頭取一件　同　二人
一御臺札 御鳥札　同　二人　一御黑鍬之者 御掃除之者 闕附　同　一人
一御寫者　同　二人　一人別帳　同　一人
一由緒吟味　同　二人　一浪人證文　同　一人
一御城内下水　同　一人　一玉川上水　同　一人
一布衣以下御役人 親類書吟味　同　二人　一御城内 植木切透　同　一人

一草刈見廻　同　一人年番懸り　一御臺所見廻　同　二人
一服忌令　同　三人　一御日記　同　三人
以上
〔柳營秘鑑三〕御目付支配
一江戸中辻番所但武家之屋敷辻番廻り場、寺社井町屋敷之儀ハ除之、
一小普請方改役人　一御本丸火之番組頭同火之番衆
一御貝太鼓役　一御徒目付組頭　一御徒目付
一御徒押　一傳奏屋敷預　一御臺所番
一御挑灯奉行　一乘物井駕籠御免之願
五十以下ハ五ケ月切之神文、五十以上ハ一度神文に而相濟、願之趣者馬上計ニ而難相勤候而、痛断之内ハ斗と云字を加ル、陪臣も同斷、拾万石格合之家ニハ、乘物願三人迄不苦、駕籠ハたとへ拾挺ニ而も苦からず、
〔萬天日錄十四〕御目付衆支配
一江戸中辻番但町方ハ町奉行支配　一御挑灯奉行　一押目付　一火之番　一御法螺之役人　一御掃改　一御歩行目付衆
〔德川禁令考十六目付〕支配向
御徒目付組頭、火之番組頭、御貝役、太鼓役、黑鍬頭、御徒目付、濱吟味役御掃除頭、御徒押、御挑燈奉行、表火之番、御中間頭、御小人頭、御駕籠頭、御臺所番、濱筆頭役、
〔嚴有院殿御實紀二十五〕寛文三年二月十八日、太鼓役、今までは、留守居の所屬たりしが、今より後、目付所屬たるべしと命せらる、

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月十三日、今より小普請方改役ハ、目付の隷下に屬せらる、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年二月廿二日、濱殿の普請方大工頭ハ、濱殿の事つかさどる、目付の隷下に屬す、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御目付衆 布衣 千石高 十人 中略 櫻田和田倉御用屋敷

〔寶曆集成絲綸錄一〕寶曆十辰年三月

御目付預り支配

一黑鍬之者頭　一御掃除之者頭　一御中間頭　一御小人頭　一御駕籠頭

〔有司勤仕錄〕御目付

一此御役ハ、御城内外之改、非常之變に依て差引等、其司る處繁多にして、委述盡しがたく、依之詰所たりといへども、必竟定なし、御禮御規式等有之節、御座敷奉行勤之、

一評定所立合、急養子之判形 万石以下若年寄支配之分なり 改、其外非常之檢使、總而御詮義事、幷所々觸流し等樣々也、御徒目付、御小人目付等に差圖して、諸事之御用を達す、出火之節出馬、其場所に於て、差引之手配致差圖、同役都合十人程有之、

一支配繁多也、又若年寄之支配にても、御目付より觸流し等致す事有之、

一御成先にて、諸事司る事數多有り、

一月番ハ大概貳人づゝ在之、乍然屆之事在之時ハ、其向寄々の御目付へ通せしむる也、尤御城に泊番有之、大坂御目付等へも罷越、又於殿中一分働有之事之由、

〔明良帶錄後篇〕御目付 千石 若支

御政事向第一の動向也、非常の事に關る、萬端差圖あり、御禮日の事寄せの仁、御役替御錠口寄せ

の人の差出計、夫々より受取、登城ハ桔梗の間、本泊加泊とて兩人の泊なり、御夜詰後、殿中見廻り、別條無の段夫々より申達す、懸りは御臺所見廻り、御勝手向、上水道方、御日記方、藝術掛り、御乳持掛り、濱見廻り、浪人證判狀、何にても掛り合ふ、判元見屆并評定所立合、御支配方八ッ時御宅申渡、遠國御用御成先、何にても御規式に拘る事、一切御觸事、御臺所著座始、追々に諸席著座、頂戴當番書、此節直に相渡す、是ハ朝御臺所の時也、聖堂釋奠、山王祭、兩山御香奠納の節出役す、御成之節場差引、内御成にも同斷、此場へ小普請組支配組頭より中川勘三郎昇り、大御番組頭よりハ昇る仁多し、兩御番組頭よりも昇る、此場奥向より出たる諸大夫の仁なくてならぬ場なり、御目付支配の者多し、名目略す、

〔職掌錄〕御目付

諸御普請、御修覆所立合、出來榮見分、月切駕籠斷、判元見屆、濱御殿、學問所、醫學館、淺草御藏、猿江御材木藏、聖堂諸所見廻り、臨時遠國御用諸向問合、辻番所取扱、諸屆物其外一切引請司之、○中略泊番は、本番加番兩人あり、本番は御玄關より登營、加番は中の口正面より登營す、其餘は中の口右手より登營する事常也、

〔御目付方諸見分心得書上〕見分心得

一見分心得、大根をふまへ候事、肝要也、枝葉にかゝはるべからざる事、

一寺社方、町方は、御徒目付不致見分、武士屋敷辻番近所致見分候、若武士屋敷等之掛無之者、當番迄注進仕、御目付中、組頭衆、御差圖可受之事、○中略

一見分に、詮議と吟味ものとの譯有之事、○中略

自害人見分、○中略身投者、○中略行倒、○中略狼藉者、○中略慮外者、○中略盜賊、○中略欠落者、○中略縊死、○中略敵討、○中略家搜、○中略捨者、

〔柳營沙汰書 三〕慶應三年正月四日

河内守殿御渡　御目附江

今般横濱表語學所英佛語學傳習御開相成候ニ付、陪臣之者モ、寄宿稽古御差免相成候間、志願ノ者ハ、英佛何レノ語學相學度段、主人主人ヨリ可被申立候、

右之通萬石以下ノ面々エ〇〇〇〇〇可被達候、

〔憲教類典 四ノ五上 評定〕享保四己亥年十二月六日

一評定所式日に、御目付壹人、立合日兩人、代々只今迄罷出候得共、向後壹人宛、壹ヶ月切に人を相定罷出、奉行役人之公事訴訟、裁許、其外諸事取扱之次第、委細見聞置、御尋之節、具に申上候樣に可心得候、若公事訴訟之譯見聞候迄にて、奉行役人之取扱委細難相知ハ、目安訴訟等奉行中江申達、とくと逢一覽、出入之譯、奉行中江も其子細具に承屆可申候、

一非番之御目付之內、障にて有之者、立合日には壹人宛相加り、可罷出候、然共病人差合等有之、難出節ハ、不及其儀候、〇中略

十二月

〔常憲院殿御實紀 四十七〕元祿十六年二月四日、去年吉良上野介義央がもとにおし入て、主のために報讐せし、故淺野內匠頭長矩が家臣、大石內藏助をはじめ、四十六人の輩、國禁を犯し、黨をむすび、飛具を用ひ、公をはゞからずとて、共に死をたまふ、よて兼て召あづけられし細川越中守綱利が邸には、目付荒木十左衞門政羽、〇中略松平隱岐守定直が邸には目付杉田五左衞門勝行、〇中略毛利甲斐守綱元が邸には、目付鈴木次郞左衞門福一、〇中略水野監物忠之の邸には、目付久留十左衞門正清〇中略まかりのぞみ、大目付仙石伯耆守久尙、目付長田甚左衞門長視、命をつたふ、

〔天保集成絲綸錄 七十四〕寛政二戌年三月

御目付

坂部十郎右衛門

井上圖書

當年中町方掛被仰付候、吟味物之品ニ寄、立合等之儀、幷町奉行江申談候樣被仰付候儀も可有之候間、其旨可被心得候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔德川禁令考目付十六〕寛政二庚戌年四月闕日

町奉行所ノ事務へ立會之儀ニ付達

御目付江

平日町奉行ニ而吟味物有之節、不時ニ御役宅江被相越、暫之内罷在、樣子可被見候、尤始終相詰候儀ニ者無之候、手附之者も、同樣可被致候、

一御徒目付、御小人目付、時々牢屋敷江罷越、牢問之樣子等爲見可被申候、尤牢問之趣意、與力等江尋候而不苦候、

一町觸之儀、何ニかぎらず相談有之筈ニ候、尤格別差掛急候儀ハ、觸候上通達有之候樣、町奉行へ申渡候間、其趣可被心得候、

右之通坂部十郎右衛門、井上圖書へ申渡候間、可被得其意候、

四月

〔大猷院殿御實紀十六〕寛永七年、此年〇中略大御所〇秀忠今年相模の國底倉に湯治し給ふ思召にて、〇中略目付仙石大和守久隆、底倉の御旅館構造の命蒙り、子左近久邦ともに檢點にまかる、されど夏の御病によて此事停廢せられき、久隆また神田辻番地所改の奉行を命せらる、

〔教令類纂二集六十五〕享保四己亥年五月廿三日

一外曲輪ハ、御目付兩人宛見廻り可申候、年中從四月九月迄之内ハ、一ヶ月に一度づゝ相廻り、其外は三ヶ月に一度宛廻可申候、少々の破損は、御目付迄申達、向々へは徒御目付申達し候樣可仕候事、

一重き破損に候ば、御徒目付申出候はゞ、御目付罷越、見分候て、其趣を申出候はゞ、修復有之樣可心得候事、

〔浚明院殿御實紀十三〕明和三年二月七日、目付室賀源七郎正之勘定吟味役古坂與七郎達經に、美濃、伊勢、河渠の事つかさどるべしと命せられ、○下略

〔浚明院殿御實紀十七〕明和五年三月十四日、目付桑原善兵衞盛員、國用の事にあづかるべしと命せらる、

〔續泰平年表〕弘化二年十月十六日、御目付稻葉清次郎、普請取調御用被仰付、

〔天明集成絲綸錄二十四〕安永九子年五月

御目付江

向後御城番と申御役當り、日々晝夜兩人宛相定置、御城近邊、并御曲輪内、出火之節者、早速罷出、燒火之間廊下江相詰、差圖次第可被相勤候事、○中略

右之通、可被得其意候、尤西丸御目付江も可被談候、

五月

右之通御使番江申渡候間、得其意可被談候、

〔大成令八十二〕寛永十八巳年四月十四日○中略

一御目付之面々　上意之趣、右五人○松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守、三浦志摩守、朽木民部少輔、被傳之、野々山新兵衞、兼松

彌五左衛門、十一日御供番之處、供奉之面々不作法之處、御目付之役として不レ申付事不屆ニ被二思召一、殘目付之面々存二其旨一、向後善惡之儀見出し聞出し急度可レ致二言上一、令二油斷一者可レ爲二曲事一者也、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御目付　享保十年乙巳九月八日、御目付二人、一人宛御勘定所へ罷出、諸役人勤方幷役所作法等、心を附及レ見及承候趣可二申聞一旨申二渡之一、是御目付勝。手。掛。之。始也、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕寬文八戊申年六月四日

覺

御目付衆御前江被レ爲レ召、此頃殿中之作法不レ宜被二聞召一候、誰によらず、作法惡敷輩有レ之候はゞ、急度可レ申レ上由、上意之旨御内意被二仰聞一御方御座候間、萬事無二油斷一御愼尤に候、

右之通、御番之順に番頭組頭兩人に而、御番衆江物語可レ仕候、

寬文八申年六月四日

〔吏徵別錄上布衣以上〕御目付　貞享三年丙寅十一月朔日、泊。番。始。、

〔常憲院殿御實紀十四〕貞享三年十月廿四日、けふ目付一人づゝ、二。九。に。宿。直すべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀三〕享保元年九月五日、目付これまで本城に宿直するもの四人の定限なりしが、この後は二人宿直すべしと仰下さる、

〔德川禁令考十六目付〕享保二丁酉年七月廿日

目付勤方幷殿中宿直之達

御本丸勤　四人

本番加番泊り共ニ相兼、一日ニ四人ヅヽにて、御番可レ被二相勤一候、

二丸　壹人

晝夜可レ被二相勤一候

西丸泊り　壹人

右之通、一日ニ御番人數六人宛にて可被相勤候、二丸江御成、御本丸江長福樣被爲入候節、御目付御供壹人宛可被相勤候、

但長福樣御入之節ハ、御本丸罷在候御目付壹人相越、御供可被仕候、

一金銀吹直し御用掛、御目付打込、外御用掛のごとく可被相勤候、

但火事等有之、役場江相越候節ハ、非番壹人可被罷越候、

右之通被得其意、向後可被相勤候、

七月

〔拾遺柳營秘鑑三〕一御目付、二丸へ晝之内相詰ニ不及候、只今迄之通リ、泊リ計可被相勤候、〇中略巳〇享保十年七月廿一日御廻狀ニ有之、

〔常憲院殿御實紀三十五〕元祿十年三月四日、目付大島雲八義也、林藤五郎忠和、小普請定小屋の事奉るべしと命せられ、〇下略

〔有章院殿御實紀四〕正德三年五月十九日、濱の御殿いまゝでは桐の間番頭所管なりしが、此後は目付鈴木伊兵衞直武、間宮叔負方好あづかるべしと命せらる、

〔惇信院殿御實紀十八〕寶曆三年七月十七日、紅葉山に酒井左衞門尉忠寄代參す、目付稻生下野守正英に、濱館の事はからふべき旨命せられ、松前主馬一廣には、日記の事命せらる、

〔溫恭院實紀五〕安政元年二月八日、松前井蝦夷地御用者防禦備方令、

御目付　堀織部〇中略

松前井蝦夷地江爲御用可被差遣候條、可致用意候、

右於御右筆部屋椽頰、大和守申渡之、

〔溫恭院實紀六〕安政元年四月廿七日、長崎御用御目付、異國船取扱方之御達、○中略

覺

長崎表在勤中、魯西亞船渡來候はゞ、先達而荒尾土佐守罷越候節之通相心得、右御用立會相勤候樣可被致候、尤外國之船渡來之節も、同樣相心得、諸事長崎奉行申談候樣、可被致候事、

御目付 永井岩之丞

〔溫恭院實紀七〕安政元年七月廿四日

御目付 鵜殿民部少輔

一色邦之輔

岩瀨修理

右御軍制御改正被仰出候間、右御用可相勤旨、伊勢守申渡之、

〔續泰平年表〕弘化二年八月八日、御目付平賀三五郎、松平式部少輔等、海岸防禦之儀御用取扱被仰付、

〔拾遺柳營秘鑑三〕一公家衆參向、傳奏屋敷御目付衆御見廻り之時、獻立可承事、公家衆人數可承事、御馳走大名、家老用人之名、其外相詰候人數可承事、

〔天明集成絲綸錄二十三〕寶曆十一巳年七月

御目付江

公家衆到著日、傳奏屋敷江上使老中相越候節、御目付壹人可被相越候、委細高家衆江可被承合候、

〔有德院殿御實紀十一〕享保五年九月廿七日、けふ道奉行の職を廢せらる、よて再びこの職を置るまでは、目付よりかねつかふまつり、下吏をも指揮すべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀三〕享保元年十二月六日、令せらるゝは、目付使番火災の地につかはさるゝは、火の樣防御の體を見て聞え上るをもはらとすべし、防禦を指揮するに及ばず、去かしながら、もし

おもふ所もあらば、後日少老まで申出るか、または其地にをいて火消役にもはかり、後に少老に告るか、そは便宜にしたがふべし、從者等やゝもすれば、無賴のふるまひして、防火のさまたげあるよし聞ゆ、よく戒むべしとなり、また目付使番防火の可否を檢察せむに、火のむかふ所を防ぎ、屋舍をこぼちて蔓延せしめざるも、火を消しはてたるも同功とすべし、よく／＼見分て聞え上べしとなり、

〔德川禁令考二十九 火事場役人〕享保五年子七月廿六日

火事場江罷越候御目付御使番之定

一出火之節、火事場江罷越候御目付御使番、兩方合九人極可申候、

火口　御目付兩人　御使番三人

防場　御目付兩人　御使番兩人

都合九人

一火消役火口之者も、防場江罷越、一手に成候節は、火口殘、

火口殘　御目付壹人　御使番兩人

防場　御目付三人　御使番三人

都合九人

右之通相心得可申候、總而御目付御使番共ニ、都合九人外は、何人に而も、出火之節御城江可罷出候事、

〔德川禁令考二十九 火事場役人〕享保十九寅年正月廿六日

御城中江人數入候節之儀ニ付御書付

御目付江

御使番

出火之剋、御城中江人數入候節、下乘附人出置候面々江、人數何方江可入旨申通候段、其節可相達候間、御目付御使番之內壹人罷越、人數入させ、差引可致候、若其節御人少にも有之、附人罷出候儀難成節ハ、其段可相伺候事、

〔大猷院殿御實紀七十四〕慶安二年三月十日、この四月、大納言殿〇家綱徳川日光山へ御參あれば、先達てかしこにまかり、驛路其外の事まで巡察すべき旨、〇中略目付石河三右衞門利政仰付らる、

〔昭德院實紀九〕万延元年十一月朔日

御目付

駒井山城守

松平彈正

黑川左中

淺野一學〇中略

和宮御方御緣組、井御下向御用被仰付之、

〔日本敎育史資料十九試驗〕寬政九年素讀ノ試改定、左ノ如シ、

素讀ノ試ヲ受ル者、年齡十七歲ヨリ十九歲マデ、總テ四書五經小學皆讀ニ定マル、褒賞モ改定アリ、〇中略

右學問所ニ於、御目付申渡シ、銘々エ書付相渡ス、林大學頭、其外儒員出席、〇中略

天保四癸巳年、學問御試有之、正月十六日相始、同十八日、同廿一日、同廿三日、同廿五日と、五日之間有之候、〇中略

正月十六日初日、林左近將監殿、朝崗五郎作殿、晝後、曲淵勝五郎殿、儒者衆不殘、出役不殘出席、組頭兩人出席、御席江御廣蓋に御題を載、御徒目付持出、御目付一統元御題、御老中誰殿より御渡被成

候間、辨書相認差出候樣にと被仰渡、尤左近將監殿御立合、御小人目付差添、

〔溫恭院實紀 十〕安政三年十月廿七日

御目付　大久保右近將監

蕃書調所總裁兼帶

右被仰付候

〔大猷院殿御實紀 十九〕寬永九年正月廿七日、此日目付宮城甚右衞門和甫京坂に使し、こたび御大喪により、關西の諸大名江戸にまかるべからず、各封地堅固に守り、前令違犯すべからずとの御旨をつたへしめ、〇下略

〔大猷院殿御實紀 三十六〕寬永十四年十一月九日、松倉長門守勝家、藩翰譜重治に作る所領肥前國島原にて、天主教を奉ずるもの、一揆をくはだて、松倉が城下の市井を放火し、有馬といへる所に楯籠りたる旨、豐後府內目付の輩より注進ありければ、板倉內膳正重昌に、目付石谷十藏貞淸、いそぎかの地におもむかしめられ、〇下略

〔昭德院實紀 三〕安政六年九月十九日、創置神奈川奉行及支配向御目付神奈川在勤件々令、〇中略

一御目付一人、神奈川表江在勤、半年交代ニ被仰付候間、可被得其意候、

〔平安索例抄 地〕御目付

一御目付在勤日割書付御進達、左之通、

九月六日ゟ十月六日迄　大坂三十日　十月七日ゟ十二月十七日迄　京都七十日
十二月十八日ゟ正月十四日迄　大坂二十七日　正月十五日ゟ二月十四日迄　京都三十日
二月十五日ゟ四月五日迄　大坂五十日　四月六日ゟ同七日迄　南都二日
四月八日ゟ六月廿日迄　京都七十日　六月廿一日ゟ九月五日迄　大坂七十二日

大坂在勤百八十日　京都在勤百七十二日　南都逗留二日　總日數三百五拾四日

一大目付樣初而御出之節ハ、上溜ヘ御通リ之上、御勝手通リ御願濟之上、竹之間江御通リ被成候事、尤二度目御出京之御方ハ、直ニ竹之間江御通リ被成候事、

一右御著發之節計、當役御送リ下座敷迄罷出候事、平日之御出之節御送迎無之、

但大坂御往來之節も、御送りも可申事、

一從關東宿次御到來之節、御機嫌伺、其度々以御剪紙御達、翌日恐悅御入來當役ゟ右ニ仰置之御逢無之、

一江戶表江宿次被差立候節ハ、其度々御案內御剪紙御達、御呈書被差出、

但刻限御差立候節、右御呈書御差留之儀、江戶表江も被仰達候、其段御目付樣江も御達し相成可申事、

一御巡見、御參詣、御廻勤等、總而御外出候儀、以御伺書御伺、御附札御差圖ニ成候事、

但御巡見之節、所司代御外出有之節ハ、御見合被成候事、

一御家來御勝手通リ御主人ゟ御願御口上、卽刻御聞濟ニ而、御勝手ヘ罷出候事、

一御著發之節ハ、總而上ニも御小書院御逢有之候得共、御同間の內に早々御送り有之候事、

〔平安索例抄天〕訴狀箱其外

天保十五辰年六月十二日御用帳書拔

一御目付樣、明日訴狀箱開封之日ニ候處、若シ御不快ニ候ハヽ、町奉行樣御立會ニ相成候哉、否之處、追々及詮議候得共、難相分候ニ付、伊奈遠江守樣江御內談いたし候、追々御詮議有之候得共、難相分、文政八年之春、御不快ニ而、御目付樣計ニ而相濟候樣、御用帳ニ而相見候得共、其頃は御目付樣御兩人樣、右ニ而相濟候哉も難相分、此度は拇斐樣御壹人ニ而如何いたし候方歟難決、

右ニ付、伊奈様より摂津様江諸懸合有之候處、左之通リ返書來居ニ而、伊奈様ゟ御内々被遣候、右ニ而相分候事故、御注進振も定例之通と有之事と相見候、追々之御用帳は誠之表向ニ而記事に相見候、

御手紙拜見仕候、然ば私共交代前被差出候訴狀箱、今日貴様御役所門前江御差出、御取入之上、所司代ゟ被差出候得共、私共立會相披可申、其節若狹守殿御不快之由ニ而御出席ニ成兼候哉も難計、就而は右休候先例御見當無之、私共ニおゐて、右様之節、先例心得方等御承知被成度貴様限、爲御内問被仰聞候御紙面之趣承知仕候、右は文政七申年二月、松平周防守殿御勤役中訴狀箱封印之節共御不快、天保七年六月、松平伊豆守殿御勤役中ハ、封印之節計御不快之趣、右兩例書面有之、乍去全之御當病ニ御座候得ば何れにも御出席有之候姿ニ相心得取扱候様ニ相見江申候、於私共ハ右様之振合ニ相心得居申候、御内問ニ付、此段貴館迄匆々可得其意候、以上、

六月十六日　　　摂津與右衞門

伊奈遠江守様

〔仕官格義辨〕大坂御目付代リ之事

問云、大坂御目付代りと申者、昔ゟ御使番一人、兩御番衆一人充、被遣、駿府候は、御使番一人充被遣候事ニ而候哉、

答云、大坂御目付代之儀、昔は御目付衆ゟ一人、兩御番衆ゟ一人充被遣候處、寛文三卯年ゟ御使番一人、兩御番衆ゟ一人被遣、一年に三度充之交代故、百日目付共申候由、同六午年ゟ、半年代リニ成、春秋兩度之交代ニ而候、其巳後元祿十二卯年ゟ、御使番衆一人充被遣、兩御番ゟ被參候儀は相止候、寛永五子年、同六丑年二ヶ年ハ御目付衆一人、御使番衆ゟ一人被遣候、同七寅年ゟ、御使番兩人

充被ㇾ遣候、正德二辰年より、御使番衆ゟ一人、兩御番衆ゟ一人充被ㇾ遣候、延享三寅年十二月十八日、御目付水野清六、御使番遠藤宮內、來春御目付代被ㇾ仰付ㇾ候、其後は又御使番一人、兩御番一人充被ㇾ遣候、

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保二十一辰年四月

御勘定奉行江

江戶より被ㇾ遣候御目付、此已後年々京都大坂交代、前町奉行月番役宅門前江訴狀箱出し置候、町方之義ハ、定日訴狀箱出し有ㇾ之候間、市中ハ夫ニ而相濟候得共、百姓などハ右訴狀箱江入候儀ハ心付申間敷候、此度之儀、先ハ町へもかゝり、第一在々百姓共致ㇾ承知、御代官善惡幷手代名主等私曲有ㇾ之候ハヾ、其段訴候爲ニ候間、右之趣相心得、江戶江言上致度儀有ㇾ之候ハヾ、書付持參いたし、右之箱江入可ㇾ申候、○中略

四月

〔常憲院殿御實紀十〕貞享元年十一月廿四日、目付戶田又兵衞直武、○中略今より後、寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭と共に、はかりあひ長崎の事奉はるべしと命せらる、

〔正德五年長崎新例寫乾〕長崎御目付被ㇾ仰付ㇾニ就て、奉行中可ㇾ被ニ相心得ㇾ條々、

一自今以後は、如ニ舊例ㇾ長崎奉行二人にて、在勤の奉行壹人、凡一年ヅヽの交代に定られ、御目付壹人、凡半年ヅヽの交替にて被ニ差遣ㇾ之候間、宜申合せ可ㇾ被ニ相勤ㇾ事、

一長崎表奉行御役所二ケ所之內、立山の御役所は、地面廣く候得ば其地をわかち候ハヾ、御目付御役所とし、殘候地に、只今迄之御役所を引移、奉行御目付交代の時に移り居候所とし、自今以後、交代之時、安禪寺に移居候事を相止メらるべく候、但奉行御目付の御役所相はなれずして可ㇾ然事も候ハヾ、立山の地を以て、奉行御目付交替之時移居候所とせらるべきは、其心に任す

べき事、

一長崎表井九州筋非常の事も出來り、注進可有之に至りては、奉行御目付連判たるべし、よの常の書狀、或ハ只今迄のごとくあるべき事、

附

凡連署の次第ハ、當地座席の例に准ずべき事、

一近國諸大名へ可相觸書付等、奉行御目付連署たるべき事、

一西泊戶町御番所等巡見之時ハ、奉行御目付同道あるべき事、

一近國諸大名、長崎表見廻りとして、奉行御目付御役所へ入來の時、奉行御目付相互ニ立合ニ而對面等及ばるべし、諸大名奉行を招請し、奉行諸大名を招請の時も、御目付立合ひ候やうに可被申合事、

附

凡奉行御目付座配の次第、當地座席の例に可准事、

一奉行所におゐて、唐人阿蘭陀人召出し候事有之時は、御目付立合候よふに可申合事、

一公事訟訴ハいふに及ばず、すべて御仕置可相係候事に就て、地下人等、奉行所に召出し候時ハ、御目付立合候樣に可被申合事、

一公儀御金長崎表に差置候事有之におゐてハ、奉行御目付相對を用ひ、奉行御目付交代の時相改メ置るべき事、

附

もし急事に就て、奉行御目付相談の上、御金を出し用ひ候事有之候ハヾ、御目付歸府之節、其事の子細を書付以て可被申上候事、

待遇

一地下役人ども、奉行所江差出し、御書付帳面等御目付へも差出し候樣に可被申付候事、

一唐人荷改并諸商賣方之事に就て、奉行所ゟ撿使を差出し候時ハ、御目付よりも家人差出し見廻しすべき事ニ候間、其由申達しらるべき事、

附

唐船入津歸帆之時、御目付家人港内見廻り候次第、本條之例に准ずべき事、

一御目付歸府の時に至りて、其家中のものども、地下の出入買掛り等の事、奉行所より相改メ、奉行歸府の時に至りても、御目付を以家中の出入買掛等の事相改らるべき事、

一長崎地下の事はいふに及ばず、奉行所家中の輩の事に至て、御目付に相尋られ、御目付の事におゐてハ、奉行中に御尋有べき事に候間、其旨を存せらるべき事、

右條々被相心得候而、御目付中可被申合候者也、

正德五年正月十一日　山城守　紀伊守　大和守　豊後守　河内守　相模守

久松備後守殿　大岡備前守殿

〔享保集成絲綸錄四十四〕元文元辰年八月

江戸ゟ駿府江被遣候御目付、此以後年々罷越候節、逗留中、駿府ニ而、御目付小屋門前江訴狀箱出し置候、駿府町中在之百姓共、役人御代官善惡并手代名主等私曲有之候ば、其段訴候爲ニ候間、江戸江言上致度儀有之候ば、書付持參いたし、右の箱へ入可申候、〇中略

八月

〔柳營秘鑑〕一布衣被仰付面々　御目付

〔憲教類典〕三ノ二十六殿中年號月日無之

平日御役所席、泊御番御夜詰之内席、〇中略

備考

中之間〈○中略〉　一御目付

〔藩翰譜〈五井上〉〕筑後守源政重は、〈○中略〉元和三年御目付の職になされ、寛永四年叙爵し、同き九年九月朔日、五の字の幟御免あつて、十月三日所領加られ、〈○下略〉

○按ズルニ、五の字の幟ハ、德川氏ノ軍旗ニテ、目付使番及ビ勘定奉行、普請奉行等ノ指ス小旗ナリ、本書柳生宗矩ノ條ニモ、寛永九年九月朔日、軍の御使たるべき由を仰せ下され、五文字の幟御免アリトアリ、

〔吏徵別錄〈上布衣以上〉〕御目付　寛永五年乙巳三月十八日、御役料五百俵、〈十人〉二　天和二年壬戌四月廿一日御役料止、

〔憲教類典〈二ノ五御役〉〕寛文五乙巳年三月十八日

一御役領之覺

五百俵　御目付

〔憲廟實錄〈四〉〕天和二年四月廿一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〈○中略〉目付衆〈○中略〉五百俵、

〔常憲院殿御實紀〈二十五〉〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〈○中略〉留守居番目付、〈○中略〉千石以下ハ三百俵、〈○下略〉

〔憲教類典〈二ノ五御役〉〕享保八〈癸〉卯年六月十八日　御目付

千石ゟ内は、千石之高に可被成下候

〔温恭院實紀〈三〉〕嘉永六年十月晦日

一　御目付　鵜殿民部少輔

近來御用多之處、格別骨折相勤候ニ付、小普請奉行次席被仰付、勤候內、二千俵高ニ御足高被成

西丸目付

下旨、伊勢守中傳之、

〔昭德院實紀 三〕安政六年九月十九日、創置神奈川奉行及支配向御目付、神奈川在勤件々令、〇中略

一御目付一人、神奈川表江在勤、半年交代ニ被仰付候ニ付而ハ、以來御暇拜領物被仰付、關內御用並之通、御手當可被下候間、可被得其意候事、

一外國御用立合之御目付

神奈川開港以來、替々相詰、度々往返致し、御用向多端ニ付而ハ、入費も相嵩可為難儀候間、出格之譯を以、此度限、是迄被下候御手當之上江、猶又右御手當之半高、在勤日數ニ應じ増御手當被下候間、在勤日數等書出候樣可被致候、御手當金請取方之儀ハ、御勘定奉行可被談候、

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月　御目付

御役金被下高之覺

一金千兩

高貳千石以上之者江ハ半減

但御切米高千俵以上之者江ハ不被下、

同五百俵以上之者江ハ半減、

〔東職記聞 二〕監國君職

目付六人　布衣

掌監西營一切事之職也、元寬日記曰、元和五年正月、台德院殿〇德川秀忠以目付十三人被屬監國君〇家光也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇家光以當職兩人被屬監國君、〇家綱或曰十一人也、享保九年、有德院殿〇吉宗以當職六人被屬監國君、〇家重爾來連綿而至今之監國君〇家治也、

〔柳營秘鑑 四〕諸御役人員數幷組支配

一御目付西丸六人、○又見官中秘策、職掌錄、吏徵、

〔嚴有院殿御實紀四十四〕寛文十二年閏六月十七日、西城はこれより先一月に三度づゝ、酒掃せしが、この後は五度づゝ、酒掃づかふまつるべしと、西城の留守居目付○中略に命せらる、

〔有德院殿御實紀四十九〕元文四年六月廿三日、けふ令せらるゝは、西城切手番頭、廣敷番頭、その外留守居の所屬等の事、今より後西城目付とりあつかふべしとなり、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿○德川家綱御方に附屬せらるゝ輩あり、○中略目付猪飼半左衛門正景、安藤市郎兵衛忠次は御方の目付になり、目付松田六郎左衛門定平は舘奉行となり、○下略

〔天明集成絲綸錄二十三〕寶暦十三未年正月

御目付江

西丸御徒目付、向後御本丸　御供心得、壹人宛相詰、西丸當番三人、右の内ゟ壹人御供心得兼相勤、若急御用之節者、御本丸御徒目付泊之内ゟ、相心得候樣可被致候、尤西丸御目付江可被談候、

〔甲子夜話四十二〕十月○文政五年十九日、於堀田攝津守殿御宅被仰渡之寫、

申渡之覺

西丸御目付　新庄鹿之助

名代　春田四郎五郎

其方儀、當四月廿二日當番之節、酒井山城守組御書院番、及刃傷候儀、○中略不取敢、遂穿鑿、致見分取計可申處、翌朝に至迄、等閑に打過罷在候段、内談之趣をも致承知、其筋々之存意に令同意候故之儀と相聞、勤柄に不似合始末、不束之事に候、依之御役御免差扣被仰付者也、

〔青標紙三編〕一何御役ニ而も、新規ニ被仰付時は、師匠番と云ふものありて、勤向之傳達を受る事

なるに、兩丸御目付ニ限りて、此師匠番無之、傳達をうけずして、即日より勤むる事なり、又御目付の部屋ハ、御用部屋同樣、別所に有之、紅葉之間のうしろニ而、御座敷の中なり、

〔吏徴附錄 廢職〕火事場目付三十人　元祿十一年戊寅九月十八日、始置三十人、(兩御番(書院番小性組番)出役)　同十二年己卯二月七日、御扶持方、以高割被下、(三十人扶持、四十人扶持、五十人扶持、)　同十三年庚辰正月廿三日廢(御番休貳百日)

本所火事場目付五人　元祿十一年戊寅十月五日、始置五人、(兩御番(書院番小性組番)出役)　同十三年庚辰正月廿三日廢、

〔仕官格義辨〕火消役之事

又問云、元祿年中ニ、火事場目付と申儀被仰付候由、何人程被仰付候哉、當時之火事場見廻り之格に而有之候哉、承度候、　答云、火事場見付之儀ハ、當時之火事場見廻り之衆等とは勤方違候由承候、元祿十一寅年九月十八日、御小性組秋田淡路守組石丸數馬、仁賀保孫九郎、酒井伊勢守組丹羽五左衞門、設樂善左衞門、小田切土佐守組長田新右衞門、大井庄十郎、北條對馬守組鳥居內藏助、仁木周防守組北條新藏、大久保豐前守組羽太十大夫、牧野內匠頭組細川六郎兵衞、伏見主水、永井美濃守組土屋長三郎、土屋數馬、松平豐前守組桑山十郎左衞門、大久保長門守組小幡吉兵衞、御書院番阿部遠江守組蜂屋小右衞門、井上叡負、酒井壹岐守組大岡次郎兵衞、設樂數馬、大久保淡路守組宮崎七郎右衞門、阿部八之允、松平近江守組小野次郎右衞門、曾我又左衞門、戶田對馬守組榊原八兵衞、揖斐半左衞門、村越伊豫守組遠藤新六郎、赤井六兵衞、新庄土佐守組戶田三郎兵衞、土屋甲斐守組野々宮賴母、森川金右衞門、都合三十人、兩御番〇書院小性々假役被仰付候由、同年十月六日、右之內々、北條新藏、森川金右衞門、兩人新規ニ、宮崎織部、服部又右衞門、大久保平左衞門、都合五人、本庄火事場目付被仰付候、同十三辰年正月廿三日、右火事場目付不殘御免、二百日之御番休之由承候、

國目付

〔敎令類纂初集三十一〕元祿十一戊寅年九月十九日

一御小性組御書院番ゟ三拾人、新規火事場御目付被二仰付一、左之覺書渡レ之、

覺

一今度火事場御目付被二仰付一候面々、兩御番打込拾五人宛、致二隔番一相勤、火事有レ之節ハ、早々當番火事場へ罷出、定火消壹人ニ、右御目付壹人宛附廻り、勤方之善惡、書付、月番之若年寄中へ、火事鎭り候以後可レ被二差出一候、火事夜中に於ては、翌日可レ被レ出レ之候事、

一自然大火に及び候はゞ、非番之御目付ハ御城へ罷出、差圖次第火事場所へ可レ被二罷越一候、

一增火消罷出候時分、是又勤方之樣子、右同前相心得、書付可レ被二差出一候事、

以上

九月十九日

〔德川禁令考二十九火事場役人〕元祿十一寅年十月

本所火事場御目付之事

御書院番御小性組番頭江渡

覺

江戶火事場御目付之內、北條新藏、森川金右衞門兩人ハ、今度本所火事場御目付被二仰付一候、依レ之江戶火事場御目付は、廿八人に而、當番十四人宛相勤候間、其段可レ被二申渡一候、以上、

十月五日

〔吏徵附錄廢職〕本所火事場目付五人　元祿十一年戊寅十月五日、始置二五人一、兩御番出役　同十三年庚辰正月廿三日廢、

〔玉露叢十六〕寬文三年四月十四日ニ江府ヲ出御有テ、同十六日ニ日光へ御著、〇中略國目付、

堀又右衛門、佐原三右衛門、(板倉筑後守支配、)窪寺小左衛門、大村藤右衛門、(松平民部少輔支配、)内藤加兵衛、今福權兵衛、(森川下總守支配、)

〔武野燭談十四〕堀田正盛、北見久大夫江挨拶之事、

一烟草は蠻草にて、我朝に而は文祿の中比ゟ渡りける、されども火をもつて吸故に、火を翫事常住なる故、營中古今制禁す、其法度を犯すものは、必甚嚴せらるゝ事なりし、堀田加賀守正盛、殿中を通りけるに、御目付北見久大夫同く廊下を通りけるに、御茶部屋之邊にして烟草を翫けるにや、加賀守并御目付の通るを見て、戸を引立けれども、いたく香しける馥りまがふべきにもあらぬを、久大夫見咎て、尙加賀守に聞する樣に、御法度の烟草の香ひ甚し、難心得々々と云けるを、其程行過て見返りて、北見殿はいつゟ鼻付には被仰付し、御目付は眼を用る御役ならずやと興じて、奥へ通りしとなん、

〔武野燭談十四〕土井大炊頭事并堀田加賀守目付役之事

一そのかみ堀田加賀守大名に被仰付しに、土井大炊頭(○利勝)が家に行向て、小身の我等、此度御取立にて大身の數に加り、家人も多召抱候、是に付目付役、横目役等可申付人品、いか樣の人柄を目付に可申付や、賢慮承度と存參候と、まめやかに尋られければ、(○中略)我等御蔭に而方方の饗應に罷ありき侍るに、膳部暉麗に切目も正しく、折節之初物も見ゆる料理したる、亭主の奔走さこそとおもふ所へ、勝手ゟ人あつてそとしらせんに、其鱠只今はいがけがしたり、此差身には蚊が入たるをば取出して杯と申さんは、何の役にたゝぬ事にして、(○中略)酢やいり酒に虫の入たるまで、取上て申立る樣成ものは、横目付には申付られまじ、去に而も砒霜斑猫などの態と入たるを見て、見遁し居る樣成律義過たる男も目付には成ず、家中の害に成る奉公人あり、左樣の者は毒石斑猫と同じければ、能見て注進する樣成こそ誠の目付

ぞ、此大炊頭が一家中に而、目付申付るには、人間の眼は、横に切たるが、天ゟ請たる性の誠也、是を物陰ゟのぞきひづめて見るは、目を逆にする同前、眞直成眼代にてはなし、途中も態と見ずして、向ふ計見る如く思へと申付侍るよし、挨拶しけるとなん、

〔大猷院殿御實紀附錄四〕宮城甚右衞門和甫は、いと抗直の質性にて、非理の事には、老臣の云所といへども志たがはず、目付つとめし頃鞭打ありし時、堀田加賀守正盛が金襴の襟付し羽織きたるを見とがめ、こは兼て停禁の事なるを、老臣として禁を犯されなば、天下の大法立べからず、またそれがし目付承りながら、かゝること見のがさば、其職を失ふに似たりといふ、正盛種々陳じけれども、和甫堅く本儀を執て、遂に羽織をぬがしめつ、〇中略かゝる事どもつもりて、心よからずおもふ者多ければ、たれ推轂するものもなくて在しが、公〇將軍家光察せられ、頭役ある者は、それぞれ聞えあげて昇進するなれ、和甫は老臣と中あしければ、誰も薦擧せず、我目利もて取立んと仰有て、大目付に擢られぬ、進見の時、此後は老中共に氣に入樣にせよと仰られしとぞ、

〔鳩巢小説下〕一嚴有院樣御代初ノ時分、北條安房守ドノ、御目付ノ時、松平伊豆守ドノト覺ヘ申候、主シノ領分ノ百姓ト、他領ノ百姓トノ公事有之候、安房守ドノヲ、其所ヘツカハサレ候、其砌伊豆守殿、安房守殿ヘ領分ノ百姓無理ニテハ無之段委細ニ被申聞候、其時房州申サレ候ハ、左ヤウニ候ハヾ、私被遣ニ及不申候、他領ノ申立ル所無理ニ究申候、此公事ハ御下知候テ埒明候ヤウニナサルベキ由申サレ候、左ヤウニテハ無之候、御自分ヲ被遣候ハ、雙方ノ申分ヲ聞屆申サル爲ニ候旨被申候ヘバ、房州殿左ヤウニ候ハヾ、只今被仰聞候事無用ノ義ト存候ヨシ被申候ヘバ、流石ノ豆州殿モ、返答是ナク候ヨシニ候、

〔政談三〕目付ノ役ニ當時闕タルコトアリ、衣服等諸事ノ儀ニ仰セ出サルヽ、御制禁ノ筋アレドモ不構、是ヲ破ル事アレドモ咎ル人ナシ、依之公儀ノ御法度ハ三日法度ナリト世上ニ云習ハス事、

有マジキコトノ第一也、其向々ヨリ被仰付タルコトハ、向々ノ支配々々ノ役ナルベシ、一統ニ被仰出コトハ目付ノ役トシテ、權門高家ヲ不嫌、人情ナクトガメテ其支配々々ヘ急度斷ルベキコト也、

〔監察故談〕一御目付部屋江入るは、奥表の御右筆、御同朋頭、御數寄屋頭、類の坊主衆、張番坊主衆、御數寄屋坊主衆にかぎる事なり、是は隱密の御役所なる故へ、御右筆は奥表とも隱密にあづかる、坊主衆は制外のものなればなり、

徒目付

徒目付ハ、目付ノ支配ニシテ、其初メ將軍家光外出ノ時、庶人禮ヲ失セシモノアリシヲ、家光ノ草履取之ヲ誅セシニヨリ、其人ヲ賞シ、之ニ歩行目付ヲ命ゼシニ起因スト云フ、初ハ小人目付、若シクハ遠國勤仕ノ小吏ヨリ登庸セシガ、後小普請世話役、表火ノ番、若シクハ徒ノ者等ヨリ昇進スル例トナレリ、此職ハ城内ノ宿直、大名登城ノ時、玄關ノ取締ヲ行ヒ、評定所、傳奏屋敷、紅葉山、及ビ遠國ノ出役ヲ爲シ、兼テ又探偵ニ關スル事ヲ掌ルモノナリ、其秘密ノ事ニ至リテハ、老臣直ニ之ヲ内命スト云フ、

〔萬天日錄十四〕御目付衆支配

一御歩行目付衆（奥頭二人在之）

〔官中秘策十〕諸御役人之事

御徒目付組頭　貳百俵高　三人（〇又見二吏徵一）

〔明良帶錄外篇〕御徒目付組頭（二百俵高　所前廊下　御[illegible]　目支）

職掌

御目付支配、御目付の心にて取立、御目付向御規定筋取扱方、年來功者なる人繰上となる、御徒目付上役にて、他よりの昇路なく御徒目付より昇る、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

御徒目付　百俵五人扶持　凡六十人

〔吏徵御目見以下〕御徒目付五十一人　御目付支配　百俵五人扶持高（享保六丑九月廿九日）　燒火間上下役

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上〕御徒目付　享保三年戊戌十月朔日、定四十員、

○按ズルニ、有德院殿御實紀ニ、享保三年十月朔日、徒目付の員を減少せらるトアルモノ是ナルベシ、

〔紳書下〕一養朴又云、御歩行目付の始は、大猷公（○德川家光）西丸より御本丸へ御成の時に、人を拂ひしに、道の材木石の中にて、あくびして、手を伸したるもの見えて、御供の人々はせ行に、御草履取、一番にはせつく、かのあくびせしもの脇差を拔て切てかゝるを、御草履取も脇差拔合せて打留たり、御覽の前にての事にて、御本丸へ入せられ、御歸りの後、青山伯耆守へ、かの草履取を取たてくれよと仰けるに付て、德廟（○德川秀忠）へ申て、初て御歩行目付といふものになしたるよりはじまれりとぞうけ給る、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年十一月六日、徒目付朝倉八右衛門正次、山梨十左衛門胤次、駿河の御使にさゝる、

〔大猷院殿御實紀五十二〕寛永十九年十一月十一日、後閤勤番人少きにより、歩行目付、庖所目付、歩行押、挑灯奉行、歩行組頭の中より十人增加せらる、

〔明良帶錄外篇〕御徒目付　百俵五人扶持　目支

此場は勵場とて、筆算武藝心得、遠國御用筋、御庭向、都て御直の隱密等、御成先御道觸[illegible]て御規定

に拘る事、一切を司る、御目付支配第一の大役なり、昇路一段にて、御目見以上と成る、以下第一の役儀也、見習といふ事なし、人數不定なれば、火之番より、御雇有り、以上引下之仁多し、御三代之頃迄は、御小人目付、遠國勤仕より昇進す、今は小普請世話役、表火之番、御徒など昇進、

〔翁草百二十五〕江府御徒目付に、常。御。用。とて三四人有り、右御用被仰付に、前夜御奉書を以て召され、輕き身分ながら、目付筋の御用なれば、御人拂ひにて、老臣自ら御用の品を被仰含、それより彼人は何方へ歟出行を、餘人は更に其子細を知ものなし、扨御徒目付仲ケ間廻文を以、何某事、今朝常御用被仰付候故、諸番諸御用之割合相除き候由是を知らす事なり、此前淺草邊に、幕府の士前田某屋敷有り、其邊に御徒目付青山某も住みて、常に前田方へ出入て、酒の友達也、然るに、青山事常御用被仰付し已後は、仲ケ間は勿論、是迄出合し人々ども、一向不通に成て、他國へ行しやらん江戸に在やらん、誰も知もの無し、一日淺草觀音の縁日に、彼前田朋友二三輩連立ち參詣するに、群衆の中に編笠を著たる無刀の男徘徊せしを、前田目早く見付て、あれは青山也、見知ごしになぶりて樂んと、渠が正面へ廻り、行當て喧嘩を仕掛ケけるに、青山大に困りてそこを避んとするを、捉へて樣々嘲哢すれども、それと名乘る事もならず、兎角して漸々と逃去ぬ、〇下略

〔御徒目付勤方〕初。泊。之事

一朝出刻限并著服之義、見習之節之通ニ而、今日ゟ平服ニ而可為相勤旨、組頭衆ゟ、御目付衆江申上有之候上ニ而、加番江談有之、加番より親規之者江申談、夫ゟ銘々及挨拶、勝手罷越、勝手ニ居合候同役江も致挨拶、平服挾箱より出し、勝手火所脇入口之方ニ而著替、麻上下を其儘挾箱江入置可申候、挾箱之置場所順之儀は、中之間入口際、加番其次當番之筆頭其次貳番目、刀掛之下三番目、其次四番目戸棚之下、新規挾箱差置候事、

一平服不相成候前、御目付衆被仰渡御條目、并同役申合書面、中之間於二階加番向寄同役立合為

讀聞候間、愼而承可申事、

但平服ニ相成候節、染上下相用可申候、且向寄同役他向寄相泊りへ相賴可申候事、

一挾箱之中江入置候品

一熨斗目　一火事裝束　一傘　一麻上下　一羽織黒紋付但時之服　一櫛道具　一股引

一半合羽　一下駄　一鳥目貳百銅并糊入半切、美濃紙少し、　一狀箱、但是は御名代之節、御注進狀入候事故、其心得ニ而用意之事、　一野羽織　一半てん　一三尺帶　一こんたび

右之外著替平服、上下、小袖等用意、御番割江入候迄は、紋付相用、縞小紋類不相成候、帷子之節は、縱令時候不順ニ候共、單物不相成、麻襦半之儀、半袖にいたし可申候、小袖袷著用之內は淺黄、半襟ハ色薄き抔は白にまがひ候ニ付、遠慮可致候事、

一夜具之儀置附候ニ付、御退出過、葛籠爲揚御掃持賴、葛籠部屋江入置可申候事、

但其節辨當取寄せ可申候、辨當之儀、御臺所被下候得共、若火事其外他出役等急ニ有之候節之用意ニ候間、翌朝迄給申間敷候事、

一矢立、股立紐、平常用意、金子之儀、人々之心懸ニ有之事ニ候得共、金貳分程も是又平常懷中いたし、扇子は御成等之節相圖ニ相用候間、成丈ケ白地之扇子持候樣ニ可致候事、

一御成心得、平日當番書每朝御小人目付取集メ差出候間、請取、新番前書狀差へ差置、御徒番所江罷越、御掛椽ニ罷在、敷居へ手を突、平日當番書御差出有之候樣申談置、無程御徒方持參、案內いたし可申候間、當番所鉾羅戶入口ニ而請取、此方名面申達、夫ゟ狀差ニ有之當番書初江とぢこみ、加番硯箱蓋之上、當番書入候袋ニ、前日當番書有之候間引替、前日當番書新番前狀差引出し江入置可申候事、

右當番書圖所

一御徒頭本番加番　一御本丸御玄關前本番詰番　一御本城中御門　一百人組　一西丸吹上御門

一蓮池御門　一紅葉山下御門　一坂下御門　一西丸御裏御門　一西丸御玄關前○本番詰番中略

一大目付衆御玄關御登城之節、御玄關番ゟ聲を掛ヶ次第、御老若方御玄關御登城之節、御出迎之場所江立罷在候而、御會釋申候而、進ミ出相替儀無之段申上候事、○中略

御。夜。詰。廻。之事

一五ッ打候段、御玄關番申聞候はゞ、壹番新規は兩人、御目付衆御夜詰御見廻之節罷出候事、尤壹番御用多之節は、御供番筆上ニ而罷出申候、御夜詰廻り支度いたし候段、組頭衆、加番、其外詰合申達、御蠟燭貳拾目掛壹挺、加番ゟ請取、勝手江罷越、勝手廊下ニ有之候御挑灯箱ゟ無地御挑灯取出し、御行燈ニ而蠟燭移し、御挑灯江建、御行燈之後ロニ差置、古番江及挨拶候而、御挑灯箱際ニ而、上下取、其儘其所へ片付差置可申候、且火所之炭を繼、やくわん江水を入掛置可申候、暫勝手ニ罷在、五ッ半時ニ、三寸前ニ御挑灯蠟燭之眞を切、古番ト一所ニ、當番所江罷出、其節中之間之刀を取、御挑灯ヲ持、組頭衆加番其外銘々江御夜詰廻ニ罷出候段申達、且當番所江殘り候筆下之者江、勝手之儀心附吳候樣及挨拶可申、夫ゟ當番所を出、刀を帶し、蘇鐵之間西側御行燈際ニ、古番之次江著座いたし、其次御徒押御挑灯奉行相詰居候間、著座已前、刀を取及挨拶、又々刀帶罷出、尤此節明日之御當番加泊御目付衆之御當リ、兼而覺置、御徒押承リ候ハゞ、可申達候、此方ゟ申達候事ニは無之候、○中略蘇鐵之間入口舞羅戸際ゟ、又々蘇鐵之間、右之方壹疊目通欠拔、御廊下入口ニ而咳拂いたし、湯呑所前ニ而咳拂いたし、中ノ口江罷越、板椽之上中之口番向ニ罷在、尤此節中之口番ゟ中之口部屋ニ、泊番之姓名書差出候ニ付、請取、懷中いたし可申候、御目付衆、御廊下御立邊へ御出被成候を見受、筆上之者御廻之旨申候而、又々欠拔、中御廊下裏中之口御納戸入口江咳拂ニ而相知らせ、御納戸口左之方板椽ニ罷在、御目付衆御納戸入口邊江御越之節、筆上之者、御納戸口番人江、番出替事も無之哉と聲掛候得ば、別條無之段相答申候ニ付、

御目付衆御越被成候節、筆上之者相替義無之段申上ケ、御跡ニ付、御臺所御廊下江罷越候ば、此所ニ火之番組頭火之番罷在、御臺所方江相廻り、御廊下角ゟ欠抜、御臺所番詰所前邊迄欠參り、當番と高聲ニ而承候得ば、御膳奉行當番何之誰と右之間番人申聞候間、立戻り、筆上同役江姓名申達候、且御膳奉行姓名聞兼候はゝ、押返し承可申候、御目付衆陰時計入口邊江御出被成候節、御賄頭罷越、御挨拶いたし、御斷差出候得ば、御受取被成候而、火之番組頭江御渡被成候、其節筆上之者相替儀無之、御膳奉行當番姓名申上、陰時計江御出被成候節、御會釋被成候間、御時宜いたし、火之番加番より、翌日之御目付衆御當り承候得ば、筆上之もの申達候事、

但古來御夜詰部屋前江罷越居、五ツ半江三寸前之御時計坊主衆部屋江知らせ候を承り、當番所江罷歸、筆上同役江申達、御夜詰廻ニ罷出候由御座候得共、近來見計罷在候事、

西。番。所。勤方心得之事

一半藏口出役同樣中ノ口江相廻、御供御目付衆御跡ニ付、猿橋迄罷越、西番所江相廻候段申上候而、半藏口出役同樣、矢來御門ゟ出候而、西番所江罷越、御番所上之間江罷通、番頭呼出し、御城之儀井諸事前々之通相心得可申旨申渡、上之間ニ詰居可申候、當番書は差出し不申候得共、心得ニ承置可申事、

但御小人目付御使共引連罷越申候事

一若出火等有之節は、半藏口出役ト申合、諸事相勤可申事、

一燒飯相廻候已後、雨天ニ候へバ、御本丸ゟ傘も相廻申候、御挑灯は相廻不申、半藏口出役と一所ニ引可申候事、

一土手上ニ高ク立チ人上り不申樣心付可申候事

一當日被御出候御成之節は、御人無之候故、御目付衆江組頭ゟ被申上、御小人目付計相廻申候事、

一還御相濟候へば、半藏口出役引候間、夫を見請候はゞ、番頭江逢引候段申達、矢來御門通半藏口出役、一所ニ當番所江罷歸リ、組頭加番江西番所相替義無之旨相屆可申事、
一宅出ニ候ハゞ、當番所江罷歸候上ニ而、組頭衆加番江是又相達罷歸リ候事、
〔大猷院殿御實紀五十〕寛永十九年五月廿二日、米廩に歩行目付を置て、查撿せしめらる、濱米所に二人、廩口に二人、簿書所に二人、廩中巡察四人と定めらる、
〔教令類纂初集十八〕寛永六己丑年四月
覺〇中略
一御玄關前出仕之面々、供之もの込合不申樣ニ、御徒目付相應ニ人數申付、大名諸役人寄合、其外同列之供之者、向々を見計ひ、場所相定、御徒目付致差引、御小人目付相添、作法能仕、主人退出之時分、順々相詰候樣ニ可仕事、〇中略
三月
〔憲教類典四ノ五上評定〕享保四己亥年十二月六日
一御徒目付、向後式日立合ともに壹人宛罷出候樣可致候、
〔拾遺柳營秘鑑三〕一傳奏屋敷、御馳走見廻リハ、御徒目付、向後服紗小袖麻上下ニて可被罷出旨、淸兵衞殿、源兵衞殿ニ被申渡候、辰〇享保九年二月十九日、
〔寶曆集成絲綸錄十六〕延享二丑年正月
紅葉山御普請始より御假屋取仕廻候まで、御徒目付五人〇中略日々代合、御山之上見廻リ、下御供所に泊り、夜中ハ繁々相廻候樣可被申付候、委細本多紀伊守、大岡越前守、河野豐前守、曲淵越前守可被談候、
正月

〔寶曆集成綵綸錄 一〕延享四卯年九月

一檜之間、溜檜之間、蘇鐵間邊は蘇鐵間內江、御徒目付相詰させ、度々見廻らせ可被申候、

一大廣間、四之間、北之御緣、山雀之御襖際江、御徒目付兩人差出置、小便所邊所々心附候樣可被申渡候、

一年始五節句等之節ハ、國持四品以上、殿上之間に御禮前相詰有之候間、殿上之間掛板、御障子際、御徒目付差出置候樣可被致候、〇中略

右之趣可被得其意候

九月

〔天明集成綵綸錄 二十三〕明和二酉年二月

御目付江

深川三拾三間堂射初之節、町奉行組與力同心差出候得共、御徒目付、御小人目付も差遣候樣可被致候、尤依田豐前守可被談候、

〔天明集成綵綸錄 二十二〕明和六丑年十二月

御勘定奉行江

御作事方、小普請方、所々御修復場所之儀、御入用、〇中略貳拾兩以下、拾兩以上ハ吟味方改役御徒目付見分可被差越候、

右之通向後相心得、尤見分書是迄ハ、御勘定所江被差出候得共、以來ハ出羽守江直ニ可被差出候、

十二月

〔天明集成綵綸錄 二十四〕安永九子年五月

御目付江〇中略

一御徒目付、〇中略日々晝夜共御城番相極置、前書之通出火之節者、早速燒火之間廊下近邊江詰置
也、其方共罷越候場所江附添、罷越候筈ニ候事、〇中略
右之通可被得其意候、尤西丸御目付江も可被談候、

五月

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年四月

一御徒目付、御小人目付、時々牢屋敷江罷越、牢間之樣子等爲見可被申候、尤牢問之趣意、與力等江
尋候而不苦候、〇中略
右之通、坂部十郎右衞門、井上圖書江申渡候間、可被其意候、

〔天保集成絲綸錄七十七〕文政五午年八月

牢内并溜内爲取締御徒目付御小人目付之内掛りを定、繁々爲見廻可被申候、且又町奉行御役宅
江も不時に見廻、火附盜賊改宅小石川養生所江も見廻、牢間并敲之者等有之節々爲立合候樣可
被致候、尤向々江可被談候、
右之通、御目付江相達候間、得其意可被談候、

〔溫恭院實紀九〕安政三年二月廿七日、御城内御修復ヶ所多ニ付、御門出入御締向之令、〇中略

御目付組頭江

此節御城内御修復ヶ所、數多ニ付而ハ、日々人足共、多人數入込候事故、御門々出入御締向、別而厚
心附候事ニハ候得共、此上共御門々ハ勿論、富士見御天守、其外御番所等ニ至迄、聊以無油斷、御取
締向入念、夜中ハ出入等嚴重ニ改、持場々々見廻候儀も、是迄とも猶更繁々見廻り、火之元等、格別
ニ心附候樣可致候、若等閑之儀も相聞候ニおゐてハ、嚴重可及沙汰候、
右之趣、御門番并御番所有之向々江可被達候事、

待遇

〔長崎志 二〕渡邊外記　三月二〇享保年九日著、四月朔日筑前ニ越、五月廿四日長崎ニ歸、

御徒目付高倉孫三郎〇下略

〔享保集成絲綸錄 一〕万治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以書付被仰出之、所謂、〇中略

一御臺所通廊下〇中略　御徒士目付組頭

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無之

平日御役所席泊御番、御夜詰之內席、〇中略

御納戸廊下敷居內　御徒目付組頭

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書〇中略

御臺所三之間緣頰　御徒目付組頭〇中略　御徒目付

〔憲教類典 三ノ三十五下衣服〕寬永三丙戌年十一月廿四日

御徒組頭

御徒目付

右熨斗目幷白帷子可著候

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵五人扶持　目、譜代、上下格　御徒目付

〔溫恭院實紀 十〕安政三年九月廿四日、御役替五人、格式增祿壹人、〇中略

御勘定格御目付

御細工所頭格勤候、內二百俵高ニ被成下、　平山謙次郎

俸祿

右被仰付之

〔大概順〕御目見以下大概順

貳百俵　目、臺、譜代、上下役、　御徒目付組頭

百俵高五人扶持　目、譜代、上下役、　御徒目付

〔營中御日記十三〕寛永十三年四月十日、今度日光江御供之御徒與頭御徒目付御切米召上被下之、

〔大猷院殿御實紀五十〕寛永十九年五月十八日、王子村にならせ給ふ、この路次にて、筋違橋門の白壁に落書せしを御覽じ、御氣色よろしからず、町奉行に命じ査撿せしめられ目付山崎權八郎正信御前をとゞめられ、歩行目付貳人月俸をはぶしとゞめらる、

〔大猷院殿御實紀六十五〕正保三年十二月十三日、加恩五十俵づゝ下さるゝ徒目付四人、三拾俵づつ下さるゝもの貳拾五人、

〔甘露叢七十〕元祿十二年七月廿日、御勘定中川吉左衛門、御徒目付組頭高木十郎左衛門兩人、當分長崎御用被仰付ニ付、役料二百俵、并ニ手代給金五拾兩宛被下旨被仰渡、

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

貳百石高　但取來御扶持方共　御徒目付組頭

〔温恭院實紀五〕安政元年三月十八日、賜金服于御備場引渡御用者、〇中略御徒目付

一金拾兩　田中勘左衛門

右相模安房上總國、御備場引渡爲御用罷越候ニ付被下之、

〔七十冊物類集六十五〕申〇萬延元年三月廿四日達ス

御目付衆江談覺　黑川左中江

外國人旅宿詰御徒目付御小人目付御手當、幷御扶持方等被下高、幷在出致し候節は、其度々別段御手當御扶持方等も被下候儀と存候間、乍御手數右廉々員數御書拔御貰申度候事、

書面之趣致承知候、御徒目付之儀一ヶ年ニ付金壹兩壹分ヅヽ、御小人目付之儀ハ前同斷壹ヶ月二分ヅヽ、御手當として被下、英人旅宿詰之方ハ、別段泊り御手當として三分ヅヽ被下、在出之儀ハ未ダ御手當相顯不申候、何れも御扶持方等ハ無之候、

西丸徒目付

〔官中秘策二十五〕西丸御徒目付組頭二人

〔營中御日記二十六〕慶安五年〇承應元年十一月十日、庵原八兵衛、神谷助左衛門、右兩人西丸御歩行目付組頭江被仰付之、〇中略　右兩役共新規被仰付候

〔吏徵御目見以下〕西丸御徒目付廿四人　御目付支配　百俵五人扶持高享保六丑九月廿九日　燒火間、上下役、　慶安三年庚寅八月廿七日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕御徒目付　慶安三年庚寅八月廿七日、始置西丸附十六員、寛永三年丙戌十一月廿三日、熨斗目・白帷子可著候、

〔天明集成絲綸錄二十三〕寶曆十三未年正月

御目付江

西丸御徒目付、向後御本丸江御供心得壹人宛相詰、西丸當番三人、右之内ゟ壹人御供心得、兼相勤、若急御用之節者、御本丸御徒目付泊之内ゟ、相心得候樣可被致候、尤西丸御目付江可被談候、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、王子村邊御鷹狩あり、歩行目付十六人、〇中略　大納言殿〇德川家綱へ附屬せらる、

徒押

〔吏徵御目見以下〕御徒押十人舊稱御押目付、　御目付支配　八十俵持扶持高　燒火間、上下役、

〔大猷院殿御實紀五十二〕寛永十九年十一月十一日、後閤勤番人少きにより、〇中略　歩行押〇中略　中よ

り十人增加せらる、

〔甘露叢十一〕延寶九年九月四日、御廣敷添番被仰付、〔中略〕押目付ヨリ辻宇左衛門、

〔拾遺柳營秘鑑三〕一西丸御成之節、人拂ニ御徒押出候儀、享保五年子六月七日、稻生次郎左衛門殿筧平大夫殿被仰渡候、

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保九甲辰年七月十三日

八拾俵高　　御徒押
持扶持之儀〔中略〕

小給之者、此度御吟味有之、勤之内書面之通被下候間、可被申渡候、

〔憲敎類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書〔中略〕　御臺所四之間　御徒押

〔大概順〕御目見以下大概順

八拾俵高持扶持　目、譜代、上下役、　御徒押

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、王子村邊御鷹狩あり、〔中略〕步行押六人〔中略〕大納言殿〔德川家綱〕へ附屬せらる、

小人目付

小人目付ハ、小人仲間等ヨリ選擧セラルヽモノニシテ、目付ノ支配ニ屬ス、諸變事ノ立合、牢屋敷ノ見廻リ、勘定所、町奉行所、普請場等ノ出役ヲ爲シ、若シクハ目付ノ遠國出張等ニ隨從スル事アリ、

〔吏徴御目見以下〕御小人目付五十人　十五俵一人扶持高　御譜代場

職掌

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十月朔日、徒目付小人目付の員をも減省せらる、

〔明良帶錄外篇〕御小人目付〈目支 十五俵一人扶持〉平御小人、御中間より被仰付るゝを、御役替といふ、其下より被仰付るゝを御取立といふ、御目付支配の內より被仰付事なれば、當時は諸向より筆算働有者被仰付、輕きものと稱すれども、諸變立合を勤、宅調宅廻狀といふ事あり、諸手扱廣き役儀なり、

〔拾遺柳營秘鑑三〕一御名代出役、御小人目付四人ハ相止、貳人罷成、御役三人出し可申旨、稻生次郎左衞門殿、小笠原平兵衞殿、享保五子七月十日被仰渡之、

〔長崎志續編一〕上使御目付到著之事

天明六丙午年

御目付 末吉善左衞門

御徒目付山本貞右衞門、御〇小〇人〇目〇付〇增田藤四郞、山崎彌一右衞門、加瀨彥市、

右御目付トシテ、六月十六日著、岩原屋鋪ニ在留、同十一月朔日發駕有之、

〔寶曆集成絲綸錄十六〕延享二丑年正月

紅葉山御普請始より、御假屋取仕廻候まで、〇中略御小人目付八人程、日々代合、御山之上見廻り、下御供所ニ泊り、夜中は繁々相廻候樣可被申付候、委細本多紀伊守、大岡越前守、河野豐前守、曲淵越前守可被談候、

正月

〔寶曆集成絲綸錄十六〕寶曆五亥年九月

御勘定奉行江

御勘定所江出役之御小人目付、當時相勤罷在候者共、拾人不殘、此節引替、向後ハ半年年宛ニ而、引替

候樣ニ、御目付江申渡候間、得二其意一可レ被レ談候、

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和二酉年二月

御目付江

深川三拾三間堂射初之節、町奉行組與力同心、差出候得共、御徒目付御小人目付も差遣候樣可レ被レ致候、尤依田豐前守可レ被レ談候、

〔天明集成絲綸錄二十四〕安永九子年五月

御目付江〇中略

一御徒目付、御小人目付、黑鍬之者も日々晝夜共御城番相極置、前書之通、出火之節者、早速燒火之間廊下近邊江詰置せ、其方共罷越候場所江附添罷越候筈ニ候事、〇中略

右之通、可レ被レ得二其意一候、尤西丸御目付江も可レ被レ談候、

五月

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年正月

御勘定奉行江

御勘定所江出役之御小人目付十人、此度差戾し候樣可レ被レ致候、外之者十人引替、出役申渡候樣、御目付江相達候間、被レ得二其意一、御目付可レ被レ談候、尤勤方等之儀ハ、是迄之通可レ被二心得一候、

正月

〔天保集成絲綸錄七十四〕寬政二戌年四月〇中略

一御徒目付、御小人目付、時々牢屋敷江罷越、牢間之樣子等、爲レ見可レ被レ申候、尤牢間之趣意、與力等江尋候而不レ苦候、〇中略

右之通、坂部十郞右衞門、井上圖書江申渡候間、可レ被レ得二其意一候、

〔續泰平年表〕弘化元年三月朔日、御小人目付、町奉行所江出役を被停、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政四子年三月

御勘定奉行江

人足寄場立合相勤候御小人目付、御手當金之儀被申聞候ニ付、壹人江壹ケ月金壹兩ヅヽ被下候、尤以來立合御用相勤候御小人目付江、御用中、野扶持之外、月々金壹兩ヅヽ、爲雜用被下候間、得其意、御勘定奉行可被談候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

火之番役

火之番役ハ、目付ノ管轄ニシテ、本丸西丸倶ニ奥表ノ二種アリ、城內ノ火ノ番ノ事ヲ行フ、組頭アリテ之ヲ監督ス、

火之番組頭

〔吏徵下御目見以下〕火之番組頭三人　御目付支配　百五十俵高　燒火間、上下役、　萬治元年戊戌十一月五日始置

〔吏徵別錄下御目見以下〕火之番組頭　万治元年戊戌十一月五日、始置一員、　元祿五年壬申十一月朔日三員、　享保九年甲辰七月十三日、百五十俵高、

〔明良帶錄外篇〕火之番組頭百五十俵高　御臺所前廊下　目支

年來勤之者、火の番より繰上となる、御徒目付組頭より至るもあり、老衰場にて、御褒美にて來るも有り、火之番規矩等之事、火之番へ申達す、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保九甲辰年七月十三日

百五拾俵高但取來候御扶持之儀(中略)
辰七月十三日

表火之番組頭

〔享保集成絲綸錄一〕万治二亥年九月
新御殿付而、諸士著座之席、以₂壁書₁被₂仰出₁之、所謂、○中略
一御臺所通廊下○中略　火之番組頭
〔憲教類典三ノ二十六奥殿中〕年號月日無₂之₁
平日御役所席、泊御番、御夜詰之内席、○中略
御納戸廊下敷居内○中略　火之番組頭
〔憲教類典三ノ二十六奥殿中〕年號月日無之
御料理之席書○中略
御臺所三之間縁頬○中略　火之番組頭
〔嚴有院殿御實紀四〕承應元年十一月十日、鈴木太兵衛は火番組頭になる、貝役藤井善右衛門も同じく火番組頭になる、この兩職は新設なり、
○按ズルニ、吏徴別錄ニハ、火番組頭、万治元年戊戌十一月五日、始置₂一員₁ト見エタリ、

西丸火之番組頭

〔吏徴御目見以下〕西丸火之番組頭二人　御目付支配　百五拾俵高　燒火間、上下役、　萬治元年戊戌十一月五日始置

奥表火之番

〔吏徴御目見以下〕奧火之番廿人　御留守居支配　八拾俵持扶持高　燒火間、上下役、　寛永十六年己卯十月八日始置○中略
表火之番三十人　御目付支配　七拾俵持扶持高　燒火間、上下役、
〔明良帶錄外篇〕火之番目支奥八拾俵持扶持、(此間恐脫表字)七十俵持扶持

西丸奥表火之番

。奥表の火の番あり、引下げの仁多し、部屋々々時半に見廻り、念入よと聲を掛る也、

〔教令類纂初集十八〕元祿十五壬午年十一月

一御役人衆之部屋々々不殘、幷ニ中奥衆之部屋退出之節、火之番立合、相改、其上にて仕廻候樣、可被致候事、

〔吏徵別錄御目見以下下〕奥火之番　寛永十六年己卯十月八日、始置九員、慶安三年庚寅八月廿七日、始置西丸附十六員、享保九年甲辰七月十三日、八十俵高、寛政四年壬子三月十三日、勤向之儀は、向後御廣敷番之頭差圖を請、身分ニ付候儀は、是迄之通、組頭差圖を請可申旨達之、

〔憲教類典御役二ノ五〕享保九甲辰年七月十三日

奥火之番

表火之番

八拾俵持扶持之儀(中略)

七拾俵高持扶持之儀(中略)

右小給之者、此度御吟味之上、勤之内被下之

〔憲教類典御殿中三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書○中略

御臺所三之間椽頰○中略　表火之番

〔寶曆集成絲綸錄十六〕延享二丑年正月

紅葉山御普請、始より御假屋取仕廻候まで、御徒目付五人、表火番五人、○中略日々代合、御山之上見廻り、下御供所ニ泊リ夜中ハ緊々相廻候樣可被申付候、委細本多紀伊守、大岡越前守、河野豐前守、曲淵越前守可被談候、

正月

〔吏徵御目見以下下〕西丸奥火之番十人　御留守居支配　八拾俵持扶持高　燒火間、上下役、慶安

三年庚寅八月廿七日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、王子村邊御鷹狩あり、○中略奥火番十六人、○中略大納言殿○家綱徳川へ附屬せらる、

〔吏徴別錄御目見以下〕表火之番　寛永十六年己卯七月十一日、元火之番之内十一人、西丸御殿爲火之用心御番被仰付、慶安三年庚寅八月廿七日、始置西丸附二十員、享保九年甲辰七月十三日、七十俵高、

〔吏徴御目見以下〕西丸表火之番十八人　御目付支配　七拾俵持扶持高　燒火間、上下役、　慶安三年庚寅八月廿七日始置

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之内場所定高幷役扶持○中略

七拾俵高扶持持　　西丸表火之番

元西丸御留守居支配に而、六拾俵扶持持に而候處、其後無之、當時左之通也、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、王子村邊御鷹狩あり、○中略表火番廿人、○中略大納言殿○家綱徳川へ附屬せらる、

二丸火之番

〔吏徴御目見以下〕二丸火之番十六人　二丸御留守居支配　六十俵持扶持高　燒火間、上下役、

寛永廿年癸未九月七日始置

〔吏徴別錄御目見以下〕二丸火之番　寛永二十年癸未九月七日、始置十員、享保九年甲辰七月十三日、六十俵高、　寶曆三年癸酉正月廿三日、定十六員、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之内場所定高幷役扶持○中略

諸所火之番

六拾俵高扶持持　　二九火之番

〔吏徵附錄 權輿〕大手方火之番一人　櫻田方火之番一人　二九火之番一人　紅葉山火之番一人　淺草御藏火之番一人　本所御藏火之番一人　東叡山火之番一人　增上寺火之番一人　聖堂火之番一人　吹上上覽所火之番一人　猿江御材木藏火之番一人

〔憲敎類典 一ノ二十 四九〕慶安三庚寅年九月十八日

御內證方御條目

定 ○中略

一火之番衆貳人宛、一日一夜、相勤べし、請取渡し之時分、圍爐裏之儀ハ不ㇾ及ㇾ沙汰、屋禰裏以下迄入ㇾ念可ㇾ改之事、○中略

慶安三年九月十八日

職員職掌

古事類苑

官位部五十七

德川氏職員六

寺社奉行 紅葉山役人附

寺社奉行ハ四人ヲ定員トシ、月番ヲ定メテ政務ヲ行フ、全國ノ神官僧侶ヲ始メトシテ、樂人、撿挍、連歌師、陰陽師、古筆見、碁將棊所ノ類、及ビ德川氏ニ緣故アル農工商等ヲ支配シ、關八州、及ビ五畿內、近江、丹波、播磨等ヲ除キテ、其他ノ諸國私領ノ訴訟ヲ聽斷ス、而シテ其配下ノ訴訟ハ、內寄合トテ、月番ノ宅ニ同役ヲ會シテ之ヲ裁決スレドモ、事ノ他ノ支配ニ關聯スルハ、必ズ評定所ニ於テ合議決定スルヲ例トス、評定所ニ會スル役人、又ハ其聽訟ノ規程等ハ、評定所役人篇、及ビ法律部聽訟篇ニ詳ニス、屬僚ニ吟味物調役、寺社役等アリ、奉行ニ隸シテ各其事務ヲ分掌ス、

抑寺社奉行ノ職ハ、足利氏ノ時ニハ、僧錄司蔭涼軒ヲシテ之ヲ行ハシメ、德川氏ニ至リテモ、其初世ハ金地院崇傳ヲ僧錄司ニ任ジテ之ヲ司ラシメシガ、寬永十二年ニ、始テ寺社奉行ヲ置キ、明治元年ニ至ル迄絕エタルコトナシ、此職ハ、奏者番ヨリ兼任シ、奏者番ハ大名ノ職ナルヲ以テ、役料ヲ給セズ、若シ奏者番ニアラズシテ之ニ補スル時ハ、其知行高ヲ一萬石ニ增加ス、大岡越前守、山名因幡守ノ如キハ此例ナリ、

〔職掌錄〕寺社奉行　當職四員〇又見ニ吏徵

〔有司勤仕錄〕寺社奉行　寺社奉行、町奉行、御勘定奉行、是を三奉行と云、〇又見ニ職掌錄

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

一一切諸國之寺社、幷寺社領之在家、門前町等迄支配す、○中略

一請取々々の場所有ㇾ之、其處へ給人、徒目付、足輕等を相廻し、非道を改、若非常之事有ㇾ之屆有時は、撿使を遣し相改、口書を取、或は呼出し詮議を遂る事あり、

〔憲教類典五ノ十五下江戸町觸〕延享二乙丑年閏十二月

寺社方江附候町屋之分不ㇾ殘、向後町奉行所支配相成候間、可ㇾ被ㇾ任ㇾ其意候、町奉行可ㇾ被ㇾ談候、

寺社奉行江

閏十二月

〔東職記聞一〕寺社奉行四人

掌ㇾ聽海内之寺社及東都府外諸州人民之訴論事之職也、故關八州以外之訴論者、一切當職之所ㇾ知也、

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

月番之時は、諸願訴訟を請、裏書を出し、理非を決斷し、六ヶ敷公事は、非番月迄持出し捌ㇾ之、或は内寄合にて決し、又評定立合等樣々也、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛永十二乙亥年十一月十日

一寺社方幷遠國訴訟人事

安藤右京亮○重長　松平出雲守○勝隆　堀市正○利重

右三人、一月ヅヽ致番々可ㇾ承之事、

〔明良帶錄前篇〕寺社奉行

寛永十二年、堀東市正始て勤む、此頃は評定所なければ、奉行の第宅江戸金地院○崇傳出座、寺社之訴訟を聽けり、

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

一昔は此職無之、寺社之事は、金地院并林永喜、道春之弟信長老支配することなり、今も法の上に於て重き事は、金地院に相談する事なり、

〔台德院殿御實紀附錄三〕室町家の頃には、鹿苑院の蔭涼軒もて僧錄司の職に任じ、天下寺院の政令を司らしむ、元和五年九月これを改られ、金地院崇傳もて僧錄司とせられ、且仰出されしは、元和元年令せられし先判の旨にまかせ、いよ〳〵鹿苑院蔭涼軒の僧錄司をば廢せられ、金地院をして僧錄司たらしめ、五山十刹の諸法令、出世の官資、入院の儀式等、先例の旨に遵ひ、舊規の如くたるべしと定められぬ、後に至り寺社の諸務いよ〳〵繁擾にして、僧徒の管轄に事ゆかざれば、寺社奉行を建置せられしより、金地院の職掌は廢せしなり、

〔御當家令條九〕五山十刹諸山法度

一鹿苑蔭涼之官職者、先代之規範也、當時不足敍用、毀破之訖、自今以後、以五山之長老之中、歸依之僧一員、可兼補之、官資并入院出仕之儀式等如先規、可有重賞事、○中略

元和元年乙卯七月日　家康公御朱印

任元和元年七月先判之旨、彌停止鹿苑蔭涼之僧官職、令兼補于當院訖、五山十刹諸山之諸法度、出世官資入院之儀式等、守同規、如先判可被沙汰之狀如件、

元和五年己未九月日　秀忠公御朱印

金地院江

〔江戸名所圖會三〕勝林山金地院　增上寺の西、切通の上にあり、京師南禪寺の塔頭にして、南禪寺の宿寺なり五山の僧錄と稱す、○中略開山を大業和尙と云、其頃碩學なりければ、五山の僧錄司に命ぜられ、評定衆に加へ給ひ、寺社の訴へを決斷せしむ、鄙留の毛衣と云草紙に、古は寺社裁許の事、金地院計らひけるが、寛永中より武家の職となる云々、

〔諸宗便儀集五〕寺社奉行支配

關八州之外、碓氷、白河、箱根、私領之分、但五畿内、近江、丹波、播磨、此八箇國ハ、訴訟公事雙方所司代裁許、其外、京、大坂、長崎ニ至迄、依二其品一其所之達二奉行一、遠國皆寺社奉行江願出ル、

〔憲教類典四ノ五上評定〕寛文八戊申年七月廿二日

覺

箱根、碓氷并白川關を限、遠國之分、公事裏書寺社奉行、關より内、勘定奉行裏書可レ被レ致之、〇下略

〔憲教類典四ノ五上評定〕元祿十二己卯年十二月

只今迄、盜賊改火附改方江訴出候類之儀、向後寺社領は、支配より寺社奉行江〇中略可二申達一候、〇下略

〔御書付手留〕安永七戊年、御三家方領内之寺社モ、願筋之義ハ寺社奉行へ可二願出一旨御書付、

寺社奉行へ

御三家御領内寺社方、只今迄、願事有レ之節ハ、寺社奉行へ願候儀無レ之トモ、以來ハ其度々、寺社奉行へ願出候樣可レ被レ致候、

右之趣、御三家家老衆へ相達候間、可レ被レ得二其意一候、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年二月

寺社奉行江

寺社奉行御役、追々無益之手數懸り、物每繁多に相成候哉に候、以前は月番とても、左樣に事多には無レ之趣之處、近來は晝夜繁多之趣に候、御用向近來格別相增候而已にも有レ之間敷、取扱方手重に相成候故之事にも可レ有レ之候、御用向之調事等も、道理貫通之儀に候はゞ、前々より之儀、一々糺候にも不レ及儀に候、尤先例を相糺、御改正之儀可二申上一は、左も可レ有レ之事に候得共、是とてもあまり細密に過ぎ、却而煩多に相成、聊之儀も先例之異同に拘り候樣なる仕癖に候、右等之儀は、斟酌致

し可被取計候、其外聊之事も、御役之規格之樣に相成り、內寄合等之儀も、無用之手續も可有之哉、且帳面類も、無用之儀迄も留め候樣に相成候儀も可有之候、いづれにも是迄よりは過半手透に相成候程に、簡易之儀可被申合候、進達伺等之書付も、可成丈は手數不掛樣に被談可被相伺候、且又每々相達候儀に候得共、御役に附候入用も多分之由、右等は格別被省候樣可被致候、

〔泰平年表五編二〕文久二年五月廿七日、寺社奉行江御達書付、寺社奉行勤方之儀、御用多に付、是迄迚も當番之者、多助立に致し候由に候得共、當節は外國御用立會等被仰付、其餘臨時評議物多端、御用多之御時節に候へば、本役之方は、平日當番御使等不相勤、本役弟子取も被致候間數候、尤御禮日御披露は相勤候樣に可被致候、就ては加役御用向幷立會御用等、是迄も出精被致候得共、御事多之御時節にも候間、當番致し、今一際踏込研究出精可被致候事、

〔嚴有院殿御實紀十六〕萬治元年八月五日、此九月崇源院殿、三十三回萬部御法會行はるゝにより、松平伊豆守信綱、總奉行命せられ、寺社奉行松平出雲守勝隆、井上河內守正利、板倉阿波守重鄕、勘定頭伊丹藏人勝長、この事にあづかるべしと仰付らる、

〇按ズルニ、法會アル時ハ、必ズ寺社奉行其事ヲ管スルコトニテ、此外其例多シ、

〔常憲院殿御實紀四十〕元祿十二年十一月廿六日、この日寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭へ仰せらるゝは、火賊盜賊考察の兩加役、今より後停廢せらるゝにより、人々緩怠の心おこるべければ、前に加役あらざりし時の如く心得、相互ひに所管の地點撿せしむべしとなり、

〔文昭院殿御實紀十三〕正德二年正月廿一日、寺社奉行森川出羽守俊胤、大目付仙石丹波守久尙、目付鈴木飛驒守利雄、堀田源右衞門通右も日記のことゝるべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀六〕享保三年正月十六日、寺社奉行松平對馬守近禎、大目付仙石丹波守久尙、今まで日記の事奉はりしが、そのことをゆるさる、

〔有章院殿御實紀五〕正德三年八月五日、寺社奉行安藤右京亮信友、松平備前守正久、前代〇德川家宣の御時、公武寺社領御判物御朱印の事奉はりしが、萬石以上御判御朱印は下され、其餘はとゞめら

支配

る丶をもて、このことをゆるさる、

〔浚明院殿御實紀三十九〕安永七年八月廿五日、寺社奉行太田備後守資愛、紅葉山の御宮、及び台德院殿靈廟修理の事にあづかるべしと命せらる、

〔萬天日錄十三〕寺社奉行支配

一日本國中寺社方、出家、禰宜、山伏、比丘尼、樂人、古筆見、撿校、勾當、碁打、將棊指等也、

〔諸宗便儀集五〕寺社奉行支配

吉川、澁川、猪飼、神道、天道、紅葉山坊主、火之番、樂人、碁將棊、連歌師、古筆見、陰陽師、虚無僧、勸進比丘尼、大神樂、

〔青標紙三編〕一寺社奉行支配下に而、碁將棊所、古筆見等は、職務は違へども、其身法體に而あれば、配下に屬すべき事なれ、ども、大坂三鄕の年寄尼ヶ崎又右衞門、及び遠州見付の上村淸兵衞、西三十三箇國の秤を司れる神善四郎を支配するは、如何なる譯のある事にや、何れの書にも見えず、

〔支配并達[illegible]町人御禮格式坤〕神道方吉川源十郎　京都樂人　日光山樂人　紅葉山樂人　紅葉山御宮附坊主　日光山目代田村權右衞門　久能山目代中嶋小左衞門　碁將棊之者　里村昌逸　連歌師　御連衆　古筆見了意　古筆勘藏　京都御醫師

町人之部

上京　下京　大坂　堺　奈良　伏見　淀川過書　五ヶ所京割府　伏見新船坪井喜六　秤屋神善四郎　墨屋森若狹　甲府町年寄　同所正田隼人　遠州見附上村淸兵衞　長崎會所調役小法師勝見、後藤總右衞門、長崎町年寄　大津總代兩人　御冠師木村筑後　御烏帽子杉本美作　御末廣師岡村淡路　大佛師左京　大經師道泉　拾所了琢　御簾屋和泉　坂本屋彌七郎　京疊屋伊阿彌新八、伊阿彌筑後、勢州大湊角屋七郎次郎

資格

豆州三島暦師河合龍節 大坂瓦師藤右衛門 尼崎屋又右衛門 伯州米子町人村川市兵衛 播州紅粉屋富田清水市郎右衛門 針屋宗元 京都町人後藤治兵衛 長崎高木作大夫 同役人高木彥左衛門 京檜皮屋久右衛門 大坂町人川口茂右衛門 豆州修禪寺村紙屋久左衛門 下野國宇都宮町人總代兩人 駿府町人總代兩人 京御疊師大針播部、保井助左衛門、

○按ズルニ、書名ニ支配トアルハ、寺社奉行ノ支配ヲ云フ、

又按ズルニ、此ニ揭ゲタル諸職及ビ町人ハ、何レモ德川氏ニ由緖アルモノニシテ、皆寺社奉行ニ就テ將軍ニ謁シ、又進獻拜領ノコトアルモノナリ、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年二月廿九日、紅葉山火番、今までは留守居の隷下たりしを、あらためて寺社奉行に屬せしめらる、

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

一此職三奉行の其一にして、芙蓉之間の上座也、

〔明良帶錄前篇〕寺社奉行御奏者番ヨリ出役

此場は御奏者番より兼帶なれば、人材により、一萬石之仁にても勤む、○中略此場より所司代、大坂御城代に昇る、器量人才之仁にあらざれば其任に堪ず、

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

一御奏者番之內ゟ兼帶して勤る時は、縱ば後役たりといへども、御奏者番之上座也、又御奏者番を不勤、寺社奉行計を被仰付時は、御奏者番之末座也、御城之下部屋は一所也、兼帶之寺社奉行は、式日立會之日は、御奏者番之當番を除き、外之御奏者番勤之、其外御奏者番之方は、同列に順番に相勤之、

〔吏徵別錄上萬石以上〕寺社奉行 萬治元年戊戌七月四日、始從御奏者番兼帶、板倉阿波守、○重鄉

〔東職記聞　一〕寺社奉行四人　從五位下

其職以爲重寄也、帝鑑間雁間重代豪傑、堪其器人、多補奏者帶此職也、然後依器與祿而進執政京都所司代大坂城代若年寄也、又菊間柳間之家多補大番頭、歷大坂定番伏見奉行、轉補奏者帶當職也、又雖萬石以下、撰諸職合格之古老而給職秩、准萬石以上被補之義亦有之也、元文元年八月、大岡越前守忠相山名因幡守豐就等兩人補之、是萬石以下之人進當職之近例也、凡補奏者番寺社奉行、則不論家席列芙蓉間也、又雖無城家、被補奏者、格准城主、寺社奉行耳者、職位次奏者而帶之者也、

〔仕官格義辨〕寺社奉行之事

問云、寺社奉行之御役儀は、大方御奏者番兼帶にて勤被申候、右二役共に、同時代より出來候事に候哉、承度候、答云、御奏者番之儀は古き事にて、慶長年中にも、駿河江戶共に當御役儀者有之候事に及承候、寺社奉行之儀は、寬永十二亥年十一月十日、始て堀市正〇重利安藤右京亮〇重長松平出雲守〇勝隆右三人被仰付候樣及承候、且御奏者番兼帶被致候儀者、雁之間詰之城主抔よりも被仰付候御役人故、寺社奉行結構成御役にては有之候得共、城主抔之御役には輕くも相聞候に付、御奏者番者、殊之外重き御役に候間、兼帶被致候事之樣に及承候、又問云、近年町奉行より大岡越前守〇忠相大御番頭より山名因幡守〇豐就被仰付候處、兩人とも御奏者番は兼帶不致候由、先規も大御番頭抔より被仰付候衆、兼帶にて被勤候處、如何之譯に而可有之候哉、答云、上之儀を下として難察候得共、是等之儀を相考候處、大岡殿は貳千石御加增に而、本高六千石、山名殿も七千石、何も御足高に被仰付、壹萬石の高にて勤被申候由、本高大名にて無之候故、御奏者番者兼帶被致不申候と被存候、又問云、山名殿大御番頭より寺社奉行被仰付候例は、元祿十五午年六月十日、大御番頭より本多彈正少弼〇忠晴被仰付候儀承り候、近年にては、享保九辰年十二月廿三日、本多伊豫守〇忠統大御番頭御免以後、寺社奉行被仰付候儀も有之候得共、町奉行より寺社奉行被仰付候例も有

之候事に候哉、答云、町奉行より寺社奉行被仰付候儀は、寛永十五寅年五月十六日、堀式部少輔〇直之江戸町奉行より寺社奉行被仰付候、又大御番頭より被仰付候例は、本多彈正殿、本多伊豫殿にかぎらず、初而當御役被仰付候、堀市正殿、松平出雲守殿抔も、大御番頭より被仰付候、其後も數多有之候事に候、

〔幕朝故事談〕寺社奉行大岡越前守〇忠相御加增にて六千石に被成下、四千俵御役料にて寺社奉行相勤む、惇廟〇德川家重の時に至、大岡出雲守〇忠光勤役中御加增にて、本高一萬石に被成下候也、此大岡出雲守御小性を相勤候節、小身にて、供廻り等、越前守の家來を借し候に付、本家と號し恩を報候なり、表にて官職大名に被成下候者は是一人なり、又山名因幡守〇豐就交代寄合より德廟〇德川吉宗の御代寺社奉行被仰付候也、是又珍事也、元文四年被仰付、延享年中卒、

〔德川禁令考〕十四寺社奉行〕文久二壬戌年八月廿三日

寺社奉行勤方ノ儀ニ付達

大目付江
御目付

今度御改革、御奏者之御役被廢止、寺社奉行ハ本役ニ被仰付候間、可被得其意候事、

八月

〔營中御日記十二〕寛永十二年十一月九日、安藤右京進〇重長堀市正〇利重松平出雲守〇勝隆右之輩於御座之間新規寺社奉行被仰付之、御奏者番如元、寺社方公事訴訟、其外一切可支配旨也、

〔藩翰譜七上堀〕左大臣家〇德川家光の御時、寛永の初め始て寺社奉行職を置かる、直之〇堀堀市正利重、二人其職を司る、

〔諸御役代々記一〕寺社奉行〇御奏者兼役、不兼分其譯記、

寛永十六亥二月十一日、御書院番頭より、明暦三戌九月廿九日病死、　安藤右京亮重長

同年同日、萬治二亥三月廿一日御免、　松平出雲守勝隆

同年同日、大御番頭より、同十五寅四月廿四日病死、　堀市正利重

寛永十五寅正月廿八日、町奉行より、同十九午七月十日病死、　御奏者番不ㇾ兼堀式部少輔直之

萬治元戌七月四日、寛文元丑十二月十八日卒、　板倉阿波守重郷

同年同日、寛文七未十二月十八日、依ㇾ願御免、　井上河内守正利

寛文元丑十一月十一日、大御番頭より、同十戌十二月十一日閉門、御役被ニ召放一、　御奏者番不ㇾ兼加々爪甲斐守直澄

寛文六午六月十九日、延寶六午二月六日願御免、　小笠原山城守長頼

寛文十一亥正月廿五日、延寶四辰四月三日京都所司代江、　戸田伊賀守忠能

同年同日、延寶四辰十二月廿五日願御免、　本多長門守忠利

延寶四辰七月廿六日、同六午十月九日(中略)御城代江、　太田攝津守資次

延寶五巳六月廿一日、同八申九月廿一日御老中江、　板倉石見守重通又內膳正

延寶六午三月廿二日、天和元酉閏十一月廿八日依ㇾ願御免、　松平山城守重治後改ニ修理亮一

延寶八申閏八月十一日、同九酉三月廿六日御老中江、　阿部美作守正武

延寶九酉二月十六日、貞享二丑五月廿一日御役被ニ召放一、　水野右衛門大夫忠春

延寶九酉四月廿九日、天和元酉十一月十五日、(中略)京都所司代江、　稻葉丹後守正通

天和元酉十一月廿九日、同二戌十月十六日若年寄江、　秋元攝津守喬朝

同年同日、大御番頭より、(中略)同三亥正月十一日卒、　酒井大和守忠國

天和二戌十月十六日、(中略)大目付より、貞享四卯五月十四日御役被ニ召放一、　御奏者番不ㇾ兼坂本右衛門大夫

天和三亥二月二日、(中略)大御番頭より、貞享元子七月廿六日依ㇾ願御免、　板倉伊豫守重形

本多淡路守忠當　天和三亥二月十二日、(中略)大御番頭より、貞享四卯五月十四日御役被㆓召放㆒、

（加賀守嫡子）大久保安藝守忠增　貞享二丑七月廿二日、(中略)同四卯十二月十八日若年寄江、

酒井河內守忠擧　貞享四卯三月十一日、元祿二巳七月廿一日病氣依ㇾ願御免、

（山城守嫡子）戸田能登守忠眞　貞享四卯五月十八日、(中略)元祿十二卯九月廿三日御免、

米津伊勢守正盛（改㆓出羽守㆒）　同年同日、同五年辰十月二日御役被㆓召放㆒、

本多紀伊守正永　元祿元辰十一月十四日、大御番頭より、同九子十月朔日若年寄、

加藤佐渡守明英　元祿二巳八月三日、同三午十月十一日若年寄江、

小笠原佐渡守長重　元祿三午十二月三日、同四未閏八月廿六日京都所司代江、

松浦壹岐守任　元祿四未十一月廿五日、同七戌十一月廿五日依ㇾ願御免、

永井伊賀守直敬　元祿七戌十一月十五日、(中略)寶永元申十月朔日若年寄江、

井上大和守正岑　元祿九子十月朔日、同十二卯十月六日若年寄江、

松平志摩守重顯（改㆓丹後守㆒又改㆓日向守㆒）　同年同日、同十五午閏八月十九日依ㇾ願御免、

（豐後守嫡子）阿部飛騨守正喬　元祿十二卯閏九月廿八日、(中略)寶永元申十月廿九日(中略)御免、

青山播磨守幸明　元祿十二卯十月十三日、同十五午六月五日御免、

本多彈正少弼忠晴　元祿十五午六月十一日大御番頭より、(中略)正德三巳閏五月七日依ㇾ願御免、

三宅備前守康雄　寶永元申十月朔日、同七寅九月廿一日御免、

久世出雲守重之（改㆓隱岐守㆒）　寶永元申十月九日、同二酉九月廿一日若年寄江、

鳥居播磨守忠救（改㆓伊賀守㆒）　寶永二酉九月廿一日、正德元卯六月廿七日若年寄江、

堀左京亮直利（改㆓丹後守㆒）　同年同日、同五子五月廿六日御役被㆓召放㆒、

安藤右京進重行（改㆓右京亮㆒）　寶永六丑十一月廿三日、正德三巳三月十二日依ㇾ願御免、

森川出羽守重興　寶永七寅九月廿一日御側衆より、正德四午九月六日若年寄、

松平對馬守昭因（改ニ相模守近治）　正德元卯十二月廿二日、享保十巳八月病死、

土井山城守利忠（改ニ伊豫守利意）　正德三巳三月廿八日、享保九辰閏四月十一日依ㇾ願御免。

建部内匠頭政字（御奏者不ㇾ兼）　正德三巳七月十一日伏見奉行より、同五未正月廿六日病死、

石川近江守總茂　正德四午九月六日、享保二酉九月廿七日若年寄江、

井上遠江守正方　正德五未二月十八日御側衆より、享保元申九月晦日依ㇾ願御免、

安藤右京亮重行　享保二酉十月朔日再役、同三戌八月十四日大坂御城代江、

酒井修理大夫忠音（改ニ讃岐守）　享保三戌八月四日、同七寅正月三日依ㇾ願御免、

牧野因幡守英成　同年同日、同九年辰十二月十五日京都所司代江、

黒田豊前守直邦　享保八卯三月十五日、同十七子七月廿九日（中略）西丸御老中江、

本多伊豫守忠統　享保九辰十二月廿三日、同十巳六月十一日若年寄江、

小出信濃守英貞　享保十巳六月十一日、同十七子三月朔日西丸若年寄江、

太田備中守資晴　享保十巳九月十一日、同十三申五月七日若年寄江、

井上河内守正如　享保十三申七月六日、元文二巳十月卒、

土岐丹後守頼稔　享保十三申七月六日、同十五戌七月十一日大坂御城代江、

西尾隱岐守忠直　享保十七子三月十五日、同十九寅九月廿五日若年寄江、

松平玄蕃頭忠曉　享保十七子八月七日、同十九寅五月廿二日病氣依ㇾ願御免、

仙石信濃守政春　享保十九寅六月六日、同廿卯四月廿二日病死、

北條遠江守氏直　享保十九寅十月十五日伏見奉行より、同廿卯七月廿九月病氣依ㇾ願御免、

牧野越中守貞倶（改ニ貞通）　享保廿卯五月二日、寬保二戌六月朔日京都所司代江、

板倉伊豫守勝清　享保廿卯五月二日、同年六月五日若年寄、江、

松平紀伊守信岑　享保二十卯六月廿二日、元文四未三月四日寺社奉行計御免、

大岡越前守忠相　元文元辰八月十二日、(中略)町奉行より、(中略)寛延元辰閏十月朔日、(中略)本高・・十萬石ニ被成下、御奏者番被仰付、當役兼帯、同四未十一月二日病氣依願御免、同年十二月十六日卒、

本多紀伊守正珍改伯耆守　元文四未三月十五日、(中略)延享三寅十月廿五日御老中、江、

山名因幡守豐就　元文四未三月十五日大御番頭より、(中略)御奏者番不兼、延享四卯九月廿二日病死、

堀田相模守正亮　寛保二戌七月朔日、延享元子五月朔日大坂御城代、

松平右近將監武元改主計頭、又右近將監、　延享元子五月十五日、同三寅五月十五日西丸御老中、江、

秋元攝津守凉朝　延享三寅五月廿八日、同四卯六月朔日西丸若年寄、江、

小出信濃守英智　延享三寅十二月朔日、同五辰七月朔日若年寄、江、

酒井修理大夫忠用　延享四卯三月十一日見習被仰付、同年六月朔日本役、同年十二月廿三日大坂御城代、江、

松平宮内少輔忠恒　延享四卯九月十一日、寛延元辰閏十月朔日若年寄、江、

稻葉丹後守正甫　延享四卯十二月廿三日、寛延三午十二月十八日(中略)御免、

青山因幡守忠朝　寛延元辰八月三日、寶曆八寅十一月廿八日大坂御城代、江、

酒井山城守忠休　寛延元辰閏十月朔日、同二巳七月六日西丸若年寄、江、

本多兵庫頭忠英改長門守　寛延二巳七月廿三日、寶曆八寅三月廿八日西丸若年寄、江、

松平因幡守輝高改右京亮　寛延四未正月十五日、寶曆二申四月七日大坂御城代、江、

鳥井伊賀守忠孝　寶曆二申四月廿三日、同十辰三月廿二日若年寄、江、

井上河内守正賢　寶曆三酉三月廿八日、同六子五月七日大坂御城代、江、

阿部伊豫守正右　寶曆六子五月七日、(中略)同十辰十二月三日京都所司代、江、

寶曆八寅四月七日、(中略)同九卯閏七月十六日依願寺社奉行計御免、
朽木土佐守玄綱

寶曆九卯正月十五日、(中略)同十辰八月十五日大坂御城代江、
松平周防守康福

寶曆十辰閏十月廿八日、同十四申二月五日(中略)御奏者寺社奉行御免還寨、
毛利讃岐守匡平

寶曆十辰三月廿二日西丸御側衆より、(中略)同十一巳七月十八日病氣依願御免、
御奏者不レ兼
小堀土佐守政方、

寶曆十辰八月十五日、(中略)明和元申六月廿一日大坂御城代江、
松平和泉守乘佑

寶曆十辰十二月三日、同十二午五月十九日依願寺社奉行計御免、
太田攝津守資俊

寶曆十一巳七月廿四日、明和二酉八月廿一日若君様御附若年寄、
酒井飛驒守忠香

寶曆十二午五月廿四日(中略)再勤、同年十二月九日若君様御附若年寄江、
鳥居伊賀守忠孝

寶曆十三未二月十八日、(中略)明和六丑八月十八日京都所司代江、
土井大炊頭利里

寶曆十四申二月十五日、(中略)安永四未八月廿五日若年寄江、
松平伊賀守忠順

明和元申六月廿一日、(中略)天明元丑五月十一日大坂御城代江、
土岐美濃守定經

明和二酉八月廿一日、(中略)同六丑九月廿四日大坂御城代江、
久世出雲守廣明

明和六丑八月廿六日、(中略)安永六酉九月十五日大坂御城代江、
牧野越中守貞長

明和六丑十月朔日、(中略)安永五申四月病死、
土屋能登守篤直

安永四未八月廿八日、(中略)天明元丑閏五月十一日西丸若年寄江、
太田備後守資愛

安永五申六月五日、(中略)天明二寅九月十日大坂御城代江、
戸田因幡守忠寛

安永六酉九月十五日、(中略)天明三卯病死、
牧野豐前守惟成

安永六酉九月十五日見習、同八寅四月廿三日、本役、天明七未三月七日御老中江、
阿部備中守正倫

天明元丑閏五月十一日(中略)同六午二月病死、
井上河内守岑有(改二正定一)

天明元丑閏五月十一日、同四辰四月十五日若年寄江、
安藤對馬守信明

堀田相摸守正順　天明三卯七月廿八日(中略)同七未四月十九日、大坂御城代江、

松平右京亮輝和　天明四辰四月廿六日(中略)寛政十午十二月八日、大坂御城代江、

松平伯耆守資承　右同日、天明六午閏十月二日、寺社奉行計御免、

土井大炊頭利和　天明六午三月廿四日、御奏者番より兼帯、同八申六月廿六日、兼帯御免、

松平和泉守乗完　天明七未三月十二日(中略)同年十二月十六日、京都所司代江、

稲葉丹後守正諶　天明七未四月十九日、御奏者より兼(中略)同八申六月廿六日、兼帯御免、

牧野備前守忠精　天明七未九月五日見習、同年十二月廿三日本役、寛政四子八月廿八日、大坂御城代江、

松平紀伊守信道　天明八申四月十五日見習、同年六月廿六日本役、寛政三亥八月十八日病死、

板倉左近将監勝政(改ニ周防守)　天明八申六月廿六日(中略)寛政十午五月朔日、寺社奉行計御免、

戸田采女正氏教　寛政元酉十一月廿四日、御奏者より兼、同二戌四月十六日、御側御用人江、

脇坂淡路守安董(改ニ中務大輔)　寛政三亥八月廿八日(中略)文化十酉閏十一月十二日、病気依願御免、

立花出雲守種周　寛政四子九月廿日、大御番頭より、(中略)同五丑八月廿五日、若年寄江、

青山下野守忠裕　寛政五丑九月廿四日(中略)同八辰十一月廿九日、若君様若年寄江、

土井大炊頭利和　寛政八辰十二月廿四日再勤、(中略)享和元酉七月十一日、京都所司代江、

松平周防守康定　寛政十午五月晦日(中略)享和三亥八月日、病気ニ付(中略)寺社奉行計御免、

植村駿河守家長　寛政十一未正月十一日(中略)同十二申十一月朔日、西丸若年寄江、

堀田豊前守正穀　寛政十二申十一月朔日(中略)文化三寅五月十二日、寺社奉行計御免、

阿部播磨守正由　享和元酉七月十七日(中略)同四子正月廿三日、大坂御城代江、

青山大膳亮幸完　元若年寄、享和二戌正月廿日雁之間詰より御奏者共被ニ仰付、同四月九日(中略)寺社奉行計御免、

松平右京亮輝延　享和二戌四月廿八日(中略)文化十二亥四月廿九日、大坂御城代江、

享和三亥八月九日、御奏者より兼帶、同四子正月廿八日本役、(中略)文化三寅十月十二日、若年寄江、
水野出羽守忠成

享和四子正月廿八日、御奏者番兼帶、加役、(中略)文化七午六月廿五日、大坂御城代江、
大久保安藝守忠眞

文化三寅五月六日、御奏者番より兼帶、(中略)文化五辰九月十日、寺社奉行計御免、
阿部主計頭正精

文化五辰九月廿二日、御奏者番より兼帶、(中略)同年十二月十日、京都所司代江、
酒井靱負佐忠進

文化六巳正月廿二日、御奏者番より兼帶、(中略)同十酉六月九日、(中略)寺社奉行計御免、
松平和泉守乘寛

文化七午六月廿八日、御奏者番より兼帶、(中略)同九申四月四日、西丸若年寄江、
有馬左兵衛佐譽純

再役、文化七午九月廿八日、御奏者番より兼帶加役、(中略)同十四丑八月廿五日、御老中江、
阿部主計頭正精又備中守

文化十酉六月廿四日、御奏者番より兼帶、(中略)同十四丑七月廿四日、若年寄江、
内藤豐前守信敦

文化十酉十二月朔日、御奏者番より兼帶、(中略)文化五午六月廿八日、(中略)御免、
松平右近將監武厚

文化十二亥五月廿八日、御奏者番より兼帶、(中略)同年十一月卒、
青山大藏少輔幸孝

文化十二亥十二月廿八日、御奏者番より再勤、(中略)文政元寅八月二日、京都所司代江、
松平和泉守乘寛

文化十四丑八月廿四日、御奏者番より兼帶、(中略)文政五午七月八日、(中略)大坂御城代江、
松平周防守康任

文化十四丑九月十日、御奏者番より兼帶、(中略)文政八酉五月十五日、大坂御城代江、
水野和泉守忠邦改左近將監

文政元寅八月廿四日、御奏者番より兼帶、(中略)同九戌十一月廿三日、大坂御城代江、
松平伯耆守宗發

文政五午七月十二日、御奏者番より兼帶、(中略)同八酉四月廿八日、若年寄江、
本多豐前守正意

文政五午七月十七日、御奏者番より兼帶、(中略)同十一子十一月廿二日、大坂御城代江、
太田攝津守資始

文政八酉五月六日、御奏者番より兼帶、(中略)天保二卯五月廿五日、大坂御城代江、
松平伊豆守信順

文政八酉五月廿四日、御奏者番より兼帶、(中略)同十二丑十二月十六日、(中略)寺社奉行計御免、
土井大炊頭利位

文政九戌十二月朔日、御奏者番より兼帶、(中略)同十一子十月廿五日、若年寄江、
堀大和守親審

文政十一子十一月朔日、御奏者番より兼帶、（中略）天保五午十二月廿二日、病氣ニ付御免、　土屋相模守彥直

文政十一子十二月十二日、御奏者番より兼帶、（中略）同十三寅十月廿五日、（中略）寺社奉行計御免、　松平丹波守光年

再勤、文政十二丑十月廿四日、（中略）御奏者番より兼帶加役、（中略）天保七申二月廿六日、西丸御老中格江、　脇坂中務大輔安董

再役、文政十三寅十一月八日、御奏者番より兼帶、（中略）天保五午四月十一日、大坂御城代江、　土井大炊頭利位

天保二卯五月廿八日、御奏者番寺社奉行見習より、（中略）同八酉七月廿日、大坂御城代江、　間部下總守詮勝

天保五午四月十八日、御奏者番より兼帶、（中略）同九戌四月十一日、大坂御城代江、　井上河内守正春

天保五午八月八日、御奏者番より兼帶、同八酉五月十六日、大坂御城代江、　堀田相模守正篤（改ニ備中守）

天保七申二月廿六日、御奏者番より兼帶、（中略）同十一子正月十三日、京都所司代江、　牧野備前守忠雅

天保八酉五月十六日、御奏者番より兼帶、（中略）同十一子十一月十三日、大坂御城代江、　青山因幡守忠良

天保八酉七月廿日、御奏者番より兼帶、　阿部能登守正瞭

天保九戌四月十四日、御奏者番より兼帶、（中略）同十四卯二月廿一日、思召有之、御役御免差扣、　松平伊賀守忠愛

天保九戌六月朔日、御奏者番より兼帶、（中略）同十三寅四月廿一日、病氣依願御免、　稻葉丹後守正守

天保十一子二月十九日、御奏者番より兼帶、（中略）同十四卯十一月五日、西丸御老中江、　戸田因幡守忠温（改ニ日向守）

天保十一子五月十九日、御奏者番より見習、同十一月八日本役、同十四卯閏九月十一日、御老中江、　阿部伊勢守正弘

天保十三寅五月十九日、御奏者番より、同十四卯十一月五日、所司代江、　酒井若狹守

天保十四卯二月廿四日、御奏者番より、（中略）弘化元辰十二月廿八日、大坂御城代江、　松平和泉守

天保十四卯十一月三日、御奏者番より、（中略）嘉永元申十月十九日、加判之列、　久世大和守廣周（改ニ出雲守）

天保十四卯十一月晦日、御奏者番より、（中略）嘉永元申年十月十九日、大坂御城代、　內藤紀伊守信親

弘化元辰十二月廿八日、御奏者番より、（中略）同二巳三月十八日、大坂御城代江、　再勤　松平伊賀守忠愛

脇坂淡路守安宅　弘化二巳五月九日、御奏者番より、

青山大膳亮幸哉　天保十四卯十一月日、御奏者番より、弘化三午十月廿三日(中略)寺社奉行御免、

本多中務大輔忠民　弘化三午十二月十五日、御奏者番より兼帯、

土屋采女正寅直　弘化五申正月廿三日、御奏者番より見習、嘉永元申十月十八日、寺社奉行本役、

松平紀伊守信篤(前ニ豊前守)　嘉永元申十月十九日、御奏者番より、

〔嘉永明治年間錄 一〕嘉永五年(壬子)　今年有司鑑抄

寺社奉行

弘化三午十二月台命　三州岡崎　高五萬石　本多中務大輔忠民

嘉永元申十月台命　丹波龜山　高五萬石　松平豊前守信篤(ノブシゲ)

嘉永三戌台命　遠州掛川　高五萬三十七石　太田攝津守資功(スケカタ)

嘉永四亥十二月台命　奥州磐城平　高五萬石　安藤長門守信睦(ノブユキ)

嘉永五子七月台命　上州高崎　高八萬二千石　松平右京亮輝聽(テルトシ)

〔嘉永明治年間錄 十七〕明治紀元(戊辰)　德川家有司鑑抄

寺社奉行

元治元甲子九月台命　常州土浦　高九萬五千石　土屋采女正寅直

慶應三丁卯台命　下野宇都宮　高一(〇一七誤)萬石餘　戸田土佐守忠友

同年台命　信州岩村田　高一萬五千石　內藤志摩守正誠

〔嘉永明治年間錄 十七〕慶應四年(〇明治元年)五月十九日、寺社、町、勘定、三奉行免役、

府下取締被₂仰付置₁候處、今度當分江戸鎭臺被₂差置₁候に付ては、寺社、町、勘定三奉行所諸記錄共、明廿日中に悉く引渡候樣可₂致事、但奉行は被₂止候、其以下役人の者、當分出勤被₂仰付₁候、

右に付、廿日三役所共引渡し相濟み、三奉行御役御免、

見習

〔職掌錄〕寺社奉行　時に寄、見習一人あることあり、

〔惇信院殿御實紀五〕延享四年三月十一日、酒井修理大夫忠用、〇中略奏者番となる、修理大夫忠用には、寺社奉行の職を見習はしむ、

〔浚明院殿御實紀三十七〕安永六年九月十五日、奏者番阿部備中守正倫は、寺社奉行を見習ふべしと仰下さる、

〇按ズルニ、忠用ハ當年六月ニ、正倫ハ安永八年四月ニ、並ニ本役トナレリ

吟味物調役

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕寺社奉行吟味物調役　天明八年戊申八月廿八日、始置、寺社奉行手。附。四員、　寛政三年辛亥二月八日、始置、寺社奉行支配留。役。四員、　同八年丙辰四月廿九日、御役名を寺社奉行吟。味。物。調。役。と改む、

〔評定所格例〕寺社奉行町奉行　支配留役之事

寛政八辰年四月廿九日

寺社奉行吟味物調役〇中略

右寺社奉行〇中略支配留役之義、向後前文之御役名ニ相改可申候、〇又見天保集成絲綸錄

〔吏徵御目見以上上〕寺社奉行吟味物調役四人　奉行支配　百五十俵高　御役扶持廿人扶持

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年八月

御勘定奉行江

評定所留役、御勘定、　青木三郎左衞門　服部權之進　本多常次郎　星野鍈三郎

右之者共、寺社奉行手附可被申渡候、尤只今迄之通、其方共支配之積可被心得候、寺社奉行可被談候、

〔德川禁令考 十四 寺社奉行〕寛政三辛亥年二月同日

寺社留役及寺社役人ノ儀ニ付達

寺社奉行支配留役之儀、以來增人之儀者難成候、先人數四人と定、銘々家來寺社役壹人宛相增、四人宛に而、留役打交、爲馴御用向、簡易に相成候樣可被心掛候、右寺社役之儀も、追而人數減候儀者、勝手次第に可被致候、留役之儀者、追而者人數被減候儀も可有之候間、可被得其意候、

二月

〔天保集成絲綸錄 一〕寛政三亥年二月

寺社奉行江

御勘定組頭格、評定所留役、羽田藤右衛門

評定所留役 服部權之進　星野鉄三郎　平山六左衛門

右寺社奉行支配留役被仰付候間、其段可被申渡候、格式御宛行等之儀は、是迄之通に候、

但席順之儀は、組頭格は評定所留役組頭之次、留役ば評定所留役之上たるべく候、

右之趣、御勘定奉行江申渡候間、被得其意可被相談候、

〔天保集成絲綸錄 七十七〕文化二丑年五月

寺社奉行江

何も支配吟味物調役之儀、此度增人被仰付候得共、向後相增候儀には無之候、各四人之節は、調役も四人にて爲相勤、一人は減切之積に可被心得候、

寺社役

〔寛政四年武鑑〕寺社御奉行脇坂淡路守安董　寺社役本庄平擧、横田亘、加集大助、〇下略

〔寶永二年武鑑〕寺社御奉行久世讃岐守重之　寺社方中根長大夫、小谷理兵衛、

〔明良帶錄 前篇〕寺社奉行

大撿使、少撿使とて、家來の内を撰て申付、寺社立會に遣すなり、

〔憲教類典四ノ五下評定〕享保六辛丑年

内寄合○中略

寺社奉行内寄合は、銘々家來之寺社役人壹人宛召連る也、

〔有司勤仕錄〕寺社奉行

寺社取次

一寺社奉行は、町奉行、御勘定奉行と違ひ、大名役たる故に、公事之役人、皆家來之内に而、寺社取次と云役人有之、諸之願訴訟を請取、諸用を司る事、町奉行にて內與力之如し、其外目安讀井白洲同心、寺社書役等、御役向一式に掛り勤る也、

〔元祿八年武鑑〕寺社御奉行

永井伊賀守○尚政 取次小島佐兵衞、山岡藤兵衞、

〔寶永三年武鑑〕寺社御奉行

三宅備前守康勝 取次松岡平大夫、石川八彌、間瀨久米右衞門、平山森右衞門、永田曾武之介、鈴木直右衞門、丹羽作左衞門、和田十郎兵衞、矢木仙右衞門、白井六郎兵衞、○下略

○按ズルニ、寺社取次ノ數ハ、時ニ由リテ一定セズ、多キハ十五六人ニ及ビ、少キハ兩三人ニ過ギズ、又全ク無キモアリ、或ハ用人トアリテ、取次ノ名見エザルモアリ、

附紅葉山役人

江戸城内紅葉山ニ東照宮祠、及ビ歷代ノ靈屋アリ、其役人ニ宮番、別當、坊主、樂人等ノ數員アリ、

宮番別當

〔延寶八年江戸鑑〕紅葉山御宮御番

牛袋勘右衞門 高木猪兵衞 荒川源右衞門 坂木傳右衞門

火之番

〔元祿八年武鑑〕紅葉山御宮番

百俵五人扶持高野一郎左衞門　百五拾俵吉田仁右衞門

○按ズルニ、此外百俵五人扶持ノ者二人、百五十俵ノ者二人アリ、

〔元祿八年武鑑〕紅葉山御別當

六拾俵樋口松齋　五拾俵石井永德

〔吏徵御目見以下〕紅葉山火之番七人　寺社奉行支配

○按ズルニ、寶永三年ノ江戸鑑ニハ三人、官中秘策ニハ十二人トアリ、

〔吏徵別錄御目見以下〕紅葉山火之番　元祿二年己巳二月廿九日、寺社奉行支配、是迄御留守支配　享保九年甲辰七月十三日、六十俵高、寛延三年庚午八月十九日、役扶持五人扶持、安永七年戊戌八月廿四日、見習ヲ置、五人扶持、

〔吏徵御目見以下〕紅葉山火之番　六十俵持扶持高　役扶持五人扶持　見習五人扶持○註略　燒火間、上下役、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高井役扶持、

六拾俵高扶持　紅葉山火之番

御濟メ之場所故、衣服ニ付、小給ニ而續兼候ニ付、其段寺社奉行ゟ申出、伺之上、向後百俵高之者御入人被仰付、寛保三亥年十月八日、被仰出此段寺社奉行御留守居江も、

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕寛延三午年八月

寺社奉行江

先達而、紅葉山火之番百俵以上之御入人可被仰付旨相達候處、百俵高ニ而相應之者無之ニ付、向

後高之儀ハ、古來之通六拾俵高ニ定、六拾俵以下之者江は御足高被下之、外ニ役扶持五人扶持宛被下候儀候間、可被得其意候、

八月

〔猿の燒藁の記上〕石井勝之助も、其年〇寛政元年の八月、紅葉山火之番被仰付侍りけり、此石井と云は、二十俵二人扶持にて、同心の家筋なりしが、人物もよく志正しく、其比人の信仰せし本間拙齋が門に入て、兵術をよくつかひたり、御目見以下の者共の藝術を因州〇小普請支配酒井因幡守見分ありたる時、何れも小給の者にて、藝とてもそこ〳〵のことなる上、心掛なんど云べき有樣もみえず、中に石井は、さなへを純子の袋に入て持來れり、又場所に望む時、脇差をとりて側に置所を見るに、中々見事の構に見請たり、劍術もよくつかひたり、こゝを以翁〇森山孝盛が目にとまりて因州にもひたすら申て、同心の家筋より上下格に直に被仰付たり、紅葉山火之番は六十俵高なり、

〔明良帶錄世職篇〕紅葉山御宮附坊主衆　御同所御靈屋附坊主衆

是は御目見以下なれ共、上下格に準ず、御掃除之者を支配す、御高盛方、同六尺には、御四季施金下さる、紅葉山一切にかぎる、世々かくのごとし、

〔吏徵御目見以下〕紅葉山御宮附御靈屋附坊主十二人宮二人靈十人　寺社奉行支配〇中略　町屋敷拜領沽券金貳百兩

御右筆部屋緣頰二半場

〔吏徵別錄御目見以下〕紅葉山御宮御靈屋附坊主　享保九年甲辰七月十三日、五十俵高、　麴町役屋敷住宅、御宮附兩人ハ例年二月朔日御目見、

〔支配井達國町人御禮格式坤〕紅葉山御宮附坊主

一二月朔日御門主御禮之節、御次一同名披露、獻上扇子五本入、〇中略

一紅葉山八講御執行ニ付、御能被仰付、爲見物罷出、於檜間御料理被下之、〇中略

一將軍宣下之御禮、御門主御登城之節、御次一同名披露、獻上扇子五本入、〇中略

安永八年十二月十八日

一紅葉山御宮正遷宮相濟候付、於躑躅間銀三枚ツヽ被下之、

〔吏徵御目見以下〕紅葉山御宮附御靈屋附坊主　五十俵持扶持高　役扶持二人扶持

〔延寶八年江戸鑑〕紅葉山御坊主衆

百俵高野道入殿　百五十俵板垣宗悅殿

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ御增高被下候間、自今以後、支配之內ゟ、格別之儀も無之候はヾ、御足米願出申間敷候、

右之趣向々江可被達候、

五拾俵高　紅葉山附坊主　持扶持之儘、但御役料有之分は、只今迄之通、〇中略

右之通、御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔吏徵御目見以下〕紅葉山御高盛坊主十六人　三拾俵貳人扶持高　御四季施銀五枚　燒火間貳半場

紅葉山御宮御靈屋附御緣頰坊主四人宮三人大猷公一人　貳拾俵貳人扶持高　二半場

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　紅葉山御宮附御緣頰坊主　同高扶持　外金三分　同御靈屋附　同

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御普代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相摸守土屋〇老中傳達之、

掃除之者

○中略

金四兩宛　紅葉山御高盛坊主　　同斷　同所御掃除坊主

〔吏徵御目見以下〕紅葉山御掃除之者組頭　三拾俵貳人扶持高、御抱場、

紅葉山附御掃除之者七十人宮二十人靈五十人　十三俵壹人半扶持高　勤金貳分至壹兩　御抱場　正德四年甲午五月十二日始置

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御普代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相模守○老中土屋傳達之、

○中略

金三兩宛　紅葉山御掃除組頭○中略　　金貳兩宛　紅葉山御掃除之者

樂人

〔明良帶錄世職篇〕樂人衆

是は寺社奉行支配也、○中略大猷院樣○德川家光以來、京都之樂官を召して、紅葉山神君廟中祭祀の音樂に侍、四九月音樂を奏するを以て恒例とす、日光山にても如斯、ついて文昭院樣○德川家宣音樂を好ませ給ふ故、正德之冬朝鮮人來聘之節、京都より樂人を召して、御城に奏樂を起舞す、辻伯耆守、近代家業に達したりと御褒稱あり、今佛家法會の音樂等是なり、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆三酉年十月

寺社奉行江　　紅葉山樂人　東儀内匠弟　東儀民部

樂人不足ニ付被召出、民部一生之內、御扶持方貳拾人扶持被下候間、其段可被申渡候、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政十午年四月

寺社奉行江

紅葉山樂人 雅樂悴
東儀峯之助

右東儀雅樂病死ニ付、悴峯之助幼年には候得共、父跡役之儀相願候、雅樂儀、一代限り被召出候者之儀、殊悴峯之助幼年にて、家業も勤らざる事に候へば、願之趣は難相成候、依之雅樂取來現米五拾石拾人扶持は可差上候、併峯之助厄介も有之、可致難儀候に付、同人比立候迄爲取續、三人扶持被下候間、其段可被申渡候、尤峯之助儀外樂人とも申合、家業取立可申候、比立御用にも相立候節に至り候はゞ、其段申立候樣可被申渡置候、

〔支配幷遠國町人御禮格式坤〕紅葉山樂人

一年始之御禮、二月朔日御門主御禮之節罷出獻上、

元祿十三年五月十三日
一銀拾枚　紅葉山樂人 上將監

上將監儀、先達而日光江罷越、彼地樂人江指南仕候ニ付而、先例爲御褒美被下候、但御目見者不被仰付、

寶永元年五月十一日
一御法事ニ付、樂人八人御能見物被仰付之、〇中略

享保二十年五月五日
一舞樂相勤候ニ付、於柳之間時服二ツヽ被下之、

町奉行 江戸町役人 牢屋役人 道奉行 本所深川道路役人附

町奉行ハ二人ヲ定員トシ、月番ヲ定メテ政務ヲ行フ、江戸府內ノ町民、及ビ囚獄、養生所ノ役人、江戸町役人、幷ニ江戸寺社領ノ町民等ヲ支配シ、兼テ火災ノ消防ヲ指揮シ、火附盜賊ヲ吟味シ、道路、橋梁、上水等ノ事ヲ掌ル、府內町民ノ訴訟ヲ聽クハ、月番ノ宅ニ於テスレドモ、其事ノ他ノ支配ニ關聯スルハ、評定所ニ於テ合議裁決スルコト、寺社奉行、勘定奉行ニ同ジ、評定所ニ

會スル役人、又ハ其聽訟ノ規程等ハ、評定所役人篇、及ビ法律部聽訟篇ニ詳ニス、其職ハ通常三千石高ニシテ従五位下ニ敍シ、役料ハ千俵ヲ給セシガ、天和以後屢〻沿革アリ、屬僚ニ吟味物調役アリ、與力、同心アリ、與力ニ内與力ト云フアリ、與力、同心ノ職ハ、内ニ在テハ米金ノ出納、戸籍ノ整理、及ビ關所過料等ニ關スル事務ニ從ヒ、外ニ在テハ、常ニ市中ヲ巡回シテ非常ヲ警戒シ、不良ヲ逮捕シ、及ビ世上ノ風説異聞等ヲ内偵シテ、奉行ニ報告ス、與力ハ、俸給百石ヨリ二百石ニ至リ、同心ハ、二十俵二人扶持ヨリ三十五俵二人扶持ニ至ル、

抑〻町奉行ハ、徳川氏ノ初世ニ在リテハ、之ヲ代官トモ稱シテ、大抵一人ナリシガ、慶長年中ニ米津勘兵衞、土屋權右衞門之ニ補セラレテヨリ二人トナリ、各〻奉行所ヲ設ケテ、之ヲ南組北組ト稱シ、組毎ニ與力二十餘人、同心百餘人ヲ置キテ、其事務ヲ分掌セシメシガ、元祿十五年ニ、丹羽遠江守ヲ之ニ補シテヨリ、三人トナレリ、然ルニ享保四年ニ、坪内能登守職ヲ辭シテヨリ、其後任ヲ命ゼズシテ、舊ノ如ク二人ト爲シ、明治元年五月ニ至リテ、寺社奉行、勘定奉行ト共ニ、此職ヲモ廢止セリ、

〔柳營秘鑑〕四諸御役人員數并組支配

一町奉行二人

〔武家職號〕奉行とは、上の仰を奉はりて下へ行なふの義也、今いふ町奉行は、古代撿斷といふ職分なるべし、

〔甘露叢〕七十八元祿十五年閏八月十五日、丹羽遠江守長守、爲江戸町奉行、自是三人ニナル、

〔有德院殿御實紀〕八享保四年四月十四日、町奉行坪内能登守定鑑、前に病免せしにより、仰出さるるは、今より後その闕を補はずして、二人にさだめらるべければ、是まで定鑑に屬せし吏は、殘りし奉行二人に屬すべしとなり、

職掌

○按ズルニ、職員ノ事ハ、役宅及ビ用途條ヲ併セ看ルベシ、

〔東職記聞 一〕町奉行二人

掌二東都府内人民之戸口數、名籍、及雜儀、一切之訴訟、糺二彈姦民之犯法非違一之職也、人別領二與力二十五人同心百人一也、

〔職掌錄〕町奉行

月番の時は、諸公事願訴訟を引請、退出已後聽レ之、式日は早朝より評定所へ詰、御用畢て登城す、立合日は評定所にあり、非番も同じ、總じて月番之時、願訴訟を請、則裏判を出し、或は雙方對決之上、六ケ敷事は非番月へ持越捌く事也、すべて江戸町中幷寺社領之町、寺社門前幷境内借地之者共より、御府内へ懸り候出入は、月番町奉行裏書いたし候定也、又人馬宿次證文を出す、出火の時は、二本道具にて場所へ出馬し、町人足火消等へ消防手當等を指揮す、○又見二有司勤仕錄一

〔明良帶錄 後篇〕江戸町奉行

江戸町奉行は、江戸町中之視察、尤人品伶利之人の勤場にて、公事訴訟裁判決斷之人の昇る場なり、留役等を勤め、夫々扱之場の數有りて、段々歷昇する人、今の根岸肥前守○鎭衞の如き人材也、○中略御仕置もの囚人申渡に、罪之箇條々々何々に依て何々被二仰付一旨、御用番誰殿御差圖と申渡す、此節は大目付、御目付立合あり、○中略此場新役被二仰付一と先挑灯に紋所、合印等を付て玄關へ出し置て、町方よりのもの共に知らせ見せる也、

〔常憲院殿御實紀 十一〕貞享二年正月廿日、今より後火災あらば、町奉行一人づゝその地にまかるべしと仰付らる、

〔常憲院殿御實紀 四十〕元祿十二年十一月廿六日、この日寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭へ令せらるゝは、火賊盜賊考察の兩加役、今より後停廢せらるゝにより、人々緩怠の心おこるべければ、前

に加役あらざりし時の如く心得、相互ひに所管の地點撿せしむべしとなり、〇又見二憲教類典一

〔憲教類典評定四ノ五上〕元祿十二己卯年十二月

只今迄盗賊改、火付改方江訴出候類之儀、向後〇中略町方は町奉行江、〇中略可レ申二達一候、

〔憲教類典屋敷三ノ三十三〕元祿十五壬子年九月

覺

一本所竪川通、横川通、其外町中は、町奉行御勘定奉行向々ゟ向後可レ有二支配一事、

一御用に掛り候拜借地之者共、町屋に而候者、町奉行御勘定奉行ゟ向後支配可レ有事、

〔享保集成絲綸錄二十九〕享保四亥年七月

一本所深川邊、上水下水定浚、圦樋修復、其外樋之戸明ケ立見廻り等之儀、只今迄は本所奉行請負之者に申付〇中略然る所此度本所奉行相止、町人拜借屋敷も上り候に付、向後右之場所、町奉行可レ致二支配一旨被二仰出一候、〇中略

一本所之內、町奉行支配之町屋敷前地通に有レ之河岸江、土藏或は番屋、材木置場等、向後町奉行計之支配に成候事、

一御材木藏近所に馬場一ケ所有レ之候、向後は町奉行支配可レ被二申付一事、

右之通可レ被レ得二其意一候、御勘定奉行江可レ被レ談候、

〔市尹秘錄一〕與力同心役々勤方大概之事

本所見廻り勤方之事

一享和元酉年書出本所之儀は、往古兩御番之內ゟ、本所奉行と申、二人宛有レ之、〇中略然る處享保四亥年、右之奉行相止、〇中略向後右之場所、町奉行可レ致二支配一旨被二仰出一候、〇中略

一本所之內、武士屋舖寺社共、町屋江向合候場所、圍ゟ外往還江板圍、又は道造等致し候節は、御番

所江屆有之候、〇中略
但〇中略朱書 總而町屋江向合候場所、武士方寺社方前往還計此方御支配に御座候、圍より內之儀は、構無御座候、
一深川之內、小名木川ゟ南之方扇橋町通迄、武士屋鋪寺社地前共、往還一圓に此方御支配に御座候、〇中略
一深川三拾三間堂
右ハ此方御支配ニ御座候ニ付、通矢有之候節ハ見廻り申候、

〔德川禁令考町奉行十五〕享保四己亥年四月闕日

兩國橋新大橋支配達書

町奉行江

兩國橋新大橋、向後町奉行支配ニ被成候、
四月

按ニ、〔中略〕慶寛私記ニ又之ヲ揭ゲ、享保四年四月、本所奉行御免、道橋ハ御勘定奉行トアリ、二說ニ依レバ、府下ノ架橋、是ヨリ兩廳ニ分隸スルニ似タリ、然ルニ寛政二年七月ノ達書ニハ、川通御普請之儀ハ、御勘定所川々定掛持ニ被仰付トアリ、此文意ハ一局持ノ如シ、諸記其詳ヲ得ズ、之ヲ古吏ニ問フニ、此條ニ達スル二橋ニ永代橋大川橋ヲ加ヘ、四大橋ト唱ヘ、其換架修繕、皆町奉行所ニテ董役シ、勘定所ノ川通定掛モ之ヲ管理ス、郡營繕廠ニ榜示シテ、町方掛定川掛ト題ス、蓋シ先規ト云フ、然レバ則架橋ノ執務ハ、兩廳協議ニ成ルモ、往年ノ達書ニ準フナリ、

〔憲教類典五ノ八上水〕元文四己未年八月三日
一玉川上水神田上水之儀、向後町奉行之支配被仰付旨、松波筑後守〇正春石河土佐守〇政守被申渡候、〇又見ニ有德院殿御實紀一

○按ズルニ、上水ハ初メ町奉行ノ支配ナリシガ、元祿六年ニ道奉行ノ支配ト爲シ、元文四年ニ至リ、再ビ町奉行ノ支配ト爲セリ、道奉行ノ條併セ看ルベシ、

〔憲教類典五ノ十五下江戸町觸〕延享二乙丑年閏十二月

寺社奉行江

寺社方江附候町屋之分不殘、向後町奉行所支配相成候間、可被任其意候、町奉行可被談候、

閏十二月

〔御役所持場町法改正一件留書〕上水道方之外、御普請奉行持之分、町方掛リニ相成候ニ付、町々江申渡書、

一看板柱建候願　一紺屋共家前江物干柱建候願　一下水外流仕付、并駒寄矢來致候願　一店前輪木建候願　一堀井戸之儀ニ付願　一木戸番屋、并駒寄掘建等之願、一商ひ物家前江積置并日覆願、一町方河岸、附石垣、并川內江足代掛候願、一火之見建階子、并火之見櫓建候願、〇但書略一町方持橋、并車留願、一武家町組合橋に而、先規ゟ町方に而頭取世話致候分、車留共、一町方家前下水、右新規修復共　一家前板囲土置場願　一神事ニ付、幟挑灯建候願、一質屋共、土用中、家前江虫干致候願、一雛甲人形商ひ候內、往還江小屋掛致候願、

右之類、以來番所江計可申出候、御普請奉行江は届にも不及候、〇中略

亥〇寛政三年四月

〇按ズルニ、此ニ番所トアルハ、町奉行所ヲ云フ、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛永十二乙亥年十一月十日

一町方御用并訴訟事

加賀爪民部少輔　堀式部少輔〇二人並町奉行

右両人、一月宛致番々可承之事、

〔憲教類典四ノ五上評定〕寛永十二乙亥年十一月

支配

一町方公事承候日〇中略
九日　十九日　廿七日

〔享保集成絲綸錄十八〕正保三戌年五月
一御奏者番、并御勘定方四人之役人、大目付、町奉行、
右之面々、日來御奉公之儀、朝四ツ以後登城、晩ハ八ツ以前ニ退出仕候事、不レ應二貴命一候之間、自今以後可レ相二嗜之一旨上意之趣、酒井讃岐守〈勝〇忠〉傳レ之、〇又見二憲敎類典一

〔御役所持場町法改正一件留書〕町奉行支配
囚獄石出帶刀、〇中略牢屋同心五十人、〇中略同斷八人、〇中略牢屋下男三十八人、〇中略小石川養生所肝煎小川又右衛門、〇中略町年寄樽與左衛門、〇中略町年寄奈良屋市右衛門、〇中略町年寄喜多村彥右衛門、〇中略地割役樽屋三右衛門、〇中略本所道役淸水八郎兵衛、〇中略同宮城善兵衛、〇中略町馬醫落合十郎左衛門、〇下略

位階　待遇

〔東職紀聞一〕町奉行二人　從五位下
或曰、當職往古布衣、寬永以後敍二五位一云也、相傳云、當職巡二失火之處一加二下知一則格准二若年寄一也、

〔吏徵上布衣以上〕町奉行二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　三千石高

〔明良帶錄後篇〕江戶町奉行
享保之度、大岡越前守忠相は、元文元年寺社奉行に昇る、古今珍敷事也、〇中略此場は二十年之勤功にて御加增、又は御小性組番頭へ昇る、是は當時之通例也、

〔靑標紙三編〕一町奉行廿年勤むる時は、五百石之御加增被レ下事也、近來根岸肥前守〈〇鎭衛〉小田切土佐守〈〇通年〉筒井伊賀守〈〇政憲〉は、此御加增あり、榊原主計頭〈〇忠之〉は、十九年目に大目付に成りて此事なし、

俸祿

〔吏徵別錄上布衣以上〕町奉行　寛文六年丙午七月廿一日、御役料千俵、天和二年壬戌四月廿一日御役料止、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黒書院江出御、被為成、御役人被為召、御役料被下候覺、○中略

一千俵　町奉行

〔憲廟實錄四〕天和二年四月廿一日、諸役人の役料を加祿となして給る、○中略町奉行○中略千俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略町奉行三千石以下七百俵、

〔享保通鑑八〕享保八年六月十八日、今日諸役人一役ゟ一人づゝ可致登城ニ付、出仕有之候處、於芙蓉之間老中列座被仰出之趣、水野和泉守被申渡、御書付二通出候而、向々江寫取候由、御書付之趣、諸役人役柄ニ不應小身之面々、前々ゟ御役料被定置被下候處、知行高下有之故、今迄被定置候御役料にては、小身之者、御奉公續兼可申候、依之此度御吟味有之、役柄ゟ其場所不相應に小身に而御役勤候者は、御役勤之內、御足高被仰付、御役料增減有之、別紙之通相觸候、此旨可申渡旨被仰出候、

但此度御定之外、取來候御役料は其儘可被下置候、○中略

三千石ゟ內は三千石可被成候　町奉行○又見憲教類典

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺○中略

役宅及用途

町奉行

一金貳千五百兩宛
　高五千石以上之者江は半減
但御切米高三千俵以上之者江は不レ被レ下、
　同千五百俵以上之者江は半減〇又見二嘉永明治年間錄一

〔町御奉行年表〕町御奉行所、南中北ト在二三所一、中御奉行所今ノ北御番所是ナリ〇中略南〇中略北昔北御番所ハ、錢龜橋ノ北土手ニ在リ、今稻荷宮ノ祠ノ處ナリ。

〔職掌錄〕町奉行
御役宅、數寄屋橋御門内貳千六百貳拾六坪餘、之を南組といふ、呉服橋御門内、貳千五百六十八坪、之を北組といふ〇又見二吏徵一

〔江戸砂子〕町御奉行兩御番所　すきやばしの内　ときはばしの内

〔東職記聞〕町奉行二人
代々記曰、慶長九年、以二米津勘兵衛、土屋權右衛門兩人一被レ補レ之、米津氏署、今之數寄屋橋門内、號二之南方一、土屋氏署、今之鍛冶橋門内、號二之北方一、乃今岩邑邸也、元祿十五年八月增二一員一、以二丹羽遠江守一被レ補レ之、丹羽氏署、今之常盤橋門内、享保四年正月、坪内能登守辭レ職之後復二二人一、坪内氏辭レ職以來、署二當邸署一〇鍛冶橋也、

〔市尹秘錄〕町奉行所始之事
一江戸町奉行所之儀、年月不レ知、神田與兵衛、初而御役被二仰付一、呉服橋御門内錢龜橋南角、當時秋元但馬守屋敷有レ之場所、御役所之由、神田與兵衛跡、山岡助兵衛、又は岸助兵衛と兩樣に書留有レ之、右之者相勤、慶長五年之頃、關ヶ原御陣に付、江戸御發駕之節、板倉四郎左衛門江、御使番加藤喜左衛門差添、町中仕置相勤候樣被二仰付一、夫より彥坂小刑部、青山常陸助、内藤修理亮迄、壹人勤之處、慶長十三申年、町奉行兩人に被二仰付一、八重洲河岸に御役所出來、南之方土屋權右衛門、北之方

米津勘兵衞と南北に相分、其後慶長之末ゟ元和五未年迄之間、子細不レ知、南奉行島田彈正忠壹人ニ而相勤候處、堀式部少輔北奉行被二仰付一、猶又奉行兩人ニ相成、明暦三酉年、北之方石谷右近將監、南之方神尾備前守勤役之節、右御役所燒失致し候剋、八重洲河岸御役所相止、町奉行壹人ニ而相勤、寛文元丑年、村越長門守勤役之節、渡邊大隅守御役被二仰付一、如レ元兩奉行ニ相成り、常盤橋御門内江御役所出來、長門守右御役所江引移、有來之御役所、大隅守江相渡候趣ニ相見、元祿十一寅年、保田越前守、松前伊豆守勤役之節、兩奉行所燒失いたし、以來八重洲河岸ニ而は、如何に被二思召一候由ニ付、伊豆守御役所、鍛冶橋御門内江場所替被二仰付一、同十五午年、保田越前守、松前伊豆守勤役之節、丹羽遠江守新規ニ町奉行被二仰付一、鍛冶橋内坂部三十郎屋敷被二召上一、御役屋敷に相渡り、是より三奉行所に相成候處、常盤橋内御役所、寶永四亥年、松野壹岐守勤役之節、御小性本多兵部少輔江被レ下、右代り數寄屋橋御門内堀大和守屋敷被二召上一、御役所に相成り、其後鍛冶橋内新規奉行所、享保二酉年、中山出雲守勤役之節燒失致し、出雲守依レ願、前書本多兵部少輔江被レ下候、常盤橋内以前之御役屋敷、此節又候奉行所に相成り、同四亥年、鍛冶橋内御役所、坪内能登守勤役之節、病氣に付御役御免被二仰付一、右奉行所相止、如二前々一町奉行兩人に相極ル、

　御役所坪數之事

南御役所

一貳千六百六坪餘、外ニ公事人腰懸ケ九拾四坪、

內

　建坪千貳百七拾八坪、外ニ腰懸ケ九拾四坪、

　御役所御入用金之事

南御役所附町屋敷、壹ヶ年地代、

一金五百五拾八兩壹分餘

一淺草福井町　一神田花房町　一下柳原同朋町　一神田松枝町　一靈岸橋際請負地

右屋敷之儀ハ、元養生所附町屋敷之内ニ有之處、寶暦二申年御役所附ニ相成、尤町年寄取扱ニ而、月々相納候事、

〔有章院殿御實紀九〕正德四年九月十二日、町奉行松野壹岐守助義、坪内能登守定鑑、中山出雲守時春に、金二百兩、榑木八千挺給はり、官宅修理の料とせらる、

〔教令類纂二集六十七〕寶暦四甲戌年二月

町奉行江

公役金、其外町奉行取扱候金銀之分、當時有高不殘御金藏へ相納、別段金貳百兩、從御金藏受取置、少分宛之入用は、右金を以相拂、有高過半減候ば、遣拂之譯書付、御勘定所へ差出、又々請取置可被申候、金高之入用有之節は、其譯書付差出、前條貳百兩之外に、御金藏ゟ受取可被相渡候、此以後取立候分は、其度々御金藏へ相納可被申候、

但翌年に至り、一ヶ年限り元拂勘定帳内譯委細に認、諸向之通り御勘定所へ可差出候、

一兩役所附過料幷闕所金之儀は、御金藏へ相納に不及、只今迄之通、諸入用等、右之内ニ而取計、勿論御役宅修復入用も、右金を以相拂、勘定帳之儀、前條之通委細に相認、翌年御勘定所へ可被差出候、

一與力同心拜借金之儀は、有金ニ而は無之候間、納之節に有高に結可被申候、尤從當年年賦返納之積可被申渡候、

右之通相心得、御勘定奉行可被談候、

寶暦五乙亥年四月

御勘定奉行へ
御勘定吟味役へ

金二千兩餘……………………町奉行方〇中略

先達而被仰出も有之候通、御勝手向不取〆、諸向も相ゆるみ候故、御入用も相増、御遣方御不足に相成候、依之當亥年ゟ來々丑年迄三ヶ年、右金高にて一ヶ年之御用相濟候樣致、勘定取計可被申候、委細之儀は、御勘定奉行可被談候、

右之通向々へ申渡候間、被得其意可被談候、

〔市尹秘錄 一〕御役所御入用金之事

一御役所御入用之內、筆、墨、紙、蠟燭、燈油、焚炭、筵、桶、挑灯、細引、御仕著等は、兩御役所牢屋兩溜御入用之一口に御金藏より請取候處、寶曆五亥年より、一ヶ年二千兩に被仰出候得共、囚人之高に寄、御入用增減有之候事故、明和八卯年より、御入用不足之分は、臨時と書出候樣被仰渡、寬政五丑年より、一ト御役所金三百三拾兩宛に御定被仰出候得共、今以牢屋兩溜御入用御改正無之候間、打込前々之振合を以、一ヶ月限勘定仕上、御金請取候間、御役所御定高より御入用相減候而も、返納金は無之候事、

但御金藏納金は、欠所過料幷地代、其外何に而も、取上候金錢之分は、不殘御金藏納に相成り候事、

一御役所御入用、御小買物、與力同心御褒美御手當金、人足賃、其外御入用、古來より定高無之、欠所過料幷地代金錢を以遣拂、殘金は御役所に差置候處、寬政五丑年より一ヶ年千三百七拾九兩に御定高被仰出、一ヶ年兩度に御金請取、殘金有之候得ば上納いたし、不足之節は、別段御金藏より請取、且臨時御入用は、御斷之上請取候事、

任免

用部屋取扱御役所入用

一金貳百兩

右は御金藏より毎年二月八月、兩度に百兩宛請取候事、

〔藩翰譜五板倉〕天正十六年、徳川殿〇家康駿河の國府に移り任せ玉ふに至て、多くの御家人の中を撰び玉ひて、勝重〇板倉して此所の町奉行に任せらる、〇中略十八年、關東へ移り玉ひても、職元の如く、〇下略

〔慶長見聞集一〕江戸の川橋にいわれある事

文祿四年の夏の比、此橋もとにて錢がめを堀出す、永樂京錢打まじりて有りしを、四日市の者共、此錢がめを町の兩御代官板倉四郎右衛門殿〇勝重彦坂小刑部殿〇元正へさゝげ申たり、夫より此橋を錢がめ橋と名付たり、

〇按ズルニ、本文ニ代官トアルハ則チ町奉行ナリ、當時老中ヲ奉行トモ云ヒシ故ニ、町奉行ヲバ代官ト稱セシナラン、又彦坂元正ノ町奉行タリシ年月詳ナラズ、松園雜記ニハ、家康ノ江戸ニ移リシ時、勝重ト兩人ニテ就職シタリト云ヘリ、

〔家忠日記増補十六〕慶長五年九月一日、板倉四郎右衛門尉勝重ヲシテ、城下〇江戸ノ町奉行ヲ司ラシム、是ヨリ先キ天正十八年ヨリ、江戸ノ町奉行ヲ勤ム、其初駿州府中ノ町奉行ヲ司ル、

〇按ズルニ、諸御役代々記、市尹秘錄、町奉行前錄等ニ、神田與兵衛、岸助兵衛ノ二人ヲ江戸町奉行ノ始トスレドモ、當時ノ史ニ別ニ所見無キヲ以テ取ラズ、

〔家忠日記増補十八〕慶長六年、此年青山常陸介忠成を江戸町奉行になさしめ給ひ、關東諸奉行を兼役ス、〇下略

〔藩翰譜五米津〕勘兵衛尉由政、〇中略同〇慶長九年、關東の町奉行職を承り、寛永元年十一月廿二日、六十

二歳にして死す、

〔大三川志 六十七〕慶長十八年十月八日、初メ坂崎成正ガ侍童罪有リ、家士ニ命ジテ是ヲ戮ス、成正ガ姪宇喜多左門是ヲ聞キ、侍童ガ仇ヲ報ゼント欲シ、其家士ヲ殺ス、〇中略左門ハ米津勘兵衛由政土屋權右衛門爲昌、〇町奉行二人並コレヲ捕ヘ、〇中略成正ニ送ル、

〔寛政度町法改正被仰渡書〕町奉行前錄

神田與兵衛、〇政時 岸助兵衛、〇正久 板倉四郎右衛門、〇勝重 彥坂小刑部、〇元正 青山常陸介、〇忠成 內藤修理、〇清亮

中

慶長、土屋權右衛門、　元和二辰年、嶋田彈正忠守利、〇御役代々記作二利政

寛永八未年、加々爪民部少輔忠澄、〇御役代々記作二忠隆　寛永十七辰年、神尾備前守元勝、

寛文元丑四月、渡邊大隅守綱貞、　寛文十三丑正月、宮崎若狹守重成、

延寶八申二月、松平隼人正重冬、〇御役代々記作二忠冬　延寶八申八月、甲斐庄飛驒守正親、

元祿三午十二月、能勢出雲守賴相、　元祿十丑四月、松前伊豆守嘉廣、

同十六未十一月、林土佐守忠朗、　寶永三酉正月、坪內能登守定鑑、

右御役所享保四止

北

元祿十五午八月、丹羽遠江守長守、　正德四午正月、中山出雲守時春、

享保八卯七月、諏訪美濃守賴篤、　享保十六亥八月、稻生下野守正長、元文武鑑作正武

元文三午二月、石河土佐守政朝、　延享元子六月、能勢肥後守賴一、

寶曆三酉四月、依田豐前守政次、　明和六丑八月、曲淵甲斐守景漸、

天明七未六月、石河土佐守政穎、〇御役代々記作正武
天明七未九月、柳生主膳正久通、
同八申九月、初鹿野河內守信興、
寛政四子正月、小田切土佐守通年、
文化八未十二月、永田備後守正通、
文政二卯四月、榊原主計頭忠之、
天保七申九月、〇同八酉七月、改名安房守大草能登守高好、
天保十一子二月、遠山左衛門尉景元、
天保十四卯年二月十四日、阿部遠江守、〇正藏
鍋島內匠頭、〇直孝

南

慶長、米津勘兵衛由政、
寛永八未年、堀式部少輔直之、
寛永十二亥十二月、酒井因幡守忠知、
同十六卯七月、朝倉石見守在重、
慶安四卯六月、石谷左近將監貞清、
萬治二亥三月、村越長門守吉勝、
寛文七未閏二月、嶋田出雲守守政、〇御役代々記作忠政
延寶九酉四月、北條安房守氏平、
元祿六酉十二月、川口攝津守宗恒、
元祿十一寅十二月、保田越前守宗易、〇御役代々記作宗郷
寶永元申十月、松野壹岐守助義、
享保二酉二月、大岡越前守忠相、
元文元辰八月、松波筑後守正春、
元文四未九月、水野備前守勝彥、
同五申十二月、嶋長門守祥正、〇御役代々記作正祥
延享三寅七月、馬場讃岐守尙繁、
寛延三午三月、山田伊豆守利延、
寶曆三戌正月、土屋越前守正方、
明和五子五月、牧野大隅守成賢、
天明四辰三月、山村信濃守良旺、
寛政元酉九月、池田筑後守長惠、
寛政七卯六月、坂部能登守廣吉、
同八辰年十月、村上肥後守義禮、
同十午十一月、根岸肥前守鎭衛、
文化十二亥十一月、岩瀨加賀守氏記、後伊豫守
文政三辰三月、荒尾但馬守成章、
文政四巳正月、筒井伊賀守政憲、初和泉守
天保十二丑年四月廿八日、矢部左近將監定謙、

吟味物調役

天保十二丑年十二月廿八日、鳥井甲斐守、○忠耀　天保十五辰年九月十五日、跡部能登守、○良弼
弘化二巳年三月十五日、遠山左衛門尉、○景元
○按ズルニ、諸御役代々記ニ載セタル町奉行モ、排列ノ順序全ク本書ニ同ジ、然レドモ南北中ノ文字ヲ記入セズ、市尹要覽ニ載セタル町奉行目錄ニハ、米津勘兵衛ヨリ島長門守ニ至ル迄ヲ北之方トシ、土屋權右衛門ヨリ坪内能登守ニ至ル迄ヲ南之方トシ、別ニ新規ト題シテ、丹羽遠江守ヨリ石河土佐守ニ至ル迄ヲ列記セリ、

〔嘉永明治年間錄一〕嘉永五年壬子　今年有司鑑抄
江戸町奉行　井戸對馬守覺弘、池田播磨守賴方

〔嘉永明治年間錄十七〕明治紀元戊辰　德川家有司鑑抄
町奉行
慶應三丁卯台命　北番所　高千五百石餘　小出大和守
明治元戊辰台命　南番所　駒次郎隱居　黒川近江守
慶應三丁卯台命　外國奉行並兼勤　朝比奈甲斐守

〔吏徵附錄廢職〕町奉行吟味物調役　百五十俵高　御役扶持貳拾人扶持　寛政八年丙辰三月十七日始置、文化八年辛未八月廿八日廢

〔評定所格例〕寺社奉行町奉行　支配留役之事
寛政八辰年三月十七日
支配勘定、評定所留役助、雨宮雲九郎
支配勘定　野澤宇太郎
御徒目付　田島清三郎

大塚龜之進

右町奉行支配留役被仰付候、席之儀は、寺社奉行支配留役之次、評定所留役之上たるべく候、

右之通申渡候間、可被得其意候、右御書付、

松平伊豆守殿信明〇町奉行御勘定奉行江御渡、〇又見天保集成絲綸錄

〔天保集成絲綸錄 七十六〕寛政八辰年三月

小田切土佐守〇町奉行

坂部能登守〇同上江

此度各支配留役兩人宛新規に被仰付候、勤方之儀は、都而寺社奉行、御勘定奉行支配留役に准じ、諸御用向爲取扱可被申候、尤牢問有之節は、たとへ寺社奉行、御勘定奉行掛之四人に而も、一人宛は、立合之心得にて罷越候樣可被致候、其外勤向之儀は、猶又得と取調可被相伺候事、

〔評定所格例〕寺社奉行町奉行 支配留役之事

寛政八辰年四月廿九日〇中略

町奉行吟味物調役御勘定

右〇中略町奉行支配留役之儀、向後前文之御役名に相改可申候、〇又見天保集成絲綸錄

〔市尹秘錄 一〕吟味方勤方之事

寛政十午年書出(中略)評定所式日立合公事出入は、當時吟味方ニ而は取扱不申、調役方ニ而取計申候、〇中略

朱書一寛政八辰年、町奉行支配吟味者調役被仰付、牢問之節に調役も罷越候處、御役所御用向多く候ニ付、同十午年十二月、松平伊豆守殿信明〇江伺之上、以來は御用透を見合罷越候樣相成候事、

與力同心名稱

〔運歩色葉集 與〕與力ヨリキ

〔玉海〕治承四年九月十一日庚申、上總國住人介八郎廣常、幷足利太郎故利綱子云々等餘力、其外隣國有

勢之者等、多以與力。○中略又熊野湛增、猶事惡逆、別當範智與力了云々、

〔武家名目抄 職名部附錄十七〕按、與力は、もと與力同心の意なれば、何人にまれ同意して力を合する人をいへり、中比よりや、其品定まりて、人の家に附屬せらるゝ士の稱となりて、被官と同じさまになれり、織田豐臣家の頃に至りて、附庸の大名をもすべて與力とよべり、後の世には大名に與力といふ名をとゞめられたれば、たゞ侍大將、足輕大將などに附屬せらるゝ騎士の稱とはなりたるなり、

〔藩翰譜 一尾張〕或人曰く、初め大御所○德川家康の御時に、右兵衞督殿○德川義直常陸介殿○德川頼宣同じく五拾萬石の地を參らせらる、其餘隣國の人々をつけらる、是を寄。騎。衆。と申しゝなり、後に常陸介殿紀伊國へ移り玉ふ時、加へられて五拾五萬石餘を領し玉ふ、此時三河國にて、寄。騎。の衆に附られしは皆國に留りぬ、

〔運歩色葉集 乎〕同心

〔武家名目抄 職名部附錄八〕同心

按、同心は與力の意と異なることなし、家々によりて與力とも、同心ともとなへわかれども、その實はみなおなじ、但織田豐臣家の比にいたりては、與力には大名あれど、同心といへるには、さばかりの大身はあらざりしなり、後の世には騎馬の同心をば與力と稱し、歩同心をのみ同心といふことゝなれり、しかれども家によりては、騎士をもなを同心と稱するかたもあるなり、

〔武家職號〕與力同心

中古與力同心と云しは、莊園の主、其所の地侍など云者の守護の被官にはあらずして、しかも兵役ある時は、近隣の守護人に志を通じて、被官同意に力を合せ與するを與力共、同心とも呼

付たり、今世に云與力同心とは、其品異なるにや、軍鑑などには、侍大將に屬し預らるゝ一騎武者を組子共、同心ともいへり、當世も是と同じく、其物頭に屬し預らるゝを與力同心といふ、但與力は馬上同心とし、それに付を歩行同心といふ歟、是は足輕と同じ事なるべし、

〔翁草百四十〕與力同心の號、中古は大家の旄下に屬する大名を誰某の與力と云、諸士の隊長に從ふ者を同心と云、此同心の中に名有士餘多有、或は馬場同心、山縣同心など云り、實にも與力同心の字義左もあるべき名目也、御當家〈○德川〉御治世に至て、組付の者の通稱となる、當時庶組與力と稱する物は、御目見以下の平士、同心は歩卒の稱也、去れども以前は幕府の士の二男三男或は弟を與力に被召出たる事、徂徠が口口にも見えたり、其子孫今も與力に無にしも非ず、其後は諸家の浪人、或は鄕士の類を被召抱、今以一統に其風俗也、右之類御譜代は稀にて、多分御抱入なれば、其子家督相續はならざれ共、親々の勤功を以、其跡へ嫡子を御抱入られ、各數代相續す、又不慮の事にて、與力幷同心闕出來れば、仲間の者の子弟を其闕へ召出され、又先住の妻子路頭に立つ類は、其親族を召出されて、其妻子を撫育するも有、是皆時の頭の指揮に任す、又與力同心御宛行の事は、御藏奉行へ、時の頭の證文を以、我等へ御預ヶの與力一人分高貳百石、四ッ物成の積を以、春御借米何程請取り申文言也、同心准之、御代長久に仍、元祿の頃、稍花奢諂諛世に行れて、〈○中略〉仍其砌嚴令有て、諸士の風大に改り、一旦清廉に成しが、亦其規矩亂て、以前よりも諸士の心卑陋に成たり、然れ共勤柄は段々品宜成て、以前は御城勤番與力計、常上下にて、御用場の與力は略服を著せしが、近年諸國一統に與力上下勤めに成、又七夕八朔白帷子、年頭歳暮計熨斗目著用せしに、今は恐悅、上巳、其外式々、御直參同樣に與力も熨斗目著用す、又御家人拜借金被仰付節も、高貳百石の割金を拜借す、直參の面々と差別なし、其上近年は嫡子に見習勤被仰付、別に御宛行は被下ざれ共、諸御用諸役、父子立並て勤、其體御譜代の勤に異な

暇員暇享

らず、斯く勤の品は能なれ共、家僕を召置事、以前とは大に異也、四五十年前迄は、銘々若黨を召仕ぬ者はなし、出替り時には、帯刀奉公人は袴を著し、先主を中立目見に來る、奴僕とも違ふ故、小玄關などにて目見へを請る、然共大方は相應に譜代者有て、加樣の新參を抱る者は寡し、外に中間二人歟、三人は召仕ひぬ、余〇神澤與兵衛抔も其通也、當時は若黨を略し、中間も二人程に乞濟し、其餘御用出役之時は、皆日雇にて濟す也、與力體の輕き者と雖、凡騎士には上下十人無ては軍役足らぬ也、家中にては、主人の借人と云事もあれども、公儀にはなし、尤小身にて馬を持事不レ克は、厩懸りの者は略し、又若黨一人は略しても、責て軍役の半減五人ほどは召置べき事也、石黑三十郎許は、若黨兩人、中間五人召仕ひぬ、其外も相應に人を仕ひ、只今の風俗の如くには非ず、當時は加樣の肝要の事を略するを儉約と心得、銘々が無益の奢は改る心更になし、〇中略白川侯〇松平定信御補佐に至て、追々庶組の與力御祟有て、江戸にては石河土佐守組與力吉田忠藏、京は池田筑後守組與力木村九郎兵衛、妻木六郎兵衛、大坂は松平石見守組與力安井新十郎、同心市川嘉右衛門、各永の御暇を下され、其徒を恐愼しめ給ふ、尤御吟味に及れば、一統の難義眼前なれば、夫となく只勤方不レ宜との趣にて、銘々御暇を被レ下、故に一統に不レ及、夫に當る者は貧乏之鬮を取たるごとく不レ及二是非一、其餘は無レ恙こそ御憐愍の仁政なれ、さればにや今度京都の大變に、與力同心悉く類燒しぬれ共、拜借の御沙汰無も、是迄の不正を咎させ給ふなるべし、適潔白の者無にしもあらね共、一統の御咎は遁れやらず、是非なき次第也、總じて三がの津、其外諸國にある、勤番一通りを務る、他組の與力同心には此憂なし、御政務に預る町組には、古來折々この變あり、

〔吏徴上布衣以上〕町奉行二人　一組與力廿五騎、同心百人、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一町御奉行、○中略與力貳拾五騎、同心百貳拾人宛、

〔市尹要覽 一〕町奉行組與力知行所、同心御切米、井御取立之次第、

一町奉行組與力之儀は、天正十八年庚寅秋、御入國之前より、慶長年中、板倉四郎左衞門勝重、三州より組頭、

樹木庄左衞門　辻半九郎　堀治兵衞　吉田五左衞門　依田作內

布施與左衞門　埒野市郎左衞門　吉田孫九郎　小笠原彌一右衞門

鈴木善大夫

右拾人召連、直に四郎左衞門組にて、町與力相勤候之處、其後年月不ㇾ知、相增五十騎に成る、多分は奈良七騎より被二仰付一候由、承傳申候、

〔市尹秘錄 一〕組與力同心始之事

一慶長五年之頃、板倉四郎左衞門○勝重、町奉行被二仰付一候節、三州より與力拾人召連、同人組相勤、同心人數之儀は、書留無ㇾ之不二相知一、其後町奉行兩人被二仰付一候節に候哉、年月不ㇾ知、與力五拾騎に相成、多分は奈須之者之內より被二仰付一候由、同心之儀は、是又書留等不二相見一候得共、寛文二酉年、村越長門守、渡邊大隅守勤役之節、同心增人被二仰付一、壹組百人宛に相成、天和二戌年、北條安房守、甲斐庄飛驒守勤役之節、同心八十人減少被二仰付一候處、同心不足ニ而御用差支候ニ付、元祿九子年、川口攝津守、能勢出雲守勤役之節相願、相州三崎走水之御番所より、同心五拾人增人被二仰付一、壹組八十五人宛相成、元祿十五午年、新規に丹羽遠江守町奉行被二仰付一、三番所に相成候節、遠州荒井井相州三崎走水御番所相止、右與力同心被二召呼一、遠江守組に被二仰付一、其上保田越前守○宗郷組より、與力三人、同心拾人、松前伊豆守組より同斷割入に相成、一組與力貳拾貳騎、同心七拾五人宛に相成、正德三巳年、松野壹岐守、坪內能登守、丹羽遠江守勤役之節、相願、三組江與力三人、同心

拾五人、小普請より御入人被仰付、壹組與力貳拾三騎、同心八拾人に相成、享保四亥年、坪內能登守御役御免、如以前町奉行二組に被仰付、能登守元組與力四人、同心四拾人、大岡越前守、中山出雲守組江增人に相成、其外之與力同心は、御先手組江割入被仰付、從是町奉行壹組、與力貳拾五騎、同心百人に相極候處、延享二丑年、寺社門前町屋之分、町方支配に被仰付、御用多に相成り候ニ付、同心共御加扶持被下候歟、又は同心拾五人宛御增被下候樣仕度旨、同三寅年、馬場讃岐守、能勢肥後守相伺候處、當時相勤候同心共子供之內ニ而相應之もの遂吟味、壹組江貳拾人宛抱入に可致旨、堀田相模守殿御書付を以被仰渡候ニ付、此節より增人相始り、壹組百貳拾人宛に相定候事、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕天和二壬戌年十一月十一日

覺

町與力同心、數年作法風俗不宜候よし、兼々被及聞召候間、作法風俗能樣に急度可申付候、數年之儀に而、急に風俗難改存候はゞ、何も御扶持を放し、新規に召抱可申候、總而同心も多過候由被爲聞召候、幸本所ニ罷在候人數、一組ニ而四拾人程、兩組に而八十人へらし可申之由被仰渡候、以上、

〔寶曆集成綿綸錄二十四〕延享三寅年十二月

町奉行江

兩町奉行組同心、人數不足ニ付、願之通御增人申付候、一組貳拾人宛、當時相勤候同心共子共之內に而、相應之者遂吟味抱入に可被致候、尤部屋住之儀に候間、父共ゟ高減じ候而、御切米二拾俵二人扶持宛被下候、且又父共一所に罷在候事に候之間、町屋敷は不被下候條、可被得其意候、御勘定奉行可被談候、

〔有司勤仕錄〕町奉行　町方非常之撿使并捕者等、與力同心勤之、

〔市尹秘錄 一〕與力同心役々勤方大概之事

一年番取扱方之事　一本所見廻り勤方之事　一養生所見廻り勤方之事　一牢屋見廻り勤方之事　一吟味方勤方之事　一赦帳撰要方勤方之事　一高積見廻り勤方之事　一町火消人足改勤方之事　一風烈廻り勤方之事　一例繰方勤方之事　一町會所勤方之事　一江戸向橋懸勤方之事　一古銅吹所懸勤方之事　一隱密廻り勤方心得之事　一定町廻り勤方心得之事　一臨時廻り勤方心得之事　一與力同心諸出役届等之事

年番取扱方之事

寛政十一未年書出

一御役所御入用御定高金、幷隱賣女、博奕一件、取上地面地代、其外欠所過料等取扱申候、〇中略

一兩御役所筆墨紙、其外牢屋兩溜御入用、毎月世話番之町年寄宅江雙方年番下役罷越、立合勘定致し、米金請取證文等者、御世話番之方江差上、米金相渡候節、雙方下役立合、町年寄幷藏宿江罷越、夫々相渡申候、〇中略

赦帳撰要方勤方之事

寛政十一未年書出〇中略

一御祝儀御赦被仰出候得者、前々ゟ御仕置に相成候遠嶋以下御免無之者、御家人雜人部を分、科書帳面相仕立、御進達之帳面爲認差上申候、〇中略

一撰要類集調方之儀は、書付袋物御用部屋ゟ請取、撰要類集に可綴分は、書抜溜置部分仕、追而淸帳仕立申候、〇中略

高積改勤方之事

寛政十一未年書出

一高積改勤方之儀は、左之通之場所三口に分け、壹ヶ月三度不時に相廻、定法之通積置出帳等無之樣申付、御屆之儀は書面ニ而申上候、○中略

高積改場所

一住吉町裏河岸　一難波町裏河岸　一難波町河岸　一高砂町河岸　一久松町

右は前々ゟ榜示杭無之、高積四尺之場所に御座候、○中略

例繰幷帳面方勤方之事

寛政十一未年書出

一例繰勤方之儀は、諸帳面相調、重科輕科等部分仕、書抜致置、御吟味書、黄紙下ゲ札案、被仰渡書文言等、御渡被遊候得ば、右書抜帳面ゟ類例繰出差出申候、○中略

隱密廻り勤方之事

寛政十午年書出

一御頭樣善惡幷御家中如何敷取沙汰及承候得ば申上候事、○中略

一武家方町方は勿論、遠國等之儀に而も、不依何事於御當地風說强く申觸し候儀は、不拘眞僞申上候、尤町方ゟ訴出候儀は不申上候、

一三芝居見廻り、衣裳等御法度之品相用候歟、倘又如何敷新狂言に取組仕候はゞ、早速申上、御差圖次第取計候事、

一新吉原町燈籠、俄、花植等之節、其外平日も折々見廻り候事、

一忠孝者、幷長壽之者及承候得ば申上候事、○中略

定町廻勤方之事

天明八申年三月、山村信濃守申渡、

一葵御紋附著用之事
一小間物類、其外諸道具、葵御紋附之事、
一諸色新規物可ㇾ改事〇中略
一當時之儀、讀本造候事、
一總町中善惡之事〇但書略
一我等身之上之儀も、善惡取沙汰之事、
一我等家來共は勿論下々至迄、私曲ヶ間敷儀取沙汰、幷町中ニ而馳走を請、押買等がさつヶ間敷事、〇中略
一徒黨ヶ間敷儀に而、人集之風聞有ㇾ之候はゞ、早々可ㇾ申聞ㇾ事、〇中略
不ㇾ依ㇾ何事、隨分聞出候樣心懸可ㇾ申聞ㇾ候、〇中略
申三月

〔憲教類典 五ノ十四 町奉行〕町奉行所役人手前之扣

一町廻り之事、毎年十月より三月迄、但正月より晝夜入替、無ㇾ間相廻候、糀町、神田、芝、淺草筋、右四ヶ所へ罷出候節は、中番より一口江、與力一人、同心五人づゝ、兩組より出ㇾ之、二口江廻り候節は、與力一人同心十人づゝ出ㇾ之、雪降雨天之日は、不ㇾ及ㇾ相廻、尤風吹候之日は、無ㇾ油斷ㇾ相廻候事、
一山王祭禮之節役人之事、與力十人同心三十人づゝ、兩組より出ㇾ之、前後之義は、隔年に相勤候事、
一中川御番所御用船之事、小網町之役に而出ㇾ之、
一御朱印傳馬、駄賃傳馬觸之事、

〔江都管鑰秘鑑 六〕牢屋見廻りの與力勤方御改正の事

覺

一向後與力牢屋へ日を不定、一兩日も間を置、又は隔日、又は病人など有之節は、其時の樣子に寄、二三日も相續見廻り候樣に仕り、可然奉存候、以上、

享保四亥年四月

中山出雲守〇町奉行
大岡越前守〇上同

右之書付、四月三日、水野和泉守殿へ進達しけるに、同十九日、彌右之趣に與力どもへ申付候樣、和泉守殿被仰渡ける、依之同月廿二日夜、出雲守列座にて、當正月ゟ四月まで、牢屋出役の與力八人へ、其段越前守申渡し、書付の寫をそへて遣しける、

〔御當家令條二十二〕町奉行所役人手前之扣

一同心捕者之事、刀脇差帶之罷在候者召捕候はゞ、道具一腰づゝ、一之手二之手共に被下之、小盜人召捕候節は、一之手計江被下之、右之節、手負申輩有之候へば、爲御褒美御金被下之、御納戶ゟ請取候事、

一初而捕者仕輩、刀にても脇差にても被下之、無撿使呼使に罷越候節、すまひ候者召捕候分にては、道具不被下之候、但其時之首尾により被下候儀も有之事、

〔文露叢三十三〕正德二壬辰年八月五日、去ル廿六日ヨリ、所々藏々米油炭等買置御吟味トシテ、町與力十二人、同心廿四人被仰付、

〔與力加藤又左衞門御役前錄〕文化十癸酉年四月廿七日御番入〇與力見習勤無之

加藤恒太郎花押
西貳拾歲

文政元戊寅年十二月廿七日又左衞門と改

一風烈廻

右者文化十酉年十二月廿一日、御頭永田備後守〇北町奉行正道殿、來戌年中可相勤旨被仰渡、戌年十二

月廿五日迄、

一傳奏出役

右者文化十一戌年三月、公家衆參向中出役御用相勤候ニ付、爲御褒美銀貳枚被下置候段、備前守殿御差圖之旨、同年五月廿七日、備後守殿被仰渡候、

一高積改

右者文化十一戌年三月晦日、備後守殿被仰渡、同年十二月廿五日迄、

一町火消人足改

右者文化十一戌年十二月廿五日、來亥年中可相勤旨、備後守殿被仰渡候、○中略

一町々之内下水外江商賣もの等差出置、往來之障ニ相成候場所取調掛、

右者文政二卯年三月十日、人足改も兼可相勤旨可被仰渡處、備後守殿病氣御引込中ニ付、御直ニ被仰渡有之之積ニ可相心得旨、用人關丈之進を以書付御渡、○中略

一御仕置例繰方

右者文政三辰年十一月朔日、右可相勤人足改も是迄之通兼可相勤旨、御同人○北町奉行榊原主計頭忠之被仰渡候、

一町火消人足改例繰方

右者文政三辰年十二月廿五日、來巳年も引續可相勤旨、主計頭殿被仰渡候、○中略

一文政八酉年四月廿五日、於吹上公事上聽有之、右出役相勤候處、此度者年經候而被仰出候儀故、改正同樣ニ而別而骨折、御當日ニ至、御場所柄、兼而之申合方行屆、都合能無滯相濟、出精相勤候故之儀、別段之趣意を以、出役六人江銀壹枚宛被下置候旨、同年五月二日、主計頭殿被仰渡候、○中略

一猿屋町會所見廻

右者文政十二丑年二月十八日、可相勤人足改例繰方ハ差免候旨、主計頭殿被仰渡候、

一年番方助、江戸向定橋を兼、

右者文政十二丑年七月十三日、可相勤猿屋町會所見廻者差免候旨、主計頭殿被仰渡候、○中略

一日本橋燒失跡新規掛渡

右者文政十二丑年九月ゟ御普請ニ取懸附切骨折相勤候ニ付、爲御手當銀五枚被下置候旨、出羽守殿御差圖之旨、同年十二月廿八日向方掛ニ付、伊賀守殿被仰渡候、○下略

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年六月二日、鈴木藤吉郎市中米油潤澤掛ヲ命ゼラル、

六月二日、於南町奉行所、鈴木藤吉郎、江戸市中米油潤澤掛り、町方與力上席被仰付、

〔德川禁令考 十五 町奉行〕文久二壬戌年十一月廿二日

逮捕方ニ探偵夫ヲ驅役スル儀ニ付達書

町奉行江

覺

其方共組之者、手先に遣ひ候目明し岡引之儀に付而者、寛政度相達置候趣も有之候處、此達書今存セズ捕者等有之節、兎角右類之者を遣ひ候故、近來右之者共、權高に相成、諸向より賴を受、剩其身者働方不致、下引と唱候ものを遣ひ、追々多人數に至り、市中を煩し候者共も有之由相聞、以之外之事に候、一躰捕者之儀者、組之者自身手を下、捕方可致筈之處、畢竟等閑より手先を遣ひ候次第に至、或者風聞探索等も人傳に相任せ候故、下々之もの共心得違、如何之及所業候儀も可有之、以來右樣之流弊急度改革致し、精々取締方申付候樣可被致候事、

十一月

資給俸祿

〔吏徵 御目見以下〕町奉行組與力　給知二百石　本勤並御手當金二拾兩　見習銀拾枚　役上下、御抱場、

町同心　三拾俵貳人扶持高　北組三拾四俵貳人扶持十五人、三拾三俵貳人扶持五人、並高八十人、貳拾俵貳人扶持部屋住廿人、　南組三拾五俵貳人扶持二十人、三拾三俵貳人扶持五人、三拾壹俵貳人扶持七人、並高六十八人、貳拾俵貳人扶持部屋住廿人、　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

三十四俵二人扶持　御抱入場所　羽織袴　町年寄同心

三十三俵二人扶持　御抱入場所　羽織袴　同物書同心

三十俵二人扶持　御抱入場所　羽織袴　町同心

〔市尹秘錄 一〕與力給知之事

一組與力給知之儀、元和年中、支干不知、上總下總之內、幷武州下谷金杉邊にて、一人二百石宛、五十人江一万石被下置候處、其後金杉邊之給知、上野御神領に相渡、替地之儀は、下總國行德領之內に而被下置、元祿十丑年、上總國給知之內、二千石餘御用地に相成、猶又下總國香取郡之內に而替地被下置候、

但古來は、本文之通、與力一人二百石宛之處、當時は前々より之仕來に而、奉行取計を以、二百石以下其勤に應じ被下候、

一同心支配與力之儀は、右高低之者ども殘知之內にて、役料三十石宛相渡、南町奉行組は、坂部能登守勤役中より詮議方與力江役料二拾五石づゝ、是また殘知に而相渡候事、○中略

一元祿十五午年、丹羽遠江守、新規町奉行被仰付、三番所之節、一組與力二十二人宛に相成り、遠江守組は、八拾石宛御切米被下置候處、享保四亥年、大岡越前守、中山出雲守勤役之節、中番所坪內

能登守御役御免、古來之通、奉行兩人、與力五拾騎に被仰付、能登守元組與力は、御先手江割入に相成候ニ付、出雲守組は御切米被下候得共、與力人數古來之通に被仰付候上は、右御切米を御先手江割入之ものヘ被下、町與力之儀は、往古之通、不殘地方に而被下置候樣仕度旨申上候處、願之通被仰出候趣、御書付を以、井上河內守殿被仰渡候、

同心御切米之事

一組同心御切米之儀、古來より三拾俵貳人扶持宛被下置候處、南之方、正保慶安之頃、朝倉石見守、石谷左近將監勤役之間、捕もの依働、名前不知同心一人、七拾五俵御加增幷本間七右衞門と申もの、六拾俵御加增被下置、其後七右衞門儀は與力に御取立、一人は名跡斷絕いたし、同心御切米高、右兩人增俵之內、高百三拾五俵組付に被成下、年寄同心幷物書同心、役料に割渡候由、夫より天和年中、支干不知、北條安房守勤役之節、年寄二拾人江一人に五俵宛、物書五人江一人に三俵づゝ之積り相極、割餘拾三俵は差上候由、北之方、年月幷勤役之奉行不知、同心中村茂左衞門儀、前書同斷之依働、七拾五俵御加增被下置候處、寬文年中、支干不知、渡邊大隅守勤役之節、名跡斷絕ニ付、右御加增分組付に被成下、年寄同心貳拾人江爲役料、拾五人は四俵宛、五人は三俵宛相渡、物書同心は役料無之、尤此節は北奉行所出來不致以前に而、右大隅守は、古來南と唱候奉行所に而、書面之通相極候處、其後當時之北奉行所新規に被仰付、古來之南町奉行所は、坪內能登守勤役之節相止、右組同心取來候御切米、北組江振替に相成候儀有之、然處當時は北之方年寄同心不殘役料四俵づゝ、物書同心は南同樣三俵宛役料相渡、且又雙方共、年寄同心二人宛相增し、役料之儀も、南北仕來之通差遣、添物書同心十人宛出來いたし、南之方は役料一俵四分宛、北之方は金二分宛相渡候事、

一組二拾人增人之儀は、貳拾俵二人扶持宛被下置候事、○下略

組屋敷

〔市尹要覽 一〕覺

一町奉行與力知行之儀は、御入國以來、元和年中より、兩組與力五十人とも、不ㇾ殘地方にて被ㇾ下候ニ付、古來之通、兩組五十人に被二仰付一候間、與力知行之分は、往古より之通、不ㇾ殘地方に被二仰付一、唯今まで相勤候與力之內、御切米八十石取來有ㇾ之候、此切米、外へ被ㇾ遣候與力どもに被ㇾ下候之樣仕度奉ㇾ存候、以上、

亥〇享保四年　五月

中山出雲守〇町奉行
大岡越前守〇同上

下ゲ札

與力知行、先規より兩組一統に被ㇾ下候、與力ども銘々に知行分ヶ無二御座一候、地相分ヶ不ㇾ申候、組中一同に所務仕來候、

町奉行兩組與力五十人は、古來より地方にて被二下置一候、中山出雲守組は新規故、八十石づゝの御切米被ㇾ下候、此度坪內能登守元組與力、外へ割込に成候ニ付、取來候地方振替度旨、町奉行願ニ付、出雲守組與力地方、唯今まで取計り候御切米八十石づゝは、此度割入之能登守元組へ被ㇾ下候事、〇又見二有德院殿御實紀、市尹秘錄一、

〔市尹秘錄 一〕組屋敷始之事

一組屋敷之儀、元和年中、支干不ㇾ知、御城近邊に而可ㇾ被二下置一旨を以相願、八町堀法泉寺、願成寺、長應寺、三ヶ寺を被二召上一、與力同心江拜領被二仰付一候由、其後元祿十五年、丹羽遠江守新規町奉行被二仰付一、三奉行に相成候節、八町堀小濱佐右衞門、并御徒組屋敷、其外被二召上一、遠江守與力同心組屋敷に被二下置一候、

組屋敷坪數

一南之方與力二拾五騎に而、總坪數八千六百貳拾六坪餘、
一同同心百人に而、總坪數九千四百貳拾七坪餘、
　合壹萬八千五十四坪餘
一北之方與力貳拾五騎に而、總坪數六千八百貳拾貳坪餘、
一同同心百人に而、總坪數七千八百七十四坪餘、
　合壹萬四千六百九拾六坪餘
　南北合坪數三萬貳千七百四拾六坪餘
右之通拜領いたし罷在、與力同心共、坪數多少有之、尤同心之分は、町屋敷に而被下置、且又同心增人貳拾人宛之儀は、父共同居に而相勤候ニ付、拜領屋敷は無之候事、

〔玉露叢十四〕明暦三年正月、今度大火事〇十八日以後、江戸町奉行ノ同心ヲ兩頭ニ五十人ヅヽ增人ヲ仰セ付ラル、新組ノ者ノ屋敷ハ本庄ニテ下サル、是渡邊大隅守、島田出雲守ノ時ナリ、

〔市尹要覽一〕町奉行組由緒、與力知行所、同心御切米、幷御取立之次第、〇中略
一寛文二年寅、村越長門守、邊渡大隅守勤役之節、同心五十人增人被仰付候、百人宛ニ罷成候、八拾人分屋敷、本所二ノ橋南之方ニテ致拜領候、其節支配之與力ヘ御役屋敷被仰付、四人ハ本所ヘ引越罷在候處、天和二年戌、北條安房守、甲斐庄飛驒守勤役之節、同心四十人ヅヽ、雙方ニ而八十人減少被仰付、本所屋敷ハ此節上リ申候、
一元祿九子年、能勢出雲守、川口攝津守勤役之節、相州三崎走水御番所相止、右之同心五十人、兩町奉行組ヘ割込ミニ成リ、一組ヘ同心二十五人宛入申候、屋敷ハ、同十一寅年六月、元大坂町近所、青山播磨守揚屋敷五千坪被召上、內九百二十坪、通ニ引、殘四千四拾八坪ヲ五十人ヘ割リ、一人八拾一坪ヅヽ相渡候由、地面之內、打出シ百九十坪有之候、此分年寄同心役屋敷ニ相成、兩組よ

り五人ツヽ引越申候、

一右之場所、正徳三巳年三月、町屋ニ被仰付、松島町と唱申候、

一諏訪美濃守組屋敷ハ、元祿十五午年閏八月十五日、丹羽遠江守新規ニ被仰付候付、小濱佐右衛門、并御徒組屋敷、其外被召上、同年拜領仕、龜嶋町と唱申候、且同心屋敷之儀者、是も正徳元卯年、右組之通り、町屋敷ニ被仰付候、○中略

内與力

一享保四亥年、能登守○坪内御役御免故、兩町奉行組、并御先手組へ割込ニ被仰付候、松島町ニ罷在候同心五十人ハ、能登守元組同心屋敷へ引移申候、松島町者さし上ゲ申候、

〔吏徴別錄下御目見以下〕町奉行組與力　天和二年壬戌十一月十一日、○中略此時より手前與力兩人を置、○中略　寛政八年丙辰三月十七日、廢内與力、　文化八年辛未八月廿八日、再置内與力、

〔有司勤仕錄〕町奉行

内與力三人は百五十石、或は百石取、屋敷内に居し、別町屋敷有之、○又見ニ職掌錄一

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政八辰年三月

町奉行所吟味物等は勿論、都而取扱候御用向は、以來留役ニ而相濟候樣可被致候、尤當時勤罷在候、内與力と唱候もの、暇等遣し候には不及、追々減切之心得に可被致候事、

家老用人

〔寳永三年武鑑〕町御奉行

松野壹岐守、○中略家老象古刑部、平山瀬左衛門、用人岸代藏、松浦藤馬、中田郷左衛門、

〔元文五年武鑑〕町御奉行

石河土佐守政朝、家老伊崎文右衛門、用人小森忠兵衛、原兵右衛門、小倉安兵衛、

○按ズルニ、寳暦八年ノ武鑑ニハ、家老用人共ニ見エズ、嘉永二年ノ大成武鑑ニハ、用人アリテ家老ナシ、

町年寄職掌

附江戸町役人

江戸町役人ニ、町年寄、地割役、名主等アリ、町年寄ハ三人アリテ、樽屋(後樽ト改ム)奈良屋(後館ト改ム)喜多村ノ三家之ヲ世襲シ、町奉行ニ屬シテ、神田、玉川兩上水、其他市中一般ノ取締ニ從事シ、樽屋ハ特ニ町屋敷ノ地代取立、枡改、酒造桶改ノ事ヲモ掌ル、各屋敷地數箇所ヲ拜領シ、間、苗字帶刀ヲ許サレ、役料ヲモ給セラルヽモノアリ、

地割役ハ、町方地割ノコトヲ掌ル職ニテ、亦屋敷地ヲ拜領シ、或ハ扶持ヲモ給セラレシコトアリ、

名主ハ、家屋敷ノ質入證文、或ハ訴訟ノ願書等ニ加判シ、總テ町内ヲ治ムル職ニテ、少キモ二三町、多キハ十餘町ヲ支配シ、寛政三年町法改正ノ時ニハ、其數二百四十三人アリ、明治二年解職ノ時ニハ、二百三十八人アリシト云フ、役料ハ幕府ヨリ制限ヲ設ケテ、其町内ヨリ支給セシム、其他ニモ、家主月行事等ノ職アリ、

〔明良帶錄 世職篇〕三年寄

江戸町年寄といふ、奈良屋市右衞門、樽屋三右衞門、喜多村彥右衞門、何れも御由緒ある者なれども、先祖多病、且懶惰に寄て町人と成る、當時諸運上扱方にあづかる、

〔江都管鑰秘鑑 十〕樽屋藤左衞門由緒の事

江戸町年寄之三家は、名譽やゝ人口に有之、侯伯といへども平視し給ふことなく、尤いみじき家柄なり、享保年中御尋に付、三家より上書の書付左に志るす、

先祖由緒書　　樽屋藤左衞門

一水野右衞門大夫忠政七男水野彌平大夫忠頼嫡子水野彌吉康忠、後樽屋三四郎と改名、〇中略

一天正九年五月、〇中略此節三四郎儀、遠州町々支配被仰付候、筧八左衛門同役相勤申候、御入國以來、天正十八年八月十五日、於江戸町々支配役被仰付、并神田玉川兩上水支配仕、武州豐島郡之内、關口、小日向、金杉、三ヶ村御代官相兼、町年寄役相勤め、代々帶刀候儀、度々御停止之節も、町年寄は格別之旨被仰付候之處、常憲院樣御代、又候御停止被仰出候節、町年寄も一同に相止め、追而可願旨被仰渡相止申候、其後神田玉川兩上水道御奉行支配に被仰付、三ヶ村の御代官之儀も、細井九左衛門支配に罷成候、〇中略

一東三十三ヶ國枡之儀、古來ゟ被仰付候、

一慶長十七子年、東海道中仙道一里塚出來仕候御用、樽屋藤左衛門、奈良屋市右衛門兩人へ被仰付、先祖藤左衛門道中へ罷越、差圖仕築立させ罷歸候節、銀子拜領仕候、〇中略

享保十巳年八月〇又見市尹要覽、撰臣紀聞、

〔大三川志三十〕天正十八年、是年水野彌吉康忠、頃年三四郎ト改名シ、筧八左衛門ト共ニ遠州ノ町司タルガ、罪有テ樽屋三四郎ト改號シ、商賣ヲ業トス、是時和州奈良ノ產、奈良屋市右衛門、北村彌兵衛ト共ニ江戸町年寄ニ命ズ、

〔御役所持場町法改正一件留書〕町奉行支配

町年寄喜多村彥右衛門〇中略

一寛政二戌年八月十九日、倉澤源一郎、樋口次郎左衛門御吟味一件に而、役儀取放、押込被仰付候、

一同七卯年五月廿八日、喜多村松之助町年寄役被仰付、彥右衛門と改、

〔江都管鑰秘鑑十〕奈良屋書上の寫

覺

奈良屋市右衛門

一私儀先祖之儀、大館家之氏族に御座候處、一旦和州奈良に住居仕罷在候、權現樣三州に被ㇾ遊ㇾ御座ㇾ候時分、三州へ罷越、駿州方に御供仕候由、御入國之節、御當地へ御供仕、拙者迄七代御役相勤め申候、○中略

一御入國以來、天正十八年八月十五日、於ㇾ江戸ㇾ町々支配役被ㇾ仰付ㇾ、幷に神田玉川兩上水之支配役被ㇾ仰付ㇾ支配仕、武州豐島郡之內、關口、小日向、金杉村共、御代官兼町年寄役相勤、代々帶刀仕、熨斗目著用仕來り候度々帶刀候儀は御停止御座候へども、町年寄は格別之旨にて被ㇾ仰出ㇾ候處、常憲院樣御代又候御停止被ㇾ仰付ㇾ、此節町年寄之儀も、一同相止申候、追而可ㇾ相願ㇾ旨被ㇾ仰渡ㇾ候、其後神田玉川兩上水道御奉行支配に相成、三ヶ村御代官之儀は、細井九右衛門支配に罷成候、○中略

一慶長年中、東海道中仙道一里塚出來仕候御用、樽屋藤左衛門、奈良屋市右衛門右兩人江被ㇾ仰付ㇾ、道中へ罷越差圖仕、一里塚築立罷歸り候節、銀子頂戴仕候、○中略

享保十巳年八月○中略

喜多村彥右衛門書上の寫

覺

喜多村彥右衛門

一私先祖喜多村彌兵衛儀、權現樣御入國之節、江戸表にて相應之御用可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ之旨に而、遠州より被ㇾ召連ㇾ、御供仕候て、御當地町年寄役被ㇾ仰付ㇾ、天正二十年十月、御黑印頂戴仕候、江戸三年寄之內に而、私迄九代無ㇾ斷絕ㇾ御用相勤相續仕候、先祖彌兵衛儀、於ㇾ遠州ㇾ御奉公仕候儀は、明曆酉年大火之節、書留ども燒失仕候由申傳へ候、○中略二代目喜多村彥右衛門儀、大猷院樣江、水練幷に御鼓御稽古之儀奉ㇾ申ㇾ上候、寬永九年、本町に捕者有ㇾ之節、召捕候爲ㇾ御褒美ㇾ、安針町會所地拜領仕候、

寛永年中、大猷院樣御上洛之節、駿州富士川徒渡り之節、御先仕候由申傳へ候、

一先規は、江戸廻り數ヶ所、神田玉川兩上水道支配仕り、天和二亥年、帶刀熨斗目著用之儀、同役一統之儀に御座候、

享保十巳年八月

〔嚴有院殿御實紀四十〕寛文十年五月廿五日、町年寄水道を所管すべしと命ぜらる、

〔憲教類典五ノ八上水〕元文四己未年八月

玉川上水、町奉行所之支配被仰付候ニ付、町年寄三人、以來上水支配可相勤旨、依之御扶持方七人分ヅヽ被下置候、右爲御禮、若年寄中相廻候樣被仰付候由、

〔憲教類典四ノ五上評定〕享保五庚子年正月

町屋敷親類中江讓候事

一町々名主并諸問屋、名を改候節は、町年寄江相屆、年寄共より御役所江相屆可申候、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕年號月日不知

一風烈之節、月番之町年寄方江、火元用心之義可申付旨申遣事、

〔御役所持場町法改正一件留書〕町奉行支配

町年寄樽與左衞門〇中略

一神田玉川上水枡樋、向後世話可致旨被仰渡、百俵被下候處、明和六丑年止、〇中略

一東三十三ヶ國枡改

一五拾ヶ所町屋敷地代取立掛り

一寛文八申年ゟ、町中酒造桶改、燒印文字量

但天明八申年、酒三分一造被仰出候節、燒印改不用之分江、右量と申文字之燒印押渡、〇又見市尹秘錄

待遇
賜輿

○本文奈良屋喜多村二家ノ條ニハ、神田玉川上水ノ事ノミヲ記セリ、

〔享保手扣録〕折上　町奉行江　町年寄三人

只今迄、御作事方小普請方掛リ、上水道樋枡、向後町年寄共世話仕候樣ニ相成候ニ付、百俵宛被レ下レ之、此段可レ被二申渡一候、

右ハ寛保元年酉四月廿六日、松平左近將監殿、三奉行江御渡被レ成候、

折上　町奉行江

一半藏御門外　一雉子橋御門外　一一ツ橋御門外　一神田橋御門外
一和田倉御門外　一馬場先御門外　一外櫻田御門外
一大手御門外は、小普請定小屋前より神田橋通り之道を限り、常盤橋之方、右御門之外通り玉川上水神田上水樋枡共、御作事方小普請方掛り向後相止、町年寄世話仕候樣可レ被二仰渡一候、〇下略

〔環齋記聞〕町年寄樽屋藤左衛門由緒の事

毎年正月三日、年頭御目見仕、同月上野增上寺御成之節、御成先にて御目見仕、私代迄七代御役儀相勤申候、〇中略

寛永十一戌年、大猷院樣〇德川家光御上洛之節、爲二御祝儀一三代目藤左衛門義上京仕、御目見被二仰付一、御紋付御時服頂戴仕候、

寛永十四丑年、類燒仕候節、金五百兩宛、明暦三酉年、大火類燒仕候ニ付、銀廿貫目被レ下置、同年大坂御藏之白米被レ下置、京都ニ而拂銀三拾貫目宛、町年寄三人共拜領仕候、此外拜領物等被二仰付一候儀も度々御座候、〇中略

享保十巳年八月　樽屋藤左衛門

奈良屋市右衛門書上之寫

年頭御禮、正月三日御目見、同月上野增上寺共、御代替り御目見仕來り候、〇中略
寛永年中類燒之節、銀子貳拾貫目、同年大坂御藏之白米被下置、京都ニ而拂銀三拾貫目宛、町年寄三人共拜領仕候、此外拜領米等度々被仰付候、〇中略

享保十巳年八月　奈良屋市右衛門

喜多村彥右衛門書上の寫

天和三亥年、帶刀熨斗目著用之儀、同役一統之儀ニ御座候、

先規より類燒之節、御金御米等拜領之儀度々、同役一統之儀御座候、

享保十巳年八月　喜多村彥右衛門

〔享保手扣錄〕御代替、町中ゟ獻上物之義ニ付、申上候書付、

一御扇子五本入

熨斗三把　樽屋藤左衛門

奈良屋市左衛門

喜多村彥右衛門〇中略

右之通り、年始ニ御本丸西御丸江獻上仕候、御代替之節も、前々獻上仕來り候間、此度も三御所樣江差上申候、依之申上候、以上、

九月〇年號不詳　島長門守〇町奉行

能勢肥後守〇同上

右之通可差上旨、被仰渡候、以上、

〔町年寄幷名主諸願申渡〕寬政二戌年四月之留書拔

樽屋與左衛門

去秋以來廢宿貸出金仕法御改正之儀、出精相勤候ニ付、爲御褒美苗字御免被成、銀貳拾枚被下

之、〇中略

奈良屋市右衞門
樽屋與左衞門

淺草猿屋町於會所、藏宿共貸出金仕法取扱中、帶刀御免被成候、

右之通、松平伊豆守殿被仰渡候、

戌四月

一同十五日、御勘定奉行久世丹波守殿江、爲御禮罷出、最早御登城ニ付、御玄關江申上置、左之御屆書上之、

樽屋與左衞門事
樽與左衞門

私儀、以來右之通相改申候ニ付、依之此段御屆申上候、以上、

戌四月　樽屋與左衞門

〔天保撰要類集支配向上〕

町年寄奈良屋市右衞門、苗字名乘申度旨願之趣、再應御內慮奉伺候書付、

榊原主計頭
町奉行

町年寄奈良屋市右衞門 午五十二歲

右市右衞門儀、數年役儀相勤候處、同役喜多村彥右衞門儀は、古來ゟ屋號無之、苗字を相名乘、樽吉五郎儀も、是又同樣之處、市右衞門而已屋號を名乘候故、釣合も不宜、迷惑仕候間、可相成儀に御座候はゞ、苗字御免被成下候樣仕度旨、別紙之通り由緒書相添、先祖之苗字館と名乘申度旨

相願申候、依之〇中略去ル丑年〇文政十二年十月中、私共ゟ奉伺候處、同十一月、伺之趣難被及御沙汰旨被仰渡候ニ付、其段申渡置候、然處猶再應奉願候も、厚奉恐入候得共、右市右衛門儀、〇中略數年來格別出精相勤候者之儀、苗字御免被仰付候はゞ、猶更打はまり、一際出精相勤可申、何卒格別之譯を以、永々苗字御免被成下候樣、於私共厚御内慮奉伺候、〇中略

以上

午〇天保五年四月　　榊原主計頭

筒井伊賀守〇二人並町奉行、中略、

午十一月廿九日、於内座申渡、〇中略

町年寄奈良屋市右衛門

其方儀、數年出精相勤候ニ付、永々苗字差免候樣、大久保加賀守殿被仰渡候間、申渡之、

午十一月

〔市尹秘錄一〕支配向起立摘書之事

町年寄　樽與左衛門

拜領屋敷

本町貳丁目住宅　百六拾坪　　元數寄屋町壹町目　貳百三拾九坪餘

岩代町　六百八拾六坪餘　　橘町壹町目　三百四拾壹坪餘

米澤町三町目　九百七拾四坪餘

一御入國以前より之家筋ニ而、毎年正月三日、年頭に罷出、御目見仕、且又正月十日、同廿四日、其外御法事、御規式、上野增上寺御成之節、御目見仕候事、〇中略

一天明四辰年十二月廿七日、熨斗目白帷子著用御免、

一寛政二戌年四月十四日、藏宿貸出仕法御改正之儀、出精相勤候間、爲御褒美苗字御免、銀貳拾枚被下、淺草猿屋町於會所藏宿共貸出金仕法取扱中帶刀御免、〇中略

町年寄　奈良屋市右衛門

拜領屋敷

本町壹町目住宅　百八拾坪

尾張町壹町目　貳百坪

橘町壹丁目　貳百坪

江戸橋藏屋敷　百五拾八坪餘

外ニ河岸地面貳拾八坪餘

四日市藏屋敷　四百八拾七坪餘

四日市藏地　三百四拾坪餘

外ニ河岸並通路犬走りとも五百八拾坪餘

長濱町壹町目　貳百六拾貳坪

同貳町目　六百六拾三坪餘

此貳ヶ所、喜多村彥右衛門兩人ニ而拜領、

一由緒書、右同斷之事、

一熨斗目白帷子著用之儀、三人同斷、〇中略

町年寄　喜多村彥右衛門

拜領町屋鋪

本町三町目住宅　百六拾坪

尾張町壹町目　貳百坪

橘町壹町目　四百六拾坪

永富町壹町目　四百五拾四坪

同町三町目　百三拾壹坪餘

日本橋藏屋敷　百八拾四坪

外ニ河岸並通路犬走リ共百三拾七坪餘

四日市藏地　貳百八坪

外ニ右同斷百三拾八坪餘

〔嘉永二年武鑑〕江戸町年寄

百俵、館市右衛門、　百俵、喜多村彦右衛門、　百俵、樽藤左衛門、

○按ズルニ、寬保明和ノ頃、町年寄三人ニ役料百俵宛ヲ給セシコトアリ、職掌ノ條ヲ參看スベシ

〔御當家令條二十二〕江戸町中定

一不ㇾ用二町之年寄五人組之相談一、任二其意一之輩可ㇾ爲二曲事一、但年寄非分有ㇾ之ば、町中一同可ㇾ差二上訴狀一、遂二穿鑿一、急度可二申付一事、○中略

明暦元年十月十三日

〔憲教類典五ノ十五上江戸町觸〕寬文六丙午年七月

覺

一町人百姓申分在ㇾ之者、町年寄、同肝煎、村頭を以、町奉行郡奉行へ可二申達一、

〔德川禁令考四十七町役人〕寬政四子年二月

町年寄共江申渡○中略

一町内年寄役之儀は、其町内之長たるにより、何事も細密に心を用、第一に公儀御觸之儀は堅く相守、末々借家人に至までも、嚴重に御觸之儀相守候樣、精々丹精を盡、日夜申敎候樣に可ㇾ致儀、肝要之役目に候處、役筋之本意を心得違候もの多く、只々觸書等をも、一通り讀聞せ候迄に而捨置、其後相糺候事もなく、夫成に致し置候より、末々に至り候而は、別而其當分計、觸書に隨ひ斟酌いたすといへども、無程相ゆるみ、終には罪科を得るものも不ㇾ少候、是等は全く年寄ども等閑より事發り候儀ニ而、無整之至に候、都而公儀より御觸有ㇾ之儀を、おろそかに相心得居候

は、役儀之本意を失ひ候事は、一町內之長役も相勤候身分に而、一通り不辨には有間敷候得共、眞實に道理を會得せざるゆへの事に候、〇中略御觸之品に數多しといへども、先差當り奢を禁じ、質素を專に相守候事、扮衣服之制度、髮之餝、或は博奕、又は町々木戶〆之儀、是等は其町內之盜難を避んとの事は、縱令入用等相掛といへども、他のためになす事にはあらざるを、等閑にいたし候は、餘り不束成事に候、右之通委細申聞置候上は、町々心得を相改候哉否は、內聞を以相糺、若不相用向も有之歟、又は年寄は勿論、月行事家主町代末々に至迄、急度可令沙汰事に候、〇中略

〇按ズルニ、御當家令條以下ニ云ヘル町年寄ハ、或ハ後ノ名主ヲ指セルモノナランカトモ思ハルレド、其名稱ノ同一ナルヲ以テ、姑ク此ニ收ム、

〔江都管鑰秘鑑四〕地割役樽屋三右衛門由緒書之覺

一町地割役之儀、木原勘右衛門相勤候處、隱居致し、忰勘左衛門跡役被仰付候處、是又隱居仕、一子無御座候ニ付、弟與右衛門役儀被仰付候、右與右衛門不行跡者にて、十六年巳前寅年〇寛永七年御役被召放、入牢被仰付、翌卯年二月御仕置被仰付、同寅年地割役私へ被仰付候、右勘右衛門地割役被仰付候由緒は、古來地割地渡し、總而間地御用御座候節、町奉行所に而、御大工頭木原內匠殿ゟ、間地御用御座候間、役人罷出候樣被仰遣、內匠どのより、間地道具共役人罷出、度々被仰遣候義も如何に候間、自今右役人町方に御受取置被成段、內匠殿より御掛合御伺之上、木原勘右衛門、內匠殿親類故、町方へ被差越、夫より町方地割定役人被仰付候、其節町奉行御名覺不申候、御役料として、日本橋南壹丁目東側會所、中通り表京間貳拾間、裏行同貳拾五間之町屋敷壹ヶ所、本石町三丁目北側會所にて、京間貳拾四間四方之屋敷壹ヶ所、都合貳ヶ所被下候、本石町拜領屋敷御用地に成、永富町三丁目にて、表京間十五間、裏行貳拾間之屋鋪御替地被下候、地割御

用御座候節は、御扶持方被下候、長富町屋敷之儀は、先年拜領屋敷金銀賣買御停止無之已前、金子書入返濟滯候ニ付、先年保田內膳正樣御在役之砌、金主方へ相渡申候、右由緒之儀、勘左衞門代より相勤候手代、私方へ相抱置候故、常々承り傳へ候ニ付書上申候、私儀與右衞門跡役被仰付候由緒者、私儀者名主役相勤罷在候故、丹羽遠江守樣、松野壹岐守樣、坪內能登守樣御勤役之節、名主役實體相勤候ニ付被仰立、與右衞門跡役被仰付候、右日本橋拜領屋敷被下候段被仰渡候事、

一私樽屋と申由緒は、曾祖父水野右衞門大夫忠政末子水野彌吉長男藤左衞門次男總兵衞と申候、彌吉、天正三年五月廿一日長篠御合戰の砌、家康公御陣中に罷し、朝の合戰に首三ツ、晝の御合戰に首四ツ討取、備御實撿に候得ば、御感狀御褒美等被下置候、依之自分爲御祝儀手樽壹ツ、樽の口へ桔梗の花をさし、幷桔梗の紋付候御盃を添へ獻上仕、是を家康公、信長公江御持參被遊候處、信長公喜悅無限、兩御大將樣方、水野彌吉を樽三四郎と御改被下候、○中略家康公駿州に被遊御座候砌、三四郎義御勘氣を蒙り、浪々の身に罷成、御當地へ罷下り町宅仕候處、俗姓いやしからざるによつて、町中の者三四郎を敬ひ、諸事差圖を得來り、自然と町の年寄と罷成候よし、長男藤右衞門義は、親三四郎と一所に罷在候ニ付、三四郎家督相續仕、町年寄仕罷在候、次男總兵衞義は、遠州濱松に居住仕候、家康公關東御入國ニ付、遠州より御當地へ罷下り、右の由緒申上候得者、日本橋南壹丁目にて、表京間五間、裏行貳拾間之町屋敷被下置、夫より私迄今以代代日本橋居住仕候、右三四郎町人に罷成候譯は、右之通ニ御座候、名字は樽之一字に而御座候處、町人故自然と屋の文字を付候よし承り傳へ置候、

右之通御座候、以上、

享保十巳年九月　　樽屋三右衞門

〔市尹秘錄〕支配向起立摘書之事

地割役　樽屋三右衛門

拜領屋敷

通壹町目新道住宅　四百八拾坪

内六拾坪餘、新道ニ成ル、

柳原土手町廣道

此坪數百九拾貳坪餘、天明七未年新規拜領、〇又見二御役所持場町法改正一件留書一

〔嘉永二年武鑑〕江戸町地割方

日本ばし木はら店一丁メ　樽屋三右衛門

〔德川禁令考四十七町役人〕明曆二申年十二月

名主役無ㇾ之町々名主を見立可ㇾ申上事〇中略

一名主無ㇾ之町々には、内々名主を見立可ㇾ申上、名主役迷惑に存、無ㇾ之町々には、年寄候者共、家役に

一年宛、名主役可ㇾ仕事、

〔德川禁令考四十七町役人〕享保七寅年七月

右同斷〇町入用多無ㇾ之、名主共組合相定候事、町年寄より申渡

總町中名主、只今數多不ㇾ埒之名主共も有ㇾ之、町内平生入用之外、過金も多く爲ㇾ差ㇾ出候由相聞候ニ付、自今は新名主出來不ㇾ致候樣いたし、只今相勤居候名主共も、相果候歟、名主役差上候跡は、隣町之名主支配に相付、名主數減候樣可ㇾ仕旨、御奉行所より被ㇾ仰渡ㇾ候、然る上は、只今迄相勤居候名主共は、一代限ニ而、悴親類等ニ而も、跡相續難ㇾ相成ㇾ事に有ㇾ之間、此段爲ㇾ心得ㇾ先達而申聞候ニ付、右之趣に而は、何も迷惑至極いたし候、因ㇾ茲自今名主之内に組合相立、相互申合、町人共江入用不ㇾ相掛ㇾ

候樣可㆑致旨、仲間申合候、ケ條書帳面差上、段々相願候ニ付、然る上は、跡名主之儀、先只今迄之通御見合も可㆑有㆑之との御事候間、差上置候帳面申合之通、急度可㆓相守㆒候、此上不埒之名主共も候はゞ、仲間より致㆓吟味㆒、其段御奉行所江可㆓申上㆒段、申合之帳面にも書載候上は、彌其旨相心得、不慎之輩有㆑之候はゞ、早々可㆓申出㆒候、勿論不埒之儀相聞候はゞ、此以後急度從㆓御奉行所㆒可㆑被㆓仰付㆒候、

享保七年寅七月八日

○按ズルニ、江戸市中名主役料留ニ據ルニ、寛政三年町法改正ノ時、名主ノ數、一番組十四人、二番組十四人、三番組十九人、四番組八人、五番組八人、六番組八人、七番組十一人、八番組十四人、九番組十三人、十番組十一人、十一番組十八人、十二番組七人、十三番組十五人、十四番組二十人、十五番組二十一人、十六番組七人、十七番組十三人、十八番組五人、十九番組三人、二十番組十二人、二十一番組四人、番外品川二人、番外新吉原四人アリテ、合計貳百四十三人ナリ、

〔德川禁令考 四十七 町役人〕明暦二申年十二月

名主役無㆑之町々、名主を見立可㆓申上㆒事、○中略

右近年名主無㆑之町々にせ賣券多、遺言狀にも爲㆑紛議有㆑之樣に相聞候、自今以後は、沽劵又は遺言狀にも可㆑致㆓加判㆒、幷於㆓其町々㆒公事訴訟人有㆑之者、先家主五人組承屆け、内々ニ而可㆓相濟㆒儀は、名主相談之上落著すべし、未濟儀有㆑之ば、家主訴訟人を召連罷出べし、若申分有㆑之、店之もの押へ置におゐては、家主可㆑爲㆓曲事㆒もの也、

十二月

〔憲教類典 五ノ十五上 江戸町觸〕寛文二壬寅年八月

此以前も相觸候通、町中家持遺言仕候もの、存生之内に遺言狀認、其町之名主五人組幷諸親類に爲㆑致㆓加判㆒、其上に而町年寄之帳ニ付置可㆑申候、○下略

〔德川禁令考四十八 地借店借〕寛文十一巳年三月

借屋店借地借之者欠落致候節、取計之事、

一町中に而借屋店借地かり之者、欠落仕候はゞ、其家主より早々名主に相斷、家主五人組立合、其者之諸道具以下紛失無之樣に相改、其品々を書立、御番所江可申上候、家守家主より不埒成儀有之由に候間、自今以後念を入可申候、若不沙汰に仕候儀、脇より相聞候はゞ、家主五人組は不及申、名主に御懸り可被成候間、無油斷念入可申事、

三月

〔憲教類典五ノ十四 町奉行〕元祿十四辛巳年九月

覺

一家屋鋪書入之儀、○中略向後名主五人組加判無之、相對之家質證文之類は、公事合になり候共、裁許に及間敷事、

〔憲教類典五ノ十四 町奉行〕元祿十六癸未年十二月

覺

一紛失物詮議之節、手筋相知候はゞ、其町々質屋ども、名主江申付爲致吟味可申事、

一手筋不相知紛失、町方ニ而は町年寄に申渡し、支配之名主ども、町切に致吟味候樣に相觸可申候、

〔憲教類典五ノ十五上 江戸町觸〕享保元丙申年十一月八日

覺

一町中に而家屋敷致賣買候節、町禮輕々致、振舞等堅無用に可仕由、每方相觸候處、今以かゝりもの多、町人ども致難儀候由相聞え候、畢竟名主ども仕形不屆に候、依之向後員數を定觸候間、其

旨可ㇾ存候、

一間口並代金、町役に無ㇾ構、名主へ銀貳枚づヽ可ㇾ遣事、

〔德川禁令考四十七町役人〕享保六己丑年

町中訴訟請願等名主奥印之事

今日大岡越前守樣御番所江、町中町人壹人宛被ㇾ召呼ㇾ候而、御渡被ㇾ成候御書付左之通、

一町中訴訟諸願出入等有ㇾ之時分、自今其所之名主奥判於ㇾ無ㇾ之は、奉行所ニ而不ㇾ取上ㇾ候間、其旨可ㇾ相心得事、

一名主奥判之事、其品輕き儀は、名主取計可ㇾ相濟ㇾ候、名主手前ニ而難ㇾ濟事は、奥判いたし奉行所江可ㇾ差出ㇾ候事、

但名主付添出候には不ㇾ及、公事之節は、唯今迄之通名主付添可ㇾ出事、

一事品輕き儀ニ而、名主取計可ㇾ濟儀を、致ㇾ奥判ㇾ奉行所江差出候はヾ、名主呼寄、名主方ニ而可ㇾ取扱ㇾ旨申付、可ㇾ差戻ㇾ候間、其旨可ㇾ相心得ㇾ事、

一總而名主取計、非分之儀有ㇾ之歟、又は奉行所江可ㇾ差出ㇾ儀を、名主奥判不ㇾ致、久敷押置候はヾ、訴訟人其品可ㇾ申出、奥判なくとも可ㇾ取上ㇾ事、

但名主手前遂ㇾ吟味ㇾ可ㇾ相答ㇾ事、

右之趣自今可ㇾ相心得、尤名主依怙贔屓なく、其上禮物或は判賃取べからず、若相背名主あらば、町中より可ㇾ訴來、急度可ㇾ相咎ㇾ事、

享保六丑年四月十三日

〔憲敎類典五ノ八上水〕元文四己未年八月

町名主　長谷川伊右衛門

彌左衛門

大鋸町名主
茂兵衛

右両人江、向後上水御用可ㇾ相勤旨、尤町年寄三人之差圖を請、玉川上水相違無之樣に可ㇾ仕旨被ㇾ仰付候、

〔武江年表十二〕明治二年三月十日、東京町々の坊正(名主と稱す)二百三十八人東京府へ被ㇾ召出、今般市中御取締筋御改正に付、一同役儀御免、翌十一日、尚又一同被ㇾ召出、右之内、元名主幷見習勤の息子、また致仕の者合て百人、その内六人は世話懸り、四十七人は中年寄、三十九人は添年寄に被ㇾ仰付、御府内を五十區に分たれ、(一區に中年寄一人、添年寄一人、)その餘の者には御手當を賜りたり、又六月より、町年寄とて、身柄宜しき者一小區に五七人、町用掛りとて十人廿人位、人選の上命せられ、町々自身番屋といへるを廢し、一小區の内一ヶ所づヽ、町用取扱所を設く、

〔享保手扣錄〕御代替町中〻獻上物之儀ニ付申上候書付

一御扇子三本入　　町中名主共(○中略)

右之通り、年始に御本丸西丸江獻上仕候、御代替之節も、前々獻上仕來り候間、此度も三御所樣江差上申候、依ㇾ之申上候、以上、

九月　　島長門守(○町奉行)
能勢肥後守(○同上)

右之通、可ㇾ差上旨被ㇾ仰渡候、以上、

〔春波樓筆記〕江戸の町は、御入國此方の事にて、其の頃よりの名主を草分と云ふ、町數八百八町ありしに、千八百八町となりぬ、正月三日、帝鑑の間の大廊架において、御通がけの御目見え、獻上物大臺に熨斗、一斗入酒樽十、大納言樣にも同じ、通油町、田所町、大傳馬町、總町代として三人、通油町の名主宮部又四郎、田所町の名主田所平藏、大傳馬町の名主馬込勘解由、

〔江戸市中名主役料留〕壹番組

一金貳拾五兩　本兩替町　名主　拾次郎〇大坪

一同貳拾五兩　北鞘町

合金五拾兩　同　定次郎〇木村

一錢百四拾貫百廿四文　新石町壹丁目

一金五兩　野島屋敷

一銀貳百四匁五厘八毛　神田塗師町

一銀貳百四拾匁　同代地

一錢六拾一貫貳百拾貳文　元乘物町

一同貳拾七貫貳百八拾四文　同拜領地

一同拾八貫貳百九拾文　兵庫屋敷

一同三貫百九拾貳文　元乘物町續兵庫屋敷

一銀壹貫百九拾匁三分　新革屋町

一金四兩貳分　後藤縫殿助拜領町屋敷

一同壹兩貳分　同拜借地

一同三兩　大和町立跡

〆金拾四兩

合銀壹貫六百卅四匁三分五厘八毛

錢貳百五拾貫百拾四文

此金八拾六兩貳朱ト銀四匁七分貳厘三毛（〇中略）

三番組　名主　兵藏（〇柳川）

一錢百四拾四貫文　淺草新鳥越町一二三四丁目
一同三拾六貫文　筆墨料
一同七拾貳貫文　同山谷町
〆錢二百五拾貳貫文
　此金四拾五兩壹分銀三匁貳厘五毛（〇中略）　同　四郎兵衛（〇丸澤喜三次）
一金貳拾兩壹分銀五匁三分四厘　淺草橋場町
一同壹兩壹分貳朱　助金
〆金貳拾壹兩貳分貳朱銀五匁三分四厘

四番組　名主　清右衛門（〇千桐）

一金貳拾七兩　西河岸町
一同六兩　手代給
一同拾五兩　竹川町
〆金四拾八兩（〇中略）

五番組　名主　源七（〇和田）

一金拾八兩　鈴木町
一錢貳貫文　紙代（〇中略）　同　德兵衛（〇富澤）

月行事

一金貳拾壹兩壹分　北紺屋町

一錢三貫六百文　使番錢○中略

九番組　名主　清一郎○浦口

一錢貳拾五貫文　芝松本町壹丁目

一銀三拾貳匁五分錢六拾六貫文　歲暮筆墨料幷定使給○中略

十番組　名主　與右衞門○龜井

一金拾貳兩貳分ト五分壹厘　澁谷宮益町

一同壹兩ト貳分五厘四毛　年頭扇子料○下略

○按ズルニ、此ニ筆墨料、紙代、助金、手代給、使番錢、又定使給、年頭歲暮等ノ名目見エタルモノハ、則チ役料金ノ外ニ徵收シタルモノナリ、本書ニ據ルニ、役料金ハ其所轄ノ廣狹ニヨリテ同ジカラズ、多キハ十八町ヲ管シテ、役料百九拾餘兩ニ及ブモノアリ、少キハ漸ク一二町ヲ管シテ、役料三兩ナルモ見エタリ、

〔慶長見聞集〕二下郎のいふ事世にひろまる事

見しは今江戸町に金六といふ者有、○中略金六日暮ぬれば江戸町をめぐり、辻の火番をあらため、火をけすか灯すかを見ては、此町に月行事はなきか何とて火番をかたく申付ざるぞ、其家主をからめ籠者さすべしとおめきければ、○下略

〔憲教類典〕五ノ十五上江戸町觸　享保三戊戌年十二月四日

火事之節、駈付組合之儀、○中略寺社方町方共に組合入込に成候、依之繪圖指出させ候間、寺社方御支配之町々より申談候はゞ、申合組合に入候樣に可相心得候、○中略

右之通、御急候、同町中名主月行事相心得、早々可被相觸候、以上、

五人組

〔憲教類典 四ノ五 評定 上〕寛永十癸酉年八月十三日

公事裁許定

一町人諸職之事、存命之内、五人組江相斷、其上町年寄三人之所にて帳に付置べし、其子不屆においては、重而可申斷之、末期筋目違たる遺言立間敷事、

〔憲教類典 五ノ十五 江戸町觸 上〕慶安元戊子年六月

一此以前も如相觸候、公事仕候ものは、證據人五人組召連罷出べく事、

〔憲教類典 五ノ十四 町奉行〕元祿十四辛巳年九月

覺

一家屋鋪書入之儀、〇中略向後名主五人組加判無之、相對之家質證文之類は、公事合になり候共、裁許に及間敷事、

〔憲教類典 五ノ十五 江戸町觸 上〕享保元丙申年十一月八日

覺

一町中に而家屋敷致賣買候節、町禮輕々致、振舞等堅無用に可仕由、毎方相觸候處、今以かゝりもの多、町人ども致難儀候由相聞え候、畢竟名主ども仕形不屆に候、依之向後員數を定觸候間、其旨可存候、〇中略

〔憲教類典 五ノ十五 江戸町觸 上〕慶安元戊子年二月

一間口並代金、町役に無構、名主へ銀貳枚、五人組へ銀百疋づゝ、〇中略可遣事、

家主

一振賣札なしの者、跡々申付候ごとく、當人は三日さらし、其上三十日之籠舍、毛たいは一町之もの可仕事、

附家主は三貫文之過料〇中略たるべき事

〔德川禁令考地借店借四十八〕寛文元丑年閏八月

店借之者店替之節之儀ニ付町觸

一町中店借り候者、店かへ候時、其店かへ候先を元家主方より見屆置可ㇾ申候、家主相斷候儀者、無用に可ㇾ仕候、但出入有ㇾ之、ことわらずして不ㇾ叶ものは、家主方江相斷置可ㇾ申候、若其店かへ候者に付出入有ㇾ之時、店かへ候先を、元家主不ㇾ存候と申候はゞ、可ㇾ爲ㇾ越度ㇾ候、此旨町中家持とも、永相守可ㇾ申候事、

〔德川禁令考地借店借四十八〕享保十五戌年五月

店借シ候節、元家主吟味可ㇾ致事、

一町々に而店借し候節、元家主方吟味も不ㇾ遂、猥に店借候故、尋者等差置候儀も在ㇾ之、并筋惡敷人宿出入、其外不埒成儀共出來候之間、自今元家主方承屆不埒成者に無ㇾ之候はゞ店借し可ㇾ申、新規之店かりは、其者出所承屆店借し可ㇾ申候、

右之通吟味も不ㇾ仕店借置、不埒之出入致ㇾ出ㇾ來候はゞ、家主は勿論、品により名主五人組まで、可ㇾ爲ㇾ越度ㇾ候、此旨町中不ㇾ殘可ㇾ觸ㇾ知候、以上、

五月

〔德川禁令考地借店借四十八〕安政二卯年正月

家主共、樽代節句錢并普請棟上建前等大工、其外鳥目申受候儀、

町々取締諸色掛

名主共

町々家主共、新規店借地借差置候節、樽代并節句錢等受取、場所に寄候而は、多分之金子爲ㇾ差上、難儀致候者有ㇾ之由、不埒之至に付、以來右躰之儀於ㇾ有ㇾ之は、急度可ㇾ申付ㇾ旨、去寅年三月申渡置候處、〇中

町代書役

略小前之者共難澁をも不顧、家主共儀は、地主より給分受取候身分に而、右躰不筋之金錢爲差出候段は、以之外不埒之事に候、此上名主共支配限、右躰之儀無之樣、家主共江篤と可申聞候、若相背者は、急度可申付候、○中略

右之通被仰渡、奉畏候、爲後日仍如件、

安政二卯年正月廿八日

堀江町名主　熊井理左衞門

外一同

〔御役所持場町法改正一件留書〕申渡

總町

名主共

地主共

家守共

一總町家守共、茶屋江寄合、町法評議等致候由、夫につき膳部等出させ、代料地主共より出銀爲致候趣に候、以來右躰之儀、決而致間敷候、もし打寄申談候筋有之候節は、名主之宅江寄合可申談事、

一家守給金、多分之過不及有之趣ニ付あたりをも見合、程能引下げ、人數之儀も、二屋鋪三屋鋪、合十五間口位迄は、地主別々に候共、申談調策、家主一人に申付候樣可致事、

但家守引替候節、町禮無用ニ可致旨は、前々相觸候儀、以來共彌相守、口上に而申觸、少したり共入用相懸ヶ申間敷事、

〔大成令七十四〕享保六丑年九月

一町々に有之町代之儀、自今相止可申候、其上所により上番下番常番抔と名付、町代之外にも在

之由、此等之類相止、公役は勿論、町内之用事共に、名主月行事取はからひ、入用等減候樣ニ可致事、

〔德川禁令考〕四十七町役人延享二丑年五月

物書共之儀ニ付町觸

先年町々町代と申者有之處、致方不宜事共有之相止候得共、物書候者無之候而は、町用差支候儀も有之候ニ付、物書迄之者を召抱候筈に相成候處、近來右之物書共、前々之町代之ごとく相成、御用幷町用共重に取計、家主名主江申聞、差圖可請儀、自分に而取計、御觸事等も有之、書役仲間之者寄合杯致、互に申合、諸事不相應之致取計候由相聞、甚不埒に候、如斯成行候儀は、畢竟其所之名主家主共未熟に而、自分に相成儀をも書役に致させ、又は公事訴訟人出候節も、名主五人組家主共名代差出、町用之儀は、猶又物書共に任せ置候故、自狠に相成候、追々吟味之上、急度相咎に而可有之候間、町々名主家主共、急度心を附、彌未熟に無之樣可申付事、

五月

囚獄

牢屋役人

幕府ノ牢屋ヲ掌ル所ノ役人ヲ囚獄ト云フ、石出氏ノ世襲ナリ、其下ニ同心下男等アリテ之ニ服務ス、ナホ牢屋役人ノ事ハ、法律部下編ノ囚禁篇ニモアリ、宜シク參看スベシ、

〔柳營秘鑑〕四諸御役人員數幷組支配

一囚獄壹人同心五十人

〔吏徵附錄〕世職石出帶刀囚獄　町奉行支配　高三百俵　役扶持十人扶持　役上下　牢屋敷內住宅　慶長以來代々役

〔明良帶錄〕世職篇囚獄三百俵高町支　同心五十八人

石出帶刀是也、俗に牢。屋。奉。行。といふ、都て罪人を取扱ふことを司る、昔は三年寄、町與力組合持也、今はさにあらず、帶刀家が世職たり、大番筋の物にて、系圖門地正敷家也、

〔市尹秘錄 一〕支配向起立摘書之事

四獄 石出帶刀○中略

高三百俵

右石出帶刀先祖本多圖書儀、大御番組之由、且石出ハ在名ニ付、御願申上、苗字相改候哉、其儀難ㇾ分、天正之頃ゟ、於二三州一權現樣江御奉公仕、其後大坂江御供仕候處、關東に盜賊亂妨有ㇾ之に付、罷下鎭候樣蒙二上意一罷下、因ㇾ是囚獄と罷成り候由申傳候事、○中略

牢屋敷始之事

一囚獄石出帶刀、○中略幼少之砌は、看抱人相願、別段看抱人江拾人扶持被二下置一候事、

〔江都管鑰秘鑑 五〕石出帶刀差出候書付之寫

覺

一私五才之節、實父帶刀儀、看抱之御願申上、飯嶋勘大夫と申者を願之通被二仰付一候、其後五十年巳前隱居仕候に付、勘大夫義帶刀と改め相勤申候處、三十七年已前貞享五辰年七月、北條安房守殿、甲斐庄飛驒守殿、御勤役中、私廿五才の節、帶刀儀も隱居仕、則私を帶刀と相改め、當年迄三十七年御奉公相勤申候、尤十年已前、私持病の脫肛差發步行難ㇾ仕、牢屋近所出火の節、差發候へば、欠附走御用相立不ㇾ申、御評定所式日御寄合の節も、名代の者を折節差出申候、輕きもの差出候義無二覺束一奉ㇾ存候、實子佐兵衞儀、其砌六才に罷成候に付、私幼年之砌、看抱之義實子奉ㇾ願候例を以、十年巳前未七月廿九日、松野壹岐守殿、坪內能登守殿中山出雲守殿、御役中、私又從弟養仙院樣御用人宿屋源左衞門甥宿屋伊左衞門、私方へ引取、御評定御寄合召連罷出、爲二見習一看抱仕度奉ㇾ存候御願申上候處、同八月三日、願之通實子佐兵衞爲二看抱一右伊左衞門被二仰付一、勘介と相改、只

今相勤申候、勿論私幼年にて看抱被仰付候節、御扶持拾人扶持被下候に付、右之趣を以、勘介へ御扶持方被下置候様奉願上候處、同年十二月十八日於御内寄合右御三人御列座にて、御書付を以、願之通り勘介へ拾人扶持被下置之間被仰付候、以上、

辰正月　石出帯刀判

諏訪美濃守殿

大岡越前守殿

右書付ども、ことごとく御老中方御披見のうへ、元來帯刀事は、國始より格別の系圖たるを以て、此度も先祖のごとく、事ゆへなく御聞濟屆被仰渡、御書付之寫左に記す、

町奉行江

帯刀實子　石出佐兵衛

佐兵衛看抱　石出勘介

右帯刀願置候通、勘介儀、佐兵衛貳拾四五歳迄の看抱いたし、役儀勤候様可被申渡候、是は享保九辰年二月三日、松平左近將監殿、則越前守殿へ御渡有けるとぞ、同年四月三日、御城にて左近將監殿、又は越前守殿を御呼被成、左の書付被下之、

町奉行江

四獄　石出帯刀跡

實子　佐兵衛　年十五

三百俵

右帯刀取來候御切米、實子佐兵衛江被下、

〔評定所張紙〕子〇寛政四年四月廿三日、池田筑後守より來る、甲斐守受取、

御勘定奉行衆へ　池田筑後守

小田切土佐守

右石出帶刀病死に付、當分之內、御用向御座候はゞ、拙者共組與力牢屋見廻り、蜂屋新五郞、都筑平右衞門と申ものへ可被仰付候、爲御心得此段御達申候、

〔評定所張紙〕寬政四子年七月六日來る

御勘定奉行衆

池田筑後守

小田切土佐守

囚獄石出帶刀病死に付、當分之內、御用有之候はゞ、拙者共組牢屋見廻り之與力ども宛、御認被遣候樣、及御掛合置候處、帶刀順置候通、忰柳之丞幼年に付、守山金之丞と申者、看抱人被仰付役儀相勤候間、以來右之もの宛御認被遣候樣存候、依之御達申候、

〔御當家令條二十六〕囚獄石出勘大夫江被仰渡覺

一牢死多候間、牢屋風吹貫候樣ニ、所々格子可申付事、

一牢舍之者、一ヶ月五度ヅヽ、行水仕せ可申事、

一宿不持之牢舍之者、紙衣被下候事、

一年々秋ニ成候而、布子一ツ被下候得共、當年ゟ二ツヽ被下候事、

貞享五年辰六月十九日

〔天保集成絲綸錄七十八〕天保三辰年十二月

書取○中略

一石出帶刀儀、身持家事取締は勿論、鎰役助役申合、囚人取扱、牢屋御入用等之儀も仕來りに不拘潔白に取計候樣可被申付候、○中略

右之通相心得、猶何ヶ度も無油斷致詮議、取締不弛樣可被申付事、

役宅

〔江戶砂子　一〕囚獄　小傳馬町一丁目の北手

〔市尹秘錄　一〕支配向起立摘書之事

牢屋敷坪數

一貳千六百七拾七坪餘　內三百八拾六坪餘囚獄住宅

拜領屋敷

小傳馬町壹丁目北側　三百六拾九坪　米澤町貳丁目西角　六百九坪餘

〔江都管鑰秘鑑　五〕一牢屋敷

總坪數貳千六百拾八坪七合五勺　此內四百八拾坪帶刀居宅也〇中略

拜借金之事

一金百六拾兩　但壹人ニ付四兩ツヽ同心四拾人、

右是は御預り同心四拾人、正月十八日類燒仕候ニ付、爲引料請取、銘々相渡申候、依之如件、

明曆三年酉三月十日　石出帶刀

淺井治右衞門殿　疋田喜右衞門殿　加賀美金右衞門殿

表書之金百六拾兩可被相渡候、斷は本文に有之候、以上、

豐後　伊豆

一帶刀居宅之儀、入札を以て、金五百五拾兩落札にて被仰付候、御金度々に受取申候、

右之通、明曆年中扣帳ニ御座候、

町奉行ゟ帶刀居宅の事、普請金被下べきやと相伺候伺書の寫、

覺

當正月廿八日、牢屋敷類燒に付、石出帶刀同斷に付、前々の通御普請料被下置候樣に相願申候

牢屋同心職員職掌

に付、則願書一通、幷先規段々被下候御金高、別紙書付奉掛御目候、已上、

四月　　中山出雲守
　　　　大岡越前守

覺

一金四百五拾兩　拜領仕候
三十九年以前壬戌年〇天和二年牢屋敷類燒にて、住居燒失仕候節、

一金參百兩　同斷
貳拾三ヶ年已前寅〇貞享三年九月、居宅類燒仕候節、

一金四百兩　同斷〇中略
拾八年已前未〇元祿十六年十一月、居宅燒失の事、

右之通御役宅、私住居類火仕候節、度々爲御普請料御金被下、依之此度も、自分居宅普請仕候儀難相成奉存候間奉願候、已上、

子四月〇享保五年　石出帶刀

右之書付、上聽に達しけるが、此度は如何御評定ありてや、金百兩下されける旨、同月十四日、井上河内守殿、越前守〇大岡忠相、町奉行、へ仰せ渡され、同十五日に御金請取之、

〔吏徵別錄下御目見以下〕牢屋同心　起立未詳、明曆二年丁酉三月、四十人あり、天和三年癸亥、增十員、合五十人、

〔市尹秘錄〕百姓牢相立候儀幷同心增人之事

一百姓牢相立候節、帶刀組同心、新規御拘入增人八人、

右帶刀組五拾人有之候處、都合增人とも五拾八人極る、

〔牢獄秘錄〕一牢屋同心五拾六人之內

鎰役貳人此節は谷川藤藏高松清次郎　同助四人

數役壹人牢屋にてかぞへ役と云、敲候時、數とりの役也、此節は石江小市と云、當時は打役かくり上り中安兵助勤之、

打役四人拷問之時打役也、敲之時打也、此時之打役、中安兵助、高野粂助、杉本入十郎、吉田留吉、四人也、

小頭貳人是總牢之番人之小頭也、此節篠原三次郎、河原林甚四郎、此兩人也、下當番所江、晝夜壹人づゝ相詰、平當番五人相詰る也、交代は每夕七ッ時也、此時牢內之科人數をかぞへ、總牢人

を請取る也、但し一々牢內へ入りて相改る也、此時牢內科人之內にかぞへ役有りて、壹人壹人頭をかぞへ、私共何十何人と云、小頭承屆、留の口を出る也、此時留ノ口外サヤニ交代して歸る、

小頭壹人、平當番貳人、張番二三人加へ居る事也、總牢人數相改、無相違請取之、相濟、是迄之小頭歸る也、每日夕七時より翌七ッ時之詰也、

世話役四人、是も平當番と共に下當番所江相詰る、

平番此內にて御呼出しの時、送り迎を勤、牢內にて平當番といふ、下當番所には、平日平當番三人、世話役壹人、小頭壹人相詰、都合五人也、

〔市尹秘錄 一〕牢內取計之儀并同心勤方之事

一鎰役當番晝夜壹人宛相勤候

但御仕置者有之節、牢改之節、其外都而御用多之節は不殘罷出、

一賄役當番、晝夜壹人宛相勤申候、

一物書當番、晝夜貳人宛、

一同見習之者、晝之內貳人宛、

一本牢當番、晝夜六人宛、

一百姓牢當番、晝三人、夜四人、

一入牢之者有之節は、改番所に而鎰役共當番同心立合、囚人名前歲肩書等入牢證文に引合、相改請取、牢鞘內江入、衣服爲脫、下男に爲相改候上、牢揚屋江入候、衣類之儀は帳面に記置、翌日雙方番所江相屆、尤金子書物、其外牢內法度之品持參り候得ば取上、縣り番所江差出候、

傳馬町與

但他掛り之分は、月番之番所江差出候、〇中略

一宿元より屆物之儀、品書に掛之押切相濟、牢屋敷江持參候得ば、當番物書請取、下男に爲持參、牢番同心立合、逸々相改、牢口迄當人を呼出し、品書爲讀聞相渡候、

一朝夕食事之儀、當番同心、下男に附添相改爲入候、

一藥之儀、藥掛り下男に爲煎、一日に三度宛、物書當番之內附添參り、牢番同心立合、逸々病人名前呼相渡候得ば牢內役人取計、銘々爲用候、

但重病人、或は年番もの江は、三度に不限度々入遣し候、

一煎藥之儀、樽に入、下男に爲持、當番同心立合、一日三度宛入候事、

一買物之儀、牢內より調候品、板にきめ、當番迄差出候得ば寫取、下男に申付爲調、當番立合、逸々相改爲入候事、〇中略

一牢改之儀、毎月四度、一牢宛四人牢鞘江出し、見廻り與力、石出帶刀、鎰役立合、小頭世話役之者下男を召連、牢內江這入、法度之品幷破損所に而も無之哉、逸々爲相改候、

〔吏徵御目見以下〕牢屋同心五十八人　貳拾俵貳人扶持高　御抱場

〔市尹秘錄一〕牢番同心御宛行之事

一牢番同心貳拾俵貳人扶持宛、五十八人、

内

四拾俵四人扶持宛　鎰役貳人　増鎰役壹人

書役兼帶貳拾五俵三人扶持　同壹人　勘定役兼帶三拾俵三人扶持　賄役壹人

貳拾俵貳人扶持ッヽ　書役四人　同斷　同助役四人

貳拾五俵貳人扶持ッヽ　小頭三人　同　打役四人

貳拾俵貳人扶持ツヽ　世話役六人　同　平貳拾六人

合五拾三人

外五人分ハ、書面之通役料ニ相成相殘候、御切米拾俵、御扶持方貳人扶持ハ、皆勤褒美井辨當代ニ前々より相成候事、

〔市尹秘錄　一〕支配向起立摘書之事

高貳拾俵　貳人扶持宛　牢屋同心　五拾人

拜領屋敷　神田鍋町貳丁目　貳百九拾坪　米澤町貳丁目　三百七拾坪　橋本町四丁目　百八拾坪

高貳拾俵　貳人扶持宛　同斷　八人

拜領屋敷無之

右八人之儀ハ、安永四未年、百姓牢新規ニ相建候砌増人、

〔市尹秘錄　一〕牢屋敷始之事

一牢屋敷之儀、〇中略天和三亥年、牢屋敷內ニ罷在候同心居宅被召上、新規ニ揚座敷出來いたし、右同心江は、本石町四丁目觀世新九郎上ゲ地代地ニ被下置候處、其後南茅場町ニ罷在候町人野間屋庄之助抱屋敷、神田鍋町壹丁目西側新道と本石町屋鋪相對替相願候處、元文元辰年六月願之通被仰付、其後揚り座敷出來致し候ニ付、四拾人之外ニ、同心拾人新規ニ相增、此節より同心五拾人ニ罷成候、增拾人之同心屋敷ハ、橋本町四丁目ニ而被下置候事、

〔江都管鑰秘鑑　五〕拜領金之事

一金百六拾兩　但シ同心壹人ニ付四兩ツヽ、四拾人

右ハ御預り同心四拾人、正月十八日類燒仕候ニ付爲引料被下候分受取、銘々へ相渡申候、仍而

如件、

明暦三年酉三月　　石出帯刀

淺井治右衛門殿　疋田喜右衛門殿　加賀美金右衛門殿

牢屋下男職員
職掌

〔吏徵 御目見以下〕牢屋下男三十八人

〔市尹秘錄 一〕百姓牢相立候儀并同心增人之事

一下男三拾八人　内八人增人

右安永四未年十二月、牧野大隅守〇町奉行勤役之節申渡候事、

〔牢獄秘錄〕一牢屋下男張番といふ三十八人之内

臺所拾八人此内親方壹人、役割壹人、跡平也、水屋壹人、是は日雇にて下男にあらず、牢屋敷にて是をテンマといふ也、

藥部屋貮人毎朝牢内へ藥遣し候役也、此藥遣し候時、町同心下役壹人さし添て藥を入る也、

門番貮人牢屋裏門の番をする也

張番拾四人入牢之者有之時は相改候役也、其外御呼出し之時、縄かける役、打首之時縄かけ候役、敲有之時、手足おさへ候役、拷問之時石を抱かせ候役、届物之時、牢内へ入遣候役也、此

内親方壹人、役割壹人有之、

〔市尹秘錄 一〕下男江申渡之事

先年於牢内役人囚人共、牢囚人を爲難儀、金子持入候得ば取上、宜衣類致着候得ば押取、張番下男を賴、賣拂配分いたし、其上博奕等いたし、下男共、右衣類賣拂、或は鳥目等調遣、右之内横取いたし、又は過分之雇錢を取、囚人共、宿々江内通之手紙屆遣、彼是牢内之掟を相背、不屆至極に付、死罪又は遠島御仕置に相成候間、右躰之不埒無之様可致事、

一賄所江掛り候下男共、右御法度之趣は勿論、朝夕囚人ども、御賄手當之儀は、御定法之通急度相守、不埒無之様取計可申事、

一下男共、牢輸出入之節、當番同心立合無之候はゞ、出入仕間敷事、

右之通相心得、懈怠無之樣急度可相勤事、

右は寶暦七丑年七月相極、毎月牢屋見廻り與力、牢番同心、并下男江讀聞候事、

俸祿

〔吏徵下 御目見以下〕牢屋下男三十八人　給金壹兩貳分、一人扶持、　御抱場

〔市尹秘錄 一〕牢屋。下男之事

一下男三拾八人、壹人ニ付、給金壹兩貳分壹人扶持、

但三拾八人之内、三拾人分味噌代、一人一日錢四文ツヽ、

内

賄所七人　米舂貳人　門番所貳人　藥煎所三人　張番下男貳拾壹人　夜具持壹人

〆三拾六人

外貳人分給金は、部屋頭共、役料に差遣、御扶持方は、夜番相勤候者江、前々より加扶持に差遣候事、

牢屋見廻與力

〔江都管轄秘鑑 六〕牢屋見廻りの與力勤方御改正の事、并御褒美被下事、

聖朝の眷顧至れりといへども、猶其久敷して怠りあらん事を愁ひ玉ひて、しきりに其沙汰有けるに依て、重ねて町奉行より上書の一帖あり、左にしるす、

覺

一向後與力牢屋へ日を不定、一兩日も間を置、又は隔日、又は病人など有之節は、其時の樣子に寄、二三日も相續見廻り候樣に仕り可然奉存候、已上、

享保四亥年四月　中山出雲守
大岡越前守

右の書付、四月三日、水野和泉守殿〈老中〉へ進達しけるに、同十九日、彌のおもむきに、與力どもへ申付候樣、和泉守殿被仰渡ける、依之同月廿二日夜、出雲守列座にて、當正月より四月まで、牢屋出役の與力八人へ、その段越前守申渡し、書付の寫を添て達しける、同年十二月廿五日、出雲守詰番の處、和泉守殿出座にて、左の御書付御渡しあり、

町奉行へ

銀三枚ヅヽ　中山出雲守組與力四人

同　大岡越前守組與力四人

右同斷

右牢屋敷へ掛り、初而の儀候處、牢死の者も少く、出精相勤候に付被下之、

欠所金の内にて被相勤候

道奉行

道奉行ハ、江戸府内ノ道路水道ノ事ヲ掌ル、萬治二年始テ置ク所ニシテ、始メ四人ナリシガ、享保中、二人ニ減ジ、明和中廢セラレ、町奉行ノ所職ニ屬ス、

〔柳營秘鑑 四〕諸御役人員數井組支配

一道奉行貳人〈役料六十人扶持ヅヽ〉

〔延寶八年江戸武鑑〕道御奉行

〈六百石 かうじ三丁目〉横山半右衛門殿　〈三百九十石 四つや〉山寺彌大夫殿

〈七百石 三ばん丁〉深津長右衛門殿　〈五百石 表五ばん丁〉美濃部一學殿

〔吏徴附錄 殿職〕道奉行　若年寄支配　御扶持方六十人扶持　萬治二年己亥月日、始置四人、〈荒井八郎兵衛、小笠原久左衛門、美濃部勘兵衛、大久保新六郎、新番、大御番〉御番出役　元祿六年癸酉七月十日、上水方支配、　正德二年壬辰二月廿六日、與力二騎同心十人附す、

享保五年庚子八月廿七日廢(人四) 同年十月廿日再置二人(有田忠左衞門、進喜太郎、御小性組出役二年宛可勤旨)、各三十人扶持、 同六年辛丑五月日、廢同心、 同年閏七月十六日、各六十人扶持、 元文四年己未八月二日、神田玉川兩上水町奉行支配、 明和五年戊子九月五日廢(小笠原權九郎、久能猪兵衞、各賜時服三)、

〔落穗集追加四〕御使役の事

一問曰、右の伍の字の差物の義は、御使番衆計りにかぎりたる事の樣に相心得罷在候所に、御道奉行衆四人の義なり、指物は伍の字同筆に有之と申にも子細有之候事や、答曰、我等承り及たるは、道奉行と有之、御役の義は、小田原御陣の節迄は御家に無之處に、慶長五年、關がはら御陣前、御備先道ばし見積りの御役人無之てはと有之、御評議を以て、御使番衆の中より、庄田小左衞門殿を以て御道奉行役を被仰付所に、小左衞門殿被申るゝは、御奉公の道は、何事を相勤申も同然の義なれば事畏候、乍去人には病煩ひと申義も無くて叶ひ不申處に、一人役と申ては迷惑仕候間、同役を可被仰付との事に候へ共、御陣先差當御入用の御使番衆を被仰付義も罷成がたく有之ゆへ、大御番衆の中より、武功の人を御えらみ有之、小左衞門殿の御役被仰付るゝを以て、右の仁も伍の字の指物にて被相勤、御陣相濟候以後、庄田殿には、元の御役御使番へ歸役被仰付候得共、御道奉行と有るは、永々共に無之ては相叶申間敷と有之義にて、又大御番衆の中より被仰付、此仁も先役に準じ、伍の字の指物にて、大坂兩度の御陣をも相勤被申候より以來、道奉行衆も伍の字の指物に有之となり、

〔仕官格義辨〕道奉行屋敷改之事

問云、道奉行屋敷改ハ、昔ゟ兩御番之假役ニ而候哉、答云、○中略道奉行ハ先規ゟ享保之初迄ハ、新御番抔ゟ出役ニ而、本役ニ而候處、同五子年九月廿七日、道奉行荒川八兵衞、小笠原久左衞門、美濃部勘兵衞、大久保新六郎御免、元御番江歸番被仰付、御小性組ゟ、有田忠右衞門、進喜太郎、兩人被仰付、

兩御番假役ニ成、二年宛相勤候處、此已後三年目ニハ御免ニ而、又外之衆被仰付候、

〔東職記聞 二〕道奉行二人

兩番組之兼職、而掌東都府內道路事也、

〔常憲院殿御實紀 二十八〕元祿六年七月十日、府內上水、今まで町奉行の所屬たりしが、此後道奉行に其事をつとめしむ、

〔大成令 五十六〕元祿六酉年七月

一神田上水道、玉川上水道、兩水道共、道奉行衆御支配被仰付候間、向後水道之儀ニ付、御訴訟仕候儀有之候ハヽ、道奉行衆江申達、御差圖を請可申候、此旨町中不殘可相觸候、以上、

七月

〔大成令 五十六〕享保五子年十一月十二日

覺

一水道普請之儀、只今迄、水元町人江相對にて普請等致候儀も有之候、向後者輕き普請にても、道奉行江相達、差圖次第普請可被致候事、

一水道水筋致見分、屋敷之內井戸、道奉行見分仕儀も可有之候間、斷次第爲見可被申事、

右之通可被相觸候、

十一月

〔德川禁令考 十五 町奉行〕元文四己未年八月闕日

兩水道町奉行支配可致旨達

町奉行江

神田玉川上水、向後町奉行支配、道奉行ハ道計可相勤旨被仰渡、

八月

按ニ、府下道路ハ、萬治ノ頃ヨリ、道奉行ヲ置テ之ヲ撿ス、元祿ノ頃ヨリ道奉行ヲシテ更ニ神田玉川上水兩水道モ兼子撿視セシム、然ルニ此回之ヲ改革シテ、兩水道ハ町奉行ヘ撿視セシム、巳來聯綿シテ、明和五年ニ及ビテ再ビ變制アリテ、道奉行井町奉行兼勤ヲ解キ、兩務ヲ合セテ普請奉行委任トナル、

延享元甲子年五月闕日

道筋取計方之達 前考ニ云フ如ク、此前道奉行アリテ其時務ヲ執ル、此ニ至テ其務漸ク岐ヲ爲ス、此達書アル所以ナリ、

町奉行江

道筋之儀ニ付、町奉行道奉行取計之儀者、前々之通雙方申談可被取計候、尤新規之儀無之樣ニ相心得、若差支候儀有之候時者、猶以熟談仕、古格ニ不違樣ニ相心得、萬端差支無之樣ニ可被致候、

五月

〔浚明院殿御實紀十八〕明和五年九月五日、道奉行つとむる書院番久能伊兵衛宗房、小性組小笠原權九郎信安にも時服三づゝたまひ道奉行の職を免さる、

〔吏徵附錄廢職〕道奉行 小笠原權九郎、久能猪兵衛、各賜ニ時服三ヲ、 明和五年戊子九月五日廢

〔附〕本所深川道路役人

本所深川ニハ特ニ本所奉行、本所道役、本所深川屋敷改等ノ役人アリテ、宅地、道路、水道等ノ事ヲ掌リシカ、本所奉行ハ享保四年廢職トナリ、其事務ヲ普請奉行、勘定奉行、町奉行ニ分屬ス、

本所奉行

〔市尹秘錄一〕本所見廻リ勤方之事

享和元酉年書出

一本所之儀ハ、往古兩御番之内ゟ、本所奉行と申、貳人宛有之、武士屋敷ハ一圓、町屋前通リ、河岸橋橋共、支配被致候、

〔憲教類典三ノ三十三屋敷〕元祿十五壬午年九月

覺

一兩國橋之側札ハ、本所奉行ゟ建させ可レ申候、〇中略

右本所奉行相伺候ニ付、此書付之通相達候之間、可レ被レ存二其旨一候、以上、

〔吏徵附錄廢職〕本所奉行　萬治二年己亥二月、始置二二員一、德山五兵衛、山崎四郎左衛門、享保四年己亥四月三日廢、向後屋敷之分、御普請奉行、道橋水道は、御勘定奉行支配、

〔嚴有院殿御實紀十九〕萬治三年三月廿五日、書院番德山五兵衛重政、山崎四郎左衛門重政、本所宅、地、井に溝渠の奉行命せらる、

〔延寶三年江戶鑑〕本庄御奉行

三千石曾根源左衛門殿　三千五百石中坊長兵衛殿

〔延寶八年江戶鑑〕本庄御奉行

林權右衛門殿たや丁　三千五百石中坊長兵衛殿するがだい下

〔正德四年武鑑〕本所御奉行平番假り御役

二千石小笠原外記　千九百石大久保伊左衛門

〔市尹秘錄一〕支配向起立摘書之事

本所道役　清水八郎兵衛〇中略

貞享元年本所奉行相止、元祿六酉年迄八年之內、地方觸役相勤罷在候處、又候同年本所奉行被レ仰付候ニ付、如二先規一道役被二仰付一、

〔有德院殿御實紀八〕享保四年四月三日、本所奉行の職を停廢せらる、

〔德川禁令考十五町奉行〕享保四己亥年四月闕日

本所道役

本所深川屋敷改

本所奉行廢止ニ付達文〇按略

町奉行江

本所奉行相止候、町方之儀、只今迄之通町奉行可ㇾ有ㇾ支配候、

四月

〔市尹秘錄 一〕支配向起立摘書之事

勤金拾兩　本所道役　清水八郎兵衛

拜領地本所龜澤町　拜借地本所一ツ目百六坪

同　宮城善兵衛

勤金拾兩

拜領地本所龜澤町　拜借地本所松井町百九拾四坪

右道役共儀、萬治二亥年初而本所御取立御普請之節より被ㇾ仰付、貞享元子年迄貳拾六年本所奉行支配相勤候處、同年本所奉行相止、元祿六酉年迄八年之內、地方觸役相勤罷在候處、又候同年本所奉行被ㇾ仰付候ニ付、如ㇾ先規道役被ㇾ仰付、享保四亥年迄貳拾七年、本所奉行支配相勤、同年本所奉行相止、其節より、町方支配ニ罷成候事、

〔御役所持場町法改正一件留書〕町奉行支配

本所道役　清水八郎兵衛〇中略

同　宮城善兵衛〇中略

右兩人、安永六酉年三月、願之通苗字御免、尤道役替候節ハ、名乘候譯に而は無之、

〔甘露叢 五十九〕元祿九年七月晦日、新規に深川本所改被ㇾ仰付、〇中略

覺

一今度本所深川屋敷改被ㇾ仰付候間、向後求屋敷、地子屋敷等、作事仕候者、先達而屋敷改へ相伺、可

被任差圖事、

一只今迄有之屋敷坪數、幷屋作坪數之書付屋敷改之方へ可被差出事、

一寺社百姓町人其外抱屋敷家作改之儀は、江戸廻之通候事、

右之通被仰出候者也、

子七月晦日

官位部五十八

德川氏職員七

勘定奉行

勘定奉行ハ、民治、財政、爭訟ノ事ヲ掌リ、郡郷吏員ノ能否ヲ監察ス、故ニ全國ノ郡代、代官、及ビ切手米手形奉行、藏奉行、繩竹殘物奉行、金奉行、錢奉行、林奉行、漆奉行、油奉行、川船奉行等ヲ支配シ、又驛路ノ事ニ關スル道中奉行ノ職ヲ兼ヌ、時ニ由リテ三人若シクハ五人ヲ置クコトアレドモ、大抵四人ヲ定員ト爲シ、内二人ヲ勝手方、二人ヲ公事方トシテ、一箇年毎ニ互ニ相交替シ、各、月番ヲ定メテ政務ヲ行フ、勝手方ハ、專ラ租税ノ徴收、米錢ノ出納、金銀銅山、諸役人ノ知行割等、總テ幕府ノ民政財務ニ關スル一切ノ事ヲ掌リ、公事方ハ、專ラ關東八州ノ公私領、及ビ關外公領ノ訴訟ヲ聽斷ス、公事方ノ、其支配下ノ訴訟ヲ聽クハ、月番ノ宅ニ於テスレドモ、事ノ他ノ支配ニ關聯スルハ、評定所ニ於テ合議裁決スルコト、寺社奉行ト異ナルコトナシ、評定所ニ會スル役人、又ハ其聽訟ノ規定等ハ、評定所役人篇及ビ法律部下編ノ聽訟篇ニ見ユ、此職ハ三千石高ニシテ、從五位下ニ敍シ、役料七百俵、手當金三百兩ヲ給スルヲ例トス、屬僚ニ勘定組頭、勘定衆アリ、勘定組頭ハ十餘人アリ、勘定衆ヲ指揮シテ、其事務ヲ監督ス、三百五十俵高ニシテ、役料百俵ナリ、勘定衆ハ御殿詰、勝手方、取箇方、伺方、帳面方、道中方、評定所留役評定所留役ハ、評定所役人篇ニ在リ、等ノ諸課ニ分レテ、其數二百餘人アリ、通常百五十俵高ニテ、別ニ役扶持ヲ給ス、其他支配勘定アリ、勘定出役アリ、

名稱

抑、勘定奉行ノ職ハ、德川氏ノ初世ニ在リテハ、松平正綱一人ノ掌ル所ナリシガ、寬永ノ末ニ、曾根、伊丹、杉浦、酒井等ノ諸氏、同時ニ之ニ補セラレシヨリ、其職制モ粗定マリ、享保六七年ノ頃ヨリ、勝手方、公事方ヲ分チテ、其分掌益明確トナリ、又勘定所ヲ營中ト大手門内トニ置キ、營中ノ勘定所ニテハ、一般ノ財政ヲ總統監督シ、此ニ出仕スル役人ヲ御殿詰ト云ヒ、大手門内ニテハ、專ヲ地方ノ財務ニ從事シ、之ヲ下勘定所ト云フ、其他吉凶ノ大禮、工作營造、内亂外交等ノ如キ、財政ニ關スル重大ノ事件アルゴトニ、必ズ臨時ニ其掛リヲ命ゼラレテ、其議ニ參與スル重職ナレバ、其人ヲ得ルト得ザルトハ、幕府勢力ノ消長ニ關係シ、萬民ノ休戚ニ影響スルヲ以テ、屢令ヲ下シテ其過誤失錯ナカランコトヲ戒飭セシガ、明治元年ニ至リ、遂ニ寺社奉行、町奉行ト共ニ廢止セリ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御勘定奉行 舊稱二御勘定頭一

〔大猷院殿御實紀三十三〕寬永十三年、此年〇中略曾根源左衞門吉次は惣勘定頭となり、〇下略

〔延寶六年江戶鑑〕御勘定頭

〇按ズルニ、勘定奉行ハ、初メ勘定頭トモ稱シテ、寶曆頃迄ノ諸記錄ニハ、兩稱並ビ行ハレシガ、其ヨリ後ハ、專ラ勘定奉行ト稱スルニ至レリ、

職員 職掌

〔柳營秘鑑四〕一諸御役人員數井組支配

一御勘定奉行四人

〔東職紀聞一〕勘定奉行四人　從五位下

統領諸州代官、掌勘撿御領所之租稅以下一切出納之事、聽關八州以內人民訴論事之職也、〇中略代々記曰、貞享五年七月、松平美濃守始稱孫大夫補之之時、帶道中奉行、爾來尙帶之、

〔折たく柴の記中〕當時〇寶永八年御勘定所と申すは、古の代に有ては、大禹伯益などの司り給ひし

所、三代の時の大司空の職掌にて、漢唐宋明の代にては、皆々重んじ設けられし官職を兼し所にして、我朝の官朝に比し候にも、民部大藏刑部等の三省、幷勘解由使等、四ッの官を兼あはせ、其下に屬せし官も、六ッも七ッも司りし所、天下の財を生じ、出すも納るも、此御役にかゝりぬれば、六十餘州の人民の樂しむべきも、苦しむべきも、此職を奉れる人々の、其人を得と得ざるとによりて、是らの劇務備らんことを一人に求むべからず、

〔有司勤仕錄〕御勘定奉行

一四人之內、公事方貳人、御勝手方貳人と分て、公事方は諸國御代官之公事等掛之、式日立合內寄合等、町奉行と同じ、公事方御勝手方共に月番有之、又臨時御用掛有之、道中奉行加役也、

〔憲敎類典二ノ五御役〕寛永十二乙亥年十一月十日

一關東中御代官方幷百姓御用訴訟之事、

松平右衛門大夫〇正綱　伊丹播磨守〇康勝　伊奈半十郞〇忠治　大河內金兵衛〇正綱　曾根源左衛門〇吉次、以上五人、並勘定奉行、

右五人、一月づゝ、貳番にいたし可承事、

〔憲敎類典四ノ五上評定〕寛永十二乙亥年十一月

一關東御代官幷百姓御用承候日

九日　十九日　廿七日

〔勸契備忘記上〕享保七寅年

御勘定奉行吟味役共御勝手向御用分候而可相勤旨御書付

一向後御勘定奉行吟味役共ニ御勝手向御用方江兩人、公事方江兩人、壹ヶ年替相勤、御勝手向江懸り候兩人は、公事方江懸り不申、評定所江も出座不及、評定日も御城江可罷出候、公事方勤候兩

人、御勝手向之儀懸り申間敷候、評定所江も公事方計出座可ㇾ仕候、〇又見二有徳院殿御實紀一

〔享保集成絲綸錄十八〕正保三戌年五月

一御奏者番井〇〇〇御勘定方四人之役人、〇中略日來御奉公之儀、朝四ッ以後、登城晩は八ッ以前に退出仕候事、不ㇾ應二貴命一候之間、自今以後、可二相嗜一之旨、上意之趣、酒井讚岐守〇忠勝傳レ之、

〇按ズルニ、此ニ御勘定方トアルハ、御勘定奉行ヲ云フ、

〔勘契備忘記上〕享保八卯年　御勘定所勤方之部

御勘定所勤方之儀ニ付御書附〇中略

一御勘定奉行、唯今迄公事方一ヶ月三日、御勝手方御城退參ゟ一日宛、內寄合いたし候得共、勝手方も、朝ゟ壹ヶ月ニ一度ヅヽ內寄合いたし、御用向得與相改、右三日程之內、公事方も一日宛一ヽ所寄合、諸事御用申合可ㇾ然事、

公事方は有來之通、壹ヶ月三日宛、御勝手方も向後一ヶ月兩度ヅヽ、右之通內寄合仕、此內ニ一日ヅヽ、公事方共不ㇾ殘寄合候樣可ㇾ仕候、日限左之通、

公事方　六日　十八日　廿七日

御勝手方　七日　廿六日

〔明良帶錄後篇〕御勘定奉行

公事方は、御領之百姓之公事、御領計りにてなく、惣て百姓方の公事、關八州の分は、多く江戶江持出す、地頭にて自捌難ㇾ屆は、添翰添使者を以差出す、駈込訴訟は當人留置、其地頭の家來呼出し引渡す、目安相渡す、御老中方駈込訴も同斷、誰殿御差圖と申渡す、差越訴ハ取上に不ㇾ及差戾す、無名之訴狀燒捨る、

〔憲敎類典四ノ五上評定〕寬文八戊申年七月廿二日

覺

箱根碓氷井白川關を限〇中略關より內、勘定奉行裏書可被致之、但遠國よりの訴狀にても、御藏入方よりの上ヶ目安裏書は、勘定奉行ゟ仕、寺社奉行江可相達事、

寬文八申年七月廿二日

〔敎令類纂二集六十五〕享保六辛丑年閏七月

公事方江可付分

支配之面々急養子、總而急變有之類之事、

御代官、其外支配之諸役所より、當座注進之事、

御仕置筋注進事

御料私領共、公事訴訟之事、

所々私領方より、百姓仕置等仕置之事、〇中略

閏七月

右之通被仰出候間、向後其心得可有之候、以上、

〔御張紙留上〕御勝手方公事方共、御代官井御預所出入訴訟等之儀、支配限り引請吟味仕候處、御勝手方公事方相分候詮無御座、入交候ニ付、向後左之通吟味可仕候、〇中略

公事方に而吟味可仕分

野論、山論、境、質地、借金、喧嘩口論、人數、惣而御勝手向へ不拘出入訴訟ハ、公事方ニ而吟味可仕候、

右之通、双方引分遂吟味候樣仕度奉存候、尤御箱訴井駕訴等、吟味仕候樣被仰渡、御下ゲ被遊候節も、前書之趣を以取計可申候、依之奉伺候、以上、

巳〇寬延二年三月

〔明良帶錄後集〕御勘定奉行

御勝手方は、一切御入用筋、國郡の事迄取扱ふ、關東筋に知行有之小身之衆、川欠自分普請に及がたき所は其頭へ相願ひ、頭より御支配方へ相願ひ、此場江下り、見分を差遣し、御普請有之處、當時御儉約中故、相願出申間敷旨、併一村亡所に及ぶ程之事にて、自力に難及は、相願候はゞ、見分之上可被仰付旨也、且高掛り、國役金、類燒拜借金、遠國拜借金は、此場之懸り、納證文は下勘定所江差出す、其外大名衆江國替所替等は、彼之司に被仰渡ありて、家來ゟ下勘定所江出て委細伺事あり、〇中略御殿詰御勘定、同吟味役などゝて有、御代官筋より段々歷昇したる仁は、利に敏き故、漢公孫弘が三計之ごとき事を考へて御益筋と號、種々上計す、

〔教令類纂二集六十五〕享保六辛丑年閏七月

御勝手方へ可付分

御代官所御取箇、幷に在々御普請方類之事、

金銀米錢納拂一件之事

知行割御代官割之事

右之外にも、當座事にて無之品々の事、

閏七月

右之通被仰出候間、向後其心得可有之候、以上、

〔寶曆集成絲綸錄十六〕延享三寅年九月

一金銀銅山懸り　一長崎懸り　一村鑑　一佐倉小金牧　一新田方懸り　一撿地奉行

右之分、只今迄神尾若狹守〇勘定奉行一人ニ而相勤候處、向後は御勝手方之者不殘懸ニ可相心得候事、

御勝手方も、只今迄若狹守一人ニ而取扱候、是又此以後、御勝手方之者不殘取扱、書付等出候も、連名ニ而可被差出候、尤重キ御用筋、支配御役替、御代官所替等之書付は、御勘定奉行不殘連名ニ而差出可被申候事、

右之趣可被相心得候

九月

〔吹塵錄徳川氏二十九〕御勘定所掛分ケ

御勘定奉行掛り

長崎　浦々并浦賀御備場　海道筋川々　川々御取締　諸向御貸附　御儉約　淺草本所御藏

金座　猿江御材木藏　植物　地誌掛　御國高　房總御備場

〔御張紙留上〕御勝手方公事方共、御代官并御預所出入訴訟等之儀、支配限リ引請吟味仕候處、御勝手方、公事方相分候詮無御座、入交候ニ付、向後左之通吟味可仕候、

御勝手方ニ而吟味可仕分

御取箇筋ニ拘リ候儀、又ハ地方役人村方江引合私慾ケ間敷儀、都而御入用向并村方勘定筋ニ拘リ候願、御勝手方ニ而吟味可仕候、○中略

巳○寛延二年三月

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和二酉年三月

御勘定奉行江

御勝手方御勘定奉行之儀者、御取箇筋并御普請所、金銀納拂、知行割御代官所割之儀は勿論、都而御勝手向江拘リ候願等は致吟味、双方相糺候類者、公事方御勘定奉行可致吟味事に候處、近來は用水論山論等茂御料所加り候得ば、御勝手方ニ而吟味いたし候樣相聞候、左候而者、公事方御勘

定奉行者、地方ニ不レ携様相聞、筋違之事ニ候、以來は前々之ごとく、御代官所御取箇、幷在々御普請之儀、金銀米錢納拂一件、知行割、御代官割、新田又は諸運上願之類、御勝手方ニ而吟味いたし、其内に茂若出入幷双方打合相紛候類者、御勝手方ゟ引渡、公事方に而吟味可レ被レ致候、尤御代官ニ而吟味之上、奉行所江差出候出入者勿論、願筋に而茂出入立候事は、公事方に而吟味可レ有レ之事に候、

一駈込訴之儀者、其支配御代官を差越候事ニ候間、御定之趣を以取上申間敷儀に候處、近年御勝手方に而は取上相糺候も有レ之候故、百姓共も自然與其支配之御代官を不レ恐、諸事輕々敷相心得候ゟ奉行所に而申付候儀を茂押返相願易様可レ成行哉、是以如何之事ニ候、向後御代官を差越駈込訴いたし候類、一切に不レ取二上之一、御代官江引渡可レ被レ申候、若御代官幷手代等江拘り、難二差置一品茂候ハヾ、其節評議之上取計候様可レ被二相心得一候、

三月

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年九月

御勘定奉行江

一諸向より差出候諸書付下ゲ候節、評儀幷了簡書付、扣ニ不レ及下ゲ候、手元江計書付差出之事、

一組支配御役出之儀書出候節、月番江出候はヾ、別段御勝手などへ出候ニ不レ及候、尤其向々江も可レ被レ達候事、

一老中之内、掛り并取扱極候御用向屆書等、是又掛り江計差出外、扣ニ不レ及候、尤其向々江も可レ被レ達事、

一諸拜借、御手當、國役、普請、扶食、種貸、御足米、上納差延、助鄕免除、右之類、支配限同斷候、尤其向々江も可レ被レ達事、

但扣入用之節は、沙汰次第追而差出之事、

一惣勘定帳幷運上帳は、老中若年寄御勝手懸り江一通ツヽ可差出事、

一諸向より出候斷物、支配江一通沈一通可差出候、尤其向々江も可被達事、

一平生差定り、御入用懸江差出候御入用書附、支配限ニ而扣不及、是迄之通ニ候、尤其向々江も可被達事、

一御仕置伺扣、若年寄江差出ニ不及事、

右之通向後可被心得候、其外右に准じ候儀は、取調可被伺候、且席拜領物、被下金等斷書付、以來若年寄ゟ計書付一通下ゲ可申候間、其向江其段をも可被達置事、

九月

〔教令類纂初集三十九〕正德三癸巳年四月廿三日

一御勘定役所ハ、御財用出入之事を承られ、公儀之御用、支配之御役其數多所にて候、然るに近世の風俗に習ひ、古來の法式に違ひ候事有之、或は御代官を始メ諸御役所之御勘定仕上ゲ、或は御加增所替之知行所割方、都而此等之事に付而、御勘定組頭幷に御用懸之面々、其吟味等之次第、正路ならざる由風聞候、もし其事の次第、風聞の如くにおゐては、甚以不可然事共ニ候、自今以後、御勘定奉行吟味役中、此旨を被存、御勘定所組頭以下之役人中は不及申、各召使候下々に至る迄、常嚴密に法式を相正され、依估贔屓賄賂財利之事、一切に禁絕せられ、公事訴訟相滯る所無之樣に急度其沙汰可有事、

一諸國御料所御仕置を始メ、地方御用吟味之次第等、御代々御條目定書、重疊分明候處、是又近世に及び、違法の事ども有之候ニ付て、此度御代官中、並諸國御料所百姓之制條を相定られ候、御勘定奉行吟味役中、此旨を存られ、自今以後、御年貢取立テ、上納未進弁納、諸國之運漕、御藏之納方、並に在々所々御普請之事等を始て、今度相定御條目に准じ、御勘定所吟味の次第、常々怠惰

有間敷事、

一御代官中、其支配所並に其役所仕置之樣子、御年貢取立、上納之次第等、すべて御役儀の勤方宜敷面々は、其支配之地をも增加られ、其所がら宜敷地へも引替られ、また御役儀勤方惡敷面々も、其沙汰可有之候、御勘定奉行吟味役中、此旨を被存、御代官中勤方常々吟味可有事、

附御代官支配所之中、或は國郡相隔り、或は方角相違ひ、常々之仕置、年々之撿見等、甚吟味に及び難く、其支配所百姓共、公事訴訟有之時、難儀之事も候由相聞候、是等事、御勘定所におゐて僉議之上、自今以後、其便不便、支配所無之樣に、其心得可有事、

右之條々、宜被得其意候者也、

正德三癸巳年四月廿三日

御勘定奉行

御勘定吟味役　右令條錄

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和二酉年三月

御勘定奉行江

惣而御勘定奉行之儀者、御勝手向御役所相勤候事故、別而御用向、後々共取〆り行屆候樣可致儀、勿論之事ニ候、然處御益之儀存付、又願人有之、吟味之上被申聞候類共、御奉公筋ニ茂可相成哉與後來之儀を不弁、品能書取被申候類茂有之候而は、他役與違、何茂之御役儀ニ而被申聞候儀故、紀方行屆候上に而被伺候事與而已相定、書面之上に而差圖相濟候茂可有之哉、且又不依何事、譬者御益筋之儀ニ付、何茂江存寄相尋候者、其筋難成儀ニ候哉、以來外之障不取〆り等ニハ相成間敷候否之儀、相尋候儀ニ候處、申渡候事故、及斟酌十分ニ存寄ニ不落儀茂、宜書取被答候儀茂有之候而者、後々取計差支茂難計、又は被仰付候儀、間もなく戻り候類茂出來候而者、分明ニ被答候ニ者

無之、其時々之事ニ拘候に而如何に候、向後何茂ゟ被申聞候儀幷相尋候類共、聊不取飾、末々取〆り之儀共ニ得与被相考、善悪可被申聞候、尤御益筋申立候者之申口ニ乗、等閑ニ取計候儀無之様可被致候、畢竟何茂之御役筋ニ付而、万事相尋事ニ候間、此處無違失相心得、随而者諸向懸合等之儀も、卒爾之儀無之様可被心得候、

三月

〔憲教類典 五ノ一 御勘定〕天明八戊申年四月

松平越中守殿 定信 御渡

御勘定奉行 江
同吟味役

一奉行吟味役、致一和被申候事専一ニ候、併混雑不致義簡要ニ候事、

一貴權を憚候様成義、此節者無之哉ニ候、行末右體憚り候而、曲尺厘毛之たがひ有之候へば、末に至り候而は丈尺之たがいに相及候事、

一姑息にひかれ候而、支配之者曲直を不相糺様ニ而は御不〆り之本に而候、不埒之筋表立候而は、事により御損失にも可相及哉ニ付、成丈ケ補ひ候心得、万一有之候而は不相濟候、御政事之行立候は、上之御勤にて候、御損失之御厭ひは無之事に而候、御政事之筋にも、御儉約之勘弁有之儀は無之事、人々懲戒致不申候はゞ追々御不〆りに相及候、右之御費は成丈ケ補ひ候はゞ厭ひ候御損失ゟ、はるかに増り可申候、

一支配下等之不宜儀申立候は、恐入候事に存られ候はゞ、猶又可申上候、可申上を恐入候とて、成丈不申上候時ハ、恐入候ケ條増し可申候、

一寛大と申は譯之有之事ニて候、慈悲と申も、是亦同斷、寛大水之ごとくに候得者、なれやすくして罪にかゝり候もの多候、今いふ寛大は不仁之本にて候、支配引立候者善者善悪は悪、よろづ

實意に申され、貴權に不レ被レ憚、曲直分明に有レ之事、支配引立候に相當候事、各より表立沙汰致候ては、行屆ざるに當り可レ申事ニ付、黜陟出精してゑらび專一之事、

一諸向ゟ申出候儀、評議かけ候事、此節者樣子宜存られ候、何れにても宜敷と申程の事ニ候者初め申立候、諸役人見込之通ニ立て候樣尤にて候、其上、業にゟ如何しくは、其節可レ被二申聞一候、さればとて御勘定所評議いつはいに不レ盡樣にとの事には無レ之候、

一言路を塞ぎ不レ申、幷剛直之言はそだて候て、人々意味合事に馴し不レ申樣に取立候事、專一にて候、右爲二心得一申入候、

四月廿三日〇又見二天保集成綸錄、寛政明典錄一、

〔德川禁令考二十四經費改革〕天保十四卯年十一月二日

御口達之寫

御勘定所之儀は、年來流弊ニ而、兎角風俗不レ宜趣ニ相聞、奉行之趣意不二相用一、或奉行を差越、申聞候者も有レ之哉ニ相聞、尤、是迄奉行も未熟故之儀ニハ候得共、以之外之事ニ候、向後右樣之者も有レ之候はゞ得と申論、若不レ用ニおゐては、其旨可レ被二申聞一候、奉行之儀ハ、此度御主法萬端御取締筋之儀ニ付、萬一支配內不服之者有レ之、是迄之風俗にて誹儀を相計候共、御取用は無レ之候間、十分ニ踏込永久之御爲筋、且御取締之儀、猶厚心附取扱可レ被二申付一候、尤自分共も得と打掛り候間、誠忠を可レ被レ盡候事、

〔駿河土產五〕關東御入國後、江戶御藏米過レ多候段、御勘定方より申上候ニ付、權現樣〇德川家康御不興の事、

一權現樣御代、江戶御藏に納米多過候故、欠米等ども多く、其上諸國の御代官所より御當地まで運送の御失却も有レ之、旁以御費に御座候間、江戶御藏米之棟數を御へらし被レ遊候へば、大分の

御徳用たるべき旨、御勘定方に而被相考、其趣を御勘定頭衆ゟ被申上候得ば、以の外御機嫌宜しからずして被仰候は、藏數多く候へば、欠米等も多く我等損と有事は兼而知りたるなれども、萬一之義も出來、遠國之新穀、當地江運送の成り兼候ごとくの義も有之時は、當時米の直段なども高直に成、諸方ゟ集り居たる江戸中の諸人の食物に難儀いたす樣成事もなくては不叶、左樣之節は、入用之爲を考へ思ふに付て、米藏を多く詰置する義也、平勘定之者などは其通り、最早天下の勘定頭とも言るゝ者抔が、ケ樣の義を我等之爲也と言聞するごとくの義が有ものかとの上意に而、殊之外御𢣷かり被遊候と也、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年七月廿六日、諸國巡察の輩暇賜ふ、○中略關東は○中略勘定頭曾根源左衞門吉次、○下略

〔營中御日記十二〕寛永十二年四月十四日、御勘定頭ゟ佐渡國金銀支配之事、兼可勤旨被仰之、御勘定頭は松平右衞門大夫、○正綱酒井紀伊守、○忠吉杉浦內藏允、○正友伊丹藏人○康勝也、

○按ズルニ、大猷院殿御實紀ニハ、伊丹康勝一人ニ命ジタル事見エテ、之ヲ寛永十二年五月二十二日ノ事トシタリ、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年、このとし勘定頭曾根源左衞門吉次は、評定の席に列り衆訴をきかしめらる、

○按ズルニ、是勘定奉行ノ訴訟ニ預リシ事ノ見エタル始ナリ、

〔大猷院殿御實紀四十二〕寛永十六年十二月十二日、庖所費用の事査撿すべき旨、勘定頭伊丹順齋康勝、曾根源左衞門吉次、留守居牧野內匠頭信成、杉浦內藏允正友に命せらる、

〔嚴有院殿御實紀十五〕萬治元年三月、此月、日本橋の四日市と銀町と兩所に長堤をきづき松を植しめらる、勘定頭その事をつかさどる、

〔常憲院殿御實紀六〕天和二年十一月廿四日、勘定頭中山主馬信久、來年日光山御法會の事命せらる、

○按ズルニ、勘定奉行ニ法會ノ事ヲ命ゼラレシ例猶ホ多シ、今一々錄セズ、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年十一月七日、勘定奉行松平美濃守重良、大目付神尾備前守元清と共に驛路の事奉るべしと仰付らる、

〔常憲院殿御實紀四十〕元祿十二年十一月廿六日、この日、寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭へ令せらるゝは、火附盜賊考察の兩加役、今より後停廢せらるゝにより人々緩怠の心おこるべければ、前に加役あらざりし時のごとく心得、相互ひに所管の地點撿せしむべしとなり、

〔憲敎類典四ノ五上評定〕元祿十二己卯年十二月

只今迄、盜賊改火付改方江訴出候類之儀、○中略御料は御代官ゟ御勘定奉行江可申達候、○下略

〔有章院殿御實紀五〕正德三年八月五日、勘定奉行大久保大隅守忠香も、万石以下采邑撿點の事をゆるさる、

〔有章院殿御實紀十四〕正德六年閏二月九日、勘定奉行大久保下野守忠位、高札の事司るべしと仰付らる、

〔有德院殿御實紀八〕享保四年四月三日、本所奉行の職を停廢せらる、よりて○中略道路橋梁水道のことは、勘定奉行より指揮すべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀十五〕享保七年八月九日、勘定奉行○中略駒木根肥後守政方、筧播磨守重賢は、訴訟のこと奉はり、各隔年に交替して司らしめらる、

〔勘契備忘記上〕享保十九寅年

京都町奉行支配御代官地方御用向者、御勘定奉行可取計覺、

一京都御代官小堀仁右衛門、鈴木小右衛門儀、御代官所公事訴訟〈町奉行支配〉并自分江懸候儀者、唯今迄之通、京都町奉行、御取箇在方御普請、夫食種貸、其外地方江懸り候御用向者、向後町奉行江不ㇾ及ㇾ相達、御勘定奉行江両人ゟ直ニも相達、御勘定奉行取計可ㇾ申事、

寅八月

〔惇信院殿御實紀七〕寛延元年六月廿日、この日勘定奉行杉浦河内守信正に、長崎奉行の事をかね行ふべしと命せらる、

〔寶曆集成絲綸錄二十二〕寶曆七丑年六月

一色周防守

細田丹波守〇二人並勘定奉行江

川々御普請御用被ㇾ仰付候ニ付、此節彼地江被ㇾ相越候ニハ不ㇾ及候、於ㇾ當地ㇾ右御用取扱可ㇾ被ㇾ申候、〇中略

一右御普請、第一下々御救之儀候間、早々遂ㇾ見分、取懸候樣可ㇾ被ㇾ致候、

右之通可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候

六月

〔寶曆集成絲綸錄十六〕寶曆八寅年七月

一色周防守〇勘定奉行

青山三右衛門

猿江御材木藏取〆り調等之儀、相勤候樣可ㇾ被ㇾ致候、御目付御材木石奉行江も申渡候間、可ㇾ被ㇾ談候、

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和二酉年十一月

御勘定奉行江

御材木石納拂、其外諸事勘方之儀ハ、向後御勘定奉行、差圖請候樣可被致候、

右之通御材木奉行江申渡候間、可被得其意候、

十一月

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年九月

御目付江

寄合御役金、向後御勘定奉行同吟味役取扱、上納金之儀ハ、後藤庄三郎役所江直ニ請取候筈ニ候、

○下略

〔天保集成絲綸錄七十四〕寬政元酉年三月

御勘定奉行江

淺草御藏、御取締も宜相成由ニ付、支配向立合御免被成候間、其段可被申渡候、此以後は、前々之通、御勘定吟味役申合、何茂一統折々見廻候樣可被致候、尤吟味役江も申渡候間、可被談候、

三月

支配

〔柳營秘鑑三〕御勘定頭支配

一諸國代官　一御勘定組頭　一御勘定衆井支配共　一御切米手形奉行　一御藏役人

一繩竹殘物奉行　一御金奉行　一錢奉行　一漆奉行　一川船奉行　一御林奉行、　一油奉行

一評定衆留守居（○又見萬天日錄、官中秘策）

○按ズルニ、天保慶應等ノ武鑑ニ據レバ、金銀朱座モ亦勘定奉行ノ支配ナリ、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年閏正月三日、この日より元拂金奉行、此後勘定頭の隸下たるべし、材木奉行は石奉行を兼べき旨命せらる、

〔勘契備忘記上〕享保二十一辰年

御代官五ツニ分、御勘定奉行五人ニ而支配可仕旨御書付、

一御代官五ツニ割、御勘定奉行支配可仕旨被仰渡候事、

此ヶ條、當時者四ツ割四人ニ而支配仕候、

一支配分ヶ被仰付候ニ付、御勘定奉行第一可相心得儀者、他之支配所へ申付、幷御代官勤方之品、

一同可承之、存寄無遠慮可申談事、

一御普請御入用、幷御普請所持口等之程、委細可有吟味事、

一夫食其外御救等、吟味可入念事、

一御年貢皆濟之吟味、幷御代官負方出來不致樣、常々申付候樣之事、

一御勘定奉行五人者、三ヶ年又ハ五ヶ年ニ壹度程ツヽ、支配所繰替被仰出候趣可有之事、

一御代官所替之儀、他之支配之御代官之内ゟ致吟味可申上候、尤時ニ寄、支配之内に而も繰替之儀可申上候事、

右之趣、被仰出候條、可被得其意候、

辰　三月

〔吏徵別錄上布衣以上〕御勘定奉行〇中略　同〇寶曆七年丁丑十一月三日、御代官所支配分止、

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年八月

御勘定奉行江

吟味方改役　拾六人

同並　拾貳人

同下役　拾六人

右之者共、其方共支配ニ被仰付候間、可申渡段、御勘定吟味役江申渡候、〇下略

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政八辰年五月

大目付江

關東郡代支配御勘定組頭并御勘定御普請役之儀、以來御勘定奉行支配ニ被仰付候、尤勤方之儀は是迄之通相心得候樣申渡候間、可被得其意候、

五月

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔天保集成絲綸錄七十七〕文化三寅年三月

御勘定奉行江

關東郡代中川飛驒守(○忠英)跡役は不被仰付候、郡代支配御代官どもは、向後何茂支配いたし、御廳野方其外御用向、無差支樣取計可被申候、

〔享保集成絲綸錄十八〕寛保三亥年十一月

御勘定奉行江

支配之者共、大勢之儀ニ而、御用ニ付而は、諸向之用事相弁候故、向々より年寄を以申込、送物可有之哉、左候得ば人により心得違、不相當之筋、よろしからざる音物致受用、猥成參會も可仕候間、左樣之儀、一切可相愼旨可申渡候、勿論後々迄忘却不仕樣ニ、無油斷可被取計候、

支配之者共へ、右之趣申聞候上は、其方共銘々一分之愼專要ニ候條、音物受用等之儀、只今迄請來候品たりとも、如何と相聞へ候音物は、受納仕間敷候、右之外、諸事心を付、支配之者共江申渡候趣、ゆるみ不申樣にいづれも可被申談候、

十一月

右之趣、毎年書直し、役所ニ張置可被申候、

待遇資格

〔吏徵上 布衣以上〕御勘定奉行四人　老中支配　芙蓉間　諸大夫

〔仕官格義辨〕御勘定奉行之事并吟味役之事

問云、御勘定奉行ハ、先規ゟ諸大夫役にて無之衆茂昔ハ有之樣ニ及承候、此譯如何に被聞及候哉、　答云、御勘定奉行之事は、寛永年中迄ハ、兼帶役之樣ニ承候、御留守居年寄衆ゟ伊丹播磨守、後順齋と改む酒井紀伊守、杉浦內藏允、右之衆兼役に而被勤候由、其以後妻木彥右衞門、杉浦伊右衞門、德山五兵衞抔無官にて當御役被勤、伊丹後播磨守、杉浦後內藏允、甲斐庄飛驒守、岡部駿河守、大岡備前守、此面々は諸大夫に而候、極而諸大夫役と申に被仰付候は、天和二戌年十二月廿六日と及承候、惣而右之外、御作事奉行、御普請奉行抔も、寶永八年寅十二月より極而之諸大夫役に成候由承候、

〔常憲院殿御實紀六〕天和二年十二月廿七日、諸大夫になるもの十一人、○中略勘定頭中山主馬信久は隱岐守と稱す、

〔幕朝故事談〕勘定奉行、德廟○德川吉宗以後、御勝手懸りの衆、上座になるなり、古反之、

〔翁草六十六〕小野日向守井近世立身士附多羅尾四郎右衞門事

惣ジテ近世ノ樣子ヲ窺ヒ見ルニ、御內昵近ノ衆ニハ、折々立身ノ旁モ見ユト雖、外樣御奉公ニテ、格別ニ出世スル輩ハ、大岡越前守○忠相ヨリ外ニハ甚希也、但御勘定所ノ勤コソ少ノ働モ際立テ、立身モ足早ナレ、享保ノ以後、御勘定奉行ノ內、杉岡佐渡守、始名彌太郎細田丹波守、始名彌三郎神谷志摩守、始名武右衞門神尾若狹守、始名五郎三郎萩原伯耆守始名源右衞門ノ類、各輕士農民ヨリ出タリ、此外ニモ多ク可有ケレ共、一々考ルニ不遑、是其筈ノ事也、其所以ハ、古來當役ハ五六千石ノ分限ノ面々エ仰付ラレシ事ナレドモ、中頃諸役御足高ヲ被定シ砌、當役モ三千石高ニ成ヌレバ、持高小身ノ面々モ、器量次第自由ニ御役勤ル故、御勘定ノ諸士一統ニ勵ミテ、平勘定ハ組頭ニ成ン事ヲ欲シ、組頭ハ吟味役

俸祿賜與

ヲ望ミ、吟味役ハ奉行ヲ羨ミ、相倶ニ進轉セン事ヲ勵ムニ仍、近世他役ヨリ此ヘ轉ズルハ希ニシテ、多ハ平勘定ヨリ段々經上リ、奉行迄モ進ム故ニ、右ニ記ルス面々モ皆其類ト也、中ニモ神尾若狹守ハ、元來伊奈半左衞門配下ノ三島邊ノ百姓成シガ、先年隣村ト公事シテ、半左衞門裁判ニ仍、可勝公事ヲ大ニ負タリ、神尾甚鬱憤シ、吾願クハ伊奈ガ上ニ立ツ役ヲ勤テ、此裁許ヲ打返シ宿意ヲ晴サントト、夫ヨリ出府シテ、御徒士ノ株ヲ買テ、其身先ヅ輕士ノ數ニ入、拔手寄ヲ以テ御勘定ヘ出ン事ヲ欲シ、竟ニ望ノ通御勘定ヘ召出サレ、運ニ乘ジテ度々御加恩ヲ蒙リ、俸祿千五百石ニ成、御勘定奉行仰付ラルヽトキ、彼先年ノ公事ヲ與シ出サセ、評定所ニ於、先年ノ裁判ヲ打崩シ、且伊奈半左衞門支配地モ、神尾在役ノ内ニ何角ニ事寄セテ大分減ジケルモ、神尾ガ累恨ヲ散ズル報酬ナリト、其頃批判セリ、

〔明良帶錄世職篇〕御勘定百五十俵高勘支

御勘定奉行
- 御勘定吟味役
- 御勘定組頭
- 御殿詰
- 同見分役

御勘定
- 支配勘定
- 出役
- 御勘定
- 出役

右之通同寮を歷昇して、奉行職に至る人有り、小笠原和泉守〇中長略如き仁なり、

〔吏徴上布衣以上〕御勘定奉行四人〇中略　三千石高　御役入用金三百兩

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、

三千石高　大目付、町奉行、御勘定奉行〇下略

〔憲教類典二ノ五御役〕寬文六丙午年七月廿一日

一御黒書院江出御被為成、御役人被為召、御役料被下候覺、

一同斷〇七百俵　　御勘定頭

〔憲廟實錄四〕天和二年四月廿一日、諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略勘定頭七百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略勘定頭は役料二百俵、都合七百俵、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺〇中略

御留守居〇中略

一金貳千五百兩宛　　御勘定奉行

高五千石以上之者江ハ半減

但御切米高三千俵以上之者江ハ不被下

同千五百俵以上之者江ハ半減

〔職掌錄〕御勘定奉行

御役御入用として、毎歲金三百兩を給ふ、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆四戌年二月　　御勘定奉行

右公事方御勝手方共ニ筆墨等其外入用多、致難儀相勤之段達御聞候、依之向後年々御金三百兩宛被下之、

役宅

〔憲教類典勘定五ノ一〕寶暦八戊寅年十一月

御勘定奉行江

御勘定奉行被仰付候節、評席は補理候得共、公事人入置候腰掛は無之、大勢之もの共難儀之趣ニ候間、公事方之者は、腰かけ補理候樣可被致候、依之右爲入用闕所金之内ニ而七拾兩づゝ被下候、向後共公事方被仰付候者江は、右之通被下候、尤御勝手方ゟ公事方被仰付候はゞ、是又可爲右之通り候間、可被得其意候、

十一月

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和三戌年二月

御勘定奉行江　　石谷備後守〇清昌

長崎奉行之御役料茂被下候儀ニ候得共、御勘定奉行本役ニ付而、月番茂相勤候儀ニ候間、御役爲入用、毎年被下候御金三百兩之内、江戸表ニ罷在候内、百五拾兩被下候間、可被得其意候、

二月

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十三申年正月

日光御社參ニ付、御供之面々金銀被下候、

一銀貳百枚宛　　御勘定奉行〇下略

〔職掌錄〕御勘定奉行

御役宅は虎御門內、神田橋外、小石川御門內、小川町にあり、

〔續泰平年表〕天保十三年三月十九日、神田橋御門外遠藤但馬守殿屋敷跡地へ、御勘定奉行御役宅新規出來、戶川播磨守(安清)御役中也、同年十一月十二日、虎ノ御門外藤堂主馬屋敷跡地へも、是又同樣御役宅出來、跡部能登守(良弼)御役中也、

〔德川禁令考二十四役所役宅〕天保十四卯年四月三日

御役宅御修復之儀ニ付御書付

越前守殿御渡

御勘定奉行江

御勘定奉行御役宅四ヶ所之内、向後御作事方小普請方ニハ、二ヶ所充持場ニ相定、御修復等之儀可被取扱候、尤御勝手方御役宅ハ、金高拾兩以下、自分ニ而取賄、拾兩以上ハ御修復可被仰付候間、其節ニ見分之上可被相伺候、公事方御役宅ハ、同拾兩以下自分ニ而被賄、拾兩以上五拾兩迄ハ、手元除金を以取計候積、五拾兩以上御修復相成候間、是又見分之上可被相伺候、且持場之儀ハ、猶又雙方申談、相伺候樣可被致候、

右之通、御作事奉行小普請奉行江相達候間、可被得其意候、

四月

〔德川禁令考十五勘定奉行〕慶應二丙寅年四月廿六日

公事方勘定奉行役宅廢止ニ付達書

公事方御勘定奉行江

覺

一今度公事方御勘定奉行御役宅御廢止に付、向後左之通可被心得候、

一公事方御勘定奉行掛、手限公事出入吟味物等、以來評定所式日立合之外、於同所取捌候樣可被致候、

一公事方御勘定奉行壹人者、日々登城、壹人者不及登城、日々評定所江出席、公事吟味物等捗取候樣可被致候、尤御用有之節者、兩人共登城致し、壹人者御用濟次第、老中退出ニ不拘、評定所江出席、若兩人之內、壹人病氣等之節者、登城之上御用向見計、評定所江出席候樣可被致候、

任免

一御勝手方御勘定奉行掛吟味物も、以來評定所において吟味可被致候、吟味物有之節、御勝手方御勘定奉行者、登城之上御用向見計、評定所江出席候樣可被致候、

一公事方御勘定奉行御役宅おいて、是迄家來共ニ爲取扱候廉者、以來評定所番、并同所書役同心使之者等ニ爲取扱候樣可被致候、

一是迄公事方御勘定奉行江被下候、白洲金三百兩者、向後不被下候、

但當寅年分者、月割を以被下候、

右之趣可被得其意候

四月

〔吏徵別錄上布衣以上〕御勘定奉行略○中　慶長八年癸卯十二月、大久保石見守長安爲所務奉行、是今御勘定奉行也、按、長安、慶長十八年癸丑四月廿五日卒、始稱十兵衛、

○按ズルニ、大久保長安ハ、佐渡其外ノ鑛山、及ビ財政ノ事ヲ司リタレバ、是ヲ勘定奉行ノ始トシテ茲ニ收ム、

〔大猷院殿御實紀十六〕寬永七年、此年曾根源左衛門吉次、東國を巡見し、關西洪水の地も巡見し、加恩ありて關東勘定頭になり。下略○

〔東職記聞一〕勘定奉行

元寬記日記曰、寬永十八年正月、曾根源左衛門良次補之、同十九年三月、伊丹播磨守康勝、杉浦內藏允正友、酒井紀伊守忠吉等補之、依是則當職始曾根氏乎、又曰、神祖及台德院殿之代、松平右衛門大夫正綱一人而奉當職事也、慶延略記、載伊丹杉浦酒井三氏補職之事而曰、於御臺所而被命諸事可吟味之旨也、

○按ズルニ、營中御日記、寬永元年八月廿日ノ條ニ、甲斐中納言樣江、甲斐、駿河、遠江、信州御領地書付、老中并勘定頭衆ゟ中納言殿家老江遣之トアレバ、寬永ノ初年ニ、既ニ勘定頭ノ職名アリ

シコト知ルベシ、

〔藩翰譜 二松平長澤〕右衛門大夫源正綱は、○中略凡天下郡國の吏務、貢賦の結解をつかさどり、要劇の職に居て、終に一事の淹滯なし、寛永十九年三月三日、始て勘定頭といふ職置かれて、伊丹播磨守康勝、酒井紀伊守忠吉、杉浦内藏允正友等、三人に司らしめらる、是れ正綱が年來壹人して司りし所なり、これ寛永の日記に見えたり、按ずるに、正綱が晩年に伊丹播磨守と二人して、事を行ひしなりと見え、又諸役人帳に、御勘定頭の下に、初めに右衛門大夫、播磨守二人を載せしは誤なり、

〔藩翰譜 五伊丹〕播磨守源康勝は、○中略松平右衛門大夫正綱と共に、郡國の吏務、貢賦の結解等を司り、寛永十九年三月三日、始て勘定頭三人を置かれし時、其第一に擇まれき、年老て頭の毛悉く禿なりければ、おのづから入道して、順齋と號す、

諸役人帳を按ずるに、此人年頃松平右衛門大夫と同じく、天下吏務の奉行人たり、後に二人ながら、いさゝか御勘氣を蒙る事あつて蟄居せり、其後をば御代官伊奈半十郎、大河内金兵衛の二人假に司る、其後これも御代官曾根源左衛門其事を兼ね司る、こゝに於て播磨入道順齋、酒井紀伊守○忠吉、杉浦内藏助○正友の三人を以て、御勘定頭になさる、是れ御勘定頭の初なりと云云、然れば伊丹かくの如き職に在る事再度なり、

〔諸御役代々記 五上〕御勘定奉行

松平右衛門大夫正綱 寄合頭より、慶安元子御免、

伊丹播磨守康勝 後改順齋 寛永九申五月三日、御納戸頭より、(中略)萬治二亥七月御免、

酒井紀伊守忠吉 寛永十一戌二月廿五日、御留守居、江、

杉浦内藏允正友 寛永十二亥十一月九日、御留守居、江、

伊丹播磨守勝長 寛永十九午三月三日、諸來並より、寛文二寅二月廿七日、御代官一色内藏介被打果、

曾根源左衛門吉○吉作真一次 寛永十八午八月十六日、御勘定吟味役ゟ、寛文元巳十一月十九日、依願御免、

村越治左衛門吉勝 改長門守
慶安四卯六月十八日二丸御留守居より、萬治二亥二月九日、町奉行、

岡田將監善政 改豐前守
萬治三子五月晦日(中略)美濃部代より、寛文十戌二月十三日、依願御免、

妻木彦右衛門頼照
寛文二寅四月十二日(中略)長崎奉行より、同十戌十二月廿三日、依願御免、

松浦猪右衛門信貞 ○貞一作友
寛文六午六月十三日(中略)御小性組ゟ、同十三巳七月晦日、御免、

杉浦市左衛門正昭 改内藏允
寛文八申六月十日、中川御番より、延寶八申閏八月廿一日、御留守居、江、

徳山五兵衛重政
寛文十戌五月十六日、寄合より、延寶九酉三月廿九日、御役被召放、

甲斐庄喜右衛門正親
寛文十二子九月十一日(中略)御使番より、延寶八申八月晦日、町奉行、江、

岡部左近勝重 改覺左衛門、改駿河守、
延寶三卯五月十三日(中略)御目付より、同六午八月十六日、依願御免、

大岡五郎左衛門重清 改備前守
延寶八申三月廿五日(中略)御目付より、貞享四卯九月十日、御役被召放、○中略、

高木善左衛門守養 改伊勢守
延寶八申十月七日(中略)御目付ゟ、天和二戌十月十六日、大目付、江、

彦坂源兵衛重治 改伯耆守
右同日(中略)御目付より、貞享四卯九月十日、御役被召放、○中略

中山主馬信久 改隱岐守、又改遠江守、
天和二戌十一月六日(中略)御先手鐵炮頭ゟ(中略)貞享二巳九月晦日、依願御免、

松平隼人正忠冬
貞享二巳十月三日、寄合より、(中略)同年十二月七日、御側衆次席被仰付、

仙石次左衛門政勝 改和泉守
貞享二巳十二月廿九日、新番頭より、同四卯年九月十日、御役被召放、逼塞被仰付、

小菅猪右衛門正武 改遠江守
貞享四卯九月十日(中略)小普請奉行組頭より、元祿元辰十一月二日、病死、

佐野六右衛門正周 改長門守
右同日(中略)御勘定吟味役より、同五辰八月廿三日、御役被召放、○中略

松平孫大夫重良 改美濃守
貞享五辰七月廿七日、御普請奉行より、(中略)元祿十一寅十二月六日、病死、

戸田美作守直武
元祿元辰十一月十四日、寄合より、同二巳四月十八日、御詮議之内、分部隼人正御預ヶ(中略)家断絶、

稲生五郎左衛門正照 改伊賀守、又改下野守、
元祿二巳五月三日、御作事奉行ゟ(中略)同十二卯四月四日、病氣依願御免、

井戸三十郎良弘 改志摩守、又改對馬守、
元祿七二月十九日、御先手弓頭ゟ、同十五十一月廿八日、御留守居江、

荻原彦次郎重秀（改近江守）　元禄九子四月十一日、(中略)御勘定吟味役ゟ佐渡奉行、其儀兼、(中略)正德二辰九月十一日、御役被召放、

久貝忠左衛門正方（改因幡守）　元禄十二卯正月十一日、御持筒頭より、(中略)寳永二酉十二月朔日、御留守居江、

戸川備前守安廣（後改日向守）　元禄十二卯四月十四日、西丸御留守居ゟ、寳永五子二月廿九日、病氣依願御免、

中山出雲守時春　元禄十五午十一月廿八日、(中略)大坂町奉行ゟ、(中略)正德四午正月廿八日、町奉行江、

石尾阿波守氏信　寳永二酉十二月朔日、長崎奉行より、(中略)同五子十一月廿九日、病死、

平岩若狹守親庸　寳永五子四月朔日、御持筒頭より、正德三巳三月十二日、病氣依願御免、

大久保大隅守忠形（○形一作香）　寳永五子十二月十五日、大坂町奉行より、(中略)正德六申二月十四日、御役被召放、小普請入、

水野對馬守忠順（改因幡守又讃岐守）　正德二辰十月三日、(中略)御普請奉行ゟ、(中略)享保四亥四月朔日、老衰依願御免、○中略

水野小左衛門信房（改伯耆守）　正德三巳三月廿八日、(中略)駿府町奉行ゟ、(中略)享保八卯三月廿一日、御旗奉行江、

伊勢伊勢守貞數　正德四午正月廿八日、御普請奉行ゟ、(中略)享保六巳三月十六日、老衰依願御免、

大久保下野守忠從　正德六申二月十日、御普請奉行ゟ、(中略)享保八卯十一月十五日、御留守居江、

駒木根肥後守政方　享保四亥四月十三日、御作事奉行より、同十七子五月七日、大目付江、

筧平大夫正鋪（改播磨守）　享保五子八月廿八日、(中略)御目付ゟ、(中略)同十九寅十一月廿八日、老衰依願御免、○中略

久松豐前守定持（改大和守）　享保八卯三月廿一日、御作事奉行ゟ、(中略)同十四酉十二月廿八日、病氣依願御免、

稻生次郎左衛門正武（改下野守）　享保八卯十一月十九日、御目付ゟ、(中略)同十六亥九月十九日、町奉行江、

松波筑後守正春　享保十四酉十二月廿六日、小普請奉行ゟ、(中略)元文元辰八月十二日、町奉行江、

杉岡彌太郎能連（改佐渡守）　享保十六亥十月朔日、御勘定吟味役より、新規、元文三午七月二日、病死、

細田彌三郎時以（改丹波守）　享保十六亥十月朔日、御勘定吟味役より、(中略)元文二巳九月朔日、病死、

松平兵藏政澄（改隼人正）　享保十七子閏五月朔日、佐渡奉行より、(中略)同十九寅十二月五日、依願御免、

神谷武右衛門文敬（改志摩守）　享保十九寅十二月朔日、御勘定吟味役より、(中略)寛延二巳六月十五日、病死、

石野筑前守範種　享保十九寅十二月十一日、(中略)小普請奉行ゟ、(中略)元文二巳六月朔日大目付江、

河野勘右衛門通喬 改二豐前守一　元文元辰八月十二日、小普請奉行ゟ、(中略)寛保二戌八月廿八日大目付江、

神尾五郎三郎春尹 改二若狹守一　元文二巳六月朔日、(中略)御勘定吟味役ゟ、(中略)寶暦三酉五月三日病死、

水野對馬守忠伸　元文三午八月廿三日、御普請奉行ゟ、(中略)延享元子十二月十五日大目付江、

櫻井九右衛門政英 改二河内守一　元文三午八月廿三日、刑部卿殿用人より、新規、同四未十月十九日、病氣依レ願御免、

木下伊賀守信名　元文四未十月廿八日御作事奉行ゟ、(中略)延享三寅三月朔日西丸御留守居江、

萩原伯耆守美雅　寛保三亥正月十一日、長崎奉行ゟ、(中略)延享三寅四月廿四日病死、

逸見八之助忠榮 改二出羽守一　延享元子十二月十五日、佐渡奉行より、(中略)寛延元辰十二月廿七日、(中略)御役被二召放一、小普請入閉門、

松浦河内守信正　延享三寅四月廿八日、(中略)大坂町奉行より、(中略)寶暦三酉二月廿三日、(中略)御役被二召放一、〇中略

曲淵越前守英元 改二豐後守一　寛延元辰七月廿一日、御作事奉行より、(中略)寶暦七丑六月朔日、大目付江、

遠藤六郎右衛門易〇易、作レ益續 改二伊勢守一　寛延二巳正月十一日、(中略)佐渡奉行ゟ、(中略)同四未八月十一日、刑部卿殿家老江、

三井下總守良泰　寛延二巳七月六日、京都町奉行ゟ、(中略)寶暦元未十一月廿五日、病死、

永井丹波守直之　寶暦二申正月十一日、京都町奉行ゟ、(中略)同三酉九月十九日、病死、

一色周防守政統 改二安藝守一　寶暦二申十二月十六日、(中略)御作事奉行ゟ、(中略)明和二酉二月十五日、御留守居江、

松平帶刀忠陸 改二玄蕃頭一　寶暦三酉三月朔日、佐渡奉行ゟ、(中略)同四戌四月廿一日、西丸御留守居江、

大井伊賀守滿英 改二伊勢守一　寶暦三酉六月十二日、小普請奉行ゟ、(中略)同六子三月朔日大目付江、

大橋近江守親義　寶暦四戌四月九日、長崎奉行ゟ、(中略)同八寅十月廿九日、相馬彈正少弼江永之御預ケ、家斷絶、

中山遠江守時庸　寶暦五亥七月廿二日、大坂町奉行ゟ、(中略)同七丑八月五日、(中略)御役被二召放一、〇中略

細田丹後守時俊 改二丹波守一　寶暦六子三月朔日、小普請奉行ゟ、(中略)同九卯五月廿二日病氣依レ願御免、

菅沼下野守定秀　寶暦七丑六月朔日、長崎奉行より、(中略)同八寅十二月廿一日、病死、

稲生下野守正英改二播磨守、又下野守一、
寳曆八寅十一月十五日、御目付より、(中略)同十辰七月病死、

小幡山城守、景利
寳曆八寅十二月廿七日、小普請奉行より、(中略)同十一巳九月七日、御鑓奉行江、

石谷備後守清昌改二豐前守又淡路守一
寳曆九卯十月四日、佐渡奉行方、(中略)安永八亥四月十五日、御留守居江、

坪內駿河守定央
寳曆十辰六月廿三日、長崎奉行方、(中略)同十一巳十一月廿六日病死、

安藤彈正少弼惟要
寳曆十一巳九月七日、(中略)御作事奉行方、(中略)天明二寅十一月朔日、(中略)大目付江、

牧野大隅守成賢
寳曆十一巳十二月九日、御作事奉行より、(中略)明和五子五月廿六日、町奉行江、

小野左大夫一吉改二日向守一
寳曆十二午六月六日、(中略)御勘定吟味役より(中略)明和八卯七月十二日、大目付江、

伊奈半左衛門忠宥改二備前守一
明和二酉二月十五日、御勘定吟味役御代官方、(中略)同六巳十二月七日病氣依レ願御免、

松平庄九郎忠鄉改二對馬守一
明和五子五月廿六日、御目付より、(中略)安永二巳十二月五日、大目付江、

川井次郎兵衛久敬改二越前守一
明和八卯二月廿八日、御勘定吟味役方、(中略)安永四未十月廿六日病死、

太田播磨守正房
安永二巳十二月五日、小普請奉行より、(中略)同七戌七月十六日病死、

新見加賀守正榮
安永四未十一月四日、御作事奉行より、(中略)同五申九月廿四日病死、

桑原能登守成〇成一作レ盛員後改二伊豫守一
安永五申七月八日、御作事奉行より、(中略)天明八申十一月十五日、大目付方、

山村信濃守良旺
安永七戌閏七月廿日、京都町奉行より、(中略)天明四辰三月十三日、町奉行江、

松本十郎兵衛秀持改二伊豆守一
安永八亥四月十五日、(中略)御勘定吟味役より、(中略)天明六午閏十月五日、(中略)御役被二召放一、〇中略

赤井越前守忠晶後改二豐前守一
天明二寅十一月廿五日、京都町奉行より、(中略)同七未十二月七日(中略)小普請入逼塞、〇中略

久世丹後守廣民改二備中守、又下野守、又丹後守一、
天明四辰三月十二日、長崎奉行方、(中略)寛政九巳六月五日、西丸御小性組番頭江、

柘植長門守正寔、
天明午閏十月廿一日、御作事奉行より、(中略)同八申七月廿五日、清水家老江、

青山但馬守成存〇存一作レ孝
天明六午十二月朔日、御普請奉行方、(中略)同七未十一月十二日、田安家老江、

根岸九郎左衛門鎮衛改二肥前守一
天明七未七月朔日、佐渡奉行方、(中略)寛政十午十一月十一日、町奉行江、

氏名	履歴
久保田十左衛門政邦(改ニ佐渡守)	天明八申五月十日、佐渡奉行より、(中略)寛政四子閏二月八日、西丸御留守居江、(中略)
柳生主膳正久道	天明八申九月十日、町奉行より、(中略)文化十四丑二月廿六日、御留守居江、
曲淵甲斐守景漸	天明八申十一月廿四日、小普請組支配より、(中略)寛政九巳二月十二日、御留守居江、
佐橋長門守佳如	寛政四子閏二月八日、日光奉行より、(中略)同六寅九月十六日、病氣依願御免、
間宮諸左衛門信好(改ニ筑前守)	寛政六寅九月廿二日、御目付より、(中略)同九年九月十日、病死、
中川飛驒守忠英	寛政九巳二月十二日、長崎奉行ゟ、(中略)文化三寅正月晦日、大目付江、
石川左近將監忠房	寛政九巳八月廿七日、御作事奉行ゟ、(中略)文化三寅十二月十四日、西丸御留守居江、
菅沼下野守定喜	寛政九巳十月十二日、京都町奉行ゟ、(中略)享和二戌五月廿七日、(中略)御役御免差扣、○中略
松平石見守貴強	寛政十午十二月三日、長崎奉行より、(中略)同十一未十一月廿六日、病死、
小笠原三九郎長幸(改ニ和泉守、又伊勢守)	寛政十二申九月五日、御勘定吟味役より、(中略)文化九申九月廿九日、病死、
松平市正信行(後改ニ兵庫頭)	享和二戌六月廿一日、小普請奉行ゟ、(中略)文化九申十一月廿四日、西丸御旗奉行江、
水野若狹守忠通	文化三寅十二月十四日、小普請奉行ゟ、(中略)同七午十二月十四日、大目付江、
肥田豐後守賴常	文化七午十二月十四日、御作事奉行より、(中略)同十二亥六月十七日、西丸御留守江、
永田備後守正通	文化七午十二月十四日、御廣敷御用人より、(中略)同八未四月廿六日、町奉行江、
有田播磨守貞勝	文化八未四月廿六日、御作事奉行より、(中略)同九申二月十七日、大目付江、
曲淵甲斐守景露	文化九申二月十七日、長崎奉行ゟ、(中略)同十三子七月廿四日、大目付江、
小長谷和泉守政良(改ニ長門守)	文化九申十二月十九日、京都町奉行より、(中略)同十一戌十月十六日卒、
岩瀬加賀守氏記	文化十一戌十月廿八日、御作事奉行より、(中略)同十二亥十一月廿日、町奉行江、
榊原主計頭忠之	文化十二亥六月十七日、小普請奉行より、(中略)文政二卯閏四月朔日、町奉行江、
服部備後守貞勝(改ニ伊賀守)	文化十三子五月四日、松前奉行兼帶、(中略)文政二卯九月十二日、小普請組支配江、(中略)

土屋紀伊守廉直　文化十三子七月廿四日、御作事奉行より、(中略)文政二卯八月廿四日、西丸御留守居江、

古川和泉守氏清(改山城守)　文化十三子八月四日、御廣敷御用人より、(中略)文政三辰六月廿二日卒、

村垣淡路守定行　文政元寅九月晦日、御作事奉行方、(中略)天保三辰三月十日、病死、

再役

石川右近將監忠房(改主水正)　文政二卯九月五日、小普請組支配より、(中略)同十一子八月廿八日、御留守居江、

遠山左衛門尉景晋　文政二卯九月廿四日、御作事奉行方、(中略)同十二丑二月七日、老衰に付御免、〇中略

松浦伊勢守忠　文政三辰七月廿八日、京都町奉行方、(中略)同六未九月廿八日、大目付江、

曾我豐後守助弼　文政六未十一月八日、京都町奉行方、(中略)天保六未十二月九日、(中略)御役御免、差扣、〇中略

土方出雲守勝政　文政十一子九月十日、西丸御留守居方、(中略)天保七申年八月十日、病氣依願御役御免、

內藤隼人正矩佳　文政十二丑三月廿八日、大坂町奉行方、(中略)天保十二丑六月七日、病死、

明樂飛驒守茂村　天保三辰三月十五日、(中略)御勘定吟味役より、(中略)同十二丑正月日死、

大草能登守高好　天保六未十二月廿二日、御作事奉行より、(中略)同七申九月廿日、町奉行榊原主計頭代江、

矢部駿河守定謙　天保七申九月廿三日、大坂町奉行より、(中略)天保九戌二月廿三日、西丸御留守居江、

神尾備中守元孝(改山城守)　天保七申九月廿日、御作事奉行より、(中略)同八酉七月八日、大目付江、

深谷遠江守盛房　天保八酉七月廿日、御作事奉行より、(中略)同十二丑四月廿八日、小普請支配江、

遠山左衛門尉景元　天保九戌二月十二日、御作事奉行方、(中略)同十一子三月二日、町奉行江、

佐橋長門守佳富　天保十一子四月八日、京都町奉行より、(中略)同十三寅二月十七日、御作事奉行江、

梶野土佐守良材　天保十一子九月廿四日、御作事奉行方、(中略)同十四卯十月九日、思召有之、御役御免、

田口加賀守喜行　天保十二丑四月十五日、長崎奉行方、(中略)同五月十五日、(中略)御役御免、小普請入被仰付、〇中略

土岐丹波守朝旨　天保十二丑五月十三日、御作事奉行より、(中略)同十三寅四月十五日、御書院番頭江、

松平豐前守政周　天保十二丑六月廿日、御普請奉行より、(中略)同年十二月八日、大目付江、

跡部能登守良弼 天保十二丑十二月八日、大目付方、(中略)同十五辰九月十五日、町奉行江、

岡本近江守成 天保十三寅五月廿四日、御勘定吟味役御留守居番次席方、(中略)同十四卯五月十日、御鑓奉行江、

根本善左衛門 天保十四卯五月廿日、御勘定吟味役より、〇中略

石河土佐守政平 天保十四卯閏九月廿日、御作事奉行方、〇中略

榊原主計頭忠義 天保十四卯十月十日、(中略)御目付より、(中略)同十五辰八月廿二日、思召有之御役御免、

戸川播磨守安清 天保十三寅二月十七日、長崎奉行より、(中略)同十五辰八月廿二日、西丸御留守居江、

中坊駿河守廣風 天保十五辰八月廿八日、日光奉行方、(中略)弘化二巳三月廿日、甲府勤番支配江、

松平四郎近直 改二河内守 天保十五辰八月廿八日、御目付方、〇中略

久須美佐渡守祐明 天保十五辰十月廿日、大坂町奉行より、〇中略

牧野駿河守成綱 改二大和守 弘化二巳三月廿日、堺奉行より、(中略)嘉永元申十一月八日、町奉行江、

池田播磨守頼方 嘉永元申十一月八日、御普請奉行方、牧野駿河守代公事方、

〔嘉永明治年間錄 一〕嘉永五年壬子 今年有司鑑抄

御勘定奉行　石河土佐守政平　松平河內守近直　本多加賀守守英　川路左衞門尉聖謨

〔嘉永明治年間錄 十七〕明治紀元戊辰 德川家有司鑑抄

御勘定奉行

慶應元乙丑五月台命　江戸駿河臺　高二千七百石　小栗上野介忠順

同年台命　同本所石原　高五百石餘　小原下總守正事

同二丙寅六月台命　同駿河臺　高二百俵　都筑駿河守

同三丁卯台命　同湯島　織田和泉守

同年台命　同小川町　佐藤石見守

勘定奉行並

同年台命　　同深川　　小野内膳正

〔諸御役代々記 五上〕御勘定奉行

井上備前守秀榮

天保十三寅五月廿四日、西丸御留守居ゟ進、御籏奉行次席、同年七月五日御勘定奉行次席、同十四卯閏九月六日、思召有之御役御免、○中略

佐々木近江守一陽

天保十四卯七月廿八日、御目付御普請奉行次席より進、御勝手方、同年十月十日、御普請奉行江、

〔吹塵録 三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺○中略

御留守居並
御勘定奉行並
御作事奉行

一金貳千兩宛

高四千石以上之者江ハ半減

但御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不レ被レ下

千俵以上之者江ハ半減

勘定組頭職員職掌

〔吏徵 上 御目見以上〕御勘定組頭十八人

〔職掌錄〕御勘定奉行

組頭十二員

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一御勘定組頭十三人 内御殿詰三人

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御勘定組頭　寬文四年甲辰六月十一日、始置六員、○中略　同年○享保七年八月廿一日、始置御勝手方組頭二員、神谷武右衛門、細田彌三郎、　寶曆八年戊寅十二月二日、始置評定所留役組頭一員、佐久間忠兵衞、　同年十一月廿三日、定十二員、但加評定所組頭、

○按ズルニ、本文ニ寬文四年六月十一日始置トアレドモ、大猷院殿御實紀寬永九年七月廿六日ノ條ニ、勘定組頭杉田九郎兵衞忠次、幷ニ井出十左衞門正員等ガ、諸國ヲ巡察セシ事見エタレバ、寬文以前既ニ此職名アリシナリ、

評定所留役組頭ハ、別ニ評定所役人篇ニアリ、

〔會計便覽〕御勘定奉行

御殿詰組頭、○中略　御勝手方組頭、○中略　伺方組頭、○中略　帳面方組頭、○中略　御取箇組頭、○中略　評定所組頭、

〔機務覽要一〕御殿詰御勘定組頭御殿詰御免之節御禮廻之事

文化九申年四月十二日

一御殿詰御勘定組頭坂野喜六郎、御殿詰御免之旨、御書付を以被仰渡、平組頭ニ相成、右は相願不申被仰付候者ニ付、御禮之義如何可心得哉之段、肥田豐後守ゟ井上美濃守江問合候ニ付、御書付御渡之御老中江計相越、宜旨被及挨拶候、

〔勘契備忘記上〕享保八卯年　御勘定所勤方之部

御勘定所勤方之儀ニ付御書付

一組頭兩人、御勘定拾人程、　享保十八丑年頃ニ而人數増　御勘定衆本役拾五人　助五人

御取箇改○中略

一組頭三人、御勘定六拾人程、　右同斷　御勘定衆八拾壹人

諸向御勘定帳改○中略

一組頭三人、御勘定三拾人程　右同斷　御勘定衆五拾人

御代官品々伺書可レ致二吟味一候、幷御代官割御用之節可二相達一候、

一御殿詰組頭兩人、御勘定貳拾人、　右同斷　御勘定衆本役拾五人助五人

有來之通御用可二相達一候、

一御勝手方納拂御用御勘定七人

右同斷

一吟味役五人　内貳人公事方三人御勝手方〇中略

右者、上方、關東與人數相分候儀相止、書面之通可レ被レ致候、尤組頭、御勘定所ニ壹兩人宛罷在候而、物

每之まり候樣可レ致候、〇中略

一御勘定組頭、御用透見合、壹ケ月二三日、御勘定一ケ月四五日相休候樣被レ致可レ然事、

一御勘定之內、筆算不レ宜ものは、御用ニ懸候而者難レ弁可レ有レ之間、遂二吟味一、外之御奉公被二仰付一候樣申

立御勘定方江者、小普請之內ゟ、相應之もの御入人被二仰付一候樣可レ被二相願一候事、〇中略

以上

卯七月

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年十二月五日、勘定組頭諸星淸左衛門盛政代官下島市兵衛政

眞、勘定能勢四郎右衛門賴安は上方、井上新左衛門某、井上宇右衛門某、糸原甚左衛門重正、壺井金

大夫永重は關東〇中略の會計を司るべしと仰付らる、

〇按ズルニ、勘定組頭ノ關東ト上方トニ分レシ年月詳ナラザレドモ、此文ニ據リテ考フレバ、

蓋シ寛永ノ頃ナルベシ、

〔勘契備忘記上〕享保八卯年

御勘定奉行ゟ組頭江相渡候書付

御勘定所勤方之覺

一組頭兩人、御勘定衆拾人程、

御取箇改

但年中水旱損、雨續之樣子、畑作之諸物、田作之事承り屆置、御取箇帳出候節、不拔樣引合、可被致吟味候、

一田畑荒所可立返吟味

但荒所年々起返候樣無油斷御代官へ申達、荒所高帳面ニ記置、年限ニ增減可有吟味候事、

損亡注進之改

但少々之儀者書留置、御取箇帳出候節可引合候、大分之儀者、事ニ寄見分も遣候哉之趣可被致吟味候、

御普請之改

但御普請可致時節怠候哉、小破之節修復不致、及大破候哉、用水懸、惡水落等、普請怠り無之哉、平生心を付可被申候、○中略

御廻米運送之吟味

但差當直段吟味候而も、的當不致事も可有之候間、年々夏秋中迄ニ致吟味、海船者勿論、はしけ船賃銀駄賃車力等、不拔樣可致吟味候、

夫食種貸之吟味

但願出候品、得與遂吟味、人數積壹人當石數相應候哉可遂吟味候、大立候分者、見分をも可遣哉可相調候、幷返納年延等之儀、不拔樣吟味あるべく候、

諸石代直段

但直段伺之儀、時節不ㇾ後樣、御取箇帳ニ差積、相伺候樣ニ可ㇾ被ㇾ致候、石代之儀者、別而入念可ㇾ有ㇾ吟味ㇾ候、

一組頭三人、御勘定衆六七拾人程、

但御代官幷諸役所御勘定帳、遂御普請御勘定帳、惣而御勘定帳仕上候分、可ㇾ被ㇾ相改ㇾ候、尤帳面出し候はゞ目錄認メ吟味役之內江可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、幷仕立候節怠り候哉、遂ㇾ吟味ㇾ可ㇾ被ㇾ申聞ㇾ候、但御勘定帳元合拂方證文等入念可ㇾ被ㇾ引合ㇾ候、臨時物帳、其外見合ニ可ㇾ成書物、平生仕立置、夫食種貸、其外借物等、當年拂ニ立、翌年元ニ組候類、仕組落無ㇾ之樣可ㇾ被ㇾ致候、尤右之帳面出來次第、致方可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、

一組頭三人、御勘定衆三拾人程、

小物成諸運上吟味○中略

御代官伺書吟味

但御代官伺書差出候はゞ、當日个條書ニ認メ、伺書とも吟味役之內江可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、尤御拂物代等之儀、明細ニ可ㇾ有ㇾ吟味ㇾ候、惣而伺之品、其時節怠り無ㇾ之樣相心得、御代官江可ㇾ被ㇾ相達ㇾ候、

御代官割　　知行割　　潰地吟味

但知行割、潰地高、平生帳面記置、每年書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、

高帳ニ而入渡增減吟味

但高帳之儀、大切之事ニ候間、入渡有ㇾ之度々、高帳改ヘ書付被ㇾ相渡、無ㇾ怠ㇾ可ㇾ有ㇾ吟味ㇾ候、

當座之吟味物、幷御廢方御用品々

一御殿詰組頭両人、御勘定衆貳拾人、
御殿詰御勘定品々書出、被仰出候書付觸書、
被下物例書上ゲ、御禮ニ廻り候例書、分限帳増減、
右之通、有來通可被相勤候、
一御勝手向納拂御用御勘定衆拾人
御役御免之御代官負金吟味、元御代官貸金吟味、御金藏ゟ相渡拜借金銀、御物成小物成諸運上、返納物、諸向ゟ納候金銀米、惣而納方之吟味、御代官銘々米金納方滯候分、并上納物之時節不相延樣ニとの吟味、諸向江米金品々渡方吟味、御切米渡方、御張紙直段吟味、
右之通御用可被相達候、向後御勘定衆支配衆共、上方關東與分り候儀ハ相止候間、其旨可被相心得候、
一各御殿江被參候儀、月番之外、諸帳面方ゟ壹人、御代官伺書改方壹人ツヽ、四ツ半時ゟ御殿江被參、月番両人者、九ツ時ゟ御殿江罷越、殘両人御勘定所ニ罷在、御勘定衆支配衆、品々御用改方、無油斷樣可被致候、勿論御用有之節ハ、不殘も御殿江可被參候、其節御用相濟候内ゟ、両人ツヽ下御勘定所江罷越、退出迄可被相勤候、
但御取箇之儀者、差當御用無之節者、下御勘定所ニ而罷在、御用可被相達候、
一各儀御用透見合、壹ヶ月三日宛可有在宿候、其節ハ勿論、御用ニ而在宿有之節も、前日可被申聞候、
一御勘定衆在宿之儀、内寄合日共ニ壹ヶ月五日之積人數割合、在宿候樣可被致候、勿論御用差湊候節ハ、休日相止可被申候、〇中略
右者今度御勘定所勤方之儀相改、水野和泉守〇忠之書付を以被申渡候ニ付、猶又委細可有吟味趣

如斯候間、可有其心得候、惣而組頭中之內、下御勘定所ニ壹兩人ヅヽは被罷在、物每しまり候樣可被致候、怠り候儀有之候ハヾ、組頭中不念たるべく旨、右御書付も有之候間、御勘定衆支配江も能能被申聞、諸書物混雜無之、平生見合ニ可入書物等ハ仕立置、怠慢無之樣可被相心得候、

卯八月

〔享保集成絲綸錄十八〕正德三巳年七月

覺

一御料所御取毛吟味之事、例年秋之末ニ至、御勘定組頭之內年番相立、帳面之調等有之樣ニ相聞候、御取毛之儀、秋作計之善惡ニも不限、麥作其外畑作等之樣子、國々の土地をも相考、御爲にも宜、百姓困窮ニも不及樣ニ可有勘弁事ニ候、當分之御用掛りニ而は、難及了簡儀も可有之候間、向後春中ゟ年番相立、年中之次第、詳に遂吟味、御取毛免相を定候樣に可被心得事、〇下略

〔牧令類纂二集六十七〕明和三丙戌年十二月

御勘定奉行へ

御勘定組頭之儀、是迄多分ハ、從他役之者先ハ被申立候もの被仰出來候、御勘定組頭之儀者、一體御勝手向、品々重き御用筋取扱候事ニ付、是も隨分撰可被申立事ニ者候得共、猶又此上共ニ勤年數幷各趣意等ニ付、符合致候勤之もの等ニ不拘、常々出精不精勤方得と相糺、人體實不實等も取計、及見及聞候者等得と相撰、丈夫ニ可相勤者、申立候樣可被心懸候、

〔大猷院殿御實紀二十三〕寛永十年九月廿六日、勘定組頭杉田九郎兵衛忠次〇中略賦稅撿斷の事奉はる、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十二月三日、勘定組頭能勢四郎右衛門賴安、勘定山中喜兵衛信三、これも信綱〇天草逆徒征討使者中松平伊豆守に陪從し、粮米の事沙汰すべきむね仰付られ暇下さる、

俸祿賜與

〔甘露叢五十八〕元祿九年二月廿日、上野御法事御用被仰付、御勘定御役詰組頭竹村彌兵衛、〇下略

〔寶曆集成祿綸錄十六〕延享四卯年八月

御勘定奉行江

御勘定組頭　早川庄次郎

御普請奉行被仰付候迄之中、御普請方御用向相勤候樣可被申渡候、尤御作事奉行可被談候、

〔文恭院殿御實紀十七〕寬政六年十二月廿六日、勘定組頭格金澤瀨兵衛千秋、父の蔭により番替命せらるべしといへども、これ迄の勤務淸熟たるにより、勘定組頭となされ、郡代附の局に有べしとなり、

〔吏徵上〕御目見以上　御勘定組頭十人　御勘定奉行支配　燒火間　三百五十俵高　御役料百俵

〔嚴有院殿御實紀四十五〕寬文十二年九月八日、けふ勘定組頭、十二人に、各加恩百俵賜ふ、

〔吏徵別錄下〕布衣以下御目見以上　御勘定組頭〇中略　同〇寬文十二年壬子九月八日、御役料百俵十二人〇中略

〔常憲院殿御實紀五〕天和二年四月廿二日、けふ又官料を加祿にして給はる、〇中略勘定の組頭百俵、勘定組頭佐野主馬正周は二百俵なり、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略勘定の組頭〇中略百俵、

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之〇中略

關東御勘定與頭　三百五十俵高〇中略

上方御勘定組頭　右同斷

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候內、御足高并御役料定、

三百五拾石高　御勘定組頭御殿詰并御取箇方組頭は、外ニ御役料百俵、

〔吏徴別錄 下 布衣以下御目見以上〕御勘定組頭〇中略 天保十四年癸卯十二月廿九日、同方帳面方共、道中方兼帶相勤候付、御役料百俵充被下、

〔寶曆集成絲綸錄 二十五〕寶曆六子年正月

御勘定組頭、御勘定支配勘定、遠國江御普請御修復、并見分御用ニ罷越候節、物書料〇中略 關外金三拾兩、關內金貳拾兩〇中略 被下候積、去々戌年相極候處、

關外
物書料金貳拾兩　御勘定組頭
關內
同　金拾五兩〇中略

右之通、向後被下候筈ニ候間、可被得其意候、

正月

〔天明集成絲綸錄 四十〕安永五申年十二月

御勘定奉行江
同吟味役

寄合小普請御役金之儀取扱候ニ付、御勘定組頭江銀拾五枚〇中略 宛年々被下候間、其段可被申渡候、

〔德川禁令考 二十四 經費改革〕天保十四卯年十二月廿九日

御勘定所諸掛り員數之覺

大炊頭殿御渡　御勘定奉行江

同吟味役

御勘定組頭

金拾兩　浦々御場所懸　金三拾三兩　馬喰町御貸附懸
金拾兩　猿屋町御貸附懸　金拾兩　長崎掛
金拾兩　町會所掛　金八兩　米價掛
金八兩　荒地掛　金七兩　植物掛
金拾兩　御林炭掛　金拾壹兩　宿場助成御貸附掛
金拾壹兩　琉球人參府國役掛　金拾壹兩　國役金取立掛
金五兩　寄合小普請金取集掛　金拾五兩　島々掛
金四兩　裁許書調懸〇中略

右之通向後御手當被下候間、被得其意可被申渡候、〇下略

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十三申年正月

日光御社參ニ付、御供之面々金銀被下候、

一金三拾兩充　御勘定組頭

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〇中略、

小遣者

關東御勘定與頭〇中略　小遣者十三人

勘定衆職員職掌

〔吏徵上御目見以上〕御勘定貳百貳拾參人但支配勘定打込〇中略　部屋住二十七人〇中略　外出役四十五人〇中略

評定所留役十一人〇中略　同助五人、

〇評定所留役ハ、別ニ評定所役人篇ニアリ、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕御勘定　寛永十五年戊寅十二月五日、始置、十二員、〇中略　同〇享保八年癸卯、定員百三十人、同十八年癸丑、同百八十六人、〇中略　寛政八年丙辰八月、定員二百三十二人、　文化九年壬申、定員二百二十三人、

〇按ズルニ、本文ニ寛永十五年始置トアレドモ、台徳院殿御實紀元和二年ノ條ニ、此年秋山半右衛門伯信は勘定役になりトアレバ、此職名ノ舊キコト知ルベシ、

〔德川禁令考二十四勘方規程〕此度御入人被仰付候ニ付、掛々人數割合取調候處、左之通、

御殿詰

寛政貳拾人　文化貳拾人　天保貳拾人　此度貳拾人　増減なし　外出役三人

御勝手方

寛政四拾人　文化四拾人　天保三拾人　此度三拾七人　内七人　此度増　外出役六人

御定所

寛政貳拾九人　文化三拾四人　天保三拾人　此度貳拾六人　外四人減　外出役四人

御取箇方

寛政四拾七人　文化四拾二人　天保三拾人　此度三拾七人　内七人　此度増　外出役五人

伺方

寛政四拾壹人　文化三拾八人　天保貳拾人　此度貳拾七人　内七人此度増　外出役五人

帳面方

寛政四拾三人　文化三拾九人　天保貳拾人　此度貳拾七人　内七人此度増　外出役五人

道中方

寛政拾人　文化拾人　天保拾人　此度拾人　增減なし　外貳人出役〇中略

天保御人減人數百六十人

此度總人數百八十八人　外出役三拾人

右之通割合置候樣可仕哉、此段相伺申候、

巳十二月

〔勘契備忘記下〕享保十八丑年

支配勘定繰上可仕旨被仰渡候覺

一只今迄、御勘定人數減候御入人之節、御目見以下元頭ゟも願出、御勘定江御入來候、向後は右之類、支配勘定江御入、御勘定之人數中上ゟ不足之分ハ、勤方宜者ハ、支配勘定ゟ御目見御勘定ニ繰上ゲ可申候、右之通ニ而差支無之哉、可相尋由被仰出候旨、松平左近將監〇乘邑申聞候間、右之通ニ而曾而差支無御座、難有筋ニ奉存候、只今迄申上候而も、彼是御吟味ニ付、人數多ハ難成筋被仰聞候處ニ、御繰上ゲ被下候得バ、勤候ものゝ勵にも相成候由申上候得者、御勘定奉行申合書付差上候樣被申聞候、

右ニ付差上候書付

御勘定方御入人之儀、向後御目見以上ハ御勘定江御入人、御目見以下ハ支配勘定江御入人相成、相障儀ハ無之哉被遊御尋候、右之通ニ而相障儀無御座候、御勘定ヨ御入人書上ゲ少き時ハ、有來支配勘定之內、勤方宜者御勘定江被仰付候バ勵にも相成候間、右之通被仰付候樣と奉存候、以上、

丑十二月　　寛播磨守〇勘定奉行、以下四人署名略、

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政八辰年五月

御勘定奉行江

部屋住勤之御勘定、以來三拾人支配勘定之忰七人之定數ニ致し置、右之內闕有之七八人程にも及候はヽ、右之上り高を以、一同御入人有之節、部屋住より之御入人被申立候內規矩ニ可被致置候、尤其節相應之者無之時は、必定人數高ニ被申立候儀ニは無之候間、可被得其意候、

五月

寬政十二申年九月

御勘定奉行江

御勘定支配勘定御入人之儀、最前貳三人明に而被申聞、部屋住之者共七八人明候はヽ可被召出旨相達置候處、以來は家督部屋住之無差別、七八人明候はヽ、御入人之儀可被申聞候、右之內部屋住之儀は一兩人ニ而も、部屋住明人數次第、一同御入人有之節々、相應之者相撰申聞候樣可被致候、

〔明良帶錄世職篇〕御勘定百五十俵高 勘支

何れも銘々其持分有て、日々下勘定所へ詰て、御調向、國郡の事、諸御入用筋、或るは大名國替、所替、加增地、人別の調、新地、新田、見取場、新繩開發場、荒地引起し等目論見、殊之外手廣の場故、銘々持分して調るなり、甚骨折の場にて出役筋多し、

〔會計便覽〕御勘定奉行

御勝手方組頭

御殿詰、書上方、御日記方、手形番、分限帳掛、御勝手方改役、積り方掛、渡り方、臨時方、御斷方、月帳掛、長崎掛、皆濟方、御普請掛、御操合掛、古銅吹所掛、

伺方組頭

同改方、手形番、同仲之間、帳面調方、御鷹方、運上方、諸入用證文調、國役掛、御林炭薪掛、小普請金集

掛、同出役、神寶方、吟味物掛、酒造掛、植物掛、同出役、嶋々掛、同出役、道中方、

帳面方組頭

同改役、村鑑奥書掛、算調御取締掛、

御取箇組頭

差出方、新田方、廻米方、御普請方、町會所、米價掛、橋々掛、知行割、關東見分繪圖掛、

評定所組頭

同留役、同助、同當分助、同組合改方、支配勘定改方、御勘定、持格支配勘定出役、支配勘定出役、吟味方改役、同改役並、同並出役、

○按ズルニ、此ハ勘定組頭ニ屬セル分課ニシテ、本書ニハ、役名ノ下ニ各々姓名ヲ掲ゲタリ、

〔勘定所書上〕天保五年五月晦日

加賀守、〇老中大久保忠眞周防守殿〇老中松平康任へ、田中龍之助ヲ以テ上ル、

御勘定所掛リ々々ニ而取扱候、御用向書附、

御殿詰御用向取扱廉書

諸向御褒美願、遠國御用罷越候者へ被下物願、野扶持御手當扶持、遠國罷越面々取越米願、幷御切米御扶持方上り等之儀御斷り下り物支配之もの諸願諸屆書、孝行奇特、長壽者獻上物申上、御用屋敷詰御代官ニ而取扱候、遠御成御用、幷奥向御用、御鳥之餌、其外上ゲ物、川筋御成之節、其外御用役船御斷取扱、月々御用番書、江戸淺草天王町大坂米相場書御屆、浦賀安房上總御備場、諸國浦々御用、支配向小役人明跡願、幷御勘定方御入人之儀取調、都而支配向身分ニ付候儀取扱、諸向御抱入席之者御暇、跡御抱入相成候節、御切米御扶持方渡、頭々より斷之儀取扱、評定所書替所御修復等、幷請取物、諸向より差出候御入用手形裏書、分限帳取調、異變出火御屆書等取扱、

御勝手方掛御用向取扱候廉書

御勝手方元拂御用、淺草本所御藏、江戶御金藏、二條大坂大津駿府甲府、其外御藏々、都而金銀米錢納拂、幷大坂御金藏より御取下金銀等之取調、大判御買上等吟味、且每月元拂月帳之仕上ゲ、一ケ年諸向惣勘定之仕上、幷凡積書付類、御繰合筋等、都而江戶遠國諸役所、其外向々より申上候、御入用御手當願之類等吟味取調、御三家御三卿方萬石以下、諸拜借幷返納調、三季御切米張紙調、町奉行御役所、幷牢屋敷溜御入用、金銀座幷金銀吹方御用、朱座諸願御買上朱、朝鮮人參幷虎豹之皮、生鹽硝、漆御買上、御旗棹御用、城州八幡竹伐出し御用吟味、御城內幷御庭向、紅葉山兩山御宮御靈屋向等ニ而、御遣方相成候大磯砂利御買上、且又御代官所、御預所、金銀米籾大豆納方皆濟御屆、御代官負金返納調、猿江御材木藏、諸御材木石類、元拂幷御買上之吟味、飛州元伐御材木運送方御藏納、佐州金銀米御藏納拂、同所金銀山、奥州半田銀山、石州銀山方、野州足尾銅山稼方等御入用吟味調、諸向本途調、幷本途無之御入用筋伺、御船向御武器類之御修復鎌倉大筒稽古御入用、御作事、小普請、上水方、道方、遠國共、所々御普請御修復御入用之吟味、淺草本所御藏々御修復取扱、諸向月帳突合、御馬方諸入用、都而御斷下り金銀、米籾、大豆錢、漆、石灰、油、銅板、幷地丁、銅類、地燒瓦御買上、幷諸役所、御納戶、御賄所、御細工所等より之請取物、其向々より申上候御斷書、吟味として御下ケ之分取調、且銅瓦延立御用、御材木藏ニ於て山挽物石類御買之分、其外禁裏御所向、宮門跡方、諸堂上方、諸願之吟味調、御臺樣、御簾中樣、幷御子樣方、年中御召物御入用、其外御合力米金銀、臨時別仕上御入用伺、御儉約ニ付御入用增減調、右之外、長崎幷大坂銅屋、江戶古銅吹所御入用向、馬喰町御用屋敷、御城內外御破損方御用材木檜木等、臨時御買上共取扱、

御取箇方掛御用向取扱廉書

差出方　御取箇筋取調、新規切替定め吟味、小兒養育、荒地起返し、幷損地糺方、御料所村々家數人

別損毛歩合、相續拜借、幷御代官手附手代身分之儀取調、

廻米方　御物成、江戸御廻米、幷二條、大坂、大津、駿府、清水、甲府、日光、今市、御詰米籾、御膳籾、豫州銅山師渡米、餅米大豆御買上、幷三分一米、十分一大豆、金銀納直段定石代、其外諸國御廻米運賃渡方吟味、難破舟、幷定火消役組與力馬飼料大豆、諸國村方貯夫食、年々石數取調願、石代直段、夫食種代農具代拜借、諸家城詰米、幷圍米等之儀取調、

御普請方　年々諸國用惡水圦樋、橋、堤、川除等御普請之儀ハ、定式前年之冬、關東、東海道、甲州、川々定掛り場之分ハ、御普請役目論見仕上、御代官御預所、手限場之分ハ、目論見帳を以相伺、右諸帳面取調方之儀ハ、前々仕來相糺、諸色人足幷米相場、國々所直段ニ見合、御入用減方吟味仕、金高多分之分、再見分差遣、減方も爲仕候上、孰も難捨置分、御普請被仰付候積取計、右御入用御足高、幷國役金割合方取調、其外私領願國役普請御下ゲ有之候得バ、見分差遣御入用積、右同樣吟味いたし、御下知相濟候上、仕立方取計、御普請金渡方、幷出來方帳面相改、定掛り場村々より願出候吟味筋、右定掛り場ニ附候御用向之儀取扱、

新田方　新田開發願、御代官御預所より相伺候分、幷奉行所へ願出候分取調、新調鍬下年季明ケ撿地年延伺、地代金取立伺、新田見取場撿地石盛伺、撿地帳改方御代官見立、新田撿地御高入後、十分一被下方伺等之儀取扱、

知行割　御所方御料割合、幷萬石以上以下御加増地渡、幷村替上地代知割、大名所替、寺社領替、御代官御預所増地場所替、最寄替、萬石以下、知行下免ニ付、御藏米御引替、諸國郡村名、村高、幷領主地頭等諸向問合之節、糺之儀取扱、

道中方掛り御用向取扱候廉書

五街道宿々人馬日〆帳吟味、幷宿々御取締、助郷村々差替願、年々定式米金渡、宿助成金御貸附方、

且利金割符、并宿々拜借返納吟味、二條大坂大番頭旅籠錢帳調、御傳馬宿入用米、五街道往還、并宿宿捨物欠所物、川々留明、宿々出火御屆、并拜借等、往還道橋堤川除樋類、宿園御普請、御代官所御預所宿々支配代リ之節、其外道中方ヘ附候御用向、宿觸等之儀取調、

伺方掛御用向取扱廉書

中之間掛　諸國御料所小物成類、高掛物代米渡元拂、大坂御城內定式御普請竹繩代、鐵炮合藥割賦、鰯味噌詰替、佐州一國定式取扱方、并私領上知御料並取計、欠所田畑家財御拂伺、御林番、御關所、浦役人、其外所々不役之もの身分之儀、水損風損類燒小屋掛料、機具代馬代金拜借、諸國御藏々御留番所、脇往還道橋渡船、伊豆國附島々夫食拜借、御救御園穀等之一件、日光今市、甲州、駿州、其外御藏々諸向小屋々々、馬喰町御用屋敷御修復御普請等之儀、取扱、

神寶方　紅葉山、上野、增上寺、日光、久能、駿府寶臺院、仙波、世良田、新田大光院、池上三州寺々、御宮、御靈屋、其外諸國御由緒有之寺社御修復御普請類、伊勢遷宮神寶御道具裝束類、寺領水旱損之節、御供養御足米被下金銀、富興行、勸化御寄附、拜借貸附金、引寺遠國道橋、御普請御修復入用吟味、郡中割、右掛役人御扶持方渡等取扱、

御林方　諸國御林并並木立枯風折根返リ御拂御伐出し、御林帳組入、并減木伺、御林仕立方、其外御林々に掛リ候役儀取扱、

御鷹方　御鷹野諸入用、御鹿狩一件、御鷹方并御鳥見旅御扶持方渡、野廻リ綱差、御場人足肝煎等之儀取調、雲雀上鳥御用、鳥見在宅御修復御普請、其外御鷹野ニ附候儀取扱、

運上方　諸國運上冥加、分一新規取立免除伺、獵具拜借等之儀、其外金銀間屋堀、都而諸運上、諸運上諸冥加等ニ付候儀取扱、年々諸國運上高取調書等取扱、

諸入用方　御代官諸入用米金渡、御預所口米永渡方、并道中引越入用等取調、口米永御勘定組伺、

銀納方領手代御扶持米渡、御代官御役拜借等之儀取扱、
證文調方　御代官御預所諸伺物、諸掛リニ而吟味相濟後、調印押切いたし相渡、御代官幷手附手代、御預所役人、御用ニ付出立歸着之月日帳面ニ記し、押切致置、御勘定組之節突合、御代官御預所場所替之節、諸證文繼添引分等之儀取扱、
吟味物掛　御代官御預所、幷私領より添簡いたし差出候願人之儀、運上小物成、御林伐出し等之儀吟味仕、其外諸運上未納金取立方、新規通船、湊切開、市場願等之儀取扱、
酒造掛　諸國御料私領酒造株讓受渡、新規冥加取立方、攝州灘、同村々酒造御貸株、關東上酒御試造上ゲ株貸渡方、其外酒造之儀ニ付、御代官御預所より差出候諸伺諸向問合等取扱、
金集掛　交替寄合、幷寄合小普請、諸向無役金取立之儀取扱、上納金案文、幷納之節請取書、其外押切帳、仕上帳下帳、淸帳等取調申候、

帳面方掛御用向取扱廉書

御代官御預所幷諸向より差出候御勘定帳相改、奧書相濟候上、御加印ニ差上、右相濟向々へ相渡惣勘定仕組相渡、惣勘定仕組方、猿樂配當米一件取扱、
奧書掛　御代官御預所諸伺、幷遠國奉行より差出候御勘定帳改相濟候分、奧書相認申候、
算調掛　御代官御預所より差出候、地方御勘定帳、幷御金藏より請取候、金銀元拂御勘定帳算入、前年帳面御取箇帳、鄕帳、諸證文御金納札突合等、其外諸向とも、遠國奉行より差出候御勘定帳、右同樣相改申候、
起印掛　御代官御預所より元組證文類掛り々々へ不差出以前、米金員數書留置、起印いたし相渡、證印相濟以後、右證文員數突合、致合印候、
鄕帳掛　御代官御預所より差出候鄕帳、算入、幷前年帳面讀合いたし、惣而入狂ひ有之候分、口々

相改申候、

惣勘定掛　御代官御預所より差出候地方御勘定帳、改相濟候上、一ヶ年分御代官御預所限り、一人別書拔、右代米納元拂差引、御藏納仕譯等、其外本途山物成仕譯いたし、惣勘定帳仕組申候、

勤方帳村鑑帳掛　御代官御預所より差出候勤方帳算入いたし、前年御取箇帳へ突合相改、月々差上、村鑑帳相改、目錄書相仕立、每暮御側衆迄差出申候、

調方掛　地方幷御金藏御勘定帳、其外諸向より年々差出候御勘定帳、繪圖類、御國郷帳、其外諸證文類、目錄帳へ相記置、御用にて出入之節々取扱申候、

右ハ御勘定所掛々にて取扱候御用向、凡前書之通御座候、以上、

〔法曹後鑑 一〕起證文前書

一今度御勘定方御役就被仰付候、重公儀御爲大切奉存、御後闇事不仕、可成程精を入、物每無油斷、末々迄猥不成樣、堅可相守事、

一御勘定之儀ニ付、御代官衆、御賄方、御普請方、諸役人、親子兄弟、智音之好身たりといふ共、依怙贔屓仕間敷候、又中惡敷輩たり共、非儀申懸間敷、萬事存寄之儀、心底を不殘可致吟味候、勿論無作法成儀仕間敷事、

一御役儀ニ付、相役人と中惡敷不仕、物每遂相談、私之存分を不立、多分ニ付御爲能樣可仕事、

附、以御威光奢たる儀仕間敷事、

一御勘定幷知行割之儀ニ付、依怙贔屓仕間敷候、總而御隱密之儀、他言仕間敷事、

附、御勘定方不依何事滯儀候ハヾ、頭中之受差圖可申候、內々ニ而相極申間敷事、

一諸御代官衆諸役人衆より上り候金銀米錢納札、壹人として請取申間敷候、右納札入候箱之封印、幷取出申儀、壹人として仕間敷事、

一遠國御用、其外諸國御普請所、并見分御用等被仰付候ハヾ、萬端及心之候程、精入相勤可申候、
右御用掛候面々、御用向之儀、不殘心底遂相談、御爲能方落着可仕候事、

一御代官衆、其外御普請御用御手傳方、并懸之面々、總而御勘定之儀ニ付、何方ゟも金銀米錢衣類諸道具、其外何ニ而も一切受用仕間敷候、但親子兄弟、并忌懸候親類、聟舅小舅者格別之事、

附、右之家來手代同心ゟ、何ニ而も一切受用仕間敷事、

一右之面々ゟ、金銀米錢者不及申、何ニ而も一切借用仕間敷候、并家來手代同心ゟも同前之事、

〔大猷院殿御實紀二十三〕寛永十年九月廿六日、勘定役由比平兵衞光運、窪田喜左衞門正次は、賦税撿斷の事奉はる、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十二月三日、勘定組頭能勢四郎右衞門頼安、勘定山中喜兵衞信三、これも信綱〇老中松平伊豆守天草逆徒征討使に陪從し、粮米の事沙汰すべきむね仰付られ暇下さる、

〔常憲院殿御實紀三〕天和元年二月十八日、勘定の吏四人をえらばれ、前年より惣代官の未進會計すべき旨命せられ、〇中略外にさし添三人、

〔常憲院殿御實紀十六〕貞享四年七月廿四日、勘定の徒二人、甲州につかはされ、山材を伐らしめらる、

〔甘露叢七十〕元祿十二年七月十三日、長崎奉行、向後四人ニ被仰付、〇中略

一御勘定等吟味承候タメ、向後小役人二人宛、代々可遣事、

〔文昭院殿御實紀十三〕正德二年正月廿一日、勘定の輩に、万石以下采邑のあらためを命せらる、

〔浚明院殿御實紀五十三〕天明五年十一月廿一日、勘定の下吏をして、陸奥國半田銀山の水路修復の事命せられ、また會津に赴かしめ、年々貢する蠟の製法を監視せしむ、

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年二月

資格俸祿賜與

御勘定奉行江
同吟味役

大奥長局向御修復之儀、〇中略小仕事之外、御修復所之分は、以來吟味方改役、御勘定方立合之積相心得、尤御留守居江茂其段申渡候間、可被談候、

二月

〔吏徴上御目見以上〕御勘定〇中略奉行支配　燒火間

〔明良帯錄世職篇〕御勘定百五十俵高勤支

此場ハ世職同様にして、同寮を經昇するは、其場に馴たるもの筆算働有仁、遠國の御用筋をも勤むる也、小普請よりも、筆算有ものは此場江出、御目見以下よりは、支配勘定に出る也、又出役向ゟ取廻し能仁ハ御勘定に出る、

〔幕朝故事談〕大岡〇忠光の家來大貫東馬、大岡の盛時、金をもらひため、暇をとり與力となり、主殿頭樣〇田沼意次兵庫樣、次第と御懸意に付、御最屓にて御勘定可被仰付候と有之付、松平右近將監樣、左樣に陪臣が公儀へ出、御普代に罷成候ては、天下に陪臣は無之罷成候、且君臣の大義にかゝはり候事故、私御役中は、決て不相成候由被申候故、其通に成、右近將監樣沒後に御勘定になり、今は御代官になる、大岡と兩敬なり、

〔柳營秘鑑四〕諸御番所幷末々迄御切米高之大概

一御勘定衆百俵五人扶持御目見勘定は百五拾俵

〔吏徴上御目見以上〕御勘定〇中略百五十俵高　部屋住二十七人百俵、〇中略諸掛御用扶持、御殿詰七十六人扶持、御勝手方百四十四人扶持、御取箇方貳百四十一人扶持、同方四十一人扶持、帳面方二十三人扶持、合五百廿五人扶持

〔吏徴別録 下 布衣以下御目見以上〕御勘定○中略　元祿三年庚午六月十一日、新規被召出候御勘定方二十人江、御切米百五十俵充被下、内一人は百俵被下、　享保九年甲辰七月十三日、百五十俵高、○中略

同二十年乙卯閏三月、部屋住百俵高、

〔享保集成絲綸録 三十〕享保九辰年七月　御勘定

百五拾俵高

但取來候御扶持方共、部屋住之者ハ只今迄之通、○中略

右之通、御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔常憲院殿御實紀 三〕天和元年二月十八日、勘定の吏四人をえらばれ、前年より惣代官の未進會計すべき旨命せられ、役料として各金百兩下さる、

〔甘露叢 七十〕元祿十二年七月廿日、御勘定中川吉左衞門○中略　當分長崎御用被仰付ニ付、役料二百俵并ニ手代給金五十兩宛被下旨被仰渡、

〔寶暦集成絲綸録 二十五〕寶暦六子年正月

御勘定組頭、御勘定、支配勘定遠國江御普請御修復、并見分御用ニ罷越候節、物書料○中略　御勘定支配勘定江關外金貳拾兩、關内金拾五兩被下候積、去々戌年相極候處、○中略

關外

物書料金拾五兩　御勘定 支配勘定

關内

同　金拾兩

右之通向後被下候筈ニ候間、可被得其意候、

正月

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年十二月

御勘定奉行
同吟味役　江

寄合小普請御役金之儀取扱候ニ付、〇中略御勘定江銀拾枚宛年々被下候間、其段可被申渡候、

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十三申年正月

日光御社參ニ付、御供之面々金銀被下候、

一金貳拾兩宛　御勘定〇下略

〇按ズルニ、此他勘定衆ノ賜與ハ、勘定吟味役篇ノ勘定吟味方改役俸祿賜與ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

勘定出役

〔吏徵上御目見以上〕御勘定〇中略　外出役四拾五人、五人扶持、百俵以下、但支配勘定打込、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御勘定〇中略　寛政八年丙辰、始置御勘定支配勘定出役二十員、同十一年己未、增十五員、合三十五員、文政三年庚辰、增十員、合四十五員、天保九年戊戌、增二十員、合六十五員、

支配勘定及見習

〔明良帶錄外篇〕支配勘定百俵持扶持勘支

格別筆算出精、多くハ右の勤功の者、または年數勤、御勘定所出役筋、一通にては、火の番なども昇る、御徒目付よりも昇る、半席以上とて、都て是迄昇る人多からぬゆへに、上の立身といふ、何れも高持なり、此場御入用、國郡の取調、銘々持にて取調、骨折之場なり、

〔吏徵御目見以下〕支配勘定　奉行支配　百俵持扶持高　見習七人十人扶持　躑躅間、上下役、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

百俵高持扶持儘　支配勘定〇中略

右之通御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

○按ズルニ、此他尙ホ支配勘定ノ賜與アリ、勘定吟味役篇、勘定吟味方改役俸祿賜與ノ條ヲ併セ看ルベシ、

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政八辰年五月

御勘定奉行江

部屋住勤之御勘定、以來三拾人、支配勘定之悴、七人之定數ニ致し置、右之內闕有之、七八人程にも及候はゞ、右之上り高を以、一同御入人被申立候內規矩ニ可被致置候、尤其節相應之者無之時は、必定人數高ニ被申立候儀ニは無之候間、可被得其意候、

五月

寛政十二申年九月

御勘定奉行江

御勘定支配勘定御入人之儀、最前貳三人明ニ而被申聞、部屋住之者共七八人明候はゞ、可被召出旨相違置候處、以來は家督部屋住之無差別、七八人明候はゞ、御入人之儀可被申聞候、右之內部屋住之儀は、一兩人ニ而も部屋住明人數次第、一同御入人有之節々、相應之者相撰申聞候樣可被致候、

勘定所湯呑所之者

〔吏徵御目見以下〕湯呑所之者十八人　貳拾俵貳人扶持、至給金拾三兩貳分、　勤金五兩、御殿詰七人、三兩御勘定所詰十一人、　見習人數勤金共不同、但見習兼勤金三十五兩、　御抱場、○中略町屋敷拜領、沽券金五十五兩

〔吏徵別錄御目見以下〕御勘定所湯呑所之者　寛延二年己巳十二月、初而勤金被下、御殿詰五人各五兩、御勘定所詰九人各三兩、合金五十二兩、　寶曆五年乙亥、初置見習三員、　安永八年己亥、定見習十員、　明和四年丁亥、見習勤金惣高三十五兩に定む、　寛政四年壬子、定十八員、

〔享保集成絲綸錄三十一〕元祿十二卯年十一月

家老用人

一今度御吟味之上、御譜第小給之輩御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相摸守（○老中土屋政直）傳達之、○中略

同斷（○金武兩）　　御勘定所湯呑所者

〔寶永三年武鑑〕御勘定頭

荻原近江守　家老、新井治部右衛門、箕和茂左衛門、芝山仲右衛門、　用人、山中彌吉、吉田與市兵衛、

〔元文五年武鑑〕御勘定奉行

水野對馬守忠伸　家老、鈴木要藏、　用人、小野藤右衛門、小林團之進、戸村又左衛門、

〔嘉永二年武鑑〕御勘定奉行

久須美佐渡守祐明　家老、塚越左傳次、平井左五郎、　用人、所猶人、平野藤、野々村治平、

勘定所

〔職掌錄〕御勘定奉行

大手御門番所後に御勘定所あり、御勘定組頭以下支配不殘此所にて御用承之、諸家留守居呼出申渡等、惣じて此所に於てす、これを下御勘定所といふ、また殿中にも御勘定所あり、奉行吟味役は奥の間に詰る、これを内座といふ、正面に御勘定奉行、其横の方に吟味役着座す、故にこれを横座といふ、其外組頭以下各座席に在て、諸事引受御用承る、○又見二右司勤仕錄一

〔寶暦集成絲綸錄十六〕寶暦三酉年二月

一向後は、御勝手方御勘定奉行壹人宛、日々朝五時下御勘定所江罷出、吟味役組頭共、御用向取計之趣承屆、九時御殿江罷出候樣可被致候、

〔明良帶錄世職篇〕御勘定

下勘定所には、國郡の調方、御領地御收納の事、段々に調上、吟味役にて上調をして、奉行へ差出す、夫より御勝手掛御老中へ上る、

〔德川禁令考役所役宅二十四〕慶應三卯年六月七日

御勘定所移轉之事

周防守殿御渡　　御勘定奉行江

覺

大手御番所後御勘定所、此度西丸江引移相成、御殿而已ニ而ハ手狹ニ付、二重橋外、只今迄御納戸役所之儀、御勘定所ニ相成候間、御勘定所奉行江早々引渡候樣可被致候、尤是迄右場所ニ有之諸品御道具類差置候場所之儀は、御目付相談候樣可被致候事、

右之通、御目付御納戸頭江相達候間、可被得其意候事、

古事類苑

官位部五十九

徳川氏職員八

勘定吟味役

勘定吟味役ハ、初メ勘定奉行差添役、又ハ勘定吟味方ト云ヒ、其員數モ一定セズ、勘定組頭ノ上ニ在リテ、僅ニ勘定所會計ノ目付タルニ過ギズ、元祿以後ハ、暫ク之ヲ置カザリシガ、正德二年ニ至リ、新井君美ノ建議ニ據リテ、再ビ此職ヲ置キ、改メテ勘定吟味役ト稱セリ、勘定組頭以下ノ職務ヲ點檢スル職ニテ、亦勝手方公事方ニ分レ、勝手方ハ、租稅ノ徵收、米錢ノ出納等、勘定所一切ノ事務ヲ勘査シテ、其正否ヲ檢證シ、公事方ハ、訴訟ノ裁決ヲ考ヘ、其當否ヲ判ジ、評定所ニモ列シテ、特ニ其意見ヲ陳ブルコトアリ、總テ勘定奉行ニ相並ビテ其職務ヲ行ヒ、上職ヘノ伺書ニモ勘定奉行ト共ニ連署シ、上職ヨリノ達書ニモ、亦勘定奉行ト連名ニテ達スルヲ例トス、五百石高ニシテ、役料三百俵ナリ、屬僚ニ、吟味方改役、吟味方下役アリ、

〔東職紀聞　二〕勘定吟味役二人

〔吏徵　上　布衣以上〕御勘定吟味役四人

〔職掌錄〕御勘定吟味役
當職四員、或五員、

〔官中秘策　十〕諸御役人之事
一御勘定吟味役　六人〇又見柳營秘鑑

職掌

〔德川禁令考勘定吟味役十五〕官中秘策曰、勘定吟味役六人、五百石高、布衣、役料三百俵、累代武鑑曰、此役天和二年六月四日、始テ被仰付、元祿十二年十二月ヨリ正德二年七月マデ闕役、但シ曾根源藏ハ松平右衞門大夫副役ニテ、當時ノ吟味役ニ類スル者也、故ニ布衣御勘定奉行ト總加判被仰付、按ニ當時奉行ト源藏同ク布衣、故ニ此令アリ、又累代ノ列員ニ曾根源藏ヲ言テ、天和年中、松平右衞門大夫副役、寬永十八年正月、千石加增シテ御勘定奉行ニ成ルトアリ、尋デ天和二年六月、二名同任ス、貞享年中、二名任ズ、正德二年七月、二名同任ズ、享保年中ニハ六名任ズ、以後項背相屬シテ慶應元年五月ニ至ル、今各其職ノ歲月ヲ推セバ、官中秘策ニ謂フ所ノ人員、大抵相當スルヲ知ル、但其職務ハ奉行ニ副タレバ、幕朝ノ達書皆連署ヲ用ユ、

○按ズルニ、勘定吟味役ハ、常憲院殿御實紀ニハ、勘定奉行差添ト見エ、貞享元祿等ノ武鑑ニハ、御勘定吟味方トアリ、吟味役ト云フハ、正德二年再置ノ時ヨリノ職名ナリ、任免條併セ看ルベシ、

〔東職記聞二〕勘定吟味役二人　布衣

掌從勘定奉行而勘檢御領所之組稅以下金銀出納公文等事之職也、

〔職掌錄〕御勘定吟味役

御勘定所一體の御取締として、奉行組頭已下取計非分ある時は、其段直に老中へも申達る事あり、すべて局中の目付也、米金受取手形も、初判は必ず當役にてする也、諸吟味物も當役の吟味を受て後、奉行へも申達する等、皆當役の規模也、

〔青標紙三編〕一御勘定吟味役は、奉行の横目につけ置るゝ役也、ゆへに是を横座と云、奉行と同じく御老中支配也、奉行の手に屬する任にあらず、

〔有司勤仕錄〕御勘定吟味役

一布衣之御役也、評定所式日立合に、三奉行の下に列し、諸公事之裁許を聞なり、事に寄、入組たる公事沙汰細吟味に至らば、別に三奉行列座ゟ奥へ公事人を呼寄、事細に吟味を掛事也、夫故吟味之手に渡りては、其詮議、殊の外委敷事也、必竟三奉行は、公事之數多き故、一方に掛り難き成るべし、

一當役は老中江密談之事有と見へて、折節は勝手座敷へ來り、密事對話有る事也、

〔勘契備忘記上〕享保四亥年　吟味役勤方被仰渡之留

一惣而御用之儀ニ付、御勘定奉行揃ニ而罷在候時者勿論、評定所一座揃候而罷在候ハヽ、吟味役右一同ニ可罷在旨、御老中於列座、久世大和守、井上河内守、三奉行幷吟味役江被申聞候、

〔敎令類纂二集六十七〕寶暦六丙子年十二月

御勘定吟味役御用筋、年番懸リニ相勤候節ニ付、御勝手向御用筋、不依何事、御勘定奉行ゟ吟味役へ委申談、被取計、都而被差出候書付之儀も、御勘定奉行江掛之吟味役連名ニて、向後可被差出候、尤其向々御用筋伺等之節も、御勘定奉行と掛りの吟味役一同罷出候樣可被致候、

〇按ズルニ、天保集成絲綸錄ノ天保八年五月ノ法令ニモ、首ニ此文ヲ掲ゲ、末尾ニ右之通寶暦之度相達置、當時も遺失有之候儀とは不相聞候得共、彌以右之趣意相流れ不申候樣、御勘定奉行同吟味役へ可申達置候事トアリ、

〔吹塵錄二十九德川氏〕御勘定所掛分ケ

御勘定吟味役掛

御國高　猿江御材木藏　御武器　御儉約　浦々備場　橋々　御貸附　町會所　關東筋川川　米價　金銀座　淺草本所御藏　植物　江戸川、神田川、

〔勘契備忘記上〕享保七寅年　御勘定奉行、吟味役共、御勝手向御用分候而可相勤旨御書付、

一向後御勘定奉行、吟味役共ニ御勝手向御用方江兩人、公事方江兩人、壹ヶ年替相勤、御勝手向江懸り候兩人は、公事方江懸り不ㇾ申、評定所江も出座不ㇾ及、評定日も御城江可ㇾ罷出候、公事方勤候兩人、御勝手向之儀懸り申間敷候、評定所江も公事方計出座可ㇾ仕候、

〔寶暦集成綵綸錄十六〕寶暦三酉年二月

御殿組頭貳人　御勝手方組頭貳人
右吟味役壹人
御取箇方組頭三人
右吟味役壹人
伺方組頭三人
右吟味役壹人
帳面方組頭貳人
右吟味役壹人

右之通吟味役掛分年番相極、御勝手方江相懸り候吟味役ハ御殿江罷出、御取箇方伺方帳面方江相懸り候吟味役は、日々朝五時下御勘定所江罷出、諸事組頭吟味之趣立合承ㇾ之、評儀之上相定、九時御殿江罷出、其趣御勘定奉行江申達候樣可ㇾ被ㇾ致候、

寶暦八寅年五月

御勘定奉行江

只今迄御殿御勝手方、御取箇方、伺方、帳面方與四手に相分、年番相勤候得共、自今は御殿御勝手方兩人一同ニ年番相勤取扱候儀ハ、一存ニ而吟味不ㇾ仕、兩人申合相勤、殘り三人ハ下御勘定所一同ニ年番ニ相定取扱候儀は、是又一存ニ而吟味不ㇾ仕、三人得與談合之上取計候樣可ㇾ被ㇾ致候、

但小野左大夫、青山三右衞門儀は、御勝手之方壹人宛、明不申樣可被申合候、
右之通吟味役江申渡候之間、可被得其意候、
五月

〔勘契備忘記上〕享保二十辰年　御勘定吟味役勤方、并可見廻所々御書付、
一下御勘定所　一竹橋御藏　一蓮池御金藏　一淺草本所御米藏　一本所御材木藏
右場所江折々爲見廻罷越候樣可被致候、此外之儀者、只今迄吟味役相勤候通可被相心得候、
辰四月

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和四亥年九月
御勘定奉行江
御作事方、小普請方、其外諸向共、金貳拾兩內之御入用之分、向後吟味に可相渡候間、御勘定方之もの三人程、懸り申渡、吟味役引受にいたし、吟味之趣相糺可被申聞旨、寶曆三酉年申渡置候處、此度其方共支配向ニ被仰付候事ニ付、右吟味之儀、其方共支配江受取、是迄之振合を以、相糺候樣可被致候、
右之通御勘定吟味役江申渡候之間、被得其意、是迄十兩以下ニ掛置候分、外懸り場所、御人少之方相勤候之樣可被致候、
九月

〔天明集成絲綸錄二十二〕明和六丑年十二月
御勘定奉行江
御作事方、小普請方、所々御修復場所之儀、御入用五拾兩以上之分は、是迄御目付見分候處、自今御勘定吟味役一同、見分可被致候、

一五拾兩以下、貳拾兩以上は、御勘定吟味役、見分可ㇾ有ㇾ之候、〇中略

右之通向後相心得、尤見分書、是迄ハ御勘定所江被二差出一候得共、以來ハ出羽守江直ニ可ㇾ被二差出一候、

十二月

〔天明集成綵綸錄四十〕安永五申年九月

御目付江

寄合御役、金、向後御勘定奉行、同吟味役取扱上納金之儀は、後藤庄三郎役所江直に請取候筈ニ候、

〇下略

〔天保集成綵綸錄七十四〕寛政二戌年六月

交代寄合〇中略

小普請御役金之儀、是迄後藤庄三郎方江相納候處、向後御勘定吟味役宅ニおゐて取立候樣申渡候間、被ㇾ得二其意一、〇中略委細之儀は、御勘定奉行、同吟味役可ㇾ被ㇾ談候、

六月

右之通可ㇾ被二相觸一候、

〔德川禁令考十八誓詞〕文化二乙丑年正月十三日

起請文前書

一今度御勘定吟味役就ㇾ被二仰付一候、彌重二公儀御爲第一一奉ㇾ存、御後闇儀無ㇾ之、御用向萬事入ㇾ精相勤可ㇾ申事、

附公事批判、無二依怙贔屓一入ㇾ念承ㇾ之可ㇾ申事、

一跡々より御法度之趣堅相守、自今以後被二仰出一候御條目壁書等、是又違背仕間敷候、相役中者不ㇾ及ㇾ申、御一門を始、大名諸傍輩と、奉ㇾ對二御爲一惡心を以申合、一味仕間敷事、

一勘方之儀被仰付候趣、及候程入念遂吟味、存寄候儀者、御勘定奉行江可申談候、尤品により御老中方江可申上事、

一唯今迄相定來候儀ニ而も、如何と存候儀者、前々ニ拘り、少も差扣候儀仕間敷事、

一御勘定奉行井同役と、御用之儀ニ付中惡敷不仕、心底不殘申談、御爲能方落着可仕候、極候儀を、陰ニ而何角と取沙汰仕間敷事、

一御用之品ニより、御老中方別而御尋之儀於有之者、御勘定奉行を不相兼、心底不殘可申上事、

一御取箇之儀相極候節、納方宜樣正路遂吟味、井百姓困窮不仕候樣隨分入念可申事、

一御代官御勘定方井御勘定向江附候役人、少も贔屓偏頗仕間敷候、御後闇儀於有之者、可申上候、假令御勘定奉行之儀ニ而も、奉對御爲不宜事有之候ハヽ、御老中方迄可申上候、次第御用掛候、町人職人、無依怙贔屓吟味之儀少も用捨仕間敷事、

一金銀吹直、其外御用之儀、何も一同入念可相勤事、

一私領相渡候節、知行割之儀、少も無依怙贔屓吟味可仕候、たとへ何方より頼候儀申來候共、一切受合申間敷候、若無據儀於有之者、御老中方江相伺、可受差圖事、

附御料井私領方論所之公事、撿使差掛候節、委細入念吟味可仕事、

一御威光を以、私之奢不仕、非儀申掛間敷事、

一親類緣者、由緒有之面々之外より、金銀米錢、其外何ニ而も一切受用仕間敷事、

附妻子家來迄、堅受用爲仕申間敷事、

右之條々雖爲一事於致違犯者（以下闕文）

文化二年正月十三日　羽田藤右衛門

牧野備前守殿　井上美濃守殿

待遇

〔有德院殿御實紀 二十四〕享保十二年六月廿五日、けふ勘定奉行に仰下されしは、〇中略吟味役のうち、その〳〵つかさどる事をわかたれ、納税の事は神谷武右衛門久敬、細田彌三郎時以、國用のことは萩原源左衛門美雅、訴訟の事は杉岡彌太郎能連、辻六郎左衛門守參、新墾ならびに荒蕪開耕の事は井澤彌惣兵衛爲永うけ給はり、猶久敬時以にはかるべしとなり、

〔有德院殿御實紀 三十九〕享保十九年四月十九日、勘定吟味役井澤彌惣兵衛爲永に、大井川の浚利命せられて暇賜はる、

〔惇信院殿御實紀 一〕延享二年十月十五日、勘定吟味役遠藤六郎右衛門易續、長崎に撿察の事命せられ暇賜ふ、

〔浚明院殿御實紀 五十〕天明四年三月廿三日、勘定吟味役倉橋與四郎員尉に、道途のこと司るべしと命せらる、

〔文恭院殿御實紀 二十六〕寛政十一年二月二十八日、勘定吟味役三橋藤右衛門成方、〇中略蝦夷地の事奉はりて暇給ふ、

〔吏徵 上 布衣以上〕御勘定吟味役　老中支配　中之間

〔職掌錄〕御勘定吟味役

中之間に列す、御用之時は土圭間內へ入る、

〔東職紀聞 二〕勘定吟味役二人　布衣

一本代々記曰、天和二年、佐野氏補當職之時、格准勘定奉行、而賜布衣也、〇中略享保二十一年三月、神尾五郎三郎自納戸頭遷之之時、賜納戸頭上座、又有旨於中間被令行御用也、

〔仕官格義辨〕御勘定奉行之事 井 吟味役之事

問云、御勘定吟味役は、いつの頃より始り候御役に而候哉、答云、吟味役之義は、天和二戌年六月四

俸祿賜與

日、御勘定組頭より佐野六郎左衞門（後御勘定奉行長門守に任す）一人始而被仰付候、尤布衣役に而御座候、其已後貞享四卯年九月十日、同組頭より國領半兵衞、萩原彥次郎（後御勘定奉行近江守に任す）右兩人被仰付候、以後御勘定組頭、又は御代官抔ゟ出役に而、段々ニ被仰付候處、享保二十一辰年三月廿八日、元方御納戶頭より神尾五郎三郎（後御勘定奉行若狹守に任す）席は御納戶頭の上に被仰付候、其跡御勘定組頭は八木淸五郎被仰付候、其已後大御番ゟ吟味役被仰付候、

〔明良帶錄（續篇）〕御勘定吟味役（五百石高御役料三百俵中老支）

此場は御勝手向御入用筋に拘り、遠國御用等にて赴く事あり、諸御入用、御普請向、御領所、總て國郡の事を取扱ふ、尤厲役ありて是を遣はす事也、筆算專一として、御代官より歷昇するか、御勘定（并）留役抔より歷昇して、場數を踏たる人は萬事利に敏き故、鹽鐵經濟に精く、漢公孫弘、倪寬、卜式がごとき才にも劣べからず、依之御儉約と稱し、才に走り工夫をなすに、肥田小笠原の如き人材あり、是を泛駕の才とて、其身危き事もあり、如斯人にあらずんば御用にも立ざる也、諸向の調をする大儀の寮なり、

〔常憲院殿御實紀（十六）〕貞享四年十二月廿五日、布衣ゆるさるゝ者廿三人、○中略勘定奉行差添萩原彥次郎重秀なり、

〔官中秘策（十）〕諸御役人之事

一御勘定吟味役　布衣五百石高　六人　御役料　三百俵

〔憲敎類典（二ノ五御役）〕享保十六（辛）亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高（并）御役料定、

（中略）

五百石高（御役料三百俵）　御勘定吟味役

〔寶曆集成絲綸錄（二十五）〕寶曆六子年二月

任免

御勘定吟味役、遠國江御普請御修復并見分御用罷越候節、物書料、關外金五拾兩、關内金三拾兩被下候積り、去々戌年相極候處、

關外

物書料金三拾兩

關内

同　金貳拾兩

右之通、向後被下候筈ニ候間、可被得其意候、〇又見ニ憲教類典一

〔吏徵別錄上布衣以上〕御勘定吟味役　天和二年壬戌六月十四日、始置二員、佐野六右衛門正周、國領半兵衛重次、元祿十二年己卯十二月廿一日廢、　正德二年壬辰七月朔日、再置二員、杉岡彌太郎能連、萩原源左衛門義雅、

〔常憲院殿御實紀五〕天和二年六月十四日、勘定組頭佐野主馬正周代官國領半兵衛重次、精勤により、勘定頭に差添て事奉るべしと命せられ、半兵衛重次に二百苞加秩せらる、

〔常憲院殿御實紀十六〕貞享四年九月十日、勘定奉行差添役佐野六右衛門正周、〇中略加祿千石給ひ頭となる、差添役國領半兵衛重次も職めさる、

〔常憲院殿御實紀四十〕元祿十二年十二月廿一日、勘定吟味役諸星傳左衛門忠直老免す、

〔文昭院殿御實紀十四〕正德二年七月朔日、勘定組頭杉岡彌太郎能連、萩原源左衛門美雅、ともに吟味役となり、加秩ありて各實祿五百石となる、これは新に設られし所なり、

〔泰平年表文昭公〕正德二年七月朔日、始而御勘定吟味役二人を置る、

〔折たく柴の記中〕當時御勘定所と申すは、〇中略天下の財を生じ、出すも納るも此御役にかゝりぬれば、六十餘州の人民の樂しむべきも苦しむべきも、此職を奉れる人々の、其人を得と得ざ

るさによりて、是らの劇務備らんことを一人に求むべからず、されば昔の御代の如く、其吟味の役と云職おかれずしては、然るべからずと申す封事奉りたりけり、其職いかなる事をか司どらしむべきと仰下されしかば、一ッには御料の貢、幷御代官の能否、二ッには貢米の漕運、三ッには河堤等を始めて、すべて土功の事ども、四ッには道中驛傳の事、五ッには諸國金銀銅山の事、是らの事を考しめらるべき者なりと申す、七月(正德二〇年)朔日に至りて、復其職をおかれて、我申せし事ども仰かうぶる、(杉村(文昭院殿御實紀作杉岡)彌太郎、荻原源左衛門、此職を承る、此二人勘定衆の組頭より選び出されたり、前代の御時に至りて、諸國御料の貢、年々に減じて、わづかに二ッ八分九厘と云事に至りぬ、御料の百姓進する所、昔にかはれりとも聞えれど、御代官の手代などいふものゝ私せし所有が故なるべし、又河堤等修築の費川も年々に増くはへたり、是もかの手代などいふものゝ共の、各其私をいとなみし故と相聞ゆ、吟味の役をおかれし明年、御料の貢米凡四十三萬三千四百俵をまして、百姓ども相悦ぶこと大かたならず、河堤等修築の料も又金三萬八千兩を減じて、水旱の憂もなく、漕運の事も、今迄は年毎に漕に沈み米數萬俵、此後よりは覆沒の患あることを聞かず、)

勘定吟味役格

〔評定所格例〕評定所留役組頭之事

安永六酉年十一月廿八日　　評定所留役組頭　江坂孫三郎

右公事方吟味役新規被(二)仰付(一)、御勘定吟味役並之通、御足高御役料共被(レ)下、只今迄之通、評定所組頭兼帶可(二)相勤(一)旨、板倉佐渡守殿被(二)仰渡(一)候、

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十一月廿五日、勘定井澤彌惣兵衞爲永、勘定吟味役に准せられ、加祿三百俵をたまふ、

〔有德院殿御實紀三十三〕享保十六年正月廿六日、勘定吟味役格井澤彌惣兵衞爲永、年頃職事に心いるゝを褒せられ、官料三百俵下さる、

〔享保集成絲綸錄十八〕享保十七子年六月　　井澤彌惣兵衞

勘定吟味役見習

勘定吟味方改役　職員　職掌

右は在々之御普請御用承之ニ付、御勝手方之儀をも不存候而は、御入用積等之儀ニ付、差支も可有之奥、吟味役ニ被仰付候事ニ候、然處外吟味役勤之通相心得罷在候樣相見へ候、畢竟在々御普請御用之儀、本□候得ば、並之吟味役勤とは樣子も違候事ニ候間、得其意申合可相勤候、

〔有德院殿御實紀四十二〕享保二十年九月十九日、勘定吟味役井澤彌惣兵衞爲永が子、楠之丞正房も召出され、兩番に准せられ、三百俵賜はり、父爲永が職事見習ふべしと仰付らる、

〔有德院殿御實紀四十四〕元文元年九月五日、勘定吟味役井澤彌惣兵衞爲永が子、同職見習楠之丞正房、撿地の事命せられ、いとま給はる、

〔吏徴上〕御目見以上御勘定吟味方改役七人〇中略　出役貳人

〔吏徴下〕御目見以下御勘定吟味方改役並十人　出役五人

〔天保集成絲綸錄七十六〕寛政十二申年十二月

御勘定奉行江

御勘定吟味方改役、同並悴共之儀、以來御勘定幷支配勘定見習之內江一兩人迄ハ可被召出候間、相應之者相撰可被申聞候、〇中略

右之通御勘定吟味役江相達候間、得其意、御勘定支配勘定部屋住定人數之外ニ可被相心得候、

〔職掌錄〕御勘定吟味役

吟味方改役同並同下役等の支配向あり、何も御勘定方取調候書面類、再應吟味を遂る事也、夫故計府諸懸共、吟味方にてあづからざる事なし、

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和四亥年閏九月

御勘定奉行江

先達而吟味役支配吟味方改役同並被仰付、御勘定所御用向、諸事御勘定方申談候樣申渡候ニ付、

俸祿賜與

左之趣之儀者、个條之通可被相心得候、

一三季御切米張紙直段書付　一金銀米惣高ニ拘候書付　一隱密ニ申渡候御用向　一奉行計之掛ニ而他役所江立合候御用向

右之類、都而奉行限之御用向者、吟味方改役同並江、御勘定方ゟ爲見候に不及候、且又奉行吟味役相掛り、御勘定方吟味方懸り切候御用向者、別段に外吟味方江爲見候ニ不及候、何茂隱密筋取計之儀者、奉行迄之儀ニ付、吟味役江沙汰申談間敷儀勿論之事ニ候、尤吟味役限之御用向ハ、吟味方改役、同並ゟ、御勘定方江爲見候ニ不及旨申渡候、

〔天明集成綠綸錄二十二〕明和六丑年十二月

御勘定奉行江

御作事方小普請方、所々御修復場所之儀、御入用〇中略自今御勘定吟味役一同見分可被致候、〇中略

一貳拾兩以下拾兩以上は、吟味方改役御徒目付見分可被差越候、

右之通向後相心得、尤見分書是迄ハ御勘定所江被差出候得共、以來ハ出羽守江直ニ可被差出候、

十二月

〔天保集成綠綸錄七十四〕天明八申年二月

御勘定奉行、同吟味役江

大奥長局向御修復之儀、〇中略小仕事之外、御修復所之分は、以來吟味方改役御勘定方立合之積相心得、尤御留守居江茂其段申渡候間可被談候、

二月

〔吏徵御目見以上〕御勘定吟味方改役　吟味役支配　燒火間　百五十俵高　御役扶持十人扶持

出役貳人、五人扶持、

〔吏徵御目見以下〕御勘定吟味方改役並十人　吟味役支配　百俵持扶持高　役扶持七人扶持

出役五人扶持〇中略　躑躅間上下役

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和六丑年十二月

御勘定奉行江

小普請御役金取立之儀、骨折相勤、失却等茂相懸候由ニ付、今年ゟ年番之吟味方改役同並之內兩人江金拾兩、〇中略年々被下候間、得其意、御勘定吟味役可被談候、

十二月

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年十二月

御勘定奉行、同吟味役江

寄合小普請御役金之儀、〇中略年々被下候間、其段可被申渡候、

一吟味方改役兩人江金拾兩、〇中略是迄被下候得共、是又以來吟味方改役江銀拾兩宛〇中略被下候間、其段可被申渡候、

十二月

〔德川禁令考二十四經費改革〕天保十四卯年十二月廿九日

御勘定所諸掛り員數之覺〇中略

御勘定吟味方改役、同並、御勘定、支配勘定、

金貳拾五兩　浦々御備場掛　金三拾三兩　金座掛　金三拾三兩　銀座掛　金百貳拾兩

馬喰町御貸附掛　金拾八兩　長崎掛　金拾三兩　御繰合掛　金九兩　京都掛　金拾四兩　淺草本所

御藏立合掛　金七兩　蓮池御金藏立合掛　金九兩　猿江御材木藏立合掛　金拾八兩　猿屋町御貸附掛　金

廢置

九兩　古銅吹所掛　金九兩　別段古銅吹所掛　金九兩　(江戸川神田川)定掛　金七拾八兩　町會所掛　金拾五兩　米價掛　金貳拾兩　荒地掛　金拾三兩　橋々掛　金貳拾貳兩　植物掛　金拾三兩　(寄合小普請金取集)掛　金九兩　御林炭掛　金三拾五兩　國役金取集掛　金九兩　日光川船方立合掛　金三拾四兩　島々掛　金五拾兩　宿場助成御貸附掛　金貳拾七兩　御法會國役掛　金三拾九兩　(琉球人國役金取集)掛　金百貳拾兩　(道中方定式御扶持方)代り　金拾八兩　御武器掛　金貳拾兩　御赦掛　金貳拾兩　類集書集掛　金拾九兩　裁許書取調掛

右之通向後御手當被ㇾ下候間、被ㇾ得二其意一可ㇾ被二申渡一候、尤掛り人數增減之儀ハ、御用之都合ニ寄り、手限ニ而差略可ㇾ致候、

〔吏徵別錄 布衣以下御目見以上〕御勘定吟味方改役　寶曆八年戊寅十月廿八日、始二置吟味役手附十員(御勘定五人、支配勘定五人、)役扶持十人扶持、　同九年己卯九月五日、增二三員一、　明和四年丁亥八月十八日、始二置當役七員一、席御勘定之上、田口八郞右衞門、松村十左衞門、神山淸次郞、武島安左衞門、水野半七、野田源五左衞門、鳶田新助、　安永二年癸巳九月十九日、改役同並共定二二十八員一、　天明八年戊申八月十四日廢(改役十六人、並十二人)　寬政七年乙卯四月十六日再置

〔吏徵別錄 御目見以下〕御勘定吟味方改役並　明和四年丁亥八月十八日、始二置五員一、松村武兵衞、高野與一左衞門、岸本彌三郞、廣瀨伊八郞、田村金左衞門、百俵高、役扶持七人扶持、席支配勘定之上、天明八年戊申八月十四日廢(十二人)　寬政七年乙卯四月十六日再置

〔吏徵附錄 殿職〕御勘定見分役二人　元文五年庚申二月廿二日、始二置二員一、(大御番出役)　延享四年丁卯四月十四日廢

〔泰平年表 文昭公〕正德二年七月朔日、(中略)按るに、徳廟(○有徳院)の元文元年、初て御勘定見分役二人を置る、大番より出役也、後是を止らる、今の御勘定吟味役支配の改役抔の始なるべき歟、

勘定吟味方下役

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年八月

御勘定奉行江

吟味改役十六人　同並拾貳人　同下役拾六人

右之者共、〇中略只今迄之席ニ而取來、御切米御扶持方、御役扶持共、其儘被下候間、改役は御勘定、改役並ハ支配勘定、下役ハ御普請役江申渡、諸向懸り々々へ割入、直ニ吟味役手附ニ可被申渡候、向後手附明キ候節は、右之向々、惣人數之内ゟ代り之もの差出、右人高ハ追々減切ニ可被致候、〇中略尤吟味役可被談候、

〔文恭院殿御實紀十八〕寛政七年四月十六日、勘定武島安右衛門茂編、笹川運四郎長直、同じ吟味方改役とせらる、

〔吏徵別錄御目見以下〕御勘定吟味方下役　明和四年丁亥八月十八日、始置一十〔〇一恐誤〕員、御普請役元〆次、平御普請役之上、　同年十二月十一日、增二員〔合十二員〕　同五年戊子十二月六日增五員〔合十七員〕　天明八年戊申八月十四日廢　寛政七年乙卯四月十六日、再置八員、役順如前年、此節初置出役二員、貳人扶持、

〔吏徵御目見以下〕御勘定吟味方下役八人　持高　役扶持三人扶持　出役五人、貳人扶持、　當分出役三人、御手當金六兩、　役上下、御抱場、

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和四亥年十二月

御勘定奉行江

吟味方下役小給ニ而取續兼候由ニ付、向後役扶持三人扶持ツヽ被下候段申渡候間、得其意吟味役可被談候、

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和六丑年十二月

御勘定奉行江

小普請御役金取立之儀、骨折相勤、失却等茂相懸候由ニ付、今年ゟ、年番之吟味方、○中略下役兩人江金六兩、年々被下候間、得其意、御勘定吟味役可被談候、

十二月

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年十二月

御勘定奉行、同吟味役江、

寄合小普請御役金之儀、○中略年々被下候間、其段可被申渡候、

一吟味方○中略下役兩人江金六兩宛、是迄被下候得共、是又以來、○中略下役江銀五枚宛被下候間、其段可被申渡候、

十二月

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年八月

御勘定奉行江

吟味方改役○中略同下役拾六人

右之者共、其方共支配ニ被仰付候間、可申渡段御勘定吟味役江申渡候、尤只今迄之席ニ而、取來御切米御扶持方、御役扶持共、其儘被下候間、○中略下役ハ御普請役江申渡、諸向懸り々々江割入、直ニ吟味役手附ニ可被申渡候、向後手附明キ候節は、右之向々、惣人數之内ゟ代り之もの差出、右人高ハ追々減切ニ可被致候、且下役之内ニは、御譜代筋之ものも可有之候間、以來紛敷無之樣ニ可被心得候、尤吟味役可被談候、

淺草藏役人 切米手形改附

淺草藏ハ、幕府ノ米廩ナリ、其役人ニハ、奉行アリテ、手代以下ノ諸役ヲ指揮シ、幕府諸士ノ俸祿ノ切米、其他米穀ノ出納ヲ掌ル、而シテ享保九年奉行組頭二人ヲ置キシガ、元文四年之ヲ廢ス、

淺草藏奉行組頭職員

〔吏徵附錄 廢職〕御藏奉行組頭　御勘定奉行支配　四百俵高　享保九年甲辰月日、始置二員、元文四年乙未十月廿二日廢

〔有德院殿御實紀 五十〕元文四年十月二十日、淺草藏奉行組頭堀內源右衞門安但、山本源兵衞正識、藏奉行伊藤源之丞利賢、○中略咎めかうぶりて小普請に入らる、

俸祿

〔官中秘策 十四〕一御役料貳百俵　御藏奉行組頭

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、

五百石高　御藏奉行組頭

淺草藏奉行職員

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一御藏奉行　十貳人

〔吏徵 上 御目見以上〕御藏奉行七人　御勘定奉行支配　燒火間　御役料貳百俵　御役宅　淺草御藏外貳軒 貳百坪充　本所御藏內五軒 三百坪充 ○中略　寬永十三年丙子五月朔日始置

〔吏徵別錄 下 布衣以下御目見以上〕御藏奉行　寬永十三年丙子五月朔日、始置三員、同十九年壬午五月廿二日、六人、○中略　同年八月十八日、大御番小十人より十二人被仰付、寬文五年乙巳二月十三日、定八員、延寶二年甲寅、增二員、合十員　貞享四年丁卯十月、初而御勘定より被命、是迄ハ大

職掌

御番計也、其後御番方五人、御勘定五人となる、　元祿十一年戊寅、同十二年己卯兩年ニ兩人職、〇中略　享保九年甲辰月日、減二二員一、合八員　元文四年己未十月廿二日、增二二員一、合十員　寶暦四年甲戌月日、增二二員一、合十二員　同六年丙子月日、減二二員一、合十員　同七年丁丑十一月日、增二二員一、合十三員　寛政三年辛亥月日、減二二員一、合十員　同九年丁巳九月廿六日、出役期月五年に定む、　同十年戊午四月十九日、出役期月を止む、　文化九年壬申四月四日、減二一員一、

〔仕官格義辨〕御藏奉行之事

問云、淺草御藏奉行は、出役衆と大御番方ゟ假役之衆有レ之候處、右假役衆も、在番江は登り不レ被レ申候、是等も先規ゟ在番は勤不レ被レ申候哉承度候、

答云、淺草御藏奉行之儀は、先規は在番勤候由、江戸勤之內計、御藏奉行致候事に承候、其年在番之御番衆休に入候節は、下り組之御藏衆先下り致し、在番組之御藏衆與代り勤候樣に及レ承候、近年者、在番には不レ能レ越候、江戸に而御藏奉行計之勤にて候、御藏奉行組頭も兩人充被二仰付一候處、元文四未年十月廿二日、組頭兩人共御役被二召放一、其節ゟ組頭相止、御藏奉行八人之處、十人に被二仰付一候、其頃迄者、本役四人、假役四人に而候處、本役三人、假役七人に相成候、

〔大猷院殿御實紀五十〕寬永十九年五月廿二日、久留七郎左衞門正親、山田彥左衞門正淸、大久保七兵衞正重、田邊淸右衞門安直、小宮山淸四郞安次、窪田小兵衞通正、權に藏奉行命せられ、この夏の借米より沙汰せしめ、伊奈半十郞忠治、曾根源左衞門吉次に指揮をなさしめらる、〇下略

〇按ズルニ、是ヨリ先キ、藏奉行等姦曲アリテ、職ヲ止メラレシヲ以テ、假ニ置キシ所ナリ、尙ホ次條ニ引ク同書同年七月八日紀ヲ參看スベシ、

〔明良帶錄續篇〕御藏奉行持高、御役料二百俵、手代五十四人、內組頭七人、內介廿七人、御門番十五人、御藏番三十五人、小揚二百人、興挽小揚七十人、勘支、燒

御勘定奉行支配にて、淺草御藏の米穀渡方、三季御切米之節渡方を司る、御役料二百俵にて、手代

并藏番小揚の物等を指揮す、尤籾詰もあれば、籾すり立も見分す、新番衆小普請よりも出て、二條御藏奉行へ昇る也、出役向より歷昇するも有り、御勘定向よりも多く昇る、

〔大猷院殿御實紀 五十一〕寬永十九年七月八日、この日、城米の廩奉行、黑田次郎左衞門某、久保田藤右衞門某、新里彥右衞門某、淺草米廩の奉行、山下彌五左衞門某、石坂金左衞門某、朝岡三郎右衞門某、葛谷藤兵衞某、米契裏書役高野喜三郎某、淺草米廩の傍に於て斬に處せらる、津田平左衞門正重、蒔田數馬助長廣、寬三郎左衞門正重撿使たり、　八月十八日、大番柴田四郎左衞門正勝、名取半左衞門長治、小十人組淺井治右衞門安元、美濃部三郎左衞門茂光、竹內二郎左衞門信吉、小西九左衞門正盛、淺草廩奉行命せられ、大番鈴木久兵衞重政、疋田長兵衞正勝、小十人組多賀又左衞門某、多門勘右衞門正吉、猪俣助右衞門則綱、山本忠兵衞正治、城米廩奉行命せられ、〇下略

〇按ズルニ、當時藏奉行ニ、淺草米廩ト城米ノ二奉行アリシナリ、

〔武家嚴制錄 二十五〕一御米藏高札

定

一御藏前において御切米御扶持方請取之輩、差札等之儀ニ付て、万事不作法いたすべからず、并對御藏衆雜言申べからざる事、

一米不渡以前、俵の上にのぼり、又は俵に手を不可付事、

附御藏屋敷江用事なくして、人馬共に一切入べからざる事、

一俵まわしの時、一番鬮ゟ三番迄のもの立合升目等可致吟味事、

右可相守此旨、若違背之輩於有之者、可被處嚴科者也、

万治二年十一月朔日　奉行

〔勘契備忘記 中〕享保十九寅年　淺草御藏役人勤方納米改方等之定書

一御藏奉行組頭、御藏奉行、何れも毎日五半時御藏江出役可レ致候、御藏奉行壹人ハ泊番相勤、翌朝出役之者ニ代合可レ致二退散一候、但御藏奉行頻差合等ニ而、御人少之節者組頭も泊可レ申事、

一御藏御用之儀、組頭兩人司被レ爲レ勤候上者、兩人別而念を入、毎々奉行中江も被レ遂二相談一奉行中も存寄候儀ハ不レ殘二心底一被二相談一萬端無レ滯樣可レ被二相勤一候事、

一川通御成之節者、御成以前、組頭壹人御役所へ罷出、泊明之御藏奉行と兩人相勤、晝時組頭壹人、井其日泊之奉行罷出代合、還御迄相詰可レ被レ申候、且又川通御成之節者、上下之御藏御門をメ、中之御門計可レ被レ致二通行一事、

一御藏御門之儀、暮六時限爲レメ、役所へ鍵取揚、夜中通路之義其役所へ屆、吟味之上、中之御門計出入可レ爲レ致候事、

附御門番人勤方、如何之義有レ之候はゞ、早速內意可レ被二申聞一候事、

一入堀水門、御藏納拂相濟候以後、手代小頭壹人、手代壹人、相廻りメさせ致二吟味一役所へ鍵取揚置、尤御番晝夜心を付可レ被二申付一候事、

一惣而御藏構之內、無用之者一切不レ入樣可レ被二申付一候事、

一御藏構之內、火之元之儀、晝夜念入候樣可レ被二申付一候、尤御藏近所、薀其外何ニ而も、火之用心惡敷もの、一切置申間敷候事、

附竹橋御藏も、右之通可レ被二申付一候事、

一前廣如二申渡一候、竹橋御藏水溜置、桶手桶と階子調置候樣可レ被二相心得一候、若、淺草竹橋御藏近所ニ火事出來候時者、何時ニ不レ限、各早々被二罷出一、手代小揚之ものも、早速御藏場之內へ出合候樣、常ニ可レ被二申付一事、

附近年者、淺草御藏へ町火消相詰候間、不レ限二晝夜一火事之樣了ニ寄、御藏御門江も爲レ入防可レ申

候、尤猥ニ入申間敷候、

一御藏間ニ水はき念を入爲見廻、水滯なく通じ候樣いたし、風雨之時分は、手代之者へ申付、所々御藏江爲見廻可被申候、右之趣御藏番之者へも無油斷樣可被申付事、

一御藏出入候米屋札差并百姓宿、各定置候御藏作法相背候歟、又は御藏内ニ而猥成義有之候ハヽ、急度申付、品ニ寄御藏出入留可被申付候事、

一御切米御扶持方請取ニ參り候者、手代小揚不作法成義無之樣可被申付事、

一御藏へ手形持參候者、又者請取人不作法成者有之候ハヽ、主人聞屆置可被申聞候、品ニ寄御勘定所へも可被申達候、馬士船頭不作法成義有之候ハヽ、急度可被申付事、

一御藏只今迄之通、小破有之候ハヽ早速繕、屋根漏候哉、常ニ念を入、納拂之節、御藏之内致吟味、漏有之候ハヽ、早速繕候樣可被致候、米大分積込候ハヽ、漏所も知兼可申間、心を付、鼠穴拵有之歟、損候ハヽ、早速ふさぎ候樣可被致候、無油斷御藏番之者へ見廻候樣可被申付候、尤御藏ニ而修復不致程之破損者、早速書付可被差出候事、

附竹藏御藏ハ、小普請方ニ而修復致來候間、小破之節、早々改、書付を以可被相伺候事、

一御藏戶前封印之儀、御藏奉行組頭、并御藏奉行之中壹人、兩判ニ而致下封、上封ハ出役之御藏奉行壹人封印可致候、

一御年貢米著船、御藏所水揚改、并渡方米改、餅米大豆御買上改、右品々、御藏奉行兩人御藏普請方之一件、御藏奉行壹人御勘定一件、納拂等日用之員數、并小買物改、右品々御藏奉行壹人、左之通改、毎年八月代リ合、壹ヶ年宛可被相勤候、尤組頭、右之上も吟味可有之事、

一御勘定仕上之儀、年勘定ニ仕立可被申候事、

一御藏手代之儀者、從跡々誓詞致相勤候條、彌其趣無油斷樣心付、且又御藏番、小揚頭、平小揚之も

の迄も、米納之百姓方ゟ音物禮物を取、依估贔屓無之、又者非分成義不申懸、何ニ而も不作法成義無之樣誓詞申付、其上無油斷心を付、右之趣度々可被申付候、若違犯之者有之バ、其中間ゟも早速各へ申達候樣、是又可被申付候、若見迯聞迯一味仕候義有之バ、猶當人可爲同罪、輕重ニ隨ひ可及其沙汰候事、

一小揚之者、小揚頭等之內にも、不宜者有之、廻米著船幷納之節も、納宿納名主贔屓ニ不存者ニ者、可納米も撰出、秤目改等之儀ニ付、差支候樣いたし、贔屓ニ存候者ニハ、惡米も不撰出、秤目輕候共相納、或ハ秤ニ不懸候而も御藏江納候樣仕候者も有之風聞ニ候、向後ハ出役奉行心付、能々吟味有之、御藏手代江も急度申付、右體之事無之樣可被致候、

一諸國納米之儀、遲日無之樣相心得、御代官ゟ手本米差出候ハヾ、御藏奉行組頭兩人、幷詰合候御藏奉行立合ニ而吟味可被致候、納米著船之節、早速御藏を借爲致水揚、日記等記置候順々に無滯可被相納候、

附遠國ゟ廻候米納方之百姓、永逗留不仕樣別而可被心付事、

一御年貢米水揚之儀、御藏透之節、可成丈明キ御藏へ入置、翌朝御藏外へ撰出させ相改納可被申候、然共御藏手支、幷六月七月炎天之節、刻限間ニ合申間敷候間、古法之通、御藏外ニ可撰置候、御藏外ニ翌朝迄撰置候米、壹萬俵ゟ多無之樣可被致候、

一納米水揚之時、御代官、手代上乘之もの罷越、念を入候樣可被申付候、若水揚米濡くされ俵こも撰ませ候哉、又は所之米ニ無之哉、不念無之樣可被申付候、隨分御代官も見廻候樣可被致候事、

○中略

一御切米渡候時ハ、前方ニ御米を改、御米之善惡、各相談之上、御藏を定置、御藏番付鬮を拵、請取人ニ鬮を爲取、其藏ゟ相渡可被申候、廻之儀者貳俵ニ相定、請取人ニは鬮を爲取、鬮ニ當リ候貳俵

を廻し平均いたし、正路ニ可取極事、

附御切米渡候儀、前日ニ差札爲致、翌日可被相渡候、勿論前日差札ニ不出手形、一切渡間敷事、

一御扶持米渡候節も御藏を改、先達而拂不然米、相談之上書出置、毎月廿一日ゟ同晦日迄之間可被出事、

附極月ハ、十一日ゟ廿一日迄之内可被相渡事、

一御扶持ニ相渡候米之儀、御切米ゟ次之米、或ハ御切米之節、少々俵江虫さし有之、撰立候内ニ而被致吟味可被相渡事、

附御合力米、并扶持米、牢舍扶持類、御扶持方、門前之米可被相渡候事、〇中略

一御切米扶持方相渡候時、小札ニ俵數を書付、小形と引替、渡置候庭帳ニ記候本俵、右之札ニ引合致御渡、端米者、出役之御藏奉行、小渡帳を扣、小札引合可被相渡事、

一御切米ニ出候御米[illegible]、包候而上ニ御藏奉行可有封印候、且又御切米御扶持方手形廻候上ニ而も、御藏奉行印形可被致置候、

一御切米御扶持方渡候時、可成程ハ御藏切ニ殘俵無之、御藏明候樣可被致候、若出俵ニ入、小細之俵も有之候はゝ、差米致、本俵並斗立、渡候樣可被致事、〇中略

右之通相心得、不時之儀有之節者、可被相伺候、以上、

享保十九寅年九月　　御勘定奉行

御勘定奉行江

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年十二月

淺草御藏奉行之儀、大御番より之出役、且御勘定より御役替に而被仰付候者も、向後被仰付候ものは、五ヶ年宛之年限可被仰付候、尤出精相勤、御用立候者、五ヶ年目ニ、猶又五ヶ年可相勤旨可被

待遇

俸祿

仰付候間、五ヶ年目ニ至、其段可被相伺候、御役替被書出候儀は、只今迄之通たるべく、右之通出役被仰付候付而は、御足高有之者は、是迄之御足高其儘可被下候間、是又可被得其意候、

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和四亥年十月

御勘定奉行江

一月番之御藏奉行、終日役所ニ罷在御用取扱、折々御藏庭見廻候樣可致候事、○中略

一納拂之節、出役御藏奉行御藏封印見屆候上切之、若御藏内ニ致置候儀有之候ハヾ、前封之もの江申談、右體之儀無之樣可申合候事、○中略

十月

右之趣、御藏奉行江可被申渡候、

〔淺草御藏舊例書上〕明和四亥年十月、松平右近將監殿○武元、老中、被仰渡候御書付寫、

御藏奉行江申渡

一泊御藏奉行、○中略夜中御藏庭不時ニ見廻り可申候、水揚米有之節ハ、繁々相廻り候樣可致事、

〔憲敎類典二ノ五御役〕寬延二己巳年

殿中席書

燒火間○中略　御藏奉行

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御藏奉行　御役料三百俵　拾貳人

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和六丑年正月

御勘定奉行江

御藏奉行　多田與八郎　中野藤十郎

右年來出精相勤候ニ付、格別之譯を以、勤候內百五拾俵宛之高ニ御足高被₂下候、其段可₂被₁申渡₁候、

役宅

〔淺草御藏舊例書 上〕一淺草御藏惣構 ○中略

一御藏奉行御役宅貳ヶ所 ○中略

本所御藏惣構 ○中略

一御藏奉行御役宅五ヶ所

但壹ヶ所地坪三百坪餘宛　建坪 本家六拾四坪五合 長屋拾八坪貳合五勺 宛　土藏　五坪

〔淺草御藏舊例書 下〕淺草御藏御門外御構內、新規御役宅貳ヶ所出來、御入用高貳軒に而、　五百九拾両、

內　三百九拾両　建家井井戸板塀之分　百拾両　土藏之分　貳百五両　地方之分　六拾五両　御堀浚井柵之分

壹ヶ所　本家建坪、五拾八坪七合五勺、　長屋建坪、拾八坪七合五勺、　土藏、四坪、　物置、貳坪、

中御門外御役宅　貳百八拾坪餘 間口拾四間 奥行廿間

下御門外同斷　貳百六拾貳坪餘 間口十貳間半 奥行貳十壹間

右文政八酉年十二月ゟ取懸り、同九戌年六月出來上り、立會方両人懸り被₂仰渡₁、

手代組頭

〔吏徵 御目見以下〕淺草御藏手代　組頭五人役金五両

〔吏徵別錄 御目見以下〕淺草御藏手代 ○中略　元祿二年己巳、始置₂組頭四員、役金五両、○中略　寶曆四年甲戌、增₂組頭三員、組頭合七員、組五十四人之內也、

〔淺草御藏舊例書 下〕支配向定人數御給金御扶持方

組頭七人　役金五両づゝ、懸扶持四人扶持宛、○中略 右何も勤日數ヲ以、相渡候事、

〔淺草御藏舊例書 下〕御禮申上候式

一手代之內ゟ組頭被仰付候節〔○中略〕

一手代組頭〔井〕平手代御役出被仰付候節

右ヶ條之分、其座に而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、〔○下略〕

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和四亥年十月

　御勘定奉行江

一泊御藏奉行、井御藏手代組頭、同手代、御藏番等、夜中御藏庭不時ニ見廻可申候、水揚米有之節、繁繁相廻候樣可致事、〔○中略〕

一御藏庭ニ有之候御年貢米等、御藏手代組頭同手代見廻り、日々俵數見屆置候樣可致候、遠國之分者、別而巨細相改候樣可致候事、〔○中略〕

十月

右之趣、御藏奉行江可被申渡候、

〔吏徵〔上〕御目見以下〕淺草御藏手代七十五人

〔吏徵別錄〔下〕御目見以下〕淺草御藏手代　寬文五年乙巳、始置二十四員、給金十兩三人扶持、同九年己酉、增八員、〔合三十二員〕延寶二年甲寅、增八員、〔合四十八員〕貞享四年丁卯、增八員、〔合五十六員○中略〕元祿三年戊寅、定三十四員、寶永二年乙酉、增二十員、〔合五十四員、以爲定員、○中略〕享保二十年乙卯、六月廿四日、向後熨斗目白帷子著用仕間敷候、

〔淺草御藏舊例書〔下〕〕手代懸り取扱之覺

御藏借〔○本文略、下同、〕　書上掛　小買物掛　御普請方掛　御膳米掛　御勘定懸　御廻米掛　手本米掛　手形掛

〔大猷院殿御實紀五十一〕寬永十九年七月八日、城米方手代六人、藏方手代三人、同所〔○淺草米廩ノ傍〕に於

て斷せられ、○下略

○按ズルニ、當時藏奉行ニ淺草米廩ト城米ノ分課アリシコト、上文藏奉行職掌條ニ云ヘルガ如シ、

〔天明集成絲綸錄 二十三〕明和四亥年十月

御勘定奉行江

一泊御藏奉行、并御藏手代、○中略夜中御藏庭不時ニ見廻可申候、水揚米有之節、繁々相廻候樣可致事、○中略

一御藏庭に有之候御年貢米等、御藏手代組頭、同手代、見廻り、日々俵數見屆置候樣可致候、遠國之分者、別而巨細相改候樣可致候事、○中略

十月

右之趣、御藏奉行江可被申渡候、

〔淺草御藏舊例書 上〕明和四亥年十月、松平右近將監殿○武元、老中、被仰渡候御書付寫、

御藏奉行江申渡

一本所御藏園內ニ住居いたし來候御藏手代幷御藏番共、是迄之通被差置候間、其旨相心得、御取締専相心得可相勤旨、急度可申渡事、

〔享保集成絲綸錄 三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩御救之爲、御金被下候旨、頭々支配々々江相摸守傳達之、○中略

覺○中略

金四兩宛　　御藏手代

〔淺草御藏舊例書 下〕支配向定人數御給金御扶持方○中略

懸役手代貳拾七人　掛扶持三人扶持ヅヽ

平手代貳拾人　出扶持壹人扶持ヅヽ

右何も勤日數ヲ以、相渡候事、

〔憲敎類典三衣服 三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿〇忠良、老中、西尾隱岐守殿〇忠尚、老中、御渡〇中略

淺草御藏手代〇中略

右之分、向後熨斗目白帷子、一切着用仕間敷候、

〔淺草御藏舊例書下〕御禮申上候式

一手代明キ跡江御抱入被仰付節〇中略

一御譜代手代跡目被仰付、如父時之被仰渡候節、

一手代御門番屋敷願相叶、所見立候樣被仰渡候節、幷所見立申上被下候節、〇中略

一手代組頭幷平手代御役出被仰付候節

右ヶ條之分、其座ニ而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、右之內屋敷願ハ、自分共御禮廻りいたし候處、寛政五丑年五月十八日ゟ相止め申候、

〔憲敎類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代幷御抱場所書付〇中略

前々ゟ御譜代に而無之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御藏奉行手代〇中略

右場所江縱權現樣御代被召抱、夫ゟ落書之場所相勤來候共、御譜代之者ニ而は無之由下札仕候、

尤右御代ゟ末之御代は、勿論御抱入之者と下札仕候、〇下略

助手代

〔吏徴御目見以下〕淺草御藏手代　助手代十九人、五人扶持、

〔吏徴別錄御目見以下〕淺草御藏手代〇中略　享保十年乙巳、置助手代五員、各五人扶持、　同十六年辛亥、增助手代五員、合十員　元文五年庚申、增助手代九員、合十九員〇中略　同〇寶曆十三年癸未、增助手代二員、助手代、合二十一員

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

五人扶持ヅヽ　外出扶持五合ヅヽ　助手代定人數貳拾壹人

〔淺草御藏舊例書下〕御禮申上候式

一見習之內ゟ助手代被仰付候節、〇中略

右ヶ條之分、其座に而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、〇下略

手代見習

〔吏徴別錄御目見以下〕淺草御藏手代〇中略　文政四年辛巳月日、始置御藏手代見習六員、各一人扶持、

門番同心頭取

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

高拾五俵壹人扶持ヅヽ　內三人頭取〇中略　御門番　定人數拾五人

右之外　雜用金五兩ヅヽ、拾五人分〇下略

〔吏徴別錄御目見以下〕淺草御藏門番同心〇中略　明和三年丙戌十二月十四日、新規頭取三人被仰付、二十俵二人扶持高、

門番同心

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

高拾五俵壹人扶持　御門番定人數拾五人〇中略

右之外　雜用金五兩ヅヽ、拾五人分

〔吏徴別錄御目見以下〕淺草御藏門番同心　享保十年乙巳月日、始置十五員、十五俵高、　同十二年

丁未、雜用金五兩、〇中略　同〔明和〕四年丁亥、御藏奉行預支配、寛政三年辛亥九月、增二員、合十七員、

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入場所　白衣役　淺草御藏御門番同心

〔淺草御藏舊例書　下〕御禮申上候式

一手代御門番屋敷願相叶、所見立候樣被仰渡候節、并所見立申上被下候節、〇中略

一御門番御抱入被仰付候節、并頭取被仰付候節、〇中略

右ヶ條之分、其座ニ而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、右之內、屋敷願ハ、自分共御禮廻りいたし候處、寛政五丑年五月十八日ゟ相止め申候、

門番同心見習

〔吏徵別錄　御目見以下　下〕淺草御藏門番同心〇中略　文化五年戊辰、始置見習二人貳人扶持、雜用金貳兩、　天保十年己亥、增見習二員、

藏番

〔憲教類典　二ノ五　御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

淺草御藏奉行〇中略　御藏番廿三人

〔吏徵　御目見以下　下〕淺草御藏番三十人

〔吏徵別錄　御目見以下　下〕淺草御藏番　前々十人、元祿十一年戊寅、增三員、合十三員、　同十六年癸未、增四員、合十七員、　享保二年丁酉、增六員、合二十三員、　同十九年甲寅、增三員、後減一員、合二十五員、　明和五年戊子己丑、增五員、合三十員、　享保十年乙巳、役金四兩、

〔天明集成絲綸錄　二十三〕明和四亥年十月

御勘定奉行江〇中略

一御廻米御藏庭江揚ゲ候節、不足俵等有之哉入念相改候樣、御藏番并納方之者江可申付候事、〇中略

略

一泊御藏奉行〇中略ニ御藏番夜中御藏庭不時ニ見廻可ㇾ申候、水揚米有ㇾ之節、繁々相廻り候樣可ㇾ致事、

〇中略

十月

右之趣、御藏奉行江可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、

〔淺草御藏舊例書上〕明和四亥年十月、松平右近將監殿〇老中、武元、被ㇾ仰渡ㇾ候御書付寫、

御藏奉行江申渡〇中略

一淺草御藏內住居いたし來候御藏番貳拾人、此度御用外明地江身分相應之御長屋相建、不ㇾ殘爲ㇾ引移、是迄之住居ハ取拂、都合八ヶ所ニ有ㇾ之水門際、手輕ニ番所壹ヶ所宛相建、壹ヶ所、晝之內御藏番壹人宛、夜中ハ兩人ヅヽ爲ㇾ相勤、水門出入之守方、御藏場所見廻り、晝夜無ㇾ油斷ㇾ可ㇾ相勤旨可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、

但本文之通、此度被ㇾ仰付ㇾ候ニ付、御藏番增人も被ㇾ仰付ㇾ候筈ニ候、其旨可ㇾ相心得ㇾ事、〇中略

一本所御藏圍內ニ住居いたし來候御藏手代幷御藏番共、是迄之通被ㇾ差置ㇾ候間、其旨相心得、御取締專相心得可ㇾ相勤ㇾ旨、急度可ㇾ申渡ㇾ事、

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

高拾俵壹人扶持ヅヽ　御藏番定人數三拾人〇中略

但高扶持共高下有ㇾ之〇中略　外金四兩ヅヽ、三拾人分

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入場所　白衣役　淺草御藏番

〔憲教類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々ゟ御譜代に而無之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御藏奉行（中略）〇御藏番〇中略

右場所江縱權現樣〇家康御代被召抱、夫ゟ落書之場所相勤來候共、御譜代之者に而は無之由下札仕候、尤右御代ゟ末之御代は勿論、御抱入之者と下札仕候、〇下略

〔淺草御藏舊例書下〕御禮申上候式

一御藏番御譜代并御抱入被仰付候節、〇中略

右ケ條之分、其座に而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、〇下略

藏番見習

〔吏徵下御目見以下〕淺草御藏番〇中略　見習勤金三兩淺草、壹兩貳分本所、

小揚頭

〔吏徵別錄下御目見以下〕淺草御藏小揚之者　寬文五年乙巳、頭十人、給金五兩弐人扶持宛、

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入場所　白衣役　淺草小揚之者頭

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

高五兩貳人扶持宛　小揚頭拾八人

高三兩壹人半扶持　杖突貳拾七人〇下略

小揚

〔淺草御藏舊例書下〕支配向定人數御給金御扶持方

高三兩壹人半扶持〇中略　平小揚百九拾九人

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

淺草御藏奉行〇中略　御藏手代五十四人、小揚者貳百三人、

〔吏徵御目見以下〕淺草御藏小揚之者〇中略　杖突廿七人、刀裁附代金壹兩壹分、

〔吏徵別錄御目見以下〕淺草御藏小揚之者　寬文五年乙巳、〇中略杖突二十人、平小揚二百八十人、同三兩一人半扶持充、合三百十八人、　延寶八年庚申、三百二十八人、　元祿二年乙巳、貳百五十人、　寬政二年庚戌、貳百四十四人、此後無增減、

〔淺草御藏舊例書上〕明和四亥年十月、松平右近將監殿〇老中、武元、被仰渡候御書付寫、

　御藏奉行江申渡

一小揚之者共、御奉公筋無懈怠致出精候ものは、壹ヶ年兩三度宛も御褒美米少宛も被下置筈ニ候間、其旨相心得取計、輕きもの共之儀ニ候間、心得違奸曲等不致、一途ニ御奉公筋出精いたし候樣申付、出精之もの御褒美之儀ハ、其節ニ相伺可被申事、

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入場所　白衣役　淺草御藏小揚之者

〔憲教類典御抱席二ノ十五〕寶暦五乙亥年九月廿四日

　御譜代幷御抱場所書付

前々ゟ御譜代に而無之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

　御藏奉行（中略）小揚之者〇中略

右場所江縱權現樣御代被召抱、夫ゟ落書之場所相勤來候共、御譜代之者に而ハ無之由下札仕候、

尤右御代ゟ末之御代は勿論、御抱入之者と下札仕候、

〔淺草御藏舊例書下〕御禮申上候式

一小揚御抱入

右ヶ條之分、其座に而御禮申上候、自分共御禮廻りはなし、〇中略

一小揚老衰御褒美被下候節計り、自分共御勝手方御勘定奉行江御禮參候事、

附切米手形改

切米手形改ハ、或ハ書替奉行ト云フ、幕府諸士俸祿ノ切米手形ニ關スル事ヲ掌ル、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御切米手形改 ○中略 貳人

〔延寶八年江戶鑑〕御切米手形書替衆　御役料二百俵ヅヽ

二百石大久保平兵衛殿

〔正德四年武鑑〕御藏書替衆　御役料二百五十俵ヅヽ、手代六人宛、

三百五十俵 淺草藏前　糸原勘兵衛　二百石 淺草藏前　池田新兵衛　鈴木新藏

〔天保十一年武鑑〕御切米手形改　燒火　御役料二百俵　手代九人宛

二百五十俵、本所緑丁三丁目　美濃部庄右衛門　六百石、本所入江丁　金田靫負

〔吏徴上〕御目見以上書替奉行兩人　御勘定奉行支配　燒火間 ○中略 御役宅淺草茅町　淺草新堀端

一人定役一人大御番出役　一組手代九人　寛永十九年壬午八月十八日始置

〔大猷院殿御實紀八〕寛永三年、此年大久保藤三郎正榮ハ、切手書替役 ○中略 命せらる、

○按ズルニ、吏徴ニ書替奉行ヲ寛永十九年壬午八月十八日始置トアレド、本書ニ依レバ、寛永三年ノ比已ニ當職アリシナリ、

〔明良帶錄續篇〕御切米手形改

御勘定奉行支配にて、手代八人づゝ、淺草御役宅にあり、三季御切米手形案文、押切割印引付直し御證文、頭支配之有之分ハ、新役被仰付候節、其頭より御證文願あり、○中略 此場より柳澤八郎左衛門小普請組頭江昇る、夫より歷昇して佐渡奉行に昇る、諸向より至る場也、

〔惇信院殿御實紀七〕寛延元年二月九日、廩米の劵、査撿の事つかふまつる、神尾忠藏某建白するにより、淺草天王町にて新に書替所を置る、

待遇

〔憲教類典二ノ五御役〕寛延二己巳年

殿中席書

燒火間〇中略　御切米手形改

〔官中秘策十一〕諸御役人之事

一御切米手形改　御役料貳百俵

俸祿

〔吏徴上御目見以上〕書替奉行〇中略　持高　御役料貳百俵

〔常憲院殿御實紀五〕天和二年四月廿二日、けふ又官料をかねにして給はる、〇中略　藏書替の奉行、新番、大番の組頭は二百俵、

〔天明集成絲綸錄四十一〕安永七戊年十二月

御勘定奉行江

書替奉行
伊庭惠兵衛

右年來精出相勤候ニ付、格別之譯を以、勤候内百五拾俵之高御足高被下候、其段可被申渡候、

書替奉行手代

〔吏徴下御目見以下〕書替奉行手代十八人　三拾俵三人扶持高　元〆一人、役金五兩、　元〆勤方貳人、役金貳兩貳分、〇中略　御抱場

〔天保十一年武鑑〕御切米手形改〇中略　手代九人宛

〔吏徴別錄下御目見以下〕書替手代　延寶二年甲寅正月、增二員、合十員、　寶永二年乙酉二月、增十二員、　正德四年甲午二月、定十八員、　享保九年甲辰十二月、御右筆所より差越候御證文下書、加役ニ相改候樣達之、　同二十年乙卯四月廿四日、元〆役金五兩、同年六月廿四日、向後熨斗目白帷子著

用仕間敷候、　天明五年乙巳三月廿九日、三十俵三人扶持高、

〔憲政類典三ノ三十五下衣服〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿老中〇忠良、西尾隠岐守殿老中〇忠尚、御渡

書替手代〇中略

右之分、向後熨斗目白帷子一切着用仕間敷候、

金奉行　鋳奉行併入

金奉行ハ、勘定奉行ニ屬シ、元方拂方ノ二部ニ分レ、幕府金庫ノ出納ヲ掌ルモノナリ、

鋳奉行ハ、幕府ノ鋳廠ヲ守ルモノヽ如シ、後年廢職トナル、

〔萬天日錄十四〕一御金奉行衆　七人、但同心有之、〇中略〇又見二官秘鑑一

〔吏徴上御目見以上〕御金奉行四人　御勘定奉行支配　燒火間〇中略　正保三年丙戌正月廿二日始置

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年閏正月三日、この日より元拂金奉行、此後勘定頭の隷下たるべき旨命せらる、〇中略

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕御金奉行　正保三年丙戌正月廿二日、始置二四員一、　元祿二年己巳閏正月三日、御勘定奉行、〇中略　享保十一年丙午十月七日、鋳之儀、添奉行兼役候處、向後御金奉行江鋳納拂共引受可二相勤一候、〇中略　文政三年庚辰七月廿六日、定二四員一、元拂一圓ニ成、

〔延寶八年江戸鑑〕御金元方奉行　同心廿人

四百石小林左次兵衛殿　四百廿石北六ばん町　南條小兵衛殿　三百石小尾七郎右衛門殿

職掌

御金拂方衆

一三百石がいノだい　多田所左衛門殿　五百石たやす　酒依長兵衛殿　三百俵うしごみ　小林金右衛門殿

〔台徳院殿御實紀二十四〕慶長十八年、是年杉原忠左衛門親俊、金銀出納奉行となり、○下略

〔台徳院殿御實紀四十九〕元和四年、是年松風權右衛門正忠は、金奉行になり、○下略

○按ズルニ、金奉行ハ吏徴別錄ニ、正保三年丙戌正月廿三日始置トアレド、上文ノ如ク、元和四年ノ比、既ニ其職名見エタレバ、慶長年中ヨリアリシ職ナリ、金銀出納奉行ハ則チ金奉行ナリ、大猷院殿御實紀ニ、諸國金銀奉行トアルモ亦同ジ、

〔明良帶錄〕御金奉行二百俵高、御役料百俵、焼同心十三人勘支

元方、拂方とあり、何れも卒吏十三人御金藏を守る也、御勘定奉行支配にて、元方御金奉行定の御納戸御役所前へ帳入有之、後藤包は後藤役人附居、此場御入用場にて、殊に骨折場なれば、御勘定方より出る遠國の御用を勤め、兩御金奉行拂方は、兩役所とも同心手代改有り、御金渡定日有之、小普請金納、拜借上納等受取日を定、手形相印を以て受取、御番方類焼拜借上納は、蓮池御藏え、頭の家來持參す、拂方は渡方を司り、拜借金其外諸向渡し金受取日を定受取る、近頃御儉約引續候へば、常憲公綱○吉文昭公家○宣の御代之御費用にて、御藏も空虚となれば、非常不慮の御備に、有德公吉○宗御代より御儉約を被仰出、

〔憲敎類典三ノ八上納〕寶永五戊子年閏正月十四日

御金奉行

閏正月當番　宿傳通院後　平岡十左衛門

二月當番　宿牛込元天龍寺前　諸星清左衛門

三月當番　宿元普請築地　小泉市大夫

四月當番

右は被仰出候御書付と不被存候間、取調之上可相除候

宿龍慶橋横通津久戸明神近所
久保七郎左衛門

〔勘契備忘記 中〕正徳五未年

元方 拂方 御金藏役人納拂等勤方定書

一元方拂方共、御藏之金銀、并灰吹金銀、其外御藏ニ有之候品々、月々納拂之所度々改之、員數明細帳面ニ記置、其帳面を以同役立合、有金銀之分量計合無相違樣可被致候、且又同役役替新役被仰付候節も、其度々互ニ立會、有金銀之數相改、其上ニ而月番を立可被相勤候事、

一御藏金銀納方之儀、隨分念を入、銘々納拂之手形帳面等、印形其印鑑引合相改、毛頭無相違樣可被致候、且又壹分判小玉銀之方も、納方之向々、紛敷無之樣帳面ニ書載之、納手形ニも其數を記可被差出候、渡方も是又手形帳面ニ記、其數を書加へ可被相渡候事、

一金銀納拂御勘定之儀、元方拂方共、年々無油斷仕立可申候、但壹分判小玉銀納渡之事も、御勘定帳面ニ書載之、無相違樣可被致事、

一御金藏納拂定日者勿論臨時納渡有之節も、御金奉行相揃可有出勤候、元方拂方共ニ御藏開候度々同役立會、封印改之上開可申候、壹人して開間敷候、御用相濟候はゝ、同役中申合、萬事念入申付、御藏并總圍之門封印共、前々之如く元方御金奉行、拂方御金奉行立會、念を入相封致置可申候、且又奥御金藏之其御入用極帳面、總都合之一紙證文を以引替、無油斷遂吟味、若格別ニ引替延々ニ相成候も於有之ハ、是又其譯御勘定所へ可申達候事、

一御藏金銀包紙、又は上箱封印損候節、包改直候事、後藤并大黒屋長左衛門等御藏へ呼出、於御藏包直、封印をも仕直候樣致、少ニ而も爲包改之、町人共へ渡遣候儀堅可爲停止事、

一御藏金銀、御金奉行自分斗として、壹分判小玉銀等、少々ニ而も町人ニ申付、兩替仕候儀堅可爲

停止候、御用ニ付而、若壹分判小玉銀等金兩替候時ハ、御勘定所へ、相達、御勘定奉行裏判之證文を以可レ有ニ其沙汰一事、

一御金奉行中、私用之爲ニ御藏之金銀取出不レ申哉、封印之義何れも出勤之度々心ヲ付可レ申事、

附金銀納方渡方之數多、當日難ニ相濟一殘候時は、其翌日何れも罷出可レ有ニ其沙汰一候、是又壹人として被レ致ニ間敷一候事、

一納渡之儀ニ付、諸證文留書明細ニ記置、其當日不ニ相濟一義者、翌日出勤候而、念ヲ入吟味可レ有レ之候、且又御金奉行月番ニ而承り候御用之儀は、早速同役中江相達、物毎遲々無レ之樣可レ被ニ心得一事、

附御藏ニ有レ之帳面書付、御用ニ付而御金奉行宅江持參候時ハ、同役へ相達可レ有ニ持參一候、尤事濟候ハヽ、早速御藏ニ入置、其旨同役へ申達、麁末無レ之樣可レ被レ致事、

一諸向拜借、并道中拜借、又ハ諸式御入用、內借金銀渡之儀、常ニ入念改レ之、拜借返納之次第、無レ滯樣遂ニ吟味一、若子細も有レ之、返納遲滯之面々も候ハヽ、其譯御勘定所へ可レ被ニ相達一候、內借渡候事も、御入用者不レ及レ言、少分之事ニ而も、人ニ被レ賴候儀堅御制禁有レ之候、若違犯之者有レ之時ハ、少も不レ隱置、同役ゟ御勘定所へ可レ被ニ相達一候、自然隱置候ハヽ、違犯之人與可レ爲ニ同科一候事、

一於ニ御藏一金銀請取候者共ゟ步銀を相定、同心共方へ其步銀を分ケ取、御金奉行ハ其爲ニ禮音物等請納候儀、一切堅御制禁之事ニ候間、此旨を以御用承り候町人、御金請取方之者共ニ、急度被ニ申渡置、若自今以後此旨於ニ違犯一事ニハ、同心共ハ御金奉行、御金奉行者、御勘定所へ可レ被ニ相達一候事、

一納方請取方之もの共、不作法成義無レ之樣可レ被ニ申渡一候、若猥成族於レ有レ之ハ、急度申斷置、其譯御勘定所へ可レ被ニ相達一候、惣而納方請取方之もの御藏圍之內、大勢不ニ入込一樣いたし、御金持運候黑鍬之もの、又ハ御金奉行同心以下家來等迄猥ニ無レ之樣急度可レ被ニ申付一事、

附於ニ御藏場一、茶弁當類ハ不レ及レ言、少ニ而も火之取扱、堅可レ爲ニ停止一事、

待遇

右之條々、御老中被仰渡候間、堅相守之、御役儀ニ付、聊以猥成義無之樣可被遂吟味候、若違犯之事も候ニおゐてハ、其沙汰可有之者也、

正德五未年七月　　御勘定奉行

御勘定奉行江

〔天保集成絲綸錄七十七〕文政三辰年七月

御金奉行之儀、以來元方拂方一圓ニ被仰付候間、打込相勤候樣可被申渡候、尤定人數四人ニ相心得、三人は當分過人ニ致し置、御役替其外明跡有之節、定人數迄は被仰付間敷候、且同心之儀は、只今迄之人數を定人數ニ致し、是又打込ニ相勤させ可被申候、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

御勘之間北ゟ二之間〇中略　御金奉行

〔憲教類典二ノ五御役〕寬延二己巳年

殿中席書

燒火間〇中略　御金奉行

〔憲教類典三ノ三十六乘物〕元祿六癸酉年六月

五拾歲以上乘物并駕籠御免之面々〇中略

一御金奉行　　右同斷(乘物斷狀御勘定頭裏書)

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一元方御金奉行　貳百石高、御役料百俵同心十三人、　四人

一拂方御金奉行　貳百石高、御役料百俵同心九人、　三人

俸祿

〔吏徴別錄 布衣以下御目見以上〕御金奉行 略○中 同 元○祿 五年壬申五月廿八日、御役料百俵、略○中
同 享○保 十八年癸丑五月十九日、貳百俵高、元文五年庚申より、古御代官貸金取立相勤候付、諸入用金十兩被下、延享元年甲子二月日、諸入用金十兩被下、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、略○中 金奉行、略○中 百俵、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保九甲辰七月十三日
只今迄之通三百俵ゟ內は
　御役料百俵　　　　　御金奉行

〔有德院殿御實紀 三十七〕享保十八年五月十九日、この日元方の金奉行に、官料二百俵、略○中 賜はるべしと定らる、

元〆役

〔天保十一年武鑑〕御金奉行 略○中
同元〆役　谷中七面前片丁 永田忠兵衛　あさぶがぜんぼ谷 溝口佐兵衛　四ツ谷左京丁 近藤官次郎　ゆしま天神下手代丁 鶴間環助　青山三すじ丁 小池辰三郎　本郷大こん畑 鈴木忠左衛門

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別 并 御役料 略○中
　御金奉行 略○中　　元方同心八人　拂方同心九人

金同心

〔吏徴 御目見以下〕御金同心廿一人　三拾俵三人扶持高　元〆三人、役金五兩、部屋住、貳拾俵貳人扶持、二半場

〔吏徴別錄 御目見以下〕御金同心　正保三年丙戌二月十六日始置　正德三年癸巳、御譜代之者被仰付、同五年乙未十一月、元〆役金五兩、同年十二月十八日、三十俵三人扶持高、一說享保十八

年癸丑五月十九日、享保三年戊戌十月朔日、定二十二員、同六年辛丑、增一員、合廿三員、同十七年壬子七月六日、始而部屋住三人被召抱、各三十俵被下、明和六年己丑五月、部屋住抱入高貳拾俵二人扶持、

〔御金奉行公用嚢中勤仕錄〕正德五未年十二月十九日、御殿ゟ元方御金奉行四人共ニ不參旨申來ル、依之不殘無參候處、御金方八人之者勤候場所高三拾俵三人扶持宛ニ被成下候旨、戸田山城守殿被仰渡候段、因幡守殿被申渡、

右之段、御金奉行細田彌三郎宅ニ於て、同人申渡候、

〔御金奉行公用嚢中勤仕錄〕先祖　鈴木庄次郎

慶長十三申年八月被召出、正保三戌年正月廿二日病死仕候、○中略

五代目　庄助子　鈴木忠兵衛

元文五辰年九月十三日、父庄助拂方御金同心相勤候節、部屋住ゟ元方御金同心江被召出、相勤罷在候處、寬保三亥年五月四日家督被下置、寬延三午年二月十二日病死仕候、

〔御金奉行公用嚢中勤仕錄〕正德三巳年閏五月十八日、御譜代之者ゟ拂方御金同心被仰付候、左之通り、

一拂方御金同心、先年ゟ勤來り候同心組者、高五拾俵貳人扶持、平役之者ハ高三拾俵壹人扶持宛ニ而何れも御抱之者共ニ而候處、不殘御仕置御追放改易ニ成り、正德三巳年、新規不殘御譜代之ものゟ被仰付候、

拂方御金同心　七人

〔憲敎類典 二ノ十四 御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々ゟ御譜代とも難₂相定₁場所と申、取扱來候趣、左之通、○中略

御金奉行元方拂方同心○中略

右場所江權現樣、○德川家康台德院樣、○秀忠大猷院樣、○家光嚴有院樣、○家綱御四代之內、大場所相勤候而も、御譜代之者には難ₗ申と下札仕候儀は、御抱入之者共、難₂相決₁御座候ニ付、御譜代ニも準じ可ₗ申と奉ₗ存候趣を以、御譜代之者とは難ₗ申候旨、前々ゟ下札仕來候、○下略

金藏番同心

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無ₗ之

一遠國御役人組附人別并御役料

關東御勘定與頭○中略　御金藏番廿人

〔吏徵下御目見以下〕御金藏番同心廿人　持高　御抱場

〔吏徵別錄下御目見以下〕御金藏番同心　正德二年壬辰六月十三日、始置₂二十人₁、○中略　寬保元年辛酉十二月廿三日、定₂二十員₁、向後入人之節、御譜代之者可ₗ申付旨被₂仰出₁之、　明和三年丙戌三月、元拂御金奉行預支配、

○

錢奉行

〔萬天日錄十四〕一御錢藏御番頭三人

〔柳營秘鑑三〕御勘定頭支配

一錢奉行

〔延寶八年江戶鑑〕御錢奉行

百五十石高屋太兵衞殿　八十俵五人ふち田中治右衞門殿　七十俵五人ふち小高治左衞門殿

〔大猷院殿御實紀十二〕寬永五年十二月十二日、錢藏番頭高谷十大夫盛政が子太兵衞盛道、父が家をつぎ、その職たらしめらる、

〔吏徵附錄廢職〕御錢奉行　三人

〔元祿八年武鑑〕御錢藏番同心二十人

錢藏番同心

〔萬天日錄十四〕一御錢藏御番頭三人、組者、久能衆、

金銀銅朱座役人

金座役人

金座ハ、江戸ニ在リ、後藤氏ノ世襲ニシテ、金貨ノ鑄造及ビ審査ヲ掌ル、銀座ハ江戸、京都、大阪ノ三所ニ在リテ、銀貨ノ鑄造及ビ審査ヲ掌ル、京都銀座常是ハ、泉州堺ノ商人ニシテ、慶長ノ始メ、銀座ニ擧用セラレ、其十三年京都ニ移リ、寛政中、江戸銀座ノ事ヲモ掌ルニ至レリ、而シテ金座銀座ノ事ハ、尙ホ泉貨部金銀貨下篇ニモアレバ、宜シク參看スベシ、

銅座ハ、元文三年銀座ノ加役トシテ大阪ニ設クル所ニシテ、諸國ノ產銅ヲ專賣ス、後寛政八年、江戸ニ古銅吹所ヲ置キ、文久中、江戸長崎ニ銅座出張所ヲ置ケリ、

鐵座、眞鍮座ハ、安永九年、銀座ノ加役トシテ設クル所ニシテ、鐵座ハ大阪ニ、眞鍮座ハ三府銀座ノ内ニ在リ、諸國產出ノ鐵、眞鍮ノ事ヲ掌ラシメシガ、天明七年之ヲ廢ス、

朱座ハ江戸、京都、堺、長崎ニ在リテ、内外ノ朱ヲ專賣スル所ナリ、

〔天保十一年武鑑〕御金改役　ときはばし外　二十人フチ　後藤三右衛門　支配本兩替町金座　大判分銅

二百五十石廿人フチ、京ばし一丁メ、後藤四郎兵衛

〔後藤庄三郎由緒書〕由緒書

御金改役　　後藤庄三郎

大膳大夫大江廣元、弟武藏守大江親廣少輔入道蓮阿後裔、美濃國加納城主領知八万石長井藤左衛門尉利氏曾孫、上意を以氏を改、

初代　後藤少輔三郎　又少三郎共庄三郎共認ル　但三樣共、同となへ御座候、

右少輔三郎光次父長井彥四郎利清儀、祖父藤左衛門利氏、美濃ニ而實名利氏な相用候事、親王家御一字之由に申傳候、父長井彥右衛門尉利治加納城ニ而戰死仕候後、彥四郎儀、京都ニ沈淪仕罷在候處、先祖之由緒上聞、御目見被仰付、其上忰少輔三郎光次、文祿二年被召出御奉公仕候處、權現樣御懇之上意被成下、御側御用被仰付、御陣中も御供仕、諸事取計策之儀等に相携り候、尤御合戰之節、勇氣相見候儀、御前御物語等申傳候節も御座候、且平日御政務御仕置之筋、御旨承之候ニ付、日々登城昵近仕候、○中略

一庄三郎光次妻儀者、青山善左衛門正長娘、權現樣上意を以緣組仕候、然上大橋局と申を妾ニ被下置、其腹ニ出生仕候男子二代目庄三郎ニ而、元和二年、御老中酒井雅樂頭忠世烏帽子子として、忠世宅ニ於て元服仕、廣世と相名乘申候、

〔國制記三〕金座之事

金座後藤庄三郎、小判壹分判相極候事は、權現樣御直ニ被仰付候得共、御證文無之、江州野洲郡、小比江村ニ而御切米五拾壹石六斗貳升被下候、京都ニ而庄三郎下之小判師三拾人在之候、諸國より集金買取、小判壹步吹立申候、極印賃百兩ニ付壹兩被下候、金吹師五拾人極り有、庄三郎方ニ而申付候、又小判之事、關ヶ原陣七年已前庄三郎江被仰候小判出來ニ而、光次之書判仕候、關ガ原御陣以後、壹步判出來致、此時小判壹步共極印被仰付候、大判者、前々ゟ彫物師後藤四郎兵衛方ニ而出來致候に、今書判共ニ致候、并法守も四郎兵衛方ニ而仕候、尤金座之外ニ而彫物後藤と言、

一庄三郎佐渡ニ而、每年小判貳萬兩餘吹立、御納戶江納メ候、諸國より寄金、座ニ而買取、小判程之金之吹立致持參候、吟味之上、小判壹步ニ申付候、尤寄金之員數、何方江も斷無之候、是又金吹師

五人、小判三拾人、金改役人、小判師誓紙神文ヲ書セ、庄三郎江取置申候、小判壹歩共、銀銅吹交候事も候得共、金ニおのづから銅交り在之、吹分候得共、金之出所ニゟ、交銅スキト退キ不申候品在之、是小判ニ致、兩替下直也、

〔八水隨筆〕小判壹歩判に光次の字あり、五世後藤德乘なのりなり、四郎兵衛家は、世々大判座なり、德乘在京の節、御用有よしにて江戸へ召れしに、病氣と申立、名代に家來永井庄右衛門をさし下す、此時初て小判を吹候樣にとのことなり、庄右衛門下りて御用承り候まゝ、直に庄右衛門を願候て小判座に取立、後藤の名字をゆづり、後藤庄三郎になり、今以相續なり、德乘初て承り候事故、光次の字を設け、今に其まゝにふく也、

〔大成令金銀五十九〕寬文五巳年三月

覺

金銀掛之分銅之儀、從此以前後藤四郎兵衛仕來之處、近來みだりになり、にせ分銅用遣之由其聞在之候、向後堅可爲停止也、

〔雍州府志土產六〕金銀　金之品以壹步判爲上、小判次之、大判又次之、製造後行後藤家請極印幷判、中〇略銀於兩替町中村常是宅吹之、其始謂灰吹、後加鉛少許再吹之、而造板銀豆板銀、凡銀爲大小片、其形似板、故稱之、凡預其事者、謂銀座、兩座中老年人謀萬事、是謂年寄、云、

〔駿府政事錄七〕慶長二十年五月廿四日、後藤少三郎召御前、大阪金銀改可申旨被仰出、則參于大阪云々、　六月二日、大阪沒收金二萬八千六十枚、銀二萬四千枚京著、安藤對馬守、後藤少三郎、持上云云、

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年九月

御目附江

寄合御役金、向後御勘定奉行、同吟味役取扱、上納金之儀は、後藤庄三郎役所江直ニ請取候筈候、

〇中略

右之趣、寄合之面々江可被相達候、

九月

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年六月

萬石以下菊之間緣頰詰、交替寄合、其外寄合小普請、幷諸向無役之者、御役金之儀、是迄後藤庄三郎方江相納候處、向後吟味役宅におゐて請取候樣可被致候、右之段向々江茂相達候、依之庄三郎儀は、以來取立方差免し候之間、其段可被申渡候、且金銀納方之儀、以前之通、後藤銀座常是包ニ而相納候積、尤小給之者共は、銘々包分候而は、手數相懸り可爲難儀間、小普請貳百俵以下、幷諸向無役之分は、支配限り一緘にいたし、小普請之分は、手傳之者、包方納方共爲取扱、其外無役之分は、其場所之頭支配、又は世話役之者共より爲相納候樣申渡候間、其方からも向々江申談、何れにも小給之者共、包入用失費無之樣、精々相心得可被取計候、

六月

〔天保集成絲綸錄九十〕文化元子年十二月

大目付江

金銀掛合候分銅、寛文年中改以前之古分銅、兩替仲間に而遣候由相聞候ニ付、京大阪堺近江之分潰等迄、外ニ而賣買不致、潰直段を以、後藤四郎兵衛方江買請させ、目輕き古分銅、内々ニ而賣買致間敷旨、度々相觸候處、今以西國幷長崎筋ニ而は、古分銅多く賣買致し用候由相聞候、此以後内々ニ而賣買致候儀は勿論、不隱置四郎兵衛方江可相渡候、尤四郎兵衛方より分銅改役人相廻り、紛敷分銅は取上候筈ニ候、其趣急度可相守もの也、

右之通、先年茂相觸、後藤四郎兵衛役人相廻り改候處、近來紛敷分銅をも用候由相聞候ニ付、此度四郎兵衛方より分銅改役人相廻、紛敷分銅は取上候筈ニ候間、其趣急度可相守もの也、

右之通、御料は御代官、私領は領主地頭ゟ可被相觸候、

子十二月

右之趣可被相觸候、

〔德川禁令考二十七金座〕文化七午年八月十六日

右同斷〇後藤庄三郎之事

牧野備前守殿御渡

後藤庄三郎不屆之儀有之、御仕置ニ成候ニ付、右代り銀座年寄後藤三右衛門江申付、金改包方等諸事、是迄之通取計候間、爲心得向々江可被達候、

〔天保集成絲綸錄九十〕文政三辰年四月

大目付江

金箔幷下タ金類取締方之儀、此度後藤三右衛門一手に申付候間、以來吹金、はづし金、屑金、其外都而下タ金類所持いたし居候ものは、金座幷金座附下買江賣渡し可申候、且金細工人金粉屋、其外地がね入用之ものは、金座におひて買請可申候、私之相對を以、他所に而直賣買一切致間敷候、

一金箔打立方之儀、此度江戸表におゐて、上澄賣渡所取建、箔地がね金座より相渡し、上澄に打立させ候上、金箔屋共へ相渡筈候間、他所に而金箔隱し打堅く致間敷候、

一右下買之もの幷上澄賣渡所、其外職人共迄、金座より看板幷鑑札等渡し置候條、右之外取引致間敷候、

待遇

右之通相觸候上は、下々金類金座之外ニて賣買致し候歟、箔隱し打いたし候もの有之においては、吟味之上急度可申付候、

四月

右之通可被相觸候、

〔續泰平年表〕弘化二年十月五日、四郎兵衛悴後藤吉五郎被召出、御金改役被仰付、二十人扶持被下置、右吉五郎は後藤三右衛門拜領屋敷并役所住居、土藏共其儘被下置、若年之義ニ付頭立勤出來候迄、年寄役山本格左衛門後見、御金改方等前々之通爲取計候樣、阿部伊勢守殿〇中略正弘被仰渡候段、御勘定奉行石河土佐守〇政平申渡候、同日御書付、後藤三右衛門不屆之儀有之、御仕置被仰付候ニ付、右代り四郎兵衛悴吉五郎へ申付候、御金改包方等、是迄之通取計候間、爲心得向々江被達、

〔地方凡例錄一〕地方總論

甲斐國御爲國と成たる時、〇中略金座は松木とて御朱印頂戴、甲府に有て江戸後藤同前也、今以甲州一國之金座也、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

御納戸前〇中略

後藤

〔明良帶錄新金集〕町人熨斗目着用之者

後藤庄三郎

右は元祿十一年、時服拜領仕着用、

〔吹塵錄十二貨幣〕安永三午年帶刀願申上候書面之内

且役人共儀も、古來御目見拜領物等仕候者之子孫も差交り、何れも譜代之ものに御座候而、私方之盛衰に不拘、天和年中、帶刀相止候以來も、古來之儘、代々不相替、貞實に相勤、右風儀を以、御

用向をも無私忠精に相勤候に付、私におゐて別而見捨がたく、ケ樣之儀江對し候而も、萬端難盡筆紙、何分格別之御憐愍を以、願之通被爲仰付被下置候はゞ、誠永々莫太之御厚恩と冥加至極難有仕合に奉存候、

右庄三郎帶刀之儀に付、役人并金座人共儀、御尋有之候に付申上候書面之趣、

下ケ札(朱書)

此度私儀、帶刀御免被成下候得ば、家來共儀も帶刀爲仕候、尤家來共之儀は、古來より帶刀仕來り、御目見等仕候者も御座候處、天和年中、私帶刀被差止候砌、別段被仰渡は無之候得共、私身分に隨ひ、家來共帶刀相止申候、然處此度私儀、古來之通帶刀御免被成下候得ば、是又私身分に隨ひ、家來共先規之通帶刀爲仕候儀ニ而、何れにも私身分に隨可申儀と相心得罷在候、依之遠國に罷在候家來にも、同樣帶刀爲仕候、且又金座人之儀は、支配之者に御座候故、別段被仰付等無之候得者不相成筋に御座候間、此度私帶刀御免被成下候而も、金座人は帶刀不仕候、

右書面差上候處、御請取被置旨、辻左源治樣被仰聞候、

右願濟之節、供侍之儀に付左之通、

舊冬廿八日相伺候、私供侍之儀、刀持にも差支候間、中之口迄召連候之樣仕度奉存候、尙又右之段奉伺候、以上、

申正月朔　後藤庄三郎

昨日申聞候刀持中之口迄、帶刀之者一人召連候儀、伺之通相濟候間、召連候樣可致旨可申達段、奉行衆被仰聞候、依之申達候、尤請書今日中自分宅江可被差越候、以上、

正月二日　辻左源治

右御尋ニ付奉申上候、以上、

戌七月七日　後藤庄三郎役人　高田與惣次

下ヶ札(朱書)
私家來之儀、御用相勤候節は、御用に對シ役人と相唱候段、先達而申上候通に御座候、
安永四未十二月廿八日、右近將監殿御直加賀守江御渡し、(朱書)

御勘定奉行江

後藤庄三郎

寄合小普請御役金、以來庄三郎役所江請取候樣可致候、右御用取扱候ニ付、帶刀御免被成候、其段可被申渡候、

〔天保十一年武鑑〕銀座かきがら丁　十人扶持　辻傳右衛門　辻力之助　十人扶持　秋田內記　秋田十七郎　細谷太郎左衛門　末吉孫九郎　譽田瓶次郎　小南宗左衛門　玉村市右衛門　關西彌八郎　泉谷七郎兵衛　平野直之丞　見習細谷太郎次郎　見習泉谷常次郎　見習譽田亥之助　京上谷彌惣左衛門　京中根上右衛門　京小西彥右衛門　京見習金谷善三郎　大坂金谷官左衛門　大坂上谷五郎三郎

御上納銀改役　常是かきがら丁大黑作右衛門　京兩替町大坂鈴木町役所有之　見習大黑十之丞

〔金銀錢座秘記〕金銀座起立

常是ノ事、慶長三年戊十二月、堺ノ町人湯淺作兵衛常是ヲ伏見ニ召シテ、御銀吹極、幷御銀改役ヲ命ゼラレ、大黑ト名字ヲ賜ハリ、大黑銀打印ノ事、末々迄違犯無之樣改ムベキノ旨御朱印ヲナシクダサレ、其比迄ハ銀位不同ニテ、堺ノ町人申合セ、諸國ヨリ出ル灰吹銀ヲ買集メテ銅ヲ加ヘ、各各極印ヲ打賣買ナシタリシヲ、此時ヨリ常是一人ノ極印ニ定メラレ、伏見兩替町ニテ宅地ヲ賜ハリ、其子作右衛門常好ノ時、同十三年、伏見ヨリ京都兩替町ニ移ル、十代作右衛門常明ノ代ニ至リテ、寛政十二庚申五月、同家長右衛門御咎ノ事ニヨリテ江戶ニ召下サレ、同年七月、江戶ノ御用ヲモ一手ニ勤ムベキ由命ゼラル、同年十二月、蠣ガラ町ニテ、酒井雅樂頭上地千八百七十一坪餘

ノ宅地ヲ賜フ、享和元年酉年、爲二手當一毎年金貳百兩ヲ賜フ、天保二年卯十一月、大坂鈴木町ニ改所地ヲ玉フ、

慶長六年丑五月、伏見ニ於テ地所四所ヲ賜ヒ、始テ銀座ヲ設ケラル、此所ヲ兩替町ト云、座人ヲ定メ、後藤庄右衞門、末吉勘兵衞、差配タルベキ由ヲ命ゼラル、同十三年戊申、伏見銀座ヲ京都ニ移サレ、地所四町ヲ賜ヒ、銀座ヲ建ラレ、伏見京兩所ニテ鑄造ス、爰ヲモ兩替所ト云フ、

慶長十七壬子、駿府ノ銀座ヲ江戸ヘ遷サレ、京橋ヨリ南ニ地所四町ヲ賜フ、今ノ銀座町是ナリ、文政十二年己丑六月、濱町ニテ七百四拾坪餘ノ添地ヲ賜フ、略○中銀座ハ代々銀座ノ中ヨリ年寄役ヲ立ラレ、萬取計ヒ來リシヲ、寛政十二年庚申六月、座人共不正ノ品有レ之ニヨリテ、悉ク召放サレ、三都銀座一時ニ廢絶ニ及ベリ、其月改メテ座人ノ中十五人ヲ召返サレ、舊弊ヲ除キ、改革ヲ遂ヲレテ今ニ至レリ、當時辻傳右衞門、秋田内記ノ兩人年寄役タリ、

〔國制記三〕銀座之事、

一年寄四人之内、壹人は江戸詰相務、年暮年始八朔御禮相務、京江登り候節は、御暇被レ下候時、銀五枚拜領、

一御運上銀ハ、寄銀三千九百九拾貫目迄ハ、御運上銀五百枚、寄銀四千貫目ゟ五千九百九拾貫目迄ハ銀千枚、六千貫目已上萬貫目迄ハ貳千枚ヅヽ、差上申候、

〔教令類纂初集六十五〕寛文三癸卯年十二月廿五日

口上之覺

一銀座運上銀三ヶ年分未進有レ之、從二來辰年一〇寛文四年十ヶ年急度上納可レ仕事、

一銀座運上之銀壹萬枚相定上は、大黒屋運上自今以後六貫貳百五十目宛、年々可二差上一事、

一銀座役不二相勤一輩は可レ除レ座、若無レ據不納有レ之ば、遂二吟味一御留守居衆江申二伺之一受二差圖一事、

一銀座之者相果、跡目幼少之内は名代を出し、銀座役可勤之、於致成人は勿論名代を除、本人可相勤事、

附江戸京都銀座頭、今壹人宛重而可被召加儀可有之事、

一銀座中、定書をいたし、御留守居衆所に差置之、不可違事、

以上

卯十二月廿五日

〔德川禁令考二十九 銀座〕寛政十二申年十一月廿二日

銀座引替地之事

伊豆守殿御渡　御勘定奉行江

銀座引替地之儀、蠣売町酒井雅樂頭上地千八百七拾壹坪餘之所ニ而被仰付候間、得其意可被取計候、尤御普請奉行江可被談候、

〔安政五年武鑑〕大坂銅座

岡本八左衞門　爲川住之助　野村八郎　野村乾一郎

〔大成令六十二 銅銭〕元文三午年四月

覺

一近年銅出方不取〆、長崎廻銅茂少く候に付、此旨銀座爲加役、大坂表江銅座申付、國々銅山より之出銅、一向に右銅座江買請候積りに候間、國々山元にて銅出方出精致、他賣不致大坂江相廻し、右銅座江賣渡し可申候、〇中略

右之條々、國々所々に而急度相守、大坂銅座之外に而、銅賣買一切致間敷候、尤銅座よりも銅之儀相改候間、若外に而賣買致し候儀於相知は、急度可申付者也、

四月

〔天明集成絲綸錄四十四〕明和三戌年六月

近年諸山出銅不進之上、一體銅方不取締に付、此度大坂表に有之長崎銅會所を改、銅座に申付、諸國之出銅一手に引請させ候間、大坂表にて銅取捌來候問屋吹屋中買、惣而正銅取扱候儀者、銅座ゟ可致差配候、依之國々銅山稼來分者不及申、此上出精いたし相稼、新山等掘いたし、銅出方試、出銅少く候共、外賣不致、不殘銅座江差廻、古地銅に至迄銅座江可相廻候、尤以來銅座江買入候銅代は、無口銀に而、卽銀拂之筈に候事、○中略

一右之通、諸國銅、大坂銅座江一手に買請、銅座ゟ諸國江賣出、大坂吹屋中買江茂相渡候間、銅座幷吹屋中買之內ゟ可買取候、尤相場之儀者、銅座江張紙出置筈に候間、右直段ゟ高直に賣立候儀、決而致間敷事、

右條々國々所々に而急度可相守、諸國出銅、銅座之外致賣買候儀於相知者、急度可申付者也、

六月

右之趣、可被相觸候、

〔天保集成絲綸錄九十〕寬政九巳年五月

御勘定奉行　長崎奉行江

大坂銅座之儀、今般大坂町奉行江茂掛り申渡候、以來、御勘定奉行、長崎奉行、大坂町奉行三支配に相成候間、得其意可被談候、

〔商業類纂商業四〕天保十二丑年三月　天保度御觸書付留五

銅座之外銅賣買停止

諸國より出銅は勿論、古地銅に至迄、銅座へ可相廻旨、明和三戌年相觸置、其後天明八申年、寬政

九巳年觸渡候處、近年不進に相聞、國々銅山稼來候分は不ㇾ及ㇾ申、出精相稼、新山等開堀いたし、出銅之分は、聊たりとも、外賣不ㇾ致、不ㇾ殘大坂銅座へ可㆓相廻㆒、尤江戶古銅吹方役所、並別段古銅吹所へ、是迄廻來候分、且新規之分は、申立之上相廻し、諸山より津出道中幷津々浦々又は海上にて銅賣買堅致間敷、若又心違之ものも有ㇾ之、山元より銅座之外へ相廻し賣拂候歟、又は山元にて荒銅勝手に延板器物或ハ眞鍮地、鏡地等に仕立候儀は堅令㆓停止㆒事、其外國銅幷質銅停止申付候段、先年より相觸置候通り可ㇾ守ㇾ之、

一國々出銅致㆓船積㆒大坂へ相廻し候節は、右銅員數書付、廻船之ものへ相渡、船宿之ものより大坂町奉行所幷銅座江廻著每可ㇾ屆事、

一銅はけ之儀、京幷大坂共はけ吹職之者申付置有ㇾ之間、右之者へ差廻し候儀は勿論、眞鍮はけ之義も紛敷有ㇾ之間、以來は一應銅座之改を請可ㇾ申事、

一諸國より荒銅を白目と名付、勝手に賣買致候趣相聞候條、不埒之事に候、以來は白目たりとも、一旦銅座之改を受賣買可ㇾ致事、

一古銅之儀、天明五巳年より、古銅切屑銅共不ㇾ殘銅座買入に相觸置、寬政八辰年より關八州之分は江戶表へ可㆓相廻㆒旨相觸置候處、近年相弛古銅賣上相減、若心得違不正之賣買致候歟、又は眞鍮職鑄物職之者にて、勝手に吹潰候儀は、決て不ㇾ致、前々より相觸置候通、急度相守、古銅切屑銅は不ㇾ及ㇾ申、はけ銅に至まで、大坂銅座、幷江戶古銅吹方役所、別段古銅吹所之內へ賣上可ㇾ申事、

右之趣、國々所々にて急度可㆓相守㆒候、若心得違觸渡之趣不㆓相用㆒もの有ㇾ之に於ては、其品取上、急度可㆓申付㆒もの也、

三月

右之通、可㆘致㆓相觸㆒候、

〔安政五年武鑑〕江戸本所古銅吹方役所　外下役八人　銅座差配銅吹屋六軒

別段古銅吹所　本所横川丁　松田甚兵衛

〔天保集成絲綸錄九十〕寛政八辰年八月

大目付江

銅方不取締に付、明和三戌年、大坂表に銅座相立、諸國之出銅一手に引請させ候間、國々銅山稼來候分は不及申、出精致し相稼、新山等開堀いたし、銅出方試候類は、出銅少く候共、外賣不致、大坂銅座江相廻し、古地銅に至迄、銅座江相廻し可申旨、其節相觸候之處、古銅之儀は、大坂表に限り候而は、不行屆儀も相聞候に付、此度江戸表においても、古銅吹所相立、御府内幷關東筋之古銅切屑銅類、右吹所江引請爲取扱候間、關八州は勿論、右國々之外も、江戸表江相廻し勝手宜方は、右吹所江賣渡、其外は是迄之通大坂銅座江相廻し候樣可致候、相場之儀は大坂銅座之通、江戸吹所江茂張紙出し置筈候間、右直段より高直之賣買致間敷候、右之外明和三戌年、天明八申年相觸候趣、無遺失相守、諸山出銅は、是迄之通大坂銅座江限り取扱、古銅切屑銅之儀は、大坂江戸兩吹所之外、吹潰候儀堅致間敷候、右之趣、國々所々に而急度可相守候、若囲置候類有之においては、急度咎可申付者也、

八月

右之通、可被相觸候、

〔天保集成絲綸錄九十〕寛政八辰年八月

町奉行江

此度於江戸表古銅吹所相建、大坂銅座之通り御勘定方御普請役壹人づゝ、日々古銅吹所江相詰、江戸詰銅座役人吹屋とも取計、諸事見屆取締等心付爲相勤候樣、御勘定奉行江申渡候、右は

町方江抱り候儀に付、先達而より、組與力同心掛り申付有之處、以來共掛り被申付、町方江抱り候用向有之候時に、掛り御勘定方より掛合之上、古銅吹所江罷越申談、銅方之儀に付申渡等有之節は、立合候樣致し、其外之儀は、一ヶ月五六度づゝも爲取締見廻り候樣、組之者江可被申渡候、

寛政八辰年九月

此度於江戶表古銅吹替所取建、御府內井關東筋之古銅切屑銅類、右吹所江買入、吹直可賣出旨被仰出候に付、江戶ゟ古銅切屑銅類、大坂表江爲差積候儀は差止、以來於江戶表細工之地銅、無差支吹方出來候上は、運賃諸雜費減難船破船之損失も無之候事に付、吹銅定直段之見合を以、細工賃等不相當之儀無之、下直に賣買可致候、

一江戶表江相廻り候古銅、燒銅、はけ銅、銅やすり粉、其外吹潰に可相成銅之分は、外賣不致、古銅所江賣渡、吹銅、間吹銅望のものは、中買井吹所ゟ可買取候、都而古銅類吹所江賣渡候儀は、此度申付置候中買を以賣渡候共、又は銘々直に吹所江賣渡候共、勝手宜方に可致候、尤代銀は卽銀に相拂、運賃車力賃等は吹所にて不差構候、且中買名前は吹所に張出候間、其旨可相心得候、

但江戶表ゟ、古銅類他處江賣渡候儀差止候に付、万一內分に而大坂表江相廻候歟、又は他所賣致し候ものに於有之は、其銅取上、急度可申付條、其旨可令承知候、

一諸職人共方江下物等に引受候古銅類有之候はゞ、是又吹所江賣渡、代り吹銅望之者は其旨可申立候、

但、賣渡方、前ヶ條之通可相心得候、

一中買共江古銅吹銅共、賣買之口銀差遣候間、其旨可令承知候、若中買共ゟ吹銅間吹銅割渡方非分之儀有之歟、又は古銅吹銅共、吹所定直段之外、相違之賣買於有之は、吹所江其段可申出候、

一古銅之内、生ヶ物と唱へ、古き儘相用候品之内、樋瓦、板物、かなぐ、右三品之分は、其形に而相用ひ候品に而も、古銅吹所江相屆、改を請、差圖次第賣買可レ致候、右之外銅道具器物類、又は少々づゝ之損所を繕ひ候迄に而、形を不レ替可レ用之分は、是迄之通賣買可レ致候、

但改請候儀は、勝手宜場所江取揃置、吹所江可二申出一候、役人差遣可レ爲レ改候、

一眞鍮吹屋、鑄物師、鏡師等、是迄は地がねに古銅を相用候由に候處、不取締に付、差止候間、所々ゟ引請候古銅類吹所江賣渡、間吹銅を買受可二相用一候、

一關八州は勿論、江戸表江相廻し勝手宜國々ゟ相廻候古銅切屑銅類廻著之度に、送り狀寫致し、江戸引受之者ゟ、古銅吹所江相屆、差圖次第、吹所江可二賣上一候、尤外古がね類入交、一同廻著致し候はゞ、是又同樣送狀寫致し、吹所江相屆、差圖受、外古がね之分は、勝手に賣買可レ致候、若無沙汰に賣買致し候段於二相知一は、急度可レ令二沙汰一候、其旨可二相心得一候、

右申渡趣、幷此度古銅吹所江被二仰出一候に付、御觸之趣無二違失一相守、眞鍮吹屋鑄物師鏡師等之類、古銅吹洩候儀堅く致間敷候、都而諸職方共、銅方に拘ゟ候儀は、吹所差配可レ受候、尤銅方爲レ改吹所役人不時に見廻候間、其旨可二相心得一候、

右之趣、鐵釘問屋、幷古鐵屋買、同見世賣、同辻賣、銅職人、飾方職人、眞鍮吹屋、鑄物師、鏡師、廻船問屋、奥川積問屋、高瀬附船宿、船大工、解船屋等、其外銅方に携候者共江無レ洩樣可二申渡一候、

九月

江戸長崎銅座出張所

〔商業類纂四商業〕文久二戌年閏八月　御達書拔抄第十

江戸長崎銅座出張役所取建

諸國銅山出銅、從來大坂銅座へ賣上來候處、此度江戸幷長崎表へ銅座出張役所御取建相成候間、其最寄領分知行所々銅山有レ之面々、開堀等いたし、出銅多少に不レ拘、同所へ賣上、尤直段之儀

は、是迄之振合に不拘、銅之性合出銅高に應じ、相當之直増をもいたし、御買上之積候間、出進方相勵、猶其筋掛り之ものへ可被相談候、江戸表は兩古銅吹所、長崎表は銅會所を銅座出張役所と相定、大坂表銅座之儀は、都て是迄之通可被相心得候、

右之通被仰出候條、御料は御代官、私領は領主地頭より不洩樣可被相觸候、

閏八月

右之趣可被相觸候、

鐵座眞鍮座役人

〔天明集成絲綸錄 四十四〕安永九子年八月

此度銀座加役として、鐵座、眞鍮座被仰付、鐵座役所、大坂において相建、眞鍮座之儀は、江戸京大坂銀座役所に而取計候事、

一諸國ゟ出候鐵釼銑之分、是迄之通、山元ゟ大坂問屋江積廻し、右問屋共ゟ鐵座江賣渡、尤鐵荷物、山元ゟ大坂江相廻し候道筋、津々浦々は勿論、大坂問屋之外江直賣堅致間敷候事、

一鐵釼銑大坂著船いたし候はゞ、問屋并船方ゟ大坂町奉行所江相屆、尤鐵座江茂可相屆事、

但代銀之儀者、是迄問屋共取扱候通、鐵帳合に應、直組致、鐵座江買入、問屋江卽銀に相拂、向々賣出し方之儀者、夫々直段定置、中買江相渡候間、望之者は、中買どもゟ可買請事、

一諸國ゟ出候鐵類之內、其所領主江買上、大坂江廻し、藏屋敷納に成り候分茂有之由、是又右鐵荷物、大坂に而引請候者、并船方ゟ茂同所町奉行江相屆、鐵座江茂屆致、賣拂之儀は、問屋又は鐵座江相渡、外賣いたす間敷事、

一國產之鐵、其所銀遣用にいたし來候分は、是迄之通たるべく、尤大坂廻致不來分は、新規に問屋江相廻し候儀、勝手次第にいたし、堅外國々江相廻し間敷事、

一眞鍮之儀、前々は京都計に而吹方致候處、近來江戸大坂伏見堺に而茂吹方致候由、此度眞鍮座

申付候上は、江戸京大坂の外に而、新規之吹方致間敷、尤是迄眞鍮吹方致候もの共は、眞鍮座手に附差配を可請事、

一眞鍮座に而、かね合割合に應じ、直段定置細工方之者、望次第、仲買江賣渡候間、細工人共、仲買より買受可申事、

一大坂鐵問屋中買井眞鍮吹屋中買之儀は、兩座ゟ人數相極、株札可相渡事、

但鐵荷物口錢之儀、問屋江は、國々仕切直段百匁に付銀壹分づゝ、中買江は、銀座賣捌代銀百匁に付銀貳匁宛、鐵座ゟ可相渡事、

一眞鍮口錢之儀は、座ゟ賣出し代銀百匁に付銀貳匁宛中買江可相渡事、

一鐵座眞鍮座之儀は、來ル十一月朔日ゟ相開候筈候間、十月中迄は、鐵眞鍮賣買吹方共、是迄之通相心得、鐵荷物著船屆之儀も、十一月朔日より前條之通可相屆事、

右條々、國々所々に而、急度可相守、鐵井眞鍮とも、兩座之外賣買致においては、可爲曲事者也、

八月

右之趣、可被相觸候、

天明元丑年十二月

去子年〇安永九年鐵座之儀相觸候處、備後國三次西城鐵之儀は、譯有之、座外に賣捌候積に候間、右鐵買請候者共ゟ、員數井買請直段共、其時々鐵座江相屆、尤賣捌之儀は、座之差配を受可申候、且又此以後出來鐵之分は、來五月より、外國々之鐵と不紛候樣、領主に而割印打賣出し、右割印は、鐵座江も印鑑差出候筈候間、賣捌方之儀、鐵座江可承合候、若買請高少分に而茂隱居不相屆於致賣買は、急度咎可申付者也、

右之趣、御料私領在町とも不洩樣可被相觸候、

十二月

〔天明集成絲綸錄四十四〕天明五巳年九月

三奉行江

安永九子年、鐵座眞鍮座被仰付、於大坂鐵座役所相建、諸國より出候鐵銅銑之分、同所問屋江積廻し、問屋共ゟ鐵座江賣渡、尤鐵荷物山元ゟ大坂江相廻候道筋、津々浦々は勿論、大坂問屋之外江直賣堅致す間敷、且大坂著船致候はゞ、問屋并船方ゟ同所町奉行所江相屆、尤鐵座江茂可相屆、代銀之儀は、是迄問屋共取扱候通、鐵性合に應直組いたし、鐵座江買入、問屋江卽銀に相拂、向々賣出方之儀は、夫々直段定置、中買江相渡候間、望之ものは、中買共ゟ可買請旨、其筋相觸候處、此節相改候仕法左之通、

一山元荷主江相渡候鐵仕切代銀之儀、以來問屋中買相對之上相場相立、問屋ゟ山元江代銀相渡候事、

一鐵賣捌方之儀は、右相對相場を以、問屋ゟ中買江買取、諸向江賣出し候事、

但問屋ゟ中買江買取候代銀之儀は、卽銀同樣之相對を以て致賣買、諸向江は中買相對次第賣渡候事、

一鐵座口錢之儀、鐵銅壹束に付銀四匁宛、銑三拾貫目に付銀三匁九分宛之當を以、月々中買ゟ鐵座江相納候事、

但問屋中買江座方より相渡來候口錢銀は、以來不相渡候事、

一問屋ゟ中買江買取候鐵類之高、一ヶ月に三度宛双方ゟ鐵座江相屆候事、

右之外、鐵座ゟ改を請候儀等は、去ル子年相觸候通、彌嚴重に相守、且諸國鐵山ゟ出候鐵類、荷主ゟ大坂問屋江積送、是迄之通鐵座改を請可申候、尤積送候道筋津々浦々は勿論、外國々江相廻候儀

并其外直賣等堅致間敷旨、去ル子年相觸置候處、拔賣買いたし候ものも有之趣、粗相聞不屆之至に候、以來夫々鐵座より遂吟味、右體之筋於有之は、江戸京大坂之内、其最寄之奉行所江申立候等に候間、心得違無之樣可相守候、萬一以來大坂問屋江不積送、外國々江密に積廻拔賣買いたし候もの有之におゐては、本人は勿論、買取候もの、其役人迄茂急度可申付候、其外前ヶ條之趣、國々於所々堅可相守、若相背におゐては、可爲曲事者也、

右之通、可被相觸候、

九月

〔天保集成絲綸錄四十四〕天明七未年九月

去ル子年、銀座加役として、鐵座、眞鍮座申付、鐵座役所於大坂相建、眞鍮座者、江戸京大坂銀座役所に而取計、諸國ゟ出候鐵銅銑之分、山元ゟ大坂問屋江積廻し、鐵座江相渡、荷物大坂問屋之外直賣致間敷候、并眞鍮之儀者、江戸京大坂之外新規之吹方いたす間敷候、是迄眞鍮吹方いたし候者は、眞鍮座差配を可請旨相觸置候處、差障之筋有之、鐵座眞鍮座差止候間、子年以前之通可致賣買候、

右之趣、可被相觸候、

九月

〔天保十一年武鑑〕朱座 新橋竹川町 江戸 義村源左衛門 江戸見習 義村二三郎 京 下村甚之丞

京 尾本與一郎 京見習 下村甚右衛門 京 糸屋九郎右衛門

〔雍州府志六土產〕硃 凡硃各権之而賣之、他人不能濫賣之、是謂硃座、在兩替町、自古権沽、世之所禁也、然硃。。。。。。。金銀三座蒙免許者也、此事不交他人、住此職而不去、故謂座、

〔官中秘策二十九〕朱座之事

一御運上銀壹ヶ年銀八百枚、毎年堺奉行へ上納仕候事、慶長十四年、初而朱座被仰付、壹ヶ年ニ御

運上銀千七百枚差上候處、年々御運上銀不足御訴訟申上候故、御免被成下、只今は百枚ニ相成申候事、先年は座人貳人有之候得共、只今は七人有之候、

頭 京屋市郎右衞門　同 山田助左衞門
堺ニ罷在 淀屋源吉　同 吉村孫左衞門
總代役江戸ニ罷在 淀屋甚大夫　同 淀屋太左衞門

〔官中秘策二十九〕朱座棟梁泉州堺小田助四郎事

一是は三河之浪人にて、廣忠公之御賴にて、戰國之時、方々に而御手遣仕候而、神君御代になり、相續て後藤光次、後藤庄左衞門と同州之方々江之御使を仕り、國々之間者となれり、庄三郎は御側に有りて助四郎と庄左衞門が、世上之風聞、國々之樣子を伺來り候而注進申上候、此大明にも渡りて其樣子を被爲伺、時に助四郎水銀山に登りて、朱を燒處へ行、是を傳授し來り、御一統之後朱座を賜りけるとなり、

一朱座甚大夫之事

一江戸竹川町に住する甚大夫は、助四郎一族に而、名代にて江戸住ひ、朱を取扱、朱座は慶長十四年酉九月より始、五節句、年始、歲暮登城御禮申上候、若年寄之御支配なり、

〔國制記三〕朱座之事

一朱座は、慶長十四年始被御仰渡、壹ヶ年に運上銀八百枚宛、毎年九月大坂江上納いたし、年始八朔朱百目宛獻上、御暇被下候節、銀五枚拜領、又光砂朱砂は、唐ゟ渡り來り候を、長崎に朱座を建置買取申候、本朱泉州堺に而仕立申候、

〔寶曆集成絲綸錄二十八〕寶曆九卯年十二月

前々ゟ朱墨之儀、朱座ゟ朱同樣賣出來候處、近年脇々に而紛鋪朱墨拵賣出候由相聞不屆に候、

朱墨商賣致候者は、前々之ごとく、朱座に而買請商賣可仕候、自今紛敷朱墨拵出候者於有之は、
急度可申付候、
右之通享保十九寅年相觸候處、右之趣を致忘却候哉、脇々ニて紛敷朱買請致商賣旨相聞不屆に
候、彌前々之通朱座ニて賣出候朱幷朱墨買請可致商賣候、以來脇々より買請候儀於相顯は、吟味
之上急度咎可申付候、
右之通可被相觸候、

十二月

〔諸問屋幷商雜類編〕　朱座

右ハ座被建置候ニ付テハ、御益壹ヶ年何程宛差上候哉之事、

安永五申十一月　辻左源次

朱座之儀、爲運上、上朱賣代銀百貫目ニ付銀百枚之積、銀五百目ニ朱壹貫目替ヲ以、寶永年中ヨリ、
銀朱之內ニテ相納候處、近年多分銀納ニテ、勿論朱賣高ニ應ジ相納候ニ付、年分ゲ不同有之候、
五ヶ年平均　壹ヶ年　銀拾壹貫九百目程ニ相當申候　此金百九十八兩程　御勝手方

〔天保集成絲綸錄九十四〕寬政八辰年八月

大目付江

朱幷朱墨共、朱座之外、脇々より紛敷品商賣致間敷旨、前々より相觸置候處、此度江戶京大坂奈
良堺江仲買之者共申付候、尤朱座に而茂是迄之通賣捌、仲買之者共は、掛ヶ札被致候筈に候間、
朱座幷右仲買共之內より勝手次第買受候樣可致候、勿論小賣致し候ものは、江戶京大坂朱座
の內より、鑑札受取、朱幷朱墨共買受、朱は朱座包之儘にて賣渡し、職人共遣殘り之分も、右包之
儘同職之者江讓渡し候儀は不苦候、若此上出所紛敷品內々賣買いたし候趣於相聞は、吟味之

上急度咎可申付候、

右之趣、御料私領寺領共、在町江不洩樣可被相觸候、

辰八月

右之通可被相觸候、

〔諸問屋幷商業類編〕天保十三寅年四月觸書

朱幷朱墨共、朱座之外、江戶京大坂奈良堺ニ仲買之者申付、掛札爲致、朱座幷右仲買共ヨリモ、勝手次第買受候樣、寬政之度相觸置候處、此度右仲買之者差止候間、以來者前々之通、座方ヨリ直ニ買受候樣可致候、尤朱者朱座包之儘、正路之直段ヲ以小賣致候儀、且職人遣ヒ殘之分モ右包之儘、同職之モノ江讓渡候儀等者不苦候、若出所紛敷品賣買致候趣於相聞者、吟味之上急度咎可申付候、

右之趣、御料私領寺社領共、在町江不洩樣可被相觸候、

四月

右之通可被相觸候、

右之通御書付出候間、町中不洩樣早々可相觸候、

四月八日

町年寄役所

〔商業類纂五商業〕嘉永五子年二月寬政度御觸御書付留六

朱幷朱墨仲買先前之通

朱幷朱墨共、朱座之外、江戶京大坂奈良堺へ仲買之者申付、掛札爲致、朱座幷右仲買共よりも勝手次第買請候樣、寬政八辰年相觸候處、右仲買之者差止候間、以來座方より直に買請候樣可致、尤朱は朱座包之儘、正路之直段を以、小賣いたし候儀不苦旨等、去る卯年十〇天保四年相觸置候、然る處、此度右五ヶ所仲買之者、先前之通申付候間、都て寬政度相觸候通可相心得候、若此上出所紛

敷品内々賣買致候段於相聞は、吟味之上急度咎可申付候、

右之趣、御料私領寺社領共、在町江不洩樣可被相觸候、

子二月

右之通可被相觸候、

漆奉行

漆奉行ハ、油奉行ト並ベ置キシガ、元祿八年油奉行ヲ廢シテ、漆奉行ヲシテ油ノ事ヲ兼務セシム、其人員二人乃至四人、幕府用キル所ノ漆油ノ事ヲ掌ル

〔延寶八年江戶鑑〕御漆奉行　同心二人ヅヽ

二百石はま町　木部藤左衛門殿　二百俵おゆみ町　太田六左衛門殿

〔吏徵上〕御目見以上漆奉行貳人　御勘定奉行支配　燒火間　百俵高　御役料百俵　手代八人

正保二年乙酉四月十八日始置

〔吏徵別錄下〕布衣以下御目見以上漆奉行　正保二年乙酉四月十八日始置　元祿八年乙亥八月十日、關東方御勘定ゟ馬場右衛門八郎被仰付、自是堀江左兵衛、雨宮庄九郎、三人ニ成、　正德四年甲午七月廿九日四人役、　同年十二月廿一日兩人役

〔東武實錄六〕元和五年、是年深津彌七郎正貞御漆奉行〇御漆奉行、一本作御膳奉行、トナル、

〔大猷院殿御實紀四十二〕寬永十六年、此年漆奉行大河內善左衛門政憲は、本城諸所繪奉行〇中略命せられ、〇下略

〇按ズルニ、漆奉行ハ、吏徵ニ正保二年乙酉四月十八日始置トアレド、右引ク二書ニ據ルニ寬

職掌

永以前已ニ當職アリシナリ、

〔萬天日錄十四〕御勘定頭支配

一漆奉行〇又見ニ柳營秘鑑、官中秘策、

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年六月十六日、油奉行を廢して、漆奉行にて兼しめらる、

〔延寶八年江戸鑑〕御油奉行

百俵　守屋八兵衞殿　久保吉左衞門殿

〔勘定所取扱覺書〕一油漆奉行

コレハ諸向油渡方、切手幷神寶方御用取扱也、

〔東職紀聞二〕漆奉行二人掌ニ漆油之事ヲ也、人別領ニ同心四人、手代十二人ヲ也、鑄錢則當職關ニ其事ニ也、

〔勘契備忘記中〕當時

漆奉行勤方書付

一漆之儀、近年御料所納者、金納ニ成、正漆納者、酒井左衞門尉獻上漆隔年ニ有之、御勘定奉行添狀を以、元方御納戸ゟ請取、淺草御藏へ納置候事、

一所々御用漆、幷拜借漆之儀、漆桶封印之儀、前々ゟ相渡來候得共、近年は漆かはき減有之ニ付、前々請負方ゟ、正味四貫目入と願候趣御斷有之ニ付、正味四貫目入之積、漆屋共之內呼出、漆奉行立會、漆入目相改、御勘定奉行添狀ヲ以相渡候事、

一御烏帽子師杉本美作、前々ゟ壹ヶ年ニ漆一桶、御拂直段ヲ以買請被ニ仰付ニ候間、漆屋共入札之高直段ヲ以美作へ相渡、代金取ニ上之、御金藏へ相納候事、

一船渡方之儀、大筒御用幷御先手所々渡方、御勘定奉行添狀ニ、所々請取手形ヲ以貫目相改、判鑑引合相渡候品々、渡方多不足之節者、町觸いたし、入札取之、落札直段御勘定所へ差出、吟味之上

御買上申付候事、

一錫鉛鐵之儀、御鐵炮御筒御用、其外御用之節、町觸入札取之、吟味之上致御買上、渡方之儀ハ、御勘定奉行添狀ヲ以、請取方手形引合相渡候事、

一油渡方之儀、前々ゟ、御勘定奉行證文ヲ以、請取手形引合相渡候事、

但右油之儀ハ、御藏納在相渡紋立、其餘ハ御買上いたし、壹ヶ月限、代金相渡候事、

一御時計并御鐵炮磨御用ニ遣候木實油胡麻油之儀、其時之町直段取之、吟味之上、御勘定奉行添狀ヲ以、受取方手形ニ引合相渡、尤代銀ハ御金藏より請取相渡候事、

待遇

〔柳營秘鑑三〕殿中座席之覺

一燒火間　漆奉行〔○又見官中秘策、吏徵、大概順〕

〔憲敎類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年九月

新御殿付而諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、〔○中略〕

躑躅之間北ゟ二之間〔○中略〕　漆奉行

〔憲敎類典三ノ三十六乘物〕元祿六癸酉年六月

五拾歲以上乘物并駕籠御免之面々〔○中略〕

一漆奉行　右同斷〔乘物斷狀御勘定頭裏書○中略〕

一油奉行　右同斷〔乘物斷狀御勘定頭裏書〕

俸祿

〔官中秘策十一〕諸御役人之事

一油漆奉行　御役料百俵　貳人

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に御增高被下候間、自今支配之內ゟ格別之儀も無之候は

手代

ば、御足米願申出間敷候、○中略

御役扶持七人扶持　　漆奉行○中略

右之通御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔有德院殿御實紀三十七〕享保十八年五月十九日、漆奉行に月俸十口を賜はるべしと定らる、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕漆奉行○中略　享保十八年癸丑五月十九日、役扶持三人扶持を増して十人扶持とす、是迄七人扶持也、并百俵より内之者、百俵高と被成下、延享四年丁卯四月十四日、神實方を兼勤せしむ、よりて御役料百俵を賜はり、役扶持十人扶持へ上る、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

漆奉行　　手代十貳人

〔吏徴御目見以下〕漆奉行手代八人　貳拾俵貳人扶持高　勤金六兩

〔吏徴別錄下御目見以下〕漆奉行手代　寛文十一年辛亥十二月廿三日始置　享保中、定十二員、元文中、定八員、同五年庚申七月九日、勤金六兩、○中略　淺草御藏御預物　漆　朱　鉛　釷銅　錫
刃　蓬砂　光明丹

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩御救之御金被下候旨、頭々支配々々江相模守○老中、土屋政直、傳達之、○中略

同断○金四兩宛　　漆奉行手代

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入場所　羽織袴　白衣役　油漆奉行手代

手代見習

〔吏徵別錄御目見以下〕漆奉行手代

寛政九年丁巳十月廿三日、始置ㇾ見習二員、各手當金五兩、

同心

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御抱入場所　羽織袴　漆奉行同心

油方同心

〔吏徵別錄御目見以下〕油方御同心　寛文十一年辛亥十二月廿三日、始置二員、寶曆二年壬申八月十一日、毎月雜用金貳分を賜ふ、

林奉行

職掌

林奉行ハ幕府料所ノ山林ヲ掌ル職ニシテ、貞享二年、始テ置ク所ナリ、

職員

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上〕林奉行　貞享二年乙丑六月十日始置四員、

〔常憲院殿御實紀十一〕貞享二年六月十日、林奉行四人命せられ、良材を巡察せしめらる、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御林奉行役料七人扶持　貳人

〔明良帶錄〕御林奉行持高御役料十人扶持、燒、手代八人宛、勘支

野役方にて、御林の事を司る、御鳥見より昇る、御作事下奉行、御細工頭、御勝手向、吹上向に至る、

〔御勘定所取扱覺書〕一林奉行詰所

諸國御林帳　コレハ知行割并上知等之節、御林帳拔差、御普請木伐渡、枯木根返リ、御拂減木等之御添帳ヲ以テ書入ルヽ也、

待遇

〔吏徵御目見以上〕林奉行二人　御勘定奉行支配　燒火間

〔憲教類典〕二ノ五御役　寛延二己巳年

殿中席書

燒火間〇中略　林奉行

〔吏徵〕上御目見以上　林奉行〇中略　持高　御役扶持十人扶持

俸祿

〔憲教類典〕二ノ五御役　享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內御足高并御役料定

百俵高持扶持　林奉行

〔吏徵別錄〕下布衣以下御目見以上　林奉行〇中略　元祿八年乙亥五月五日、御役扶持十人扶持、明和七年庚寅月日、御役扶持止、

〔憲教類典〕二ノ五御役　年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御林奉行　手代八人

手代

〔吏徵〕下御目見以下　林奉行手代七人　三拾俵貳人扶持高〇中略　御抱場　貞享四年丁卯月日始置

〔享保集成絲綸錄〕三十　元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩、御金被下候旨、頭々支配々々江相摸守屋〇老中、土正直、傳達之、〇中

略

同斷〇金四兩宛　御林役人

手代見習

〔吏徵〕下御目見以下　林奉行手代〇中略　見習貳人、十五俵一人扶持、

道中奉行

道中奉行ハ、道中一切ノ事ヲ總管ス、二人アリ、大目付、勘定奉行ノ兼職トス、政治部驛傳下篇ヲ參看スベシ、

〔吏徵附錄職權〕道中奉行兩人　大目付一人御勘定奉行公事方一人兼役、　正德二年壬辰二月廿六日、始置、兩人、與力二騎、同心十人宛を附らる、　享保九年甲辰十月廿九日、與力同心を廢す、

〔吏徵別錄上布衣以上〕大目付　寛永九年壬申十二月七日始置、四人、道中奉行兼帶水野河内守守信柳生但馬守宗矩秋山修理亮正重井上筑後守政重

御勘定奉行○中略　元祿十一年戊寅、松平美濃守、始道中奉行兼帶、此後連綿至于今、

〔道中秘書十四〕一道中奉行

大目付壹人　御勘定奉行壹人

但古來は大目付壹人ニ而相勤候處、神尾備前守大目付之節、元祿十一寅年、御勘定奉行松平美濃守道中奉行加役被仰付、夫ゟ以來兩人ニ而相勤申候、尤當時公事方御勘定奉行ゟ、兼帶いたし候得共、柳生主膳正勤役之節は、御勝手方ゟ兼帶いたし候、

一道中方掛

御勘定組頭御方帳面方組頭之内ゟ兼役　支配勘定四人

〆拾人

但御勘定支配勘定は、壹ヶ年御手當金拾兩被下候事、

〔五驛便覽〕大目付道中奉行

萬治二年ゟ　高木伊勢守　延寶八年ゟ　彥坂壹岐守　天和三年ゟ　高木伊勢守

元祿八年ゟ　神尾備前守　同十二年ゟ　安藤筑後守　寶永五年ゟ　松平石見守○中略

職掌

御勘定奉行右同斷

元祿十一年ゟ　松平美濃守　同十二年ゟ　久貝因幡守　寶永二年ゟ　石尾阿波守

同五年ゟ　大久保大隅守〇下略

〔道中秘書十四〕道中方勤方申上

加役道中奉行勤方之儀申上候書付

松平石見守
伊勢伊勢守

一先年は大目付壹人ニ而、道中奉行相勤候處、神尾備前守大目付之節、元祿十一寅年、御勘定奉行ゟ兩人ニ而相勤申候、其節迄ニ道中方御用、相互ニ平勘定三人相附相勤候處、美濃守〇松平道中奉行被仰付候段、御勘定所御殿詰組頭竹村彌兵衛、細田三郎右衛門道中方御用相勤、其以後松岡彌三郎、萩原清左衛門引續相勤申候、此兩人正德二辰年、御勘定吟味役被仰付候得共、道中方之儀も差加り、御用相勤候樣被仰渡、因只今も松岡彌太郎、辻六郎左衛門相勤申候、

一御料所宿々之儀、寶永四亥年、宿手代被申付置、其所之御代官支配仕、公儀ゟ御扶持給米被下、上役下役一宿ニ兩人ツヽ罷出、往來御用其外宿助鄕村々人馬取捌仕候處、勤方不宜筋ニ而、正德二辰年、宿手代不殘差止、道中奉行壹人ニ與力貳騎、同心十人ツヽ御預ケ相成、道中方宿々吟味仕候樣ニト被仰渡、只今組與力同心御用相勤候、

一右宿手代扶持給米之儀は、寶永申年より諸國御料所村々へ、御傳馬宿爲御用、高懸被仰付、壹ケ年ニ米高六千俵ツヽ相納來候處、宿手代は被差止候得共、右高懸り米は、向後も前々之通取立、道中方御用ニ可仕旨被仰渡、今以右高懸り米、道中之御用ニ相渡申候、

一東海道井美濃路之內、御料所宿々ニおゐて、往來旅人之ため、時之鐘無之宿には、定番を立置、晝

夜時打可申旨、正德元年被仰付候、右入用扶持米、并年番代金年々被下之、右御傳馬高懸り米之内を以相渡申候、

一先年道中宿々より注進之事、其外輕き分は、道中奉行手合ニ而申付ル事、訴訟等之入組有之時は、御勘定奉行內寄合へ、道中奉行罷越吟味仕候、其外宿助鄉最寄違ニ付、割替願之義も、御用相違候もの人少ニ而、吟味も難仕候ニ付、差當不申儀ハ差延、拜借返納之儀も、御代官又ハ領主役人申次第ニ仕候樣ニ成、吟味も屆兼候處、組與力同心被仰付候以來、道中奉行月番を置、寄合日を定メ、公事訴訟又は拜借返納之儀、明細遂吟味候故、返納も濟、年久鋪不埒成類、段々相濟申候、

一宿々燒失有之時ハ、其所之御代官吟味次第、御定之火事拜借貸渡候處、道中方與力同心被仰付候後ハ、傳馬役之もの拾軒、人足役之もの貳拾軒以上、燒失いたし候時ハ、組之もの見分ニ差遣、委細遂吟味、貸渡可然旨、正德二辰年被仰渡、只今迄は、見分差遣役人間數之割合迄、明細ニ遂吟味候上貸渡申候、

一昔は宿々助鄉村々ハ、領切郡切抔の樣ニ相賄、人馬多少有之不同ニ付、宿々依人馬差支も有之候ニ付、元祿二巳年、其宿限ニ最寄を吟味いたし、高も相應ニ助鄉村々相附、只今以て往還御用相勤申候、助鄉最寄遠近等之訴訟有之候得バ明細承屆、品ニ寄組之もの見分にも遣し割合等仕候、

一道中道橋新規御普請修復等、前々ハ御代官より伺次第、御勘定所に而吟味之上申上候處、與力同心被仰付候以來、御普請修復之品ニ寄、組之もの見分ニ差遣、御普請差延不苦分、又ハ御普請申付可然分ハ、委細吟味之上、御勘定所へ申談、御入用懸り不申樣詮議仕候ニ付、跡々トハ御入用減申候、

一道中道橋並木一里塚等、前々不埒成所も御座候處、只今時々組之もの相廻り、不絕吟味いたし、

川船改

尤助郷人馬等之寄方迄詮議仕候故、唯今無用之人馬も、助郷より差出さす、往還も順路ニ罷成、前々トハ宿助郷とも甘候方ニ罷成候、

右之通り道中方古來之勤方、只今之勤方替り候品々、幷支配增減加役之事、書面之通御座候、先規不ㇾ及ㇾ伺に、評議之上申付候事、道中方には無ㇾ之候、前々ゟ伺候品ハ其格ニ而、今以古法之通ニ仕候、勿論以來之儀ニ御座候間、委細ハ不ㇾ知候得共、大概を以申上候、以上、

○按ズルニ、松平石見守、伊勢伊勢守ノ並ビテ道中奉行ノ職ニアリシハ、享保元年ヨリ同六年ニ至ル間ナリ、

川船役人

川船改川船奉行ハ同一ノモノニシテ、始ハ川船奉行ト云ヒテ、勘定頭卽チ勘定奉行ノ支配ニ屬シ、江戸幷ニ關八州ノ川船ノ事ヲ掌リ、其稅金ヲ徵收ス、享保中之ヲ作事棟梁鶴氏ノ世職ト爲シ、川船改役ト改稱セリ、

淀河過書船支配ハ、山城國淀河ヲ上下スル所ノ商船ノ稅金ヲ徵收スル職ニシテ、始ハ河村木村二氏ノ世職ナリシガ、後河村氏除カレテ、角倉氏之ニ代レリ、倘ホ川船役人ニ關スル事ハ舟車部舟篇ニアリ、參看スベシ、

〔萬天日錄 十四〕御勘定頭支配　川船奉行〇又見ニ柳營補任一

〔東職記聞 二〕川船奉行鵜飼左衞門代々之職也、改ニ船之極印一也、

〔台德院殿御實紀 五十八〕天和八年十二月廿四日、美濃部三郎左衞門茂勝、新に川船奉行を命せらる、

〔憲教類典三ノ二十六 殿中〕萬治二己亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、

定

躑躅之間北より二之間〇中略　川船奉行

〔柳營秘鑑三〕殿中座席之覺

一燒火之間　川船奉行

〔貞享三年武鑑〕川舟奉行

六百七十石　山角豊右衛門

〔延寶六年江戶鑑〕御舟改墨印衆　二百俵　勝屋庄右衛門　三百俵　齋藤忠右衛門

〔吏徵上 布衣以上〕川船改役一人　御勘定奉行支配　燒火間　百五十俵高　御役扶持十人扶持

御手當金五十兩　手代十七人　元祿九年丙子三月廿九日始置　御役宅本所石原

〇按ズルニ、此職モトハ舟改墨印ト稱セシコト、貞享元祿ノ武鑑ニ見エ、寶永、正德、享保、寬政、天保等ノ武鑑ニハ、舟改極印トアリ、川船改役ト云ヒシハ、其後ノ事ナルベシ、

〔吏徵別錄下 布衣以下御目見以上〕川船改役　享保十六年辛亥三月廿七日、始置一員、鶴飛騨御作事方棟梁也 御勘定奉行支配席、支配勘定並、　延享四年丁卯四月日御勘定上席、天明八年戊申三月廿四日、爲御手當御年貢之內より、一ヶ年金五十兩充被下、

〔明良帶錄續篇〕川船改役二百俵高 勤支 燒

御勘定奉行支配にて、昔は御先手にて勤たり、中奥濱內御船手より御水主出役まで、當時別役となる、諸向より昇る、極印船改役所なり、

〔有德院殿御實紀三十三〕享保十六年三月廿七日、作事棟梁鶴飛騨正任をして川舟の事をつかさ

ざらしめらる、これを新に設らるゝなり、

○按ズルニ、下ニ引ク憲教類典ニ據レバ、鶴氏ハ、是ヨリ先キ享保六年三月ニ川船ノ職ヲ命ゼラレシガ如シ、姑ク附シテ參考ニ供ス、

〔憲教類典五ノ七川堤〕享保六辛丑年三月廿八日

關八州川船之事、去子年〇享保五年迄ハ川船奉行相改候處、向後棟梁鶴飛驒相改候筈ニ候、御年貢役銀取立之義ハ勿論、船改を始、新造潰船等之義迄、諸事飛驒差圖趣、違背不仕候樣ニ、川船所持之者共江可申付旨、町中可觸知者也、

〔御當家令條二十六〕覺

面々致所持候川船之儀荷物を積候船には、川船奉行方ニ而改之極印打也、荷物不積船は、唯今迄不相改極印も不打に付而、紛敷候而、商賣船之改にも障候間、向後川船之分、不殘川船奉行江相達、極印打せ可申也、

貞享四年卯十一月

江戶幷關東筋極印受たる船有之由、川船に寄らず、極印之うすく成候船、四月中旬ゟ六月晦日迄之内、江戶兩國橋石場船改所迄差出、川船奉行得差圖、極印可受之、總而川岸に有之川船は、其所之大屋名主共、委細相改、船數不殘帳面ニ記之、川船奉行江可差出之、若隱置、後日ニ改出し候者、急度曲事可申付者也、

元祿九年子三月

〔勘契備忘記中〕川船極印打渡候定日

二日　七日　十一日　十六日　廿一日　廿六日

但川通御成之節者相延、重而之定日打渡候、

御成又ハ雨天ニ而度々相延し、遠國之船差支候節ハ、定日之外、臨時ニ打渡候事、

一武家所持之船者、知行物成運送船、并日除船、其外何船に而も、屆書出次第承屆、前々ゟ格式相之船遂吟味、致差圖、新規船、有來船修復共、書付次第、船大工ゟ之證文取之、造立申付出來之證文又取之、間尺入、御年貢盛付、帳面印形取置、船古成、潰船ニ仕度分申出候分ハ、相渡候極印三ヶ所相納候上、極印請取、潰船ニ申渡、帳面相除申候、

一商船新規船、并有來船修復共、船頭船大工證文取之、出來之上、名主船主證文取之、間尺入、極印相渡、御年貢盛付、帳面ニ記印形取、潰船之儀も、極印三ヶ所切拔、船主證文取、極印請取、潰船ニ申渡、帳面相除申候、

一新規潰船に而も、年々增減有之に付、新規潰船差引書付、毎年八月極高、御勘定所へ達、御勘定奉行證文を以、御勘定仕上申候、

一八月ゟ十二月迄造立候新船ハ、御年貢役銀臨時取立、御勘定仕上申候、

但八月ゟ出來之船、翌年八月ニ至り、御年貢取立候得者、一ヶ年ゟ御年貢拔候ニ付、享保五子年改之節ゟ、八月ゟ十二月迄出來之船者臨時ニ取立申候、

一總船高之內、八月ゟ十二月迄修復いたし、極印打替差出、間尺相延打出之分、御年貢役銀臨時ニ取立、御勘定仕上申候、

但右同斷

一船古成、用立不申候船、潰船極印切拔納候義ハ、其年之御年貢役銀上納仕、名主加判證文を以、其年之八月ゟ翌年三月晦日迄、帳面相除、或ハ流失破船燒失船ハ遂吟味、帳面相除申候、

一商船ゟ武家江賣渡船、八月ゟ翌年四月を限書替、武家ゟ商船ニ賣候儀ハ、時節無構書替申候、

但武家へ商船無限勝手ニ爲賣候得者、商船役銀高減候ニ付、前々ゟ限り相立候事、

一川船御年貢、長錢ニ而取立、鐚錢之直段御金藏江相納、又ハ御拂ニ成候得バ入札取之、代金御藏江相納申候、

川船改方之儀覺

一御三家手船并商船獵船等、船改之爲、合印請取置相改申候、

一御三家手船、御領分之商船、公儀極印相願候時ハ、御三家極印切拔候を船ニ添、見分を請候上にて極印打渡、御年貢盛付、新船ニ準じ候事、

一日除戸障子入候役船は、三拾艘之定ニ而燒印札相渡、商人江爲持置、御用役船ニ差出候積、

一御用ニ付、日除戸障子入候役船、御目見以上江ハ水主三人乘、御目見以下ハ、水主貳人乘定ニ候事、

一日本橋江　六艘

一江戸橋江　六艘

一新大橋江　貳拾艘、内八艘者、火消爲ニ御用ニ御先手へ渡、十二艘ハ渡船、

一兩國橋江　貳拾艘、内右同斷、

一淺草御厩河岸場江　拾艘

一竹町渡場江　拾艘

右之通役船差出申候、

一金壹兩

右者橋場關宿貳ヶ所船改番所地代金ニ被下候、每年川船役銀之內を相渡申候、

一川船役所普請修復之儀、其度々御勘定所へ相屆修復致、役銀之內を以、右御入用吟味之上相渡申候、

一小買物品々年々御勘定所へ相達、吟味之上、役銀之内を以相渡申候、

一川船役所相勤候ニ付、川船御年貢役銀高之拾分一、年々鶴武大夫江被下候之事、

一川船極印損候節相改、御勘定所へ相達、直段吟味之上仕立申候、

一無年貢極印船之儀、古來ゟ謂有之、知行高ニ入、又者役錢御代官へ相納候菜御肴差上候役儀ニ付、所持之船共言字極印相渡申候、

〔憲教類典川堤五ノ七〕享保四己亥年十二月廿八日

覺

一今度川船間尺相改、極印打替候附て、江戸幷關東筋川船は何船によらず改を請極印可受之、但江戸舟ハ未年中を限り、江戸運送之序次第、川船奉行所役江舟乘行、川船奉行江相達、差圖次第極印可受之、前之極印受おくれ候舟たりといふとも、此度罷出極印可受之、且又江戸運送之序無之舟ハ、舟數委細に書附、御料私領共ニ川舟奉行江差出置、重而改請、極印可受之候事、武家之乘船、其外譯有之而、跡々より極印不請船ハ、船數委細書付、川舟奉行江相達、帳面ニ可附置候事、

以上、

十二月

〔大成令八十〕享保六丑年三月

一船大工新艘造り立候はゞ、其旨川船役所江相訴筈ニ去冬申付候處、心得違候由ニ而不訴船大工も有之不屆に候、向後不訴船大工有之候はゞ、過料可申付候間、此旨船大工共に可觸知者也、

三月

〔勘契備忘記中〕享保六丑年

川船役所勤方船役銀取立米之定書付

川船改役見習

淀河過書船支配

一毎年八月ゟ翌年五月迄川船御年貢幷役銀納可ㇾ申事、

附年貢手形於ㇾ番所ㇾ改を請可ㇾ申事、

一御年貢手形無ㇾ之船作ㇾ之、船之御年貢手形を借候におゐては、貸人借主共可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ事、

一往還之船に不ㇾ限、晝夜番所に而相改可ㇾ通、若隱忍於ㇾ致ㇾ往還ㇾ可ㇾ爲ㇾ曲事ㇾ者也、

〔文恭院殿御實紀 八〕寛政二年六月十一日、勘定奉行支配無役にて、川船方見習ふ鵜房次郎正浮本職を命せらる、

〔東職記聞 一〕淀河過所船支配二人

木村宗右衛門、角倉與一、兩人代々奉ㇾ當職ㇾ也、

〔木村宗右衛門先祖書〕權現樣天下御一統之御代と相成候節、過書之儀、古來之通無ㇾ相違ㇾ被ㇾ爲ㇾ仰出ㇾ河村與三右衛門、木村宗右衛門過書中江、慶長八年、權現樣御朱印被ㇾ下置ㇾ所持仕候、〇中略右兩人、以前ニ不ㇾ相替ㇾ、過書奉行可ㇾ仕旨被ㇾ仰出ㇾ候、

〔翁草 百九十五〕宇治御茶師上林幷角倉等之事

角倉與一ハ、先祖嵯峨住居の大商人にて、〇中略御當家に至、御取立有て御代官仰付られ、且淀川過書舟支配、

是は中頃迄、河村與三右衛門、木村宗右衛門支配致候處、與總右衛門被ㇾ相除ㇾ、右替角倉與一被ㇾ仰付、當時木村宗右衛門、與一、兩人にて支ㇾ配之ㇾ、與總右衛門被ㇾ除候譯未ㇾ考、元祿頃歟、自ㇾ夫以前歟、年號は慥と不ㇾ覺、過書方古來之制札法度書等は、與總右衛門宗右衛門兩名也、

御土居藪方支配相兼代々勤ㇾ之、御宛行貳百俵寛政三年、御土居藪一件、角倉支配相止、町奉行管沼下野守掛りに成る、〇中略

河村與三右衛門ハ、淀水車を巧始し者にて、謠にも淀の與總右が水車と唱ひ、其名高く、神君にも能御存之者也、御代後被ㇾ召出ㇾて代々御奉公せしが、故有て役儀召上られ、當時其裔淀に在て浪人

たり、同所木村藤五郎も由緒有之者故、地方にて領地を頂戴して無役也、結句右の庶流木村宗右衛門は、過書方支配被仰付（寛政三年の頃御代官被仰付）に仍、藤五郎儀も代々御奉公願を差出せ共、今に於て何の御沙汰もなし、此類は諸國にも間有之事なれども、當地まのあたりなる計を注す而巳、

〔東照宮御實紀七〕慶長八年十月二日、河村與總右衛門某、木村摠右衛門勝正に、淀川過書船支配の御朱印を下さる、其文にいふ、大坂傳法、尼崎、山城川、伏見、上下する所の過書船、公役として年中銀二百枚課せしむべし、官用の船は、例の如く川筋折々船番すべし、武家船は課銀をとるべからず、商物を積載するに於ては、嚴に査檢を加ふべし、木材の如きは、直に武家の邸内へ収めしむべし、材木商へ渡さしむべからず、二十石積の船課は銀五貫目納むべし、船に大小ありといへども、課銀は二十石積の船に准じて收むべし、鹽藏の魚物船課も上に同じ、下り船の米は二割をとり收むべし、新過書船三十一人船一艘づゝのすべし、かく定めらるゝ後、船持商人に對して非義を申かくるに於ては、嚴に命せらるべしとなり、

〔御當家令條十九〕覺

一過書船上米之事、百石ニ付而銀子六匁宛相定上ハ、爲兩人請取之、木村總右衛門角倉與市方江可納之、幷船數兩人次第數多可申付事、

一從伏見下船乘人荷物之上米之事、如先規右兩人方江可納之、船數同前、〇中略

元和二年辰八月

〔嚴有院殿御實紀三十九〕寛文九年十月廿九日、京邊堤防の竹林を、淀川過書支配角倉與一玄起にあづけらる、この後官用の外は、伐取しむべからずと命せらる、

〔嘉永三年武鑑〕淀川過書船支配

二百俵　角倉與一　二百石　木村摠左衛門

元締年寄

〔天保十年大坂袖鑑〕過所年寄

鈴鹿町松村伊左衛門　尼崎岩井増三郎　老松町西原市右衛門　信保町家原清右衛門　京渡邊勇助　平田國分紋次郎

〔嘉永三年武鑑〕同〇淀川過書船支配　元締役

高田次郎右衛門　伊東五百平　田中丈助　小田切要人

同年寄　毎年御目見、獻上拜領有之、

大坂松村伊左衛門　尼崎岩井武兵衛　大坂西原市右衛門　同家原清右衛門　京渡邊勇之助

〔支配幷遠國町人御禮格式坤〕淀川過書

一正月三日、總中進物色羽二重拾疋、年寄三人白紗綾一卷ヅヽ、

一御暇於二蘇鐵間一寺社奉行申二渡之一、年寄三人、時服三ヅヽ被レ下レ之、

正德三年正月三日

一御代替獻上物年頭之通

一右ニ付、年寄江時服二ヅヽ被レ下レ之、

評定所役人

評定所ハ、毎月式日、及ビ立合日ヲ定メテ、訴訟ヲ聽斷スル所ナリ、其主タル役人ハ、寺社奉行、町奉行、勘定奉行ニシテ、之ヲ三奉行ト稱シ、各〻其支配下ノ訴訟ノ、他ノ奉行ニ關聯シ、又ハ其事ノ重大ニシテ、獨裁シ難キモノアレバ、此所ニ集會シテ議決スルナリ、老中一人之ニ列シ、側用人及ビ在府ノ所司代、遠國奉行等モ亦傍聽スルコトアリ、其他勘定吟味役、目付、徒目付、

小人目付、囚獄、町年寄等モ參集シテ事ニ從フ、評定所專務ノ職員ニハ、評定所留役アリ、目安讀アリ、評定所番、及ビ同心アリ、書役アリ、評定所留役ハ、三奉行ヨリ各〻其屬僚ヲ出役セシムレドモ、寺社奉行、町奉行ノ留役ハ、常ニ評定所ニ在ルニアラズ、獨リ勘定奉行ノ留役ニ限リ、其數十餘人アリテ、常ニ評定所ノ事ニ從ヒ、組頭ヲ置キテ之ヲ統轄セシム、其俸祿ハ、勘定所ノ勘定組頭、及ビ勘定衆ニ同ジ、目安讀ハ儒者ヨリ出役スルモノニテ、後ニ評定所勤役ト稱ス、數人アリテ評定所ノ文書ヲ整理ス、正德二年ニ之ヲ廢セシガ、享保三年ニ至リテ再ビ之ヲ置キ、寬政二年ニ更ニ又之ヲ廢シテ、留役右筆等ヲシテ、其職ヲ兼子行ハシメタリ、評定所番ハ三人アリ、古ハ評定所留守居ト云ヘリ、同心十餘人之ニ屬ス、書役モ亦十餘人アリ、各〻書記ノ事ニ從フ、尙ホ評定所ノ事ハ、法律部下編ノ聽訟篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

〔憲敎類典〕四ノ五上 評定 寬永十二乙亥年十一月

一寄合日　二日　十二日　廿二日

右之日罷出輩之事

松平伊豆守〇信綱　阿部豐後守〇忠秋　堀田加賀守〇正盛、以上三人、並老中、

右三人、壹人宛致番可罷出事、

安藤右京進〇重長　松平出雲守〇勝隆　堀市正〇正貫、以上三人、並寺社奉行、

此三人、一人宛致番可罷出、但被仰付御役儀ニ公事有之時は、不殘罷出候事、

水野河内守〇守信　柳生但馬守〇宗矩　井上筑後守〇政淸　秋山修理亮〇正重、以上四人、並大目付、

此四人、壹人宛致番可罷出事、

松平右衛門大夫〇正綱　伊奈半十郎〇忠治　伊丹播磨守〇康勝　大河內金兵衛〇久綱　曾根源左衛門〇吉次、以上五人、並勘定奉行、

此次第貳番ニ致可レ罷出、曾根源左衛門、右之內江相加可レ罷出事、
佐久間將監〇直勝　酒井因幡守〇勝久　神尾內匠〇元勝、以上三人、並作事奉行、
此三人、壹人宛致レ番可レ罷出事、
道春〇林　永喜〇以上二人、並儒者、
此貳人、壹人宛致レ番可レ罷出事、
內藤庄兵衛〇直信　野々山新兵衛〇兼綱、以上二人、並小納戸、
右同斷
建部傳右衛門　久保吉右衛門〇以上二人、並右筆、
右同斷、右兩人共罷出申候、
但其外之御祐筆壹人、相加可レ罷出事、
加賀爪民部〇忠澄　堀式部〇直之、以上二人、並町奉行、
右兩人、毎度可レ罷出事、
寬永十二亥年十一月

〔東職紀聞一〕勘定奉行
寺社奉行、町奉行、勘定奉行、各雖レ所レ掌異一也、直參陪臣以下至二庶人一、於二大事之訴論刑法等一、則三職相二會評定所一而糺二彈之一、故稱二之三奉行一也、

〔江戸舊事考三〕評定所　高木丘山
評定所勤ハ、評定所留役御勘定組頭三百五拾俵、御役料百俵壹人、御勘定評定所留役百五拾俵高御役扶持貳拾人扶持拾人、同留役助同高、御役扶持拾人扶持五人、同留役當分助同高、御手當金一ケ月金壹兩五人、都合貳拾人ニテ、月々貳人宛月番ヲ立、公事訴訟之事ヲ取扱、其外評定所書物方、

御勘定同高、人員不定、目見以上以下小普請ヨリ出役有之、人數不定、此書物方ハ、總テ評定所ニ附テ之事務ヲ扱、內貳人宛、日々御殿御勘定所ニ詰番トシテ出テ、公事方之扱ヲセリ、御觸書認方御用出役御仕置例類集認方御用出役、是亦小普請ヨリ出ル、人數不定、評定番貳人、百俵高、目見以下ニシテ、評定所地內ニ役宅アリ、評定所書役、貳拾俵三人扶持、人員不定、抱入之者、同心拾俵貳人扶持拾八人、內表同心ト云ハ、腰掛ニ番所アリ、內同心ト云ハ溜吞所ニテ相勤ナリ、寺社奉行支配吟味物調役四人アリ、百五拾俵高、御役扶持貳拾人扶持ニテ、式日立合日ハ評定所ニ出勤、其他月番之寺社奉行宅ニ出勤、公事訴訟之事ヲ勤ルナリ、

〔憲教類典四ノ五上評定〕享保四己亥年十二月六日

一評定所式日に、御目付壹人、立合日兩人、代々只今迄罷出候得ども、向後壹人宛壹ヶ月切に人を相定罷出、奉行役人之公事訴訟裁許、其外諸事取扱之次第、委細見聞置、御尋之節、具ニ申上候樣ニ可心得候、若公事訴訟之譯、見聞候迄にて、奉行役人之取扱、委細難相知は、目安訴訟等、奉行中江申達、とくと遂一覽、出入之譯、奉行中江茂其子細具に承届可申候、

一非番之御目付之內、障にて有之者、立合日には壹人宛相加り可罷出候、然共病人差合等有之難出節は、不及其儀候、

一御徒目付、向後式日立合ともに、壹人宛罷出候樣可致候、尤御小人目付茂、右に准じ相減じ可申候、

十二月

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕年號月日不知

一評定所式日、毎月四日、十三日、廿二日、御老中壹人御出席也、當日月番之方より、與力三人(內壹人組頭)物書壹人出之、同心拾六人は兩組より出之、但組頭不及出之、同立合、毎月六日、十四日、廿五日、御

老中無御座、當日兩組ゟ與力二人ツヽ出之、但組頭不及出之、物書同心等は同斷、

〔公儀秘錄 一〕評定所出來之事

享保四亥年書付

覺

一明曆三年之頃迄は、評定所立合へ老中出座有之候所、稻葉美濃守〇正則老中之節、向後立合へは奉行中出座有之、寺社奉行をおもにいたし、詮議有之樣ニ申渡候由、

一立合へ老中出座有之時分は、登城などは無之、此時分は評定所へ上使等有之候よし、

〔評定所格例〕京都所司代參府之節、評定所式日立合江出席之事、

一寬政七卯年三月十一日、評定所式日立合江所司代出席有之、評議之趣も被承候而差支無之哉之段、松平伊豆守殿一座江御尋ニ付、差支之義無之段、同十二日申上、尤御同意伺相濟候段、所司代堀田相模守〇正順より達有之、尤出席之節、注進狀端書ニ認入可申哉與相伺候處、伺之通可仕旨被仰聞、内座は寺社奉行之上ニ着座、評席ハ御老中出席隱聞之通、障子を建、右障子橫骨際、少し切明ケ、右内ニ着座、

但奉行御目付席江出候跡より評定所番先立に而、本文之座江被相越、

〔享保集成絲綸錄 十八〕寶永三戌年四月

覺

伏見奉行　長崎奉行　京都町奉行　大坂町奉行　山田奉行　日光奉行　奈良奉行　堺奉行　駿府町奉行

右之面々、向後在江戶之内、評定所立合に、二三度程出座候之樣可被相達候、

四月

留役及助役
職員
職掌

（天保集成絲綸錄七十五）寛政三亥年九月

三奉行江

遠國奉行、評定所江出座之儀、寛永之度、相達候趣も有之處、いつとなく發足前一度出座而已之樣ニ相成、見習之詮も無之候、以來寛永之度相達候通、在江戸之内、二三度程出座いたし、右度數之外にも見習度候はゞ、伺候而出座候樣可被相達候、

右之趣、大目付江相達候間可被得其意候、尤數度出座之儀ニ候間、評議物等之差支ニ相成候はゞ、其節は別間江爲被候とも、爲致退散候共可被致候、

（御張紙留）文化十二亥年正月廿五日、伏見奉行丹羽式部少輔、爲見聞評定所出席ニ付、例之通評定所番案内いたし、誓詞之間へ參着、寺社奉行次ニ着座、評定席座順も同樣ニ候事、

（常憲院殿御實紀二）延寶八年閏八月六日、今日より評定所式日に、御側牧野備後守成貞出座せしめらる、

（常憲院殿御實紀三十）元祿七年十一月廿五日、評定所式日に、御側用人柳澤出羽守保明、始て出座せしめらる、

○按ズルニ、此後間部詮房、田沼意次等モ側用人ニテ評定所ヘ列席シタリ、

（文昭院殿御實紀三）寶永六年七月四日、けふより御側森川出羽守俊胤、評定所に出座すべしと命せられ、はじめてまかる、これも古は御側一人づゝ出座せしに、先代よりとゞめられしを復古せられしなり、

（官中秘策十）諸御役人之事

一評定所留役　三百五拾俵高　御役料百俵

（評定所格例）寺社奉行町奉行支配留役之事

寛政八辰年四月廿九日

一評定所留役之儀、何れも出役之義ニ候間、一同評定所留役与相唱可申候、御勘定より之出役、幷寺社奉行町奉行支配吟味物調役より之出役、何れも勤方は各持前之通ニ而、評定所留役之義は、以來右三場所之出役たるべく候、

一評定所留役に而之順は、右出役被仰付候、新古に而座順を定、評席其外出役ニ付候義は、打込候而順立可致候、

但寺社奉行支配之内組頭格は、評定所留役組頭之次与相達置候、年始其外之順は右之通に而、評定所留役之方ニ而は留役一同之通、御役之新古に而上座可仕事、

右之通被仰付候間、被得其意可被申渡候、〇又見天保集成絲綸錄

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御勘定組頭〇中略 寶曆八年戊寅十二月二日、始置評定所留役、組頭一員、佐久間忠兵衛、〇中略

御勘定〇中略 元文三年戊午三月廿日、評定所留役五人〇中略 同三年庚申五月十九日、增留役三員、合八員 寶曆三年癸酉七月廿六日、定留役七員同助四員、合十一員留役助、此時よりはじまる、 同五年乙亥三月十六日、留役八員、助三員、合十一員

〔評定所張紙〕寶曆八寅年十一月廿二日相摸守殿御渡候御書付

評定所留役八人、助三人有之候處、向後留役幷助役共、二人ツヽ相增、都合拾五人被仰付、助役之もの江も、御扶持方十人扶持ツヽ、可被下候事、

〔評定所留役勘定勤方〕式日立合內寄合出剋限之事

一式日毎月　二日　十一日　廿一日

奉行衆卯半剋揃ニ付、六ツ時評定所江出候事、

一立合毎月　四日　十三日　廿五日

奉行衆五ッ半時揃ニ付、五時評定所江出候事、

一内寄合毎月　六日　十八日　廿七日

奉行衆四時揃故、五ッ半時、御月番宅江出候事、○中略

一寺社奉行衆、町奉行衆江罷越、吹聽申候事、

一式日立合、其節濟口之留を認候事、

金公事、四日廿一日は三人、其外ハ貳人宛ニ而、古格見合認候事、

一代ル々々評席江出相詰候、三四人ヅヽ、

一銘々奉行之落着ものは、留を銘々認候、尤月番之手傳いたし候を専要ニいたし候古格之事、

月番之心得

一月番前月晦日ニ、星順奉り帳、其外引渡もの受取、

一朔日、前月之留を讀候事、

但十一月ゟ式日立合、毎ニ卽日讀之事、

一同日、同役御役扶持、御用扶持、御定扶持之手形取集、組頭押切を取、

一月番書認、同役江配候事、

一壹ケ月式日立合、銘々請持之當番割いたし認置候事、

一三奉行衆ゟ、御用日帳外之銘書被遣候間、五枚ヅヽ認、

一御出座ニ付、訴訟公事之帳上り、幷御扣とも町奉行月番ゟ被相渡候間、町與力詰所江參り申談じ、公事人共呼出、銘書江領主地頭、國郡村幷名前、公事之趣意、伺出入ニ候哉相尋、突合候而町奉行衆江返上、○中略

一都而當日も留を重ね候ニ裁許之留を奉行順にいたし、濟口之留を同樣にいたし、熟談破談之留、是又奉行順にいたし、初公事之銘書、奉行順ニいたし、其次江訴訟之留書を奉行順ニいたし、表紙を附、假とぢいたし、留入と申袋江入置、○中略

一燒捨封物は、寺社奉行衆ゟ御目付江渡、燒捨、御附札に而下り候訴狀は、腰掛ニ而町同心訴訟入之名前を呼、罷在候得ば呼入、月番三奉行衆御目付立合、燒捨申渡、請證文取之、○中略

一諸御書付、御用日之延刻限遲速、奉行衆、組頭衆、御役替等之儀、廻狀遣ス、都而其外仕儀隨ニ取計、

一御殿日記之日々相改、御吟味願、御差圖振取計、都而下り物、評議物、夫々銘書附出、且吟味伺書進達、御下知書御渡裁許ものハ承附いたし、評議いたし候分ハ、其通先之懸り奉行口方へ被仰渡候段、沈ミの下ケものに而、奉帳江朱を入申候、○中略

一御代官伺相濟、口書其外書付有之、袋ニ入有之分ハ袋之銘を消、御附札何月幾日上ル、其外御下知書、何月幾日上ル、奥書何月幾日上ル奥夫々ニ書付、承帳之銘も消し、調方江遣し候積改方江達ス、○中略

一諸觸出し、月番ゟ出し候、

一年中筆墨渡し方

一忌居、病氣等斷、當日斷、

右之通ニ候得共、內譯品々ニ而、右體大通り如此、

〔諸事留書七〕寶曆九卯年二月

御勘定奉行江

公事訴訟吟味事ニ付、只今迄寺社奉行迄へは、評定所留役之者不相越候得共、今度吟味仕方相改候ニ付、以來ハ評定所へ差出候公事訴訟吟味事之節ハ、留役之者、寺社奉行宅へも罷越候樣

可被致候、尤御勘定奉行申談、一人ツヽ罷越候樣可被致候、○中略

右之通、寺社奉行へ申渡候間、得其意可被談候、

〔評定所張紙〕子○安永九年七月四日、右京大夫殿、伊豆守江御渡し、御勘定奉行江、

成瀨藤左衞門○評定所留役

組合御勘定方之取計は、御勘定所同役衆並之通ニ被心得、書役共之儀は、右に准じ、一體引受指揮可被致候、

一一人ニ而、留役衆一體之吟味物、一通りツヽ被糺候事は、手も廻り兼候間、末座之留役衆懸り之分ハ、御勝手方公事方共、一兩度も致吟味候上、懸り留役衆へ御存寄被申合、吟味決候上ニ而、伺書相談書も一覽いたし可被申候、

但古き留役衆たりとも、無遠慮存寄可被申達候、

一道中方は、是迄之通、懸りと被心得、御定書は先ヅ懸り候ニ不及候、然共御定書、能呑込不申候而は差支候間、心懸ケ得と辨可被申候、

一御用日外は、評定所へ出勤可被致事ニ候得共、御勝手方公事方共、折々朝より被參、又は評定所退散より被參、吟味物承り可被申候、宅々へ被參候節、改方衆へ談置可被申候、

右之外、都而江坂孫三郎勤役中之通、可被相心得候、

但寺社奉行衆御用類も、是迄之通相心得可被申候、

子七月

〔折たく柴の記下〕近き比ほひ、評定の人々、評定所留役人といふもの共に打任せて、訴訟の事も禁獄の者も、多くの年を歷れど事決せず、かくては世の人のため、いかにぞやあるべきといふ事共、つぶさにしるして、今よりして後、評定の衆中、訟聽かるべき事例を議し申しければ、まづ彼留役

資格　俸祿

人ども其職召放されて、公事訴訟百日を過て事決せざらむには、其事を申べき由の事等、奉行の人々に仰下されたりけり、

〔評定所格例〕評定所留役組頭之事

寛政六寅年十二月十四日

評定所留役組頭　甲斐庄武助

右年久敷御役筋出精相勤、近年別而御用多骨折候ニ付、布衣被仰付候旨、戸田采女正殿被仰渡候、

但伺之上、式日立合之節、於内座御料理被下之、

〔評定所格例〕評定所留役組頭之事

寶暦八寅年十二月二日

一明和五子年十一月、江坂孫三郎、評定所留役組頭勤役中、御役料百俵被下、其以來留役組頭は、右之通御役料被下置之、

〔評定所張紙〕評定所留役組頭御役料之儀申上候書付

評定所留役組頭　江坂孫三郎

右留役組頭は、寶暦八寅年十二月、御勘定組頭伺方相勤候野村庄助跡役、留役より佐久間忠兵衞被仰付相勤候内、並之通高三百五拾俵被下置、伺方組頭壹人相減、留役組頭可相勤旨初而被仰渡、同十三未年三月、忠兵衞は御勝手方掛り被仰付、同月四日、右孫三郎留役組頭被仰付、是迄並高之外、御役料無御座候、一體評定所は組頭一人ニ而相勤、格別骨折相勤候場所ニ付、留役其外御勘定、支配勘定、夫々之通り助相勤候もの共迄、御役扶持御役金等被下候儀ニ御座候間、可相成儀ニ御座候者、以來留役組頭江御扶持被下置候樣仕度奉願候、以上、

子十月

別紙申上候書付

御勘定組頭拾貳人之內、御役料被下候分、御殿詰組頭貳人、御役料百俵ヅヽ、御勘定之內改方、御用扶持拾人扶持ヅヽ、御勘定同五人扶持、但助之ものは、御用扶持無御座候、

御勝手方組頭貳人　御役料百俵ヅヽ　御勘定、支配勘定、御用扶持拾人扶持ヅヽ、但助之ものは、御用扶持無御座候、

御取箇方組頭三人　御役料百俵ヅヽ　御勘定、支配勘定、御用扶持拾人扶持ヅヽ、但助之ものは、御用扶持無御座候、

評定所

留役、御役扶持貳拾人扶持ヅヽ、同助、御用扶持拾人扶持ヅヽ、御勘定、支配勘定改方、御役金拾兩ヅヽ、支配勘定書物方、同拾兩ヅヽ、同助江も、金五兩被下候、

右之通御座候間、可相成儀ニ御座候者、留役組頭は、留役御役扶持ニ應じ、三拾人扶持被下置候樣仕度奉願候、以上、

(評定所格例)寶曆八寅年十二月二日

評定所留役　佐久間忠兵衞

右評定所留役組頭新規被仰付、御勘定組頭並之通、勤候內高三百五拾俵之積、御足高被下置候旨、堀田相模守殿被仰渡候、○中略

安永六酉年十一月廿八日

評定所留役組頭　江坂孫三郎

右公事方吟味役新規被仰付、御勘定吟味役並之通御足高御役料共被下、只今迄之通、評定所組

目安讀及見習

頭兼帶可相勤旨、板倉佐渡守殿被仰渡候、

一安永九子年七月四日、評定所留役より成瀨彥太郎留役組頭被仰付、江坂孫三郎義、吟味役ハ是迄之通可相勤旨、同人江松平右京大夫殿御書付御渡、

〔嘉永二年武鑑〕評定所留役御勘定組頭　燒火之間　三百五拾俵高　御役料百俵（廿俵二人フチ）松井助左衛門　（組頭格）大森善次郎

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一同（○評定所）留役御勘定　凡拾七八人　百五拾俵高、御役料貳拾人扶持、

〔吏徵別錄（下布衣以下御目見以上）〕御勘定（○中略）元文三年戊午三月廿日、評定所留役五人江、各御役扶持二十人扶持被下、（先是正德四年甲午十二月、御役扶持六人扶持充被下、○中略）同（○寶曆）八年戊寅十二月十六日、（○中略）此時より留役助へ、御役扶持十人扶持充を賜ふ、

〔嘉永二年武鑑〕同（○評定所）留役御勘定　百五拾俵高、御役料廿人扶持、內支配勘定六人百俵持扶持

木村敬藏　青山伴右衛門　本多喜八郎　吉際繁三郎　星野金吾　水野正大夫　吉田昇太郎

三宅立太郎　屋代增之助　豐田榮次郎　安間純之進　山下敬次郎　堀越十五郎　赤木唯五郎　瀧澤喜太郎　吉田雄藏　今井太郎九郎　新家鐵作

〔泰平年表（常憲公）〕元祿五年八月十二日、評定所目安讀を置る、（儒者ゟ被仰付、寶永六年に、此御役名を評定所勤役儒者と云、正德二年八月に至て是を止られ、享保三年十二月十五日、再び儒者を置る、寬政二年十二月に至て是を止らる、）

〔吏徵別錄（下布衣以下御目見以上）〕儒者　元祿五年壬申八月十二日、始置評定所目安讀、儒者ゟ出役也、寶永六年乙丑十月十二日、目安讀を改て評定所勤役儒者とす、（五人）各御役料五拾俵、後百俵、正德二年壬辰八月、廢評定所勤役、享保三年戊戌十二月十五日、再置評定所勤役、寬政二年庚戌十二月八日、廢評定所勤役、（四人、此後御右筆出役に成、）

〔寛文七年江戸鑑〕儒者衆○中略　同御目安衆

二百俵　坂井伯元　百俵　伊庭春貞　百俵　深尾春庵

〔延寶八年江戸鑑〕御目安讀衆

二百石　坂井白元　百俵　伊庭春貞　百俵　深尾春庵

○按ズルニ、泰平年表及ビ吏徴別錄ニ、元祿五年八月十二日、始テ此職ヲ置クトアレド、本書已ニ此職名ヲ掲ゲタレバ、延寶以前ヨリ此職アリシナラン、

〔寶永三年武鑑〕御儒者衆○中略　同評定所方

二百俵　深尾權左衛門　十人ふち　深尾權十郎

〔文露叢二十一〕寶永六年十月十一日、向後評定所ヘ出席ノ役名、評定所勤役ノ儒者ト被仰付、御役料五拾俵宛、庄藤左衛門、和田傳藏、安見文平、右同趣、深尾權左衛門、同權十郎、御役御免、向後御勘定ヘ相勤、

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十二月十五日、儒員桂山三郎左衛門義樹、德力十之丞良顯、秋山半藏某、この後評定所に伺候すべきむね命せられ、官糧五十俵賜ふ、

評定所番

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政二戌年十二月

評定所一座江

評定所勤役儒者、當分被差止候間、訴狀等之儀は、留役江爲讀可被申候、○又見ニ文恭院殿御實紀

〔文昭院殿御實紀三〕寶永六年七月廿九日、評定所目安讀儒員見習坂井新七郎政規、多病にして、其上學術淺陋なりとて、小普請に入らる、

〔吏徴御目見以下〕評定所番三人舊評定所留守居

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一評定所留守居三人〈同心五人ツ〉、

〔吏徵別錄〈御目見以下〉〕評定所番　萬治年中始置二員一　寛政三年辛亥月日増二一員一

〔明良帶錄〈外篇〉〕評定所番〈百俵高持扶持同心十八人宛、目支〉

評定所同心より繰上ハなし、傳奏屋敷御勘定所小役人、御目付支配無役、御臺所支配より昇る、寛永十三年以來の御役名にハ評定所を守衛す、以前ハ同心より繰上も多し、

〔張紙留〕御役所引渡も相口見廻り、風烈之節は、夜中も繁々見廻り、其外火之元入レ念候樣、文化十酉年十二月、評定所番へ被二仰渡一有レ之候、

〔天保集成絲綸錄〈七十五〉〕寛政三亥年九月

御勘定奉行江

此度傳奏屋敷番被二差止一、以來何れも持場ニ被二仰付一候、評定所番并同心共、兼相勤候樣可レ被二申渡一候、〈中略〉尤御目付相談可レ被二請取一候、平日掃除手入等之儀心附候樣可レ被レ致候、

〔吏徵〈御目見以下〉〕評定所番〈中略〉　御勘定奉行支配　百俵持扶持〈中略〉　燒火間、上下役、

〔憲教類典〈二ノ五御役〉〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內場所定高并役扶持

百俵高扶持持　評定所番

〔大概順〕御目見以下大概順

見習十人扶持　評定所番

〔寶曆集成絲綸錄〈二十四〉〕寛延二巳年七月

御勘定奉行江　評定所留守居〈三平養子〉甲斐庄大藏

右見習御奉公、精出相勤候ニ付而、御扶持方五人扶持被ㇾ下候、其段可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候

同心

〔貞享三年武鑑〕評定所同心

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無ㇾ之

一遠國御役人組附人別并御役料

評定所番　　同心拾八人

〔吏徴別錄御目見以下〕評定所同心　萬治二年己亥、初置ㇾ十員、寛政八年丙寅七月定ㇾ十五員、

〔大概順〕御目見以下大概順

十五俵二人扶持ゟ拾三俵一人扶持迄、世話役は勤金三兩、　御抱入場所　羽織袴役　評定所同心

〔吏徴御目見以下〕評定所内同心五人

〔吏徴別錄御目見以下〕評定所内同心〇中略　萬治二年己亥、初置ㇾ八員、　元文五年庚申二月廿七日、定ㇾ五員、　明和八年辛卯八月六日、十三俵一人扶持、勤金貳兩、

〔大概順〕御目見以下大概順

十三俵一人扶持、勤金二兩、　御抱入場所　羽織袴　評定所内同心

書役

〔吏徴御目見以下〕評定所書役十八人　三十俵持扶持高　勤金十兩　見習三人、六兩貳人扶持、出役十六人、御手當金六兩、　御抱場

〔吏徴別錄御目見以下〕評定所書役　寶暦九年己卯二月十五日、始置ㇾ二十員、勤金拾兩、　明和二年乙酉十一月日、初置ㇾ見習三員、給金六兩貳人扶持、　文政七年甲申年五月日、置ㇾ出役十六員、手當金六兩、

〔御張紙留上〕評定所書役

二半場と唱申候、但御譜代御抱入之治定難致ものは、跡願之節一人、御目付方にて取調有之候上、相定候筈、

〔評定所張紙〕寶暦八寅年十一月廿二日、相摸守殿御渡候御書付、

一支配勘定より、只今迄評定所へ書物方之もの出候へ共、向後は出役之人數相減、外ニ新規ニ小給之者書役可申付候間、人數等□□いたし可被申聞事、○中略

寅○寶暦八年十一月廿七日、相摸守殿江、

評定所書物方、并書役之儀、評議仕申上候書付、

伺之通可致旨被仰渡奉畏候、

寅十一月廿九日　一色周防守、細田丹波守、菅沼下野守、稲生播磨守、○以上四人、並勘定奉行、

支配勘定より、只今迄評定所へ書物方之もの出役仕候へ共、向後右出役之人數相減、外ニ新規小給之書役可被仰付候間、人數等了簡仕可申上由被仰渡候ニ付、評議仕左ニ申上候、

評定所改役　支配勘定　五人

右改役は、只今迄之通差置候積りニ御座候、

評定所書物方　支配勘定　拾人

内　調方二人、御定書掛二人、書物六人、

右書物方、此度人數相減、書面之通拾人ニ仕候積リニ御座候、

合十五人

只今迄、改方書物方助共ニ、都合廿六人御座候處、此度拾五人ニ罷成、拾一人相減申候、

右書役之儀、日々評定所、并私共前にて吟味物有之節、罷越候儀ニ御座候間、至而小給ニ而ハ續兼可申候ニ付、高三拾俵より以下之ものは持扶持を居置、三拾俵之積、御足高被下置、外勤金拾

両充被下候様仕度奉存候、尤手跡達者ニ仕候もの、御小人目付、御賄六尺、其外諸方同心等之内より被仰付候様仕度奉存候、

右評定所書物方、并書役之儀、何も評議仕候趣、書面之通御座候、以上、

戌十一月　　一色周防守、細田丹波守、菅沼下野守、稲生播磨守、

〔寶暦集成綵綸錄十六〕寶暦九卯年二月

御勘定奉行へ

御留守居市川出雲守組同心 行方庄右衛門　　御留守居番兒嶋孫七郎組同心 新源左衛門

御細工所同心 大竹粂藏　　御畳手代 遠藤忠兵衛

小普請方手代 松村藤十郎　　中村政次郎

御賄方調吟味役書役 山本市十郎　　同西丸定助勤 堀内吉大夫

御小人目付 小山新九郎　　御膳所小間遣 宮崎甚藏

表小間遣 屋代庄助　　奥六人 高貫半右衛門

定普請同心 小關文平　　御臺所中様仕丁 後藤喜太郎

右之者共、評定所書役申渡候、三拾俵より内之者は、勤候内、三拾俵之高ニ御足高被下、何茂勤金拾両宛被下候段申渡候間、被得其意、頭々可被談候、

元方御金同心元〆 柴田喜平次　　漆奉行支配油方同心 高林三次郎

御勘定所湯呑所之者 石川佐次右衛門　　在方御普請役下役 竹本幸右衛門

三谷佐一兵衛　　川嶋庄三郎

右之者共、評定所書役可被申渡候、三拾俵ゟ内之者ハ、勤候内、三拾俵高ニ御足高被下、何茂勤金拾両宛被下候間、其段も可被申渡候、

使之者

〔吏徵別錄下御目見以下〕評定所使之者　元文五年庚申二月廿七日、始置二中間四員一、明和八年辛卯八月六日、改て使之者とす、八俵一人扶持、勤金壹兩貳分、

古事類苑

官位部六十

德川氏職員九

作事奉行

作事奉行ハ、初メ作事方小奉行ト云ヒシガ如シ、寛永中始テ定役トナリテ、作事奉行ト云ヘリ、其員數一定セズ、凡ソ幕府ノ土木建築ニ於ケルヤ、大小ノ事、悉皆作事奉行ヲシテ之ヲ管セシメシガ、其後小普請奉行ヲ置キテ、其一部ヲ掌ラシメテヨリ、其職掌分レテ二途トナレリ、此他又普請奉行アリ、其初ハ臨時役ニシテ、陣營若シクハ江戸府内ニ在ル諸家ノ屋敷等ニ關スル事ヲ掌リシガ、明和五年常置ノ職ト爲リテ、道中奉行ノ所管ナル土木建築ニ關スル事ヲモ掌レリ、是ニ於テ土木建築ノ事、三所ニテ分掌ス、卽チ一工事ヲ擧グルニ際シテ、普請奉行ハ地取、石垣等ノ事ヲ掌リ、作事奉行ハ殿屋ヲ建築スル事ヲ掌リ、小普請奉行ハ繁雜ノ工事ヲ掌ルナリ、而シテ切支丹改、鐵砲改等ノ如キハ、作事奉行ノ所掌ニ屬ス、當時之ヲ下三奉行ト稱セリ、文久二年、小普請奉行ヲ廢シテ作事奉行ニ合シ、慶應三年、屋敷改ヲ廢シテ、其所掌ヲ作事奉行ニ移セリ、

作事奉行ニ屬スル諸役甚ダ多シ、今此ニハ其內ノ小細工奉行、疊奉行、材木石奉行、植木奉行、瓦奉行等ヲ錄セリ、

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數 并 組支配

一御作事奉行貳人 ○又見ニ官中秘策、吏徵一

職掌

〔享保集成絲綸錄 一〕寬文二寅年二月

先頭所被仰出之老中幷御旗本方支配之差別

御作事奉行〇中略

右者老中支配〇又見憲教類典、教令類纂、

〔常憲院殿御實紀 四十八〕元祿十六年七月廿八日、長崎奉行大島伊勢守義也、作事奉行仰付られ、これより作事方三員になる、

〔明良帶錄 後篇〕御作事奉行 二千石高、芙、老支、

専木工之事を司り、御大工頭、吟味役、下奉行の屬役を率ひて其場を修理す、御本丸西丸共、表向御座敷、御城内とも繕ひ御修復、增上寺一山御靈屋御供所、定式棟梁大工木挽諸色幷人足、其外筆墨紙、薪炭、小買物、幷御材木、取木水揚、筏組、御屋根方、幷高石垣草取、外曲輪御門の渡御櫓、大番所、御橋詰地櫓繕、溜池山王、幷火消屋敷五ヶ所、山屋敷、猿江御材木藏、駒場野の御成先御藥園、御茶屋、聖堂釋奠御用、其外御作事方定小屋、御新初、山王神田祭禮幕張人足、御普請の外御向人足、御鐵砲方渡人足、同旅人足、御城内鵜威、雪除、西丸御臺所定掃除、黑鍬代人足、御餝御用、上野御宮等也、御場所見廻り野服也、兼帶ハ宗門方也、其外御規式御成先、鶴御場、鶉御場等、遠國御用、其外見分、參州矢矧橋掛直し等也、

〔東職記聞 一〕作事奉行二人　從五位下

掌城郭及神社佛閣以下總大儀造營之職也、寬明同說、慶延略記曰、寬永九年十月、始置此職、以佐久間將監寬明實勝政夫 後河内守〇諸役人代々記、作佐久間將監直勝、 酒井因幡守忠知、神尾內記元勝 後備前守 三人被補之也、代々記曰、寬文二年二月、保田若狹守宗雪補之之時、帶吉利支丹改之事、而被令領與力六人同心三十人也、元祿十一年十二月、小出淡路守補之之時、又帶鐵砲改之事、爾來尙帶兩改之事也、

〔諸役起請文前書〕御作事奉行勤方

一御作事奉行勤方被仰付候ニ付、彌重公儀、御爲第一奉存、聊以御後闇義不仕、奉對御爲惡心を以申合、一味仕間敷候、且又相役人と中惡敷不仕、萬事不殘心底相談、私之申分不立之、御爲能方ニ付可申候、御作事方之諸役人并諸職人等不宜儀於有之者、早速御作事奉行江其趣有體ニ可申上事、

一御普請并御修復之仕方麁末無之、大工木挽手間御入用多掛り不申候樣仕、御材木等其外費成義無之樣、心之及程入念遂吟味可申候、從親類緣者知音之好、又は中惡敷輩たりといふ共、無依怙贔屓正路ニ沙汰可仕事、

一隱密ケ間敷儀見及聞及候共、毛頭他言仕間敷事、

一以御威光私之奢不仕、非義申掛間敷事、

一御用ニ掛り候面々、并町人職人其外何方よりも、金銀米錢衣類諸道具酒肴等、一切受用仕間敷候、尤馳走ケ間敷儀も請申間敷候、此段妻子召仕之者ニも、堅可申付事、

右之條々、雖爲一事於違犯者、

〔東湖隨筆上〕小普請奉行ノ職掌ハ、御作事ニ匹シタルモノニテ、何事モ御作事同樣ノ勤ナリ、唯御作事奉行ハ、芙蓉ノ間ニテ、老中支配ナル計リ、小普請奉行ハ、中古ニ置レタル御役故カ、中之間ニテ若老支配ナリ、サレドモ伺事等ハ老中ノ決ヲ直チニ執ルナリ、勤向ノ異同ヲ論ゼバ、御作事方ハ城郭等表向ヲ持、小普請方ハ奥向ヲ持ドモ、御櫓多門ノ內、小普請方持モアルユエ、一概ニハ言ヒ難シ、御靈屋向モ、上野ハ小普請方、芝ハ御作事持ナリ、御成先御用ハ、皆小普請方持ナリ、雙方ヘ入札ノ上、何レモ相互ニ持事アリ、畢竟御作事ノ權ヲ分ツ爲ニ設ラレタル職ナラント云、

〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配

一御疊奉行二人　一石奉行三人　一材木奉行三人　一樹奉行二人　一瓦奉行　一小細工奉行四人　一御大工頭二人并御被官大工アマタ　一御掃除方　一繪師十一人　一張付師　一飾屋　一鍛冶　一庭作

〔德川禁令考十六作事奉行〕支配向

切支丹宗門改同役中ヨリ一人兼帶　御材木石奉行、御大工頭、御疊奉行、植木奉行、小細工奉行、繪師、川船奉行、

〔營中御日記九〕寛永九年十月三日、職人不ㇾ殘、今日可ㇾ罷出旨、年寄中被ㇾ申渡付、西湖之間へ伺候、小十人組衆番所之前ニ並居、大炊頭、○土井利勝讃岐守、○酒井忠勝信濃守、○永井尚政丹後守、○稻葉正勝大藏少輔○青山幸成被ㇾ申渡候ハ、佐久間將監、○直勝神尾內記、○元勝酒井因幡守、○忠知御作事奉行ニ被ㇾ仰付候間、御普請之刻、御細工等、右三人ヨリ可ㇾ申付之間、可ㇾ存ㇾ其旨之由、依ㇾ上意ㇾ如ㇾ此、

〔享保集成絲綸錄一〕寛永十二亥年十一月十日

一御作事方ニ付、御用并御訴訟、將監、因幡、內記、三人ニ而、壹月宛番可ㇾ致候、○中略

寛永十二年亥十一月十日

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年二月八日、作事奉行保田若狹守宗雪、天主數考察の事を兼しめらる、

〔教令類纂二集四十五〕享保三戊戌年五月廿五日

御作事奉行方

一御本丸外廻リ、御座之間邊より表向御座敷廻り、但御座敷內ハ別紙繪圖ニ仕候、

一御臺所前之三重御櫓ゟ南之方御細工所、御鐵砲部屋、御長屋御門、中之口前御多門ゟ御玄關前御門迄、

一御風呂屋御前御多門ゟ、北之方廣敷前二重御櫓塀迄、

一御玄關前ゟ御書院番頭部屋、同所二重御櫓御多門、臺部屋御多門、下埋御門迄、

一富士見御櫓ゟ續塀上埋御門、御舞臺、御樂屋、富士見御番所、御寶藏、御數寄屋前御門、御櫓御多門塀、大奥境迄、

一中之御門より銅御門、同所大番所、大手三之御門、並ニ升形之內御多門、下乘橋張番所、同所腰掛迄、

一百人組御番所ゟ御通り御多門御櫓、蓮池喰違ひ御門、御金藏、御厩、同所御櫓御多門、蓮池御門、並ニ御門續塀、坂下御門迄、

一內櫻田御門ゟ內腰懸、大手御門續塀、三之丸喰違御門、下御勘定所、並に御堀通、

一西丸表向

但御廣敷之內、並ニ西丸ゟ山里邊迄、御作事方、小普請方、双方割合、別紙繪圖仕候、

一奥表境土戸ゟ南之方土手上塀、御長屋御門、御玄關前御門、並ニ續御多門御櫓、山里塀、紅葉山境迄

一山里御門ゟ幷塀、的場曲輪、吹上御門、獅子口、中仕切御門、大手御門迄、〇中略

上野御宮、總御佛殿、並ニ御別當本坊學頭、此外山中御修復所々社堂等、

神田橋御門　常盤橋御門　呉服橋御門　鍛冶橋御門　和田倉御門　馬場先御門　外櫻田御門　數寄屋橋御門　日比谷御門　一ッ橋御門　竹橋御門　雉子橋御門　清水御門　田安御門　半藏御門　馬場曲輪御番所　筋違橋御門　淺草御門　小石川御門　牛込御門　市ヶ谷御門　四ッ谷御門　赤坂御門　虎之御門　幸橋御門　山下御門　芝口御門　昌平橋木戸門共ニ　水道橋　赤坂喰違ひ木戸門共ニ　新シ橋木戸門共ニ　三浦壹岐守御預り御櫓　町奉行御役屋敷三ヶ所　火消御役屋敷拾ヶ所附札、是ハ前々御金御材木被レ下、手前ニ而仕候儀も有レ之候由、　本所

任免

御材木藏　同本所奉行會所同右同斷　小細工小屋　御疊小屋　山王　御宮廻り、此外御修復所之分計り聖堂、

五十三ヶ所〇中略

御修復願出候節、吟味之上可₂申付₁場所、〇中略

淺草寺　東海寺　西之久保八幡別當普門院〇中略

此外神社寺院幷ニ所々橋下水溜等之儀、前々小普請方ニて仕候處も御座候、此等之儀ハ、至₂其節₁吟味伺之上、御作事奉行小普請奉行へ割合可₂申付₁候、

〔職掌錄〕御作事奉行

御作事方定小屋は、龍口にあり、

〔享保集成絲綸錄二十九〕享保十八丑年十二月

御作事小屋〇中略

右屋敷家作之儀、柿屋根之分、有來候家作も瓦葺に致し、火除に成候様申付、二三年之內ニ不₂殘瓦葺に可₁致候、尤普請ニ取懸り候節、御入用積書付可₂出候、

右之通、向々江申渡候間、可₂被₁得₂其意₁候、

十二月

〔職掌錄〕御作事奉行

當職其始は御目付、御使番、御番衆等より臨時出役にて勤め、定員なし、定役を置るゝ事は、寛永九年壬申十月三日、佐久間將監直勝、神尾內記元勝、酒井因幡守忠知を以て始とす、

〔台德院殿御實紀三十四〕元和元年正月、この月片山源右衞門國次は致仕し、其子三七郎國家、父の原職を繼、作事方の小奉行となり、〇下略

沿革

○按ズルニ、此職、初ハ職掌錄ニ見エシ如ク、目付、使番、番衆等ノ出役ナリシガ、台德院殿御實紀ニアル如ク、作事方小奉行ト稱シテ、定役ナルモアリシガ如シ、

〔德川禁令考十六作事奉行〕作事奉行累代武鑑ニ、寛永九年十月十三日、佐久間河内守、酒井因幡守、此職ニ就ク、尋テ寛永十五年十一月、神尾備前守之ヲ命セラル、已下列員數十名ヲ擧ゲ、文久三年十二月十五日ニ任ズル岡部駿河守ニテ歇ム、

〔諸役人代々記一〕御作事奉行　二千石高

家光公御代、始而寛永九申年十月三日、御使番より、　佐久間將監直勝

同年同月同日、御書院番より、同十五寅年五月十六日、町奉行江、　酒井因幡守勝久

同年同月同日、長崎奉行より、同十七辰年三月五日、町奉行江、　神尾備前守元勝

同十五寅年十一月十一日、寄合より、寛文十戌年九月二日卒、　船越伊豫守永景

同年同月同日、御小納戸ゟ、萬治二亥年五月十五日、二千石御加增、山田奉行江、　八木但馬守宗直

同年同月同日、御書院番より、寛文三卯年十一月六日御免、　牧野織部正成常

家綱公寛文二寅年二月八日より切支丹掛り、與力六騎、同心三十人御預、同十二子年四月廿九日、依願御免、　保田若狹守宗〇宗雪

〔有司勤仕錄〕御作事奉行

一御作事方と小普請方と同所に役所有之て、其司る處品あり、御作事方は御城表向御座敷、或は御門御櫓多門、總而外曲輪之見付、增上寺等也、或は諸國之寺社修復等臨時に相勤、

一下奉行御被官、并手代等在之而支配之、

一昔ハ御作事方計に而悉司る、今は小普請奉行と分る也、

一芙蓉之間相詰る御役也、

〔德川禁令考 十六 作事奉行〕元祿十丁丑年閏二月十九日

小細工方廢止ニ付向後勤方定書

作事奉行 小幡三郎左衞門江

覺

一御作事方ニ而ハ、御當地并遠國共ニ、大立候御普請、遠國寺社共ニ、御用可承事、

一御材木方、御疊方、植木方、繪師、大工、此外有來支配之分、唯今迄之通り可仕事、

一御小納戸御用御道具、小普請奉行ニ而可仕候、破損御修復も同前之事、

一御風呂屋方御道具品々、并御修復同前之事、

一表御膳所、并御臺所御賄方御道具品々、破損御修復同前之事、

一表御座敷御用御道具品々同前之事、

一大廣間遠侍、御改、御掃除御修復、共ニ同前之事、

一御數寄屋、御水屋、度々取立、并同所破損御修復共ニ同前之事、

一大奧方御道具品々、其外破損御修復、并部屋方道具品々、且又破損修復同前之事、

一方々御番所御道具品々、新規御修復共ニ同前之事、

一二丸御道具品々、御鳥籠破損御修復同前之事、

一西丸神田御普請小屋、品川御殿、逢坂御用屋敷、四谷御用屋敷、評定所御用道具同前之事、

一五月より八月迄、所々御宮御佛殿御掃除改共ニ同前之事、

一增上寺御裝束所改、破損御修復共ニ同前之事、

一植木方黑鍬方御掃除方御道具同前之事、

一小石川御殿御道具、并御放鳥之籠度々取立新規御修復共ニ同前之事、

一山本藤右衛門、左原十左衛門方御鳥籠、井ゆたん新規御修復共ニ同前之事、
一方々下馬札、高札御堀札共ニ同前之事、
一地割方御用之地杭同前之事、
一御厩方御道具同前之事、
一御城中御殿唯今迄小細工方より仕來候御普請御修復共ニ、向後不ㇾ殘同前之事、
一御材木藏御用之道具ハ、御材木奉行方ニ而可ㇾ仕事、
一御疊小屋少々修復、井御疊之御用ハ、御疊奉行可ㇾ仕事、
一小細工方ニ有ㇾ之儀、向後相止可ㇾ申事、
附小細工小屋も相止勿論、小細工方役人も相止可ㇾ申事、
右之通相極候間、向後可ㇾ被ㇾ守ㇾ此旨ㇾ候、以上、
〔德川禁令考十六作事奉行〕文久二壬戌年六月十六日
改正支配向ノ儀ニ付達書
御作事奉行江
此度御改革被ㇾ仰出ㇾ候ニ付、御普請奉行、小普請奉行、不ㇾ殘御役御免勤仕並被ㇾ仰付ㇾ跡役者不ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候間、小普請方御普請方之者共一同引受、支配向同樣可ㇾ被ㇾ取計ㇾ候、尤小普請方御普請方之者共江も、其段可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、
六月
〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年二月、屋敷改役名ヲ廢スニ就キ、作事奉行ヲシテ兼務セシム、
周防守殿渡書付　是迄屋敷改にて取扱候御用向、向後御作事奉行にて取扱候に付、只今迄屋敷改へ申立候願伺、其外都て御普請方役所へ可ㇾ被ㇾ申立ㇾ候、

敍位

〔憲廟實錄二十四〕元祿十二年二月廿七日、敍爵二人、作事奉行小幡三郎左衞門重直、備中守に任す、
○按ズルニ、吏徵別錄ニ、寶永七年庚寅十二月十八日、諸大夫トアリテ、作事奉行ノ敍爵ヲ以テ、此時ニ始マルトシタレド、憲廟實錄ニ據レバ、其以前ニアリシナリ、

待遇

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月
新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、○中略
一芙蓉間○中略　御作事奉行○又見憲敎類典

〔憲敎類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年
一御臺所ニ而、御料理給候衆、
上之間○中略　御作事奉行

俸祿

〔憲敎類典二ノ五御役〕寬文六丙午年七月廿一日
一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、○中略
一七百俵　御作事奉行

〔憲廟實錄四〕天和二年四月廿一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略、作事奉行○中略七百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略作事、普請、槍の奉行、持弓筒頭二千石以下は三百俵、○下略

〔文露叢九〕寶永三年十二月廿五日、御役扶持五十人扶持、御作事奉行　曲淵越前守

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日
貳千石ゟ內は、貳千石之高に可被成下候、　御作事奉行○又見敎令類纂

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺 ○中略

一金貳千兩宛　御留守居並、御勘定奉行並、御作事奉行、

高四千石以上之者江ハ半減

但御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不被下

千俵以上之者江ハ半減 ○中略

右之通、御役金月割を以被下候、渡方之儀は、三月六月九月十二月、右四度に相渡ニ而可有之候、請取方等之義ハ、御勘定奉行可被談候事、

作事方吟味役

〔明良帶錄 續編〕御作事方吟味役 御勘定吟味役より兼役

前に記るす諸品御買上の品吟味致して、上掛へ申達する役なり、

〔官中秘策 十四〕西對　攝家親王諸公家諸門主衆諸大名諸士於御城座席相定る事

燒火之間

一百俵高御役料十人扶持　御作事方吟味役

作事奉行支配組頭

〔文久三年武鑑〕御作事奉行支配組頭　御納戸前廊下　二百俵高　御役扶持廿人扶持

〔文久紀事 六〕文久二年九月七日、御同人○松平出雲守御渡

御目付江

一御作事奉行支配組頭席順、御材木石奉行之次、吹上奉行之上と可被心得候、尤持席之者は、格式等是迄之通たるべく候、場所ニ而定人數等之儀は、追而相達ニ而可有之候、

〔泰平年表 七編 二〕元治元年四月六日、御作事奉行支配組頭 秋山杢兵衛、來年四月、於日光山御法會御用被仰付、右被申渡之、

作事方被官組頭

〔甘露叢 四十六〕元祿三年十月七日、御役替被仰付、〇中略新規御被官組頭平被官ヨリ片山三七郎、同鈴木與次郎、

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無之

平日御役所席、泊御番御夜詰之內席、〇中略御納戸口〇中略御被官組頭

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書〇中略御臺所三之間線頰〇中略御被官組頭

被官

〔吏徵 御目見以下〕御被官十六人、助四人、　御大工頭支配　五十俵持扶持　見習金三兩　書付渡、上下役、

〔大概順〕御目見以下大概順

五拾俵高持ふち　役上下　白衣勤　二半場　作事奉行支配　御作事方御被官

〔職掌錄〕御作事奉行

御作事下奉行八人、百俵高、御扶持十人扶持、此外御被官以下を支配す、

〔慶應元年武鑑〕御作事奉行〇中略

同御被官　五十俵高　御役扶持五人扶持〇人名略

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書〇中略御臺所三之間線頰〇中略御被官

〔憲教類典 二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內場所定高并役扶持〇中略

五拾俵高扶持持　御被官

作事下奉行職員

〔吏徵別錄 下 布衣以下御目見以上〕御作事下奉行　享保三年戊戌三月廿六日、始置、五員、役扶持十人

扶持、八木友右衛門、笹瀬杢左衛門、米津昌八郎、

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一同(○御作事)下奉行 百俵高 御役料十人扶持 八人

〔吏徵 上〕御目見以上 御作事下奉行八人 奉行支配 燒火間緣頰 百俵高 御役扶持十人扶持 ○中略

享保三年戊戌三月廿六日始置

職掌

〔明良帶錄 續篇〕御作事下奉行 作支 百俵高、御役扶持十人扶持、納戸、

一代御目見の場にて、御作事方御普請、幷人足御材木石等之事まで立合改るなり、

〔憲教類典 二ノ八 御作事小普請〕年號月日無之

御普請場高札 條々

一下奉行御被官幷諸品之棟梁申付を少茂相背べからず、但人足又は諸職人相撫剋限は可為六時、退散は下奉行可任差圖事、

一御材木遣所念入べし、下奉行御被官之指圖なくして、長木切捨申間敷事、

一釘鐵萬金物遣所、下奉行御被官差圖を請、不入所に遣間敷事、○中略

寅七月廿一日 四郎五郎 太左衛門

待遇

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書 ○中略 御納戸前廊下 ○中略 御作事方下奉行 ○又見憲教類典

〔天明集成絲綸錄 一〕天明七未年六月

當時殿中席書 ○中略 燒火之間前廊下 ○中略 御作事下奉行

俸祿

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候は

ば、御足米願申出間敷候、

右之趣向々江可被達候、○中略

百俵高　持扶持之儀　但御役扶持ハ只今迄之通○中略　御作事方下奉行

右之通増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔憲教類典 御役二ノ五〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候内御足高并御役料定

百俵高　御扶持十人扶持　小普請方改役 御作事下奉行

勤方

〔吏徴 御目見以上上〕御作事下奉行八人○中略　勤方二人、十人扶持、　寛政元年己酉二月廿二日始置

作事方勘定

〔憲教類典 御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御作事下奉行　勘定役廿三人○下略

〔吏徴 御目見以下下〕御作事方勘定役廿二人　持高　見習御手當金貳兩貳分

〔憲教類典 衣服三ノ三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿 西尾隱岐守殿 御渡○中略　御作事方 勘定役○中略

右之分、向後熨斗目白帷子、一切着用仕間敷候、

小役

〔憲教類典 御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御作事下奉行　小役者六人

〔吏徴 御目見以下下〕御作事方小役九人 御作事奉行支配　貳拾俵貳人扶持　役扶持三人扶持　見習人御

手當金貳兩　御抱場

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〇中略

書役

御作事下奉行　書役七人

〔吏徵下御目見以下〕御作事方書役七人　貳拾俵持扶持高　見習人御手當金貳兩　出役壹人貳人扶持　御抱場

〔憲教類典御役二ノ五〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

調役

役扶持五人扶持　御作事方調役

手代

〔吏徵下御目見以下〕御作事方手代十五人　三十俵貳人扶持高　見習御手當金貳兩　出役九人、壹人扶持、御抱場　町屋敷拜領沽券金五十五兩

定普請同心組頭

〔吏徵下御目見以下〕御作事定普請同心七十五人　持高　組頭役米十俵　出役廿五人、一人扶持、御譜代場

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政元酉年十一月

御勘定奉行江

一定普請同心組頭之儀、是迄役給も無之儀ニ付、以來壹人江拾俵ツヽ、爲役給右減高之內を以被下候、〇中略

右之通、御作事奉行江申渡候間、可被得其意候、

十一月

定普請同心

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

疊奉行

一諸國御役人組附人別并御役料〇中略

御作事下奉行　　定普請同心七十九人

〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政元酉年十一月

御勘定奉行江

御作事方定普請同心之儀、是迄定人數七拾九人ニ候處、以來七拾壹人ニ相定、八人相減可被申候、〇中略

一定式諸場所相勤候定普請同心共江、右減高殘り三拾貳俵と六人扶持を以、相應ニ割符いたし相渡爲相勤候樣可被致候、

右之通、御作事奉行江申渡候間、可被得其意候、

十一月

〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配

一御疊奉行二人

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御疊奉行　三人役料七人扶持〇又見官中秘策、吏徵、

〔吏徵別錄下〕布衣以下御目見以上 御疊奉行　寛永九年〇九年一本作十一年壬申十月八日、始置一員、柴村左源太、元祿九年丙午十一月十九日、加入一員、小普請ゟ幡野市郎兵衞、是より三人ニ成、　寛延元年戊辰十一月五日、御役扶持十五人扶持、　寛政三年辛亥十二月十日、百俵高、

〔明良帶錄續集〕御疊奉行百俵高、御役扶持十五人扶持、焼、手代二十人ヅ、作支

御作事奉行支配にて、御疊御座敷向、并諸役所疊表替、并御疊藏より新規替、疊表床の吟味をする、御幕奉行よりも至る、御入用場といふ、是經昇する處也、御目見以下よりも以上へ昇る處、何れも

小高の人也、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年十月八日、柴村左源太長次、疊奉行になる、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

平日御役所席泊御番御夜詰之内席○中略　桔梗之間○中略　御疊奉行　下ケ札　泊不相勤候

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所三之間○中略　御疊奉行○中略

右之分、於此所御料理可被下候、當番之外可爲無用、但御用之時は、御目付江可相斷者也、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書○中略　燒火之間○中略　御疊奉行

〔官中秘策二十五〕諸御役人增高等之分類

一百俵高　御役扶持十五人扶持　疊奉行三人○又見ニ吏徵

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續粟候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

高之多少無構　御役扶持七人扶持　御疊奉行○中略

右之通御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

御勘定奉行江

疊手代組頭

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政四子年七月

御疊方手代組頭明キ有之ニ付、世話役之者共打込、御用向取扱候樣可被申渡候、○中略　尤組頭之

儀、向後は減切ニ相成候間、可レ被レ得二其意一候、

右之通、御作事奉行江申渡候間、可レ被レ得二其意一候、

〔憲敎類典 衣服 三ノ三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日

木多中務大輔殿 西尾隱岐守殿 御渡〇中略

御畳方手代組頭　同世話役〇中略

右之分、向後熨斗目白帷子、一切着用仕間敷候、

畳手代世話役

〔吏徵 御目見以下〕御畳方手代廿人〇中略　世話役三人三人扶持

〔天保集成絲綸錄 八十六〕寛政四子年七月

御勘定奉行江

御畳方手代組頭明キ有之ニ付、世話役之者共打込、御用向取扱候様可レ被二申渡一候、右世話役三人江御役扶持壹人扶持ヅヽ被レ下候間、其段も可レ被二申渡一候、〇中略

右之通御作事奉行江申渡候間、可レ被レ得二其意一候、

畳手代

〔官中秘策 二十五〕御畳奉行三人、手代二十人ヅヽ、〇又見二憲敎類典、吏徵一、

〔大概順〕御目見以下大概順

御抱入　御畳手代

貳拾俵貳人扶持 同斷(組頭)役扶持五人扶持、世話役者貳人扶持、

〔憲敎類典 御抱席 二ノ十四〕寳暦五乙亥年九月廿四日

御譜代幷御抱場所書付〇中略

前々ゟ御譜代ニ而無レ之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御畳奉行 手代 六尺

畳同心

〔大猷院殿御實紀 二十三〕寛永十年、此とし畳奉行柴村一郎右衛門正次に同心二十人、井上外記正

石奉行

繼に十人あづけられ、○下略

〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配

一石奉行三人

〔延寶八年江戶鑑〕御石奉行

五百石　藤川庄二郞殿　三百石　中嶋孫兵衞殿　四百石　朝比奈彥右衞門殿

〔大猷院殿御實紀四十四〕寬永十七年五月廿一日、今度本城搆造不日に成功し、御感の旨をつたへられ、○中略石奉行石野六左衞門廣吉○中略金あるは三枚あるは貳枚たまひ、○下略

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付面、諸士着座之席、以₂壁書₁被₂仰出₁之、所謂、○中略

一御闘之間、北ノ二之間○中略　石奉行

〔甘露叢四十〕元祿二年閏正月三日、秋元但馬守宅ニテ、御役被₂召上₁輩、(中略)石奉行　小笠原彌左衞門、太田源兵衞、依田新八、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年閏正月三日、この日より○中略材木奉行は、石奉行を兼べき旨命せらる、

材木奉行

〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配

一材木奉行三人

〔延寶八年江戶鑑〕御材木奉行　同心十五人ヅヽ、手つだい三人ヅヽ、

三百石　美濃部與藤次殿　四百石　依田小隼人殿　四百石　小林六郞左衞門殿

〔大猷院殿御實紀十五〕寬永七年正月、是月材木奉行宮崎半兵衞重次子、助右衞門重昌召出され、○中略大番にいる、

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年五月廿一日、今度本城搆造不日に成功し、御感の旨をつたへられ、〇中略材木奉行美濃部與惣次茂勝、中根七左衛門貞次、永井淸兵衛某、〇中略金あるは三枚、あるは貳枚たまひ、〇下略

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年閏正月三日、材木奉行は石奉行を兼べき旨命せらる、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書〇中略　御臺所三之間〇中略　御材木奉行〇中略

右之分、於此所御料理可被下候、當番之外可爲無用、但御用之時は、御目付江可相斷者也、

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

一躑躅之間北之二之間〇中略

御材木奉行

材木奉行添役

〔甘露叢五十二〕元祿七年八月廿四日、御材木奉行添役被仰付、御勘定ヨリ荻野與五右衛門、志村長兵衛、歩行目付佐藤權兵衛、矢田部仁右衛門、

材木方改役

〔吏徵御目見以下〕御材木方改役一人　奉行支配　五十俵三人扶持高　書付渡、上下役、　寛政五年癸丑正月廿五日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕御材木方改役　寛政二年庚戌九月十九日、始置御材木改方假役五員、役扶持五人扶持、格式は御普請役並、元〆手代之上ニ可罷在旨達之、　同五年癸丑正月廿五日、始置當役、御被官格、五十俵三人扶持高、

〔大概順〕御目見以下大概順

同高〇五十俵三人フチ　御抱官格　御抱入場所　役上下　白衣勤　御材木改役

材木方改役下役

〔吏徵御目見以下〕御材木方改役下役一人　三拾俵貳人扶持高　御抱場

材木石奉行

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年閏正月三日、材木奉行二人、石奉行三人、〇中略ともに奉職無狀とて職うばはれ、小普請に貶さる、〇中略この日より、〇中略材木奉行は石奉行を兼べき旨命せらる、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御材木石奉行　正保四年丁亥十一月十四日、御材木奉行の名あり、寬文七年丁未九月、御材木藏制札立、天和二年壬戌十二月廿三日、谷藏材木藏延燒、此後猿江江移さる、歟、元祿二年己巳閏正月三日、御材木奉行石奉行兼勤、享保二年丁酉二月廿二日、若年寄支配、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年二月廿二日、材木石奉行幷ニ畫工等、この後少老の隸下に屬せらる、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　御材木石奉行

〔官中秘策二十五〕諸御役人增高等之分類

一貳百石高　御役料　百俵　御材木石奉行

材木石奉行手代元〆

〔吏徵御目見以下〕御材木石奉行手代八人〇中略　元〆貳人　三拾五俵三人扶持　同助一人勤金貳兩

〔吏徵別錄下御目見以下〕御材木石奉行手代　寬政五年癸丑正月廿五日、元〆役五俵一人扶持充足米被下、

材木石奉行手代

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御材木幷石奉行　四人〇中略　手代十四人

〔吏徵御目見以下〕御材木石奉行手代八人　三拾俵貳人扶持高〇中略　御雇手代五人、五人扶持、御抱場

材木石奉行手代助

材木石奉行同心組頭

材木石奉行同心

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政五丑年正月

　御勘定奉行江

御材木藏、近來何れも出精被相勤、格別御取締も宜相成候得共、猶永續之ため、左之通御改正被
仰出候、

一是迄、手代、元〆、平手代同樣之御宛行被下、同心之儀も、組頭平同心御宛行之差引無之ニ付、以來手代元〆は五俵壹人扶持ツヽ、同心組頭は五俵ツヽ、御足米可被下候、〇中略

一手代貳人、同心貳人、當時定人數より相減有之由候得共、右體御手當等も被下候上は、以來右四人は減切ニ致し、一同出精相勤候樣可被申渡候事、

右之通、御材木石奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶曆五乙亥年九月廿四日

　御譜代并御抱場所書付〇中略

前々ゟ御譜代ニ而無之と相定取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

　御材木石奉行手代

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵貳人扶持　御抱入　白衣　御材木石奉行手代

〔吏徵御目見以下〕御材木石奉行手代八人〇中略　同助一人　勤金貳兩

〔吏徵御目見以下〕御材木石奉行同心三十三人　十五俵一人扶持高　組頭三人、廿俵一人扶持、

御雇同心六人、一人扶持、　御抱場　年月日始置

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政五丑年正月

　御勘定奉行江

一同心組頭之内壹人、平同心十六人、是迄懸り役申付置、重立御用向爲取扱候由、右之もの江も勵之ためにも候間、以來組頭江三百疋、同心十六人江貳百疋ツヽ、可被下候事、〇中略

右之通、御材木石奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付〇中略

前々ゟ御譜代に而無之と相定取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御材木石奉行(中略)同心

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政五丑年正月

御勘定奉行江

御材木藏、近來何れも出精被相勤、格別御取締も宜相成候得共、猶永續之ため、左之通御改正被仰出候、

一是迄手代、元〆、平手代同樣之御宛行被下、同心之儀も、組頭平同心御宛行之差引無之ニ付、以來〇中略同心組頭は五俵ツヽ御足米可被下候、尤右之内より、人物相撰申出候ば、品により御取立にも被仰付、且改役名目之者も、可被仰付候事、

但去ル戌年、同心組頭病氣差合等之節、平同心之内より組頭助申渡、今以組頭ニ准じ相勤罷在候由、右之もの江も、以來金五百疋ツヽ差遣、此上彌出精いたし候はゞ、組頭明有之節は、本役ニも申付、追而は助之者申付候儀は、無用ニ可被致候、

一同心組頭之内壹人、平同心十六人、是迄懸り役申付置、重立御用向爲取扱候由、右之もの江も、勵之ためにも候間、以來組頭江三百疋、同心十六人江貳百疋ツヽ、可被下候事、〇中略

右之通、御材木石奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配
一御材木奉行　三人〔中略〕同心五十人 ○又見二官中秘策一
〔萬天日錄 十四〕御作事奉行支配
一樹奉行二人
〔延寶八年江戸鑑〕御樹木奉行
百俵五人ふち　品川八郎左衞門殿　百俵五人ふち　增井彌右衞門殿
〔正德六年武鑑〕御植木奉行
水野三右衞門　薗部善左衞門　同心十五人
〔明良帶錄 續編〕植木奉行
諸向御入人有レ之、御徒目付よりも經昇す、諸植木方吟味方を司る、御作事奉行支配也、百俵高、同心十五人、
〔吏徵附錄 慶應〕植木奉行
闕所奉行上席　御作事奉行支配　百俵高　手代十五人　同心五十一人　寬政三年辛亥九月七日廢
〔憲敎類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日
御目見以下役儀勤之内場所定高并役扶持〇中略
同斷〇百俵高 扶持持　植木奉行
〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月
當時殿中席書〇中略　御臺所前廊下〇中略　植木奉行
〔憲敎類典 三ノ二十六 殿中〕年號月日無レ之、

植木奉行同心

御料理之席書○中略　御臺所三之間繰類○中略　植木奉行

〔憲教類典二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御植木奉行　同心五十一人

〔憲教類典二ノ十四 御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付○中略

前々ゟ御譜代に而無之と相定取扱來候場所、左之通御座候、○中略

植木奉行同心

瓦奉行

〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配

一瓦奉行

〔大猷院殿御實紀四十四〕寬永十七年五月廿一日、今度本城構造不日に成功し、御感の旨をつたへられ、○中略　瓦奉行木部藤左衛門直春、○中略　金あるは三枚、あるは貳枚たまひ、○下略

〔萬天日錄十四〕殿中坐席御定之次第

一燒火之間　瓦奉行

小細工奉行

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一小細工奉行　貳人

〔大猷院殿御實紀七十九〕慶安三年十一月廿日、後閣構造成功せしかば、○中略　小細工頭、黑鍬頭、諸工人、時服銀かづけらるゝ事差あり、

〔御當家令條二十六〕一小細工方御用之儀、土井能登守、永井伊賀守、板倉筑後守、松平民部少輔、森川下総守、并四人、御留主居衆、御目付申渡於有之は、旨越承屆可申付之候、其外誰人申渡といふ共、

右之面々江相斷、差圖有之樣ニと及挨拶、一切不可仕、但品ニより、御作事奉行江申伺之可任其意事、

一御城外之儀、一切可爲無用事、

一棟建之御作事之分は不可仕、但不叶子細於有之は、御作事奉行江申伺之可任差圖事、

一御急之御用之由於申渡有之は、互と承糺可申付、遲々不苦儀に存候におゐては、御作事奉行江相伺之可隨其儀事、

一御作事其外入用銀、高十貫目餘ニ及ぶ御普請は、於小細工は不可仕事、

一小細工方に入し諸國直段相究候儀、小普請奉行中承合立合、御作事奉行得差圖可究事、

一毎年遂結解、請帳御勘定所江可差上事、

右可相守此旨、若於令違背は可爲越度者也、

寛文六年八月朔日　老中連判

小細工奉行衆

〔有德院殿御實紀十一〕享保五年九月廿七日、小細工奉行野田甚五兵衛古武、河野半兵衛某も職ゆるされ、小普請に入らる、これ奉行のこひによれりとぞ、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、○中略

廊下一之間○中略

小細工頭

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所三之間緣頰○中略　小細工奉行

小細工方手代

大工頭

〔延寶六年江戸鑑〕御小細工方頭　百俵五人扶持ヅヽ、御役料十人扶持ヅヽ、
三百俵川合平大夫　二百俵天野傳八郎　五百俵須田市兵衞　三百俵立石平右衞門
〔貞享三年武鑑〕御小細工頭　手代四人ヅヽ
〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配
一小細工奉行　貳人〇中略手代五人ヅヽ、（又見二吏徴別錄一）
〔萬天日錄十四〕御作事奉行支配
一御大工頭二人
〔官中秘策二十五〕諸御役人增高等之分類
一貳百俵高、御役料二十人扶持、　御作事方大工頭二人
〔憲教類典三ノ二十六〕年號月日無之
平日御役所席、泊御番、御夜詰之内席、〇中略　御納戸口　御大工頭
〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年五月廿一日、今度本城構造不日に成功し、御感の旨をつたへられ、〇中略大工頭木原杢允義久、銀百枚、鈴木兵九郎、銀五十枚、その外諸工人へも銀若干かづけらる、
〇按ズルニ、此文ニ據レバ、吏徴別錄ニ此職ヲ元祿三年庚午十月七日始置トアルハ誤リナリ、
〔天保集成絲綸錄七十四〕寛政元酉年十一月
　御勘定奉行江
御作事方定普請同心之儀、是迄定人數七拾九人ニ候處、以來七拾壹人ニ相定、八人相減可被申候、
一御大工頭内抱使役之儀、家來ニ而間ニ合可申旨申聞候得共、是迄四人有之候儀ニ茂候間、不減

高之內を以、拾貳俵壹人扶持充、二人分被下候間、使役一人ヅヽ、定人數之外、自分ニ而內抱いたし候樣可被申渡候、○中略

右之通、御作事奉行江申渡候間、可被得其意候、

十一月

〔貞享五年武鑑〕御大工頭

京都　五百石中井主水

〔明良帶錄世職篇〕御大工頭

京都住居、中井主水、規矩準繩を以陰陽之曲尺を定め、水盛水繩にて城取御所向宮室等、御藍大橋いづれも定あり、棟上式法都て居宅は水の緣をとり、蝦股波流鴨居何れも水之緣也、古實を以子孫代々世職たり、

〔吏徵附錄世職篇〕中井岡次郎京都御大工頭

御作事奉行支配　高五百石　御役扶持廿人扶持　二條御藏奉行格　京都在住　御暇時服貳

元祿十一年戊寅十一月七日以來代々役

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以壁書被仰出之所謂、○中略

一御納戶之前緣頰○中略　中井主水

〔憲廟實錄二十三〕元祿十一年十一月七日、京都大工頭中井主水、刀を帶することを許さる、

〔翁草四十八〕一御大工頭中井主水事、以前は帶刀不成、馬は御免ゆへ、一刀乘馬にて出勤す、○中略其後主水は帶刀御免、御目見以下の士分に成、延享の頃ゟ、故有て御目見以上に准せられ、御代官の次に列す、○中略又中井主水下に、御扶持人棟梁と云者三人有、各由緒の者共なれ共、常帶刀にも非、

漸御用帶刀御免にて、町棟梁の上に立、御普請御用を勤む、町棟梁は作料を下され、此三人は役扶持を下さる、町棟梁と云は、昔和州法隆寺より京都江相詰て、主水役所を勤む、

濱普請方大工頭

〔文昭院殿御實紀七〕寶永七年九月六日、濱普請方大工頭各二人を置て、作事奉行の所屬たらしむ、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年二月廿二日、濱殿の普請方大工頭は、濱殿の事つかさどる目付の隷下に屬す、

作事方手大工組頭同小頭

〔吏徵御目見以下〕御作事方御手大工三十七人〇中略 組頭貳人、役切米五俵、役扶持一人扶持、

〔吏徵別錄御目見以下〕御作事方御手大工 寬文三年癸卯八月十九日、御手大工小頭江御作事方大工棟梁より二人被仰付、三十五俵三人扶持充、〇中略 被下之、

作事方手大工世話役

〔吏徵御目見以下〕御作事方御手大工三十七人〇中略 世話役人、役扶持一人扶持、

作事方手大工

〔吏徵御目見以下〕御作事方御手大工三十七人 三十俵持扶持高 道具代金壹兩〇中略 御掃場寬文三年癸卯八月十九日始置、

〔吏徵別錄御目見以下〕御作事方御手大工 寬文三年癸卯八月十九日、〇中略 御手大工江町大工より二十三人、三十俵二人扶持充被下之、 享保三年戊戌十一月十八日、御作事奉行支配、只今迄御細工頭支配、

大工棟梁

〔東武實錄八〕元和八年五月、是月江戶御本城經營、御表方奉行土井大炊頭利勝、大工棟梁中井大和、奥方ハ奉行酒井雅樂頭忠世、棟梁鈴木近江、

〔正德四年武鑑〕御大工棟梁

二百俵鶴飛驒　百石柏木土佐　三人扶持村松淡路　百石坪內大隅　百石溝口備中　十人ふち大谷出雲　百石依田伊豫　十人ふち小林阿波　百石甲良豐前　柏木因幡　辻內和泉

〔天明七年武鑑〕御作事方大棟梁〇〇〇

百俵甲良筑前　百石平内大隅　百俵辻内吉五郎　石丸讃岐

〇按ズルニ、大工棟梁ノ内、分レテ作事方大棟梁、小普請方大工棟梁トナリシナリ、安永ノ武鑑ニハ未ダ此名見エザレバ、天明中分割セシナランヵ、尚ホ小普請奉行篇、小普請方大工棟梁條ヲ參看スベシ、

〔享保通鑑 二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺

一大工棟梁〇中略

右之輩、向後熨斗目、幷七夕八朔白帷子、一切堅着用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、

戌七月

〇又見憲教類典、有徳院殿御實紀、

京都大工棟梁

〔享保十八年武鑑〕御大工京都棟梁

二百石　辨慶小左衛門　百五拾俵　矢倉久右衛門　百俵　池上五郎右衛門　塚本石見

大鋸棟梁

〔明和八年武鑑〕御大鋸棟梁

御切米三十俵櫻井新兵衛　同石山嘉左衛門　同櫻井金三郎　同田所紋太郎　御切米四十俵

佐野源藏

飾師棟梁

〔享保十八年武鑑〕御飾師棟梁

百石　體阿彌周防　百石　松井丹後　二十人ふち　體阿彌山城　五人ふち　丹阿彌出雲

作事方庭作

〔吏徴附錄 世職〕鎌田庭雲御庭作

御作事奉行支配　高十人扶持　年月日以來代々役

〔延寶八年江戸鑑〕御庭作り

三百俵　山本道句　五十俵　同道雲　鎌田貞雲

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日
御目見以下役儀勤之內場所定高井役扶持〇中略
拾人扶持　御庭方　鎌田庭雲

作事方定小屋門番

〔吏徵下御目見以下〕御作事方定小屋御門番九人　三十俵貳人扶持高　出役一人扶持　御抱場

普請奉行

職員

普請奉行ハ、慶長中既ニ其名アリテ、或ハ總普請奉行トモ稱ス、其職掌ハ既ニ作事奉行篇ニ云ヘリ、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數井組支配
一御普請奉行　貳人〇又見ニ官中秘策、職掌錄、吏徵、

職掌

〔有司勤仕錄〕御普請奉行
一是は御城石垣普請、地形繩張、所々土居石垣堀浚橋等之事司ㇾ之、常ニ役所無ㇾ之、臨時ニ其場ニ至る役所有ㇾ之、芙蓉之間詰ル、
一江戸中之明地、井其處ニ有ㇾ之店屋之類迄支ㇾ配之、尤新地奉行其下支配として、御普請奉行へ達ㇾ之事也、

〔明良帶錄後篇〕御普請奉行
此場は、專ら土功を司り、土上土臺下之事を司る、以前は道中奉行より兼たる處、御場所多に付、新規明和五年ゟ被ㇾ仰付、道方上水懸り兼帶にて、專土功を掌る也、新規屋敷拜領屋敷相對替等は御普請奉行可ㇾ被ㇾ談との御差圖有、所々明地桐畑等懸り、諸屋敷普請之節、板圍之屆、道普請車留日切

屆、下水涵高枡修復等見分あり、遠國御用御場所見廻り野服也、下奉行改役等之屬役あり、

〔職掌錄〕御普請奉行

當職二員、老中支配、貳千石高、諸大夫役、芙蓉間に列す、御城石垣堀普請、地形、繩張、所々土居石垣堀浚、井神田玉川兩上水掛樋埋枡、組合出銀取集、其外一切上水にあづかる事を司る、又江戸中明屋敷、井拜領屋敷請取渡等の事司之、

〔諸役起請文前書〕御普請奉行

一御普請奉行被仰付候上は、彌御爲第一奉存、聊以御後闇義仕間敷候、物每心之及程入精、御用等費無之、御普請能相に不相成樣に入念可申候、縦親子兄弟たりといふ共、無依怙贔屓正路に可仕事、

一御普請に掛り候面々より、金銀米錢衣類諸道具等、一切受用仕間敷候、勿論御威光奢たる義井非分申掛間敷事、

附召仕之者にも、此段相聞候樣に誓詞可申付事、

一屋敷割之義、坪數以下萬端入念相改、割渡可申候、百姓地之義は、田畑高を改、畦溝芝間等除之可申事、

附御城相構、土手御石垣等、切々見廻り可申候、存寄之段、各江可申達事、

一御普請屋敷割等諸事御用之儀ニ付て、相役人と中惡敷不仕、萬事逐相談、私之申分を不立、多分ニ付御爲能樣可仕事、

右條々雖爲一事於致違犯者、

罰文

年號月日

老中一人　立合之大目付一人

〔萬天日錄 十四〕御普請奉行支配

一御堀普請　一土手屋敷　一地割等也

〔營中御日記 二〕寬永二年三月十四日、諸旗本一万石以下之面々、屋敷無之輩、今度物頭可被仰付間、江戸中明地新地等見立井地割可致旨、御普請奉行之輩へ老中被傳之、

〔東武實錄 二十五〕寬永五年十一月十八日、來年江戸御普請ニ付テ〇中略御普請ノ公役ヲ勤ル諸大名ヘハ、加藤遠江守、佐久間河内守、安倍四郎五郎、石河三右衞門等、御普請奉行四人ヨリ觸レ遣ハス、

〔大猷院殿御實紀 二十〕寬永九年七月二日、使番朝比奈源六泰勝、庄田小左衞門安照、小姓組佐藤勘右衞門繼成、長崎半左衞門元通、書院番駒井次郎左衞門昌保、黑川八左衞門盛至は、總普請奉行となり、今よりのち萬一御親征あらんときは、御先へまかり、陣營を搆造すべしと命せられ、〇下略

〔憲敎類典 二ノ五御役〕寬永十二乙亥年十一月十日

覺

一目安裏判之義、其役々可仕事、

一御普請奉行、小普請奉行、道奉行、御用之義、

可承之、但大造之御普請井大なる屋敷割之義は、可遂相談之事、

松平伊豆守

阿部豐後守

堀田加賀守

土井大炊頭

酒井讃岐守

〔厳有院殿御實紀四十〕寛文十年五月廿五日、この日より普請奉行一人ヅヽ、毎日營中伺公を命せらる、

〔厳有院殿御實紀五十〕延寶三年二月廿七日、普請奉行阿倍四郎五郎政重、大久保甚右衛門長重、中〇略芝金杉、新堀船入掘疏鑿の奉行を命せらる、

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年五月廿一日、普請奉行甲斐庄喜右衛門正永、鳥銃考察命せらる、

〔江都管領秘鑑一〕兩國橋普請停滯ニ付眞田伊賀守信清身上沒收之事

享保年中、町奉行より兩國米澤町名主喜左衛門といふものを呼て、兩國橋の古を尋られしに、喜左衛門申あげるには、兩國橋の事は、寛文元丑年、始て新規ニ被仰付候節、御普請奉行芝山權左衛門、坪内藤左衛門へ被仰付、町棟梁大工助左衛門、傳左衛門と申者へ命じ、貳ヶ年かゝりて成就す、其後天和元酉年に橋朽損じ、人の往來危き體にみへけるに依而、御手傳として眞田伊賀守信清に仰付られける、此伊賀守といふは、いわゆる眞田安房守昌幸が嫡子伊豆守信幸に男子貳人あり、嫡子大内記信政は、父の家督を繼ぎ、信州上田の城に在住し、位四品にいたる、庶子河内守、其子鍋千代とて、男子壹人有けるに、台命によりて、大内記より上州沼田の城三萬石を分地し、從五位下伊賀守と叙爵し、信清と云、則此人なり、御普請奉行には松平采女、船越左門被仰付、矢の藏の脇にかりばしをかけられて馬車を禁じ、人を往來せしむ、この假橋跡の義を、今に元兩國橋と諸人申習はせり、然る處に、いかゞの事にや、御材木出來不足にて、橋の御普請出來ざるによつて、等閑の致し方を御咎有之、眞田伊賀守身上御取上、奥平大膳大夫に御預となり、奉行釆女左門は閉門被仰付たり、其後元祿九年まで十五ヶ年の間は、假橋相用ひ、仮橋の修復は、伊奈半左衛門承り申

付られたるむね、先祖の舊記に備成と申に依て、やがて右之趣を認めて、官府にとゞめおかれしとぞ、

〔有徳院殿御實紀八〕享保四年四月三日、本所奉行の職を停廢せらる、よりて武家邸宅のことは、普請奉行、道路橋梁水道のことは、勘定奉行より指揮すべしと命ぜらる、

〔德川禁令考十六普請奉行〕明和五戊子年九月五日

普請奉行水道道方掛新命并舊員免職ノ達

御普請奉行 長田越中守 久松忠次郎

上水道道方御用掛被命、新規下奉行二人、改役四人、同心十人被附、○中略

九月

〔憲教類典五ノ八上水〕明和五戊子年九月十三日

松平右近將監殿御渡大井伊勢守被達

一上水方道方之儀、向後御普請奉行掛りに相成候間、其段向々江可被相達候、

九月

〔天明集成絲綸錄三十七〕天明四辰年九月

御勘定奉行江

御普請奉行掛、上水方、道方御用向、年々相當候處、奉行宅ニ而取調候故、諸失脚多相懸候趣相聞候、右爲諸入用奉行兩人江、當年ゟ壹ヶ年分金貳百兩ニ增被下候、依之是迄受取來候七拾兩は、只今迄之通、御入用ニ而受取、新規ニ增被下候百三拾兩は、御組合入用を以被下候間、御取替金を以受取、御組合入用江割入、追而返納可被致候、尤御勘定奉行可被談候、○中略

九月

任免沿革

右之通相違候間、可被得其意候、

〔御役所持場町法改正一件留書〕上水道方之外、御普請奉行持之分、町方掛リニ相成候ニ付、町々江申渡書、

一上水井戸普請等、都而上水ニ付候願并届訴、

一進造并車留願

一武家町組合橋ニ而、先規ゟ武士方ニ而頭取世話致候分車留、

一町方往還横切下水車留共

右新規修復共

右は以来御普請奉行江計可申出候、番所江は届にも不及候、

右之通可相心得事

亥寛政三年四月

〔職掌録〕御普請奉行

定小屋、辰之口にあり、

〔泰平年表五編三〕文久二年七月廿三日、御普請方ゟ達、此度御普請奉行御差止ニ相成、御作事支配ニ被仰渡候得共、御普請方御役所之儀は、是迄之通被差置候間、諸事先格之通可被相心得候、

〔職掌録〕御普請奉行

當職も、もと御使番等もより兼帯の處、承應元年壬辰二月廿八日永井彌右衛門直元、城半左衛門朝茂を以て、始て定役を置かる、

〔東職記聞一〕普請奉行二人　従五位下

掌、一切之地取、繩張以下、賜諸侯大夫宅地等事之職也、集成曰、天正十八年二月、小田原之役、神祖以

山本帶刀、丸島織部、朝比奈彌太郎等三人、被命陣場奉行、且依台命而帶陣營造作奉行也、代々記曰、神祖在駿府之比、佐藤駿河守奉當職也、慶元軍記曰、大坂之役、普請奉行佐久間河内守由盛、山本新五左衛門賴資等、奉台命而帶御使役也、元寬日記曰、元和三年九月、以村田權右衛門被補駿河普請奉行、又以小澤瀨兵衛、中澤主稅兩人被補江戸普請奉行也、又代々記曰、台德院殿〇德川秀忠之代、與村田小澤中澤三氏、山岡五郎作四人作奉當職、而不記村田氏在駿府而奉當職也、案代々記之說可乎、如何者、元和之始、賴宣卿主駿遠而在駿府、則何爲有此義乎、然如亞相公國家之骨肉、殊於國初乎、以今難論、記以待來者改正也、寬明同說、慶延略記曰、寬永九年六月寬明作七月以佐藤勘右衛門、長崎半左衛門、朝比奈彌太郎寬明作源太郎、駒井次郎右衛門、庄田小左衛門、黒川八左衛門等六人被補總普請奉行、且被命可掌臨戰陣則陣營造作之事、及候道路險易之變之狀也、相傳云、寬永七年十二月以來敍五位也、

〔諸役人代々記 一〕御普請奉行　二千石往古布衣、寬永七寅年十二月以來諸大夫、

神君御代駿河方　佐藤駿河守

右同斷　村田權右衛門

秀忠公御代江戸　小澤瀨兵衛

江戸　中澤主稅助

同斷　神田與兵衛

同斷　山岡五郎作

同斷　伊東右馬允

家光公御代、寬永年中、屋敷奉行共二、　駒井治右衛門

〔台德院殿御實紀 二十一〕慶長十八年二月十九日、普請奉行犬塚平右衛門忠次死して、その子小善

次重世家をつぐ、

〔台德院殿御實紀二十四〕慶長十八年十二月十四日、總普請奉行石川八左衞門重次死して、その子八左衞門政次家をつぐ、

〔營中御日記九〕寬永九年七月五日、富永斎四郎、神尾猪兵衞、小笠原源六郎、加藤淸三郎、右四人定普請奉行被相加云々、〇又見大猷院殿御實紀

〔吏徵上御目見以上〕御普請奉行二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　貳千石高　承應元年壬辰二月廿八日始置、

〔玉露叢十五〕寬文二年十月十九日ニ役替被仰付面々、

一御破損奉行淺井八郎左衞門、花井治左衞門、須田次郎太郎、松平次郎左衞門、以上四人ナリ、

〔延寶八年江戸鑑〕破損衆御支配頭

三千石　八木勘十郎殿　三千石　本多大隅殿　三千石　片桐新之丞殿　三千二百石　永井式部殿　三千七百石　壽田權左衞門殿　五千石　一色右京允殿　五千石　靑木求女殿　三千石　堀長吉殿　水野兵部殿　三千石　佐久間忠二郎殿

〔德川禁令考十六普請奉行〕文久二壬戌年七月廿三日

普請奉行廢職ニ付達書

此度御普請奉行御差止ニ相成、御作事奉行支配ニ被仰渡候得共、御普請方御役所之儀者、是迄之通被建置候間、諸事先格之通可被相心得候、

七月

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年六月十五日、普請奉行小普請奉行並廢セラル、

時服五宛　御普請奉行中村石見守、大久保大隅守、　小普請奉行田村石見守、朝比奈甲斐守、此

敍位

度御改革仰出され候に付、御普請奉行、小普請奉行、被レ廢候間、御役御免、勤仕並被二仰付一、是迄出精相勤候ニ付被レ下レ之、

〔東職記聞　一〕普請奉行二人　從五位下

相傳云、寛永七年十二月以來敍二五位一也、

〔文露叢　二十六〕寛永七年十二月十六日、隱居家督大勢有レ之、官位被二仰付一、（中略）御普請奉行　水野權十郎對馬守

同　三枝左兵衞、同　島田十兵衞淡路守

待遇

〔東武實錄　四十〕寛永九年九月二日、御普請奉行朝比奈源六郞、庄田小左衞門、黑川八左衞門、駒井次郞左衞門四人、御使番ト同母衣指物ノ事ヲ仰出サル、○又見二大猷院殿御實紀一

〔職掌錄〕御普請奉行

五の字指物は、寛永九年壬申九月二日免許あり、

〔憲敎類典　三ノ二十六〕萬治二己亥年

一御臺所ニ而御料理給候衆○中略　二之間○中略　御普請奉行

〔享保集成絲綸錄　一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以二壁書一被二仰出一之所謂、○中略

一菊之間○中略　御普請奉行

寛文二寅年二月

先頃所レ被二仰出一之、老中幷御旗本方支配之差別、○中略

御普請奉行○中略

右者老中支配

〔嚴有院殿御實紀　四十〕寛文十年六月十五日、けふより普請奉行本鄕勝三郞長泰、能勢治左衞門賴

俸祿

宗、阿倍四郎五郎政重、作事奉行と同じく芙蓉間に伺公せしめらる、

〔憲教類典 御役二ノ五〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黒書院江出御被爲成、御役人被爲召御役料被下候覺、○中略

一同斷○五百俵　御普請奉行

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月廿一日、諸番諸物頭諸役人の役人の役料を加祿となして給る、○中略普請奉行○中略五百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略作事、普請、槍の奉行、持弓筒頭、二千石以下は三百俵、

〔憲教類典 御役二ノ五〕享保八癸卯年六月十八日　御普請奉行○又見二教令類纂一

貳千石ゟ內は、貳千石之高に可被成下候、

普請方下奉行

〔職掌錄〕御普請奉行

下奉行二人、百俵高、御役扶持十人扶持、これは明和五年戊子九月五日、長田越中守、久松忠次郎兩人へ、上水井道方加役被命によつて、下奉行二人、改役四人、新規に置かる、といふ、

〔吏徵 上 御目見以上〕御普請下奉行貳人　奉行支配　百俵高　御役扶持十人扶持　御手當金八兩

明和五年戊子九月五日始置

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十二月廿日、屋敷改、並ニ新地改役名ヲ廢ス、

右取扱の儀、御普請方下奉行兼勤を命せられたり、

〔天保集成絲綸錄 一〕天明七未年六月

當時殿中席書○中略　燒火之間前廊下○中略　御普請方下奉行

改役

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕御普請方改役　明和五年戊子九月五日、始置四員、百俵高、役扶持七人扶持

熱田吉八、田中金五郎、宮崎段七郎、豐島佐兵衞、初稱上水方道方改役、　安永四年己未四月、御手當金五兩、　寬政八年丙辰七月廿四日、兩人役、

〔吏徵 御目見以下〕御普請方　奉行支配　貳拾俵高　役扶持三人扶持、役金八兩、　假役役金八兩　燒火間、上下役、　寬政元年己酉二月廿五日始置

〔吏徵別錄 御目見以下〕御普請方　寬政元年己酉二月廿五日、始置二員、○中略　同八年辰七月廿四日增三員、合五員、　文化三年丙寅三月日、始置假役七人、扶持御手當金五兩、　同四年丁卯十二月二十八日、假役御手當金八兩、

〔諸役起請文前書〕御普請方

一御普請奉行支配御普請方被仰付候、彌重公儀御爲第一奉存、聊以御後闇義不仕、惣而御一門方を始、諸大名諸傍輩と、奉對御爲惡心を以、一味仕間敷候、

且又相役人と中惡敷不仕、萬事不殘心底相談、私之申分不立之、御爲能方ニ附可申候、御普請方諸役人井諸職人等不宜義於有之者、早速御普請奉行有體可申上事、

一上水方道方地割方御普請之仕方能相無之、大工人足手間御入用多掛不申候樣仕、諸事費成儀無之、及心程入念遂吟味可申候、縱親類緣者知音之好、又は中惡敷輩たりといふとも、無依怙贔屓正路沙汰可仕事、

一御隱密之義及見及承候共、毛頭他言仕間敷事、

一御用ニ掛リ候面々井町人職人何方ゟも、金銀米錢衣類諸道具酒肴等一切受用仕間敷、尤馳走ヶ間敷義堅請申間敷候、此段妻子召仕之者江も急度可申付事、

右之條々、雖爲一事於致違犯者、

〔大概順〕御目見以下大概順

御普請方

御譜代席　上下格　白衣勤

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政六寅年三月

御普請方持高之場所に候得共、廿俵より以下之者は、以來廿俵之高に御足高被下候事、

〔衛門類例秘錄六〕御普請方之義は、上下役に而、御譜代席持高、御役扶持三人扶持、御手當金八兩、貳十俵以下之者被仰付候得ば、貳拾俵被成下、平日白衣勤に候得共、身分は御徒方諸組與力等には別段之事に候、御小人目付迄一體に心得候は不念、元來二統に而、御中間ゟ出候と御中間目付、御小人ゟ出候は、御小人目付に而も、右は何れも御譜代者に而、家督は被仰付候へ共、御殿に而は不被仰付、頭宅に而御書付渡、拾五俵壹人半扶持に而勤之、

御作事方と而已有之候得共、御作事方にも、御被官は御抱入也、御作事方小役、貳拾俵高、貳人扶持御扶持三人扶持、御抱入、羽織袴、貳拾俵扶持に而、御作事方書役、身柄小役に同じ、三拾俵高、三人扶持、御作事方手代、身柄小役に同じ、

同心肝煎

〔吏徵御目見以下〕御普請方同心百人略○中　肝煎役四人、役金五兩、増金貳兩、

〔吏徵別錄御目見以下〕御普請方同心略○中　明和八年辛卯四月三日、置肝煎役、役金五兩、　安永四年乙未四月日、增肝煎役金貳兩、合七兩　文化四年丁卯十二月廿八日、置假役、役金四兩、

同心

〔吏徵御目見以下〕御普請方同心百人　持高　役扶持二人扶持、略○中　見習十五俵壹人扶持、　假役役金四兩　御抱場

〔諸御役代々記五下〕御普請奉行

明和五子九月五日、上水方道方當御役掛り被仰付、略○中　同心新規被仰付、

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持ふち　羽織袴役　白衣役　御抱入場　御普請方同心

門番人

御役扶持二人ふち、肝煎は御役金五兩、御手當金二兩、

〔御門類例秘錄六〕御普請方同心之義は、諸組同心之内に而八貫上々(上々恐誤)に而持高、御役扶持貳人扶持、肝煎御役金五兩、御手當金貳兩に而、御抱入場所に而、羽織袴役或は白衣勤也、

〔屋敷願吟味帳〕御先手 曾根内匠元組同心

宮野善右衛門

右善右衛門儀、御普請方役所御門番人被仰付候ニ付、地面上り候ニ付、場所江罷越、同組與力手嶋彥兵衛江承合候之處、右場所之儀は、寛文三卯年、設樂甚三郎組之節、組屋敷ニ而相渡候、尤是迄右場所上地差戾ニ相成候例無之候得共、大縄組屋敷ニ相違無之旨申聞候、

右相糺候趣、書面之通御座候、以上、

正月廿六日 荒川吉十郎 三橋喜右衛門

地割棟梁

〔萬延元年武鑑〕御普請方 同地割棟梁 十八人

小普請奉行

小普請奉行ハ、元方、拂方ノ二部ニ分レ、元方ハ所用ノ物品ヲ購入シ、拂方ハ之ヲ受ケ取リテ、之ヲ配分スル事ヲ掌ル、其長ハ初メ小普請奉行組頭又ハ御破損奉行總頭ト云ヒシガ、元祿十四年四月、改メテ小普請奉行ト云ヘリ、而シテ享保二年十二月、又改メテ之ヲ置キシガ、文久二年六月之ヲ廢セリ、副ハ初メ小普請奉行、又ハ破損奉行ト云ヒシガ、元祿十四年四月小普請方ト改稱セリ、

職員 職掌

〔明良帶錄後篇〕小普請奉行 二千石 若支 中ノ間

小普請方、同改役、同吟味方の屬役有り、御本丸西丸共、大奥向二三の丸、平川上梅林、下梅林、汐見坂御門、仕切御門、平川內喰違御門、御太鼓御門、西北桔梗紅葉山下御門、西丸御裏御門、御春屋、二ノ丸織殿、吹上御茶屋、植木御門、新御門、御三の間御門、半藏口、千駄木雜司ヶ谷御鷹部屋、上野一山、駒場野、井御成先御用、遠國御用等、內曲輪渡御櫓、大番所御橋等、御用場所見廻り野服、此人足は古來小普請の面々より出すの處、當時は金納と成て、小普請金といふは是なり、

〔職掌錄〕小普請奉行

當職二員、若年寄支配、諸大夫役、中之間に列す、御本丸西丸大奥向、二丸御殿向、紅葉山御宮御靈屋、東叡山、濱御殿、品川東海寺、池上本門寺、其外所々御役屋敷御普請御修復を掌る、

〔青標紙三編〕下。三。奉。行。といへども、御普請奉行はさまで御用多くもあらず、威權もうすし、小普請之方奥向の御用あるゆへ、繁劇にて威權あり、然れども五奉行の列には入らず、又其席は中之間にて御留守居番御勘定吟味役と同席なれども、名目ばかりにて、芙蓉之間に候する事多し、手附配下の小普請方及び改役など、御取立にて出身するもの多し、至て出口のよき場所なり、又この御普請方よりして、多く御廣敷番の頭へのぼり、御普請がゝりを持つは、建築造營の事に功者なるをもつてなり、

○按ズルニ、下三奉行ハ、作事奉行、普請奉行、小普請奉行ヲ謂フ、

〔東職紀聞一〕小普請奉行二人　從五位下

掌下不レ論二處諸方繁雜之造作事一之職也、假令殿屋造立之時、普請奉行修二地取石垣等之事一、作事奉行造二立殿屋一、當職修二繁雜之造作一、故當二造立之時一、則三職相交而經二營之一也、寛明記同說

〔德川禁令考十六小普請奉行〕支配向

小普請方改役、小普請方吟味役、同吟味手傳役、小普請方伊賀者組頭、小普請方手代組頭、同改役下

役組頭、明屋敷番伊賀者、小普請方伊賀者、同手代、小普請方改役下役、小普請方物書役、小普請方御掃除之者組頭、同御掃除之者、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年九月二日、小普請奉行梶川四郎二郎忠助、飯田清左衛門在久、西山太郎兵衛昌綱に、増上寺修理の事を命ぜらる、

〔享保集成絲綸錄一〕寛永十二亥年十一月十日

一御普請奉行、小普請奉行、道奉行、御用之儀は、松平伊豆、〇信綱阿部豐後、〇忠秋堀田加賀、〇正盛可承之、

〇下略

〔御當家令條二十六〕條々

一小普請方修復又は新規之造作等、萬事費無之、不致遲滯、麁相に無之樣入念、若難計儀は、御留守居御勘定頭遂相談可申付候、其上猶落着難仕義於有之は、老中迄可被申伺事、

附、御城中御城外切々見廻、小破之時修復可申付事、

一小普請方役人丁場等割渡之義、無依怙贔屓、善惡之場所、人足員數以下相考之、正路可被致沙汰事、

一御材木石瓦銅鐵疊繩、其外之諸色、御普請之上中下考之、相應ニ可被申付之、大工壁塗等ニ至迄、上中下ニ可入所を致吟味可被用事、

一御普請道具場所江相居之義、前廉遂吟味可取扱之、持運木挽大工不斷居樣可被入念事、

一以入札申付御普請、同傭人足等、前廉請人以下慥成者を撰び相定請負之以後、假何遍之訴訟仕といふとも、一切不可被用事、

一奉行十人之內、五人ツヽ隔年ニ小普請之奉行相勤之、五人は御勘定ニ掛リ、嚴蜜ニ可被遂詰解事、

一同心之者ども、常々遂吟味、無作法私欲無之様入念可被申付事、

右之條々可被相守此旨者也、

寛文二年十二月十五日　老中連判

小普請奉行中

〔常憲院殿御實紀 二十〕元祿二年十一月六日、小普請奉行元方二人を創置せられ、役料三十口たまはる、

〔教令類纂 初集二十三下〕寶永七庚寅年八月廿七日

覺

一先御代小普請方之御入用、年々ニ相増候處、當御代、去年當年別て無據御普請之御用多、臨時之御入用大分之事ニ候、其上諸役所共ニ御入用多、段々御金相渡候得共、御拂金相滯候、此後彌御拂金段々可相渡候間、其旨可相心得事、

一向後小普請方御用之御拂金は、當金可被下候間、御用等差支無之様ニ可被仕候、是又小普請方前々ゟ諸事請負方之内、當時之直段より殊之外高直ニ有之、又は格別ニ下直成品も有之様ニ相聞へ候、向後彌以吟味、當時之賣買直段ニ引合、高直成品は相應ニ引下ゲ、又は格別ニ下直成品は、相應ニ相増候様ニ隨分入念可被遂吟味事、

一去年當年、小普請方急御用無類多有之、御入用大分之事ニ有之候間、隨分心ニ及候程遂再吟味、前方御入用高ゞまり候内も、御入用不掛候様ニ可被仕候、右之段々各存寄共有之ニ付、急度申渡事ニ候間、此旨可被相心得事、

以上

〔教令類纂 二集四十五〕享保三戊戌年五月廿五日

小普請奉行方

一御本丸大奥銅塀を限り、但し大奥向は一繪圖ニ記、

一二丸三丸は、內外御座敷廻り迄不殘、

一二丸御殿、並ニ塀、重御門之內、御多門御樓不殘、喰違ひ御門迄、

一下梅林御門、上梅林御門、並ニ續御多門御櫓、北跳橋內、二重御櫓、北跳橋御門、御天守御門、乾御櫓御多門塀、西桔梗橋續大奥境迄、

一西丸大奥向不殘

一西丸御裏御門ゟ、同所御春屋、太鼓櫓並ニ塀奥表仕切引戸迄、

一紅葉山御宮、御佛殿、御供所、御寶藏、並ニ惣御園、紅葉山下御門より、御宮後通り御搆塀、山王境迄、

〇中略

增上寺安國殿、惣御佛殿、並ニ御別當、本堂、此外山中御修復、所々堂舍等、 濱御殿 吹上御花畑 月光院樣御屋敷 竹姬君樣御屋形 壽光院殿宅 法心院殿屋敷 蓮淨院殿屋形 清心院殿屋敷 御春屋 高倉屋敷 傳奏屋敷 評定所 櫻田御用屋敷 田安御用屋敷 神田橋外御用屋敷 二丸御用屋敷 小川町小石川貳ヶ所 西丸下御用屋敷 御花畑奉行預御用屋敷 御厩御役屋敷五ヶ所是は前々御金御材木被下、手前にて仕候義も有之候由、 紅葉山坊主御役屋敷十二ヶ所 駒込御鷹部屋御樂園並御役屋敷 芥川小野寺 千駄谷御藏屋敷 駒場野鹽硝藏 竹橋御藏 小普請方定小屋 深川御船藏番人居宅共付札、是は前々御金御材木被下、手前にて仕候儀も有之候由、

五十三ヶ所

御修復願出候節、吟味之上可申付場所、〇中略

傳通院所々御佛殿 金地院 神田明神 幸龍寺御佛殿、御修復願出候節は、右之通可申付哉、此

外神社寺院、並ニ所々橋下水溜等之儀、前々小普請方ニて仕候處も御座候、此等之儀は、至ニ其節一吟味伺之上、御作事奉行、小普請奉行へ割合可ニ申付一候、〇又見ニ有徳院殿御實紀一

〔惇信院殿御實紀八〕寛延元年十二月七日、小普請奉行駒井能登守壽正、御船の事かね奉はりしをもて、時服賜はる、

〔御留守居勤方手扣留二〕大奧向御普請并御修復出來榮見分掛之者勤方

一小普請奉行江申談之上、出來榮見分之儀、御老中方江申上候得ば、掛に無レ之御留守居并御用人見分致し、委細申上候樣、御覺書江仕樣帳御添御下ケ被レ成候間、番之頭申達、月番同役之方江達ス、其上ニ而小普請奉行江申談、見分日限并揃刻等取極、幾日何時揃與申儀、番之頭江申達、月番同役方江も申達ス、

〔天保集成絲綸錄七十八〕天保七申年二月

小普請奉行江

來酉年〇天保八年御移替引續將軍家〇德川家慶宣下御大禮も有レ之、御入用多之御時節ニ付、都而御修復所破損之ヶ所、成丈御手入ニ而差置、手重之御修復は御差延之積り、御役屋敷向も右准じ取計、格別御入用相減候樣可レ被レ致候事、

〔下田取計一件八〕一小普請奉行衆并御鐵砲方等より、大筒持運据付方爲ニ御用一町人足差出候樣御達有レ之候節、諸向駈付、御用物持退方等の人足に、町火消共差出候儀は、寛政度町法改正之節、御差止相成候儀に有レ之候間、町年寄方に而、町火消人足共江申渡候は不相當之處、今般之儀は、非常御急ぎの場合ニ付、右人足を追々差出候得共、右は其町内家持始町人共罷出、消防方仕候儀は素之處、渡世にも差支候に付人足を抱置、出火有レ之候得者、差出候仕來に而、御普請場所其外江、銘々聊之賃銀に而被ニ雇罷出候は、平生妻子之育方に仕候儀に而、職分と申には無レ之、消防方專ら之儀に

任免

付、出火有レ之節は、直に其場所ゟ出火場江駈付候は勿論之儀に御座候、就而は此度非常爲二御手當一、
詰場所等も被二仰渡一候間、町々ゟも足留錢等差遣置候趣に有レ之、此後萬々一右體之御用有レ之候節、
町火消人足どもを、前書持運据付方御用等に差出候而は、旁相當仕間敷、非常消防方にも差支候
ニ付、其向々に而兼而手當有レ之候樣、別紙之通御掛合可レ有二御座一候也、

下け札
本文小普請奉行衆井御鐵砲方ゟ御達有レ之候人足之儀は、此程御懸合相濟候間、最早不レ伺積
相心得申候、〇中略
丑嘉永〇六年七月　金子兵七郎　谷村官太郎　安藤源五左衛門　稻澤彌一兵衛

〔職掌錄〕小普請奉行
定小屋、辰之口にあり、

〔享保集成絲綸錄二十九〕享保十八丑年十二月　小普請定小屋〇中略
右屋敷家作之儀、柿屋根之分、有來候家作も瓦葺に致し、火除に成候樣申付、二三年之內に不レ殘瓦
葺に可レ致候、尤普請に取懸り候節、御入用積書付可レ出候、
右之通、向々江申渡候間、可レ被レ得二其意一候、
十二月

〔大猷院殿御實紀二十〕寬永九年七月二日、小納戶前田五左衛門定良、井梶川四郞次郞忠助、大番西
山太郞兵衛昌綱、飯田淸左衛門在久は、小普請奉行を命せらる、

〔諸役人代々記一〕小普請奉行　二千石〈初メ小普請奉行組頭と稱す、元祿十四巳年より組頭之唱止ム、〉
綱吉公御代、貞享二丑年八月より、同四卯年九月十九日御勘定奉行江、　小菅伊右衛門
元祿二巳年二月三日より、同三午年五月十八日御先手江、　梶四郞兵衛

同三午年五月書替奉行より、同九子年三月四日病死、　建部十郎左衛門

同七戌年二月九日御納戸與頭より、同九子年四月十三日御役被召放、　竹川善兵衛 初源右衛門

同九子年四月廿一日より、同十一寅年七月依願御免、　東條信濃守 初藤兵衛

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月十三日、この日、小普請奉行間宮播磨守信明、竹田丹波守政武ともに職奪はれ、小普請に入らる、これはこたび新入の手代十一人並にもとよりつかふる伊賀手代百十餘人に、俸米を加給せられん事をこひ出たり、さしあたりいまだかゝる沙汰有べき時ならねど、新入の徒小祿ならば、やがて加俸あるべきゆへ、そはことはりなきにあらず、もとより勤來りし徒に於ては、小普請方の局開かれしより此かた、かれら微俸にてつとめ難きよしいまだ聞えざるを、にはかに究乏に及よし申といへど、さるは歷世の間何としてつとめ、今にいたり何としてつとめがたきや、それらの撿點も加へず、聞えあげたる事、不審少からず、すべて奉行はじめ手代にいたるまで、局中のふるまひ、家計の有さま、ともに世の流言する所なれば、御聞にふれし事なきにもあらず、先に諸局に嚴令下されし時、思召旨あれば、小普請方のみはいまだ沙汰も加へられず、然れば奉行始手代までも、前非をかへりみて、後來をあらためつゝしむべき時なり、たとひ手代共の中申出るもの有とも、百十餘人の中を取捨せば、はじめより局務もひが事なく、家計も分にこえず、今となり艱困せざるものも有べければ、其他を嚴にいましむべきに、さる査撿も加えず、ひたふるに忌憚なき申文さゝげしは、いとひが事なり、嚴く糺問せらるべけれど、宥恕の旨をもて、かく仰付らるゝとなり、

〔有德院殿御實紀五〕享保二年十二月廿八日、この日新に小普請奉行の職を設らる、目付加藤右近明敎、寄合星合攝津守顯行奉はり、各官量三百苞を賜ふ、右近明敎は、叙爵して駿河守と稱す、

〔御留守居勤方手控留追加〕安政六未年二月廿四日

小普請奉行(江)下田奉行井上信濃守被仰付、右ニ付、石之間ゟ同道ニ而、御用人部屋へ罷越、御廣座敷宜旨番之頭より承り、圖之通罷出、信濃守小普請奉行被仰付、引合候旨申述、信濃守結構被仰付難有旨御禮申候處、おめでたくと表使申引、

〔東職記聞 一〕小普請奉行二人　從五位下

慶延略記曰、寬永九年六月(寬明作七月)、以前田五郎左衛門、梶川四郎次、西山太郎兵衛、飯田清左衛門等四人、被補小普請奉行也、當職之號、先是無所見、則始于茲乎、代々記曰、貞享二年八月、始置此職、以小普伊右衛門(後達江守)被補之、元祿二年二月增一人、以梶四郎兵衛(後和泉守)被補之、同十年二月、又增一人、以小普次郎右衛門被補之、爾來三人、寶永二年四月、曲淵越前守遷作事奉行、同年八月、竹田丹波守補其後職、與間宮播磨守兩人在職、正德二年八月、間宮竹田二氏有故解職、即罷當職、而被命作事奉行番之也、享保二年十二月再置之、以加藤駿河守、星合攝津守等兩人被補之、爾來連綿至于今也、案寬永新置、而後當職或廢乎、不然代々記何以小普氏爲其權輿哉、來者夫詳焉、

〔吏徵別錄 下(布衣以下御目見以上)〕小普請方　寬永九年壬申七月五日、富永齋四郎、神尾伊兵衛、小笠原源六、加藤清三郎、小普請奉行被仰付、江城年錄、　寬文三年癸卯十月廿六日、十四員、三十人扶持充を賜ふ、　元祿十四年辛巳三月廿八日、小普請奉行を改て小普請方とす、　正德二年壬辰八月十三日廢、　享保三年戊戌三月廿六日、再置五員、御役扶持十五人扶持、御材木奉行次席、是迄は新御番大御番より出役八人、此度相止、格式を改め、小十人御目附より新規五人被仰付、

〔仕官格義辨〕小普請奉行之事

問云、當時之小普請奉行衆は、中之間、諸大夫役ニ而候處、天和貞享之頃之小普請奉行は、大御番新御番抔ゟ被仰付、布衣已下之御役ニ而候と承候、何れの頃ゟ結構ニ格式替り候事ニ候哉、答云、先規ゟ元祿之比迄之小普請奉行は、元祿十四巳年四月三日ゟ、小普請方と唱可申旨被仰出候、其節

小普請奉行組頭

迄之小普請奉行之組頭を小普請奉行と唱申候、其已後正德二辰年八月十三日、間宮播磨守、竹田丹波守、兩人之小普請奉行御役被召放、跡御役不被仰付候處、享保二酉年十二月廿八日、加藤右近、(駿河守と改)星合攝津守、兩人小普請奉行被仰付候、此面々當時之小普請奉行初發ニ而候、同三戌年三月廿六日、小普請方格式御改ニ而、八人共ニ不殘小普請入被仰付、小十人組ゟ森長四郎、千種忠兵衞、志村藤十郎、御徒目付ゟ伴野彌一右衞門、植木藤助、右五人被仰付、其以後右之格之衆ゟ被仰付候、依之當時之小普請方は、享保之初之小普請方とは格別輕く相成申候、

〔嘉永明治年間錄 十一〕文久二年六月十五日、普請奉行、小普請奉行並廢セラル、

時服五宛、○中略 小普請奉行田村石見守、朝比奈甲斐守、此度御改革仰出され候に付、○中略 小普請奉行被廢候間、御役御免、勤仕並被仰付、是迄出精相勤候に付被下之、○又見二卷平年表

〔職掌錄〕小普請奉行

當職は、貞享二年乙丑九月十四日、始て一員を置く、小菅伊右衞門正武是也、時に小普請奉行組頭と稱す、

〔憲廟實錄 八〕貞享二年九月十四日、小普請奉行小菅伊右衞門組頭となる、新役なり、

〔元祿八年武鑑〕御小普請奉行組頭

〔常憲院殿御實紀 三十五〕元祿十年二月十一日、大番組頭菅沼次郎右衞門勝重は、小普請奉行組頭になる、これより組頭三員になる、

〔教令類纂 初集二十三上〕元祿十丁丑年閏二月廿八日

小普請奉行組頭へ但馬守、丹後守、相渡候書付、

覺

一小普請方定小屋、向後小普請奉行四人ニ而、元方拂方と二人宛相わかり候而小屋ニ相詰、一年

宛相勤吟味可ㇾ仕事、

一元方之奉行は、諸色御入用之品、直段等吟味致し、職人賣人共方ゟ請㆓取之㆒、元帳通帳ニ引合、一日切ニ押切判形仕、御入用次第、拂方之奉行之以㆓書付㆒印判相渡し、毎日元拂帳合、双方之帳面ニ立合之印判可ㇾ仕事、

一拂方ニ而も、御普請御修復之木積、諸色其場之奉行幷棟梁承屆、御普請輕重、隨分遂㆓吟味㆒、其上ニて御入用之品々元方ゟ請取、尤處々奉行江相互ニ以㆓印判㆒請取渡仕、其日切に帳しめ可ㇾ仕事、

一元方ゟ請込候諸材木、夫々ニ見積、木割寸間を以、拂之方江相渡、拂方ニて挽立置、所々御用ニ相渡し、右元方之木割寸間ニつき合、壹年ニ兩度程元拂可㆓相改㆒事、

一同手間之大工木挽、其外諸職人入用之人數を積、拂方ゟ元方江申達、元方ニ而申付、職人等小屋江入候節は、拂方ゟ人數を改、其日切ニ帳しめ可ㇾ仕事、

一御納戸ゟ相渡候紙蠟燭、一月ニ壹度宛も請取置、所々御入用は、拂方に而、致㆓吟味㆒、元方ゟ右之品品請㆓取之㆒、其場へ相渡、尤度々帳合可ㇾ仕事、

一所々小屋ゟ請取候品々、其場之奉行以㆓書付㆒印判拂方へ差出、拂方に而遂㆓吟味㆒、元方ゟ請㆓取之㆒相渡候樣可ㇾ仕候、手代之判形ニ而請取候物は、追而其場之奉行、印判之書付ニて引替勘定むすび候樣可ㇾ仕事、

一所々ゟ小屋江戾り候古木幷殘物等、其處之奉行送狀ニ注ㇾ之、拂方江遣、拂方請㆓取之㆒、判形其場之奉行取置候樣可ㇾ仕事、〇中略

一定小屋之門ニ番人相定置、晝夜共出入改、入ㇾ念可ㇾ申事、

一定小屋之外、わかれ御普請之小屋場も、諸事右之通り可㆓相心得㆒事、

右之趣可ㇾ被㆓相守㆒候、以上、

小普請方頭

敍位

附過怠

丑閏二月廿八日

〔憲廟實錄二十四〕元祿十二年二月廿七日、叙爵二人、〇中略小普請奉行組頭東條源右衞門長時、信濃守に任ず、

〔敎令類纂初集三十九〕元祿十四辛巳年四月朔日

覺〇中略

一小普請方頭を小普請奉行と可申事

一小普請奉行を小普請方と可申事

右之通被仰渡者也

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年二月廿七日、東叡山嚴有院殿靈廟再造落成により、作事奉行小幡三郎左衞門重厚、小普請奉行組頭東條源右衞門正甫、ともに從五位下に叙せられ、三郎左衞門重厚は備中守、源右衞門正甫は信濃守とあらたむ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕小普請奉行　元祿十二年己卯二月廿七日、諸大夫、上野御普請相勤候付、諸大夫被仰付候、而定式にはあらざる也、

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士着座之席、以書被仰出之、所謂、〇中略

一御躅之間北ノ二之間〇中略　小普請奉行

〔享保集成絲綸錄一〕寬文二寅年二月

先頃所被仰出之老中幷御旗本方支配之差別〇中略

小普請奉行〇中略

右者久世大和守、〇廣之土屋但馬守、〇數直支配、

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月
當時殿中席書〇中略　中之間　小普請奉行

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保八癸卯年六月十八日
貳千石ゟ內は貳千石之高に可レ被レ成下レ候、
小普請奉行

〔明良帶錄〕小普請方 百俵高 小普請支 御役扶持十五人扶持 燒
前に記るす繕り々々の場所、諸色買上積方の事を手代下役等立合て積立て奉行へ出す、改方下役よりも昇り、御徒假役よりも昇る、御徒目付御臺所組頭よりも歷昇し、夫より下奉行へ昇る、大畠半左衛門は御金奉行に昇る、

〔敎令類纂 初集 二十三 下〕寶永七庚寅二月
右去丑年、御普請大分之事ニ候間、去年中之御用之品、諸事入レ念吟味可レ有レ之候事、
小普請方
一小普請方十一人之內、向後兩人宛年番元〆役を相定、所々御入用之儀隨分致二吟味一、尤御用之筋滯候儀無レ之樣ニ仕、御用之外、實成餘慶之遣ひ方無レ之樣、心ニ存候程入レ念可レ致二吟味一候事、
一去年中御普請御用、所々大分之儀候、其上御代替以後、初而御用多事ニ候間、去丑年中之御普請御勘定之儀は、御入用大積を內分中、勘定之目錄ニ相認候而差出可レ被レ申候、尤淸帳之儀は、追而明細吟味之上、仕立可レ被二差出一候事、
御納戶　御賄方　御細工方
右之役所々も、去丑年中御入用之儀、急ニ出來兼候はゞ、先中勘定帳ニ相認差出可レ被レ申候事、
寅二月

〔敎令類纂 初集 二十三 下〕寶永七庚寅年九月六日

覺

一小普請方役所、近年は別而猥ニ有レ之樣ニ相聞ヘ候、向後は小普請奉行、小普請方、隨分心を盡し、速心底を不レ殘遂二相談一、御普請之儀は勿論、少々御修復等之儀成共致二吟味一、御入用相改、念を入可レ申事、〇中略

一惣而小普請方之面々勤方善惡之儀、改役之者共及二見聞一次第、少も無二依怙贔屓一、小普請奉行兩人に相達候樣に申渡候間、改役申達候者、兩人にて遂二相談一、其上ニ而月番江可レ被二申聞一候、且又小普請奉行兩人之內ニも、若難二心得一儀有レ之候はゞ、壹人之同役江申達候樣に申渡候間、是又少も無二用捨一、月番迄可レ被二申聞一事、

以上

九月

小普請奉行へ

〔敎令類纂初集二十三下〕寶永七庚寅年十二月

覺

一吹上御花畑役所江、向後相詰候小普請方役人、末々迄無作法無レ之樣ニ可レ被二申渡一候、尤役所廻り掃除等入レ念、麁末ニ不レ仕樣に可レ被二申付一候事、

一諸職人幷人足等出入之節、不作法に無レ之樣に可レ被二申付一候事、

一火之元之儀、隨分入レ念、大切ニ仕候樣に可レ被二申付一候事、

以上

十二月

〔享保通鑑一〕正德六年五月三日、於二增上寺一御法事中御用被二仰付一面々、〇中略

改役

小普請方　竹村權左衞門　太田伊兵衞

〔有德院殿御實紀六〕享保三年三月廿六日、小普請方は、新番大番よりえらばれて、その職にうつることなるが、こたびそれらの八人を小普請に入られ、小十人徒目付よりその闕を補はれ、ながく例となさしめらる、〇又見二仕官格義辨一

〔憲敎類典御役二ノ五〕享保十六辛亥年三月　小普請方
御役扶持　拾五人扶持

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月
當時殿中席書略〇中　燒火之間略〇中　小普請方

〔吏徵御目見以上上〕小普請方改役四人　奉行支配　燒火間緣頰　百俵高　御役扶持十人扶持
勤方二人、十人扶持、寛永七年庚寅九月六日始置

〔明良帶錄新金篇〕小普請方改役
下役之改たる所を、一度吟味改む、此役にていよ〱を改る也、

〔敎令類纂初集二十三下〕寶永七庚寅年九月六日
覺中〇略
一此度小普請奉行支配江、改役人新規ニ八人被二仰付一候間、御用向之儀、委細可二申合一相勤させ可レ申候、右之もの共、勤方粗末ニ無レ之爲メ、誓詞前書相渡候間、改役之者共は勿論、小普請方始人足末末迄も急度申、少も猥成儀無レ之様可二申渡一事、
一改役之內兩人ヅヽ、小屋年番申渡、定小屋之內ニて役長屋相渡、壹年宛爲二引越一、晝夜共無二油斷一所所江心を附相勤候様ニ可レ仕候、年番之者は翌年御勘定ニ可二取掛一、無二遲滯一様ニ御勘定仕上可レ申事、

改役下役組頭

一前々ゟ御勘定殊之外延引之事ニ候間、年番之者請取り、月初メゟ早速御勘定之儀心掛、月日之御入用高寄委細可認上、御藏ゟ出候品々、別而御材木石類等清帳仕上候、內々引替手形月切ニ一紙手形ニ引替、總て手形類無之樣ニ可仕事、

一總而小普請方之面々勤方善惡之儀、改役之者は及見聞およひ次第、少も無依怙贔屓、小普請奉行兩人ニ相達候樣ニ申渡候間、改役申達候者兩人ニて逐相談、其上ニ而月番江可被申聞候、且又小普請奉行兩人之內ニも、若難心得儀有之候ハヽ、壹人之同役江申達候樣ニ申渡候間、是又少も無用捨月番迄可被申聞事、

以上

九月

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月十三日、今より小普請方改役は目付の隸下に屬せらる、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、〇中略

百俵高　御役扶持十人扶持　小普請方改役

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十二月十八日、鳥見組頭、小普請方改役の輩は、大工頭に準じて、歲首に御流盃をたまふべしとなり、

〔吏徵下御目見以下〕小普請方改役下役組頭三人介三人　改役支配　貳拾俵貳人扶持高　役扶持三人扶持　役上下　御抱場

〔享保集成絲綸錄三十〕享保五辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

改役下役

右之趣向々江可〻被〻達候（略〇中）

小普請方改役下役組頭（略〇中）

貳拾俵高（貳人扶持）　但役扶持は只今迄之通

右之通御增高被〻下候間、向々江可〻被〻相談〻候、以上、

〔吏徵別錄（御目見以下）〕小普請方改役下役　寶永七年庚寅九月六日始置

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持扶持　役扶持貳人扶持　御抱入　小普請方改役下役

〔憲敎類典（二ノ五）御役〕年號月日無〻之

一遠國御役人組附人別幷御役料（略〇中）　小普請方改役拾人扶持宛　下役貳拾壹人

〔明良帶錄（新益編）〕小普請方改方下役

一切御普請皆出來前之入用積りと云事有〻之、上下兩役有、改に定めあり、

〔吏徵（御目見以下）〕小普請方改役下役十五人　持高　役扶持貳人扶持　御雇六人、貳人扶持、出役五人、貳人扶持、　御抱場

吟味役

〔官中秘策（十）〕諸御役人之事

一同（〇小普請）吟味役（略〇中）　四人

〔明良帶錄〕小普請方吟味役（持高、御役料十人扶持　下役二十三人　小普請支　納戶前廊下）

一切御普請向出來して見分する、又積り物吟味、總て御入用筋改の省略を付る、改方下役は、在の勤筋、又は再勤の者、上水方等、郡代組付等より昇る、下役ゟ昇進す、上場の御作事方へと昇する向も有り、多分交攝す、

〔大概順〕御目見以下大概順

（小普請奉行）七拾俵五人扶持　勤金拾兩　上下役　御譜代席　白衣役　小普請方吟味役

〔吏徵 御目見以下〕小普請方吟味役三人　奉行支配　七十俵五人扶持　勤金拾兩　勤方貳人、三人扶持、勤金同斷、燒火間、上下役、　寶曆元年辛未十一月十二日始置

〔寶曆集成絲綸錄 一〕寶曆十辰年三月

當時殿中席書〇中略　御臺所前廊下〇中略　小普請方吟味役

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寶曆元辛未年十一月十二日

信濃守殿

御目付

小普請方吟味役

御貝太鼓役之次たるべく候〇中略

右此度新規被仰付候役順、此通申渡候間、可被得其意候、

吟味手傳役

〔明良帶錄 新舍 集〕小普請方吟味手傳役

懸り々々有、下出來之繪圖、又は下書加筆下見等、手傳を入て下をこらべする也、

〔吏徵 御目見以下〕小普請方吟味手傳役三人　奉行支配　三拾俵三人扶持高　勤金五兩　役上下、御抱場、　寶曆元年辛未十一月十一日始置

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寶曆元辛未年十一月十二日

信濃守殿

御目付

小普請方吟味手傳役

小普請方手代組頭之上たるべく候

右此度新規被仰付候役順、此通申渡候間、可被得其意候、

御徒吟味役

〔教令類纂初集二十三下〕寳永七庚寅年九月

覺

一小普請方ヘ相勤候御徒吟味役、向後相止候事、

一御普請方九人支配之者共、向後打込候而總支配ニ可被仕事、

九月

手代組頭

〔吏徴御目見以下〕小普請方手代組頭三人人分五人　小普請方支配　五十俵三人扶持高　役上下

御抱場

〔常憲院殿御實紀三十二〕元祿八年十一月九日、中野犬小屋のあづかりを、寄合番澤仁兵衛奉實に命せられ、この職二員となる、其屬吏をば略〇中小普請手代組頭略〇中より附らる、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料略〇中　小普請方拾五人扶持宛　手代五十一人

手代

〔明良帯錄新garnered〕小普請方手代

御普請積り立、竹木一切手間迄を記す、下帳繪圖をもたゝむ、

〔吏徴御目見以下〕小普請方手代四十五人　三十俵三人扶持高　御雇三人、貳人扶持、出役十三人、三人扶持、　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵ゟ貳拾俵迄貳人扶持　御抱入　羽織　小普請方手代

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書略〇中　御臺所四之間横手略〇中　小普請方手代

物書

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

小普請方拾五人扶持宛　物書拾六人

〔吏徴御目見以下〕小普請方物書役十四人　十五俵貳人扶持高　改役物書役、役扶持二人扶持、

同見習三人扶持　御抱場

〔有章院殿御實紀四〕正德三年七月五日、小普請より小普請方の書記二十二人を命せらる、これ新置の職なり、

定小屋吟味方

〔正德四年武鑑〕御小普請方定小屋吟味方御役料十人扶持

七拾俵五人扶持、原田佐大夫、　八拾俵三人扶持、鈴木九八郎、　五拾俵三人扶持、堀儀右衛門、　百俵五人扶持、兒玉庄左衛門、　上同斷、關口文左衛門、○下略

人足方上役

〔正德四年武鑑〕御小普請人足方上役

七十俵六人扶持、中村庄兵衛、　七拾俵八人扶持、高野平左衛門、　六十俵六人扶持、小幡儀夫大、

五十俵六人扶持、萩原八市郎、

大工棟梁

〔天明七年武鑑〕御小普請方大工棟梁

百俵　依田伯耆　十人ふち　柏木門作　百俵　村松阿波　十人ふち　溝口內匠　百俵　柏木出雲　十人ふち　小林備前　十人ふち　大谷長門

〔明良帯錄新益篇〕町人熨斗目着用之者

小普請方　大工棟梁

右は御規式之外、着用不レ相成候、

〔文久紀事六〕文久二年九月七日、御同人○松平出雲守御渡　御目付江

今度御改革、小普請方御大工頭之御役は廢止被二仰付一、勤候之內、何茂取來候御定高御役扶持其

掃除者組頭
掃除者
定小屋門番人
職員
職掌

儀被下候、尤京都御大工頭之儀は、是迄之通り爲べく候、

〔吏徵 御目見以下〕小普請方掃除之者〈略〉○中　組頭貳人、役扶持壹人扶持、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〈略〉○中　小普請方拾五人扶持宛　御掃除三十五人

〔吏徵 御目見以下〕小普請方御掃除之者三十六人　持高〈略〉○中　出役、一人半扶持、　御抱場

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〈略〉○中　小普請方拾五人扶持宛　番人九人

〔吏徵 御目見以下〕小普請方定小屋御門番人七人　持高　出役三人、一人半扶持、　御抱場

細工頭

細工頭ハ三人アリ、殿中ノ建具諸道具類、及ビ高札、下馬札等ノ事ヲモ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、役料百俵ヲ給ス、屬僚ニ細工方改役、細工所組頭、同組頭改役勤方、及ビ同心等アリ、西丸ニモ亦細工頭アリ、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一御細工頭　三人

〔明良帶錄 續篇〕御細工頭 若支 二百石高御役料百俵　焼　同心三十人

御本丸御座之間、御休息、新御座敷向、競馬之間、御小納戸御道具類、障子、掛障子、奥御舞臺、御能道具、御庭向、大廣間、御舞臺、腰包詰直し、御障子、御黑書院、御數寄屋向、同所二重の御櫓、御風呂屋、表御臺所渡物、御厩、御先手番所、增上寺御法事渡物道具、并江戸并道中筋は高札下馬札、御陣札、御臺所、并

狙板新規削直し等、西丸同斷、山里御茶屋迄掛るなり、隊卒有之、

〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月

御細工頭へ相添渡之

覺

常々御用之品、御細工所へ向々ゟ斷有之申付候節、再應遂吟味、少も御費無之樣可被相心得候、別而三郎兵衞、兵右衞門、安左衞門は、前々櫻田より相勤、御用向之筋も存在之故、御取立當御役も被仰付候處、段々勤方もゆるみ、惣而近き比は、御誂物御買上物直段等高直ニ有之處、吟味等も麁末ニ相聞不屆候、向後相愼、御入用之儀、諸事入念可申候、尤支配并組之者にも、勤方不精に而不宜者候はゞ、吟味候て伺之上引替可被申候、以後御入用等、吟味之儀麁末之事候はゞ、何も越度たるべく候間、其旨可被相心得候、以上、

七月

待遇

〔吏徵上〕御細工頭三人　若年寄支配　土圭間　貳百俵高　御役料百俵

〔吏徵別錄下〕御細工頭〇中略　享保三年戊戌十二月晦日、御金奉行次席、

俸祿

〔憲教類典二ノ五〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、

御細工頭

貳百石高　御役料百俵

〔有德院殿御實紀四十〕享保十九年九月二十五日、細工所頭は、二百俵の職祿に、故のごとく官量賜ふべしと仰下さる、

〔慶應元年武鑑〕御細工頭　焼火之間　二百俵高御役料百俵

任免

〔台德院殿御實紀五十六〕元和八年五月六日、細工頭矢部掃部定淸死して、其二子納戸番七左衞門

改役　組頭　勘定改役　同心

定勝家つぎ、父の原職命ぜられ、同心十二人を屬せらる、定清、もとは今川家の士なりしが、慶長元年より今の職つかうまつりたるなり、

〔明和八年武鑑〕御細工所頭　御役料百俵　二百石高

七十俵五人フチ、向山源大夫、　三百俵、松村十左衛門、　村垣佐大夫

〔慶應二年武鑑〕御細工所頭　燒火　二百俵高　御役料百俵

二十俵二人フチ、赤木唯五郎、　二百石、戸田總八郎、　百俵十人フチ、石場齋宮、　新見蝮藏

〔德川禁令考十七〕細工所頭支配

御細工方改役一人　御細工所組頭三人　同組頭改役勤方二人　同所附同心四十七人

〔吏徵別錄御目見以下〕御細工所同心　文政七年甲申正月日增五員(合四十七員)　內增組頭三員(合六人)

〔吏徵御目見以下〕御細工所同心五十二人　三拾俵貳人扶持高　組頭役扶持三人扶持、役上下、勘定役頭取、役扶持貳人扶持、　御抱入、十五俵一人扶持、　見習御手當金三兩　町屋敷拜領(沽券金六十五兩)　御抱場

〔天保十一年武鑑〕御細工所組頭　五十俵、小川瀧右衛門、　五十俵、中島儀右衛門、　竹內孫助

同勘定改役　番熊次郎　佐藤三右衛門　川田半助

〔元治元年武鑑〕御細工所頭

御細工方改役　百俵高、御作事下奉行格、小林市之丞、

同心組頭　五十俵、中島儀左衛門、

同御勘定改役　支配勘定格村越丈之助、竹內孫三郎、杉浦嘉右衛門、

〔慶應三年武鑑〕御細工方改役　百俵高、小林市之丞、

御細工所組頭　中島儀左衛門　矢田鐐三郎　荒井猶吉

西丸細工頭

同組頭改役勤方　村越丈之助　杉浦嘉右衛門　竹内孫三郎〇節略

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御細工頭　慶安三年庚寅月日、始置二西丸附二員一、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、大納言殿〇德川家綱世子家光へ御家人あまた附属せらる、

右筆二人、細工頭二人、〇下略

明治三十四年七月二十一日印刷
明治三十四年七月二十五日發行

神宮司廳

昭和十年六月一日印刷
昭和十年六月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　古事類苑刊行會
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
振替東京三一七〇〇番

發賣所　內外書籍株式會社
東京市小石川區竹早町三十二番地
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）